

現代文學全集

XLII



Shuf

PL  
816  
U9  
1930

Suzuki, Miekichi -  
Suzuki Miekichi shu

East  
Asiatic  
Studies

PL  
816  
U9  
1930

EAS

CALL NO:

AUTHOR:

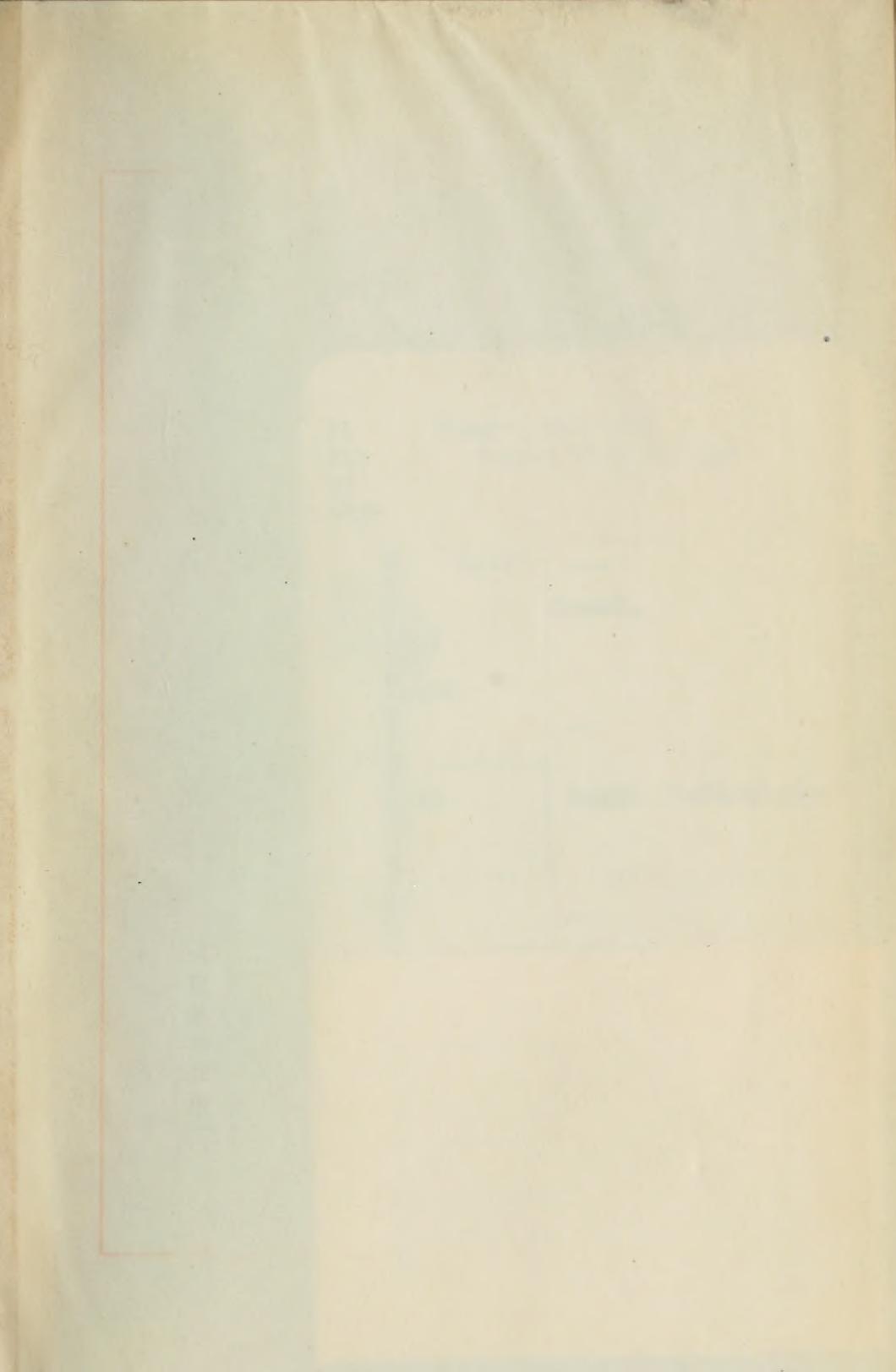
Suzuki,

TITLE:

Suzuki Miekichi shu

VOL:



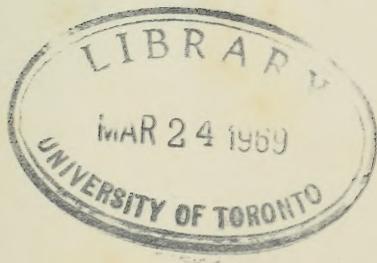


鈴木三重吉集  
森田草平集

改  
造  
社  
版

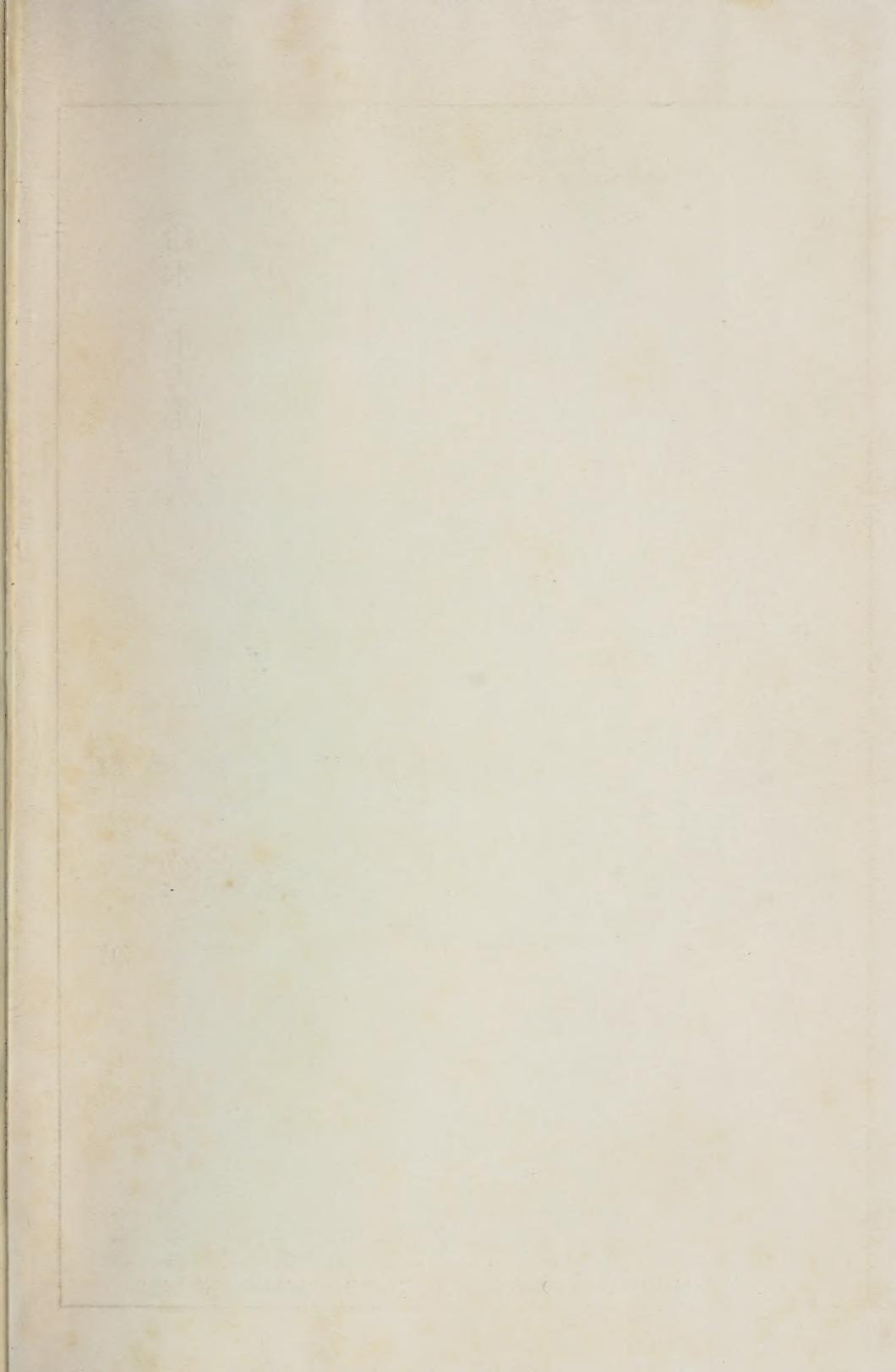
杉浦非水裝幀

PL  
816  
U9  
1930





（影撮月五年五和昭）氏田森るて立に前の士安と氏木鈴の装正團年少道騎



# 「鈴木三重吉集」目次

卷頭寫眞(照影)

序 詞(年譜)

千鳥	山彦	あみつさん	鳥語	黒髪	小貓	烏	女
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
五	三二	三七	四五	五三	五七	七三	八五

魚	瓦	民	羊	櫛	穴	大	桑	八
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一〇一	一〇四	一三一	一五九	二七一	一九〇	二〇七	二二八	二八四

附	月夜	同二	同三	同四
(一〇〇)	(一〇一)	(一〇二)	(一〇三)	(一〇四)
同五	同六	午後一	同二	同三
(八四)	(八五)	(一〇〇)	(一〇一)	(一〇二)
同四	赤菊	(一〇三)	同三	(一〇六)
(八七)	(一〇三)	(一〇三)	(一〇三)	(一〇六)

年譜	.....
.....	二九三

# 「森田草平集」目次

卷頭寫真(照影)

序 詞(筆蹟)

煤ぼい 煙えん……………二九七

初はつ 戀こひ……………四二四

白じ 鉞じ 傳たづ……………四四三

袈け 袈さ 御ご 前まへ……………五五八

(附) 好きな文章(四四三)

年譜……………五七一

鈴木三重吉集

私は永久に夢を待つ。たゞ、  
年一少終るごとく、吾れに燃ゆるを  
乙と少あするのみ。

ニ  
集  
舎

千鳥

千鳥の話は馬喰の娘のお長で始まる。小春の日の夕方、蒼ざめたお長は軒下へ藤を敷いてしよんぼりと坐つてゐる。干し列べた平莖には、最早絲筋ほどの日影もさゝぬ。洋服で丘を上つて来たのは自分である。お長は例の泣き出しさうな目もとで自分を仰ぐ。親指と小指と、そして歯がけの眞似は初やがこと。その三人ともみんな留守だと手を振る。頭、奥を指して手枕をするのは何のことか分らない。藁でたばねた髪は解れば、掻き上げて直ぐまた顔に垂れ下る。

座敷へ上つても、誰も出て来るものがないから勢がない。廊下へ出て、のこ／＼廊下の方へ行つて見る。麓の家で方々に白木綿を織るのが響き鳴くやうに聞える。廊下には草花の床が女帯ほどの幅で長く續いてゐる。二三種の花が咲いてゐる。水仙の一株に花床が盡きて、低い階段を拾ふと、そこが六疊の中二階である。自分が記念に置いて往つた招繪が、その儘に仄暗く壁に懸つてゐる。これが目につくと、久し

振で自分の家へ歸つて来でもしたやうに懐かしくなる。床の上に、小さな花瓶に龍膽の花が四五本挿してある。夏二月の逗留の間、自分はこの花瓶に入り替りしをらしい花を絶やした事になかつた。床の横の押入から、赤い縮緬の帯揚のやうなものが少しばかり食み出してゐる。一寸引つ張つて見るとすうと出る。どこまで出るかと續けて引つ張るとすう／＼とすつかり出る。

自分はそれを幾つにも疊んで見たり、手の甲へ巻き附けたりしていちくる。後には頭から頭へ掛けて、冠の紐のやうに結んで、垂れ下つたところを握つたまゝ、立膝になつて、壁の招繪を見つめる。「ナイシヨンス、ビクチュア」から抜いた繪である。女が白衣の胸にはさんだ一輪の花が、血のやうに滲んでゐる。目を細くして見てみると、女はだん／＼と繪から抜け出て、自分の方へ近寄つて来るやうに思はれる。すると、いつの間にか、年若い一人の婦人が自分の後に坐つてゐる。きちんとした嬢さん

である。しとやかに挨拶をする。自分はまごついて冠を解き捨てる。婦人は微笑みながら、

「まあ、この間から毎日々々お待ち申してゐたんですよ。」といふ。

「こんな不自由な鳥ですから、あゝは仰しやつてもたうとおいで下さらないのかも知れないと申しまして、しまひにはみんなで氣を落してゐましたのでございますよ。」と、懐かしさうに言ふのである。自分は狐にでもつまゝゝれたやうであつた。丘の上の一つ家の黄昏に、こんな思ひも設けぬ女の人がのこりと現はれて、さも親しい仲のやうに對して来る。かつて見も知らねば、どこの誰といふ見當も附かぬ。自分は只も

ちもちと帯揚を疊んでゐたが、やつと、  
「をばさんもみんな留守なんださうですね。」と  
はじめて口を利く。  
「あゝ、今日は午過ぎから、みんなで大根を引  
きに行つたんですの。」

「どの畠へ出てゐるんですか。——私一寸行つて見ませう。」  
「いゝえ、もう只今お長をやりましたから大騒  
ぎをして歸つていらつしやいますわ。」

「先刻私は誰もゐないのだと思つて、一人でず

んずんこへ上つて来たんでした。」と言つて、お長が手枕の眞似をしたことを腕に浮べる。女の人は少し頭痛がしたので奥で寝込んでゐたところ、お長が裏口へ廻つて、障子を叩いて起きてくれたのだと言ふ。

「もう何ともございませぬ。」と伏し目になる。起きて着物をちやんとして出て来たものらしい。稍あつて、

「あなたはこの節は少しはおよろしい方でございますか。」と訊く。自分の事は何でもすつかり知つてゐるやうな口振である。

「どうも矢つ張り頭がはき／＼しません。實は一年休學する事にしたんです。」

「さうでございますつてね。小母さんは毎日あなたの事ばかり案じていらつしやるんですよ。今度またこちらへおいでになる事になりましたから、どんなにお喜びでしたか知れませぬ。：：考へると不思議な御縁ですわね。」

「妙なものですね。この夏はどうした事からでしたか、ふとこちらへ避暑に来る氣になつたんですが、——私は餘り人のざわつくところはだもんですから。——その代り宿屋なんぞの無いといふ事ははじめから承知の上なでしたけれど、さあ、船から上つてそこらの家へ頼んで

見ると、果してみんな斷つてしまふでせう。困つたんですよ。」

婦人は微笑む。

「それから仕方がないもんだから、たうとのこのご彼場へやつて行つたんです。くる／＼坊主ですね、この村長は。」

「え、ほ、ほ。」

「そしたらあの人が親切に心配してくれたんです。」

「そしてこゝの小母さんに、私は母といふものがないんだから、こんな家へ置いてもらつたらいいのですがつて、さう仰しやつたのですつてね。」

「さうでしたかなあ。とにかく小母さんを目見るとから、何かしら懐かしくなつたんです。」

「そんなに仰しやつたものですから、小母さんもしをらしい方だと思つて、お世話をする氣になつたんですつて。」

「私は今では小母さんが生みの親のやうに思はれるんですよ。私の家にゐたつて何だか旅の下宿にでもゐるやうな氣がするんですもの。」

「小母さんも青木さんはあたしの内證の子なんだかも知れないなんて冗談を仰しやるんですよ。」

「あ、いつか小母さんが指へ傷をしたと云ふのはもう直つたのですか。」

「え、只ナイフで一す切つたばかりなんですから。」

二人はこのやうな話をしながら待つてゐる。築地の根を馬の鈴が下りてゆく。馬を引く女が唄を歌ふ。

障子を開けて見ると、籠の蜜柑畑が更紗の模様やうである。白手拭を纏つた女たちがちら／＼とその中を動く。蜜柑を積んだ馬が四五匹續いて出る。やはり女が引いてゐる。向ひの、籠のやうになつた山出に煙が一竿揚つてゐる。煙がぼろ／＼と光る。煙は斜めに横かつて、木は夕方の色と落ちてゆく。

女の人も自分の側へ寄つて等しく外を見る。山出のあちらこちらを馬が下りる。馬は犬よりも小さい。首を出して見ると、庭の松の木のはづれから、海が黒く湛へてゐる。影の如き漁船が後先になつて續々歸る。近い干潟の灰白い砂の上に、黒豆を穿したやうなのは、鳥の群が下りてゐるのであらうか。女の人の教へる方を見れば、青葉巻をした／＼か背負つた頬冠りの男が、とこ／＼と畦道を通る。間もなくこちらを背にして、道に附いて斜めに折れると思ふと、その

男は最早、只大きな松葉の塊へ股引の足が二本下つたばかりのものとなつて動いてゐる。松葉の色が見る／＼黒くなる。それが蜜柑畑の向うへ這入つてしまふと、しばらく近くには行くものの影が絶える。谷間々々の黒みから、だんだんとこちらへ追つて来る黄昏の色を、急がしい襷の音が招き寄せる。

小母さんは何でこんなに遅いのでせうね。と女の人は慰めるやうにいふ。あたりは見る内に薄暗くなる。女の人が一寸出て行つて、今度歸つて来た時には、向き合ひになつても最上面輪が定かには見えない。

女の人は、立つて押入から竹洋燈を取り出して、油を振つて見て、袂から紙を出して心を撫む。下へ置いた筈に何か書いた紙切が喰つ附いてゐる。讀んで見ると章坊の手らしい幼い片假名で、フチサンガマタナクと書いてある。

「あら。」と女の人は恥かしさうに笑つてその紙を剥がす。

「章ちゃんがかんな悪戯をするんですわ。誰ですのよ、みんな。」と打消すやうにいふ。

「何の事なんです、これは。」  
「ほゝゝ。」

「フチサンいふのは。」

「あたしでございませう。」

「あゝ、お藤さんと仰しやるんですか。」

「はい。」と藤さんは微笑みながら、立つて押入を探す。藤さんといふ名はかうして知つたのである。

「そしてあなたが何でお泣きになつたんです？」

「いゝえ、誰ですの、そんな事は。」

「燐寸を探していらつしやるんですか。私が持つてゐます。」

「あら、冗談なのでございませう。あれは章ちゃんか。」と勘違へをしてゐる。ポケットから燐寸を出して洋燈を點すと、

「まあ、恐れ入ります。」と藤さんは坐る。燈火に見れば、油給のやうな艶やかな人である。顔を少し赤らめてゐる。

「あしが一番あん。」と章坊が着物を引つ抱へて飛び出すと、入れ違ひに小母さんが這入つて来て、シャツの上から着物を着せかけてくれる。

「さ、これを上げませう。」と下締を解く。それを結んで小暗い風呂場から出て来ると、藤さんが赤い裏の羽織を披けて後へ廻る。

「そんなものを私に着せるのですか。」

「でも他にはないんですもの。」と肩へかける。

「それでも洋服とは衆でござんせうがの。」と、初やが規矩を煽きたがいふ。羽織は黄八丈である。藤さんのだといふ事は問はずとも分つてゐる。

「着物が少し長いや。ほら、踵がすつかり隠れる。」と言ふと、

「母さんのだもの。」と炬燵から章坊が言ふ。

「小母さんはこんなに脊が高いのかなあ。」

「なんの、あなたが少し低うなりなんしたのいの。病氣をしなんすもんぢやけに。」と初やが冗談をいふ。

「女は臍のところを下締で繋げて着るんですか。」と言つて、藤さんは側から羽織の襟を直ししてくれる。

「何故さうするんでせう。」

「みんなさうするんですわ。おや、羽織に紐がございませんわね。」

「いゝえ結構。」といふと、初やが、

「まあ、お二人で仲のいゝこと。」と言ひさま、急に

にばた／＼とはげしく煽き出す。

「まあ。」と藤さんは赤い顔をしてゐる。

「藤君を導いて、底へ丸い穴を開けたの  
上、筒抜けの算珠の数を数めて、それを踏臺の  
上に載せて、上から算珠をかける」と、それが  
草坊の算珠機である。

「またみんなを玩具にするのかい。」と小母さん  
が笑ふ。この機は床屋の寅吉に泣き附いてさ  
せられたといふ。草坊は、

「兄さんを寫して上げるんだから、よう、炬燵  
から出て下さいよ。」と日えるやうに言ふかと思  
ふと、

「ちきです。直き寫ります。」と、眞面目に寫眞  
の機りである。

「兄さんは炬燵へ當つてる方が甘く寫るよ。」  
「だって姉さんかか機をしてるんだもの。」と風  
呂敷の中へ頭を入れる。

「姉さん、ぐづ／＼してると背中が寫つて終ひ  
ますよ。」  
「はい。」と、藤さんは笑ひながら自分の隣  
りへ移る。

「兄さん、もつと眞つ直。」  
「私の顔が見えるの？」

「見えるとも、そら笑つてら。やあい。」  
「がた／＼と箱を擦ぶる。やがて勿體らしく身  
構へをして、

「はい、寫しますよ。」とこちらを見詰める。  
「あら、目を閉つてるものがあるものか。……  
さ、寫りますよ。……只今。……はい有難う。」

「上手に持つた厚紙の蓋を鎌語へ被せると、箱の  
中から板切を出して、それを提げて、得意にな  
つて押入の前へ行く。

「草ちゃん、もう夜はそんな押入なぞへ這入る  
もんぢやないよ。」と小母さんが止めると、  
「だつてお母さん、寫眞を樂でよくするんぢや  
ありませんか。」と泣きさうな顔をする。

「それよりか寫眞屋さん、一昨日かしら寫した  
あたしの寫眞はいつ出来るんですか。」と藤さん  
が問ふ。小母さんも、

「私ももう五六度寫つた筈だからねえ。いつ出来  
るんだらう。まだ一枚もくれないのね。」と突つ  
込む。それから小母さんは、向ひの地方へ渡つ  
て草坊と寫眞を撮つた話をやる。草坊は、

「今度は電話だ。」と言つて、二つの板紙の筒を  
持つて出て来る。筒の底に紙が張つてあつて、  
長い青紙が筒の中を巻いてゐる。工場で買  
つたのださうである。草坊は片方の筒を自分

に持たせて、しばらく何かしら言つて、  
「ね、分つたでせう？」といふ。  
「あ、分つたよ。」といふ。加減に間を合はして  
置くと、  
「萬歳。」と言つてにこ／＼して飛んで来て、藤  
さんを除けて自分の前へあたる。  
「よ。姉さんもだよ。」といふ。  
「よし／＼。」  
「何の事なんです。」と藤さんは微笑む。  
「今電話がかかりましてね、……」  
「あ、今言つちやいけななんだよ、兄さん。あ  
れは姉さんには言はれないんだから。」  
「何でせう。人が悪いのね。」  
このやうな事を言つてゐるところへ、初やが  
飯頭を買つて歸つて来る。小提灯を消すと、  
饅頭から白い煙がふは／＼と揚る。  
「奥さま、今度の狐もやつぱり似とりますわい  
の。」と言つてげら／＼と初やが笑ふ。  
飯頭を食べながら話を聞くと、この飯頭屋の  
店先には、煙に化けて手紙を被つた藪子の狐  
が立たせてあつた。その狐の顔がその家の若  
い女房に可笑しい程そっくりなので、この近在  
で評判になつた。女房の方では少しもそんな  
事は知らないであつたか、先達ある馬方が、飯頭

の借りを拂つたとか拂はないとかでその女房に口論を仕かけて、

「え、この狐め。」

「何でわしが狐かい。」

「狐ぢやい。知らんのか。鏡を出してこの招牌と較べて見い。間拔けめ。」

かう言つたやうなことから、後で女房が亭主に話すと、亭主はこの邊では珍らしい捌けた男

なんださうで、それは今頃始つた話ぢやないんだ、己の家の傻頭がなぜこんなに名高いのだと思ふ、などと茶らかすので、そんならお前さん

はもう早くから人の悪口も聞いてゐたのかと聞へば、うん、と言つて澄ましてゐる。女房は

わつと泣き出して、それを今日まで平氣でゐたお前が恨めしい、畢竟わしを馬鹿にしてゐるからだ、もうこれざり實家へ歸つて死んでしまふと

言つて、筆奇から着物などを引つ張り出す。やがて二人で大立廻りをやつて、女房は形を亂して

向ひの箱頭の家へ逃げ込むやら、たうと面倒な事になつたが、とにかく箱頭が仲儀して、お

前たちも、元を尋ねると踊の囃に袖を引き合ひからの夫妻ぢやないか、さあ、仲直りに二人で

舞れよ、おい、と五合ばかり取つて来た。その時の女房との條約に基いて、店の狐は翌日か

ら姿を隠して了つた。ほかの狐が箱に這入つて城下の人影屋から来て、再び店に立つたのはついでこの間の事である。今度のは大きさも

位しかないし、顔も少し趣を變へるやうに註文したのであらうけれど、

「なんぼどのやうな狐を拵へて来たところで、お孝ちやんの顔が元のまゝぢやどうしても駄目

でがすすわいの。へムムム。一と、初やは、やつと廻りくどい話を切つてあちらへ立つ。藤さん

はもう先達も聞いたから、今夜はそんなに可笑しくはないと言つたけれど、それでも矢つ張

りはじめてのやうに笑つてゐた。話が杜絶える。藤さんは草坊が蒲團へ落した

簞を手の平へ拵ふ。影法師が壁に寫つてゐる。頭が動く。やがてそれがきちちんと横向きに

落ち附くと、自分は目口眉毛を心で附ける。小母さんの臂がちよいと寫る。簞で髪の中を

掻いてゐるのである。裏では初やが米を搗く。

自分は小母さんたちと床を列べて座敷へ裏枕が大きくて柔かいから嬉しいと言ふと、こ

の夏にはうっかりしてゐたが、あんな枕では頭に悪いからと小母さんがいふ。藤さんはこの枕を急いで拵へてから、俄に十日あまりを待ち暮したと話す。

藤さんは小母さんの蒲團の裾を叩いて、それから自分のを叩く。肩のところへ坐つて夜着の袖をも押へてくれる。自分は何かか窮苦しいやうな氣がする。やがてあちらで藤さんが帯を解

く氣色がする。草坊は早く小さな躰になる。自分は何とはなしに笑入つて下ふのが惜しい。

一ね、小母さん。一と再び話しかける。

一え、一と、小母さんは閉ぢてゐた目を開ける。

一あの、一たい藤さんはどうした人なんですか」と訊くと、

「なぜ？」と言ふ。

聞いて見ると、この家が江田島の官舎にゐた時に、藤さんの家と隣り合せだつたのださうである。まだ草坊も貰はない、ずつと先の事であ

つたし、小母さんは大變に藤さんを可愛がつて、後には夜も家へ歸すよりか自分の側へ泊らせる

方が多いくらいにしてゐた。はじめそこへ移つて来た翌る日であつたか、藤さんがふと城の

扇骨木垣の上から顔を出して、

「小母さま。今日は。」と物を言ひかけたのが元

であつた。藤さんが驚かして八つに過ぎぬ頃であつたらう。それから四五年してこの主人が亡くなつて、小母さんはこちらへ住居をきめる事になつた。別れの時には藤さんも小母さんも泣いた。藤さんはその後いつまでも小母さん小母さんと懇しがつて、今日まで月に一二度、手紙を缺かした事はない。藤さんの家は今佐世保にあるのださうで、お父さんは大佐ださうである。

「それでは佐世保から遙々来たんですか。」

「いえ、あの娘だけは二月ばかり前から、この對岸にゐるんです。あなたでも同じですけれど、こんなになると、場合は全く本當の親子と變りませんわ。」

「それなのにこの妻には、あの人の話は一寸も出ませんでしたわね。」

「さうでしたかね。おや、さうだつたかしら。」

「そして私の事はもうすつかりあの人に話してあるやうですね。」

「ふゝゝ、それはあなた、家では何とかいふと直ぐあなたの話が出るんですから、あの人だつて、まだ見もしない内からも青木さん／＼と言つて、おいでになつてもまるで兄妹かなぞのやうに思つてゐるんですもの。」と章坊の杖

を直してやる。

「さつきもね、初めから、お嬢さんは存外人に恥かしがらない方だとかなんとか言つてからかはれたんでせう。さうするとね、だつてあの方はもうよくお知り申してゐる方なんだからさう言ふんですよ。あれでゐるまだずるぶん子供、のやうなところがあるんですからね。」

「私だつて何だか、はじめて會つた人のやうには思へませんよ。——まだ永く逗留するんですか。」

「あの娘ですか。さうですね。……一晩今度こちらへまゐつたといふのが……」

「仕事を欠と一緒に言つて、杖へ手を添へたと見ると、小母さんはその後を言はないで、それなりふいと眉毛のあたりまで埋まり込んでしまふ。しばらく待つて見ても容易に再び顔を出さない。蒲團の更紗へ有明行燈の灯が籠にさして赤い花の模様がどんよりしてゐる。」

「何だか煮え切らない。藤さんが今度来たのはどうしたのだといふのか。何か面白い事柄があるのであらうか。小母さんは何とか言ひかけてひよつくり黙つてしまつた。藤さんはどうして九月から家を出てゐるのか。この對岸のどんな人のところにあるのであらう。」

池へ山水の落ちるのが幽かに聞える。小母さんはいつしか顔を出してすやくと眠つてゐる。大根を引くので疲れたのかも知れない。小母さんの静かな寝顔をぢつと見てゐると、自分もだん／＼に顔が重くなる。

千鳥の話は一夜明ける。

自分は中二階で長い手紙を書いてゐる。藤さん、

「兄さん。」と言つて這人つて来る。

「あの只今結頭が行李を持つてまゐりましたよ。」といふ。

「あれは私のです。」と言つたまま、やつぱりずん／＼書いて行く。

「それはさうですけれど、どうせこちらへ運ばなければならぬのでせう？」

「えゝ。」

「ではこの押入には、下の方はあたしのものが少しばかり這人つて居りますから。あなたは當分上の段だけで我慢して下さいませ。」

「……」

「ねえ。」

「えゝ。」

「まあ一心になつていらつしやるんだわ。」といふ。

「丁度一區切附いたから向き直る。藤さんは少し離れて膝を突いてゐる。」

「お召し物も来たんでせう？——では早くお着換へなさいましな。女の着物なんか召して可笑しいわ。」と微笑む。自分は笑つて、袖を騎して見る。

「先刻ね。」と、藤さんは袂へ手を入れて火鉢の方へ来る。

「これ御覽なさい。」と、袂の紅絹裏の間から取り出したのは、莖の長い一輪の白い花である。

「この頃こんな花が。」

「蒲公英ですか。」と手に取る。

「どこで目つけたんです？ たつた一本咲いてたんですか。」

「どうですか。さつき玉子を持つて来た女の子がくれたつたんですの。どこかの石垣に咲いてゐたんださうです。初やがね、これはこの頃あんまり暖かいものだから、つい敷されて出て来たんですつて。」

「返した花を藤さんは指先でくるく／＼廻してゐる。」

「本當にもう春のやうですね、こちらの氣候候。」

は。」

「暖かいところですのね。」

「自分はもく／＼と日のさした障子を見つめて、陽炎のやうな心持になる。」

「私只今お邪魔ぢやございませんか。」

「何がです？」

「お手紙はお急ぎぢやないのですか。」

「さうですね。——郵便の箱は午に出るんでしたね。」

「え、ではあとで直ぐ行李をこちらへ運ばせますから。」と、藤さんは強合が無きさうに立つて行く。

「あ、この花は？」

「え、と、出口で振り向いて、」

「それはあなたにおあげ申したのですわ。」

藤さんが行つてしまつたあととは何やら物足りないやうである。たんば／＼を机の上に置。

手紙はもう書きたくない。藤さんがもう一度やつて来ないかと思ふ。ちぎつた書き馴しを拵つて、くちや／＼に揉んだのを披けて、轍を延ばして疊んで、また披けて、今度は片端から噛み切つては口の中丸ある。いんし／＼かいら／＼の夢を見はじめ。——自分は覺めてゐて夢を見る。夢と自分で名づけてゐる。

馬の鈴が聞えて来る。女が濡ふのが聞える。不躰立つて廊下へ出る。藤さんが池の側に踏んでゐて、

「もうおすみになつて？」と聲をかける。自分は半着えのやうな返事をする。母屋の縁先で何匹かのカナリヤが、焦氣に轆り合つてゐる。庭一杯の黄色い日向は彼等が吐き出してゐるのかと思はれる。

「一寸いらつして御覽なさいな。小さな蛸かしら澤山ゐますわ。」と、藤さんは眩しさうにこちらを見る。

「だつて下駄がないぢやありませんか。」

「あたしだつて足突う儘ですわ。」

自分もそれなり下りて花床を跨ぐ。はかなげに咲き残つた、何とかいふ花に裾が觸れて、花叢の白いのがはら／＼と散る。庭は一面に未拵れた芝生である。離れの中二階の横に松が一叢生えてゐる。女松の大きいのが二本ある。その中に小さな水の溜りがある。すべてこの宅地を開く時に自然の儘を残したのである。

藤さんは、水の側の、苔を被つた石の上に踏ん

ゐる。水際にはら／＼と三葉四葉附いた蘆の

實生えが、真赤な色に染つてゐる。自分が近づ

けば、水の面が小砂を投げたやうに薄れを打つ。

「おや、みんな沈みました。」と藤さんがいふ。自分は、水を隔てて前めに向き合つて芝生に踏み、手を延ばすなら、藤さんの膝に辛うじて届くのである。水は薄黒く濁つてみれど、藤さんの驚す袂の色を預してゐる。自分の姿は黒く寫つて、松の葉の影に切られる。

「また浮きますよ。」と藤さんがいふ。指すところをちつと見守つてゐると、底の水苔を味噌汁のやうに爛れて、幽かな色の、小さな鮎子がむらむらと浮き上る。上へ出で来るにつれて、幻から現へ覚めるやうに、順々に小黒い色になる。しばらく一しよに集つてちつとしてゐる。やがて片端から二三四つ繰り出して、列を作つて、小舟に日の當る方へと泳いで行く。ちらちらと腹を返すのがある。水の底には、泥を被つた水草の葉が、泥へ彫刻したやうになつてゐる。稍あつて、ふと、鮎子の一隊が水の色と紛れたと思ふと、底の方を大きな黒いのがうぢやうぢやと通る。

「大きなのもゐるんですね。そ、あそこに。」と指すと、

「どこに。」と藤さんが訊く。併しそれは寫つてゐる影であつた。鮎子は矢つぱり小さく上の方に行く。自分は足元の松葉を掻き寄せて投げ附

ける。鮎子は響の如くに沈んで、再び亂れて味噌汁へ逃げ込んで了ふ。藤さんが笑ふ。

手前の白羽が五六羽、離れの屋根のあたりから羽音を立てて芝生へ下りる。

「あの、鶯は綺麗な鳥ですね。」と藤さんがいふ。

「あれは鳩ぢやありませんか。」

「ほゝゝゝ、あれぢやないんですの。あたしね、ほゝゝゝ。」

「どうしたんです？」

「いゝえ、あたしとんでもない事を思ひ出したんですわ。」と一人で微笑む。

「何を？」

「何でもないことです。——先達あたしがこちらへ渡つて来る途中でね、鶯が一匹、小さな板切へ棲つて、波の上をふはり／＼してゐたんですの。丁度學校などにある標本を流したやうでしたわ。」

自分は氣が附いたやうに、海の方を見渡す。遙かの果に地方の山がうつつら見える。小島の蔭に鳥具を取る船が一群帆を聯ねてゐる。

「ね、鳩が餌を捨ふでせう。」と藤さんがいふ。

「芝生に何か落ちてゐるでせうか。」

「あたしがさつき撒いて置いたんです。いつで

もあそこへ餌を撒くんです。」

「あ、あれは足をどうかしてるやうですね。初やがすた／＼とやつて来る。紺の半纏の上

に前垂をしめて、尤く脹れてゐる。

「お嬢さん。」

「何？」

「いゝや、男のお嬢さんぢやわいの。」

「まあ。今お着換へなさるんだわ。」

「私がどうした。」

「冗談は置いて、あなたは蟹を食べなんしたか。」

「いつ？」

「ほゝゝゝ、爾のやうな話ね。——蟹を召し上げば買つて来る積りなの？」

「えゝ、はあ買つたのよのよ。午に煮ようかと思ふんでがんさ。はあ直にお午ぢやけに。——食べなんした事ががんすかいの。」

「食べるけど、あれは厄介なばかりで仕方がないや。」

「おしいものですけれどね。」

「それや甘うがんですえの。それにこの頃は月が無い頃ぢやけに尙更甘いんでがんすわいの。いえ、ほんとでがんすて。月夜にはの、あれが自分の影に怖れてびく／＼するけに瘦せるんで

がんすといの。」

村の水天宮様の御威徳を説く時の額附である。

「ほゝゝ。」

一面白いた、それは。」

「そんなら食べなすか。」

「食べるよ。」

「ちや、よかつた。」と、またあちらへすたく草履の踵へ短い影法師を引いて行く。鳩は少しも人に怖れぬ。

自分は外へ出て見たくなる。藤さんは一人で座敷で雑物をしてゐる。一しよに濱の方へでも出て見ぬかと誘ふと、

「さうですね。」と、につこりしたが、何だか躊躇の色が見える。二人で行つたとて誰が咎めるものかと思ふ。

「だつてあんまりですから。」と、稍あつて言ふ。「何が。」

「でもたつた今これを始めたばかりですから。」

「ついでに仕上げて了ひたいのですか。」

「いゝえ、さうぢやないのですけど、何だか小母さんに濟まないから。——あたし行きたいん

ですけれど。」

「では行けばいゝぢやありませんか。」

「そんな事は構はないんですけどね、あたしこちらへまゐつてから、いつも鬱いでばかりゐて、何一つ碌にお手傳ひした事もないんでせう。」

自分は立膝をして、物尺を持つて針山の針をこつ／＼叩いて、順々に少しづつ引つ込ませてゐたが、ふと叩き過ぎて、一本の針を頭も見えないやうにして了ふ。幸にそれには一寸した

針はすらりと抜ける。「もう一月からなるのですのに、ずつと私そんなでしたものですから、今日は気分はいゝし、私の方からさう言つて、これを言ひ附かつたのですのに。」

「構はないや、そんな事は。」

「だつて女はさうも……」と、針に線を通す。自分は素直に立つて、獨りで文關へ下りたが、

何だか張合が抜けたやうで暫くぼんやりと敷居に立つてゐる。

「兄さん。」と藤さんが出て来る。

「あそこに水天宮さまが見えてるでせう。あそこ

つていらつしやいな。」といふ。そんなに勢ま

いのだけれど、もう、よさうとも言へないので、千し列べた平葦の中をぶら／＼出て行く。

五六歩すると藤さんがまた呼びかける。

「あなた、お背に縮肩かしら喚つ附いてゐますよ。」

「どこに？」

「もつと下。」

「この邊ですか。」

「いゝえ。」

「大きいのですか。」

「あ、もう一寸上。」と言ひ／＼出て来て取つてくれる。真綿の切に赤い絹糸の絡んだのが喚つ附いてゐたのである。藤さんはそれを手の平で採みながら、

「いゝお天氣ですな。」といふ。一緒に持つて見たいといふ念が素振に表はれてゐる。門を出し

なに振り返ると、藤さんはまだうろ／＼と立つてゐる。

「お早くお歸りなさいました。」

「えゝ。」と、自分は後の事は何にも知らずに、ステッキを振り廻しながらとこ／＼と出て行つたけれど、二人は遂にこれが永き別れとなつたのである。

勿論この時には、借りた着物はもう着換へて  
みた。着換へるまで自分は何の氣もなしにゐた  
けれど、さうして鳥の宿りに客となつて、女の  
人の着物を借りて着たのかと思ふと、腹く段に  
なつて一種變な感じが起つた。何だかもう少  
し着たいやうにも思はれた。そして、しげ  
らげ寝織の赤い裏の裏返つたのを見守つた。自  
分の家などでは、こんな花やかな着物の脱ぎ捨  
てであることは運に見られない。姉は十一で死  
んだ。その後家中に赤い切ななどは切れ端もあ  
つた事はない。自分の家は各枯れの野のやうだ  
とつくもさう思ふ。その内に不圖蛇の脱殻が  
念頭に浮んだ。蛇は自分の皮を脱いで、脱いだ  
皮を何と見るであらうかと、癩んでもない事を  
考へ出した時、初やがやつて来て、着換へた着  
物を持つて行つた。

今自分は、その蛇が皿を巻いたやうな丘の小  
路をぐる／＼と下りて行く。一曲りづつ下りる  
につれて、女の歌つてゐるのが追々に鮮やかに  
聞き取れる。

「ねんねしなされ、おやすみなされ。鶏がな  
いたら起きなされ。」と歌ふ。艶やかな聲であ  
る。

「おきて往なんせ、東が白む。節々の鶏が啼

く。」と、丘を下りて了ふと、歌ふのは角の豆腐  
屋のお仙である。すべてこの鳥の女はよく唄を  
歌ふ。機を織るにも唄を打つにも、舟を漕ぐに  
も馬を引くにも、働く時にはいつも歌ふ。朝か  
ら晩まで歌つてゐる。行くところの歌の揚らぬ  
事があれば、そこには若い女がゐないものである。  
若い女はみんな歌ふ。そしてお仙などは一番う  
まい組のやうである。

お仙は外に背中を向けて豆を搥いてゐる。野  
袴をつけた岩者が二人、畠の道具を門口へ轉が  
したまふ、黒煙りの籠の前に罪んで煙草を喫ん  
でゐる。破れた唐紙の陰には、大黒頭巾を着た  
爺さんが、火鉢を抱へ込んで、人影のやうに坐つ  
てゐる。眞つ白い長い頸鬘は、豆腐屋の爺さん  
には洒落過ぎたものである。

「をかしかし／＼、樞の葉は白い。今の娘  
の齒は白い。」

お仙は若い者がゐるので得意になつて歌つて  
ゐる。家に歸つて曲ると、

「青木さんよう。」と、呼び止める。人並より餘  
程廣い額に頭痛骨をべた／＼と貼り寒いでゐ  
る。昨夕の干潟の鳥のやうである。

「昨日来なんしたげなの。わしや、丁度馬を換  
へに行つとりましての。」と、手を休めて、

「乗りなんせい。今度のも大人しうがんすわい  
の。」と言つたかと思ふと、また直ぐに歌にな  
る。

「一軒が二十で子が二十一。どこで算用が  
違たやしら。」

「一ようい、よい。」と野袴の一人、囁す。

横の馬小屋を覗いて見たが、中馬はゐるな  
つた。馬小屋のはつれから、道の片側と無花果  
の本が長く續いて居る。自分はその影を踏んで  
行く。南方は一段低くなつた島である。お  
仙の歌は追々に聞えなくなる。ふと藤さんの事  
が胸に浮んで来る。藤さんはもう一月も逗留し  
てゐるのだと言つた。そして毎日働いてばかり  
ゐたと言つた。何かがあるのであらう。昨夜  
小母さんが俄かに黙つてしまつたのは、眠いか  
らばかりではなかつたらしい。どういふ事なの  
であらうかと頻りに考へて見る。

後から爺の音が来る。自分はわが考への中  
で唄うのかと思ふ。前から薬を背負つた男が来  
る。後で、

「ごめんなんせ。」といふ。振り向くと、馬の鼻  
が肩のところに見えてゐる。小走りに百姓家  
の軒下へ避ける。そこには土間で襦を織つてゐ  
る。小聲で歌を誦してゐる。

「おゝい。」と言つて馬を引いた男が立ちどま  
る。藁の男は足早に同じ軒下へ逃げる。馬は通  
り抜ける。蜜柑を積んでゐる。

「まあ誰ぞいの。」と襦を織つてゐた女が甲走つ  
た聲を立てる。藁の男が入口に立ち塞つて、  
自分を見て笑ひながら、ぢり／＼とあとしざり  
をして、背中の藁を中へ押し込めてゐるのであ  
る。

「暗いわいの。」と女がいふと、  
「ふゝゝ。」と男は笑つてゐる。打ちとけた仲か  
も知れない。

再び藁さんの事を考へつゝ行く。初やは事  
情を知つてゐるかも知れぬ。あれに喋らせて見  
ようかしらと思ふ。

このあたりはすべて漁師の住居である。赤ん  
坊を竹籠へ入れて、軒へぶら／＼釣り下げて、  
時々手を舉げて突きながら、網の破れをかどつ  
てゐる女房がある。最先の席に横げた切手へ、  
藁が眞つ黒に集つて、全て藁を干したやうにな  
つてゐるのがある。だけれど、初やに訊くとい  
ふのは、何だか、小母さんが言はないでゐる事  
を藁へ廻つて探るやうで變である。訊くまい。  
細れる時には細れるのだ。自分はなぜこんなに

藁さんの事を氣にするのであらう。單に好奇心  
といふに過ぎないであらうか。

この時自分は、濱の堤の兩側に春木よりも高  
い林薄が透間もなく生え續いた中を行く。浪が  
ひた／＼と石崖に當る。程程で横手からお長が  
白馬を引いて上つて来た。何やら丸い物を運ぶ  
のだと手眞似で言つて、一しよに行かぬかと  
言ふのである。自分は附いて行く氣になる。馬の  
腹がざわ／＼と薄の葉を煮でる。

そこを出ると水天宮の社である。あとで考へ  
ると、この邊で引き返さへしたらよかつたの  
に、自分はいつまでも馬の臀に附いて、山島を  
五つも六つも越えて、たうとお長の行くところ  
まで行つたのであつた。谷合の岬にお長の雙親  
と兄の常吉がゐた。二三寸延びた麥の間の馬鈴  
薯を掘つてゐるのである。

「まあ、よう来てくれたんしたいの。」言つて  
みんなで喜ぶ。爺さんは顔中を皺にして、  
「わし等はあんたが往んなんしたあと、いつま  
でもあんたの事ばかり話してゐたんだ。」とこ  
にこする。

「はあ死ぬまで會はれんのかいのかと思うたに。」  
と母親が言ふ。自分は小さい時の乳母にでも會  
つたやうな心持がする。しばらく色々々の話を

する。

やがて雙親は掘りはじめる。枯れ萎れた藁の  
根へ、ぐいと一針入れて引き起すと、その中にち  
りりと狼の臀のやうな色が覗く。藁を掘んで引  
き抜くと、下に手が赤く重なつて附いて居る。  
常吉はうしろからほき／＼とそれをもぎ取つて  
畚へ入れる。「畚溜ればうんと引つ均へて、畦  
に放した馬の兩腹の、網の袋へうつし込む。

馬は岬へ影を投げて笹の葉を食つてゐる。自分  
はお長と並んで、岬の隅の席の上で煙草を吹  
かす。雙親は鎌を休める度毎には自分の方を向  
いて話をする。お長も時々袖を引いて手眞似で  
話す。沖の鳥貝を掻く船を指して、どり船も

帆を三つづつ横向きにかけてゐる、兩端から二  
本の碇綱を延してゐるゆゑ、帆に風を孕んでも  
結は動かない、帆が懸つてゐるから碇綱は弛ま  
ぬ、鳥貝は日に干して依に詰めるのだなどと言  
ふ。浪が岬の下の崖に碎ける。日向がもく／＼  
と頭の方にはみえる。

やがて常吉の若い娘が、赤い馬を引いてやつ  
て来る。その馬が豆蔵屋のであつた。娘も掘る。  
自分も掘つて見たいと言つたけれど、着物がよ  
ごれるから駄目だと言つて母親が聞かない。娘  
は唄を謡ふ。母親も小聲で謡ふ。謡ふお長には

騎つ伏して藪の深を探つてゐる。

常吉が手を叩くと、お長は立つて、白馬を引いて行く。藪の袋には馬鈴薯が一ばいになつてゐる。白馬が歸つて来ると、家の赤馬が出て行く。お長が歸ると白馬が出る。

「父やん、はあ止めにしなんせ。」と常吉が針巻を取つた時にて、もう馬の影も地に寫らなかつた。自分は何時歸屋つたか知らぬ。鳥貝の自帆も疾くにおなくなつてゐる。

「旦那は先い往んなんせ。お初やんが尋ねに出ませう。」と母親がいふ。自分は初めて貝殻の事を思ひ出して、そこへ水天宮のところまで歸つて来る。

夕日が遙か向ひの鳥藤に沈みかゝつてゐる。貝殻はもう止さうかしらと思つたが、何だか気が済まぬゆゑ、せめて二つ四つばかりでもと思つて平湯へ下りる。嫁の風といふ貝殻が深山ころがつてゐる。拾ひ出すと中々止められない。たうと月片方の袂へ大方一つばいになるまで拾ふ。

上へ上つて見ると、自分の歩いた下駄の跡が、居集つた二つの漁籠の間にうねすねと二筋に續いてゐる。歸つたら藤さんが一番に出て来て、まあ何をしておいになつたんですと云ふであ

らう。そして貝殻を玄關へうつし出すと、おや、澤山、まあと言つて嬉しさうにするであらう。自分はそれをもう有つた事のやうに考へ探べながら、袂を抱へて小早に歸る。豆腐屋の前まで来ると、お伯が門口でカンテラへ油をさしてゐた。

丘上る途中で、今朝買はせたばかりの下駄だのに、ぶすりと前鼻緒が切れる。元が安物で脆いからであらうけれど、初やなぎに言はせると、何か難た事がある前戯である。仕方がないから、片足はぬいで、半分踵足になる。

家へ歸ると、戸口から藤さんを呼びかけて、しばらく玄關にうろついてゐたが、何の返事もない。もう一度高く呼んで、今度は小母さんと言つて見たがやつぱり返事もない。家中がしんとしてゐて、自分の聲の遠入つて行く跡が見えるやうである。勝手へ廻つて初やんを呼んでも初やんもゐない。變だと思ひながら、有り合せの下駄を提げて井戸端へ出て、足を洗はうとしてゐると、誰かしら障子の内をしく／＼と吸り泣きをしてゐる。障子を開けて見ると草坊である。足を投げ出してしよんぼりしてゐる。

「どうしたんだ。」と問へど、返事もしないでた涙を拂ふ。

「お母さんはゐないの？」と言へば顔を横に振る。

「ゐるの？」と言へどやつぱり横に振る。

「どうしたんだ。姉さんはどこへ行つたんだい？」と訊くと、草坊は涙の目を見張つて、

「姉さんほもう歸つちやたんだもの。」と泣き出すのである。

「おや、いつ？」

「よその小父さんが連れに来たんだ。」

「よその小父さんだよ。」と涙を吸る。

自分は深い谷底へ一人取残されたやうな心持がする。藤さんは俄かに荷物を纏めて歸つて行つたといふのである。その小父さんといふのは大分年の入つた、鼻の先に痘痕がちよ／＼ある人だといふ。小母さんも初やんも一しよに隣村の埠頭場まで附いて行つたのださうである。

夕方の船はこの村からは出ないのである。初やは大きな風呂敷包みを背負つて行つた。少し先のことだといふ。その小父さんは草坊が學校から歸つたらもう来てゐたといふのである。自分は藤さんの身邊の事情が、色々に廻り燈籠の影のやうに想像の中を廻る。今埠頭場まで歸けついたら、船はまだ出ない内かも知れない。

い。磯村の真ん中までは二十町からあらはあらうけれど、どこかの百難馬を獲せば譯はな  
い。何だか會つて一言別れがしたいやうであ  
る。この儘では物足りない。煮されてもしたや  
うにあつけない。新け附けて見ようかしらと思  
ふけれど、考へると、その伴れに來た人間に顔  
を見られるのが難である。何だか無上の人相の  
よくない人間のやうな氣がしてならない。それ  
が情しげな眼附をしてじろ／＼と白帆でもす  
ると難である。又船が出た後であつては聞け  
てゐる。そして小母さんに自分などは來なくて  
もいゝのにと思はれると何だかきまりが悪い。  
かう思つて決心がつかない。しばらくぼんやり  
と立つて、その小父さんの顔を考へて見る。こ  
れまで見た事のある、鮮な意地くねの悪い顔を  
いろ／＼取り出して、白髮の髪の下へ嵌めて、  
鼻へ瘡を振つて見る。

やがて自分はこの／＼と物置の方へ行つて、  
そこから新妻の船に山へ附いた切道を、すたす  
たと片眞片のまゝで駆け上る。高みに立てば神  
がぞつと見えるのである。そして、磯村の埠頭  
場から出る帆があれば、それが藤さんの船だと思  
つたからである。上れるだけ一足でも高く、  
境に廻らす竹垣の根まで、葎木の中を無理無理

に上つて、小松の船を捉へて息を吐く。  
白帆が見える。地の如くに澄み切つた黄洋の  
海に、白帆が一つ、動くともなく浮いてゐる。  
藤さんの船に違ひない。帆のない船はみんな漁  
船である。藤さんが何か考へ込んで岸に坐つ  
てゐるところが想はれる。伴れに來た人は何に  
も言はないで、鼻の瘡痕を小指の爪でせゝくつ  
て穿つてゐるやうな氣がする。藤さんはどんな  
心持がしてゐるであらう。どういふ事からこ  
んなに不意に伴れで行かれたのであらうか。小  
母さんのところに一月もゐたのはどうした故で  
あらうかと、いろんた事が一度に考へられて、  
物足りないやうな、苛立たしい心持がする。船  
から磯村の岸までは、目で見てもこゝからこの  
前の岸までより遙かに遠いけれど、まだ一里  
と乗り出してはゐない。自分が岸に永くゐさへ  
しなかつたら、少くとも藤さんが出かけること  
ろへなりと歸つて來たであらうに。それともな  
ぞはじめから出て行くのを止さなかつたらう。  
一しよにゐる間に別にも思はなかつたけれ  
ど、かうなつて見れば、自分は何かしらあなた  
をいぢらしく思ふとくらゐは言つて置きたかつ  
たやうな氣がする。この儘で永く別れてしまふ  
のは何だか物足りない。自分がどんな氣でゐる

かは藤さんは知つてはゐまい。別れた後は元の  
知らぬ人と考へてゐるやうに思つてゐてくれて  
は都合がない。自分は何だかお前さんの事が案  
じられてならないのである。  
このあたりの見渡しは、この時のみは何やら  
意味があるやうであつた。暮れて行く空や水  
や、ありやなしの島の影や、山や蜜柑畑や、  
森や家々や、目に見るものが悉く、藤さんの  
白帆が私語り言葉をとりにんに自分に傳へて  
くるやうな氣がする。  
と、ふと思はぬところにもう一つ白帆がゐる。  
かなたの山の隅り角に、霧に薄れて白帆が行く。  
目の迷ひかと評を凝らしたが、やつぱり帆であ  
る。伴し藤さんの船は是非とも前からの白帆と  
定めた。遠い分はよく見えぬ。そして、間も  
たゞ霧の中に消えてしまふのである。よく見え  
て永く消えないのが藤さんの船でなければなら  
ぬ。  
はら／＼と風もないのに松葉が降る。方々の  
機音が遠くの壘を聞くやうである。自分は足  
もとつわが宿を見下す。宿は小島の逃げた空籠  
のやうである。離れの屋根には木の葉が一面に  
積つて朽ちてゐる。物置の屋根裏で鳩がぼろぼ  
ろと啼いてゐる。目の前の枯枝から女郎蜘蛛が

下る。手を上げて拂ひ落さうとすると、蜘蛛は  
すら／＼と枝へ歸る。この蜘蛛の貝殻がささと  
鳴る。今まで頼と忘れてゐたけれど、もうこの  
貝殻も持つてゐたつてつまらないと思つて、一  
つづつ出しては離れの屋根を日かけて投げ附け  
る。屋根へ届くのは一つもない。みんな途中へ  
落る。落ちて木の葉が圓かに鳴る。今のは何  
とも答が無かつたと思ふと、しばらくして思ひ  
出したやうにばさといふのがある。目を閉ちて  
横の方へうんと投げて、どの見當で音かするか  
當てて見る。しなければするまで投げる。しま  
ひには三つも四つも擲つて無茶に投げる。  
たうと決意には、から／＼の葉草の切と小砂  
とか残つたばかりである。

再び白帆を見る。藤さんのはいつまでも一  
つところにある。遠くの分はもう亡くなつてゐ  
る。そして、近く岸の薄のはづれにこちらへ歸  
る帆がまた一つある。どこから歸つたのかとは  
じめは訝しむ。その内に、これは一番はじめ  
のがこちらへ近づいたのではあるまいかと疑  
ふ。見る／＼岸に近くなる。それでは藤さんの  
船だと思つたのは、こちらへ歸る船ではなかつ  
たらうか。今の藤さんの船は、霧の中がこち  
らへ出て来たのではあるまいか。自分はわが説

が囀りの中に退けられたやうに不快を感じる。  
もしかあなたの船も同じくこちらへ歸るのだとす  
ると、實際の藤さんの船はどれであらう。あち  
らへ出るのには今の場合は帆が利かぬわけであ  
る。けれども帆のない船であらうへ行くのは一  
つもない。右から左へ、左から右へと驟なく探  
しても一つもない。自分は気が許立つて来る。

それでは先に霧の中へ隠れたのが藤さんだ。  
そしてもう山を曲つて、今は地方の輝を望んで  
走つてゐるのである。そこに極めれば收まりが  
つかない。無理でもそれに違ひないと、權柄づ  
くて白説を貰いて、こそ／＼と山を下りはじめ  
る。

下りる途中に、先に投げた貝殻が道へぼつぼ  
つ落ちてゐる。綺麗な貝殻だから、木練にもま  
た拾つて行きたくなる。あるだけは残らず拾つ  
たけれどやつと、片手に充ちる程しかない。  
下りて見ると章坊が淋しさに山羊の鬣を  
嘔いて立つてゐる。  
「兄さん、どこへ行つたの。」と訊く。  
「おい、貝殻をやらうか、章坊。」といふと、素  
氣なくいらぬと言ふ。  
「私は不意に歸らねばならぬ事と相なり  
候。わけは後でお聞きなされることと存

候。容易にはまたとお目もじも叶ふまじ  
と存せられ候。あなたさまはいつまでも  
「私」のお見さまにておはし候。船かに御  
養生なされ候やうお祈り申上候。おも  
のも申とて出で立ち候こと本意なき限り  
に存じまらざ候。何卒お許し下され度  
候。

これは足を洗ひながら自分が胸の中で書いた  
手紙である。そして實際にこんな手紙が残し  
てあるかも知れないと思ふ。出ようとする間際  
に、藤さんはとん／＼と離れへ這入つて行つて、  
急いで一筆さら／＼と書く。母家で藤さんと呼  
ぶ。はいと言ひ／＼、あら／＼かしくと書きを  
さめて、視の蓋を重しに置いて出て行く。白  
分が藤さんなら、こんな時には是非とも何とか  
書き残して置く。行つて見れば實際何か机の上  
に残してあるかも知れないといふ氣がする。

併しやつぱりそんな手紙はなかつた。  
けれども、ふと机の抽斗を開けて見ると、中  
から思はぬ物が出て来た。緋の紋羽二重に縞絹  
裏の附いた、一尺八寸の襦袢の片袖が、八つに  
疊んで抽斗の奥に突つ込んであつた。もよ

初めは奇怪な事だと合點が行かなかつた。別に證據と言つては無いのだから、それが、藤さんが竊かに自分に残した形見であるとは容易に信じられる譯も無い。併し抽斗は今朝初めに掃除をさせて、行李から出した物を自分で納めたのである。袖はそれより後に誰かが入れたものだ。そしてこの袖は藤さんのに相違はない。小母さんや初々や、そんな二三十年前の若い女に今頃こんな花やかな物がある筈がない。果して藤さんが入れたのだとは斷言出来ぬけれど、併しほかのものがどう間違つたつてこんな物を自分の抽斗へ入れ込む譯がない。藤さんとした事に極つてある。さうすれば只うつかり無意味で入れたあてではない。心あつて自分にくれたのである。さう推定したつて無理とは言へまい。自分は袖を着して何だかほろりとなつた。

併し自分に藤さんについては遂にこれだけしか知らないものである。あゝして不意に歸つたのはどういふ譯であつたのか、それさへたうと聞かないづくであつた。その後どこにどうしてゐるのか、それも知らない。何にも知らない。

といふと一寸合點が行かぬかも知れぬけれど、それは自分がわざ／＼心配してこんな風にしてつたのである。千鳥の話が大切なからで

あ。千鳥の話とは、藤のお長の手紙にはじまつて、繪に描いた女が自分に近よつて、狐が變ほどになつて、更紗の薄圍の花が流んで、おが沈んで其が埋まつて、下駄の緒が切れて女郎蜘蛛が下つて、それから机の抽斗から片袖が出た、その二日の記憶である。自分は袖を膝の上に乗せたまゝ、暗くなるまでゴつと坐つて色々な思ひにくれた木、一番しまひにかう考へた。語は只この二日で終らなければ面白くない。跡へ尾を曳いてはもう掛らないと考へた。或西の國の小島の宿りにて、名を藤さんといふ若い女に會つた。女は水よりも濃き二日の熱らひに、片袖を形見に残して知りあ間にゐなくなつて了つた。去つてどうしたのか分らぬ。それで澤山である。何事も二日に現はれた以外に聞かぬ方がいゝ、もしや餘計な事を聞いたりして、千鳥の話の中の彼女に少しも傷が附いては惜い譯である。かう思つたから自分はその夕方、小母さんや初々などに會ふのが氣になつた。二人が何となく藤さんの身の上を語つて、千鳥の話を壊しはしまいかと氣がもめた。

小母さんは歸つて來々や否や、

「あなた、お腹がすいたでせう。私氣になつて急いで歸つたのでしたけど、一と、初やにお茶の

指圖をして、

「これから當分は何だかまびしいでせうね。全く不意にこんな事になつたのですよ。と、その何か言ひ出しさうであつたから、自分は、

「あつ豆酒屋の親爺さんは、どういふ氣であなたに物を生やしてゐるんでせう。長い髪でそれと言つて、話の芽を枯らしてしまつた。それ以來小母さんたちが一寸でも藤さんの事を言ひ出すと、自分は忽ち二日の記憶を抱いて逃げて行くのであつた。どんな場合でもすぐ逃げる。どうしても逃げられない時には、一生懸命に他のことを心の中で考へ續けて、話は少しも耳へ入れぬやうにしてゐた。後には、小母さんも藤さんの事は先方から避けて一切自分の前では言はなくなつた。初々も言ひ含められませんでしたのか、妙に藤さんの名さへも口に出さなかつた。二人で何となく考へての事なのかも知れないと思つたが、そんな事はどうでもよかつた。

聞かされさへしなければいゝのである。その後小母さんからよこす手紙にも、いつでも自分がゐた頃の事をあれこれ回想してゐながら、今に藤さんの話は垢程も書いては來ない。以來水く藤さんの事は少しも思はない。よく

思ふのは思ふけれど、それは藤さんを思ふのではない。千鳥の話の中の藤さんを思ふのである。今でも時々あの袖を出して見る事がある。寝附かれぬ宵などには必ず出して見る。この袖を見るには夜も更けぬと面白くない。更けて自分は袖の兩方の角を捻んで、腕を斜めに擧げて燈火の前に釣す。赤い袖の色に灯影がしみ渡つて、眞ん中に褶が曇るとき、自分はそとろに千鳥の話の中へ這入つて、藤さんと一しよに活動寫眞のやうに動く。自分の芝居を自分で見るのである。初めから終りまで千鳥の話を詳しく見てもしまふまでは、醫す兩手のくたぶれるのも知らぬ。袖を疊むとかう思ふ。この袖の中に、十七八の藤さんと二十ばかりの自分が、いつでも老いずに封じてあるのだと思ふ。藤さんは現在どこでどうしてゐても構はぬ。自分の藤さんは袂の中の藤さんである。藤さんはいつでもあり／＼とこの中に見る事が出来る。

（明治三十九年五月）

## 月夜 (二)

自分は實際に、さうした女の西洋人の形を見たのである。

それは自分が十六の時であつた。寄宿舎に入れられてゐた自分は、父が死んで、長塚ひをしてゐる母が×學校の教官をしてゐる叔父のところまで面倒を見てもらふ事になつてからは、八月の休みには自分も叔父の處にかゝりものとなつて、母と共に一月ばかりゐた。

九月になつて再び學校へ歸るのに、行李も出来てもう立つといふ日になると、母は何だか別れたくないからもう一週間だけ學校を休んで、こゝにゐてくれなやかといふ。叔父もさしてそれを悪いとも云はなかつた。自分は母と永久に別れる日が来るのだとはもとより分らない。たゞ、母のために心の重たい日のみが續いた。

自分は母が眠つてゐる間は、もう飽き／＼した官舎の構内に、一人淋しく立ち盡したりし

つゝ、する事もない毎日を見てゐた。

官舎といふのは、學校の裏に、二筋の續きに並んでゐた。どれも同じやうに、低いからたちのかにオリア色の小門がついて、表から見える階下の二間と、二階とは、白い色に塗られた西洋造りになつてゐる。短剣を帯びた教官たちは、藁の纏つたりしてゐるバルコニーの下の上り口から、靴の儘で出入りをした。門の内は青々しい芝生で、西洋檜の木などが二三本植つてゐた。

このやうな小綺麗な官舎が、通りを挟んで、背合せに、物靜かに二三十戸續いてゐた。裏口には互の見通しを妨げるやうに、いろいろの立木が厚く立つてゐた。

自分はする事もなく、かうした校内の通りを一人でもぶら／＼と歩いた。よその家にはどのやうな人たちがゐるのか、外を通つたのでは中に入影の見えた事もなく、たゞカーテンの下りた窓などに、火を點したやうな、赤い一輪の西洋花の鉢などが出てゐたりするだけで、人の話も漏れないくらゐ上品に住ふ人々であつた。

山彦

城下見に行こ十三里、炭積んでゆこ十三里、と小唄に歌ふといふ十三里を、城下の泊りからとぼくくと、三里は雨に濡れて来た。

これぢやいの、こつちへ行くと門ががんすけ、と言つて、伴の女は、大きな立木の根に、古ぼけた鯛場の角へ来て止る。この板が三百年、浪名屋が出来てから三百年と言ひながら、馬の合符をめぐつて風呂敷包みを出してくれ。横の傘がぼたり／＼と洋傘に落ちる。向う角の小店の、赤い天狗の面を書いた障子の灯が、泥濘へぼんやり寫つてゐる。この裏はこちから返させるからと言へば、何の、わしにくれなせ、ついでががんすけの、と言つて馬へ附ける。

横へ這入ると片方は品である。眞つ黒い夜の小雨の奥に、高い木立が板よりも黒く濡んでゐる。眞赤な火が、闇にあらと見えて直ぐ隠れる。門口へ来し。

「あはな屋」と書いた四角な金燈籠がどんよりと柱に下つてゐる。小門を押し見て見たが締つてゐる。早く締に會ひたくて、とん／＼と叩いてゐる間も飛ぶやうである。やう／＼、あゝいといふ若い女の返事が聞えて、石の上を足音が来て、ばさ／＼と大戸へ傘を絶らせる。小門が重たげに半分開くと、赤い襦袢をかけた小女が、下へ置いた手燭を取り上げて、どなたでござんす、といふ。小鼻の胸にほくらがある。

奥の障子にあかりがさしてゐる。手燭に続いて松の中を這入つて行く。途中の小屋に、水鏡池や繩梯子のかゝつてゐるのが見える。小屋の横の百日紅が、編竹を被せた石の井戸を落花生で赤く閉ちてゐる。玄關を横に見て臺所口へ這入る。

何をしてゐるのか、姉は一寸出て来ない。二十ばかりの正直さうな下男と小綺麗にした年増の女中とが、上つたり下りたりして世話をしてくれぬ。黒ずんだ、だだびろい臺所に、暗い

いんぶが眞ん中にたつた一つ黠いてゐるばかりだから、何だか岩屋の中へ這入つたやうな心がある。赤い襦袢をした逞しい下女がある。盥を土間の眞ん中へ持ち出して、大家から脇がけたやうな湯をうつす。桶を繋げてその中へ立つと、下女は鼓の皮のやうな手の平でこしくくと踵を擦る。下男が側へ来て提灯を見せる。何か茹でたあとの湯と見えて、葉つ葉のちぎれが交つてゐる。さつきの小女は板の間の開き裏の鍋の下に種袋を焚く。向うの、黒光りの戸襦袢へその火が映つて揺れてゐる。裏口の方に黒いこぼろぎが二匹、まだこそ／＼と啼いてゐる。姉はどうしたものかまだ出て来ない。

女中に足を拭いて貰つて上へ上りかけると、眞つ白い頸飾をしたお爺さんが出て来た。さあさあ上り、どんなに疲れましたるぞい、前から知れてゐれば迎へを出すのに、えらかつたでせうぞいの、こんな山の／＼奥で、まあま、挨拶はあとからにませうい、と、こゝろして、こつちへおいで、姉さんがびつくりするぢやろ、と言ひつゝ、薄暗い間を二つ三つ抜けて、その障子を開け一縁側へ出ると、お爺さん、まああなたは、と取り廻るやうに呼びかけて、姉が小黒く馳せて来る。

頭のところに手拭と楊枝と齒磨の兩とが置いてある。姉の寢床はいつの間にかすつかり片附けてある。何時だか分らぬけれど、大分朝寢をしたらしい。

起きて縁側へ出る。曇つた空が低く小庭に被さつて、今日もまた雨らしい。手洗ひの水が八手の中の筒からちよる／＼と水引花の中へ落ちる。かたへ小窓の青桐の間から、裏の花晶が見える。手水を使ふと、檜杉の下駄を突つかけて行つて見る。深くやうにして歩かぬと、足の裏の豆が痛くてならぬ。

杉垣を出ると、裏は廣い蔬菜畠である。眞ん中の一仕切が花壇になつてゐる。大きな倉が七戸前、向ひ側に白く續いてゐる。白の右を限る果物の林の後から、昨夜の榎が二股に高く空に突き出てゐる。花壇の中の亭へ這入る。白い蝶々が三つ四つ、花へは來ずに、畠の大根に飛んでゐる。

しづかに腰をかけてゐるうちに、向うの青柿の間から、色の白い女がふと現はれて、畠の中を眞つ直にこちらへ向いて來る。姉である。白木の三寶をさげてゐる。いつの間にか艶やか

に髪を結んで薄化粧をして、帯をきちんと締め、小ざつぱりした若女房になつてゐる。微笑む目元も活き／＼して昨夜とは全く見違へるほどである。

側へ來て、疲れが出た、と言つて肩にさはる。ほかはないが足が痛い、ちつとしてゐても切石の上を走るやうだ、その三寶は何だ、と言へば、まだ母さまから聞かなんだか、三百年このかたの掟で、日に一度、あの榎の下のお社へ片手に一掬ひのお米を供へるのが、家の女房の大事な勤めの一つになつてゐる、雨のふる日は棲をからげて傘さして來る、といふ。姉さんが寢て居た間は誰がする。ほかのものではいけないのだ、こゝの母さまは二十七とかで亡くなられて、それきり二度目のも見えなんだゆゑ、わしが來るまでおほかた三十年の間、神さまはただ年に一度、二月の十八日のお祭の外には何にもお貰ひなされなんだ、神さまもお不仕合せでいらつした、三十年してわしが來ても、といひかけて、姉は一寸銀の簪に手を障へて、祀つてある御神體は鍍金さうだといふ。ちつと見てゐると、姉はやつぱりやつれておて、どことなく力が抜けてゐるやうである。もう起きてもいゝのかと訊くと、あなたがかうし

てはる／＼來てくれたのに、寢てゐてはすむまい、といふ。それではわしに對して我慢するのにか。いや／＼、あなたが來てくれたので直つてしまつたのだと言ふ。ほんとかしら。縁附いて來て間もないのに、一月も續いて寢てゐても、それを家の方へは知らさなかつたのである。わしにも黙つてゐた、あなたは随分だといひ／＼、花壇のはしの白い花をうつかり捲る。その恨みごとは昨夜よう聞いたぢやないか、そんなにたいた病氣ぢやなし、たゞ何となく氣分が悪いただけであつた、かゝさまが氣遣はれるゆゑ、あなたこそへ寄つて行つたといふ事を知らせても、わしが寢附いてゐたといはうておくれるな、いゝかと、念を押して、わしや先へ行く、もう直ぐお午だ、と歸りかける後姿へ、指先の花びらをふつと吹きかけると、五ひら六ひら、ひらひらと、一つが辛うじて帯の色へ白くかゝつて直ぐ落ちる。

鐙を配つたといふ社が行つて見なくなる。姉が出て來た柿の木の間から、深い果物畠を抜けて、例の榎の立つてゐる、扇骨木垣の中へ這入つて行く。向うの隅の榎の下に、小さな芽齋の社がある。榎の眞つ黒い、じめ／＼した太い幹の眞ん中を、青い蔓草が二尺ばかりの幅に、二

殿のところから高く社の屋根まで這ひ下つてゐる。古ぼけた練堀に亂れ續いた、花は枯れ、の萩の中に、一基の石碑が小暗く立つてゐる。こちら側には、小さい石燈籠が向うに九つ、ふり返つて見ればすべてで十四、垣に沿うて列んでゐる。一ばんはしの一つはまだ新らしい。あたりは一面に深い苔で、雨上りはつる／＼して滑りさうである。石に刻んだのは社の縁起であつた。

此祀我遠祖

去今三百三十年前

と書き起してある。古き代の物語は繪巻物の繪を見るやうである。三百三十年のその昔、永祿丙寅三年閏八月、雲州富田の居城陥落して、尼子氏の一門悉くこゝに亡ぶ。併し、さるところの土家の家に、宗徒のさる重い大将の血を分けた、七八つになる子供があつた。勝に誇つた毛利の軍兵が、追付その方へも押し寄せて來ると聞いて、この子にかゝる災を恐れた母は、腹心の家の子を頼んで、絹を商ふものの大婦に裝うて、素早く里を落ちて出た。二匹の馬に竄んだ菰包みに紛らして、一包みは親が分けてくれた千兩の小判、もう一つには、昔一夜の賑宴から、もく生れた子供が男なら、十五になつたら、二人伴つて名乗つて來いと、その

印に遺された、今は悲しき形見の緋威しの鎧を匿しつゝ、いづこからいづこへ渡つてか、百十何里を落ち延びて、この山中へ出て來た時、女はたうとこの里に炭商人となつて、殘された子を手一つに育て上げ、十七になると家を繼がせた。これが淡名屋の初代七郎右衛門である。當時この邊もやはり敵の領内であつたので、胡亂な鎧は下男が早く石棺に納めて中庭に埋めてしまつた。二代に至つてその上に小祠を建て、胡子社と稱して竊かに尼子氏を祀る。時に元和乙卯元年二月十八日、二百六十一年の昔である。古き代の事はこれだけしか分らぬ。ほかに記録も何も無い。戦亂の世に於ては、いろんな事が禍の種になり易いゆゑ、名門の血を引いてゐるといふことは深く世に秘めてゐたのである。たゞこれだけの事を親々が傳へて來た。この榎は、たしかには分らぬが、古くこの社の出來た頃からあつたのだといふ。

こんな調れが書いてある。裏を見ると、二十年前に建てたのである。十三代七郎右衛門とあるのは今のお爺さんの事と見える。石の肩の窪みに蟲が赤土で巢をくうてゐる。萩の枝をむしつてつゝ、いて見たが、中には何にもゐない。中

指で押へたらげちやりと潰れてしまふ。小さな鳥居をくゞつて堂へ上る。藪を覗くと、豆粒ほどの燈明が青く消えかゝつて、小暗い中に、お鏡が物の目玉の如く仄白く光つてゐる。三寶に供へたのは白米であるとはしかと分らぬ。榎の後へ廻つて見ると、蜘蛛の足のやうになつて浮き出た大根の間に小籠が生え詰つてゐる。髯は四抱へも五抱へもあらう。この木の下を掘れば石棺がそのまゝ出るであらうか。その緋威しの鎧が見られ、はい、にと思ふ。上から何やらばたりと足もとに落ちる。見廻した何が落ちたのか分らぬ。苔の中に榎實が黒くなつてちら／＼埋つてゐる。咽を釣り上げて上を見ると、高い／＼梢の眞つ先に、鳥が一匹棲つてゐる。嘴を頻りに枝に擦つてゐる。頸が痛くて見てゐられぬ。鳥居を出しなにかあと啼く。

三

お爺さんのところから痺れを切らして出て來ると、姉が向うの唐紙をあげて招いてゐる。鮎が澤山獲れて來たといふ。それから栗が落ちてゐると言つて、奥の廊下へ伴れてゆく。片側の栗の木の下に、青栗が五つ六つ落ちて

ある。果つてゐる粟にも小雨が白く塗れてゐる。まだ拾つたつて駄目かと訊いたら、一昨日下女に割らせて見たが、中はまだ白かつた、そのうち山へ探しにやろ、山にはいゝのがあるかも知れぬといふ。

廊下の突き當りは兩戸が締つてゐる。お天氣になつたらあそこを開けさせて庭を見せよう、いつもあゝして締つてゐるゆゑ、掃除をせねば汚くて這入れまい、わしが来た時には、あそこで祝言をしたのだつた、そして父さま母さまが一番奥の間へ五日泊られた、さあ、鯨を見にゆこと、姉は帯物を締め直す。

臺所にはもう灯をつけてゐる。縁側へ出て見ると、井戸端に四斗櫛へ六本の鯨が獲れてゐる。大川の業へかゝつたのださである。筒袖に鯨の帯をした若い男が、口を突らせて、景氣よく敷を讀みながら、大きいばかりを選り分けて席へ出す。二人の男がそれを一つづつ竹の中へ刺して籠へ入れる。向うの風呂場の後から、蓑を着て、背中に担架を負つた女が五六人、ぞろ／＼と這入つて来る。こちらを見て、今度は大層獲れたいの、あれで何遍目ぢやろ、もう今年はお仕舞ぢの、と黄色い聲で詳しく合つて物置の後へ這入つて行く。小さいのは鹽漬にし、

大きいのは、あゝして串へ刺して、お午に食べたやうな干鯨にするのださうである。あの小屋へ行つて見て来いと姉がいふゆゑ、下りて傘をさして行つて見る。

小屋の中には昨夜の下男が、大きな二つの火鉢に火を拵へてゐた。串の鯨を、頭を下に、背を内へ向けて、この火のまはりへ挿し列べて、上からこの桶をかぶせて五六時間放つとくと、鯨は乾いてかち／＼になる、桶が焦げないやうに、時々上の底へ水を注す、かう言つてしまへば造作もないやうだけれど、その火の加減といふものが中々骨である、鹽漬の方は早く食つてしまふのだが、干したのは來年まで一年中の食料になる、けふは七十貫とれた、大凡要るだけ拵へたら、そのあとはなんぼ取れてもすつかり村中へ分けてやるのだ、といふ。

下男は話しながら煙草を吹く。松の木の痛で作つた煙草入で、筒も木の根で旨く拵へてゐる。お前の細工かと訊いたら、まだもう一つ拵へかけてゐるから、今夜わしの寝るところへ來て見ぬか、面白ければあげる、といふ。

小屋を出ようとする、さつき女たちが、臺所の戸口で一人々々編や型の袋を拵けて、下女に米を貰つてゐる。後に聞くと、これがこの日

の勞銀ださうである。縁側へ笠を懸いで、黃楊の小櫛に蟹の解れを搔き上げてゐる、目もとの涼しい、十六ばかりの娘がある。びし／＼に濡れた蓑の胸に、赤い襟が覗いてゐる。どこかで見た事があるやうな氣がして、傘を拵げかけてちつと立つて見てゐると、女は櫛を手に持つたま／＼、うつとりと宙を見詰めてゐたが、およしや、おい／＼、と、せぎ／＼に向うへ歸つてゆく一人に振り返られて、急いで笠をかぶり、紐を結び／＼走つて行く。風呂の軒下に、砂に埋つてゐた鶏が跳ね起きて、小雨の中に體を振ふ。砂がもうつと背中を包む。

この夜、姉と二人で青櫛の雨に撥餅を焼いて食べながら、いろ／＼昔話をして、もう小早に寝ようと言つてゐるところへ女中が来て、乙吉が何か言つて来たといふ。瘤の煙草入の男かと訊いたら、あの男仕でござりますと笑ふ。この下男はじつ年からこの家へ来たのださうである。炭舟の船頭をしてゐるのだといふ。早く行つておいで、そのうちに床を取つて置く、今宵は二人でこゝへ並んで寝ようかと言ひつゝ、姉は針箱の上の水薬を飲む。提灯をつけて、乙吉と作つて、屋敷の隅の男仕長屋へゆく。三つ目の部屋へ作られてはひ

る。破れ儘の八疊である。眞ん中、圍籠裏の御に、白髪のお爺さんがカンテラの灯で草鞋を作つてゐる。この爺さんは算ださうである。後の古壁に仕事音がざらりと響けてある。

乙吉は楢へかけの燗草入を見せ、このでこぼこさへ落したら、あとは楢の葉で摩きをかけるだけだから譯はないと言つて、赤く焼けた古籠を火の中から抜いて、割つた燗の中を焼く。

濃い燗がじう／＼と立つ。カンテラの臺もこの男の考案と見えて、三叉になつた女松の小枝を逆さに立てたものである。稍あつて楢子の障子の外から、乙吉と、五十ばかりらしい聲が呼びかける。濱の方のお米がなくなつたと言ふけ、あしたの爲さんにさう言うて、誰でもえ／＼一馬御苦勞してくれんさいの。乙吉は、あ、い、といふ。この算法師は誰ぢやろ、勘一、われやいつむ軍になつた。ふ／＼、勘ぢやがせん、勘は夜番に出とります。さうぢやろてい、勘がうかうか坊主になる、例の餓頭禿が出るので、誰ぞの、そいでは、ふ／＼、こたさんは、あれや、おさまのお里の方、といふと、あ、これはこれは、眞／＼、御籠をいませ、と言つて這入つて来て、びか／＼の頭を撫でながら御籠の挨拶をする。濱の焚火の方の番頭ださうである。

青い盲目織のごは／＼した大綿羽織に、氣紐に結んでゐる。

この親爺が、こゝの家の事をわが自慢のやうにあれこれと語つて聞かせる。家の山は、凡何萬町歩ある。こゝから奥へ六里這入つても七里這入つても、よその家の山は一つも歩かぬ。九里行つて國界のところまで這入ると、昔から足一本踏み入れぬ大森林がある。多くは杉と檜で、その大きい事と言つたら、家の椋などは容易にその孫にもなれぬ。この頃は、そこから二里ばかりこちらで杉を切り出すので、楢や人が五六十人も籠つてゐる。若旦那も行つておられる。切り倒した木は、杖を拂うて轉がして置いて、雪が積んだ時に谷を滑り落すので、それを木抱が板にして、筏に作つて川を下す。これから冬の半へかけては方々の炭竈で炭を焼く。一昨日も五十駄積んで来た。炭のいゝ悪いは木

によるが、それも落葉の頃に焼くのが一ばんいのである。三里ばかり行く一寸した處があるゆゑ、その内荷馬に乗つて行つて見ぬか。そこへ行くと愈々山ばかりで、家などは三里の間に一軒もない位だから、猿が獨りで威張つてゐる。用心しないと、うつかり先生たちからかつて腹でも立てさすと、行くうちに連中を深

山集めて来て、山の曲り角などに待ち伏せしてゐて、見張りに立つた奴がぎやあといふ音や、一度にばら／＼と石を投げつけたりする。中々手に合ふ奴ではない。夏なんかは、馬方が馬を驚いで書寝して、さあ行かうといふ小時に、驚いといいた辨當行李がない、笠がない。見送すと、それが頭の上の高い／＼木の先頭へぶらさげてあつたりする。現に一昨年の春であつた。わしたちがこの邊の山林を見廻りに行つて、山の木抱小屋に住んでゐた時である。或日みんなはそれ／＼、揮場へ出て行くし、わしは留守屋に残つて飯を炊いて――二升であつた――それをお櫃へ取るなり棚へ仕舞つて置いて、日向の蔭で頭を掻いてゐたら、一時してみんながわいわい騒いで歸つて来るから、どうしたのかときよるついでゐるうちに、屋根から茶碗が二つ三つ轉がり落ちてがちや／＼と碎ける。びっくりして上を見たら、お櫃が屋根の眞ん中に乗つてゐる。箸や漬物が散らばつてゐるといふ體たらくだ。猿奴が飯を食うて逃げたのだ。いつの間にお籠などを盗み出したのか一寸も知らなんだ。小面が當かつたのは、そんな事をして置きなから、すぐ後の松の木へ逃げ上つて、すまして込んで蚤の取りつくらをしてゐる。小猿奴は

小猿奴で、腰の赤いおけつへぶら下つて、ぶらぶらぶらぶらんこをしてゐる。

番頭は調達のやうにゐるん手真間なぞをして、乗り氣になつて喋る。大變面白い話だが、二升飯のお概は猿には少し重くはないかと云ふよ、はい、でもほんとはござります、現に誰かが下しに上つたのでござります、なる、これ吉吉。わしや知りません、船頭は山へ行かんけに、と細工の手の小刀がびかりと光る。は、ムムム、これはしくじつた、さうだ、勘が知つとるわい、と少しへこんだ氣味で煙管をはたく。篝は草蓑を二足作り上げた。

四

掃除が出来ましたと言つて来たから、讀みかけてゐた本を伏せて、姉について立つて行く。廊下の粟はあれからまた澤山落ちた。小女が、手拭を被つて雑巾桶を提げて出て来る。厄介だからこちは聞けさせなんだと言つて、二十五間だといふ長い縁側が眞つ暗である。火吹竹を覗いたやうに、向うに小さな濡り戸が開いてゐる。そこから出ると、更に三四間の廊下が斜めに奥の一間に導く。

欄干の下は水である。灰白き花の萍に、絹

絲のそうな小雨がかゝる。水の向うには、杉の大木が何十本と立ち重なつて、男郎花女郎花なぞが、間にちらちら咲いてゐる。こゝは百十何年とやら昔に、國の殿さまが來られた時に建て

たのだ、この上へ上れば庭がすつかり見えると言つて、姉は襖に兩手をかけて、疲びた鎖箱の色を左右に開く。中は小暗い四段の段々になつて、黒塗の障子が高く嵌つてゐる。上へあがれば、古い繪草紙の中へ這入つたやうな心持がする。床の間の虎の皮や、脇息や、紋のついた大きな黒塗の煙草盆なぞを取り出して、殿さまがたつた今まで坐つてゐたばかりのやうに並べて見る。姉が下の間に疲れたやうに膝を崩して坐つてゐるのを見て、姉さんこれをお見、あゝ、まだこの刀かけをこゝへかう置くのだ、と抱へて来る。ふムム、昔は可笑しかつたのね、と言つて、姉は傾きながら微笑んで、二つの袂を膝にかき合はす。

障子を開けば、欄干に赤く覗いた芙蓉の花に、絲櫻の枝が雨の如くにかゝつてゐる。満庭すべ

て楓の古木のみである。後に女松の茂つた小山を負うてゐる。間近く鎖す露の中から、頂上の岩が危く肩に迫る。山のはづれに外が少し見えてゐる。たゞ眞つ白の霧の中に、二本の高い

銀杏の木と、赤瓦の寺の屋根とが、半分ばかり覗いてゐる。

姉も上つて来る。高く水に架す橋の欄干へ、一羽の翡翠が下の河骨の中からつと上る。自分はこの一間が大變好きになつた。姉が用事をしてゐる間や、向き合つてゐても話が切れずしまふと、すぐのこゝこゝへやつて来る。毎日々々小雨が降つて、外へ出ることも出来な

いし、仕方がないから、後にはこゝへ火鉢や机や、そのほか姉の部屋の調度をいろいろ運ばせて、晝間はこゝをゐるところにする。姉も用事をして置いてはこゝへ来て、二人で物の本を讀む。家へはこゝへ寄ると言つて來たのではないし、

いろんな事も氣にかゝらぬではないが、姉と別れるのがいつまでも惜しい。雨が續いてくれるのが却つて仕合せである。姉は、雨が霽れば自分分はこゝを出て行くのだといふことを全く考へもしないらしい。たゞ、あんたがあるから嬉しい、と何かいふとすぐさう言うて、自分はいつまでもこゝにからしてゐるものだといふ氣でゐるやうに見える。雨はしめんど、と四日つゞく。四日目の午まへの事である。やはり例の好きな一間へ来て、退屈して火鉢の灰をいぢくつてゐると、どこから出て來たのか、小きた鼠の子

が一匹、横の障子の根をちよろ／＼と走つて来る。毛鼠の端まで来て、一寸立ち止つて、小さな粒々の黒い目上げてちつとこちらを見てゐたが、そのうちにくるりと向き換はつたかと思ふと、大急ぎに走つて段々の方へ這入つてしまふ。稍あつて、一寸頭だけ出してまた引つ込む。

立つて見ると、どこへ這入つたか、もう姿が見えぬ。をかしいと思つて見廻してゐると、段々の襖の、小さな押入の戸襖の下の方に、小さな穴が開いてゐる。あそこだと思つて襖を開けて見ると、中はがらん洞で何にもない。ほこりの中に鼠のふんがほつ／＼落ちてゐる。さつきの鼠の逃げたところを突き留めなければ気がすまぬ。下の間へ出て行つたのかしらと考へてゐると、戸廻の天井でちい／＼と鳴く。見ると、天井の板の合せ目に二寸ばかりの隙間がある。爪立ちをして手を當てると、板がずらりと横へい

ちると同時に、砂のやうなごみがじり／＼落ちてきたから飛びのいた。上から薬が一本下つてゐる。こんどは段々の二段目へ上つて、斜めになつて手を入れて探つて見ると、紙屑のやうなものかちよ／＼とある。奥の方で親らしい奴がごそ／＼言はせる。薬をしかめてぐいと手を突

つ込んで掻き廻して見たら、何かしら固い物が  
ある。

取り出して見ると一たばの封書である。上になつてゐた方は、鼠が齧つてぼろ／＼になつてゐる。どうしてかういふものがこんな變なところに這入つてゐたのであらうか。あゝして誰かが隠して置いたものであらうか。變だと思ひながら、袋だらけだからそつと袋先へ持ち出して、どうせ汚れついでに手の平ではたいて、裏を返して見ると、民さままる、ちよ／＼と書いてある。女の文である。八通ある。よほど古いものだと思つて、眞ん中を括つた紙縫などは、醬油で煮絡めたやうな色をしてゐる。上包みの白紙も眞つ黄になつてゐる。手を洗つて机のところへ持つて上る。探して見れば奥の方にこんなのがまだいくつももあるかも知れぬと思つたが、きたないから止めにする。

火鉢に絶える火種をついで、ちつとこの青き戀を見詰めて坐つた時には、丁度春の日のそゞろ歩きに、菜の花の中に分るゝ路の、いづれへ曲るとためらふやうな心がある。女の文句が披いて見たい。披かうか。披いたら若き昔の二人が産かしがらう。披かずに置かうかと思案したが、それではやつぱり心残りである。自分へ來

た手紙を封を切らずに捨てて置くやうな氣持がする。どうしようかと迷ひながら、紙縫の下へ指を過さうとしたら、紙縫は細香でも打るやうにぼく／＼と切れる。

下の一通を手取る。下のもやつぱり、民さままる、ちよ／＼とある。裏を見ると、この分はまだ封がその儘になつてゐる。變だと思つて次のを取れば、これも封が切つてない。次のもやつぱりさうである。最後の二つはぼろ／＼だけれど、全き六通は六通ながらみんな同じに、封を開けない儘である。中には蠶がはひつてゐるのがあつて、黄粉のやうなふんが落ちる。それほど古い手紙が一つも封が切つてないのである。これはたゞの嬉しい戀ではあるまい。開いて見よう。古い昔の手紙を見るに誰に濟まぬもない事だ。ちいと一つをちぎりかけると、廊下にとん／＼と足音がする。悪い事をでもしてゐるやうにどきまきして、机の下へ隠してしまふ。女中が來たのである。下の間に手をついて、御飯でござりますといふ。

五

封に手紙の事を話さうかと思つたが、妙に自分の事でもあるやうに取かしい氣がして黙つ

てゐた。食事すむと、お爺さんが、梨のいゝのを貰つて来たからと、姉と二人を常屋へ連れて行く。姉は山の兄のところへ送るものを整へる。お爺さんは筆が出来るのである。若し時に寺の院主から教はつたのだといふ。さつきの手紙の事が氣になつて、しまひはもちろ／＼して坐つてゐた。やうやくの事で話が切れる。

再び奥の間へ歸る。向うの水のほとりの草叢に、蟲が一匹、かすれ／＼に晝の小雨に啼いてゐる。杉の木間に湧く露が、煙のごとくに水を渡る。

自分古き代の戀の封を切る。しめ／＼と小雨のごとき筆の跡である。

けふの牛いちへお里からまゐりし人のいよし、うけたまはり、また／＼かひなきうらみをこつてまゐらせし。

と、走りがきに纏れた假名が、考へ考へて五行ばかり讀める。途中で先まで開いて見る。一尺ほど開くとぼらりと紙の織ぎ目が切れる。摺つた模様のもつれ線が、紅紫の色も仄かに占りて、絶え／＼に文字の間に絡んでゐる。最後

に、きざらぎ、中の七日、ちゑより、こひしき／＼民さままゐるとある。恨みをこつてまゐらせいと、再び前から迎つて行く。讀めぬところが多くてもどかしい。背だてばなほ分らなくなる。たゞ飛び／＼に二三行づつ翻りくさしたままで、ずん／＼六つ封を開く。

それでも、氣を落ち附けてよみ返すと、しまひにはだん／＼に少しづつ分つて来る。時々後へ返つては字を較べ合せて見たりするうちに、すべてがやう／＼頭に這入る。

叶はぬ戀の恨みである。女は夜晝涙に伏して、袖を濡みちぎつて悶えてゐる。何ゆゑか男は取合はぬ。いくたび文の数をかさねても、ただ一ことの返事もくれぬ。昔は昔、添はれぬ戀は互に忘れてしまひたいとばかり、投出すやうに返事して、その後またいくたびも出す文

は、こんどは／＼と、待ちに待つのがいつても仇だ。あれだけの數々を一つに繋げば、何十丈といふものになるのである。その中に、一寸ぐらゐは不憫な女の願ひが見えてゐさうなものだ。添うてくれななどはもう疾うから言ひはせぬ。

わしが厭におなりたのか。大方それはさうぢやるが、厭になつたらなつたのだと、たゞそれだけ聞かしてもらひたいばかりに、この三年を

生きてゐた。それだけ書いてよこす一言が、なぜそのやうに情いのか。わしが恨めしきもどかしさは、水を掬へば火となつて落せば再び水となる、地獄の底の責苦に、生きて遺ふかと思はる。縁側に立つて北の空を見つゝ泣けば、涙の目に迫るあの山々が、嘯んで／＼嘯み辞きたい程やるせない。果はいつもそのまゝそこに伏し倒れて泣くのである。

女は誰にも話さずに、この苦しみを狭き胸一つに押しこめて悶えてゐる。母親は何にも知らぬゆゑ、病はわしが念力でも取つて除けると言つて、三年の長煩ひを力をつくして介抱してゐるのに、女はいつまでも直らぬやうにと祈つてゐる。直つたらまた縁付きの話で血を絞られなければならぬ。

されど母さまが、わしの介抱に瘦せてやつれてゐられるのを見れば天罰が怖ろしくなる。先夜も次の間でしく／＼泣いてゐらるゝゆゑ、よろよろ起きて行つて見たら、筆筒からわしの衣裳を出して泣いてゐられる。先年三村屋から

話があつたとき、なぜそなたはこの衣裳を着て綴づいてはくれなんだかと責められる。あの時にはお前さまから内證でくる文が、帯の間に絶えたことがなく、いちんちたいそは／＼とく

らしてゐた。仇し男にどうして添はれよう。母さまは再び涙を飲んで、三人がかりで十日も寝ずにこの衣裳を仕立てた時には、わしや手足も浮いてゐるやうに嬉しかった、あの時素直に行つてさへくれたなら、たとひその後こんなに行つて裏やうとも、それは實家へ歸つて寝てゐる病いまではあなたは年頃すきて、いつまでも縁づかずに斬うてゐるのだと泣かれるゆゑ、母さまも忍して下されませと泣き入れば、いゝや、わしや叱るのぢやない、不憫なからだ、たとひ今すぐに直つてくれ、すぐによそから買ひに來てくれるとしても、これ見や、十七の春のこの花のやうな振舞は、もう着ては行かれぬぢやないか、たうと生着られぬぢやないかと言はれた時は、わしや勿體なうて切なうて、生きてゐるのホ辛くなつた。

六つの文はかゝる痛ましき繰りごとを暮ねて、寢事をしんと、足に敷り纏らぬばかりに寝込んでゐる。しやになつたのだと一こと聞けば、それで未練も遺さずに、このまゝ絶え入る事が出来ると言ふのである。六つ目の文には、進て書に、小十は大井さまとやういふ三百石のお傳へ傳へて入つたと書いてある。

六

民さんといふのは誰のことか、お爺さんに聞せば分るだらうが、何だかそんな事も訊きにくい。お爺さんの恥でもさらへ出さうとするやうな心がする。考へて見ると實際又、お爺さんの親が叔父か兄弟かであるかも知れぬ。事によるとお爺さんその人も分らない。波多なことは訊かれはせぬ。そして一方から言つても、誰だといふ事が分つては興がなくなつてしまふかも知れない。目南へ出しては羽が抜ける。やつぱり月夜の霧の奥に、仄かに仕舞つて置かねば損だ。だれだといふまきまりはない。たゞ圓々に殿さまといふものが治めてゐた古き代の戀である。民さまは世話物に出て來るやうな若い綺麗な男なのだ。

だからお爺さんには言はぬけれど、姉にだけはこつそり話したい。情深い姉が同情すれば、はかない文の女は嬉しがるに違ひない。手紙は袋に包んで持つてゐる。言はうかゝと思ふけれど、女中があるから何だか言ひ出しにくい。二人はらんぶの向ひ側で、奥山の兄へ送るお入の室開着へを入れてゐる。今夜中に仕上げて置かねばならぬといふ。けふの便りに、今

年は山はもう霜が降るとあるさうだ。

自分はこちらへ轉んで物を讀む。しばらくして女中は、さあすみしました、あとは私が行きますと云つて、着物を抱へて立つて行く。姉は塵に落ちた靴履を拂ひながら、さうに午から中ぢつと縫物ばかりしてゐたから、あなたとは永らく會はなんだやうな心がする、少し肩が凝つて來た、久し振でお針をすると第一にこゝが痛くなる、と言ひつゝ、腕指の先を見詰めてゐる。お京が行つてしまつてもやつぱり言ひ出し悪い。何ゆゑか妙に、あんな話をすると姉が羞かしがるだらうといふやうな心がする。ぐづぐづしてゐるうちに、姉は氣が向いたからと言つて、床の間の琴を下して調子を調べはじめた。それからいろ／＼の語が出て、手紙の事はたうと話さずに寝てしまふ。

並んで寝てゐる姉は、羨しいほどすや／＼と寢入つてしまつたのに、自分は目か痒えていつまでも寢附かれない。寝よう／＼ともが／＼ほどなほ寝られない。しよぼ／＼と降る雨の音に、二間三間隔でた柱時計が、十二時一時と更けて行く。その間、傳の女の事が引つ切りなしに頭に響はる。色々場面が、一度見た芝居を想ひ出すやうに目の前に浮く。ほかの記憶が入り

代り間へ這入つて来て、塗物へ息を吹くやうに、曇れば乾いて、しまひはすぐこの女のことになつてしまふ。

昔七八つ頃の頃に仲よくしてゐたお絹さんの事もひよつくり思ひ出した。南京風の箱を提げて、何とか言つた建具屋の店の鏡屑の中をばさばさと這入つて行つて、無花果の木のところから、お絹さんく〜と呼び出す。障子の内では三味線のお稽古をしてゐる。誰かいの、禮さまかいの、おはひりなさいやとをばさんが呼ぶ。お絹さんが縁側へ出て、随で何か言ふけれど分らない。白足袋へ鼻緒の赤い跡が附いてゐる。お絹さんは抜け出るやうにしてやつて来て、こゝへ来ては厭ぢやといふ。こんどがわしの番ぢやけに、直ぐぢやけに、門口へ出て待つてゐておくれなさいの、とみんなにきまりが悪いといふやうな素振をする。お絹さんが中へはひると、をばさんが、禮さんはもうお歸りたかと訊いてゐる。無花果の木の蟲が吐き出した、無屑のやうな固まりを指先でいぢくりながら、往かずにやつぱり立つてゐると、片手の箱の南京風ががらがらと車を廻す。だれだつたか、大きい女の人が出て来て、禮さん、帯が解けとるに言つて、後へかんで結んでくれて、かはいゝ鼠ぢ

やいのと言つて出て行く。やがてお絹さんが赤い扇子を胸に挿して出て来る。お不動さんのお祭へ詣つてこれを買うたんだと言ふと、あらあら車を廻す、車を廻すと言つてお絹さんがよろこぶ。あと先になつて鏡屑の中を駆け一出る。家へ行かうとわしいいふ。お絹さんも自分の家へ來いといふ。

それから日を置いて、巴屋の奥座敷でおさらびがある。いゝ着物を着て付さまと件つて行く。庭の櫻に雪洞が點してある。みんなの中へ坐つて見物する。お絹さんとこのをばさんが見附けて、巻簾司を鮑の貝へいれて持つて來てくれる。兼屋の爺さんが燭の心を切つて廻る。三味線が鳴り出して、白と赤のだんだらの幕が開くと、お絹さんがきら／＼した簪を一ばいさして、振袖に長い帯を後へ下げて、おくみになつて出てゐる。わしは嬉しくていよ／＼お絹さんが好きになる。もう一人のおくみは蟲が好かない。そのうちにべるりと舌を出したりなんかして可笑しな風をするから厭になる。お絹さんだけで舞へばいゝのと思つて商売くてならぬ。やがておくみのお絹さんがその儘すん／＼大人になつて、どこの家とは知らぬ小暗い窓の下に、振の袂を押し當てて泣き伏してゐる。緋

鹿子の鬘がゆら／＼と搖れて、なぜに返事が貰はれぬ、會ひたい／＼と泣いてゐる。——何でもすぐに文の女の事になつてしまふ。

そのうちにぼろ／＼の二通の事を考へて、寢られぬついでに一行でも持つて讀んで見ようといふ氣になる。姉はいつの間にかあちらへ向き變つて寢てゐる。目をさましてくれねばいゝ、と祈るやうにしつゝ、徐かに蒲團を扶け出して衣箱のところへ行く。着物の袂が脹れてゐる。手紙を取り出すと、再びそつと蒲團へはひつて、有明行燈を少し掻き立てる。

鼠に喰はれた分を披げて見る。一つは下の半分過ぎしか形がない。薄羅で小貝の繪が摺つてある。一つは只の白い紙である。この分は全でめちや／＼で、開けばばら／＼に小さく切れてしまふ。小貝の間に拾へる言葉に後先を足すと、この手紙の届かぬうちに、わしは十萬塵土へ行くかもしれない。何かしら、一品はお前さまの形見に持つて行く。——髪は剃り落さず置いて貰ふ。……一つ合點かぬは、お前さまは家の總領でありながら、なぜに今日までお嫁を取らずにおいでなのか。萬々一、時を待つてわしに添うてやるといふお積りであるのら、わしやかうして死んでゆくのが口惜い。併しそれ

は愚かな心の迷ひである。……おまへさまはわしの事はすつかり忘れて、いゝ嫁さまを買うて千代八千代まで養えて下さい。遠くからお二人の息災を祈つてゐる。……わしや少しもお前さまを恨んでゐぬ。いつノ、までも、おなつかしい方だと思つてゐる。これまでかすノ、はしたないことばかり言つたのは、どうぞノ、お許し下さい。いまはの際にたつた一日、遠くからでもお顔が見たい。……何月かの十一日と、さゝがにの縁の如くにかほそき文字が、かすれんに亂れてゐる。女は一息々々に近づく死期を待つてゐるのであつた。

はじめて気がついたが、びやになつてゐる方は手が違ふ。たしかにほかり女の手に。肉太にこねくつた拙い字である。日附のところには女月十二日と、前の分の日附の翌日になつてゐる。切々の中から取れるところだけ拾つて見る。見馴れない字だから中々讀み悪い。

……は女にそだち不申し。また、よめいりいたしまり外もの……  
 ……といふのがある。  
 ……これに類もなき世の口のうはさにて外へど、萬一これが……  
 ……聞かぬか吹つてゐれど、

まことにて外ときは……と續くらしいのがある。

……がいよノ、せまりまらせ……これは書き出したところらしい。

……これを申しのこしゆゆゑ、それが氣にかゝりて……

とだけで切れたのがある。あとに枯葉を採みちぎつたやうな切々や、膨のやうに裂けたのばかりで、もう拾へるところは一行もない。拾へたのだつてさつぱり何の事かわからぬが、代筆を頼んでゐるといふのは最早からだが利かなくなつたのにちがひない。かくて遂に息が引けたのだ。枕元に嫁入の衣裳がならべてある。紅女袴の裏側の襟に冷たく亂れた、さびしい黒髪を片手にたぐつて、泣き／＼燈火に黄楊の櫛を振いてゐる。附き添ひの女の懐に、この手紙は匿されてゐるのかも知れぬ。

ちぎれを集めて、小貝の模様の一通へ巻き込んでゐると、またもう一つ大きいのが出て来た。

……これ、たゞりをはらひなされいやう、くねくねもねんじ上げ……眞ん中が破れてゐる。

……その二十七にてみまかり外と申しこと、いとノ、氣がかりにぞんじまらる

せぬ。それではお家のさかえおぼつかなく……

といふ文句である。何か男の家には浪りがあつて、それでは家の繁栄が衰えないから、何とかしてそれ浪りを縛はなければいけないといふのらしい。自分は不意に冷たい水の中へ漬けられたやうな心持がする。再び前の切れを選び分けて見る。女は育たぬ。……やはり浪りのあるであらうか、そして嫁入して来た女は……それが二十七で死ぬといふのはあるまいか。こゝの母さまは二十七で亡くなつたと聞いたやうである。そして三十幾年して姉が来たのである。……自分は愕いて、もつとで、姉さん、と呼びかけようとした。姉はすやく／＼と小さい息に寝入つてゐる。

七

裏裳をしてゐた間に四日の小雨が霽つて、午後の日がかん／＼とさしてゐる。目隠しを取外したやうにからりとした心持がする。大空は産毛一本ほどの雲もかすれずに、高く深く、眞つ碧に澄んでゐる。裏の方で小鳥がちい／＼と啼いてゐる。水の白く落ちる水引花の小縁に兩足を垂れて日向を見る。からだが軽くなるやう

ない、大氣である。

姉がやつて来て、たうと起きたのね、といふ。おろし立ての手拭を帯へはきんで、小急がしとらな襟子をしてゐる。お年につきさうかしらと思つたが、それでは夜が足らぬからほつて置いた、もう四時すぎだ、といふ。昨夜はたうと寢んつくて、人で話してゐたのである。わしが目をさました時、あんたは何であんなに目を開けて考へ込んでゐたのか、とまた訊く。何でもなかつたのだと言つて、下つた手拭をいぢくる。どうしても言つてくれないのだからなほ更聞きたい、と言つて微笑んでゐる。いま考へればもう何の事もない。祟りとかなんとかいふのは暗い昔の事だ。こんなに日あかんノとしてゐる中に、そんなだた黒いものが滑んでゐるようなわけがない。手紙の文句を繰り返して見たつて怖くもない。あれは眞夜中で雨が降つてゐたからだ。行燈の灯で考へたからである。寢つかれないで頭が腫になつてゐたせゐだ。姉は、けふは舊の十五日で、夕方から振まひの酒事をするのだから、その支度を手傳つてゐるのだと言つて、いそ／＼して直きまたあちらへ行つてしまふ。

ひとりだとぼ／＼裏へ出て行く。例の夜が、

ちい／＼と啼きかほす何十羽の鶴鳥を包んで聳えてゐる。花畑に白い蝶々が出たり這入つたりしてゐる。

花を一廻りして、向うに並んだ倉の後へ行つて見ると、そこゝに外へ出る小門が開いてゐて、戸が半分開いてゐる。下は一面の苗木の畝で、向うに延びた、大きな杉の茂つた小山の麓まで、だん／＼に高くなつてゐる。杉の畝は下が赤枯れた色になつてゐる。左を隔る樟林の後から、すぐに高い山が迫つてゐる。右の方は六七町の青い稲田が、中流の段々になつて、正面の小山の後から延びた、高い山の隈まで昇つてゐる。田の中に灘れん／＼に薬家が五六軒ある。全く插鉢の底のやうな山中である。

苗木の中へ下りてぶら／＼と田の方へゆく。鶴はみんな穂が立つてゐる。ちよろ／＼と流れる水のところへ来て、しばらくの間大藨の花を捲つて投げ／＼する。それから酢豆の葉を取つて、一寸置きに並べて、藨の花を一つづつそれへ載せて見たりする。十人前の風が並ぶ。一二間行つては、同じやうに野菊を載せたり溝蕎麥を載せたり、しまひには困つて酢豆を捲つて載せたりする。もう腰になつたから、稲の穂を一本取つて、粒々を一粒づつ前齒で噛んで、牛乳

のやうな汁を嘗めながら、ボウリ／＼引き返す。振り向いて見ると、豆の葉の風を知らずに踏んだり蹴散らしたりしてゐる。

苗木の中へ歸ると、向うの小山から、頬被りをした爺さんが、小籠を肩にしてとこ／＼下りて来る。その方へ向けて行く。

行き會ふと、爺さんは手拭を取つて、お許しなされませと言つて丁寧にかゝむ。乙占のところにゐた爺さんであつた。魚の小骨を植ゑたやうな頬髯が、目にきら／＼と光る。何だと言つて籠の中を覗くと、椎茸を澤山採つてゐる。この山に生えたのかと顎で指すと、爺さんは小腰をかゞめて、はい、お墓へおまゐりでございますか、はい、お墓はこの山の上でございますと、辻褄の合はない返事をする。嫌だからである。併しこの山に誰の墓があるのだらうと思ふと、ついでに上つて見る氣になる。

雑木の中をうね／＼と上る。木の葉を漏る日影は、もはや、赤がかった夕日の色である。松林の中の赤い土の平みへ来る。こゝへ来ると景色がずつと開ける。

すぐ向うに険しく峙つ山の裾を、二三町幅の大川が、ゆる／＼と渦を巻いて眞つ青な海になつてゐる。大きな岩が兀々と覗いてゐる。こち

らの岸の稲田は、足もとから左の方へだん／＼と響が廣くなつて、三四町ばかりで盡きると、また山の續きが横合から出て来て、兩方から川をくの字にはさんで遠く走せてゐる。水の青みは日影を受けて薄紫や赤みを帯びて、やがて川中の女松の林のところから二つに割れて、白き瀬と碎けて落ちる。それが一つに合すると小幅になつて、末は小黒い山あひに淡く煙つてゐる。川の縁に沿ふ一筋の岨路に、四五寸の薄墨色の小舟を水に曳いて、小指ほどの黒影が二つ上つて来る。

後を見れば、向うの山の麓に續く古ぼけた一筋の町が、小さい丘の兩方から、長短に覗いてゐる。右のはづれに赤瓦の寺がある。銀杏の木が三本立つてゐる。小山の左の角から、姉の家の禪堂の一角が見える。例の檀がこの山里を領し、藪に突つ立つてゐる。

また川の方を見る。横手の間近に葉蔭に油漬が鳴き出した。みんなのあとに立ち後れて、たゞ一匹、しんとした山の秋に封じ込められてゐるのである。何やら惻れな鳴聲が、日影を赤く頭はせて、向うの山まで響いて行く。小路について、丁度その聲の出る方へ這入つて行く。薄い女松がこもりと立ち詰つて、絲筋ほ

どの日影も漏れぬ。藪にどの木へ棲つてゐるのか、路が濡れば後になつて、やがてもう聞えなくなつたと思ふと、仄暗い路は櫻の大木に盡きて、右手に石の鳥居を見る。そこから小高い石の段々が附いて、上に石燈籠が二つ立つてゐる。上つて見たらそこが姉の家の墓場であつた。杉の中が小暗く開けて、深い苔の雨側に、墓が高低に並んでゐる。正面に、初代七郎右衛門と大きく刻んだのが、梅根で赤く包まれてゐる。森閑として木の葉一枚の音も立たぬ。仄暗いあたりの色に、からだも古く染まるかと思ふ心がある。上を見れば、狭く蓋をした夕空に、白い雲がちぎれ／＼に迷うて行く。

右の取附きのは十二代七郎右衛門の後妻とある。お爺さんは總母にかゝつたのだと見える。その次の墓の花立の間から、小さい蛇の抜殻が覗いてゐる。蟬んで引つぱり出さうとしたらぶつりと切れる。石の間を覗くと、一寸ばかり下を、囀中がずつと集まつてゐて、向うへ出たところに、頭の方がだらりと二三寸下つてゐる。蟬の抜殻が丁度その頭と上下に向き合つて、斜めに喰つ附いてゐる。何事か冷たさうな話をから／＼に囁き合うてゐる。指で障れば、蛇はふは／＼と動く。蟬は力を込めて齧り附い

てゐる。後の墓の根元に火を焚いたあとが残つてゐる。この墓の裏面には、

元治甲子元年閏月十日亥 行年七十有二男 文政戊寅十二年 長女 八津川隴防八里 書儀 白鶴一 賞賜 弘化丙午三年 歳大 散 散 散 二十一 村 漢侯 再 賜 銀十枚 …… 前妻 名 加 久 ……

二十七で死ぬてゐる。表を見るとお爺さんの雙親である。墓だと思ふ。お爺さんの妻も二十七で死んで、生みの母親——繼母の方は七十四まで生きてゐるが——生みの母親がやはり二十七で死んでゐる。向う側の角にあるのがおばあさんの墓である。行つて見るとちやんと行年二十七とかいてある。墓だと思ふと、昨夜の手紙の文句が影の如くに想ひに浮ぶ。何だか頭の中が土で詰つたやうな気がする。またこちらへ来て二十七と讀んで、それからつきつぎにほかの墓を見て廻る。合靈といふのに、十二代の女の子が二人、一つと六つで死んでゐる。十一代の娘が十六で死んでゐる。女は青たぬといふ文句がどこかに刻んではないかといふ気がする。十一代の妻は、後妻は六十いくつだが、先妻の方は早く三十二で死んでゐる。

順々に見て歩く。字の讀みにくいのは石の角を押へて透して見る。そのうちに、また歿年二十七といふ女房がある。十代の嫡妻だ。これで二十七が三人である。ちつと立つて考へると、まはりの暗い杉の後に夜風の如きものが吹ひだくと黒く叫んで走つて行くやうな心とする。これはわが神經だと思ふ。何だか早くこゝを立ち去らねばいけないといふ氣がして来る。あとの墓の事は忘れて、知らず、石段の半まで下りて来る。あたりはすでに大分小暗くなつて、踏む石段ばかりが仄かに白い。

ふと姉の姿が物の匂ひのやうに心に浮ぶ。ひとりで振り向いて見た石燈籠の片はしに、目の迷ひか、蜘蛛の絲のやうなものが一本下つてゐる。一尺ばかりで切れてゐるけれど、下の切れ口が土の下にあつて、それが眞つ黒い土の中を、切れるかゝと思へど、うねゝとどこまでも續いて、末は家の練堀の根まで傳はつて、そこから目に見えぬほど小さくなつて、姉の袂の先へ絡まつてゐるはせぬかと思ひつゝ、段々を下りる。姉の袂が捲れば、絲はふはゝと白く動く。――そんな事がある譯もない。併し兩親にさう言うて、早く姉をあの家からつれて出ぬと、わしが歸るとまた煩ひ出して、二十七になつた

ら死にはせぬかといふ氣がする。まさかそんな事もあるまいけれどと思つて見ても、それでも油斷がならぬといふ氣がして来る。ばかな事を考へるものだと自ら打消しつゝ、はじめの入口のところへ出ようとして、ふと横の透間を見れば、薄青く暮れかゝる遙かの空の下に、眞ん圓に淡く出てゐる夕月の中へ、水が二里、白く煙つて流れて追入る。今夜はいゝ月夜である。

## 八

外の夕間から這入つて、臺所へ上ると次の間の襖の透間から赤々と灯影が見えて、大勢が賑やかに酒を飲んでゐる。わつはつはと一度に笑ひ出す。はじめに厭た夢からさめたやうな心がある。お京が見附けて、お歸りなされましたか、すぐにお風呂へお召しなされます、奥さまが先刻から探しておいででござります、といふ。

酒を飲んでゐる縁側を通ると、障子に五六人の影法師が寫つてゐる。大きく襖がした女の影が、何かしら皿へついでゐる。肘を張つてつると素麴かしたら嘔るのや、年取つた聲でねちねちと理窟を埋ねて、まあ聞かんせ聞いしてくれなせ、と手を動かすのや、互に酒を注ぎ合ふ

のや、いろんなのが影畫のやうに寫つて、わいわい言つて飲んでゐる。どこかの娘が手傳ひに來てゐるやうである。一番先の障子が少しあいである。額を反けて通り過ぎると、あゝ、もしもしあなたさま、と、屋根のお櫓が呼びかける。風呂へ召すのぢやわいの、と、後から来るお京がいふ。

風呂へ浸つてゐると、乙吉や、與平やと、お櫃が聲を絞つて促してゐる。一座がしんとつたかと思ふと、二人の若者が節を揃へて小唄を謡ひ出した。黄色い聲と胸滿聲とがうまく一つに調和してゐる。駈け出して行くやうな、景氣のいゝ唄である。黄色い方が乙吉かと訊いたら、お京は、はい、と言ひつゝ着物を片寄せる。落舟の唄ださうである。何とかよおゝゝいと、しまひを細く長く投げる。

「落ちてゆく時や、よおゝゝい。」とまた話ふ。じやぶゝゝと、側から口早に川瀬の音を入れる男がある。

「落ちて行く時や、躑躅が赤い。着けば大濱の、よおゝゝい、灯が赤い、よおゝゝい。」と話ふ。

お京が背中を流してくれる。大濱の灯といふのは何かと訊くと、何でございませうと言つてくすゝ笑ふ。女のゐるところらしい。

二十五間の縁に月夜を踏んで、奥の間へ這入つて行く。上の間に點した朱塗の雪洞の灯が、黒びかりの段々にゆら／＼と流れ落ちてゐる。雪洞の向うに、袂の振に紅友禪の覗いた姉の後姿が、待ちわびたやうに火鉢の灰を掻いてゐる。

上つて行くと、こちらを向いて、まあどこへ行つてゐたのかといふ。その邊を歩いたのだと言つて、赤い高足膳を向け合せて坐る。火鉢の小鍋がくつ／＼と煮える。なんぼ探しにやつてもるやせぬし、いつから待つてゐたか知れぬ。今夜はお爺さんのところへは院主さんが見えるのだし、こちらは二人で面白くお月見をしようと思つて、通ふに遠いから、いつそ何もかもすつかり持つて来た、御馳走は何にもないが、今夜のはわしが拵へたのだから、と嬉しさうにしながら小鍋を下して、もつとこちらへかうお向き、あら、あなたは赤い顔をしておいでぢやないかといふ。少しほてり出した、風呂から出ると、何かいふあの頭の禿げた番頭に無理矢理に引き入れられて、たうと四五杯飲まされて来た。まあ、いらぬ事をする爺さんだ、それでは

もう飲まれまい、とはずみが抜けたやうにいふ。まだ飲める、もう少しぐらゐ。そんなら折角だから、難儀にならぬやうに、一つか二つお重ねや、と小徳利に燗をして、鍋の湯豆腐をついで、胡麻味噌をかけて赤い刻み生姜を入れてくれる。姉も箸を取りながら、いゝお月夜ぢやないかといふ。

障子の外は、深い水の底の圃のやうである。

一面に碧くさした月影を掻き分ければ、手に白き泡と割れ返るであらう。池の面が網蒲團の上を行くやうに歩かれさうで、木間に滑り入れれば、枝は藻草の如くにゆら／＼と靡きさうだ。小黒く向うを隈つた松山は、發れば薄紙の如くにべりべりと破れてしまつて、二三十里のたゞ碧白き圃が、この高殿の領に入るだらうと思はれる。山のはづれから庭の色は白みがかつて、上へ延びると再び碧く空となる。影のごとき阿斐屋の屋根の上に、星が一つ見えてゐる。静かな月夜である。もの言へば、わが聲が水の上を渡つてゆく。

それはさうと、紙屋のおようさんはどうしてゐてぢや、と姉が突飛な事を言ふ。今ふいと思ひ出した、あなたはあの人が大好きぢやつた。なぜ。ほゝ、一寸ぐらゐ好きぢやつた

る、あなたがどこかで貝殻を澤山もろて、それを入れる袋をおようさんが拵へて来ておくれたことを覚えてゐるか、桔梗紫の甲斐絹で裏が白で、緋縮緬の紐がついてゐた、それからおようさんが家の二階で泣いた事があつたら。それは知らぬけれど、ともかくあれからもう五年ばかりになる、あの頃わしは兎を飼つてゐた。今ゐるところはさびしい鳥ぢやと聞いた。あゝ、この夏叔母さんのところへ行つた時に、山へ上つたら、おようさんのゐる鳥が、潮路のはてに徴かに見えた、その時はおようさんの事は忘れてゐたが、今考へると、あの鳥がさうだ。さういへば會ひたうなつた、この山へのぼれば沖にその鳥が見えさうな心がある。

月がきら／＼と橋のかなたの水草の中に碎ける。おようさんといふのは姉のお針のつれである。お京が鰻を焼いて持つて来る。お湯へ這入れと姉がいふ。只今富やが這入つて居ります、誰とかが、見つけないお方が八幡さまの方へ行かしたつたといふのを聞いて、あそこまで行つて見ましたさうでございませといふ。まあ、かはいさうに、禮さん、あなたを探して歩いたのだ。

腕の蓋を取れば中に稚芽と玉子の薫味を煮た

高野豆腐とが運入つてゐる。これはあそこの山で振つた樺茸か。あら、あの樺茸のところへ行つて見たの？ 日に干さない、と直ぐは食へないのだろ？ まあ、あの山へ上つてゐたの？ ああ、ひとりですか。一人で。どうして樺茸のあるところが分つたの？ 樺茸は見ない。あしこの杉の中へ這入つて行くと、奥に墓場があるが知らんぢやろ。墓か、と、それとなく雪洞に刺の面輪を透して見る。わしが追つつけ埋まるところぢやから、いつか行つて見て置いておくれ、といふ。いやだ姉さん、と蓋を置いて、もしや二十七の事を知つてゐるのぢやないかと考へる。姉さんがそんな死になんかするものか。ほほ、禮さん、なぜそんな顔をしてゐるの、酔うたのか、と嬉しさにさし覗く。姉は何にも知らぬらしい。いつまでも知つてくれなければいゝがと祈るやうに思ふ。

あれ、と姉がいふ。笛の音が月夜の中から傳はつてくる。お爺さんか院主さんかと姉は耳を敏てる。姉の白粉の匂ひが来る。目を閉ぢると、ふと文の女が芝居のお染のやうな多々想ひに浮ぶ。丁樞がそつと出す文を、あたりを見る見る受取つて、帯へはさんでそは／＼と、二重の暖簾へ這入ると思ふと、女は煩ひに腕に

やつれて、床の上に髪をほつれを搔上げる。白い小時に紅女袴の袖口の袖口が縮まる。目を開けば、姉は宙を見る目で聞いてゐる。笛の音は駭けて月夜と響むのかと思はれる。

お京がまたやつて来る。あの乙吉があなたに、と言ひかけて、一つ私にお酌をさせて頂きます、と莞爾やかに追つた後、乙吉が、舌が纏れてよく分りませぬが、あすは舟を出す申します。それが？ と姉が訊く。あなた、あすお立ちなのでござりますか。あら、と姉は愕いて、禮さん、まあ、わたしには知らぬ顔をしてゐて、あの、いつ乙吉に約束したの？ こなひだ頼んで置いた、いやぢや禮さん、あすはまだ水が引かぬから船は出ぬ。水はもう大丈夫でござりますさうな、淵が青うになつて居ると申します、しかしお歸るのはあすには限りませぬ、とお京が口を添へる。

愚圖々々してゐてはいつまでも切りがつかぬ、いつそあすにしようかと考へる。わしやも少しは泊つて貰へる筈でゐたのに、と姉は訴へるやうにいふ。それにあしたは炭を積んで落ちるんでござんすけに、汚うござんすけに、と雪洞の燭を覗いて見てお京は立つて行く。それは面白い、唄の文句をその儘だ、炭積んでゆこ十

三里、といへば、ほ／＼、さつきのあるで、もうお覺えなさいました、とお京が段々のことこで振り返る。なに、これ今申聞いたんぢやない、こゝへ來ぬうちに疾うに城下で聞いて来た、城下見にゆこ、よ／＼、いと、先刻の節の眞似をして、お京の指を注ぎにしたのをぐいと飲む。ほ／＼、とお京が笑ふ。酒が頭へ上つた。笛はまだ絶えんに續いてゐる。

お京が行つてしまふと、禮さんと姉が纏り寄つて、あなたが歸つたら、わしや、——ほんとに、あしたの歸る氣か、と膝に手をかけてさし覗く。姉の雨の睫には見る／＼涙がにじみ出る。

(明治四十年一月)

### 月夜 (二)

一しきり飛びかはしてゐた赤蜻蛉も、もう終りとなつて、稀に生き長らへてゐるのが一匹、黄色い冷々しい日影の中に、門口の小溝のふちの石にとまつて、自分の影と重なり合つてぢつとしてゐる。人が通るとちら／＼と立つけれど、また同じところに歸つて石の上に影を落してぢつとしてゐる。

おみつさん

緒の切れた片方の下駄を、帯へ通して腰に下げて、女竹を二本、じい〜と後へ引き拵つて、片跣足で、跛を引いてのらり〜歸つて来る。表の提灯屋は、もう店をしまつて門口を掃いて、銅げちよるの戸が下りてゐる。露路へ這入りかけると、提灯屋の障子戸がらつと開いて、

「丁さん〜。」と、誰だか、白粉を附けた若いおばさんが、塵取を提げて出て来る。

「丁さんでござんせうが。まあ、すつかり見違へた。こつちへおいでい、丁さん。あたしぢやのに。〜もうあたしをお忘れか。〜ほ、分つたの？」と嬉しうにして、塵取を置いて側へ来る。おみつさんだ。知らない間にをばさんになつてゐるのだから分らなかつた。綺麗に髪を洗つて、黒い帯を結んで、綺麗なをばさんになつてゐる。

「まあ大きくおなりたいの。お前さまがいつ

の間にこんなになんしたろ。いくつにおなりたいの？ え、丁さん。」

背中へ手をかけて、覗くやうにして訊くけれど、何だか恥かしくて、電信柱を爪で擦りながら黙つてゐたら、おみつさんは後から兩方の手取を操つて、

「丁さん、なぜそんなに恥かしがりなんす。」と、驚さりかゝるやうにして、重たく二足三足たじたじと歩かせたが、

「あ、あなたは跣足でゐるか。〜下駄は片つ方だけかいの。〜ほ、こんな事をして丁さん、着物が汚れるに。除けなさいよ。もつとかう向いて見なせ。〜好え帯ぢやのにくちやくちやに結んでおいでい。」

下駄をばづして、扇で帯を結び直して、着物の土を拂つてくれる。

「丁さん、おみつさんがよくおんぶして上げたのをおぼえておいでるか。え？」

おみつさんは顔を黒く染めてゐる。昔のおみつさんとはすつかり違つてゐる。

「忘れたの？」

「いゝえ。」とかぶりを振つて、頭を襟子の帯へ擦りつける。

「夕方にはいつでもおみつさんとお湯へはひりましたぞのい。あら〜、また砂塵煙。こつちへおいで、こつちへ。」と、二人で軒下へ駆け込むと、じやり〜と襲つて来て、向ひの生業屋の看板ががた〜とかち合つた。目を開けたら町の方へ黄色い煙がかかれて向うが見えぬ。おみつさんは袖をはたき合つて、

「あゝあ、汚いこと。」と顔をしかめて帯を取つて、片隅に掃き寄せてある提灯の削り屑を塵取へ取る。

「丁さんはあの時はまだお饅頭ぢやつたいゆ。そしておみつさんとこがこの向ひで、隣がお魚屋で。〜おぼえておいでるか。」

「少し知つてる。」

「お魚屋はなくなりましたぞの。向ひはいつ普請をしましたか？」

「疾くに。去年。」

「さう？ まあすつかり變つたの。丁さんとは今裏座敷においでるの？ ほんに。二階の下へ露路が附きたいの。」と、おみつさんは往來の真ん中へ出て、髪へ櫛を入れながら、こちら

「さう？ まあすつかり變つたの。丁さんとは今裏座敷においでるの？ ほんに。二階の下へ露路が附きたいの。」と、おみつさんは往來の真ん中へ出て、髪へ櫛を入れながら、こちら

の家並を見てゐる。

荷車が来る。

「丁さん、竹を引つ込めて置きなさい。」

「一人で川のところへ行つて取つたの。屋根まである。これお見。屋根とは高いがの。」と立てかけて置く。おみつさんは黙つてつくづく昔を考へるやうな目もとをしてゐる。薬屋で店をしまふ。

「丁さん、お祖母さまは毎日どうしておいでるの？」

「家にゐる。」

「まだ繼母さまが来られんのかいの。」と言ひつづつ、物を考へるやうな顔をしてゐる。自分は戸に紐つて、横明のお稲荷さんの松の木の上につた一つ出でゐる、大きな星を見つめてゐたが、何だかさびしいやうな氣になつて来た。おみつさんが自分の家の子ならいゝのにと思ふ。

と、

「おみつや。——おみつ。」と後からおばあが呼ぶ。

「お前そんな薄着で外へ出とつちやいけんに。早う遣入らないや。」と戸の内から呼びかける。後を向いて見たら、戸の節穴に灯がさしてゐる。もうランプを點してゐるのである。

二

薄暗がりの中に佛さまの線香が一粒、短く點いてゐる。お祖母さんは炬燵の向ひに寝てゐるやうである。

「おばあさん。」と言つたが返事をなさらぬ。ランプを探して灯をつける。お祖母さんは、もう本當に床を延べて寝てゐられる。頭のところにはわしの夜具も出してあつて、寝間着が炬燵の上に置いてある。枕もとへかゝんで、蒲團の縁をいぢくりながら、

「おばあさん。」と言つたが、やつぱり寝てゐられる。おばあさんの額には、丁度兩の眉毛の真ん中に黒いほくらが一つある。わしが時々その上を指で押へると、目を堅く閉つて、もういゝもういゝと言はれる。そのほくらをぢいと突いて、指をぐるぐる動かしたら、

「あ。」と言つて目を開けて、

「丁さんか。戻つたかい。」と言はれる。

「わしや寝入つたさうな。もう夜ぢやいの。今まで何しておいでた。こんなにいづまでも歸つて来ぬとお祖母さんはどんなに氣遣ふか知れんがの。板の間にお膳が下してあるから、そつとこつちへ持つておいで。——お止し。ラ

ンプを動かしてはいけん。丁さんが扱ふとつい引つくり覆すけ。お膳をこつちへ掲げて来れやいゝのぞい。下におかずが入れてある。そいから、この中をお見。」と言はれるから、炬燵へ手を入れて見る。

「下つとるぢやる。」

「何が。」

「上にく。真ん中に。」

蒲團を剃いで見たら、小さい蓋物がハンケチで包んで釣してある。御飯が温めてあるのである。

「あとをとんく。叩いて置かんと、すう／＼する。さう／＼。もういゝ。」

おばあさんは、今夜は何だか力なげに、途切れ途切れに物を言はれる。小さい赤いお膳を下して、赤い箸で、胡麻鹽の振つてある御飯に筍の煮たのを副へて食べる。おばあさんは目を閉つて顔に苦しげな皺を寄せてゐられる。

「おばあさんは工合が悪いの？」

「お茶かい？ そつと下さんと重たい土瓶ぢやから。——手へかけてはいけんぞの。火傷をするからの。おばあさんは足が立たんから、お給仕がしてやられぬ。」

「なぜ足が立たんのぢやる。」

よく見ると顔の色も少し悪い。

「さつき物置から重たいものを提げて来しなに、どうやらしたらしいの。踵ついて轉んだいの。たいやうに轉んだだけぢやのに、足やらそこいら中が痛いぞい。少し風邪も引いるのぢや。気分が悪いぞい。」

「いけんやう。どうおしる。」

「なんの、もういゝのぞい。かうして寝て起きたら、あしたになれや早や世話はない。併しもうわしもつまらぬものになつたわいの。」

「お父さんが早やお歸るとえゝのになう。」

「とうさんかい？　とうさんはまだ中々戻りやせぬ。けふは十六日。いよゝあさつてからお彼岸ぢやいの。丁さんや、すんだら板の間へ出してお置き。さうして、あとでこの蒲團をそつちへ引摺つて行つて、丁さんの寢間を敷いておくれよ。どうでも早やお母さんを貰はねば、わしやもう世話が出来まいて。女を置いて見れば不束なわしでは切り廻しが出来ぬし、――嫁が来ねばいけんぞの。おふさがもう少し生きて居つてくれたら言ふ事はないのに。」と獨り言のやうに言はれる。お膳を片づけて、ランプの前へ膝を組んで、壁にあつたマツチを取つていぢくつてゐると、

「丁さんや、おばあさんはいつ亡くならうも知れんぞの。あとでどんなお母さんが来るやらの。――少し目鼻が附くまで見てやりたいが、もうつまらぬ。」とあとは口の中では言はれる。ちつと向うの仄暗い煤けた壁を見てゐると、涙がひとりてほろ／＼と零れる。おばあさんは目が見えぬゆゑ、

「おまへ、ランプをいぢくるのではないかい。」と言はれる。

「いゝえ。」と言つて、唇を噛みしめて内證でしく／＼泣く。

さうしてゐる内に、玄關に誰か来たやうな気がする。ちつと聞いてゐても何とも言はぬ。誰だつたのかと思つたら、本當に、

「ごめんなさい。」といふ。立つて行つて襖を開けると、

「あたしよ。」と言つて、おみつさんが障子を開けて上つて来る。

「お父さまは？」

「ゐない。」

「おばあさまは？」と言ひ／＼居間へ這入つて、

「あら、もうお寝み？　御隠居さん。いえ／＼、さうしておいでなさんせ。お久しうござんす、

みつでござんす。」と、なつかしさうに言ふ。自

分は、泣いた顔を見られるときまりが悪いから、入れちがひに玄關へ出たきり、いつまでも暗い中に立つてゐる。おみつさんの言葉は急に低くなつて、

「まあまあ飛んだ事でござんしたいの。ほかにどつこともお怪我はござんせななか。」と訊いてゐる。自分は知らないで手にマツチを持つてゐる。何の氣もなくしゆつと擦り附けて、半分燃やしてふつと消す。先の赤いのが落ちかゝる。

急いで障子を開けて玄關へ投げたら、赤いのがわしの下駄へ當つてすと消える。下駄の緒を切つてゐる事を思ひ出す。わしが直して見ようと思つて、襖の右側を開けると、上がばつと明つて、居間の重筆筒の背中が出る。下の片隅に板切りが當つてゐるのを取ると、鼠の齧つた穴から小抽斗へ手のはひる。掻き廻して、心覺えのある、丁度いゝ麻繩を出して、玄關の下駄箱の上の豆ランプを點して、切れた鼻緒をすげかけ

る。心配して瘡に結んだかと思ふと、上から引張つて見ればすぐ抜けてしまふし、大分ひねくり廻したけれど、たうと手に合はぬから、打棄つて、おみつさんのゐるところへ行つて、炬燵の横に坐つてゐる後姿へ負さりかゝる。

「ほゝゝ、どうしなんすの、重たいに、丁さん。」

と後へ手を廻して提まへる。わしは裏直に抱かれて、横に胸をかける。

「ぢやから御座居さん、まあ、そんな譯なんてござんすけど。」と、おみつさんは、何か話してゐた續きをかう言つて、壁に涙を溜めてゐる。

三

起きて見たら、おばあさんは板の間であられを炒つてゐられる。足はだいぶ直つた。おみつさんが、まだ二、三の内に來て、御飯を焚いてお汁も拵へて置いてくれたから、おばあさんは起きずに先刻まで床にゐた。昨日また下駄の緒を切つたのか、なぜそんなによく切るのぢやろ、おみつさんがそれも直して行つた、と言はれる。

「おみつさんは？」  
「もう家へ去んだいの。」

おみつさんはこんなにして毎日家へ來て世話をしてくれるのだつたらいいのと思ふ。御飯を食べると、直ぐとんくと走つて出て、提灯屋の店先へ行く。赤い銅を十文字に書いた、大きな、お祭の提灯が、軒に葉がつて下つてゐる。お爺がいつもの淺黄木綿の筒袖を着て、汚れた緋の袋を、組んだ腰へ被せて、満色のつる／＼頭に、大きな目玉の眼鏡を鼻の先へかけて、番

傘へ字を書いてゐる。お婆は奥の方で、手拭を被つて、提灯の脚を赤く塗つてゐる。日向へ片足の先を出して、黙つて、古塵の端に腰をかけて見てゐたら、お爺は字を書き／＼、

「誰かしら小坊主が來たぞ。」といふ。  
「ふムム。」と笑つたら、  
「え、つと、こんなほどこやらの坊主ぢやつたいの。」と、やつぱりこちらを見ないで言ふ。

「やあ、わしや坊主ぢやない。お爺の方が坊主ぢやい。」  
「あら。お爺は坊主かしらん。」  
「それでも頭の髪が一つもないわの。」  
「なんのい。髪は一ぱい生えとるい。」  
「う、そ。一つもない。どつこにもない。」

「いんにや。ある。」  
「やあ、い。」  
「そいではこの小坊主は明首目ぢや。黒いのがちよん蓋に結うたるが。」

「やあ、い。誰ぢやい。」と言ふと、頭へ手の平をやつて、  
「あ、れ、ないぜ。ない。あ、れ、大變ぢや大變ぢや。一つもない。」と、わざとびつくりして、

「しまつた。さつきまでちやんとあつたのに、どうなつたる。はあての。」と言つて、傘をくるりと廻して、  
「は、あ、分つた。丁さんが後から來て徐と食べたんぢやあ、い。」  
「やあ、い。」  
「食べた。ちよい。舌を出してお見せ。」と、眼鏡の上から白い目をしてこつちを覗いて、  
「ほう。長い。舌ぢやの。あ、丁さんは書抜けぢやな。可笑しいな。書抜けぢやい。と言ひ／＼字を書く。お爺が字を書くのは一通に書かないで、同じところを何度も繰取つたり、後から真ん中を塗つたりして、たうとしまひに大きな字にするのだ。お婆が、  
「丁さん、おばあさんは足は直りなんしたの？」と訊く。  
「まだ大分直らん。少し直つた。」  
「悪かつたいなう。」  
自分はおみつさんはどこへお行きたと訊かうとしたが、何だか氣が引けるやうだつたから、黙つて墨の解れ口を引つ張つてゐる。  
「お婆や。」  
「なあに。」と訊く。  
「あのう……おみつさんは？」と言ふと、お爺

が、  
「おみつはこの上に居るいの。」と言ふ。  
「どこに。」

「ん？ 天井の中に居るのい。」

「うふふふ、さうぢやないえなう、丁さん。おみつはの、裏の小母さんとこへ行つとるんぞの。」とお婆が本當を教へる。裏の二階の襦物屋である。わしの家が提灯屋を提灯屋へ行して、提灯屋が提灯屋の裏二階を襦物を教へるをばさんに貸してゐるのである。

「丁さんも行つてお見。あねさんたちが大勢のておやけ。」といふ。だつて恥かしいから、  
「暇あ。」と言つてこそ、家へ歸つて行く。

歸つて襦物の横の襦物を押して、座敷の庭へ這入ると、頭の上が提灯屋の小二階である。竹藪の根の、赤い芽の出た牡丹の木が、戸が障つたと見えて、這入る後に微かに揺れる。締めになつて風を差げた松の木の下に、苔の生えた雪見燈籠があつて、そこから礬石が筋造ひに、大鼓で踏けて五つ六つ、賑々に大きくなつて行つて、縁側に腰をかける、擦かつた松の葉の上、二階の障子が白く嵌つてゐる。切れ切れに低い話声が聞える。おみつさんだか誰だか分らぬ。手水鉢の下の苔の上に、椿の花がぼた

ぼたと赤く落ちてゐるのが目につく。小さい木なのだけれど、花はお梅の蓋ほどある。はじめで落ちた花である。一つ一つ擦つては、燈籠の臺の縁へ順々に並べる。こんなにして、落ちるのをはしから並べると、しまひには燈籠の下がぐるりと赤くなる。まだ五つしかないから、少し間を開けて片方へだけ並べてゐると、  
「丁さんく。」と上から呼ぶ。四郎さんこの小さい姉さんが、赤と紫になつた片袖を垂らして、二階の手摺に縋つてゐる。

「それをあしに一つおくんないの。」といふ。  
「へ。」と言つて、手取つて突き出したら、上から白い手を伸べて、

「あゝれ、暑くもかいの。」と言ふ。裏から見ると花の真ん中に穴が開いてゐる。兩手で揃んで穴から姉さんを覗いて見て、  
「見えんく。」と言つてゐると、

「早うおくんないの。」とせか〜いふ。  
「何に。あれ、あしも欲しいえの。」と、また誰かしら出た。襦物の袖にさんだと思つたら、矢つ張りにおくんないの。花びらを一枚むしる。

「丁さん、壊しては厭いの。」  
「いゝ事があつた。丁さん、待つてゐていの。」と四郎さんとこの姉さんが内へ這入つて、そ

れからおくにさんも這入つて、大分して、おくにさんが針箱の蓋を黄色くしたつた紙箱の蓋で十字に禁じて手繰り下す。壁の半分までも届かぬから、四郎さんとこのが、緋羅布の下着を解いて、まだ足りぬから、更紗の風呂敷を持つて来て角をつないだ。箱は山吹の花の上へ下りて来る。更紗はおくにさんの手元に飾つてゐる。

瓜立ちをして、花を一つ入れる。  
「も一つ入れぬと傾くから駄目いの。」  
「ついでにも一つ真ん中へお入れいの。丁さんのはまだあるのでがんしよ？ おまぢく、ゆつくりゆつくり。」

「ほむむ。」  
「どつこい〜。」  
「も少しえの。ほむむ、あぶない〜。」  
「ふむむ。」と、赤い袖口と緋の袖口と、たがひちがひに、びく〜してたぐり上げて、わいわい騒いで這入つて了ふ。

「丁さん。」と、また呼びかける。  
「あゝ？」と言つて、上を見たら、おみつさんだ。  
「あたしにも、一つおくんないの。」と、にっこりして手の平を出す。黙つて一つ突き出した

「ほムム、うそ〜。二階へおいでんか、丁さん。表から廻つておいで。あんた、お着物が黄色うなつとるぞいの。こムんところ。こム。陶器のところをお見なんせ。」

指の先にも花の粉が黄色く附いてゐる。

四

大切なお彼岸だから、お寺へ詣つてくれねばいけぬ、とつてお母さまを拜んで来い、とお祖母さんが言はれる。

お午を食べると、袂の附いた絹の着物を着て、いゝ帯を貝の口に編んで貰つて、きんきらの巾着を横へ下げて、十銭貰つて紙へ包んで帯へ夾せる。

玄關へ下りて、いゝ方の下駄を出してゐると、おばあさんが襖をつらまへて出て来て、お包みとお米を入れた袋を包んだのを渡して、

「いゝかい、丁さん。信龍さんにでもいゝから、おばあさんが語るのをごさんですが、少し工合が悪うござんすかと申うて、それから永田のをぢさんに言うて、これへ上書きをして貰ふのぞの。をぢさんが一寸見えなんだから、信龍さんに頼んでもしてくれてぢや。いゝかい。まご〜しとるんぢやないぞえ。」と、同じ事をまた言う

て、

「そしてお經が始まつたら、ちやんと静かにして坐つておいでよ。足が痛うなつたら外へ出て遊んで来てもえよが、よその家の子のやうに、本堂の縁をとん〜飛び廻つたりなんかしちやいけんぞの。庭へ下りて蕪鐵のところへでも行つて、離れてお遊びや。それから、紙屋のを

ばさんが、おばあさんの事をお訊きたら、少しお頭が痛いだけぢやから、寝てはおいでんとお言ひや。氣遣うて尋ねて来てぢやといけんから。――まだぢや〜、丁さん。昔言ふまでよ

う聞かにな。――しまひに菓子盆で豆の御飯か何かが出るからの、よく零さぬやうにして食べるのぞの。あれは丁さんは片手ぢや提げられぬから、下へ置いて、屈んで食べるのぞの。」と、

もぢ〜して敷居の上に立つてゐるのに、ずんずんい〜くても言はれる。

行く途中で、本町のびら屋がびらを書いてゐるから、永い間店先へ立つて見てゐるうちに、誰かしら後からわしの耳を引つ張つて、そつと隣りの店の暖簾の後へはひる。誰だらうと思つて直ぐ附いて這入つて行くと、くるりと表へ廻

る。下から黄色い天鵞絨の鼻緒が見える。「やあい、おみつさんぢやい。」

「ほムム、ばあ。――まだこムいらにぶらついとるしいの。」

おみつさんはいゝ着物を着てゐる。直ぐ手を繋いでくられて、

「おばあさんは、もう疾くに出たとお言ひたのに、今まで何をしておいでた。」と言ひ〜一しよに行く。

「もう途中でぐづ〜せずに、せつせとおいでや。いゝ着物を汚しなさんなや。ちよいとこつちを向いて見なんせ。大層いゝ子におつりたこと。湯を使うて貰うたのいの。鼻を拭く紙を持つておいでかい。」と、立ち止めて、袂から紙氣

を出して、二三枚はなして、小さく疊んでわしの懐へ押し込んでくれる。郵便局の角のところへ来ると、おみつさんは手を放して、

「こムから獨りで眞つ直ぐおいで。おみつさんはこつちへ行くの。」

「どこへ？」

「ちよいとこの先まで行つて、ついでに葦を貰ひに行くの。それで蒸すとおばあさんの痛いとこがすぐ直るから。」

「誰た何？」

「葱のやうなもの。早うおいでや。」と、おみつさんは横町へ這入つて、一寸こちらを振

り向いて見て、肩の板摺の下をずん／＼足早に  
行く。紫がかつたやうな羽織の雨脇に、つぼ  
め合せた袖の八口が二すぢ赤い。やつぱりぐづ  
ぐづして立つて見てゐると、蓆を積んで通る荷  
車から、だし扱けに叱られたので、急いで寺の  
方へ向けて行く。

五

しめん／＼と降る夜の雨の門口で、由公の大き  
な背中から下りる。

「お待ちなんせ、ついでに奥まで附いて行かに  
や濡れますに。丁さま／＼。」と言ふのを、  
「もうえ／＼／＼。」と言ひ／＼、深い露路を駆け  
て玄關へ飛び込むと、居間に三味線を弾いてゐ  
る。

「だれに見しよとて紅かねつきよぞ。」と、  
低く濡ふのはおみつさんである。襖を開ける  
と、

「あゝ丁さん、お歸りたかい。」と三味線を置いて、  
「永うお遊びたいの。何をしてお遊びたいの。」  
といふ。おばあさんは炬燵の側で、火鉢にかけ  
た土鍋で布巾を絞り／＼して、兎の甲を蒸して  
ゐられる。

「由さんが伴れて来てくれたのかい。濡れはせ  
なんだかい。」と言はれる。

「いゝえ、一つも濡れてはおいでません。肩の  
ところに只ばら／＼と雫が／＼つてるだけでご  
ざんす。さあ直ぐにお着換へなさいの。おいで。  
帯を解いて上げるから。——何が懐へ這入つ  
てゐやんすの？」

「こうれ。」と言つて引き出す。

「何に？ あゝ、千代紙を貰うて来なんしたの。」  
「これお見。甕がたんと／＼お湯へ這入つて  
る。甕のお湯屋ぢやいの。ほうれ、こいつは背  
中を擦つてるがの。こいつはこんな事をしてる  
い。」

「さ、早くお着なさい。風邪を引きますすけ。そ  
れは後で見やんせうえの。」  
「丁さんはお寺で、言うた通りにおとなしくし  
ておいでたかい。豆のおまんまが出たる？」と、  
おばあさんが訊かれる。

「いゝえ。小芋と蒟蒻のおまんまぢやつた。蒟  
蒻は甘うないから、みんな選り出して、紙屋の  
をばさんのおまんまへ入れてやつたい。」

「ほゝゝゝ、まあ。」と、おみつさんが笑ふ。

「これからはそんなお行儀の悪い事をするもん  
ぢやないぞえ。」

「それから、歸りに雨か降つて、紙屋のをばさ  
んが家へ来いとお言ひたから、——そして、由公  
をおばあさんのところへ言うてやらすから、す  
つと夜までお遊びとお言ひたんだの。」  
「それはいゝが、また風呂敷をどこかへ忘れて  
来はせぬかい。」

「風呂敷はこゝにござんす、お隠居さん。——  
あの先刻、男仕が来た時に持つて来ましたい  
の。」

「由公が歸りに、丁さんを泥濘の中へ落さうか  
落さうかと言つたから、落して見／＼と言つて  
やつたあ。」と言ひつゝ、炬燵の蒟蒻の裾を性  
にして轉んだら、おばあさんが、見え悪いやうな  
目をして覗いて、

「丁さんや、今夜からおみつさんは家の子にな  
つたんだ。えゝぢやる。」と頭へ手をかけられ  
る。

「うゝそ。」

「うそぢやないわの。」

「嘘ぢやいなう、丁さん。」と、おみつさんはわ  
しの着物を掛竿へかけて置いて、

「丁さんはおみつさんが嫌ひぢやから、そいで  
諷ぞいなう？」と微笑みながら、ランプのところ  
へ坐つてわしを見る。

「うん。そんなら本當ぢやい。」  
「ぢやあ、おみつさんは嫌ひぢやないの。」  
「あゝ。」

「いや。嫌ひぢやるい。」と、おばあさんが罵られる。

「あゝ、足をそんなにするんぢやない。ぢつとしておいで。おみつさん、どういふところまでぢやつたいの。」

「どこやらでござんした。」と三味線を取つて構へて、

「とんと言はずにすまそぞと、あそこでござんしたかいの。——いや、あそこはまだぢやつたいの。何にしても、御隠居さん、もう久しう持たんのでござんすからまるで忘れてしまひましたいの。」と、つん／＼と調子を見て、棹の手に赤い袖口をちよと引き出す。

「おみつさん。そんなら毎回家へ来てゐておくれるの。」

「えゝ。わしやもう丁さんとこへ来たんぢやから、夜もずうと泊るんぢやいの。」

「今晚も？」  
「えゝ。」

「あしたの晩も？」  
「えゝ。これからいつまででも。丁さんやおば

あさんかもう往んでくれとお言ひるまで。——  
「そんならもう他家のをばさんにはおなりんの？」

「えゝ、もう誰がをばさん何かに行くもんぞい。なう御隠居さん。——えゝつと、それぢや、戀の手習ひつい見習ひてから、も一度やりませう。はあつ。」と、にこやかに掛聲をして諭ひはじめ

る。

(明治四十年五月)

### 月夜 (三)

雨はいつしか本降になつて来た。  
片側の土手には、晝顔が小さい花になつて、草の中には藁でもこぼろぎが啼いた。下の溝には犬そばが吠いて水に動いてゐる。

自分だけか話しかけてくれる人をでも求めやうなムードを包みながら、オリブ色の門口に覗き／＼して歩いた。

家のはづれから路は瓜先上りになつて、或教室の煉瓦造りの建物の方へ行けるのであつた。その途中に西洋人の居る官宅が一構あつた。

その處を北へ進入すると、棕の大木が兩側に

搦んで、葉も夕方のやうな色を包んだ、表の正門の方へ續く大きな路へ出る。棕の木は一町ばかり續いて、その先に、操帆を教へるマストの立つた海の面が、向うへ貼つたやうに木の間に擴がつて青く見える。

片側には小さい川が走つてゐた。  
こゝは校内の山の手になつてゐるのであつた。

九月も下旬の月の夜、自分は母の寢入つた後、一人で抜けるやうにして門を出て、水の中のやうな、青い月夜の中に立つた。

自分には母には隠して考へる事があつた。子供の癖によく考へ沈む自分であつた。それの

一つは、もし母が亡くなつたら自分は一人で何うなるのかといふ事であつた。それから、

もう母がゐない目になれば、だが、あんな黒いしつとりした目をして自分を見守つてくれるだらうと考へると淋しかつた。門内を見ると、母の寢臺の枕元に點けてある蠟燭の灯

が、海の中の船の火でも見るやうに隔つて見えた。夜霧が深いからであつた。もう校舎の門の點鐘が先に十一時を打つた時分であつた。

鳥

物

語

小さい自分は、何の譯も知らなかつたゆゑ、仄白い水に臨んだ、生絲を取る古里に、母の伯母の家を自分の家のつもりであつた。それは、五六本の榎の大木が、門の内を舌い代の色に薄暗くした、大きな構への家であつた。これを自分の家だとはかり信じて、母の従兄を父さまと言つてゐたけれど、本當は母が十九の年にこの家のかかりものになつて来て、腹の中の自分を生み落して、二人でその厄介になつてゐたのであつた。城下の娘であつた母が、こゝへ来てから里の仕事の稽古をして、かよわい體で、家のものと同じに働いてゐた不測な動の中を、自分は少しも知らなかつた。考へて見ると、自分の若い母の名は、悲しい女の名であつた。

それは母が亡くなる少し前の事であつた。自分は母に伴れられて、水の向ひへ灸をすゑに行つたことがある。自分は生れ附き體が弱くて、小さいうちから横つてばかりゐた。それがために母の辛い心をどれだけ痛ませたか知れなかつた。母は何事も私の乳が悪かつたからだといふ。

言ひくして、自分の寝入つたあとなどで獨りしく泣いてゐることがあつたといふ。早くからいろく手に手を加へて見たが、どうしても心が丈夫にならなないので困つてゐた。すると、そのとき水の向うの町に、北の方の國から、年取つた爺さんで上手な灸をすゑるのが、五六年ぶりとかで廻つて来てゐるといふ話を聞いて、母は最後にこの灸へ當つて見ることにしたのである。

丁度五月の蠶のあがりかけてゐる大事な場合なのに、家の妻女は子供が出来るので寝てゐたから、母は一人で蠶室の指圖をしたりして、忙しい時だつたけれど、自分が下女なんぞと一しよには行かないと勘ぬるので、ぐづぐづしてゐると灸者は去んでしまふといふことだから、仕方なしに母が自身で伴れて出たのであつた。

二人は表の桑畑に、夜中から桑を摘んでゐた女たちの、帯に挿した提灯の灯が、薄淡く白みかゝつてゐる時刻に濱へ出た。久吉といふ十五六の下男が併に附いて来た。自分は、向

ひの町といふと、樋口のをばさんの家があるといふことと、蔭さまの祀つてあるところだといふことだけは知つてゐた。蔭さまといふのは、いつの代のことか、水を圍んでゐるこの古里の浦々へ、はじめて蠶飼を教へたといはれてゐる、何々蔭といふ長い名の女の神さまである。里の家の戸口々々には、小さいそのお社の輪が、ちびた版行で黄色い紙に描つて、お譲りに貼つてある。

船は四角な帆を張つて、仄かな漆水を斜に流す。二十三のお曹黒を滑けた、色の小白い小間物賣の女と乗合せる。女は母と話をしたり、自分に紙縫で犬を拵へてくれたりして、何だか家のものやうな氣のする女であつた。この女は途中の村へ着けて貰つて、大きな荷物を背負つて上つた。水の上は四里。向ひの濱へ着くには大分かゝつた。

自分等の上つた一筋町では、小晴い家々のかみさんたちが、いゝ着物を着た自分の若い母を、わざ／＼戸口へ出て見た。何にもしてゐない家には、木目のざら／＼に繋れ出た下し戸が半分下りて、垢じみた着物が掛けたりしてあつた。雨圍の雨溝の縁に草の生え續いた、灰色に古びた町である。母は灸がすんだら樋口のをばさん

のところへ寄るのだといふ。自分は樋口といふのはどういふ家なのか知らなかつたが、をばさんは以前に自分の家へ来て泊つたことがあるからおぼえてゐた。灸者の泊つてゐる宿は、分るのは直ぐに分つたが、肝心な爺さんは、急な用事が出来てどちらかへ向けて昨日出かけたさうで、四五日しなければ歸るまいといふ事であつた。母はがつかりして、いろ／＼諷き返して見たけれど、何と言つてもしやうがない。しをしを引返して樋口へ行くまでのことになつた。自分はたゞ樋口がどんな家かといふことばかりを考へつゝ、面白く附いて行くだけの子供であつた。

そのをばさんの家は、町の中程の、大きな石燈籠の立つたところから横へ這入つて四五軒目の、竹の格子に黄色く燦けた障子の撤つた、小さい家であつた。向ひ側はずつと向うまで大きな柔巾になつてゐる。剃つ子のちゃん／＼を着て上り口へ出て来たをばさんは、  
「あゝれ、まあ出し抜けにどうした事い。」とそはそはして、取り散らしたものを片寄せたり、箆筋の鏡にかけた小帯を押入へ投げ入れたりして奥の間の濃紙の上を小忙しく片づけた。何事も後になつて知つただけけれど、この家は母の

一寸した續き合ひで、昔は大きな造り酒屋だつたのが、この時はをばさんがたつた一人になつてこゝに逼塞してゐたのである。伯母の家へかかつてゐた母は、生れた家は固より、親類中へだつてどこへも出入りが出来なかつたのだけれど、このをばさんだけは内諳で母の味方をしてゐたのであつた。

物柔かい、親切なをばさんは、母が、今日はこれ／＼の譯だと話すのを、ふん／＼と言つて母親のやうに聞いた後、それでは灸者の歸るまでゆつくり泊つて下さい、丁度いゝ幸だと言ふ。母は蠶の方が棄つて置けないから、せひ夕方の船で立つといふと、それでは綱さんは私が預つて、灸をすゑてから伴れて行くと、譯もなしい事のやうに言ふのであつた。母は、自分が母と別れてよその家に泊つたりする事の出来ない事を話したが、

「だつてこゝはをばさんの家だもの。」と、もうそれに極つたつもりである。久吉は蓋さまの神主のところへ母のお供へを持って行く。あとで母とをばさんと何事が話す間、自分は縁側へ出てゐた。小さい庭の竹垣に、豆の花が這ひ上つてゐる側に、茶碗の破片が白く土に埋まつてゐる。母の話し合つた事は何の事か知らなかつ

たけれど、何か悲しい話であつたらしい。母は涙ぐんでばかりゐた。この程の何日かは、蠶で忙しい目をして、夜もろく／＼寝なかつたゆゑ、疲れた母はいつもよりも非度く顔色が悪い。自分は重たく涙の溜つたその目元を見て、何の譯とは知らぬけれど、何だかいつになく母がいたはしくなつた。これからは母の言ふ事は何でも素直に聞いて、もう決して困らせはせぬといふ事を告げたかつた。久吉が歸ると、母は一緒に蔭さまへ詣りに出る。詣つても何にも見るものはないのだからと言つて、自分を家に待たせて置く。

母の出たあとを、をばさんは自分に缺餅を焼いてくれたながら、綱さんはもう追つ附け八つになるのだから、よくお母さまを大事にして、お母さまの氣を助けて上げなければいけないといふ事を、湿やかに言つて聞かせた。そして、  
「綱さんは獨りでこゝへ泊つて灸をすゑて貰ふえのい。今晚だけはをばさんと二人だけれど、あしたは久吉にまた出て来て貰ふからいゝぞのい。」と静かに訊く。自分は素直にさうすると言つた。さうすれば母の足しになるやうな氣がしたからである。

母は歸つてこの話を聞いたが、自分を置いて

行くのが心許なかつたと見えて、をばさんに聞えぬところで、

「綱さんは本當は歸りたいのだから？」をばさんが何だつて何しやつたの？」と訊き、

「いゝのかい？ 本當にゐるのかい？ それではもしあとで歸りたくなつたら、をばさんにさう言つて伴れて来て貰へばいゝわいの。」と言つて嬉しがつた。

夕方に、自分はをばさんと一緒に母を濱へ送つて行く。をばさんは留守を頼んで置くと言つて、町角の小さい家へ立ち寄つた。

濱へ出ると水は黒く黄昏れかけてゐる。自分の杖の方はもう何にも見え分かぬ。母は別れを告げて後、石段に立つて、蓋さまであらう、目を閉ぢて何事かを祈るやうに拜んで船へ這入つたが、

「綱さんや。」と呼んで再び上つて来て、二三段下りて行つた自分の耳へ口を寄せて、

「綱さん、お母さまが悪かつた。もう灸はいゝから一繻に歸りませう、のい。お前一人であるのはいやでせう？」と、小さくいふ。自分はやつぱりゐると言つた。

「それではお母さまがまた伴れに来るからのい。さつきのあれはちゃんと持つておいでか

い。」と自分の帯を押へて見る。母と別れてゐる間大事に持つてゐよと、小さいお空の袋を渡されてゐたのである。

母は再び船へ這入る。自分は一緒に歸りたいやうな心もする。さう言はうかしらと歸つてゐる内に、雑巾のやうな着物を着た船頭が船を突き出した。もう仕方がない。いつまでもこちらを見てゐるらしい母の姿は間もなく見分け難くなる。久吉は屋敷の上へ腹這つたまま、黒くなつて行く。一人残つた自分は急に物足りなくなつて来た。何だかこれきりでたうといつまでも

二度と母に會ふ事が出来ないやうになるのではないかと、先の事が示されるやうな気がして、をばさんと歸る途々一人で悲しかつた。

家へ歸ると、小晴い門口に、自分より少し年上の女の子が、足に餘る大きな草履をはいて、戸口に纏つて、人影のない向うの往來を見詰めながらしよんぼりと立つて留守居をしてゐた。をばさんが一寸這入れと言つたのに、何にも言はずに、とぼり／＼草履を引きずつて、さびしうに歸つて行く。あれは物の言へぬ子だとをばさんが言ふ。大人の櫛の缺けたのを挿して、貧しいなりをしてをつた。

夜になる。

をばさんは、母の供へたお灯がお社の燈籠に點くから一緒に見に行かうと言つたのに、ねつから伴れて出ないので、所在なきに門口へ出て見ると、町の角の石燈籠に、知らぬ間に灯が點つてゐるので、側へ行つて見ると、火を入れ

る口の下つた紙がふは／＼と捲れて、中のくすぶつた天井に蜘蛛の絲の固まつてゐるのが見える。通りの前びする家々も、夜は早くすつかり戸を閉めて、町筋は暗い。見ると暗い町の半町ばかり彼方に、もう一つ燈籠が點つてゐる。またそれへ向けてと／＼行つて見たら、そこ

のところの小路の奥に、また一つ燈籠が點つてゐる。また／＼這入つて行くと、ひとりでに濱の蓋さまのお社へ来て了つた。

薄暗い夜の中に、岸に續く松の木と、その間々の小さい石燈籠とが、闇の中に影の如く浮いてゐる。燈籠の灯は黄色く刺り抜いたやうに點つてゐる。松の中の社の横に、星が一つ下に映つてゐる。――社殿は水に浮んでゐるのであつた。

神殿に雪洞が一対仄暗くともつてゐる。自分はい小さい廻廊に立つて、水を隔てて、町筋の家の後に漏れる灯影を見た。だれだか女の子が一人鳥居を這入つて来る。夕方に門口にゐた

女の子である。階段の下へ来て、何にも言はないで這入つて来た方を指して、分つたかと言ふやうに小首を傾げる。すると向うから提灯が来る。それはをばさんであつた。をばさんが自分を探しに来たのである。綱さんはどうして蔭さまが分つたのか、をばさんに断らないで出て来るから心配して、おつうと二人で尋ね廻つたと言ふ。をばさんは提灯をおつうに持たせて置いて、下から蔭さまを拜んで、格子戸の中に下つた生絲を、もう覗いて見たかと自分に訊く。覗いて見ると獲に取つたいろ／＼の色絲が、左荷の壁に懸がつて下つてゐるのが、ぼんやりと綱の灯影に見える。をばさんはこの絲の事を歸る／＼話した。あれは村々の娘たちが上げたのだ、娘たちは、あゝして、絲の取れる女になつたといふ事を蔭さまに見て貰つて、それから嫁入をするのだといふ。おつうはやつぱり大きな草履を履いて、黙つてとぼ／＼と後について歸る。

この夜は生れてから初めて、母に別れてよその家へ寝るのであつた。をばさんが箆笥から出してくれたをばさんの襦袢を寝間着に着て、座蒲團を巻いて枕にして貰つて、小早く床に就く。片隅に置かれた有明行燈に、燈心押への狐の影

が擴がつて寫つてゐる。自分は母を目に浮べながら寝入つた。

翌朝朝御飯が済むと、をばさんが、湯りへ行つてお煎餅を買つて来いと言ふ。教へられた店は、昨夜の二つ目の燈籠のところである。目の腐つたかみさんが、黒い壺の中から出してくれた、反り返つた煎餅は、一つ／＼眞ん中に紙経が通してある。羽根を披げた鳥の形の煎餅である。紙経を揃んで一匹づら下げて、

「これは鳩ぢやのい。」と訊くと、

「いやいの、お前さん、鳥えの。蔭さまのお使ひの鳥えの。」と言ふ。歸つてをばさんに、なぜ鳥が蔭さまのお使ひかと訊いて見る。をばさんは目を小さくして縫物の針へ絲を通しながら、

「あゝ鳥かい。」と言ふ。

「蔭さまにゐるえの。まあま、昔は羽根が白かつたのに、たうとこんなになつて黒になりまし」と、をばさんがその鳥になつたやうに言ふ。「たうと別が當つたのい。」といふ。

どうしてかと訊くと、

「蔭さまの罰が當つたのい。」と、やつとの事絲を通して、針先へ頭の油を附けて縫ひ續けたがら、

「蔭さまの鳥は一匹だけゐるのえの、をばさん

が綱さんのやうな時分から一匹。をばさんがこんなにお婆さんになつてもやつぱり一匹。」

いつでも一匹しかゐないのかと訊くと、

「え、たつた一匹ゐるの。綱さん、おせんをお食りな。」といふ。

「なぜ鳥は罰が當つたの？」

「それはのい：：と、丁度自分が一枚を割つて食べかけたのを見て、

「おや、鳥の羽根が取れましたのい。痛い。羽根が取れたらもう飛べぬ。」と、しまひは節をつけて言ひ／＼縫ふ。自分は罰が當つた時が分らないなりに、ぼしり／＼と續けて食べ

る。それから黙つて寝轉んでゐると、をばさんは、

「鳥を二三匹おつうにやつておいで。」と言つて自分を縛らす。自分は出て行つた。

おつうの家は破れた障子戸が閉めてある。こねくつて開けて這入つたが、内には誰もゐない。上り口の板の間に、竹の割つたのが小桶の水に浸けてある。奥の一間の古櫃に、反古紙がべたべたと破れ目に貼つてある。

「おつうや。」と言つて見たが、やつぱりゐないから、鳥を板の間へ四つ並べて置いて歸つて来る。

午後になると、もう久吉が来さうなものだとをばさんが言ふ。ひるからは門口で麩に食物を扱かせて見た。それからをばさんの縫盤を巻いたり、あられを煎つて貰つたりしたが、直きに所在がなくなつて来る。町の角へもいく度も出て見た。外へ出て見ると、お日さまはいつもとどんよりと家の葺屋根の上に洗んでゐられる。自分は今吉が来るのをばかり待つてゐた。

その夕方、町筋の桶屋の前へ立つて、擔をかけたゐるのを見てゐる時、向うから、荷臺を擔いだ翁さんが、團扇太鼓を叩いて来た。行つて見ると、それは猿を使ふ翁さんである。後へ尖つた茶色の頭巾を着て、山袴をはいてゐる。兩方に擔いだ荷臺の片方に、小袋が一枚振袖の娘になつて乗つてゐる。着物の裾を噛んだりしながら、ぞろ／＼後へ喰つ附いて来る子供の中に、おつうが交つてゐる。手袋で髪を解れをからけて、小さい子を負つてゐる。翁さんは自分を見ると荷を下して、

「あい、い、着物を着た子供し、一つ見なしな。一と、提箱を擔つて、二つの荷臺を喰つ附ける。それから一寸口上を言つて、亂杭藪をがくがくさせながら順をうたつて、喰つ附けた臺の上に猿を踊らせる。猿は日傘をさして踊る。おつ

うは自分の側へ来て見る。それがすむと、翁さんは猿を荷臺の下へ引つこめて、今度は坊主に仕立てて出した。黒い衣の股くらに、張子の徳利をぶら下げて、いろ／＼のおどけをする。集つて来た女の子なんかげら／＼笑つて見物する。翁さんは、

「さあ、これでおしまひだ。はい、その子供し、お錢を出さんし。一と自分にいふ。坊主の猿が坐つて手を受ける。自分はお錢は一つも持つてはゐない。どうすればいゝかともまごつてゐると、翁さんにはこ／＼して太鼓を叩きながら、一早くお母さまに貰うて来なんせや。一と言ふ。自分は悪い事をした時のやうにとぎまぎして、急いでお錢を取りに歸りかけると、おつうが自分の袖を引いて、こゝにゐよといふ素振をして、ひとりでも向うへ走つて行く。どうするのかと角の石燈籠のところ立つて見てゐると、おつうはをばさんの家へ向けて行つたけれど、中へは這入らないで、入口の横の壁に喰つ附いて手を延ばすと、直ぐに引き返して来て、握つて来た五六枚の一厘錢を、子供の間を分けて猿に渡す。翁さんは、

はい／＼有難う。一と臺を放して、兩方に擔いで、太鼓を叩いて向うへ行く。おつうはまた他

の子供と一緒に、夕方の淋しい町に草履の踊りほこりを立てて附いて行く。

家へ歸つて戸口のところを見ると、この時まゝ一氣が附かなかつたが、柱の横に竹の串が打ち附けてあるのへ、一厘錢がまだ二三枚残つてゐた。をばさんに此の事を話したら、串のお錢は、あゝして来る翁さんなどが、自分で一枚づつ取つて行くやうにしてあるのだと言つた。

その日も夜になつたが久吉はたうと来ぬ。をばさんは、けふは船が出なかつたのだらうと言つて慰めた。自分はもう母のところへ歸りたくなつた。

翌る日はしと／＼と雨のふる日であつた。昨夜簞笥の上に置いて置いた妻の鳥の煎餅が、濕つてべたりとなつて了つてゐる。しづきがかゝると言つて縁側の戸が閉めてあるゆゑ、家中が小暗い。をばさんは表の格子の間で用事をしながら、いろんな昔の話をしてくれたりしたが、午後はもう話がなくなつた。自分は獨りで何をしても面白くない。久吉はいくら待つても来はしないし、面だれの軒下を傳うて、おつうの家へ行つて覗いて見ても、母親がわびしい内職の竹箸を削つてゐるだけとおつうはゐない。雨風に流れる赤土色の水に、蒲鉾の板へ絲をつけて流した

りしたが、それが厭になると、もうする事もなくなつた。外にはいつまでもしよぼくしよとふる雨が、桑田に淋しく煙つてゐる。自分は母のこへ歸りたくて堪らなくなつた。をばさんにさう言ふと、をばさんは仕事をやめて、いろ／＼まぎらしてくるけれど気が乗らない。直きに重たい息が胸に溜つて、早く家へ歸りたいばかり考へる。

その内に雨だけはだん／＼にかすれて、夕方には本當に霽つた。白い雲がずん／＼山の方へ走せる。自分は往來へ出て、知らず／＼家の前の桑田の中へ這入る。桑の蓑葉に雨がびよびしよに溜つてゐる。小路を少し這入ると、横に切れた路の角へ来る。左の方から水色の帯をした若い女が、番傘を肩にさしてぶら／＼来る。見ると一昨日船で一緒になつた小間物屋の女であつた。荷は負うてはゐない。當り前の若いをばさんである。自分を見ると、

「あゝれ坊ちや。と親しげに側へ来て、

「坊ちやはあれからまだ泊つておゐなんすのかい？ お母さまと宿屋におゐなんすの？」と言ふ。自分は何か家のものに會つたやうな心がある。女は髪をかき上げて、

「お母さまと毎日どうしてゐなんした？ いつ

お家へ歸りなんすの？」と訊く。自分は歸りたくてならぬものだから、ついうか／＼と、けふ歸るのだと小さく言つた。そして本當にをばさんにさう言つて、これから直ぐ伴れて行つて貰はうと考へた。

女は、

「けふ？」と訊き返して、

「この夕方の船に乗りなんすの？ それではまた私と一緒に。私はこれから荷物を取つて、直ぐに船に行きやんす。」

お前さまも、もう支度をしなければいけないと言つて、自分に別れて、肩で籠を廻したが、足早に向うへ行く。少しして横の方へ這入つて了ふ。自分はやつぱり一つとこに立つてゐた。桑の雪がばら／＼と落ちて、小さなさびしい心に浸みる。

再び往來へ出る。何だか濱の方へ行つて見たくなる。雨上りの往來をびちやり／＼と町筋へ出る。おつらが戸口に踞んで一心に足駄の緒を直してゐた。自分はたうと濱のところまでずんずん来た。

濱には昔の船が三ばいゐる。眞中の船から土鍋のくすぶりが上る。水の上は白い雲が間近に低く散つて行く。石崖の下から、若い男が竹

竿で二匹の鷺鳥を追ひながら、膝頭までの水をざぶ／＼と出て来る。鷺鳥はが／＼啼いて、濡れた石段を上つて来る。自分はこの水鳥を珍らしく見てゐると、後から、

「坊ちや。」と言つて小間物屋の女が来た。

「さあ乗りやんしよ。と、家の方へ出る船を呼ぶ。右の端のが、

「あゝい。」と言ふ。女はお母さまはまだかと訊く。母はもう一昨日家へ歸つたと言ふと、

「あゝれ。ではお前さんは今日ひとりでお歸るのか。あゝれまあ。」

お前さんは賢い子だと、自分の手を取つて船へ下りる。

自分はその儘一緒に乗つてしまつた。船には下駄や疊長の荷が積んであつた。女は背の中から下した荷物を裸にして、その風呂敷を疊んで自分の下へ布いてくれる。

船は間もなく帆を上げて出る。自分は家へ歸るのが嬉しかつた。をばさんに黙つて歸るのだといふ事に気が附いて、何だか悪い事をするやうな心がして来たのは、もう大分走せて水の上の夜になりかけてからの事である。しかし女がいろ／＼親切にしてくれるから、をばさんに済まないといふ事は直きに忘れた。

夜が真つ暗になると、船頭が小さい箱行燈を  
 附けし。女は灯がつくと、帳面を出して賣  
 上げを控へてゐたが、自分が足へ痺れを切らし  
 たのを見て、おまじなひだと、言つて敷藁座の端  
 を撈つて自分の懐へ入れて、兩足を伸ばさせ  
 て、親指の頭をぐいぐいと押へ曲げてくれる。  
 そうして痺れが直ると、それでは先刻の薬屑を  
 出すのだと言つて、自分の懐へ手を入れて探  
 つたが、

「坊ちや、何かしらこゝにこびり附いてゐます  
 えの。」と、それを一緒に取り出して、灯影で一  
 寸見て、

「ほゝ、小さいお煎餅の切だつた。」と、行燈の  
 臺へ置く。昨日食べた鳥の煎餅だと言ふと、

「あゝ鳥の煎餅え、これは？」

「紙纏で下げた……」

「藤さまの鳥のおせん。可哀さうな鳥えの  
 い。」

かう言ひ、また帳面を出して附ける。な  
 ぜ藤さまの鳥は可笑想な鳥かと訊くと、

「あれ。坊ちやはまだお知りでないの？ さう  
 かいの。……あの鳥は女えの。あれは昔藤さ  
 まが山におゐた時分に……」と、帳面  
 を片づけて、鳥の話をしてくれる。

女が言ふには 昔々藤さまが山へ下りて  
 蠶飼をしてゐられた時、男と女の二羽の白い  
 鳥が仕へてゐた。それが日々、一つは北の谷間  
 へ、一つは南の谷間へ飛んでゆき、桑の葉を探し  
 ては口に咬へて来た。藤さまはそれで蠶を育て  
 なされて、三年の間白い絹をお織りなされた。  
 今度は赤い絹を織らうといふ年になると、鳥は  
 谷間へ別れ、山へ飛んでは行かずに、内證で一  
 緒に後の山へ這入つて、二人でお話ばかりし  
 て、桑は一つも取つて来ぬ。いつの間にか、そ  
 んな鳥になつてしまつた。

それゆゑ藤さまは、いく度も言つて聞か  
 せて見なしたけれど、いつまでもやつぱり桑は  
 取らずに歸る。しまひには小言を聞くのがつら  
 いと言つて、二人で谷へ隠れたなり、何日しても  
 歸つて来ない。藤さまはたうと怒つて探しにお  
 行きなされて、片つぼの鳥を、山の山のそのまた  
 山のその先の、谷を越え、山を越え、いくつも越  
 して、遠い、暗い國へ追ひなされた。

あとの鳥は女である。それは後の山へ閉ぢ込  
 められた。藤さまはその内に里の娘が松葉を掻  
 きに来たのを呼んで、蠶の種を一粒與へ、生絲  
 を取る事を教へて置いて、もう空へ歸つてしま  
 ひなされた。

里の娘はそれから神女に生絲を作つて、大  
 切に七つの籠に巻いて置くと、一日小雨のぼら  
 ぼら降つた日に、藤さまが空へ七色の虹の絲を  
 渡して見せて、一雙つづをこの色々に染めよと  
 教へなされた。それからみんなの娘がだん／＼  
 に習ひつたへて、浦々が蠶飼の村になつたので  
 ある。

それは古い昔の事だけれど、内證のお話を  
 した女の鳥は、いまだに山から出られない。向  
 うの鳥に會ひたうて、日々泣いてばかりゐるけ  
 れど、どうしても藤さまがお許しなされぬ。そ  
 れゆゑ悲しんで、悲しみのために胸の中が  
 黒うなつて、たうと羽根まですつかり黒うなつ  
 て了つた。

「坊ちや、このつぎのお祭の時に藤さまへ詣り  
 なんせ。その日は鳥が山から出して貰ひやん  
 す。神主が笛を吹きなんすと、山から下りて來  
 て、お團子を口へ咬へて往にやんす。」

いつもはたつた一人で山にゐるのである。  
 「山にゐて、會ひたい」と泣いてゐやんすけ  
 れど、泣いたとて會へやんせう事か。のい坊ち  
 や。可笑想な鳥えの。」

かう言つて、女は髪を掻き上げる。  
 自分はこの話を聞いて、なぜ鳥は内證の話を

したのかと女に訊く。女は、  
「ほ、まゝ」と笑つて、

「それはまだ坊ちゃんには分りやんせぬ」と言ひながら、自分の手を両手に挟んで、

「まあ小さいお手。」と言ふ。自分はその内に女の膝にもたれて眠つた。

搖り起されて目をさますと、女は、船が着いた、もうお母さまのところへ歸つたのだと言ふ。自分は女に附いて船を出た。どつこも眞つ

暗い。星さへ黒い夜中である。女は小さい提灯をつけて、自分の家まで附いて来てくれる。

どこの家もみんな寝静まつてゐる。  
女は家の門口をとん／＼と叩いて、

「もしえ／＼」といく度も呼んだけれど、いくらしても内へ開えない。自分は横手の菜出を抜

けて、裏の竈室の下へ廻つて行く。その一棟の角のところ、母が竈室中夜更けて一寝入りする部屋がある。女は背中の荷物を下して、提

灯を持つて附いて来てくれる。行つて見ると、襦子の障子に灯影がうつすら射してゐる。自分

は、  
一母さま／＼と言つて見たが、返辭がない。

よく悪戯にする時のやうに、その石崖を上つて、障子の下を指で破つて覗いて見ると、板の間の

片隅の箱の上に、蠟燭が柵の中に短く點つてゐて、そこに二枚だけ敷いた畳の上に、やつれた母が斗柵へ片肘をかけて、疲れたやうにうたゝ寝をしてゐるのが見えた。蠟燭はもう早いのは上つたのだと見えて、蠟燭の火の蔭に齒が灰白く積んでゐる。

「お母さま。と言ふと、母は直ぐに目をさまして、不審けにありに耳を澄ましたが、再び、

「お母さま。といふ聲を聞くと、  
「あれ。」と愕いて立つて来た。

自分が石崖を下りかけると、母は障子を開けて、

「まあ綱さん、歸つたのかい。」と、突き出した蠟燭から蠟がぼと／＼と下へ落ちる。母は急いで裏門を開けて出て来た。自分に代つて、一緒に歸つて来た事を母に話した女は、この時はじめて自分が無断で歸つたのだといふ事を知つて、

「まあ。」と言つて呆れた。  
母は繰り返して女によく／＼禮を言つた。

その夜自分は、母と二疊の畳へ毛布を被つて寝た。母は、をばさんがどんなにか心配してゐなさるだらうと氣遣つたが、自分の悪い事は叱らなかつた。

一はじめからお母さまが悪かつた。覺る日久吉をやらうと思つたけれど、忙しい時だから、お父さまに言ひ悪かつたから。」と言ふ。自分は母へ歸つた嬉しさに、お袋の坊さんや、おつうの事や、小間物賣の女が親切にしてくれた事などを、息をはずまして詳しく／＼と話した。

そしてしまひに船の中で鳥の話聞いたと言つて、しつかり譯の分らないなりに、婆さまの鳥は泣いても／＼奮ひには行けない鳥だと言ふと、何の返辭もしずに、遠くの事を考へるやうな目もとをしてゐた母は、見る／＼と瞳に涙を

浮べて、  
「綱さんや。」と自分を抱きしめて、

「そんな悲しい話を綱さんは聞くんぢやありません。」と言つてしく／＼泣いた。

話はこれだけの事である。若い母は翌る年に、八つになる自分を置いて亡くなつた。

自分が亡き母と自分との身の上を知つたのは、ずつと後での話である。それは訊かれても話されぬ。いろ／＼悲しい譯のある事である。

(明治四十一年七月)

黒

髪

前まへの向むかひひに暮くらを賣うつてゐた年寄としよりは、いつも夜よになると自分おれのところへ來きて、いろんな話はなしをした。自分おれは立つて行くといふ前の晩ばんに、その年寄としよりを呼よんで別わかれの酒さけを飲のんだ。年寄としよりはしまひに、お前まへさんもこんな四十里よじりも渡わたる海うみの上うへへはもう二度にどと來きられまい、來きてもわしはゐなくなつてゐるかもわからぬ、今宵こんやはあとにたつた一つ残のこつた話はなしをすると言いひ出した。蟋蟀せせりの切きれ切きれに鳴なく黒くろい夜よであつた。戀こひの話はなしぢやよ、戀こひは怖こわろしいわの、と杯さかづきを置おいて、ちつと目を閉しつて考かんへてゐたが、やがて、今いまのものは知るまいが、昔むかしは國くにの果はたに商あきなひをして廻まわる、家船やぶねの衆しゆうといふものがゐた、と話はなしに這まり入いる。

家船やぶねの子こだといふことは、この年としになるまでただの一言ひとことも人ひとには言いはなんだ。生うまれたのはどの國くにの浦うらの夜よか書かか。父親ちちの名なさへ儘ままかには知らぬ。たつた一人ひとりの母親ははが亡なつたのはまだ三つに足たりらぬ子供こどもの時とき分ぶんであつたと聞きいてゐる。わしは緞じゆん類るい、筆ふで墨ぼく、繡しゆう、綉しゆう物ものを賣うる家船やぶねへ買かはれて行いつたのである。後あとの雙親ふたごころもが、おすが、とよく言いつたゆゑ、生うみの母親ははの名ながおすがと言いつたといふ事ことだけは儘ままかに知しつてゐる。私が戀こひをした女おんなはおふさと言いつた。おふさが船ふねは酒さけ肴さかな、壽司すしなどを賣うつてゐた。大きな浦うらへ着つけた時には、おふさが船ふねは石岸いしがきの上うへに蓆むしろの小屋こやを建たてた。濱はまの岩者いわもの等はそこへ來きて夜更よまたけるまで清酒せいしゆを飲のんだ。母親ははは三味さんまいが弾ひけた。時々ときどき自分おれで浮うかされると、客きやくにまじつて小唄こたぎを弾ひいた。わしがおふさは十七じゅうしちであつた。ふとした二人ふたりが戀こひは、或薄曇あまのつゆつた四月しがつの月夜つきよが初はじめてであつた。わしの雙親ふたごころもがおふさの母親ははと妹いもうととをつれて、珍めづらしく泊とどりの浦うらの夜芝居よしばいへ行いつた留守留守に、おふさが父親ちちは早寢はやねして、おふさとわしと

それからといふものは、わしが水みづの上うへの戀こひはもどかしかつた。書かきのうちは、船ふねにゐる向むかひをするのは年寄としよりと女おんなとだけで、男おとこは荷にを負おうて、いぢんち三里さんり四里よじりと陸りくを商賣しょうばいして廻まわるのである。船ふねへ歸かへつて戀こひしい夜よも、人目ひとめがあるゆゑやつぱり言葉ことばが替かはされぬ。たまに兩ふたで商あひに出いられぬ日ひなど、用事ようじを設たけて、障馬しょうばを寄よせて船ふねの上うへり、母親ははの帳合ちやうあひせの、だれかが急いそいで附つけた讀よめぬ字じを、それは十六丈じゅうろくぢやう丈ぢやう八丈はちぢやうだと口くちを入いれ、儂おろそかの間女まんなの體ていにゐる事こともあつたけれど、そんな時ときも、小暗こくらい軸じくの寢床ねどに帶おび閉しめて、すばやくと煙草たばこ吸すふ父親ちちに氣きが置おけて、戀こひしさを素振そふで知らず事ことさへ出來きぬ。おふさは生うれつき内氣ないきな性せい分ぶんだつたのだけれど、嬉うれし立たてられるやうなわしが戀こひの目めには、何なにの問とえもないさまに横向よこむかひいて、しづかに縫ぬひ解ときなぞしてゐるものごしは、わしに對たいしてもう心こころが冷ひやたくなつてゐるやうに見みえた。わしはいつとも、糞くその半はんを裏う悲ひしく歸かへつて來きた。浦うらによつて、船ふねが出て行く時の引ひ汐しほを見計みからつて、わしたちが商あひに出いた間に、船ふねを沖合おきあへ出いして諸合もろあつてゐることがある。そ

んな夕方歸つて来ると、合間を聞きつけて傳馬で渡しに来るのは、奴子供であつた。八つの船には娘が三人ゐた。おふさが渡しに来てくれ、ばい、と念ひ断つて、稀に嬉しく來合はず時には、わしが代つて櫂を取り、出來るだけ緩く漕いでゐても、水の上は二町に足らぬ。女は袂を纏んで、

「戀しい夜は息が重たうて寝られぬ。」と言ふに、

「女は戀の心不足らぬ。なぜわしの船の側へ來ても、こちらも向かずに歸つて行く。」

「でも小父さんが此のやうに見えるもの。」

「それはお前の氣りせぬだ。一體お前はつれない。」と恨めば、何にも言はずに涙ぐんで、船路に落ちる藻草を見つめてゐる女を、

「おふさ、何か悲しうて泣くのか。」と訊くうち、傳馬は、や、観船に着く。このやうな心ならぬ明草ゆゑ、切ない戀は募りまじつた。

たうと三四十日した或開の夜中に、わしは竊かに傳馬を出して、四つ開てたおふさの船へ、底板で水を掻いて附け寄せた。おふさも寝ないで箱行燈の側に悲しきうに坐つてゐた。わしを見ると、灯を吹き消して傳馬へ下りて、一どこへ作れて行く。知れたら怖い。取り纏

る。家船の習はしは、妻合は先添に添うた男と女とは一生親から見放されるのであつた。わしも何だか輪ろしい氣がしたが、押へ切れぬ戀は傳馬を岸へ漕いで行く。女はわしが櫂に懐へてゐた。

それから半年ばかりの間、このやうにして幾たびか闇の夜に紛れて會うた。女を背中に負つて、藻草の中をざぶ／＼渡つた夜もあつた。船は二人が戀を積んで、浦から浦を廻つた。

その内におふさは病氣で寝てゐるとかいふ事でも、五六日姿を見せなかつた。氣になる餘り、或夕方そつと尋ねて行つたら、おふさは亂れた髪をしてよろ／＼と出て來て、

「來てはいけぬ。どうやら母さんが知つてゐるらしいから。」と追ひ立てた。

それ以來おふさは病氣が癒つてからも、わしが夜中に忍んで行けど、たしかに知つてゐながら出て來ない。晝間出會つても、これまでのやうにわしを戀しい目附もしない。何だかいつも出來るだけわしに顔を合せまいとする容子が見えた。もしやわしを嫌ひ出したのではなからうかと心配して、十日許りの間、わしは夜更悲しく恨んでゐたが、一日、雨で商ひが休みの午後、濱へ將棋をさしに出かけて行く後から、おふ

さがおふさの追ひかたを、

「一寸待つておくれ。といふ。そこはこの間から眼が曇いてゐる時ゆゑ、

「お前にはもう日は利かぬ。」と、つれなく言ふと、

「千さんにはなぜわしの心か分らんぢやろ。」と悲しうな顔をする。

「お前こそわしか心を知らんのだ。」と言ひ返せば、おふさはさあ／＼と泣いて、

「どんな難儀を見ようともわしに添ふ氣があるのなら、相談したいことがある。」と言ひかけた時、船からおふさの母親が、

「おふさ／＼。」と呼ぶ。わしは急いでさつさと向うへ行つた。

同じ日の夜、

「今宵はまだお灯が上りぬ、どの船の音だ。」と父親が訊く。わしは船へ出て、

「お灯はまだか。」と、暗い小雨の中へ、聲高く叫んだ。神さまへ捧げる焚火である。

「おゝい。」と答へたのはおふさの父親の聲であつた。おふさの船は一番端にゐたのである。待つてゐると、ほろ／＼と煙の燃える焚火が、

櫓の上に現れた。持つて出たものの姿は闇ににじんで宛かには見えぬ、やがてその火を

くる。と、廻す筒袖の工合が、どうやらおふさらしいと見てゐると、火は三度圓をかけた水へ投げられた。投げられて落ちる時、ちちとおふさの顔が幽かに見えた。おふさはたうと、この閃きに似たはかない一日が、わしには一生の見納めになつたのである。

その時わしはおふさの事を考へて、夜更けるまで寝られなだ。やつぱりわしを忘れてはるぬものに、書聞なせあんなに辛く當つたのだからと後悔した。おふさが雨に濡れて、涙ながら立つた姿を想ひ浮べれば不機であつた。考へて見ると、おふさがわしにつれなく見えたのは、容子を喚いだ母親に叱りつけられたからではあるまいか。そしておふさはそれから毎日母親から責められてゐるのでないかしらと氣にかゝる。おふさが父親は不慮から何だか怖い。もしも父親かわしたちの仲を知つたらどうなるだらうと續いて考へ廻らすと、何だか黒い影に追ひ詰められるやうな氣がして胸が閉がつて来る。すると壁の方で、だれだか小聲でわしを呼ぶやうな氣がする。まさかおふさが來はすまい。心迷ひかと思つてゐると、

「おい／＼と再び呼ぶ。たしかに年がいつた男の聲だ。そつと出て見たが、暗いから何にも

分らぬ。雨はいつしか止んで、苦い雲がぼたぼた落ちて落ちてゐる。

「だれかい。と低く訊くと、水の中を一足近づく音がして、

「わしぢやよ。」と言つたのはおふさが父親の聲であつた。わしははつと逆せ上る聲どぎまぎした。

「悪い事ぢやない。一寸内證でそこまで来ておくれ。といふ。わしは仕方なしに素直に水へ下りた。おふさが父親はちつと聞き耳を立てて、

「あの聲は父御か。と安心したらしく言つて、わしを導いて、七八間先に礎を下した小舟へ載せた。わしは何だか薄氣味が悪くてならなかつた。

「わしをどうする積りか。と訊くと、おふさが父親は私の肩を押へながら、

「氣づかふな。小父に任せて置けよ。」と愛しく言つて清き申した。どうやら三四間向うの見當に見える、裏見見た大船の灯らしい。小さい燈火を日當てに行くやうであつた。

「どこへ行くのか。と訊いて見ると、

「大船だ。といふ。わしは合點が行かなかつた。

「何しに行くのだ。あれは明りの朝佐渡へ出る船ぢやないか。」と云へば、

「さわぐなよ。お前をおふさと添はせて一緒によそへ通してやるのぢや。お前も男ぞ。これからしつかり一人前になり上れよ。たゞ知らぬところへ出ではからだが大事故だから、用心せいや。」と、涙に濡れた聲でしみんとといふ。

「そんならわし等はどこへ行くんだ。」

「それは船頭がよくしてくれる。」

「そしておふさはどこにゐる。」

「おふさかい。」と、問ひ答へするうちに、大船が目の前に仄暗く見えて來た。おふさが父親はそれきりずつと黙つたまゝ、ことんと大船へ横掛けにした。

「お前、誰を論すへら怖れちやいけんぞ。一と船を向うの藪へ驚いで置いて、わしが船へ來る。」

「何もかもわしがうまくやるんだから、お前怖れちやいけんぞ。おふさは腹を氣にして自害した。千さん、何をそんなに驚へる、見つてもない。もう仕方がないよ。この藪の下に寝せてある。海へ沈めるんだ。それで千さんは氣の毒だが船にはゐない方がいゝ。おふさの事は誰も知らん。あすは二人が運けたといふ懸きにな

るだけぢや。さあ上つた。といふ時に、上から  
ぼたりと綱が落ちる。わしは初めて深い息をつ  
いて、

「それではおふさを見せせておくれ。」と、ど  
れが席が暗闇に探つたら、

「おい、いけない。血が附く。上れ。」と引つ張  
られて、綱に縋つて船端を上つた。

「頼んだぞ、親方。」と、おふさが父親が下から  
いふ。

「おい、引受けたよ。こゝ頭の上に船頭があつた。  
」待つた。忘れたものがある。棹を下してくれ

い。」と、父親は下でべり／＼と何か裂く。やが  
て棹に結び附けられて上つたものを船頭が取つ

て、わしを中へ連れて這入つた。

船は渡る日佐渡へ向けて出た。それから丁度  
七日目、

「今日はあの子が一七日だ。もう女には迷ふな  
よ。」と言つて船頭は、わしをこゝへ下してくれ  
た。

これはもう何十年といふ昔のことだ。その時  
棹に結び上つたのは、三十兩の金と、血に  
染つたわしへの書置と、長い黒髪の一束とであ  
つた。その形見の髪はおふさが父親の手拭の裂  
けたのと一しよに、久しい間わしが涙を吸う

たものだ。——言へばたゞこれだけの話だけ  
ど。

年寄は目を潤ませて杯を取つた。

自分はこの話を、いつまでも自分の事のやう  
に忘れ得ぬ。年寄はまだこの世に生きてゐるで  
あらうか。

(明治四十二年一月)

### 月夜(四)

自分はいつしか一人とぼ／＼と、青白く眠る  
夜の小路を、たゞ一人物に考へ入りつゝ、何  
のためともなく、上の方の西洋人の官宅の前  
まで来たのに気がついた。

その黒ずんだ影のやうな二階には、まだ灯  
影がカーテンに寫つてゐた。自分は水の深み  
に入るやうな月夜をくゞつて椋の木の方へ行  
つて見る氣になつた。稍小暗い木の下だけれ  
ど、そこを通り抜けるまでは、西洋人の家に  
寫つてゐる灯影が自分を見てゐてくれるやう  
な心持がした。向うへ出れば、まだ見た事  
もない、月夜の海の面も見られるからと考  
へた。

と、自分の五六間向うを、すらりとした女の  
西洋人が行く。若いたわ／＼しい女で、足早  
にせか／＼と行くらしく見えた。たゞちらり  
と、漂ふやうな白いスカートが見えただけで  
はあるけれど。

ちらと見えてもうそれきり形は隠れた。裏に  
マストの見える方角は、先もなく青く煙つて  
ゐる。木蔭を選んで行くのか、形は見えない  
けれど、小さい聲でその女は歌をうたふ。ゆ  
つくりさまよひながらうたふ調子のやうだの  
に、それをはずきり聞き得るやうに竊かに小

走りに行つても女には追つ附かれない。餘り  
近附いては人がゐるのに氣が附いて歌をやめ  
るに違ひないからと思つて、一寸足を止めて  
窺ひ見た。

まだ詭ふ。月夜に似合しい歌を長く引いて、詭  
ふのである。そのために、一人でさまよひに  
来た女なのかと考へつゝ、そろ／＼と行く  
と、いつしか歌は自分の後の方に隔つた。

自分は變に感はされたやうな心持に振り返  
つて見ると、後に眞白い服を着た女の、肩か  
ら下がちらりと見えた。

小 猫

三つになる父なし子を作れたお岸は、町へ馬鈴薯を積んで来た、間子船が歸るのへ乗つて、十一月下旬の暗い夜、船着へ上つた。

そこからは、彼女は力のない背中に子供を抱り附けて、夜道を一人とぼくと歩かなければならなかつた。子供は暗がりや怖れて背中でき泣きした。それがやつと寝入ると、お岸は自分の前掛をほどいて頭へかぶせてやつた。さうして、休み／＼して山路へかゝつた。

お岸は、かうして二里以上の路を歩いて、自分の村へ着いた。お岸が十九の年までゐた彼女の家は、昔の儘に、山麓の崖の下に、小さく、黒い夜の中に沈んでゐた。疲れたお岸はもう寝て了つてゐる戸口に子供を下したが、何と言つても中へ這入つたものかともち／＼した。作一は、寝た間にどこかへ落した肉桂を尋ねてぐづぐづ言ふ。お岸はそれをそつと宥めながら、よその軒下に竊かに立つてゐるでもするやうに、息を小

さくして考へ迷つてゐた。

すると、横合からふいと灯影が射して来た。見ると、腰の曲つた自分の祖母やが、油煙の上るカンテラを頭の先へ突き出して、見え悪い目をながら、何か失くした物をも探す容子で、物置小屋の横から出て来て、のそ／＼小屋の中へ這入りかけるのであつた。

「祖母。」と、お岸は憚るやうに後から呼んだけれど、祖母は耳が聞えなくなつたと見えて、振り返りもしずに、そのまゝ小屋へ這入つて、びた／＼の破れ戸を閉めた。行つて中を覗くと、畠の道具をごと／＼入れた狭い片隅に、蒲藪の小さい床が出来てゐて、その上にどす黒く綿の裂け出た蒲團が擴げてある。祖母はそれへ這ひ上つて、床の足へ括り附けた小紐をたぐり寄せて、落ち附かない容子で頻りとぐるりを撫で探る。祖母やが床の角へ置いてたカンテラの下には、頭を藁で束ねた見知らぬ若い女が、芋俵を拵へる仕掛をしたまゝで、正體もなく寝倒れてゐる。お岸は作一に來いよ／＼と

言つゝ戸を開けて這入つた。

「祖母は、けるんとして見上げてゐたが、やがてそれがお岸だと分ると、

「まあお前さけい。」と愕いた。お岸は祖母やに變りはないかと訊いて、久々で言葉をかけるの

だけけれど、祖母にはそれが少しも聞えないらしい。四年の間會はずにゐた間にすつかり年

取つて了つた。もう何の役にも立たぬやうに老いほうけてゐる。お岸が言ふ事にちぐはぐの返事はかりして、

「何、お前さ、こゝにかうしちよる方がどれ程

ましたか。うる／＼すればがみ附かれるけい。お前さ、用のない時にはこゝへ來て話させ。」

かう言ひながら、氣が附いたやうに、蒲團の下から、反古紙に包んだ黒砂糖の固まりを取り出してお岸に食べろ／＼と言ひ／＼、指先を管

める。

「これはないしやうで買つたのぢやけ、母やへは言はずにゐてくんなきるよ。」

かう言つて、口の中で母やの悪口を并べかけ

たかと思ふと、ふいと、どこからか來た宿無し猫

がこの床の下で子を生んだ話をし出すのであつた。それをお母が目つけて放り出して了つた。

その子猫の一匹に逢ひない、或日ふいとわの足元へ来て蹠んでから、そのまゝ置いて養つてゐると、またお母に目つけられて扱つ放されたのぞと、どうでもいゝ話ばかりを續けて、お岸が家を逃げ出した後、どうしてゐらして来たのか、どういふことから歸つて来たのか、さういふ事は今で訊いてもくれない。お岸は、壁の根に轉がった、漬物の切の残つた鉄皿を一人見つめたがら、ぢつと黙つて突立つて、深い、暗い穴の下に落ちて行くやうな心持に涙ぐんでゐた。

やがて子供の這入つて来ないのに氣が附いて、お岸は急に小屋を出た。裏口の笥の水が落ちるのが、人の話のやうに聞える。

作一は下して置いたところにある。戸が少し開いてゐて、中に灯影が動いてゐる。

「お岸、早う這入れいよ。のいお前。」と、中から母やが呼びかける。

二

ずるぶん、口汚く、ひどいことばかり言つて罵るだらうと思つた母は、待ち受けたものが歸つて来たやうに、素直にお岸母子を受取つた。さうして、急いで障壁裏に火を拵へて、お岸が

家を出てゐた間のいろんな事情や、自分のまだ知らない、町の生活のことなどを珍らしさうに掘り出した後、自分の力頼りになるものが歸つたのを心丈夫に思ふ容子で、自分の毎日の苦勞を話した。お岸はそれをわがことさうにしみんと聞いた。六疊一間の濃色の古畳は、坐つて話し合ふ二人と、取り散らしたごだ／＼物と、寝入つてゐる子供の一團とで一ぱいであつた。さつき戸口をがた附かせてお岸の母の目を覺まさせた作一は、お岸の留守の間に出来た母の女の子と、口の利けない、嫂の二人の子と、じつばかりになつたお岸の妹の中に頭から埋まつて、小さい寢息をかいてゐた。

母の語では、父やはこの小半年ばかりこつち、村の片栗の製糖場へ夜廻りに働はれてゐるのださうであつた。お岸のたゞ一人の兄は、いつまでもこんな小作の百姓では居ほさないからと、洒落れた事を言ひ出した末に、何とかに成るのだと言つて去年の四月に飛び出した切り、鏝一文も送つてはよこさない。だいが遠いところにあるのだといふことしか母やは知らないのだから。父やは村の道普請に働はれて、石に撲つ附かつた右肩が痛むので、畠の仕事がはき／＼出来なないといふのから、あゝ、夜番に這入つ

ただけれど、さういふ意氣地のない情に、備けるだけのものはすつかり飲んで了つて、まだ方々へ「ちよい／＼小借りを拵へてゐる。そして、夜寝ないといふのを拵にして、晝はいちんち寝込んでばかりゐる。昔から自分ばかり職着をして、れば文句はない代物である。結局が、晝ちう寝つくばるために夜の仕事をやるのだ。それも白馬をぐい／＼飲つて、いゝ心持になつてうるつき廻つてゐるのだから世話はな。娘

のおおきだけは、働く事は粉になつて働けけれど、何しろ自分の、生んだ子供の世話さへも出来ない女だから情ない。母やはこの四年に續けて三人の子を拵へたのと同じことで、面倒が餘計で仕事が一寸も抄らない。祖母やと来てはまるで話にならぬ。小屋に生み溜まる玉子を盗んで子供に賣つて来させて、それでもつて買食ばかりしてゐる。そしていつもうろ／＼とこつちへ出て来て、そこいらに轉がつてゐるものは何でも取り込んで置して、知らん／＼といふ。いくら言つても、矢つぱりないしやうで盗人猫を飼つて、食物を食はせてゐる。  
「本當にわしは早お前、食ひ潰す口ばかりが六つもあつて、働く手が二つしけやないのぢやらうがい？ この儘ぢやもうお前何としらあに。」

母やを額口の髪の中へ出来た、田舎のやうな吹き出しものを、赤身が出るまでがし／＼と掻き廻した。

「考へて見ても分らあに。わしがお前、たゞの一日でも寝附けばお前、家のもの等は泥でも溜つて喜んぢよる氣かに。……わしや本當に思、長生きをすれやすするだけ損だぞい。」

かう言ひ／＼母やは欠伸をして、半纏を脱いで、一つ餘つてゐる寢床に這入つた。

お岸は重たい深い息を吐いてゐたが、やがて、橋柱と下の物だけになつて、母の横へ、縁に這入つた。何か比にするものはないかと思つても、探しに出るのが面倒臭い。蒲團を少し引つ張つて、はみ出た肩を隠さうとするし、そんなにしては私が半分外へ出て了ふと母親が苦情を言ふ。お岸は容易に寝附かれさうにもなかつた。ぢつと目を閉つてゐると、昨日からこつちのことが、水の中のものでも覗いて見るやうに、目に寫つて来る。

「母や、寝たかいと」なう、母や、わしがこゝへ這入つて了へばお岸やの寢床があるまいが。ふいと氣になつたので母に訊くと、

「おゝ冷たい足だ、お前の足は。……お岸はお前、薬でもかぶつて氣樂に小屋へ寝らあ。小屋

へ寝たくなけれやお前、どこへでも寝らあ。若いうちは誰がとこへでも寝かせてくれらあに。」と、むにや／＼言つた母親は、すぐに高い薪になつて了つた。

お岸は整る日目を開いて見ると、障子へ曇つた薄白い日影が射してゐた。母親も子供たちもすつかり家にはゐなかつた。お岸はいつまで寝入つてゐたのかと考へた。寝れが出たといふものか、昨日よりか體に力がなくて、頭が土で擦へたやうに重かつた。

着物を着て、戸口へ出て見ると、祖母やが唐辛子を釣り下げた物置小屋の壁の根に薪を敷いて、煮た鉄のやうな口をあぶ／＼させながら、薄曇りの日向の中にしよんぼりと坐つてゐた。側に二つばかりの小さい子が、お臂を刺き出して這ひ突く張つてゐる。小屋の前の、小さい桑島には、葉のがさ／＼に枯れ腐つた桑株の中に、裸足になつた作一が、たつた一人跣で土を掘

じくつてゐた。お岸が傍へ行くと、桑の向うの石崖の下から、四つばかりの、同じ年恰好の男の子と女の子が、汚れた額を并べて突き出して、直ぐまた引つ送めて了つた。二人とも小路に沿つてすた／＼と驅け出して行く。見ると、女の方は作一のちゃん／＼を自分のもののやう

に着込んでゐる。一人の子は、一昨日買つて履かせて来たばかりの作一の下駄を、穿だけの黒い足に履いて得意さうに走せて行く。作一は二人の逃げて了ふのを見て泣き出した。

子供等は追ひ立てられるやうにどん／＼小窓らしく走つて、ちき下の元造の家の向うへ這入つて了つた。お岸は、泣いじやくる子を自分の半纏で包むやうにして立ちながら、濁つた空の下に、寒く薄黒い色に打ち返された出の一面を見渡した。すぐ下の一任切は、最早麥を蒔いて了つたと見えて、筋目々々に腐つた藁が入れ

てある。方々、高い木は大方葉も落ち盡してゐる。左手の竹藪の下を行く小川の、動くとしても見えないだだ黒いの中に、着物が纏で繫いで漬けてある。水が眞つ直に織いて向うに街道の家並が斜に聯つてゐる。薄皮に包まれたやうな色目の悪い太陽は、小さい玩弄品に似た、酒屋の白壁の倉の上にとんよりと懸つてゐる。小

川は倉の五六軒先へ這入る。お岸は先程から、その小川に閉いて段々と大きくなつてこちとへ向いて来る仄黒い、男の姿が、どこかの親爺だとわかり、たうと自分の父だと認めるまで、一人ぼんやりとそこに佇んでゐた。

「もうおつ母から聞きたい。親を三文とも思はないで、さんざい、眞似をしちよいて、くたぶれたら歸つて来れや世話はない。おまけにがきまで上産に持つて来たちふぢやないか。そねえなものは叩き潰して犬にでも食はせやいゝんだ。何だい、水ぢやないか、これは。のらいつてる間に飯位は食へるやうにしちよいても損は行くまいがい。烏の死に損ひめ。何が忪へて下せいで。退けよそこを。退けちふに。」

父親は火の消えかゝつた圍爐裏の側に坐り込んで、がみ／＼言ひながら冷たい茶漬をがぶがぶ食べた後、ぼろけた足袋を脱いで、小砂を振り出して、上り口の壁に釣して置き、蒲團を引つぱり下して頭から被つて、毛の生えた踵を覗かせて寢込んで了つた。お岸は背中の子供を揺り附けた儘、土間に立つて涙ぐんでゐた。手拭を被つたお幸が、釜へ馬鈴薯を摺いで歸つて来て、土間の隅へ撲ち空けた。そして、被つた手拭の片端で小鼻の汗を拭きながら、父親の食べたあとの飯櫃を見て、

「もうお前は済ましたか。」と、親じさうに玉貞似で訊く。年に幾つだか、二人の子持なのに、自

分よかり三つも年下で二十ばかりとしか、えな。薄い眉毛の下に、少し落ち込んだ何だか泣いたあとのやうに黒く潤ひを持つて目をした、色の着い、素直さうな、小柄な女である。お岸には、一日見るとから、もう永い間知り合つて来たやうな心持がする。お幸は、お岸の背中の作一に笑ひを見せて、再び釜を摺いで出て行つた。

變に吐きたいやうな心持がして、腹は減つてゐるのに何こそ食べたくなかつたお岸は、父やが悪さうに溶せかけた小言を心に繰り返しながら、力なく上り口に腰を掛けて、眞つ黒に煤けた向うの壁を見詰めてゐた。考へると、何だか取り返しの附かぬ事をして、了つたやうな心持が浸み上つて来る。紺屋の定には全く欺された。へてゐたのが間違ひであつた。親の家を飛び出させて、三年近くも伴れ合つて、かうした子供まで出来たのに、他に女を拵へて、こちらの着てゐるものまで刺かして持ち出した果が、たうと子供と二人を長屋に置いた儘で逃げ出してしまつた。

村へも歸れないお岸は、仕方なしに僅か許りの元手を拵へて、或夷町に店借りをして、駄菓子

の店を出した。そして、もう一生男といふものは持たない積りでゐただけれど、毎日買ひ食ひに来る、中根といふ子供上りの郵便配達に何かの世話をしてやつてゐる内に、今度は自分から持ちかけて、怖が中根を自由にして、了つた。しまひには引き入れて寝泊りまでさせて、しばらくは／＼した目を送つてゐた。ところが中根はそれから四五箇月すると、何かしら間違つた事をして勤めを奪はれた。もと／＼氣の小さい男だつたので、毎日それを苦にして、かう居食をしてゐてはすまないと言ひ／＼しつゝ、他の勤め口を探してゐたが、さうかうしてゐるうちに、生れた村から中根の伯父とかが探し當ててやつて来て、雇だといふ中根を無理矢理に伴れて歸つた。

それでも、中根はやつぱり戀しかつたと見え、その後二三度はこつそりと尋ねて来たが、最後に、この頃は役場へ手傳ひに出てゐると言つた時から、それきり一寸も出て来なくなつた。最早二月ばかりになるのに何の便りもしない。お岸はそのうちに體が悪くなつて、市場へ仕入れに行くのが苦しくなつた。町筋の醫者に見て貰ふと、どこかが悪いのだと言つた。少しでも歩くと直ぐに息が苦しくなつて、どき／＼と

動悸が烈しくなつた。たうと一月といふものは  
 全でふら／＼と寝附いてゐた。

さうしてゐる間には店賃も溜つた。税も来た。  
 卸し屋からは掛けを取りに来て、いろんなもの  
 を形に取つて行つた。後には内職も出来ないの  
 で、その日／＼の食料にも困るやうになつた。  
 お岸はそんなことから、少し體の加減のよくな  
 つたのを幸に、たうと村へ歸つて来る氣になつ  
 た。そこへ或日表を通る占ひ屋を呼び入れて見  
 て貰ふと、どうしてももとの土地へ歸らなけれ  
 ばいけないといふ判断をした。この儘かうして  
 るでは、また何かかんかろくでもない災難に會  
 ふ。病氣のところも、一時は癒つたやうに見え  
 ても、また押し返して来る。一寸は今快しさう  
 もないと言ふ易であつた。その他色々自分の身  
 の上を讀くと、一々見て知つてゐるやうに言ひ  
 當てた。お岸はそれと共に一途に何もかも賣り  
 放して、僅かの餘りの中から、子供に下駄を買つ  
 て穿かせて、背中に括りつけて、河岸へ船の都合  
 を訊き合はせて出て行つたのであつた。

あゝ頼つてゐた時分に、たつた一人で店裏の  
 後に寝てゐたことを考へると今でも情ない心  
 持がこみ上つて来る。四五軒置いた車屋の家  
 の女の子がよく店先へ来て、テムネの玉を弾い

て遊んでゐたのが、家と一緒にどこかへ越して  
 了つた後は、誰一人寝てゐるお岸の用を足して  
 くれるものもなくなつた。後の六疊を貸してゐ  
 る、年取つた渡り者の夫婦は、夜は夜店に出て、  
 遅く迄歸つて来なかつた。喜間だつて、二人で  
 せつせと色んな秘傳を書いた版行を摺つたり、  
 揃つて晝餐をしたりするだけで、口の／＼も利  
 いてはくれなかつた。向ひは倉庫會社の古け  
 た煉瓦塀なので、夕方通りが静かになると、何  
 だか話に聞いた、牢屋の中にも閉ぢ込められ  
 てゐるやうな思ひがした。

歸つて来てよかつた。やつぱり歸つたのがよ  
 かつた。かうして父親にはひどい事も言はれる  
 けれど、いちんち一緒にゐる譯でもないから構  
 はない。たゞ再び寝附くやうにさへならなけれ  
 ば、母やも困りはしまい。どうにかして子供と  
 二人の食料だけは取れるだらう。さうして、當  
 分母親を扶けて仕事をしてゐるうちには、また  
 どうにか事がゆるかもわからない。

こんな事を考へてゐると、お岸が再び馬鈴薯  
 を運んで来た。さうして、今度はしばらく物置  
 に送入つてゐたが、間もなく出て来て、右の親  
 指の先へ刺つた竹の刺を、爪がなくて取れぬか  
 ら、お岸に取つてくれろといふ。お岸が側へ來

て手眞横であれこれいふ素振が、いかにもお岸  
 には何の觸てもないやうに見えた。早速抜いて  
 みると、にっこりと子供のやうに笑つて、指先  
 を嘗めながら出へ行つた。お岸はこの女が物  
 も言はれず、人のいふ事も聞き取れぬ一生を、  
 あゝして土だらけになつて、何一つ物事に遊ぶ  
 ことを知らない女のやうにこつ／＼働いて後影  
 を見送つて、自分のことゝやうな寂れさをそゝ  
 られた。

かれこれしてゐると、間もなく午時になつた。  
 母やは何のちやん／＼と下駄を片手に提げ  
 て、側を撥いだお岸と二人で畠から歸つて  
 来た。上の女の子は、村の酒屋へ子傳に行く  
 ので、夜でなくては家へ歸らないのであつた。  
 その他の小さい二人の子は、着物の裾を口に銜  
 へたりブリキのきれへ繩を附けて引つぱつたり  
 しながら、母たちの跡に附いてぞろ／＼歸つ  
 た。物置へ立ち寄つて祖母やをいぢめて来た母  
 親は、土間に立つて、父やの寝てるのをみ／＼  
 言つて、子供等に擦振り起させた。父親は誰々  
 床から出た。さうして、一同が上り口に固まつ  
 て、照や桶に掬つて午飯を食つた。母親とお岸  
 とは、土間に立ちほだかつたまゝで食ふ。父や  
 は、口の内でお岸のことをいつまでもぶつ／＼

罵つた。

「もういゝぢやないか。お岸にやわしが十分言ふ事だけ言つちよるけ、お前さがくどく言はつしやる用はないがい。」

母やはうるさがつて釘を刺すやうに言ひ放した。お幸はいつも餘つ程父やに苛く扱はれてびり／＼してゐると見えて、一刻々々に物でも扱、附けられるのを待ち怖れ、もするやうに、父やの方をじろり／＼覗ひながら、悪い事でもしたあとのやうに、おづ／＼と一口々々を食べる。母親はやがて、

「お前さ、もう箸を置いてもいいがい。と父親の食事を切り上げさせた。

「これこれ、そんなに茶ばかりがぶ／＼と飲むと蛙に化ける。腹がぶく／＼に膨れて蛙になるぞい。さあもう止めて外へ出い、外へ。」と、子供等を追ひ立てた。

「なう寝平さ。」と、鼻先で笑ひながら、

「午後はもう書にして、蒲團を上げて出へ出て下さつせ。さうやつて毎日々々お前さ……」

一分つとらい。と、父親は膨れながら外へ出た。

お幸も行った。母親は二人になるのを待ち、設けてゐたやうに、早速裏口へ出て、石臼の中へ置いて置いた鱧の鹽物を出して来て、三四本ばかり

り火にかけて、お岸に下をふい／＼吹かされた。母親はそれをお岸と分けて食ひかけて、戸口の方を覗いて見た。

「もう父やはお出かけたのかい？ からしちよるところを見ると直ぐ這入つて来て引つたくるけのい。本當にお前子供よりか仕方のない父やぞの。これでももう早隠しちよるところがないのぞと思ひせい。探しては取つて食ふけ。自分はお前外で氣儘に好きなものを食うちよるくせに。と、小悪さうに言つたが、

「わしはお岸、いつからか魚の茹でたのが食ひたいがい。」と、取つて附けたやうな事を言ひながら、焦げた鹽物の頭をかじり／＼噛んだ。

そこへお幸が小さい子に乳を銜、させながら出て来て、缺けた皿を母親に渡した。母親は鹽物を一匹お幸にやつた。お幸がそれを食べるのを見ると、お岸も食ひかけたのを食べて了つた。

母親は缺血へ飯を一抄ひ落し入れて、その上へ

漬物の残りをごさげ落してお幸に返した。お幸は母親が裏へ鹽物の残りを隠しに立つたあと

で、竊と皿へもう一抄ひ入れ足して、お岸を見て微笑みながら物置へ歸つた。祖母やが食べる

のだとお岸は知つた。

母親は直ぐに鉢を擔いで出かたせよとした。

お岸は何か仕事をしたければ済まないのだが、この容子では三四日は高の仕事のある力量は出来さうにもない、追々に體を癒してから働くから、當分は少し許してくれ、その代り何かよその仕事でもいゝから、家でぢつとして出て出来る事を探して来てはくれまいかと母に訊いた。

「なにお前、そんないに、二日や三日は休んでゐたちうでお前、また寝附いた跡ぢやけ、用心せいし。お前の目の色を見んか。病人のやうにどんよりしちよるに。まあ當分ちつとして子供の見張りでもするい。」

母親は親切にかう言つて出て行つた。子供等は品の小満の目高を抄ふと言つて、お岸に人物を探してくれろとねだる。お岸は漬物が這入つてゐた缺井を、壊してはいけないうと念を押して貸してやつた。作一は兩方から何かいふ二人の仲間の言葉が分らないので、指を銜へながら勢まない容子をして附いて行く。

「作一や、母やはこゝから見てゐて上げるけ

の。」と、お岸は自分の子供の瘦せた後影を見送つた。

祖母やはいつの間にか、壁の根の藪の上に子供を這はせて、さつきの皿の飯を手探りに掴ん

で食べてゐた。その側には、骨の浮き出た、どす黒い小箱が居眠つてゐた。

四

お岸は、父親が使はれてゐる、片栗の製菓場へ紙袋を張りに行くことになつたので、子供を置いて朝早くから出かけた。五六人備はれてゐる女仲間、大抵お岸の知つてゐるものばかりであつた。それ等の女は、お岸が出奔してからの事をいろ／＼突つついて訊かうとした。お岸は仲間が黙つてせつせと仕事をする時も、無駄口を叩いたり小唄を歌ひ伴れたりしてゐる間も、始終自分ひとりが冷やかされたり、當て擦りを言はれりしてゐるやうに心が僻んだ。それに體も倦怠くて、一とき／＼が長くてならなかつた。

夜暗くなつてから、一日の工賃を買つて、腐れるやうな心持をして家へ歸ると、母はや十間に積んだ馬鈴薯の側に坐つて、傷の附いたのや、非常に小粒なのを探し分けてゐた。お岸は早く床に這入つて寝た。

お岸はかうして四日ばかり仕事に出るには出たけれど、どうも氣分が浮き／＼しないで困つた。する／＼或朝、烈しく日暈がして、土間の降

り口へばたりと倒れた。それからこつちは、丁度町で寝附いてゐたやうな容體で、五六日寢床に這入つてゐた。

書問誰れもゐない時分などには、お岸は一人蒲團の上に起き直つて、着振れた着物の間に膝頭の覗き出たのも直さうともしずに、力なく首を傾げて、障子の外へとまつた蠅の影が、膨れて寫つてゐるのを見詰めたりして、毎日作一と二人で食ひ潰してばかりゐるのを心苦く考へた。作一はよく外で泣かされては歸つて來る。お岸はそれを叱つたり宥めたりしながら、自分も時々涙ぐんで、せめてこの子供でもゐなかつたら、自分はこの儘死んで了つてもいゝし、達者になればなつて思ふ儘に働けもするのだがと考へた。お岸は馬鈴薯を擔いで影のやうに這入つて來ては、また影の如く出て行つた。

五六日目からお岸は毎日吐きたいやうな心持が續いた。横になつてゐるうちに、どうかするとむか／＼と胸が悪くなつて裏へ出た。そして岸の下の棒枕に倚りかゝつて、嘔いて見ようとするけれど、その段には何にも出ては來ない。

お岸はしまひにお幸に千金丹でも買つて來て貰ふ氣になつて、麩紙に包んだ僅かばかりの小錢を荷籠の下から出した。

かうした五六日の容子を見てゐたお幸は、その時土間に立つて、少らく首をかしげてゐたが、やがて側へ上つて來て、お岸に子供でも出来るのぢやないかと心配さうに訊くのであつた。お岸は何だか悪い事を探し當てられでもしたやうな心持がした。けれども顔を振つて、さういふ事はないと返事をした。

併し、さうは言つたものの——自分には度々かうした癖もあつたし、又煩つてゐた間も、こどももあるから、勘定には入れずにゐたけれど——言はれて見れば自分でも疑へる事情がないでもない。お岸はさう思ふと氣になり出して、町で寝附いた當分に、中根がひよ／＼り會ひに來た、あの一番仕舞の日の前後から月を繰つて見た。

かういふ方には、疑を持つてゐなかつた母やお幸が相談でもしたせゐるか、その西作に爐の灰で馬鈴薯を焼いて食べさせてゐると、お幸が訊いたのと同じ事を問ひかけた。お岸はそんな心配はない、もう久しく、みんな事になる覺えはないのだからと、取り繕つて言ひ切つた。さうして、かう體の悪いのは、やつぱり先頃の續きだと言つて、町で煩つてゐた時の病狀を詳しく話して聞かせた。本當のところ、お幸が

あんなことを言はない間は、自分でもさう思つてゐたのである。まだはつきり子供だと極つてゐるでもない。だから十が十諺をついた譯でもなかつた。唯、またこの前のやうにひどくなつてくれなければいゝがと、お岸はそれを苦にしながら話を杜切つた。

「まあそんだけいゝがお前、この中へまたお前が子でも殖して見い、どうなるだものけい。ただ膨れ出しただけでもお前、荷足介で力一ぱい仕事は出来やせんがい。それにお前、かう弱つてゐるちふと、どうしても二月は寝たりぐつたりせにや生れやせんけい。そんなにしてお前、のら／＼して見い、作一の口だつてお前、馬鹿にしたもんでないがい。」

かう言ひながら、母は時刻が惜しいと言つたやうに立ち上つて、土間の馬鈴薯のところへカシテラを持つて下りて行つた。お岸は腹のことが頻りと氣になり出した。十の八九は大丈夫だと思ふけれど、しかしそれは自分が慾に任せ、都合のいゝやうにはかり考へるのかもわからない。事情が一つでもあるからにはどうも不安心でならぬ。お岸は厭な心に鎖され出した。

それ以来お岸には、翌る日になつても、お幸

や母親の容子が、何だか知らぬ顔をして自分を探つてでもゐるやうに僻んで見えた。けれども二人ともそれぎり何にも口へ出しては言はなかつた。

お岸は毎日横にばかりなつてゐるのが苦しくなつた。それで、晝間少し心持のいゝときには、起きて物置へ行つて、お幸が夜仕事に作つてる芋俵を、氣紛れにぼつり／＼拵へてみたりした。そのうちに嘔きたいやうな氣持のするが少しは止んだ。ときには面白く勢んで作つた。

或晩の事である。お岸は退屈まぎれに物置へ行つて、火穴へ火を拵へて、お幸と向ひ合せに坐つて、俵の手傳ひをしてゐると、誰だか、入口の戸を少し開けかけたものがある。そして、その儘小蔭に立つて、中を覗き込んでゐるらしい容子であつた。お岸は誰だらうと思ひつゝ、目附でそれをお幸に話すと、暫く後を振り返つて考へてゐるお幸は、何だか氣を置くやうにお岸の顔を見た後、ふと立つて外へ出た。

お幸は間もなく歸つて来たが、どうしたのか怖ろしいものに會ひでもしたやうな目附をして、親指を出して、母やが来ても黙つてゐてくれろといふ手振をして出て行つた。お岸は、誰

かお幸のとは違つた足音が下の方へ下りて行くのが、お幸の出た跡に聞き取れた。

お幸はやがて歸つて来た。そして氣になるやうな容子をして仕事に附いた。お岸は別に事の譯も訊かなかつた。

するとその直き翌る晩である。お岸は寝入つてゐるところを拵すぶられて目を覺した。部屋中は眞つ暗であつた。併し、顔にかゝる女の臭ひで、お幸が側に来てゐるのだと氣が附いた。どうしたといふのか合點が行かないけれど、とにかく、お幸が突つ突くまゝに床を出た。開け放した戸口から、一輪の月影が薄白い布を張つたやうに土間に射し込んでゐる。立つて行くお幸の跡に附いて下へ下りかける時、ちらと月影に當つて戸口を出たお幸は、下の物一つで素つ裸であるのであつた。お岸は愕いて附いて出た。

外は冷たい水に漬つたやうな月夜である。お幸は暗い物置の中へ這入つてしく／＼泣くのであつた。寢床にしてゐる、積み擡げた藁の上に伏せりかゝつて泣いてゐる。暗がりでは手眞似で話は出来ない。

「お幸さ／＼、どうしたのだい、お幸さ。こつちへ出て話してお聞かせい。どうしたといふの

い。

お岸は、開えるものに言ふやうに、手を引つ張つて、入口の月明りのところへ伴れ出した。見ると、髪を引つかき亂したお幸は、顛へ上る身振をして、寒いから着物を貸してくれろといふ。お岸も袴袴と下の物だけだからぞくぞく寒い。家へ這入つて蒲團の裾にかけた自分の着物や、母やの半纏やを手探りに引つ抱へて来て、お幸に、自分の半纏と下の物を解いて貸してやり、自分も着物を着た。お幸は涙鼻汁を吸りながら、もういゝから歸つて寝てくれといふ手附をして、再び薬の上に伏しかゝつて泣くのであつた。お岸は祖母やの枕もとのカンテラの灯を點けて、夜の氣の冷たく捲れ入る戸口を閉めた。

「お幸さく、一體どうしたのい？」と搖すぶると、お幸はやつと顔を上げた。その顔口には、亂れ下つた髪の下に、生血が一筋吹き出てる。お岸は青くなつて愕いた。お幸は、言はれてはじめて氣附いたやうに、手の平でそこを押へて見ると、指先に血がべつとりと噴つ附いた。

## 五

お幸の話すことは飲み込めないことが多い。

に、話の續き工合もよく分らなかつたけれど、お岸は大體を了解して、お幸が意外なことをやつてゐるのに愕いた。

お幸はお岸の兄の出たあとで、鶴かに男を拵へたのであつた。どうして出来た仲なのか知れないけれども、ぼくづつて訊くと、相手は二十一だといふ。お幸よりは年下の男である。どこか誰だといふことは、お幸は訊いても答へない。お幸も一時は相手を思ひ込んだ。二人は大分久しく喚つ附いてゐたものらしい。お幸は兄から少しも好かれなくて、何とかいへば揉つたり踏んだりばかりされて来た。そしてしまひに言はばかうして置き去りにされたのである。お幸がそれでも矢つぱりこゝまに、手ひどい父親と他人々々しい母親との間に挟まつて、いちぢち小休みもなしに働いてゐたのは、たゞ夜になるとこの男に會はれるからであつた。男はよくさう言つた。いまに表向きに自分の家へ入られてやる。寅はどこへ行つて了つたのかでんで分らないのだから、子供も一緒に引き取るといへば親等も直ぐお前を渡すに極つてゐる、と、こんな事を言ひ／＼してゐた。お幸はそればかりを待つてゐた。すると、そのうちに子供が止つた。お幸は或晩會つて、かう／＼だと話した。

相手はそれではと言つて早速に親等へかけ合つてくれると思つたら、そんなどころか、男はそれは他のもの子だらうと言つて全て取合つてもくれなかつた。しまひには、ありもせぬことをこじつけてさかさにかつちを罵つた。お幸は悔しさに相手の肩に噛みついてわん／＼泣いた。それからといふものは、男はふつり寄りつかなくなつて了つた。晝間擦れ違つても見向きもしない。お幸がたづねて行けば、母親を出させたりして、何の用事で来たのかと突き當らせる。お幸は情なくなつて、夜になると一人こゝで泣いてばかりゐた。それからいろんなごたごたがあつたりした末に、お幸は仕方なしに諦めて、腹の子供を産み落した。――お岸は生んだといふらしい手眞似を見てうなづいた。

ところがさうして元の體になると、男はまたひよつくりと物置へ這入つて来て、何とか蚊とかいやらしいことを言ひかけるのであつた。お幸はもうこの男を信じなかつた。これまでい

い眞似をしてゐたのも考へて見れば怖ろしい。お幸は男が何と言つたつて振り返りもしなかつた。それはつい二三日前の事である。

續いて昨夜も来た。昨夜は丁度お岸かこゝにゐたので、氣づかれては極りが悪いから、お

岸には黙つて外へ出て、もう許してくれと男に願つたのだけれど、また今晩寝るところへ這入つて来ていろんなことを言ひかけた。お幸はしまひに外へ逃げて出た。すると男は附けて来て、月夜の中で捕らまへた。お幸がそれを振り放して逃げようとする、男は忿つてお幸の頭をぐんぐん振りつけた上に、力づくめに着物を剥いで、それを引つかへて逃げて行つた。なんでも今夜は大笑酒を被つてゐたやうであつた。

お幸は涙ぐみながら、かうしたいきさつを話した。お岸は、こんな生な女を、しかも口で弄ぶことも出来ぬ女を弄つていゝ氣になつて若者の、卑怯と亂暴とを憎んだ。いくら何だとして、裸にしといて逃げなくてもよきさうなものである。小面憎い奴もゐたものだ。まだこれから夜が明けるまでに、また調弄ひに来るかも知れない。わしも朝までこゝで寝て行くから、お前ももう寝んだがいゝ。泣いたつて返る事でもないから、とお幸をいたはつて、土間の火穴へ火を拵へて、自分も蓆を敷いて坐つた。何だか今の話で、お幸が子をはらむまで、弄られてゐるのだといふ事を知らずに、こちらから一心に思ひ込んでゐたといふのが、いかにも年の行かぬ

女かなどのやうにばか／＼しい。お岸はかうして火を隔てて向き合つて、再び悪い若者の悪戯を忿つてゐたが、氣附いたやうに、蓆にすがつて目を閉つてゐるお幸の膝を突いた。「それではいつも祖母やに傳をされてゐるのがその男の子供かい。」

お岸は手眞似でかう言つて訊いた。ところがこの問ひがいくど言つてもお幸に通じない。お幸は小首を捻つて子を生んだといふ手附ばかりを繰り返した。「それは分つてるよ。だけどその子はどこにゐるい。」

「ゐない。ゐない。ゐないだよ。」とお幸は顔を振つて、何か庖丁で削つて土瓶へ入れて、それを火にかけて煎じてぐいぐい飲んだといふ所作をして見せて、それで以て腹の中の子供を——お岸はまあと愕いた——子供を産胎したといふのであつた。お岸は何だか自分がしたことかなぞのやうに怖ろしい心持がした。

お幸はさう言つて當り前のことのやうな顔をして再び目を閉りかける。「そして何かい、そんな無茶な事をして、まあずゐぶん苦しかつたらうのい。」

「一つの事かい。」  
「たつたこなひだ。」  
二人は手眞似でこんなことを訊いたり答へたりした。

「もうよつほどこゝは大きくなつてゐたのかい。」  
「着物の上から見ても少し膨れてゐた。かうして上を半纏で包んで、それから前掛をこゝいからから掛けて。」と、さうしてゐたからは、たからは分りはしなかつたらうといふそぶりをする。

「その何とかをぐいと飲んだら直ぐ下りたのかい。」  
「二度飲んだ。そしてその翌る日に下りた。」  
「跡で寝附いたらうが。」

「いゝや。」  
「母は何と言つた。」  
「知らん／＼。母は知つてゐやせんに。その祖母やが、と、小娘のやうな笑を口もとに浮べて、

「祖母やが、夜その床の下に置いた土瓶を、猫を探すと、言つて知らずに引つくりかへして、何だ何だと言つてまご／＼した。母は知りはせん。」

「その削つて煎じたものは誰から貰つて来たの  
い。」

「そこいらをはらうと探し廻つて掘つたのだ  
よ。」

「掘つたのとい？」

「こつり」と掘つたのい。」

「何だらうそれぢや。」

何か草か木かの根で、すぐ得られる、譯もな  
いものらしいと言ふだけは分るけれど、それ以  
上は、口の利けないお幸には説き明しが出来な  
い。

「腹がきり／＼痛みはしなかつたかい。おい、  
見いよ、こゝがきり／＼と。」

「いゝやい。」

「子供は血になつて下りたのかい。それとも固  
まつたものが出たのかい。」

「それは、さあ、…どうだつたらう。」と言ふや  
うに小首を捻る。お岸は一人愕きながら、薬に  
絶つて寝かけるお幸の横顔を見詰めてゐた。す  
ると自分の腹の事が再び氣になつて来た。何だ  
か、體がだだ黒くなるほど不安である。

寝てる祖母やがし／＼言はせる。見ると、  
向うを向いて、手拭を拭つた頭の出して、お  
幸の小さい子を抱いて寝てゐる祖母やが、滑圍

の中で頸柱のあたりをがし／＼掘いてゐる。寝  
入つてゐての仕業らしい。柱に括り附けた紐の  
先が滑圍の中に傳はつて這入つてゐるのは、例  
の寝せた猫が中に溝線り込んでゐるのだと見え  
た。お岸は火穴に枯枝を加へ足した。箱に這入  
つてゐるやうに森閑とした夜の中に、たつた一  
匹死に後れてゐる、何とかがいふ蟲が、壁の後に  
朽ちた糸を引くやうに哀れに啼く。お岸は、も  
し本當に子が生れるのだつたらどうしたらいい  
かと考へ惑はれた。

六

ろくに寝られなかつた物置の二人は、夜明け  
方、焚火を隔てて、仄暗い手眞似で話をした。  
そろ／＼母の着物を返して置かねば、何とか疑  
はれるに極つてゐる。併し母のを返したところ  
で、着るものがなければ同じことである。お岸  
は一寸當惑して、最早大明るくなつた入口の  
がた／＼の戸をこじ開けた。外は音もない雨が  
小棟のやうにし／＼と白んでゐる。ふと見る  
と、すぐその壁の根に、お幸の着物が投げ捨て  
てあつた。半分以上雨の中にさらされてびた  
びたに濡れてゐる。飛び出してそれを拾ひ上げ  
たお岸は、思はぬ拾ひ物をしたやうに嬉しがつ

て濡れ濡る半纏や着物の裾を絞上げた。さら  
して、火穴に火を十分に拵へて二人で乾かし始  
めた。火に多ると湯氣が立つて、月端からずん  
ずん乾いて行くやうに見えたが、暗つて見ると、  
まだじ／＼してゐて容易には乾き切らない。  
お幸はいゝ加減でいゝといふやうに、そのまゝ  
襦は着て了つた。

雨は終日降つたり霽つたりして、しめ／＼し  
い日であつた。母親もお幸も襦を着て、島へ  
馬鈴薯を掘りに出た。子供等は縁側に集つて、  
櫛寸の笥などを積んで、蒸つぽさうに遊んだ。  
祖母やは薄ら寒いと言つて物置の戸を閉めて閉  
ぢ籠つてゐた。四羽ある鶏も、軒下に躍んで  
動かなくなつた。お岸は、お幸の小さい子を負つ  
て、父親を手傳ひながら、馬鈴薯を依に詰めた。  
昨夜席の上に乗つたまゝ、被るものもなく居眠  
つたせぬか、體にも氣分にも變に力がなくて濁  
つた如の中にあるやうな氣がした。  
夕方近く、雨が小止みになつた時、お岸は表の  
石崖の下にぼんやり立つて、子供等が、土の窪  
みに溜つた水を、油だといふことにして抄つて  
賣り買ひするのを見守つてゐると、お幸が母親  
の後に附いて歸つて来た。例の泣いた跡のやう  
な目をして例へ来て、

「何を考へ込んでゐるの。一言ふやうに、立ち止つて、同じく子供等の賣り買ひを見守つた。お岸はさつきまで腹のこまばかり考へ續けてゐたところであつた。お岸が昨夜書いた腹の子の處置が、恰も自分のしたことのやうに浮んでゐた。

「お幸さ。」と、お岸は、母親が家へ這入るのを振り返つた後、お幸に、あの削つて飲んだあれは、いつでも取りに行けば直ぐ取つて来られるのかと、たいして深い考へがあるのでもなく、いい訊いて見た。するとお幸は、お岸の顔を読むやうに見入つて、

「それではやつぱりこゝがあれなのかい？」と、腹の痛む手眞似をして、心配さうな目附をした。そして、それならこれから行つて探して来よう、待つてゐる、取つて来て見るからと、お岸がもうその氣でもするやうに獨りで合點して出かけて行つた。

お岸はそれを止めようともしなかつた。少なくとも、どんなものか見たいやうな氣もした。お幸は、藁の下に覗いた、泥の割ね上つた足を、びしよりと小さく運んで、横手へ廻つて、家の裏の丘へ上る小路へ這入つて行つた。お岸は、何だか怖いやうな不安な、心持を隠しながら、

ら、また雨になりさうな、灰色の低い雲の、足早い織がりを入見てゐた。そのどんよりした雲の下には、見る限り一人一人あやしめない。だだ黒く濕つた品の中を、小川が黄色に染んで、逃げ落ちるやうに流れてゐるばかりである。お岸には何だか自分一人が遠い海に向うの、知らぬ國の果へ漂泊うて來てもしたやうな夕方であつた。

お幸は、灯を點けねばならぬ頃になつても、ねつから歸つて來なかつた。お岸はみんなと一緒に、闇裏の道で小暗く腹を食ひながら、お幸がまた昨夜のやうな目に會つてゐるのではなからうかと考へた。どうとしかして當分お幸をこちらで寝せるやうにしなければ不安心だと思つた。

お岸は母に向いて、

「お前さ、お幸を夜あそこに置いては蠅が集るが。昨夜もお前さ。」と、誰だか、この邊の若い者がからかひに來て、戸をがたくとさせた。それだものと言ひかけると、母親は一口目に目色で違つた。父親が箸を置いて片栗屋へ出かけた時、母親は口を開いて、父の前では、お幸の悪口を言つてゐるな、あんな羽根の脱げたやうな女を、青い目に會せるのは不憫だからと、

たしなめた。母親はお岸の心持を取り違へてゐるのであつた。

「お前、それくらゐのことはいゝが。若いうちばちつとは内通でどうとかすじにあ。あんぬいに一心に仕事をするだもの。少しぐらゐのことは黙つてゐてやらんぢやあて、いゝかないもの。」

「それだらゐがおつ母や、どこのものか知らんが、厭がつて小さくなつちよるものを捉まへて、采れたことをするんだぞい。」

お岸は、お幸が額に血を出されたことから、着物を剥がされて雨の中へ投げとかれたことを話さなければならなくなつた。あの男とのこれまでのおいさざつは隠して、唯相手がひよつくりやつて來て亂暴をしたのだといふ風に取纏つて話した。

「はゝゝゝ。」と、母親は子供のたわいな惡戯を見るやうに笑つて、

「ぢや、そんだけ傷かい、額のあれは。いちやつく間際に引つ掻かれたのだら。若いうちばあねえにして着物を脱がされたり、追かけられたりするのが面白いのよ。はゝゝゝ、つまらぬ。あれやお前、お幸の方から好いぢよる男ぢやらうがに。」

「そんだったらお幸やでも男を引っぱり込んでみるのかい。」と、お岸はわざとかう言つて見た。

「それやお前、出かけても行かあに。」

「だれだのい、それぢや、その相手といふのは。」

「は、そんなに、お前羨しけれや、お前も自分が力で拵へたらいゝがい。けど今度はもう騙け出さないことにしてくれいよ。本當に外聞が悪けい。」

「厭あなこと、まあこの母やは。：：そんだが：：と、氣を替へて、

「お幸やは、そんなにして、しまひに子でも出来つれやどうするぢやらうぞのい。」と、知らぬ振りで訊いて見る。

「ふ。」

「でも困るぢやらうぞい。兄やでも訊いて見い。」

「どないにするちうてお前。と、母やはそんなことほどうでもないといふやうに笑つて、口を詰めて、奥歯に挟まつたものを舌の先で掘り出さうとしてゐる。二人でこんなことを話しながら、カンテアへ竹を點けたりしてゐるところへ、お幸が泣いた目をして歸つて来て、怖えたやうに黄を度ぐ。お岸はやつぱりあの男にどうかさ

れたんだらうと思つた。

「どうしたのい、お幸さ。」

「泣いぢよるのかい？ これ／＼——これに扱られたのかい、出がけに。」と母親は親指を見せた。お幸はうなづいた。

「どうしてそんなに父やはごき／＼人を捜るのぢやらうかの。不憫に。」と、お岸はそこいらを片づけながら言つた。

「今晚は餘りぐづ／＼が長過ぎたからよ。ちよつと片附がのろくてゆつくりして来ると、ぼかんとやられるのぢやがい。何の罪もないものをあねいにするのが癖ぢやけのい。わしぢやつてお前、何年掬られて来たぢやらう。あの男はお幸を見さいすれあ、お前、どうしてあゝだか、無上に痛癢に障るのぢやがの——上れよ、お幸。早く足を洗つてのい。これだ／＼。お前だけだぞい、もう。葱も何も冷らあに。」と、母親は顔を變めて頭の吹き出ものをがし／＼と掻いた。

お幸はやがて俯つ向いて飯を食つて、こそこそ物置へ這入つて了つた。

あとでお岸が行つて見ると、お幸は眞つ黒に油の浸みだ、二つに折れた鬘櫛を、つぎ合はせたり離したりしながら、しよんぼりと火穴の側に

坐つてゐた。火の上には缺けた皿を置にした、口の缺けた手の取れた古土瓶が傾いて乗つかつてゐる。お幸は、

「い、これだぞい。」と言ふやうにそれを指した。お岸は袂の先でそれを掴み下して、カンテラの下で覗いて見た。中にはどす黒い汁が沸き立つてゐる。何を煎じたのであらう。搖ぶつて見ると、細かく刻んだ、木の根のやうなものがちら／＼見える。

「もうこの儘飲みさいすればいゝのかい。」といへば、お幸はうなづいて、喉つ割け合はせて持つた櫛を、造くへ突き出して隠めてゐる。

お岸は試しに飲んで見ようかといふ氣になつた。飲んで何ともなかつたら體の加減でかうなつてゐるのである。下りて了へば厄介が取れるから言ふ事はない。併し本當に子が出来てゐるのだつたら、ずるぶん苦しい目を見るに違ひない。それにしても、一たいこれは何の根だらう。お幸に幾度訊いたつて、たゞ何か草の根で、土を掘つて取つたのだといふことだけしか分らない。お幸は眞つ暗い中で物の見わけをしようとするやうな、じれつたい心持を見ながら、お幸を手傳つて芋俵を作つた。

お岸はやがて仕事を措くと、お幸の袖口を引

つ張つて、昨夜の男がまた甦て来るかもしれないから、今宵は母屋へ行つて一緒に寝ようとお勧めたけれど、お幸は手を振つて、  
「いゝゝ。」と言ふ。内から棒を振つて置くからいゝ。祖母やに抱かれてる子に夜中に乳を飲きたければならないからと言つて来なかつた。

母屋へ歸つて見ると、もう寝てるだらうと思つた母親は、子供等を頭を並べて這入つてゐる寢床のそばに坐つて、子供に出るお辰の蟲歯が痛むのを介抱してゐた。

「もう降らない。寝れば治るけい。口を拭けい。さ。」と言ひながら、蒲團の肩を叩いてゐる。次の妹と作一とは目を覺ましてもぢくしてゐた。作一がぼくく口を動かして、小さい聲で口の中で歌つてゐる頃は、お岸が子供の時に諺つたのを、町で教へてやつた、「雀や雀」といふ唄らしかつた。

母親はカンテラを吹き消して、お岸の側へ這入つた。しばらくしてお岸が寝入りかけると、母親が不意に、

「お幸かい？ お幸や。」と大きな聲を出すので目がさめた。暗がりへのそく、這入つて来た足音は、何をかごとつとお岸の比元へ置いて、お

岸の肩をちよいと突つ突いて下りて行つた。

「お幸ぢやらうがい？」と母親は言つた。

「お幸さだよ。」

「何しに來たらう。びつくりすらあに。」

「何、わしが櫛でも返しに來たんぢや。父やに撲られて、櫛が二つになつたんぢやがい。お幸の櫛が。」

かう言ひ紛らしながら、お岸は竊と、それと分つてゐる枕元のものに障つて見た。さつき物置へ忘れて來た、例の土瓶である。

母親は再び寝入つた。

お岸はどうしようかと考へた。

## 七

お岸は言ふに言はれない、だだ黒い心持で目を開いた。みんなはまだ寝入つてゐた。戸の隙間が薄く白みかけてゐる時刻である。お岸は昨夜たうとあれを飲んだのであつた。そして何

だか自分が今にも黒い血でも吐き上げるのを待ち受けるやうな、剛な心持をして眠りに這入つた。けれども體にはまだ何こそ異状がない。も

つとたつてからだらうか。あれだけではどうもならないではあるまいか。土瓶にまだ半分ばかり残つてゐる。ついでにすつかり飲んで了は

なければ駄目なのかもわからない。

こんなことをぼんやり考へてゐるうちに、お岸は全て自分のすることに氣の附かないものやうに、いつしかついと土瓶を取つて、口を吸うても出なくなるまで飲み盡した。あとがいつまでも苦い瀝青い。そして變に臭くて非常に心持が悪い。こんなに深山飲んでもいゝものだらうか。併しもうどうなつたつて飲んだものは仕方がない。なるやうになるのを待つより外はない。どうせどうにかなるだらう。

お岸は追ひ詰められたやうに蒲團を被つて、出来るだけの他の事を考へながら再び目を閉ぢた。一同が床を出る時分には、お岸は平生の朝のやうに、何事をも忘れて、生欠伸を噴みながら、今日は賣り渡して了ふといふ馬鈴薯の値段を、母親と勘定したりしながら寢床を出た。

「飲んだかい。」と、お幸は顔を合はすと直ぐ訊いた。お岸は、何だか氣味のわるい心持を、自分の前に欺くやうに、眼もとで笑つて點頭い

た。朝飯が済んでから一時すると、お幸がさつき起き抜けに呼びに行つた馬鈴薯の仲買人が二人と、その手下の男が三人とで、どや／＼出かけて來た。父親も夜番から歸つて來て立ち會つ

た。小さい土間へこれだけが立ち詰つて、依の口を開けて中を割べたり縛つたりして、一俵づつ秤にかけて、附木へ日方を書き入れながら、がや／＼と取り込んでゐる中に、母親とお幸とは、まだ詰め餘してゐるのをせつせと依に入れた。

と、さつきから厭に曇りかけてゐた空から、雨がばら／＼と降り出した。しばらくすると他の仲買仲間が二三人、ほう／＼言ひながら雨の中を駆け抜けて、雨宿りに走り込んで来た。それは矢張り組を組んで買ひに来た、他の村の仲買であつた。めい／＼に草履や下駄を脱いで手に提げて、縁側へ上つて小止みになるのを待つた。母親は依の方がすむと、漬物を切つて、その雨宿りの密に茶を出したりしながら、せか／＼と戸口を出遣入りした。そのうちに土間の中では下見の濟んだのへ値段を附け始めた。

「あい、やあ／＼／＼、こいつは、大分小さい奴ばかりが交つた分、え、と、こいつは、一と、大きな聲に節を附けて煎り附けるやうに乾らした。

「それぢやあ、いや、いけねいよ。もつと張つた。もう三袋張つた。と、お岸の父親は汗を滴らして争つた。母親も口を添へて頼んだり拗

ねたりした。さうしてるところへ、さつきから疊の上で匆ね廻つて騒いでゐた子供の中で、作一が俄かにぎやん／＼泣き出した。逆せ上るやうに聲を絞つて泣き立てる。母親は矢つぱり構はず飛び廻る他の二人を叱りつけながら、それどころではないのでいら／＼して、甲高くお岸を呼び探した。つい今しがたまで母親を手傳つて、依の口を締めてゐたお岸は、ちよいとどこかへ行つたと見えて姿が見えなかつた。

「八釜しいがい。お新やい。何で泣かすんぢやい。見てやれよ、千吉。——お岸は何をしちやるんぢやらうい。こんな取込でる最中にどこへ行つたらいい。お岸／＼。」と、油紙に火が附いたやうに愚癡り散らしながら呼び探した。

「お、い、八釜しい。お岸はどうでもいゝが。——否、それではいけねいよ久さん、それぢや前の軽い分と一袋二厘しきや違はない算用ぢやがい。——お、いお兼、樽寸を貸せちうてるに。煙草の火を出さんかい、そこに休んでる衆等に。」と、父親はがみ／＼言ひながら鉢巻を締め直した。と、裏口からお岸が蒼ざめた顔をして、自分自身を失つた女のやうに、のそりのそりと草履を引き摺つて出て来た。お岸は母親が樽寸を取つてくれと言つてゐるのに耳も貸

さずに、人々の間をゆら／＼とくゞり抜けて、物置の中へ遣入つて行つた。

そこには祖母やが、地ひたに立つた、小さい子供の腕をとらまへて、戸口の横にきよついでゐた。お岸は小猫が小さくこゝまつてゐるのを押し除けて、どす暗い床の上へ俯向きに倒れかゝつた。あちらの方が混亂してゐる間に、お岸は二三度續いて裏口へ行つたのであつた。血が多量に下りた。何度も下りた。そのたびに石の裂け日かなんかに引つかけて、力任せに逆の投げ抜かれたかと思ふほど苦しかつた。お岸は床の上に倒れると同時に目先が見えなくなつて了つた。雨は砂利の層を落し附けるやうな勢で／＼と小屋を叩きつぷしでもするやうに降り出した。お岸は頭の髪に纏はり附く小猫を押し退けた。何だか頭がぐわん／＼割れるやうで、耳が鳴り、目が痺れた。そして、ちきり／＼と下腹が痛み出した。苦しい、苦ししい。振ぢ切られるやうに苦しい。猫がまた摺り附く。除ける。また来る。お岸はしまひにぐつと猫の頭つ玉を無我無中で引つ擡んだ。お幸には何事もなく下りたといふのに、どうしてわしだけがこんな苛い日を見るのだらう。このまゝ眞つ黒になつて息が止つて了ふのではあるまい

か。お春はどうしてゐる。わしのこのざまに気が附かなかつたらうか。息が苦しい。水が欲しい。水が飲みたい。――

かう思ひつゝ、気が遠くなつて行つたお岸は、ふと飛び出すやうな笑聲が、母屋の入り亂れた人々の間からどつと湧き上つたために気が附いて目を開けた。見ると自分は猫をぐんと掴んでゐる。

お岸は、「おや。と愕いて、あわてて横へ投げつけた。やがて気がつくくと、猫は土間に倒れてゐた。斜に倒れて、足をびく／＼と引き附けたから、剛に動いてもがいてゐる。お岸は薄暗くなつて行く目にそれを見て、猫が自分を恨む恨みの情が、だだ黒い煙のやうに自分を取りまきでもしたやうな、氣味の悪い、心許に押へられながら、茫として何ごととも分らなくなつて了つた。

母屋に集つた仲買等は、雨が小降りになるのを待つて、作れ立つて歸つて行つた。土間には二十何俵の俵が賣り渡し濟になつて、一々封の紙が結びつけられてゐた。お春はこそり／＼それを片隅に積み片づけ。母親は何事もほつといて、仲買から受取つた金を圍爐裏の側と并べて、札は札、銀貨は銀貨と別々に幾度も數へた

上、一緒にしてまた數へ直した。父親はそれを横目で見ながら、吸ひ盡して煙も出ぬ煙管をいつまでも銜へて爐のはたの蓆の上に寝轉がつてゐた。

子供等は疊の上を集つて、反古紙を切れ／＼に切り剪んで遊んでゐた。と、お春の男の子が外へ小便をしに戸口へ下りて、小雨の中へばりばり飛ばしながら、

「あゝ猫が死んでゐい。猫が死んでゐい。」といふ。他の子供も早速飛び出して、  
「やあ死んだく。――祖母やの猫が死んだ。」と一緒になつてわい／＼いふ。お岸の作一までが、よく廻らぬ舌をして、  
「死んだい／＼。」といふ。母親は疊を割つて金を納めると、

「どこのやう。祖母やはまたあの猫を飼うちよつたのかのい。どうしてま ああ猫も、よくそのそ何處も歸つたものぢやらう。一と、咳きながら下りて行つた。祖母やの小汚い小猫が、兩足を揃へて、びしよ濡れになつて物置の外に横はつてゐるのであつた。雨の足し叩き飛ばす泥を被つて、白と黒との斑毛が濡れて片寄つた間から、肋骨の浮き上つたぼこ／＼の腹を暴して轉がつてゐる。子供等は雨の中へ飛び出して

奔らうとした。

「おゝい何するぢやい。這入れよ馬鹿。ほつとけい。さうしとけい。障ると恨まれるぞい。お前が殺したのぢやと間違へてお前を恨むぞい。」と、母親は眞面目になつて警告した。子供は薄氣味が悪くなつたやうな顔をして、  
「誰ぢやらう？」と、頭の雨を拂ひながら母親の側へ集つた。

「何が誰ぞい。お前を恨むぞい、千吉。作一も今日のやうに泣くと猫が化けて出るぞい。」かう言つて調弄ひながら立つてゐると、祖母やがぬつと物置の戸口から顔を出して、  
「お爺や／＼。」と呼び立てた。  
「来て見いよ、お爺や。力造や。」と言ひながら、うる／＼してゐる。

この日は舊の十一月十七日であつた。お岸は土間に倒れて冷たくなつてゐた。

(明治四十三年一月)

「ぢやあ已出るぜよ、おまきさ。——う？ 何に、寝ちよれよい、ぢつと。もう一ん日二日はぢつとしちよつて見い。と、六は力を附けるやうにかう言かつ手扶を被つて、戸口に下げた襦を

出た。どんよりと曇つた切れるやうに寒い朝であ

る。無花果の本の上へ来て、二本指でちゆん／＼と水鼻汁をかみ飛ばして灰小屋の角へ出ると、裏の方にでも逃げ隠れてゐるのだらうと思つた娘のさくは、こんなところへ来て、追ひ出され

てもしたやうに、泣き汚れた目をして、小屋の壁の、食み出した寸前を爪で擦りながら、裸足の儘で、薄く寒く拗ね返つて立つてゐる。一何をしろよれやい、さくい。はあ可えけ、歸れよい、彼方へ。護ちやけよ。」と六は歩き／＼振り返つて、遠くの山び目から坂まがれの背の朝、いたるに目を附けながらかう言つて、竹藪の

間の小路の、下駄の齒の跡などのぐざ／＼掘れたなりに凍て附いた赤土を、浮足に踏んで上手へ出た。これまで備はれて行つた日備とちがつて、出揃ふ時間をきち／＼言はれるので気が急ぐ六は、ぼろ／＼の半纏の下に挿り下げた襦を包みを上から押へて、だら／＼下りの下りを柔細の洞へ下りかけると、

「父やあ／＼。」と、十四になる白癡の由が、土手の上まで追つ駈けて来て、大水でも出て来たやうに呼びかける。

「何だやい。」と、またかいと思ひつゝ六は立ち止つた。

「何だい、由。姉やにして貰へよ。可え子ぢやけ。」

「ううん。」と、いつもの癖で、何でも父がゐれば父にさせなければ聞かないのだから仕方がない。

「それぢやあ来いよ、こゝへ。何だい、毎日々々出がけにやあ何かさせるぞなう。——お籠、帯をどうしたい。落したんぢやないけい、途中へ。」

こうれ、そ、こゝと納ぶるあやと、下りて来た子し、襦も腹もぼろ／＼濡して、背えたやうに息を努ませてゐる前物の前を登き合せて、「かうしちよれい、こゝを。押へちよれ。さ。

何かい、その絲は。また鳥かい？ もうほあ、さう濡れやせんぞい。そんないに何定も濡れるもんか。針はどうした。ふ、この野郎、落したのかい。絲はかりぢや指られやせんかい。探して見い。まつとずん／＼向うへ行つて見い。まつとまつと。」

うろ／＼してる間を見て、六はいゝ加減に放つといてせつせと行つて了ふ。今度この地方へ、久しく噂の儘になつてゐた輕便鐵道がかゝる事になつて、一里半ばかり先の村を通る線路の工事へ、六たちは土を擔ぎに出て行くのである。

九月の水害ですつかり水に漬つて了つたこのあたりの村のものたちは、何にも收獲れなくなつた跡の生活を立てるために、出られるだけのものは大抵かういふ日備とりに筒はれて出るのであつた。

うろ／＼と針を探しつゝ土手へ引き返して行く由は、さうしてゐる間に、もう父はずん／＼縣道へ向けて遠ざかつて行くのにも心附かない

で、だらりとした唇から涎を滴らしながら、  
帯たらほどけで、土の上をぎろ／＼見つゝ實際  
まで上つて来ると、

「かあ、かあ。」と、ほうれ、——自分の毎日  
付け狙ふ鳥が啼いた。由は口をあぐりと開け  
て、ぎろ／＼と頭の上を見廻した。

「かあ。」と今度はかすれたやうな異つたの啼  
聲がした。由はもう父も針も忘れてしまつて、

上を見る／＼縣道の方へ向き變つて、ずつと向  
らの肥料取車の見え隠れして續いて行く、疎ら

な家筋の屋根の上を見探つたが、鳥はそんなと  
ころから啼くのではない。由の欲しい／＼その

黒い鳥は、寒い雨を含んだまゝ米附いたやうな、  
低く押し下つた空に突き擴がつてゐる、竹藪の

眞ん中の、大きな榎の裸の梢に高く棲つてゐ  
るのであつた。

上下になつて二羽棲つてゐる。上の一羽は何  
をか食うて来た嘴を、こくり／＼と、踏まへ

た枝に擦つてゐる。一羽はもう飛び立とうと構  
へてゐるでもするやうに、尾をびく／＼させなが  
ら、見渡す限り、水害の跡をそのまゝに冬ざれ  
て氷の張つた下界の、かち／＼の水田を見廻し  
てゐる。

由はどこにゐる鳥とも見出し得ないなりに、

引指つて来た麻絲を、長い舌先で鼻の下を嘗め  
嘗め手練り寄せる。がさ／＼に枯れた叢に引  
つかまりつゝ、手練られて寄る絲には、塵のや  
うな草の葉の粉が喰つ附いて来る。鳥はまた  
かあ／＼と、遅いの上らぬ前の、飛び離れた  
仲間を探し促すやうに、代り／＼皺枯れたやう  
な聲を立てた。

二

「もう可え加減で言ふ事を聞いて、早う食へて  
了つておくれい。いつまでも片附かんけ。」

十日ばかり前に、四月になる六の子を臨胎し  
て、まだ體のしやんとせぬ着ざめたおまきは、

戸口の席の外にぐづり／＼して立つてねち／＼  
拗ね返つてゐるおさくに、障子の内からかう言

ひつゝ、梳に冷飯をついだ儘にして、鳥の巢を  
掻き探したやうにさ／＼くれた鬚の毛を、うるさ

く掻き上げつゝ、ちやんと待つてゐるのだけれ  
ど、拗ね出したら癖で、言へば言ふだけひねく  
れるのだから切りがない。

「おさくさ。」  
もう已あ知らんぜ。已だけ食うて片附けら。

いつまでもぐずり／＼面倒臭い、本當に、と、  
おまきはもうくさ／＼して、力の抜けたやうな

手に上瓶をはづし下して、湯をかけては箸で押  
へて、六が食うたあとの五郎八茶碗へ流し注け  
て、齒に浸みつく冷たい干菜の漬物を嚼みなが  
ら、一人できつさと先に食へ出した。

何といふいけすかない、ひねくれた阿摩なん  
だらう。何か言へば直ぐあゝして拗ね込んで、  
わざと己を困らせるんだ。お前の心は分つと

ら。己がかうして他處から這入つて来てるもの  
だと思つて馬鹿にして、人が何でも怪へるとや

可え氣になつて附け上るんだ。そんないに、己  
だつて何にもしつたにたゞで食はせてもらつてる

厄介ものでもないぢやないけえ。ばか／＼し  
い。己が一寸した事を言やあぢきに恨んで、六

が歸るのを待つとつては、何だのかんだのと己  
が事をありもせん文句を附けてつべこべと言ひ

附けるんだ。詰らない事にべそ／＼泣いたりし  
て、何にもがんでない小阿魔つちよのやうに

猫を被つてゐるけれど、夜になれや抜け出して  
男に喰つ附きに出て行きやがるんだ。己あ知つ

ちよるぞ、ちやんと。何にも知らんかと思つて  
しらばつくれちよるから小憎つたらしい。己あ

もうお前をあしらふばかりにでもどれだけ血が  
減ると思や。毎日々々本當に。——

おまきはむか／＼しながらざぶ／＼と食つた

が、昨夜胸が悪くてたうと何にも食べない儘だつたので今朝はいつもよりかもつと食ひたい。おまきはおさくと由とに當てて櫃の中で分け寄せて置いたのを、盗み取るやうに一杯掬ひ減つて、注すのを忘れてゐてもう亡くなりかけた乏しい湯を、ありたけかけて再び箸を取つた。

「おまきさ、己あ今日は仕事は手傳はんぜい。」と、おさくはいいつの間にか、のつそり土間へ這入つて、障子の直ぐ外に立つてゐる。

「何やい」と、しつかり聞き取れなかつたおまきは梳を置いて訊き返しつゝ、自分がおさくの食ふのを減り取つたのを、おさくはこの穴から見はしなかつたらうかといふ氣がする。たつたこのあひだ古新聞を貼つたばかりの上り口の障子は、由が、いくら言つても矢つ張り人の見ぬ間に舌で穴を開けくして、もう、すつかり破れ目だらけになつてゐる。

「何ん言や？」とおまきは訊いた。

「もう言うたい。」

「分んない、何だか。——ま、一人で何でも言うちよるが可え。」

「今日は仕事をしねい言つたんだい。——己あ、はあ、何もお前の事は手傳はねい。」

「何とでも好きにせい。」とおまきは口の中で言

つて、

「だけどまあ一寸這入つておくれい、おさくさ。言ふ事があるけ。」と、擽けたやうについかう言つたが、まあじれつたい女子もゐたものだと思つむづするより外には、何を言ひ出さうといふ當があるわけでもなかつた。

「言ふ事があるだら言はつせ。そこから言はつせ。お前に何を言はれる覺えがあれあ。」

「何やおさくさ。黙つちよれあ可え事にして口の減らねえ。何をそんない己を仇敵のやうに突つかくるだ。ま、こゝへ上らつせ。」とおまきはむつとして、引つ搔くやうに障子を開けた。

「上るよい。そげいに睨み附けんでおくれい、怖くもないに。」

三

おさくはわざと外方を向いてつんとして坐つた儘、何を言つても黙つたきり返事をしない。

「だからお前さが何も己にどう言ふ事はないぢやないか。」と、おまきは折れて出るやうにかう言つた。

「もう父やが紡績々々言ふのはこなひだからの事ぢやらうが。そのたんびに己がそねいな無情い事を言はんでくれい言つちや止めるからこ

そ、お前もさうして濟んぢよるのぢやないかい。

今朝でも見い、あねいに父やを怒らすけ、もう何が何でも引き摺つて行つて渡して丁ふ言て逆つかけて出ようとするのを、己あ飛び出して止めて、どんだけ口う叫いたと思や。それにお前はもう父やが怪へちやる言たけ歸つておいでい言て呼びに出れあ、知らんぞい言て何の罪もない己に慥突を食はすのぢやらうが。何を己が知つた事があるい。考へて見ておくれい、己も

はあ、そんぢや何の事たか引き合はん話ぢやないかい。と、情たさうに、力なくかう言つたおまきは、このあひだ以來すつと落ち込んだやうな氣のする目の上を撫でながら、もうお前も女の十六といへばいゝ年ぢやけ、少しははきく素直にして、ちつとはかうした己が氣にもなつて見てくれたらどうだらうと、心に言ひ沈みつゝ、貧乏ゆゑに二度目の苦しい噴息をしたりした小怖ろしい事などが考へられた。

「あの、なうおさくさ。」

「何だ、聞き飽きたげ、もう何にも言はんでおくれい。己あそんな事で怒つちよるのぢやないけ。」と、おさくは突つ撥貧に言つて背中を向ける。

「はいぢやあ何だぞい。言うておくれい。そね

いにたゞ撃つてつん／＼してみちや分らんぢやないか。

「それあ、お前が arī もせん事を持へへ、無闇な事を父やに告げ口をするけいよ。」と、おさくはばら／＼落ちる涙を噺んだ。

「う、うらがいつ爲造と喰つ附いたい。見をか。いつ見たかい、己が喰つ附いちよるまこころをいつ見たい。」

「あれ、あねいな事を言ふぞよ。己がそれいな事を父やに言ひつけた言のかい、お前さ。何をいふだよ。」

「白を切れい。聞いちよるけ、己あ、ちやんと。今朝がた暗い時に、寢間の中で父やに執つこい程言うちぢやないかい。」

「それはよう、ほんぢやあ言ふけど、それ言ふのはお前が父やの留守には仕事もしずに、毎日ぶら／＼怠惰けてばかりゐるけ、どうも悪い跡がついて読き出すんぢやあるまいか言て、この邊の若いものの癖の悪い事を話しちよつたのぞい。」と言ひかけるのを、おさくは押し除けて、

「誑ばつか言へい。いつ己が爲造と喰つ附いた證據を見たい。いつ見たい。」と向きになつて来る。

「ふん。それい言やあ言ふが、お前さ、それいな大きな口が利けるものかよ。駄つちよる方が得ぢやらうぞい。」

「何が。」と、おさくはづら／＼しく白ばつくれる。

「己あ知つちよるぞい。言はうかそんぞやあ。昨夜お前さ己が知らぬかと思つて、こんそり灰小屋へはひり込んで何をしたい。――ほれ立つが。聞けよ、おさくさ。己あ、それいな事は何にも父やに言やあせざつたぞ。お前が一人で餘計な氣を曲らして、つけ／＼人に喰つてかかるだから可笑しいぢやないか。」

「知らんわい。」と眞赤な顔になつたおさくは、どぎまぎして土間へ飛び下りるが早いか、びしんと、けた／＼ましく障子を撥ち閉めて、草履の上まで裸足で渡りつゝ、

「へん、お前だつてこなひだから何をすれあ。」と、わざと大きな聲でいふ。

「己だつて見ちよるぞ。表の戸中に男を引つ張り込んでべたつかあ。間男ぢやらうが、お前は。」

「これ、何を言ふだ。人聞きの悪い事をばあはあと。」

「ふん。言つたらどうしたい。」と、それなりふ

いと戸口を出る。

「おさくさ、何處へ行きあ、おさくさ。」と、何をし出すか薄氣味が悪くなつて、おまきはどきどきしながら、立つて縁側の障子を閉けた。

「おさくさ、薄多な事を人に言つ布帯でもする」と聞かんぜ己あ。」と追つ被せるやうに言ひ押へて見たが、おさくは見向きもしないで、蹠の赤切れから血が流れ出してゐるのも構はないで、つん／＼して土手の方へ駆け出して行くのであつた。

と、ナグ二三間前の楢根の木を心にして讀み上げた置案の向う側に、荷馬の足音がして、だれかが通りかゝる。おまきはかうした、悪い事をあばきまくられて周章へた心持を、通る人に見穿られてもするやうに、急いで竊と障子を閉め切つた。

「おい／＼おさくさ、おさくさよう。」と呼びかけながら、藁の下の次平が、馬を引いて出て来た。

「おさくさ。――あゝれ、もう行つた。ほ、落しちよいて知らねいだ。」

おまきは障子の隙間から覗いて見ると、どてらをだらりと着て、齒の曲つた足駄をはいた次平は、灰小屋の手前で、何か下に落ちてゐたもの

を拾ひ上げて、ことり／＼上へ行く。櫛らしい。

おさくの挿してゐる半分に割れた櫛であらう。

人のものを放つとけい。餘計なお世話だ、目

下り爺。あんなに頭(うたま)の天井のくるりと割けた、

いゝ加減によほ／＼の癖に人の女房をつらま

へて口説いたり何かしやがる。づう／＼しい。

きやあつて、わざと大聲を張り立てて外へ逃

げ出してやつた時の泡を食やあがつた事い。随

分いゝ氣味だった、あのときは、と、いつかの

事を考へ返しつゝ、おまきは帯の緩んだのを締

め直したが、

「併しあゝした腹の悪い執念深い奴だから、う

つかりしてゐると何といふ事で仇をし返される

かも分りはしない。」

から思ふと、おまきは氣がついたやうに、おさ

くのあゝして駈け出した儘なのが餘計に心配に

なつた。大平がそこで呼び止めて、どうせあ

の櫛を渡すだらうけれど、あいつが女子だとさ

へ見ればいゝ御流(ごりゅう)な人よがらせばかり言つて乗

せ上げる奴だから、おさくがいつ口を割らし

て、腹立ちまぎれにさつきのやうな事を大平に

吐いて明けてしまひますまいかと氣にかゝる。

おまきはもぢ／＼して、だだ黒く當惑しつゝ、

考へた。

「おさくが言へば言ふで仕方がない、何のさ

うなれあ、逃げて行かぬ。六が聞いてつべこ

べ言ひ出すより先に、こつちは信吉の言ふやう

にして件つて逃げて出らぬ。知れたつて何だら

う。もと／＼六と夫婦の約束をした譯でもない

のだ。己がだれと喰つ附いて出て行かうと己の

自由だもの。」

おまきはかう考へ返して、弱り衰へた心の中

に、平生の自分にも似合はぬやけ度胸を振ふた

四

やがておまきはぼろけた着物の上に汚れた上

つ襦りを着て、繩切を帯にして、いつもの仕事

にかゝつた。

かうした百選(ももせん)仕事のない時分には、六が外

で疎(ま)く留守に、おさくと二人で岩圍を巻へる手

間仕事をするのである。縣道(かたみち)ばたの孫右衛門の

ところから、目方(めがた)の極つた髷(まげ)を、俵(たわ)りて

來て、夜なべに石臼(いしうす)で粉にして、拵(こしら)へ留めては

持つて行くのである。

おまきは、土間(どま)を暗くした戸口の風除(かざり)の藁(わら)を

半分捲き上げて、土間の真ん中へ二つの櫛を持

ち出して、出來たのを干し並べる箱を積み重ね

ると、鏡(かがみ)に一紙着てある布海苔(ぬれのり)を埋桶(うみづく)にうつし

て、湯を注して無敵(むてき)をし、炭(すす)の桶(か)から粉(こな)を測(はか)

入れては掻き廻して抱(かか)ねた。

今日は手傳(てでん)おさくが出て了つたのだから、

支度(しど)が出来上るまでは一人であれこれ動いてゐ

て、物の考(かん)へ事も忘れてゐたけれど、かうし

て薬(いす)を束ね敷いた上に坐(ま)つて、ぢつとした仕事

にかゝると、昨夜(こぞ)から迷つてゐる信(のぶ)への返事を

考へなければならなかつた。信(のぶ)は今日(けふ)もう一度

來て、決着(けつちやく)を聞くと言つた。昨日(けふ)のやうに午時(ひる)

分にやつて來るとすればもうたんと間(ま)もない。

どういふ事にしたものだらうかと思案(しあん)の間に、

おまきは手(て)で髪(かみ)を丸めては箱(はこ)に並べて行

つた。

何(なに)にせよ、かうして二度(にど)と會(あ)ひさへしなけれ

ば、もうこちら(こちら)もあれぎり忘れて了つてゐたの

だめに、それがひよ／＼くり尋ね探して來たとい

ふのも、やつぱり切つても切れぬ繋(つな)がりが、ま

だあれから續いて隠れてゐたといふものだらう

かと思ひつゝ、おまきは二人(ふたり)が知り合つたはじ

めから考へた。

信(のぶ)はおまきの先(まへ)の切(き)りだつたのである。こゝか

ら七八里(七八里)ある村(むら)に生(な)れて、早く變装(へんさう)に死(し)なれて

の百難の家に手守にして救つてもらつて、二十六の年になるまで、長い間その家に使はれて、百姓仕事をしてみたのだつたが、一寸した事から、間近の宿場から洋燈を盗んで廻つて来る、自分よりは五つも年下の信と出来合つて、前後の考へもなしに、たうと使はれてゐる家から黙つて逃げて出て、信のところにはひり込んだのであつた。さうして晝はその村の煉瓦を拵へるところへ賃取りに通うて、信と、信のおつ母と三人で世帯を持つてゐただけれど、そのおつ母といふのが性の悪いがり／＼の女で、まだ色男も持つてゐるくらゐの年輩だつたが、それが少しばかり一緒にくらす内に、諷もなくおまきを悪み出して、商ひして歩く先々で泊る信の歸らない夜などには、仇のやうにこじつて苛め抜くのであつた。根は信と仲のいゝものが瘡にさはるからしつた。

それは後から考へて見ると、よくまあ、あんなに凄度い事はばかりされながら、ものの五月もあんなところに我慢してゐられた事だつたと、自分ながら愕かされるくらゐであつた。返事の仕方がつく／＼してゐるとか何とか言つて、頭から、夜の冷水を撲つかけられたなどは何でもない事である。あの隠し男が来る夜は、寒の雨が

降つてゐても外へ寒き出されて、裏手の牛小屋で凍えながら立ち續けの夜を明かした事もあつた。それを一々信に言ひてもすれば、後の仕返しが怖ろしいから、どんな日に會つても黙つて我慢して、逃げて歸らうにも歸る處がないばかりに、泣き／＼苦しい毎日を見てゐたが、しまひに、或夜、庵丁を足へ投げつけられて倒れてゐるところへ、信がついて歸つて来たので、信とおつ母との大喧嘩になつて、おつ母が巡察のところへ願ふと言つて躰足でかけ出して行つた後で、信はおまきを連れて、要るだけのものを引つ括つて家を出て、夜露を四里の上も歩いて死んだ父やの方の續きの小さい農家へおまきを預つて貰つて、自分は商賣の合間々々に來て泊ることにしてゐた。

おまきはかうしてまた百姓に歸つて、一人前の食料だけはその家へ働きて償つてゐたが、その内にどうした事か、ふいと信が一寸もやつて來なくなつて、待つても／＼一言のたよりさへもしない。そんなにして心配な三十日四十日といふものが續つた。それで、こつそり客子を探つて貰ふと、信はその二月も三月も前から村へは一寸も歸つては來ないのださうで、何でもどこかの村に女がゐて、そこにずつと引つかゝ

つてゐるといふ事なので愕いた。段々聞いて見ると、それはもう信が以前から夫婦のやうにして働いてゐた女だといふ事であつた。けれどもおまきは全でそれを信する事が出来なかつた。

おまきの腹にはいつしか三月の子が止つてゐた。さうして後で待ちに待つ日が集つて腹は五月にもなつた。おまきはたうと欺されたのだと知つて後悔したがもう仕方がない。人に行つて見てもらふと、信はこの時はもうどこかへ妻をかくしてしまつて、例の女のところにもゐなかつた。それで腹の片附は厄介になつてゐる家のかみさんの指圖で、八月になるのを待つて、紡錘で突いで、死んだ子を生み落した。

おまきはそれからこれ一年もその家でぐづぐづしてゐて、その家の世話で、こゝろもう一つ手前の村の、或荷馬車引の傭になつて、生れたところから段々と遠くへ移つて來たのであつた。

馬車引と夫婦になつたのが二十九の年である。さうして三年足らずの間何といふ事もなく來たのだつたが、その男がどうした處に附かれたのか、ひよいと出先で物を盗んで、それなり懲役に投げ込まれて、一月とたぬ内に、牢

の中でチブスにかゝつて死んで了つた。

六はこの馬車引の兄である。戀るところのなかつたおまきは、どうにかこの先を極めるまで、當分といふので、六の家へ引き取つてもらつたのであつた。六は丁度一年ばかり前に噤に亡くなられて、二人の子をつれて不自由な日を送つてゐたので、女の手がはひつた事は、六に取つては切つて嵌めたやうに仕合せであつた。その内にまだ三十二にしかならないおまきは、もう五十に近い六とずる／＼べつたりと夫婦のやうになつてしまつて、こなひだの、九月の洪水にも漬つた。さうして十日ばかり前には子供を産んだ。子などで勝れてゐては働けないからであつた。

おまきはこゝへ移つて来てからまだ七箇月ばかりにしかならない。六もおさくも、矢つぱり来た時の儘で、おまきさ／＼と言つてくらししてゐるのである。たゞ由だけは母や／＼と言つてゐる。由のいふ事はもとより言葉にもなつてゐないけれど、おまきには母や／＼と言つてゐる積りらしく聞かれるのであつた。

### 五

かうしておまきは、もうこれなり行きがかり

で、六のものになつて了つた積りで、その日／＼を送つてゐたところへ、この五日ばかり前の夕方に、思ひがけない昔の信が、自分を尋ね當てて、ひよつくりと出て来たのだから愕いた。

信は自分があゝして放つといつて了つてからの、その後のおまきの事は何もかもすつかり聞いて来たのであつた。お前の前へは死んでも出て來られる譯ぢやないけれど、何と言はれても構はないから、どうかして一目會つて見たい氣になつて、わざ／＼探して來たのだと、信はもぢもぢして立つてゐた。そんなお前見たいな、人間でもない男に何も用事は無い。もう何を言つたつて相手になるものかと、おまきは心を締め、信が言ひ出す事をいゝ加減に聞いてゐたが、信のいふのでは、何も隠さず話すと、わしにはお前と出來る前に一人勝手に關係してゐた女があつて、しつこく附け廻されるので窮つてゐた。それはわしがつゝ、欺されて引つかゝつた、軒茶屋にゐたあばずれ女で、そいつがわしにお前といふものが出來たのを聞き知つて、わしの出先から出先へ血眼になつて附け廻つて來て、

いろんな外障の悪い事はかりするんでわしも困つてしまひ、仕方なしに一月二月とお前の方へは苦しい不義理をしてゐた。その間働ける

だけのものは皆その女に押された。それといふのがこの女にはわしの内蔵事を探られてゐて、ぐづ／＼言へば繩附きにして出すと威かされるのだからどうする事も出来なかつた。何、今から言へば馬鹿々々しい話だけれど、その時分は、お前も知つてゐるやうに、わしも二十を一つ二つ出たばかりの生なわしで、その女と手を切るだけの腕がなかつた。さうしてゐる内に、わしは一寸した借金も背負ふやうになつて、すつかりやけになつて了ひ、たうと二進も三進も行かなくなつてから、夜逃げをして町場へ出て、あれやこれやへ奉公して見たが、人に使はれて働か廻つてゐたのではねつから物にもならんで、辛抱してためた給金が少し圓まつたのを引出して、たつたこの一月前に、生れた村へ歸つて來た。おつ母はいゝ年をして男と通げて了つて、どこへ行つたのか分らない。

それからあしはやつぱり元の商賣にかへつて、かうして歩いてゐる。實際のところあの時はくしや／＼してやけになつて了つて、お前の事も、どうなるものかと無理にさういふ氣になつて通げて了つてしまつた。併し、さうして飛び出してさふより外には手がなかつたので、それからははつが悪いから、お前の方へ一本のはが

きさへも得う出さなかつたけれど、あれからずつとお前の事は忘れちゃあゐない。それはもうお前からどんなに恨まれても言譯はない。何と言はれても仕方がない。――

かう信は話して、どうだい、まあ話だけだとお前こゝを出る事が出来ればもう一度昔に歸つてわしに添ふ氣はないか。わしももう先のやうなぐうたらでもない。何が何でもお前を二度といゝ目にも會はずまいぢやないか、と、かういふのである。

「まあそれは話が別だ。己もはあこの年をして、さうく人の口車にや乗りたくないから。」と、おまきはあの折の事を思ひ返して、

「お前も全體まあ考へて見いよ。」と、さんざ及ばぬ腹立ちも漏らして見た。

そこへおさくが外から歸つて来たので、話もそれぎりでその日は別れたが、二三日して信は昨日またやつて来て話し込んだ。

おまきはあゝして、この男については随分馬鹿を見たのだけれど、こんなに再びまた目の當り行き會つて見ると、もといく性質の悪い人間といふ譯でもない上に、自分が女になつてはじめて持つた男であつて見れば、まんざら悪い心持にもならない。自分がそれから持つた

男といへば、あの馬車引や六のやうなものだけだ、ねつから男といふ程のものにも出會はなかつた。おまきはやつぱり昔のこの男に繋がるのが自分の引いて生れた約束ではあるまいかと考へた。信は、手づ取り早く黙つて逃げ出せば、何の心かといふ面倒がなくていいぢやないか、わしの心が分つとるなら、何のそれしきの事を怖れる事はないぢやないかといふのである。

それはもう、こんな處にゐて、あんなぢぢむさい六や、小憎つたらしいおさくなぞと貧乏の中に漬つてゐるよりも、信に附いて二人でせつせと稼げばいくら氣が利いてゐるかも知れない。併し、こゝを逃げ出してから先がどうなるかといふ事は、かうして貧乏して苦しんでゐても、あゝやつて六から大事にされるやうに儲かではない。信の心の中ももつとよく探つての上でない、損をしても拙らん事だ。とにかく、もし出るとすれば、これまでになつてゐて、六からかうだと話し出すのは言ひ辛いから、それには黙つて逃げるのが可え。何も六の女房でもないに。――

おまきは炭團を丸めながらいろ／＼に考へた。

## 六

やがておまきは、上になつてゐる二つの箱へ拵へ詰めたので、それを一つづつ抱へて外へ出て、柿の木の下の藪の上へ干し並べた。

昨日も今日も、どんよりと寒く曇つた厭な日和で、どこを探すべき日向もない。切入るやうに皮膚にあたる空風は、かち／＼に凍てた上の上、どこからか飛んで来た泥けた鶏の抜け毛を、――それがちつと考へ入つてはまた轉がるやうに――ふはり／＼とほろ／＼寒く走らせた。こゝはぐるりの三方を竹藪で堰かれてゐて、烈しい風は當らぬけれど、藪の外は物の吹き飛ぶやうな北風が出だしたやうで、ざわ／＼と藪を揺つて海の音のやうに鳴り渡つてゐる。

おまきはついでに柿の木の股にかけてある山の帯を取り入れながら、由は飯も食はずに出て行つたまゝ、外で何をしてうろつてゐるのだらうと思ひつゝ、再び土間へ這入つて藪の上に坐つたが、一つ二つ拵へかけると、つと、ちきりちきり羞し込みがして来た。

何だかこなひだからこつち、少し仕事に坐つてゐると、おきにちき／＼と痛んで来るのである。あんな、子を囓胎したりなんか無理な事を

した後が、かうした寒氣に冷えるのだらうと思はれる。おまきはしばらくそのまゝ下腹に力を入れたが、顔を擽めて息を殺して慄へてゐた。

やがて、やう／＼それが大分落ち附いて來かけると、そこへ村の使ひ走りをする寅がやつて來た。

「小母やあ、お前のごは洋燈かいカンテラかい。」と出し抜けの事を言ひながら、いきなり籠の裡へ行つて、大方灰になりかけた火をほじくつて、新聞紙でたゝんだ煙草入を出して、まだ十七八にしかならない青二歳の癖に、馴れない手附をして、曲りへこんだ鈍豆の煙管で煙草を喫み出すのであつた。

一夜點すのがかい？—とおまきは訊いた。  
「カンテラよ。それが何だ。」  
「何、そんぢやあ可えんだ。」

今度お上からの布告で、洋燈は一切、鐵葉か金かの油が附いてゐるのでなくてはいけないといふ定になつたので、この月の末までにすつかり買ひ換へないと、來年早々巡查が調べに來て、もしやつぱり改めてゐないとすれば、二十圓以下の罰金を食はず規則になつたから知らせて廻るのだといふ。

「さうかい。何でまた、そねいな八釜しい事をいふのぢやらう。」

「あたり前のぢや、火事が危いけいよ。」と寅はすば／＼と忙がしく吸ひ續けて出て行きかける。

「あの、のい、寅さ。」

「あゝ？」

「お前來る時に己がとこの由を見かけやせざつたかい？」

「由けえ？—あれあ、今その藪の板へ上つちよつたぜい。」

「あれい、あのでつかい木の上へかい？」

「おゝ。ずつと先つ頭まで上つちよつたい。」

「ほうかい。まあ何ちふ事をするだらうか、あの野郎は。—落ちつれあどうするのぢやらう。危え、まあどこにやあ。」と、おまきは見に出た。

「あの子は人さへ見れあ、持つちよる物を何でもくれるい／＼言てせがむ子ぜいなら？」と寅は先に立つて歩きながら言ふ。

「馬鹿ぢやけのい。」とおまきは仕方なくから言つた。馬鹿でも、由は、おさくとちがつて、おまきには何だかいぢらしい心持が引かれるのであつた。由はおまきのいふ事は何でもよく聞

きかけた。  
「こなひだはよ、あすこの土手のところを馬が下りて行くのを由やが飛び出して來て、動いて行く馬の腹の下をぐるり／＼くゞり抜けるのぞい。そしてお前、その馬の、下つちよる金を切つてくれろい言て、せがみ／＼どこまでも附いて行くがい。」

「それいな馬鹿な事を己に告げるお前の方がもつと馬鹿い。」と心に言ひつゝ、おまきはつんとして返事もしらずに路まで出て、

「由やあ。」と言ひつゝ、腹を見たが、高く突き出てる部分には由は見えたかつた。また例の鳥を引つけようとしてゐるのだらう。高い梢の先から絲を下らせてゐる。

「寅さ、そこから覗いて見えておくれい、藪の中を。」

「うゝ。」と言ひつゝ、土手の方へ歸りかけた寅は中を見探つた。

「ぬいよい。」

「ぬいかい？」と見に行きかけると、また例のがちきり／＼とさし込んで來た。

七

おまきは痛みが烈しいために、たうと上へ上

つて、蒲團に這入つて俯つ伏した儘午後になつても、それなり仕事につく事も出来ない。斜に古席の上にはじり出て、顔を伏せたなりで、枕元の障子の隙間からすう／＼寒い風が来て、這ひ出てそれを閉めるだけの氣力もない。痛みだけはもうこれで落ちついたのかと思つてゐると、またぢきにぐすり／＼さし込んで来るのであつた。

さうしてゐると、だれだか竊と這入つて来たらしく、上り口の障子こそ／＼開けるものがある。信ぢやないかと苦しい顔を上上げて見ると、おさくがこつそりと上つて来るところであつた。何をそんなに内證のやうにして歸つて来るのだらう。

「おさくさ。」と機嫌を取るやうに、氣分の悪い中からさういふと、おさくはもう見附けられたからどうでもいふやうに、わざとがたびしと、おまきが足にしてゐる方の戸棚を開けて、元結と水油の壺を取り出して、がたりと閉めて下へ下りる。

「已あ一人でからして困つちよるのぢやけ、もう出ずに家にゐてくれると可えに。」と言はうとする間もなく、おさくはそれなりまたふいと出てしまつた。何か薬でも買つて飲んだら、ちつ

とはよくなるにちがひなからうにと思へど、どうする事も出来ない。おまきは冷えつく手足をした儘で、ちつとさうして寝てつてゐた。

おまきはさうしたなりでつい知らず／＼寝入つて了つたのであつた。ふと目を開いて見ると、障子の内はいつの間にか薄暗くなつてゐる。さうして、力の抜けたやうな體が急に顫へつくやうにぞく／＼寒くなつた。例の痛みはもうすつかりなくなつたけれど、何だか、かうしてたつた一人で、冷たい中に力なく薄暗く生きているでもするやうな、いつにない味氣ない、心持が被さつた。

と、おまきは、炭團を外へその儘にしてゐたのに氣が附いて、蒲團を出て戸口の外の黒すんだ夕方へ出た。

竹敷の向うには、晝間よりもきつくなつた北風がごう／＼と鳴つた。見ると路際の棕櫚の木の下に、由が土べたに暗く足を投げ出して坐つて、首をうな垂れて頻りに何かやつてゐる。

「ま、由や。そげんとこへ坐つてからよう。何をしちよるい。」と側へ行つて見ると、おや、またたうと鳥を捕つて、ぶすり／＼と齒で引つばつては毛を捲つてゐるのである。膝や、あたり

の土の上に、黒い生毛がふは／＼と散りかつてゐる。

「あれ、まだ生きちよるいなう。見せ。ほ、むくむく動かあ。」

まあ馬鹿の癖にどうしてあんな手に合はぬ鳥を引つかけるのぢやらう。

「針へ何か餌を附けちよくのかい、由。」と言つたところで、由に分る譯もない。由はたゞ、

「う／＼。」と言ひながら、半分毛を捲つた鳥を、兩方の翼を握つて突き出して見せる。

おまきは炭團の箱を一つづつ土間へ持ち入れた後、戸口でカンテラに油をついで灯を點して、飯を炊く支度、家の後へ松葉の束を取りに行くと、途中でぶすりと草履の鼻緒が切れる。おまきはそこで藁を探してそれをすげて、ついでに他の片方の切れさうなのをも直したりしつ

つ、稍手間を取つて、松葉を抱へて家へはひると、いつの間にかおさくが歸つてゐて、上り口に置いたカンテラを背にして坐つて、爐の火が消えてゐたのだから、冷たい水になつてゐる筈の土瓶の湯をかけて、ざぶ／＼茶漬を食つてゐる。

「おさくさ、お飯ならもう一寸待つたら可かつたに。今に暖いのを炊いたげるのに。お前さ、

たうとう書も食べないでゐたのけい？」と言つても、おさくは黙つてゐる。さうしてがたりびしりと荒々しくお櫃などを片付けて、

「退いてくれ。と下へ下りかける。  
「お前さ、また出るのけい？ もうはおかえ加減にせいよ。もう追つつけ父やが歸るに。また叱られようぜ。已あ今日お前さがずつと家に居らんんだ事は父やにや隠しちよつてやるけ、もう出ずにゐなよ。なう。」

「へん、隠しちやいらんぞい。何にも隠したりしちやいらんぞい。」と、ぶり／＼して土間へ下りる。  
「あゝれ。朝つばらからまだ膨れちよるのけい？ しつ／＼こい子ぢやいなう。あきれたよ已あ。」

「已もあきれたあ。男を歸してもやつぱり寢ちよつて、人が見れば腹が痛い風をしてごまかすけ、世話はないだ。」  
「何を言やあお前。そんな出任せを。何と言ッ—  
「お前に訊いて見いよ。お前がよろ知つちよら。已あ今日は父やの歸る途中に待つちよつて、みんな父やに言うたらい。お前も父やに己の事を言ふけ、已も言はあ。」と言ひ散らかして飛び出した。

「えゝい、何なりと言やあがれ、畜生。本當にあゝいふ奴だ。だが今日男と寝たら。己があゝして苦しんぢよつたのをつらまへて、勝手な文句を附けるい。あの阿魔。ちつとも怖れあしねいだ、已あ。」

八

それからふう／＼と竈の下を吹いてゐると、  
「おい、おまきさ。」といひながら、ついと信が這入つて来た。  
「何だ、お前さ。そねいに息を切らせて。」

「お前一人かい？」と信はいら／＼した目附をして、抱へて来た風呂敷包みを上り口に置いた。  
「ようおまきさ。きつぱりと締めてくれい。崖から下へ飛び落ちる氣になつて了へばそれきりの話だ。逃げてくれいよ、これから直ぐ。」

これを見い。お前の着る物もちやんとかうして工面して来たい。襦袢と緋入と帯と。——半纏だけや反を買つて今日仕立てた新らしいのだぞい。見いこれを解いて。」  
「そしてお前今こゝから伴れて走る氣かい。」  
「それよ。そのつもりで己が荷もはあ向うの村まで擔ぎ出しちよいたんぢやけ。早うせいお

前。よう。」

「まあ、そねいに言うたちて。」と、おまきはいつそさうして了はうかといふ氣になつて、  
「お前今そこらで、うちの由に、で無え、おまきに會ひはせざつたかのい？ つい、お前と入れちがひに。」

「いんにや。おさく言やこゝの阿魔つ子ぢやしらうがい。」  
「あいつがそこをうる／＼しちよつて見い。」と、おまきは、くしや／＼になつた髪を亂れを掻き上げながら、どうしようかと考へて、

「あいつがもうはあ、己がお前と臭い事をぢやんと見ちよつて、今夜六の歸るのをそこらで待つちよつて、何もかも六に換ち開ける言ふんぢやがよい。」と、信の解いて見せる着物に目を附けながら、

「こゝからそれを己が着て出るのがかい。」  
「いゝやい。そんだぐ／＼しちよられやせんけ、どこかへ行き着いてから着換へる事い。」  
「ぢやあ出い。逃げるけ。——その代りお前もう己に二度と非度い日は見せまいなう。一生添うてくれるかい、本當に？」  
「何を言ふだ。——知れた事を。」と言ふところへ、

「うーうー」と涙をたらしながら、由がいつかの缺けた皿を持つて、醬油をねだりに這入つて来た。

「何だい。もうあいつを焼いたのかい。待つちよれよ。——おまきの阿魔あしろうの煙をそこへ置いてみる」と、上へ上つて戸欄を採す。

「おい。いゝ加減にしちよれよ。あゝ、これぢやないかい。」と信は、戸口に置いてあつた石油の燭を取り上げる。

「否。こゝにあら。おい、持つて来い皿を。二滴ばかりあら。ほうれ。」とおまきは下りて注いでやつた。

「さあ行け、由」と、外へ出して、おまきたち二人は、それから真ぐに戸口を出た。

「信さ、お前先行つて、そこらに誰かうるついちよれやせんか見ておくれい。」

「おま。」と信はすた／＼先へ行つた。

「おまきは出かけた足で一寸灰小屋を覗いて見ると、由はもう中で足を投げ出してつくばつて、丸焦きにした鳥を握つて、ぐじり／＼齧つてゐるのが、焚いた薬火の燄にぼんやりと見える。

「お前は何にも知らないで、由よ、己あこれぎりで明日からも居れあせんのぢやぞい。」と思ふと、何だかいぢらしい心も残る。

「由や。お前その火を外へ持ち出さない。風が吹くけ。よう、可えかい。」

由はたゞ、

「うーうー」と言つてゐる。

「おい／＼。ぐづ／＼するな。」と、信は小さく言ひつゝせか／＼して立つてゐる。

「大丈夫かい。」とおまきも小聲に言つて、前後になつて竹藪の間の寒い闇に這入つた。

「何をしちよるのかい、灰小屋で。」と訊きながら、信は先に立つてせつせと歩く。

「由かい? ——鳥を食ふのい。」

「何をい?」

「鳥をよ。」

「鳥をい?」

「あゝ。」とおまきは追ひ附いた。弱つてゐる體はもう息切れがするのであつた。

(明治四十四年二月)

### 月夜 (五)

自分だ愛だと考へつゝその方へ引き返したけれど、いくら行つてもその形に追つ附かぬ。樟の木の、もと入つて来たはづれまで返

して来たのに、女にゐない。形がない。それでも、歌はまだ聞える。しかもまた後の方に。

見ると再び白いスカートがちらと見えてすぐ消えた。

自分は頭の迷ひかと考へつゝ、先の二階の窓を見上げると、そこにはもう灯影が消えてゐた。茫として立つてゐると、だれだか、女の聲で、早くお母さまの方へお歸りよといふ。これこそは耳のせむだと考へつゝ、それでも急に母が氣になつて来たので、西洋人の女の疑問もその儘にして、急にきつさと歸つた。

するとバルコニーの下の石段に伯母さんがしよんほり立つてゐた。

「どこへ行つたの? ——と小さく訊く。母には變りもないのだと分る。

「西洋人の女が一人で歩いてゐましたよ。」

「女の異人さん? ——うそ。あそこには、女の人はゐやしません。メイリーさんといふ嬢さんがゐたけれど、去年亡くなつて、もうゐやしない。あそこには教官をしてゐる年取つた方だけが一人であるんですよ。」といふ。

自分はやはりその時代でも、外都のすべてで、事物に何の交渉をも感じないで、たゞ自分と、自分の仕事とだけを一人薄暗く見入つてゐたのは變らなかつた。それが自分に取つては、黒い水にばかり生きてゐる生物が、わが水の黒いといふ比較を取つた事がないやうに、それで何の缺損をも意味しない、平靜な状態なのである。さういふのが、與へられた自分の性分だから仕方がない。自分は今でも、夜になるととぼく變なところに寝に歸るけれど、その頃はまだ學生でゐた時代で、或つてから、一區の、あのざわざわしい一町といふやうな變つた場所に住んでゐた。

けれども、一町といへど、裏筋のやうに這入つて行く、壁の厚い三階にゐたのだから、忘れておればそんなにざわ／＼しい町場の中のやうでもなかつた。その表通りを行くと、入口の柱に半男半女の形を浮かした、或、機械や標本を賣る店のショー、カインドーに、子供の外套を賣る黒い大きな標本と、後の標本物足りな

い、足のない長い腕鳥の出でゐるのが日に留る。そのショー、カインドーに沿うて這入ると、高い煉瓦の壁に挟まれた、行き抜ける狭い露路の取つ附きに、自分の住居の入口がついてゐた。

夜は露路の中段にたゞ一つ瓦斯ランプが暗く點く外には灯影もない。建物は表の標本屋の所有である。丁度マツチの箱を突き立てたやうな、ぬつとしただけの撲つ切ら棒の煉瓦造りで、外から見ると、がた／＼に老いぼれた、うす汚い建物であつた。階下の土間は持主が店の倉庫に使ひ、二階が標本などを作る仕事場で、その上の大きな一室を、他のものが何かの事務室に借りて、下の入口に表札をかけてゐた。

自分は、階段口を隔てた、三階の表角の小さい一間と、それへドアで續いてゐる後の一室と、さうした二つの間を借りて、物蔭に隠れた、減入つた鳥かなぞのやうに、自分一人忘れられたやうになつて住んでゐた。同じ屋根の下に頭と足とになつてゐても、下の仕事場とはもとより何の交渉がある譯もない。

たまに家にはかりゐる日には、二階の水の出るところへ、水さしへ汲みになど下りて行くと、ちよい／＼、汚れたエイパーンをあてた仕事場の工女たちと擦れちがつたりするほど、人を注意して見る自分でもないから、いく度か出會つたにしても、いつでも、はじめて見る相手のやうに、何の接觸をも見出さなかつた。三階の室とだつて、互にろくに顔も見出さないりに立て切つてゐて、外の町での別々の家同志のやうに暮してゐるまでの事である。さうした一室で何の事務をしてゐるのだつたか、いゝも、問訊された、使はない室のやうにひつたりしてゐた。その階下は書でも夕方のやうにどんよりしてゐた。

自分は角の部屋の、表の建物の後壁に面した、厚い壁の下にテイブルを置き、それに黒いカシミヤの布をかけて、一腳の質素な椅子を配してゐた。さうして、入口のドアのある壁の根に、かなり買つてゐた自分の書物や、死んだ兄の讀んだ多くの文學書をつんだ箱を置べ、下の往來に面したもう一つの窓のところ、別突の椅子を、何の續きもなくたつた一つ据ゑた外には、一方の隅に水さしやコーヒー茶籠などの五六の小物と、ニツケル色の石油こんろを載

てゐた。さうして、入口のドアのある壁の根に、かなり買つてゐた自分の書物や、死んだ兄の讀んだ多くの文學書をつんだ箱を置べ、下の往來に面したもう一つの窓のところ、別突の椅子を、何の續きもなくたつた一つ据ゑた外には、一方の隅に水さしやコーヒー茶籠などの五六の小物と、ニツケル色の石油こんろを載

せた圓卓を、取片附けたやうに置いてゐた。

自分は、夜は物古く靜くやうな蠟燭の灯の外には使はなかつた。何だか蠟燭の火の影が好まざつた。いつも寝る時には、もう短くなつた何本目かの蠟燭を持つてドアーを開けて、次の、より小さい室に這入る。そこは疊敷になつてゐて、樫の木材の大きな寢床が、一ぱいになつて横はつてゐた。さうして、その頭の方の物を置く臺に、壺の蓋を擧げ、その中に押へた、三四尺の丈のバンドールの朝像と、その膝の下に花挿の壺を置いた。そこへ置いて蠟燭のまたゝ

きが、白く洗んだ壁にバンドールの影を大きく按じて點いてゐる間、自分は薄闇に這入つた儘、夜はこの建物に唯一人ゐる自分をしんとした心持で見守りつゝ、やがて火がじゅゝと言つて盡きると共に、慥かに目を閉げば、夜の長さもなくすや／＼と寝る。さうして、朝になると、圓卓で麵麩を切つて食べて、さういふ一町

からとぼ／＼歩いて學校へ出た。

それからレクチニアが了ると、地下の穴倉に、日影を知らないものやうに、たつた一人で仕事を續けるのであつた。夜もとつぶり深くなつたといふ事を、外に出てはじめて氣附きながら、包みをかゝへて、さきの三階へ寝にかへるやう

なことも珍らしくなかつた。どこをどう通つたとも分らずに、いろんな取留もない考に浸されつゝ、滅入つたやうに、力なき足をのろく刻んで、いつ歸つたともなく入口の戸を開けるのが癖であつた。

そのやうにして、いつも考へ入つてゐるものやうに生きてゐて、その實はこれといふ何にも考へてゐるのではない。仕事に關した事の外には何にも考へることもない。入口の戸は夜中でも押せば開く。夜になれば、倉庫の中のやうにだれも人のぬ階段を、足探りに上つて、ポケットの鍵を出して室を開ける。

休みで籠つてゐる以外の日には、夕方の暗がりの中に、二階の工場にしまひまで一人ゐた、作業の主任の男が、パイプの火の赤く見えるのを口にして、靴を重たくこと／＼階段を下りて來るのを見せきりで、この建物にゐる人々と顔を合はす事も稀であつた。

休みの日には寝たいだけ寝て、それから町に灯が點く頃になると、例の、どこをどう出て來たともなく、一丁の、ベイヴェメントの續いた町をぶら／＼歩いて、古本をせまくつたり、草花を買つて來たりして、肘突の椅子のある窓に置く。それでも、大抵はそのとききりでそこに花を

置いたことも忘れるので、雨の日の、外へ出られぬ盡たぎに、稀に、カーテンを開けて、向うの屋根の續きを見る時などに、そこに、いつしか花壇も落ちた、黒い鉢などを見出して、最早幾日さうして置き忘れてゐたかを考へ分らない事すらあつた。自分が自分の學科に關した、最初のエッセイを書いたのはかういふ頃の事であつた。

その時分には、學校では、穴倉で自分の工夫した或装置を覗いて、そのエキスペリメントにばかり没頭してゐた。そんなにして、度々夜になつて穴倉を出る自分は、小使部屋の窓にか灯影のない、暗い建物の石段を下りると、年古の大木の黒く夜を包んだ、人もない構内の闇に吸はれつゝ、その内にいつの間にか、店の灯の續く町の中を、何にか囚はれた人の如く、とぼりとぼり歸つて行くのに氣が附く。さうして、行きあたりばつたりのレストロランに這入つて、スープと麵麩と、二皿ばかりのものを食べて、例の三階の梯子段を探り／＼上る自分を見出すのであつた。

さういふ譯で自分は或小さい雨のしと／＼した夜、自分のある町から間もない、ベイヴェメントの續きの或町角の家に這入つて、棕櫚竹の鉢

置いたことも忘れるので、雨の日の、外へ出られぬ盡たぎに、稀に、カーテンを開けて、向うの屋根の續きを見る時などに、そこに、いつしか花壇も落ちた、黒い鉢などを見出して、最早幾日さうして置き忘れてゐたかを考へ分かない事すらあつた。自分が自分の學科に關した、最初のエッセイを書いたのはかういふ頃の事であつた。

その時分には、學校では、穴倉で自分の工夫した或装置を覗いて、そのエキスペリメントにばかり没頭してゐた。そんなにして、度々夜になつて穴倉を出る自分は、小使部屋

の置かれた、小綺麗な階段を上つた。

そこには白いエイベーンをかけた一人の少女が、壁の姿見の前に立つて、容のない夜の、する事も無い我が髪を撫でてゐた。それが、皿を通して下へ下りて行くと、自分は一旦かけたテーブルを變へて、外のバルコニーに臨んだ、小さい一室に席を取つた。

その室は、かうした家によく見るやうな、小下りもしない装飾なぞは何にもない、さつぱりした一室で、高度な瓦斯の灯影が、薄青い水の中のをやうに漲つた中に、白い絹の布のかゝつたテーブルに、ベイズに挿した赤い色の西洋花の束が、ぼつと目に立つて見えた。

自分はそこに一脚ある綺麗な椅子に坐つて、さうした花の色の何をか告げようとしてゐるやうなめを目的にして、皿の来るのを待つた。外に、下の夜のさむくしい中に、小さい雨が、こゝろとバルコニーに落ちるのが聞き取れた。

その内に自分は、ベイズの水に、束から取れた花の一つが、容の硝子を通して大きくくたつて見えるのを、頭を傾けて透して見たりして、何のためにこゝへ来たといふ事を忘れたもののやうに、かうした瓦斯の光りに澄み切つ

た一室に、小雨の夜の自分を鎖してゐた。

さうしてゐると、さつき前の女が皿を持って上つて来て、あちらのテーブルにかけてゐると考へ設けたのが違つたやうに、

「そちらへいらつしやいましたのですか。」と、一寸入口に立つたが、自分が例のやうに、何にも言はないで黙つてゐるものだから、そのまゝ這入つて来て皿を置いて、氣のない容子にあらからナイフなどを運んで来た。

自分は何といふ聲もなく、たゞ惰性のやうに、その翌の目にも夜になつての歸りにこの家へ這入つた。丁度女中が一人もそこにななかつたから、柱のベルを鳴らして置いて、自分のために定められたところのやうに、一度這入つた昨夜の室のドアを、何心なくつと開けると、一人の女がそのテーブルにかゝつてゐたので、おや人がゐるのだつたと思ひつゝ急いで閉めた。

と、直ぐに内からノツブを廻して、その女がそはくしく出て来た。

「あの、構ひませんからどうかこちらへお這入り下さいまし。」と、こゝの家のものらしくさう言つて、今までそこで讀みかけてゐたと見える、黒い表紙の洋書を、指を挟んで片方の手に持ちながら、徐かに向うの室へ行つた。自分はこの

すらりとした女の、長い髪の下に深い色にしめた目と、つや／＼しく束ねた髪と、薄いとき色の中に石竹の花を出した帯とを目に入れて、そのまゝ這入つてテーブルにかけた。

すると、昨夜の少女でなく、ずつと年の入つたさびしい造りをした女中がやつて来た。「はい。」と自分の命じた皿を受合ひながら、テーブルに置いてある紙切を取つて裏を返して見たが、

「ふふ、横文字ですな。何といふ事が書いてあるのでせうね、これは。」と、物購れた女のやうにさう言つて、自分の前に置いといてさつきと下へ下りて行く。

自分は仕業のない時に何でもない事をすこやうに、その紙切を取つてみると、鉛筆で急がしさに書き付けた字で、

“Chi rendu alla meschina  
La sua folietta?”

と、小唄の一句が書いてある。それから下はフランス語で、對話の一部がらしく、いゝえ、そんなにいつもあの人の事はかり言つてやしません。私だつてほかの話も出来ませう。

蜘蛛。

と書いて、

それから何といふの、お母さま、え？

と、がさ／＼と書いてある。さつきの黒い本

を持ってこゝにゐた女が書いたのだらうかと、

自分はたゞそれだけ一事を考へつゝ、ふと、ベ

イズに挿された花が昨日のと異つてゐるのに氣

が附いた。何といふのか、見馴れない、黒い草花

である。黒い花もあるのかと見つめてゐると、

その間に、女が皿を持つて出て来た。

「何と書いてありましたの、さつきののは？ あ

ら、あの紙切をどこへおやりになつて？」

「ああ、こゝに落ちてゐる。」と、自分は足の下

を指しつゝナイフを取つた。

「これでも手紙か何かでせうか、あちらの言葉

で。」

「……………」

「女が男へ遣る手紙でせうか。何だか私たちが

見ますと愚が這つたやうですわね。」と、女中は

口元に笑を見せながら、そんな事でも言つて、

客のために相手にならなければならぬかのや

うに、それを披げて見つゝ話を引く。

「手紙ではないよ。」と、自分は例の薄暗い調子

「ぢや、何でございます？ 言つて下さつたつ

てどうせ私たちには分らない事なんでせうけ

れど。」

「……………」

こんな返事だから女は話を持つてくはずみも

ないやうに出て行つて、次の皿を持つて来た。

「だれが書いたのかい、これは。」と黙つてゐる

癖の自分も、つい挨拶にかう訊いて見る氣にな

つた。

「これですか？」と女は来て、

「さつきこゝに女の人がおましたでせう？——

あの方が書いたんです。私見ませんけど。」

「このうちの娘さんかい？」

「えゝ、まあ。」

「まあとは？」

「ほゝゝゝ。」

「……………」

「こゝの家で預つてゐる人ですの。」

「こゝへ這入つて黒い本を讀んでゐたつげ。」

自分の話は噺つ附け方が下手である。横文字

「そゝ、毎日いろんな本を讀みますわ。横文字

なんですからね。」と、終りは獨り言のやうに言

ふのであつた。變つてゐたつてもいゝけれど、

その言ひ方には、この女はこゝの家へ来てから

未だ目もないといふ事が愛取れた。

それきりで女は「いゝ下へ行つた。何だか

面白くもないところに備はれて、自分で自分一

人を見守つてゐるのを示すやうな容子であつ

た。

やがて自分はそのやうな事はみんな浮ぶまゝ

に忘れて、この一室を出る時、何の氣もなく口

に出たさつきの一句を、

「Chi renda alla meschina

la sua felicità ?」

と、獨り言のやうに言ひつゝ戸口を出ると、

そこにさつきの、この句を書いた女が、自分の

さういふ獨り言を聞くとはなしに立ち聞きをし

てでもゐたやうに、我を忘れたやうな目光をし

つてゐた。自分は、

「キ、レンダ、アラ、メスキナ。」

と、もう一度それを繰り返しかけて、この女の

ゐたのこゝろに心附いて後を黙つて了つたが、それ

ので、たゞ、上つて来た時と同じに、何の心もなく、次の瞬間にはさういふ女のゐたといふ事すら忘れて、のそり／＼梯子段を下りた。

それから四五日も経つて、もうどこかで夕飯を食べようかと思ひつゝ、例のどこをどう歩いて来たとも分らない、歸りの夜の町筋に、ふと、洋食とかいた石柱の札を見て這入ると、それはやつぱりこの間も来た、棕櫚竹のある家であるのに気がついた。

「あすこへ這入れるかい？」と、この前の淋しい造りの女中に訊くと、

「一寸ませんけれど、唯今そこで例のが本を讀んでゐるのですから。」と言ふ。

「やがて自分はナイフを動かした。

「あすこの室はあの女が使つてる室なのかい？」

「え、ですからあすこに挿してある花が毎日變るのですわ。」

「ティブルの上の？」

「え。」

「……………」

「今日は黒い花です。」

「だつてこの前も黒いのだつたぢやないか。」

「あら、さうでしたつけね。」と言ひつゝ女中は

次の皿を取りに下りた。すると、いつの間にか今日も石竹の帯の女が室の戸を開けて覗いてゐて、

「こちらへいらつしやいませんか。——どうぞ。」と言つて中へ這入る。自分はそれに對してたゞ黙つて點頭いだけだ、その儘そこで食事を了へた。さういふのに従つて、わざ／＼そちらへ動いてゆく程の必要は何もない。戸はそのまゝ自分が這入るのを受取るためのやうに開かれたまゝで續いた。

それから自分はもう歸りかけて、梯子段の方へ行きかけると、

「あなた、失禮でございませけれど一寸、」

「女が急いでティブルを離れて呼びかける。

「私ですか。」

「え、すみませんけれど、」

「……………」

「一寸この句を教へて下さいませんか。どなたかに教へられなければ分らないのですから。」

もうよく知り合つてゐる間でももあるやうに言ふのである。

「何ですか。私に分るやうな事ですか。」

「自分も當り前のやうに戸口の方へ歩みを運んだ。」

「出しぬけた女ですから變だとおぼしめすでせう？ ああ、この本のね……………」

「私には分らないでせう？」

「キ、レンダ、アラ、何とかいふ——待つて下さい。——え、こゝに引いてあるのですよ、昨晚のは。これはイタリヤ語でせうね。」

「さうでせう。」

「では一寸。これをフランスに譯して下さいませんか。ほ、ほ、變な女だといふお日ね。」

「これへ書くんですか。」

「御面倒ですけれど。」

自分はかうしてたうと黒い花のティブルの上で、例の黒い表紙の本の一頁の、フランスで書いてある中のキ、レンダを譯させられた。

「おや、さういふ事なんですか。——失はれたる女にだれか與へ得る。その過ぎにし幸福の」と、女は自分の綴る洋字を追うて讀みつゝ、

「幸福の——え、その字だけは分つてゐました。——幻影ですね。——ありがたうございました。」

「どうせ直譯だから拙いですが。何を書いた本ですか、これは。小説ですか？と自分はそれで黙つて立ち去るのも間が悪いから訊くと、今自分の書いた譯を取つてもう一度讀んでゐた女

は、目を伏せて微かに眉を皺めた。

「厭よ、あなた。そんなにわざと知らない振をなさらなくともよござんすわ。」と言つたが、

「でもお蔭さまでございました。」と、直ぐ氣を換へて、

「一寸待つてゐて下さいました。私お禮にあれをあげますから。本當に待つて下さる？ 鏡

をかけてちやんとしまつてあるんですから。」と言ひつゝ、次の室の戸を開けて這入る。自分は

何だか勝手な目に會はされてゐるやうな氣がしたが、それでも、構はないでさつさと下へ行つて了ふ譯にも行かないので、仕方なく立つてゐると、

「ね、これよ。かうして見ると赤いでせう？」と、女は何だか洋酒の這入つた壘を持ち出して、火にすかして見せたが、

「でも、あなたはお酒を召し上つて？」と、女はこの時はじめてちつとまともに、黒く深いうるほひの目を自分の額に注ぎつゝ、

「上れるでせう？」といふ。自分は、さう言はれて、何だか物の怖れといふものを知らない、罪なき小鳥のそのやうな、この女の目の目に逆ぶ

ぶ事は出来ないやうな心持を見た。

「どうだか。飲んだ事がないのだから。」と、白

分の友人に言ふやうに、

「何といふ酒？」と訊く。

「ちや、この椅子におかけなさい。めしあがつた事がないのなら、あがつて御覽になればいいわ、あがれるかどうか。」

「私はその酒ばかりの話ぢやない。」

「え、酒といふものをでせう？——御覽なさい。この小さいコップだつてレナが孔雀の女王になつた儘の着物を着て、毒を飲んで死ぬ時のコップでせう？ だからこの酒も私がエジプトから取り寄せたんですわ。」と、自分には何の事か分らない事をいふ。

「そんなに注いでは駄目。一口だけ義理で飲んで行くんだから。」

「ね、飲れるでせう？ 本當はこんなものなぞへ注ぐのではないのですけれど、レナが、こんな指を洗ふコップで飲むんですから仕方がありませんわ。」

「もう澤山。」

女は壘の口をして、ちつとそれを押へた儘、何をか考へ入るやうな目元をして、黒い花を見てゐたが、と、思ひ出したやうに、

「ちや、もう上げません。あなたは随分暗い方ね。薄い心持の方。ほ、ほ、また變な女だ

とお考へなさるのね。さうでせう？ 私にはあなたになら何でも言ひます。愕いていらつしやる。」と、ちつと灯影を見る。別に愕いてゐやしない。

「ちや、それをもう少し下さい。」

「え、まだこちらにもう一本ありますから。レナが怖れ、鞭の中に隠したこの酒を飲むでせう？ だから私も厭になると飲むんですの。こつそりと。——でもレナのは毒が這入つてゐるからいゝけれど。」

「レナといふのは何です。」

「あら、あんな事をおつしやる。誰でせう？——私が誰を吐く必要は何にもない。」

「だつて、レナをだつて知つてらつしやるぢやありませんか。違はないわ。私がちやんと考へてゐたのと違はないんですもの。」

「何が。」

「だつて昨日もその前も、この室へ入れて上げてでせう？」

「入れて上げた？——ちや厭なもののは這入れない室ですか、こゝは。」

「え、だれだつて厭。それはね、かういふ家ですから、お客さまが這入つて來れば仕方がありませんけど、さうしたら、こゝに挿してある

花をすつと抜いて持つてつてすひますわ。

「それではどうして私が這人つても取つてかないの？」

「だつてあなたはキ、レンダをお歌ひなさるからちやありませんか。本當にお蔭さまでした。

私はどこかへ訊きに行く積りでゐたんですよ。女囚の窓から聞えるのだから、意味が分らなく

てはじれつたくつて。——氣ちがひでせうね、どうしても。」

「それが。」

「これを歌ふ女囚。」と、女はさつきの本の開いたまゝの頁を指で押へる。

「そんな事は私には分らないが、あなたも随分出鱈目を言ひますね。」

「あら、なぜ？」

「だつて私がキ、レンダを歌つたからだと言ひけれど、それでは、私がこの前をはじめこの家へ上つた時にはどうしてこゝへ入れたんです。懺かこゝに赤い花があつたと思ふけれど。」

「自分にもう好い加減で切り上げて出て行く容子を示しつゝ言つた。」

「ええ、一ばんはじめも私が這人つて下さいと言つたのです。」

「ないの？ だから誰だ。」

「だつてその前は三階の窓から下へ飛び落ちて死ぬ人に似てると思つたんですもの。」

「私が？」

「ええ、いつもさう思つて見てゐました。」

「なぜです。」

「だつて、薄暗い沈んだやうな方ですもの。」

「ふふ、そんなものは三階から落ちるんですか。」

「さうね。——さうばかりでもなさうだけれど、丁度私が、そんな事を考へ出してゐた夕方に、二階だつていゝから、その窓から覗いて下を見てゐたら、その時に丁度あなたがお通り

だつたから、それでいつでもさう思ふのかも知れませんか。——さうして、ええ、それよりもあなた

が三階にいらつしやるから。」といふ。

「自分、この女が、どうして自分が三階にゐるといふ事を知つてゐるのだらうかと心に考へた。」

「ほう、知つてますわ。」と、女は直ぐ自分の心を讀むのであつた。

「それでは毎日私を見るのですか。」

「ええ、もう一つついでにみんなお上りなさいな、これを。見て、御覽なさい、あとで段々と酔ふから。奇體なお酒よ。」

「……………」

「この椅子へおかけなさい。」

「それではどうして私がこゝを通る時刻が分るんです。ちつと通るまで立つて何を見てるんです。」

「ね、サロメですか、あの句は。——戀の女のみだに何ものか見えざる、といふのは。」

「どうだか。私たちがそんな事を知るものですか。」

「そんなに私を輕蔑なさらなくもいゝわ。あなただからそんな口を利くんぢやありませんか。私は人が唾だと言つてるほど、いつもは黙つてゐるんですのに。」と言つたが、

「私も三階から落ちたいと思ひますよ、時々。毒を飲むよりかもつといゝわ。」

「なぜ三階から落ちるんです。」

「たゞ落ちて見たいだけ。」

「だつて私に似てる男が落ちたと言つたでせ

う？」

「あれは書家です。サツフオーの中にあるぢやありませんか。モデルに備はれた女がその書家に戀をして、畫が出来上ると一緒に、三階の窓から飛んで落ちて死ぬでせう？」

「小説の話ですか、やつぱり。」

「たと知らない振をなさるといふわ。——それに愕いて気が觸れて、その女と同じ窓から落ちて死ぬ書家だわ、あなたは——」

「何でもない。」

「ほ、御覧なさい、酔ひが来たでせう？」

「酔つたのかしら。」

「まあ苦しうな息をなさるわね。——そんなに苦しうですか。」

「何、——たゞ息が出るんです。」

「何を考へていらつしやるの。」

「ふ、ふ、何にも考へてゐやしません。——もう歸る。」

「まだ、お苦しくないのならお話をして聞かせて下さいよ。ね。この本のアンジオーは火事で焼けて死ぬぢやないんですか。」

「そんな事は私に訊いたつても駄目。それよりかあなたから話して聞かして下さい。そのキ、レンダの女の話を。私は人から聞くのなら聞

く。分る話なら。」

「ほ、分る話ならですつて。私だつて自分の讀んだ話を人にさせて、忘れてゐさうのを考へ出すのは大好きよ。」と、女はちつと灯影を見守つてゐる。

「さうして灯を見ては考へるのですか。」

「だつて——何といふ作でしたか、ゴートイエね、あれは。暮から出た女が、向うにいつも點く灯を見ては物を思ひ出すでせう？ その灯を見ないと自分が死ぬ前にどういふ女だつたかといふ事が思ひ出せないのね。」

「だからあなたも灯を見るんですか。」

「私は灯を見たつて自分が何だか分らないからつまらないわ。——では私がしませうね、お話を。——私はこの本で蜘蛛が出て来るのが面白

いと思ひましたわ。まだこれだけしか讀まないのですけれど。」

「それは牢屋の事が書いてあるのですか。」

「だからこの花は黒いでせう。」

「黒いのをわざと挿したんですか。」

「え、かういふ牢屋の事なんかを讀む時には黒いのを探して来るんです。」

「どこで？」

「ほ、花屋へ行かなければありませんわ。

こゝに赤いのがたつた一本あるでせう？ あれがアンジオー。——昨日はまだ黒い花ばかりでしたけれど、今日のところで赤い小さい花が加はりました。キ、レンダの女は汚れたやうな白い花。」

「おや、どこへ行つたんです。——あら、下が短かつたから、水へ届かないで萎れて了りました。ではどうしてもあの女囚は氣ちがひね。」

「何ですか。そんなに飛びく／＼に言つたんぢや一つも連絡がなくて譯が分らない。」

「ではあなたは一つの本をはじめから終ひまで順を追つてお讀みになるのですか。」

「あなたは？」

「あら、小説などはどこを開いて讀んだつて面白いぢやありませんか。女の子が垣の上へ上つて、伯父さん、神さまにお祈りなさい、もしあなたがシルビオ、ペリコさまなら、お母さまはあなたのお書きになつた本を讀んでゐます、幾度も幾度も。それから？ え、それから何といふの、お母さま。——牢屋の窓からゼノアの海を見てゐると、子供がさう言つて訊くでせう。私はそれだけの一頁を讀めば、もう長い小説を讀んだやうに、その下に隠れて子供にそれを言はせてゐる女の、生れてから死ぬまでも、垣の上

て、娯楽のやうに噂の言ふ事を取り次ぐその子が、また母の年になるまでの長い月日の間の事も、すつかり目に見えるんですもの。一つの小説を一枚々々讀まなければ氣の済まない人間は厄介ですわ。字引の字を一つ見ても、それが一々小説になつてゐるんですもの。

「何だか六つかしいな。——そのシルビオ、ペリコといふのはどういふ人間です。」

「ほゝゝ、今で試験のやうね。ペリコが何だらうとそれよりも蜘蛛がいゝわ。終日暗く讀まされてゐて、淋しくて堪らないものだから、蜘蛛が這つて来たのを捉まへて、蜘蛛の切をやると、そこへ字の数が出て来て、私の蜘蛛を取つたといふのね。それから女はいつも、秘密にコーヒを賣りに来ては、男が俯つ伏して黙想してゐる後に立つて、その儘しばらくちつと見守つてゐるんでせう。何をしてゐるかとか男が訝つて訊くと、かうしてあなたを見てゐて上げるのよと言つて涙を出すんですわね。——さうして

あて上げれば、あなたが淋しくないだらうと思ひますから。——それから、もういゝから行けといふと、でもまだ涙が乾かない、父に見られるから、と言つたやうな句がありましたね。しまつた、さうと女は自分に戀しい男がある事を話

して、それから何かといふとこのペリコのところへ来て泣くんでせう。なぜ私はこんなにここへ来たがるのでせう。——それは私の前でお前が戀に泣くのを許してゐてやるからさ。——いえ、そんなにいつもあの人の事ばかり言つてやしません。私だつてほかの話も出来ませわ。——二人がこんな話をする時に、薄曇つたやうな夕方の日影が一筋、解れた絲のやうに鐵格子の隙間から板の間へ落ちますね。」

「あゝ。その女の言葉なのか、この間のは」と自分は心に言つた。この女は自分があのいつかの紙切を讀んだのを知らないのであるのではないだらうか。あれを見ずにキ、レンダを自分が知つてゐる譯でもない。

「さうして或日女は、ふと秘密の手紙をこづかつてペリコに渡すのですね。私はその手紙は、きつとあの戀の歌を歌ふ女岡から来たのだと思ふのですが、どうでせう。」

「それで？」  
「違つたら黙つて下さいな。私はさう考へる方がいゝのですから。——さうしてアンジオラは、私が來なくなつたら、私の蜘蛛を見て、私を叩つて下さいと言ひかけて、父の獵卒に呼び立てられて出て行つたさき、それさき一寸も來な

くなるのですね。——もうそれで澤山。——來ないから薄赤いでせう。それはアンジオラと、女はペイズの黒い花の中から、きつきの小さい一輪を抜いて見入るのであつた。  
「おや痛い。ちきりとした。何だらう。」と私は顔をしかめた。

「ポケットの中？ では引つくり返して御覽なさいな、立つて。針ぢやないでせう？」

「まさか。」  
「ほゝゝ。よろ／＼なされるわね。お顔にはそんなに出てゐるにないの。」

「無い。何にもない。どうしたのだつたらう。」

「何でもなかつたのでせう？」

「では、これで私は歸りますよ。またこの次、いろんな話をして下さい。」

「あなたこそ。今度は私の知らない話をあなたから澤山聞かして頂きますからよございませう。」

「さやうなら。」

「あなた、三階からお飛びなさらぬ？ 私がさきに飛ぶから。」

「厭だ。そんな下らない事を。」  
自分は梯子段を下りて外へ出た。  
町筋は人の出さかりで、兩側のペイヴメント

に蓋んだ夜のランテラの火が、向うの方は、夜  
ばかりの暗く續く間に、物の微に現はれた、怪  
しい火光のにじんだのででもあるやうに、薄暗  
く垂れ下つた空を凶悪な意味を帯びた色にほ  
てらしてゐる。自分はざわ／＼しい下駄の音の  
中を、一分間前まで何をしてゐたかといふ事も  
忘れて、蝙蝠の出たショー、ウインドーを求め  
つゝ、かういふのを醒つてゐるといふのかとば  
かりたと思ひながら、いつもの自分より變にモ  
ディファイされた心持を見ながら、とこ／＼と  
歸つた。さうして、例の暗い階段を上つて、戸  
を開けようとしてズボンのポケットを探した時  
に、おや鍵をどうしたらうと變に思つた。

ない。どこにもない。どこへも落すわけもな  
いのだが。——ではあすこだ。あすこでポケッ  
トを引つくり返した時に考へ合せたので、ま  
たて／＼二町ばかり二度の足を踏んで、松栢  
竹のある階段を上ると、小女がティابلに俯つ  
伏して居眠りをしてゐる。奥の方の室からは、  
二二三の客が来てゐるらしい、話聲が漏れた。  
自分はさつき女と話した室を開けて見た。  
と、女はあれなりずつとそこにゐたもののやう  
に、ぼんやりと斯る火を見詰めたまゝ、自分  
が進入つても、造つた形の如くにちつとしてゐ

るのであつた。  
「私はこゝへ鍵を落して行きはしませんでした  
かね。」

「いゝえ、そんな物は落ちてゐやしませんでし  
たよ。見て御覽なさい、そこいらを、無いでせ  
う。」と、もう口を利くにも飽きたやうに、そと  
の方を見るやうにしつゝ、女は言ふ。

「困つたな。それではどこへ落したんだろ。家  
の戸口の鍵だかな。」

「ぢや中へ這入れないんですか。」

「なに、家主のところまで合鍵を借りればいゝん  
だけれど。しかし困つたな。その内、こゝい  
らに落ちてでもゐたら取つといて下さいな。

ね。」

「まあこの蟲。もう灯取蟲が出るんでせうか。一  
と、女は他の事を言ひかける。

自分はぐ／＼しずかに歸つて、標本屋へ這入  
つて鍵を借りた。さうして三階の室でマツチを  
擦つて蠟燭を附ける時分には、もうあたり前の  
自分になつてゐるのを見出した。一分間の後に  
は、さつき何といふのか或酒を飲んだといふ事  
も忘れて、自分のエッセーに關する本を讀んだ。  
さうして一時を聞いて床に就く時に、バンドー  
ルの足下へ蠟燭を置いて、しばらく、まんじり

と、壁に映るその朝像の女の、何とも分かぬ大  
きな影を見詰めて眠り待つ事も、もどより毎  
日と變らなかつた。

かうして自分は常のやうに寢入つたのであつ  
たが、夜中に、ふと、目の上に何だかもや／＼  
と灯が射してゐるやうな感じを以て目がさめ  
て、寢てゐての錯覺なのかと茫とした目を開け  
ると、どうしたのだらう、本當に灯がついて、  
ぼろ／＼と物古く輝いてゐる。自分は狐にで  
もつまゝれたやうに目を見張つて、頭を上げて  
見ると、

「ほゝゝ、私よ。」といふ。自分は暗がりであ  
いと猫の目を見た時のやうにぎよ／＼とした。黒い  
本の女が来て、寢臺の足にしてゐる方角に蠟  
燭を立てて、その下に蹲んで何をかしかけてゐ  
るのであつた。

「愕いたでせう？ たうとう目附つた。大丈夫  
だと思つて蠟燭を點けたものだから。——ま、  
動いちゃいけません。あら、駄目よ。落ちてし  
まふわ。御覽なさい。」といふ。自分の這入つて  
ゐる蒲團の上がぎつしりと眞赤な花を振り撒い  
て覆はれてゐるのであつた。

「ほゝゝ、また愕いていらつしやる。雑芥子の  
花はお厭？」

女は平氣で微笑みながら、蒲團の楊の花の上  
に腰をかける。

自分は何にも言はないで息を吹いた。

「あなたはさつき月蝕があつたのを御存じない  
でせう？」

「一たいどうして、こゝへ這入つて来たんです。  
あすこは戸がかけてあつたのに。——あなたは  
私の鍵を持つてゐるな。」

「あんな厭な事をおつしやる。それならあの時  
にお返ししますわ。」

「でもあれでも持つてゐなければ這入れないぢ  
やないか。」

「そんなに平凡な事を言はれるのは厭。イツボ  
リタは十階の屋根の尖端に男の生首を隠しに上  
るぢやありませんか。繩もなしに、梯子もなし  
に。」

「さうしてこんな夜中にこの花を撒ぎに来たん  
ですか。夜中でせう？」と、一寸動くと花は  
ばた／＼と肩から落ちる。

「でもあなたは暗い人ね。月蝕の夜だとも知ら  
ないで眠つていらつしやつたあなたは日蝕のや  
うに暗い人。」

「困つた女だね。」

「私がこんなに出し抜けに來たのがお氣に障つ

て？」

「さうぢやない、私は同情した意味で言ふん  
だ。しまひには自殺でもするよ、あなたは。」

「それは今夜でもしますわ。」

「……」

「目を閉つて何をお考へなさるの？」

「自分は自殺といふ我が言葉が耳に這入つて、  
誰ひのやうに自らの心を黒く包むのを、悲し  
く見守らずにはゐられなかつた。もう永久に忘  
れるやうに自らに誓つて、さうして近頃漸く忘  
れ得てゐた兄の事を、隔らず考へ出したのであ  
る。今から思へば、今夜この女に、どれだけ自  
殺の話をされたか。何とかが毒を飲む。女が三  
階から飛ぶ。畫家が飛ぶ。さうして眞赤に碎け  
て死んだといふ。まだあつた。——そんな具體  
された事件をでも何でもない話のやうに唯聞い  
てゐたのに、今自分が言つた自殺といふ抽象の  
言葉によつてのみ、どうして自分は、自殺した  
兄の——もう忘れ盡してゐた兄の死を、誰ひの  
やうに考へ浮べたのであらう。」

「自分はかういふ事を自らに疑問しつゝ、囚は  
れた如くに黙してゐた。」

「ぢや、私は歸りますわ。」と、女は間が悪くな  
つたやうに、急にしよんぼりして俯つ向きなが

ら、子供が拗ねたやうに、指先で蒲團の上の花  
を突つ突いてゐる。

「もうお歸りなさい。」

「えゝ。と、女は怒ひにしめつた言葉になる。

「月蝕を見るために今夜起きてゐたの。——と、  
話の續きのない自分は、それがこの女に對して  
切りになりでもするやうにかう言つた。

「私ね、と、女は大分俯つ伏したまゝ間を置  
いて、

「今夜はぢつと寝ないで物を考へてゐたんです  
の。さうして……あれですか……」と言ひか  
けたが、

「もう私何にも言ふのは厭。」と、投げるやうに  
かう言つて、儼の灯影を見詰める時分のやうに、  
坐つた自分の肩を越えて立つ、バンドールの塑  
像を見守るのであつた。

「あの、女が押へてゐる壺の中には希望が這入  
つてゐるのではしたね？」

「どうですか。」

「また！」

「だつて知らないのが何と言へます。私はさう  
いふ風な事は少しも知らんのだ。たゞバンドー  
ルといふ名を知つてゐるだけです。」

「もうそれでは私は歸ります。さやうなら。」

と、女はどうしたのか、譯もなくつんとして、蠟燭を取つてずん／＼出て行くのであつた。

「何です、どうしたといふんです。」

「知りません、と、次の間へ出て行つて、こちらからは見えない、戸口の讀の壁の根に蠟燭を掛つたまま、手みながら、

「どうしてそんなにまで自分の讀んでる事を隠しす必要があるのですか。私にもうあそこにとれだけいろんな本があるか、今夜ちやんと見ました。私がうちで讀みただけの話なんか、みんなあそこにある筈に。」

「あゝさういふ事か。それで忿つたの？ けれどもあの本はね。」

「もうようござんす。見ない先から、こゝへ来る本屋の男にも聞きました。疾くに。」

「だつて、あれは死んだ兄の持つてゐたもので、自分が讀んだ本の中、アンダーラインを引いたところを、死後に人から見られるのは厭だと、いつも冗談でもなく言つてゐたから、あゝして我が手に保存されてゐても讀みはしない。讀んだところで文學の本だから自分に分る譯もない。何で自分がそれ等の本の内容を知つてゐよう。」

かういふ譯を話さうとする間も與へずに、女

は急に、  
「ほゝゝ。」と考へ直したやうに笑つて、またこちらへ這入つて来る。

「あなたは、あのバンドールは最初の女だから置いていらつしやるのですか。それとも、すべての女を憎むためですか。」

「六つかしいね、あなたの言ふ事は。たゞ何がなし置いてるだけです。好きでもなく、憎いでもなく。」

「冷たい方。あなたは冷たい方。暗い冷たい方。」と、手にした蠟燭の心のもや／＼するのを見詰めたが、

「あなたはどんな女に戀をなさるのでせう。あなたが戀をなさる目には、このバンドールの像が動き出しますわ、きつと。」

「なぜ。」

「だつて私があの中へ私の心を入れて置くのだから。」と言ひつゝ、女はほろ／＼涙を流すかと思ふと、つと板の間に蠟燭を投げ附けて、ずん／＼外へ出て行つて了つた。

自分はまだあつてに取られて、そのまゝ暗い中にちつとしてゐた。これが果して目さめた現實なのであらうか。暗がりにかうしてゐれば、何だか今のすべては、寝てゐた間に見た影の

やうにも考へられる。

けれども事實である。すべてが事實である。自分は何だか自分で自分を知らないものやうに、蒲團の上を撫でて見た。花がある。散るために吹く花のやうに、ほろ／＼しい。雛若子の花がふは／＼とある。自分は、まだ女がそこらにゐるのではないかと思ひながら、はじめて身を起して蒲團を出て、手探りに次の間へ行つて見た。

「ねえ。」と、かう言つて見る以外には、名を知らない女なのだから呼びやうもない。  
「ゐないのですか。」と言つたが返事をしない。自分はタイプルの抽斗を探つて蠟燭とマッチを出して灯を點けた。

女はゐない。何もものゝもない。もう歸つたのかしらと考へて、戸のところへ行つてハンドルを動かしたが、戸はきちんと鍵がかゝつてゐて開きはしない。自分は騙されでもしたやうに、そこに立つて暫く茫としてゐたが、と三階の窓からと言つた事がびしやりと冷水を浴びせられたやうに心を突いた。

自分は自分を忘れてつか／＼と表に臨む窓のところに行つて、カーテンをめぐつたが、何、まさかそんな事もと自分の憐れきを消し給らしつ

つ、他の三つの窓をも見た。いづれも硝子がちやんと下りてゐる。併しどうして女は下りて行つたのだらう。同時にどうしてこの室に這入り得たのだらう。——自分は再びそれを考へずにはゐられなかつた。何だか女はまだこの建物の中にあるのではあるまいかといふ気がする。けれどもこゝにはどこと言つて隠れるところもない。

自分は鏡を出して入口の戸を開けて外へ出て見た。蠟燭を傾けた拍子に暗い足下にぼたりぼたりと蠟が落ちる。夜中の上り段は、深い洞穴の口のやうにひっそりと暗く流んでゐる。女はこゝを上つて来て、下りれば下りたのだらうけれど。——併しもうどうでもいふ。

自分は引き返して、それなり床に這入つて、困つた女がゐたものだと思へつゝ、バンドールの足下に灯を消した。

自分は驚る日目をさますと、何だかさうした夜中の事がみんな寝てゐるうちに見た、空しい景ではあるまいかと疑はれた。けれども、目を開いて坐つた朝の明るみにも、やつぱり赤い花は遊園の上に散らばつてゐる。下にもばらばら散つて澤山落ちてゐる。室の片隅を見ると、かうした花を入れて来たらしい、蔓で編んだ大きな籠が、そのまゝに置かれてゐるのであつた。

自分はそれから麵麩を食べて、戸口の鍵を下して學校へ行つた。さうして、またいつものやうに何事も忘れて夕方の穴倉を出たが、やがて夕飯を食はうと心づくくと、あゝした、蠟芥子の女の事を考へ出して、もう面倒臭いから、これからはあの家へ行くのはよす事にして、ほかで食事をした。

それから三階へ歸つて来ると、机の上に何か紙切がインキ壺で押して置いてある。自分はこんな物をかうして置いて出やしない筈だつたと考へつゝ、紙の裏を見ると、おや、また來のだ、またこゝを開けて這入つて來たものらしい、さうしてこゝにあるペンを取つて書いたのであらう。

一バンドールの像の動く日のために。とフランス語で書いてある。バンドールの像が、自分の戀をする日には動くと言つた。どんな女を戀するあなただらうと言つた。その日のために。——何の事だか。その日のためにどうしたと言ふのだらう。

まあ何でもいふけれど、また今夜も來るのかしら。五月蠅い女である。今夜は言ふ。もう決してあなたとおつきあひはしたくないと言つ

てやる。——そんな女と交際ふには第一に時間と餘裕がない。もとは自分があの女の酒を買つて飲んだりしたのが悪かつたのだけれど、併しもう來させない。さうに知り合ひでもないので、さういふと叱つて歸してやる。

かう考へつゝ、着物を着換へに次の寢室へ這入つて見ると、放つた儘にして出た遊園がちやんと寝臺の上に疊まれて、昨夜の花などはすつかり籠に抱ひ入れられて一隅に置かれ、疊に一つの散らばつた花簾もなく綺麗に掃除がしてある。いろんな眞似をするものだ、自分は弄ばれてゐる様に不愉快な心持がした。

やがて自分は戸口をかけて、テーブルにかゝつて物を讀んでゐると、こつ／＼と入口の戸を叩くものがある。そうら來たと思ひつゝ、しばらく相手にしないでゐて見ると、頻りにこつこつとやる。自分はむつとした心持を押へて戸を開けた。

「どうもすみません。と小さい女が立つてゐる。

「だれだ。——お前か。」  
例の女の家に使はれてゐる小女であつた。  
「何の用事だ。」  
「いゝえね、あの唯これをお渡しして歸ればい

いのでございます。」と、何にも書いてない、洋紙の封筒を出すのを受取つて、

「よろしい。歸つて行け。」と自分は言つた。中には自分の忘れた鍵が盗入つてゐるのであつた。

「あゝ、それからね、これからは一切、もう二度といたづらをしに來てはいけなかつて、さう言つてくれ。いゝか。」

「だれにでございますか？」

「あの女にさ。」

「あら、何もいたづらをしたんぢやございませぬわ。この鍵はあなたが落していらつしやつたのを、あの方が拾つて置いてくれたんですのに。」

「それはいゝんだけど、こゝへ出て來てはいけないとさう言つてくれ。」

「さうですか。でももう私方にはいらつしやいませんのですよ。今日出ていらつしたんでございませぬ。あの方がこゝへおいでになつた事があるんですか。」

「何、別に來たといふ譯ではないけれどね。」

「でも少し變つていらつしやるのですからね。何だか氣ちがひ見たいな時がありますよ。夕方になると一時間でも二時間でも二階の外の出窓

へ出て立つてゐたりする事がありました。」

「とにかく、出て行つたつて、また歸つて來たらよくさう言つてくれ。」

「でも、歸つていらつしやりやしません。遠い遠いところへ行つて了ふんだつて言つてましたもの。」

「どこへ。」

「白い鳥ばかりゐるところへ行くんだとか言つてましたわ。」

「ふゝん」と、いつまでも厄介な女だと嘲るやうと言ふと、

「あら、本當ですわ。あの人はお金をいくらでも持つてゐるお嬢さんですもの。どこへだつて行きますわ、あなた。でも白い鳥の澤山ゐるところがどこかにあるんでせうか。」

「どうだか。——もういゝからお歸り。」と自分はいゝ、加減に追ひたてた。

「それではさやうなら。」と、何事も知らない小女は辭宜をして下り一行つた。

自分はそれで、面倒を拂つたやうにすつとした。さうして、それきりで、もう變る日からの女の事を消したやうに忘れてしまつた。それから、誰にも來て邪魔をされる事もなく、前のやうに、一切人と口を利く世話もない自分に

返る事が出來て、儼の薄暗い心に朝出ては、夕方またのそゝ歸つて來て、バンドールの足下に灯を消しては寝るのであつた。

けれどもそれから幾月か経つてから、この建物の三階の間も、すつかり標本屋の住事場に使用される事になつて、となりの事務室と共に立ち退きをしなければならなくなつた。

それは二月二十いく日といふ日と、丁度雪解のした午後であつた。自分がそこから今ゐるところへ引つ越して出るために、下へ一臺の荷車が來て、荷造りをするものが二人で以て、すつかりの物を縛り上げた。自分も一緒に手助けをしたが、何より兄の形見に遺したバンドールの像の壊れるのを怖れたので、自分で標本屋から箱を貰つて來て、銀屑を詰めて入れることにした。さうして、いざ收めようとして、像を抱へて一應臺の上を下しかけると、何かかさとして、像を抱へたものがあつた。

併し別に何もそこにあつた譯でもないから、何の氣もなしに像を箱に入れて一息してゐると、寝臺の頭の臺の下に、金の丸くなつたやうなものが落ちてゐる。拾つて見るとそれは指輪であつた。どうしてこんなものがと、いろ／＼考へて見たけれど、どうしても像の足の下に隠

れてゐたのであるより外には、これが今日まで目に見えずにこゝらにあり得る譯がなかつた。併し、それにしても、これだけのものが下に挿まつて、像が安定な位置で臺の上に載つてゐる譯もない。自分は訝しみながら、鋸屑を掘つて像を取り出して、足の下に着いてゐる圓板の裏を見た。すると、そこに穴が開いてゐる。後からナイフでぐりぐり掘り穿めた穴である。指輪を入れて見たら、丁度きつしり這入るだけ掘つたのだと思はれた。

二人の足は、

「さあ濟んだ。第一この寢床から積まう。」と言ひつゝこちへ這入つて來かけた。

自分は少らく人足等の這入るのを止めて、像をその儘にしたまゝ、ちつとそこに突つ立つて考へてゐた。

一ハンドールの像の動く目のために。一

話はこれだけの事である。

その指輪は今でも自分のそこらの箱の中に収めてある筈である。返さうにも返すべき相手に會ふ事が出来ないのだから仕方がない。白い鳥のある園へ行くと言つたとかいふあの女は、どこかで園を離れず樹の蔭で、三階から飛べとかいふやうなことを言つて、自分のやうなものを

脅かしてゐるのだらうけれど、もとよりどこにあるといふ事も分らない。自分は矢つぱり例のやうに、穴倉に出入して仕事をしてゐる。平生そんな女の事などを考へ出したりする譯もない。たゞバンドールだけはいつまでも好きである。

それは足の下から指輪が落ちたつと後に、或日、兄の本の中に「メタモルフオーズ」といふ、フランス語で書いた本があつたのを、暫くついでにちと開けて見ると、それには何もアンダラインが附けてないから讀んでもいいと思つて、何の本か讀んで見たら、昔の神話の詩篇であつた。作者は紀元前四百年時代に聖海の海岸の蠻土に降臨した晩生を了へた羅馬の詩人だといふ事が、序文に書いてあつた。原文はラテンなのである。

それはどうでもいふけれど、この本を少しばかり讀んでゐる内に、ふとバンドールといふ名が見えたので、おやと思つた。自分はそこを讀んで、はじめ毎日自分の寢床に附き添うてゐる女が、どうした女であるかを知つたのである。それは造化的はじめ、諸々の生物を造るために地に下された、ジャペの子エビメテが、最後に水と土とを用ゐて人を作つたが、それに生存

の能力を授けるとて、兄のプロメテに謀つて、兄に、天の日の動く車の火を奪ませ持來らしめ、人間に火といふものを與へたので、その罪を罰するために、神の首長が、天上で一人の「女」といふものを造り、人間の最初の女としてエビメテに下し嫁せしめたのがバンドールである。バンドールは神の首長から封じた壺を授かつて下りて來た。

エビメテはいかなる事があらうともその蓋を開いてはいけなさと固く禁じてゐただけけれど、バンドールは、その中に何があるかを見たいと、遂に竊かにそれを開いて覗いた。女は愕かした。女が壺を叩くと共に、その中に封じられたる、人間の肉體を破壊するためのあらゆる害毒と、肉なる心を齧蝕するすべての罪惡とが、一度に飛び出して人間の間に瀰漫してしまつたのである。かくしてたゞ希望といふものが、バンドールが愕いて閉ぢた壺の底に、たつた一つ取り残された。だから今に人間には、僅かに希望だけはいつでもあるのだといふのである。自分は、自分の寢床の上に立つ女の意味をはじめて解して面白かつた。

それからプロメテも、弟のために火を盗ん

だ罪で、永久にコーカサス山嶺の頂上に鎖で縛りつけられて、その肝臓を禿鷹といふ鳥が啄き出して食ふに任された。不幸にも彼の肝臓は食はれる後から直ぐまた出来る。禿鷹の子孫はプロメテの生命と共にいつまでも絶えない。だからプロメテは永久に縛せられて永久に肝臓を食はれるのだと書いてあつた。

自分は相変わらずバンドールの足下に蠟燭を消して寝床に這入る、さうして希望、希望、と、時々その押へた壺の中のもの考へつゝ寝る事がある。

「バンドールの像の動く日のために。」

また引つ越してもすればこの像は動く。けれども引つ越しは面倒だから出来ればもういつまでもこゝに籠つてゐたいと思ふ。

自分はあの女が言つた、戀といふものにはまだ落ち得ない。従つて戀の印に使ひ得る例の指輪は、いつもどこかにそのまゝ納つてあるきりである。

(明治四十四年四月)

### 月夜 (六)

「それでもゐましたと、しかしね。」と、さつき

女が自分が行くにつれて、俄かに後になつて了つた事を話すと、伯母さんは笑つて、「それは月の光りのせいでせう。霧があるとそんなに見える事があるわ。いつだつたか、私も夜お二階から下を見ると、シートが一枚竿にかゝつてゐたから、下女に取入れて来いといふと、けふはシートの洗濯はしないといふのでせう。だつて出てから入れといくとさう言うて、下へ来て見ると、月の工合だつたんで笑つた事があつてよ。」と言ひつゝ、伯母さんは毎夜の附添に寝足りないで、力なさうに破れたからだを柱にもたせてゐた。

「お母さんは、まだ目をさましませんか?」  
「よくお寝つていらつしやるわ。」  
「では月のせいでせうね。」と、自分は再び先の事を考へつゝ石段に立つた。

二人が何んにも知らずにたゞかうして休息してゐる間に——その間に、母はハンケチで以て自殺して、冷たくなつて寝てゐたのである。——

その時の事は言ひたくない。母は氣が狂つてゐたのである。よくさめんと泣くのもそのためであつた。

書置はたゞ二行、鉛筆で書いてあつた。それは——白い着物を着た西洋人の女がうるさく呼ぶから附いて行く。きつと私を厭なところへつれて行くのだ。三つちやんさやうなら、——と自分の名が書いてあつた。

その書置はいまでも自分の手に残つてゐる。

(三赤婿給より)

### 午後 (一)

私はどんよりした午後の町をぶらり／＼歩いてた。

黒ずんだムードに鎖されつゝ、書くべき筋を頻りに考へ續けてゐるのだけれど、氣が附いて見れば何を考へてゐたのか分らない。どこをどう来たともなしに、汚いगत／＼の店ばかりの續く、割げたやうな町筋に這入つてゐる。

こんなものを、どんな女が賣つてどんな女がまた買ふのか、脂じみた、女の不斷着が一枚、古靴や古足袋の洗つたのを並べた店先に、小塞く下つてゐる。

金魚

町に金魚を賣る五月の、かうした青い長雨の頃になる。しみみ、おふさのことが思ひ出される。今日も外にはしとくと蜘蛛の絲のやうな小雨が降る。金魚の色ばかりを思ひ浮べても物淋しい。おふさを思へばうら悲しい。

二人はあの青山の裏町の、下二間と二階一間とだけの小さい家に住んでゐた。

はじめて世に出ず作にかゝつてゐた私は毎晩夜學へ講義に行く外は、晝はいちんち二階に籠つて一字々々に血も黒くなるやうな思ひをし、一つとところを消したり流したりばかりして、狂人のやうになつて書いてゐた。おふさはその間下でたった一人、しよんぼりと、下手な手着かたぎをして坐つてゐた。今から思へばそれも半分は思ひ出さなかつたらうけれど、おふさはその頃はしよつちうはきくしない顔ばかりして、静かであつた。私にはおふさのういふ心持も分つてゐた。おふさの心のところへ入つてゐることは母親の方へ知れてからは、絶えず手紙で以てしつこく

責められて、一人目も延びくした心持がしないらしいといふことは私も察してゐた。それでも私にあれの母親が何と言つて来ても、おふさには手紙を出さなかつた。しまひには母親は私へ當ててきまゝの事を言つて来る。そんなものはおふさには見せほしなけれど、母親からの手紙だと見れば、何が書いてあるかはおふさにも分る。そんな事で、私に對してもすまないすまないといふ念が、おふさの心を痛めてゐるといふことも分つてゐた。けれども私は書かうとする事がうまく書けないと無暗にいらいらして、そんな事に思ひやりもなく、罪もないおふさに當り散らすことが度々であつた。くさくさして下へ下りて来てもおふさがたゞ自身の目もとを伏せて、火のない火鉢の傍に坐つてしよんぼりしてゐるのを見ると、私は、おふさが、私と私の事業とに何れも同情も持たない、自分勝手のことばかりにくよくよしてゐるやう

るやうに思はれて、一人土の中にでもゐるやうな、ゐたゝまれない寂しさにいら／＼して、おふさの洗んだ銀足に髪が解れ下つてゐるのをおこつけに、ものたしなみがない、自墮落な女だと言つて八釜しく叱りつけたりした。私がかれこれ半歳も入院した後だつたので、行李の中の二人のものが一つもなくなくなつてゐるやうな貧しさも、私にひがみを起させた。或時はおふさの態度を曲解して、そんなに貧乏が辛いからなら、こんなところにゐないで出て行つてしまへと言つて、夜這くおふさを突き出さうとしたこともあつた。

その他に、いろんなことで随分無理を言つてがみ／＼叱りつけたのも、今から思へばみんな私が悪いのだけれど、その時には、一途におふさを思ふで當り散らした。それでもおふさはすべてが自身の單のやうに、どんなことをされても言はれても、たゞ黙つて慄へてゐた。時には私も、おふさをひどく叱りつけた直ぐあとで、自分が無理だつたことを悔いて、おふさが涙を隠しながら、かひ／＼しく使ひなぞに出て行つたあとに、私は先刻まで彼女が仕かけてゐた乏しい解し物が束ねてゐるのを寂しく見守りながら、自分のやうな男の妻になつて彼女の運命を、覆れと思ふ事も度々あつた。

な、ゐたゝまれない寂しさにいら／＼して、おふさの洗んだ銀足に髪が解れ下つてゐるのをおこつけに、ものたしなみがない、自墮落な女だと言つて八釜しく叱りつけたりした。私がかれこれ半歳も入院した後だつたので、行李の中の二人のものが一つもなくなくなつてゐるやうな貧しさも、私にひがみを起させた。或時はおふさの態度を曲解して、そんなに貧乏が辛いからなら、こんなところにゐないで出て行つてしまへと言つて、夜這くおふさを突き出さうとしたこともあつた。

けれどもその時分の私、遂に自分自身よりより多く憫れなものを知らなかつた。私は先の女についておふきに打ち明ける事の出来ない或深い苦痛を抱いてゐた。而もそんな中で、一行一行に血を吸ひ取られるやうな思ひをして、苦しい作を続けなければならなかつた。私はおふきを叱りつけたりした後、いきなりおふきの手を取つて、一人とめどなき涙に暮れることもあつた。私が泣けばおふきも涙を知らないなりに私のために涙ぐんだ。おふきは、自分より外にはたれ一人私かたよりにするものがないのを知つてゐた。私がどんな事をして、どのやうな事を言つても、おふきはそれが當然のことのやうに黙つて受け入れてゐた。

併し、私だつてたゞ苛々した心持ばかりで生きてゐた譯でもない。二人はやっぱり年若い夫と妻とであつた。おふきは今でも、私のために辛かつた事は忘れ盡して、たゞ、女として與へられたいろ／＼の享樂のみ考へて眠つてゐてくれるやうな氣がする。それだけ私は、彼女に對して一つも大らしい仕向けをしてやらなかつたかのやうに、おふきに與へた苦勞ばかりを消滅して、いちぢいあの女の不仕合せな命數を覆れと思ふ。何が彼女の得た享樂ぞ。物

窓に置かれた黒ずんだ鉢に、吹いて萎れた、質素な花のやうに寂しいあの女よ。

不仕合せなおふきは私の作がやう／＼出来上らうとする時分になると、或日どこがどう悪いともなくふら／＼と床についた。私が作に没つてゐた長い間のいろんな氣苦勞に疲れたのだからと私は懼れに思つて、何もくよく／＼しないで當分ちつと寝てゐて見るが、いと云つて、やさしく介抱してやつた。おふきは牛乳は腥、何は厭だと言つて、何も食べようとしない。何にも欲しくはありません、たゞかうしてぢつとしてゐさせて戴けばその内には直りませう、あなたはそのことなぞに心配をなさらないで、ついでに早く書き上げて下さいと言ひながら、無理に起き出で、私の食事の世話をしてくれたりする。或ときはもうすつかりよくなつたやうな氣がすると云つて、床を疊んでつれ／＼の細物なぞをして坐つてゐた。

それは丁度かういふ青い小雨の續く或日であつた。私は朝から二階に閉ぢ籠つて書いてゐた。外を見ると、窓のちき前の、黒ぼけた屋根に張つた蜘蛛の巣に、疎らに溜る程の小雨が、絶え間もなくじめ／＼降り頻つた。

それが、午後になつて不圖氣がつくと、いつ

の間にか、空の眞つ青い雨上りとなつて、久しぶりで、黄色い生々した日影が、窓に迫つた屋根瓦の、黒い濕り氣の上に射してゐた。

見ると、そこには、下から覗いた桐の梢の、潤ひ重なつた青葉の蔭に、雀の子が一匹、珍らしく探し當てた日向を嬉しむやうに、枝から枝に飛び移つて餘念もなく戯れてゐる。

すると下からおふきが上つて来て、雨が晴れて氣分がからりとなつたから、そこらあたりまで出で、買物をして来たいといふ。私が勢のいゝ返事をする、おふきは子供のやうな笑顔をにして下りて行つたが、それから大分経つても容易に門口の鈴の音がせぬ。もう出かけたのかしらと、息止め、匆下りて見ると、一つしかならない不斷着の帯を、着換へたネルの着物の上に結んだおふきは、小暗い三疊の鏡臺の前に俯つ伏して泣いてゐる。どうしたのかと訊けば、おふきは涙に汚れた顔を上上げて、髪が澤山抜けるから悲しいといふ。こんなに、いくらでも抜けるんですのと言ひながら、油染みた體に引つかかつた抜け毛を見せる。片方の手にも、抜けたのを溜めて持つてゐる。私は、そんな下らない事に泣く奴があるものかと、わざと作り笑ひをして言ひながら、行くなら早く行けよと囁まし

て出したけれど、さうして出て行く後ろ影を格子越しに見送つて、おふさが前と較べて、くつきりと力なげに瘦せたのを見て、それがみんな自分のした事のやうに、濟まないやうな馴れな心持がした。いつもは見馴れて何とも思はないであつたけれど、今氣がついて見ると、いかにも脆い姿になつてゐる。何を買ひに行くのだから私もそこらまで附いて行つてやらうかと思ふ。けれどもその内におふさは露路を出てしまつた。

私に再び二階へ上つたけれど、おふさが歸るまでは何だか落ちつかれなかつた。書きかけでもペンが動かないので、紙の上へ意味のない悪戯書きをしてゐる内に、いつしか、馴れたあの女の、私についての長い苦勞のあとが、考へるともなく夢へ浮べられた。

どこまで行つたものか、いつまでもおふさは歸らない。もう扉根に當る日足も段々と外方に近く、藪ばみになるのにまだ歸つて来ない。私は氣になるから表通りまで出て、傘屋の店先に立って、通りを雨方を見廻した。

すると丁度向うからおふさがとぼ／＼と歸つて来る。金魚を買つて来たらしい。硝子の入れものを糸で下げて、しよんぼりと歸つて来る。

私に二人がより早く近づき得るために、こちらからも歩いて行つた。

どこまで行つたのかと訊くと、私どうしたんですか、歸る途中で急に息が苦しくなつて歩けなくなつたものだから、どうしたらいいかと思つて、少らくあそこので休んでゐました、すみませんがこれを持って下さいませんか、と、金魚の入れものを渡すのであつた。眞つ着い苦しうな顔をしてゐる。何ならこの足で直ぐ醫者へ行つて行つて、見て貰つて来ようぢやないかと、私は氣を引き立てるやうにさう言つたが、それよりも早く家へ歸つて横になりたい、醫者へ行かなければならぬやうなら、明日にでも行けば濟む事だからと言つて、おふさはそ

れ儘一緒に家へ歸つた。

おい、大丈夫か、しつかりしろと、私は障子につかまつて上るおふさにさう言ひながら、押入から蒲團を出して敷いてやると、おふさは、おや、すみません、あなたにそんなことをして頂いてはと、そのまゝ崩れるやうに蒲團の上に伏せつたかと思ふと、不意にがぶりと敷蒲團の上に血を吐き出した。

その時私の愕きを、私は今でもたつた昨夜の事のやうに目に浮べ得る。ぢつとしてゐよ、

かまふものか蒲團ぐらゐ、もう吐きたくはないか、いゝのか、と言つたとき、自分も涙ぐんで、おふさの俯つ伏した背中を抱くやうにしてゐた。おふさはおろ／＼と泣いて、私はもうどうなつてもいいけれど、私が寢つけばあなたのお仕事かと、僅かにさう言つて、絶え入るやうに泣き崩れた。

その夜、私はぢつとおふさの枕元に坐つたまゝ、おふさが力のない目を閉ぢて、やう／＼と微かな寝息になつた着ぎめた眼りを見送つた。私は夜中過ぎまでまんじりともせずに、夜が更けると、おふさはかうして何日かの後にたうと亡くなつてしまふのではあるまいかと考へた。枕もとには、夕方おふさが買つて来た金魚が、夜つびで薬罐と共に並べ置いてあつた。

金魚の色はいつ思ひ出してもうら悲しい。おふさを思へばうら悲しい。

(明治四十四年六月)

私は古い割けた一枚の瓦を持つてゐる。それは私が、自分の家の古い倉を忘れ得ない印に、いろ／＼の自分のこと忘れられなきに、わざわざ倉の屋根へ長い梯子をかけさせて、一枚割ぎ取らせて持つて来た瓦である。

丁度秋も暮れて行く夕分であつた。その古い屋根の上に生えた草の、から／＼に萎けたのから、鳥の生毛のやうなものがふは／＼と飛つのが、そのとき、梯子の下に淋しく行んでゐた私の上を力なく落ちて、薄い黄昏の中に見えなくなつた。あの割けた倉は容易く忘れ盡されはしない。あの倉の事を考へれば、私の長い間のさま／＼の事が、にじむが如くに思ひ返される。

私は母が亡くならずにゐた日の事は何一つ知つてゐる譯もない。私にどんな母がゐて、どんなに私を育ててゐたかを記憶し得るには、餘りに早く母は亡くなつた。祖母は、私が長じてか

らでも、母の事に就いては、たうと何にも話しはくれなかつた。私が自分の幼い日を考へ出し得る限りでは、私は最早母といふものを奪はれてゐた子供であつた。それから間もなく父も亡くなつて了つた。私と小さいお文とは、昔から薄暗く古りて来たやうな、どんよりした、使はない室のいくつもある中の一つに、祖母と、それから、久しく使はれてゐる、髪の毛の少ない、何とか言つた女中と二人に傳られて、蔭にばかりゐる小鳥のやうな目を見つゝ、夕方になるとすぐ寝間着を着せられて、早く寝かし／＼させられた。

私は、表口の、桐の木が二本ある門の内側に、乏しい日向に薄べりを敷いて坐つて、狐の面なぞを被つたまま、お文を抱きかゝへた女中に、千代紙を切り抜いてもらつたりしたのを微かに記憶してゐる。さうした、外の土の上ですら、何となく、いつも古い代のやうにどんよりした家であつた。十二月から二月へかけては、その桐の木、小寒い實のがら／＼に黒ずんだの

へ、稀にも人通りのない裏町なれば、唯しと／＼と、晝も小暗い雨がよくふり續いた。さういふ季節には、さらでもの一問々々は、餘言にどんよりと薄く寒かつた。私はしば／＼、ちつと坐つたきりの祖母にあやされるのにも飽きると、中戸の格子のところへ出て、下駄の上を下りて、お文を負つて使に出て行つた女中の歸るのを待つとしもなく待ちながら、一人しよんぼりして、昨日も今日も降る雨を、ちつと見て立つ事であつたのを忘れない。外の門のくゞり戸には、鮑の貝殻が、長短の縁に釣して下げてあつて、人の出入りの開け閉めに、がら／＼と鳴るやうにしてあつた。

私は、お文が生きてゐた頃の小さい自分に關しては、こればかりの事しか考へ出せない。お文といふ名は早く亡くなつて了ふ子の名であつたのか。このたつた一人の女の子は、まだろくに立ち歩きも出来ない内に、永久に、母のゐるところへさそはれて行つたのであつた。

私はその内に、學校へあがつて、單紙の帖に、假名の文字を一つ一つ宛おぼえて来る程の年となつたけれど、祖母は私が他の子供の仲間に加はり外に出て行く事を許さなかつたゆゑ、學校から歸れば、矢つ張り小さい時と同じに、家の

中で祖母や女中と薄暗い毎日にゐる外には、友だちといふものも持たなかつた。祖母は、私が一寸土の上を下りて、指先で土を弄つたりしても、汚いと云つて直ぐに叱るのであつた。かうして、帷帳あんまり目を利かない、黙つた子供であつた私は、終日大作家にばかりゐて、しかも女の子かなぞのやうに、一間の中のみこそしてゐるやうな子供であるより外はなかつた。私がだん／＼と祖母たちの見る目から逃れて、裏の小暗い倉の中なぞに、しんめりと一人ゐる事を求めるやうになつたのも、そろ／＼この時分から徴してゐた。私はこのときには、ただ、祖母に見咎められないで、自分のしたい儘の出来るために、よく、黒ずんだ麻下を傳つては裏へ行つて、こつそりと、倉の前の塗喰の上を下りた。

そこは祖母のゐる方から見ると、丁度、いつも面戸の閉つたまゝの——私のまだ這入つて見た事のない——とある一間の裏になつてゐて、雑喰から倉の石段の上へかけて、書でも夕方のやうにどんよりしてゐた。こゝへ来れば、何をしてでも祖母には見えない。美足で下りても見るものはない。下りて左へ這入ると、倉の側面と、二階建になつた障りの裏麻敷の壁との間に、一

間位の幅の空いた地面が、向うの角まで深まつてゐる。その突き當りが、裏へ出るくゞり戸になつてゐたけれど、その戸は釘閉けにされてゐて、杓かけたなりに開かなかつた。裏へは他の方から行くのであつた。裏には無花果の木などが澤山植つてゐるのだつたが、いつもは、あちらの通ひ口も閉ぢたきり、誰も一寸も行かなかつた。

私はかうした倉の脇の、どんよりした物蔭にこゝんで、一人土なぞをいぢくつた。土を見る時、雲の剛まつた空が、二つの高い壁に狭く圍切られて見える。足もとの土の中には、割けた葉螺の喰ひ殻がごろ／＼埋まつてゐた。私は小さい手に古釘なぞを持つて、その貝殻をいくつも掘り出して、水を入れて井べたり、古けた壁の裡の石の下に、蟻の穴の開いてゐるのを見出して、土を振りかけて閉ぎ／＼しても、直ぐに蒸れり出てちら／＼走る蟻をなぶりなぞして、一人こゝんでゐるのが好きだつた。

すると、私があるものだから、女中がのこの探しに来る。廊下の端まで来て呼び探してゐるのを、ちつと隠れて立つて、壁の上皮の割げたところを爪でぼじつて、赤土の跡をほろりほろり落しながら、わざと黙つてゐると、女中

はこゝにはゐないものと欺されて引き返して行く。私はさうして罷きながら、もう、いつまでもかうやつてゐるのにも飽きると、誰も自分をこゝまで目つけに来てくれないのが、見捨てられでもしたやうにうら淋しくなつて、その内にほろ／＼涙を出しながら祖母のゐる方へ歸つて行き、半は面當にしく／＼泣いて見せる。それを祖母や女中が、どうかしたのかと氣遣つて、色々に問ひ尋ねる。私は黙つて涙を振りながら、矢つぱり泣き擲れてゐる内に、何かしら本當に物悲しくなつて来て、しまひにはひし／＼泣き入るやうな事があつた。けれども私はどうしてそのやうに泣くのか、それは自分でも分らなかつた。

このやうにして私は、涙に汚れた頬をしたまゝ、泣き疲れると、知らず／＼それなりそこへ寝入つて了ふのが癖だつた。やがて不圖目を開くと、もういつの間にかあたりはとつぷり暮れて了つてゐて、着せかけてある祖母の半纏の、襟元のほろ／＼寒さに坐り直ると、祖母も同じく、薄喰がりにぢつと坐つたまゝゐる事があつた。

「もう目がさめたかのい。」と、祖母は私の淋しい顔を見守つてゐたやうにいふ。押入の内に

は、祖母が夕方々々にじき母とお文とに供へる習ひの線香が、ぼつちり、赤い點になつて點つてゐる。そこへ下女が何處から歸つて来て、「まあま、済みませんでござんした。」と急いであかりをつけて、夜食のものを運ぶまで、私は祖母をいつまでもその暗がりに坐らせて、膝頭を私に貸してちつとしてゐさせた。私はさうして寝ころんで、障子の外の八手の木の上に、黒ずんだ倉の屋根より低く、早い夜の星が一つ、母のない私のやうに、ものさびしく消えへんに出てゐるのを、黙つて見守つてゐたいのであつた。

「さ、頭を退けておくれ。もう火を點さうに。」と祖母が言へど、「まだい〜。」と、私はいつまでも暗がりにさうしてゐさせた。

私はこの時分、夜寝る前に、好んで祖母にしてみらした話を、今でもちやんと記憶してゐる。何かなし暗い淋しい話が好きであつた。祖母はそれとは知らないで、私を悦ばすために話すのだつたらうけれど、私はそれを聞いてうら悲しくなるために話して貰ふのであつた。さういふ話を聞いてゐると、ほろ〜と涙が出る。涙を見せれば祖母が知る故、私は隠して涙を

拭き〜聞くのであつた。女中は次の間に坐つて解しものなぞをする。その手元へあかりを送るために、間の襖のところに置いて、こちらに遠い行燈は、燈心挿へのお狐さんの影を大きくぼんやりひろげて映して、及ぶ灯は暗かつた。私は祖母がする話は一寸した何でもない事でも直ぐさびしかつた。

その頃女中がよく歌つてくれた歌のいくさりをも、私はまだ忘れないのである。

「お萬来い〜おいろをつれて、おいろ来たつて遣るもな無いが。」といふ歌を、その髪の毛の少ない女中は、私をつれて外の町筋を行くときなどに、小さい聲で歌つて聞かせた。そんな歌だつて、祖母が、もう私が目を閉つたから寝たのだと思つて、あちらへ行つた後に、一人まんじりして考へれば、

「状の上書讀んでくれ、おいろはゐらないと書いてある。おいろは死んだと書いてある。」といふ文句なぞの、状の上書といふのが何の事だかも分らないなりに考へれば、何でも淋しかつた。

私は今でもさう言つたやうに、何でもない事が薄ら淋しく考へ入られるやうな、しんめりした自分を見る日が時々ある。さういふ日には、

目に入るものが、何でも、私と同じ灰色の心持を抱いて、しつとりと私の考へる通りを考へてゐるやうに見えて、どのやうなものでも、ちつと見守つてゐないではゐられない。見るものが一つ〜何とはなしに淋しく戀しい。私がひとり出て行く夕方なぞに、やはりとぼ〜と私の前を行く人があれば、その人が違ふ方へ曲つて見えなくなると、何だか私が思ひ護つてゐてやらなければならぬ人のやうに、その人に就いて見たものを考へ入りつゝ行く事などがよくある。履いてゐた下駄、肩の形、提げてゐたものの色合なぞを考へて行く。その行く手に貸家の札があればそれがまた何とはなしに戀しい。

その文字が下手な文字ならそれが戀しい。鳥籠に鳥がゐれば、行んで見る。貧しい魚屋の店先に、小魚が乏しく并んでゐても立ち止つて見る。さうして何となく淋しく物戀しい。

私は時々のかういふ心持の直ぐ裏には、小さい時に、さきに言つたあの女中や祖母と、ひつそり暮してゐた日夜の自分が、直ぐに續いてゐるやうに思はれる。

二

けれども、最早それは何れも久しい昔の事と

なつた。何だか、さういふ頃の自分といふものは、それが長じてかうした今の自分になつてゐるのだと言ふよりも、その頃の自分は何れの日までもその儘に——別に小さい自分といふものを——隔つた年代の向うに薄暗く納つて置いてゐるやうな気がするのである。

私はそれから段々に十ばかりになつて三千代がたま／＼家へ託されて来る迄は、このやうにしてどんよりした日へのみ生きてゐたやうな、弱々しい小さいものの如くに、たつた一人の祖母と、さつきの髪のない女中とに傳られて、灰色な晝と夜との下に生ひ立つて来た。

私は、三千代がどんなにして家へ伴れられて来たかを記憶してゐない。私の忘れれる事の出来ない女となるべきものが、いつの何月から私と同じ祖母の膝下に置かれるやうになつたのだつたか、それもはつきり考へ出せない。私が三千代との間に就いて考へ得る最初の記憶は、たゞ彼女に對して、小さい自分のムードだけである。二人は互に長じて後の、二人が落ち入るべき約束を考へ得る筈もなく、たとへば同じ一つの血筋に、仄暗い小さい鳥と、色のある異つた小鳥とが、何の續きもなく入れられてゐてもしたやうに、祖母といふ一つの壺の水と解を、

別々の態度に食べてゐたやうな二人であつた。私は三千代を何となく好かなかつた。三千代は髪の色がく／＼しい、しつとりした黒い目をした子の癖に、何うしてか、何をするのにも容易くは私の言ふ事に従はなかつた。

三千代は私よりも二つ年上の子であつた。私が、どういふ譯で伯母が三千代を私の祖母の手に託したのだつたかを知つたのは、ずつと後に、三千代が最早一人の女になつてからの事である。小さい間には、もとよりそんな事を詮索する譯もない。祖母はこの女の子を受取つて、何と言つて私に話したものだつたか、それは私の記憶にない。

私は三千代が未だ學校から歸らなかつたりして、一人で相手もなくゐる時には、何だか三千代のある事を求めて、三千代が好きになるのだつたけれど——子供ながらも、三千代の睫毛の長い黒い目だつても何となく好きだつたけれど——二人でゐると、一寸した事にも氣に喰はない事が多かつた。

「かうするのだのに。」と私が言へど、三千代は聞かないで黙つてゐる。私は直ぐに、物が自由にならないうやうな、暗い心持になつて、背中に反けて、黙つて一人で事をする。さうしていつ

までも物を言はないのである内に、三千代はいつしかその長い睫毛に涙を溜ませて、一つところをぢつと見入つてゐる。赤い下駄の緒の跡の附いた足袋をして、斜に坐つて、ぢつと目を伏せて、一つところを見入つてゐる。さうして、いつまでも私のいふ通りをしやうともしずに黙つてゐる。

このやうにして私は、三千代が厭になると、かういふ女子が、自分の祖母によつて自分と同じに働かれてゐるといふ事に、何だか自分の分前が減ぜられて損をしてゐるやうな、忌々しい心持を見るのであつた。

私は、三千代が小悪さに、彼女のカナリヤを殺して了つた事があつた。三千代は同級の或女の家の家から貰つて来た一匹のカナリヤを——澤山に癖化した子鳥の一匹を貰つて来て——籠に入れて飼つてゐた。

それを三千代は一人で大事にして、私が貸せと言つても貸さなかつた。柱にかけてあるのを下して見せろといふだけの事をでも、鳥が怖れるから厭だと言つて、聞かなかつた。祖母にねだつても、一つゐればいゝのだと言つて、私のにするのを貰つてくれない。私は三千代の小鳥が悪かつた。

それはどういふ事からだつたか忘れしたが、或日私は、何かの事で三千代と言ひ争つて、さういふなら、お前さんは家の子ではないのだから、もう行つて了ふがいよとさげすんだ事があった。三千代はつんとしてさつさと祖母のところへ行つて、わざとそこでしく／＼泣いた。さうすれば祖母は、どうしたのか、どうして泣くのかと庇ひ置く。三千代は黙つて泣き／＼して、それで私に當て附けをするのが癖であつた。

一いゝから、こつちへおいでよ。附いておいでよ。譯をいはずに泣いては分らん。と、祖母は三千代ばかりがいゝものやうに宥めながら、何かの用事で倉の方へ出かけて行くのへ、三千代は泣き／＼くつ附いて、三千代一人の所有する祖母のやうに、私の方を見向きもしずに噴つ附いて行くのである。私は一間にたゞ一人となつて、障子の紙に小指で穴を開けたりして、息々しく淋しい目を見てゐるに、祖母は三千代ばかりを庇つて、私の事は忘れてゐるものやうに、いつまで待つても倉へ行つたのが歸つて来ない。私は欄障りな餘りに、三千代の

いつも貸してくれないカナリヤを、黙つて取り下していぢつた。しまひには手を籠に入れて、ばた／＼と傍く鳥を柔かに掴んで出して、口

を開けさせて覗いて見たりした。さうして、それを持つたまゝ、のそ／＼倉の方へ行つた。どういふ積りだつたものか、今考へては分らないけれど。

行つて見ると、祖母たちは倉の二階に上つて何かしてゐるのであつた。階下は入口の戸だけが開けてあるのみだつたので、中は暗くなつてゐる。私はかうして、三千代の見ない間に、三千代の鳥をこんな手に平に持つたりして、二人のいつまでも出て来ない戸口にうろついてゐるといふことが、三千代に對していゝ氣味なやうに思はれた。それだから、私はそれなり竊かに中へ這入つて鴛かなぞが隠れてゐるやうに、階子段の下の暗いところに、祖母たちが下りて来るまで隠れてゐた。

けれども、二人は容易に下りて来さうにもない。私一人を放つといつて、上で何をしてゐるのか。私は、人がさせる事のやうに、だれかが出てもよいと言ひに来てくれる迄は出る事も出来な

いものやうに、ぢつとその暗いところに埋もれて立ち盡してゐた。けれども誰がさう言つて来てくれよう。勝手な私はやがてそれが一人で物悲しくなつて来た、と、小悪い三千代がと／＼下りて来る。祖

母も續いて下りて来る。さうしてどちらとも私のゐるのには氣附かないで、二人で話をしながら、戸を閉めて出て行つて了ふ。祖母は布切の這入つた大きな疊紙を抱へてゐる。

戸が閉ると共に、中には暗がり私とだけが鎖される。封じられた暗さの中に、戸締りを開ける鍵穴が、小さく四角に明るく見えてゐるだけである。それが遠くにあるものやうに淋しく隔つて見えるのであつた。

出ようと思へば、内から栓を上げれば戸は開くだけけれど、かうした儘出ずにあつて、夜になつても出ずにあつて、祖母たちが何んなに私を探し廻るだらうかを試て見たい。さうして、私はいつまでも、こゝにゐるといふ事を見出されないとして、だから夜になつても出られずに、一人で封じ入れられてゐるのだといふ事にした

い。——私は自分でさういふ事に假定して、わざとゐるんな物悲しい事はかりを考へた。わく／＼と小さい動悸を打つ、柔かい小鳥は、やつぱりそのまゝ手の中に持つたなりにして。鳥はさつきから、放して欲しい口を開けて、ちき／＼と手を噛まうとする。少し指を絞めると、暗い中でも矢はり放れたいと見えてばさばさと身を藻掻く。——何故に祖母は探しに来

ない。もう考へるべき悲しい事も、いく度も同じ事を繰返して考へた。祖母たちは私がおらんくても、探さうともしないで忘れてゐるのではなにかと思ふと掛らない。私はもう飽きたから、不平な心持に戸を開けて、竈と開けて外の石段に出た。

と、手に握つてゐる鳥を見ると、ちつと目を閉つてゐる。口を突つついて見ても矢つぱり固く目を閉つてゐる。逃げないやうに両手の中で握りを緩めて見ると、ぐつたりしてちつとしてゐる。首をぐつたり俯だれて、冷たくなつて了つてゐる。私はやがて、それは鳥が死んでゐるのだと分ると、急に愕き慄うた。どうすればいいかと困つたまぎれに、自分で自分のする事を知らないで、つとその儘それを暗い倉の中へ投げ込んで、後から黒く追はれるやうに、すた／＼と居間の方へ駈けて歸つた。

私は人あらしを悪い事をしたのだから、どうしようかと気が咎めた。殺された鳥が恨んでゐると思へば清氣味が悪い。こちらへ歸つて来て、三千代や祖母のあるところへは行けないから、竈と、いつも通入らない室を抜けて、女中へ行つてゐなければ、悪い事をしたのがばつが

悪い。  
女中はそんな事は知らないで、板の間で髪を結うてゐる。米櫃の上へ、刺げた鏡を立てかけて、乏しい髪を束ねてゐる。

「何かお要りなすのですかのい。」と言ひく髪を束ねる。私は黙つてその後の壁の根に掌つて、壁行摺の壁層の貼つてある下に踵まつて、薄暗く情れてゐた。

それから何うしたか忘れたけれど、とにかく私はさういふ事をして置いて、心に咎められながらも黙つて隠してゐたのであつた。三千代はその大事な鳥がなくなつた事には氣附かないで、祖母のとこで何をかしてゐたものらしい。もうそろ／＼夕方も迫る頃を、私は竊かな罪を包んだ、後ろ暗い心持を見つゝた。一人、人通りもない門口に出て情れてゐると、そこへ三千代が出て来て、

「あの、のい。」と、私を探し求めてゐた容子で話しかける。カナリヤが何處へか逃げてつて了つたと告げるのであつた。さう言つて、三千代は泣きたさうな目元になつた。私は何とも言ひ得ずに、雨落溝に雨降れた小砂を弄りつゝ俯つ向いてゐた。あの鳥は私が何うもしたのではな

らと言はうとしても、やつぱり自分が悪いのだから言はれない。そんなことも知らぬ三千代は、暫く取りつく續きもないやうに立ち盡してゐた。その内に、

「十さんには、私のものは何れでも上げるけ、もう書間の仲を直して下さいえの。」といふ。  
「何でも欲るものを上げるから。」とさういひつゝ、隠し得ぬ涙を隠しに見せてゐる。私は黙つて涙ぐんだ。何と言へばいゝかに惑ひつゝ、知らず知らず涙ぐまずにはゐられなかつた。

それから夜寝るのにも、私は自分のした事が悔いられた。さうして、矢はりその事の忘れぬ翌の日となつた。  
私は尙だれにも隠してゐた。祖母などを見ると、何だか、もうちやんとすつかりを知つてゐて、黙つて私の自白するのを待つてゐるかのやうに心が咎めた。學校へ行けば、先生の目附が、私とした事を見抜いてゐるやうに受取れて後めたい。——私は子供であつても、悪い事をして隠してゐるといふ事が、いかに心持が悪いかが足りるだけ分つた。

學校から歸ると、竈と倉を開けて這入つて、昨日の亡骸を探して見たが、どうなつて了つたものか、そこらを見廻しても、私の投げ込んで

行つたのが無いのである。ごだ／＼したものを間をまで探して見ても見附からない。——私はそれが又氣にかゝつた。

その後いく日か経つた。さうして、その内いつしかその死骸の事も暫く忘れて了つてから、或日、町はずれへ竹を取りに行くために、祖母に隠れて、倉の裡にある道具箱から、劍を出しに倉へ這入つて行つた。棚の上を探るのには足元が暗いゆゑ、ぼろけた、がた／＼の長持があるのへ上つて、蒲手の明り取りの窓を開けていて下へ下りると、その長持の側に、例のカナリヤの黄色い抜け毛が一本、ふはりと落ちてゐるのが目に附いた。

よく見ると、その提灯を入れた箱が置いてあるところには、ばら／＼と澤山落ちてゐる。その箱と、手の取れかけた古箱との間にも、毛が固まつてばらけてゐる。——鼠がしたのだ。悪い鼠が食うたのだと氣附きつ、その固まつたのを掻き出して見ると、その中から、食ひ切られたやうにぼつくり取れた片足が出て来た。長い小さい爪の附いた指を閉ぢ合はせたまゝ、かち／＼になつたのが出て来た。私は、こんな片足ばかりにされて了つた鳥を哀れに思ひ入ると共に、鼠の仕業が悪くてならなかつた。そ

れもつまり自分がした事だ、自分の罪だとさう思ふと、ひとり心持悪く自分に責められた。

私はその散らばつた鳥の毛をそれなりにして置くと、自分のした事が分つて了ふゆゑ、すっかり集めて、人の目に見えぬところへ——氣味の悪い、ちぎれた足と共に、長持の向うに落しやつて了つた。さうして、もうそれで以て鳥の事も片足も忘れて了はうとしたけれど、やはり時々思ひ出すと、祖母の前に出てゐる氣が咎めた。

### 三

私はまた或日、無理な事を言つて、三千代を泣かせた事があつた。三千代は泣き／＼立つて行つた。祖母はそれを知つて、私を坐らせて、よそから來てゐる子だから、泣かされては情なくなる、泣き／＼裏へ行つたゆゑ、探して來て仲を直せといふ。私は自分が悪かつたのが分つてゐたから、厭々ながら探しに行つた。

倉の方だらうと言はれて行つて見ると、戸が少し開いてゐる。私は、三千代が一人でこの中へ這入つて泣いてゐるのだらうと思つて呼んで見たが、返事をしない。這入つて探したけれどゐもしない。——と、薄暗く千んでゐた私は

不圖またいつかの鳥の足の事が思ひ出された。まだあれが長持の向うに落ちてゐるのかと思ふと氣にかゝる。

すると、外の窓の下で、女中が三千代さまに何とかだと言つてゐるのが聞える。三千代がそこにあるのらしい。女中と二人で、そんな、いつもだれも行く事のない裏口へ行つて何をしてゐるのだらうと、長持の上へ上つて、窓を開けて覗いて見ると、自分の耳の迷ひだつたのか、裏にはだれもゐはしない。開けた窓の金網に、蜘蛛が子袋を喰つ附けてゐる。見下す下は、もとは祖母が慰みに、鶏豆やしんぎくなどを作つてゐた、小さい、町中ながらの虫になつてゐたのだつたけれど、今ではその儘に放棄つてあるのだから、土も掘れ返つたなりにかち／＼に固まつて、ぐちゃ／＼に五月の草が生え延びてゐる。倉向の堀際に並び植つた無花果の木や、窓に近しい梨の木などは、さうした、廢れた裏に、諳しかけてくれるものもないやうな容子をして、淋しげに青い着物を揃へてゐる。無花果の木の下面にも、撥にも、單の、白い、ぼろ／＼しい覆盆子の花がちらほら咲いてゐる。麥のやうな穂の出る草も延びてゐる。

と、三千代がとぼ／＼と、向うの無花果の

木のところに出て来た。もう鳥のぬい跡の空籠を提げて、一つ一つの雀籠子の花を摘み取つては、附いてゐる青い葉と共に籠の中に充たし充たししつゝ、一人でしょんぼりと遊んでゐる。一人だから、何一つ口を利くでもなく、私に泣かされた後の心持を淋しく包んだやうにして、ひとつく、ほろくしい花を摘んで行くのである。

私はちつと窓に手を入れて、長持の上に小暗く立つたまゝ——三千代が一人だとほりくしてゐるのを見守つた。ちつと立つて見てゐるのに、三千代はその黒いしんめりした目をつけて私の方を見ようとしな。私のあるのにさへ気が附かない。——私はそれが、三千代が私を相手にしてくれない印のやうに淋しくなつた。さうして矢つぱり三千代の籠に白い花の充たされるのを黙つて見守つてゐた。

かういふ事を續々に考へ出せば眼りもない。二人はこんなにして、一人がゐなければ一人が探し求めして、互に無くしては足りない二人だつたのだけれど、私は何だか、三千代が、何かに頼りしよとすゝさうして、くれなひの事があるのが小恐ろしかつた。祖母が三千代々々と言つて、計に縁を絶せたり、祖母の要る物を

取つて來させたりして、すべてに究ひ守るやうにするのを見ると、自分の祖母が三千代によつて奪はれてゐるやうな気がして、それを心附かないでゐるやうに見える祖母が恨めしい事さへあつた。

しかし争ひは一日の内に幾度も直つて、また二人でこそくと、どんよりした部屋々々に移り歩いて、大抵毎日同じ仕度をして遊びつゝ夜になる。さうして二人とも祖母の寝るところで、小さい寢息を并べて寝る。私は三千代が、私より早く、長い睫を閉つて寝るのを目に見つ、その日自分の悪かつた事を考へ返すと、もう一度目を開けさせて、何をか——私を悪んではゐないといふ印に、何をか言つて後に寝入つて欲しいやうな氣のする事もよくあつた。

さういふ時には私は三千代が好きだつた。それなのに、三千代は、よく私のしようといふ適りになつてくれない事が多いゆゑ、三千代の方では私を好いてはゐないのかも分らないと思つた。——そんなことを考へながら、私もいつしか眠くなつて、最早、一分前には何を考へてゐたかをも忘れて眠りに入る。——私は今でも、さうした自分の子供ながらのムードを作り浮べる事が出来る。

その内に、私たちの履く下駄も、古いもの納つて置かれてゐるのと載れば大きな下駄になり、前には、汚れるからと祖母に言はれ言はれしてゐた着物もいつしか洗ひ割けて悪くなつて、寝間着に着せられたりなどしつゝ、二人は段々に祖母の手で大きくなつて行つた。女中が包みを提げて二人に附いて、町中のそれながら、白湯の木の蔭の多い學校への行き歸りをしてゐたのも、いつしか一人で銘々に出て行くやうになつた。三千代は私がまだ尋常科にゐる間に、女ばかりを集めた、上の學校へ移つた。

二人を守り立てた、例の髪毛の少ない下女は、もうこの頃には家を下つてほかの何とか言つたのが來てゐた。先の女中はいつ辭たのだつたか記憶えてゐないけれど、それが家から下つた日は、まだ暑さの取れない、九月かなどの或日の午後で、日影のかん／＼と漲つてゐる中に、赤蜻蛉の群の、日高魚の亂れ走る水の中のやうに、ちら／＼と、込み合つて飛びちがふ門口に、私と三千代と二人で出て、女中が行李と共に乗つて行くための車を得べく、通りかゝるのを見張つてゐてやつたのが日に残つてゐる。その女中が家を下つて行くのだといふ事を、その前の

夜には、私と三千代とはまだ言はずに隠して、常の夜のやうに、解しもの拔糸を盆に集めて、障の上で一々々々繋ぎ／＼してゐたのも目に附いてゐる。この女中は私たちをよくしてくれ、祖母にも大事にされてゐた。

一十さまは、もう幾日寝たら幾つ／＼におなりなすぞのい。まあ／＼大きい十さまにおなりなしたことい。と、小さくから附いてゐた私の生長を待ち計るのが常であつた。

さう言はれてゐた私も、この女中の事をも大分昔の事として考へ返す程に長じた。さうして十四の四月から中学校に這入つた。二つちがひの三千代は、學校は高等科だけで下つて、それからはお針のみに通うてゐた、それは、祖母が女には學校はその位で十分で、大勢の女の集りの中へ久しく交つてゐる内には、女が女らしくなくなつて來るといふ考へだつたからである。祖母は、女といふものは、何んな事に出くはしても、たゞ素直に自分が慍へること、する事に控へ目といふこと、行儀たしなみといふ事が女の印だといふこと、小さい事にも儉約しい事、目下の者に情をかけて使ふこと、——かういふ總てのきつちりした女になる癖を附けるのと、お針の業を修めるのが何よりも大切だの

に學校では、たゞ本を読む事だけしか教へては貰へないのだからと、三千代によく言ひ聞かせて、それきり學校へはやらせなかつた。三千代の交際してゐた或ものは、上の女學校へ這入つて、東髪に袴をつけて、靴をはいてゐるのを、私は學校の往き歸りによく見掛ける事があつたけれど、三千代は祖母のいふ通りになるべき約束に生れた女のやうに、素直な髪と、女らしい帯に、表附の下駄を履いて、下女に送られて、亡くなつた家の母の知合の、つましい几帳面な小母さんのところへお針だけを教はりに行き、午後歸つて來ると、學校などへは行つた事のないものと同じに、女中と二人で、食事の事や、女のすべきその日／＼の用事をした。それから十八にもなると、もうそろ／＼仕馴れて置かなければならないとして、祖母は帳面を綴ぢさせて、日々の家計を任して書き附けさせた。夜になると、三千代はいつも、針箱の抽斗から赤い糸で綴ぢたその帳面を出して、あかりの下で、晝間買つたものなぞを女中と相談して記し附けるのが毎日であつた。私は學課に飽きると、そんなところへぶら／＼出かけて行つて覗いて見たりした。すると、

「まあ厭です、十さん。男はこんな女にする事を見るものぢやありませんに。あつちへ行つていらつしやいよのい。」と三千代は笑ひつゝ言ふのであつた。

一では見ないからいゝに。と、そこへごろりと横に寝そべつた、私は三千代の物尺を取つて、針山の針の頭を叩いて順繰りに一つ／＼引つ込ませたりしながら、もう、追つつけほろ／＼寒くなるべき時候の夜を、外の床の下で、古縁を引くやうに、かすれ／＼に鳴くこぼろぎを、聞くともなく聞き入りつゝ、人のゐる一間の火影を懸ひて、容易に自分の室へ立つて行かうともしなかつた。私はさういふ心持を今でもよく記憶えてゐる。私が、する事がつかへて長く起きてゐる晩には、いつも寝る時刻が來ると、

「十さん、まだお寝みなさらないの？」と、三千代は襖の外に來て物を言ひかけて妨げるのを怖れるやうにいふのであつた。三千代はいつでも私の床を取つといつてくれて、女中も寝させて、それから私が寝るまでは、中の間にぼつ／＼一人坐つて、燈火を相手に針仕事をしてゐるのである。風邪を引いて鼻をつまらせたりしてゐても、さうしていつ迄でも待ち坐つて、私が床に這入つた後に、晝の着物をちやんと疊んでくれて、金縛りに這入つた手廻を持つてもう一度方々

の戸締りを見て廻つて、それからなければ寝に就かない。女はそのやうにするものだ」と祖母に言はれてゐるのであつた。

三千代は次の間に祖母と並んで寝るのだった。すべてを片附けた後に、やう／＼人の締りに床に這入るべく、する／＼と帯を解く布擦を、私に床の中で横越しに聞きながら、三千代が祖母のいふまゝに、素直に、女のする事を何から何まで一々してゐるのが、元々この家で生れた女でないだけに、何だかいぢらしいやうな、彼女のために小淋しいやうな氣のする事が、冬の夜などによくあつた。

四

男の子が男になる前に、女は早く女になる。十六といへどまだ子供に過ぎなかつた私は、何かにつけて三千代にたよつてゐた。母に黙して求むべき或町の、祖母からは得足りない部分をも、暗に三千代によつて與へられてゐたのであつた。私は何事をも三千代に頼り、誇り、事のすべてを彼女に向つて誇り、厭な辛い事も彼女の瞞つた事や、不平をぶつて、祖母には決してある、彼女の理解の中に生きた。

んでぶら／＼してゐる事があつた。さういふ日には、何とてする事もなく、どんよりした家中にあるゆゑ、ひとりでに物暗い重たい心持になり易かつた。

「十さん、来て御覽なさい。今時分に畑がぬますぞい。あの石の下を御覽なさい。一匹づつと棲つてしませうがの。」と、三千代は障子を開けて私を呼らせようとした。

「私は子供の時にはあそこにかうなつてる石が、何かの影のやうに見えてゐましたのい。大きな平たい石ですぞい」と、こゝろな事を語る三千代は、つゝましく前髪に櫛を入れたりしながら、ぢつと一つところを見てゐるのが癖であつた。

すると、  
「三千代々々々」と祖母が呼ぶ。お針へ出て行かなければならぬのである。

私ははたらく下駄の上へ下りて、一人で裏口の方をのそ／＼した。薄ら寒く曇つてゐる日なぞに、板目しぎし／＼に古りた物置の戸の前には、板汁桶が置いてあつて、消毒の切れの浮んでゐる水が、ちよび／＼入物に受けられてゐるのを見て、手んだり、木戸を開けてこぼ／＼裏へ出て

試たりする心持に、三千代の留守に一人ゐるもの足りない私には薄らさびしかつた。倉の後へ行つて見ると、いつか子供の時に、その日向に立つて、古れた壁に寫した、儼い自分の影法師を、三千代に釘で描かせた跡が、またありありと残つてゐた。冬ざれのその裏の黒木には、よ／＼着を知らぬ小鳥が來てゐる事があつた。

私は暗い一冬を病み通して、長い間床に就いた。その間の事にはいろ／＼忘れられない事もある。今著しく回想に浮ぶのは、その時分に私が飼つてゐた犬である。

それは或日門口から迷ひ込んで來た、黒い子犬である。私は女中に言ひつけて、中庭の縁側の下へ空箱で寝どころを拵へさせて、紙でつないで置かせた。

小犬は下に這入つてゐても、私が障子を開けて呼びかけると、くん／＼言ひながら石の上に出て來る。それからのその／＼下へ下りて、向うへ走り出る。紙の長さ許さな／＼を、もつと出よう／＼と徒らに苛ちながら、方角を變へては走り出て寝たところから、私はそれを見て、重たい時間の單調を紛らせた。それがそこらに食物を糞をはら／＼撒らかすのを、女中に驚か

うに一々掃除をした。まだ生れて間もない子犬だつたので、夜になると頻りにく〜鳴き続ける。三千代は夜中に兩戸を開けてはすかしに出た。

祖母は厭だから遣がして下へと言ふ。けれども晝間になつて、私を人見知りして、罪もなく寄りつく容子を見れば、さうした、行きどころもない小さいものを放出すのも非度いから、矢つぱりその儘に庇つて置いた。すると夜はまたく〜鳴いて眠りを妨げたので祖母から厭がられる。その内には馴れて鳴かなくなるからと言譯をしてゐる内に、或日小犬はどうしてか、小屋の口に括り附けられた紐ばかりを遣して、何處かへなくなつて了つた。

私は、それに氣附いた三千代が、衰へ眠つてゐる私を起して、自分がした罪のやうにおどおど私に告げたことや、もしか夜は歸つて寝てゐはしまいかと、手燭を附けて、寝がけにもう一度探してゐる氣色を聞きながら、うと〜してゐた夜半の自分を、今でも目に見るやうに考へ返し得る。夜毎に祖母に氣を置いて、私のために、鳴く犬を宥め〜した三千代の、寝間着の上にはうすら寒く結んだ、小帯の色も目に浮んで来る。

このやうな病間の出来事などもあつて、私は暗い長い冬の明けのを待つた。

冬が明けると私は十七になつた。その三月に這入つてから、やつと久しい床を出る事が出来た、私は全快後のリフレッシュされたす〜しい目に、裏の花床にさいてゐる、大人しい、質素なふだん草の花を見ては、もく〜とむむ日向を嬉しんだ。例の無花果の木のある裏口を、三千代が冬の内に女中に手を入れさせて、もとの畠だつた一區切へ、花の種を蒔いたのであつた。ふだん草の外にどんな花がさくのか、西洋豆とかいふものと、赤い花のさく、鑼芥子とが、やがてその花になるべく生えてゐた。それを見入つてこゝんでゐると、何處でもなく、ち〜といふ小川が、黄色い柔かい日影の深みに、わが考への中で、のやうに聞えた。

「い〜天氣ですぞのい。」と、三千代が麗らかに言ひつゝ出て来る。三千代はもうお針の方もさがつて、家にはかりあるいつからかを、かうして時々裏口へ出て見たりする外には、祖母の仕附けてゐる女として、どこへ出て行く事もないのであつた。

「まあ一心に見てゐなすこと。」と言ひながら、私のこゝんでゐる側へ来て、私の見入つてゐる

花を見ては、色を誇らない、單純なふだん草は、母の乳を吸ひつゝ眠る心持に、程かな日影の中に吸ひ浸りつゝ咲いてゐる。土の上には二人の影が斜に寫つてゐる。

やがて私は、

「長い髪の毛が。」と、獨りごとのやうにさう言つて、花床の上から一筋の髪の毛を掴み上げ

る。

「こんなに長い髪。…あなたの髪だぞい。」

「はんに。と三千代は笑つて、鬢に手をあてて後れ毛を搔く。

「私は爪が延びたね——こんなだ。」

「まあ。後で切つて上げませう。」

「わたしは自分の爪が切れないのい。」

「こちらの方がでせう？」

「何だかこつちの手では鎌が使へないもの。あなたは自分で切れる？」

「え。自分でしなけりやあなた。—おや、蜂がゐますぞい。」

「もう行つて了つた。そつちへ行つた。後。」

「あれ、もう屋根まで飛んで行きましたぞのい。あしこに巢があるんでせうぞのい。」と、三千代は例の癖で、長い睫毛をして一つとところをちつと見續ける。二人は男と女とであれど、一つ家

に住めば、このやうなたわいもない事を話しながら、何の不平も求めもなく、たゞ、久しぶりに返つた、三月の目を癒しむのであつた。

私はかうして體も元に復して、學校へも出られるやうになつたけれど、相變らず人と往來する事はしなかつた。私の學校の生徒は、何の必要があつてか、大抵が點頭までしかない着物を着て、申し合はせたやうに、汚れた手拭を帯に釣し、塵埃だらけの足をして、わざと力んで肩を張つて、ぞろり／＼作れだつて歩く。そんな連中と交際つて、どさ／＼家へ上り込まれたりしては厭である。彼等の多くは、寄ると障ると厭な話をする。教室へ這入れば洋刀で机へ字を撃つたり、撃パンを買つて来て授業中に食つたりして、ろくに講義を聞きもしないで置きながら、何をでも解らない／＼。と教師が悪いのかやうにぶつ／＼いふ。「一たい、けるとかかれとかいふやうな文法なんかを教はると何ういふ堪能があるのですか。「我々男子たるものがこんなぐ／＼した文章を読む必要があるでせうか。」といふやうな質問を發して國語の教員をいぢめるものなどがある。殊よくやうな操縦だつてである。さうして置いて、一家の規律を崩すのだと言ふので、あしこの事を目つけ出

しては下級生を扱ひ附けるのであつた。生徒の大部分は土の中で生れたのが下宿して出て來てゐるのである。品位ある家の子弟でも、さうした大勢の力に依つて、彼等に從つて動いてゐる。教員にもろくなのがゐない。校長は一室に引つ込んでばかりゐる。生徒等はこゝの人の目動だけで小さくなつてゐるものだから、校長にそれに欺されて、自分の虚信で何事もうまく行つてる積りでゐる。

私は學校へ行くのがたゞの机までが嫌にさはつた。それだから自分の調べるだけのものは調べ、學校ではさつさと了解して、自分一人で物の目ざはりのない處にあるために、急いで家へ歸つて來た。下種な人間たちが私を降け物にしてゐてくれるのが却つて、幸であつた。彼等は私が本にはかり溜り溜いてゐるから、それで連せて洗んでゐるものやうに誤解して、藪でいろんな悪口を言つてゐる。何だつて構はない。私はいつも口を閉ぢて、黙つて級に交つてゐた。

私はまだこれから先何になればよいのか自分にも分つてゐなかつた。けれども、とにかく自分の性質に投合するやうな仲間を得ないために、いつも一人で家にはかりゐて、自分の好きな

ものでも讀む外には仕方もない。私は分らないなりに、出來ただけ簡易な西洋の物語などを、辭書を引き、讀んだ。飽きて來ると、裏口へ出れば、小さくとも、寸むに足りる木の蔭があつた。私は大工のところを板を切らせて來て、倉の後の桐の木の下に、簡單な、形ばかりのベンチを拵へて、そこで物を讀んだりした。

### 五

それから一月二月たつと、遂に戀芥子も咲いたけれど、これは能く落ちるために咲く花のやうに、慌しく散り過ぎた。さうして間もなくしめ／＼しい雨續きとなつて、裏には何の色彩もなくなつた。その久しい雨が舞ると、いらいら暑い毎日となつて、再び冷たい冬が戀ひられた。戀ひられた冬は、もうそれを求めぬ頃になつて、日々／＼暗い雲を着て廻つて來た。

私はこの冬には、不圖して、小さい頃の日とは違つた、或喧わが影を見る程になつた。どうした事からか分らないけれど、私は自分に物の考へが出來て來るにつれて、一晩半後の日が萎つたやうな變化が來て、或物に不足な自己を見出すやうになつた。人間といふものは、自分

のすつかりの性質に——自己の性質の求める、一々言ひ表はす事の出来ない刻々の欲求を、足し充たしてくれるものを得る事は出来ないものかといふ事が、一人で考へられた。どうしてかといふ事は言へないけれど、自己といふものの形が出来かけて来た私は、淋しいとそんな事を考へるやうになつた。何か私は欲しいものがあつた。何だとも分らない物足りなさが感じられた。

私はどうした續きからか、一人門口などに立つて、考へるともなく自分の沈んだ性質などを淋しく考へた。目に入るものは、悉くほろゝ、寒く、灰色に冬ざれてゐる。私が、この陰鬱な空の下に淋しく立つて何を考へてゐるかを了解するものは、自分一人しかないと思ふと物足りない。祖母には、もう大きくなつた私を解すべき理解はない。祖母としては不足のない、しつとりとした祖母だけれど、かうした私の心持の前には、さういふ祖母としてだけでは物足りない。私はもつと何か、祖母に缺けてゐる或物を欲してゐる。かういふ時に母といふものが要るのではないかと思つて見ても、母のない私には何がなる。

と、急に風が出た。門口の雨樋の腐れたものが

がた／＼と鳴ると思ふ間に土塵埃が向うから茫々と吹いて来る。

私は急いで門を這入つて、のそ／＼家へ上つた。三千代はそこらのものを片付けて、絲の解れ屑などを拾つて掃出してゐた。それから方々の雨戸を入れるために、どんよりした一間々々に這入つて行く。しつとりと立居する女ではあるけれど、黙つて彼女を手傳つて、引窓の綱を手繰つたりする私とは、別々の事を考へてゐるやうに向うへ行く。少くとも、私の包んでゐる心持は分りはない。淋しいといへば何となく淋しい女に生れてゐるのに、その淋しい女なる自身には氣附かぬものやうに、目元に

かゝる妻の毛を、女らしく掻上げつゝ、  
「明日もまた暗い天氣でせうぞのい。と、しまひにこちらの戸袋の雨戸を繰る。私は何をか言ひたいやうな心持になつた。何を言はうといふ事は分らないけれど、何か言ひたい。自分の何とはなく物足りぬ心持を充たすやうに、何事をか了解させたいやうな氣持がするのであつた。

かうして私は一室の夜に一人籠る。祖母は小早に寝了つて、あちらには三千代と女中とだけ、こつそりと固まつて、かじかむ手を火鉢

にかざしつゝ、切れ／＼の寒い話を小さく私語いてゐる。私は物を讀むにも飽きて、壁にこゝまり寫る自分の影を見守りながら、誰も私の物足りない心持を知つてくれないのが淋しくもどかしい。三千代が、何をか話して、つゝましく笑つてゐるのが聞える。それが謔もなく私を淋しがらせる。何だか私を同情もし了解もしてくる事の出来ない——しようとしてもしてくれない印のやうに小淋しい。

やがて三千代は、  
「もう炬燵を入れたいても可うござんすかい。」と、例のやうに訊きに來る。寝る前に、這入る蒲團を暖めて置いてくれるのである。私の返事が鈍いゆゑ、  
「まだ勉強をおしなすの？ まあ火が乏しくなつてゐますのに。と、火鉢に炭をついでくれて、

「何だか、この部屋はすう／＼するやうですぞのい。と、私を見る目を伏せるやうにしてさう言つて、唐紙を閉めて出て行くのであつた。かういふ物淋しい夜には、もつと私のところにお

て、火鉢を圍んで話してゐてもいゝのに、三千代は女になつてからは、私とは違つた事を考へてでもゐるやうに、元ほどしつとりと私の側に

は居附いてゐない。

「もう寝るんだ」とて、私は床に這入る。

一十さん 忘れなさらぬ内に、炬燵を出して寝なさらんと、夜中に火が消えると風邪を引きますけのい。と言ひつゝ、三千代は蒲團の櫛を叩きに来る。さうして唐紙の向うで、まだ女中を相手に何をか讀んで聞かせたりして起きてゐる。私にはそれが好ましいやうな気がした。分りもしない女中に物を讀んで聞かせて何が面白いだらう、女は馬鹿げたものだといふやうな気がして厭になる。

私は物足りなかつた。何が欲しいのだから分らないけれど、恰も自分の周圍のものが何をとも興へてくれないで澄してゐるやうに物足りない。私は仕方なしに、その日讀んだ物語の中に、出て来る女のことなどを考へ返しつゝ、段々眠りに入るやうに努めた。私はナソーといふ古い人の綴つた、神と、早い代の戀のさまん、の話を書いた本を得て、毎日字引を繰つてゐるのであつた。

かうして暗い冬は毎日に寒くなつて行つた。暗い私は、それからは、この本の話をも自分の事のやうに考へ返すが、たゞ一つの淋しい享樂であつた。小暗い、誰にもあつたところに一人

ゐて、その中の話を一人淋しく考へるのが好きになつた。私が何んなものを讀んで、何んな事を考へて居るかは、もとより、私自身の外には知る者はない。誰にかその話をして聞かせて、二人でそれを楽しむ相手があるればよい、のにと求めた私は、或一章を三千代に話したけれど、三千代にはその面白さが分らないらしかつた。面白いのは戀の話だから、女の前には気が咎めて言はれない。私は一人で讀んで一人で考へるより外はなかつた。

冬も十二月から一月二月と向ふにつれて、例の暗い雨がよく降り續ける。どこへも出る事のない門口の、襦子の小障子を覗いてゐれば、そこに二本ある桐の木が、がら／＼に黒ずんだ實の淋しく落ち残つたのが、寒く濡れそぼちて、しめ／＼しい雨の足に捲かれてゐる。こゝなひだから一度も開けた事もないやうに物古く閉つた門の戸の下には、剝けた板を傳はつて濡り流みる雨水が寒さうに暗く溜つてゐる。同じ日々に伴つてゐれば、一間々々に別々の火を擁して小さくこゝんでゐる各々の間には、薄ら寒く用事を言ふ、短い對話の外には何こそ話す種もない。三千代はそれにも馴れて、不平もなささうに、祖母の炬燵の側に坐つて物を縫ふ。女中は寒い火

人に赤い冷たい指を乗つて、赤裂れに膏藥を附けながら、あちらの一間の暗さも厭はずにしようぼりしてゐる。私ばかりは何故かひし／＼と淋しかつた。

私はこの程から、どんよりと濁つた障子の色を見守りつゝ、自分の得べき女といふ事を、水に溶けて行く色を見入るやうに、ぼんやりと考へ満るやうになつた。何のためにそのやうな事を思ふのか分らないけれど、一人淋しいゆるい、つしかそれを考へ入りつゝ、夜は、何事かを私語くやうに點る灯の下に小寒く坐つた。

私の讀むナソーの本の中に、男と女とを語る話がある。ジヨブが人間と罪惡とを亡ぼし盡した大洪水の後に、たゞ二人生き残されたデューカーオンとピラとが、土と水とを以て人間を造り代へる。デューカーオンの造るものは男に、妻が作れるものは女になる。その二つには、やがて戀に撃るべき約束を附けるために、二人が半分づつ息を吹き入れて置く。かくして造られた男と女とは、互にその片方の相手を求め探して、人の代に繁き戀をするといふのである。或ものは遂に人間の間にも求め得ずして、所つて鳥となり、悲しき歌を以て啼きつゝ探す。二つ宛ひしと喰つ附いて漂ふ白い水鳥は、それ

を水の上に得たる戀である。戀を得ずして徘徊ふものを導くために、星の明りは點じられるのだけれど、星は黙してゐるゆゑ、その目印の言葉を入は讀み得ぬ。かくして悲しく探し迷ふのだと記してある。

淋しい私はこの話を考へ返す事から、いつしか竊かに自分の女といふ事を思ふ癖が附いた。そんな女を得るまでは、人はかうして淋しいのではないかと考へても見る。けれども自分の女といふものは、どこか自分の見得ぬところにゐなければならぬといふ氣がする。容易に得られる女は自分の求むべき女ではないといふ氣がする。

私はこのやうな事から、戀とは何んなものかといふ事が、ぼんやりと分つて來たやうな氣がするのであつた。さうして、自分もいつかは戀を得なければならぬと考へた。自分の戀すべき女はナソーの話の中に出てゐるやうな、嘴の赤い、悲しい歌をうたふ、水鳥のやうな女でなければならぬ。自分と共にナソーの本を讀み得る女でなければならぬ。——さういふ女がどこにゐる？ 私はさういふ價のある女を見たい事がない。どんな女を見てもつまらない女ばかりである。——けれども何處にか一人、必ず一人

は自分の戀すべきものが隠れてゐるものと考へたい。その女を見出す事が出来なければ、自分は一生女といふものは要らない。いつまでもたゞ一人ゐる。一人ゐてナソーを讀むのだ。元の本はラテンで書いてあるのだといふ。自分はどうしてもラテンの讀める人間にならなければつまらない。早く高等な學校へ這入つて、何でも讀めるやうになりたい。探したら、このやうないろんな古い代の話を書いた本が、まだいくらかもあるに相違ない。

私はこんな事を考へながら、淋しい毎日を、暗く一間に籠つてゐた。今から考へ返すと、それこそ水に漂ふ鳥のやうな自分だつたと思ふ。それでもその時分には一心にさう考へてゐたのであつた。たゞ何うする事も出来なかつたのは、ひし／＼と自分を浸す暗い淋しきであつた。私はよく、ぢつとしてゐるところもないやうに、用もない倉の中にのそ／＼這入つて行って、二階の窓から各ざれの郊外を見つゝ、薄ら寒くぞんだりした。向うに裸になつてゐる棟の太木の間から、潮候所の古けた屋根の上から、風見の矢の列が、老い剥げたやうに凍えてゐるのが見える。雨の降らない日でも、どんよりした空はいつでも陰鬱に壓へ下つてゐる。私の

日々の淋しい心持は、丁度その陰氣な空の色に似てゐた。

## 六

三千代が私の家から實家へ歸つて行つたのはこの冬、二月の本の事であつた。

或日、漸多に家へは來た事のない伯母が、珍らしく出て來た。二十里ばかりある或町に嫁入つてゐるのもあつたけれど、何だか、母子とは言へ、祖母のところにはしげ／＼來惡かつたものらしい。その譯は、ずつと後になつて私は聞いたのである。併しさう聞いてから考へ返すと、さうして自身の生れた家へ來た伯母に對して、何も祖母が冷やかであつたとも思はれないのに、伯母が一人で氣が引けてゐたものらしく思はれる。

伯母は三千代を護へ呼んで、他人の家で話をしてもゐるやうに、久しぶりであつた二人が、冷たさうに對座してゐた。私にもとより一間に引つ込んでゐた。伯母は祖母に似た目元をした物分つた人であつた。私は、この時には、まだ何事をも知らないなりに、何だか、私が同情して上げなければならぬやうな氣のする、しをらしい伯母であつた。夜私のゐるところへ來て、

徳先のない筆はないかと訊いたのを今でも私は記憶してゐる。

「一手紙を書くのですけれども、私は先の失つたのでは字をよ書かないのだから。」と言ひつゝ、心持顔を変めて、箸で髪の中を掻きく待つてゐたの目に浮ぶ。三千代の母のやうにもない位の年輩に見える伯母であつた。

「十さん、一寸で済むのだから、ついでにこゝで書いてもいゝでせうのい？」「やあ一寸で済むをしますよ」と、伯母は靴の向うへ坐つて、巻紙を片手で持った儘さし、と書いて封をした。

「譯業が済んだらあらへ出ておいでよ、いと、伯母は立つて行く。伯母の寝床は、いつもは使はない六疊の間に取つてあつた。その押入の唐紙に貼つた更紗は、昔祖父が紅毛人から買つたのだといはれてゐた。

伯母は着物を着換へて、私と共に置敷地にあたりながら、私の胸に、祖父の代り事で、私のはじめて聞く事を何かと話してくれた。驚といふものゝまた用ゐられてゐた時代に、祖父が、青く塗つた地に西洋の赤い鳥を刺つてゐたといふ事や、まだその時代の人の見たことのない、置敷地を飾つてゐた時歌を讀んで、人から切支

丹のものばかりを持つてゐると言つて氣味を悪がられたといふやうな、小さい頃の記憶を話した續きから、伯母が學校といふものゝ出来た最初の生徒で、「羅馬洋字」「亞刺比亞洋字」と言つて算用数字を教へられたといふやうな話もして聞かされた。

三千代は次の間へ伯母の着物を疊んだ後、そのまゝ火の氣もないところに坐つたなりで、一人何か考へ込んだやうな容子をしてしよんぼりしてゐた。

「三千代はそこで何をしてゐるのい？」と、話の間へ伯母が軽くさう訊くと、

「別に何にもしてゐやしません。――何か御用でせうか」と、浮かな氣をして這入つて来た。

「まあ、十さんは、さつきから蒲團無しであつてゐたんですか。あら。――三千代、座蒲團を持つておいでよ」と、どういふ氣の毒かない、女と云つて、伯母は袂と蒲團の手柄を上げて壁爐の火を焚いた。

三千代の容子には、母が來てゐるために、いつもととは違つて、私に對して出來るだけ馴々しい容子を見せまいと努めてゐるやうなところがあつた。

「でも、一寸お布きなさい、十さん。」と、座蒲團を持つて來て出すにも、何だか他家から來てゐるものやうに、改つたやうに言ふのであつた。それが私には餘計に、いつも他の事ばかりを冷たく考へて、つましく生きゐる、淋しい女つやうに見えた。さつきから何をか考へ込んでゐるやうな後姿をして向うへ行く、何か母から厭な事を言はれたのではないかと私は考へた。

私が寝間へ這入つて目を閉ぢかける時、三千代は俯つやうに、覗いだものを片手に來た。私は、三千代の母がゐるせるか、何だか、いつものやうに三千代にかうして持つて貰ふか氣が引けるやうな氣がした。二人の間に何の關係もないのを、こんな事から何とか怪しみでもされはしまいかといふやうな、先き廻りな心配のやうな或物が、譯もなく心の底を這つて、三千代が向うへ行くまでは、落し附かれないやうな氣がするであつた。

もう行つたのだらうかと、目を閉ぢてゐると、三千代は室の片隅に洋燈を置いた儘、そこに頭を伏せてこぼまつてゐる。

「何うしたんです、三千さん。」と、變に思つた私は、人から自分たちを怪しまれてもするやうに、

不愉快さうに言ふと、三千代は一人考へ沈んだ容子を一てゐたが、やがて、黙つてそれとなく涙を駈りつゝ、急に氣が附いたやうに、

「お休みなさい。」と、あかりを小さくして、徐かに唐紙を閉めて次の間へ下つた。何か情ない事でもあるのらしい。唐紙を隔てての事ながら、冷たく寝間着を着換へたりするのにも、やつぱり何をか情なく考へて、減入つてゐるらしい。けれど、それにしても、これまでとはちがつて、同じ黙つてゐるに、私には話す事でもないと言ふやうに、私の前には冷やかに自己を鎮してゐるやうに見えるのが氣に喰はない。私は何らしたのかも訊かないで、それなり自分は自分で寝て了つた。

翌朝、朝學校へ出かけようとして、靴を履いてゐると、三千代はいつにもなく表口の間まで出て来て、ぼんやりと立つてゐる。

「何か用事？」と、私は變に考へるでもなくさう訊くと、

「いええ。」と言ひつゝ、矢つぱり立ち盡してゐるが、

「十さん、その靴下でなしに、もう一つ、穴の開かない、別なのがあるでせうがのい？」といふ。

「だつて探しても無かつたもの。」

「私が見て置きます。——あの今日は何時にお歸りなすの？」

「何故？」

「……何故といふ譯もないのですけれど。」と言ひつゝ、何を見る的もなく、しつとりした日をして、外の桐の木の方を見てゐる。何を考へてゐるでもないやうなその目元が、何となく頼りのない女のやうな容子に見える。私は昨夜の寝がけの時の心持とは違つて、何だか三千代に、昨夜は何うしてあんなに涙を隠してゐたのかといふ事を訊かないでゐては、人情がないやうな氣がしたけれど、それを言ひ出す續きもないので、そのまゝ出て行つた。

其の轍のがら／＼に下つた、表の門のくゞりを下りて、帯の背巾を斜めに見せてこままつて、何もする事もない淋しい時分の仕草のやうに、下駄箱の下駄を揃へ直してゐた。私は門を出るといつその儘引き返して、今日は家にゐたいやうな心持がしたけれど、それを慄へて學校へ向つた。どうしてさういふ心持がするのかは、自分自身にも分らなかつた。

私は途々何をか暗示されつゝあるやうな心持がした。學校へは、表通りの町へ出て、一筋

に行けば近いのだけれど、どうしてか、今頃は出来るだけ、かうした、人通りのない、赤ばしれた二月の杉垣の續く間を、一人物静かに小寒く歩いて行きたいやうな氣がするのであつた。それゆゑ私は、門の表札の字の消えたやうな家ばかりの、冬ざれの立木の覗き續いた、しつとりしたその町筋に沿うてとこ／＼行つた。

やがて私は、何か隔つてゐるものに取り絶るために行きつゝあるやうな、一種の物戀しい心持に包まれて歩いてゐる自分を見出した。さうして、その心持を見守りながら、もしや自分は戀をしてゐるのではあるまいかと不圖さう考へた。このやうなのが戀の心といふものではあるまいかと考へた。

と、私は、自ら何を考へてゐるかに氣が附いて、何だか、かういふ心持を、後で誰かが聞いてゐはしなかつたらうかと、振り返つて見たいやうに氣が咎めた。けれども、そんな事は誰だ。それは流れ行く水を見守る一部分が、全體と區別されるべき境界もないのと等しき、續きもない妄想である。今自分のやうなものが戀をしたつて何ができる。三千代を戀ひて何ができる。——私は慌てて私の考へた痕跡を探き消したがら、

その町角を曲つた。私の學校のものが三四人行く。少し行くと後からもやつて来る。何だか自分ばかりが、怠惰な、人の笑ふべき事を考へ描いて生きてゐてもするやうに氣が引ける。假りに三千代が私の一々の心持をすつかり了解する事が出来て、私が戀ひれば私をも戀ひる約束の女であるとしても、まだ私は、現實に女といふ事を考へるべき筈の私でもない。もし三千代を戀ひるとしたらどこを戀ひる。——冷やかに考へれば、私は三千代の價値を否定しずにはゐられなかつた。私の得べき女は、そんなに容易く目前にゐる筈のものではなかつた。

私はその日の學課を了へると、今朝來がけに何を考へたかは最早それなり忘れ盡して、たゞ平生のやうに家へ歸つて來た。門口を這入ると、伯母が外出の着物を着て、丁度どこかへ一人で出かけようとして、戸口を出るところであつた。

「おや、お歸りなさい。私はい、もつと逗留する積りだつたのでしたけれどいい。——あの——急にあれだものだから——急ぐ事が出来て、夕方の汽車で立たうと思ふのいい。一寸そこまで行つて來て、あとでゆつくり御挨拶をしませうよのいい。といふ。私は、

「さうですか。そんなに早く。」と言つて、靴を取つて上へると、女中が、「御隠居さま、千さまがお歸りになつたやうですぞい。」と小さく言ふのが聞える。なぜ今日に限つてそんな事を言ふのかと思ふ。私は自分の一間へ這入つて、學校の服を脱がうと思つて三千代を呼んだが返事がない。着物がどこにあるのか、三千代が出してくれなければ分らなかつた。

「歸つたかい。」と祖母が來る。

「三千代は今倉に這入つてゐるよ。まあお坐り。」と、何だかもぢ／＼して、私に話す事があつた。

「どうしたのです。」

「何のい、お前さんの知つた事ではないのだけれどのい。今日お前さんの留守に三千代はお母さんから大變に叱られたのぞ。お前さんにはまだ話さんでゐるが、あの子は今度實家の方で嫁にやる事になつたのでいい。それで一應まああちらへ作れて歸る積りで實は今度母が來たのだつたのい。——それで何だか急に今か立つ事にしたらしいのぞ。——十さんには又私が詳しい話をするけれどどの子については段々込み入つた何があつてのい、どうもいつまでも家のもの

にして置く譯にも行かんのだから。と、私へ言譯でもするやうに言ふのであつた。何の意味でそんな事を言ふのか私には分らなかつた。

何で私に對してそんな事を言ふのだらう。私は、それが何も自分の利害に關係する事でもないのだと言はぬばかりに、わざと冷淡な返事をして、着換へる着物を探しに立つた。祖母はその跡に少らくぢつと坐つた儘、しよんぼりして一つとところを見入つてゐたが、それからのそのそ復私のある方へ來て、

「着物を探すのかい」といふ。

「そこには入れてないだらう。三千代が今來るけ、一寸待つてゐなさい。」と言ひつゝ、そこにある續きを作るためのやうに、屜託を包んだやうな容了をして、衣箱の下に落ちてゐるものなぞを取り片づける。

私の開けて見た押入には、夕方に立つといふ三千代のもものが、まだ何うもしずにその儘にある。これからどうする積りなのか。さう急に立つ支度が出る積りであるのかと思ふ。けれど、人のする事だから、私が心配したつて何にもならない。

私は着物を着て自分の一間に這入つたけれど、何だか物が手に附かないやうで落ち附かな

い。用もない抽斗を開けて掃除をしたりしながら、それはくしてゐると、抽斗の物の下から、いつか三千代が、私が長坂をやる前に、ちよいちよい病院へ通つてゐる時分、控室で診察を待つてゐるところへ、女中に持つてよこさせた手紙が出て来た。私は、手でもきつて開封した切口を、家へ歸つて丁寧に缺て切つて取つて置いたものである。開けて見ると、半紙一枚へ走り書きに、

「十さん、きものが寒くはありませんか。氣にかゝりますから、これを持たせて上げます。おはりの下へ召して下さい。」

と書いてある。私は、その後忘れぬたこの手紙を読み返しつゝ、その時の事を日に浮べてゐる内に、何だか、もう去つてから久しい三千代が——どこか遠いところへ行つて了つて、それぎりいつまでも會ふ日の来ない三千代か——今かうして、これだけばかりの短い便りを寄せて来たのをでも聞いたやうに、いろ／＼昔が考へ返されるやうな心持がするのであつた。

私はそれを状袋に収めて手に持ったまゝ、この三千代が夕方にあちらへ向けて去つて了ふ

のかと思ふ。實家へ歸つてどんなところへ嫁られるのだらうか。私は、昨夜三千代のしく泣いてゐたのもこの事に關してではないだらうかと思ひ合はせた。今朝表口へ出て来てぐづぐづしてゐた容子も、この家を去るのが厭だといふ心が暗に現はれたのではあるまいか。こゝを出て行くのが厭だといふよりも、これから嫁人させられるところが不平なのではあるまいか。それならばなぜ厭だと言はないのだらうか。考へて見ると、三千代は七八つの時からこゝへ託されて来て、それ以來たゞの一度も實家へ行つた事がない。私もそれを當り前のやうに考へて、この家で生れたものと同じやうな氣で一緒に育つて来たのだけれど、一體どうした譯のある子なのだらう？ 私はこの時はまだ何も知らなかつたので、さつききの祖母の言つた事も思ひ浮べて、はじめて三千代の身の上を考へて見ないのであつた。

けれども三千代そのものの心も解し難い。母と一緒に歸るといへば、それに従つて、かうして急いでも歸る氣である。それは仕方がないと言へばそれでも可いけれど、そんな著しい變動があるものを、どうして私には黙つて隠してゐたのだらうと思へば、三千代も少しよそ／＼しい。

三千代は倉へ這入つて、二階の箆笥のものを取り纏めてでもゐるのだらうか。私がかうして學校から歸つてゐるといふ事も考へようとはしず、に、他の事にのみ薄ら冷たく考へ奪はれつゝ、暗い二階で、こそ／＼物を出し揃へたりしてゐる容子を日に浮べると、私が何んな事を考へたからとて、三千代にはそれが徹しはしないやうな氣がしてじれつたい。私は三千代が行つて了つたつて何だらう。母に作れられて歸つてどんなところに嫁られても——丁度、いかなる手からくれる餌にでも馴れて、誰にでも附いて行く羊のやうに、何の反抗もなく人のものになつて了ふのを、私が何といふ資格がある。私はこれからこの女のゐなかつた昔の、祖母と二人で物暗く暮した日に返ればいゝ。私とは交渉を鎖してゐる女が——だれにでも盡すだけを、型のやうに私に與へてゐただけの女が去つたと何ぞだらう。ゐてくれなくてもいゝ。女には何が分る。型に生れて、型に従つて人に行けば、それで約束は充たされるのだ。

私はこのやうな事を考へつゝ坐つてゐる内に、何の譯ともなく一人ぼろ／＼と涙が出た。どんよりした障子を見詰めてゐる冷たい頬を、

冷たい涙が傳はつて落ちる。自分ながら何のた  
めに泣く涙だらうか。

三千代はいつまでも出ては来なかつた。

## 七

私は一人ゐるのが淋しかつたので、やがて涙  
を拭いて祖母のところへ行つた。祖母は恒産に  
あたつてゐた。私はそれへあたつて寝ころん  
で、何をか忘れようとするやうな心持を見つ  
つ、蒲團の更紗の小さい模様輪郭を目で辿つ  
た。祖母は私の何事をも解し盡してゐる人のや  
うに——私と同じ心持を見守るやうにたゞ黙  
して、上目につつとところを見つめてゐる。

さうしてゐる内に、三千代が唐紙を開けて這  
入つて來た。

「お祖母さま、——あの青貝の嵌つた簞笥の後  
側へ、鼠が穴を開けてゐますぞのい。」と、平生  
の目に言ふやうな事を言ふ。私は壁の方ばかり  
を見て黙つてゐた。

あれはもう疾うからの事ぞ。捕斗へは内から  
板を落して置いたけど、あれをまた斷つてゐる  
のい？ どういふ悪い鼠ぞのい。と祖母は訊  
く。

「それはいゝが、もうちやんと着て行くも心の

支度は出来ましたかい。そんなにしないで、急  
いでせんと間に合はんぞい。」と注意する。  
見ると、三千代は泣いた後のやうな眼を伏せ  
て、疊に指を突いた儘、他の事を淋しく考へ  
てゐるやうな容子をして黙つてゐる。

「お前さんは、あんなに急な無理な事を言ふのは、  
お母さんが間違つてゐるけれど、い。あの子は  
かうと言つたら聞かない性質だから手の附けや  
うもないわの。それもお前さんが悪いからぞ。」  
と祖母は云ふ。三千代は俯つ向いて冷たく涙ぐ  
んでゐる。出ると言つても聲もぐら／＼になつ  
てゐる儘である。私はやつぱり何にも言はない  
で黙つてゐた。氣の知れない女に向つていふべ  
き事もなかつた。

三千代はやがて寄り附くところもないやう  
に、しよんぼりと立つて行つた。どうしたのが  
「お前さんが悪いから」と祖母にいはれるのか、  
私には分らない。まあ何だつていゝ、人の事だ  
から、と思ひつゝ、私は自分一人を見守るため  
のやうに目を閉ぢた。

「十さん、さうした儘寝てはいけませんぞい。  
実目を引くけよのい。と、やがて祖母がいふ。  
私はそれには返事をしらずに、これから先で私の  
得べき女——いつかは得べき女といふものを、

形もなく考へ掛いてゐた。

三千代は次の間でこそ／＼させてゐたが、や  
がて薄ら冷たく髪を解くらしい容子であつた。  
私はそれなりそこに假寝をしてつた。

目がさめて見ると、小寒い日はとつぷり暮れ  
て、自分一人が薄暗い中に見捨てられたやうに  
寝てゐるのであつた。三千代はもう立つて了つ  
たのだらうか。

私に氣が附いて、何にも忘れて寝てゐた  
のに愕いた。向うの方の間もひっそりしてゐ  
る。祖母はどこへ何をしてゐるのだらう。家中  
にはだれもゐなくなつて、たゞ寒い夕方の暗さ  
ばかりが銷されてゐるやうな氣がする。三千代  
はもう出て行つて了つたのだ。これぎり最早

私たちのゐるところを永久に見捨てて去つたの  
だ。それにしても、私に一言ばかりの挨拶を  
しようともしらずに出て行き得る、冷ややかな女の  
心が分らない。伯母だつてよくその儘立つて行  
つたものだ。私は何だか取り返し附かぬ掠  
奪にでも會つたやうに、び／＼と物快めしく  
淋しかつた。二人が出て行くのを私に知らし  
てくれようともしなかつたお祖母さんも恨め  
しい。  
私は少らくさうして暗がりに漬つたまゝ、も

う私に何を話しかけてくれるものも、私が何の理解を求めるものも亡くなつた、この先の暗い淋しい日の續きを考へ落すにはあられなかつた。

と、女中かしらそりりと唐紙を開けるものがある

「十さん。」と、霧と見探るやうにいふ。三千代の聲である。私は自分の耳を疑つた。

「お起きなさいよ。もう火を點す時分です。」と、淋しうに、

「私が背中を抱へて上げますお起きなさい。」と言ひつゝ、側へ来て坐る。

「なぜ私をこんなによつまでも放つといて寝させたの。」と、さつき厭に淋しかつた心持を告げようとするやうに、

「私はもう厭つて歸つて行つて了つたのかと思つた。」と、それだけを言ひ得たけれど、何だか、もつと言ひたい事があつた。言ひたい事が尤ちてゐた。

「先刻からいくら起しても、厭だ。」と言つて起きなさらないのですもの。誰ぢやありません。お前さんなどは見ても厭だつて非度くお言ひなしたものの。」

「そんな事があるものか、寢言に言つた事ぢや

ないの？」

さうでせうかい、と言つたきり、黙つて坐つてゐる。

「さうしていつ歸つて行く事になつたの？」お母さんは歸つて来たの？」と、私は心にもない事を口先ばかりでのやうに言つた。それではない。そんな事ではない。私にそれとは違つた何事かを言ひたくてじれつたかつた。

「三千さん。」と私は前後もなく三千代の膝に頭を靠せて、目も眩しい淋しい心持に涙ぐんだ。

「私はまだ歸りはしません。」と、三千代はどうでもいゝ事を言つてゐる。そんな事ではない。歸るなら今だつて歸つて了つてもいいけれど、お前さんには何うして私の心持が分らないのか。私のこの喉ひ入るやうな淋しい心持がどうして分らないのだらうか。

三千代は生れてはじめて男に構す膝を、強ちに拒まうともしげに、冷たく考へ入つたやうにしよんぼりしてゐる。ついでに何と入言つて欲しい。私のこの心持が分るといふ事を示すべき何事かを言つてはくれないのか。さうして今でも歸つて行くがいゝ。歸つてもいゝ。お前さんが私のかういふ心持だけは解してゐてくれたのだつたとさへ思ひ得れば、これきり行つて

了つたとて、私は何にも恨みはしない。どのやうな淋しさの中に残されても堪へてゐる。

分るのか。私がかうして泣いてゐるといふ事を、けをでも見てゐるのか。

泣くまいと思へど止まらぬ涙が暗がりに浸み落ちる。お前さんの膝に、こんなに、冷たい涙が浸みつゝある。それでも何とか言つてはくれないのか。それだけでは、たゞ反抗をしないといふだけである。私が泣き止んで、お前さんの膝を離れるのを、反抗なしに待つてゐるといふだけなのか。

「十さん。——どうしてそんなにお泣きなす。」と三千代は訊く。もう泣いておやしない。もういゝからあつちへ行つて了つて欲しい。かうして暗かりに二人である事を、お祖母さんたちが何とか思つては厭である。

「もういゝからおいでよ。」と、私は疊に俯つ伏した。拙らない。自分の事はお前さんには分りほしないのだ。分らうとしてもくれないのだ。

「何とか疑られては厭だから。」と私は拒けるやうに言つた。

「十さん、濟みませんけど、あなた先に出なして、あちへ行つて御飯をお上りなして下さ

いた。」と、三千代は睫毛に涙を流へたやうにして、他の事を考へてゐるやうにいふのであつた。

私は徒らにこんなところを俯つ伏してゐるのに気がつくとき、物凄しく立ち上つて、他のものに見られたくない涙を拭きつゝ、少らく出て行く足止めてゐた。三千代まさうして坐つた儘、直ぐには立ち上つてもしない。何を考へて、さうして黙つて涙ぐんでゐるのか。なぜ私のあんない跡に泣かうといふのか分らない。お前さんは私と同じ心持で泣くのではない。私とは違つた事を考へて泣いてゐるのだ。私には遂に何にも言はないで、これで去つて了ふのかい。さうして泣いてゐる涙をすら私には何にも明かさないう儘にして。——お前さんは冷やかに自己を鎖した女だ。じれつたい女だ。

私は、この女に何でもこんな着を見るのかと考へれば、自分を罵り嘲りたくなつた。

さちらへ出て行くと、丁度祖母が洋燈をつけてのそつと持つて来かけるところであつた。私に何をか探られるのを嫌れるやうにどぎまぎした。伯母は女中を伴れて再びどこへか出たのだといふ。それでは立つのはいつにしたのだから。

「三千代は何をしてるのかい？」と祖母は訊く。「何をしておますか。」私はいふ言つたきり、暗い心持をして顔を洗ふ水のある方へ行つた。

### 八

このやうなのが別れの夜の自分と三千代であつた。二人はそれで別れて了つたのである。翌の日自分が學校へ出た留守に、三千代は母に伴れられて立つて了つた。

學校から歸つて来ると、祖母は伯母たち二人の立つた事を話した。私は伯母から聞いて出たのだつたから愕きもしなかつた。何だか、いつそ物が片附いてすつとしたやうな心持にもなつた。祖母は、伯母が催かだがこれで好きなものでも買つてくれと言つて託したとて、紙に括つたお錢をくれよとする。そんなものは貰ひたくもない。

「三千代らしい、何となく出て行きたくはない容子だつたけれどいい。どうも仕方がないものだ。」と、祖母はまだ何をか言ひ掛さうとするやうに黙つてゐたが、——まあ三千代は三千代でいいぞしい、十さん。お前さんには、これからは何でも買はれるやう

にお小遣を上げるけのい。」と、三千代のみなくなつたといふ事を、私が不平にでもしてゐるやうに、氣を取直させよとするやうな事をいふのである。

「そんなにも何も買ひたくもないもの。」と、私は素つけなく言つて一間に這入つた。祖母がそんな言葉を聞くとき、私は、昨夜でも、三千代に何をか求めるかのやうに、あ、して床に絶つて泣いたりしたのが、何だか自分ながら嘲られないではゐられなかつた。何であんな事をしたのか。どうしてあんなにじし／＼と淋しい自分を見たのだらう。私は三千代を戀ひたのであるまいか。あんなのが戀といふのではあるまいか。私は三千代を戀ひてゐるのではないだらうか。

私は火鉢の炭のいぶるのを除けようとしげに、顔を覺めてそれを見守りながら、一人こんな事を考へた。

「それなら厭な事だ。三千代の方では私を戀ひてゐるといふ印も、容子にすら見せなかつたのだ。」だからそんな事は考へたくない。三千代にそんな風に取りられたら厭だ。向うは私に執着もななく出て行つて了つたのだから、私一人がいゝ面

の皮になる。私はたゞ泣いただけで別に何も言ひはしなかつた。三千代も何で泣くのか訊きもしなかつた。もしこれが私の戀であるなら、もうこれで忘れて了ひたい。私の戀を見捨てて行つたものを、まだ戀ひるのは男でもない。

私は二三日は、このやうな事はかりと二人考へ續けた。さうして或時は、三千代の冷やかだつたのが悪かつた。さうかと思ふと、七八つの小さい時から一つ祖母に育てられて、あゝして歸つて行くまでの久しい間の事をいろいろ考へ返せば、三千代は何だか、行つて了つただけ一層戀しくもあつた。私が煩つた間だつて、いつだつて私をよくしてくれた。私はたつたこの間まで、どんなに彼女を頼りにして暮してゐたかが、別れてから分つたやうに思はれて、悪く思ふのは間違つてゐるといふ氣にもなつた。

私はどんな心持に三千代の事を考へるにしても、別れてからのこの程は、暗い冬の、どんよりにした家の中に、どこにへんでも坐つても、何も手に附かぬやうに物淋しくて、自分も自分の置場がなかつた。私は二人ゐた日のいろゝの記憶を浮べ返しつゝ、何をか失つた人間のやうに、用事もない暗い倉の中なぞに這入つて、そこらの物の前に立ち盡したりしてゐる内に、頻

りに何か考へてゐたやうで、氣が附いて見れど何こそ考へてゐたのでもないやうな、茫とした自分を見出す事も度々であつた。

三千代心ものはまだいろんなものがそのまゝ置いてあつた。倉の二階には彼女の小さい時のものを納めた手立庫などもあつた。表の下り口の下駄箱を開けても、まだ履かれる下駄が忘れて置いてある。塗漆に鼻緒のにく色な、さういふ下駄なぞが、今雖いまだ許りのやうに入れてあるのを見れば、何だかこれ迄のやうに欠つぱり三千代がある日の續きのやうに思はれて、あんな返らない影が戀ひられた。

私は何だか三千代に手紙を出して見たいやうな氣がして、その中に書く事を一人で考へ盡く事もあつた。その内に祖母へあてて三千代からよこした。裏へ蒔く雑芥子の種を取つていたのが、薬箱に入れてあるといふ事を、言つて置くのを忘れましたから、さう言つて下さいと書き足してあるのを祖母は讀んでくれた。私は三代がたつたそれはばかりしか私には通信しないのが寂しかつた。三千代はこれからどういふところへ貰はれて行くのだから、行けばもうそれきり私とは何のつながりもなくなるのだと思へば、祖母に訊くのも忌はしい。祖母は、わざと三千

代の事については多くを話さないでゐるらしいつた。

「お祖母さん、三千代の事情といふのはどういふ事ですの？」  
「ずつと家へ預けられてゐたといふ事を、いつか話すつてこの間お言ひなしたぢやないの？」と、或日ものの續きから訊いて見たけれど、

「それはのい、一寸一口には言へないけれど、いゝ……言つたきり、祖母は黙つてしまつた。後にそれを私に話して聞かせたのは、私の大祖母に當る人であつた。

私は話相手がないので、陰鬱になつた。三千代の事は、一日々と隔るにつれて、一人徒らに考へ續ける事も減つて來たけれど、それだけ寂しい自分を見守つて、他の暗い事をのみ考へなければならなかつた。私はどんよりと暮れて行く夕方などは、一人で、ひし／＼と淋しい障子の黒ずみを見て憂つて、涙もなくしめ／＼と涙ぐむ事もあつた。

三千代は物足りない女である。逃げた鳥でもあるやうに、それきり私には何にも言つては來なかつた。夜分など、女中が祖母のところに行つて、ひそ／＼と三千代の事を話してゐるのを聞くと、私は何だか糊障りだつた。私に冷や

かであつた女を、行つて了へばそれで私の事なぞは考へてもくれないうらな女のことを、恰もそれが當り前でもあるやうに、あの女の事をねち／＼話すのが嫌ましかつた。

やがてやう／＼空が行つて、日影の色が濃くなつて来た三月に、三千代はどこかへ貰はれたといふ事を聞いた。どこへ貰はれたつて、もとより私にはどうでもない。たゞあのしつとりした黒い二つの日だけは、人のものにしたくはないけれど、それも三千代の持つてゐる日なのだから、私が何と言つても仕方がない。私はもう戀しがらない。戀しがつたところでそれぎりの話である。

でも手紙に言つて来た雛芥子だけは、女中に言つて裏へ蒔かせた。五月になつて、或日、もう二三日すればそれが花が咲くと女中は言つた。それから、今日は吹き揃つたから出て見よと言つた。

私は何かの事に紛れて、その雛芥子の事も忘れてゐた。それから小雨のしと／＼とふり續く日となつて、一人物に飽きたつれ／＼に、それがどうなつてゐるかを思ひ出したので、とぼ／＼倉へ行つて、薄暗い窓から裏を覗いて見ると、わたしの見ない間に、最早大方はわびしく散り

果てて、僅かに三つか二つ淋しく落ち後れた花の色が、しと／＼の雨の足に叩かれて、はら／＼しい約束の短さを語つてゐる。誰もわざ／＼来て權ふものもなかつたと思えて、花床と言へど名ばかりに、いろ／＼の草が亂れて生えて、廢れた裏になつてゐる。下草の延びた無花果の木、茂り倒れた枝に注ぐ、しめ／＼しい青い雨さへ物淋しい。

私はしばらくここにふる雨を見入りつゝ、何とはなく昔の日の事なぞを考へた。戀ひ返すといふのでもないけれど、はかなく褪せた乏しい芥子の花片には三千代が去つて幾日になるといふ事も、考へるともなく考へられた。もうそれらの日も、久しい昔の事の記憶のやうに薄れて浮ぶ。この次の同じ五月には、私はどのやうな自分になつてゐるだらうかと思つて見る。

私は、その翌年には中學を了へて、かうした青い雨を見る五月には、上の學校の入学試験を受ける支度しながら、馴れない下宿の一間に、隔つた祖母を案じてゐた。それから九月になつて入學して出てからは、その後何年も國許の五月に會つた事はそれきりない。私が出たあとは、女中とたつた二人になつた祖母は、私とも相談した上、これまでののだだ廣

い家を區切つて、後の方の三間だけに倉を添へて小さく住まふ事にして、表はずっかり、性質の分つてゐる、小綺麗に住まふ人に貸して了つた。私の家がさう言ふ容子になつてから、三千代は一度祖母に會ひに来たさうであつた。私は三千代とはあゝして別れたきり、凡そ二年ばかりの間はそれきりが交通した事もなければ、もとより互に會ふ事もなかつた。私はたゞ昔の記憶としての外は、三千代の事は忘れて了つた。

二年ばかりたつてから、私は、祖母が急病だといふ不意の知らせに愕いて、行李も整へ取へず歸つて来た事があつた。それは十月の末の或日であつた。

夜中に歸り着いて、小門の外に車が下りると、内から待ち設けてゐたやうな灯影が動いて、門の栓を開けに出たのは、それだと考へ圖らない三千代であつた。伯母も大伯母も来て、祖母の純許に聞き切つてゐた。もう一月も寝てゐるのだけれど、介抱に来た伯母に、私へはまさかの時までには知らせないでくれといふものだから、黙つて言ふ儘にしてゐたが、この二三日以來、急に容子が悪くなつたので、醫者の注意もあつたし、萬一の事のない前に、急に打電したのださうであつた。

「母はげつそり衰へて、何を辨へる力もなき子に、僅かにすやくと寝入つてゐた。私は自分の何事にも代へて守り救はうとするやうに、そのかすかけ眠りを護りながら、何とはなしにほろ／＼と涙ぐまずにはゐられなかつた。

「併し、まあ安心ですわい。この調子で行けばどうにか取りとどめ附くだらうけ」と語つて伯母も涙ぐみながら見守つた。人々は騒ぐやうに立ち居をした。

私は少らくして、次の間の火鉢の側、三千代が大伯母と代つて坐り、祖母のための片栗かなぞを溶いてゐるのに気が附いた。もとは少し瘦せたやうに顔色になつた。三千代は、私の氣のせむか、何だか、しめやかな淋しい姿をしてゐた。

長時間の汽車に疲れた私は、後を伯母たちに託して、次の間に蒲團を延べて貰つて寝た。

「十さん、それ一寒くはありませんか。少し薄い蒲團ですね」と、三千代は寢床の足元に藁を突いて、倉から出して来てかけようかと尋ねる。

「そんなに寒くはない。」とそれに答へた私は、一久しぶり、かういふ秋の夜の蒲團に寝るんだ」と獨り言のやうに言つた。

三千代は直ぐにあちらへは行かうともしず、少しばら／＼と膝を突いたまゝ坐つてゐた。私は唐紙の向うに伯母がゐなかつたら、何とか話を續けて、その後どのやうに暮しゐるか彼女であるかを問ひ尋ねてやりたいやうな心持もした。

「ではお休みなさい。」と、三千代に唐紙を閉め一行く。

それから翌の朝は疲れのために遅くまで寝た。目が開くと、どこから来た子か、四つばかりになる男の子が、私の寝てゐる室へ来て、一人でこゝろ／＼と私が置いた時計を取り出して弄つてゐる。物のある商家の、脆弱い、血の色のない女が生んだやうな、頭ばかり大きい、瘦せこけた子供であつた。

「おいでよ。こゝまでいらつしやい。」と、やがて蒲團に坐つて、シャツを着ながら相手になつても、陰気なねち／＼した目附をして、私は見向きもしない。毛を撚つた鳥のやうな瘦せ若ざめた好かない子である。

と、三千代が出て来た。

「十さん。そんな、叔父さんの大事なものを弄つてはいけません。こつちへいらつしやい。母さんとお倉へ行つて遊ばせよう。十さん

やんのお馬が待つてゐますけい」と、大事な子のやうに機嫌を取る。子供は、

「いや。」と、憎たらしく言つたきり見向きもしない。餘程甘えさせた子と見える。三千代はそれ以上に何も得言はないやうな、權威のない顔をしてゐる。

「その子は三千代さんを母ちゃんといふのかい」とこの子」と、自分は何も知らないものだから三千代に訊くと、

「十さんやんはどこの子、叔父さんが訊いてゐなすのに。黙つてゐるの？——おもうそ。母さんの子ですわのい。もういゝのよ。泣くものぢやありません。さ、いらつしやい。」と抱き上げて、

「泣くのぢやありません。母さんの子ですもの。母さんは大きな十さんやんの母さんになりました。」と、半は私への返事のやうにかう言ひながらあちらへ連れて行く。それは三千代の夫の子なのださうであつた。寮所で、大伯母からたつたそれだけ聞いただけで、三千代がどんなところに縁附いてゐるのか、詳しい事は何も聞かなかつたけれど、大伯母の口振で察すると、三千代ははじめての結婚なのに、先夫の子のある家へ嫁つてゐるものらしかつた。

三千代は、以前と違つて間敷がないものだから、祖母に八釜しくないやうに、その子を倉へ作れて行つては進ばせた。あんな、前生の生んだでもない、ねち／＼したやうな、聞き分けのない子を、よくあゝして飽かず、大事にするものだと思ふ。伯母もこの子を、目上りの子のやうに、大事やうに機嫌を取る。何だか、下劣なものが、利慾上の關係から人に取入つてゐるのを見るやうな不愉快な感じがある。三千代がこの子に對する態度には、それだけで以て、三千代が何事にも反抗をし得ないで、すべてをわが約束のやうに受け入れてゐる性質と、興へられた今の生涯とが目に見えらるやうに思はれて、何だか私事のやうにじれつたくもある。たゞ影の薄い女だとばかり思へば哀れでもある。その子は私を嫌つて、いつも私を見れば直ぐに顔を反けて、泣き出しさうにして母へ行く。

私、それから七八日ばかり三千代と共にゐたけれど、彼女自身の事については何一つ聞かなかつた。話し合へば二人に共通の、小さい時からの昔もあれど一かけ代のない、たつた一人の祖母の重病を見守る自分の心にも、さういふ事が考へ進されもしたけれど、伯母がゐる手前

もあつてか、三千代もさして心安だての話もせず、人のゐないところでも、そのしつとりとした目元で、まともに私を見る事もなかつた。私も取り出でて過ぎた物事を話もししなかつた。

「十さん、もうお休みなして下さい。私たちはこの間から、もう夜いつまでも坐つてゐるのに馴れてゐますよ。」と、三千代は言ふ。伯母もどちらも睡眠不足に疲れてゐるらしかつた。

「それへ少し湯でも水でも注して来ておくれよ。三千さん。」と私は言ふ。

「おや、痺れが切れましたの？ 私が見察をして上げませうか。」

「どんな見察？」

私たち二人は、病人に付き添うてゐる夜を、かういふたゞの事などを低く語るに過ぎなかつた。

祖母は幸に経過がよくて、少しづつ元氣も附いたので、三千代は一先づ安心して歸つて行つた。私にはその弱々しい黒い目も物が哀れな心に残つた。もうこの次はいつ會ふ日か来る事か。あゝした女にこの先段々と女房としての氣苦勞の蔭が印されて行くのを見るのは物淋しい。私は、後になつては、もつと何としか話してやればよかつたやうな氣がした。

祖母はこのときまたうとうと歸つた。一箇月ばかりの彼には、私も立つて出て下宿生活に歸つた。それから伯母が去り、最後に大伯母も歸つたといふ事は、もうすつかり回復した祖母が書いてよこした。

### 九

話はこれ位にして終りとしたい。もとより、その後にもさまざまの變動はあつた。あの時祖母を勵まして、

「まだそんな窮い事を言つて下すつてはいけません。これから十さんも學校がすんで、立派になりなすのを見なした上、十年程お隠居さんをしたさらなけれや。」と、祖母を引き立ててゐた伯母が、一年とたゝない間に、急性の病氣で先に亡くなつて了つた。三千代はそれから間もなく出されたか出たかして、祖母のもとに運げて來た。三千代は厭々に縁附いた上に、ひどく夫から虐待されてゐたものだといふ事を、私は後に大伯母から聞いた。三千代は夫に別れても歸つて行くところはないのであつた。それは、これまで少しも話を聞かないでゐた事だつたが、實は三千代は、伯母が縁附いた夫との間の子ではなかつた。三千代が久しく私の家に育てられて

来た講も分つた。詳しい事實は亡き伯母のために語りたくない。私には物哀れな伯母の話が、三千代自身の経た事のやうに考へられて、それだけ三千代を哀れに思つた。

私は遂に三千代との戀に落ちた。三千代は早くから私に戀してゐたのだといふ事を泣き泣き話した。そのやうな事はどうでもよい。厭がつてゐたのでも構ひはしない。祖母は、伯母については死ぬまで何事も語らない儘で、今はもうあの世の人となつた。私ที่บ้านをすつかり賣り拂つて、三千代と二人でこちらへ出て來たのは、私がまだ學校にゐる内であつた。私はその時、いざ立つて出る段になると、久しい自分の家と別れるのが惜しかつた。もし小さいものだつたら、せめてあの古い倉だけでも記念に持つて行きたいと、三千代も言つた。私は遂に、今櫛の上にあるあの瓦を、わざ／＼割がせて來たのである。

もうこれ以上には話したくない。今私のところにある女は三千代ではない。それからの詳しい事は話したくない。私は三千代を一旦捨てて、今ではまた戀ひ返して悔いてゐる。

(明治四十四年七月十八日)

## 午後 (二)

死んだ女の滑つてゐたものではないかといふ氣がして來ると、私は、それが自分がどうかしてやらなければならなかつた女でもあるやうに厭な氣がして、さつきと通れるやうに歩く。あとを振り返ると、私に何か關り合ひでも出來はしまいかといふやうに、ぐん／＼急いで歩く。さうではなくとも、わざとさう考へるやうにして急ぎたい。

と、私は何のためにかうして急いで歩くのか分らなくなつて足を徐める。私は二三人のひとぼとぼ行く人を追ひ越した。向うから來る人とも擦れちがつた。しかしそれが男だつたか女だつたか分らなかつた。

一人私の前を行く男がある。泥の匂ね返つたなりに靴いた長靴をぼた／＼言はせて急がしさうに行く。紺の筒袖の、割けた半纏に股引を履いて、烏打帽に、海老茶色の襟巻をしてゐる。後から見るだけだけれど、懐かに何か容積ばつたものを入れて、帯から上を膨らましてゐるやうに思はれる。魚屋か、飲食屋かの亭主らしい。

魚屋だつたら、血色のいゝ、氣のさつぱりした男である。飲食屋の亭主なら、頬髯をむさくろしく延ばせて、根性の惡さうな目をぎよ／＼させて、人にろくに挨拶もしないで、垢の黒くたまつた爪をして薙鬚を切つたりする。喉は、ふけだらけのくしゃ／＼の髪をして、鼻たれ子に乳をくられてゐる。だだ黒い二疊の疊は火で焦げて穴だらけである。喉の足の垢を見るが、汚い店だからだれも這入りはしない。小屋根の板が古くさつて、繩切れの朽ちたのが引つか／＼つてゐる下に、のれんが汚れて下つてゐる。私はこんな家をどこかで見た事がある。

もうさつきの男はずん／＼向うへ行つて形が見えなくなつた。

私はさういふ飲食屋の前まで行くために、さうして、今の男をさういふ家の店臺の、紙でひびれを貼つた硝子を通してちらと見て過ぎるために、かうして歩いてゐるやうな氣もして來る。何だか氣味が悪い。

共用栓の下で一人の若いかみさんが洗濯をしてゐる。男のものらしい綿の着物を丸洗ひにしてゐる。

民 子

私は鳥に水を浴びさせて、籠を提げて上つた。祖母と小母とは、私の見る目から隠れて、蓋ばんだ一間にぼつんと坐つて、私に言ひたい事が言へない不平を包んでゐるやうに、二人でひそひそ何か話してゐた。私が上つて来るのを見ると、二人は、互に何でもない別々の事を考へてゐたのだといふやうに、しばらくさりげなく黙して、浮かぬ目附を異る方へ注いで、ちつと一つところを見守つてゐるのであつた。

二人が何を言つてゐるのかは聞かないでもちやんと分つてゐる。最早どうにもならない段になつてぐづ／＼言つても仕方がない。民子の来る事がそのやうに面白くない位なら、かうならない先に、きつぱりと反對すればいいのに。——そのために二人に相談したのであつた。何でも私のする事には逆はないといふのかと思へば、愈々来り度になつてから昨夜以來またあの調子だから困つて了ふ。いけないと言ふのなら、来ると直ぐにでも歸して了ふ。着いても行李を解かせないで、その儘直ぐに——さんのところへでも伴れてつて、女中にでも置いて貰へばいい。小母たちは、女としてゐる／＼の點を考へてぐづ／＼言ふのだらうけれど、私の口から一日引受けると言つた以上は、もう何でもいいから、そんなに蔭の方でぶつ／＼言はないで、私の計ふ儘に黙つてゐて欲しい。自分だつて引き取るだけの務めをしていいからこそ受け合つたのである。女房にして永久に伴れ添ふといふのではあるまいし。——

私は、私の心持が二人に了解されないのがもどかしいけれど、それを口へ出していふのも面倒臭い。祖母は物の分らない人でもないのに、あゝして、女一人を引受けては厄介だからと、ねち／＼した事をいふのは、つまり民子の母を好かないからなのだ。祖母は亡くなつた私の母をも餘り好かなかつたとさへ聞いてゐる。立派な伯母でもないけれど、母の事を考へれば、私にはあの伯母を忘れる事は出来ない。さういふ伯母が困窮してゐるのである。民子に小島のやうに素直に出来た女であつた。私の久しく戀してゐた——さうして、私を戀ひるがために、あんな不幸な目を見たものの妹である。私はこの四月以來、暗い、いら／＼した求めに生きてゐる自分自身を描きつゝある。その中にはこの女の姉の半生をも寫してゐる。日毎の紙上にてそれを書くのに拵せてゐる。それだけでも、民子とも切るに切られない關係を引いてゐるやうな氣がするのである。それがする事もあらうに、儼然看護婦にならうとしてゐる。私が、女のプロフェツションとして何よりも厭で、考へても齒の浮く、安っぽい女たちを相手に這入りかけてゐる。これだけは、私の母の血統といふもののために、小母にも祖母にも言ひたくない。さうして民子と、民子の母とが、どんな事をでもする、させるから、どうか當分少しの間引受けてはくれまいかと、二人で頼んで来たのであつた。

もない。少くとも、私が長い苦しい仕事をしてゐる間だけでも、理解といふものの備はつた、或純淨な同情を周圍に領してゐたいといふ欲求が私を驅つたのであつた。併し、それだからと言つて、私の方から言ひ出して來させるやうにしたのでは決してない。まさか祖母たちがそんな事を疑つてゐるまい。

私は柱の釘に鳥をかけて、そのまゝ縁側にぼんやりと立ち盡しながら、このやうな事を取りとめもなく考へ入つてゐた。

私は、久しく會はない民子が、何だか自分の戀してゐる女でもあるやうに、午後には一りの驛に着くあの女の、すべての容子が思ひ描かれ

た。  
生垣の向うの柿の木に、油蟬がじん／＼鳴き出した。間近いその一匹が耳を刺すと、裏の山や方々で鳴いてゐるのが一時に耳に附いて來る。仕事に夜ふかしをする私に取つては、まだ寢床を出たばかりの朝だけれど、日影は已に強度に丈けて、頭ががん／＼するばかりに黄色く漲つてゐる。小母が刈り取らうと言つても私が取らせないために、雜草の伸びたいだけ延びた、だだ廣い垣根の内には、何とか葵といふのの眞赤な大きい花が一つ、漲つた日影の中に

畫いたやうに、小搖ぎもなく吹いてゐる。石の間の、土の皮がざら／＼に割れた龜裂の上に、昨日或子供が忘れて行つた、白糸で石ころに括りつけられた蜻蛉が、から／＼に死んで裏返つてゐる。油蟬は、それ等の總てをじり／＼と浸した日光の色を、より黄色く、より長くする力やうにじん／＼と鳴くのである。倦怠く焼けつく一ん日の炎暑が、もう目に見るやうに厭はしく待ち置けられる。

やがて私は、今日送るべき一回を書くために、例の如く原稿紙に對したが、まだ書かない先から、已に飽き／＼した續きのやうにぐつたりしてゐる。四月以來一ん日の休みもない、長い苦作に疲れてゐるのであつた。

すると、小母が乾り上げた洗濯物を提げて、そこらの日向を得るために、こそ／＼と目の前を通つて行く。そんなにわざと猫が歩くやうにこそ／＼通らないでもいゝから、きつさと行くがよい。餘計なところで氣を遣つたつて、いつも肝腎な事で自分をごさ／＼させるのだから何の足しにもなりはしない。また通る。目障りで堪らない。  
一小母さん、そんなに一つ／＼いく度も行つたり來たりする代りに、パケツか何かへ入れて

一度に持つてけばいゝぢやないか。」と言つて見る。  
一ふふ、だつて今丁度あれだもんですけのい。もう直ぐ済みますすけ。」と急いで裏口へ歸つて、また一つ持つて來る。最後のは私の裏間着らしかつた。

「もうこれきりですけのい。」と、事多いやうに寢れた小母は、人の宅地をでも通り抜けるやうに、濟まなささうにして往來をする。そんなにしなないで、當り前に行動する方が却つて目障りにならないのだのに。

私のまはりには癒きはりな蠅が、もう小うるさく集つて來た。私はそれをつつ／＼と蠅叩きで取つて、しばらくの間の小康を作り／＼しては書いて行く。

いつもの事ではあるけれど、今日は餘計に纏まらない。同じ書き出しのところを何枚となく書き崩すばかりで、容易に形を爲さないののでくさくさして來る。こんなになると、いかに焦つても駄目である。今日は、郵便夫が來るまでに出來なくても、どうせ町まで民子を迎へに行つてやらなければならぬのだから、それまでに書けばいゝのだけれど、それがまた間に合ふやうに出來るかどうかわからない。

私は、いら／＼して、ペリ／＼と書き崩しを裂いた。またいつの間にか蠅がうぢや／＼来て、頭へも手の先へも、拂つても直ぐまた飛んで来て目まぐるしい。

私はしまひには厭になつてしまつて、がじがじと、伸びた頭の髪を掻き／＼次の間へ行つて、何にも置いてない、がらんとした畳の上に倒れるやうに寝ころんで、壓へられたやうな黒い息をしつ／＼目を閉ぢてゐた。その、私の足の方になつてゐる輩の後が、祖母のある、小さい、薄暗い一間の、押入になつてゐる。その戸棚で取が惡戯でもしてゐるのか、暗い板戸の中でことごとと微かな音がする。私の過敏になつた神經はこの四五日以来取りわけて、こんなこそ／＼した物音にもちき／＼刺激されるのであつた。私は足で聲を叩いてそれを追うたけれど、矢つぱりこと／＼言はせる。煩い蠅はいつししかもたこ／＼も集りに来た。私は遂に出かけて行つて、祖母のあるところを覗いて見た。と、それは祖母が戸棚に聲を突つ込んで、何かこそ／＼いぢ／＼つてゐるのであつた。

「何をなさるの、お祖母さん。——お祖母さん。」といふと、

「ふ、いゝ子だからあちらへ行つておくれよ。どだごだした物が突つ突き込んであるのを見ると痛癢が出るけ。今こゝを片附けてゐるのぢやけのい。」

「何でそんな下らないものを大事さうに取つとくんです。その錆び附いたブリキの盥なんか何にするんです。と私は斬走つて言つた。

「いゝからあちらへ行つておくれ。汚いけ。」

「おや、戸棚の中に水かしら零れてゐるぢやありませんか。いゝえ、その方ぢやない。——何だ、行李の下へ流れ込んでびた／＼だ。——また目をあれするんですか、あなた。いくら言つても聞きわけのない。：目の縁が爛れてじくじくになつてるぢやありませんか。」

「いく度も言ふのに聞きはしない。目が見えるやうになるのだからと言つて、鹽水で洗ひ／＼して擦るのである。そんな事をしたつて何の足しになるものか。」

祖母は私の言ふ事をがみ／＼突つつくやうに取つて、情なさうに目を閉ぢながら、

「私も、もう長くは生きんけ、少しはしたい通りをさせておくれよ。」と、やるせなげに言ふのである。

「だから、何でも人のいふ事は聞かずに、した

い通りをなさるからいゝぢやありませんか。」

「あんな事をいふよ。いつ私がお前さんの言ふ事に逆つたらう。言つて見なさい。」

「目だつて御覽なさい、そんなに痛さうになつてるぢやないの?」

私はくさ／＼して口ではいら／＼しくかう言つたけれど、私の外に、下女も小母といふものもあるのに、祖母が何一つ面倒を見ても貰へないやうに、小汚い中に一人でごそ／＼してゐるのを見れば、何もかも私一人が悪いやうに自責されて、黙つてうろ／＼してゐる祖母が可笑想で堪らない。

私は案所口を覗いて、けたましく下女を呼んだが、小母が何事かと出て来たので、戸欄にひつくり覆つた鹽水を拭くやうにがみ／＼と言ひ附けた。

私はぢつとしてはゐられないやうにせか／＼して、またもう一度原稿に取りかゝつた。

「まあ、なぜ直ぐ私を呼びなさんらんかあ。退いて下さい。おや／＼、あなたの痛癢が倒れとつたのへ鹽水がびつしよりかゝつとりますぞい。あれ、行李もでき。——まあ、これはついこゝから拭いたのぢや駄目。本當に仕やうのないお祖母さんぞのい。」

小母か、ぶつく／＼いふのが耳障りて堪らない。黙つて拭いとけばいゝ譯である。たつたその位の事か何だ。――まだ言つてゐる。

「おい、やまましから黙つてしなさい。」と私はまた立つて行つた。

「誰もお祖母さんを叱れつてお前を呼んだんぢやないよ。」

かう言はうとして、口まで出かけたけれど、また小母が膨れるから黙つてゐた。

「お祖母さん、こつちへおいでなさい。そこをちやんとして貰ふ間、こつちへ来てゐなさい。」

と、祖母の方を窺めるやうにかう言つて、人のごつ／＼言はないところへ伴れて行くためのやうに、自分の物を書く方へ導いて来た。

「こゝへ坐つてゐなさい。そつとして。」

「えゝ、どうなりと好きなやうにしてゐなさいばいゝ。そこへ寝そべつてゐなしてもいゝんです。」

「この一間は午後には日が這入るやうぢやない。まあ、こゝにも随分蠅があるぞの。――私のゐるところにはかりかと思つたのに。――私が日

が見えればこゝに附いてゐて、蠅ぐらゐ追うてやるのだけど。」と、つまらない事を一人で言つ

てゐる。

「お祖母さん、私は物を書いてゐるのですけ、黙つてゐて下さいな。」と、子供に言ふやうにたしなめつゝ、私は何とはなしに祖母のためにしめ／＼と涙ぐむのであつた。祖母も何を考へ出したのか、見えない目に涙を溜めて、しよんぼりと坐つてゐる。

かうして私はまた、書きかけたのを崩してはべり／＼裂いた。

外に漲る日はじり／＼と暑くなつて来る。うゝん／＼と此が来る。

私はやつと出来上つた一回分を掲げて、じりじりしい日の色の熱し切つた門口に出ると、かうした書寫時の炎天の下を、二十町も歩いて行かなければならぬ事かと考へて、うんざりしてぞんだ。

往來の下の溝川はから／＼に乾き上つて、川床の磐い砂の中に、ブリキの切がざら／＼と光つてゐる。土手にいきてゐる草の中に、熱し砂土の上皮が、陽炎ふやうに、獨りではろりほろりと下に落ちる。うまく馬車でもゐてくれなかつたら、町のステイションまで出る間に、往

## 二

來には僅かの日蔭もないのである。原稿だけならば、ついあそこの先まで下女をやつて、使ひをする子供にでも託ればいゝのだけれど。

自分は今、いら／＼暑い汗でじく／＼になるのを目に見るやうな、厭な心持をして洋傘を開いた。

この厄介だといふ氣持は、何だかこれから民子を引き取つてから、祖母や小母に對して、これまでと違つた、二つの氣投ひが殖えて来るのも、今から考へてみれば置かなかつた。

私は都合よく、村の水を賣る店の門口に馬車が休んでゐるのを得て乗つて行つた。

郵便局の前で下りて原稿を出した後、或家で水を貰つて體の汗を拭いて、それからステイションへ行つて、民子の着く下り列車を待つた。

驛員が總てで二人しかゐない小さい驛である。柱にかゝつた、不似合に大きな時計は、止つてゐるでもするやうに、針が一寸も動かないやうに見えるけれど、それでも三分五分づつ移つて行きはするのであつた。ぢつと落ち附いて立つてゐると、あれでも少しはそよ／＼と動く風が受けられないでもなかつた。入口のすぐ外の、ふは／＼した砂を掘り窄めて、どこかの鵜が

二三匹、暑い日光の中に倦怠さうに蹲つてゐる。ベンチの上などに、纏れば指の跡が附くやうに、埃がざら／＼に溜つてゐるだけを見て、この寂れた灰色の町に、人の乗り降りのない事が考へられる。民子は三十萬の人口のあるところから、こゝをどのくらゐ寂しい町だと考へて、設けて来るのだらう。

私は一人ベンチにかゝつて、民子のすべての容子などを想像して見た。三十いゝ時間もかゝる間を――二度の乗換への度にもまごついたであらう。――長い、馴れない汽車に乗つて、一人で来る途中の事を考へれば、まだこれから先にある事のやうに不安であつた。自分は民子に思ひ護つてやるやうな心持になつた。民子が見られるのも何となく氣後れのするやうな心持に、たつた一つの値段のかゝつてゐない帯や着物をつましく着て、物馴れない女のやうに、手荷物を片寄せて乗つてゐる様子が想はれた。或處が、わが戀ひたあの女によく似て、しつとりした、女らしいところのあつた民子を、私は何年ぶりに見るのであらう。

私はそれに續いて、わが昔の三千子の事について、いさ／＼の回想を浮べないではゐられなかつた。

私は、かうして、民子のためにこゝに出て来てゐる自分が、何だか、私が日々書いてゐる作中の出来事のやうな氣がするのであつた。

その内に時間が来た。さうして、待ち設けた列車が着いた。私は、改札口を覗いて、それらしいもの下りのを待ち受けたが、どうしたのか、二人の男の客が下りたきりで、民子の姿が見えない。下りたもの一人はもう改札口を出た。私は落ち附かないで、列車の中を覗いて歩かうとしかけた。貨物の下りるのがあつて列車はまだ止つてゐた。

すると、二等車の出口から、民子が荷物と洋傘とを抱へて下りた。二等で来たものだ。ポイイが手傳つて、二三の手荷物を下した。民子は、紫陽花を染め出した、クリーム色の帯をして、垢抜けたつくりをしてゐる。ニツケルの口金がついた、ハイカラな手提袋を開けて、ポイイに袋をくれてゐる。それが、何だか違らなくもい餘計な事をパニテイでしてゐるやうにも見えた。すつかり變つてゐる。考へてゐたのとは違つてゐた。――民子が私の來てゐるのを見たといふ事は、さうしてゐる容子の或物で分つた。私はその方へ近づいた。民子は何と言つて挨拶をすればいゝかに惑ふやうに、顔を赤らめ

て、極り惡さうに頭を下げる。久しく見ない間に、すつかり一人前の女になつてゐるのに愕かされた。

「一人で心細かつたらう。この方をお前持つてくれ。何、どうせそこから馬車に乗るんだから。――と、私は荷物の袋の大きいのを抱へてブラットフォームを出た。

「他に荷物ほ？」  
「行李が二つと鞆とだけです。――あそこを下りてをりますうい。」  
「あんな鞆を買つたのかい、今度。」  
民子は極り惡さうに目を伏せて、ベンチの上に置いた、袋の口を結び直してゐる。その腕に僅かに覗いたレイスの袖口が、何といふ譯もなく、プロフェツショナルな女といふ事を考へさせた。私は少しづつ／＼しかけてゐる束髪の前髪や、肉附いた肩のあたりをじろ／＼見た。

ブラットフォームに下された行李と鞆が持ち出された。ばかにけば／＼しい不愉快な鞆である。民子はすつかり私の考へ設けた事を裏切つた。

民子はその事を知らないで、そは／＼したやうに、紙入に納めた荷物の合札を探してゐる。

着物の下はじつと汗ばんで、汗ばんでゐるやうである。目もとにも、いら／＼と暑い疲れが見えてゐた。

「どうだ。その家へ行って顔を洗はないか。」と私は言った。

「お兄さんがお洗ひなすなら私はこゝで待つてゐます。」

「私はどうでもいゝんだけども。——ちや早く家へ行かう。併し大變だよ。まだこれからしばらくがた／＼の馬車に乗るんだぜ。」

私は言譯のやうにから言ひつゝ、出口に立つて、約束して置いたさつきの馬車がやつて來るのを待ち受けた。

### 三

「まあ、ほんとにいゝところですよ。」と、汗を落して、さつぱりしたやうに、浴衣の上に巻帯をしてこちらへ出て來た民子は、やう／＼落ち附いたやうに、縁先へ躍んで、何とか姿の、もう午後はすつかり閉んで了つたのを見入つてゐる。私は二三間置いた柱のところ、寢椅子の上の本などを片づけた。

「随分と廣いのですぞのい。いろんな花がありますこと。あれは何とか言ひましたぞのい。」

「どれ？ あれは射干さ。私は下らない草でも何でも、延びるだけ延ばして置くんだ。その雨落のところの砥草の向うには桔梗の花があるよ。——その鳥はどうだ。その戸袋のところを御覽。」

「あら、まあ。眞つ白い鳥ですよ。何を食べてゐますのですぞ？」

民子は私のかけた長椅子の側へ来て、珍らしいやうにその鳥を見る。

山の蔭だから、もう日足は隠れて、垣の内はすつかり蔭つたやうになつてゐる。下女が隈なく水をまいて置いたのが、雨上りの後のやうに土に浸みて、ひんやりとした夕方待つ色をしてゐる。外の木立の中では、その夕方の迫るのを招くやうに、きり／＼と蛸が鳴く。

二何だか寺の方丈か何かにあるやうだらう。こいらのかういふ大きな柱へは顔がぼんやり寫るよ。みんな黒光りになつてゐる。その唐紙でも御覽、幅が一間あるぞ。——障子がすつかり蔽まつてる頃は、雨が降ると家中が眞つ暗になる。——こゝは十疊だ。それからそこが八疊二間だらう。それから次の間がまた八疊だ。——あちらが三間とお祖母さんのあなすところ

と、またそのところにも一間あるのですぞのい。」

「あそこは雨が漏つて畳が腐つてるから使へないんだ。こゝだつてじゃあ／＼漏るんだよ。」

「まあ。——それちや雨の降る口にはどうなるんですの？」

「さういふ時には、バケツや盥や、手當り次第のものや井べといつて、あちらの方へ引き上げるんさ。面白いだらう。これでもやう／＼の事で目つたんだから不平は言へない。もと醫者の家だつたんだ。あゝ、いゝ物があるよ。一寸こちらへ来て御覽。」

自分は椅子を離れて、向うの、物入れにしてある一間の、ぼろ／＼の障子を開けて見せた。

「ほんに。こゝが本當の玄關なのですぞのい。」

「その上を御覽。あんなものがある。」

そこには、雨ざらしになつたやうな、古い淀んだ昔の駕が、二つ釣し上げてあるのであつた。

「こゝの家の人が乗つて歩いたものだらうね。いつの昔だか。」

「へーえ。」と云つて、民子は珍らしさうに見上げてゐる。足下は二段の階段になつて、下に三枚敷ばかりの式臺の板の間が、灰色に古けてゐる。

る。こゝからの上り下りを閉すために立てかけた、竹の格子の仕切も、いつからの物とも分らないやうに朽ちかけてゐる。直ぐ外には大きな蘇鐵が一株あつて、その横に赤錆びた濁り水を湛へた、人間の夫が浸るばかりな、用水の大釜がある。その中に湧いたらしい子牙が蚊になつて、うちや／＼と立ち纏れてゐる。

「この小さい方は、芝居でおかすが賣られて出る時に、こんなものへ乗つて出ますぞのい。」と民子はまだ驚を見つめてゐる。

私は何だか、いろ／＼言ひたい事があるやうで、兩も何こそ纏つて言ふべき事を見出さない。自分がこんな寂れた村に、年取つた祖母と、これもいゝ加減の年の小母と、そんな面白くもない二人をつれて、何一つ理解といふものもない、灰色な空氣の中に、毎日創作に苦しんで、いかに苛々寂しいがじ／＼する日をのみ一人見てゐたかを、この女にどう言つて了解させればよい、だらうといふやうな氣がする。その日々の自分の生活がしみ／＼と察して欲しい。かういふ心持が突つ突くやうに動くけれど、口にはその裏見が見出されない。私はたゞ、何でも民子には珍らしく受取られでもするかのやうに、そゝこちを見させて廻つた。

「民子さん、こゝへ来て御覽なさいな。」と、小母が裏から廻つて、縁側へ出て来て呼びかけた。一まあ段々／＼とほつ／＼見ればいゝ。小母さんこつちへお上りよ。お祖母さんもこゝへ呼んでおいでな。

「でも一寸来て御覽なさい。これ、こんな小さい胡瓜が實つてゐるのですけ。」と、小母は手で大きさを示して見せて、自分の物を何でも見せながら子供のやうにいふのである。

「さうですか。どこに／＼と、民子は甘えたやうに、お勤めのやうにかう言つて、小母が縁側の下から出した庭下駄を突つかけて裏へ行く。小母が種子を蒔いて、魚の腸などを肥料に埋めたりして作つた五六本の胡瓜や、近所で貰つた茄子などの植つた、二坪ばかりの畝が、物置の側にあるのであつた。

私は一人になつて、何だか落ち附かないやうな心持がした。祖母はどうしてゐるかと行つて見ると、小さい一間の縁先に出て、伯母から來たらしい手紙の、祖母に見えるやうに、手習ひの字のやうに大きく書いたの目を喰つ附けるばかりに披けて、目を齧めて讀んでゐる。そこには、民子が土産に持つて來たのだらう、二品三品の、煮浸んだやうな青や赤で指つた紙袋に

這入つたものが、伯母が乏しく求めた事を告げるやうに置かれてゐた。私はそれを見て、何だか伯母が不憫なやうな氣持になつた。目のよく見えない祖母は、私が／＼來たとも知らないで、手紙を讀み續けてゐる。縁側の壁の根には、祖母が買はせた鼠取の金網の籠が、この間私が釣しておいたビスケットが、未だにそれなりに附いた儘、口を開けて置いてある。

「お食卓は座敷へ出しますのですか。」と訊きに來た。

「私と祖母とは、やがて先に食卓について、小母たち二人が裏から出て來るのを待つて。私は四五杯しか飲めない酒を、一人で注いで、ちびちび嘗めるやうに飲んだ。そのうちに二人も下から上つて來た。

「さあ民子さん、こゝへお坐りなさい。大變な御馳走が並ぶからびつくりしなすなよ。」と言ひつゝ、小母は有合せの物ばかりを小皿に分けた。

「今日はあなたが來たお祝ひだけれど、この春こゝへ引つ込んでから以來は、かうして、家のものたちが一つになつて食事をするなどといふ事は滅多にないのぞ。この人はいつでも一人で、

おかずも冷たくなつた頃にしようぼりと来て食  
べるのぢやぞろ。と、祖母は、これまでので寂し  
かつた毎日の話をし出すのであつた。

「そんな事はどうでもいゝから、一つお上りな  
さい。お祖母さん。」

私はそんな拙らない事を聞くまいとした。

「とにかくのい、民さん、かうして来たからに  
は家の子と同じぢやけ、これ〜と思ふ事は互  
に隠さずに言ふやうにして、みんなで面白く暮  
しませうぞのい。」と、祖母は民子に盃をくれ  
る。

「お前ものい。」と私に向いて、

「かうなるまでには、私もいろんな事を言ひも  
したけど、もうかうなつて見れば、何の事はな  
い、家で生れたものも同じ譯ぢやけのい。……た  
だ、いろんな事を考へて見ると、後で互に後悔を  
するやうな事があつても何だと思つたものぢや  
けのい。」と、餘計な事を言ひ出した。民子の来  
た事に對して、もう何の反感も持つてゐない  
いふ心持を、私に告げようとするのである。そ  
れはくどく言はなくても分つてゐる。

「さ、お箸をお附けなさい、民子さん。本當にこ  
こいらには、お魚と言つたらこんな鰯か鮎かし  
かないのですけのい。それは〜不自由な、仕

方のないところですよ。私はいつもあちらの  
事を考へますのい。お魚だつて何でもありませ  
しのい。」と言ひつゝ、小母は祖母が膝に食べ落  
したものを手の平に拾つた。民子は貰つた盃  
の始末に困つたやうに、手に持つて、何をか他  
の事を考へ入るやうに俯つ伏してゐる。私はそ  
の長い睫毛をした、黒い、濡りつばい目を、偷む  
やうにちら〜見た。

私が昔三千子を戀ひて、伯母の家へ行き〜  
してゐた時分には、この民子は八つか九つかの  
子供であつた。その頃はまだ伯母のところも立  
派にやつてゐただけれど、間もなくがらりと  
傾いて了つたために、民子は三千子とは異つて、  
すべてに乏しい、薄暗いやうな中にお育てつて  
來たのである。私は今民子が、かうして小母た  
ちにもまでも氣を置くやうな容子をして坐つてゐ  
るさまを見ると、あちらに末の男の子と二人で  
みすばらしく暮してゐる、氣の毒な伯母の事も  
考へられた。

私はいふやうなムードを以て女を見ると  
きには、いつでも、哀れに弱いものは、不自由な  
中にゐる、女らしい女の運命だと思ふ。何も知  
らずに、薄い日に生ひ立つて、それ〜に同じ  
乏しいもの妻となる。——私には、俯つ向い

てゐる民子の帯の間に、はら〜と散りやすい、  
籬芥子の色に似た帯揚げの覗いてゐるのさへ何と  
はなく哀れに見えた。

「どうだ、民さん、こんなひどい田舎だとは思  
はなかつたらう？ かういふところなら来るん  
ぢやなかつたのぢやないか。」と、私は口では賑  
やかにこのやうな事も言つた。

「いゝえ。そんな事は……と、民子は眞面目に  
返事をして、顔を上げて、眉毛にかゝる髪の後  
れ毛を掻き上げる。何を考へたのか、長い睫毛  
に涙ぐんでゐる。

「その盃を已にお返しよ。今に己が舌が廻ら  
なくなるから見てゐて御覽。ちび〜椀古をす  
るのだけれど、とても亡くなつたお祖父さんな  
ぞのやうにはなれさうもない。」

「あんな事をお言ひなす。あなたのやうな脆弱  
い體で、お祖父さんのやうに召し上つて御覽な  
さい、それこそ命はないのですぞい。」と小母が  
いふ。

「さうだ命といへば、私は三十三になつたら死  
ぬつて、占者に言はれた事があつた。——本當  
だよ。それ、あの二丁目の角に鳥屋があつて、  
そこを少し左へ行くと、何とか言つたし、また家  
の格子の下に、夜になると占ひ屋が店を出して

ゐたらう。あいつが言つたんだ。さうだな、私が十五六の頃だたらうか。久しぶりと思ひ出した。己は三十三で死ぬのかな。一

まあ厭なこと。どうしてそんな事を言うたのぢやらうぞのい。と祖母も文つた。

このやうな事から、皆はそれからそれへとあちらの話をした。民子は小母たちがいるなことを訊き尋ねるのに返事をした。こゝへ来る途中の見聞をも話した。

「まあ、民さんたちはゆつくりお上りよ。私はいつでも、灯が點らない内にちやんと寝支度をして、引つ込んで了ふのが癖ぢやけのい。」と、祖母はのそ／＼立つて行く。

「お祖母さん。お危うございませぬぞ。」と、民子が附いて行かうとする。

「いゝよ、民さん、いつでも一人でずん／＼行くんだから。」と民子を止めた私は、少してか／＼出した頬を押へて、またもつと飲まうとした。下女は小早に洋燈を點けた。

やがて段々と外も暗くなつて行くのに気が附くと、悲しい雨のやうに、蜘蛛の鳴くのもいつしか止んで、薄根に響きながちや／＼言ひ出した。洋燈の灯には、火を取る蟻が目まぐるしく舞ひ／＼した。

小母は民子の疲れを休ませるために、早くあちらに床を取つた。私も、いつものところに敷帳を釣らせたが、まだ本當に寝ようとする意味でもないのので、寝間着も着換へないで、その儘這入つてごろりとなつた。民子はあちらの方で手提袋を解いて、さしむき要る物を出したりしてゐた。

「はあれ、綺麗でございませうこと。あなたがお拵へなすつたのですか。へーえ。」とこんな事を言ひながら、下女が側で何を見つてゐた。

一でも、これはまだ何でもないのよ。もつとどんなりでも出来るわ。などと、民子は下女ともう心安らかに話してゐる。かうした風託のな

あけて、急に麗かな三月の日影になつたやうに、賑やかに暖かい或ものが感ぜられた。私は敷帳の中の巻に映る、蚊帳の目の影を見守りながら、民子のしつとりした黒い眼もとや髪の色を、何といふ譯もなく考への中に畫いてゐた。

その内に、私はいつしか、三千子の、日影を失つたやうな、薄暗い姿を目に浮べた。垣の向うでは夜作事にこり／＼と麥を搗く。

と、俄かに曇り出したやうな心持になつた私は、それから自分の書いてゐる作の事に考へ

移つた。疲れ果てて両も過敏になつてゐる神経は、よく發作的に私のムードを動搖させるのであつた。明日は八十二回が出る。さうして今日の続きの八十五回を書くのかと思ふ。まだ豫定の長さまでにはもう九十回も書かなければならぬ。かうした先を考へると、この調子でうまく體が続くかしらと心許なくなつて来る。

民子たちは、あちらで何か言つてげら／＼と笑ひ合つてゐる。何だかそれが、かうした私の心持を同情する事を解しない、淺薄な女たちといふ事を考へさせる。私は、

「民さん。」と苛々しく呼んだ。  
「はい。」と言つて立つて来た民子は、  
「お呼びなしたか。」と、まだあちらでの笑ひを顔に残してゐる。

別に用事があるのでもない。私が不安な事を考へる間、私の後に來て、私と同じ事を考へつ、私を護つてゐて欲しいやうな氣がするのである。私は昔の自分を書いてゐる。悲惨なお前の姉の事をも書いてゐるのではないか。——けれど、私がこの作に苦しみ心持が、どうして民子に了解させ得られよう。人にどうしてそのやうな事が分らせしれよう。  
一何の用事でもない。草臥れてゐるだらうから

もう早く寝るがよい。」

私はばつを造るためにかう云つた。

「はい。」と云つて民子は徐かに向うへ行く。

私はさう言つた後から、何だか物足りなくなつた。

私は先刻は、民子がかうして逃々出て来たことに、何か意義があるやうに胸を震かせたりしたけれど、考へて見ると、民子だつたのだ款の上の糞様のやうに生きてゐる女である。

私の底の心の憧憬に對しては何の足しにもならないやうな氣がする。私はどうしても私一人である。どうせ一人の自分だと思へば、やつぱり薄ら寂しくなつて来る。

一仕方がない。ぐん／＼書く、書くより外には何の意味もない。明日は愈あゝの若ざめた、千子と會ふところになしうか。

私は我ともなく坐り直つて、自分ながらくつきり妻せた胸首の兩方に、代々／＼指を巻いて見た。

四

民子は先程、下女と伴つて、外の方を見に出たと小母がいふ。

「もうあなた八時ですぞい。」と言ひつゝ、小母は朝飯のりの牛乳を沸かして持つて来る。私は

仕事に就く前に、後の山の上へ、運動にぶら／＼上つて来ようかと考へた。

私は今日書くべきシーンを考へ浮べつゝ、裏の無花果の木の間に抜けて、物置の後から山へ上つた。もう蟬はじん／＼と、今日も暑い午後

を見せるべく、日影に翳へ擴がるやうに鳴いてゐる。薔の花は、そろ／＼、叢に老い衰れて、

黄色い小草の花が暑く咲き續いてゐる。下から屋根の高さくらゐまで上ると、そこに小さい芋

出がある。元はこゝに何か家に附いた建物でもあつたらしく、礎だつたらしい四角な石が、掘り出して製の木の下に片寄せである。家を預つてゐる人が、こゝを打ち返して芋を植えたものである。

そこから上は低い、灌木や小松ばかりの草山で、女郎花がちら／＼交つて咲いてゐる。山と言つても、このあたりのは、屋根より三四倍高いくらゐの小さい丘の列りである。私はいつも行つては名む、山の背の女松の林の中を目指してぶら／＼上つた。

そこには私が丸太を打ち込んで作ったベンチがある。私はそれにかゝつて、薔草に火を點けた。こゝはまだ日の出ぬ先からの蔭になつてゐて、足下の草の葉には露がじと／＼にかゝつて

ゐる。物陰の松の枝の間に張り渡した蜘蛛の巣には、大きな女郎蜘蛛が一匹、固く蹲まつて眠つてゐる。時々、露がき／＼と鳴いて、木から木へ飛び移る。

前は稍廣く、薔の稲田で、ぐるりを遠く松山が取り繞つてゐる。その中程を、家の種な往來が淋しく横切つて、たつた二筋だけの針金を引いた電柱が續いてゐる。その道路が再び山に隠れる際に、小さい川が見えて、そこに固まつてゐる一部落の間に、一棟の白壁の倉が、ノツキりと、玩具の家を置いたやうに見えてゐる。向うの山の木立の間から、一筋の一部分が、果もな

い水の續きのやうに仄かに見え擴がつてゐる。稲は大分穂も大きく、延びて来たやうである。見渡す限りの田面の色は、青さの間に薄く黄ばんだ色が交つて来た。

朝日の影の濃つてゐる空は、いつしか段々と、摩訶子のやうな朝曇りに鎖されて来た。かうして、しばらく薄どんよりしたやうに見せるのだけれど、その曇りのすぐ後には、暑い光が壓搾されて隠れてゐる。低い雲がふは／＼と向うの水の果の方から深く動いて来る。これが段々に散つて了ふと、かつと暑い炎天になるのである。油煙が、その暑さを薄き出す先觸れのやうに、

苛だたく四方に落け顔へて鳴き立てる。

私は恰も、三千子を戀ひた日にある自分のやうに、今日のシーンに取るべき彼女を考へ盡きつゝ、そこらの女松の林の間を彷徨つた。今日は、自分が戀ひ求める三千子に會ふところを寫すのである。

それは、或ほろ、寒く曇つた夕方の事だつたのだけれど、かうした夏の日の下に考へ浮べれば、徳意く寒れた戀のやうに、重たい女の宿命である。あれだけ私に戀ひられてゐるのを知つてゐて、さうして、私に反く辛さに聞えつゝも、何事も知つてゐる母が、嫁入せよとたゞいふのを、どうして鎖にでも縛られた如くに、それを得ら振り切らないで、薄晴い約束に生れた女のやうに、黒い心をして人のところへ行つたのであらう。行つてそれきりで私を忘れて了ひ得る女だつたら、私も恨みと憤りとだけに呪ふに盡きて、あゝした不歸の痛苦の檻には閉されなかつたのである。嫁入した女は、私への忘れられぬ戀を見附けられて毒を飲んだ。私に出さうとする手紙を見られたのである。さうしてしばしが程は息も絶えて、だく／＼と吐いた黒い血が胸まゝの中に俯つ伏してゐたといふ。それをなまなか掛けられて、より暗い女となる

ために生き返つた。それから實家へ引き取られて、よろ／＼と病んでゐた。それを私は知らなかつた。別れてしまつたきり何事も私は知らなかつた。

その時、私は頭が悪いので休學して歸つて来て、二年會はぬ彼女を戀ひ求めつゝ、がじ／＼と痛い頭を抱へて家に籠つてゐた。三千子が歸つて實家にあるといふ事だけは一寸聞いてゐたけれど、裏切りをした女にその上何を求めよう。それに、祖母が前に手紙で以て、少し罰があるから、或時期が来るまでは、歸つて来て一切伯母のところへ行かないでくれといふ事を言つて来た。何で行くものぞ。戀しいに變りはないけれど、それは私を欺かない前の彼女を戀ひるのである。けれども同時に、あの女が私を欺く女とはどうしても考へられない。私を忘れて了ひ得るとは考へられない。私が彼女を戀ひる日には、別れてゐても、彼女もやつぱり私を戀ひてゐるやうな氣がしてならない。私にそれがどうかしい。それは自分の迷ひかとも考へぬではなけれど、ぢかに會つて訊くまでは落ちつかれない。私はどうかして會へれば會ひたい。けれど又一方では、あゝした彼女をいつまでも追ひ

求めるのが忌々しくもある。――

このやうな事を考へ惑ひつゝ、倉の横の露路を一人往きつ返りつすれば、屋根裏の巢に鳴が啼いて日はほろ／＼寒く黄昏れかける。壁の根の、葉の落ち盡した無花果の木の下に、昨日倉の中の、物の間から見出して、噛み裂いて投げ附けた赤い縮緬のきれが、まだ同じところに落ちてゐる。誰の持つてゐた切とも知らないけれど、その赤い、戀のやうに赤い色は、求めども會へない私の心を恨多く／＼り立てる。その、ぼつちりと土に落ちた、戀の色も黄昏れる。すると、裏の入口の方からとぼ／＼と、物の影のやうに這入つて来て、蹲けかゝるやうに近寄つてくる女は三千子であつた。三千子は私に向いて何と言ひ寄るべきかに壓へ退まれたやうに立ち止つて、顔に袂を押し當てて倉の壁に寄りかゝつた。何といふ哀へ盡したその不意な姿であらう。私は自分の目の迷ひではないかとぎよつとして立ちどまつた。その姿は何だ。髪はばさ／＼に解れて、烏の死骸でも見るやうに瘦せ落ちた肩のあたりに、悲しく腐れかゝつてゐる、どうしたのかと胸を痛かせて近づけば、女は壁に靠れておろ／＼泣いてゐる。

「どうしたんだ。何を思つてこんなところから這入つて来たんだ。お前さんはもう二度と、私のある前へは来られない女ぢやないか。」  
私は何を言つていゝのかを知らずに、悪々しうにかう言つて、身を顛はせながら女の肩に手をかけた。倒してやらうか。押し倒して置いてあつちへ行つて了はうか。

「何をしに來たのだ。」  
「知りません。自分でも何しに來たのか分りません。」

「お歸りよ。用事がないのならお歸りよ。誰かに見られ、また無い腹を探られるのだから。——二人の事はもう父までが知つてゐる。」

お祖母さんもみんなも知つてゐる。」  
「みんな私が悪いのです。」と言ひつゝ三千子は身も世もないやうに泣き顛へる。

「さうしてお前さんのその装は。——全で捨てられて出たばかりのやうな、だらしなを着物の着やうをして。」と、私もいつしか涙ぐんだ。

「病氣をしてゐるのか、三千さん。」  
「もう歸ります。放して下さい。歸ります。」  
「何か私に言ふ事があつて來たのかい。」  
「許して下さい。見られてはまたあなたに御迷惑をかけます。」と、よろ／＼と出て行かうと

する。  
「待てよ、三千さん。一寸待て。言ふ事がある。——と呼びかけると、ふいと後に小母が來てゐる。  
「どうしなしたのです、あなた。——今行きなしたのは三千さんでせうがの。」と言ふのである。

私は悪事を發かれたやうにどぎまぎした。  
「何でお前は人の後へそつと來て覗いてゐたりするのだい。己は何にもお前たちに探られるやうな祕密は持つてはゐない。」と、私は、半ばこの場のばつを消すために、わざと怒つて突つか

かつた。  
「何も、そんな悪氣があつてこゝへ出て來たのではありませぬ、悪く取らないで置いてくださいよのい。さうぢやないのです。そこまで倉の戸締りを見に來ましたら、誰かしら、しく／＼泣いてゐるやうな氣色がするものです、自分の氣のせむかとも思ひながら、つい下りて見たのです。——だけど三千さんはどうしてこゝへ出て來なしたのでせうぞ。」

「己は知らないよ、ふいと這入つて來たんだもの。」  
「まあ、どういふ三千さんでせう。何というて

來なしたのでせう。」  
「何だか己にも分らない。」

「困りますのぞい。もうどんな事があつても、三千さんは家へは來てはいけな」と言つて、お父さまがよく／＼言ひ附けて置きなしたのに。

あなたは何にもお知りでないけれど、實はいい、大變な事があつたのですぞ。言ひませう。こつちへいらつしやい。お倉の中ですつかり話しませう。あなたには隠して置くといふ相談だったのでせうけれど。」

小母はかうして、三千子の自殺の事を話したのであつた。後で考へ合はせると、三千子は、あゝして實家に歸されて、煩ひ附いて寝てゐたのを、自分で自分のする事を知らないものやうに、母の目から抜け出して、私の家までふらふらと出て來たものなのであつた。

今からいへばそれは最早十年近くにもなる昔の事だけれど、今でも考へ返せばすべての事があり／＼と目に浮んで來る。壁に泣き籠つてゐた三千子の、亂れ束ねた髪の下に、着よく瘦けた領足、二人の手を放して出て行くときの病み衰へた着い顔。——考へ足すからか、そのしめじめしい目に溜つた涙の粒さへ目に浮ぶ。

かうしたところを今日のシインに取らうかと

思ひながら、私はそこらを行き歸りした。

けれどもどういふ風に書かう。餘りに心ばかりが充ちて、うまく纏めて寫し出せさうにもない。またあの蠅の體に突つつかねながら、こつりこつり消しては書きし、容易に形をなさないのかと思へば、もう今から頭が痛くなるやうな気がする。

厭だ。もう何にも書きたくない。何も書かないでこの山へぐつたり轉んで寝入つてゐたい。

私は、とある椎の木の下、苔の上に腰を下して、浮き上つたその木の根に靠れて、破れたやうに目を閉ぢた。さうして、じん／＼と鳴く蟬の聲に頭を浸して茫としてゐると、先刻考へ浮べたシインの纏きがまた頭に纏つて来る。

今から言へば、もうどうだつていふ事だけれど、私はどうして、あの時實家に歸つてゐた三千子を自分のものにしなかつたらう。私は三千子を戀ひつゝも遂に決斷を得しなかつた。その後三千子はまた二度目の嫁入をして、最早どうする譯にも行かなくなつた。且つ私の心は、その女を執念く戀ひる程いつまでも若くはなかつた。私はその後いろいろんな女に出くはしたけれど、どうしても、もう眞から女に戀ひる事は

出来なかつた。そんな女がゐなかつたといふよりも、狂然に盲目で戀を追ふやうな早い日が盡きたのだ。これから女を得るとせば、それはただコンベンションである。けれども私はまだ、これきりでコンベンションに納め入れられるのは物足りない。その前にもう一度最後の戀をして見たい。しつとりと私を解する女を得て戀したい。

私は常に戀を求めてゐる。いづくにかたゞ一人、自分のために隠されてゐる女があるといふ迷ひに生きてゐる。私はそれを採し當てるためのやうに生きてゐる。きつとどこかに一人の女がある。ゐると考へずにはゐられない。けれどもいつそれが求められるのだから。かうして遂に自分の血は空しく老いるのかと思へば恨ましい。

私は今、自分の生れてからの、いろいろの仇なる戀の後に、この憧憬に苛々して生きてゐる心持を書いてゐるのである。自分の「……」の一篇は、このいら／＼しい寂しさを求めて強烈な表現を與へようといふクリエイションである。作の主人公としての私は、その求めが得られないために、昔の三千子を求めるのである。私の作はクリエイションに違ひないけれど、自分が

寫してゐる女の性格と、作中の自分が一人の隠れたものを求めて生きる心持とは、正しく三千子の性格と、自分自身の或ものを求めて得られない空虚なる悶えそのものである。私は時々自分のロマンティックな性癖を嘲つて、目覺めた現實に自分を引き入れることもあるけれど、ロマンティズムに生きてゐる私は、現實の空虚に這入れれば、たゞ、黒い息ある死骸のやうに何の意味もない。少なくとも、自分の率ゐてゐる祖母や小母たちの前には現實の自分として立ち得る。立たざるを得ない煩勞を辛うじて堪へてゐる。けれども自分の内心に喰ひ入る寂寥をどうする事も出来ない。このさびしさは何であらう。どうすればこのさびしみが亡びるのであらう？ 少なくとも忘れ得られるであらう？

自分は弱いのだと思ふ。意志が弱いのだと思ふ。けれども、これは時に自分自身が嘲る外には、人の評判を加へられたくない。人の嘲るのは許したくない。私は戀より外に自分以外のオンリテイを見出さないのである。嘲るものには石の如き幸福の外に何の力があらう。だから私は、自分の如きものを嘲らうとするものの中には、表面のコンベンションに従順な事によつて自らを守護して來た。私は教師なぞに

なつて、表面は人として素直に務めてゐた。けれども、内心では一人寂しさに堪へられなかつた。それで仕方なしに物を書いた。さびしい鳥が啼くやうに物を書いて僅かに自ら紛れようとしたのである。今度も、やはり學校へ出ながら書いて行くつもりで引き受けたものの、やりかけて見ると、他の事に力を分けてゐたのではとても十分に作を完成する事が出来ないので、たとと學校も辭して、このやうなところに引つ込んだのだけれど、勞作をする事も遂にやつぱり寂しい。餘計に寂しい。私は、どうかして自分の或物を求める寂しさをば、その求める或物の前に訴へたいがために——いづくにか一人隠されたる或女に——自分が求めても得られない或女の前に——わがさびしい求めの苦痛を告げたいために、自分の力量を疑ひながらも今度の作を受合つたのである。もし中途にして力が盡きたら、行き詰つて書けなくなつたら——その時には自殺でもする。自殺してわが流り倒れる血をもつて、書けない續きを塗り消して了ふ積りで書き出したのである。而も私は、これまでよりもなほたまれぬやうにひし／＼と寂しくなつた。體も過勞のために疲れ果てた。書いてもつまらない。訴へたつてどこにか通じよう。

もう苦しくなつて來た。それよりも、やはりコンベンションに従つて教師でもして小さいさびしさに生きた方がましである。私は書くのが厭になると、いつも平凡なライフを戀ひる。コンベンションに大人しくしてゐる事が、いかに厄介がないかを考へる。

私はもう飽きた。これで止められるなら止めてしまつて、一日でもいゝからぐう／＼と寝て見たい。何にもしないで朽ちたやうに寝て見たい。

私は朝からぐつたりとなつて、こゝに一人行き倒れでもしたやうに、椎の根に倚りかゝつたなりに目を閉ぢてゐた。

すると、向うの、山の續きの方に、民子の聲がするやうな氣がした。

「兄さん／＼。」とあちらの方から呼んでゐるやうである。用事があるなら黙つてこゝまで來てから言ふがいゝ。自分はいつも従弟妹たちから、兄さん／＼と言はれるのだけれど、何だか、今の民子の言ひ方にはアフネクテイションがあつて厭な氣がする。

私は黙つてゐた。

「ほゝ、隠れてらつしやるのよ。」と下女に言ひつゝ二人で近づいて來る。

「これを御覽なさい。」と側へ來て、

「まあ、こんなのが一ばい咲いてゐますのい。取りに行きませう、のい。ついそこまで行くとありますすけ。」といふ。

「知つてるよ。」と私は倦怠さうに立ち上つた。

民子は白い百合の花を、兩手で持ち切れない程束ねて提げてゐる。下の谷間へずん／＼下りて行つたものらしい。小鼻に汗をかいてゐる。小さい女は、濡れたた着物の袖で顔を拭きながら、向うに立つてゐる。

「まあね、ついそこのところを一寸下りると、岸のやうになつたところにまだ幾らでも重なり合つて咲いてゐるのですけど、そこへは怖くて下りられませんのい。」と、民子はいかにもかうした山が珍らしさうに、勢んだやうにさう言つたが、私が取り合はないものだから、間の悪いやうな顔をして、

「でも、見て綺麗な割に、あんまりいゝ匂ひはしないものですぞのい。」と、小さく言ひながら喚いでゐる。

「もう下りよう。それをお祖母さんのところへ挿して上げるといゝ。」と、私は努めてかう言つて袂の煙草を探つた。

「お前、どちらから上つて來たの？」

「そこるところをおつねに件れられて、こちらへかう上つてまゐりましたのい。」

「では今度はこつちから歸らうよ。」

「その方からでも路がありますのう。」

「こつちから下りると家の門の前へ出る。黍の苗があるだらうと家の外に、あの中へ下りるんだ。」

民子は黙つて附いて歸る。下女が、片方の草履の、切れさうな鼻緒を直しながら、その後について来る。民子も素足に草履を履いてゐる。

「この次にはいつか百合の根を掘りにまゐりませうか。鎌を持って来てこつちへ掘ると、ぢき一升ぐらゐ取れますよ。煮て食べるとずゐぶん甘しうございます。」

下女は、下りながら小さく民子に話してゐる。民子は、

「あゝ、この百合の根なの？ よく青物屋に賣つてゐるのは。」と言つたが、

「まあ、蝶の巢が澤山あること。厭らしい大きな蜘蛛が。——そこにも、それ。」

あれを取つて来て、竹の棒の上で、唾唾をさせて見ませうか。——え、え、竹の兩方へとまらせて、しつ／＼といふと寄つて行つて噛み合ひますわ。」と、下女はまだ十六ばかりの子供だ

から、こんなおきな事をいふ。

「まあ、さうしつと、民子は眞面目で聞いてゐる。そのうちに私も、或木の枝に蟬の抜殻の喰つ附いてゐるのを存延びをして取つて、手の平に弄びながら、とろ／＼下りを下りて行く。

「民さん。」

「はい？」と、後れてゐた民子は足早に近づいた。

「お前さんもかうしてはる／＼来てくれど、何一つ物が仕込んで貰へるでもないから、考へると掛らないだらう？」と私は訊いた。どういふ心持からそんなことを訊くのかを告げない以上は、民子には突然な問ひであつた。民子は

何と言へばいゝだらうといふやうな顔をしてゐる。私は何の續きからか、かうして自分の許に來た民子の身の行先といふ事を、考へるともな

く考へてゐたのであつた。

「女には學問なんかは要りやしない。その代りには、縫物などがよく出来んと駄目なやうな氣がするが、そんなものでもないかね。お前の姉さんは何でも上手に縫ふだらう。」

「さうですのい。でも姉さんはそれを一式にやつたんですけのい。と民子に、自分の思ふ儘に何事をもさせて貰へなかつたこれまでを、辭ん

で考へ浮べてもしたやうにいふ。私は、とにかくかうして何一つ身に附いたもののないこの

女を、せめては心の持ち方だけでも女らしいものにして置いてやりたいやうな、しみ／＼した氣持になつたのである。民子は考へ込んだやうにして黙つて附いて来る。これがこの先、どのやうなものになるだらうと思ふと、何だか女といふものの名前それ自身からが不憫なやうな心持をする。

私はそれから家へ上つて机に籠つた。外はそろ／＼日がじり／＼して來た。今日はどうしてもあそこを書かうと思ふ。

私は何事をも忘れて、暑い倦怠い力を、ペンの先に集めて書き出した。

五

私には苦作に暑い同じやうな日が、昨日、今日との區別もなく続いた。毎日一日分のがやつと出来ると、もう動くのも厭なやうにごろりとなつて、早く作の了る日の事ばかりを心に描いた。

私のあるところは、午後になると日がいきれが暑いので、例の襦の纏つてゐる一間の、がたがたになつた縁側に寝椅子を持ち運んで、大き

な樞の木の蔭になつた、仄暗いところに寝ころんで、何を見てもない目を、ぐつたりと、萬兩の赤く實つてゐる草の上に落してゐた。

祖母はこゝには蚤があるだらうにと、私のために厭さうに言つたけれど、家のものたちから隔絶して、ぢつと一人ゐたい私には、この部屋がどこよりもひんやりとしてゐた。そここの樞の木の下には、壊れた茶碗だの、古い雑器の殻だの、いろんながらくたものが、雨の足に塗れた泥を被つたまゝ、汚らしく轉がつてゐた。私はこゝへ来て寝椅子の上に横はるのが、害の間の何よりの安息であつた。民子はお母に言ひつけられて、蠶豆の煮たのなぞを小皿に入れて、楊枝を添へて持つて來たりなぞした。小母たちは暑い午後には、そんなものを拵へて食べたりしながら、臺所の冷々しい板の間に集つた。

私もこんな不自由な村にゐては、そのやうなものを貰つて食べるのにもれた。下女は時々朝の涼しい間に、籠を提げて町まで使ひに出された。

私は原稿が出來ると、よく自分で往來の郵便箱まで出しに行つた。切手を九錢貼つて置くと、午頃に一日一回の開函に町から來て取つて行く。さうして入れてさへ置けば、局では

それを書留にしてくれるやうに話が附けてあつた。

小母たちはこれといふ用事もないものだから、下女と民子と三人で、袴や冬物の、家で洗濯のきく不躰着なぞを解いてゐた。小母がこちらへ出て來ると、その絲の解れ肩が着物に喰つ附いて來るのを、自分は一々氣にして拾つて拾つた。時には、一人で所在なくなると、皆の

あるところへ行つて、無言のまゝ、柱に靠れなとして、女たちの仕事の手先を見守る事もあつた。よく民子を呼んでは、そこらの散らばつた物を片づけさせたりした。

民子は、私のいふ事を何でもさつきとした。一のい、あなた、これでいゝでせうかのい。一と、何をしてもさう言つて訊き／＼した。私には、かうして物の分る若い女が周囲の用を足してくれる事が、物珍らしいやうな、ドメステイクな、或物を感ぜさせた。

一民さん、來て見る。あんな大きな物を一匹で引いてくよ。ほら、ずん／＼行く。一

私は庭の蟻を指したりして、たわいもない話をする事もあつた。民子は掃除をし／＼つてゐても、すぐに側へ來て躍んでそれを見た。一あれ、もう一つが加勢に來ましたよ。こちら

からも一つ。――あゝして二匹で擦れちがふ時に頭を一寸突き合はせるのは、何か話でもするんでせうかい。と、民子は子供のやうな眼もとで見詰めてゐたりした。

又或時には、本棚から西洋の書集などを抜いて見せてやる事もあつた。二人對坐して話を引いて行く事の下手な私は、民子が側に坐つて、頭をこぼめて、大切なものを弄るやうに、一枚一枚を聞けて行くのを、ごろりと横になつた儘見つめてゐた。民子は手の綺麗な女であつた。その本の角を押へてゐる片手の、ぼつそりした指をのみ見てゐると、各の指の爪の形や、第二の關節から附根までの長さや、それ／＼の指で違ふ程合までが細かに目に這入る。民子はそ

のやうな事とも知らないで畫を見てゐる。私はよくこんな時に、自分が何か言ふべき事を得言はないでゐるやうな心持がして、譯もなくそれはする事があつた。何を言はうといふ事は明白には分らないけれど、何だか言ひたい事があるやうな氣がした。

一まあ、いろんなのがありますぞのい。と、民子は無心に見てゐる。

そのうちに私は、かうして二人でぢつと坐り合つてゐるといふ事が、小母たちに變に見えは

しまいかといふやうな心持がして来る。別に變に思ふ譯もないけれど、もしか、私が間違へれば、民子を側へ呼びたがるやうに見えても厭である。

「もう、その位にしてまたこの次に御覽よ。」とやがて私はいふ。

「どうも有難うございました。」と、民子はたしなめられでもしたやうに、それを尤のところへ歸して立つて行く。そんな時に、そこらに、あちらへ下げるものでもあると、それを持つて行けば、民子自身に取つても小母のゐる方へ歸るのに都合がいゝやうに思はれた。私は、時々自分ながら、いつも女の前にインディフレントになり得ない人間だといふ事を思つて、厭な自分を嘲ることもあつた。

民子が來てから、まだ四五日にしかならないのだけれど、一つところへ寄つてみんまで来る時などには、もう何日も一齋に居續れたやうな氣持がした。民子は小母を助けてせつせと働いた。

「中々よく氣が附きますぞい。あれで何にもいけれど、たつた一つ、どうもちよい／＼書生風な存在はところが出て、目に見えるところだけ小鶉並にして、自分のものの始々などをきつ

ちりおして、いゝがありますぞ。」と、小母は民子を譽めた後でかう言つた。

「どういふところが？」

「いゝえね、私が別にあらを探してあなたにとやかく隘口を利く譯ではないのですけれど、い。――まあ、下らん事ですわい。」

「下らんたつて悪いところは言つて直してやらなければいけないよ。」

「何、たゞ、あの人のものを入れるところが、一寸都合の可い場所がないものですけ、お祖母さんの押入の下を當分使つて貰つてゐるのです。が、何だかいつも行李の上へ、ちよい／＼脱いだり着たりするものを突つ突き込んで、ぐちやぐちやにして置いてゐなすのですのい。お祖母さんがそれを嫌ひなしてのい。」

「そんならお祖母さんがちかちかにさう言へばいゝぢやないか。入れるところが狭いから思ふやうに片づけられないのだらう？」

「さうでせうけれどものい。」

「下らん事ぢやないか。」

「ふゝゝゝ、だから下らない事ですけども言つたぢやありませんか。」と、小母は笑ひ事にしてしつた。

後で私は、小母から聞いたとはなく、押入

の中を少しどうかしないかと民子に言つた。そんな事でぐ／＼言はれるのは堪らない。民子は、

「はい。」と言つて立つて行つた。

併しこんな事はどうでもいゝけれど、私は時々民子に對して何を言ひたいのだらうかと、一人裏の方を歩き／＼考へた。裏には解した着物を鹽に浸して、灰汁桶から灰汁がたら／＼落ちてゐるやうにしてあつた。小母の大切な品には、胡瓜の花が黄色く咲いて、小さい胡瓜が五つ六つ實つてゐる。茄子の木は、まだ小さいながら葉に蟲が附いて赤ぼんでゐる。その根もとには、小母が肥料代りに魚の流ひ汁をかけたのが、水を欲しさうにかち／＼に乾いた土の上へ、鱗がきら／＼光つてゐた。民子に何か言ひたいといふのは、三千子の事が訊きたいといふ事なのであるまいかと、私はそんなことも考へた。

けれども三千子が今どんなになつてゐようとも、私がどうする譯にも行きはしない。私は無分別な三千子の悲劇のために、随分久しい間、それが皆自分の負はなければならぬ責任のやうに苦悶して、割け腐れるやうな重たい年月を送つた後に、やつと今あの女を忘れ得てゐる

のである。昔二人が、密く戀ひ合つた日の記憶だけは、いつまでも、早い代の物語を讀むやうに懐かしいけれど、その後の彼女の現状に附いて考へるのは不愉快である。私を惹ひて、あんなに死にかけましたと言へど、また嫁人をすれば二人も子を生んで、今ではあれで片附いてゐる。それは自由を奪はれた、古い型に作られた女の哀れさと言へば哀れでもあるけれど、もうあれ以來四五年になつて、どうにか落ちついてゐるものを、私がいかに心配したつて駄目な話である。當人も、耳や疾くに、返らない戀は忘れ盡して、現状に満足してゐるのかも知れはしない。それを私が一人餘計な心配をするといへば、私だけが拙らない損をする事になるのかも知れない。もし假りに、女が私に救はれたいと思つてゐるとしても、私がどうする事も出来ないのだとすれば、私は、女ももう疾くに痛みを忘れて、その日々に不平なく生きてゐるといふ、幸福な状態を想像した方が苦勞がない。何で今の三千子の事を詮議する要がある。訊きたければ何だつて民子に訊き得る譯である。訊いたつて一寸も可笑しい事は無い。それとは違ふ。三千子の事に關してではな

それならば何を民子に求めようといふのであらう。不愉快である。あんな女に惹き得る自分だとは考へたくない。やつぱり自分は隠された一人を追い追つてゐるのである。民子に對して時々見る、さつきのやうな心持は、隠れたる一人を推して與へられない、寂しい、心の影の投射である。そんな一人がどうして得られよう。ただ空想である。愚かな自分も空想である。私はこのやうな事を考へながら、家の周圍の蔭を傳はつてぶら／＼歩いてゐた。やがて、上へ上つて、祖母はどうしてゐるかといつて見る。今朝から一寸も口を利いて上げない機かなかつた。あの一間に一人でしょんぼりしてゐるのではないかと覗いて見る。祖母はそこに寝ころんで口の内で何か獨り言を言つてゐる。これは祖母の心持の平和な事を示してゐるのだけれど、私にはいかに、先のない老人の暗い生を語るものやうに不愉快に感じられた。

と、こちらの、入口に近い隅の窮屈なところに、民子が躑まつて手紙を書いてゐた。私が這入るのを見ると、書きかけたのを手の平で押へて、

「おです、兄さん、見なしては。友だちへ出す

のです。と、わざとらしく仰山に言ふ。誰が人の書く手紙などを覗くものか。民子は、行李の蓋の上に、どこから引つ張り出して来たやうな板切を載せて書いてゐるのであつた。ほつた汗ばんだ顔をしてゐる。側を見ると二行書いては裂つた書き崩しが、幾つもあるてあつた。足を崩してゐるまづみびを、開直して直した膝の上には、隠さうとしても、女子用文と言つたやうな、薄紙、表紙も取れた板が散つてゐるのが見えた。私がそれがいかに看護婦にでもなりかけた女の、無學なところを見せられたやうに驚であつた。けれどもそんな感傷な感想は、この女が私と同じ血を引いてゐる事のために——この女の不幸な過去のために、努めて掻き消した。

「訊くまでもないがお母さんへは、着くと直ぐ詳しい手紙を出したらうね。と、私は言つた。民子は、

「え。」と言つて、また今書きかけてゐるのを裂つて手の平に丸めた。

私は祖母の側へ行つて、

「お祖母さん。」と言つて對手になる。

「お前かい。書けましたかい。」と祖母は、却つて私を慰め顔にいふのであつた。

「書きましたよ。今日はよく書きました。――暑くはありませんか。」と私は祖母の肩を押へた。私にかういふ時には、祖母の外には、私の或分身はないやうに、いつまでもいたはり譲りたいやうな気がするのである。

「兄さん、私昨日のところを今日讀まして貰ひましたが、よく出来てゐますぞのい。」と、民子が口を出した。

「あのお爺ですか、あれは。よし子といふのは何だか家のお姉さんを見るやうですぞのい。」

と、底に何をか含めたやうな物の言ひ方をする。私に不愉快であつた。民子の言葉は、あゝした寂れな私の女が、その肉親の妹によつて嘲笑されてもするやうに私には響いた。讀んで欲しくない。私の書く事が何を言ひ現はさうとしてあるか分らないやうなお前たちには讀んで貰ひたくない。けれども私は、

「どこの姉さんに似てる？」と、口ではわざとさりげなく訊いた。

「だつて、さうぢやないかしらと思ひましたのい。」と言ふ。

「そんな重篤な事があるものか。女なんかはあんな小説などを讀むものぢやない。」と、私はそこを出てこつちへ来た。

もう何かか祭の花もそろそろ、閉じ時刻になつた。土の上の日向には屋根の蔭りが出て来た。私は何一つ自分の寂しい心を託するものがないやうにいら／＼した。

先刻の、民子が自分の小説を讀むといふ事が何だか氣にかゝる。あんなのが三千子だと考へさせたくない。創作である以上は、事件にもシテユニイションにも、いろんな修飾が附いてゐる。私は民子があれを讀む事を禁じようかとも思つて見た。

同時に、もし三千子があれを讀んで、彼女自身身のいろんな事が寫してあるのを見たらどんな氣がするだらうと、私は今ほじめてそんな事を考へた。三千子には、あれを讀んで一人寢かに泣いて欲しい。私と別れて出る時の、あの夕方のやうに泣いて欲しい。あの女に決闘といふものない、自分で自分の自由といふものを作り得ない女だけに、何だか、しつとりした女らしい女であつた、自分自身の影に似た悲しい作

を、しみじみと讀んで泣くべき女である。かう思ふと、私は何だか矢つぱり一度會つて見たくもある。私にもう何にも書きたくない。自分求めの寂しさを書いて、なほより寂しい自分を見るよりも、あの女のところでも戀ひ

て行つて、自分の側へ寄れば何が悲しいともなくさめんと泣くあの女の、亂れてかゝる髪や鬘ぎを見守つてゐたい。涙の雫を見入つてゐたい。

かうした心持は、私のかういふ心持は、私が遂に彼女を得なかつた事を悔いる心が暗に動くのではあるまいか。私に何だか、私の戀を失つたあの頃に續く日に、寂しく生きてゐてもするやうな氣がして来た。

私はいつしか柱に倚りかゝつて、戸袋の角にかけた籠の鳥を見入るともなく見入つてゐた。

やがて私は籠の下へ行つた。そこには誰が取つて来て捕したのか、前天の木の下の手洗ひに、山の横突から来る水の潤れぬのへ、書類の花の二つ咲いた藪が、長く引き抜いて来て挿してあつた。私は鳥の壺の粟の殻を吹いてやり、水入の水をも取り代へてやつた。籠の戸口を半分開けて、手の平を見せると、鳥は水を飲むのをやめて、ついと籠を出て私の手の平に棲る。

棲つて、ちつと私の顔を見つめてゐる。歌ふ事の出来ぬ白鳥ゆゑに、人の寂しい心も解し得るといふ事を告げるかゝやうに、寂しさうに、ちつと私を見入つてゐる。よく眠れてゐる何鳥

なので、自分が額を近く寄せても怖くない。その、扇子を扇めたやうな黒い小さい目に私の顔か寫る。寂しい私の顔が曇つて寫る。ちい／＼とよく啼くべき鳥なのだけれど、私が學校時代に買つて、飼ひ出してから二年になるのに、一度も啼いた事がない。家のものは鳥屋に居させたのだと實際的な事を言ふけれど、私は私のところへ来てから、急に歌といふものを詠はなくなつたのだと、子供の考へるやうな事を考へたい。この小鳥がこのやうにして私を見守るの

は、私の二つの時に亡くなつて、顔も知らぬ母の靈かなだが、鳥になつて見守るのだといふ事を、自分は十七八の時に、やはりかういふ白い鳥を飼つて考へた事があつた。その時には三千子と二人で戀に這入つてゐた。この鳥もいつしかかうして私を見守るやうになつた。さうして私は過ぎた昔の戀を書いてゐる。

今日はまたこれから夜へかけてもう一回書かう。書くより外に寂しさを紛らす方法は無い。書くより外に自分の生きの意味はないやうに寂しい。

私は手の平の鳥を握まへて籠に入れた。下女が跳足になつて、庭へ水を打ちに來た。私は黒く塵へられて溜つたやうな息を吹きなが

六

ら、再び心に信つた。

大雨が執拗く降り続ける。今日もびし／＼と激流りに吹きつけるので、どこも開け置いた事が出来な。家中が暗にじめ／＼してだだ暗い。例の墨の朽ちてゐる一間などは、じやあじやあと言かして雨が漏る。座敷の八畳もびだびだ漏るので、私はすつかりのものを、駕の下のつてゐるところの繼四畳に移して、そこで作をするのであつた。

座敷の縁側の並びは、雨戸を閉め切つて了ふより外はないので、元の玄關になつてゐる方の戸を開けなければ閉りが取れない。そこには障子が一枚もないので、座敷へ嵌まるのを持つて來たが、うまく合はないから、真ん中を開けて、両方一枚づつ、打ちつけて倒れないやうにした。その代り動かされもどうも出来ないので、變に冷たい單な風が來ても閉める譯にも行かない。前の作織の下の窪みには、外の壁を傳はつて落ちる漏水が、赤い色に濁つて擴がつてゐる。方々の掛戸などがたびし言つて糊障りで堪らない。

祖母のゐるところもきつしり板戸が閉めてあ

る。僅かに明り取りに開けてある部分には、障子がびし／＼に濡れてゐる。祖母は心持悪く寒いと云つて、毛布を被つて、蒸氣を減するためか、火鉢に火を入れて室の真ん中に置いて、片隅にどんよりと小さくなつてゐる。表の出口の土間から外を見ると、大きな雨の足が横しぶきに吹きまくられてゐる。向うの竹筒が、大浪の狂ふやうに風に搖られて鳴り立つてゐる。障の手前に續く田の稻は、へと／＼に倒れ重なつてざわ／＼と吹き亂れる。小母は暗い板の間で、夕方の葉の何をかこつ／＼切つてゐる。下女が手拭を被つて、背中に席を着て、びし／＼濡れになつてそこを往來する。何といふ厭な雨が續くのであらう。

民子はどこに歸まつて何をしてゐるかと思つて、

一民さん。と呼んで見たが返事がない。小母はそれが聞えても聞えない風をしてゐるやうに、あちらを向いた儘こつ／＼と庖丁を使つてゐる。

所在の盡きた私に、また四畳へうろ／＼と歸つて、一人寂しく寝轉んだ。家のまはりの立木の揺れるのが、私が唯一人であういふ中に聞はれてゐるやうに、ひし／＼と寂しく耳を

變ふ。私は、被れた頭に取りとめない事を考へては消し忘れて横はつてゐた。韓子の棧の、上の方を見ると、燈が二三匹、死んだやうにちつと點つぱ、棲つて動かない。私は墨の解れを捲つて見たりして、ぼんやりと考へ込んでゐた。

やがてそこへ、不図小母がやつて来た。鼻の先へ眼鏡をかけて、手紙の中身を持つて来た。

「あつ、あなた、御邪魔でせうけどいい、これを一寸読んで御覧なさい、お民さんのお母さんが、かういふ事を言つてよこしたしたのでござ。私はあなたには見せないで置かうかと思つたのですけど、それでも一應は見せて置きましたのでいい。」といふ。何を言つて来たのかと、面倒臭くそれを受取つて、窺ころんだ儘で披いて見る。

「何だ。こんなに満れてゐるぢやないか。一え、郵便屋が駄袋を滿らして持つて来たのが下まで浸みためですのう。どうも假名ばかり書いてあるよだから、いらいするばかりで已には讀まない。つまり一口に言ふとどういふ事か書いてあるのかね」と言ひつゝ、下らないところは飛ばして讀む。小母は肩にさうな、滑かない紙をして、ちつ

と一つところを見詰めてゐる。

「民はぶじにおたくにつきそろや。出たきりでなんのたよりもござなくそゆゑ、ひとりしんばいいたし……。何だ、民子は家へ手紙を出したと言つてゐたが、まだ着かないのかね。と私言つた。

面倒くさいのを我慢して讀んで見ると、意外にも、民子は伯母を欺して飛び出して来たのであつた。民子はこの月ばかり前から、伯母の方へ行つてゐたのが、不意に行李を拵つて歸つて来て、兄さんが見てやるから來いと云ふ手紙を下さつたから、行つてもいいか。突然なことを言ひ出すので、伯母は愕いて、どういふいきさつから兄さんがさう言つてくれたものか、いつも私には細々と手紙をくれるのに、今度の事に限つて私には何にも言はないで、民にばかりさう言つて来たといふのも變である、すつかりの事情をよく話してお聞かせよと言ふと、たゞそれ以上に何も無い、私もあんな醫者のところなどは厭だから、兄さんの側へ行はばどんなに任せかかも知れないといふ。それでは、一應、どういふ事か書いてくれなかつたか試いた上で、事によればお世話を願へればこちらも仕合せである、手紙を出して見るから返事が来るま

で待てといふと、それでは兄さんの感情を害するからいけないと言つてぐす／＼泣いたりして見せる。とにかく、それでは私も相済ませて來るところもあるからといへど、それは厭だ、餘計な人に知られてはいけないと無理なことをいふ。唯やみくもに行きたい／＼と頑張るだけで譯が分らない。それから中一日置いて、兄さんからあなたによく話して貰ふから、この事は誰にも言はずに待つてゐて下さいと素直にいふゆゑ、勿論それが當り前ぢやないかと伯母は言つた。民子は、だからともかく返事が来るまで、兄さんの方へ歸つてゐると言つて、午時分に荷物を持つて出て行つた。すると、その夕方に郵便が来た。今汽車で兄さんの方へ向けて立つ、旅費として三千子に口實を設けて二十圓借りた、これから、私が先で立派なものになるまであなたには何も迷惑はかけないから、その代りにこの金だけはどうかして三千子に拂つてくれ、かう書いてある。伯母は餘りの仕打に愕いて、物も言へなかつた。全で下等社會のあばずれものがするやうな造り口である。自分の子ながら全く呆れ果ててしまつた。

こんな事が書いてある。私も期か愕いた。まさかそんな女でもあるまいに、何か伯母が、驚

にしようとする考で、いゝ加減なことを作つたのではないかと、瞬間にはさうも思つた程信じかねた。

伯母は、私がどういふ積りであの子を呼んだのか、詳しい話を聞かしてくれといふのである。民子が私を欺して出たのは許し難いけれど、お祖母さんもあなたもゐるところへ、おしの子にも等しいあれが呼んだ事だから、行つてからの事は氣遣ひはしないが、それとも、あゝいふ太い奴だから、あなたの方へ行くのだと偽つて、他へでも行つたのではないかと思ふと、夜もおちおち寝られない。だれに相談も出来ないし、ただ一人で案じ通してゐる。どうか容子を知らして下さい。もしあなたのところへ無事に着いてゐたら、何分あゝいふものだから御厄介だらうけれど、よくよく叱つて下さつて、あの堂摺れた根性を直してやつて下さい。又萬に、つもさういふ事はあるまいが、あれでも三千子の事もあり、若いもの同志の間にはどんな間違ひが起らないとも限らぬから、民子があゝいふ呆れた奴であるだけに、いろんな事が案じられる。そこもよく氣を付けて下さい。あの子はともあなただのところに嫁つて貰へる女ではないのだから、なま中の事があると、どちらも後悔しなけ

ればならない事になる。雙方のいろ／＼のためを思ひ、あなたの返事が来るまで、私ほどこへも話さずに待つてゐる。人前へは、民子は、心安い友達のところへ逗留に行つたことにしてゐます。もし民子が勝手に押しかけたのであれば、直ぐにこちらから人を伴れに上せます。私の心配を察して下さい。

小母へ宛てた、かういふ意味の長い手紙であつた。

「困つたなあ。」と言つたきり、私はしばらく黙つてゐた。

「これが本當だとしたら民子はずぶん喰はせものぢやないか。あんな女がかういふ亂暴な事が出来るものだらうか。本當だらうか。」

「まさか伯母さんがそんな事を謔言におつしやりもしまい。——私はあの人々が来ると直ぐから、はてなと思つた事がありますのぞ。殿方には何にもお分りになりませんけれど、いゝ。あゝして、あなたの前へ出るとすつかり容子が變つて、大人しさうに澄ましてゐますけど、妙なところがち／＼見えますのぞ。一體この手紙に

「——さん／＼と書いてあつて、あんなお醫者さんのところゐたつて何とかなだあるのを見る

も思はれますが、お民さんはあの……」

「一寸黙つてゐな。」と私は小母の追求を諷刺化した。私もいつかの民子の手紙ではじめて知つただけれど、あれがあゝいふものになりかけたりしたといふ事は、伯母のためにもこの小母に知らせたくない。——といふのは、民子の家と知り合ひの醫者である。

「民子は今どこにゐる。」

「さつきから物置へ水が流れ込むので、つけねを手傳つて、赤土を握れて、下の寶石の隙間を閉して貰つてゐるところです。」

「一寸呼んで御覽。」

「まあ、そんなにお急ぎなさらんでも、伯母さんの方へだけ詳しい手紙を出して、一應安心させて上げなした上で、ゆつくり訊き出して見な

した方がいゝでせうぞい。あなたは何でも氣がお早いけい。またこんな事がお祖母さんに知

れでもししますと面倒ですから、お訊きなすなら竊とお訊きなさんと。——一體あなたが安請合

をなさるから悪いのですぞい。よく物事を訊き

糺した上でお引受けなさいから、伯母さん

の方ではあなたが誘き出したやうに取つてゐなすかも分らんぢやありませんか。私は伯母さんからの頼みだつてあなたがさう仰しやつた

のを本當にしてゐましたのぞい。」

「下らない事を言ふな。」と私は鋭く言つた。小母は私と民子との間に何か言ひ合せてゐてもするやうな事をいふのである。馬鹿な事だ。

「とにかく、電報を打つから、つねをやつて、この間の男を呼んで来て下さい。」

「何と言つておぢぢなすの？」

「無事に着いた。民子の事は安心するがいゝ。すべての處置は私がうまく附けるから待つてゐるといふ意味でいゝだらう？」

「さうですのい。まあ、さう言つて置きなした上で、眞と考へなせばのい。——併し、何にしても、もうかちなつた段に、お民さんを餘り非度い事を言つて責めなしてはいけませんぞい。」

さうすると私が伯母さんの手紙をあなに見せたのが悪い事になりますのい。」と愚かな事を言ふ。私は黙つて澁い顔をして、もう一度手紙の節々を讀み返した。

「おや、こゝも雨が漏り出しましたぞい、御覽なさい。それ、そこんところが。」

「併し愕いた女だね。」

私は何だかまゝ、喉はされたやうな、不愉快な心持を見守つた。

「小母さん。その新聞が積んであるのを少し

こちらへ寄せておくれよ。そこもほとく漏るぢやないか。」

### 七

私に電報を出したに行くものが来ると、ついでにそれを待たせて、小母に出す手紙をも書いた。

それには、要するに私も全く民子から欺されてゐたので、小母への手紙を見て愕いたやうな事だといふ事を認めて、民子がこの度の交渉のために寄越した二三通の手紙を封入した。

「これでも分る通り、あなたからの御依頼のやうに認めであるので、さうすればあなたの足しになるといふ事なら、及ばずながら引き取つて上げようといふ氣になつたのでした。それに元々私は、乍かに

つけて民子に同情してゐたのですから、私がどうか面倒を見てもる事が出来れば、私も自分の心配を一つ除く譯だし、

それで、快く引受けたのです。民子の仕打については、私が極くまで詰責するから許して下さい。併し、それはもつ後の

拳で仕方がないが、たゞ私のところへ受取つた以上は、もうこの上不都合な事は斷じてさせないから、私に任して置いて

下さい。前以て言つて置きますが、私は民子と私との事として永久に引受ける事は出来ません。たゞ當分預かるまでですから、そのところは儘くまで御承知をお願いします。出来る事ならば、民子が何か一つ、女として必要な事が手に附いて、よ

しんば嫁入をしてから夫を亡くしても、かつく、獨立して行けるだけの女になるまで間諜をした上、再びあなたのところへ歸りたい。それについては、私か學費

だけを遣ふ事にして、東京の知人に託するかも分りません。或は、民子の出づ一つで、この際直ぐに人をつけてあなたの

方へ送り歸するかも知れません。いづれにしても、あなたのところを出てゐる間は、私が安全にお預かりしますから安心して居て下さい。」

かういふ意味を、伯母に分るやうに書いて、局へ出させた。民子は何にも知らないで、洋燈の掃除をしたのを持つて来て置いたりして行つた。

私は民子が、よくあんな事が出来たものだといふ事には少々愕きもし、小母の前には、容易ならぬ事件だといふやうな顔をもして見せたけれ

ど、併し考へて見ると、私は民子の仕打を、伯母や家へ小遣が不都合がる程憐れたり悪んだりしてゐるでもなかつた。それはなせだか自分にも守らない。それよりも、私がこの女をこの先どうすればいいかといふ問題が、今はじめ一思つて置いたやうに考へ進はれた。進するがといふ腹もすつかり極めないで、たゞ引受けてやればいいやうに安受合をしたといふ事では、自分も今度の民子の失態に關して責任を分たねばならないやうな気がする。私に何かなし、自分のまはりが賑やかなるのを喜んで、それを幸に受合つたやうな気がして、そんなものの考へのないといふ事が、民子に對しても伯母に對しても、いかに無責任なやうに不愉快に反省された。併し引き取つてから面倒を見てやるといふ同情と決心とを持つて話をした事だけは事實であつた。少なくともあんな變なところにも置いてやる方がいいと考へて、民子自身のために受合つたのは事實である。たゞ引き取つた上でどうするかといふ、具體的な成算を立ててゐなかつたといふまでである。だから、これから篤と考へようけれど、民子のためにいゝんな點を思ふと、直ぐに向うへ歸されもしない。

第一、どこにかして置いてやれば伯母も助かるわけである。本人も、鈍ればまた確な目を見はしまし、同時に私に描らない厄介な事を引受けたもたといふ気がはじめ一浮んで来た。實は今度民子を見て、この女に被せゐたイリユージョンが、少々取れたやうな気がするところへ、あゝした下等な遣り口などの化粧皮が剥けて見ると、何だか私こそいゝ面の皮のやうで、あの女のしやあゝしてゐるのが小面倒悪かつた。面倒な手紙を書いて疲れた私は、またぐつたり寝ころんだ。知らない間に足を蚊に食はれた。烈しい雨の日もいつの間にか段々に暮れかけて来た。私はもう何を考へるにも餘りに疲れてゐた。夜になつても、まだ雨は烈しく降り續いた。「それで、この先をどうなさるつもりですか。いと、小母は心配さうに訊いた。「どうすると云つて、家で養つてやればいゝぢやないか。」「だつても、あなた、あんな事をして親を欺して出て来たものを、伯母さんに對してもいゝ顔をしてぐづくに置いてく譯にも行くまいぢやありませんか。一

だから民子の遣り口には私も憐れたといふ手紙を出して、民子からはじめ言つて来た手紙もすつかり入れてやり、私から酷しく叱ると言つて置いたんだ。私たつて、民子をこのまゝ黙つて置きはしない。私はこれを幸に、向うでもさうお言ひなすのですけ、人を連れに寄越して貰つて、あちらへ歸したらどうかと思ひますのぞい。置くと云つたつて、もういゝ加減な女一人ですすけのい。」「女一人だからどうだつて言ふんたい、一ですから、そのまあ言つて見れば、一私と出来合ひでもしようかといふのかい。」「私と皮肉な顔をして調弄つた。小母は眞面目に、「そんな事を決して、私が思ひはしませんけれど、實はのい、私はふと、伯母さんの手紙を見て、何となく氣になり出したんですのい。」「誰か聞いてゐるものでもあるやうに、聲を潜めて、「私のい：：その：：民さんはあなたの奥さんにもなりたい積りで、逃げ出して来たのではないかと思ひますのい。民さんの方でいつからかあなたを思つてゐるのぢやありませんまいか。」「そんな馬鹿な事があるものか。」「自分は心から苦々しくかう言つた。そんな事

は考へもしたくない。

「いくら思つたつて、あんなものが私の妻に出来ずかと」

「さあ、それですよ。それを思ふと、尙更今の内に何とかなさらないではい。民さんも不憫ですけれど……」

「そんな馬鹿なことはないよ。斷じてない。私は民子に思つて貰ふ器がないのだから、そんな氣で来たのなら私はそれこそ直ぐにでも突き返すよ。馬鹿にしてら。」と私は煙管の詰つたのを力を入れて吹きくした。そんな事は冗談にも考へたくない。

「それにあの人は縫物だつて、口でいふ程出来はしないのでござ。口ではいろんなことをお言ひなすけど」と、小母は何を考へた続きからか、こんな事を言ふのであつた。

「まあ、それでいゝから、あちらへ行つて下さい。そして一寸民子に來いと言つてくれませんか。」

「さうですね、もうお湯から上りなしたかしら。」  
小母と入り代りに民子が這入つて來た。湯から上つて、化粧をして、茶黄色いナスマシヤムの蓮花の花着を一輪、襟の目の麗々した髪に

挿してゐる。

「何か、御用、ございますか。」と、這入つたばかりのところ、手を突く。何喰はぬ顔をして、白粉なぞをつけて、いゝ氣な女心だといふ氣もする。

もつとお這入りよ。話がある。

「あれ、一寸見さん。太鼓が鳴りますぞい。

「水でも出たんぢやありませんか。」と、民子にちつと手を觸けた後、徐かに立つて來て、自分の背後に何か越つてゐるかも知らないものやうに、たゞ常の如く、そこらに散らばつた原稿の類しを取り片斷けて、洋燈の燭へ來て坐つた。

「ね、遠くの方でどん／＼鳴つてゐるでせう——この近くに大きな川があるのですか。」

「まあそんな事はどうもいゝ。それよりかお前さんはね。」と、私は手紙の一件を言ひ出さうとしかけたが、それともう少し待つて、或る止むを得ない時點が來るまでは、しばらく不問に附して置いてやらうかしらとも思つて見る。

私はこの女が私から詰問されて、ぐつと行き詰る心持が、自分の受ける責苦のやうに心に迫つて來て、罪を悔いてゐるものを尙追求してもするやうな、殘酷な或物が感じられた。民子

は、私に容子を見て、思ひ當りの事があるのか、い

つしか驚いて一驚を寂寂して了つた。

「何の事が分つたかい。」と言ふと、民子に聞かせるやうな目を、偷むが如くにちらと私に送つてまた俯つ附いた。

「さつきお母さんから手紙が來たよ。」

「かゝいひ出すと、私も流行に、この女のづうづうしい、女らしくない仕方が忌々しく考へ返された。何であんな亂暴な事をして出て來たものだらうかと、この女の品性のために情ないやうな氣持が強まつて來た。」

「お前は随分呆れた女だね。私はこの四年ばかりは、お前の平生のことを詳しく知らなかつたけれど、まさか、かういふ女たとは思はなかつた。お前さんは私を欺したね。」

民子はほろ／＼涙を出して、

「どうしてですのいし」と顔を上上げて怖れろ、私を見た。

「どうしてつて、お前はお母さんからの頼みだといふやうな事を言つて、私に承諾させといつて、お母さんのところは勝手に逃げ出して來たやうに書いてあるが、誰かい。お母さんの言ふのが嘘だらうか。」

民子は、それきり黙つてしまつた。

「どうだ。黙つておちや分らない。」

民子は急に、押へつけられるやうに泣き出した。

「泣かんでもいいぢやないか。どつちか言つてくれよ。さうぢやないのか。お前は、一昨日だつたか、その前だつたか、もうお母さんへ手紙を出したかと訊いたら、出したと言つて謾をついたらう？」

「いゝえ、出しました。…あの朝出したんです。」と、涙をばら／＼落して噎り泣きに泣くのである。

「駄目だよ。何であんな淫賣婦か何かが逃げ出すやうな事をして出て来たんだい。」

かう言つたが、私は人を責める事が下手なので一寸後が出ない。

「お前の遣り方は、余きり、淫賣婦だね。」と、同じやうな事を言つて、しばらく、民子の俯つ向いた額口を見守つてゐた。

と、小母がついと出て来て、

「のい、あなた、水が出てどこかが切れたらしいのですぞ。さつきから、向うの方の村で太鼓が鳴つてから變だと思つてゐましたら、その往來の方でも何だかわい／＼騒いでゐるやうです、つねを門口まで見に出しましたら、大

勢が松火を點してどん／＼走つて行くと言ひますのがいい。」と、追々にはこの邊まで流りでもするやうにいふのである。

「大丈夫だよ。この近所には切れるやうな大きな川はないもの。沼の水でも溢れ、ばだが、少々溢れたつて知れたものだ。この村までは二里もあるんだもの。」

「さうでせうかのい。まあ、水は怖ろしいですけどいい。ずん／＼来たらどうしませうぞ。」

小母は子供のやうな事を言ひながら尙もぢもぢしてゐたが、民子と私との對話を妨げないためやうに、それなり再び向うへ行つて了ふ。

さう言へば何だか垣隣の百姓家でもわいわい言つてゐるやうな景色がする。民子は袂を日に當てて俯つぶしてゐる。雨はじやり／＼と柵戸を撲り附ける。

「民さん、私は、お前さんがそんな事をするやうな女としてこゝにゐるのならお世話はしないよ。ね、おい。一體どういふ了見で飛び出して来たの？」

民子はしばらく黙つて涙を拭き／＼してゐたが、

「兄さん、何もかも私が悪うございました、どうぞ堪忍して下さいませ。」

かう言つて、また歸へて泣き出した。

「私は東京に一人たよる友達か来るのがあります、どうせ長くお兄さんの御迷惑はかけない積りで来たのでございます。」とこんな事を言ふのである。

「馬鹿。」と、私はむつとして噎鳴り附けた。

「何をいふのだ。今になつて私に厄介になるならぬの話をぢやないぢやないか。引き取ると言つて出て來させた以上は、何を今更だの厄介でないのもありやしない。お前はそんなしやあ

しやあした事を言つて、お母さんに對して悪い事をした事を悔いようとはしないのか。私を欺したり、私の方から來い／＼と言つたなんて騙

るやうなことをしたのをどうするか。馬鹿。お前は下等な女だ。そんな永く迷惑をかける積りだなんていふ下種ばつた挨拶があるか。向うへ行け。——行け。脚だ、そんな女と口を利くのは。」

私はついと痲癩に障つてつけ／＼かう言つた。皮を剥つて見ればかういふ下卑た事をいふ女なのでは情ない。

「もういゝからあつちへ行け。行けと言つたら行けよ。」と、私は稍言葉を和らげて言つた。

民子はしく／＼泣きながら、仕方なしに立つ

て行つた。

「何だか、叱り方が足りないやうな気がする。

もう少し徹底するやうに言ふべきであつた。私の妻云々といふ事も、それとなく、ぎつしり止めを刺して置かなければいけないかつた。併し、

そんな心配だけはなさうに思はれる。それは小母の邪推である。民子がそんな事を思ふ譯がない。民子は三千子と私との事を知つてゐる。そんな馬鹿な事はない。

私は一人、やゝ小降りになつた雨の音の中に坐つて、このやうな事を思ふ傍にも、民子があのやうな下等な、ひねくれた女となつて了つたのが不憫にも思はれた。私は氣の毒な伯母の事も考へると、何だか民子にもつとよく言ひ聞かして、ちやんとした女にしたいやうな氣がした。民子は何と思つて暮してゐるのだう。

と、俄かに三四町先の火の見えるあれだらう、半鐘がじやん／＼と、雨の中に鳴り出した。火事かしらと思つて立ちかけると、同時に、表の門をどん／＼と破れるやうに叩き立てるものがある。

「はい／＼。今聞けます。只今。と、つねが黄色い聲をして叫んでゐる。

「もし／＼もし／＼。」と、どん／＼叩く。

「何ですか」と叫びながら、自分も出て土間に下りた。

見ると、松火を持つて門を這入つて来た眞笠の一人は、私がよく局まで使ひに出す子供の父親であつた。

「利根が今夜にも切れさうだと言ひますで、萬一の用意に、濡れてはならんものを片附けて、荷物をつとぎなさらんぢや、いざといふ時に困りますでがすよ。こゝはまあ少しは高みになつとりますもんだで、水が来ても大丈夫でがせうが、あれでもこの三十年前には床の上まで来ましたでがすから。」

かう言つて、注意してどや／＼と引き返した。「何ですか、利根の水がこゝまで来るでせうか。と、私は追ひかけるやうにして訊いた。

「来ますのなんので。利根が切れると沼へ来るんでがすから。」と、一人が振り返つて言つた。一同は松火を先に立てて山の手の部落へ廻つて行く。

「おい、水が来るといふぞ。轆を上げると言つて来たんだ。」

「それ御覽なさいのい。まあ、どうしませうぞ。」と、小母はわく／＼して、

「お祖母さん／＼。お起きなさい。お祖母さん。」と騒ぎ立てる。

「まあ、そんなに騒ぐことはないよ。まだ果して来るか来ないか分らないんだもの。——つね、お前御苦勞だが急いで蠟燭を十本ばかり買つて来い。ぢきあすこの小店にあるだらう？」

蠟燭を何になさるのです。と小母が訊く。——だつて用意だもの。——それははい、が片附けるといへば大變ぢやないか。と、私はもう取りかゝらない先からうんざりした。

「民子。——民子はどこにゐるのかい。——」

「お民さん、そんなところに這入つて泣いてなすどころぢやありませんよ。家が漬るかも知れませんが、あなた。と、小母は、押入を開けて、重たい行李を取り下さうとするのである。

「そんなところまで水が来るものか。落ち附けよ、小母さん。」と言ひつゝ、片附けるとすれば何より第一に私の四疊からかゝらなければならぬと考へる。民子はまだ祖母のゐる暗いところに入つて泣いてゐるのであつた。

私に一々の物を片附けたりする事の面倒なのに／＼として、民子がさうして堂摺れたやうにしてゐるのが補障りであつた。中の間の洋燈の下を見ると、民子は柄の悪い友禰縮緬の切を

綴り合はせて、射突を縫ひかけ一置いてある。自分にくれるためであらう。そんな射突は厭だ。

それよりも本當に水が来るだらうか。

「どうする、小母さん。厄介だね。片附けると言つたところでどうすればいゝかなあ。もし畳へ水が上りでもしたら、どこへ行つて原稿を書かうね。」と、ぐづぐづして立ちながら、小母に相談をする。

「つね、何をしてくれるのかい、お前は。そんなにけるんとしてゐないで、こゝへ来て何か手傳つておくれよ。」續々なんか要らないでせう？あな。と、小母もどうしていいか迷ふやうな顔をして、私にいふ。

民子は一間の暗がりの中で、泣き潤んだやうな小聲をして、何にも知らないで寝てゐる祖母を呼び起してゐる。

「とにかくお前たちはお祖母さんの行方なんかをよく縛つて上げてくれよ。」と言ひながら、私は四疊へ進入つて行つた。

半鐘ほどほかの部落でもじやん／＼と鳴り出した。

(明治四十四年八月)

午後 (三)

傾けた盥には黒い汁が出てゐる。どんな顔をした女か分らないけれど、拙い着物なりにもしきちんと約ましい風をしてゐる。結うて間もない髪にほこりを溜らせてゐる。私はその袖振に覗いた、色の褪めたメレンスの薄裃の袖を見つゝ過ぎた。

何だか、こちらを向かせて見れば私のどこかで見えた事のある、そして私の好きさうな女だらうといふ氣がする。

と、そこに古けた格子戸の横つた家があつて、その戸口の横に汚い床屋の出先から取りはづして来たやうな、古くさつゝ、硝子戸が二枚、懸て懸つて立てかけてある。そばで、紙片に賣物と書いて貼つてある。硝子戸の内、日影の當つた事もないやうな黒ずんだ土間に、床の下から拾ひ出したやうな古下駄が一足脱いである。この戸をいくらで賣るのだらう。これを私を買へば、さしむき何にする事が出来よう。これを買つて大八車に積ませ

て、とこ／＼引いて行かせて見てもいい。何

處といふあてもなく、このやうなたを黒い筋を、ずん／＼引つぱり歩かせて、龍きたらその男にくれてやつてもいい。

何を私は考へるのだらう。町筋は行きつまつて、ぼろ／＼の寺の塙のところへ私へ来た。右か左かどちらかへ曲らなければならぬ。私は白足袋に泥が一面をね上つてゐるのを氣にして紙を出して拭いた。こんなところへ来るのに、このやうな取つときの衣脚を履いて来たのが餘計である。私は何のさうにかうしてぶら／＼あてもなく歩くのだらう。

私のムードは黒く寂しく沈んでゐる。何をか探し求めようとして得られないやうに底なし

い。

私は炭の缺けらで悪戯書をした塙を見廻して立つたまま、これからどちらへ行かうかと考へた。

と、一人の小汚い三つばかりの女の子が、ちびた大人の女下駄を履いて、小さいく／＼枕をちやん／＼の音中に括り附けたのが、水桌

汁と一緒に肉柱を噛みながら向うから来る。じく／＼になつた、車の轆の附いた上を、危さうに拾ひ歩きをしてやつて来る。

久さんの手紙に返事を出し後れた私は、午後に休みが出来た或日、いつそこちから出かけて見ようといふ氣になつた。

丁度、牧場の赤い荷馬車が驟へバタを積んで行つたと聞いたので、それが歸つて来るのを待ち受けて、乗せて貰つた。

膝の上まであるごはくの長靴を履いた馬車使は、荷物の上にかけるツツクの埃ひを振り出して、積荷箱の、後の方へ敷いてくれる、ざらんとした車の上には、赤い鼻緒の附いた、小さい女の子の下駄や、紙袋に入れた干雜魚が細て茶けたバケツに這入つてゐるの、正札の附いた柄杓などの、小食しい買物が、片隅に乏しく荷積まれてゐた。馬車が止まると共に、物見高い、小汚い子供等がぞろぞろ集つて来て、耳の長い馬の手綱に觸れたり、黒い帽子を着て、外套のボタンを掛けながら千んでゐる私を珍らしさうに見守つたりした。

馬車は私を乗せると、再び馬の頸のベルを鳴らして、黒字んだ一筋町をがたくと走せて出た。十一月の日影のどんよりした、陰氣らしい日であつた。それでも毎日何の興味もなく一人減入つてばかりの私には、かうした荷馬車に乗つたりして、單調なところから出て行くといふだけでも、一つの物さびしい變化であつた。

私は、言はゞ自分で好んで、わざわざかういふところに口を得たのだけれど、来て見れば何だか人がさせた事のやうに忌々しくなつた。ただ私は、どこへ行つて何をしても、自分自身がこれではやはり同じだといふ事が分つてゐるので、努めて我慢してゐるだけであつた。自分の性格に反對した、厭な仕事をしてゐるのが諷はしいばかりではな、さういふ外面からの反射よりも、寧ろ私自身の變調に疑はされてゐるのであつた。

私は久しくからのさびしい自分を亡ぼさうとする事に囚はれてゐた。どうしてかう餘日、

もなく、ひしひしと食ひ入るやうな寂寥に襲はれるのか自分にも分らない。人と上つ皮の口を利くのが、何よりも面倒くさくて堪らないので、出来るだけ交際といふ事をしないやうにして、一人で引つ込んでばかりゐた。さうして取りとも附かない事はかり考へた。

何だか欲しくてならないものがあつて、それが得られないからかうしてさびしいのだとも思はれる。それでもその欲しいものが何であるかが分らない。女でもない。女はたゞ薄べらな裝飾品であるより外には何等の價もない。そんなものではなく、何だか已に消えて得られない或物を求めていらしてゐるのだとも考へられた。私は夜一人のこゝ外へ出て、何をか探し求めて行くやうに、小早くから戸を閉めた、灯影の一つもない町筋をとほく歩いてゐる自分に氣が附いて、暗がりの中にぼんやり佇んだまゝ、考へて見ても、變な自分の解し得られないやうな事もあつた。

それでも寂しいだけは事實であつた。こんな時に、これが開けた町であつて、色彩のあるショー、ウインドーかなどの前を覗きく行つて、一寸したレストーランにでも這入つて、ガスの灯影を書き受けたテーブル、クローズに射をか

けながら、一皿の何かに、ウキスキーでも取る事が出来たら、それだけで、どんなにかかういふおげさくくれたやうな夜の内容を得るだらうにと、そんな出来もしない事を考へたりした。さういふ心持の下には、ずつと以前にたい或物を買つたと言ふだけの、一種の下等な女でも、何だか自分の得られない戀人のやうに戀しく考へ返される事もあつた。私に町へ来て以來、かうした、譯も分らない寂しい心持を餘計に腐らすためのやうに、厭な毎日を自分で拵へては見てゐたのであつた。用事がなければ外へ出て歩くのも厭であつた。出たつて行くところもなく見るものもなかつた。

私はかうして馬車に搖られて行くのにも、寂しい私の事を全く忘れ得る事は出来なかつた。たつた一本しかない電線の低く引かれた村筋を、私は、定めもなく漂泊して行く人のやうに遊ばれた。

一兩側には殆ど桑ばかり培られてゐる。何一つ見る價もない平凡な村だけれど、私がどういふサーラウンディングスを持つた町に来てゐるかを解するためには何でも意味があるやうな氣もした。

その内に馬車は村筋を離れて、小さい赤はし

れた木ばかりがばら／＼に生えた、手を拂り取つたやうな山に這入つた。

物の二十分間も、こと／＼と迂迴して上つて行くくと、下の村とは一段高まつた平地に出た。

氣附いて見ると、だだ黒い土質から赤がかつた土に變つて来たやうに思はれる。道の左右は、低い木立がところ／＼に固まつた、灌木と石ころとの交つた一面の草原が、淋しい狐色に末枯れてゐる。その中を、どこから出て来るのか分らない水が、うね／＼と歩み走つてゐる。何といふ花か、薄紫の小さい花が夥しく咲いてゐる。隔つて深い森の續きが、かうした兩方のバック、グラウンドになつて、仄黒い色に淀んでゐる。

やがて馬車は前を區劃つた森の中に這入つた。少しの間、日影の通らない、どんよりした陰になる。いつからの雨が乾かないのか、じくじくに水の溜つたところがあつた。木立の少しく杜切れたところへ来ると、先刻のやうな灌木の原が、弱い日影を受けて、ときは明るく擡がつて見えた。

すると、さういふところにたつた一つ、假小屋のやうな下手な葺草の小家が建つてゐるのがあつた。草原を切り開いた赤土色の小さい一郭

に、がさ／＼と掘り建てた、見すばらしい低い家で、外の壁も、塗りくしたまゝで未だじめ／＼してゐる。それへ、穴だらけの煤けた古障子が、細て折り附けて嵌めてある。家の前には型ばかりの小さい畠が作られて、土の固まりのごろ／＼したのも構はないやうに、乏しい葱がかち／＼になつて植ゑられてゐた。住んでゐる人はどこかへ出かけて留守らしく、空家のやうに戸が閉つてゐる。

變なところに家があるね。と馬車使に言ふと、何か用事かと聞きちがへて馬車を止めかけた彼は、その儘速度を緩めて話相手になつた。

この邊一帶には村も何もないのださうで、たゞこの原を開墾しにながれ漂うて来たものが、ほつり／＼あゝいふ出来合の家を建てて、少しづつ草地を拓いては、僅かに芋などを作つて生きてゐると言ふのである。私はさつきの住居の印象を目に保ちながら、かうして一生を終る貧しい農夫の、野鼠のやうな不自由な生活を考へつゝ行つた。

何だか寂しいところに来てゐる自分だといふ念が俄かに増して来た。考へて見ると、私が學校を出て、かういふ土地に就任して来たのが、どういふ約束だつたのだらうと思ふ。さうして思

ひも設けない久さんにこんなにして會ひに行くのである。人間といふものは、いつもは互にすつかり忘れてゐても、もと一たび接觸すると共に、目に見えない無形の絲が結びつけられて、永久に暗黙のつながりが引かれてゐるやうに思はれる。私は久さんを何年ぶりぞで考へ出し得たのだらう。久さんは私と小學校で同級にゐた、貧しい家の子らしい、黙り込んだ色の青い子供であつた。私はたと學校で同じ机に並んでゐたといふ以外には、久さんがどういふ家の子だつたのか、私が三年生で中學校へ這入つた後に久さんはどうしてゐたか、さういふ事も一向に知らないままで、それきりこの年まで一度も考へ出した事もなかつた。だからこの間私の勤め先へ向けて出し扱けにはがきをくれても容易にだれ／＼といふ事が分ちなかつた。

「私はあなたが前に來られたといふ事を聞いて愕きました。お久しうござります。私は表記の牧場で牧夫をしてをります。いつかお呼びしてもいいですか。私のやうなものが尋ねてゐるつても御迷惑ではありませんか。」

かう書いたはがきが來たのである。私はこちらへ來てから間もないので、そこに牧場がある

事も知らなかつた。私はこのはがきを見て、思ひがけない事もあるものだと思きながら、いろいろ久さんの記憶を回想した。それから牧夫とはどういふ等級の職業であるかといふ事も人から聞いて分つた。私は、何だか、久さんがさういふ人夫同様のものになつてゐるだけそれだけ、この廻り廻ひが私の感情を動かす事が深いやうに思はれた。二人の生れたところは、こゝからはそれこそ随分かけはなれてゐる。久さんほどどこからどうしてかういふところへ來たものであらう。——私は人の一生の約束といふやうな事を考へ續けずにはゐられなかつた。

私は馬車使が再び黙して急ぐ背中を見ながら、やがて森を出て、片側に柔の山が一面に續いてあるところへ來た。他の一方には、道路と柵に高い土手が長く限られてゐる。馬車の上に立ち上つて見ると、中はさつきいくつも見たやうな狐色の草原で、土手に近い小さい水たまりに、一匹の、手綱も何もない黒い裸馬が水を飲んでゐる。足と蹄とに綺麗な白い茸毛のあつた。放牧してあるのだと察しられた。

私は已に牧場の一角分へ來たのだと思ふと、急に久さんに對する感情がそはついて來たやう

な氣がした。第一に、私の心の上つて來る事は、汚い皮引でも履いて、貧しい人夫の群にゐる久さんを見る私が、昔の同窓を氣の毒に思ふプリゼンテイメントであつた。何だか自分が、かういふ出来事にはばかりのけはくしい外套や、キツドの靴などを着けてゐるのも、自分で咎められるやうで不愉快であつた。私が自分としては少し贅澤すぎる靴を付けてゐるのも嘲られた。

私はこんな氣分を見ながら、長い土手に滑うて運ばれて行つた。

二

私は牧場の事務所の門の前に下された。やはり土手を柵の代りに繞らした、灰色に古ぼけた低い、平家造りで、入口の硝子戸の毀れたのへ紙が貼つたりしてある。黒ずんだ、朽ちかけたやうな標札を讀んで、私は初めてこの牧場の會社組織の一つの會社の經營である事を知つた。

門の内にはいろいろな毀れた農具のやうなものや、腐つたやうな桐の切や、守造りのあとの席の切端などが取り散らかつてゐる上を、十匹ばかりの鶏がうるつてゐた。斜げた黒の小倉の腹を着た、小使らしい若い男が出て來て、上り

口の土間の壁に木札が懸つてゐるのを見てくれた。久さんは綿羊牧場の第三號羊舎といふのに廻されてゐるのださうであつた。

私は教へられたやうにそれを探して行くために、古い小家ばかり並んだ村の通りを北へ行つた。一町足らずの間、小汚い駄菓子屋や、木賃宿や、黒くなつた焼豆腐の煮しめに切りさしの鹽鮎などを乏しく釣した居酒屋や、がた／＼の床屋などが、何にもしてゐない家々の間にばらばらとあるだけで、再び雨側とも土手續きになつてゐる。その間に青いペンキで塗つた小さい郵便局と、門口に硝子戸を嵌めた二階造りの小綺麗な宿屋とが目になつた。往來は雨の日の車の跡が、いく筋も深く掘れ返つたなりに固まつてゐて歩き悪い。商賣をしない家々には、大抵が、門口に、木目のさら／＼に出た、割げた下し戸を下だけ下して、それ／＼垢じみた子供の着物などが引つかけたりしてあつた。

私は土手に沿うて二町ばかり行つて、左手に久さんのある羊舎の入口を見出した。中は例の草地で、正面に大きな樫の木が群がった林が一團まりをなしてゐた。這入つたばかりの横手に、いつか外國の雜誌で見た事のある、器械仕かけの耕作用の馬車が一臺、泥にまぶれたまゝ

で置いてあつた。私は樫の林の中で二つに別れてゐる路を右に取つた。さうして五六間も行きかけると、向うから、粗末な着物を着た二十前後の女が、さ／＼くれた髪に汚れた手拭を被つて手籠を抱へて出て来るのに會つた。私がそれちがつて行くのを振り返つて見てゐるやうであつたが、私がその曲り角を折れようとする、後から呼びかけた。

何をいふのかよく分らない。解せない顔をして立つてゐると、女はこちらへ引き返して来て、

「あなたは三號羊舎へお行きなさんでございませうか。」と物馴れない女のやうに訊くのであつた。血色のない顔をした、目のしめ／＼した淋しい女である。羊舎へは、この林を抜けてからでも四町ばかり行かなければならぬのに、行つても今誰もゐない。羊を件れてみんな出てゐるのだと注意してくれる。その、羊をつれて行つてゐるところはどこか、私が一人で探して行つては分らないのだらうかと訊くと、みんなそれ／＼異つたところへ行くので、どこにゐるか分らないといふ。

「あちらの牛の方を先に見て來なせ、その内には羊も追附こゝの羊舎へ歸つて來ませうけ。」

と、私をたゞ牧場の見物にきたものと思つてゐるらしかつた。

「それは困つたな。實は羊舎にゐる人に會ひたいのだが。」

「何といふ人でせう。」

「山下久二といふ、牧夫をしてる人に。」

「さうでございませうか。それならこちらにのみませう。私がそこまで附いて行つて上げませう。」

と、どうしてか久さんのゐるところを知つてゐた女は、かう言つて先に立つた。私は女に附いて今這入つた入口を出て、さつきの、郵便局のある方へ引き返して、或家の横手の小さい露路に這入つた。そこには牧場の役員の仕事らしい家が、杉垣に包まれて五六軒並んでゐた。女はそれはづれに私を待たせて置いて、芋畠の間を小走りに走せて、向ひの松並木の間に這入つて行つた。

私は時計を出して見た。町を出てから二時間かゝつてゐる。牧場に頼めば馬車を仕立ててくれるといふ事を聞いて來たから、歸りの事はどうにかなるだらうと考へた。

空には鈍い色の雲がちぎれ／＼して、弱い日影が射したり曇つたりした。見ると、私の行んだ杉垣の角に、コスモスの花が、もう咲きじま

ひらしく覗いてゐた。私は、そのほろ／＼した  
淋しい花の下に立つて待ち飽ぐんでゐると、き  
つきの女は、ちがつた右手の森の中から出て來  
て私を招いた。側へ行くと、

「この小さい路についておはりなせば、どこま  
でも一筋でございませう。さうすると廣い原へ  
出ます。そこへ出て見なすと羊があるのが見え  
ます。それを伴れてゐるのが多分あの人にちが  
ひありません。」

かう言つたやうに教へてくれて、女は蜘蛛の  
巣が顔にかゝつたらしいのを拂ひ／＼しつゝ引  
き返して行つた。私は用事のありさうな女に迷  
惑をかけたのを氣の毒に思ひながら、林の中に  
這入つた。何といふ鳥か形は見えないが、きゝ  
きと、小ささうな鳥が私の通る直ぐ側で鳴い  
てゐる。私はその小暗い林の間を抜けて教は  
つた原へ出た。

けれども何も羊らしいものを見出す事が出來  
ないのできよと／＼見廻してゐると、何町先  
だか、ずつと向うの方に小黒いものが群がつて  
ゐるのが見えた。ずつとこちらの片方の林の側  
に、一寸した裸の木が立つてゐるのへ、黒い半  
纏のやうなものが引つかけてあるのも微かに認  
められた。正面の薄れた森までは十五六町も

あるかと思はれる。ミルク色の雲の固まりが、  
ふは／＼とその森の上に大きく擴がつて、半面  
に弱い日を浴びてゐる。左右の幅は五六町ばか  
りに見える草原である。ぐるりを松林が取りま  
いてゐる。林は遠くの方になると、厚さもない  
薄黒い影のやうに見えてゐる。それがふうはり  
と、煙かなぞのやうに掻き消す事が出來さうで、  
それを拭へばまた同じやうな草原が果もなく見  
え續きさうな氣がする。原の中間あたりへ弱い  
日影が黄色に落ちてゐる。その明るみを後にし  
て、小黒いものの群がのそ／＼と影のやうに動  
いてゐるのであつた。

私はそれを目指して路もないところをとぼと  
ぼ歩いて行つた。黄ばんだ芝草に交つて茨の果  
がところ／＼に赤く固まつてゐる。紫色をし  
た龍鬚の密状の花もちらほら咲いてゐる。行く  
中に、ちぎれ／＼に漂ふ雲の影が、足もとを蔭  
らせてたり、再び明るくしたりした。

やがてふと前方を見ると、向うを限つてゐた  
森も、羊だと思つた影も、半纏をかけた裸の木  
もすつかり亡くなつて、私はたゞ草ばかりの果  
しもなく續く茫漠たる原の中に一人空しく彷徨  
うてゐるやうに見えた。私は一寸愕いて立ち  
止つた。氣がついて見ると窪んだ低いところへ

やつて來たのだと分つた。森の上に圍まつてゐ  
た雲はそのまゝに見えてゐる。構はないでずん  
ずん行くと、しばらくして、白けた薄の枯穂の  
列なつた上から、隠れてゐた森が段々に現はれ  
て來た。黒く群がつた獸の影も浮んで來た。何  
にもない草原で、あたりに比較を感じさせるも  
のがないためらしく、私が追々に近づいて行く  
羊の形體は、圍抜けて大きなもののやうに見え  
る。或は羊でなくて、牛ではないだらうかとも  
考へた。それでも牛にしては形が低くて太り過  
ぎてゐる。

と、その側の森の中から、洋服を着た一人の  
男が出て來て、羊の方へのそ／＼と歩いて行き  
かけたが、ふと足を止めて、羊の方を見てちつ  
と立つてゐる。それがやはり、並はづれの巨大  
な男のやうに見えるのであつた。久さんだらう  
か。二人はどう言つて挨拶をするだらう。久さ  
んでなかつたらどうしよう。——私はこんな事  
を考へながら近づいて行つた。

尙一町ばかりも行くと、その立つてゐる人は、  
さつきからちつとこちらの方を見てゐるのだと  
いふ事が分つた。その時にはその人の形も普通  
の人間の大きさに復して見えた。そのうちに向  
うからも近づいて來た。

「鳥井さんですか。」と沈んだ聲をかける。私はさう言はれなかつたら、それが久さんであるとは受取り得なかつたであらう。膝の裂けた、ぼろ／＼の汚濁の洋服に、古ぼけた茶色の鳥打帽を被つて何か遠入つたまぶ／＼した袋と、紐で釣した角笛を肩に下げている。雪も汗丈の低い、汚い羊飼であつた。私を乗せて来てくれた馬車使のやうなごは／＼した長靴を履いてゐる。

「きつとあなたに違ひないと思つて見てゐたんでしたけど……でもわざ／＼来て戴かうとは思ひませんでした。」と、久さんは昔の儘のアクセントで、口重にかう言ひながら、淋しい笑を漏らした。黒く目に焼けたその顔色には、私が子供の時の久さんに見た事のない、嫌しさうな感情が動いてゐた。

「あなたは どうして私を町へ來てるのが分つたの？」

私は子供の日の二人のやうにかう言つて、私から先に草の上に足を投げ出して坐つた。

久さんは町の學校へ通ふこの牧場の獣醫の子から聞いたのださうであつた。

「通ふといへばこの村からはる／＼出かけるのかな。」

「でも馬車ですけ、あなた。」

「往き返りとも？」

「馬車はいく臺もあるんですよ。」

二人はこのやうな事から話しはじめた。私は、それから何を言ひ出せばいゝかと惑はれた。

「あなたは一寸も變つてゐないなあ。随分久しぶりだけど、よく見ると同じあなただ。」

「さうでせうかの。」

「實際こんな思ひがけないところで二人が落ち合ふといふのは全く意外だつたなあ。」

私は久さんが改まつた言葉を使ふのを止させようとするやうに、わざと存在な口を利いた。

「あなたは變つてゐなさらんが、私の方はきつと見違へなさるに違ひないと思つてましたけど。」と久さんは後戻りをした返事をする。

「私は三年ばかり前に長い間ひどい病氣をして、もちつとで死にかけたんですがの。」

「こゝで？」

「こゝへ来る前にです。」

「でも體は昔よか餘つ釋丈夫になつてゐるやうだよ。」

「こゝへ來てからよくなつたんです。仕事と言つても、たゞかうして終日のんきな事をしてる

んですからのい。もう、置いてくれる限りはこゝを勤くまいと思つてるんですよ。」と、言ひながらポケットから安、雨切の巻煙草を出して口に銜へる。私は何と挨拶していゝか分らなかつた。さういふ言葉の裏には、これまでいろいろな事をして、随分華い日に出席つたのだといふ事が考へられた。

と、久さんはそれだけで自分の事はすつかり言ひ盡してもしたやうに、それなり話を換へて昔の小學校の先生の事などを訊き出した。久さんには、そんな、私がこの永年の間一つも考へた事もないやうな回想がいつも繰り返されてゐるのらしい。私はそんな話よりも、あちらに群がつてゐる羊の方に目が注がれた。私は羊といふものを今はじめに見るのであつた。私にそれまで羊だと思つてゐたのは乳を取るために飼ふ山羊で、これが本當の羊なのであつた。私は話が杜切れると立ち上つて、半町ばかり向うにのそり／＼動き廻つてゐる素直らしい灰色の歌の一群を見守つた。

「久さん、私一人で羊の側へ行つて見てもいいかい。」と言へば、

「そんなに珍らしいですか。」と久さんも氣を換へたやうに、

「それぢやとちらへ呼びますから、そこにゐなさい。」

かう言つて、肩から釣してゐる、豆腐屋の持つてゐるやうな角笛をぶら／＼吹くと、向うに閉まつてゐた羊は——恰もさうして命令を待つてゐてもしたやうに、こちらを向いて佇んでゐた二三匹が、こと／＼と歩き出して来るのに續いて——長い列になつてぞろ／＼とみんなやつて来る。この時まで私には気が附かなかつたが、その羊の群には小さい黄色の犬が一匹附き添うてゐて、動いて来る彼等を檢閲するやうに、少し離れた草の中に小さく立つて見張りをしてゐるのであつた。そのうちにみんなの列に後れた五六匹の羊が、十間ばかり置いて、後かゝるのそり／＼来るのを見ると、犬は急いでその方へ駆け出して行つた。すると、後れた羊は小首を食つたやうに足早に走せて、みんなの列の後に附いた。犬はそれを見るとまた走つて引き返して、先頭の羊の首を横切つて向うの側面へ廻つて、再び後まで行くと、それで安心したやうに、あとから草の上を踏ま／＼徐かに附いて来る。

「まの犬があゝして羊の番をするのかい、久さん。」

「あいつがわしたちの手足のやうなものですのうい。思ふ通りに犬がちやんと動かすんです。一匹でも迷うてうろ／＼してる奴があると、ちき喚き出して引つ張つて来ます。羊舎から出ると牧羊はたゞ懐手をして見てればいゝのですのうい。」

久さんはかう言つて番犬を手もとへ呼んだ。外へ出てからは羊のことは何でも一々この犬が獨りで始末をするのださうである。

「だから牧羊は女房よりも番犬を大事にしますい。牧羊なんぞの女房なら、叩き出してしまつたどこにか轉がつてるけど、かういふ犬はこの牧場に五匹しかゐないのですけの。」と、久さんは重たい口で冗談を言ひながら、犬の頭を撫でてゐる。

「あれでどのくらゐゐるの？ 数は。」

「あれだけが二百五十七匹です。牧羊全體では二千ばかりもゐませうよ。」

「三號舎といふのはどの位ゐるの？」

「さうですのうい。私の羊舎だけだと七百五十ばかりです。それが毎日三組になつて放牧に出るんです。」

かういふ話をしてゐるうちに、羊の先頭は久さんの足もとまで近づいて来て、命令を待つやうに立ちどまつてゐたが、間もなく先頭の二三匹が許されたやうに草を食ひ出すと、みんなも用事がすんだやうに、長く伸びてゐた列を解いて段々に密集して、思ひ／＼の方向に向き換はつてくつろいで休息する。或るものは地面へ鼻先をつけて、芝草に交つた、何とかいふ草に似た黄ばんだ牧草を選つて食ふ。中にはいつまでもぼんやり考へ込んだやうに立つてゐるものもある。のそり／＼大勢の間へ割り込んで歩くのもある。見てゐるうちに互に少しづつ勝手な方へ動いて行つて、段々と間が疎らになつた。

かうして目の前に寄せて見ると、丁度、青ぼけた灰色の羅紗を解して拵へた生物のやうである。體の色をぢつと見てみると、何となく舊約全書に畫かれた、遠い代の事蹟が聯想される。全で綿のやうに温順しい老い若けたやうな固まりである。非常に素直な動物で、互の間に争ひといふ事が一寸もないと久さんが言ふ。どんな事があつても、たゞ一匹である事の出来なだけで、いつも必ず幾匹づつかまつてゐる。獨り置くと非常に淋しがつて、悲しい聲を立てて鳴くのなさうである。

「これほど人間を戀しがる動物はありませんよ。そこへ行つて歩き出して御覽なさい。あな

たの行く方へ附いて行くから。」

かういふのに従つて、私は或一角にゐる五六匹を誘うて向うへ行つた。すると外の仲間が段々に見附けて、さつきのやうな行列になつて附いて来る。私は小学校の一年生の男女を扱ふ女教師のやうに、あとすざりをしながら導いて行つて、しまひには全ての前を率ゐて一町ばかりの長さの半圓を描いて廻つて見た。羊は一匹一匹、ちやんと私を了解してゐてくれるやうな心持がする。私は何だか譯もなく、ゆつたりした温かい気分が包まれて来た。いつもひしひしと食ひ入るやうな寂寥に浸されて、いら／＼しく生きてゐる私は、しばらく久さんと代つて、かういふ灰色の雲を收してたゞ一人でこの野原の中でくらしたいやうな心持がする。さうした方が却つてさびしさが忘られはしないだらうか。——私はこんな事を眞面目に考へながら、再び久さんのゐる方へ歸つて来た。久さんは何にも知らないで微笑してゐる。私は竊かに久さんの境遇が羨しくなつて来た。

二人はそれからまたしばらく草の上に横はつてゐた。

「もうそろ／＼羊舎へ歸りませう。汚いところですけど、私たちの小屋へ行つてお茶でも飲んで

くれませんか。」

「さうだね。羊の寝るところを見せて貰はうかな。」

「別に見るがものもないですけど、わざ／＼来て下さつたのに何の景もありませんか。」

「私ははじめて、こんなのんびりした気持ちになつたよ。何にも忘れてあつたと二人で羊を引つぱり廻した事は、これからいつまで経つても忘れられまいよ。」

私はかう言つて、最早間もなく入日となるべき日影が、向うの森の上の雲を照してゐるあたりを見やつた。私がさう言つた心持は久さんには徹しさうにもなかつた。

「ぢや私は外套を取つて来ますから。」と久さんは、それが引つかけてある木の方へこのくへ行つた。

やがて私は久さんと並んで羊の群を導いて、さつき来た方へ引き返して行つた。いろ／＼話して見たい事があるやうで、同時にこれと言つて言ひ出す事もない。私が話したいのは、考へて見ると、町で一人寂しい私の心持や、私

のしてゐる仕事についての不平である。けれども、さういふ事を久さんに話したつて分る譯もない。それよりも、久さんが今日までどこでど

うしてゐたのかを久さんのために訊いてやりたいたい気がするけれど、何だか、人に考へ出したくない記憶をほじくらせるやうな心持がして、深いつて訊く譯にも行かない。私はたゞ黙つて歩いた。

「今日私がこゝにゐるのを誰が教へてくれました。一應私の羊舎へ尋ねておいでたんでしたかい。」と久さんが思ひ出したやうに訊く。私はさつき女に出會つて、いろ／＼面影を見て貰つた事を話した。

「それではこゝのところに一寸した痣のある、色目の餘りよくない女でしたらうか。」と久さんは右の耳の後へ指をあてて訊いた。

「そんな事は分らなかつたけど、人のよささうな二十ぐらゐの女だつたよ。」

私はこんな事でも言つて久さんとの話を作るやうにした。

「羊をつれて出る人たちは、毎日どこといふ極りもなく、方々へ行くやうな事を言つてゐたがさうかな。」

「えゝ極つてゐませんね。日が出ると出かけて、どこでも氣の向いた方へ行つて終日ゐて来ればいゝのですのい。日が蔭りかけると羊の奴は獨りでずん／＼羊舎へ向けて勝手に歸つて行

きますよ。  
「ちやんと時刻が分るのだらうかな。」  
「それは天候などを見る事は早いですが、朝  
權を出す時に少し出過ぎるやうな事があるとその  
日はきつと雨ですけの。」

久さんはかういふ事をほつ／＼話した。夏な  
どは、うつかり木蔭に寝こんだりしてゐる間に、  
羊が急にのそ／＼歸りかけるので、大が愕いて  
吠えかける。それで目をさますと、遠方の森の  
上に雨雲が擴がりかゝつてゐるので、早速羊の  
後に附いて引き返す事などが度々あるといふ。  
牧場の廣さは二里に一里の面積を焼うてゐるの  
ださうで、その一部分には馬や牛や羊の食料  
を耕作する大きな畠もあつて、それへ種を蒔い  
たり刈入れをしたりするのをすつかり器械仕か  
けてやるのださうである。

私は狼羊についていろ／＼の話を聞きなが  
ら、さつき出て来た林のところまで歸つて来て、  
久さんが外套をかけてゐた立木を、遂か後に  
見返つた時、さきほどの女が、こんなところか  
ら、四五町も隔つた向うにゐるものを、どう  
して久さんだといふ見分けがつくのだらうかと  
考へた。久さんにさう言ふと、

「それは馴れてゐるものが見ると、一寸した恰好

のちがひでそれくらゐ分りますい。」と言ふ。二  
人が已に日の蔭ばんだ原を振り返つて、このや  
うな事を言つてゐる間に、羊はずん／＼せぎ  
せぎになつて林の中の小路へ這入る。後に固ま  
つて待つてゐる羊がばらけないうやうに、例の大  
がぐる／＼と周囲を廻つてゐる。

「あなた野葡萄を食べますか。」と久さんが不意  
な事を訊く。

「こゝらに澤山あるんですよ。」と言ひながら久  
さんは子供のやうに、深い灌木の間をばさ／＼  
と分けて、林の中へ斜に這入つて行つた。

三

私は久さんと野葡萄を食べながら、小店のあ  
る往來へ出た。もう馬車を頼むなら頼まない  
と、馬車が町へ着いて引き返して来るのが夜遅  
くなるがといふと、久さんは、別に何の面白い事  
もないけれど、用事さへなければ今、私のとこ  
ろへ泊つて行かないかといふ。明日早く、獸醫  
の子を學校へ運んで行く馬車で歸れば、勤務の  
方には差支へはしないだらうと言つてくれる。  
私も何だか林の中の小屋に寝て行くといふ、珍  
らしい變化を見たくもあつた。  
「少々遅くなつても、馬車の方は構はないです

から、一應羊舎へ行つて私たちの寝る小屋を見  
て下さい。あんなところでも構ひませんでした  
ら、蒲團だけは綺麗なのを借りて來ますけ。一  
それと食べるものが何にもありませんけ、氣の  
毒ですけど。」

こんな話をしながら、久さんは私を伴れて、  
さつき女に出會つた、門内の林の小路へ這入つ  
た。私は久さんの迷惑にさへならなければ、さ  
ういふ事にしようかとも考へながら附いて行つ  
た。

林の中を抜けて、三四町ばかりの草原を横切  
ると、木立の詰つた、少し高みになつたところへ  
來た。そこが羊舎のあるところであつた。

そこへ行つて見ると、林を開いた一區劃が、  
北と西とを高い木に塞がれて、薄黒い土の色を  
見せてゐた。

正面に、二十間ばかりの低い茅葺の小屋が横  
に延びてゐるのが羊の櫛であつた。その小屋の  
右角に、小さい二階のやうなもの附いてゐる、  
同じやうな茅葺の小さい建物がある。右手に  
開かれた地面は七百ばかりの羊が群がり得るく  
らゐる廣さに見えた。羊小屋の前には、羊に水  
を飲ませる仕かけがしてある。丁度水車へ導か  
れた、板の笕のやうなのが二列に引かれてゐる。

「羊はどうかしらう。」と試くと、

「もう獨りで小屋へ這入つてしまつたんです。

入口の開き戸を犬と羊がこつ／＼開けるんですから。と久さんは言ふ。右手の小屋には、降りたての白い障子が嵌つてゐる。久さんは私を導いて羊舎の眞ん中の入口から這入つた。十間ばかり置いて、同じやうな小屋が後にもう一棟建つてゐる。中には籠が兩側に向き合つて置んでゐる。久さんの愛持の羊は、右手の方の兩側に、一匹割に二三十匹づつ這入つて小暗く固まり合つてゐた。左手の方の半分は、まだ羊が歸らないでがらんとしてゐる。通り路の天井に硝子張りの明り取りが設けられてゐるけれど、兩側の窓が比較的高いので、そこいらがどんよりしてゐる。中央に例の黒色の犬が監督者のやうに前足を搖へて控へてゐる。こちらから見てみると、犬は籠の前を嗅ぐやうにして、二三間歩いては、またもとのところへ歸つて、蹲つてゐる。

かうして絶えず自分の見張るべき羊に注意してゐるのださうであつた。

「羊小屋といへばこんなもんです。見るものもありません。と、久さんは擧げなささうにかう言ひながら、時々立ち止つて、何をか調べ

るやうに、羊を覗き／＼して歩いた。さうして右手の端まで行つてその最終の區分に三四十ある角のある大きな羊を見せた。

「これはまた種類が違ふの？」

「どうしてですか？」

「だつて角が生えてるぢやないの？」

「これは牡羊ですから。」

「ぢや、あちらのはみんな牝かい？ 私はこの中に牡と牝とがあるのかと思つてゐた。」

「さうぢやありません。一寸この角を握つて御覽なさい。こんなにぐる／＼巻き附いたやうな恰好ですから、少しも敵を引き受ける武器にはならぬのです。先端だつてこんな方へ向いてるでせう。」

久さんは小暗く蹲つて羊の一匹を引き寄せて、私に角を弄つて見させた。

二人は横の出口から外へ出た。

「汚いところですよ、上つて休んで下さい。」

と、久さんは先に立つて、小屋の方へ行つた。

「これからまだ片附ける用事もあるんでせう。何だか邪魔をするやうな氣がするな。もう歸らうよ。これからまた度々出て来るから。」

かう言つて私はもぢ／＼した。これでもう馬車を頼んで乗つて歸つた方が、世話がなくてい

いやうに思はれた。

「さうですかい？」と、久さんはたつ／＼と尋ひ得ないで、躊躇した顔をしたが、とにかく一寸腰をかけるやうに、その小屋の、右角の一室の障子を開けた。そこは粗末な疊を敷いたみすばらしい六疊の間であつた。新聞を貼つた片方の壁に、こぼ／＼した未練の古い布子が一枚かゝつてゐる。その外には石油の箱のやうなものも反古紙で張つたのが、ランプ臺の代りに使はれてゐるらしく、ホヤだけ一つ載せて、正面の押込の前に置いてあるだけで、がらんとしたほど取片づけてあつた。

「どうぞ一寸上つて下さい。こゝは私が一人で貰つてゐる部屋です、だれにも遠慮は入りません。と久さんは、ぼた／＼した長い靴を脱いで先の上つて、押人から、穴だらけの、吉けた赤毛布を出して、四つに疊んで上り口へ敷いてくれる。同じやうな部屋がもう二つと、後に臺所がついてゐるだけの小さい一棟である。

「あなたは煙草を召し上らんからいゝです。い。と言ひながら、久さんは次の間の汚れた襦袢を開けて、自身のための煙草盆を持ち出して来て、毛布の側へ膝を揃へて坐つた。

「どうしようかな。馬車なら一時間半ばかりで

着くんだから、今から歸つたつて五時半には歸れる譯だが。」と私はまだ極めかねてかう言つた。こゝへ一晩でも消つて行くといふ事も久きに對して一つの同情になるやうな心持もした。

「この三號舎といふのが三つの羊舎のうちで一等のんきなんですから助かります。私の他には二人の牧夫がゐるだけですけ。」

「その人たちはまだ歸らないの？」

「まだそこらに出てゐるんです。この近くで放牧してる時には大抵は日が遣入つてから引き上げて来るのですから、こゝへ歸つて来て水を飲ましたりしてゐると暗くなつてしまひますよ。それから灯を點して食物をくれてやるんです。」

「それぢや今日あんたは私のために早く引き上げて来たんぢやないの？」

「いゝえ、さういふ譯でもありません。折々かういふ事もありますのい。」と久さんは頬をすばめて、煙の來にくい巻煙草を吸うた。

「羊に水をくれてやるんぢやないの？」

「何時も時間が來ると羊が獨りて水槽のところへ出かけて行くんですから。」

「水はどこから來るんだろ。」

「あすこのところへ竹の筧が來てるでせう？あれであの後の林の中から引くんです。」

「あの中に水の湧くところがあるの？」

「えゝ、土壘が大分高まつてゐますけ、そこへ横穴を突いて水を出すんです。こゝの臺所にも、この後の林から引いたのがちよびく來ますのい。つまりかういふ、水の出るところを擇んで、そつちこつちへ羊舎を立てたんですよ。」

「井戸は掘れないのかね。」

「井戸を掘ればずつと深く掘らなければなりませんから大變ですよ。」

久さんは煙草を喫みながらかういふ話の相手をする。こゝにゐる他の二人はどちらもまだ二十にならない若ものださうで、よその羊舎にゐると博奕を見習つたり、いろんな悪い癖を眞似るので、年の行かないものはこゝへ閉めて入れてあるのださうである。

「一女を取つたとか取られたとか、貰した金を返したの返さないのと、そんな事はかり言つて、獸のやうにのんきに日を送つてるのですけ、一日でも牧夫をするやと止められないつて言ひますよ。一寸も盛を使はないのですけのい。」と、もう殆ど吸口まで火が來てゐるのを、根元まで吸つて灰に插した。

「私のやうなもの、さういふ人たちに交れませんけ、一寸も騙が利きません。博奕も奪ひだし、酒も好かんし。」

かう言つて寂しく笑つたが、ヤがて思ひ出したやうに、

「まあ一つ火を掃へて茶でも沸しませうい。直きですから。」と次の部屋へ立つて行きかける。

「久さん、私にならもういゝよ。どうでも歸る事にしよう。あしたの朝早く立つたりするのも厄介だから、いつそこれで馬車を頼んで歸らうよ。」

「さうですか。どうもこんなところですから無理にお引き止めしても何だし。」

「さういふ譯ぢやないけど。またこの次に來たときにゆつくり泊つて行くから。——どうしても体みの前の日か何かでないとね。」

「ぢや少らく待つてて下さい。馬車を仕立てて來ますから。」

「すまないがさうして貰はうか。ともかく二人で馬車のあるところまで一緒に行かう。」

「さうですね。」

私は久さんの後についててくくと羊舎を出た。

「久さん、あの小屋の角の二階のやうなものは、あれや何？」

私は後を振り返りながら訊いた。

「あれですか。あれは物置でさ。」

右手の林の方を見ると、灰色がかつた鈍い空の下の方に、紙を通す弱い灯影のやうに薄黄色い太陽が、樫になつた大きな椋の木の間にごんよりと濁つてゐる。頭の疲れ易い私は、朝から終日仕事でもしてゐたやうに、そろ／＼目が痒くなつた。私はもう何にも口を利かないで、馬車の上でぞつと目を閉つて見たいやうな気がして来た。

「全く何の風情もありませんでしたぞのい。わざわざたづねて来て下さつたのですのに。」と久さんは、門を出て事務所の方へ行く途すがら、濟まなささうにかう言つた。

「そんな事はない。いろ／＼珍らしいものを見せてもらつて愉快だつた。今日程長く人と話した事は、こちらへ来てからはじめてだよ。」

「私も何だか言ふに言はれず愉快でした。私は羊をつれて出て草原へ一人ころんでは、よくいろんな昔の事を考へるんですよ。あなたが町へ来てゐなすと聞いた時には愕きましたぞい。」

「これからは私の方へも、出て来られたらちよ

いよいよ来なさいな。私はどういふんだか、毎日一人で寂しくつて堪らないよ。」

「まだ田舎に馴れないからでせう。」

「いゝや、さういふ寂しさぢやないんだ。」

かう私は言つたけれど、それだけでは了解され得る譯もない。

私は、さつきからこの割けこくれた小家の織子を三四度も通るので、村人はきよろ／＼と私を見る。私はまたかうして町のさびしい夜の中へ一人とぼ／＼歸る事を考へながら、久さんと並んで歩いた。

久さんは私を待たせて置いて事務所へ這入つて、何かそこで話を附けるらしかつた。しばらくそのまゝ出て来ないと思つたら、やがてあちらの出口から、ちやんと一頭立の鞍馬車を仕立てて、馬の口を取つて出て来た。

「それでは、今日来た途中に山をぐる／＼上るところがあつたでせう？ あすこの下り口まで送つて行きますせう。」

「あんたが？」

私は考へちがへてゐた。

「それでは私はいつそ泊つて明日の馬車で立つんだつたのに。私はさうだとは知らないもんだから。困つたな、それは。」

「なぜです。」と久さんは馬の下へ頭を入れて腹帯を直す。

「だつて久さんに馬車を囁かせては氣の毒だ。」

「あんな事を。私はこゝへ来るまでには長く馬車使をしてゐたんですから。こゝでも一年以上あれでしたもの。平氣ですよ。」

「だつてあなたに私を引かすのは濟まんぢやないの。」

「でも學校時代では二人が代り／＼馬になりつこともしたぢやありませんか。」と久さんは、俯のさびしい笑を見せて、手綱を掻い繰つて御者臺へ上つた。

「さ。」

「では乗らうか。」

「よがんですか。——急いで上げますけのい。もつと真ん中へ乗つて下さい。へ、出しますよ。」

と久さんは手綱をしゃやくつた。私は何だか二人の境遇の相異を考へて、久さんを同情しずにはゐられないやうな気がした。

かうして私は町へ引き返した。それから再び久さんに會ふまでには、私にはまた毎日寂しい日が續いた。

(明治四十四年十二月)

櫛

やつと一通りだけ取片附けたおとわは、髪だけそこ／＼に撫でつけて、通りの湯へ出て行った。

禮吉は、二階の小さい四疊の、間もなく黄昏れになる襦子の障子に、そこち穴が開いてゐるのを繕つてゐた。そこには、自分が始末をしなければならぬものが、まだそれなりになつてゐた。手紙の束やノートなどをごと／＼に押し込んだ行李の底から、やつと手鏡をさがし出して、寸法を見測つて半紙を切つてゐると、すぐ前の門口の往來で、おとわがこゝの家の主婦さんと何をかこそ／＼話し込んでゐるのが聞える。全て知らない人の家を間借りして、たつたさつき越して来たばかりなのに、もうあんなに

なま／＼立派なものをするのである。  
禮吉は、そんな事から自分の女の素性が少しづつ暴かれて行くやうな気がして、不愉快である。主婦さんのところから貰はせて来た飯粒

も、たつたこればかりではすつかりの穴を張るのに足りさうもない。それでもおとわは平氣で出て行つてしまつた。こんなつまらない事までがじれつたくて堪らない。

この女と一緒になつてから、最早かれこれ半年ばかりになる。その間いつも同じことを叱つたり諭したりして、いろんなところを直さうと努めて来たのだけれど、まだ容易に自分の欲するやうな女になつてくれない。所つ中下らない事が癖に障つてくさ／＼する。考へて見ると、自分が戀にすべてを忘れ盡して、甘い日向に浸つたやうな夜書を、たゞうつとりと暮したのもほんの僅かの間であつた。向うでも、こんな私だとは思はなかつたやうな點も色々あるだらうけれども、こちらはそれ以上に、餘計な下らぬいものを掴んで来たやうな気がしていま／＼しい。今で思ふと、後ではこのやうな心持を見るのが、前から暗示されてゐた。自分が、自分の求め得る正當な女を捨てて、こんな變なものを引き入れたのが悔いられる。

この近頃は、おとわのする事が一寸した事まで、一々目ざはりで堪らない。この間まで二十日ばかりも入院してゐた禮吉は、病後の衰へた體のまゝでいろんな事に頭を使つたため、五六日前からとき／＼不眠症に襲はれてゐる。右の耳は全て聾したやうに塞がつてゐる。今日も體に少し蒸があるやうで、何をするのも不愉快である。平生怠惰けてばかりゐたところへ、卒業試験が目の前に押し迫つて来たので氣が氣にならない。おとわは、私はどうしてもあなたの氣に入るやうな女にはなれさうにもない、私がかつての私になつて、口にも出さずに一人隠して戀ひ入つてゐる方が、あなたに取つてもどんなに仕合せだか分らない、もう、これだけ伴れてゐて貰へば十分だから、どうか歸してくれと愚癡をいふ。自分に對してすまないと思ふ心持は分つてゐるけれど、そんなことを言ひ出すだけ、自分に對する執着が少ないのが飽き足りない。

さうかと思ふと、こちらが課業に追はれて一間に籠つてゐると、おとわは、自身のした事が氣に入らないために相手にされないかのやうに、目に涙を溜めて、一人しよんぼりと坐つて考へ込んでゐる。女といふものはどうしてこんなに面倒なものだらう。おとわに物を分らせるために

は、どれだけ手数がかゝるか分らない。しまひには小五月繩くなつてしまふ。自分はたうと、自分の求めるやうな女を得ないで、一生このやうに、砂塵の中を通るやうながじ／＼した気分ばかりを見て死ぬのだらうか。何にも言はないでも、一々こちらの心持を了解して、重ねて切つた二つの形のやうに、きちんと自分と併せてくれる女は得られないのであらうか。

どた／＼した片附けに被れた禮吉は、半分まで強るともう厭になつて、それなりそこへごろりと寝そべつたまゝ、いら／＼した暗黒な心持の中に、いろんな取りとめもない事を考へた。

板圍ひの直き外の往來を荷車がどた／＼通る。禮吉はさつきからいつまでもぼんやりと天井を見て寝ころんでゐる自分が附いた。頻りに何をか考へ入つてゐたやうだけれど、氣が附いて見れば何を考へてゐたのか自分にも分らない。たゞ不安な暗い心持が、冬の夕方の蔭ばみのやうに自分を包んでゐる。何か、無くてはならない物を求めて得られないやうな、何事かの悔い入られるやうな氣分が、譯もなくただ黒く湧き上つて来る。何だか窩かに罪惡を犯してゐるやうな氣持もする。利己的な、残酷な事をした後のやうな心咎めが感ぜられる。どう

してであらう。どうした譯で、こんなに自分で自分の罪を數へ立てるやうな氣分を見るのであらう。

それはともかく繼母からあれなり返事が來ないのがじれつたくて堪らない。たつたこなひだけあれだけ取つたばかりだけれど、いろんな事を使つてしまつて、おとわの手にはもう一圓もあつかないかである。明日は例の奴がまた催促に來るに極つてゐる。人の足元を見通して、僅かばかりの借りをせか／＼言つて來る。あいつが來るとおとわはおど／＼して私の顔ばかり見てゐる。やつて來た相手に對してよりも、もちもぢしてゐるおとわに突つ突かれるやうな氣がして忌々しい。繼母がよく金が要ると言つてくよくよしてゐる顔も目に浮ぶ。早く學校を出てしまひたい。さうして、どうにかかうにか、自分で二人の生計を立てて行く事が出来るやうになつたら、繼母に對してどんなにかさつぱりするだらう。それには何が何でも試験をうまく切り抜ければならない。早く耳を直してすつとした氣分になつて調べに取りかゝりたい。

禮吉は寝ころんだ目に、行李に押し込んであるノートを見つめて、うんざりした心持になつてゐた。

と、その行李の下に散らかつてゐる手紙の中に、おとわの手紙が一本目に附いたので引き出して見る。目附さへ見れば、これ／＼の時の手紙だといふ事は禮吉にはちやんと分るのであつた。この手紙は、もし今宵も出掛つたらどうしませう、私はもう立つてもゐてもめられませんと言つて來たあの手紙である。おとわが自分に對して不安を感じ出して、自分と外で會ふのを避けようとするのだと疑つた禮吉は、約束したなりおとわのところへは行かないで、近くの寄席へ長唄を聞きに出て行つた。おとわと會つたところで何になる。體に觸れる戀はしないといふ事はこちらもはじめから極めてゐる。自分の求める戀に通俗な價を付けられるのが厭きに、そんなそぶりは誰にも見せたことはない。會つてもどうするでもないのに、何のために會ふのかといふことがおとわにはよく分るまい。それが分るまでは會はないことに極めよう。――かう思ひながら何だか物足りない心持を見ながら、寄席からとぼ／＼歸つて來ると、禮吉は自分を待ち焦れて出て來たおとわと、ふいと家の前の暗い夜の中であつた。おとわは家へはもとより得ず遣入らないで、寒い夜の往來を、一人もぢ／＼してうろついてゐたのであつた。

その夜二人は、たうとかうなるべき二人になつてしまつた。おとわは羽織をぬいで坐つたきり、ちつと顔を伏せてゐて、いつまでも帯を解かうとはしなかつた。さうして、そのうちに一人さめんと泣き出した。はじめて女となる夜の恥らひに、何となくためらひ泣かれるおとわが頬には鬚の後れ毛が一筋哀れにかゝつてゐた。瘦せぎすな體にしんみりと似合つた、何とかいふ襦袢の着物の胸に、黒緋子の片帯から、赤い縮緬の帯揚げが小唄のいくさりのやうに覗いてゐた。

おとわはやがて息もたえぬに、亂れた髪を被つて目を閉ぢてゐた。禪吉は、おとわが何にも言はずに泣いた後に、わがなすまゝに女となつて寝入つた時、哀れに、もうさきん、どんな事があつても一生捨てはしないと心に誓つた。禪吉は平生おとわに對して口やかましくつけつけ言つてばかりゐるけれど、かうして二人が一つになるまでの事をあれこれと考へればおとわも哀れにいちらしい。

あたりは見る／＼暗くなつて来た。自分一人、どのくらゐの間こゝにかうしてゐたのだつたらう。何だかおとわの歸りの遅いのが氣にかゝる。薄暗がりに一人かうしてゐる

自分の事には氣も置かないで、ゆつくり歩いて歸るところを日に晝けば小さびしい。何だかまた熱が出たやうで氣分が悪くなつた。

六疊へ下りてランプを探したけれど、そこらには見當らない。縁側の開き戸をあけて見ると、ランプはまだ掃除がしてないなりで、ほやも黒くくすぶつたまゝ押し込んである。油壺にも石油の罎にも油がない。

禪吉はそれなり縁側に立つて、しばらくぼんやりと、暮れて行く土の上を見てゐた。そこには一本の桐の木と、南天が一株植つてゐる外には何にもない。いかにもみすぼらしい裏町のやうな、どす黒い土の上に、引つ越して散らかつた反古紙などがわびしく轉がらつてゐる。縁側の片隅には、おとわが、こゝの家で借りたらしい薄べりを、二つに疊んで敷いて、その上に炊事用の石油こんろやバケツや、小さい箆や、筵などを置き並べてゐる。そこいらに釘がないので兩半や洋傘が戸袋の側を立てかけてある。禪吉はその下に置いてある新聞紙にくるんだ自分の靴をそのまゝ開き戸の中へ片づけた。

こんな事をしてゐるところへ、おとわが裏口からこそ／＼歸つて来た。

「どうも濟みませんでした。歸りにいるんな買物をしたものですから。――これをそこへ上げといて下さいまし。私下駄の緒を切つたんですの。足を洗つて来ますから。」

かう言つてあちらへ行く。風呂敷包みの中には何かごた／＼這入つてゐる。

おとわはやがて界の襖を開けて、向うから上つて来た。中學へ行く男の子とたつた二人で暮してゐる主婦さんは、もう小早に食事も済ましたらしく、食卓の上に洋燈をつけて、一人で読本を讀んでゐた。

おとわは急いでランプを燈へて灯を點けた。「お前、何をこた／＼買つて来たの？ 家から例のが来るまでは、なるべく儉約してゐてくれないと困るがなあ。」

禪吉はおとわが風呂敷を解く手元を見ながらかう言つた。金があると、何の後先もなく下らない物を買つて、こちらの要る時に少しくれといふと、もうこれだけしかないんですのにと、困つたやうな顔をするのが癖である。禪吉は電車にも乗れないで、學校までてく／＼歩いて行くやうなことが變度もあつた。

「何だ。コーヒー茶碗かい？ そんなものを三つも四つも買つて何にするんだ。」

「でも安かつたんですわ。お客さまがいらつした時に、あんなもので紅茶なんか出すのが變ですから。」と、しまひにはおど／＼と口の内でかう言つて、偷むやうに人の顔を見る。髪を解いて櫛巻にして町家の女房のやうな恰好をしてゐる。禮吉は厭な顔をして、おとわが火鉢に炭を繼ぎ足す手先を見つめてゐた。おとわは、浮かない顔をして、そこへ小鍋をかけて湯を注した。何かさいに煮るものを買つて来てゐるらしかつた。

「これから飯を焚くのか。」  
「いゝえ。もうお主婦さんが焚いてくれてたんです。」と陰氣な返事をする。

「何をそんなに／＼してらんだい。」

「直きにあんな事を仰しやるわ。どうすればいいんでせう。いつも何かといふとちぎつ／＼してらつて仰しやるけど、私はかうした陰氣な性分なんですから。」と涙ぐんだやうに下目になつて、指先で襟元を弄つてゐる。

風呂敷にはまだ新聞に包んだものがかき張つてゐる。何かと訊いてもおとわは黙つて、一つところを見てゐる。出して見ると、二人の不斷ばきの下駄を買つて来たのである。

「とわ、また持つてつたね。——もうぢき来ると

いふのに、それだけの間がどうして待てないのだらう。だからお前は下種な女だといふんだ。女だつてらで、あんなところへ出遣入りするのを何とも思つてゐやしない。おれはそんな眞似をしてまで下駄を履くよりか跣足で歩くよ。お前は何でも見つともないといふけれど、假りに見つともなくたつて何だ。私はまだつまらない書生ぢやないか。どんな下駄を履いて歩いたつて何でもないぢやないか。」

禮吉は先のやうに、下女を置いて一軒借りてゐたときとはちがつて、襖一重でこゝの家のものがゐるのに氣を置いて、驟くやうに小聲でかう言つた。

「下駄が見つともないよりも、眞つ書問あんなところへ平氣で出かけるやうな女を伴れてる方がいくら恥かしいか知れやしない。お前見たいに一寸した不自由が慄へ切れないやうな性分では、これから先々私が一人で困るのが目に見えてゐる。お前たちはもとはろくでもない家へ生れた癖に、金なんていふものは人がくれるものだと思つてゐたんだから堪らない。たつた一日も一文なしで暮す事が出来ないやうな女と伴つてゐたんでは、生涯私の仕事は出来やしな

ど金にはならないんだ。それに今から一人前の暮しを標準にしてあれこれ言ふやうなお前では先々が不安でたまらないよ。」

禮吉はまたいつもの同じ事を言ひ出さずにはゐられなかつた。

「おい、下駄一足ばかりの事でそんなにつけつけ言はんでもいゝといふ顔だね、それは。」

「まあ。」

「私のいふ事が分らなければもう言はないさ。何でも自分のしたい通りをするがいゝ。」

「でも耳のあれへもお通ひなさらないやならな

いぢやありませんか。」

「おれはお前の着てるものを判がしてまで醫者へ行かなくもいゝんだ。それよりも、金がないから淋しくつてつい行つたんだと正直にさう言つたらいゝぢやないか。」

禮吉はかう言つてぶいと言つて梯子段の唐紙を開けた。

「おい、ラングを持って来てくれ。——それぢやない。それを取つたら後が眞暗ぢやないか。點せよ、もう一つのを。」

禮吉は面白くない心持をして二階へ上つた。少しの事でも痾に障ると、つい心にもないひどい事を言ひ出すのが癖だから、いつもこんな時

にはこちらからいゝ加減に立つて行くやうにしてゐるのであつた。

禮吉は二階の床の間にランプを置いたまゝ、不愉快な氣持でぼんやりそこに坐つてゐた。

自分の言ひ方は少し大袈裟だつたけれど、どうにかして、金がなくてはぢつとしてゐられないやうなあの女の性分を直したい。それでないと自分分は所つ中一人でいらゝしななければならぬ。あの女から言はせれば、いつも出来得る限り不自由を堪へてゐるのではあるけれど、根本に今のやうな癖が取れないでは困る。自分が病院に這入つたりしたために、おとわは大方持つてゐた着物を、すつかりあれしてしまつたやうである。おとわはそれでも平氣であるやうだけれど、こちらは男として氣が咎める。今日は何を待つて行つたのだらう。いくら取つて来たのか知らないけれど、もうそれこそ着物が何にも無くなつたのではないかと思ふと哀れである。自分は、一つはそのために、あんなにつけつけいふのだけれど、向うでは、それほどまでの心づくしが察しても貰へないやうに思つてゐる。そんな事をするので、以て、女のつとめの全書を盡してゐるやうな氣であるのだから可笑しくなる。

おとわが上つて来た。階子段のところへ顔を出して、

「出来ましたから召し上つて下さいまし。」といふ。

二

禮吉は黙つて他の事を考へ込んでゐた。

禮吉は電車を降りて、おとわから頼まれた胡椒を買つた。圖書室で手取つたので、十二時も疾くに過ぎたけれど、ついでに家まで行く歩く事にした。家へ歸つてもおとわはお針へ行つて留守だけれど、夕方まで一人二階に籠つて、おとわの歸つて来るのを暗に待つやうな心持で、徐かにノートを讀むのが樂しみのやうに思はれた。

五月と言へど、何となく日向さへ薄冷たい午後である。おとわはどんな容子をしてお針の先生の前に坐つてゐるだらう。當りまへの女たちの中に交つては、何となく氣後れがするだらうと思はれる日々を、小さい油紙の袋に、小さい握飯を二つ入れて、雑物を抱へて通ふのも、もう四月以上になる。何をいはれても黙つて微笑んでゐるだけだから、口を利かない人だと言つてからかはれるさうである。自分はわざ／＼

あの家の前を通つて歸つて来る事もたび／＼あつた。いつも竹の格子に障子が閉つてゐて、家の中は見えないけれど、上り口の土間におとわの下駄が脱いでゐるのを見て通つた事もある。

口には出しては言はぬゆゑ、おとわはそのやうな事は一寸も知るまい。自分の氣に入る完全な女にしたいばつかりに、眼の前では小さな事をやき／＼言つて叱るけれど、少しの間でも眼に見ずにゐれば氣にかゝる。

禮吉は外から歸るときにはいつもおとわの事を考へながら、冬の蔭ばみに日向を戀ひ求めるやうな心持をして歩いて來るのであつた。

植木屋の多い横町をぐる／＼通つて家の傍へ來ると、古けた板垣ひの隙間から、おとわの着物の赤い裏が、洗つて物干竿に干してあるのがちら／＼見える。

開き窓いがた／＼の門の口をこじ開けて這入ると、上り口の横手の小さい空地に、家の主婦さんが黒つぽい土をほじくつて鶏豆を少しばかり蒔いたのが、二列になつて日向に吸ひ浸つてゐる。柔かい若葉を揃へた、低い無花果の木の上には、蜂が一匹まひ／＼してゐる。その小さい體の影が、土の上や、無花果の葉の上にまひ／＼と寫る。

禮吉は久しぶりに、おとわと二人がはじめて家を持った頃の、濃やかな戀の心持に返つたやうな氣がして、そはく上へ上つた。

主婦さんはどこかへ出たものと見えて、家の中はがらんとして誰もない。

襖を開けて六疊へ這入ると、長火鉢に鐵瓶の湯がしゆん／＼沸つてゐる。ちやぶ臺の上には例のやうにパンと紅茶とを用意して白い布が被せてある。

禮吉は押入から着物を出して、洋服と着換へて火鉢の側に坐つた。

庭を見ると、桐の木の下に、ナスタシヤムが一株、もく／＼した日向の中に五六輪の朱黄色の花を傾げてゐるのが目を引いた。おとわが買つて植えたものらしい。ほじくつた土の餘りが目影に乾いて、土の中から判り出された貝殻が一つ、泥に塗れて覗いてゐる。

禮吉はちやぶ臺の被ひを取つて、紅茶を入れてパンを食べる。壁の根に据ゑた小さい手籠筒の上には、翡翠色の硝子の嵌つた置時計が、十時過ぎを示したまゝで止つてゐる。その側に手紙が一通來てゐる。禮吉は母から書留が來たのではないかと思つて、立つて行つて見ると、それはおとわへ來た手紙の狀袋であつた。子供

が書いたやうな下手な女文字で、「とわの行」と書いて、切手が六錢貼つてある。先の住所へ向けて來たので、附箋が二枚も附いてゐる。裏を返して見ると、おとわの叔母から來た手紙であつた。

小さい時分に雙親に亡くなられたおとわは、たつた一人のこの叔母のところへ十六の年まで養はれてゐたといふ事を、禮吉は前々おとわかから聞いてゐた。これだけがこの女の生ひ立ちについて禮吉の知つてゐる總てであつた。それがどんな叔母だか、何をしてゐたものの子に生れたおとわなのか禮吉はそんなことも全で知らない。おとわに向つてそんな事をほじつて訊くのも罪なやうな氣がして、さういふ事には一寸も觸れないで暮してゐるのだけれど、考へて見ると、あゝした素性も分らぬ女と戀に落ちて、かうして二人で住まつてゐるといふ事が、自分ながら自分でしてゐる事でもないやうに唐突な氣持がする。殊に自分はまだ學校の濟まない書生である。繼母などは自分がこんな暮しをしてゐるとは夢にも考へないであらう。自分はかうして、たうと一生おとわと伴れ添ふのであらうか。今更切れてしまはうとも思はないからには、このまゝで一年二年と經つて、遂には切るにも切

られない腐れ縁に縛られるのかと思ふと、何だか、考へるなら今のうちだといふやうな氣もして來る。

平生は、たゞ自分が好んで得た女として、何の危惧をも抱かないでゐるけれど、おとわが叔母にたよりを出したとか、叔母から手紙が來たとかいふのを聞いてこの女のデリニエイションといふ事に考へると、何だか、一種の不愉快な不安が呼び起される。下種張つたオリジンから出て來た女といふ事を見せつけられでもするやうに思はしい心持がするときに度々あつた。

おとわは、さうした叔母たちと、どんな手紙を遣り取りしてゐるのであらう。叔母からたまに來る手紙は、自分には隠すやうにしてゐる。時々さういふ手紙のちぎれが、油に汚れて、鏡臺の抽斗などに見出される事もあるけれど、書いてある字はわざと見ないやうにしてゐるのである。

禮吉はこんな事を考へると、おとわが或黒い蔭を引いて自分に投じてゐてもするやうで、何となく不安な氣持がする。禮吉は食事をすまして二階へ上ると、留守だと思つたおとわがちゃんとそこにゐた。机に坐

つて、小さな算盤と算紙の帳面とを出して、小  
進の計算をしてゐる。

「まあ、びつくりしましたわ。いつお歸りにな  
つたんです？」

寝亂れたやうなぐらゝした髪に、倦怠さう  
な目もとをして、急いで机の上を片附ける。少  
し臟たれかけた着物に、紺青ときき色との縞に  
なつた、メリンスの晝夜帯をだらしなく結んで  
ゐる。

「お前、變な風をしてゐるね。」と、禮吉はいき  
なりかう言つた。

「留守の間に髪ぐらゝを梳いて、きちんとしてお  
いでよ。長屋のかみさん見たいぢやないか。」

「何ですか、今朝から變に気分が悪くて、何を  
するのでも徳劫だつたものですか。」と言ひなが  
ら、力なきさうに鬢の解れを掻き上げる。

「女の癖に自分の身だしなみをするのを億劫が  
るのよ、根性が自降落なからだよ。お前は何  
だつて私の心事を畏まつて聞いた例がない  
ね。いつも何とかがとが言譯ばかりするぢやな  
いか。」

禮吉は、別に深く替めるのでもなく、たいじ  
ぶ、自分の心持を知らすために、外見は小言  
をいふやうにかゝ言つた。だらしない容子をし

てゐると言つて叱るのも、一面には、自分のた  
めにこんなみすぼらしい姿になつてしまつたの  
が、哀れに氣が替るからであつた。

「今に髪結さんが来てくれる筈ですから、ちや  
んとします。本當に何といふ風でせう。頭にこ  
んなにふけが溜つてゐますわ。」と厭さうに顔を  
しかめて、禮吉に言はれない先にことわるやう  
にいふ。禮吉が今どんな心持を見てゐるかと  
いふことは分らないのであつた。

「ナスタシャムを買つたんだね。」と禮吉は、叱  
られたやうに取つてゐるおとわの心持を忘れ  
させようとするやうに、かう言つて話を換へ  
た。

「あゝいふ花を少し買つて来て庭先へ植ゑよう  
ぢやないか。今晚二人で學校の前の夜店へ買ひ  
に行かないか。」

禮吉は子供のやうに、おとわの膝の前へ頭を  
つけてごろり、と寝轉びながらかう言つた。こん  
な時の心持は、自分で自分の責められるやうな  
氣分を忘れて、一人り、弱い、單絶な男としておと  
わから勉つて貰はうとする一種の哀訴の心持  
であつた。

「ね、久しく出かけないから、今夜あそこいら  
まで出て見ようぢやないか。」

おとわにいろんな苦しみがかりを見せてゐる  
のを償はうとするやうに、機嫌を取つてかう言  
つたが、いつもこんな時には直ぐに膝を貸して、  
こちらの心の底に何かの苦痛があるのを慰めよ  
うとするやうに、たわひなく微笑みながら、輕  
い聲かきさうなキツスをして、その瞳の長い、  
潤ひの深い黒い目で、まんじりとこちらの顔を  
見つめてゐてくれるおとわは、今日に限つて返  
事もしないで、黙つて他の方を見入つて沈んで  
ゐる。

「どうかしたんかい、お前。」と、禮吉は間を置  
いて頭を上げておとわを見た。

「何を涙ぐんでゐるの？——おい、おとわ。」

「何でもないので泣くのかい。」

「……」  
そんなじめじめした面倒臭い女はもうつく  
づく厭だ。

「外へ出るにも着物がなから情なくなつたの  
かい？」

「かういふとおとわは急に激り上げて泣き出し  
た。」

「さうなんだらう？」  
「つまらない事を仰しやるのね。外へ出る着物

ぐらあちやんと持つてゐますわ。」と指先で涙を拭いて、

「あなたはこの頃他人がましい事ばかり仰しやるから。着物なんか一枚も亡くなつたつて何てせ。男がそんな事に氣を遣ふもんぢやありません。あなたは何か言へば私の着物々々つて氣にしてはつかりいらつしゝるから水臭いわ。」

「そんなに泣かないでもいぢやないか。他人がましいと言はれりやそれきりだけれど、何だか自分だつてすまないからさ。すまないといふのが厭ならね、それではかうだ。私は私自身のために、お前の着物を一枚でも減らしたくないやうな氣がするんだよ。私は自分の女がいろんな着物を持つてゐてくれれば、丁度花の色が生々して濃いやうに氣持がいゝんだから。その反對にさ。」

「私はあんな着物はすつかり亡くして丁度いいくらゐに思つてゐるんですからようござんす。」

「そんな亂暴な事を言ふものぢやないよ。」

「でも、これまであゝした私だつたときの着物なんですもの。」

「どういふ意味だい、それは。」と禮吉は、おとわの心持は分つてゐても、わざとかう言つて氣

を變へさせようとした。おとわはこれまでそんなところにゐたといふことで以て、いつも私に對して氣が引けるらしいのである。そんな事は人の境遇だから仕方がない。それを知らないで貰つたといふのではないし、そんな事にくよくよして貰ふ必要があるくらゐなら、はじめからお前を引き取りはしないのだ。

「拙らない事をいふもんぢやないよ。全て子供見たいぢやないか。」

禮吉はかう言つて、おとわのそんな考へを拂はうとする。心持の裏には、さつき、下で叔母から來た手紙の封袋を見て、この女の素性に對して輕蔑と不愉快とを催したことが考へ浮べられた。おとわがかうして泣いてゐる。心持を考へれば、自分がそんな事を竊かに心に抱いたりするのが殘酷のやうな氣がする。こちらの氣のせむか、おとわは何だか今日は少し目のふちや頬のあたりが瘦せ落ちてゐる。禮吉は、自分がいら／＼口小言をいふために、おとわがこんなに衰へでもしたやうに、すまないやうな哀れな心持がするのであつた。

「私はどうしてこの近頃、こんなに一寸した事が調もなく悲しくなるんでせうね。」と、おとわは氣を換へようとするやうに、袖口で涙を拭き

ながら下目になる。「何もそんなに物を悲觀するわけはないぢやないか。」

少し神經衰弱にでもかゝつてゐるのではないかとと思ふと、それが半分は自分がさせた事のやうに氣が咎める。

「お前、どこか體の工合でも悪いのぢやないだらうか。何だか目の色に變に力がないやうだね。」

「私はあなたから叱られるたびに、自分といふものが情なくなつてしまひますわ。」

「それはお前が誤解してゐるんだ。自分にいろんな缺點がまだいくつも取れないでゐるから叱られるんぢやないか。お前は私から何か言はれるがそんなに厭かい？」

「さうぢやないんですわ。」

「私が言つて聞かせる事がお前を悪んで言ふやうに聞えるのかな。お前は私から嫌はれかけてゐるといふやうな氣がする時があるのかい？—そんなに言はれれば私も泣いて見せた

いやうな氣がするよ。」

れていふのだらう？と、謙吉はもう面倒臭いので、わざと撲つ附けるやうにかう言つて見る。

「きういふあれぢやないんです。何かにつけてあなたに済まないと思つて自分が厭になるんですわ。どうかしてあなたのお氣に入るやうな女になりたいと思つて、一生懸命になつてゐるんですけれど、どうしてかう情ない女なんですかね。もう半年以上にもなるのに、おかげで一つだつて、いつも働辛かつたり、水つぼかつたりして、まづいものばかりしかさし上げないし、……」

「つまらない事を言つたら。私はお前がどんなものをどんなにして食べさせたとつて、たいの一度も不平な顔をした事はない積りだがな。」

「てすから尙更私が……」

「止せよ。食物なんかどうでもいふよ。それよりかまだ重大な問題がいくらもあらうぢやないか。」

「そんなにして何でも我慢してゐて下さるから、あなたがおいたはしくてならないんです。あたし物頼ないやうな氣がして……」と、またかゝる……と泣き出すのである。

それによつて……手紙が来ましてね……その中に……な事か書……てあつたものですから。」

と、おとわは泣き／＼かう言つて前垂て涙を拭く。

涙を拭いて見ると、叔母はおとわがこゝへ来たといふことが、どうも不安でならない。だれが考へても餘りに釣り合はない緣だから、その中にはいつか飽きて捨てられさうな氣がして心配である、出来るなら今うち早くちやんと筆を入れて貰ふが、もしとやかくと言つて、長引かされるやうだつたら、面倒のない間に、いつそ思ひ切つて、別れた方がいふ、と、こんな事を書いて来たのだといふ。

謙吉はおとわが厭だといふのを聞かないで、命令的にその手紙を帯の間から出させた。

「この中で、どうしても私に見せたくないところだけは裂つてお取りよ。今の話のところだけ見ればいふんだから。」と謙吉は、おとわのためにならない苦痛だけは省いてやらうとした。構はないといふからそのまゝ見る。必要のないところはず／＼飛ばして扱いて行くと、しまひの方に今の事が書いてあつた。假名ばかりで讀み悪いけれど、その次にまだかういふ意味の事が書いてある。

「男といふものはよくさういふ段になる。とそれほどたつて歸りたいといふならど

うなりと勝手にするが、その代り、お前の荷物は渡さないからその積りで出るなら出る、こんな事を言つて、こちらを括りつけようとかゝるものである。萬一そんな行きがかりにでもなつたら、荷物などはいくらあらうとも目もくれずに出ておしまひよ。女の目光の怨から、そんな事に引かされて取り返しつかない。は、いになつてしまつてはばか／＼しい。荷物ぐらゐはまた働けばいくらでも出来るのだから。」

かう言つたやうな事が細々と書いてある。「お前はいゝ叔母さんを持つてゐるね。全て相手を女たらしと見殺つた方策だね。お前は一體、平生この叔母さんといふ人に、私の事を手紙でどんな風に言つてやつてるの？」

「後生ですからどうかお氣を悪くなさらないで下さいまし。あなたには何にもお話ししてのませんけれど、今では多少落された暮しにしてゐても一寸も下種な人ぢやないんです。たゞ私つ事を氣づかふあまりに、あれこれ考へるだけの事なんですすから。」

「もういふ。そんなに大きな聲をして泣くと下で變に思ふよ。——おい、もう泣かないでくれ。」

私は別に何とも思やしない。荷物の議論などは中々非凡な見識と思つて感服したよ。たゞ滑稽なのは繪の事だ。いくら籍を入れたからつて厭になつて出さうと思へばそれまでぢやないか。

そんな驚かなくていふものに愛情を支配する方がどれだけあると思つてるんだらう。併しそれはとにかく、叔母さんにこんな事を言はれて悲しくなるといふのは、つまりお前が私を愛つてゐるといふ事を自白するやうなものだ。お前は何かいふと、私のやうなものでなくても、どんな立派な方だつて貰へるあなただのにか、私のやうなものがいままで喰つ附いてゐては、あなたが先々まで肩身が狭いだらうとかいふやうな事を言ふだらう。今更そんな気がねをするくらゐならいつそ初めから私のところへ來なければいゝぢやないか。私にしたところが、氣まぐれに盲目半分に一緒になつたんぢやないんだ。私が世間ていに對して、いろ／＼考へて躊躇したのもよく知つてゐるだらう。おとわ。聞いてゐるのかい、私が今言つてる事を。」

「ちやんと聞いてゐますわ。と、おとわは涙を吸る。壽吉は何だかおとわに言つて聞かせてゐるのではなくて、自分で自分に向つて諭してゐるやうな氣がする。この女をこのまゝ一生つれ

添うてやるかどうかといふ段になると、まだそれとなく遲疑するやうな心持が閃くの、自分で打ち消すために、こんなことを言つておとわに誓ひをしてゐるやうな心持がする。

「私はお前がそんな事をいふのを聞く度に、それはお前が私をすつかり信じてないせふだとか思はれない。お前が根性悪く、いつまでもお前を捨てほしいといふことを私に誓言させようとするやうに聞えるよ。お前は私がそれを口に出して誓はなければ不安心なのかい？」

「そんなに、私のやうなものいふ事を、皮肉にお取りなさるのはあんまりですわ。私はいつもあなたにすまない／＼と思つて暮してゐるんですから、いろいろな愚癡っぽい事を考へるんですもの。」

おとわはかう言はうと思つても、それができはき言へないといふやうに、黙つて頭を下げてゐる。

「もうそんな下らない話をするのは止さうよ。」

そんな事を言ひ出せば、私がどういふわけであんなにお前を得たいと思つて執念く聞えたかといふ事や、お前のどういふところが私に氣に入つてゐるとか、私がどんなにお前を戀してゐるかといふ事などを、一々話さなければならぬ

くなる。そんな事が口に出して言はれるわけのものではない。

「こちらへお寄りよ、おとわ。もうほかの話をしよう。ね。顔をお上げよ。」

かうなれば女に眞實を語るには抱擁より外にはすべもないやうな氣がする。自分は聞くまでこの女を戀ひてゐるのである。哀れなこの女をどうして裏切ることが出來よう。眞實はこの女のためにこの女を引き取つてやつたのではな

い。自分がこの女に求めてゐるのである。女は自分にすべてを盡してゐる。自分の言ふ事を一々羊のやうに従順に聞いてくれてゐる。どうかして自分の欲する通りの女にならうとして一心に努力してゐる。さういふ意味に於いて女は自分の求めを充たしてゐる。少なくとも自分の求めを充たし得る女である。

「おとわ、なぜ? : : : よ。」

「あら、一寸放して下さいまし。はい、——今下りますから。」と、おとわは涙つぽい唇を引放して櫛子段の方へ向いて返事をする。

「髮結さんが來たんですわ。私泣いたやうな顔に見えるでせうか。何だか今日は髪を結ぶのも厭ですけれど。」と、顔に下る髪を掻き上げて、涙を拭いて下りて行く。

禮吉は、おとわのためにもつと何かしめじみとやさしい言葉をつけ足してやりたいやうな心持がする。おとわのすべての疑ひと懼れとを拂つて、二人がはじめて家を持つたころのやうな、醇淳な享樂を興へ得るやうな何事かを言ひ注ぎたい。我儘な自分が不斷言つたりしたりしたすべてを撤回してしまひたいやうな氣がしてもぢ／＼する。何もかも自分が悪い。少なくとも、疑惑に陥り易い、理解の乏しい「女」なるものに對する、自分のインナープリティションが悪かつたのである。自分がこの女に對して抱いてゐる心持を、インナープリートする仕方が下手であつた。自分は一から十までこの女に戀してゐる。自分がこの女に缺けてゐる點を悔い、この女を得てゐる事に對して狐疑を抱いたやうに見える點があつたなら、それは自分がこの女を完全な女として見ようとする愛情の逆りだつたのである。自分があらゆる我儘を言ひ得る女に對する、同情ある專制的欲求だつたと考へたい。それは餘りに身勝手な解釋であらうか。

禮吉は、腹這ひになつて、疊の目を爪でほじりながらこのやうな事を考へてゐた。すると、おとわが間もなく再び上つて来て、二疊へ膝を

ついて、

「私うつかりしてゐました。あなたはもう下でお午を召し上つたんですね。すみませんでした。昨夜の肉の餘つたのを叩いて、つまらないものを一皿拵へて置いたのでしたのに。——いとお歸りになつたのか一寸も知らなかつたものですから。」

「ぢや夕方方に貰ふからいゝよ。髪結かいりー」

「え」と、おとわはこそ／＼と下りて行く。泣きほくろとて、睫毛の長い、黒の目の下臉のところ、ほつちりと小さいほくろのあるこの女の顔は、このやうな日には、自分が見る日まで淋しくなるほど衰れつぽい。

見ると、さつきこの女が泣き伏したあとに黒い斑點の交つた、厚ぼつたい鬘甲の櫛が落ちてゐる。禮吉は手を延ばしてそれを取り上げた。

考へて見れば、何もかも自分が一人が悪いやうな心持がする。

禮吉に櫛の齒を指先で割つたりしながら、それからそれへと考へ移つた末に、やがていつしか、二人がまだ戀を語るまでにならなかつた日のいろんな事を、一つ／＼詳しく考へ返した。おとわがまだ水々しい十九の女の誇りに輝い

て、甲斐の青前垂をした高髷に、宗十郎の紋の、平打の銀の簪を挿した、だれに見せるともない、きちんとした早い面影が、最早壞れて取り返すことの出来ないはかないものの記憶のやうに、衰れに懐かしく目に浮んで来た。

三

禮吉はさつき歸りに買つて来たペン先を取りにとこ／＼下へ下りて行つた。

外の上の上には黄色い日影がもく／＼と漲つてゐる。おとわは縁側に間近く鏡臺を据ゑ、髪を結つて貰つてゐる。髪結は四十恰好の、色の淺黒い、眉毛を落した淋しうな女である。毛筋櫛を頭に突き出して、元結の片端を口に咬へて、おとわの髪を根を括つてゐる。おとわはまだ結び馴れない髪結の手加減を氣にするやうに、上目使ひに鏡の中を覗いてゐる。禮吉が押入を開けると、おとわは顔をこちらへ得う向けない儘で、

「何かお要りですか。と、」

「洋服のポケットにペン先が這入つてゐんだ。」

「では、こちらの方を開けて御覽なさいまし。」

「おとわは押入の中がすつ／＼と髪結に見えるの

が、氣はつかしいやうな心持がした。上の段には蒲團が入れてあつて、下にはおとわめりからつぼの行李が二つ並べてある上へ、二人の乏しい着物が載せてある。それこそ何一つの物のない二人の世帯の内装がすつかり見透かされるやうで取かしい。

おとわは平氣であつた。

「そのお蒲團の上に載せてあるでせう？——まだその中はろくに片附けてないのですから、ごたごたしてゐますわ。」

おとわは、禮吉からそれを叱られるのを氣遣ふやうにかう言つて、こちらへ立つて來かける。

「いよ。もう分つたよ。」

禮吉は押入を閉めて、上へ上つて行かうとした。

「あなた、一寸御覽なさいまし。これ、こんな蠅がもうゐますわ」と、髪を分けた髪を絞つたおとわは、女房らしい口を利きながら、右手の甲に棲つてゐる蠅をそつと見せる。

「もう蠅が出るのかねえ。」と言つたきり、禮吉は、人前で二人が口を利くのがこそばゆいやうな氣がして、さつきと上へ上つた。何だか學生でゐて、女を引き入れて暮してゐるといふことが、髮結にだつてじろ／＼顔を見入られるやう

うで氣が引ける。跡におとわはすまして、髮結と話をしてゐる。

「ほんとにいろんな服なものがあるのね。蠅だの蚊だのつて五月蠅いものがあるわ。私は蚤や蚊に食はれると、ひどく影れるんですよ。負ける性分なのね。」と下らない事を言つてゐる。

禮吉は一人でこつ／＼と調べものをした。試験までに、ノートを片附ける外に、一寸したエッセーを書いたり、二三の基礎學科の口答試験の準備もして置かなければならない。それがうまく間に合ふかどうかと思ふと氣がいら／＼する。今日も醫者へ行かないで歸つて來たけれど、何だか耳が少し痛く／＼一來たやうである。

頭も茫として髪に重たい。二三時間も経つてから、禮吉は頭が絞れてがりがり痛くなつて來たので、ペンを置いて後にそつくり返つて目を閉つた。

何だか物が氣になつて落ちつかないやうな心持がする。考へると、髪母からまだ手紙が來ない事もその一つである。二人になつてからは、目に見えない下らない費用がかゝる、よくあれだけの金でおとわボどわかかうかやつて行つてくれる事だと思ふ。いろんな事を考へると

髪母といふ言葉それ自身から、忌々しい。先の髪が落ちてくれたら、何でも打ち明けてしまへるのだけれど、——いつもは目の前の事だけ考へて一日々々とする／＼に暮してゐるけれど、どうせしまひには、こちらに妻のやうなものがあるといふ事を、髪母に自白しなければならぬいだらうと思ふと、今から不安である。こんないろんな心配の中で、厄介な試験を受けなければならぬ。

耳がひどく痛み出して來た。

禮吉は薄ら寂しい心持に塵へられながら、おとわを求めて階子段を下りて行つた。下はしんとしてゐる。おとわはどこかへ行つたかして、そこらにゐない。自分が二階に籠つてゐる間は、おとわは下で一人考へ沈んでゐるのだからと思ふと落ち附かないやうな氣がする。

「おとわ。」と呼んで見たが返事がない。鏡臺の抽斗から、元結の先が喰み出してゐるのが氣になる。ふしだらな女だと思ひながら入れ直す。それから何をするためともなく、押入を開けて見た。さつきと／＼してゐたこちら側を、おとわはちやんと片附け直してゐた。自分やおとわの寫眞の遺入つてゐる板函が、物の一番下に入れ込んである。おとわはこれまでの自

身の姿を見られるのを一番影がつてゐるやうである。

「この寫眞は幾枚撮つたの？」と、いつかも、ついでに話がないのでこんな事を何気なく訊くと、

「一なぞです。三枚ですわ。と、自分がそんな事を訊く心持を覗ふやうに顔を俯み見た。

「一枚は叔母のところへ送つて、あとの一枚はどうしたでせう。——さうく、變な人へ上げたわね。あの家へよゝ来るおときさんね、あの手に取られたんですよ。」

こんな事を言譯がましく言ふ。下らない事にまで先廻りをして氣にするのであつた。

禮吉はこんな事を考へ返しながら縁側に立つてゐた。壁の日向はもういつしか蔭ばんでしまつた。垣の向うの家の屋根に、やがてどんよりと暮れて行く名残りの日影が稍赤ばんで射してゐる。樹の木の下のナスタシヤムの花壇に山藁が一匹這つてゐるのが見える。

禮吉は下駄の上を下りて庭へ出て見た。物置の間に、何かの草花の蕾らしいものが三四本植ゑられて、印の竹が立ててある。と、その物置の向うにおとわの聲がする。

「それから？ それからその姉さんがどうしたの？」と、どこかの子供の相手になつてゐるやうである。

ぶら／＼行つて見ると、一人の小汚い女の子が、裏木戸のうちの、無花果の木が低く若葉を揃へてゐる垣根に席をしいて、赤い緒の下駄を履いて坐つてゐる。おとわが、一人で寂しさにこんな子供に相手になつてゐるやうに、そこへこぼんで話をしてゐる。髪をきちんと丸髷に結つて、とき色の手柄をかけてゐる。物干竿には、

禮吉のシャツが二枚洗つて干してある。

おとわは禮吉が来たのを見ると立ち上つた。

「どこの子だい。青鼻汁を滴らしてゐるぢやないか。と禮吉は小さい聲で言つた。

「私がこゝで干物をしてゐると、少しづつ這入つて来て、をばさん、こゝで遊んでもいいんですか。つて、一人ぼつちのやうに言ひますから、私はお這入りなさいと言つたんです。さうしたら家へ歸つてあの藪なんか持つて来て、一人でプリーキの籠を弄つて遊んでゐるのですよ。と、おとわは子供に代つて言ふやうに微笑みながら話した。子供は人前でおどろかすやうに、小首をかして、雑誌の口繪を裂つた幾枚かの寫眞畫を膝の上で揃へてゐる。ちよいと禮吉の顔を見つめる。いやにびくびくした陰氣な顔をした子供である。

「私があの繪をくれてやつたんですよ。それから今活寫寫眞を見て来たお話を私にして聞かせてゐたところでです。よく覚えてゐるんですよ。と、おとわは禮吉の驚いた顔を慰めようとするやうに、つとめて話をすすめてゐつたが、その沈んだやうな目の色には、何か心の中で心細い事を考へてゐたあととやうな容子が見える。

「紅茶でも入れてくれないか」といふと、おとわは、

「一ではまたいらつしやいなね。をばさんはこれから別家があるから」と、女の子にかう言つて向へ行く。禮吉はおとわが、こんな、どこの子とも知れぬ小汚い子の相手をしてゐるのが、いかにもおとわの子供の頃のシチュエーションを語るやうな、下卑た感じがする。同時に、いかにも同情といふものを味ふ事の出来ぬ寂しいものがする事のやうに寂れでもあつた。おとわはあんなに自分に惹かれてゐても、自分の前には一々語られないやうな、或いは心細い思ひを包んでゐるやうである。女といふものには、どうしてこんなにかう理解といふものがないのだらう。どう言つてやれば自分に對して安心させる事が出来るのだらう。——禮吉はかう思ふ

ど、女よりも自分自身の方が寂しくなつて来た。  
「とわ。」

「はい？」

「もうその着物を着るのはお止しよ。物はいゝのだからが、鹽たれてるからみすぼらしいよ。」

かう言ひながら上へ上つた。

「これはもう解いてしまふんですけれど、今こそ掃除したりしてゐたものですから。」

「そんな汚い着物を着て、頭ばかり光らせてると、砲兵工廠の職工か何かの主婦さん見たいぢやないか。」

禮吉は冗談に響くやうにかう言つて長火鉢の前に坐つた。

おとわは、紅茶の壺を開けて、茶出しへ入れて湯をさしてゐる。

女は丸髷に結つたのが一番戀をそよめる。これで一寸したなりをさせたら、人の目を引くいちぢらしい小女房になるのである。おとわは茶出しを火の上にかざしてしばらく下目になつてゐる。こちらが頭ばかりじろく見えてゐるのが極

りが悪いので、顔を伏せてゐるのかと思つてゐたら、何だか目に涙をためてゐるやうである。そんなじめじめした性分にはもう飽き／＼してゐる禮吉は、厭な氣持になつて黙つてゐたが、

それでも何で涙ぐむのか氣になつて堪らない。  
「とわ。」と禮吉は少し陰しく呼びかけた。

訊いてもおとわは譯を話さない。

「だつて何でもないんですもの。私はどうしてこの頃いつもかうなんでせうね。何だか自分でも譯が分らないんですわ。」

こんな事言つてごまかしながら、紅茶をさして、藕と袖口で涙を拭く。禮吉はそれなり黙つて、角の砂糖の溶けるのを待つてゐた。

#### 四

夜になれば、さうした二人の心持もいつしか變つてゐた。禮吉は晝に言つたやうに、二人で草花を買ひに、學校の前の通りまで行かうと言ひ出した。

「でも御勉強なさらないやならないでせう？」と、おとわは氣になるやうにかう言つたけれど、

「では行きますわ。」と微笑みながら、そは／＼と支度をした。

禮吉は、家にゐてもどうせ何も出来さうもないので、いつそさつぱりと外へ出て、明日から本氣でやり出せばいゝといふ氣になつてゐた。

何だか二人で夜店の灯の揺ぐ中をあてどもなく

ぶら／＼歩いて見たい。

禮吉は二階の雨戸などを閉めに上つた。

それとも、どこか寄席へでも行つて見ようかと思つて、國民一の寄席案内を見たりしながら、

おとわの支度が出来るのを待つてゐた。

やがておとわに呼ばれて下へ下りる。おとわは小綺麗に化粧をして、鏡臺の上を片附けてゐる。

「こんな風でいゝでせう？ 夜ですから。」と、立つて、帯の背中に鏡に寫して恰好を直した。

「まだこれを着るのは早いでせうか。」と、いつもになく、麗らかな、すが／＼した目もとをしてゐる。薄赤い繻の大目に這入つた本フランの合着に、水淺黄へ白でつぶ／＼に麻の葉を抜いた紹縮緬の帯をしめてゐる。

「あなたはそのままいゝんですか。」といふ。やがて主婦さんに挨拶して、ランプを持つて上り口へ下りた。おとわは、昨日買つて来て叱られた二人の下駄を出して揃へて、クリーム色の帯の片裏に、赤い帯揚を結び直しながら立つてゐる。

「二人で出るのは、随分久しぶりだね。」

「さうでもありませんわ、でも丁度一月ぶりですわね。」

二人はこのやうな事を話しながら、杉原の多い、暗い横町を出て行つた。何だか久しく夜出た事がなかつたせむか、暗い町の、寂れた水菓子屋のむさへ珍らしく物懐かしい、心持がする。

二人は寄席へ行く事にして電車に乗つた。

かうした気分の下には、見るものが一つ／＼親しく見える。二人が並んで腰かけた前に、三十前後の、世帯のつましきうな、感じのいい女房さんが、不躰着に、油氣の扱けた髪をして、帯の間から白刺を一枚出して片道の切符を買つてゐる。その女房さんは下りるまで、おとわの容子を懐かしむやうにちら／＼見てゐた。

「何だか見た事のあるやうな人ですわ。」と電車を下りるとおとわが言つた。その女房さんも同じところで下りて、日和下駄の音を刻んで二人の前を歩いて行つた。そんな見知らない女房さんさへ親しい、人のやうに思はれる夜であつた。

二人は若竹へ這入る。禮吉の好きな東嶽がかつてゐるから来たのだけれど、少し遅かつたので、東嶽は中人前二枚目を語つてもう済んだ後であつた。名を聞いた事もない變な女が、いきいといふ聲を立てて野崎を語つてゐる。

二人は二階の正面に坐つたが、禮吉は女の語るのには附かないで、下に來てゐる客を見下し

てゐた。すぐ下のところに、待合の主婦さんかなどのやうな、小意氣な中年増の女が、小さい銀の煙管で煙草を喫んでゐるのをぞつと見てゐると、

「ね、そんなにうま／＼ないやうですね。と、おとわが小さい聲でいふ。それでもおとわは目を輝かせて久しぶりのやうに聞いてゐる。禮吉は三味線の手を目で追ひながら、語りものの言葉に合はせて、いつか明治座で見た延岩のお染の身振を心に畫いてゐた。

かうした三味線の音を背景にして、いろ／＼の艶にはかない事をとりとめもなく考へ續けるのは、二人がかうして一緒に出て來た夜の心持に似合はしい。禮吉はいつしか、おとわとはじめて會つた日の事などをそれからそれへと考へ追うてゐた。

二人がかういふ二人になつたのも、容易なわけではなかつたやうに思はれると同時に、すべてがたゞ自分のムードから造り出された、突飛な冒險のやうにも思はれる。もしもこの女が私といふものに出くはず事がなかつたら、どんな人と戀をして、今頃どんなに暮してゐる事だらう。假りに私に投じたやうに人に投じてその男に欺かれて悲しい目を見てゐるものとして見

る。それよりも私がこれで捨てると假定して見る。何だか醜いものは女のやうな心持がする。もし捨てたとしたら、自分はやつぱり後ではこの女と作らつてゐた目を戀ひるに相違ない。自分に向つて何一つ違ふといふことを知らないものやうに、いくら無理を言はれても、みんな自身が足りないからだといふやうに、わく／＼してかしづいてゐる。自分はどうしたつてこの女を捨てることは出来ない。もしも自分とこの

るから出て、どこにどうしてゐるか分らなかつたとしたら、自分は目の前に泣き伏して恨まれるよりも、もつと心に責められるに違ひない。自分が今戀ひてゐるよりも、もつとやるせなく戀しくなつて、この女の行方を探して廻るかも知れない。さうして探しても、最早再び見出す事が出来なかつたら、自分は何を求めて生きるだらう。——禮吉にはその時の自分のすべての心持が、もうあつた事の回想のやうに日に見える。

禮吉はその中に、この冬頃おとわに本を教へてゐた時のことを考へ返した。さきで困る事が出来るに違ひないと思つて、小学校の讀本を買つて來て、少しづつ讀ませてゐた。おとわも進んで習ふ氣になつてゐた。禮吉が學校から歸つ

てみると、おとわはよく一間の隅にちんまりと坐つて、膝の上に披げたノートへ、本の中の讀めない字を書き取つたりして、子供のやうにおさへをしてゐた。けれども、一旦習つた字を忘れると、それを訊くのが極りが悪いと見えて、先へ進んで行くばかりで、たまに後へ返つて讀ませて見ると、忘れたのをそれなりにして放つてゐる。そんな事などでよくおとわを叱り飛ばした禮吉は、しまひにもうこんな事はよきうと言ひ出した。お前たちにかういふ事をさせるのが間ちがつてゐる、いろはだけ讀めて、きつときつと返事を下さい、私は毎日あなたの事ばかり考へて居りますなんて、いゝ加減な人よがらせが書けるのだから澤山だ、と、寧ろ慰めるつもりで冗談半分にかう言ふと、おとわはしくしく泣き出して、

「これから忘れたところはきつと訊いて、しつかり覚えなすからどうか教へて下さいまし。」と手を突いて詫言た。禮吉は、自分の企ての無意味で且つ殘酷であつたことを悔いて、穏やかに諭して止させた。つまりはおとわが小學校の生徒の學力さへないといふ悲しさを教へただけの結果になつた。

その時の、涙に沈んだおとわの顔が目に浮んで来る。うつかり罪な事をした自分だつたと思ふ。高座の女は久作が灸を握られてあつゝ、といふところをやつてゐる。義太夫もかういふグロテスクなくすがりがあるので興がさめる。それを喜んで笑つてゐる馬鹿けた聴衆よりも、そんな下らない事を眞面目に書き下した、愚昧な時代の作者の頭の幼稚さと、それを守つて得意に演じてゐる無智な女のノンセンスとが、哀れなやうな、ひや／＼するやうな氣がする。禮吉は女が生々しい聲で老人の聲色をつかつて、一生懸命に顔を壁めたり、口を開けたりするのだけを見てゐた。義太夫などはかうして顔面筋肉の運動だけを見てゐると滑稽と醜惡とを極めたものである。學校の講義でもつまらない先生が下らない事を喋るのが馬鹿々々しくなつて、その頭の赤げ工合と顔面の運動だけを見てゐると、相手は人間でも何だか獸のやうに見えて悲惨である。みんながそれを懸命に筆記して、一字一句をも通すまいとするベンの音が、蠶室の蠶が桑の葉を喰ふやうに鳴るのも滑稽である。

禮吉はこんな事を思つてゐたが、それから試験の事などに考へ移ると、何だか急に物悲しいやうな不安な心持になつて来た。心の底には自分がおとわを伴れて暮してゐる事それ自身さへ不安なやうな、黒い心持が湧いて来た。

「おい、もう歸らないか。こんな義太夫を聞くよりかそこらをぶら／＼歩いて見ようぢやないか。」と、遂におとわにかう言ふと、おとわは、「私はどうでも。」と言ふけれども、何だかまだ聞いてゐたいのぢやないかと思ふ。

「折角だからもつと聞く？」

「いゝえ、私はさつきから他の事ばかり考へてゐるんですわ。」といふ。

二人はそこを出て、學校の前の夜店の方へ向けてぶら／＼歩いた。

何を考へ出したのか、おとわは無上に滅入つたやうな顔をしてゐる。何か自分自身の事を考へてゐるらしい。禮吉が側にて二人で歩いてゐるんだといふ事は忘れて、禮吉には關係のない、他の事を考へてゐるやうな氣もする。禮吉は自分の女が、自分の知らない過去を持つてゐて、恣にそれを一人回想する自由を持つてゐるのをどうする事も出来ないのが不愉快であつた。

「おい、蕎麥でも食べないか。」と禮吉は、努めて自分のさういふ感情の頭を押へながら、女

の心持を自分自身に集めようとするやうにか  
う言ふと、おとわは、

「あなた、召し上りたいのですか？」と訊く。

「私になら澤山です。さつき御飯を戴いたばかりです。何にも食べたかありませんわ。」

「私だつて別に食ひたくもない。たゞ何だかかうして歩、ばかりでも物足りないからさ。」

「ではもうさつきと歸りませう。早く歸る方がよろこびますわ。」

「なぜ。」

「なぜつて事はないんですけれど。」

「か言つて物足りないさうに歩いて行く。すれちがふ人間がみんなじろく、二人を見て行くやうな気がする。制帽を被つた學生たちが景氣よく笑ひ興じながら通つて行く。學校の柵の下には植木屋がいろいろな草花をづらりと列ねてゐる。」

「二人はこちら側のベイガメントの夜店の前を、人込みに躊躇ひながら歩いて行つた。」

「ね、あなた、金魚を買つてはいけませんか。」

「と、おとわが騒ぐやうにいふ。」

「もうずつと通り過ぎたんですけれど。」

「おとわは先に立つて引き返して行つた。禮吉が立ち止つてゐる目、前には古い石燈籠などを

扱けた主婦さんが、だれも買つてくれば手もない品物の土に、しよんぼりと視線を落してゐる。目の縁に黒い影を帯つた、寂しさうな顔をした女である。一つしか懸してゐない置ランプの薄ぼんやりした灯に、晝の手本の切のやうな、紅葉葵の花の赤いのが、窠れつぼく目立つてゐる。禮吉にはその哀れを帯びて見える色合が、何だか自分とおとわとの戀の色のやうに小寂しく見えた。

「おとわは向うの方の金魚屋の店先に立つてゐる。そちらへ行つて見る。おとわは小さな硝子の入物に、小さな金魚を二匹入れさせたのを足下に置いて、帯の間から財布を出した。」

「もつと大きな入物を買へばいゝのに。それでは金魚が死にさうだね。」

「でも大きな金魚は高いんですわ。と、おとわは小さな聲でいふ。」

「入物だけ大きなものにすればいゝぢやないか。」

「さうしませうか。」

「もうそれでいゝよ。面倒だから。」

「禮吉は、興のない顔をして、桶の金魚の群が水の下に大きく寫つて動くのを見て立つてゐた。呼吸をする口元のところに、丸い團まりのやうな影が、出たり引つ送んだりして寫つた。」

二人は家へ向けて歸つて行く。歩けば随分あるのだけれど、何だか電車には乗らないで、暗い横町ばかりをとぼろ、歩いて歸るのが、自分のかうした心持に似合つてゐるやうな気がする。

「二人とも黙つててく、歩いた。」

「おい、何を考へてゐるの？」

「或硝子燈の灯の下へ家へから訊くと、おとわは、

「私ね……と、何か言はうとしたのを急に黙つて、泣き出しさうな顔をしてゐる。」

「何だい。」

「人があるから、もう少し向うまで行つたら話しますわ。」

「何を？」と禮吉は、たいした事でもないやうに平氣でかう言つて、暗い横町に折れた。

「何だい、誰すといふのは。」

「私まだよく分らないから今まで黙つてゐたんですけれどね……と、おとわは沈んだ聲で言ひ悪さうに、

「私は子供が出来たんぢやないでせうか。」と、ふいとこんな事を言ひ出すのであつた。

「さうかい？」と禮吉は、努めて平氣らしくかう言つたけれど、何だか考へたくもない厭な事を

不意に聞かされてもしたやうに、不愉快な心持に鎖された。

「いつからかい、それは。」

「私はこれまでだつてよくまういふ癖があつたんですけれど、今度は何だか容子が違ふやうですから、こなひだから一人で心配してるんですの。と、困つたやうに言ふ。

「もういつからかあれなの？」

「ええ。——私考へると一人で泣きたくありませんわ。」

なぜ。

かう言つたきり禮吉は、その後を何と言つていゝか分らない。もしさうだとしたらもとより仕方もない事だけれど、それにしても何だか自分たちが得意地悪く苛められてゐるやうな忌々しい心持がする。今から子供が出来るのも五月蠅いし、それまでに女がやつれ悩んで厭な姿になるのを見る間でも不愉快である。女に對しては、それが自分のさせた罪のやうに哀れである。もしそれだとしたら、自分は世の中に出るはじめから、最早一人の父になつて出立するのかと思ふと、厄介な荷物を負はされるやうな厭な思ひがする。女がもうこれきりで、若々しさの減び行く、母といふ身になるのも痛はし

い。禮吉はこのやうな心持が黒く寂しく自分に被さつて行くのを見入りながら、しばらく無言で歩いてゐた。

「だつてまだはつきり分らないのだらう？——お前が一人でさう思つて心配するのぢやないのかい。」

「でももう三月からなるんですもの。……それに今日魚屋が來ましてね、海老のいゝのを持つてたんですのよ。あんまり高いから私買はないでしまつたんですけれど、後になつて何にもないから困つて、あの海老でも買つといたらよかつたのにつて家のお主婦さんに話したら、お主人のが召し上げるのならよござんすけれど、あなたはもうそんなものは召し上げられませんよつて言ふんでせう。私は何の事だか分らないものですから、けろんとしてゐると、それから椎茸と茸とそんなものがいけないうんだと言ふんですの。さう言つてるところへ郵便が來たりしたものですから、私はそれなりこちらへ來てしまつたんですけれどね、後で考へると、身持の時の事らしいんでせう。それぢや人の目にももうさう見えるのかと思つて、私急にわく／＼し出したんですわ。」

「その金魚をよこせ。代つてやらう。」

「ようございます。私が持つて歸ります。」

「仕方がないや。出來たものはどうする事も出來やしない。」

「私何だか情ないわ。」

「だつて女の役だから仕方がないさ。と、禮吉は、何か言はなければならぬやうに心にもななくこんなことを言つた。

「私のやうなもの、子供を推へてもそれをちやんと得う育てないだらうと思ふと悲しくなりますわ。と、おとわはまた涙ぐんでゐる。

「なぜ得う育てないんだ。」

「だつて何にも知らない女ですもの。私はあなたに濟まないやうな氣がして一人で泣けて來るんです。」

「何が。」

「私のやうなものが一生あなたに喰つついて廻つてゐては、あなたの肩身が狭いでせうと思つて……」

「またそんな事をいふ。ぢや、どうすればいいのかい。」

禮吉は、いつもの、面倒臭い、焦れつたいやうな心持の中にも、自分が苛めてこんな事を言はせでもするやうな物哀れな氣持もする。

「よさうよ、もうそんな話は。もつとさつきとお歩きよ。——おや。」と、禮吉は自分の袂におとわの櫛が這入つてゐるのに気が附いた。出がけに、二階から持つて下りようとして、兩戸を繰るのについ袂に入れたのを、それなり忘れてゐたのであつた。

「お前の櫛が這入つてゐるよ。」

「あら、さうですか？」と、おとわは氣のない返事をする。

「私どこかへ亡くしたのかと思つて、方々を探したんですの。」と言つたきり、どうして禮吉がそれをこゝに持つてゐるかといふ事は氣にも留めないらしく、たゞ受取つて帯の間へ入れる。

二人はそれきり黙つて西月町の榎の木のところまで来た。禮吉はさつきから、心の底には、おとわの娘といふ事をのみ考へ續けてゐる。何だかおとわの情けたやうに考へ込んで歩いてゐる姿が、暗い夜の中に物哀れに見える。禮吉は、もし本當に子供が止つたのだとしたら、おとわが産に苦しんで死ねやうな事がありはしまいかといふ氣がする。或は産後の肥立ちが悪く、生れたばかりの赤ん坊を男の私の手一つに續けて、死にでもしたらどうであらう。——それのために自分が一人で困るといふ事よりも、さ

うなつた日には自分がおとわに氣苦勞ばかりさせて死なせたのを悔い懼れむ辛さが今から目に見えてゐる。

「何を自分は考へるのだらう。」

禮吉は、そんなつまらない妄想を消し忘れようと努めながら、

「おい、今の櫛を一寸貸して御覽。」といふ。

「どうなさるの？」とおとわは立ち止つて帯の間に手を入れる。どうしようといふのでもない。たゞ何だかそれを自分が持つて歩きたいやうな氣になつたからである。

「もう何時位でせうね。」と、おとわは溜息を隠し紛らすやうにかう言ひながら櫛を禮吉の手に渡した。

「冗談は退けて、本當におとわは娘なのだらうか。もしさうだとしたら差し向どうすればいいのだらう。」

禮吉は黙つてこのやうな事を考へながら、暗い夜の中をまだもつと暗い、或物の中へ這入つて行きでもするやうに、とぼ／＼と長い坂を下りて行く。向うの高臺の家々に見える灯影が、知らない海邊の港へでも漂泊して來たやうに、寂しく見える夜である。

(明治四十五年六月)

午後(四)

私はこんな女の子を私の女に作れてゐさせようかと思ふ。——私の女といふのはこれから書かうとする女である。どんな女だかまだ解つてはゐない。たゞ一人の貧しい女が墮胎をし損じて死んで了ふところを書かうと思つてゐるだけである。

私はこの子の出て來た方へ向けて行かうとした。

「おい、ころぶよ。こつちへ出ろ／＼。」

私は小さい泥水のたまりを渡らうとする子に指圖をしながらかとこ／＼歩いて行つた。

もつとぐる／＼かういふ町ばかりを歩きたい。なぜでもないけれど歩きたい。さうして第一に私の女に名前を附けて、それから、どんな女にするかを考へ纏めなければならぬ。

私はどんよりした午後の中に、マントも着ず帽子も被らない儘で、わが書く女の住んでゐるやうな氣のするだだ黒い貧しい町を、ぶらりぶらり歩くのであつた。(赤蜻蛉)

穴

私に、厭で堪らない一日の仕事からやつと放されて、一冊のノートと午に食べさせた麵麩の這入つた包みを抱へた手に、昨日置き忘れた、不恰好な大きな洋傘を持って、底さびしい、黒ずみ剥げた心持に減入りつゝ、たゞ一人、裏手の小門へ向けて、がた／＼の暗い建物の階段を下りた。

何だか、たゞでさへ気分が悪くなるやうな、上部だけ薄冷たくて變に蒸し附けるやうな、どんよりした天氣が続くところへ持つて来て、情ない思はしい、病氣の後を引いて困憊してゐた私は、その薬のせむか、この間中から、平生から弱い胃をひどく壊してゐるので、こんな日には、生きてゐるのも小五月蠅いやうにがじ／＼と不愉快でたまらない。

いつからともなく烈しい神經衰弱にも罹つてゐる。昨夜もまんじりと寝入られなかつた頭は、中が毛蟲で一杯に詰つてでもゐるやうに、

いら／＼とき／＼くれるやうに痛痒い。目を開けてゐると、瞼の内側がちき／＼痒くて気がいらぬ。その上に、隔日にやる、驅蚊の注射の跡が、根性の悪いやうな、だだ暗い痛みを潜めてゐて、立つたり坐つたりするのに、不愉快にうづ／＼頭を刺戟するのである。

私はかうしたく／＼する気分に含まれながら、光線の這入らない、陰鬱な小汚い一室で、がた／＼のティブルにかゝつて、下らないものがすべき仕事を面倒くさくこつ／＼片附けて行かなければならなかつた。私の後の窓が下りなきて、一尺ばかり開いてゐる下から、厭な、ほろ／＼冷たい風が、外の土埃を帯びて、灰色になつて這入つて来る。目の前には、人格の下劣な、犬のやうなきざな或書記や、上のものへべこ／＼して奴隷のやうに使はれてゐる老ぼれたさもし上役のものや、ねち／＼しい皮肉な日附をした、根性の悪い會計の男や、それらの低級な人間へまでも媚び入るやうに作られてゐる二三のもの、がや／＼と詰らない事を言つて面白さ

うに笑つたりしてゐる。裁判所の書記上りの、しみつたれた大風な幹事は、自分がみんなのものを備つてゐるやうに威張つてゐる。人々は陰ではこの男の事を乞食か犬かなぞのやうに罵倒するけれど、この男に悪まれて口を尖つては困るので、目の前では何にも得言はないで黙つてゐる。いづれも衰れなほどひどい月給でこき使はれてゐるのである。中には厭でたまらなくとも、ほかに行くところがないのでどうする事も出来ない人もあるけれど、大部分は、かうしてこゝに全人格的に縮りついてゐるより外には何の働きもない人たちが、それが下のものに對して階級的に威ばつてゐるのが、私には餘計に衰れである。

私はいゝ口がないので仕方なくこんなところに出でゐる。人のやうに、幹事たちに拘泥してぶつ／＼言つたりする餘裕がないから、そんな事には不愉快ながらに目を閉つて、一人かけ放れてゐるけれど、たゞ月給の事を考へるとばかばかしくて堪らない。體のいゝ時には、それでも半ば運動にもなるので、不平も忘れて出かけて来るけれど、今日のやうな、かういふ氣分の日には、何かの思はしい刑罰のために、苛酷な懲役にでも繋がれてゐるやうに苦しくて、つく

づく情なくなる。下らない人間と交つて、つまらない事ばかり聞くのが、腐れるやうに物寂しい。厭だといふよりも、何だかだだ暗く腐れるやうに汚く物寂しい。

私は、どんなにいら／＼思つてもどうする事もならない自分を、何物かからつれなく嘲られてもするやうな、忌々しい心持をして、一人とほ／＼と裏門を出た。

さつきあの室から出がけに、割げ壊れた薄暗い火鉢で火をつけて吸ひかけた巻煙草に、女の髪の中のやうなものが交つてゐたのをじり／＼と吸ひ込んだ、死人臭い、胸の悪い、心持の續きが、變調な胃が興へる不愉快な気分の中にまだ縛はつて残つてゐる。

私はかうして門を出るには出ても、どこへも歸るべきところもないやうな、或は、自分の家へ向けて眞つ直にかへつて行くのも厭で、どこか行くところを考へ探るやうな心持になつて、我ともなく、少らく往來に立ちどまつて、がたがたの、埃に古けたやうな狭い通りの左右を見入つてゐたが、ちへて、赤坂見附を廻る電車のかへ向けて歩いて行つた。いつもの方へ向いて歸れば、あそこの通りの醫者で注射を受けなければならぬ。気分にくさ／＼する私は、何だ

かそれが面倒臭いので、かた／＼こつちの方へ足が向いた。こちらへ廻つたところで、どことて行くべきところもないのだけれど。

こゝの通りは、がた／＼の小汚い家ばかりがごた／＼並んだ、だだ黒い町である。しほれた、みすぼらしい着物を着た、色目の悪い、やつれた女などが割げたやうな店先に、子供を負つて倦怠さうにぞんぞんたるりする。土埃の積つた低い屋根の上を、ぐちゃ／＼した電燈の線が、古い疲れたやうに、重たさうにたるんで下つてゐる。そのすぐ上から悪病にでも誑はれたやうな、變に物暗い陰氣な午後の空の色が、家の中に暗く倦み疲れた人間や、仕方なくがじ／＼した埃を噛みつゝ不愉快に外を行く人間や、すべてを汚らしい地上のものを腐らせようとするやうに、低く底黒く厭へ下つてゐる。貧乏に割げこくれたやうな小汚い人間がのそ／＼通る。根性の悪さうな、狡猾さうな人間がせちがらい中をくゞつて詐欺でもしさうな目附をして擦れちがふ。髪をほこりだらけにした、星の悪さうな、疲れ果てた女がしを／＼と歩いて行く。鞍ずれに赤身を出した、瘦せこけた馬が、荷を下して来た後のがた馬車を引いて、やがてはどこか、途中で倒れでもしさうによぼ／＼と通つて

行く。大きな、泥だらけのその馬車の轍が、人の顔をもうつと土ぼこりに包んで、狭いところをがた／＼と轟いて行く。

さういふ中へ、どこか町の裏手の方の仕事場で、がん／＼と鐵板のやうなものを叩いたりする——煤だらけな場所と黒くなつてゐる人間を聯想させるやうな——物音が、いら／＼しい頭を不愉快に刺戟するのである。濁つたおどんだ陰暗な天氣の中に、目に入るすべてのものが、たゞ懲れて割げて、がじ／＼とどす黒く見える。

私は、このやうな陰鬱な日には、多くの氣違ひの發作が起つたり、いろ／＼の残忍な凶行が行はれたりするのだといふ事が考へられた。自分だつてこの儘いつまでもかうしててく／＼歩き続けなければならぬものとしたら、その内には氣が狂ふか、又はいきなり卒倒でもして、土の上になだ／＼と黒い血でも吐き出して冷たくなつてしまひさうな氣がある。かういふ氣分の悪い自分と氣ちがひや卒倒者との間には、最早何程の間隔も餘されてはゐないやうな氣がする。自分が氣が狂つて、うす氣味悪く青さめ瘦せて、暗いところにじめ／＼して閉ぢ籠められてゐる心持や、それが人中へまぎれ出て、巡

塵にでも扱へられて、泥だらけになつて、人だかりに取り巻かれながら、見蹴にされてゐる光景などが、もうすぐ次の瞬間に見る事の豫想のやうに目に浮ぶ。――

私は何といふ厭な事を考へつゝ歩くのだから。

けれども、それは突拍子もないほどの妄想とも思はれない。何だか自分のふいと考へ浮べる事は、自分で自分に来るべき凶悪を暗示するのではないかといふ気がする。もう、こんなたゞれたやうな、いら／＼しいだだ黒い心持に刺けて、恰もさき程見た、赤身の出た骨張つた瘦馬のやうに、やるせない毎日に生を引いて行くことは、かういふ烈しい神経衰弱と、暗い冷たい孤獨とに誑はれてゐる私には、とても長く續きさうにもないやうな気がする。せめて、あゝいふところへ出て行くのだけは早くどうかして切り上げたい。いつまでかうして揃いばさ／＼の連綿の切なさを包んで、月給の取れない、厭な烈しい労働をしに通ふのだらう。今日は、いつも自分のタイプルに入れて置く様に、バタが少しもなくなつてゐたのを忘れてゐて、たうと午には何にも食はんづくであつた。働の人がさう言つてくれたので、箱に砂糖を拵つて來さ

せて見たが、黒っぽい煮物用の砂糖なので食はれはしない。私ばうっかりして片側を焦した麵を釜から取り上げて、何にも附けないで少し擦りくさして見たのを、かうしてそのまま包みの中へ入れて歸るのであつた。

私は寝られない夜のだだ黒い妄想のやうに、いろんな事を考へつゝ歩いて行くうちに、いつしか、私がこれから歸つて、いきなり、一人で蒲團を引き下して寝る、夕方に近づく午後、どんよりした、暗い私の家の一間の光景や、首ひた、かんぜない私の母なし子や、私のゐない間を、一人でその子を守つてゐる、髪のぢぢむさく解れた見ても臭さうな氣のする、白濁落な小汚い下女の事なぞを、不愉快に目に浮べつゝ歩いてゐるのであつた。

盲目の子は女がそこらでこそ、用事をしてゐる間を、一人で手探りにのそり／＼、表の間へ出て、蛤汁のやうに濁つた暗い目に涙を湛へて、上り口の障子につかまりながら、見えぬ目を傾げて、いつまでもぢつととんとんと、しょんぼりと私の歸るのを待つてゐるやうな氣がする。いつか下女から聞いた事だけれど、午後になるとうちと父さんへ行かう／＼と言つて、表口へつれて行かせて、その障子につかまつて、いつまで

もぢつと外の方を見守つて立つてゐるのだといふ。どんなにかお父さんが戀しいのでせうねと下女が獨り言をいふと、子供はそれを聞いて、このくらゐお父さんが歸つて來てほしい、このくらゐだと言つて、障子へべつたり寝つて、兩手を披けて見える。もつと／＼、もつと大きく歸つて欲しいと言ひつゝ、壁の方へ擦りついて行つて、自分のさういふ心持の大きさを告げようとするのだといふ。生れてから一寸も目の見えぬ、哀れな小さい私の子供には、たゞ私の聲と、私に觸れる感覺とだけが、自分のたつた一人の父なのであつた。子供は、私が疲れてぐんたりして、家の前の坂になつてるところをてくてく下りて來る足音を、かすかに聞いても、すぐに私だと聞きわけて、探り／＼に上り口の方へ出て來るのであつた。

たゞこれだけ言へば、物哀れな、いたはしい小さいもののやうにのみ見えるけれど、この子の疑り深くてねぢくれた、ねぢ／＼した性質と、頭ばかり大きく痩せ青ざめた、血色のない、陰氣な顔と、その魚の目のやうに濁つた、白目の多い雨眼とは、生んだ父の私にさへ何だか不愉快で厭である。私はいつもこの子の事をたゞ心に考へ浮べても、目の前に見るのと同じく、何だ

か私のこれから先生きてゐる眼りの目、永久に、絶えしない不安と陰黒とに飾られてゐるやうな気がして情なくなる。この子の顔が、私と、まだ乳のみ児の間の目の見えぬこの子とを捨てて出た、この子の母に似てゐる事ばかりでも、この子の母の思はしい罪をいつまでも私に忘れさせないために不愉快である。

私はもう女の罪を悪みはしない。あのやうな女の事ばもう考へ返すだけでも罪である。けれども、あの罪はしい、あさましい女の面影が、いつまでもこの子の顔に印されて遺つてゐるのは、どのやうに忘れようとしても、いつも、見ると不愉快でならない。この子を生んだ母は、いふに言はれない誤つた事をして、私のところから出て了つた女である。もとよりどうせ私からだつて出さずにはゐられる譯もないのだけだ。

私は私の口からはそれ以上の事は言ふに堪へられない。  
女が出て行つた後、子供は、園にゐる私のただ一人の母が、厄介をせず着く引き取つてくれてゐた。私はさうした伯母の同情で、二三等はかりの顔、おぼ思はしい、女を考へさせるものいたましい不具者を、目の前から消し

忘れてゐる事が出来た。實際には、伯母が手のかかる面倒を見てくれてゐる厄介をさへ考へないで、一人の自分になつてゐた。

私はこの子の母を悪みむむむりに、罪もないこの子をさへ、考へ出すのも罪はしかつた。あの子がたのどうもない子供だつたら、どこか人にくれて了ふのだつたけれど、あゝした片輪者を貰つてくれる人などがあつて得べくもない。いつそ何うかして死んで了つてくれよばい。

伯母が、探して窓にでも出して置いて、遺失のせうにして、滅え死なせてはくれないものか。かういふひどい事を一人癡かに考へて、自分で自分の前に小毒らしいやうな、薄情な氣持にまでなつてゐた。

私はあの女の事で、外聞の悪い目を見てからは、一人だだ嗜い、何事にも信實といふ事を置き得ない、寂しい人間になつて、それ以来永く獨棲で了らうと考へてゐた。私はあの子の母一人のために、すべての女を誹つた。女にたゞ淫慾を特と着物との色彩で包んだのみ、上つ皮の、低級な生物としか考へられなくなつた。私はもう女なるものを信ずる事が出来なかつた。  
それと共に私は、一人ひし／＼と自分の肉と血にまでも喰ひ入るやうな、いら／＼しい寂し

さを教へられた。しまひには一人でそれに堪へられなくなつていろんなはかない女の肉を求めては撲つたり纏つて、やけ半分に、強烈なアルコールの刺戟で、腐りつくやうに赤しい頭をたゞれさせた。さうして、しまひには、自分のこれまでしかけてゐた仕事も抱負もたうと擲つて了つて、たゞ食ふために、仕方なく、つまらないイット、イブの教員になつて、本土の北の方のさびれたとす黒いところへ下つて行つた。

私はそんなにしてこちらでやけになつてゐる間に、よく悪性の病氣にかゝらなうで済んだ事だと思ふ。それを私は、かうした目下の痛ましい生活の中で、二度目の女に死なれて了つて、盲ひた子をつれて救れさゝくれている中で、たゞ氣まぐれに似た、つまらない事から傷を受けて、未だに洗刷をしたりしてはかな、情ない目を見てゐるのである。

私はそんなにして、やけで北の方へ落ちて行つて、何もかもない、寒風が吹れた朝で、たゞ水の中に寂しく目をつぶつてゐるやうに目を送つて、たゞれた自分を自分に返さうといふ氣にもなつてゐただけで、二年ばかりもそこにゐただけで、またこの寒風の吹つた、葉まぶれのいら／＼しいところへ歸つて來なければなら

なくなつた。私はどうしても、この汚れた、嫌だ  
らけな、困憊の巷の中で倒れ果てるやうに出来  
てゐるのであらう。あの寂しい小うるさい北方  
の町は、私をよりはげしい寂寥と、その低い空  
のやうなただ暗い陰鬱とに割けさせた後に、た  
うと私を拒絶したのであつた。

その町を出る五六箇月前である。私は陽室  
の斯のやうな、ひどい熱病にかゝつて死にかけ  
て、それがすつかり回復し切るまで、難な病  
院の一室に、陰氣な何十日かを鎖されてゐた。  
私が私のために逃げ、盲ひた子供のために母  
を押し來した、私のこの間死に別れた妻は、  
私の宿の人から頼まれて、私の入院中附いてゐ  
てくれた、私にゐた近處の貧しい家の女であつ  
た。

私は女が私に附いてゐる間に、その性質をす  
つかり見る事が出来た。これまですべての女を  
疑つてゐた私も、遂にこのうら寂しい、女らしい  
女の氣だてが懐かしくなつた。私、自分が安ん  
じて私の妻に選ぶべき女は——或は寧ろ、どう  
せ盲目の子供のために繼母となるべく、私のや  
うなものどころへでも來る女に——この一人  
の女より外にはないやうな氣がして、いろ／＼  
考へた末に、遂に退院後二月ばかりして、私は

この女と結婚したのであつた。

私がさういふ女の手を握るといふ事は、私に  
とつては、寧ろ物悲しい満足だつたのである。  
女はこれから私の氣に入るやうな女になり得る  
といふより外には——その性質の外には、たゞ  
の結婚としては何こそ私をいざなふに足るもの  
はない。私がはじめての女にあゝいふ目を見せ  
られる事がなかつたとしたら、——私がはじめて  
であたり前に女を貰ふのだつたとしたら、たと  
ひ性質はどうでもその他のいろ／＼の點から、  
このやうな女を愛するなどといふ事はしなかつた  
であらう。私はもうそんな十分な事を言つてゐ  
られるやうな經驗な人間ではなかつた。それで  
も、この女の手を握つた心持の裏には、寧ろ  
ス物さびしい、自らを衰れるやうな心が裏打  
されてゐたのであつた。

ところが私、町のものたちからは、あゝい  
ふ階級の女を引きずり込んで女房にしたのだ  
といふやうに見られてしまつた。私が入院中に  
この女と出来合つたのだといふ悪評が、狭い  
町のすつかりのものの間に私語かれた。私は  
そんな事は心さびしく人の批評に任せてゐた  
けれど、意外にも、私はそのために學校を止  
まなければならなくなつた。私はそれとはなく

責任をすゝめられるやうなわけになつた。さう  
いふいま／＼しいところに生きるのには自分の方  
から厭である。私は言はれるまゝにすぐに止め  
てこちらへ出て來た。

私はそれでもこの女を得た事を悔いる理由を  
持たないばかりでなく、私ははじめて女といふ  
ものを得たやうに楽しい自分を見出した。たゞ  
女は、當分は半面により寂しい女となつた。何  
ゆゑに私たちがあの町を去らなければならなかつたかを知つてゐる女は、私のために永久に不  
幸を作るやうに考へて、時々、一人涙に鎖され  
てゐるやうであつた。そんな事も手傳つて、後  
には病氣を出して、ぶら／＼衰つていかりした。  
女はその時身持になつてゐた。私がどこにも定  
まつた口を見出し得ない間は、二人は小さい家  
に這入つて、ひどい貧しい日を見てゐた。

私が今のところへ出るやうになつてから、妻  
は私の盲目の子を引き取つて、自分たちの側で  
育ててやりたいと言ひ出した。女は自分が私の  
ところへ引き取つてもらつてゐる償ひに、すべ  
てに於いて私のための犠牲になる積りでゐるら  
しかつた。私は一つはこの女の氣やすめのため  
に、一つは伯母に對しても早くさうしなければ  
ならないので、やがて今の子供を引き取つた。

女はさうした病氣が、たうとう自分を亡くしてしまふものとは考へなかつたであらう。私事もとよりたいした事にならうとは思はなかつた。

女はよく、やつれた膝に、四つになる百日の子を乗せて、自分の生んだ子のやうに、いろ、子供にわかる話をして聞かせたりして、妻をて前の上になんか寄り直つてゐた。この女を自分の母だと思つてゐる子供は、女が一寸立つても、直ぐに探り／＼附いて行くのであつた。

私は、女にはまだ病院で私についてゐてくれた間に、已にこの子の事も、何故私がこの子を伯母に託してゐるやうな事になつたかといふ事も、すつかり話して了つたのであつた。私はその時、病室はもう回復期に向つてゐたあだけれど、何だか私は、どうかして再び病勢があともどりをして、しまひには、どうしてもあの陰鬱な窓の下で死んで了ふやうな氣がしてゐなかつた。私は或夜、夜中に一人目をさして、私にさういふ事になつたあと、私の首ひた子供の手などを考へて、一人しく／＼とわれを忘れて泣き入つた。女は彫いて、襦袢を捲つて次の室から出て来て、私に聲をさへ来た。

私はひし／＼と寂しくて堪らなくなつて、この女に、私の暗い心のために泣いてくれる涙を求めるやうに、私の一人の子供の事や、すべての事を話して聞かせた。女はまた／＼打撃を下に置いたまゝ、寝臺の下に坐つて、寂しく目を伏せて聞いてくれた。

「そのお母さまは、どうして、そんなに目がお見えにならないやうにおなりなされたのでございませう。」  
女は涙のたまつた臉を上げて、自分の事の悲しさのやうに、私の姿を果てた顔を見守つた。その夜の涙もろい目もとは、泣きほろ／＼の後までも、私には最もいぢらしい思出の一つになつて目に附いてゐる。

他人の中で育てられたのと、目の見えないのげんの悪いときには、よく、いろんな無理な事を言つてはねち／＼切ねたりした。私に責任をけをした、寝臺中の、病み衰へた女に責任を、私がこの子の不具のさまを見て、だだ／＼とされる陰鬱な心持とを敷ふたあと、こんなものが、あのさきの女によつて残された事を恨んだ。いつそ早く死んでしまつてくれたら——こんな

事もよく考へた。

私は時によると、女が自分の生んだのでもないあんな不愉快な、ねち／＼した子を飽きもしず、母のやうに面倒を見ざるのを目に見て、自分までが淋しく味氣なくなる事もあつた。さういふ、何の反抗も選擇もないやうなぐうたらな女の氣が知れないやうな心持もするのであつた。どんな日にあつても、それを一人で忍んでゐる、影のうす、悲愴な女のやうにも思へる。いづれにしても、そのやうな女をつれてゐる自分が、そんな女を選んだ自分が、人のさせた事のやうに物さびしくなる事もあつた。女の態度に、こゝろに對してどうしても母のやうな權威を持つて／＼得ないで、何だか、下婢が、使はれてゐる人の子供に對してゐるやうなところがあつた。私たる二人のものの幸福に小暗い陰黒な影をにじませてゐるやうに不愉快で、私はそのために、よく、いつもおど／＼してゐる自分の女を叱つた。

女は私がどんな無理を言つて叱る時でも、いつも自身が足りないからたとしてゐるやうに、たゞさめんと泣いてわびをいふ。私は女につけ／＼言つた後では、いつも、さうした女の女に、自分の言つた事を悔いつつ、小暗く

一間に坐つて、女のさびしい心持を考へて、自分までも涙ぐむ事があった。

女ははじめて血を吐いたのも、やつぱり、何か子供に關した事で、私からひどく叱られた日の夕方であつた。私は、女がその日に限つて、いつまでもぐづく悲しんでゐるのが哀れでもあり、痛ざはりでもあつて、一間に籠つたきり口も利かないで仕事をしてゐたが、その夕方近く、久しく降りみ降らずみに續いた、暗い五月の小雨が上つて、珍らしい日向の無花果の木に、雀が、久しぶりに見出した黄色い日影を嬉しんで飛んでゐるのに目をやつてゐると、女がおぼつしたやうに進入つて来て、子供が外へ出たといふゆゑ、一寸表の通りまでやらせてくれといふ。女は自分も久しぶりで、そこらあたりまでぶら／＼出て見たい氣になつたらしかつた。いゝだらう、少し氣分でも紛らして来るがいゝと、やさしく言つてやると、女はさつきから、一人で涙ぐんでばかりゐたあとのやうな目に、子供のやうな嬉しさを湛へて、

「ほんとにからりとしたお天氣になりましたわね。と日えるやうに言ひつゝ、少らくそこに膝をついたまゝ、外の日向を見入つてゐたが、やがていそ／＼と向うへ行つた。寝くたれた單衣

の上に羽織を着て、みすばらしく瘦せ衰へてゐるのであつた。

私はそんなに起きて外へ出ていゝのかと思ひつゝ、仕事をしてゐた。乏しい月給ではとても立たないので、私は、夜や休みの日を拵つて、下仕事の翻譯などをしてゐた。

と、女がいつまでも出て行くらしい容子がなないので、私はそれとなく見に立つた。子供は縁側にゐんで、下で、その子の下駄の鼻緒を立ててやつてゐる下女に、見えない目に訊きたい色んな事を、うるさく訊き／＼してゐた。雀がどんなにして啼いてゐるのか、かうして啼いてゐるのかといひつゝ、形をして訊いてゐる。女は三疊に這入つて何をかしてゐるらしかつた。行つて見ると、その暗いところに鏡臺を据ゑて、解きかけた髪を被つたまゝ、疊に俯伏して、一人さめ／＼と泣き入つてゐる。どうしたのかと訊けば、髪がすう／＼といくらでも抜けるのだといふ。こんなに抜けてしまふのだと言つて、油じみた櫛についてゐるのを見入りつゝ、子供のやうに泣くのであつた。

—そんな事を言つたつて仕方がないぢやないか。今に體が直つたら髪ぐらゐまた生えるよ。ばかだね、お前は。と、私は物暗く哀れつばい

心持を隠して、かう言つてたしなめると、女はやつぱり小氣しい自分に考へ入るやうにしつゝ、やう／＼髪を結びかけたが、もう出ようといふ氣も擱けたやうな事をいふ。

それでもやつと着物を着かへて、やがて私に挨拶して、子供の手を引いて出て行つた。私は再びいら／＼して仕事を急いだのに、女はいつまでも分日がどんよりと暮れかけたのに、女はいつまでも歸つて来ない。あんなに衰へた體をして、考へもなく、いつまで外にぶら／＼してゐるのだらうと、私は女のわきまへのないのを怒りながら、下女を通りまで見にやつたが、ゐないといふ。私は、自分で出て、ちがつた裏手の方へ行つて見た。

と、家の後の、水車小屋のあつた跡を埋めた空地を、女は、子供の手を引いてとぼ／＼と力なく歸つて来る。子供は目の見えない手に、硝子の入れものに入れた二匹の金魚を買つて貰つたのを持つて、片手で女の袂につかまつて、急ぎたさうにして歩いてゐる。

一ついそこの通りまで行つたのですけれど、歸りにふいと氣分が悪くなつて歩けなくなつたものですから、少らくあそこのところで、石の上

かう言つて、女は蒼い顔をしてゐる。無心な子供は手さぐりで私に投まつて金魚を見よといふ。

女は家の上り口まで来ると、胸苦しさうに障子に撞まつて上つたか、六疊へ這入ると共に、倒れるやうに、そのまゝ寢床の上に伏し轉んだ。

「おい、何なる醫者を呼んで来ようか。苦しのかい。」と言ひつゝ、肩に手をかけてゐてやると、女は何をか言はうとしかけて、がぶつと、蒲團の上に血を吐き出した。そして自身でも愕いて、おろ／＼と消え入るやうに泣き伏した。

女はかうしてたうと、十日ばかり後に、腹に四月の子を持つたまゝ、多量の血を吐いて、冷たく目を閉つたのである。

語ればかうして長いけれど、私の氣分の悪いがじ／＼した頭には、さうした、自分の亡き妻についてのすべての惨ましい記憶が、錆びついたやうに寂しく纏はつてゐる。女が亡くなつてから、もう五月ばかりにもなるけれど、私は仕方なし、あつちをむさい下女にすべてを見させておぼめてゐる。移へると、私はこれかしをどう定めたいものだらう。下女は一人でい

く、もうどうにかして出て行きたさうな口吻を漏らしたりする。

私とても、あんな小汚いものにつつまでも家を見させてゐるのも不愉快だけれど、どうしようと言つても仕方がない。もう女房などは待たたくもない。寒さうなあてもない。また自分とちがつた個性を引き入れて、いろんな氣面倒を見たりするのにも、當分はとてもうるさくて堪へられさうにもない。亡くなつた女は、水も日向もなくて暗いところに萎れ枯れた、弱々しい花であつたやうに哀れだけれど、だだ暗く生き残つてゐる私と子供とは、死んですべての面倒から免かれたものよりも尙いたましい。どうかしてあの子が死んででもくれぬものだらうか。さうすれば私は足手まといがなくなつて、大分たすかる譯である。下女もすぐに解放して、あつちの家をたゞ一人でどこかへ轉げ込んで了ふ。さうしてゐる内には、この調子でいら／＼しい頭がいよ／＼がじ／＼いらだつて、しまひには氣ちがひになつて、あるところから叩き出されて、巡査の手によつて養育院へでも放り込まれるかも知らない。もう、さうなつた私の惨ましい、彩が目に見えるやうな氣がする。

しかしそれが、私があの子供を伴つたまゝでそんなものになつて了ふとか、氣分が悪くなつて倒れてしまつて、それなり冷たい死體にでもなるとしたら、あの子はあとに一人でどうなるのだらう。百日のあの小さいものが一人でどうなるだらう。下女が、あの子を一人置いて出て了ふ事も出来ないで、送方にくれて警察へ出かけて行くさまがまど／＼と日に浮べ得られる。さうなつたら、あの子も孤別院へ入れられて、暗い冷たい一生を青ざめ果てて生きるのか。

私は何を考へるのだらう。このやうな取りとめもないだだ黒い事を悪夢のやうに考へ入りつゝ、いつしか電車の通りまで来た。何だか厭に胃が悪い。胃袋に、どろ／＼に腐つた、澁い辛汁がたまつてでもゐるやうに、變にいら／＼と氣分が悪い。注射の跡の筋肉が、中からねちねち寒くやうに痛む。

私は何だかこのまゝ家へ歸りたくもない。あの小傭い、がさ／＼した、冷たいところへ歸るのは刑罰のやうに厭である。どこかへ行つて、何か一皿の洋食でも食つて、刺戟のきつゝいアルコールでも取りたい。けれども、物を食ふには胃が悪い。アルコールをすれば、さめたあとの、いつまでも黒黒く

頭の痛いのが目に見えてゐる。どうか他にする事はないものだらうか。どこかへ行くところはないものか。

私は停車場に立つて考へつゝ、やつて来た電車に乗らうとしないで、しばらく気分が悪い空を見てゐた。すると、私に悪性の病氣を注いだ女の事がふと考へ出された。私はどうして、ついあのやうなところへ出かけたものだらう。私は、下女に隠して、一人悔恨の中に熱ぼつたい毒の交つてゐるやうな息を吐きつゝ、小暗い一室に寝てゐるところへ、子供が激しがつてしく泣きながら、手さぐりに這入つて来て、亡くなつた母を求めているんな事をいふのを追ひ拂うた、あの傷あとが取れるまでの十日ばかりの間の心持が、腰みつきやうに頭を襲つて来た。

私はあきらめて電車に乗つた。

## 二

私は一丁目で、日まひがするやうなふらふらする心持で電車を下りた。そこから暫くどだくした裏筋を歩いて歸るのである。もう、一つ買はなければならぬのを無理に履いてゐる、踵の潰つたぼろ靴は、先の方に釘が覗

いてゐて小指の先が痛い。或は血でも出てゐないだらうか。何だか傷が擦られるやうに痛い。靴も靴だけれど、このごろはすべてに一寸も構はなくつた自分である。そんな事にかまつてゐる餘裕もない程、そはくと、埃ばかり吸うてゐるやうな、がじ／＼しい心持にのみ生きてゐる。

洋服のズボンには、いつか汗の汚點がついたのが、そのまゝにこびり附いてゐる。シャツのカフスもただ黒く垢だらけになつてゐる。私は何だか體中が痒いやうな、人の見る日にも氣はづかしいやうな、不愉快な心持を渡へて、ぐつたりして、とぼり／＼歩いた。ズボン釣がゆるんでゐて、ズボンが、ズボン下と一緒にすり下るのも彌さはりである。

やがて、私の家のある小さい横町へ這入る。そのの入口には、片方に汚い青物の市場があつて、横手になつてゐる往來へ、市の立つた跡にちらばつた薬屋や、青物の屑が喰み出してゐる。いつからともなく潰つたことのないその泥溝は、そんな汚いものが詰まつて埋もれてゐる。それへ通りの家の流し水が這入つて来て、いつもじく／＼往來へあふれてゐる。こゝを通過すると、鼻を突くやうな膩な臭ひがするので氣持

が悪い。毎日仕事通ふ分署の巡查や、町の衛生組合がよく黠つてゐられるものだと思ふ。

その向ひの、塵芥だらけの空地には、水道の鐵管が、水のたまつた中に泥だらけになつて積まれてゐる。その側には小さい假小屋があつて、だれか寝起きをするらしく、がた／＼の戸棚の上に食器などが束ね上げであるのが見える。その外、兩側とも、小さい汚い家はかりがぐちゃぐちゃと並んでゐる。私はこゝを通るたびに、自分がこんなところに住んでゐるのが腹でたまらない。さもしさうな目をした、汚く古ぼけた、下種っぽい女や、垢で眞つ黒になつた、ちぢむさい着物を着た、醜い女の子がうぢや／＼してゐる、じめ／＼しい長屋もある。

今日はその入口の共用栓のところ、一人の見すばらしい、殆ど乞食みたいな女が、どこかで泥溝の中へでもはまつて来たらしい、鼻たれの小さい子を裸にして、バケツの水をびしやびしやと背中からかけて、口やかましくつけつけいひながら、臀から下の泥まぶれになつてゐるのを擦つてゐる。その側では、夜店へ出るらしはよぼ／＼の婆さんが、唐製黍を附知にして賣る屋臺の拵へをして、カンテラへ油を注してゐる。

私はそんな哀れつばい、小汚いものを見るのが厭でたまらない。そこを行つて私の家の古けた垣根のところへ来ると、今日もまだ塵芥取りが廻つて来ないと思つて、三つ四つ置いたごみ函に這入り餘つた汚いものが、そのまゝそこへほかしてある。私の家の並びや向ひあたりの家が、自分のところにも裏に置きどころもあるのに、わざ／＼こゝまで函を持つて来て、人の家の垣根の外へ並べて置くのである。いづれも相當な借家に入る人間にちだりに、どういふ氣でよくさうした自分さへよければいゝといふやうな事が出来るのだらう。私の家の構手は一段低い崖になつてゐて、小さい古けた家の背中は並んでゐる。近所の人は、ごみ函へ這入り切れないごみを持つて来て、その函の下へも落して行くので、そこを覗くと、いろんな汚いものが腐つてゐる。そこにうぢや／＼わく蠅が、みんな私の家の秦所へ飛んで来るのである。

私はいつからかそれが厭でたまらないのだけれど、そんな事をする家へ一々言つて廻るのも厭である。私の家の前の雨溝へ這入つて崖下へ流れる道所へ流し水が、よく崖際の土管がつかまつて、溝にあふれるばかりになつても、そこへ水を流すでもない私の家から、下女がいつも竹

で管を浚つて水をほかすより外には、どこにも知らない顔をしてすましてゐる。

見ると、そのの塵函のところへ子供が四五人立つて、何をか汚いものを見るやうに、崖の下を見てわい／＼言つてゐる。私は門口へ這入らうとして、何氣なくその子供の見てゐる下を覗くと、そこには、犬の死屍が持つて来て投げすててあるのだつた。もういつからか轉がつてゐるものと見えて、雨にたゞまれた毛が片寄つて、ぼこ／＼の腹の皮が覗いてゐる。子供等は私が覗くので調子に乗つて、

「あ、その頭のところに蛆がわいてゐるよ。」

「あ、胸が知らぬでら。と、口々に騒いでゐる。一寸見ただけで胸が悪くなつた私は、だれが持つて来て捨てたのだらうかと、見さかひもない下等な人間の仕打を憎みながら門口へ来ると、私の子供が、外で面白さうなその子供たちの聲がするので、探り／＼に出て来たらししく、仲間へ這入りたさうに、見えない目をして、しよんぼりと、戸につかまつて立つてゐるのであつた。

「もうこちらへ上れよ。何でもないので。お前一人でそこから下りたのかい？ そんな大きな下駄を履いたりして。」

私は氣分の悪いのを堪へてかう言ひながら、入口を閉めて子供を上へ上らせた。

「あら、坊ちゃん、たけが一寸そこへ行つた間に一人でどこへいらつしやつたんです。こちらへいらつしやいませよ。と、下女は暗いところから出て来て、私に挨拶をすると、自分の不注意を咎められでもするやうに、言ひわけらしくかう言つて、子供の背中を抱くやうにして伴れて這入る。汚い着物に、だらけた帯を結んで、油の腐つたやうな臭をうるささうにぐら／＼にして平氣である。私は、四疊半へ床を取つてくれといふだけの口をきくのも氣分が悪いので、パンの包みを、疊に投げ出して、洋服を脱ぐと、一人で戸棚から蒲團と寝間着とを引きずり出して敷いた。

「どうかなさりましたのでございませうか。と、下女は入口に来て膝を突いて訊く。

「そのの障子をして、それから、あそのの拵斗の胃活と水を持つて来てくれ。――胃活。薬だよ。拵斗を開けて見ると、小さい蠅に這入つたのがあるから。」と、流し水を流すといふと、やがて下女はそれを持つて来た。子供は下女についてその／＼こちらへやつて来て、指をくはして、しよんぼりと突つ立つてゐる。

「坊ちゃんも今日は一人日齒が痛い」と仰しやつて、御機嫌が悪かつたのでございますよ。たつた先刻までくすくす泣いてばかりいらつしやいましたのでございます。——坊ちゃん、ちやんとお坐りなさい。指などくはへていらつしやると、弱鐵のやうぢやありませんか。お父さまの寝てらつしやる前ですから、ちやんとお坐りなさいなげや。

下女は小さく、子供にかう言つて、こちらへ来て障子をしめる。そこを閉めると、かういふ日の室内は、一層どんよりと薄ぐらくなる。

「さうしてたらと齒をどうしたのかい。」と、私は仕方なく訊いてやらなければならなかつた。

「どうにもしやうがありませんから、どうかしこお寝かせ申しますと思ひまして、おんぼをして、立つてゐたりいたしましたけど、ひどく痛いのので、お寝みになれないのでございます。齒齦でございますの。」

子供はいつもよりか餘計に青ざめた、力のない顔をして黙つてゐる。

「もう痛くはないかい？ こゝへ来てお見せよ。齒がどんなになつてゐるか見せて御覽。」と、五月蠅いのを怖へて、下女の手前だけに對して、父

らしくかういふと、子供に急に思ひ出したやうにしくしくとしやくり泣きに泣き出した。

「泣いちゃいけない。なぜ泣くのかい。——もうあちらへ伴れてつてくれ。」

私はかう言つて、いら／＼寂しく目をつぶつた。頭ががじ／＼痛い。臉の内側が充血したやうにちき／＼痛い。私はかうして寝たきりで、このまゝ死んで了ふのではないかと思ふ程氣分が悪い。

と、下女が、

「ね、ですから坊ちゃんも一寸寝ねをなさいますよ。——ねんねはお厭ですか。それで、どうしませう。おや／＼お馬が來ましたよ。大きな大きなお馬です。泣かないでゐて御覽なさい。まあ大きなお馬が、ひいん／＼／＼、ね。こと、目のない子供にだから出たらめな事を言ひつゝ、六疊であやしてゐるのが小正月に、蒲團を頭から被つて、下女や子供の喋るのを聞かないやうに動かしつゝ、割げこくれたやうな眼りに落ちた。

私はどの位の間寝たのであつたか、何といふ原因もなく、自分で自分のすべての非行を責め悔いもやうな、不愉快な心持を引いて目を

さますと、もう室内はとつぷりと暗くなつてゐる。私はげつそりして、からだ中に冷たい寒汗をじつとり滲いてゐる。自分がどんなに衰弱してゐるかといふ事がひし／＼と寂しく自分に分る。私は蒲團を解ねて、掛け喪へた心持をして、自分の形と、室内の夕方との間に區別がないやうに仄暗く坐つて、少らくは動かうともしなかつた。

私は、何だかいつからともなくかうしてだだ暗い夕方の中に一人見捨てられてゐるやうに寂しかつた。下女や子供はどうしてゐるのか、あたりにはだんもゐないやうに、たゞとつぷりと目が算れてゐる。

私は寝てゐた間に絶えず後前と汚辱とに攻められてゐた續きのやうに不愉快でたまらない。頭も髪に茫として底重たい。私はこの間下女が轉こゝを片づけるのに、私の寢床の下に襪帯があるのを見て、どこかお怪我をなすつていらつしやいますのですかと訝かしさうに訊いた時、あの、すべてを見抜かれたやうな不愉快な心持が、つい今あつた事のやうに私の氣分を塗つてゐる。私は、自分の食器を別にして置くやうに命じた。この間内は沃度ホルムの臭ひがどん／＼してゐた。注射のあとが痛いのので

變な癖をして歩いてゐた。當分はふるへも傳行かなかつた。いろんな事で下女は何とか疑つてゐやまいかと思ふ。それを知つてゐて黙つてゐるやうな氣もする。私に下女の前に私のすべてを突撃して了つたやうに氣が引けてならぬい。女房を亡くして、どうする事も出来ずに、すべてを下女にまかせて、あゝいふ子供の面倒まで見させてゐる。さうして、時には二日も三日も小遣が一つもなく不自由な目をさせたりしてゐる。さういふところへ、私は順な氣にかゝつて難者へ進ぶ。何だか人にも言はれないやうに氣につかしい。

それが下女に對してはかりならぬ、けれど、亡くなつた妻の前にも、生きてゐて見られでもするやうに氣が替る。何といふあさましい私だらう。神樂坂で體にも心にも一向りもないのに、どうしたのか、この間うちは病的のやうにまで肉慾の刺戟がはげしくて、五六日づつてそのために夜寝られないやうな事があつた。私はいく度となく熱ぼつた苦しい寝返りを打ちなら、あちらの室で子供と並んで寝てゐる下女、寢息が響いてもするやうに耳を寄せながら、もつとで出て行つて、どうかしようと思つたくらゐ、もう何の選擇もなくいらだつて

朝になつて考へれば、あんな小汚い、臭い嫌な女にまで走りかけようとした、あさましい自分の肉慾を自分で胸悪く嘲つた。どうしてかういふ情ない、暗黒な自分を見る事かと考へて一人ひし／＼と寂しくなつた。さうしてたうと堪らなくなつて、その晩、ずつと以前に、はじめの女の手でやけになつてゐた時代に行つた事のある、濱町の或ところへ行つて、狭い一間に敷かれた。

けれども、そんなところに何の味ひがあらう。私は無敵したすれつからした女の、下卑た笑ひ顔や、皮相的な下らない言ひぐさなどが鼻について、もう、夜中でもかまはず寝びださうかと思ひつゝ、頭が不愉快に絞れて寝られないので反轉して、やつと刑罰をのがれるやうに、まだ片ぐらゐ内に歸つて来た。さうして、その一度で忌々しい病毒に感化したのである。

私にさういふ、自分の下分なところを考へると、何だか人のことゝやうに不愉快でたまらぬい。もし私があの下女を飽して、それがためにあの汚い女と離れられなくなつて、女を出さうとしても泣いたりわめいたりして出ないと言ひ出して、その内にあの女に子まで産ませても

した。何を私は考へるのだらう。

私は氣味の悪いまでに汚い不愉快な心持に襲はれて寢床をはなれた。

立つて障子を開けて見ても、外はもうすつかり暗くなつてゐる。黒ずんだしめ、しい土の上に、低い無花果の木がたつた一本植つたばかりの古ぼけた庭は、見る／＼夜になつて行くやうに、暗いたそがれの影に充ちてゐる。私は取りすがるとよりもなく、いつまでもかうした暗い生を見るべく一人鎖されてゐる人間のやうにひし／＼と寂しく、子供のやうに泣き出したやうな氣がする。

私はのその、暗い臺所へ出て、水口へ下りて顔を洗つた。そこらには、物の始末の自落な下女が、いろんな力をごた／＼取り散らしたりしてゐて、歩くど何だかねば／＼したものが氣味悪く足の裏にこびりつくのであつた。私は顔をしかめて足域を擦した。

「おい。たげはゐないのか。と言ふと、  
「はい。上六疊の方で、暗さうな倦怠い返事をしたけれど、直きにはこちらへ出て来さうにもない。私はそちらへ行つて、  
「お前、暗いのにしよんぼりして何をしてるのかい。その電気カネを一寸捻つたらいいぢや

ないか。日が暮れてるのに、平氣な女だね。」といふと、

「さうでございましたね。」と氣のない返事をしながら、やつぱり長火鉢の前に、暗がりにはいつて坐つたまゝ、うるさく下つたぐらゝの頭をして、そこにかけた鍋の下を吹いてゐる。

「子供はもう寝たのかい。」といへば、

「はい?」でも御飯が澤山餘つてるものですか、あなたが召し上げるくらゐだけ温めてゐるんです。」と、何か自身の事をでも考へてゐたらしく、はきちがつた返事をする。

私は電氣をつけた。子供は三疊に敷蒲團だけをかけられてもう寝てゐる。いつを晝と夜との別もなく、暗い日に一人さびしい子供は、もう日の入る頃から早く寝入るのであつた。

「ぢき御飯をお上りなさいますか。」と下女は、だらけた自落さうな坐り方をして膝頭を出してゐたのを隠し包みつゝ、顔を上げもしないで、向う向きになつたまゝで言ふのである。

「何でそんなに不機嫌さうにしてるのかい。」と私は氣に任せぬやうに訊くと、

「別に何でもないのですが、つい物を考へてゐたものでございますから。」と、つまらなささうに立つて行つて、戸棚から冷たい茶の

遣入つた皿を出して茶ぶ葉、上に置く。

私は先にふるに行つて来てそれから飯を食へば胃の工合もいゝのだがと思つても、下女に反抗する事が出来ないうのやうに、仕方なく、寝起きのまゝの氣分をして、そのまゝ茶ぶ葉に坐つて、加減の拙い茶を啜へて不愉快に飯を食ふのであつた。

「おい、まだ小遣はあるかい?」と私は箸を置いた時はじめてかう言つて、不安な口を利いた。

「え、まだ一昨日戴いたばかりですもの。いくらも遣ひはいたしません。昨日あれを買つて、それから。」と、一々の用途を言はうとしかけるのを、

「そんな詳しい事はどうでもいゝ。お前、飯をすましたらふるへでも行つておいでよ。ぐつたりしたやうな顔をしてるね。ふるへでも這入つて早く寝るがよい。子供の世話だけでも大抵ぢやないからくだれるだらう?」

私はこんな事も言つて、この女の機嫌を取らなければならなかつた。

「おれも早く一人どうかしなければならぬのだが、こいつばかりはさう犬猫を貰ふやうには行かないから。」と、もう少しお前もこの儘辛抱してくれなければ困る、どうせいつまでもこ

んなにしてゐる譯でもないから、といふやうにかう言ふと、下女は、

「ほんとにあ、奥さまが御丈夫であつて下さりさへすれば、皆さんがいふ事はありなさらぬのに。」と言ひさして、しょんぼりしたやうに火鉢の灰を掻きならして、そのの壁に、ほろろ冷たい夜の、暗い影法師を映してゐる。

私は今日の新聞を探して、それを持つて四疊室へ行く。下女はさつき私がついて歸つたパンを焼いて食べるのだと言つて、皿に醬油を入れて、板の間から金網を持つて行つた。

私は一人で、物足りないがさくした暗い心持に、手あぶりの火鉢の前に坐つて新聞を讀まうとしたが、その儘ぢつと、懐手をして、いゝんな事で不機嫌な自分自身の事を考へかけた。こんなに揺らない暗い思ひばかりして、厭な仕事につかれて来て、がじくした、いらくしい日にのみ生きてゐるのがばかしくしいやうな氣持がする。

私は人間がいろいろな場合に、いろいろな方法で自殺する心理状態などを考へて見たりした。何だか私がビストルかなぞで自分の額を打ち抜いて、血まぶれになつてこの四疊室に倒れるといふ事も、あり得べからざる事とも思はれない。

私はもしさうにでもなるとしたら、いろ／＼死後に見られたくない手紙や物の控へなどが、押入の行李にぐちゃ／＼に入れてあるのが気がかりなやうな心持になる。

やがて下女は、それでは一寸ふるへやらせて戴きますと言つて出て行つた。門の鈴が鳴つて跡はまたしんとする。

その内に下女はいついとかへつて来た。顔をかてか光らせて、  
「只今廻りました」と挨拶をする。その間私はいつまでも一人かうして坐つて、何を考へてゐたものだらう。

自分に返ると、考へつめて頭が茫となつて底痒い。私も気分を直しにふるへ出て行く。こちらの裏の方の狭い往來は、電燈の線を埋めるのに掘りしてゐて歩き悪いと下女は言つた。

出て見るとその掘り返したところに、二三間置きに、煤の立つてゐたりする、曇つた硝子燈が、黒い夜の中に仄／＼と並んでゐた。

と、家の欄手の方の、一段低い家の固まつてゐる中で、

「玉やあ、——く——く」と、気がちがつてゐるものぢやないかと思はれる程、安靜な、青ざめた女のやうな事が、冷たい闇の中で、闇を

置いてはかう言つて、猶かなぞら呼び探してゐる。私がその坂を下りて、下の町筋へ出るまで、そのあたりにはうろ／＼とゐるやうに、いつまでも呼び續けてゐる。何だか聞いてゐる内にとつとするやうな気がする。聯想の悪い、何事かの凶悪を先づれるやうな嫌な女の呼び聲である。

私は湯へ這入りはしたけれど、もう汚れてゐて臭かつたので、何だか不愉快になつて、却つて來ない方が氣／＼利いてゐたと思ひつゝ、ろくにゐる／＼な上つて來た。職工かなぞのやうな小汚い男などがせき／＼になつて滿してゐるのが、だれかきき程表の往來で電車に撥か

れたとかいふやうな事を話し合つてゐた。何だかえたいの知れない女たつたとか言つて、見て來たらしい一人が辯じてゐた。女ぢやそんなに潰かして殺して了ふのは惜しいもんだ、血が出てたかいななどと、しまひには汚らしい事まで言ひ出してげら／＼笑つたりした。

そんな事を聞いた私は、何だか自分が、その死體をでも見たやうに、電車道の石の上に黒血が固まつて落ちたりしてゐるところを氣味悪く日に浮べながら、さつきの暗いところを通つてかへつた。嫌かれて死んだ女といふのは、さき

ほどの、玉や／＼ぢやないかといふやうな事を考へる。女といつても、たゞの女ぢやなさうである。何だか水膨れ心したやうな、割げこくられた、汚い女が目に見えて、晝間犬の死骸を見た時のやうに胸が悪くなつた。

かへつて見ると、子供はもう三疊からこちらの方へ移されて、本當に寢床をして寢かされてゐた。覗いて見ると、下女はその半圓の櫃に、疊の上で鉛筆で手紙を書きかけたなりに、俯つ伏し一層黙りをしてゐる。汚らしい紙をかいてぐら／＼言つて寢てゐる。

私は今夜はもう寢て了はうと思つて、さつき片附けさせた半圓を再び四疊へ運んでゐると、下女はふいと目をさまして、びつくりしたやうな顔をす。

「どうしたんでございませう。さつきから眠くつて眠くつて。といひながら立ち上つた。そこには鉛筆を削るのに持つて來たらしい庖丁が疊の上へ轉がつてゐる。

「おい、そこいらを少し片づけなさいか。汚いぢやないか。——あんなものもどこかへおやりよ。汚いね」と私はつぶやいた。

「あれは解いて洗はうと思ひまして。こと、取りちらしてゐたものをくる／＼丸めて表の間へ出

す。下女自身の身じみた着物である。

私はこちらで蒲團に這入つて、目をつぶりかけたけれど、今日は夕方まで晝寝をしたりしたので容易に寝つかれさうにもない。下女はあちらでがさごそ言はせてゐたが、やがて、こそと寢床を延べるやうな気がひがした。

私は頭ばかりいら／＼と痛くて寝つかれない。體を延ばして電氣を點けて、火鉢を引きよせて煙草を吸つた。もうすつかり替ばかりになつて了つて、辛くて身にならない。襟元がぞくぞく寒くて續けさまに嘔が出る。

と、下女がのそ／＼寢床から出一乗たらしく、寢間着姿で這入つて来て、

「これを下に召しておやすみにならないぢやお風邪を召しますから。」と、寢間着の上に着る胴着を出して持つて来た。

「私お煙草を今日買つとききましたけど、こんなのでは如何でございますか。」と小窓さうにして、哀れつぽい小さい袋の剣みを持つて来る。あれでも、いろんな事に氣をくばつてゐるのがいぢらしいやうな氣もしたが、こんな小法い下女が、私の蒲團のはしをのさ／＼踏んで歩くのが不愉快で堪らない。私は汚いものが行つて了ふのを待つやうに、黙つて顔を伏せてゐた。

私はそれからとうと、いつまでも寝つかれないのに困つた。暗い中に、腐れるやうな、變な胃の調子と、毛蟲が刺すやうないら／＼痛い頭とに氣がくさ／＼する。いろ／＼に體の向けやうを變へて見たりして藻掻くけれど、焦れば焦る程駄目である。かうしてまた明日、一層厭な頭を見るのかと思ふと、氣が氣でない。それに、かういふ寢られない時にはろくな事は考へない。血を吐いて死んだ妻の寒れつぽい短い生涯、これまで、困意と不安といらだたしさとこの外には、何にもなかつたやうな、私の生の黒さ寂しさ、そのやうな滅入るやうな慘ましい回想や、子供が盲目のまゝに大きくなるのをどうしたらいいかと言つたやうな、しめ／＼しい行先の心配や、氣ちがひになつて倒れる私や、赤身の出た馬や、刺げた犬の死體や、晝間見たすべての不快な氣分やなどが、汚く、臭く、重たく、息苦しく、厭悪く、がじ／＼と赤身を擦るやうに痛い頭に纏はつて物狂ほしい。

私はしまひには蒲團から刎ね出て電氣をつけ、兩戸を開けて、毒を吹くやうに、外の眞つ黒い闇の中へ顔を出して息をした。何だか死んで穴の中に生き返りでもしたやうな寂しさが、ひし／＼と闇の中から湧いて、私の心と肉體

とに浸み入るやうな氣がする。こんな時に人はピストルで氣を刺つて倒れるのぢやないかと思ふ。

私はぞく／＼と自分が怖ろしいやうな心持になつた。自分が毎日のやうに、こんなにして厭はしい夜表をのみ見てゐる内には、何を仕出すか分らないやうな氣がして物怖ろしい。私はこのやうな私をたゞ一人不眠に残して、冷やかに黒くすべての眠れるものを音もなく包んでゐる闇の中を、忌々しく見廻した。

と、前の、裏手の竹垣の隙間から、ちらりと赤い火の影が見えて、つと消えてしまつた。私のかぶつた神經に見えた幻影であらうか。何だか、詛ひのやうな、小黒い色を帯びた火影であつた。何だか低く私語く人聲がする。私は何かの凶悪が、私の家に加へられるのぢやないかとぞつと、冷たい痺れのやうなものが私の腦から背中を傳はつた。二三人の人間がカンテラを點けて何かやつてゐるのである。何をやるのだらうか。

私は氣味が悪いけれど、不安なので、表口へ行つて下駄を持つて来て、土の上に下りた。垣の根へ行つて覗いて見ると、後の空地に黒い筒袖を着た二人の人影が、赤い裸火を圍

んでござまつてゐる。泥棒ぢやあるまいかと打たれるやうにさう思ふ。よく見ると、人が穴を掘つてゐる。中へ一人這入つて肩から上を出して、黒ずんだ土を上げてゐる。掘つてゐた一人が、

「替らうよ。」と私語くやうに言つて、穴の中へ這入ると、先の男が上につつた。三人とも夜の暗さの中のみ棲息してゐる人間のやうに、眞つ黒いものを着てゐる。今時分あそこに穴を掘つて何をするのだらう。やりかけてゐる電線の工事とも違ふ。あんな突飛な空地の眞ん中へたつた一つ大きな穴を掘るのである。

かう思ひつゝ、不氣味になつてこちらへ上りかけると、下女がふいと向うの兩戸をがらつと開けて、

「旦那までですか。」と愕いたやうにいふ。私の室の灯がさしてゐるので姿を認めたのであつた。

「何をしていらつしやるのでございますか？」  
「已は何にもしてゐやしない。だれかあそこで三人して穴を掘つてゐるんだ。」  
「どうしたんでございませう。」と、下女は私のゐる方へ来た。  
「もうさつきから、坊ちゃんが外にだれかゐる

だれかゐるつて、怖がつていらつしやるものですから、私は氣のせゐでさう仰しやるんだらうと思つてゐましたけど、それでも何だか怖くて、二人で小さくなつてゐたんでございますが、やつぱりさうだつたんでございませうね。

「何だ、坊も起きてゐるのかい。」  
「え、私によつて寝て何にも知らなかつたんでございませうけど、坊ちゃんかこのへ、寢床を出ていらつして、怖い」と言つて私の中へお這入りなさるんでございませう。私はびつくりして目を開けたんでございませう。坊ちゃんはお耳が敏いのでございませう。――まあ、今時分穴を掘つてどうするんでございませう。」と不安さうに佇んでゐる。

「お、もう怖くはないから安心してお寝なさいよ。お父さんもちゃんとゐるんだから。」と言ひつゝ、側へ行つて顔を覗くと、子供はもうすやくと寝入つてゐるのであつた。何だかいつもよりかざつと顔の色が若いやうな氣がする。熱でもあつちやあるまいかと思つて、額に手を當てて見るとさうでもない。若さめた小さい寢息をして

「おい、もう怖くはないから安心してお寝なさいよ。お父さんもちゃんとゐるんだから。」と言ひつゝ、側へ行つて顔を覗くと、子供はもうすやくと寝入つてゐるのであつた。何だかいつもよりかざつと顔の色が若いやうな氣がする。熱でもあつちやあるまいかと思つて、額に手を當てて見るとさうでもない。若さめた小さい寢息をして

ゐる。  
「もう寝てるよ。」と私は這入つて来た下女にさう言ひつゝ、ぢつとその哀れな寢顔を見た。下女は、  
「坊ちゃんがさつき妙な事を仰しやるんでございませうよ。」と言つて、這入つたまゝのところを突く。  
「何だつて。」

「あのさつき怖い」と言つていらつしやるかと思ふと、坊やは母さんの顔を知つてるよ、お前は知つてゐるかいつて、さう仰しやるんでございませうよ。いつ、どうしてお母さま、お顔がお見えなさいましたかとお訊き申しましたら、だつて知つてる、お父さんの顔でも知つてるつて仰しやるのでございませうの。」

「變な事をいふ子だね。」と私は下女にはさりげなくさう言つて、どうして日の見えない子供が、ふいとそんな事をいふのかと訝しみつゝ、その目を閉つてゐる顔をまじくと見入つた。私は何事をかこの子に豫言されでもするやうな、呪ひなるものを形なく見るやうな、不安な心持がするのであつた。

「そんな事を仰しやるかと思ふと、外に人がゐると、人がゐると言つて顔つていらつしやるので

ございますの。私は一向氣が附きませんもので  
すから、何もみやしません、何か夢でも御覽にな  
つたのでせうつて申してゐましたんですけど、  
やつぱりさつきから人がゐてこつ／＼搦つてゐ  
たんでございませうね。私はそこを開けて見ま  
して、且那様がおいでになるものですからびつ  
くりいたしました。」

「あ、ぞく／＼寒くなつた。何時だらう。」

見ると時計は二時半のところまで止つてゐる。  
立つてこちらへ来て垣の外を覗くと、まだ火  
影が見えて人の氣色がしてゐる。

私はそれが氣になつて、やがて火影もなくな  
り、人影も去つて了ふまで、蒲團の上へしよん  
ぼりと坐つて、いくたびも外を覗いて見いみし  
た。下女も、目がさえて得う寝ないで、蒲團の  
中でまんじりと目を開けてゐるらしい氣色であ  
つた。

翌朝、がじ／＼ただだ黒い眠りから呼び起  
された私は、下女から、

「あなた、昨夜のは、あそこへ電車で轢かれた  
死骸を埋めたんでございますつて。」といはれな  
がら、腐れるやうな、氣分の悪い頭をして、寝  
足りない體を濫々と起した。

「どこのものですか、年取つた女ださうでござ

いますよ。昨夜轢かれたのを、引取人が来るま  
であそこへ埋めといたんでございますつて。」  
一驚だなあ。——もうどこかへ運んで行つたの  
かい。

何ですか、その儘にしてあるのでございませ  
うよ。私はお隣りの方から聞いたんでございま  
すけど、氣味が悪いから行つて見もしませんが、  
あすこの土の上に血がぼた／＼落ちてゐますつ  
て。と、こんな事をいふ。

「あちらで子供がぐづ／＼言つて下女を呼んで  
ゐる。  
「行つて見ておやりよ。子供が何か言つてゐるぢ  
やないか。」

私は顔をしかめて立つて、障子を開けて外を  
見た。また今日も、ただ暗い暗鬱な空が低く壓  
へ下つてゐる。そのすぐ垣の外に、汚い女の死  
骸が埋めてあるのかと思ふと、胸が悪い。警察  
が許してそんな事をさせたのだらうか。

氣分の悪い私は厭々しい、心持をして顔  
を洗ひに行つた。もう今朝は急いで出かけなけ  
れば、勤めに間に合はない時間であつた。

(大正元年十一月)

### 赤菊

いろ／＼を習つたら別れても手紙が出るかと  
思ひたりも、自分は日に二三字づつお綱に平  
假名を教へた。小女は土の上で稽古した。素  
直な子であつた。

毎日二人で、登る日食ふ米を、月の中の兎が  
搗くやうな臼で搗いた。夜暮大きな浪が壁の  
後の石崖に碎けた。

自分はお綱を置いてこの西の國の果に三月お  
た。女はいつも縁側の隅に、ひひの入つた古  
鏡に黒ずんだ櫛を載せて置いてゐた。頭、薬  
で束ねてゐた。

女が消炭の箆をかけた裏の柿の木の下に、ま  
ばらな低い菊の一株が乏しい苔を以啼く附け  
てゐた。いつまで経つても堅く閉つた儘であ  
つたが、たうと自分がこの浦里を引上げる前  
の日に、小さい赤い花を二つ淋しく開いてゐ  
るのを見た。

別れてから二年振りに不圖お綱からの手紙が廻  
り廻つて来た。自分の教へた假名を綴つて、  
私は辰といふ者の女房になつてゐる。例の  
家は去年浪がさらつて行つたと書いてあつ

(三赤菊拾遺)

# 大 伯 母

先月私の祖母が亡くなつたとき、私のたゞ一人の伯母がはるく出て来た。殆ど生れたばかりで母を失つた私は、子供の間は、すつかり祖母とこの伯母とに育てられて来たのであつた。

伯母は、祖母の僅かばかりの影見を片づけてゐるうちに、祖母が昔から持つてゐた、黒い濃紙を貼つた小さい竹行李の底から、一冊の藍紙の横線の本を見出した。俳諧七部集の寫本の「炭俵」の巻であつた。お家流の小さい字で丁寧に書いてある。伯母の伯母に當る人が寫したのださうである。

私は子供の時に、この本を祖母のところから持ち出して、譯もわからないなりに抜いて見た記憶が懐かである。最早それから二十年ばかりもたつた今日、久し振で再び目に見るのであつた。かゝいふものが祖母の手にあるといふことゝ私にすつかり忘れてゐた。

伯母は、さうした續きから、私が小さい時に、祖母やこの伯母から聞いたこともあるやう

な、私の家の昔の事などをあれこれと話した。私は大伯母については、これまで少しも知らないてゐた事を聞いた。祖母も伯母自身も嘗てさういふ事は私に少しも話さなかつた。

私が大伯母について聞いてゐたすべては、その私の祖父の姉なる人は、殿さまの奥方のお局に上つてゐた人で、字が上手、俳句が上手であつたといふこと、男にも儂な程の賢い人で、少しゆつくりした性質の伯母は、家へ嫁入つて來てから、母人よりもこの大伯母に氣が置けて、いゝるんな人知れぬ苦勞をしたといふこと——たゞその伯母のこゝろであつた。それから家の過去帳に、何々童女とよの女行年一歳、かういふのが書いてあるのを知つてゐたけれど、御殿にゐた大伯母が、それからどこへ嫁入したのか、さうして何故にその人の生んだ子の或名が私の家の過去帳に載つてゐるのか、私はさういふことを考へようとしたこともなかつた。伯母に今度聞いたのでは、大伯母は、私がこれまでぼんやりと想像してゐた人とは全でちがつてゐた。

私は伯母の話した事を書いて見る。次の記載に「私」とあるのは伯母自身の事である。お万といふのが伯母の名である。大伯母は、御殿では桐江さんといふ名前を買つてゐたのださうで、祖母も伯母も、それを本名のやうに呼んでゐた。

私の家は、もとより今は何一つ跡形もないけれど、舊藩時代には紀の國屋と言つた大きな分限者の一つだつたさうで、舊くから代々續いて藍の前ばいをしてゐたのださうである。その時分の家は、伯母が十二の年に、維新の時つ百姓一揆で、掠奪の後にすつかり焼き掃はれてしまつたさうで、祖父がその地面の大半を賣つてそのあとに建てた家も、父の代にすつかりしくじつて人の手に渡つた。それはまだ私の生れ、先のことである。私の生れた家も、數年前に私が賣り放して、祖母をこちらへつれて來た。もとの紀の國屋だつた跡は、今では三階建の一等郵便局と、電氣交換局となつてゐて、昔の面影は何にもない。

これは私がすつと後に、最早一人の女になり、子供の母になつてから、一人考へ返したこ

これは私がすつと後に、最早一人の女になり、子供の母になつてから、一人考へ返したこ

とだけれど、どうも桐江さんか亡くなったのは、たゞの亡くなりやうではないやうに思はれてならぬ。それには、小さい私一人の日に觸れただけで、だれも氣づかないで了つたことが一つある。私はそれをだれにも言はなかつた。亡くなつた人だからさうなのだらうと、子供心にたゞさう思つただけで、人にいふべき特別の事だとも思はなかつた。

桐江さんはたうとしまひに、哀れな裏町の、わびしいところで亡くなつたのである。さうして、だれと引受人がないために、町役人から遂に私の家へさう言つて來たけれど、私の父は已に紀の國屋とは縁を切つた人の亡きがらを、表向き家の方から引き取りに行くわけには行かないので、どうしたものだらうかと考へた。

母はその知らせを聞くと、さめ／＼と涙をこぼして、やがて寢かにこの哀れな人のために備さまにお灯を點じ、線香を立てて、一人拜んでゐた。次の間では、父と店の方の主立つたものが二人と膝を合せて、前後の處置を相談した。

私はそのときのことをよくおぼえてゐる。「お万さん、こゝへお坐りよ。伯母さんが亡くなりなしたのぢやけのい。さ、手を合せて、母さまと二人でこゝから拜んで上げようぞい。お

万をよくいとしがつてくれなした桐江さんだつたのに。」

かう言つて、母は、仄ぐらい一間に、晝をまた／＼佛さまの轡の灯を見守りながら、しよんぼりと、考へ入つたやうにしてゐた。

夕方になつて、通ひ番頭の高助と、幸八といふ年上の手代と二人が、祖父の代に主人の一人娘だつた桐江さんの亡きがらゆゑ、亡くなつた祖父に對して、父たちに内證で竊と引き取りに行く體にして派せられた。店が忙しくて、夕方まで奥へ遣入つて來る間もなかつた兄は、それまで何も知らずに、帳場に坐つて、子供相應の手傳をしてゐた。

二人のものが出かけたすぐあとから、私は、つい不斷のまゝの着物で、佐吉といふ、年取つた翁番の爺やに負されて、裏木戸から、二人のものあつたを追うた。

もとより、すべて後になつて母から聞いたこととだけれど、私がさうして負されて行つたのは、母が、一人の了見で、せめて小さい私を、家の血筋の名代にして、父には言はずに、それとなく桐江さんの亡きがらに會ひに行かせるためであつた。

一のい、お万はいゝ子だから、黙つて爺やに負

されて、伯母さんを見て來ておくれよのい。母さんも父さんも、だれも、行くわけには行かんのぢやけのい。お前がみんなの代りに竊と行くのぞい。」と母は小蔭で私にかう言つた。

「それでは兄さんも行つてはならんのい？」と、私は涙ぐみながら母に訊く。

「兄さんもい。」と母は私の髪に櫛を入れる。

私は、さう言つたやうな、そのときのことをよくおぼえてゐる。佐吉といふその爺やは、母が私のところへ來たときに、たけといふ女中と共に母について來て、こちらの家に使はれる爺やになつたのであつた。

裏木戸を出ると、そこは少しの間、ひつそりした人通りのない町筋であつた。こちら側は、私の家の長い練堀で、向うには、米の取引所の、白壁に丸に七の字の印のついた倉が並んでゐた。

そこには「る組」の火消しの溜り場があつて、半鐘の高梯子の下の、小さい小屋がけの前に竹の梯子に並んで、勇ましい櫛が立つてゐたのが、今でもあり／＼と目に殘つてゐる。

私は佐吉の背中に負されて、もうそろ／＼日もくれかける練堀に沿うて、とほ／＼と出て行つた。

すると、その堀の向うの角の、丁度、家の裏

の物置倉の後になつてゐる、網の嵌つた物見の窓から、

「お万や。」と、母かそこへ来て待ち受けてゐて私を呼びとめた。格子の内には、おはぐろをつけて、平打の銀の簪をさした、眉毛のあとと青い、目の下に私の好きな大きいほくろのある母の顔が覗いてゐた。そこは、庭から出て倉の間を抜けて来る、淋しい物見の窓で、段々を上つて、戸棚のやうな重たい板戸を開けて這入ると、三疊ばかりの暗い、曇りきになつてゐるのであつた。いつもは母たちが自分でこんなところへ来て覗いたりすることなどはもとよりないのである。

「お前のい、人がどこの子か」と訊いたとて、黙つて聞えぬふりをしてゐるのぞい。家のものだといふ事が知れてはいけないのぢやけのい。」と念を押した。

「佐吉は提灯を持つてゐないのぢやのい。」と、母は次いで急ぎに前へいふ。

「い、え、覺んで懐に入れて居りますでござります。」と、母は答へる。

「お母様、その罫の下には、家の裏の大きい木から取つて来た家香の葉が、ばら／＼と、仄暗いたそがねに黄色く落ち敷いてゐた。」

二

小さい私は、桐江さんが、そのときどんなところはどうしてゐたのかといふ事も、その他の何ごとをも知らなかつた。たゞ、あの自分の好きだつた伯母さんが亡くなつた、さうして私は佐吉につれられて、その亡きがらに會ひに行くのだといふことだけ分つてゐたのである。けれども、たゞそれだけでも私には十分悲しかつた。人が訊いても、どこの子だといふことを告げてはならぬと母が口止めをしたのが、なぜさういふのか、それはその時私には分らなかつたけれど、さういふはれたのが、何だか、私の沈んだ子供心を曇らせた。

私は物心が附いてから、伯母さんの桐江さんとつらつてゐたといふのは、たゞ、その三四年ばかり前に、桐江さんがお局から下げられて、家へ来てゐた間の、催かもの十日か十五日ばかりが程のことであつた。それでも私は、これまで自分を大きくしてくれてゐた人のやうに考へられた。伯母さんが間もたくまたどこへか行つて見られなくなつてからでも、いつまでも好きなた人だと思つてゐた。

私は小さいときには、この伯母さんに非常に

可愛がられて、母人へよりも、伯母さんの方へ餘計になつてゐたさうであつた。伯母さんは人形のものをつねるやうに、私のために、いろんな着物やら巾着やらお守り袋やらを拵へて、それを着せたり附けたり、私の小さい髪を分けたりして、自分のもののやうにいとんでゐたといふ。けれども、それは後になつて母たちから聞いたことで、私が、やがて何でも口を利くやうになり、甚の着物の赤い紐をでも一人で拵へる子になつたときには、伯母さんはもう家にはゐなかつた。私はさうした伯母さんがあると聞くだけで、顔もおぼえてはゐなかつた。伯母さんはそのときには、もうお局へ召し出されてゐたのであつた。

伯母さんがさういふところへ上つたといふのは——それ等はすべて私が一人の女となつてから、ずつと後に知つたことだけれど——それにはいろ／＼こみ入つた譯があつてのことであつた。

母から聞いたのでは、家ではおきよさんと云つたこの伯母さんは、もと／＼、私の父とひとく氣の合はない人だつたさうであつた。女ながらてきはきした人で、小さい間から、女のするだけの業の他に、いろんな事に才があつて、町

人では男にさへ用なきものとなつてゐた漢書（漢書）の學問さへ、一わたりは修めてゐた。それから伯母さんのお父さんになる、私たちのお祖父さんが俳諧に堪能であつて、その方の交際かし、いつも入り代りいろんな俳人などが廻つて来ては、いつまでも泊つてゐたりするやうなわけだったので、おさよさんも小さい時から、自づとさういふ方の道をおぼえて、後には女ながら父の俳諧の座にも交つて、俳人の間に評判されてゐた。お祖父さんは、それを何よりの誇りとしてゐた。おさよさんは、町うちでも名代の、いゝ器量の人であつた。

發句のことをいへば、おさよさんがまだ十一か二かの小娘（小娘）だつた時分に、人々につれられて氏神さまの祭（祭）へ参つたときだとか、そのときの夜の見世物（見世物）で見て来た事をそのまゝに、

山雀の文箱くはへてお初かな

といふ句を詠んで、お祖父さんを愕かせたといふことを、私はいつ誰か聞いたのだつたか、この句だけは伯母さんの句としてたつた一つおぼえてゐる。私は若いうちには、よく、子供のときのことを考へ返すたびにこの句を思ひ出して、何だか、それに寫されてゐる情景が、自分が小さい目に見た事の記憶のやうに、なつかし

く目（目）に浮んだものであつた。

私のお祖父さんは、二人ある子供の中で、女の方のおさよさんが何より氣に入りで、この人のためには今で目がないくらいであつた。ところが、それに引きかへて、私の父には、すべての點が全て他人のやうに冷やかだつたさうである。父は、子供の間には至つてどんよりした人だつたとかで、それが姉さんの人なみはづれて利發（利發）だつたのに對して、お祖父さんには餘計にまどろかしく思はれてゐたのであらう。長じてからでも、父はたゞこゝろと家の商ばいの事をおぼえて行くより外には、他にこれとて能くない、平俗な人だつたので、何かにつけてお祖父さんや姉さんから見下されてゐたものらしかつた。

さういふ父は、おさよさんについては死ねま（死ねま）で得忘れなかつたやうな悔しい目を見たことがいく度もあつた。その一つは、父が十四五の時分のことだつたさうだけれど、或日店の帳場へ出して、お祖父さんの前に坐つて、何かの帳合せをしてゐたときのことであつた。まだ年の行かぬ父は、計算の少し紛らはしいところへ来て行きつまつて、何遍も算盤を置き直したりしてまごつてゐると、丁度そこへ何かの用事で店へ

出て来たおさよさんが、やがて父のさうしてゐる側へ来て、少らくぢつと覗いてゐたが、父の算盤がのろいので、つい何の氣もなく口を出したのだらうけれど、さつきからいら／＼してゐるところへ持つて来て、おさよさんが、はたから、

「お前さん、さうお置きだからいけないのえり。貸してお見。私がそだけして上げように。」そんなことだから、いつでもお父さんに叱られるのぞい。」言つて、帳面を向け直すので、父は何だか情なくなつて、

「ではどうでもおしがいい。」と、ねつちりした父もくさ／＼したまざれについで算盤を投げ出して立つて了つて、店の次の間へ這入つて、その柱にすがつて、悔しさにおろ／＼と涙を噴込んでゐると、後からお祖父さんが踵を追うて這入つて来て、手に持つてゐた算盤でいきなり父の頭を搔りつけた。

さうして血がたら／＼と流れるのを押へさせもしずに、目の廻るやうなのを引つ張つて行き、店のもや、取引に来てゐる人たちが大勢で見えてゐるところで、姉の前に坐つて、兩手を突いて今の不行儀のわびを言はせた。父の頭には、そのときの、算盤の角が三角に食ひ込んだあと

が、生涯大きな傷になつて残つてゐた。

それは併し、父が悪かつた刑罰で仕方がないけれど、そんな事よりも、父が最も侮辱を受けたのは、お祖父さんが、行く／＼は、父をさしおいて、二つ年上のおきよさんに家督をつがせるつもりで、父に十七で私の母を持たせると同時に、おきよさんへ他から養子婿を取つたことであつた。たゞ、たま／＼その養子は、一年たらず同棲しただけでぢき別れて實家へかへり、おきよさんは、それから私が生れたりした後に、家のお祖父さんの姪なる人が嫁づいてゐる、山内といふ、一寸した傳つたの家へあづけられて、やがてそこから、その家の娘分になつて、代瑠院さまといふ、殿さまの奥方のお局へ上り、それから三年ばかりしてお祖父さんが亡くなつたので、父は二十三で家を継いだのであつた。

この事だけは母がしまひまで私には隠して、さうと何にも言はずにつれけれど、おきよさんの養子婿が、そんなにして間もなく歸つて行つた時、それからおきよさんが山内へ預けられたりしたのは、おきよさんにはいつの間にか竊かに言ひかほした男があつて、大分ごと／＼したから、その事だ、言はれてゐる、それは、家では、父とお祖父さんたちの外には、だれにもわか

らないやりに秘密にされてゐたのだと言ふけれど、そのことは私と早い學校友だちだつた、亡くなつた山内のおかうさんが、ずつと後に、年取つてから、私に話したのである。とにかく男があつたといふのは間違ひないらしい。おきよさんは、お祖父さんの計らふ事なので、仕方なく養子をもらつたには貰つたが、表面きではそれとなく装うてゐて、その實、二人が同棲してゐる間、その養子には一寸も膚身を許さなかつたといふやうな事も聞いた。そのおきよさんの言ひかはした男といふのは何人だか、とにかく、いくらお祖父さんでも、許しておきよさんに添はせる譯には行かない人だつたものと見える。それで二人の隔を割くために、山内から、御殿の方へ上げて置くことにしたので、おかうさんはかういつたやうに話した。

三

おきよさんは、私のおぼえてゐるだけでも、目もとの黒い、髪はふさ／＼した、瘦型の綺麗な人であつた。お局へ上つたのは、二十一二年だつたらうと思はれる。

行つた事があつた。それは、何でも、私が極々小さいときの事だつたらしい。そのときのことには、母たちから聞いて、そんな事もあつたのかと思ふだけで、私自身では殆どおぼえがないけれど、さういはれて見ると、私にたつた一つ、そればかり前後もなしにぼんやり目に遺つてゐることがある。

そのとき桐江さんは、最早二十五六になつてゐた勘定である。あゝした利發な人だつたところへ持つて来て、何一つこれとて出来ぬ事のないやうに、すべてのわがしの備はつてゐる人だつたから、お上に非常のお氣に入りではばらくの間にずん／＼抜上げられて、その時分には、もう一人のずつと年上の人と二人で、御禰筆の役目を申附かつてゐた。それはお局では老女に次いでのもの上の役目で、中々幅の利くものであつた。二十代のもので、さういふ御用に仕へた人は、これまで桐江さんより外には未聞の事だつたさうである。

桐江さんは、さうして一方では代瑠院さまに引き立てられてずん／＼上へ進んで行つたし、一方では、山内のおかうさんの言つたやうな譯で家から出たのだとすると、お閉を戴いて下るにしても、もう、お祖父さんもゐなくなつて氣心

の合はない私の父が監督を取つてゐる中へは、尚さら歸りがよいといふ事もあつたらうし、また外にもいろいろ考へて、その年までお局を下らないでゐたのだと察しられる。おかうさんの話では、桐江さんに取つては、その間の月日は、上部には隠してゐても、忘れようにも忘れられぬ男の事で、何事にもあぢきない暗い年月であつたらうといふ。桐江さんはその間、お祖父さんの亡くなつた時の外には、一度も宿下りといふ事をしなかつた。

桐江さんは、家にゐた間は父とは律がよくなくとも、私の母を好いて、母には情をつくしてゐたさうで、お局へ上つても、しげく消息をしてゐたし、ときく、いろんな下されものまで分けてよこしたりしてゐたさうであつた。私もいろいろのものを送つて貰つて、大きくなるまで大事に持つてゐたものがさまへあつた。

桐江さんは段々物に自由になるやうになつてから、まだるくに立ち歩きも出来ないくらいのお小きかつた間に可愛がつてゐた私を、久しぶりで見えたとて、母へ手紙を持たせて、人をつれによこしたのださうであつた。

からいふ話をすると、今ではあんなになつて了つてゐるあのお城に、まだ、大きな矢倉や、

白い指手が高く續いてゐて、御門々の石がけに、乳房のやうな金具がばいばいに附いた、いかめしい門の固めがしてあつたのが目に浮んで来る。あの外側のぐるりのお濠なぞは、今ではあつて泥で埋まつてゐるけれど殿さまのゐられた昔には、塵一つも落ばない水が、底もわかぬほど青く湛へてゐたもので、たゞのものは、その濠のところまででも減多には近づけなかつた。

私は、桐江さんのゐた御殿は、西北の御門から這入つて行つて、ずつと奥の方にあるのだといふ事を後に教はつたけれど、あのとき桐江さんのところへ行つた時分には、どんな人につれられて、どこをどう行つたものか、何にもおぼえがない。

たつた一つ微かに目に遺つてゐると言つたのは、どうした續きだつたものかそれは分らないけれど、とにかく、桐江さんのお局の小きい一間に、私は一人、小きい膝に手を置いて、所在ない心持をしてしよんぼりと坐つてゐた。

そこは、どんよりした、物暗いやうな一間であつた。さうしてゐる私の前には、だれだか知らない一人の年若い女の人が、黒い色の、襦袢のやうなものを着て、唐紙の方を向いたまゝ、何か待つてゐるやうにぢつと坐つてゐた。そんな

な人形が拵へて据ゑてゐるのではないかと疑はれる程、ぢつと目を伏せたなりに一寸も身動きもしない。私は後に坐つて、その人の後姿をまんじりと見つめてゐた。

すると、さうして向うを向いてゐるこの女の人の目が、何だか、その頭馬屋町の角の紅屋の店先に招牌に立たせてあつた、大人程に大きな京女郎の人形のビードロの嵌つた目のやうに、その瞳が冷やかに光るまゝで固まりついて、たゞちいつと一つと一つとこころを見たなりに動かないのであるやうな気がして來た。私はさう思ふと、何だかうすく怖いやうな心持がして、もうこゝにゐるのは厭で、早く家へ歸りたくなつた。私はさう思ふと譯もなく物悲しくなつて、瞳にばい涙をためて、一人でしくしくと泣きながら、何もその黒い着物を引いて坐つてゐる人を、小暗く後から見守つてゐた。

私はさういふ前後もない事をぼんやりと記憶してゐる。それから、もう一つ私は、桐江さんのお居間の前かなぞの、縁側のはしに立つてゐる柱につかまつて、だれかが、もうおよしなさいませ、危うござりますすけと止めるのを聞かぬいで、げらげら笑ひながら、縁板から足を離しては、くるくると柱を抱いて廻り廻りした、さ

ういふ私の小さい姿が、かすれぬ、目に浮ぶ。私は、紙のついた、小さい白絹の足袋をはいてゐたやうに思ふ。

その外の事はなんにも知らない。お局がどんなであつて、桐江さんがどんな桐江さんであつたかといふことも、なんにも頭に遺つてゐない。

だから私は、桐江さんがその後御殿から下つて、私の家に歸つてゐたときに一寸の間一しよにゐたばかりのが、私をはじめ見て、それきり永久に別れた私のたつた一人の伯母さんである。

その桐江さんが御殿から下つてゐたといふに附いては、私はだれに聞いたものだつたか、小さい時からかういふ事を聞いてゐる。

それは、その時分、お局の若いお女中たちの間に、正月の一の寅の晩に「寅待」といふ事をしたものださうであつた。詳しいことは知らないけれど、なんでも、その一の寅の晩の寅の刻が近づくと、お女中たちは四人づつ別々に大きな部屋へ這入つて、その真ん中に白木の三脚を据ゑて、それへ、かねて銘々の人が用意しておいた、七色の絹の小さい束を持ち寄つて、その三脚に供へる、それから部屋の間隔へ一臺

づつ、銀の燭臺を置いて燭燭を點して、四人が銘々鏡を持つて、一人づつ四隅に分れて、燭臺のもとに坐るのださうである。

その晩はみんな綺麗にお化粧をして、自分の一番いい着物を着飾つてゐる。さうして、息をしづめて、ぢつと鏡の表を見つめてゐる。次の間でも、その次の間でも、四人づつ同じやうにさうやつて、寅の刻が来るのを待つてゐるのである。さうしてゐると、お城の矢倉で、寅の刻の太鼓が夜更に傳はつて響いて来る瞬間に、自分がさきで一生つれ添ふ男の顔が、すうつとその鏡の表に仄かに寫つて来るといふのである。

桐江さんが御殿から下つたのは、その寅待の晩に、さういふ四人づつのお女中たちの組が、一組だけ人数一人が足りないの、老女の指圖で、上役の桐江さんが、それを填めるために、お女中へ交つて鏡を見てゐた。すると待ち受けた寅の刻が来て、一日鏡の中に見えるといふ面影を、人々は、私は見た、私には見えなさんと興じ合つてゐる間に、一人口をつぐんで、襦袢の袖を顔にあてて目を伏せてゐた桐江さんは、やがてついで立つてどこへか出て行かうとした。居合はせたものは、その顔がまつ着になつてゐるのに傍いて、どうかなさりましたのでござりま

すかと訊く間もなく、桐江さんは二足三足歩きかけていきなりぱたりとそれ場へ倒れて正氣を失つた。

御殿中は大きわぎになつた。桐江さんは手當を受けてやう／＼息を吹き返して、自分の局へはこばれたさうだけれど、それから常分は杖を得上げないで、いつまでも蒼い顔をして、がたがた慄へてばかりゐるやうな状態が續いた後、

全で騎の扱けたやうな女になつてしまつて、ふら／＼と出て行つては、物暗いところにぼんやり立つてゐたりした。口を利く事が何を言つてゐるのか取りとめがつかない。人が側へ行くと、さめん／＼と涙を流して俯つ向き込んで了ふのださうであつた。

御殿中では、これはきつと、だれかこの女の出世を妬むものがあつて、竊かに呪ひをかけたにちがひないといふ事になつた。老女たちは、奥方のお言ひ附けて、一々の部屋や、下女の部屋にいたるまで、各の部屋の床下をめぐり上げ、天井裏へまで人を入れて、五寸釘を刺してある薬

人形が隠されてでもゐるかと思つて探させたさうであつたが、そんなものは更に見附からなかつた。尙もう一つの呪ひの仕方として、桐江さんの着物に針でも刺してはいないかといふので、

着物をすつかり出してそれをも調べて見たけれど、別にさういふ形跡もなかつた。

人々の間にはいろ／＼の噂がさ／＼やかれた。若さめ果てた桐江さんは、いつまでも元の人に戻らないで、たうと一先山内の方まで下げられた。

四

桐江さんが私の家へ歸つて来たのは、さういふ状態からやう／＼恢復して、もとの桐江さんになつてから後であつた。

私の家では、山内へは急だから、御殿から下げられると直ぐにこちらへ引き返つて徐かに養生させるからといふので、父が出て行つたのださうであつたが、桐江さんはあそこへ歸るのは厭だと言つてどうしても聞き入れなかつた。いゝろんな人が代る／＼行つて勧めたけれど、どうしても歸らうと言はなかつた。それが、すつかり直つてもとのやうになると、何だか一寸家へ行つて見たいからと、自分から言ひ出したのださうであつた。

山内の若黨がついて、鯉へ載せて作れ来る、と、あとから、山内の奥さんも——それはお祖父さんの姫で、私にかういふ事を話したおかう

さんのお母さんに當る人——その人も、駕であとから出て來られた。

その時は七つばかりの姫であつた。二人が前後して家へ着いたときの事なぞはかすかながらおぼえてゐる。併し、もとよりすべての仔細を知つてゐるわけもなく、たゞ私を可愛がつてくれてゐた伯母さんが、御殿から退席に來られたものとのみ思つてゐた。

私がその後すべての事を知つてから考へ返しても、桐江さんは、そのときさうした病氣氣味のものやうには見えなかつたやうに思ふ。私には、そのときの桐江さんは、目元のりんとした、綺麗な、好きな伯母さんだといふ記憶が、いつまでもなつかしく遺つてゐるばかりである。

髪はお扇風の、鬘の張つた、白いたけな水をかけた二層はづしといふ結び方にして、定紋を打ち出した平打の大きな銀の簪をさして、伯母さんらしい人に似合はず、厚くお化粧をして、口紅も濃くさしてゐた。着物は、水色の上布に、金や銀絲や、赤色の緯で、大きい模様を縫取したのへ、朱珍の帯を胸高に結んでゐた。細かいことはおぼえないけれど、私は、さうした御殿風をした綺麗なお扇さまが私の伯母さんで、それが母たちと打とけて話したりしてゐる

ところを、よその人に見せて誇りたいやうな心持がし／＼嬉しかつた。

桐江さんは家に逗留してゐる間は、母のものが入れてある倉に隠つた、青桐の大きなのが襦袢本か植つてゐる、襦袢の一間にいつともなつた。

わたしは今でも、黒塗りの障子の俵つた、その疊の青い一間に、桐江さんの紫色の着物が衣桁にかゝつてゐて、その下の、青色の焼物の香爐から、匂ひもののが細く立ち達うてゐたさまなぞが、はつきり目に浮いて見える。

それは五月の青い雨のしと／＼と降る日であつた。私は桐江さんの膝の前に坐つて、桐江さんが小さい春日人形を拵へてくれる手元を、長い睫を見張つて神妙に見入つてゐた。その人形は、厚紙を、湯斗を伏せたやうな形に貼りつけて、その上へいろんな布切をぐる／＼巻きに貼り、首には奉書を小さく巻いて插しただけの、一寸ばかりの小さい人形であつた。

桐江さんは小さい髪などを使つて、そんな人形をいくつも拵へて、錦を貼つた私のみだれ箱の中へ並べてくれる。と、そこへ、母がいろんな布の遣人つた疊紙を持つて来て、「どうもあんまり面白い布もございませんけど、どんなのがようございませうぞのい。」と桐

江さんの前で還り分ける。

「お万さんは、どれがいゝのい？ これ？

は今度これにしようかのい？と、桐江さんは私の相手になつてくれながら、私が迷ひくゝい、い加減に指す布を取つてはお人形に着せて、母と二人で微笑み興じる。そのとき桐江さんは、小さい青い蚊蜻蛉が、外の雨を避けて、障子に來てとまつたのを捉へて、赤い絹帯で捕つて、それを障子にとまらせて見てゐたりした。蜻蛉は長い糸を重たく垂れたまゝ、障子の棧から後へ移つてまひくゝしてゐた。

雨の降らない日には、黄色い柔かい日影が、倉の草履をにいて、浮き足に土を踏んで下りて來た桐江さんを、その藪の中に、水色の螢草の花を摘みつゝ、追へて、その花や麥の穂のやうな毛のある花をも取つて桐江さんに上げた事もあつた。そこには自然生えに低く生えた桑の木などがあつて、その若い柔々しい葉の裏に、山藪をつける数々の卵が、青い絨々に閉いてゐるのを、桐江さんは私を招いて指したりした。

五月といへば、私の家の表で、大屋根の下に澤山藪を食つた乙鳥の巢が、子鳥を孵化して、あたりの屋根の賑やかになつてゐる時で、私は、門口

の流色の暖簾をくゞつて外へ出て、乙鳥の巢のごだ／＼と込み合つたさまを見て來たりして、子鳥がどのやうにして飛んで歸つたなどといふ事を一々桐江さんに話して上げた事もある。家の表には、黒ずんだ椀子が長く續いてゐて、その上の小屋根のもう一つ上の屋根裏に落ちて、いくつともない乙鳥の巢が、下から見れば音が生えたやうに、一面にべつたりと閉いてゐた。

私はその外いろ／＼の事を思ひ出すことが出来る。

けれども、桐江さんがゐた間、どんなことを私は言ひ、桐江さんが、どんなことを私に言つたかは忘れて了つた。たゞどうかしたときに、「お万さんは家中でだれが一番好きかいの？」と訊かれたとき、私は恥かしうに、  
「ふムム。」と笑つて、眞赤い顔をして袂と顔を掩うた。そのときに桐江さんが、あの黒いしめじめしい目をして私に何か言つた聲は、今でもまだ耳に残つてゐるやうな氣がする。

桐江さんは、さうして逗留してゐる間は、たゞ子供のやうに、私をのみ相手にして、青桐の一間にばかり閉ぢ籠つてゐたのださうであつた。  
「私はもうすつかりもとの私でせうぞのい？」  
私は一體どうしてお局を下つてこゝにゐるので

せうぞい、自分では何にも知らないらしく、こんな事を母に訊いたりした。一人である時には、その障子の側などにつくねんと坐つて何か考へ探らうとするやうな目元をして、しょんぼりしてゐたさうであつた。

母は、夜分なぞは、よく桐江さんのところへ行つて、早く蒲團に這入つて、目を開けて淋しさうにしてゐる桐江さんに、何くれとない話をしておとぎをして上げてゐたといふ。桐江さんは私と母をのみ好いて、父に對しては全で口をつぐんでゐた。父が行くと、たゞ下を向いて黙つてゐたさうであつた。それだから、父の方でもなるべく桐江さんの前には出ぬやうにしてゐた。――母は私にかう話した。

桐江さんは十日だか十五日だか私の家でさうしてゐた後に、もう私はすつかりもとのやうになつたと思ふから、山内の方へ歸つて、またお局へ上るやうにしようと言つて、或夕方、突然駕を仕立てさせて、山内へ向けて立つて出た。

私はそのときのことよく覚えてゐる。桐江さんがさう言ひ出したとき、母は、  
「何だか今日は、大それたお顔色がよくないやうですけれど。」と案じて言ふと、  
「いゝえ、私はもう何でもないのですけい。」

と愛想よく微笑んで、駕を待つ間に、私を膝に抱き上げながら、

「お万さんや、私は今度はいつお万さんと遊びに来ませうぞのい。」と、こんな事などを言つて、何氣なく興じてゐたが、桐江さんはその頃山内へは歸らずに、變な方へ駕を向けさせて、それきり、私の家とも山内とも自分から絶縁してしまつたのである。

私はずつと後に、山内のおかうさんにあらましを聞いてから、もう三四人の子をも持つた後、その事について母に訊いたけれど、母は言葉をそらして、いゝ加減らしい事を言つて濁してゐた。桐江さんは御殿で人の嫉みから狐をつけられて、山内まで下げられたので、それからいゝんな加持祈禱をして貰つてやう／＼直つて、あのととき家へ逗留に来てゐたのだと、たゞこれだけ言つて、寅待の夜のごとなどは、それは拵へごとで、人がいろいろなことをいふのだと打ち消した。

それはいづれが本當にしても、桐江さんは家を用いて山内へ歸つたのではないことだけは慥かである。何でもその時父への書置に、どうかこれぎり私を勘當して了つてくれといふ事だけが書いてあつたさうである。それで、父はいろ

いろに考へなやんだ舉句、御殿の方へは、桐江さんはたうと狂人になつて了つたといふお扇をしてお闇を貰ひ、桐江さんとはそれきり往來をしない事にしたのであつた。

私の母はそんな事はすつかり隠してゐたけれど、御殿から山内へ下げられた桐江さんの荷物、私の家へ夜運ばれて来たのを、目立たないやうに、やはり夜を選んで、少しづつ桐江さんの方へ廻されたといふことは、小さい私でも知つてゐた。父や母には、桐江さんの行つたところも、相手の男がだれであるといふ事もちやんと分つてゐたのである。

## 五

そのときにはまだ何にも知らなかつた私は、母に用窓から言ひ含められた事を、何とは知らずうら悲しく思ひながら、佐吉の肩に負されて、夕方の町筋をとぼ／＼と、伯母さんの亡きがらに會ひに行つた。

伯母さんにはあのときり會はないまゝでゐた、私はそのときにはもう九つ年の年になつてゐた。伯母さんはどんなところでどうして亡くなつたのだらうかと思ひつゝ、佐吉がつれて行くまゝに行つて見ると、そこは、その頃ではもう町

はづれになつてゐた三川町の、長屋のやうな汚い家ばかり續いた裏通りで、がた／＼とした、貧しい頓屋と、もう一つは木椀の宿のやうな家との間の、狭い煤けた露路を這入つた、たつた二間だけの、疊もぼろ／＼になつた小さい裏店に、伯母さんは、御殿で着てゐた、桔梗紫の、定紋を扱いた甲斐絹の表に、赤い裏の附いた蒲團を一枚着て、やはりお扇から持つて来た朱塗の枕をして、別の人間のやうに、瘦せ落ちた頬を見せて、疊の上にぢかに寝て、冷たく目を閉つてゐた。蒲團も大分垢じみてゐた。着て寝てゐた着物は小綺麗な銀絲の縋のあるものではあつたけれど、暮れて行く秋の着物ではなくて、八月の頃に着る薄物であつた。家の中には、それこそ洗ひ上げたやうに何にもなかつた。押入に大きな袂箱が這入つてゐたけれど、それにも、はたいたやうに何一つ這入つてはゐなかつた。

私が行つた時には、已に家から行つた清助と幸八とが、伯母さんの蒲團の裾に坐つて、何をかひそ／＼相談しては頭をかしげて、合點が行かぬやうな顔をしてゐた。私はやがて、幸八たちが伯母さんを洗つて棺に入れるのを、そこに坐つて手を合せて泣く／＼拜んで上げてから、佐吉と二人で先に家へ歸つて来た。

幸八たちは、父から指圖された通りに、夜の暗くなるのを待つて、人に目立たぬやうに、家の菩提寺なる長久寺へ、櫓を搦いで行つた。お寺へは、父も母もこつそり行つて、葬式の式をして貰つた。

その時はじめて寺のお上人が父母に話したのは、伯母さんは亡くなる二月ばかり前に、夜ひそかにお寺へ来て、伯母さんの生んだ子の母だといつて、小さい壺を持つて来て、それ私の家へは内話で、いつか自分がこの寺に納まるまで預つてゐてくれるやうに、さうして私がこゝに納まる時に一しよに埋めてくれるやうにと頼んで、丁寧に供へ物をして行つたさうである。その時の事を聞いて、訊くと、伯母さんは、身なりなぞもきちんとしてゐたさうであつた。お上人はその子の名を、私の家の過去帳に書き入れて菩提を申つてやりたいといふつもりで、そんな内意にしてゐて、それといはれた事を、そつと父母にだけ話したのでさうである。

お上人が話した、伯母さんの身なりの事などを考へ合はせると、伯母さんがそれから二月も後に、急にあんなところに這入つて、何一つなしに、畳の上へちかちかに寝てゐたといふ事が、どうも變だと言つて後に母は私に話した。やはり清助

たちがいふやうに、近所のもの等が、伯母さんの死と共に何もかも剃り取つたのかも知れないと母は言つたが、併し伯母さんの男がしたことだとも疑へば疑はれた。母は、伯母さんは家を出て、二人で家を持つて、人に俳句などを教へて暮してゐたのだといふやうに言ひ續つてゐたが、男のところへ遁げて行つて、二人でそちこちへ住んでゐた果が、あくしてあんなところで死んだのだといふのが實際らしい。家では、うるさい引つかまりが出来ては面倒でもあるし、事が表立つて、色んなことが世間へ知れては家の恥だからといふので、及ばないあとの詮議はしないことにして、すべての疑問を葬つて了つた。

私が長じて後に一人考へ返して、伯母さんの死にやうが、たゞの死にやうではないやうな気がするのは、あの時清助たちが後から伯母さんを慰へ起して、私の額で髪を掻いて上げてゐた間に、私は横に坐つて手を合せてゐると、不意に伯母さんの口からだらりと涎のやうに黒血の塊りが出た。私は可哀さうな伯母さんだと思ひつゝ、何の氣もなく、黙つて紙を出して拭いて上げると、少らくしてまただら／＼と出た。清助たちはそれを知らないでゐたものらしい。私がお人には誰にも言はなかつたから、たうとみんな

も知らずにはまつたのであつた。今から考へると、どうも伯母さんは毒でも飲まされたのではないかといふ氣がする。

これだけの話である。伯母さんの男といふのが、どこの誰だつたといふことは、私は今に知らないづくである。山内のおかうさんは、それは私の家に逗留してゐた、どこから来てゐた俳諧師ぢやないかしらと言つた。

また誰だつたか、伯母さんは山内におた間にも誰かと通じてゐて、それと隠れて暮してゐたのだといふやうな事も言つたけれど、それは少し變である。あの寅待の夜の鏡には、伯母さんが死ぬまで作つてゐた男の顔が寫つたのだらうけれど、果してどんな人が寫つたものか。

それと、もう一つ私に解せないのは、伯母さんがさうして家を出てゐた間の私の父の心持である。父はもつとどうかして伯母さんを保護して上げる譯には行かなかつたものだらうか。父が情なかつたといふものか。または、そこにはどうするわけにも行かぬ事情でもあつたのか。何だか私は伯母さんが可哀想でならぬだけ、父の心持がよく分らない。

(大正元年二月)

桑の實

「おくみが厄介になつてゐるカツフェーは、お  
かみさんが素人の女手でやつてゐられる小  
い店だけれど、あたりにかういふものがないの  
で、ちよいと出前もあるし、お客さまもぼつ  
ぼつ来て下さるので、人目にはかなりやつて  
行けるらしく見えたが、中へ這入つて見ればい  
ろいろあれがあつて、おかみさんは、月末にな  
ると、よく浮かない顔をして、ペンと帳面を手  
に持つたまゝ、ぼんやりと一つところを見つめ  
てゐられるやうなことがあつた。

おくみは自分がいつまでもぶらぶらとこゝに  
かゝりものになつてゐるのが濟まないやうな氣  
がして、いつも自分で先へ〜と用事を求めて  
働くやうにしてゐるのだけれど、料理場の男と  
店の方を受持つてゐるべきはお安さんと  
もう一人の女中との外に、下を働く女が一人、  
出前持の小僧が一人ゐて、それへおかみさんも  
出来るだけは立ち働いてゐられるので、おくみ

はたい十になられるあき子さんと小さい男のお  
子さんの面倒を見るのと、一寸したお針などを  
したりする外には、これとすることもなかつ  
た。

「おくみさん、もうお寝みなさいな。十二時よ。  
私もそろそろ目をつぶりかけるわ。」

夜分など、おくみはもうするだけの事はして  
了つて、客のない店の鏡のところへ出てしよん  
ぼりと髪など解いた後、窓の硝子を通して、向う  
の、郵便局をしてゐる家の赤い電球を見るときも  
なく見入つて立つてゐると、おかみさんが所在  
なさうな顔をして出ていらつして、椅子を片  
寄せながらかう言つて、眠さうな欠をなごる。

女中のお安さんは、多い髪のハイカラな巻き  
かたに、黄色い厚い留袖を見せて、向うのテイブ  
ルに俯ぶした儘、正體もなく居眠りしてゐる。

「雨でも降つてるのかしら。變にしつとりして  
るやうだわね。」

「さうでございませうか。」

入口の硝子戸を開けておくみは覗いて見た。

雨ではないけれど眞つ暗い夜である。店の少な  
い通りとて、もうどこにもすつかり戸を入れて  
ゐて、人の往来もない。頭の上には、たつた一  
つ黒く消えかけた星が、小さい詛ひのやうに瞬  
いてゐる。

おくみは戸をしめておかみさんの方へ来る。  
外を見た目で店を見れば、水の中かなぞのやう  
に青いガスの漲つた室内には、すべてのものが  
畫のやうに光つて見える。少しもあくどい飾り  
などのない、さつぱりした店である。よくこゝ  
へ來られる青木さんが畫かれた、西洋の女が椅  
子にかけてゐる畫と、黒い壺にさまざまの色の  
花をさしたのとの、二枚の小さい油畫が、テイ  
ブルかけの玉子の上に際立つて見えた。

二階には女づれの西洋畫家と、つれの一人と  
がまだカルタを引いてゐた。

かういふつゞきから、おくみはおかみさんが  
ぼつねんとかけてゐられる椅子のところに行み  
ながら、さつきも頻りに考へたやうに、自分の  
これからの身の振り方について憂ふ心持をお  
かみさんに話した。

「だつてなまじつかなところへ奉公なんかする  
と、身をしくじる元だから、それこそよく何し  
た上でない。——私も何とか考へて上げる

つもりであるだけれど、でもくみちゃんにしては、いつまでもこゝにかうしてゐるのも拙らなしいね。」と、こちらの氣にもなつて見て、ここにゐて働き／＼してゐてもするやうに言はれる。おくみはさういふ得手勝手なわけからではもとよりのない。

かうして何一つおかみさんの足しにもならないのが濟まないから色々々に考へるのであつた。「私がおもつと何か出来ますといふんでございませすけど、かういふ調子で一寸ももの間には合ひませんし。」

おくみはこんなときにも、自分の心持はこれだけしか得言はなかつた。「そんなことをお考へのは、まだ私を他人のやうに思つてゐるからだわ。私のところにくみちゃんが一人居たつて何でもないぢやありませんか。ゐて貰へば私だつてそれだけ助かつてるんだしね。——いゝからまあ當分この家の子になつていらつしやいよ。」

おかみさんは氣よくかう言つて下さる。「それよか一寸こちらを向いて御覽なさい。面白いところに転ぐるがあるわね。」

「これでございませう？」  
「話はこんな風にして飛んでしまつた。」

おかみさんは寧ろ氣のいゝ方で、主人に亡くなられたすつてから、二人のお子さんをつれていろ／＼言ふに言はれない苦勞をなすつて、どうかかうかこれまでにやつて來られた人程あつて、すべてにしんみりした思ひやりがあつた。亡くなられた主人は洋畫家だつたのださうである。おかみさんも、二人の小さいお子さんを抱へてさへゐられなかつたら、こんなことなぞをなさなくともいゝ人柄である。この店をおやりになるといふについて、青木さんたちが力を入れて下さつたり、それから同じやうな畫家たちが多く出入りして下さるのも、亡くなつた畫家の未亡人に對する同情であつた。併し店としては餘りはかゝ／＼しくもなかつた。

おくみはこゝへかゝりものになつて來てから浮か／＼してゐるうちにかれこれ二月以上になつた。考へると自分ながらたよりのない身の上である。お父さんには二つの年に亡くなられて、十一になるまで繼母の手で大きくなつたのが、繼母はそれまで一人でやつて來たのに、四十になつてからおくみを人にくれといひ、よそへ再婚した。繼母は赤十字病院の看護婦長のやうなことをしてゐた。おくみが貰はれたのは、その

病院で書記をしてゐたところであつた。おくみはそこから、續いて學校へもやつて貰つてゐるが、さうしてゐるうちに、その養父はおくみが十四になつて女學校へ上げて貰つたばかりのときに急に亡くなつて了つて、おくみはまた養母となつた二人になつた。そんな事で學校も間もなく下つた。

養母はどこからも金が這入るところがないので、ずつと小さいところへ移つて、人の針仕事などをして貧しい目をしなければならなかつたので、おくみも僅かの日給を取りに、下町の商

品陳列館の小賣部へ雇はれて賣子のやうなことをしたり、或小さい商會へ給仕に出たりしてゐた。養母はもとから少し下種なところのある、冷たいたちの女であつたが、夫が亡くなつて手もとが苦しくなつてからは、貰ひ子のおくみを足手纏ひのやうにつけ／＼當り出した。おくみは勤め先へ通ふ電車の中などで、よく、先の繼母のことを考へ出して、たよりのない自分に、一人涙ぐまれるやうなことがいくどもあつた。

繼母はおくみを今の家へくれといひ、後の夫と臺灣へ行つて了つたのであつたが、このときには上海にゐるとかいふ事を、養母が赤十字

病院の人に聞いたくらのことで、向うへ行つてからとき／＼便りをしてゐたのが、二年ばかり前からつりはがき一つもくれなくなつた。どうしてゐるのかきつばり分らない。養母がそんな事なぞを悪くいふのが、おくみには自分の引け目のやうに辛かつた。

二人はそのやうにして一年ばかり貧しい目を送つてゐたが、養母は仕事だつても一向ないし、おくみが得る金も、電車賃やその外のつましい入用を引くとおくみが一人の口を立てるのにかつかつぐらゐなわけだったので、苦しい目を厭ふ養母は、おくみさへどこかへ撤めることが出来たら、いつそ、大きなところへお針にでも住み込みたいやうに言ひ出した。

そんなことで、おくみが商會で新聞の職業案内を見て、或日曜の日にたづねて行つたのが今のおかみさんのところであつた。おかみさんは、そのときは主人に亡くなられて間もない頃で、水道町の小さいところに裝飾美術の手工を教へる看板をかけてゐられた。おくみはそこへ女中代りに這入つて、間々にさういふものを教へて貰ふ女になつた。養母は間もなく、考へどほりに、青山の方の或伯爵家へお針女に這入つて今にそこに勤めてゐる。

こゝのおかみさんは、おくみの氣立を哀れがつて、自分の血を享けたもののやうによくして下さつた。そのときには今のあき子さんがまだ五つか六つかで、下の坊ちゃんはんの赤さんであつた。おかみさんに仕事を習ひに来る人は多いときでも四人ばかりしかなかつた。おかみさんはそれらの人に教へてら手傳ひをさせて亡くなつた主人の知合の畫家たちが畫いてくれる下圖によつて、西洋のもののやうな意匠の壁かけや、テーブルかけや、カーテンのやうなものを経取りして、下町の賣店へ託しに行かれた。おくみは坊ちゃんが寝たりしてゐられる間などに、來たての人たちに交つて、編物や、子供のエイパーンや帽子の拵へかたなぞを習つた。

## 二

その頃青木さんとき／＼話しに來られた。

おくみはそこを自分の生れた家のやうに思つてたよつてゐたが、おかみさんはそれから一年もたない内にどうもその仕事では立てて行けないので、いつそ身を下げて千駄木の方へミルクホールを出されることになつた。さうして片手間で受合仕事のレイヌ細工なぞをされたが、その方は大した足しにもならなかつた。おくみ

は店で牛乳を沸かしたりして手助けをした。

おかみさんは、このやうなことにおくみを使つてゐたのでは、元來の約束にも反くし、おくみが何一つ先のために得るところがないから、どこか程よいところへ世話をしたいと言つて氣にされた。おくみの方でもいゝ思ひつきがあつたらその方へ行つてくれると安心だがと、あれこれ考へたりして下さつたけれど、おくみの方では、おかみさんの窮してゐられるのをほんといひて、よそへ出て了ふ氣になれないばかりでなく、自分もこの人のところからはなれなかつたので、奥さんが置いて下されば、いつまでも伴れてゐて戴きたいと涙ぐみながら言つた。おくみはそのときはまだ十六になつたばかりであつた。

ところがミルクホールも一寸もはやらなくて、これも一年ばかりで店を閉ぢて、おかみさんはお子さま二人をおつれになつて、仙臺のお實家の方へかへられることになつた。たゞ自分たちが月々を立てて行かれるだけならどうにかやつて行けないこともなかつたのだけれど、おかみさんはさうした女手一つの間から、亡くなられた主人の遺された負債の方へ、毎月少しづつ入れて行かなければならぬので、少々の

あれではとても追附かなかつた。月々の利息ばかりにでも困られた。

お實家の方はどうにかやつてゐられるのさうであつたが、もと／＼おかみさんは、お父さままたちのお聞きにならないのを運げ出して來られて先主人に投じられたので、おかみさんがかうして一人になられるまでは、實家の方からは絶交されていらしたのであつた。ミルクホールを出されるときの元手は、お父さまとお母さまとが竊かに上面して下さつたのださうだけれど、家を頼いでゐられるお兄さまはいつまでも解けて下さらなかつた。おかみさんが負債の方へは夜逃げでもするやうにして、さういふ中へ歸つて行かれるのは、どんなにか辛かつたやうであつた。

おくみはおかみさんのお近づきの方の世話でおかみさんの立たれるのと共に、さし向或西洋人のところに子供の守に這入つて、そこに七八箇月あつた後に、青山にある養母のついで、この間まで兩年足らずの間、山の手の、或外務省に勤めてゐられる人の郷へ小間使に上つてゐた。養母には西洋人のところにある間に二年ぶりで會つたのであつた。これまで手紙のやり取りをしてゐるが、平河さんのお家が、ミルクホー

ルなどを出されたりしたことは隠して、これまでのやうに仕事を教はつてゐるやうな體にしろつてゐた。西洋人のところにあるのを告げたときには養母は傳いた

平河さんのおかみさんには、お別れしてもしげしげ手紙をいたゞいてゐた。おかみさんは間もなく、小さいお二人を置いて出てこられて、或私立の女學校へ手工を教へに行つてゐられたが、後には二人をつれておいでになつて、女生徒を預る素人下宿を開いたり、いろ／＼に迷はれた後に、たうと今のカツプエーをお出しになつたのであつた。

おくみはこれまででも、おかみさんのところを實家のやうにしてときをりたづねて來た。女生徒を置いてゐられたときには、正月の宿下りに行つて泊めて貰つたりした。

おくみはお郷にゐる間に二十といふ年になつた。これから先いつまでもこのやうに、同じことばかりして人の家に奉公してゐることかと思ふと心もとないやうな氣がしたけれど、歸らうにも家はないし、何かして行かうと言つたところでも何一つ手に入つてゐる業もない。女のすべきお針さへも——そのお家で少しづつ教はりはしたけれど——まだやつと一通り道が聞い

たくらむのことで何にも出来なかつた。性質の大人しいおくみは、上に立つ女中や、いゝるんなどところに氣くばりはかりして、辛いうるさいことが多かつた。けれどもだれとて語るべき人もないので、一人で諦めてゐる外にはすべもなかつた。養母にはそのやうな事は言ひたくなかつた。

おかみさんは黒人の出の人だとかで、短氣な、氣に入り悪い方であつた。それへ大勢のお手たちがあつたりして勤め辛かつた。今から思ふとよくあれだけの間あそこゐたものだといふやうな氣がする。おくみは、自分が辛いと思ふときには、いつも平河さんのおかみさんのことなどを考へ合はせて、これでもまだ今のうちは自分の方が仕合せのやうな氣になつたりして、何ごとも忍んで來た。考へると女程つまらないものはないやうな氣がした。

今度は、主人が、政府が變つたのについて出せされて、西洋の大使館へ代られることになつて、こちらをすつかり疊んで行かれたので、おくみたちに問が出たのである。おくみは歸るところがないので、平河さんへおたのみして、どこへか身の振り方のつくまでかうして當分來てゐるのであつた。

この間内まではおかみさんが少しお禮が悪かつた上に、小さい方がばいにかかまつたりされて、おくみがゐるのが切つてはめたやうに役に立つてゐたけれど、今ではゐてもゐなくともいゝやうな自分である。どうせずつとこゝにゐられるわけでもないで、何とかしなければならぬのだけれど、養母がいふやうに、またどこかのお邸へ上るといふのももう氣が寒がるやうに進まない。水仕事はやうなことをしてもいいから、のんびりしたところにゐたいやうな、我儘な心持が動くのである。ミシンを教はるところがあるからそこへ這入らうかと思つたけれど、それはおかみさんが拙らなと言はれる。何をすると言つても今からではもう遅いし、どことて取りつくともないやうな氣がする。

出来ることなら、このまゝこゝの家のものにして戴いて、いつまでもおかみさんを頼りにして暮して行つたらと思つたりするけれど、自分には何とて嵌つた用事もない。お安さんがしてゐるやうなことが出来たら、あゝした全くの他人を置いたよりもおくみが働けば丁度いゝのだけれど、お客の氣心に合はして笑つたり相手になつたりすることはおくみには出来ないし、もししなければならなくなつたとしたら情ない。

やつぱりまたどこかへ奉公に上らなければならぬまいか。――

小さいあき子さんと一つ寢床に寝てゐるおくみは、板戸の隙間が仄かに白んで来た明方など、一人このやうなことを考へて、早くから目を開いてゐたりした。

三

おくみは丁度さう言つたやうな矢先へ、たまたま青木さんのところに代りの婆やが要るので、だれか来るまでの間、一寸手傳ひに行つてお上げすることになつた。

或雨のふる午後、青木さんはいつものやうにしよんぼりした顔をして出ていらつして、こちらへお上りになつて、おかみさんというんな打明話などをなさつた後、店のテーブルでお安さんを相手に食事をされて、少しばかりのウキスキで赤い顔になつて、ガスが附くところに雨の中を歸つて行かれた。

青木さんはおかみさんとの話が杜切れたと「おくみさんは私を覚えてゐますか。と、こちらで扱内のハンドルを廻してゐたおくみに訊かされた。

「だつてこの間も一寸お目にかゝりましたぢやございせんか。」と笑つたら、

「だけれど、私といふことを忘れてゐやしないかと思つて。――私はこの間はだれだらうと思つた。すつかり見ちがへましたよ。」と仰しやりながら、おかみさんの前にごろりと寝ころんでおいでになつた。

「あなた様はあの時分と一寸も變つていらつしやいせんよ。」

「水道町の頃と？」でも四つになる子供のお父さんだのに。」と、あちらを向いたまゝさうお言ひになつて、おかみさんと話をついでけられた。

「おくみさん、あき子さんをつれて出て來ませんか。山羊の乳を飲ませるよ。」

「お家に山羊がゐりますのでございせんか。」

「二匹あるよ。二匹。」と青木さんは赤い顔をして歸つて行かれた。黒い長いネクタイを大きく結び切りにして垂れてゐられた。さういふ風にしてゐられても少しもげ／＼しくお見えにならないところが却つて人を引くやうに思へた。つましく寂しく暮してゐられるやうに見えた。

おくみはおかみさんから、青木さんが去年まで二年ばかりフランスに行つてゐられたといふ事を話された。

そのときには別にお家のことなども聞かなかつたけれど、その次に青木さんが坊ちゃんをつれて来られて、婆やが近々に息子のところへ歸つて行くといふのだけれど、後が困つて了ふかどうかしたらいゝだらうとおかみさんに相談されるのを聞く前は聞いて、話の容子で青木さんは奥さんが亡くなられたかどうかして、婆やに出してはれると坊ちゃんとなつた二人になられるらしく思はれた。

「あなたも少しのんきだわ。なぜかうなるまで黙つていらつしたんでせう？」

「だつて、さう急いだわけでもないと思つたから、その内代りを探さうよと言つたさき、私も急がしいんでつい忘れてゐたんです。」

おかみさんと二人でこのやうなことを言つてほそ／＼話して行かれた。それから目を置いて二度ばかり來られた。

昨日は青木さんから、どうも困つたといふはがきが來た。その晩に、おかみさんが當惑したやうにおくみにそれを仰しやつて、どうでもおくみさんにも當分行つて上げて貰はなければなるまい、氣の毒だけれど、と、困つたやうに言ひ出された。

おかみさんはそれから青木さんのお家のこと

を話された。青木さんの奥さんは去年の暮あたりから、坊ちゃんを青木さんの方へお置きになつて、牛込のお實家の方へ歸つてゐられるのださうであつた。大分久しくからヒステリーのやうになつてゐられて、いつもぶら／＼してゐられるのだといふ話であつた。

「青木さんがあゝしたおとなしい、いゝ方だから餘計に氣の毒でね。どうせその内にどこからかい、奥さんをお貰ひなさるだらうけれど。」

「でも只今の奥さんもお氣の毒でございませぬ。」

「それがね、言はゞ奥さんの方の考へで、今一寸離婚されなすつたやうな風になつてゐるから。」

かう言つておかみさんは話をお換へになつた。何かこた／＼したわけがあるらしく見え

た。今ある婆やは、青木さんに學校時代から使はれてゐる女で、青木さんの洋行中は、奥さんと二人で小さい坊ちゃんを護つて留守をしてゐたのださうだけれど、今度どうしても息子の方へ歸らなければならなくなつたのださうである。

青木さんは亡くなられたこゝの主人によくしてお貰ひになつた方で、主人が亡くなられてか

らは、すべてにおかみさんの力になつて上げてゐられるのであつた。おかみさんもさういふわけで青木さんのためにはどのやうなお世話でもなさらなければならなかつた。

一時おかみさんが女學生を預つてゐられた頃に、二人の間に何かありでもするやうに、下宿してゐる女生徒たちに評判されてゐられたらしいやうな事も聞いたけれど、おかみさんの氣實を知つてゐるおくみには、もとよりそんなことは信じられる筈もなかつた。たゞ青木さんが一寸々々出入りされてゐたのを見て、恨もないことを言なれたがために纏つてゐる。青木さんにしたつて、あゝした堅い方である上に、その

ときには、ちやんと、お貰ひになつたばかりの奥さんがおありになつた。

「併しその中に都合よく代りのものが目附かるかも知れないけれど、いよ／＼どうにもならなくなつたら、十日かそこいらのところを、おくみやんが行つて上げて上げるつもりしてくれないこと？」

おかみさんは言ひ悪さうにかう仰しやるのであつた。

「何でも構はない方だから、たゞ御飯を拵へて上げて、小さい人のお守をして上げればそれで

いゝんたもの。——麓の内は坊ちやんをつれて  
所つ中こゝへ来てたつていゝしね。それにさつ  
きも言つたやうに、今丁度弟さんが大學試験  
を受けるので来ていらつしやるから、あそこの  
家たつて夜になつてもさう淋しくはないわ。」

「さうですね。」とおくみは考へてゐた。

「厭？」

「いゝえ。たゞ私のやうなもので間に合ひま  
すかしらと思ひまして。——お勝手元のことな  
ぞでも本當に何にも出来ないのでございますか  
ら。」

「大丈夫よ。」

青木さんがたつた一人であつしやるのだつ  
たら、若い女があつてゐるといふ事が、何だか  
世間々手前などに對しても變なやうな氣もする  
けれど、それにはちやんと弟さんもうらつし  
やるのだしするから、そんなに何も心配しなく  
てもいゝしと、おかみさんはおくみの身になつ  
てから仰しやる。おくみは行くところが極るま  
での間、かたゞ自分に取つても都合がいゝや  
うに思つた。

おかみさんがその事をはがきでお知らせにな  
ると、青木さんは御安心なすつた。それでもな  
るべく来て貰はないで済めばといふ御返事であ

つたか、二三日して、やはりおくみが借りられ  
る事になつた。

おかみさんと二人は、朝、支度をして、白い  
服を着た料理人の男が、買ひ出しから歸つて來  
るのを待つてゐた。

四

おくみはおかみさんと二人で由の手織の小き  
い驟へ下りた。

おくみはいつかこの電車で品川へ行つたとき  
に、そこに今見えてゐた、何かの工場らしい大き  
な赤い煉瓦の建物や、さつきの牛乳屋の、牛がい  
くつもゐた欄などを、この驟の目印のやうに見  
て通つた氣がするけれど、このあたりへ下りた  
のは今初めてであつた。

「もうこゝまで來れば大方來たやうなものよ。」  
おかみさんはブリツヂを下りて了ふとかう言  
つて、帯の間から切符をお出しになる。驟を出  
て互に洋傘を開く手に、おくみはおかみさんの  
お土産のハンケチ包みを持つてゐた。

いろんな店などの出てゐる、場末らしい町筋  
を少しばかり行つて、或、貧しい草花の鉢物を乏  
しく並べた、黒ずんだやうな家と、活動のびら  
の下つた小さい床屋との間の狭い横町へ這入つ

てから、そこを左の方へ折れこめての間は、汚  
らしい長家のやうな家ばかり並んだ、こた、  
したところであつた。

やがて再び輔の顔の通りへ出た。

二人は、粗末な貧家などがぼつ／＼立ちあけ  
てゐたりするやうな、草履などの多い、寂れたと  
ころを近廻りして、小きれいな家の並んだ上品  
な通りへ來た。

「まあ珍らしいでございますこと、麥の穂が出て  
をりますよ。」

「きれいに作つてあるのね。あの家の裏手にな  
つてるんだわ。——あそこを御覽、水引よ、あ  
れは。」

「あんなにして拵へるんでございますかね。こ  
ちらにも並べてありますよ。赤いのが綺麗です  
こと。」

二人はこのやうなことを話しながら、立木な  
ぞの澤山ある、青々とした通りを歩いた。

おくみはかうして久しぶりに、たゞやら、  
歩くために出て來でもしたやうに、すべての物  
に氣がまぎれるやうな、のんびりした氣分にな  
つてゐた。柔かい五月の日向も、心地よく二人  
の洋傘に浸みた。二人ともそれ／＼に一寸した  
よそ行きを着物を着てゐた。おくみの、根の上

つた日本髪で、帯の下の恰好などは、どうしても、きちんとした、上品な小間使らしい女に見えた。

おくみは、電車を下りてどこをどう来たのだつたか、もう分らなくなつた。そこから間もなく、西洋人の名札の出た、白いペンキ塗りの、小さい平家だての西洋館の前を通つて一寸行くと、右手の杉垣のつゞきの中に、青木さんのお家の瓦斯燈が見えた。

「ね、小ぢんまりしたい、お家でせう。あたりはこんなだしね。——あの二階が青木さんがお仕事をなさる書室よ。」

おかみさんはかう言つて、先に立つて木戸口をお開けになる。上に見えてゐる二階のこちらの間は、硝子戸の内に白い布が引かれてゐた。

おくみは一足後れて洋傘を畳んだ。そこには青木さんのお名前が、黒いペンキで標札に書いてあつた。

おくみは何となく青木さんのところを、だだ廣いばかりで陰気な、さびれた家のやうに想像して来たけれども、それとはちがつて、小造りな、建つて間もない明るい綺麗な家なので、つとめるやうな氣がした。

おかみさんが入口の格子戸のベルをお押しに

なると、障子のちぎりに附いてゐるらしい種子段からどなたか下りて来られる足音がした。

と、取次に出て来たのは十八九くらゐの、ハイカラな東髪（オウゴン）の女の人であつた。派手なメレンスの帯をしめて、丁度店のお安さんのやうな人馴れたところが見えた。

「お家でいらつしやいますか？ 平河でございますが。とおかみさんが仰しやる。

「どうぞ。」と言つて格子戸の栓を開けてくれる。つゞいて青木さんが氣色で知つて下りていらつした。

「さ、お上り下さい。今日は仕事をよして待つてたんですよ。——林さん、こちらにしよう。そこをちやんと片附けて下さい。」

青木さんは下の間へ通すやうに女の人にさうお言ひになる。

「婆やさんはどこかへ行つたんですか。——え、子供をつれて一寸そこまで使ひに。——今のはモデルの女。」と青木さんは小さい聲で仰しやる。

「私はこんな妙な風をして来たんですよ。——くみちゃん、こつちへいらつしやい。」

おくみはハンケチ包みをそこらへそつと置いて、お二人の後から襖の内へ這入つた。

そこは六疊ばかりの綺麗な一間で、大きな鏡のついた西洋風の硝子臺の上に、赤い西洋花が小さい青い壺に一かたまりさゝれて、それが鏡に寫つてゐるのが第一におくみの目についた。

下には、とき色で十字型に色を出した敷物が一枚敷いてあつた。低い小さい臺へかけた變つた縫取りをしたテイブルかけを挟んで、青木さんの考案らしい質素な椅子が二つ置いてあつた。

「おかみさん、こゝへおかけなさい。私の椅子はこちらにあるから。」と向うのを持つていらつして、

「どうもお急がしいところをわざわざ。」とおかみさんにお禮を仰しやる。

「いゝえ。いつも午前は何の用事もないんですもの。たゞくみちゃんに少しお氣の毒なだけ。——ね。」とおかみさんはくつろいで冗談のやうに言はれる。

「私は何にも出来ませんのでございますから。と、おくみはまぶしさにこれだけ言つた。

「どうぞ一寸の間、面倒を見てください。のんきな家だから何でもありませんよ。——婆やはもう昨夜から行李を出してこそくやくつてますよ。」

とおかみさんと二人へかう順々に仰しやる。

「いつ立つんです？」

「一人日でも早く立ちたいんでせうよ。年寄のくせに氣のいら／＼した女ですからね。」

「だれでも年取つた人は、かうと言つたらたまりがないんですわ。——坊ちゃんはあれからいかいです。」

「え、相變らず。昨夜から少し蟲歯が痛いと言つてぐ／＼言つてゐます。どうも私のやうなものは子供なんか全く荷厄介だ。」

「それや無理ありませんわ。今日までだつてよくやつておいになつたやうなものですからね。」

おくみは一人外の方を見てゐた。

「どうして子供なんてものが生れるのかな。餘計な事だと思ふんだけど。」と、青木さんは函の巻煙草を取つて火をお付けになる。

「全くね。と、おかみさんは口もとでお笑ひになつて、

「あなた、どうぞお構ひなさらないで下さいましな。お客さまやないんですから。」と、さつきの女の人にさう仰しやる。その人が銀色の盆に紅茶を入れて来たのであつた。

「これは家の山羊の乳ですよ。」と、おくみに仰しやうながら、青木さんは、手のついた、黒ずんだ色の、變つた面白い小さい壺から、三人の紅茶

へ乳をお注しになる。

「冷たくならない内にお戴き下さいな。」

おかみさんとお二人は匙を取つてそれを飲みながら話をされる。おくみは氣を利かして、お土産をそこへ出す積りで席を立つた。

さつきの三疊へ出てハンケチ包みを取つて、次の間を覗くと、そこにはモデルの女の人が、することもないやうに障子のところにぼつんと坐つて、新聞を捲ひ讀みしてゐた。外の上の上には小さい花壇が作られてゐて、赤いゼラニウムや、その外の花の色が目立つてゐた。

「どうぞこちらへいらつしやいませ。と、女の人は愛想よく迎へて新聞を片づける。そこは青木さんの弟さんの部屋にしてあると見えて、青い羅紗のかゝつた一閑張の机の上に、英語の辭書やインキ壺などが置いてあつた。

おくみはこの女の人にさう言つて菓子鉢にするものを出して貰つた。向うに、茶の間の四疊半と、臺所と湯殿と、もう一間附いてゐるらしかつた。どこもきちんと片附けられて小ざつぱりしてゐた。四疊半には、坊ちゃんの、紐のついた小さい着物が柱の釘にかけてあつた。女の人は不馴れた容子でそちこちの押入を開けたりして、有り合せの西洋皿を一枚出してく

れた。

「え、これで結構でございます。」と禮を言つて、おくみはそれへ、ハンケチから出した、パセリをそへたサンドキツチをよそつた。包みのナプキン紙には妻楊枝まで附いてゐた。

「林さんとかいふ方をこゝへ呼んでお上げなさいよ。」と、おかみさんが青木さんに仰しやる。女の人は用事かと思つて出て来たが、

「いえ、私は澤山でございます。一寸歸りに用足しをして行くところがございますから、これでおいとまいたします。」といふ。

「さうですか。もうしばらくゐたつていゝでせう。——ではすまないが二階のテイブルの上に置いてある手紙をポストへ入れてくれませんか。明日は必ず坐つて貰ひます。」

青木さんは灰皿に煙草を消しながら仰しやる。

女の人は二階へ上つて行つた。おくみは送りに出て三疊に立つてゐた。女の人は手紙を懐にはさんで、帶揚を結び直しながら下りて来た。

「何かお忘れになりましたか？」  
「いえ、一寸。」と、林さんは次の間へ這入つて、そちらの方を向いておくみながら、懐鏡を出して、懐中白粉でそこ／＼に顔を直してこ

ちらへ出て来た。

「さやうなら。——どうぞお心安くお願ひ申します。」

「私こそどうぞ。」とおくみは言ひ後れたやうにかう言つて下り口に駈をついた。

「これから外は追々暑くなりますね。」

「段々に厭になつてまゐりますわ。どうぞあなた、あちらへいらしつて下さいまし。すみませんでございまして」と、林さんはさきくに挨拶をして椅子戸を締める。縫直しの着物の、色の變つたところが出てゐるのを着てゐたりするのが何となく氣の毒で、おくみはそれを見まいとつとめるやうな心持がした。

こちらでは青木さんが、おかみさんにこの女の人の話をしてゐられた。

「くみちゃん、折角のが冷たくなつたわ。」

おくみは馴れない手附をして、半冷たくなつた紅茶を飲みながら二人のお話を聞いてゐた。

青木さんはサンドキツチを一つ二つお上りになる。

モザルの女の人は赤坂の方から来るのださうであつた。午前に二時頃の割で歸つておいて、なままださうで、まだ後十日くらゐに來てくれなければと青木さんは言はれた。さういふモデ

ルの給金や、さうした女たちの性行なぞについて聞くことは、おくみには珍らしかつた。一寸した受合もので、椅子に倚りかゝつてうたゝ寝をしてゐる顔を書いてゐるのだと言はれる。

「お目にかけるやうなものぢやありません。拙らない小さい書です。——あとで御覧になればいい。どういふのか、こちらへ歸つてからは意ける癖がついて一寸も實のあるものを書かないんですもの。それに一つは、どうしても餘裕がなくては駄目ですよ。間に合せものばかり書いてるのは、人から悪口をいはれるよりも、自身がお淋しい。だれかゆつくり、力を入れたものを書かしてくれないかな。」と、青木さんは頭の後、手を組んで、御冗談でもないやうに仰しやる。

「さういへば私のところの主人などは、随分はじめでしたわね。あの人の畫としては拙らなかつたかも知れませんが、どうもかしてたつた一人になつて書いてゐたいといふのが口くせでね。そして、いろんな出来もしない事ばかり言つて、いら／＼してゐるんですものね。駄目よあなた、それどころぢやないぢやありませんか、第一今月はどうなさるんですつて、私はよくぶつ／＼言つたものよ。お金がないと惜げ

て了つて小さくなつてゐる人でしたわね。ときどき目に見るやうですよ。」

二人はそれから、亡くなられたおかみさんの御主人の事について思ひ出し話をされた。

「まあ、青木さんはこれからですわ。かうしてみつちりやつてらつしやる内には段々にあなた

の畫が光つて來るんですから。」

「どうですか。近頃は一向氣が向かない。いろんなことでくしやく／＼するせゐか、とき／＼畫なんか書くよりも、ぼんやり寝ころんで居ても見てる方がいゝ、心持のときがありますよ。一體おれたちがのんきなかな？」と、彼の寂しい微笑みをお見せになる。

「それがいゝんですわ。人間はそんなにせかせか焦つたつて駄目ですよ。私なんか、これまでとはすつかり人間を變へてしまひました。もう先の事なんか考へないことにしてゐるんです。

拙らないから。」と、おかみさんは別のことを言ひ出された。

「だれかまゐりましたやうですわね。」とおくみは立つて行かうとした。

「いゝんです。豆腐屋でせう。山羊の餌を持つて來たんだ。」

「山羊はお豆腐の粕を食べるんでございませ

か。とおくみは訊いた。

「それへ、ふすまと言つて小麦の皮の粉になつたのを交ぜて食はすんです。」と青木さんが仰しやる。

おかみさんはそれから毎日の買物やなにかにかいて訊かれた。

目の前の外の日向を、青く光つた蟲が、青い絲を引くやうに筋を附けて飛んでゐる。

やがて、婆やが坊ちゃんを伴れて歸つて来た。

## 五

おかみさんは晝室からお下りになつて、裏の方へ出て御覽になつたりした。後お午近くに歸つて行かれた。

「では婆やさんが立つたらこの人をつれていらつしやいな。一通りのことだけして置けばあとはどうでもいゝんだから。家の内といふものはさう何から何までしようとしたつて限りがないものだからね。」久男ちゃん、今度はこのお

如ちやんに伴れて来てお貰ひなさいよね。さうさう、あそこで電車へ乗つて、それからまたもう一つ電車へ乗つてね。——よくお如ちやんの言ふことを聞いて大人しくしていらつしやいよ。久男ちゃんが無理を言つて困らせたりすると、

お如ちやんは直ぐ泣いてをばちやんの處へ歸つて了ひますからね。久男ちゃんはずつとお如ちやんを大好きだつて言つたでせう？

おかみさんは洋傘をおさしになつた片手に、鬘の後れ毛の下のを氣になさりながら、

そそ歩いてお行きになる。おくみは小さい久男さんの手を引いて、さき程通つて来た、白い西洋館の先まで行つた。

「たゞ、水道がないのが一寸困るわね。風呂だけは青木さんの弟さんが汲み込んでくれると言つたけど。」

おかみさんは別れるまであれこれ言ひ足して行かれた。

お母さまのいらつしやらない小さい坊ちゃん、もうおくみにおなれになつて、人なつつかさうに手に攜つて歸つておいでになる。向うの電車の音が、あたりの青い木立の中に軋つて聞える。

後から水色に染つた洗濯屋の車が来た。

おくみはおかみさんの行つてお了ひになつたあとを、しまひにまた振り返つた。ザつと前に千駄木のお家から西洋人のところへ行つたときに、寒い雨のしよぼ／＼降る中を、おかみさんが、小さいのを負つて、車屋まで附いて来て下さ

つたりした事なぞが、どうしてか思ひ出された。あのときにはおくみは生みの母にでも別れて出るやうに悲しくて、鞆の中でおろ／＼と泣いて行つた。

おくみはそのときまだ年の行かなかつた自分が、おかみさんに拵へて貰つた不躰着を下したのへ、赤い色緋子の帯をして、あそこの家を出た姿があり／＼と目に浮んだ。あれからでもいろんな事をして來られたおかみさんも悲しい人のやうに思はれた。

「おや、下駄が脱げましたの？ 早くおはきなさい。——まあ坊ちゃんはお手がずるぶん汚くなつてゐるんですね。」

坊ちゃんはいかに赤い筋が雨の絲のやうに這入つた、厚い浴衣のやうな木綿の着物が、五月らしく着せてあつた。目もただけは青木さんに似てゐられるやうだけれど、あとはすつかりお母さまに似てゐられるのらしい。ひよわい、沈んだやうなお子さんである。片つ方の人差指を口に銜へてとぼ／＼とお歸りになる。

青木さんは臺所の水口の前にこゝんで、パケツに入れた山羊の食料の豆隔がらへ、鹽を振つて混ぜてゐられた。坊ちゃんはおくみの手を引張つて、格子戸の方から上らうとなさる。

間もなくお午になつた。

青木さんは、サンドキツチを食べたから、午は乳だけでいゝと言はれたさうで、おくみは婆やが生温かくして壺に入れたのを、コップと共に盆に載せて二階へ持つて行つた。

青木さんは小さい方の室に、蔓の安椅子に長まつて、少し開けてある硝子戸を通して外を見てゐられた。硝子には、下の西洋檜の木が、大きな花を咲かした青葉を揃へてゐる。青い空には低い雲が薄くやうに消えて行つた。

おくみは寝椅子の隅の物置臺へ乳を置く。「さつきからそこへ小さい鳥が来て啼いてゐんだが。——もう行つて了つたかな？」と、青木さんはちつとしたまゝさう言つて耳を澄ましてゐられる。

「いゝお天氣でございますね。」と言ひつゝ、おはほそこに佇んで、青木さんの足もとの方の壁にかけてある、珍らしい壁かけの畫を見てゐた。

それは女の神さまらしい一人の西洋の女が、白い鳥籠の戸を開けて、木のの上に棲つてゐる七羽の赤い小鳥を呼び入れてゐる圖案で、すべて赤、色、色、珍らしいさまざまの布を貼り合はせて置にしてある畫であつた。鳥は木をはなれて

女の持つてゐる籠に下りて来る。一つは半ば口口に這入りかけてゐる。女の足の下には、見たことのない異つた草の花が咲いてゐる。一間程の幅の、珍らしい裝飾であつた。

「こゝへ出て御覽なさい。向うの畫がすんかり見えますよ。」

青木さんは、おくみがさうして外を見て「行くでなした。續きさやうに言はれる。おくみは赤い鳥から目をなした。

「すみませんでございまして。」と、おくみは壺を取らうとした。

「いゝんです。私が勝手にやるから。」

「さうでございしますか？ ではまたあとでゆつくり見させて戴きますから。」と、おくみは畫室をもこちからからだ一寸見たばかりでそこへ下へ下りた。このお家へ来て青木さんに馴々しく對してゐるやうに見えては、婆やの前に何となく變なやうに氣が置けるからであつた。

「どうぞお二人でこゝで召し上つて下さいな。何にもないのですみません。」と、婆やは、おくみを目上の人のやうに、坊ちゃん二人で先に食べさせようとした。

「いゝから。どうぞ私のいふ通りにして下さい。」

よ。私は坊ちゃんのお給仕をしといて、あとで一人戴く方が片づいていゝんですから。」

氣のいゝ婆やは心安くかう言つて、坊ちゃんお元へオプキンを挿んだ。

「何だか私をお客さまのやうになさるわ。」

おくみは困つてもぢ〜してゐた。

坊ちゃんは食べかけて、また齒が痛くなつた。婆やが鹽水を含ませたのが飲み、ひどく泣き出された。

食事の済んでから、おくみはその室も異處へ、膝子に買つて来て貰つたケリシートを敷けたりして、やうやく坊ちゃんを洗濯入りに寝せつけて、一人枕もとに坐つてゐた。

全て村かなどのやうに、あたりのひつそりしてゐる土の上を、黒い大きな影が這つた。

### 六

その時青木さんは、フランスにゐられた仲間のお會へ行かれて留守であつた。弟さんは下ではうるさいからか、二階の畫室へ上つて調をしておいでになる、下では婆やとおくみとが茶の間の四疊半で坊ちゃんの相手になつたりして、電氣の下に坐つてゐた。

おくみは夕方に行李が着いたので、手輕な着

物に着換へてゐた。婆やは明日立つのだからであつた。

「坊ちやんはもう眠いでせうよ。——今夜はこゝへお床を取つて上げますからもうお寝みなさいな。——おくみさん、済みませんがこのと着換へさせて上げて下さいませんか。」

婆やはあちらの四疊の押入を開けて蒲團などを出して来た。坊ちやんは寝床へお這入りになるとまた日がさえたやうに、しばらくはしやいでいらつしたが、その内にくだぶれて寝入つてお了になつた。齒の痛い方の片頬が熱を持つたやうに腫れてゐた。

「やつとお寝みなすつた。かういふ小さいお子さん一人にでも随分手がかゝるんですから、これから少くの間お氣の毒でございますね。と、婆やはほつとしたやうに言つて、長火鉢へ坐つて煙草を喫んだ。

「どうもお母さまが弱いせぬかして、この小さいのがいつもどこかこゝかお悪いのですね。——ころなほ少し物を召し上ると直きもどしてお了ひなすつたものですよ。」

どこかの訛の取れない言葉で、あれこれと話して、さういふよわいお子さんが、お母さまなしに、不自由ばかりして來られたのだから、こ

の人がだれよりもお可哀さうでならぬと言ひながら、口を少し開いて、睫毛の長い目を閉つてゐられる坊ちやんの寝顔を見守つた。

「それはお母さまがゐなくなつた當分しばらくは、夜晝となく母さまへ行かう、母さまへ行かうつてお泣きたすつてね。それが丁度旦那が久しく不眠症で困つていらつしたところで折角やう／＼のこと夜中時分にどうやらお眠りなすつたらしいところを、この人が目をさましてお泣きになると、私は身を切られるやうでしたよ。——仕方がないから、前つ暗いのに負つて裏の方へつれて出て、人の寝入つてる夜中にそこらを負り歩いてすかしながら、お可哀さに私までおろ／＼泣いて、この裏どなりが奥家だつたときの屋根下へ立つてゐた事もありました。——どうやらこのごろは大分聞きわけがついて、母さま／＼と仰しやるのだけは止んだんですけど、お體の方はまだあゝいふ風にお弱くつていらつしやいますのでね。——私は今度このお家を出るのについて、このお子の事が一等氣になりますよ。あなたのやうないゝ方がずつとゐて下さるなら言ふことはありませんけど、さういふ譯にも行かないし。——いづれどこからか奥さまがお見えになるにしても、餘つ程苦

勞でもしていらつした方でない、生んだ子のやうに纏子の面倒を見ては行けないのですからね。私ならかまはずびし／＼叱つても上げる代りに、このお子なら目に入れても痛くないんですけど。」

婆やはしんみに坊ちやんの事を氣にしてゐるやうであつた。

この人は青木さんに七年の間つてゐたのださうである。坊ちやんは青木さんの洋行に立たれてから四月ばかりして、お留守中にお生れになつたので、坊ちやんが三つになられるまで向うにゐられた青木さんには、子供をそれまでにする苦勞が分つてゐない。そんなことから、あの人はこのお子に對しては人の子のやうに冷やかだから、はたのものは一倍このお子によくして上げなければいふやうなことを婆やは言つた。

おくみは後にはそれらの譯がよく分つたが、とにかく今婆やが言つただけでは、奥さんはこれなりでもう歸つていらつしやらないやうな容子であつた。

一婆やさんもこれまで大抵ぢやございませんでしたわね。と、おくみは自分がその身になつて見るとやうにかう言つた。

「いゝえ、私はかういふ人間で、んから役に立たないもんですから、まあせめて毎日の物費りでも少くなるやうにと思つて、自分の事のやうにつきましくやつて来たつもりですが、どうもそれが却つて青木さんのお氣に入らないやうな場合がありましてね。そこへ行くと女といふものは氣が小さいものですから、一寸したもので、また要るかと思つて取つといへば、そこが汚らしいと言つては叱られたりね。よく二人で口喧嘩をしたんです。さつきもお前が行つて了つたら家がせい／＼するだらうつて悪い顔をしていらつしやるんですよ。」と婆やは笑つた。

「でも氣はいゝ人ですから、私を可哀さうだ可哀さうだと言つて、たうとこの年まで置いて下さつたんです。私も随分不幸な人間でしてね。」

婆やは息子が一人ありながら、いろんな諍があつて、その子にかゝることが出来なくて、五十六の年に、一人で、こちらにゐた姪の方へたよつて来て、それからこゝへ春公に來たのださうであつた。それがこの冬ごろから、息子の方から頻りに歸つて来てくれと言つて、しまひにはわざわざ人をよこしたらしい。それには一寸込入つた事情があつて、息子の顔も立ててやらなければならぬので、たうと今度は立つて行くの

だと、かう言つたやうな事をほんやり話した。

「おくみさんはこちらでお生れなすつたんでせうからようござんすね。田舎は萬事がうるさくてそれは厭です。」

「でも私は家といふものがないんですし、言はばたつた一人ぼつち見たいなものですから前りませんわ。と、おくみは爪先に目もとを集めて、さつきから半分外し事を考へてゐた後にかう言つた。

それでもまだあなたはこれから自分の家が出来るんですもの。お若いに似合ふとよく出来ておいでだから自分にもお任せですよ。何でもさちんとしておいでですよとね。」と、婆やはおくみの髪を形からなつかしうに見入つた。

二人は十時前までそこに坐つてゐた。婆やは小遣帳をつけた後に、眼鏡をかけて、貸本屋から借りた古けた講談本を読んだ。

おくみは行李からレイス糸を出して、いたづらに、小さい肩掛袋を編みかけた。青木さんの弟さんは退屈さうに下へ下りて、そこらをごそごそさせていらつしたが、再び二階へ上つておいでになつた。

「洗吉さんは恥かしがりやですからね。あなたがいらつしたので極りが悪いんですよ。いつも

だと退屈するとこゝへ來てごろ／＼していらつしやるんだけど。」

婆やはまだいろんな話をしたけれど、奥さんの事については、あれきりで何にも言はなかつた。

「おくみさん、旦那は今晚は終ひごろの電車でなくて帰れないでせうからもう先にお寝みなさいな。今日はあなたもお寝れだし。」

「いゝえ、私はこの間から馴れてしましまして、夜分は幾時までも起きてるんですよ。平河さんのお申で、二時ごろまでお寢さまがおありになることがあるんですからね。」

おくみは婆やを手傳つて座敷の椅子やテイブルを片よせて青木さんのお床を取つて置いた。

### 七

翌朝おくみが一人四疊で目を開くと、婆やは巳にいつの間にか起きて、板の間でこそ／＼と仄暗い水使ひの音をさせてゐた。

おくみは襦子の戸を開けてきちんと晝の着物の帯をしめた。

そこらの、まだ蔭ばんでゐるやうな土の上には、ちやんと、すが／＼しく箒の目がついてゐた。どこか裏の方の木のうえで、雀の子がまだ目

をさましたばかりのやうに暗さうに集つて噂いてゐる。いつも着て寝た寝着をたゝむにも、どことなく町中とちがつた朝の氣分に、何だか自分が當分しつとりと居着くところへ来たやうな心持がするのには、かうした、いろんな人のごたごたゐらない、たゞの家だからだらうか。おくみは、平河さんのおかみさんたちが、いつもまだ今時分は、狭いところへ固まつて寝てゐられるのが目に見えた。あの、ナイブルや椅子がどんよりと集め寄せられてゐる店の戸を、お安さんがいつまでも眠さうな目をして開けに行く様子なども考へ返された。

坊ちゃんも昨夜の茶の間に、そのまゝすやすやと寝てゐられる。あちらのお二人の方は、まだ夜のやうに暗く戸が閉つてゐる。

「まああなたもつとゆつくり寝んでいらつしやれば、いゝものを。私はあなたの目がさめないやうにと思つて、そつとこゝらの事をしてみたのに、と、無理におくみのために湯敷へ水を取つてくれた婆やは、漆喰の上に立つて前垂で手を拭いた。昨夜あれから一人考へて、どうでも今日午後の汽車で立つことにしたのださうであつた。

「私はそれまでに、せひ一軒いとま乞ひに行つ

て来たいところがあるので、手廻しに少し早く起きたんですよ。」

「では随分氣ぜはしなうございませぬ。私が出ることだけは何なりといたしますから、あなたはいゝ加減にしていろんなお支度をなすつて下さいよ。」

「私は支度も何も、たゞもう着物さへ着換へれば、いつでも立てるやうにしてあるんですから。——おや、うっかりしてゐました。一寸待つていらつしやいな。くせ直しのお湯を少し取つて上げますから。」

「いゝえ、よござんすよ、婆やさん、いつでもたゞかうやつて置こんですから。」

「さうですか？ 何ならついでさきはありませんよ。」

おくみは鬘搔へ洗面器の水をつけて、柱の鏡に覗いて髪を掻き上げた。婆やが、表の門を開けて、裏手の草つばへでも廻つて、青いものを見ていらつしやい、と言つてくれる。

おくみは徐かに支關を開けて自分の下駄を履いて、表の門を開けに行つた。その邊もすつかり掃いて敷石に水まで打つてある。郵便受に手を入れて見たがまだ新聞も来てゐなかつた。向ひの家の硝子燈には夜のつゞきの灯が白けて點

つてゐた。早くから動くらしい電車の警笛が、間近さうに、手に取るやうに聞えて過ぎた。

おくみはこれとてする事がないので、婆やがいゝといふのを無理に箒を出して貰つて、中庭の方を掃きに行つた。

物置の横手から廻つて行くときに、裏の山羊がもう起きて小屋から出てゐるのが見えた。

裏には一寸した地面があつて、山羊のゐるところと小さい畠とが作つてある。疊二三枚ばかりに青く生えてゐる芝生にはベンチャやぶらんこも拵へてあつた。

山羊は、左の方の隅を五坪ばかり低い柵で圍つて、それへ二匹飼つてある。

柵の中には棕櫚の木が五六本植ゑられて、その下に山羊の遠入の小さい小屋が出来てゐる。

片方に、一間に一間半ばかりの柵が四五尺程の高さに作られて、兩方からそれへ上り下りが出るやうに板がかゝつてゐる。白い體をした頭の長い山羊は、大きな赤い乳房をだらりと垂れて、一匹は柵の柱に頭を擦り／＼していたづらをしてゐる。他の一匹はおくみがこちらにぞん

でゐるのを見ると、柵の側まで歩いて来て、頭を出しておつとこちらを見てゐるのであつた。

柵の横手の畠は、半分が草花の床になつてゐる。

て、黒い柔かい土に、いろんなものが植ゑてある。こちらには玉蜀黍と大豆とが作られてゐる。後に立つてゐる栗の木や青梨の間には、甘い匂ひのする栗の花がうす黄色に咲いてゐる。それらのすべてが、まだ日の出ない前のしづかな朝の中に、青い眠りからさめたやうにしつとりしてゐる。生垣の外の草地には鶯が間近に下りてゐる。

そここゝに白い野茨の花がちらほら見えた。おくみはくゞり戸を開けてこちらの庭へ這入つた。雨戸の閉つてゐる穴の前の、色とりどりの草花に目がさめるやうな気がする。おくみは座敷の方の片隅から掃いて行つた。水鉢のそばの南天の木に、白い花がさいてゐる。一つ一つ、拵へたやうにあざやかな葉の蔭に、絹糸のやうな蜘蛛の巣がかゝつたのへ、夜露のしめりが小さい粒になつてゐるのも早い朝ししかつた。

やがて半分ばかり掃除が出来たときに、座敷の雨戸の中で日さまの音がちり／＼と鳴つた。しばらくして戸袋の戸が開いた。

青木さんが寝間着のまゝで雨戸をお開けになつた。  
「お早うございます。もうお目ざめてございま

すか。」と、おくみは側へ行つて他の人が目がさめないやうに小さく言つた。

「寝られましたか。」  
「え、よく寝まして寝坊をいたしました。私が聞かせよう。」

「昨夜は會で少し酒を飲んだので目が赤いでせう。」

おくみは上へ上つて徐かに寢床を離れて置いた。

土の上を掃いて了つて裏へ出ると、青木さんが山羊の欄の中で乳を搾つておいでになる。

「まあ、そんなにして取りますのでございませうか。」

おくみははじめて見るので珍らしくかつた。山羊は二匹其欄の柱へつながれてゐる。青木さんは小さい豪へ腰をかけて、兩手で腹の下の乳房を揉み下すやうにして、下へ置いたバケツへ乳をお搾りになる。次にはもう一つの方へ行かれる。山羊は大人しくちつとしてゐる。

「あちらではこんな事は小さい女の子がしてゐますよ。よく出るでせう？ これには少し上手下手があるんですよ。」

毎朝兩方で二升位取れるのださうで、みんなで飲めるだけ飲んだ餘りを溜めといつて牛酪な

ぞにするのだと言はれる。

「おくみさんもこれからお炊きなさいよ。牛乳よりも餘つ程營養分が多いんですよ。」

欄の隅には小屋から出した敷藁が横げられてゐた。雀が二三匹小屋の屋根へ下りて啼いた。

八

七時を打つと婆やは洗吉さんを起した。洗吉さんは眠さうな目をして湯枝を衝へて水口から下りて行かれた。六月に高等工業の試験をお受けになるのので、その準備に神田の方の學校へ通つてゐられるのださうであつた。學校は八時に始まるので、婆やはせき立てて一人先に御飯に坐らせて、お給仕をしながらお雑煮をつめた。

おくみは坊ちゃんを起して着物を着換へさせたり、顔を洗ひにつれて行つたりした後、そこら掃除した。

洗吉さんが打斬子に粉をほいて、眠い／＼と仰しやりながら出て行かれてから、おくみは婆やを手傳つて、みんなの御飯の支度をした。

おくみは婆やが切つて来た麴麴を、長火鉢へ餅を掛けて焼いて、バタをつけて、座敷のテーブルの上に運んだ。

婆やは山羊の乳を温めて黒い煮へ入れた。

「さ、もうそれでよござんすから、あなたも一つ一緒に待つて下さいよ。その積りて廻りも餘計にあれしんですから」

「坊ちゃんもあちらから呼びにいらつして袂におつかまりになる」

「牛轡はお厭ぢやないでせう？ ぢやいらつしやいよ。一度だけですま。もうお夕飯からは厭でもあなたがすつかりなさらないやならぬのだから」

「ぢや私はお給仕にだけ参りますわ」

「おくみはかう言つて坊ちゃんに附いて行つた」

青木さんはテイブルにかゝつて新聞を讀んでゐられた。テイブルの上には小さいペイズに、新らしい黄色い花が插されてゐた。

「坊ちゃんは姐やと並んでおかけなさいませう？ ね？」

「あなたもお上んなさい。坊やはほつとけば一人で食べるんだから」と、青木さんは小皿へ麵を挿んで下さつたり、乳をついたりして下さる。婆やが、洋蓐に入れた玉子の半熟に、小さい匙を添へて三人に持つて来た。

「おくみは仕方なく一緒によばねなければなら

なかつた。

「坊やはこのお姐ちゃんを婆やとどつちが好きだ。——婆やの方が好きかい？」と、青木さんがお訊きになる。

「それを食べてからお言ひなさい。そんなに頬ばつてちや口は利けないよ。」

「姐ちゃんも好き」と坊ちゃんが言はれる。

「も好きか」

「どつちも好きでございますつて。と、おくみは微笑みながら、坊ちゃんの膝の上にはこぼれた麵の屑を拾つた。

「おくみさんは書は好きですか。——尤も近頃は極端な小さけたやうな書も出ますけれどね。——あとで二階へ上つて私の書いたのを見て下さい。一二枚ぐらゐる出来のいいものもあるから。」と、青木さんはおくみに話しかけられる。

「おくみはどう言つていゝのか、自分がちゃんとした一人筋の女かなぞのやうに言はれるのが極りが悪いやうであつた。

「私は何にも分りませんのでございますから。とおくみに顔を赤らめた。

「婆やは小さい皿にお漬物を入れて持つて来た。

「おくみさん、御遠慮なさらないで澤山召し上

れよ。お乳はまだお代りか温めてあるんですよ。」

「おくみは何たかしまひまでもう、するやうな気がしてゐた。

「御飯が済んでから、婆やはそこらを掃きはじめた。おくみも襦袢をかけてパケツの水を取り代へに下りた。

さうしてゐる内にモデルの林さんが今日は大分めかして出て来た。こちらへ這入つて来ると、六疊で叩き人形のお相撲を並べて足を投げ出してゐられる坊ちゃんを、後から手で目撃しをした。

林さんは間もなく晝室へ上つた。婆やも、やがてそこへ着換へをして出かけた。

「あのね、おくみさん、私は旦那に黙つて出て行くんですからね、もし後でお訊きになつたら、一寸自分の買物に四谷あたりまで出かけたんですつて、たゞさう言つて下さいな。」

大抵お午に間に合ふやうに歸つて来ますから。」と、坊ちゃんのいらつしやらない處へ一人で、小さい聲でかう言つた。

「坊ちゃん、婆やがい、お土産を買つて来て上げますから、おとなしくしてお姐ちゃんと遊んでいらつしやいよ、ね。」

婆やはどこか、青木さんに言ふと面倒になるやうなところへ竊と行つて来るらしかつた。

二階では林さんが坐つて、晝が晝かれて行くやうであつた。坊ちゃんは椅子戸の外まで婆やに附いて出て、硝子燈の柱の下で一人で遊んでおいでになる。

おくみは坊ちゃんの寝間着の八口が綻びてゐたのを早速縫つて置いたが、もうそこらほどこも片附いて了つて、さしむき何もする事がないので、しばらく六疊で新聞を披けて拾ひ讀みをしてたりしてゐた。自分一人が留守をしてでもゐるやうな、しんとした家の中には、外の青いものが、疊に明るい青い藪を透つてゐる中に、茶の間で置時計が秒を刻んで行く音が際立つて大きく聞えた。

おくみは鏡面の寫眞や、その日の九星などを見てゐたが、思ひ出して新聞を疊んで、座敷の押入へ行つて、青木さんの枕の覆が大分汚れてゐるのを脱して井戸ばたへ持つて行つた。

「坊ちゃん、待つてらつしやいませよ、今直きこれを洗つて了ひますからね。あのさつきの人形のお相撲はどうなさいまして？」  
小さい人は、臺所にあつた古けた下駄の大きいのを履いて相手がなささうにおくみが石輪

の泡を立ててゐる手許へ来て「んでおいでになる。」

「あそこへ行つて山羊を覚えていらつしやいませよ、二つとも欄の上へ上つてあんな事をしてゐますでせう。をかした山羊ですこと。」

「ぶらんこの側の物干網へ洗つた物をかけて置いて、坊ちゃんを併れてこちらへ歸つて来ると、八百屋が御用を聞きに来た。何を取つていていか分らないから歸した。すぐ近くだといふから、あとでだれかが行つてもいいと思つた。」

「おくみは坊ちゃんの手を引いて、何かの裏目屋が太鼓を叩いて歸れて来たのを見に出たりした。」  
やがて家へ進入つて、坊ちゃんのお相手をしながら、昨夜の編物を出して編んだ。坊ちゃんは壁に足を投げかけて何向きにお轉びになつたまゝ、物足を持つて疊を掻いておいでになる。

さうかうしてゐる内に、いつしか十一時過ぎになつた。モデルの女の人は日課を済まして歸つて行つた。向屋が挽肉を持つて来た。

坊ちゃんは二階の梯子段を上つたり下りたりして動き廻つてゐられたが、一人で厭々して何かくれるとお言ひになる。おくみは風入らずを開けて、いろんな簾や著物などを開けて見た。

朝が早いから、もうお願がすいたらだらうけれど、婆やはねつから歸つて来なかつた。

「おくみはさつきから度々晝計を見た。もう五分ばかりで十二時になる。朝の内に馬鈴薯の買ひ置きがあるので、それをあしらつて、さつきの牛肉を煮て先にお午にしようかとも考へた。」

青木さんが退屈なすつたやうにとこゝろ、二階を下りていらつした。  
婆やはやつと、おくみがお午の後じまひをしてゐるところへ氣を急いだ容子で歸つて来た。

「お午にはおまごつきになつたでせうね、どうもすみませんでございました。つい話が長くなつたのですから。——どうぞそれはさうして下さい。私がしますから。」と言ひつゝ、汗ばんだ顔をして帯を解く。

「實はね、旦那に内證で一才奥さんのところへお暇乞ひに行つて来たんですよ。あの方には随分よくして戴いたんですからね。」と、婆やは人に物を得ろ隠してゐないやうに、竊とおくみにかう言つて、押入から不慮の着物を出したが、

「い、つそもうこの儘にしてゐませうよ。着き汽車の時間が来ますから。」と言ひながら、手拭で顔を拭いた。  
青木さんは坊ちゃんを併れて後の原へ出てゐる

られるのであつた。

「旦那が何とか仰しやりましたですか。」

「いえ、青木さんはたゞどこかへ行つたのかつて仰しやつただけで、他に何にも仰しやりやしません。たゞ、今日立つと言つただけどうする積りでゐるのかしらと仰しやつていらつしやいました。——ではどうしても五時のお立ち

になるんですか? —  
おくみは濡れた手を拭いてこちらへ来た。婆

やお留守の間の坊ちゃんの事を尋ねた。

「私は今も奥さんといふ坊ちゃんの話をして来たんですよ。奥さんが初めから終ひまで

あのお子さんの事を言つてお泣きになるんですよ。どうかして出来る事なら自分で作れてゐた

いと言はれるんですけれど、あれはこちらの後取なんだからさういふ譯にも行かないしね。——

どうも仕方がないんですよ。」と、婆やは何かお土産に買った来た小さい袋をそこへ出した。

「それから、私が今日奥さんのところへお訪ねしたつていふことは、平河さんのおかみさんにも黙つて下さいよ。それが傳はつて青木さん

の耳へ入りますと困りますから。」

「え、私は何にも言やしませんから安心していらつして下さい。」と、おくみはすべての譯は

分らないけれど、さう言つて受合つた。

婆やは新聞紙の包みを開けて、坊ちゃんのお召しになる、銘仙緋の單衣が一枚と、柄のいい眞岡の浴衣とがちゃんと仕立ててあるのを出して、これはこなただ近々にお暇乞に行くといふ手紙を出して置いたので、奥さんが内證で拵へ

といつて渡されたのだから、もとから坊ちゃんとおつたやうな風にして行李へ入れといつてくれと言つておくみに頼んだ。

「あなたはその家中に箆筒といふものが一本もないのを變にお思ひでせう?」と、婆やは軽く笑ひながら言ふ。

「さうでございませうか。でも行李の方が手帳で便利でございませうね。」

「いえ、えね、奥さんが持つていらつしやつたのを何もかも返してお了ひになつたもんですからね。——旦那に、悪いのでもいゝから是非一つ

お買ひなさいと言つたんですけれど。——行李では物を一つ出し入れするのもも編障りだね。それに着物もいたむし。」

婆やは四疊の押入の前に立つてこんな事を言つた。

「あそこいらに坊ちゃんの聲がしてゐますわ。」

「さうですか。私行つて呼んで来よう。私が

歸るなんて事は何にも知らないでいらつしやるんだけれど、どうも何だからさう言つて聞かせて上げようか。」

婆やはかう言つて坊ちゃんの着物なぞの出入つてゐる行李を出した。

四時を少し廻つた時分に車が来た。

婆やが涙ぐみながら行李を積んで乗るのを、坊ちゃんほどこへ行くんだ、と言つて訊かれた。さつき青木さんが婆やはもう遠くへ歸つて

了ふんだつて言はれたのを、坊ちゃんは誰だと言つて信じられなかつた。

ステイションへは青木さんと洗吉さんが送つて行かれた。おくみは坊ちゃんをつれて門口で見送つた。

「さ、こちらへいらつして左様ならをなさいませ。危うございませうよ、そんなところへお行きになつては。」と、おくみは坊ちゃんやまが車の背中の漆塗へ顔を書してゐられるのをこちらへ引き放した。

婆やは目をしよぼ／＼させて、いくども後を振り返つた。

## 九

おくみは物を出しに四疊の間へ行つたときに

その柱に、忘れられたやうにかゝつてゐるめく、  
り唇が、いつまでも一つ目を示した儘になつて  
ゐるのを見て、固めてそれを解がして来た。婆  
やが行つて了つて、おくみが一人になつてから、  
丁度一週間といふものがそはく立つた。

おくみは一人でこそくと、出来るだけの事  
をして行つた。手の空かないときなどには洗吉  
さんが使ひなぞもして下さるし、青木さんでも  
二階などの掃き掃除や何か自分でして下さるの  
でどんなにか助かつてゐる。大抵のものは廻つ  
て来てくれるので、おくみは一々外へ買ひに出  
たりする世話がなくてすんだ。洗濯石鹸やマツ  
チや元結のやうなものまで坐つてゐて用が足せ  
た。それにみなの方が何でもおくみのするだけ  
の事で辛抱してゐて下さるので、おくみは考へ  
てゐた總一人でまごつく事もなく、どうかか  
かやつて行けた。

たゞ聞える事は、これまで、餘りしつてゐない  
ので、煮物や無濾などが不安であつた。その日  
その日のおかずの取り合せにも氣を使つた。  
どうも進くなりません。もう電氣が来てをり  
ますでせうね。何だかまごついてばかりまし  
やくみに熱氣に汗をにじませて、袂を衝へ

ながら、下手なよそび方なぞをしたお肌を、ち  
やぶ臺の上に並べた。

「お加減がいかにございませう。召し上られ  
ますかどうかですか。」と物馴れない恰好をして坐  
つた。

「昨日は平河さんのおかみさんが容子を見に  
来て下さつた。おくみは着ち附いたら一度坊ち  
やんをつれて出かける積りでゐただけれど、  
何かとどさくさして出られなかつた。青山の養  
母へ、こゝへ来てゐる事を知らず手紙を書くの  
もまだその儘にしてゐるやうな譯であつた。

おかみさんは物の煮方の事なぞあれこれ言つ  
て行つて下さつた。

おくみは夜茶の間の電氣を低く下げて、小遣  
帳をつけた後に、おかみさんの言はれたのを考  
へ出して、あくる日のおかずの拵へをノートへ  
書いて見た。

「お小遣はふるを立たない日に坊ちやんをつれ  
て外湯へ行つたりなぞする外には、おくみの手  
で遣ふ費りが少しもないやうな日があつた。

「それは何かと氣をくばるばかりにでもくたぶ  
れるでせう？　もう少しの間だから辛抱してゐ  
て下さいな。その内には段々に馴れても来よ  
うしね。」と、おかみさんは氣にして下さつた。

「一でも皆さんがこゝろよくして下さいますか  
ら、一寸も氣が置けませんで、のんびりして用事  
でもして居りますのでございますよ。たゞ何か  
に鈍な私でございませうから……」と、おくみは  
たい人々に氣の毒なやうにから言つた。

「青木さんは今もおくみさんをいつまで借して  
くれるんですかつてお訊きになるのよ。まあせ  
いせい早く代りを目附けなければ、あの子もこ  
れから行くところがあつてせうから言つて  
いたけど、あの人はかういふ事には少しのんき  
な人だし、それに割に知合の少い方だから、私が  
そちこち當つて見て、その内にならぬにします  
よ。とにかくこれまでね。」と、おかみさんは裏  
の玉劉黍のところになつてさう言はれた。

「おくみはそれから坊ちやんの事を話したりし  
た。

「坊ちやんはすべに聞分けのよいお子さん  
で、少しも無理をお言ひにならないから、おく  
みも餘儀し易かつた。最初二三日の間は、とき  
どき飽きて来ると、淋しさうな涙をして、婆や  
はまだ歸らないのかとお訊きになりながら、着  
物の裾を噛んでしよんぼりして立つてゐられる  
やうな事もあつたけれど、追々に、おくみと二  
人になつたのに馴れて、機嫌よく外へ出て遊ん

て来たたりなさる。

おくみがお午な。に呼びに出ると、坊ちやんは向ひのお家の門の中で、紙で捲へた帽子などを着せられて、その家の同じくらゐの小さな女のお子さんと二人で並ばされておいでになつた。その女の子のお兄さまらしい、六つばかりのお子さんが、大將のやうに二人を率ゐてゐられた。そのお家は、一寸した西洋間なぞの附いた、上品な家であつた。

家の中に入られるときには、坊ちやんはおくみが動く方へ書いて廻つて、おくみのする事を立つて見たりなさりながら、大人しく遊んでゐられた。

「さ、それぢやありません。坊ちやんには何を買つてお上げ申しませうね。——おや、金魚をですか？ お湯屋の前に？」でなければ、お父さまがお叱りになりはしませんかしら。——

二階でひつそりと畫が書かれて行く青い午前などに、おくみはそのを閉め切つて置いて、白い洋傘をさして、坊ちやんの手を引ながら、驕の近くの通りまで、束髪へ入れるすき毛を買ひになぞ出て行つた。髪がゆるんだので解いて丁つて、この間から西洋髪にしてゐるのであつた。おくみは大分しばらくかういふ髪を結はなかつ

た。通りを行くと、店のお子などへ自分の姿が寫るのを、おくみは何だか變つた自分のやうに見て通つた。

おくみは自分のお鏡で坊ちやんに欲しいものを買つて上げた。

夜になると、坊ちやんが寝てゐられる枕もとに、三四の小さい金魚が這入つた硝子の壺が、電氣の灯を受けて、赤いのが大きく見えてゐた。

「もう寝たの？ これがあるのをおくみさんの厄介も大抵ぢやないね。——

青木さんは、話相手をお求めになるやうに、二階からのその、下りていらつして、しばらくそこへこゝんで煙草を吸かしたりされた。

「何だか婆さんなんぢがなくなつてから家の中がからりとしたやうな氣がしますよ。あの婆さんには随分役に立つて貰つてたけれど、どうもときん、頑固を振られるのでね。——何でも自分のしようと思ふ通りに出来ないとおつて言つて駭れる婆さんだから。——

こんな事を、悪口といふ程でもなくお話しになりながら、膝頭を抱へて柱に倚りかゝつてゐられる。

「一寸あちらの灰皿を取つてまゐりませう。——何、もう直き行くから澤山。——

「ついでここにございますから。——

おくみはそれを取つて来て再び坐つて、これとて話もない日を伏せて、着物のはしを爪先で擦つてゐた。

一本當にひつそりして居りますです。ね。——

「一人でぢつとしてると淋しいでせう？」

「いえ、そんなにも思ひませんでございます。私は一層陰氣なものでございませうね。かういふしんとしたのが好きなんでございますよ。——

額を動かすと、疊と壁とに擦がつて寫つてゐる景法師も軽く揺いだ。

「夜分は電車の音が随分近く聞えますこと。——

洗吉さんが外から歸つていらつした。

「おくみさんへ繪巻書が来たよ。と仰しやる。店のお安さんがよこしたのであつた。二つ

巴の紋の社印に、大小をさした、いたいけな

子供役者の寫眞姿で、市村座五月狂言、力辯

何々と役者の名前が赤く摺つてある。

「これはお客さまから貰つたのです。ちかんに

にお遊びにいらつしやいます。おかみさんもお

待ちになつていらつしやいます。青木さんによ

ろしく。と、表に鉛筆で書き、と書いてある。

「お安さんからあなたさまによろしくと書いて

ございます。と一言ひつと、おくみは青木さんに

裏の寫眞畫を見せた。

「だれかやつて来たよ」と、青木さんはそれを下へ置いて戸口の方に耳を向けられた。

ベルが鳴る。

「はい。」と、おくみは立つて出て、上り口の電燈を滅つた。

「青木さん、ほんますか。」と、格子戸の外から訊かれる。

「どなた様でいらつしやいますか。」と言ひつゝ、おくみは格子戸を開けに下りた。

「や、どうぞ。」と、青木さんが出て迎へられた。ネルの單衣にステツキをお持ちになつた、髭のある春の高い方が這入られた。

「二階に灯が見えへるたからまだ大丈夫だと思つたけど、差支へがある、ちやないの。」

「いや、家のものばかりだ。さつきから下へ下りてほんやりしてたところだ。」

かう仰しやりながらお二人とも二階へお上りになる。

おくみさんがとからお客様の座蒲團を持つて上ると、青木さんが上り口へ来てお取りになつた。

「すまないが戸棚の葡萄酒でも持つて来て下さいな。小さい洋壺を二つと。」

おくみはやがてそれを銀色の盆へ載せて徐かに持つて上つた。平つたい壺にはお酒は餘り澤山も残つてゐなかつた。

こちらにごろんと横におなりになつて、そこらの書物を見てゐられたお客さまは、おくみが次の間に坐つてお辭儀をするのを見て半り直された。城の机に置いてある本棚の隅に、白い大きな盆に纏茶子の花が澤山束ねて挿してあるのが、電氣の灯の中にも赤く目立つて見えた。

おくみはそのまゝ下りて来た。さつき、らどんな方かよく顔を見ない儘であつた。おくみは上り口に投げ出されてゐた、その方の、縁の小さい柔かい帽子を拾つて帽子かけにかけた。

洗吉さんは六疊の机の前に坐つて、インキ壺の口にこびり附いたインキを紙で拭き取つてゐられる。

「これから御勉強でございますか。」と、おくみは後で、衣桁にかけてあつた袴を下して疊んだ。

「今朝は少し歩き過ぎたから草臥れた。」と仰しやる。

「どちらまでおいでになりましたんでございませう？」

「ずつとこつちの方を廻つて、あそここの活動館の前まで行つて来たんです。今晩はあの邊の

縁日でいろんな店が出てました。」

「さうでございませうか。私、はどこがどうなつてゐるんですか、このあたりを一寸も存じませんでございませう。」

「あ、さつきの顔はかきを以せて下さいな。」

「あそこにございます。」とおくみは立つて持つて来た。

洗吉さんは半ばおくみの方を向いて、膝を崩してお坐りになつて、

「これはい、役者ですか。」とお訊きになる。

「どうぞでございますか。私はお芝居の事は一寸も分らないのでございませうけど、それはずるぶん可愛らしい子でございませうね。」

おくみは遠くに坐つて、片手を壁に突きながらかう言つた。

「お國にはあなたさまのお下にもうおありになりませんのでございませうか。」

「弟がまだ一人ゐます。いたつち坊で母が病つてゐるんですよ。」

「でも男の御兄弟ばかりがお三人もお揃ひになつていらつして御結構でございませうね。」

「たつて二人はまたどんなものになるか分らないんですけども。」

洗吉さんは輪はかきを元め一眼鏡のやうに覗

いて、向うの壁などを見てゐられる。

おくみはしばらくそのまゝそこに坐つて、絲屑の落ちてゐたのを爪先で弄つたりしながら、こんなことを話してゐた。

## 十

おくみはお安さんからはがきが来た翌々日、青木さんにさう言つて、少し早午を戴いて、坊ちやんを伴れて一寸店へやらせて貰つた。

別にこれといふ用事があるのでもないけれど一度行かないと何だか變なやうな氣がするからであつた。行けばもう一つの行李から出して來たいものもあつた。

「まあ、すつかりハイカラにおなりなすつたわね。家では毎日お噂をしてたんですよ。——おかみさんは今一寸お湯。もう直き歸つていらつしやるでせうよ。」

お安さんはもう一人の女中さんと二人でぐるりの腰板を拭いてゐるところであつた。

「こなひだから一寸上りたいと思つても、一人ですから容易に出られないんでせう。——どうぞついでに片づけて下さいな。」

「もう済んだんです。綺麗になつたでせう。さつからそこいらの卍斗の金具からすつかり磨い

ちやつたところ。」

坊ちやんは喉が乾いてか、水が飲みたいと仰しやる。

「ぢや待つてらつしやいませよ。——帽子の紐が取れたんでございますか。——お坊ちやんが附けて上げますつて。どうもすみません。」

おくみはかう言ひながら、コップを持つて奥へ白い砂糖を取りに上つた。

「何ですか、家でもよく水を召し上げるんですよ。習慣になつていらつしやるから別にどうもないやうですけれど。」

おくみはお安さんと話しながら、ティブルの上の水挿の水を小さいコップへ半分注いだ。

「もう途中に、水店が一寸々々出て居りますね。」

「え、もう疾つからでございますよ。」と、もう一人の女中さんは鏡の前で汚れた手を洗つた。

おくみは椅子の肩をハンケチで軽く押へながら、お安さんとあちらの容子などを話したりしてゐた。

その内におかみさんが石鹸入を手拭に包んで、下のお子さんをつれてお湯から歸つていらつした。

「おや、久男さんは靴を履いていらつしたの？そしてい、提袋をかけて。——さうですか？お坊ちやんに編んで戴いたんでですか？」

坊ちやんはおかみさんには馴れてゐられるので、坊ちやん相應のいろんな事を機嫌よくお話しになる。

「さ、お坊ちやんはこちらへお上んなさいよ。今日は夕方までゆつくり遊んで行つてもいいんでせう？」

お安さんはそこらの事をしながら坊ちやんとお家の三郎さんとの手になつてくれてゐる。

「もう、あのモデルの方をお使ひになつた晝は二枚ともお仕上げになつたやうでございます。女の人は一昨日からもういらつしやいません。」

青木さんのお仕事の話に移つたとき、おくみはかう言つた。

「こなひだ一人、この裏の方にある四十くらゐの行きもどりの女で、さういふところへなら早速行きたいと言ふのがあつたのよ。」と、おかみさんは鬘を直した鏡臺を片づけて、手拭を外

の掛竿へかけて來られた。

「裏の家主さんでさう言つて下すつただけど、お安が言ふんでは、よくそこいらへ出てべ

ちやべちや下らない事を喋つたりしてゐるといふから、そんな女では困ると思つてね。——探す段になると一寸ないものよ。滅多なものはお世話が出来ないしね。その前にも私は一軒心當りのところへ行つて見たんだけど。」

「おかみさん、私にならどうぞ何にもお構ひなさらないで下さいまし。只今御飯を戴いてまゐつたばかりでございますから。」

「揃らないものがあるのよ。一寸鐵瓶のお湯を見て頂戴。懐中汗粉を他家から貰つたから。」

「坊ちゃんには何を上げようね。」

「おかみさんはどうかして早く代りの人が出来ればと言つて氣にして下さつた。」

「私は人さまの事だから、くみちゃんにはまだ何にも言はなかつたけれど、婆やから何か青木さんの奥さんの事を聞いて？」

「おかみさんはやがて、話の續きからかう言はれた。」

「いえ、別に何にも……たゞ、いつも坊ちゃんのことを大變氣にしていらつしやるといふ事だけは、お聞きしました。」

「おみはかう言つて、婆やがこなひだ奥さんに……に行つた事、清物を二紙託かつて来た事などは、口止めをされてゐるんで少く黙つて

ゐたが、何だかそれではおかみさんの前を偽つてゐるやうで變であつた。」

「婆やさんは、奥さんの事は何でも青木さんに隠してゐるやうでございますね。」と、半ばはその言葉のやうにおくみは言つた。

「あの婆やもよくないのよ。一寸々々青木さんに内諺で奥さんに會ひに行くんたさうだからね。だから青木さんは、一方から言へば、あの婆やが行つて了つたのを却つて喜んでいらつしやるのよ。——少し詳しい譯を話さないとならないけどね。」

「おかみさんはかう言つて、長火鉢に炭をお繼ぎになる。」

「それはだれよりも青木さんが一番お氣の毒なのよ。」

「やがて三郎さんが、店で遊ぶにも例きたやうに、浮かない顔をしてこちらへ上つて來られた。坊ちゃんも來たさうにして覗かれた。」

「もう三時を少し過ぎましてございますね。」

「私はそろそろおいとまをいたしませう。あま子さんは今日はまだ學校からお歸りにならないのでございますか。——坊ちゃん、待つていらつしやいますよ。もう直き歸りますからね。」

「おみはそれから尙三十分ばかり青木さんの

方のいろんなお話を聞いた後そこへおいとまをした。」

「電車は雨で四十分と見れば澤山だから、もう少し遊んで行つたらと言つて止めて下さつたけれど、電車を下りてから、坊ちゃんがまよ／＼お歩きになるのにも手間取るし、ほつといて來たお家の事も氣になつた。來がけには少し坊ちゃんを負つて上げたけれど、随分重くつて困つた。」

「それぢや左様なら。何だか飽氣ないやうね。今度ば朝からいらつしやいよ。青木さんには少しくらの留守をして戴いたつていゝわ。お午の代りにお壽喜でもさう言つといつて出て來れば。」

「おかみさんは口口まで送つて來てかう言はれた。お安さんには、不斷の清女の蓋ひ直しを一枚仕立てて小包みで送つて上げる約束をして、戸棚の中の自分の行李から出した悪い帯と表と一緒に風呂敷に包んで抱へた。」

「今度は私面白い手紙を上げますから返事を下さいな。」と濃く白粉をつけたお安さんは、なすび歯を見せて笑ひながら外に立つてゐた。

「おくみはそれから少し歩いて賑やかな通りへ出て、勝手て使ふ胡椒や、自分の白粉下のクリュームや、針や絹絲などの買物をして、ついでに」

寸先まで行つて乗換へのない電車に乗つた。坊ちゃんには白い糸のついた風船玉が持たせてあつた。おかみさんのところで戴いたお菓子の包みはおくみが預つてゐた。

そこから終點まではかなりある。おくみは、まだ町をか買ひ着したやうな氣がするのを考へへ出さうとするやうな心持をして、向う側の窓の外などを見てゐた。

山の手線の驛で電車を待つてゐるとき、おくみには、さつきまじめておかみさんから聞いた青木さんのお家の事情が自分の事のやうにうら寂しく心に繰り返されてゐた。

### 十一

おかみさんは、さまで詳しくはお言ひなさらなかつたけれど、青木さんと奥さんとの間にはいろんなごたくした事がありになつたらしいやうである。

奥さんはかうなるまでも、一度少く別れてゐられたのださうであつた。それにはお二人の間に互に誤解もあるのださうだけれど、青木さんの方から言へば、少くとも、奥さんが、もともとひどく感情のきつい人で、どちらかといへばわが儘な、ハイカラなちなのがお氣に入ら

なかつたのだとおかみさんは言はれた。

青木さんはあゝいふおとなしい方だから、大抵のことは奥さんの言はれる通りになつてゐられたけれど、たゞ、奥さんが何かにつけてなさり方が勝手なのをいつも不平を言つてゐられた。

それはまだ奥さんがすべてにお譲れにならないといふ點もあつたらうけれど、とにかく、これまでが聲澤にやつて來られたので、その習性で餘計なところに氣を張つて、いろ／＼無駄な事もしてゐられたやうであつた。

はじめの内は、よく實家からお金を取つたりして、竊と青木さんの手前をつくるつてゐられたやうな事もあつたらしい。併しそれはそれとして、自分だけでは青木さんのために辛い事をも辛抱してゐられたのも事實である。どうしても青木さんのやつてゐられるやうなお仕事では、とかく収入も不定なので、奥さんは來れて間もないのに、自分のものなぞを婆やの手から持つてかせたりして、月末の工面をされるやうな事もたび／＼であつた。

さういふ點は、奥さんをよくお言ひにならないうおかみさんも、自分のして來た事に引き較べて十分同情してゐられた。お二人は、はじめの間はもとよりこれといふ

事もなく暮してゐられたのであつた。併しどういふ譯でか、奥さんは、どうかすると、一人で人のゐないところに行くので、少く／＼泣き入つてゐられるやうな事を、よく婆やは見たさうであつた。青木さんが洋行されたのは一月に結婚されたばかりの十二月で、お立ちになるときは奥さんのお腹には今の坊ちゃんが出来てゐられた。

奥さんは或女學校を出られた方で、もともとがた名前で少しばかりの物をお書きになつてゐた事もあつたさうで、青木さんの洋行のお留守の間には――さびしかつたからであらうけれど――一寸々々そちへ短いものなぞを出してゐられた。しかし、世間から作家として許されるまでにはもとよりまだ大きに間があつた。たゞ自分が好きで氣なぐさみにやつてゐられたといふだけであつた。

青木さんは女としてはそのやうな事をなさるのにはお好きにならないので、あちらから厭みを言つてよこされた。奥さんは分らないつもりでやつてゐられたのだけれど、青木さんからさう言はれて、自分でお書きになるのはお止めになつた。青木さんは、平河さんのおかみさんには、自分

が西洋へ出てからといふものは、どうも妻が自分に對して冷やかになつたやうで變だといふことを言つて來られたさうであつた。奥さんの手紙についてさう言はれたものらしい。それはこちらにゐられた前から、少しはそんな事を言つてをられた事もあつた。あの女はまだよく自分を解してくれてゐない。自分は妻に對しては、とき／＼他人と一つ家にゐるやうな、さびしい気分になることがあるけれど、どうも女たちが、少し私には觸りが冷たいからだらうかと言つて、沈んでゐられた事もあつたさうである。

青木さんは、先からおかみさんにはどんな事をでも願されるのであつた。ときには奥さんに相談なさるべきことを、その方へは黙つておかみさんの方へ持ち込んで來られることさへあつた。

あちからさう言つて手紙をよこされたのに對して、おかみさんはおかみさんだけの温かい手紙を上げて、圖擧に懇めて上げるより外に仕方がなかつた。

青木さんが二年振であちから歸つていらつしたときには、奥さんは丁度體がお悪くて醫者にかゝつてゐられて、瘦せ青さめて寝てゐられた。そこへ坊ちゃんもとかくそちこちがお弱

かつたので、家の内は青木さんを陰鬱な色をして受取つた。

奥さんは間もなくたうと入院されることになつた。たしか乳かどこかを切斷されたすつたので、その方はやがて直つて退院されたけれど、それから後がいつまでもヒステリーのやうな風に、變になつてお了ひなすつた。

そのとき、或日青木さんがおかみさんのところへいらつして、あゝ女は私の洋行も留守の間、だれかほかの男と關係でもしてゐたのではないだらうかといふやうな事を言ひ出された。さう考へると、いろんな點で疑はしいところがある、少くとも、私に對して下手な隠しだてをするのが變だと言つて、あれこれ少しづつの事實をお並べになつた。併し、變だといへば變だけれど、たゞそれだけではまさかさういふ詳細は出来なかつた。たゞ青木さんは奥さんが

陰氣に滅入つてふら／＼してゐられるばかりでも氣がくさ／＼なさるやうなところから、さういふ一寸した事もひどく青木さんを不愉快にさせたのは止むを得なかつた。

それに奥さんも悪いのは、青木さんに對してさつぱりと物事を言つてお了ひにならなかつた。例へば、病院から出られて間もないころ、

夜中にそつと寢床を出ていくつかの手紙を火鉢でもやしてゐられたことがあつた。それを青木さんは次の間で目を開いて見られた。それをも奥さんはどうした手紙かといふ事を、その後には訊かれてもどうしても譯を言はれない。私だつてどこからでも手紙は來ようではないかとさう言ふやうな事を言ひ返して、しまひには一人いつまでも泣いてゐたりされたさうであつた。

それに青木さんがあちらにゐられた間、奥さんは、いつも小さい坊ちゃんをつれて實家の方へ行つてゐたりされたといふやうなあたり前の事を、青木さんに隠されるのからも變であつた。それから奥さんの入院中に、だれかマントを着たまゝ奥さんの寢臺の側の椅子にかけて話して行つたといふ見まひのひとを、随々まで實家のお父さんだと言ひ通されたのも青木さんの氣を悪くさせた。看護婦から聞いたのと奥さんの口とが違つてゐた。

もとより青木さんは、しかとした事を握へるまでは、奥さんに向つては、そんな事だけで奥さんのすべてを罵られるやうなものだけけれど、おかみさんだけにそつと疑ひをもらされたのであつた。

青木さんはそんなわけを勢ひ洋行前のやうに

奥さんをたまたまにはなごらなくした。

さういふやうな事からしてあるまいけれど、奥さんは平氣が随々にひどくおなりになるばかりで、後には「おふくさん」として下り、裏の夕方の木の下へ行つて、一人で土の上に髪を亂してしよんぼり坐つてゐたり、夜分に、大きな蠅がでて自分をお食ふと言つて家の中を方々へ廻つて廻つたり、さう言つたやうないろんな事をされるやうになつた。さうして、實家へ歸してくと言つていつも泣いてばかりゐられたさうであつた。

それで青木さんも、とにかく實家の方へやつて静養させる事にされた。さうして二月ばかりおつとしてゐられる内に、さうかから直つて、つねのやうになられるのはなられた。

「奥さんはそれで一旦青木さんの方へお歸りになつただけで、やつぱりたうとどうもあれだものだから……それは詳しく言へばもつとあるんだけれど、まあさう言つたやうなごたごたした事である……何してね。——併しこんな事は、青木さんにもだれにもおふくさんが知つてゐるやうに言つちやいけませんよ。人さまの大事な事ですからね。」

おかみさんは、さう言つてるところへお安さ

んが顔を出したし、それきりあとは黙しておみにお言ひにならなかつたけれど、前後の口裏では、やつぱり青木さんの洋行のお留守の間、何か間違つた事がおありになつて、たうとと縁になられたおぢやないかと思はれた。

おくみは下目になつて聞いてゐた顔を上げて、おかみさんの目の色を讀むやうに見ただけで、自分からはそれ以上にほづつては得ず訊かなかつた。

もし果してそんな事だつたとしたら、奥さん何といふ人が全で氣が分らない。一通り以上に立派なお家からおいでになつた方が、人の奥さんとして、どうして、さういふふしだらな事が出来るのだらうと思ふと、それは自分のおぢやないかとおぢやないかとおぢやないかと思ふのであつた。おくみは青木さんの心持にもなつて見て、何だか言ふに言はれないやうなお氣の毒な思ひがした。

婆やも言つてゐた事だけれど、おかみさんが、なぜかこの坊ちやんを青木さんがあまりおかはいがりにならないから、坊ちやんもお可哀さうだと、別の事ですう言はれたのも、どうやらそんな意味があるやうな氣もされた。

坊ちやんは何にも知らないで、風船玉の綱を

待合室のベンチのはしに巻きつけたりして待つてゐられる。

やがて速い電車が軋つて来た。

一ではお落しにならないでちやんと持つていらつちやいませよと、坊ちやんが、おくみの手に持つてゐる切符を貸せといはれるのに對してかう言ひつゝ、おくみはベンチに置いた買った買物の風呂敷包みを手頭にかけて、兩手で坊ちやんを抱へてそばへと電車に乗つた。

おくみは何もお知りにかからない坊ちやんが、一寸もお用さまもお言ひにならないで、婆やが行つて了へば今度はおくみをしんみのやうにたよつて附き纏うてゐられるのが今日は餘計にいたはしいやうな氣がした。

「坊ちやん、ちつとしていらつしやいませよ。もうちぎでございませうからね。ずぶん長く遊びましたからお飽きになつたんでせう。」

おくみは、髪をかけるところに立つて、しよんぼり窓の硝子の縁を弄つてゐられる坊ちやんを抱くやうにして言つた。睫毛の長い淋しい坊ちやんも黒い瞳に、おくみは自分の顔が小さく寫つてゐるのを見た。

おくみは坊ちやんの手を引いてやう／＼家の門口へ歸り着いた。もう午後二時ごろ、暮は

んで、門の内は鈍い色に沈んでゐた。

洗吉さんもどこかへ出てゐられて、青木さんが一人、二階で留守をしてゐられるやうであつた。おくみは氣のせむか、同じさうしたしんとした家へ上つても、これまでになく、何だか酸氣な色の中に潜入つたやうな氣がする。二階、前にあつた奥さんの事で黙た目を見られた青木さんの心持を考へるからであらうか。

「坊ちゃん、お父さまに只今をしていらつしやいますな。をばさまからいゝお土産をお戴きになつたのをお言ひなさいませよ。」

おくみは自分の下敷を下駄箱にしまつて、坊ちゃんをあとかから二階へ上つた。

青木さんは留守にその押入などを掃除なすつたと見えて、掃子段を上つたところに、反古不用の雑品などが寄せ集めてあつた。昨日から花の飾り子が、果早行のりと散り落ちて了つたらしく、その花びらも反古の中に交つてゐた。

晝をお晝きになるところは、すつかり容子があつたやうに、ごた、したものが片づけられてゐた。青木さんは所在なさにぼんやりと何か考へ入つてゐられた後のやうな沈んだ顔をして、横になつて煙草を喫んでゐられた。

「坊やはまたそれをお姐ちゃんにねたつたのかい？」と仰しやる。

「どうも遅くなりました。おかみさんからよろしく仰しやいます。とおくみはこちから手を出した。

## 十二

おくみはさういふ、このお家のことを聞いてからは、當分はこちらの氣のせむか、何だか淋しい人たちと同じに來てお世話をしてゐる自分たといふやうな心持がそれとなく考へられた。

さつきも青木さんが坊ちゃんを外の湯へつれて行かれて、もうとつぷりと日もくれかけた、雨もひらしい夕方を、澄かない顔をしてとほとぼ手引いて歸つて來られたときに、青木さんがしなことを考へてゐられた戴きかといふ事が、おくみにはちやんと分るやうな氣がして、自分までがさびしいやうな心持がした。

おくみは門口の戸が開いたので、上り口へ出て、電氣を捻つて待つてゐた。「おかへりなさいませし。」と言ひつゝ手拭や石輪などを受取ると、青木さんは、「この襪はすっぱりお湯屋へ置いて來たんだつた。と仰しやしながら、あちらへいらつして、

髪をお梳きになる。坊ちゃんは黙つておくみの袂につかまつて、おくみの行く方へ附いて來られた。

おくみは夜分なども、みなさんがお寝みになつたあとに、なほしばらく一人茶間の電氣の下に坐つて、お安さんのものゝほひかけをついでに仕上げておしを切つて、もう寝ようかと思つて綿などを巻きたがら、ふと髪梳が來て自分をお食べると言つて恐ひ歩かれた奥さんの事なぞを考へ返して、しばらくまんじりと一つところを見入つてゐたりするやうなこともあつた。

坊ちゃんはおくみの中へ進入つて寢られるので、その間の、小さい寢息の枕もとに、おくみの枕と寝間着とが置かれてゐた。電氣をうす明りにして蒲團へ這入つたおくみは、足を出してゐられる坊ちゃんの着物をかき合せて、やがて自分も目を閉いだけれど、さつきこの人たちについてあれこれと取りとめもないことを考へてゐたあとと氣分が、何だか人のことではなくて、自分のこれから先の事をそれいつまでも一人寢入られないやうなこともあつた。

おくみはさうした心持から、自分がさきく

どんなことになつて行くだらうかと云ふことを考へて、心細い思ひに目を開いてゐた。あつてないやうな自分の養母のことも考へられた。こへ来てゐる路を、一寸手紙で言つて置いたのだけれど、養母からは、いつか平河さんの方へ向けて、いつまでもそこでぶら／＼してゐるのはどうぶ気なのかと言つて訊いて来た、あの手紙以來、一寸もたよりがないのであつた。

おくみは自分の家と云ふものがないことや、だれ一人しんみりした血つゞきの人もゐてくれない事などが、あぢきなく考へつめられた。山の手にゐたときには、よくそんな事を思つて一人寢床の中で泣いてゐたりした事がいくどもあつた。

おくみはいつしか自分の小さかつたときから今日までの事をそれからそれへと考へ返して、言ひ知らない涙つばい自分を見守つた。しまひには、たゞ女に生れて来たと言ふ事それ自身さへはかないやうな心持がした。

おくみは、かういふ夜を寝て目さめた朝などは、坊ちゃんや暗い内からもう目を開いて、蒲團の中でおくみの肘を枕に、雀の手がちい／＼と啼くの聞きながら、たわいない御り言を言つてゐられたりするの、何だか、もうすつかり他

人ではないやうな気がした。自分もこれからまた他へ行つて、氣の分らないところへ奉公に上つたりするよりも、いつその儘こゝに置いて貰ひたいやうな、はなれ難い心持がする。青木さんも、おくみが来てゐてくれるのをよるこんでゐて下さるので、おくみも何となく張合があつた。

おくみはあれこれ氣をつけて、行き届くだけのことをして行かうとすると、これだけの人數のお家でも、一軒の家となればいろ／＼する事があつて、手の安まらないやうな事もあつた。夜のひまなぞには青木さんの不斷着などで縫ひかへたいものを一枚づつ解いた。自分もお針の方はまだ何でも縫へるまでは行つてゐないのだけれど、それでも婆やがして置いたものの中には、ずいぶん變な事がしてあるのがあつて、青木さんがこんなものを黙つて着てゐられたのかと思ふと氣の毒であつた。

おくみはそちち垢點が附いてゐるまゝで行李にしまつてあるやうなものなども、晝の中に一々きれいにしておいて、そこの押入の中を段々にきちんとして行つた。お天氣のいゝ日には、朝を擦つて着て、解いたものを張板へ張つた。

「おくみさん、坊はどこかへ行きましたか。」と、青木さんはおくみが裏でその張物を剥がしてゐるところへぶら／＼出ておいでになつた。

「私これが済みましたら紅茶でも入れて持つて上らうと思つてをりましたところでございませう。坊ちゃんは洗吉さんと御一緒に驛の方へおいでになりましたやうでございませう。」

「何をしに？」

「坊ちゃんが需車に乗りたいたいと仰しやつて、お午ごろからねだつていらつしやいましたものですから。」

「洗吉はもうぢき試験だのに、あんなにぶらぶらしてゐてもいゝのかな。」

「でもずいぶん御勉強もなさつていらつしやいますわ。」

青木さんはその儘その花床へいらつして、草花の若い芽生についてゐる蟲を取つたりなすつたが、その中にまた表の方へ行つてお了ひになつた。

おくみはやがて、土の上の藁座へ坐つて張りもの押しをして、もうこれから夕方の支度をするまでには、何をする間もないと思ひつゝ、襦袢がけのまゝ物置の片蔭に立つて、鬘の毛に櫛を入れたりして息休めをしてゐた。

おくみは自分だけの氣でか知らぬけれど、このお家へ来てから、かうしてこちらを見て、柔かい青葉に充ちた外の色に對して佇むと、何だかその青い色が、人の感情を吸ひ集めでもするやうに、すが／＼しい中にも何となく物の哀れになつたかしいやうな心持が煙つて、なんでもない、小さいときの事なぞが、とりとめもなく一人戀ひ返されたりするのであつた。

今小さい畠の彼方の栗の木には、段々と傾いて行く日足が、黄色い灯を點したやうにしづかにさしてゐる。おくみはその光を通す葉の色に、濃くうすく蔭が出来てゐるのを見入つてゐた。重なつた葉は濃く厚い葉のやうに見える。下には、畠の中にもまはりにも、毛の並んだやうな薄黄色い栗の花がばら／＼と落ちてゐる。牛初ちて土にまぶれたりしてゐる上へ、日ごとに後から落ちては来るらしい。

山芋の棚の中にもばら／＼と落ちてゐる。山芋は二つとも椀淵の木の下に固まって、白い背中に日影を浴びてうづくまつてゐる。と、おくみさん、と青木さんがお呼びになる。お

くみは、  
「はい、と言ひつゝ、こちらへ来てあたりを見廻した。」

「こゝです。一寸こゝまで来て御覽なさい。」  
青木さんは井戸の方のこんもりした生垣の外から覗いておいでになる。

「まあ、どこにいらつしやるのかと思ひました。と、おくみは側へ行つた。

「一寸手をうけて下さい。こゝから。」と、青木さんは變なところから、手の平に何かを掩うてお出しになる。

「何でございませう？」  
「食べられるもの。零れますよ。」

「まあ、桑の實でございますか。と、おくみは言つた。

「汗が手に附いたでせう。まだありますよ。」  
「一寸待つて下さいまし。それではお皿か何か取つてまゐりますから。」

おくみは黒く熟したつぶ／＼の實を兩手に受けたまゝ、急いで臺所へ行つた。

それを有り合せの籠へ入れてこちらへ来る。

「おや／＼、大きなものを持つて来たんですね。もうそんなにはない。小さい木だから。」と、片手へ一ぱいだけお入れになる。

「こちらからは何にも見えませんでございませう。そこはどことなつてゐるんでございませう？」

「こゝから覗いて御覽なさい。――ね、また赤いのがぼつ／＼實つてゐるでせう。かういふのはこれから熟れるんだ。」

「赤いのが未だ大分實つてゐるやうでございませぬ。綺麗でございませうこと。あそこに白い花が澤山咲いて居りますやうでございませぬ。」

「野薔薇が咲いてゐる。――あれは秋になると南天の實のやうな赤い實が果つてかはいらしいもんですよ。」

平生はだれも人が這入らないものと見えて、草が随分高く延びてゐる。

「こゝは一體となりの地面になつてゐるのかな。」と青木さんが言はれる。

すぐこちらには、三尺ばかりの幅を置いて、となりの家の物置の黒い板塀の背中が見えてゐて、その下に、白く雨さらしになつた大きな貝殻が二つ三つ、土の中に覗いてゐる。そこへはあちらの草原からつゞいて這入れるやうになつてゐるのださうである。草の中に薔が澤山に生えてゐる。

「あなた、お召しもへ澤山泥坊草が喰つ附いて居りますよ。」

「頭も蜘蛛の巣だらけだ。もう出よう。――赤いのも少し取らうかな。これがあちらから見え

たものだから這入つて見たんだけど。」

青木さんはしつぱに獨り言のやうにかう仰しやつて、桑の枝をたわめて、少しばかり赤いのお取りになる。ひとりでに生えて大きくなたらしい一本の桑の木が、こちらの生垣の中から覗いてゐるのであつた。

おくみはいつしか川の根へこんで、土の上に置いた笹の實の中に、青木さんが草の上へお置きになつたか、朽ちた細い芝草のごみが交つてゐるのを取つてゐた。指の先が薄い紫色の汁に染つた。おくみは桑の實といふものを久しぶりで見るとやうな氣がした。

寒いところをさわ／＼と草を踏んで出て行かれた青木さんは、やがておくみが笹なりにその實を洗つて、押入から白い西洋皿を出して入れてゐるところへ、表から廻つて歸つておいでになつた。

「おくみさん、それを二階へ持つて二人で食べようか。」と青木さんは水口へ覗いて、眞で、子供のときと言ふやうな事を仰しやう。「只今すぐにごさいますか？」とおくみは微笑みながら、皿のふちの濡れてゐるのを布巾で拭いた。

「一寸甘いもんだよ。」と仰しやりつゝ、そこか

ら上へお上りになつて、おくみの手にある皿から摘んでお食べになる。

### 十三

おくみは牛肉屋が挽肉を持つて来たのを戸棚へしまつて置いて、やがてその桑の實の西洋皿へ匙をつけてお盆へ載せて、二階へ持つて上つた。

青木さんは机をちがった方へお屏風になつて、黒と赤とで縫取りをした布をかけた上へ、その半分ばかりの白い大理石の板を置いて、その上にいろんな燻物を並べたのをこちらから見入つてゐられた。

「こんな風をしてまゐりまして。と、おくみは氣がついて、襷をはづして持つてゐる手で前垂を取つて、お盆をそこへ出した。

「すみませんが紅茶を入れて来てくれませんか。おくみさんのもの。——もう夕方まで用事はないんでせう？」とお訊きになる。

「では少しこゝでお話しなさいよ。」と一人ではせいがないやうに仰しやる。

おくみは下へ行つて瓦斯をつけて鐵瓶をかけて置いて、裏の裏座を片づけて、張物などをこちへ持つて歸つた。

湯が沸く／＼持つて紅茶を入れようとしたが何だか、ぬすまひも取り亂してゐるし、この間から着てゐる着物がもう鹽たれかけてゐるので、二階へ行つて坐るためにも、ついでに他のと着換へたくなつた。

行李から、こなひだ平河さんへ着て行つたときのネリの着物を出して着る。もう前からこれを下さうと思つてゐたのであつた。それへ帯をそのまゝ結んで、湯敷のところの鏡に後の恰好を寫した。

「すつかり着物を着換へて改まつて来たんですね。」と桑の實を食べて待つていらつした青木さんは、おくみの姿を見てからお言ひになる。

「あんまり氣持が悪うございましてから。」と、おくみは顔を赤めながら坐つた。

「おや、一つだけしか拵へて来なかつたんですか。」

「私はこれを藏しますから澤山でございませう。」

青木さんが紅茶を召し上るのと共に、おくみは桑の實を一つ二つ匙で取つて戴いた。

なる。

「久しぶりのやうで珍らしうございますわ。」

おくみはハンケチを出して指先を拭いた。ちやんと着物を着換へた書の心持にこそはれて、うつすらと目立たぬ程白粉をつけて来たのが、氣はづかしいやうでもあつた。

「甘いですか。」

え、甘しうございますわ。私は小さい時分に繼母と芝のはづれの方に居りましたときに、近所にお社が何かがありまして、その後のところで二三人でこれを探して食べたのをかすかに覚えて居ります。——さう言へば坊ちやんが早く歸つていらつしやいますと、みんなで一所に食べますのに。」

「何、ときくゝゝぬないでくれてもいいよ。子供といふものは絶えずがさくゝ動き廻つてちつとしてゐないから、こちらの氣が落ち附かなくと。」と仰しやる。

「よく子供のときには、これを食べると後で舌の見せつこなんかしたものだかな。——舌が黒くなるでせう。——青木さんは話をもとへかへして、のんびりした心持のやうに足をお延ばしになつて、紅葉を眺んでおしまひになる。」

「もう一ついかゞでございます。」

「今度は砂糖を入れないで山羊乳ばかり飲んで見ようかな。乳だけの方が木の實を食べるのによくうつるやうだね。自分が搾る乳だし。」

「まだ今日はあの壺へ半分ぐらゐ残つて居ります。」

おくみは下りて乳の人れものを持つて来た。青木さんは、長まつてゐられて、おくみがそれを注いで上げるのに目を止めながら、おくみさんはこゝへ来てから少し痩せやしないかとやつて下さる。

「でもこちらへ上りましてからはすつかりのんきにしてみさせて戴きますから肥るはずでございますけれど。——私ほもとからこんなに肉附がないのでございます。と、おくみは下目になつて樽のあたりを掻き合はせながら、極り悪さうに坐つてゐた。

「だつて一人ぢやずるぶん忙しいでせう?」

「そんな事は私は何でもございませんですけど、すべてがお氣に召さない事はかりでございます。うと思ひまして。」

「そんななどろぢやない。あなたが一人で何でもしなけれやならないんだから、ときくゝすまないやうな氣がするんだ。」

「いゝえ——私が何でも勝手な事はかりして

居りますのですから一寸も氣苦勞がないのでございませぬもの。却つて一人の方が良いでしょう。でございますわ。」

「さういふものですかね。」

「どうしても女はほかにいろんな方がいらつしやいますと、描りたい事にまで氣を使ひますものですから。」と、おくみは必ずこの這入つた細い金の指輪を袂の袋に、腕の襷糸を掻き上げながら、つゝましくかう言つた。

「もう食べたいんですか。と、何をか考へたやうにしてゐられた青木さんは、しばらくしてかう仰しやりながら乳を飲んでおしまひになる。

「私、はもう澤山戴きました。あとは坊ちやんに取つといつてお上げ申しませう。」

「うんう、赤いを食べたら酔つぱかつた。」

「何かへお出しなさいませうか?」と、おくみは袂の中を探らうとした。

「澤山です。あとから甘いのを食べれば同じなもの。」と笑ひながら仰しやる。

「子供見たいだね。」

「え、とおくみも微笑んだ。

青木さんは何をか言はうとしてお止しになつたやうに、巻煙草に火をお移しになつたが、

「おくみさんはすつとこのまゝ私の家にあつてく

れないかなあ。と、やがて思ひ出したやうにか  
うお言ひになる。さつきからそれが言ひたかつ  
たやうな御容子に見えた。

「ね、お嫁に行くまでこゝにゐて下さいよ。」と、  
灰皿へ灰を落して、遠慮らしく軽くさう仰しや  
る。

「そんな事はいつでございませうか。」と、おくみ  
は、さう言はれて何だか暗に寂しいやうな気分  
を見つゝ、ハンケチを口もとへ當てて、はづか  
しさに下目になつた。

「平河さんのおかみさんに、私がさう言つて  
がどうしたらいいだらうつて相談して見るとい  
い。——でもおくみさんに外に考へがあれば仕  
方がないけど。」

「私も別にどこへと言つてまゐる處もござい  
ませんし：一と、おくみは指先に目もとを集め  
てこれだけ言ひかけたが、あととは得言はないで  
顔赤らめてゐた。いつそさうして戴けば自分  
も出来るだけ働いて行くけれど、平河さんでど  
うお言ひになるか、何だか自分からはおかみさ  
んに言ふのが變だしと思つて見る。

「私はおくみさんが来てくれてから、すべてに  
不平といふものが一寸もなく、のんびりした  
気分になつて來ましたよ。何だか暗いところか

ら日向の中へ出たやうに。——そんなだから、こ  
の間から何か愉快にものが畫けさうな気がして  
考へてゐるんです。明日からあの机の上のものを  
やつて見ようかと思つてゐるんだけど。——いろ  
んな機物が並べてあるでせう？ あの後へこれ  
から何か面白い布をつるして背景にして、それ  
からあの花挿へは他のいゝ花を何か挿す積りで  
すかね。」

青木さんはかう言つて、横になつてゐられる  
肩を起して、あちらの机の上のものの位置を考  
へておいでになる。

「坐つてゐて透かして見ると、あの大理石へ花  
挿の青い蔭などが寫つてゐるでせう？」

「ええ、うつすし寫つて居りますね。一と、おくみ  
は片手をついてしばらくそれを見入つた。

「歸つて來たな。久男が大きな靴ででたらめの  
靴を踏つてるよ。」

「一と、あれは坊ちゃんでございませうか。」  
と言ひつゝ、おくみはもう大分目も低くなつた  
のに氣つきながら、向ひの家の屋根に半分さし  
た、赤ばんだ日影の色に目をとめた。

#### 十四

その翌日、青木さんは終日二階からお下りに

ならないで畫をかいいておいでになつた。お午  
も、山羊に飼料をやりを下りていらつしたついで  
に、たゞコップで乳を召し上つたきりで、物  
を囁むのが面倒だとお言ひになつて、御飯もお  
上りにならないで、また上へ上つてお了ひ  
になつた。

三時頃におくみは、青木さんがお腹がすきは  
しないだらうかと思つて氣になつたので、しづ  
かに梯子段を上つて行くと、青木さんは梯のこ  
ちらにお坐りになつて、片手に繪具の板と、片  
手に筆をお持ちになつたなりに、ちつとそち  
らの畫を見入つておいでになつた。

おくみが遠慮して梯子段の上に立つた儘、何  
か召し上らないでもおすみになるのでございま  
すかと訊くと、

「いゝや、何にも。ちきあとで下りるから。」と  
お言ひになつたばかりで、目をお放しにならな  
いで考へ入つておいでになる。おくみは非禮に  
なつては悪いと思つたのでそれきりで下りて來  
た。どんな畫が出来かけてゐるのか、こちらか  
らは見えなかつた。

おくみは坊ちゃんが、そちこちお歩きになつ  
たりするのにも氣を使つて、竊とこちらへ俾れ  
て來るやうにしてゐた。

洗吉さんは、家にばかりおいでになつては氣がつかまると思つて、何か書きぬいたノートを携つて裏手の草廐の方へお出ましになつて、木の下のぞを歩きながら、諸記物が何かをしてゐられた。

坊ちゃんが生垣へ覗いて、

「叔父さんあんぐい、と、用もないのにお呼びになるのを、おくみは、

「もう黙つていらつしやいませよ。叔父さんは勉強していらつしやるのでございませうからね。こゝへ来て御覽なさいませ。あの栗の木にあんな大きな黒い蟲がゐるでせうか。あとであれを取つて車を引かせませうかしら。板でも何でも上手に引くんですよ。と、こんな事を言ひながら、そこらの土の上を掃いた。

「おくみさん、さつきは失禮。畫を見せようか。と、おくみが茶の間でマツチ函へ絵をつけて、蓋に引かせる荷車を拵へてゐるところへ下りておいでになつた。

「もうお出来になりましたのでございませうか。と、おくみは自分のものが出来てましたやうにかう言つた。

坊ちゃんも、出紙でつないだ圓い角のある黒

い罫の荷馬を持つて、後から上つておいでになつた。

もう畫がちゃんと出来てゐた。畫を一つだけにして、小さい畫にしたと仰しやつて、昨日の大理石へ一寸した壺を載せて、庭の赤と白とのハイヤシンスを盛つて挿したのを、二只に一隻位の大ききものを寫生してゐられた。後には、色のばつとした、赤やも、えぎや紫の五色に染め別けた、だんだらの綺麗な大巾な絹の布が、柔かい垂囊を見せてふらはりと吊されてゐた。

當には、大理石の表にその色紺やハイヤシンスや青藍色の壺が斜につや／＼して潤んで寫つてゐた。

「まあ綺麗にお出来になりましたこと。一

おくみは、自分たちの目で見たばかりでは、さまで意味があるやうにも思へぬ原物が、畫になると、同じものでありながら、何だかものともののに比べてこんなに引きつけられるやうな、つとりした色になつてゐるのを見くらべながら、それが畫の力といふものなのかといふやうな事を、何にも分らぬ心に考へながら、兩手をついてぢつと畫面を見つめてゐた。

「どうです。氣に入りましたか。と、青木さん

も自分の畫の前へいらつして、おくみの左手へ

立つておいでになる。

「私などは分りませんけど好きでございませうわ。」

「その布の色なぞが？」

「ええ。布もでございますが、畫のすつかりが。下の大理石へ寫つてゐるのが何とも言へませうでございますね。」

「うん。と言つて、見ておいでになる。おくみは本當にさう思つた儘を言つたのであつた。青木さんがお書きになつたのだと思ふから豫計にいゝと思ふかも知れないけれど、大層よくお出来になつたやうに思はれた。

「何でございませうか、この寫つて居りますところを覗くと、こちらの額まで寫りさうでございませうかね。と、おくみは黒い目をつけて青木さんのお顔を見上げながら言つた。

「さうですね。と、青木さんはおくみの側にお路みになつたが、

「ぢつとこの畫を見てゐるとどんな氣がしますかと、煙草を吸つて火をおつけになつて、おくみの方へ進んで行かうとする煙を口でわきへお吹きになる。

「分りませんわ。とおくみは、自分の感じてる心持をどうにも纏めて得る言はないので、困

つたやうに極り悪くかう言つた。

「これを見てゐると気分が浮き／＼するやうに愉快になりませんか？」

青木さんは微笑みながら碎いて置き直して下さる。

「私の氣のせむでございませうか、よく見て居ります申に、何だか寂しいやうな氣になつてまゐりますけれど……」

おくみはためらひながら正直に言つた。

「さうでせう？ あんなに華やかな色ばかりで畫いてあつても、全體の氣分には、了度大理石そのものの澤のやうな寂しい心持が底を流れてゐるでせう？ 浸み出るやうだと言つてもいいかな。——これは私の自作かも知れない。——ふいとかういふものが出来た。」

「お日出度うございませう」と、おくみは自分までが何もわかを得たやうにかう言つた。

と、

「好きならおくみさんに上げようか。」と眞面目になつて仰しやる。

「これをでございますか。」と、おくみはそれでも御冗談だといふやうにかう言ふと、

「それぢや、これから銀座へ行つていゝ額縁を買つて来て、おくみさんの部屋へかけて上げよ

うね。——おくみさんの部屋と言つたつて別にないんだけど、ぢやあの四疊か。あそこにあな

たの荷物が置いてあるんでせう？」と仰しやる。おくみは何と言へばいゝのか困惑しつゝ、

「たつて私たぞにかういふものを……それよりか大事にしまつてお置きなさいませうよ。」と、もち／＼してゐた。

「お禮に上げるんだからいゝよ。」  
「ほゝゝ、何のお禮でございませう。」

「この畫の寂しいところを分つてくれたのと、私の畫が一つ出来た力を悦んでくれたから。」と仰しやる。

「畫がどことなく寂しいのは、私がいつも寂しいからなんだ。おくみさんにはそれがいつも分つてゐてくれるやうな氣がして感謝したくなつたんさ。」と、青木さんはつとめて笑ひながら仰しやる。

おくみは黙つて下目になつてゐた。

「何、冗談ですよ。——たゞ上げたたいから上げるんだから貰つておきなさい。私は自分の畫いたものはやたらに人にくれたいのだから。」

おくみは、  
「有難うございませう。」と口の中で言ひながら、改まつてお辭儀をした。

「ふゝゝ、そんなに眞面目にならなくもいや。」

さう言はれておくみは何か言はうとして微笑みながら、諷もなく涙ぐまれるやうな目を上げた。なぜだか、ひとりでにさうしたしみ／＼した心持になつて来た。

坊ちゃん、蟲の絲を持つて這はせながら、二人の顔を見くらべておいでになる。

「坊や、下へ行つて二人で山羊に餌をくれようか、ね。」と青木さんはおくみの目もとを见ないやうにして下さるやうに、坊ちゃんにさう仰しやる。

「坊ちゃん、はい、つてお返事をなさいませう。」とおくみは涙になりさうな心持を隠しながらかう言つた。

### 十五

やがていつものやうにおくみさんが済むと、青木さんはしばらくそちらで妻楊枝をお使ひになりながら、朝の新聞を披けて飛び／＼に讀んだりしてゐられた。

と、どうでも一寸銀座へ行つて、さつき前の額縁を買つて来よう、他にもついでに廻つて来たところもあるからと、さうしないでは氣が

濡まないらしく仰しやつて、あちらでこそく  
洋服を召す支度をなさるやうであつた。  
皆さんのお結仕をしたあとに、一人坐つて御

飯を戴きかけてみたおくみは、箸を置いて立つ  
て、青木さんが座敷の押入の前でワイシャツな  
ぞをお着しになる側に附いてゐた。

でもこれから大變でございますね。

おくみはその電氣を捻つた。

「何、二時間も経てば直きに歸つて来るんだか  
ら。」と、青木さんはダブルカラーをお附けにな

つて、いつもの黒い長いネクタイを大きく結び  
放しにして、挿入の上の段の、小さい鏡にお覗  
きになる。

「何かそこへ縁が下つて居りますでせう？ お  
や、そここのところが解れたんでございますか。」

ネクタイの先の縁縫の縁が下つてゐるのを、  
おくみは齒で切つてお上げした。

青木さんはワイシャツの箱へいろんなネクタ  
イを一ぱい持つておいでになるのだけれど、こ  
の幅の廣い黒いのをそんな風にお結仕になるの  
が、等おききたと見えて、いつもそればかりを  
お附けになる。

「こんなに洋服なんかに着換へるのは厄介だけ  
ど、今はあの黒座の通りなぞの漆喰になつて

やうなところを靴でさつきと歩くのが好きだも  
のだから。」と、おくみが着せる上衣に手をお通  
しになる。

おくみはあちらの長火鉢の挿斗から、洗濯し  
て置いたハンケチを出して来た。

「お靴はこの方でもよろしいませうか。」

おくみはやがて土間へ下りて、こなひだ履い  
て出られた黒い編上の方を下駄箱から出した。

「どうぞ、もういゝから。久男は何をむしや  
むしや食へてるんです？」と、青木さんは、そ  
へ出ておいでになつた坊ちゃんを振り返りなが  
ら靴の紐をお結びになる。

「坊ちゃん、そんな叔父さんのお西洋鍔なんか  
あちらへ置いていらつしやいませ。さ、お父さ  
まをそこまでお見送りいたしますせう。」

おくみは久男さんを負つて後から門口まで附  
いて出た。

「坊ちゃんがお父さまに左様ならでございま  
すつて。」と、こちらから言ふと、青木さんはおと  
なりの門口で振り返つて、

「坊ちゃん、子だからおとなしくしてお姐ち  
やんと待つておいでよ。今日は直き歸るんだか  
ら。」と、しまひはおくみに言ふやうに仰しやつ

て、二三問ばかりお出かけになつたが、ふと思

ひ出したやうに引き返しておいでになる。

「何かお忘れになりましたんでございますか。」  
おくみもこちらから近づいた。

「あの、ひよつとしたら歸りに一寸平河さん  
の方へ寄つて来るかも分らないけれど、何か用  
事があれば、併しどうするか分らないけれど  
ね。」

「いゝえ別に何にも：：もしお寄りなさいまし  
たらどうぞ皆さんによく仰しやつて下さい  
まし。」

おくみは坊ちゃんを擦り上げながら頼んだ。  
気が附くと、お向ひの家の奥さんらしい方が、  
いつも坊ちゃんとお遊びになる小さい女の子

さんを負なすつて、門の内立つておいでにな  
つた。おくみは何だか極りが悪かつたので丁寧  
にお辭儀をすると、急いでこちらへ歸つた。

顔などはよく目に這入らなかつたけれど、西  
洋髪にお結ひになつた、どこやらいさな造りを  
してゐられるその若い奥さんは、さつきから、  
それとなくおくみの方をまじく見えてゐられ  
たらしかつた。

「お父さんはもうあんなに遠くまでおいでにな  
りましたよ。あそこに。」と、おくみは家の門口  
で尙しばらくあちらを見送つてゐた。

暮れて行く往來の向うは、もう兩側の生垣の色も、壁で塗つたやうに茫々と黒くなつてゐる。ついでその近い木立の間にも黒い蔭が濃くなつて、そこちの閑達な瓦斯燈の灯が、しよんぼりと夜の色になりかけてゐる。あたりは見る見る暗くなつて行くやうに見える。

青木さんのお姿は間もなく見えなくなつた。

おくみは何だかいつもになく、青木さんの行かれる先がどこことほなく物戀しいやうな心持をする。

おくみは大分久しく行つたことのない、銀座あたりの賑やかな通りの、青白く漲つた、瓦斯の灯影の中に並んだ品物の、華やかな色取りや、さういふ店に客足を呼ぶ蓄音器や、遠くの高い屋根の上に、青や赤の電氣の大きな廣告の字が、黒い空に消えたり點つたりした記憶のぞを、かうした留守居の心に懐かしいものやうに思ひ浮べながら、坊ちやんを負つてゐる片手で門口の戸を閉めた。

おくみはそれから御飯をしまつて、やう／＼そこらを片附けた。

坊ちやんはさつきから、洗吉さんに相手になつてお貰ひになつて、六疊でふざけておいでになつたが、見ると、どうしてか忿つてはたきを

振り上げて手向ひをしてゐられる。

「坊ちやん、もうお止しなさいましな。御覽なさいまし、叔父さんがあんなに泣いていらつしやいますのに、あなたの方がお強いんですから、もう忤へてお上げなさいましな。——ほ／＼、ほどうしたつて仰しやるんでございませう。」

洗吉さんは泣く眞偽をしておいでになる。もう御勉強なさらなければならぬからと思つて、おくみは坊ちやんをなだめてこちらへ伴れて来た。

「二人でお二階を閉めてまゐりませう。坊ちやんは私の好きな好きないとおすさまじすから、叔父さまに今のやうな事を仰しやるものぢやございませんよ。おや／＼、梯子段が眞つ暗です。」

おくみは二階の十六燭の電球をはずして来て座敷の暗い十燭と取りかへてお上げた。洗吉さんはこの頃はこゝのテイブルが好きだと仰しやつて、こちらへ来て椅子におかけになる。氣のせぬかこなひだ内から目に見えてお瘦せになつて、何だかがつかりしてゐられるやうに見える。

「もう大抵一通りはお調べがついたんでございませうか？」と、おくみは坊ちやんと二人でしぼら

くそこにたんだ。

「何だかあんまり勉強したつて冊子がないやうな気がするけど……これだけのものを見たつて、化学はたつた二問題ぐらんしか出ないと言ふんだもの。」と、氣乗りのしないやうな顔をして、本の小口を割つておいでになる。

「ほんとお辛うございませぬ。あと幾日でございますか？——ではもう僅かでございますからついでにしつかりおきばりなさいましな。この電氣をもつとこちらへやりませんでもよろございませうか。」

おくみはこちらの襖を閉め切つて置いて、やがて茶の間の電氣の下で、坊ちやんを傍へ坐らせてお針をする。

坊ちやんは、鳥や猿や象などかいろんな眞似をしてゐる色摺の繪本を一枚々々開けて、その繪の譯をお訊きになる。おくみはぼつり／＼い加減な事を言つて聞かせて上げながら、不斷に締める夏帯の悪いのをくけた。

「それだけ？ うん、もつと——もつと長いのを。」と、坊ちやんは、話の一區切毎にさう仰しやるので、段々引つぱつて行く内に、しまひにつままりが附かなくなつた。

「もうこれだけでおしまひでございませう。今度

は坊ちゃんがして聞かして下さいました。こな  
ひだの雀と鳩のお話がいゝでせう？ あの本も  
みんなこちらへ持つていらつしやいました。一  
おくみは坊ちゃんに謝り分らない事を仰しや  
るのを笑ひく、分つたやうに聞いて行つた。

その内に時計が八時半を打つた。青木さん  
お出かになつてから、かれこれ二時間ばかり  
になる。あゝ、仰しやつても、平河さんへでも  
お寄りにならばどうしても長くなるから、やは  
りこなひだのやうに遅くなつてお歸りになるか  
も分らない。おくみは青木さんが郵便を包んだ  
のを抱へて、物に考へ入つたやうにして、電車  
へ乗つたり下りたりなさるところなぞを目に畫  
いた。

考へて見ると、何だかいつも何一つこれとい  
ふ御愉快な事もなくて、たゞ一人のやうにかう  
して暮しておいでになるお心持がお氣の毒な  
やうな氣がする。あまり人に物事を仰しやらぬ  
性質のこゝろ、それだけ御自分ではお淋しいであ  
らうと思はれる。後の奥さんの事なども、この  
先どうなさるおつもりでいらつしやるのだらう  
と、おくみは青木さんの氣になつて、いろ／＼  
たよらない心持がする。

そのうちにいつしか自分の事にも移つて、自

分がお屋敷にゐて、この帯を頼らしく結んでゐ  
た頃の事などがあれこれと思ひ返された。

おくみはそれから坊ちゃんに赤い糸の束を手  
頭にかけてゐて貰つて、終巻へ二つばかり巻き  
取つた。

灯取蟲が電氣のかきに来てまひ／＼する。坊  
ちゃんも、もう箱の本にも早くにお満きになつ  
て、足を投げ出して、紙面の著を裂り／＼してゐ  
られたが、やがてもう眠くなつたと見えて、せい  
のない、滑かない顔をしておいでになる。

一それではもうお床を取りますから待つていら  
つしやいませよ。まあ／＼、おるぶん散らかり  
ましたわね。と、おくみはそこらの坊ちゃんの  
ものを急いで片づけて、疊の上を掃いて、四疊  
へ蒲團を出しに行つた。

挿入の蒲團を抱へてこちらへ来ると、坊ちゃん  
んは、急に何をか思ひ出しでもなすつたらしく、  
一人悲しうにしく／＼泣いておいでになる。

どうなすつたのかと訊くと、お父さんがゐない  
からと、やう／＼の事これだけお言ひになる。  
一叔父さんがあちから御勉強なすつていらつ  
しやるんですから、もうお泣きなさらないでお  
寝間着をお洗濯へなさいませ。一番に帯を解い  
て、ね。お姉と二人でゐるんですから何にも悲

しい事はないでせう？」  
坊ちゃんにはあやす程悲しくおなりになつて、  
涙を頬に光らせて、いつまでもしやくり上げて  
お泣きになる。

一では負しとお父さまを見にまゐりませう。ち  
やんと涙を拭いて——もういゝでせう？ お父さ  
んはぢきお歸りなさいませうですからね。」  
おくみは赤吉さんに氣兼ねをして、負つて門口  
へ出た。

「あそこを御覽なさいませ。あの硝子燈に小さ  
い蟲があんなにたかつて飛んでるでせう？ 大  
變な蟲。——お父さまは今どこをお歸りになる  
でせうね。こなひだ坊ちゃんとお姉と二人で坊  
ちゃんの小ちやな下駄を買ひに行つたでせう？  
あそここの家のをばちゃんがお湯で何だつて言ひ  
ました？ 坊ちゃんは一寸もお泣きになりませ  
んかつて訊いたでせう？ 今にお父さまが歸つ  
ていらつして、坊やはちゃん泣かないで待つ  
てましたかつて仰しやつたら坊ちゃんはどうお  
言ひなさいませう？」

おくみはお向ひの家の門の電氣が、往來を區  
切つてさしてゐる中に立つて、坊ちゃんを揺ぶ  
つてゐた。

「一寸この影法師を御覽なさいませ。あれが坊

ちやんでございますよ。長い／＼影法師。

おくみは汗中の涙の人をなだめながら、そこらを行き廻りした。ひっそりした往來には晴い蔭りが深く横がつてゐる外には何にもない。ずつと向うの、お湯屋がある通りの角に、自動電燈の赤い電氣がたった一つ、眠つた港の灯か何かのやうにぼつちりと寂しく見えてゐる。暗い方へ一寸這入つて、もとの灯のさした中を見ると、漬戸物の小さいかけらの土に埋もれたのが、金色の釘を寫して潤んだやうに光つてゐる。あたりの生垣の中には、ところ／＼に灯影がちぢ／＼と漏れた。

「もうぢつとそのまゝ寝んなさいましよ。お父さまがお歸りになりましたら、お姐がぢやんと起してお上げ申しますから。」  
おくみは自分が小さいときに寝せられた子守唄を、うる覚えに小さい聲で歌つた。

何だか自分のためにも青木さんの靴の音が近づくのが待ち入られるやうな氣がする。

口こそ言ひ得られれば、昨日今日、どうしても青木さんが自分の血つゞきの方でもあつてもやうに物慾しい。あの戴いた晝にどのやうな額縁かつけられるかといふ事も子供のやうに繁しみてもあるし、そのやうな事が、この頃のたつた

一つの方物嫌しきである自分が、考へればいつまでも頼りない身の上のやうに小寂しくもある。「ぢやん。——もう眠つておしまひになつたんですか。」

ふと黒い空を見ると、睡らにまた、いてゐる薄い星の間を、自分の心持の中でのやうに、それかたきかに小さい星が微かに流れた。

### 十六

おくみは背中で寝入つておしまひになつた坊ぢやんを、假りに晝の着物の儘で湯圍にお寝かせて、座敷へ行つて青木さんのお床を簡べて置いた。

洗吉さんは椅子にかゝつてこつ／＼と勉強しておいでになつた。

おくみは、それから再びきつきの帯を纏ひ上げにかゝつて、坊ぢやんの寝床の傍へ坐ると、間もなく門口の戸が開いた。遅くおなりになるだらうと思つた青木さんが歸つておいでになつたのであつた。

おくみは上り口の電氣を開けて、障子に手をかけて晝を浮かしてゐた。青木さんは、郵便受に這入つてゐた手紙の表をすかしてお讀みになりながら、椅子戸を開けてお這入りになつた。

「お歸りなさいまし。」とおくみは板の上へ下りて手を突いた。

「途中でビールを二杯飲んだものだから、まだ少し酔つてゐるんですよ。」と、仰しやつて、心持顔を赤くしておいでになる。

「でも早くお歸りになりました。……たつた今まで坊ぢやんを負してそこらまでお這ひに出て立つて居りましたんでございますよ。今お寝みになつたところでございます。」

「それは濟まなかつたね。洗吉、勉強してゐますか。」と、靴を解いてお上りになる。

「これが額縁でございますが。」とおくみは英語の新聞で包んだ、かさばつた包みを受取つてこちらへ這入る。

「額縁は駄目だつた。出来たのでいゝのがないから琴平町の製紙屋へ送つて置いた。銀座にないからそつちへ廻つて見たら、そこにもなかつたものだから。それをそつと開けて、中のものを下して下さい。」

青木さんはおくみを出して来た着物とお着擦へになつて、湯敷に行つて額や手を洗つて、二階へお上りになる。

「洗吉、つまらないものを買つて来たからおいでよ。」と、座敷を覗いて仰しやつた。

おくみが開いた包みの中には、書をお書きになる板が十枚ばかりと、黒や赤などの、五色ばかりの粗いスコッチの線の本と一緒に、珍らしいぼん／＼の、紙紐のついた袋が四つと、平つたい小さい壘に這入つたウキスキーかしらと、蠶豆の油で揚げたやうなのを壘に詰めたのと、それだけが這入つてゐた。赤い版行で色づけたぼん／＼の袋は、どこかの縁日の、夜店のカンテラの灯と、ざわ／＼した人の往きかひを思はせた。

おくみは氣を利かせて、お酒のおさかたのお積りらしい蠶豆を小さいお皿に少し分けて洋盃を添へて、ウキスキーやぼん／＼と一緒に一つのお盆に載せて持つて行つた。

青木さんはお讀みになつた御手紙を袋にお收めになつて、

「これは皆が一つづつ取るんだ。」と仰しやつて、ぼん／＼の袋を一つおくみに下さる。

「この豆は甘いね。——洗吉は来ないつて？」と、自分でウキスキーをお注ぎになる。

「洗吉さんは御勉強ですから、御土産があつたら下へ貰つて来てくれつて仰しやつていらつしやいます。」

おくみは珍らしいぼん／＼の袋を指で吊しな

がら言つた。青木さんは、何か厭な事でもおありになつた續きのやうに、浮かない顔をしておいでになる。

「平河さんへはお寄りにならなかつたんでございますか。」とおくみは、さうした青木さんのお顔許を覗ひながら訊いた。

「何だか面倒くさくなつたから止して来た。それしたら丁度留守へおかみさんから手紙が来てゐた。」と、今讀んでおいでになつた手紙を見やりながら仰しやる。

「おかみさんの手でございますね。」と、おくみは上書をこちらから見ながら言つた。

「別に變つた事ぢやございませんか。」

「うゝん。」と首をお振りになつたきりで、ウキスキーの洋盃をお上手になる。おくみは壘を取つて注いでお上げする。

「この豆を食べて御覽なさい。胡椒が少し振つてあつて甘いよ。名古屋の名産だつて。」

「でもこちらでも賣つてゐるのでございますか。」

「銀座に賣つてゐる。」

「ちやんと壘へ這入つてゐるんでございますかね。」

「大分こはれたのが交つてら。」と仰しやりなが

らお摘みになる。

おくみは、おかみさんの手紙は、こゝの代りの婆やでも見當つたといふのではあるまいかと思つたので、訊いて見たが、

「何、何でもない、外の事が一寸書いてあるだけだ。」と仰しやつて、氣をお換へになつたやうに、京橋に近い和泉町の通りで、よその格子の内で上手な清元を誦つてゐたのをしばらく立つて聞いて来たといふお話をなさる。

「私にはよく分らないけれど、三味線も上手な人が弾くと、いゝもんだね。」と仰しやる。

「私がこの前に居りましたお屋敷の奥さまが義太夫が大變にお上手でいらつしやいましたね、——でも滅多にお語りにはなりませんでしたが、とき／＼旦那さまのお歸りの遅い晩などに、私たちの前で語つて聞かせて下さいました事がございました。」

おくみはおかみさんの手紙の事はそれきり氣にもしないで、さういふ話をしかけたけれど、何だかそんな事でなくて、何か言ひたい事があるやうな氣がする。それが堀川とか野崎とかいふものを聞かせて貰つたときの物悲しい心持に似てゐるやうにも思はれる。さういふ義太夫などの事を思ひ出したからであらうか。

おくみは少しく下目になつて袂の先をいぢつてゐる自分に気がついた。  
「ではこれを一洗吉さまにお上げ申してまゐりませうね」と心持顔を赤らめて言つた。

## 十七

その内にちぎに月も六月に遡入つて、いつしか單衣になつた膚にもなづんで来ると、やがて間もなく厭な梅雨の季節が来て、物の微附くやうな、うつたうしい雨が、毎日よく飽きもしずにじめ／＼と降りつゞいた。

「ほんとに何といふしつつかいお天氣でせうね。」

裾をからげて湯殿へ這入つたおくみは、後に立つてゐられる洗吉さんに言ひながら、さつき折角洗つた洗濯物を取り入れたのが、じつとり濡れたまゝで箆にかゝつてゐるのを片寄せ、そここの板の間の真ん中へ雨が漏るのへ、バケツを受けておいて、まはりがとばしりでびた／＼になつてゐるのを新巾で拭いた。

「まあこゝはかうして置けばすみますけど、他のところは漏りでもしたら大變でございますね。」

おくみは念のために方々の押入の中なぞもつ

いでに見て廻つた。

魚屋がお午近くになつてやう／＼廻つて来た。足袋跣足で、頭からずぶ濡れになつて、顔から汗を滴らしながらはん拳を抜けるのを、おくみは水口の敷板の上を下りて、戸口にかゝるしぶきをよけながら、見つくるひをしてお皿を出した。

そこを閉めると餘計に小暗くなつてしまふ板の間に、おくみはどんよりした戸棚から煮物の砂糖の入れものを出したりして、うつたうしくごんで、アルミニウムの手鍋の下の瓦斯を振ぢた。

さうしてゐると青木さんが山羊へ餌をやりにお下りておいでになる。

それもこんな日には大變である。着物をまくつて、穴のあいた毛布を中におかけになつた青木さんは、古い冬帽子を頭に被つて、飼料のバケツを提げて裏へおいでになる。山羊は少しでも泥のついたものなぞは食べないので、八百屋が外へ置いといて行つた青物も、一々雨の叩いた泥を洗つて持つてつておやりにならなければならなかつた。

おくみはその間戸戸ばたへ出て、棲をからげて傘をさしかけてゐてお上げした。山羊はじと

じと水を吸うた樞の板屋根の下に小暗く引つ込んで、人のけはひを戀しがるやうにみい／＼啼いた。

午後おくみが茶の間でつれ／＼の新聞を讀んでゐると、青木さんがつくねんとした音をして下りていらつして、こんな日にはいつそ寝るのもい／＼かなと仰しやりながら、やがて押入から蒲團をお出しになる。

「二階でお寝みになりますのでございますか。では私が持つて上ります。」と、おくみはきさくに毛布と敷蒲團を抱へて先に立つた。

「そのカーテンをすつかり引いといてくれませんか。あゝあ厭な日だ。」と青木さんは、おくみが小さい方の間に敷いた蒲團の、自分で縫模様をお入れになつたシートの上に、毛布を着て長まつていらつして、下りて行きかけるおくみに生欠仲交りにお言ひつけになる。

そちらの晝室の方には今日も縫取りの樞が据ゑられてゐて、暖の布へ、黒と茶色と赤のスコッチの緯で蔓草のやうな模様が縫ひかけてある。近い内にどこかからいふ手工品品の陳列會があるのへ、夏のテイアルかけを十枚ばかり出品するのだと仰しやつて、もうこなたひだからいゝんな柄を圖案して慰み半分に縫つておいでになる

のであつた。

硝子障子の外には、方々の木立が、しと／＼と降る雨の中に青白い霧に煙つてゐる。板戸が少しづつ閉めてあるので、白いカーテンを引くおくみの顔や帯が仄かにその硝子に寫つた。

「もう他に御用はございませんか。」と、おくみは蒲團の裾に手を突いた。

坊ちゃんをはじめ／＼した家の中をそちこちして、一人でつくねんと遊んでゐられたりするけれど、家にばかりゐて窮屈になると、降るのも構はないで、入口の格子戸の外へ出て、雨滴の水溜りを弄りなぞして、着物を濡らしてお上りになる。時には、小さいお壺へ、土間に濡れて立てかけてあるお父さまの洋傘をおさしになつて、小降りになつた雨の中を、よち／＼とお向ひの家まで出て行つたりなさる。

「おくみさん、久男が着物を濡だらけにして、靴は往來に出てゐるがね。——どこかの小さい火を帯で纏つて、びしょ濡れになつて引つ張り廻してゐるんだよ。」

或半後青木さんが二階からさういふのを御覽になつて、早く作れて送入つてくれとお言ひになる。

「まあ、ついさつきまでお座敷でおとなしく遊

んでおいでになつたのでございますよ。」  
おくみは用事を措いて、急いで傘をさして出た。

「坊ちゃん、もうちつとお家で遊んでいらつしやいませよ。さつき叔父さんが拵へて下さいました娘をどうなさいますか？」  
おくみは脱がせた着物を湯殿の盥の中へ入れた。

坊ちゃんは、赤い西洋紙を衫着へ貼つた小さい旗を、疊の合せ目へいくつも立て並べて、叔父さんと二人でお遊びになる。

「おや／＼、あそこの花壇の花がすつかり倒れてしまつたのね。」

二人のさうしてゐられる前の、縁側のしぶきを扶いたおくみは、雨戸のところへ、庭先の中を見入りながら言つた。煙草の木のやうな葉をした、白や赤の花がかはいらしく咲いてゐた何かといふ草花などは、すつかり土の上に伏してしまつて、あさましく雨の降る弾く泥にまぶれてゐる。

「あなた、あそこ縁の下へあんなに水がずんずん這入りますのでございますがどうしたらよろございませうね。」

やがてけうといふ雨の暗くたそがれて行く夕方

を、おくみはすつかりの雨戸を閉めかけたとき、お湯から歸つていらつした青木さんにかう言つた。

「それから書に言はうと思つて忘れてゐたけど、昨夜あたりはもう蚊が二三匹出て寝られなかつたから、今夜はぜひ蚊帳を吊りたいんだがね。」と、青木さんは手拭をかけた竿にかけたがら仰しやる。

「こちらにも昨夜は一、二匹居りましたけど、私は無神経でございますから構はず寝てしまつたのでございますよ。」と、おくみは食卓を抱へて運んだ。

「私は仕方がないから、夜中に押入から風呂敷を出して、それを拂つて寝たんだ。」と仰しやる。

おくみは御飯が済んでから、四疊の押入の下から、穢臭い臭ひのする蚊帳を取り出した。それを包んだ、つぎだらけの大きな風呂敷の右せ目から、鼠のふんが澤山出た。大きな蚊帳と小さいのと二つしかないもので、今夜から洗古さんは青木さんと一緒に、座敷で寝て戴かなければならなかつた。

洗古さんは釣手を茶の間へも附けるために、四隅へ釘を打つて下さる。青木さんは、釘が一

本足らないと言つて、そこらの柱に遊んでゐる釘を、手拭のはしをかぶせて、爪をしておくがくと抜き取つて下させて。おくみは兩方へ灯を送るやうに、電氣を倒さにして持つてゐた。

「今外がびかかると光りましたわ。」

「大分大きな降りになつて来たやうですね。」

寝がけにおくみは長火鉢の火を火消盥へ入れながら、お湯を呑んでゐられる洗吉さんと話した。

洗吉さんはまだこれから一人起きてゐて試験の調べをなさるのであつた。

## 十八

間もなく洗吉さんにはその試験が来た。體格検査の日とすべてで四日の間、市内の刺引が上らない内から藏前の學校までお出かけにならなければならぬので、おくみはそれにゆつくり間に合ふやうに、暗い内から起きて御飯の拵へをした。

はじめの二日はいゝあんばいにお天氣が持たけれど、それからあとまた雨になつた。

「ついでに今日明日だけ降らないといふんですね。何だか變に暗うございますこと。——今日はインキはお持ちにならないのでございま

すかと」

坊ちゃんも青木さんもまだお目ざめにならない、厭さうな雨の色の格子戸に、おくみは襪を手に持つて下り立つた。

「今日ですつかりしくじりさうな氣がして……」

一たい問題はどこで活版に指るのかしら。あれを指る男が、竊と一枚取つといひに私にだけ先に見せてくれるといふんだがな。と、洗吉さんは子供のやうな事を仰しやりながら、帯の間の時計を見て、風呂敷包みを持つた手に洋傘をお開きになる。

「もう何にもお忘れものはありませんか。——どうぞよくやつていらつしやいませよ。」

おくみは、洗吉さんが氣が立つてゐるやうな御容子で、元氣よく出ておいでになる後を見送つた。あんなに心配していらつしやるのだから、お通りになつたらどんなにお嬉しいだらうと、祈るやうな氣がする。

「今日はどうぞございませうね。もう一時間目に半分ばかりたつた時間でございますよ。」

おくみは青木さんと坊ちゃんとの朝御飯のテーブルに附いてゐて、洗吉さんの事を話した。

「どうも危さうだね。」  
青木さんは何でもない事のやうに晴やかに仰

しやりながらお乳をお上りになる。

「でも一心になつていらつしやるんでございませうから。」と、おくみはさう言はれて何だか不安なやうな心持をも見つゝかう言つた。

「洗吉さんはお試験がお済みになるとすぐにあちらへお立ちになるんでございませう。早く歸りたくて仕方がないつて仰しやつていらつしやるんでございませうよ。」

「試験なんか受けるときは全く厭なもんだ。併しあちらへ歸るとまたぢき出て来たくなるんですよ。」

後程、青木さんが外の函から出して来て下さつた郵便物の中に、青山にある養母からおくみへ久々で来た手紙も濡れて交つてゐた。

「どうもすみませんでございました。」と茶の間でうつたうしく髪を結びかけてゐたおくみは、青木さんにお禮を言つて、間もなく根だけを括ると、半ば髪を前に被つたまゝ、油手を拭いて封を切つた。

あれから二度目の手紙を出して、一寸こちらにも代りがないので私もいつを當分しばらくこゝに置いて戴かうかとも思ふがと、相談のやうに言つてやつたのに、何とも返事をくれないから、どうしたのだらうと思つてゐた矢先であ

つた。

手紙には、

「こなひだ内少し気分が勝れなくてぶら／＼してゐたので、つい返事も得う出さなかつたが、お前さんは變りがないさうで何よりと悦んでゐる。その内いつか都合のいゝときに一寸出て来てくれる譯には行かないか。何かの話も手紙では書けないから。併し別にこれといふ用事があるのでもないから急ぎはせぬけれど。」とかう言つただけの事が、假名ばかりの字で長たらしく書かれた末に、

「もう今ではすつかり元氣も出て、いつものやうに暮してゐるから、氣づかはないでくれ。」と書き添へてある。このまゝこゝにゐるゐないに ついては何にも言つてはなかつた。

とにかくおくみには、何だか養母が近頃ひどく氣が弱くなつてゐるやうな容子が、手紙の上に見えるやうな氣がした。おくみはお母を下つた當座一度會ひに行つたのを、たつたこなひだのやうに思つてゐたけれど、もう彼は四月から上にならぬ。

おくみは養母の事を考へると、しまひにはいつも、自分の體が自分のものでないやうな厭な氣がする。

とにかく後で早速見舞の手紙を書いて出して置いて、その内お天氣にでもなつたらまた一度行つて来る事にしようと思つた。

やがておくみは髪を結つてしまつて、後の恰好を合せ鏡に寫した。

道具を片附けて油手を探してゐると、子外の生垣を籠めてしと／＼と青く降る雨に、どこか間近い草の中で、まだ早い蟋蟀が一匹、ひそひそと青白い線を引くやうに鳴いてゐる。その聲を聞くと、この雨でも舞つたら、段々にじりじり暑くなつて来る先觸れのやうにも想はれて、けたるい眞夏の、やりどころのないやうな心持なども物寂しく待設けられた。

おくみはそのやうな聯想から、平河さんへ置いてゐる行李の中の、三枚の浴衣の袖を目の前に並べたりしながら、あの中のものでこの雨に汚點が出るやうなものはないだらうかと氣になつた。

平河さんへもあれからしばらく御ぶさたをしてゐる。おかみさんはまだ代りの人が目附からないと見えて、その後何とも言つておよこしにしない。青木さんはもう自分がこれなりでここに置いて置くものと極めておいでになるやうで、あれなり人をお探しにならうともなさらないやうである。おくみはずつと置いて貰ふのなら貰ふやうに、おかみさんにその事を言つて置かないでは落着かないやうな氣もする。それも、青木さんが、洗吉さんがこゝにおいでになる内におかみさんにさう言つて下さらないと、二人になつてからでは何となく變なやうで極りが悪い。

それともいつそ代りの人が早く出来れば何にも片附いていゝのだがとも思つて見る。おくみは青木さんにはつきりと相談して見たいと思ふけれど、そんな事を自分からは言ひ出し悪い。

おくみはそのやうな纏まらない心持をして洗吉さんのお机に坐つて、思ひ立つたついでに、養母への見舞の手紙を書くと、丁度青木さんが坊ちゃんをつれてお湯へお出かけになるのでついでに出して戴いた。

やがてお午近くになると洗吉さんが歸つていらつした。

「今日はどうぞごさいましたと」と、おくみは顔色を窺ひながら氣にして訊いた。

「もうどうでもいゝから今日は遊んだ。」と、投げけるやうに仰しやりながら、じと／＼に濡れた袴を脱いで衣桁へおかけになる。

「でも随分早くお済みになりましたんでござい

ますね。」

おくみは洗吉さんが口ではあゝ仰しやつてもそんなに情けてもおいでにならないから安心した。洗吉さんは障子のところへごろりとおなりになって、自分で昨日今日取れたと思ふ蠟燭を見積つて不均して見たりしておいでになる。

「まだ御勉強でございますか。朝がお早いのでございませうからもうお寝みにならないと明日ぼんやりなさいますよ。」

おくみはその晩一時を聞いてから、寢間着姿の上にまた帯だけ一寸巻いて六疊へ行つた。

「今ついでに机の拵をすつかり掃除してゐるんです。もう本なんか残らず行李の中へ收めちやつた。」と仰しやつて、笑ひながら押入を開けてお見せになる。

「明日試験を済まして歸つたら直ぐに立たうかしら。」と仰しやりながらせいのなささうな欠伸をなさる。

「まあ、そんなにお歸りになりたいんでございませうか。」

おくみは微笑みながら、そこらの反古を手に拾つた。

「おや、寫眞をお撮りになつたのでございませうか。」

「うん、これは人の寫眞だから。」と言つてお隠しになる。

「ほゞ、ちやんとこちらから見えたんでございませうに。」

## 十九

洗吉さんは試験がお済みになつていつでもお立ちになれる段になると、何だかもつとこちらに居つて見たいやうな氣もすると仰しやつて、どうしようかと迷つておいでになつたが、その内に、外國語學校にゐられるお友達のところへお遊びにいらつして、その方の試験がお済みになつてから、御一緒にお立ちになるやうに約束してお歸りになつた。

「でもこの次の土曜日といへばもう直ちやございませんか。」

おくみはそれにしてもあわたしいといふやうにかう言つた。

「もう、明日、明後日、明々後日……」

洗吉さんはいつも寝がけには、その間がもちぢされるやうに仰しやりながら長火鉢の拵の鑲を弄つたりなさつて、おくみが縫物の針を造り／＼する前に坐つておいでになつたりした。

お立ちになる前の日には、朝、高等學校をお受けになる、おつれの方がいらつして、二人で一緒に市中へお出かけになつた。

家を出てずつと有樂町まで電車で行つて、日比谷から銀座通りへ出て、たうと眞直に須田町まで歩いたと仰しやつて、お國の弟御さんへのお土産に、よく子供が飛ばしてゐる飛行機の玩具や、市内の名所の繪はがきなどを買つて、午後になつて歸つていらつした。

飛行機は坊ちゃんがお望になるとお欲しがりになるからと、竊と手鞆の中へしまつてお置きになる。坊ちゃんは何にもお知りにならないで庭先の日向にこいで、赤い蝶が何をか引いて行くのを見ておいでになる。

洗吉さんはお疲れになつた足を縁側にお伸ばしになつて、買つてお歸りになつた繪はがきを御覽になる。

おくみも側へ行つた。

「あなた、昨日のお寫眞を私に一枚、記念に下さいました。」と、その繪はがきを見つてからおくみは言つた。

「あんな變な寫眞なんか極りが悪いから。」と頭を押へておいでになつたが、  
「では、おくみさんの下されば。」と洗吉さん

は胸を見ながら言ひ悪さうに仰しやる。

「私はもう先に一度撮つたきりで近頃のは一枚もないのでございますよ。もしあつても私のやうなものの寫真なんか仕方がございませんわ。」

「ではつまらないな。」

「え、とおくみは微笑みながら、下目になつて他の事を考へた。

夕方、洗つて干して置いた皆さんの下駄を取り入れに行くとき、洗吉さんは、一人でこつそり裏の草場へ出て、お土産にお買ひになつた飛行機を飛ばしておいでになつた。

「お前、どうしても明日立つ積りかい。」と、夕御飯のときに青木さんがお訊きになる。

「だつてさつきはもう少し歸りたくないやうな事を言つてたからさ。——それならそれで己の都合があるから。」

洗吉さんは先に御飯をお済ましになつて、子供かなぞのやうに、自分の頸を抱へて巾着の根に纏んでおいでになる。

「あの子のお金を借りて使つたから拵へて来ておきなぐちや。」

洗吉さんがやがてはがきを出しにおいでになると、後で青木さんが仰しやつた。

「澤山でございますか。」とおくみは少々なら自分でも持つてゐるからと思ひながらかう言つたが、

「何、取りに行けば貰へるのがあるんだから。」とお言ひになつて、やがて下町の方へ出ておいでになつた。

二十

洗吉さんは新橋までお兄さまに見送つてお貰ひになつて翌の九時の急行でお立ちになつた。

「いつもいらつしやつた方がいらつしやらなくなりましてせんですか、何だか御飯のときが變でございますね。」

翌の朝坊ちゃんと三人で麵總と山羊乳とのテーブルに着いたとき、おくみは坊ちゃんのためにバタのナイフを取りながら、急に帽子が違つて来たやうに思ひながらかう言つた。

「もう七時半は過ぎたらうな。」と、青木さんは鏡の前の置時計の方を御覧になる。

「あれは昨夜から止つてをりますのでございませう。もう彼は八時ぐらゐでございませうね。」

「一度今八時十分でございます。今朝は麵總を取りに行つたりいたしましたから、大分遅くなりました。」

「ではあの子はもうちゃんと家へ着いてるな。」

「十時間以上でございますから随分お暇なさいましたでせうね。」と、おくみは青木さんに二度目の乳を注いだ。

青木さんは、汽車と言へば西洋ではそこちと長い汽車を乗り通してうんざりしたといふお話をなされる。

「その上に、ちがつた國へ進入ると乗合の人とも一寸も話が通じないんだから拙らない事でもどつてばかりゐてなもんだ。」

かう言つて麵總をお裂りになる。

「もうそろそろ暑くなつて来るな。今はまだいけれど、——それにこのあたりは木が多いから蝉が澤山ゐるんでね。」

食事が進んでから、青木さんはしばらくそのまゝ椅子におかけになつて、垣の向うの高い木立の方に目をおやりになりながら、煙草をお上りになる。

おくみはテーブルの上を片附けて、濡らして持つて来た手拭で、バタの光つてゐる坊ちゃん

の手先を拭いてお上げしてゐた。

「婢はお嫌ひでございますか。」と微笑みながら訊くと、

「だつてあれが浴びるやうに啼き立てると、ただでも暑い日光が油でじり／＼滯え立つやうな気がしていかにも暑くなるしいからね。」

青木さんは、もう今からさういふ眞夏の晝をお厭ひになるやうな顔をしてお言ひになる。

「さう言つてる内にもう直ぐでございますね。」

おくみは坊ちゃんを壁の上に抱へ上げながらかう言つたが、青木さんは、他に何か不愉快な事を思ひ出しでもなすつたのか、それには返事をなさらないで、指の爪先を見て考へ入つたやうにしておいでになる。

おくみもそれぎりで話を杜切つたまゝ、すぐ前の西洋樫の木の間に、蜘蛛がぢつとまとまつてゐるのを、見るともない目に見入つてゐた。

外には赤味を帯びたやうな日影が、段々と朝の氣を消して滅つて行くやうに、すべての青いものの上に射し渡つてゐる。蜘蛛の巣の絲は光りに紛れて見えないので、ちつとしてゐる小さい蜘蛛は、空間に喰つ附けられてゐるやうに動かない。土の上には濃い木の蔭はすかひに寫つてゐる。しばらく雨が續いた間に、生垣の下

葉が長く伸びて覗いてゐる。

「おくみさん、新聞はまだ來ませんか。」と、青木さんは炭皿へ煙草をお消しになりながら仰しやる。

「いゝえ、もうさつきまゐつて居ります。うつかりして居りました。」

おくみは氣が附いたやうにテイブルの傍を離れてあちらへ行つた。

坊ちゃんはその隙子に缺つた硝子へ息を吹きかけて、指でいたづら書きをしておいでになる。

「今日はもうこの月も二十二日。」  
おくみは持つて行く新聞のはしを壁に見ながらひとり心にかう思つた。

やがておくみはそこいらへ雑巾がけをしたついでに、洗吉さんが使つておいでになつた六疊の押入の半分が、上下空いたのをきれいに拭いて、その儘あつてもいゝと思ふ机だけを置いて、あとの要らない本棚や、その外の洗吉さんのものを差向下の段へそつくりしまつて置いた。

「おくみさん、この晝はこゝへ懸けようか。——  
かうするとちゃんと晝らしくなつたでせう？」  
青木さんは昨夜歸りに取つておいでになつた櫃の廣い金色の額縁へ、この間敷いた晝を入

れて下すつたのであつた。

「こゝへかう持つてくより外仕方がないな。」と、押入の左手の、半間幅の中塗の壁へあてがつて、恰好を見ておいでになる。額縁は硝太目の赤い編の打紙で吊すやうになつてゐる。

「まあ。——このお部屋がすつかり變つてまゐりましたわ。」

おくみはいそ／＼と襷をはづしてそこへ坐つた。

「あその梯子段の上の戸棚に鉋があるから取つて來て頂戴。」

青木さんは袂から眞鍮の螺旋釘をお出しになつて、鴨居の下へお打ちになる。

「かうして見ますと晝がまた引き立つて來たやうな氣がいたしますね。」と、おくみは嬉しさうに晝面を離れて坐り直した。

「さう言へばいくらかちがふかも知れない。」  
青木さんも側へ來てお坐りになつて、少くちつと見入つておいでになる。

「まあ、あの下へ寫つて居ります色が好うございますこと。」

「そんなに好きですか。」  
「えゝ。」と、おくみは目もとを輝かして言つた。

「この前に思つた程よくもないけれど、これで

もどうにか着にだけはなつてゐる。——紐をもつと短くしようかね。——一寸マツチを。——着に氣を取られてゐたおくみは、青木さんが指の間に巻煙草を持つていらつしやるのに氣が附かなかつた。

一ついであの安つばい机もどこかへ仕舞ひ込むといふね。代りにいゝのを出して上げるから。——そして、この邊をちやんとして、こゝをおくみさんの部屋にするといふ。

「ほゝゝ、大變でございませぬ。」

おくみは軽くさう言つて微笑みながら、あちらの押入から出して来た洗吉さんのお蒲團を縁先の日向へ披げて、上蒲團の襷當の汚れてゐるのを解きはづしてゐたが、後に裏で一二次洗ひものをして、それを竿へかけとて手を拭いて上へ上ると、青木さんはいつの間にか、二階に焼物などを載せてあつた檜材の小机を、先の机のあとへお据ゑになつた。それへこたひだ肉から巻取りをなすつた麻の地の机かけがかゝつて、青い色の小さい花挿にナスタシヤムの花が二輪さして載せてある。

その机かけは、たま〜この間、十枚ばかりの中でおくみが一番好きだと言つた分、縁で赤い鳥を上下へ二寸ばかりの幅の中へ縫ひ並べ

た、女のものに似合はしいい柄の飾りものである。鳥はいろ／＼の羽をして一つづきに棲つてゐる。

「何だかすつかりいゝお部屋になつたこと。」

おくみは一人かう思ひながら、やつと一通り朝の用事のすんだ襟をかき合せて、ほつとしたやうにまた簾の前に坐つて、大理石に寫つた五色のだんだらの紺の色をなつかしんだ。

外の方で、さつきからお向ひのお子さんと違つていらつしやる坊ちゃんの声がする。障子の方を見ると青葉を越えてみなぎつた黄色い日影は、かうしたきれいに取り片づいた部屋の疊のはしまで射し込んでゐる。

おくみはすつとした氣分をして、留櫛の髪を掻き直したりしながら、しばらくそのまゝ坐つて息休めをしてゐた。

縁先の蒲團の上の日向を、蜂が一匹まひ／＼してゐる。

と、二階へ上つておいでになるのだとばかり思つてゐた青木さんが、庭先からぶら／＼上つていらつした。

「こゝがちやんとなつたでせう？」と仰しやりながら、机の側へこんで、赤い小鳥の圖案のはしに下つてゐる縁肩をお取りになる。

「ほんつとに見ちがへるやうなお部屋になりまして。」

おくみは微笑みながら隣へ行つて、膝を突いた。

「ではついでに四疊にあるおくみさんのものをみんなこつちへ持つていらつしやいな。行李などは私が抱へて上げるから。」

「いゝえ、私のものはあそこで澤山でございませぬ。」

「でもすつかりこゝへ持つて来て置かなければ自分の部屋らしくないぢやありませんか？」

青木さんは立ちかゝつてゐて仰しやる。おくみはさつきは御冗談のやうに聞いてゐたけれど、やつぱり自分のためにこゝをこんなにして下さつたのであつた。

「まあ、私がこのお部屋を戴きましてございませぬか。」

おくみは何だか極りが悪いやうにもぢ／＼しつて言つた。

「これからこゝでお針でも何でもするといゝ。女があたりを綺麗にして物なんか縫つてゐるのはいゝものだ。」

おくみは顔を赤らめて目を伏せてゐた。青木さんはおくみに鉄を持つて來させて、縁

先で爪をおきりになる。

「そちらは私が取つてお上げ申しませう。」と、おくみは日向の堺へ出た。

「何大丈夫。袂がよく切れるから。」と左手でお使ひになる。

「もう日向は暑いな。」

「また蜂がまゐりました。」と、おくみはまぶしい日向を見た。

「どなたかおいでになりましたやうでございませぬ。」

おくみはやがてかう言つて上り口へ出て行つた。

おくみは折角だからと思つて、あとで四疊に置いてある自分のものをすつかりこちらの押入へ運んで、ついでに青木さんや坊ちゃんのものの這入つた行李も、ゆつたり分けかへた。そして、左側の上の方を束けて、新聞を敷いて、そこへ型ばかりの化粧具や、ちよい／＼とした自分の手廻りのものを収めた。

坊ちゃんがそこへしよんぼりして歸つていらつして、指をくはへて、何かくれとおねだりになる。

「もうちきですから一寸待つて下さいませよ。こゝちやんとして置きませんとね。――お向ひ

のお嬢さまと何をしてお遊びになりましたと。――おくみはかう言つて紛らしながら、干してある浴衣を側へやつて裏返して、もう一度疊の上へ帯を當てた。

何だか汗ばんだやうに暑くろしくなつたおくみは、茶の間の戸棚を開けて、買つときのお菓子

の饅を出すのに、櫛から来るそよ／＼した風が、足のあたりに小嫌しいやうであつた。

「それからあとでお客さまへ御飯を出すのに何を捧へませうね。」

おくみは坊ちゃんを相手に獨り言を言ひながら、臺所・済の胸かけをかけて、襷を取つた。

二階には、洋服を召していらつした、秋本さんといふ畫家の方が、青木さんと話しておいでになる。久し振でおいでになつた方らしかつた。

## 二十一

「ね、おくみさん。何なら簡単にそばでも取つて済ましていいんだだけだね。」

やがて青木さんは、おくみがごたく／＼しなげればならないのを氣にして下すつたやうに、中途で下りていらつして臺所をお覗きになつた。

「もうこれだけいたしましたらいゝんでございませうけど、あんまり何にもございませぬから、

一寸あたこのおすし、でもさう言つてまゐりませうか。――でも不味いおすしでございませぬね。」

勝手もとを取り散らしてゐるおくみは、前垂のはしで湖麻を煎つた炮烙を取り下して、考へ違ふやうにから言つた。

「何、それだけあれば澤山だ。あの男はさういふさつぱりしたものを喜ぶんだから丁度いゝ。」

と、青木さんはさうさなく仰しやる。しまひに御灸をお櫃に取つて、襷に汗を見

たおくみは、支度した皿のものをお盆に載せて、そろ／＼座敷のテーブルに運んで、袂の先を御へて、すべてのものを恰好よく並べた。

たゞあり合せのものでいゝと仰しやつたので御馳走はほんの小鉢が十四だけあつたものを焼いて、生姜の汁をさした三ばい酢に漬けたのと、

しんぎくの湖麻汚しのおひたしと、たつたそれだけしかないものであつた。それを色のいゝ、すつきりした形の深皿を二枚畫室から借りたのへ

二つに入れて、小皿を四つ重ねて別の箸と一緒に眞ん中へ置いた。さつきテーブルかけを取り換へて、洗濯したばかりの、とき色の筋の這入つた氣持のよい布をかけて、片はしへ、鏡の前に据ゑてあつた、西洋藥のはつとした赤い花の壺

を備つて置いたので、テーブルの上の色取りだけは綺麗であつた。

「青木さまと、おくみは椅子段を上つて、こちらの間からお呼びした。

「一寸下を御馳なすつて下さいませんか。」と、おくみは自分の拵へが気がかりなやうに小さい聲で頼んだ。

「いゝですよ。いつもの通りでいゝんだから。」と、青木さんはたゞさう仰しやつて、やがて二人で何をかお笑ひになりながら下りていらつした。

「何にもお構ひをいたしませんのでございますから……と、おくみは極り悪く挨拶をして、後から、いつもの器物の、切足布の個煮を小さいものに分けたのと、西瓜のお漬物とを持つて来てお盆から移した。

「方々にいゝ蔭屋があるんだね。と、六疊の方の縁側から歸つていらつした、書などで見る西洋の方のやうに、長い髪をお分けになつたお客さまは、菊色あふつくりしたネクタイをお直しになりながら椅子におつきになる。

「誰だからわざと御馳走をしなかつたんだよ。」と、青木さんは御主人役にお看をおよそひになりながら仰しやる。

「その代り夕方にはどこかで珍らしいものを食べさせるよ。」

「これで精備だ。あちらでは馬蹄の中からお釘が出るやうな、青木さんのお料理でもおとなしく戴いたんだものね。」

「お客さまは快活にお笑ひになりながら、おくみの注いだ葡萄酒の洋盞をお上げになる。

「さう言へばあの釘はまだ鳩小屋の中に這入つてるだらうかね。——おくみさん、フラースではね、この人と二人で、一夏フロモンビルといふ田舎で一緒に自炊をした事があるんだよ。」

と、青木さんはおくみがこちらへ廻つて注ぐ手元の日をお置きになりながら、微笑みつゝお言ひになる。

「丁度二月ばかりあそこゐたんだね。」

「燕が降るやうに澤山ゐた。」

「お客さまはかう言つて、ハンケチで眼鏡の曇りをお拭きになる。ついなひだ西洋からお歸りになつたばかりなのだ」と青木さんが仰しやる。

「まあ、さやうでございすか。と、おくみはただつゝまじやかにさう言つて、少く椅子のはしにかけてお給仕についてゐた。

「自炊といへばずるぶん色んな事があつたね。」

「第一妙なものはかり食べさせられてこり／＼した。併しもうあんなことはしたくも出来ないね。」と、お客さまは快活にお笑ひになりながら暫著をお割りになる。

「だつて君はたゞはたでませつ返すだけの役だからのんきだつたけど、日に二度づつさういふ料理をする身になつて見たまへな。」

「でも買物や下働きはみんな僕一人がやつてたんだもの。」

「あんな下働きならだれでもするよ。」

青木さんは洋盞を干してお受けになる。

「ふゝゝ、あれは人參だつたかね。君がスープを拵へて待つてる間に、僕が急いで買ひに行つたまではないが、歸りにジャシーの叫ぶたひがゐたのへ附いて廻つてゐる内に、買った物をどこかへ忘れて素手で歸つて来た事かあつた。」

「そんな事は所つ申だ。」

「そのとき君は一人で待ちくたぶれて、ベッドに這入つて午寝をしてゐたから、僕も眞夜をして寝ちやつたよ。」

「それでたま／＼手拭をしたつつもりで得意になつて來るとあんなかたつむり何かだろ。」

この人がね、おくみさん、或日珍らしく午寝もしないで、下の運河のふちで一生懸命にかたつむり

を取つて飽つてゐるんでせう？ 暑い日がかんかんしてゐる中でね。こちらはあれを取つて何にするんだらうと思つて窓からちつと見てみると、しまひに、おい、見る、ケ方の御氣遣だよつて、汗だらけになつて下からハンケチ包みを持ち廻すんだ。——そんなところどころがつてゐるやうな斑點のある、たつむりはいくら秋本でも食はれやしないものを。」

「ふふ、それを黙つて見てゐるんだから君の方が餘つ程ひどいよ。」

「おくみも一緒に笑ひながら、お客さまにおひたしをよそつてお上げした。」

「これはもうこれだけですか？」と青木さんがお訊きになる。

「いゝえ、もう少しは残つて居ります。——ぼつちりしか持つてまゐりませんでしたから……」

「おくみはお客さまがそれを珍らしさうに澤山召し上つて下さるのを悦びながら臺所へ取りに行つた。」

「坊ちゃん、お腹がおすきになつたらうと思つて、胡麻鹽を振つたおむすびを二つばかり拵へてお上げして置いたのを、鼻の先に御飯粒をお附けになつて、繰先で足を投げ出して一人で食べておいでになる。」

「ほんとに何にも召し上げるものがございませんで……」

「おくみはこちらへ来てお二人の御飯をよそつた。」

「そんな事でたうとあの黄色い馬車を賣つてしまつたんだよ。」

「お客さまは何かお話のつゞきをなすつておいでになる。」

「どうしてまた、さういふひどい怪我なんかしたんだらう。あのよく窓から赤いハンケチを振つたりした、一寸雀斑のある女だらう？」

「あの子のもう一つ下の妹さ。」

「それでは何とか言つた妻せた子かい？——可哀想に。」

「こなひだあちらを立つ前に、側々の別居してゐるお母さんのところへも行つといんだがね。青木さんからはずぬぶんしばらくおたよりがありませんが、どうしていらつしやいますでせうなんて、入齒の頬を押へながら訊いてゐた。やは例の大きな銀の十字架をこんなところへかけね。」

「僕はある人には一番多く厄介になつただけだね。」

「お二人はさつきとは異つたところの事を話し

ておいでになるやうであつた。

「食事がおすみになると、おくみはテーブルの上をきれいに片づけて、番茶の匂ひのいゝのを抱じて持つて行つた。」

「ね、かういふのを一つ女の帯に應用したらどうだらう。」

「面白いかも知れないね。」

「第一にこの方に一筋拵へて上げて、試しに結んで見て貰ふといふ。」

「お客さまはおくみを意味してかう仰しやりますが、青木さんがいろ／＼持つて来てお見せになつてゐる、こなひだ内の籠取りの最後の一枚を御自身の腕にかざして御覧になる。」

「おくみさん、こんなので帯を拵へたら結んで見る氣になりますか？——と青木さんは御元氣にお訊きになる。」

「さうでございますね。——でも地はどんなものをお使ひになるのでございますか？」

「おくみは入さまの前でそんな批評がましい口を利くのを極り悪がるやうに、半ばためらひながら言つた。」

「さうだね、——地は今一寸考へが附かないけれど、とにかく言つたやうな柄を、こんな風に縫取つて帯にしたらどうだといふのさ。」

「それはお召しなさるかたがお召しになりましたら、ずぶん髪つてゐて面白うございますでせうね。ですからどつ程はでな方でございませんとらつりませんでございませう？」

おくみはお茶を注いでお二人の前に配つた。「併しそれにはまづ着物から選んで来なければこれまでの着物では釣り合はないだらう。」とお客さまは再び順に返しながら仰しやる。

おくみは呉服屋の店先にでも立つたやうに、傍でそれを覗いてゐた。

青木さんは先にお茶をお上りになる。

「これはやはり先からのお茶？」

「いえ、今朝程取つてまゐりましたのでございます。」

おくみは自分の袂の一寸觸つた、テイブルの上の花の影を直しながらかう言つた。

「これなどは大分變つて二面白いですね。」

お客さまは、金色の黒く煉げた、昔のあついたのきれや、柿色のごろ組などを使つた圖案のを抜き出してお賞めになる。

「その薄茶のもう一つ下のを、御覽——その前、花の影などは僕の手袋の革を切つて染めたんだよ。」と、青木さんは笑つておいでになる。

「この麻絲をこんなに並べたところなどはオースタリヤあたりのベザント、アートにでもありさうだね。」

おくみはたこらに一匹棲つてゐた蠅を手先で追うて、そこ／＼にこちらへ下つた。

これから自分たちの御成にするのだけれど、お客さまのおかすが何にもないので、また例の唐紙のそちら側では、お客さまが西洋の女の着物の意匠の事などを話しておいでになる。

「だからこちらの着物でも、帯だの襦だのといふものは單獨に買はないで、自分の體に附けるだけのすべてのものを統一して、自分の特有の意匠をすべて見たら面白いだらうがね。」

「それでは一そろひづつが、纏つた一つの創作なんだね。」

「さうしなければ自分の着物といふ氣がしない客だがね。色や柄が自分自身の調子にしくり合ふ點から言つてもそれがあたりまへだもの。」

「併し君の指圖で君の好きな色ばかりを着せられたりすると、大分變つた畫が歩くわけになるね。」と、青木さんが間を置いて仰しやる。

「でも一々畫家へ足を運ぶばかりでも大變だね。」

お二人はお笑ひになる。

「併しそれにはまづ着物を追うて揃らないものにずるぶん手かずや金をかけて着てるんだもの。」

その内にいつしかまたあちらの畫のお話になつたやうである。お客さまは、どこかで天幕の下で鴉鳥を寫生したといふやうな事をお話になる。こちらで御氣を戴いてゐるおくみには、そのやうな事が聞くともなしに聞えた。

「おくみさん、あそこにあるワイシャツが二枚とも汚れてるんだが、いつかの分はまだ出来て来ないの？」

後室裏口で生姜の匂つたのを土の中に入れてゐると、青木さんがいらつしてお訊きになる。

「これから御一緒に御出かけでございませうか？」

おくみはこちらへ歸つて、洗濯したばかりのワイシャツへ袖口のぼたんなどを附け換へた。

「一では夕御飯は一緒に外ですまして来るからね。早く歸りますよ。」

青木さんはお出かけのときに小森でお言ひになる。

「お客さまは今晚お泊りになりますのでございませうか。」

「いゝや。なぜ？」

「それならようございませうけれど、お泊りになるのですと、お蒲團が……」

「うゝん、あれは見賞のところにお泊つてゐるんだから。」

おくみはたゞきへ下りてお二人のお靴を拭いた。

## 二十二

「もうその外には御用はございませんですね。」  
青木さんにお留守をして戴いて、これからお湯にやらせて戴くおくみは、もう臺所の方を閉めたので、お出しになるはがきを持つてこちらの方から下りた。

坊ちゃん、きつきはまた少し齒が痛くてむづかつていらつしたのが、やつとおまぎれになつて、六畳で青木さんをお相手に待つてゐて下さるのであつた。

「今晚はお向ひの方で蓄音機の聲がいたしますよ。」

おくみは忘れたものを取りに上つて、押入を開けながら言つた。

「外は眞つ暗でせうね？」

青木さんは電氣を低くして、厚い晝の御本を膝に開いておいでになる。

「でもたゞあその間だけでございませうから。」  
おくみは自動電話のある角まで暗い通りを行つて、八百屋の前ではがきを入れた。

その貧しい店先へ買ひものに来てゐる女の人、は、もう村の人かなぞのやうな型の浴衣を着て、空色の纏子の帯を結んでゐた。家へ廻つて来る若い男が、これから市場へ買ひ出しに行くのだと見えて、店先へ下した荷車の下へ這入つて、心棒へ何をか括りつけてゐた。その男が土の上に置いてゐるカンテラに、赤く長く擦いでゐる火焔の色も、もうそろそろ濡衣がけになる頃の夜らしく、暑くらしい色に見えた。

そこからお湯屋の前へ行くまでには、一寸した小さい店が二三軒飛び／＼にある。その一つのいろんな煎餅を賣るきれいな店の前には、青い瓦斯が晝のやうに芽えてゐる中に、硝子函の上に飾つた、鉢植の赤と白との石竹の花が、濺つた灯を映うてゐるやうに目立つて見えた。

あたりには女の子などが二三人で、明るくと

闇との塊をかけ廻つてきわいでゐた。

おくみは歸りには菟物屋へ寄つて、言ひ附かつたペン先を買つた。がた／＼の袖斗から出して来た小さい名刺入の函に残つてゐる乏しいペン先は、半分は錆び附いたやうになつてゐた。

おくみはついでに毛すぢと壺入の書みがきを買つた。

かうしたものをきびれた町の夜の灯も、おくみには何とはなく、自分にしたしい或物の合まれているやうな、小なつかしい晩であつた。

今日は髪を結び直したかつたのに、午後またちがつたお客さまがあつたので、どきどきして結ふ間がなかつたけれど、それでも、お湯に這入つてのんびりした気分には、大分うるさいと思つてゐた髪のことも忘れて、たゞしつともした平和な心持の下に、よその小家の瓦斯燈の文字などさへなつかしまれるやうな自分を見つ

つ、また、もとの自動電話の赤い灯に沿つて曲つた。

暗い通りを、よその女の人が、昔中の子供に母人らしい何事かを言ひながらすれちがつて行く。右手の杉垣の門口に、女髪結の看板のかかつてゐる家の竹窓には、すだれを通して男の浴衣が見えて、小さい男の子の聲で本をさら

てゐるが聞えた。

おくみは歸ると門口をかけて、内へ這入つた。さつきは歸つたら何をか青木さんに言はうとした事があつたのに、それが何であつたか分らなかつた。

青木さんが机に倚つて、さつきの本を見ておいでになる側に、坊ちゃんはず蒲團を枕にさせてお貰ひになつて、すやくとうたゝ寝をしておいでになる。

「たうと寝てしまつたよ。」

「お世話までございました。只今ぢき蚊帳を吊つてお上げ申します。」

おくみは湯上りの顔にうつすら白粉をつけてゐた。

「是へ敷がとまつてる。」と仰しやつて、青木さんほ手を伸してお叩きになる。

「こんな血を吸つてるよ。」

「まあ。」

おくみは側へ行つて坊ちゃんの足の方を包んで置いてお上げする。

「今日は午後中、馬車ごつこだと仰しやつて、大きな函を引かしていらつしやいましたものですか、かつかりなさいましたのでございませよ。」

おくみは急いで押入を開けて蒲團を出した。

「さ、寝間着を着換へるんだよ。」と青木さんが仰しやる。

「ほゝゝゝ、お手をそんなところへお通しなさいませよ……」

おくみは、寝ぼけてむづかしい顔をしていらつしやる坊ちゃんを抱へるやうにして、やつと蒲團の上へお寝かせした。

「まあ、重たい坊ちゃん。——おや、お枕がございませんでしたね。」

青木さんも手傳つて下すつて、一間へ一ばいに吊る蚊帳の、向うのはしを吊つて下さる。

「どうも懼りさまでございます。」と、おくみは蚊帳の中へ這入つて、まはりの裾をひろげて廻つた。

「まだ今晚はずるぶん早いのでございますね。」

「ネがておくみは蚊帳のはしに障つた髪形の形を押しながら、こちらの蔭から言つた。

青木さんは敷物を縁先へ出して、灯を肩に浴びて坐つておいでになる。

「こゝは木などが多い割合に蚊が少いので餘つ程凌ぎいゝんだけ。」と仰しやる。

「さうのやうでございますね。ところによりますと、このころでも、もうこんなに坐つてな

ぞゐられないやうなところがございませよ。」

「でもずつと暑くなつたらこんなことでは濟まないけれど、まあ、割にあたい方だらうね。——その代り小さい蟲が澤山灯に集つて来る。今でも少しはまひゝして居るでせう？」

おくみは蚊帳の側をくゞつてそちらの方へ坊ちゃんの着物を取りに行つた。

机の上の方へ引いて置いた灯は、暗い庭先の一部分に光りを擴げてゐる。右手の、障の中に入れてゐる檜の木が、夜の色より黒く沈んでゐる。

「もうみゝずが鳴くやうになりましてございませぬ。」と、おくみは檜の際に膝を突いた。ちつとしてゐると、そこの暗い土の上に水のやうな色でも擴がるやうに、じいゝといふ燐のやうな聲が立ち混みてゐる。

「何だか少し蒸し暑いやうな晩だね。——もう著音機も止んだのかしら。」

青木さんはかう仰しやりながら、何をか他の事を考へておいでになるやうに、土の上の一つところを見入つておいでになる。

「今日いらつしやいましたお客さまは、いつか、晩にいらつしやいました方でございますか、私はずつかりお見忘れ申して居りますよ。」

して、どなた様でございますか。お訊き申しましたのでございますよ。」

おくみはお湯できれいになつた指先を見つめながらう言つた。

坊ちゃんのお召物が、裾の方に泥が少しついてゐるので、縁先へ出て落して、こちらの衣箱にかけて置く。通りすがりに蚊帳が邪魔になるので、机の方の一隅はづして置いた。

おくみはそれから夕方に筆から下した青木さんの膚着のシャツを、ほかのものと一緒に四疊へ置いたのを思ひ出した。

盥の中でそのシャツのボタンが一つ取れたのを、物置のこちら側の出張つた臺石の上に置いていたので、蠟燭を點して、臺所口を開けて探しに行つた。

裏の方は眞つ暗である。そこらの軒下に立ってかけてある鹽や炭俵などが、蠟燭のろうとした黄色い灯の中にしんかんとして見える。ぼたんは洗濯石輪の小さく減つたのと一緒に、置いたところにあつた。

蠟燭の蠟がぼた／＼と土の上に滴る。

檻の山羊が灯を懸ひてみい／＼鳴く。たゞ一色に黒い闇とばかり見えた向うの方も、よく見れば栗の木も山羊の檻も灰かに黒ずんだ形が見

分けられた。

おくみは茶の間の灯の下でぼたんを付けて白い縁のはしを縁切齒で切つた。一人縁先の方においでになるのだと思つてゐた青木さんが、入口の格子戸の方から上つておいでになる。表の郵便筒を見にいらつしたのらしい。

と、一洗吉からはがきが来た。」と仰しやつて、灯のところへおくみになる。

お着きになつたお知らせであつた。青木さんはお讀みになつておくみの前へお出しになる。「おくみさんによろしく。」としまひに書いてあつた。

「まあ、あなたのお手とそつくりのやうでございますね。」

「さうかしら。變な字だ。」と仰しやりながら、一緒に郵便筒の中に這入つてゐた何かの雜誌の帯封を切つて、ところ／＼を御覽になる。

おくみは縁巻のはしを巻いて小箱へ入れた。「一昨日の日附になつて居りますのに大變遅く着きましたものでございますね。——消印がかすれてゐて分りませんけど。」

「何だか今日は私もがつかりしたやうな気がする。——でもまだ寝るにも早いし。」

青木さんは所在なさうに仰しやつて、長火鉢のお湯を土瓶へおさしになる。

「もう、出がらしてございますから。」とおくみはそれを空けに立つた。

「今日の人が来るといつでも座が長いんでね。尤も私だつて人のところへ行くとつい長くなる癖があるんだが。——その代りめつたに出かけないし、行くところも餘りないんだけど……先の婆や人が来るのが大嫌ひでね。」

「なぜでございますか。」

「なぜといふこともないだらうけど、人が来てゐるといふことで、變に氣がづまるやうな心持がするのだらうね。」

「でもこちらの方とは別でございますのにね。」

「何かが少し變つた婆さんだつたから……」

「お湯が少しぬるうございましたでせう？」と、おくみは鐵瓶の下の火をかき探した。

「そろ／＼あちらへお床を延べて置きましたも宜しうございますか？」

### 二十三

青木さんは後程お寝みになるときに、これから追々足へかける蒲團が重くろしくなつて不愉快だと、蚊帳の中からお言ひになる。

「暑くなりますとほんとに厭でございませぬ。床に這入りましてからいつまでも寝附かれませんくらゐ苦しい事はございせんわ。」

おくみは蚊帳の裾に膝を突いてかう言ひながら、蚊の後れ毛を掻き上げて、お厭ぎになつたシャツをさつきの洗つたばかりのと取りかへて置いた。

「もう電氣を消しても宜しうございませぬか。——ではお寝みなさいまし。」

おくみは界の襖を閉めてこちらへ来た。

それからしばらく今日のお小遣をつけたりした後に、そこ／＼に茶の間の灯を消した。もういつしか十二時を廻つてゐた。

さしむき、九月ごろまでしまつて置くのに洗濯した、自分のこの間からのネルの着物を、さつきから簾の下に敷いて押しを切つてゐたのを、ついでに寢床の下へ入れて寝ようと思つて、こちらへ持つて来る。

自分の這入る蚊帳を覗くと、坊ちゃんはお暑いのだと見えて、襦をはづして横の方へおあばれになつて、お腎をすつかり出しておいでにならぬ。おくみは寝間着を着換へて、赤い扱帯を結ぶと、お帯を巻んで置いて蚊帳に這入つた。

「さ、ちやんとお社をなさいまし。まあ、お額に

じつとり汗をおかきになつて……」  
おくみは獨り言のやうに口の内でかう言ひながら、自分の襟の先で額口を拭いてお上げする。

何だかいつになく少しむし／＼するやうな氣がするけれど、また雨にでもなるとではあるまいか。

おくみはさつききの着物を敷蒲團の下へ入れると、再び蚊帳を出て、押入から半紙を出して来て、床の上で枕紙を取り換へた。く／＼り絲を結ぶ新らしい白い紙の上に、電氣が蚊帳の影を寫してうす青く射した。

おくみは、やがて中からその電氣のかきを引きよせて灯を採ぢた。

暗がりて坊ちゃんを少し上の方へ引き上げてお腹のあたりまで蒲團をかけてお上げして、自分も横になつたが、さうした蒲團の厚ぼつたいやうな手觸りに、さつき青木さんがお愛みがけに仰しやつた事が思ひ出された。全くかういふ冬のまゝの蒲團では、これから先は暑くしくお困りになるだらうと思はれる。

さき程はついそこまで考へなかつたけれど、青木さんのお召しになるのを一枚だけでいゝから、薄い夏蒲團を拵へてお上げ申せばさうさは

ないのだがと思ふ。去年もあの儘でお済ましになつたのだらうけれど、何だかこのやうな事にも、誰とて氣をつけてお上げ申す人がなくていらつしたのが、お氣の毒なやうな氣がする。

おくみは暗い蚊帳の中でしばらく目を開いて考へた。

さう云へば青木さんにはこれからのお召し物も御不慮の一枚しかおありにならぬ。外へ召してお出ましになるのには、襦の東京織のいゝのが一枚と、それから白緋の帷子の一寸したのがあるけれど、あとはお浴衣が二枚ばかりある外に、今召しておいでになるたて、じまの木綿の一枚だけで、洗ひ代への不慮着が一枚もおありにならぬのである。

もう一つのかすりは、もうするぶんいたんでゐて、ちよい／＼つぎも當つてゐるので、門口へも着てお出ましになれない。せめてもう一枚だけでもおありにならないと御不自由である。これも去年はあのまゝでお通しになつたのであらうか。

つい一寸した久留米織でもいゝから、一枚お拵へになるといゝけれど、かういふ事は何だか私が言ふのは言ひ悪い。お蒲團の方ならば、さつき御自分でもあゝ言つておいでになつたのだ

から、一應さう言つた上、こちらでどうか都合をして拵へてお上げ申しても變ではないやうな氣がする。

夏だから柄も少なくていいし、布も三巾と四巾とでいいであらう。よく裏には水色の麻などがつけてある。あれだと一圓も出したら買へるであらう。綿は一枚どほりにして八百目もあれば澤山である。百目十二錢としてざつと一圓に、それから表は涼しさうなメレンスの柄のいゝのをでもさがして來れば何かある。表も裏にするとしたら、先のお邸でお子さま方のお拵へになつたやうな更紗型のもよかつた。それなら裏の麻も白いのがよくうつる。どちらも一反つづ買へば、やつぱり當り前に四巾に五巾の大きさになければ布が無駄になる。

それでもいくらく安く積つても、すつかりで三圓五六十錢はかゝるから、そんなに譯なくも出來ないけれど。

その内、平河さんのおかみさんでもおいでになつたら、御相談をして見ようかしらと思ふ。平河さんへもしばらくごぶさたをしてゐる。どうしてと思つておいでになるであらう。

おくみは何だか目がさえて、急には寢つかれさうにもないので、臉だけは合はせても、頭の

中ではそれからなほいろ／＼の取りとめもない事を考へつづけた。

「即がさつきからがり／＼と、どこかそこらの天井の中で何をか説つてゐるのが氣になる。」

と、

「おくみさん。」と、唐紙のそちらから青木さんが小さくお呼びかけになる。

「はい？」とおくみは、鼠でおめざめになつたのかと思ひながら御返事をした。

「もう寢たんですか？」と仰しやる。

「どこをがり／＼やつてるのだらうね。昨夜もよつびて耳について寢られなかつた。——どこかそちらの押入の中ぢやないの？」

「さうでございますね。私は寢ましたら何にも分りませんのですから。——昨夜からでございますか？」

おくみは蚊帳を出て電氣をつけた。

「こちらの天井でございますよ。」

しばらく止んでひつそりした。

青木さんは、

「何だか今夜は變にむし暑くてさつきから一寸も寢いられないんだよ。」と仰しやつてこそくさせておいでになる。

「何でございますか厭な晩でございますね。」

お手拭でもぬらしてまゐりませうか。冷たいのを目の上へ當ててお寢みになつて御覽になりましたら……

おくみは唐紙を掛けて膝を突いた。

「今もう何時です？」

## 二十四

ついでさくさしてゐて、青山の養母のところへもあれなり得う行かないでゐたおくみは、今日はさし向これといふ用事もないやうだから、午後一寸お開を戴いて、程によつたら平河さんへも歸りにお寄りして來たいと思つて、朝早く、青木さんが山羊の乳を搾つていらつしやるところへ行つてお願ひした。

坊ちゃんはまだ蚊帳の中でよくお寢つておいでになる。

おくみはその間に通りの髮結さんのところへ行つて、朝の内に來て貰ふやうに頼んで來る積りで、そこの押入を開けて懐中鏡を立てて、ひんやりした蚊帳の色のすが／＼しい青さに、おみながら、そこからへ出るにもあんまりな髪をあたりに掻き上げた。

「あちらの髮結さんなら一寸上手でもございませし、おとなしい人であるんな事をべちや／＼

言ひませんからうるさくなくてようございますよ。と、いつかお湯屋の女の人から聞いた分へ、少し遠いけれど行つて鞆んだ。

「おくみさん、何ならいつそ午前に一寸行つて来たらどうだらう。久男は厄介だから、置いてけば一人で遊んでるよ。今日はこれでは午後は暑くて歩かれないよ。」

青木さんは朝御飯の後で小楊枝をお使ひになりながら、いら〜と盤のはしへ射し入つてゐる日影を見つめてかう仰しやつて下さる。

「でも、これから髪を結つて貰つたりしてゐますとどうしてもあれでございませうから……と、おくみは柱の時計を見た。

「さつき仰しやいましたのは、本當でございませうか、坊ちやま。大人しくお父さまとお二人で待つて下さいますか？ さうして下さいますといふ坊ちやんでございませうけれどね。」

やがておくみは着て行くものを揃へながらかう言ひつゝさつきから髪結さんが来るのを待つてゐた。

「組あやん、何あれは……と、髪を投げ出して坐つておいてなる坊ちやんに、他の事仰しやりながら、不審さうに外の方を上口に見て、きよと……し……おいてな……」

「ほ〜、何でございませう？」  
「どこ？」  
「小屋根。」  
「え〜。」

「とたん張りの上をばた〜言はせてゐる。雀が下りて走つてゐるのですよ。」  
「雀？」  
「え〜。雀のお宿。」

「お宿？」  
「ほ〜、坊ちやんは眞此ばかりお上手ですな。」

おくみは單衣のメレンスの長襟袷の襟をくけながら言つた。

「やがて髪結の家がすき手が来た。髪結さんほど手順が違つたので、午後でなくては来られないからとことわりに来たのであつた。」

「まあさうですか？」  
おくみは困つたやうに立つて行つた。

とにかく来られるだけ早く来て見て貰ふ事にして、使の女を返したけれど、そんなにしてゐては今日の間には合はないやうな気がして、いふそ髪だけ結つて、行くつは明日にしようか、それとも平河さんの方はこの女にして、養母……」

ころへだけなりと、折角だから一寸行つて来る事にしようかと思ひながら考へ迷つてゐると、表口の格子の呼鈴が鳴る。

出て見ると、思ひがけなく平河さんのおかみさんがいらして下さつたのであつた。

「おや、いらつしやいます。まあ、丁度今さう思つて居りましたところでございますよ。」  
おくみはさつきからのつゝもりを話した。

「さう？」  
「でも別に變つた事ぢやないでせう？ 私は今間違へて、もう一つあちらの通りから這入つて来てずゑんまごつたのよ。そちらにいらつしやるの？」

「おかみさんはおくみに附いて六疊へお通りになる。」  
「只今一寸そこらまでお出かけになりましたのでございませうけど、今に直き歸つていらつしやいます。」

「私失禮して上だけ取つてよ。今日はあちらの電車来て、あそこからずつと歩いたものだからすつかり汗になつて……」

「まあ、あちらからですと大變でございませうでせう？」  
おくみはいそ／＼して、手拭ききれいなのを絞つてお籠に置つて来りました。

「いゝ柄の座蒲團ね。青木さんのお見立て？」

おかみさんは手拭をお使ひになつてさつぱりなすつたやうに、そちらのほしへ出てお坐りになる。

「大分しばらくでございました。どなたさまにもお變りもございませんで……」

おくみは改めて御挨拶をした。

「もうこなひだから、一寸お伺ひいたしませんではと思つて居りましたのでございますけど、ついとさくさいいたしました……」

「私こそいつもおはがきを貰つても、返事も上げないし、ずんぶんでせう？——たゞあれからしばらくたよりがないから、ひよつとしたらしくみちゃんはどこか加減でも悪いのぢやないかと思つたりして心配してゐたのよ。水が變るとよくある事だしね。家ではつい一昨日あたりまであきが少し熱があつて、學校も二三日休んで寝てたんですよ。」

「さうでございますか。私は一寸も存じませんものでございますから。」

「もうすつかりよくなつただけだね。——くみちゃん、一寸髪掻きを貸して頂戴な。私の髪はぢきこんなに下るのよ。もうお婆さんになつて髪も少くなつたし……」

おかみさんは髪をあたりを撫でながら仰しやる。

おくみはお服ぎになつたお羽織をそつと衣紋竿にかけて置いて。お店の方では女中さんが代つて、ほかのが一人来たけれど、何だか思ふやうにないといふお話をなさる。

「お安は相變らずのんきよ。あれでなく、もう一人のおさわと言つた女——何だか自分で、きが来たんでせうよ。」

おくみはこちらでも、洗吉さんが試験がおすみになつて、一昨々日急にあちらへお立ちになつて、あと三人きりになつた事や、坊ちゃんや青木さんの御容子などを話した。

「坊ちゃんも今一緒に出ていらつしたの？——いゝえ、つい今までこゝで遊んでいらつしやいましたのでございますよ。」

おくみは一寸失禮して立つて、お茶を入れるためのお湯を瓦斯にかけた。

「おくみさん、もう何にも構はないで下さいな。お茶も深山。——それよりかね……」

「お呼びになりました？」

「いゝえね、あの私今日来たのは外ぢやないけど、いゝ都合にこゝへ来てくれる代りの人が見附かつたのよ。」

「おや、さうでございますか。」

おくみはこちらの敷居際に膝を突いた。

「まあこちらへいらつしやいよ。私になら何にもいゝから。」

おくみは袋戸欄の前に坐つて、つい重にお茶を入れた。

「これは昨日大阪の方からまゐりました奈良漬でございますけど、いかゞでございますか。生憎何にもお茶受がございません。」

瓜とお茄子を少しばかり切つて小さい容器へ入れたのへ小楊枝を添へて出した。

「まあ珍らしいものがあるのね。先に私が女の生徒さんたちを預つてゐたときに、一人あちらの方の人がゐて、その家からよく貰つたけど、あちらのはそれは甘しいのね。」

おかみさんはかう仰しやりながら、上り口の方へお立ちになつて、何かお土産に持つていらつした風呂敷包みを、こちらへ持つておいでになつた。

一ほんのつまらないもの。あとで坊ちゃんに上げて頂戴な。——それでさつき言つた婆やの事ね、まあやつとの事でこれならと思ふのが有つたのよ。くみちゃんは先に私たちが千駄木にあつたときに、あそこの大観音へ曲るところの角に

瀬戸物屋があつたのを覚えてゐて？ それこそ  
ずいぶん前の話だけだ。

「さういふ家がございましたかね。」

「おくみは心持續を長くして、うつつら覺えて  
ゐる、あのあたりの通りを日に歩かうとした。

とにかくその瀬戸物屋が今下谷の方へ小さく  
やつてゐる店の前を、この間おかみさんはよ  
の歸りにふとお通りになつて、店先にゐたかみ  
さんと久しぶりでお話をなすつたのださうであ  
つた、そのときお話のついでに、このお家に要  
る婆やさんの事をお頼みになつたら、二三日し  
て心當りがあるからと言つて、わざ／＼はがき  
をよこしてくれて、昨日その當人が、おかみさん  
の方へ出て来たのださうであつた。

「何でも四十六だとか言つてたけど、見かけは  
もつとふけて見えるの。いろ／＼これまでの事  
を訊いて見ると、とにかく正直一方らしい氣の  
よささうな婦人なのよ。早く夫と別れてさんざ  
苦勞をして来たんだつて。」

その人はいいこなひだまで、七年ばかりの間、  
小石川の方の或學生の塾で勝手元の面倒を見  
てゐたのださうであつた。それが近い頃その  
塾の監督をしてゐられる方が奥さんをお買ひに  
なつたので、言はゞその婆やが要らなくなつた

のだけれど、それでもさしむき行くところがない  
ために、半年ばかりそのまゝ置いて貰つてゐ  
た。併し下を働くには下女もゐるのだし、そん  
なにしてゐるのが氣の毒なので、こなひだ閑を  
貰つて、今自分自分の短とかのところに、かゝつ  
てゐるのださうである。

「その姪の家といふのが大變困つてゐるらしい  
やうな話ぶりなのよ。とにかくまああれなら人  
柄だけは體かなやうだから、私にあらかた取り  
極めて置いたんだだけだね。——いかに何でも、か  
うしていつまでもくみちゃんを使つてゐるのが  
すまないから、一人で氣を揉んでゐただけど、  
これでやつとくみちゃんも一應私の方へ歸れる  
わ。今日でいく日こゝにゐただしたかね。」

青木さんが歸つていらつしたやうである。

「おかみさんは、實は今日その婆やさんを伴れ  
ておいでになるお積りだつたのだけれど、今朝  
になつて、今日が日が悪いから明日にして戴き  
たいと言つて、本人がことわりに来たのださう  
であつた。」

「私は折角ちゃんと着換へまでして待つてたん  
でせう。ではともかく私だけ行つてお話をし  
て置いたらと言つて、その儘出て来たの。丁度  
よかつたかも知れないわね。いきなり併れて來

ても却つて何だつたらうし。」  
かう仰しやつてゐるところへ青木さんが這入  
つていらつした。

「どうもしばらく。……女の下駄が脱いである  
からだれだらうと思つた。」

「まあ、いゝ花ですれね。」

青木さんはあちらの通りの植木屋さんへ行つ  
ていらつしたと見える。

「色が少し變だけど……」  
薄紫の西洋花の鉢植に、きれいな籠が嵌つ  
てゐるのを机の上にお置きになる。

「おかみさんは早速婆やのことをさう仰しやつ  
た。」

「おや、さうですか。そしてもう極めてしまつ  
たんですか？ まあ座敷の椅子へいらつしやい。  
こゝは何だか狭つくるしいから。」

「おくみは急須を持つてあちらへ立つた。  
一ね、こちらの方がひんやりしていいから。」  
と、青木さんはお座敷からお言ひになる。

「くみちゃん、もうぢきお午だわね。私は丁度  
中途半端なときに來て……」

「おくみさんは茶の間の方へいらつしてから仰  
しやる。  
おくみはやがてこちらで、そろ／＼お午の支

度をし。

「くみちゃん、お午後青山の坊へ行く筈になつてゐるですつてね。近頃はこれでお暇をするから、くみちゃんはいゝ加減に何して、髪を結びに行つてはどう？」

「おみさんはお話が清んだと、え、こちらへいらつしてかう言つて下さる？」

「いゝえ、あの方はいつたつていゝのでございませうから、どうぞ御礼。りなすつて下さいませ。もうちゃんと御飯をさし上げるやうに出来て居りますのでございませうよ。」

「おくみは袋戸棚の斗から、おかみさんにさし上げるお茶碗を出して布巾をかけながら言つた。青木さんもそこへいらつしてお引止めになる。」

「そんなに今日に限つて急いで歸らなくてもいいぢやありませんか。まあこの晝でも見て下さい。近頃は何にも晝かないものだから……」

「さつき一寸拜見したんですけれど、何でこんなところへかけてお置きになるの？」

お二人はおくみが戴いた晝の前に立つておいでになる。おくみは板の間でおかずの煮魚をよそひながら、あゝした晝を自分が戴いたりにしてゐるが、それとなくおかみさんの顔、気が咎めるやうな心持がした。青木さんが自分を一人前の女のやうに扱つて下さるのに馴れて、いい氣になつてゐてもするやうに見えさうでできましが悪い。

### 二十五

おかみさんはどこもかしこもちゃんと時麗になつてゐると仰しやつて、青木さんに答へておいてになる。

その内に丁度坊ちゃんも外から歸つていらつした。

「おや、そんなところからお上りになりましたの？ あちらへいらつしたらちやんとお手を突いてをばさまにお辭儀をなさいませよ。」

おくみは禮をはづしながら言つた。

「一寸お待ちなさいませ。帯が後へ下つておます。まあきれいなお手、土をお掘りになつたんでせう？ 一寸こちらでお洗ひなさいませ。このお着物も、もうお着換へにならないといけませんね。」

おくみは洗濯したのを出してついでに着換へさせてお上げする。

やがて、皆さんは座敷でナイゲルにおつきになつた。

「久男さんはお姉ちゃんとお並んで食べるんだと仰しやるから、くみちゃんも一緒にこゝでお食べなさいよ。一々こゝまで運ばせて大變ね。」と、おかみさんは青木さんの御腹をよそつて下さる。

「さ、坊やはこゝへ坐るんだよ。何でもお姉ちゃんお姉ちゃんと言つて世話ばかり焼かせるんだね、お前に。今にお姉ちゃんがあるとなつたらどうするんだい？」と、青木さんが仰しやる。

「をばさまにお上りなさいませですつて。お父さまには？ ほゝ、いゝお行儀でいらつしやいますこと。」

おくみは微笑みながら腰をかけてお給仕に附いてゐた。

「折角くみちゃんになつていらつしやるのに、まあ違つた人が来るのだから何だか當分お可哀想だね。と、おかみさんもお氣をお取りになる。

「僕だつて困りますよ。もうこの儘いつまでもゐて貰へるぢやないんだに、餘計な婆さんなんぞを附けて来るんだからいけないや。」と青木さんは、御元氣でもないやうに仰しやる。

では私は兼んだ憎まれ役ですね。だつて仕方がないわね、くみちゃん。」  
おかみさんは笑ひながら袂のハンケチをお出しになる。

「坊ちゃんはお不思議さうにお二人のお顔ばかり御覧になつていらつしやいますよ。」

おかみはつゝましく坊ちゃんを見守りながら言うつた。

「このお加減が大變いゝこと、ほんとに上手に出来てよ。と、おかみさんは牛蒡のきんぴらを買めて下さる。

「いかゞでございますか。そちらのお魚の方は少しおしたじが足りませんでしたかと思ひますけど……」

「うゝん、丁度いゝ。この玉、はどうして魚の身の中で固まらせるんです？」

「こちらも甘しく出来てるわ。くみちゃんはいつににかういふお稽古をしたんでせう？」

「ほゝゝ、人知れずでございますね。」

おかみは嬉しきやうに、下目になつて、坊ちゃんがお膳にお箸になる御飯粒を拵つてゐた。

かうしてるところへ、あちらの方で御免下さいといふ女の人の聲がする。

「いゝえ、髪結さんでございませうよ。まあ、

髪なときき、おんてすこと。

「おかみは返事をしつゝ立つて行つて、いつそ明日の朝来て貰ふやうにさう言つて、すき手の女を歸した。」

「あら、なぜ、構はないぢやありませんか。一寸そこからお呼びなさいよ。私がゐるからなの」と、おかみさんか仰しやる。

「いゝえ、さうぢやございませぬ。もう行つてしまつたんでございませぬから。」

「おかみはかう言ひながら後れ毛を掻き上げて椅子に着いた。」

「知な人、ついあちらで、一寸結つて貰へば好いがあるに。」

「おかみさんは着にして仰しやつた。さうさせて戴かうかとも思つたのだけれど、あんまり氣遣なうたつたから。——そしてどうせ明日でも同じであつた。」

「こゝらの髪結さんなの？ 上手ですか。——どうでございませぬか。まあ、今度のはじめてなんですけど。——何ですか結ひつけない人に結つて貰ふのは變になるものでございませぬね。」

「くみちゃんには東髪だつてよくうつるんですのにね。——と、おかみさんは青木さんに仰しやる。

「しばらくこんなにしてゐましたから、今度あ

たり前に結ぶのには髪が變ないで髪でございませぬね。」

「さうでもないわ。髪直しをよくすればちゃんとなつてよ。たゞこんなにしてると髪が切れてね。」

「がて皆さんのお食事がすむと、おかみはあちらへ下つて一人で戴いた。」

「くみちゃん、あとでお手水鉢へ水を入れられて下さいな。すつかり、附いたらこちらへいらつしやい。まあほんとにいゝ、盡だわね。」

「おかみさんは通りすがりにかゝ仰しやる。——青木さんがおれを私に下さると仰しやるのでございませぬよ。と、おかみは箸を置いて、後ればせにかう言つた。」

「さうだつてね。いつまでもいゝ記念になるわ。」

「おかみさんは事もなげに仰しやるのであつた。もう青木さんからお聞きになつたらしかつた。」

それからみんなでテーブルに集つて、おかみさんのお土産のさくらんぼを戴いてゐると、外を金魚賣が長い聲を引いて通る。おかみには揺がれて行く掃のなまぬるいやうな水に、赤い色がせぎ／＼に動いてゐるのが目に見えるやうな

気がした。

「このお部屋は、これからでもひんやりしてゐていゝでせうね？」 建前の工合でせうか。」と、おかみさんが仰しやる。

「どうしてもこゝういらは市中とは暑さが違ひます。せうね。」

「おくみは坊ちやんのお出しになる種をお盆のはしへ置いた。」

「その代り蟬が澤山ゐてうるさいや。」

青木さんは巻煙草に火をお附けになる。おくみはこの間もさう仰しやつたのを思ひ出して、餘つ程蟬がお嫌ひなのだらうと思ひながら微笑んだ。

おかみさんはそれから二階へお上りになつたり、裏口へ出て御覽になつたりして、しばらくお遊びになつた後、午後の日ざしのまだ残つてゐる中を歸つていらつした。

青木さんはおくみのゐないところで、いつそこのまゝおくみにもうしばらく面倒を見て貰ふ譯には行かないかとおかみさんにお訊きになつたのださうであつた。

「それやくみちゃんの氣持一つで、私がどうつて事は勿論ないんだけど、それにしても、またお母さんの方の考へもあることだしとさう言つ

て、私はその場を濁して置いたんだけどね。だつてそれはくみちゃんにしてもよく考へて見ないと一寸引受け悪いでせう？——まあ、とにかく一應歸つた方がいゝわ。青木さんには氣の毒だけれど、くみちゃんの方から言へば、まだどちらにしても、ちゃんとした女の人に附いていろいろ教はつて置かなければならない事もあるんだしするから。」と、おかみさんは裏口へいらつしたときに小聲にぞんで竊とかう仰しやつた。

青木さんはおかみさんを送りがてら、湯へ行つて來ると仰しやつて、坊ちやんとお二人で一緒にお出かけになつた。

おくみはその間に一寸縁側で髪を解いて結びかへた。

何だかおかみさんに相談したいことを言ひ遺したやうに思つてゐるけれど、考へると青木さんのお前圖のこともその一つであつた。あすは婆やさんを一人でおよこしになるやうに言つてお歸りになつたけれど、おれなひ人には家が一寸分りにくいだらうが大丈夫かしら。おくみはそのやうな事もそれとなく氣になつた。

髪を結つて了つて油手を拭く反古の一つには、養母から來た手紙のちぎれの字が讀み返された。これでこゝから一應すぐ平河さんの方へ

歸るとして、それから先をどうしたらいいものかと考へると、自分ながら心もとなない氣がする。

おくみはそこに膝を突いた儘、お向ひのお家の二階屋根の片面に、黄色い色に狭まつた夕日の影を見るとしもなく見入つてゐた。今度はもう平河さんのお家へもさう長く御厄介になつてゐたくない。おくみはこのやうな事を相談すべき人がだれ一人とて無いのであつた。

それから氣がついて蒲団を片づける。障子の縁に立てた懐鏡の蓋の赤い布がかうした沈んだ心持を色づけるたつた一つの赤い色のやうに小淋しい。

おくみはその一間を掃き出しながら、かうして青木さんたちによくして戴いて、自分の家かなどのやうに心安く置いて戴いたこの二月ばかりの間のことが、この先いつまでも自分の一番戀しい頃のやうに思ひ返されるであらうといふ氣がする。

おくみはそれから押入を開けて、お午前におかみさんがいらつしたときに急いで取り片づけたまゝの着換への着物を出して、襟をつけかへたばかりの長襦袢もちやんと畳み直した。ふと、もう一つの悪い方の丸帯を解いて表に

して、青木さんの夏のお遊園を拵へてお上げし  
 ようかと思ひつく。去年拵へてまだいく度も  
 縛ばない帯だから、前へ出る方なども一寸も汚  
 れてはゐない筈である。あの白いメレンスの、  
 嫌々を崩した涼しい柄なら、丁度これからのお  
 遊園にいゝかも知れない。さうすれば裏と綿と  
 だけ買つて、戴けばいいのだから。——それもつ  
 いでに私が買つて、だまつて拵へて納つて置  
 けばいいのである。

おみはかう思つて行手を開けて、中程に這  
 入つてゐるその帯を、そつと引き出し、披けて  
 見た。

物尺を出して横つて見る。一丈のたけだから  
 たつぶり取つても一尺は餘るであらう。巾は二  
 巾にして、兩方へ二寸ばかりは縫ひ込まなけれ  
 ば廣すぎるかも知れない。おくみは念のために  
 座敷のお遊園を一枚出して、縦横の寸法を測し  
 て見た。

片づけてこちらへ来て、ついでに帯を解しに  
 かゝる、やつぱり軽い襦を附け一ちやんとしな  
 ければならないから、縫ふのはあすの午後でな  
 くては出来さうにもなかつた。

見ると丁度中に出るあたりのところに一寸  
 したしみが出来てゐる。泥か何かの迹がつい

た跡でもあるやうに、小黒く滲んでゐる。あ  
 とでそつと着み洗ひにして見よう。  
 おくみは袋を入れては縫糸を解しながら、そ  
 の抜いて行く絲の一筋づつに、さつきからの、小  
 さびしい自分の心が讀み返された。

二十六

一もうお湯へも召していらつしやいましたので  
 ございますか？」

「おかみさんがよろしくつて。——久男がどこ  
 までも附いて行くもんだから、たうとう青物市  
 の近所まで行つたんだよ。」

青木さんは、おくみが裏の山羊の欄のこちら  
 で青い鞆豆をつんでゐるところへいらつして、  
 お湯上りの快から煙草を出しておつけになる。  
 日はもうさつき、栗の木の後の、となりの屋根の  
 向うへ這入つて、一日のいされからよみがへつ  
 たやうな青い蔭ばみが下りてゐた。

「今これを少しばかり取つて見ましたのでござ  
 いますけど、まだやつとこれだけしかございま  
 せんのです。」

「おくみは小さい筈を持つて出た。  
 一ほんの十ばかりだね。」  
 「さうでもございませぬわ。こんなに小さいの

ばかりですけど。——でも自分の家へ出来たの  
 ですからこんなものへ入れましても心持が違  
 ふやうな気がいたしますよ。」  
 おくみは袋を下に置いてござんで、さつきか  
 ら馬鈴薯と豚肉とで、シチー見たいなものを  
 拵へかけてゐるのへ入れるつもりで、それ等の  
 小さい早い莢の筋を取りかけた。  
 「今日はたうとお母さんの方へも行けなかつた  
 ね。」

青木さんもござんで、一つ二つ絲を取つて下さ  
 る。

「でもいつつて日を限つてゐる譯ぢやございま  
 せんから、婆やさんでも来ましてあちらへ歸り  
 ますときに廻ればようございます。」  
 膝の上に莢をためながらおくみは言つた。  
 「だつて婆やが来たつておち歸らないでもない、  
 でせう？ これまで一人で忙しい日はかりした  
 んだから、五六日はゆつくり遊んで行つて下さ  
 いよ。今度は留守番があるから、一日どこか  
 へ伴れてつて上げる事も出来るし……」

「いゝえ、そんな御心配をなすつて下さいまし  
 ては。」と、おくみは極り悪さうに言つた。

「もうこんなにしているのも、きたかも知れない  
 けど。ど青木さんは御冗談のやうに仰しやる。

「それに婆やさんがまゐりすと、蚊帳の都合があれでございすから。」

「蚊帳なんかどうだつてなまよ。一張り買ったつて傳りたつてどうでもなるもの」と、お笑ひになる。

「あなたが坊ちゃんとお寢みになつて下さいませば、一晩ぐらゐは、私たち二人があつた蚊帳でもすみますけど、でも婆やさんに一日だけ一緒にゐてあれこれ言つて置きましたら、大抵何にも分つてくれませうから……」

おくみは笹を持つて行つて、棚の中の山羊が、自分のくれた餌を食べてゐるのに目を遣りながら言つた。

「坊ちゃんにはおかみさんが何とか言つた？」

「いえ、別に何にも仰しやいませんですけど……なぜでございす？」

「何、たゞね……もつとおくみさんを借してくれと言つただけど御裁可にならなかつたんさ。どんな婆やが来るか知らないが、私はもう厭になつた。久男さへゐなければいつそ一人でどこかへ下宿でもするんだけどね。あの子をたねか費つてくれないものかしら。」

青木さんは、棚の横木に釘が出てゐるのを内

側へ手をやつて揺ぶり抜かうとなさりながら仰しやる。

おくみはさうお言ひになる青木さんのお心持になつて見て、自分のことのやうに物悲しい氣になつた。

「手では抜けないよ。かうしとくと山羊が傷をするからね。」

「坊ちゃんはどこにいらつしやいますのでございませう？」

自分の心持のつゞきをかう言つたおくみには、坊ちゃんが今度の婆やさんにおなづきになるまでの、しよんぼりした小さいお心の内もお可哀想に目に見えた。

「どうしても早く奥さまをお貰ひになりませんではいつまでもあれでございすわ……」

おくみは笹の中の青い莢の中を掻き分けながら、伏目になつて青木さんのためにかう言つた。

「どうかしてお探しにさへなれば、どなたか、いゝ方がいらつして下さりさうな氣がするのにな。」

「何にしても、これでは困るけど……と仰しやつたまゝ青木さんはお吹きになつたお煙草の煙の消えて行くのを見入つておいでになる。何だかお心の内では他の事をお考へになつてゐ

でもするやうな御容子になつた。

「でも細君なんていゝ加減なものだからね。また髪なものに染られたら大變だ。――御覽よ、今時分蝶々が二匹あそこを飛んでら。」

青木さんは考へたかない事を考へさせられでもなすつたやうに、他の事をお言ひになる。

「もう今日もこれで暮れてしまひませうね。と、おくみも話を換へて、そちらのぶらんこの柱のそばの土の上を、二つもつて低く舞ひくする黄色い蝶々の方を見た。

玉蜀黍がいつの間にかあんなに高くなつた。――あそここの花床にはずるぶんいるんなものが時

いてあるのでございすね。」

おくみはお先へ失禮してあちらへ傳りかけた。

と、

「おくみさん、背中にが附いてるよ。」と仰しやつて下さる。

「さうでございすか。さつき、肩をあれいたしましたから。」

「もつと上。――取つて上げよう。待つて御覽。」

「どうもすみませんでございす。」とおくみは顔を赤らめた。

「たうと自分で髪を結つたの？」

「いゝや。綺麗に出来てるよ。お借りなさい。僕ももうあちらへ行かう。」

「まあ、大きな犬ですこと。こなひだから、所中あそこから出入りいたしますのでございませよ。」と、おくみはそこらの生垣の下へ、這入るのを指しながら言つた。

「今のはどの犬だらう。——そこどころへは、草が延びたね。」

「いつかあそこ、葉の實をお取りになりましたときには、やつと手が這入るだけの穴だつたのでございまして、犬があんなに大きくいたしたのでございませよ。」

おくみは思ひ出して言つた。

「その器る日にあの晝を戴きましたのでございませね。何だかもう遠い事のやうな気がいたしますわ。」

「僕もあれから、進んでばかりゐて何にもしない。またこれから一人で寂しくなつたら晝でも晝くかな。」

二人はこのやうな事を話しながらこちらへ歸つた。

もう臺所には早い電氣が来てゐた。

「僕ももうみんな行つてしまふ。は何かお解なね」と傳しやりながら、青木さんは座敷の方

へおいでになる。

「坊ちゃん、外の方で、お向ひの女のお子さまたちと賑を賑つていらつしやるのが聞える。歌に合せて晝音をお吹きになるのはお向ひの一番上のお下さまらしい。何だかいつにない物哀れな夕方のやうな心持がする。」

おくみは瓦斯をつけて、鶏豆を茹でるための鍋をかけた。それをさつと茹でこ入れて、味をへつければシチニーが出来るやうに拵へが出来てゐるのであつた。

青木さんが茶の間へいらつして、袋戸欄を開けてウエスキをお出しになる。

「いゝよ。あちらへ持つてつて一口飲めばいいんだから」と、自分で持つていらつしたか、しばらくして、あちらからお呼びになる。

「何か御用でございませうか。」と、おくみは青木さんのおかけになつてゐるテーブルのところへ行つた。

「もつとこちらへおいでよ。今晩は何にも晝へないでもないから、こゝへかけてこれを注いでおくれよ」と、いつになく御自分からお言ひになる。

「では一寸お待ちになつて下さいませば、只今ぢき、召し上るものを拵へてまいりますから。」

おくみはそこへ電氣を、まだ少し早いけれど點して置いて、急いでさつきのお料理を整へて来た。そこへ坊ちゃんも度々つていらつした。

その夜おくみは、青木さんにお留守を頼んで、坊ちゃんを伴れて四谷まで買物にやらせて歸つた。

「坊ちゃんのお好きなものを何でも買つてお上げ申しますから、電車のところまでさつきとお歩きなさいませよ。」

おくみは門口でかう言つた。

「もう、かうしてお連れ申して出るのも今夜さじだといふ事も知りにならない坊ちゃんば、はじめて浴衣の人におなりになつた竹をうれしさうに、先に立つてお歩きになる。」

「皿ちゃん、あそこに赤い灯が附いてるよ。」と、立ち止つてお待ちになる。

「あれは自動電話。さ、早くまゐりませう。」と、手を引いてお上げする。

おくみはそれとは言はないで、今日、帯を長にするお荷物の、裏と綿とを買ひに行くのであつた。

(大正二年七月十日)

# 八の馬鹿

私がしほらくゐた或貧しい漁村に、八といふ馬鹿がゐた。八といふのは十文に二文足りない馬鹿な人間といふ意味だから、博士にでも男爵にでも、下女にでも、犬にでも、馬鹿には平等に附いていゝはずの便利な普通名詞なのだけだ。村では八といへば、不公平にも、一人この八のことになつてゐた。

村中で八を馬鹿にしないものは、たゞ石と丸太袴と、人の女房及びそれ以外の多くの女が、自然の命令に従ひ、又は自然に對する反逆の企圖の下に、従つて、歡喜又は憤悶、人間の或は獸的平氣を持つて暗内に安んずせてゐる、未來の人間とだけであつた。村といつても、人家はいくらもない。人口も、うぢや／＼した隊のやうな子供と、その背中に喰つ附いてゐる準子供を除くと大人はいくらもゐない。子供はすべてそのことを實行する先頭走手である。つまりそれだけの村でゐて八を知らないものはあり得ないからであつた。

實さい鳥彼等自身さへ、或意味では八を馬鹿

にしてゐた。但しこの場合、子供等が八を鳥の子分だと信じてゐたといふことを註記したところで、私の外見的急速肯定を合理にするには役立たない。これは八が垢で以て馬のやうに黒いといふ大人の比喩と、子供等によつての、その比喩の直受とを意味するだけだからである。

八と馬とは、それより先に或交渉があつた。八は元來は村の直産物ではなかつた。他の村か町かの粗製な製産品であつた。併しどこものなかばだれにも分らなかつた。いつから村にゐるのかといふことも私はねつから聞かないでしまつた。三十七八になる或一人の女の言によつて、その女がまだ雛唄をしたりしてきやつきやつ言つてゐた當時、或十二月時分のほろ／＼寒い午後、もとゐた、村の女の先生が、齒下駄をはいてとこ／＼向うの村からやつて來た。そこでこちらは鼻汁をすゝつて頭を下げた。その後から、赤い圍かけをつけた、毛の長いがたがた馬が、荷を背負つてとほ／＼やつて來た。

その女の子は一人のそ／＼とその馬の後へついで村の通りの中ほどまで行つた。霧に通る大きな動物だから、面白くて附いて行つたのであつた。

すると向うから、霧までしかない、黒い色のぼろ／＼の着物を着た、髪をぼろ／＼延びた一人の男がやつて來た。まづ黒い足をして、靴は足のそり／＼やつて來た。通りの家のものが、つぎ／＼に戸口へ出て覗いた。八がぼじめて村へ這入つて來たのであつた。人が出て見たのは、最初八を見附けた人間が愕いたのが篝火の線となつて、次の家から家へ好奇心が熱火されたのである。その最初の發見者に愕きを興へた所以は、八が半分毛を捲つた泥まぶれの鳥の死骸を片手に握つて、股のところをがぢり／＼と噛みしやぶりながら乗り込んで來たからであつた。八はもとより馬鹿だから、何にも言はないで、のそり／＼、失はれた人間のやうに歩いて來た。一われは水を以てバアテゾマを投ぐ。さういふ汝等の未知なるもの、一人汝等の中に立てり。とも「われに後れ來りてわれにまさるものとはこれなり。」とも言はなかつた。

ずるぶん元からの八だけれど、今でも八はそれとよ／＼と一寸も變つてはゐないとその女は

笑つた。おまへだつて、そのちんちくりんの赤ら髪と、その二本の反齧とは、馬のあとと喚つ附いて行つたときと一寸も變つてゐやしまいと私は言はずに黙つてゐた。

この女は顔には竹の皮のやうな黒いほち／＼が一面にあつて……併しそれはどうでもいゝ。それよりも八は、つまりその時から四十ぐらゐだつたらしい。如何となれば今にやつぱり四十ぐらゐの人間に見えるからである。村の大人が鳥の子分だといひ、子供等がその嘲笑を正面から受取つてゐると私がさつき言つたのを二分間記述出来るものには、八がいかに垢だらけの汚い顔をしてゐるかは、いかに馬鹿な男爵にでも直ちに再びこゝで的確な寫像が現像できるであらう。彼のその黒さと汚さに次いで彼に目立つてゐるものは、第一に彼の長へ、ほこりだらけな、くし／＼の髪と、變せた、ひよろ／＼した長い煙草、彼のしよぼ／＼した目であつた。公堂に言へば彼を形成してゐるすべてのものがストライキンダに出来上つてゐた。併し私にはその目が一等八を特徴してゐるやうに思はれた。一寸見ると泣き出しさうな顔に見えるやうな目で、同時に民いやうな、また何が何でも平氣だといふやうな、さうかと思ふと陰鬱なやうな、而

も笑つてゐるやうな、あらゆる表情を一度に發現してゐる目であつた。それが、各の二分の一秒にちき／＼、瞬きをする。瞳の隅隅と共に、目の上下の皺、小鼻とルル摩摩が加はつて、迅速に且つ間斷なく、さ／＼、ちき／＼と瞬いてゐるのである。それで以て目が、たびれるせるでもあるまいが、八はよく居眠りばかりしてゐた。とき、歩きなながら眠つてゐた。

八が村へ来たときのことには、さつききの女以外に多くのものが記憶してゐた。或ものは、八はこれさきの村のもう一つ先の町から来たのだと言つた。併しその町では、まだもつと先の村からのその、来たのだといつてゐるさうであつた。その所謂出て来た村へ行つても、またその先へ行つても、つまり循環小數が割り切れないのと同じであつた。八は、どうしてこの村から向うへ行かないで、こゝにばかりゐるついでゐるのかといふことは、馬鹿な村人にはもとより分らなかつた。私にだつて分らなかつた。

村のものたちは、怒りつばい巨人洋が、少しでも顔色をかへると、青くなつて大さわぎをして巢穴へ逃げ込むけれど、一寸でも笑つて見せるも勇み立つて、巨人の皺の上をかける通つて、わつしよい／＼といひながら、彼の眼の中

の輝を取つた。晝はまつ霧で寒風のやうに働いた。

ぼろ／＼の灰色、又は藍色、低い屋根が山を背にしてうち／＼と霧がたつてゐた。それが赤燐の巢であつた。その狭い通りの中程に二間四方ぐらゐの大きな井戸がたつた一つあつた。こゝへ村中の若い女たちが帯の代りに繩や小紐を結んで、片かたの下駄をはいたり、跣足になつたりして水を汲みに来た。彼等がこゝへや／＼集まつて二十本ばかりの繩釣瓶で丸桶へ水を汲んだり、わい／＼言ひながら前にかついで迎んで行くさまを見てゐると、彼等は全て水を汲むために生きてゐる動物のやうに見えた。

けれども彼等の多くはその乾しい生存が夜になると、結果的に言へば、てん／＼に奪つて子を喰むことに熱中した。そのため、多くの子供が水銀瘡で解けた。その水銀瘡は或野生の植物が供給した。解けない奴は、大きくなつて青乳汁を垂らしてうぢや／＼、わい／＼と活動した。子供等は村の巡査にお辭儀をすることと八が馬鹿だといふことより外には何にも知らなかつた。その巡査は、七月になると、眞つ裸で村を歩いた。人のいゝ巡査であつた。十二

鏡ぐらゐの裏面に眼鏡をかけてゐた。その眼鏡は、或とき片つがへ、眼をかける柄が五分ばかりほくりと折れて飛びへ、落つた。巡査はその折れをくるく見廻したが目つからなかつた。二三日、村の女の子が一人が使ひに行きかけに、土の中から爪でほじり出した。太陽の光線できら／＼光つてゐたからであつた。

獨り、八は、巡査にも水銀箱にも赤蟻にも平氣で、村の赤い竿のそばで何十年となく暮して来た。村の井戸のところから、小さい汚い家の間をくゞつて海へ出ると、一寸した砂地の空地があつて、そのそばに長い竹の竿が立つてゐた。その先へは潮車がついてゐて、月のない暗い晩には、赤い籠提灯が通り上げられた。赤蟻が、夜の遠くから歸るのを導く目標であつた。その竿の、ちらに板張りになつた疊三枚敷ばかりの火番小屋が立つてゐた。八は夜になるとその小屋の床下に這入つてゐた。床の下はもと吹き通してあつたのを、交代で小屋番に來る若もののだれかが、八のために三方へ板を打つ附けて、寢所にしてやつたのであつた。そこへ藁をして、八は犬のやうにもぐり込んでゐた。その代り、火の番が、

「八よ、こゝと上から寝衣をこゝと」言はせるに、下からもぐり出た。冬の寒い夜中なのに、火の器は、窓からぼり／＼小使をしながら、下から出て來て暗がりて目をぼり／＼瞬いてゐる八に向つて、「しゅつ／＼」と犬をけしかけるやうに息を鳴らした。すると八は直ちに命令を聞きわけて、赤火竿の綱をたぐつて、籠をたぐり下して持つて來る。そのときは眞つ暗い沖の方で、海がごろ／＼鳴る中に、一點の赤い燈火がぐる／＼と振られてゐるときである。海鼠を取りに出た最後の船の歸着を知らせる灯である。

火の番はそれと任務を終へて家へ歸つて行く。それから一二時間たつた後には、村中へ、公然起きてゐるものは八がたゞ一人であつた。八はそんな時分に暗がりをうろつて、油に打ちよせられた木片や、家々のぐらりの塵埃の中の板切や、すべて、恰好な焚きものになり得るものがありつたけ集め一來るのであつた。不思議なことには八は猫のやうに暗がりて目が見えらしかつた。夜、一寸も寝ないでうろ／＼してゐるのであつた。いたづらをし合つてゐる男と女とは、よく八のうろついでゐるのに出く

はしたと、ふ語であつた。  
「ちよいと、ちつとしちよれ、だ、か来た。と  
お置の中まで男が言ふ。  
「八ぞい／＼。かまはんよ。と女はくす／＼、  
笑ふと、つたやうな調子であらう。

八は、それから人が起きる時分には、番小屋の下でぐすり寝てゐた。頭の方から床の下へ這入つて足先を外に出して、人から突つ込まれたやうになつて寝てゐた。日がかん／＼出ると、八は昨夜取つて來た焚きものを、石かけの上なぞへ下し置べて、またそこらへこま／＼考へ込んでゐるやうに、番小屋の外の方角で、土の上に膝をか／＼へて、息もなささうに黙つてゐるのを見た。その側に、牡蠣殻のついた木切なぞが目に見えかしてある中に、潮と泥で黒く腐つた、餅の缺けらや、椀の割けたのなぞが交つてゐるのを見たことがある。

八は、年中さういふものを、ひ集めては乾かして束にして、床の下へ入れて置く。そして、とき／＼それを少しづつ引つかいで米のある家へ出かけて行くのであつた。村のものは殆どを食はなかつた。みんな芋ばかり食つてゐた。山でも平地でも、芋ばかりであつた。家々で

はそれを掘つて来て、穴の中へかこつて置く。かこひ餘したの、小さい女の子や婆さんたちが手の甲で鼻汗をこすりながら庖丁で薄く切つて、薪に干した。十一月十二月には、どの家でも、目のふちを赤く廻らせた婆さんや、赤ら髪の子が、戸口の薪の上で、ぎしり／＼と芋を切つてゐる。或意味から言へば、婆さんは四年には芋を切り芋を食つて地獄へ行くのであつた。女の子たちは芋を食ひ芋を切つて、子を如むべく下ろすべく大きくなるのであつた。村中にはどこへ行つてもさういふ切芋が席の上に干し置かれてあつた。それへ蜘蛛の黒にたかつてゐた。全で乾を干したやうにたかつてゐた。

さういふ村にゐて、しかも、鼻たれや赤頬や、目尻に婆さんたちに馬鹿にされてゐる八は、彼等の上に自然として、嘗て芋には見向きもしなかつた。どんなに腹が減つても米でなければ食はなかつた。米を毎日食ふところは村ではたゞ村長の家と郵便局をやつてゐる物持の家と、芋の坊主ぐらゐなものであつた。村長や郵便局は金があるから食ふのであらうが、寺の坊主は、金は一丈もないくせに、且つ爺さんと婆さんの財布の一文銭をかき集めて漬きてゐるくせに、

威張つて米なんか食つてゐた。薄まに供へるために米を焚かなければならぬ。かも分らないけれど、佛典によれば、佛は印度の鍛冶屋の婆さんのところで腐つた豚を食つて、驢りに赤痢になつて道ばたでしヤアノと下して、喉が乾いてたまらないから田のどろ水を掬つて飲んだ男である。そんな男が米でなくては食はないといふやうな贅澤なことは言はない筈である。もしさう言つてゐるとすれば、佛だけに碗一ぱいづつ飯を焚いてやつて、坊主は芋を食へばいいわけである。けれども米を食つてゐるのは確かであつた。

八はなぜ米でなければ食はないのかそれは分らない。腹が減ると本切の束を捲いでゐるそのり村の通りへ出かけて行く。その外には決して日中は火番小屋のぐるりを動いたことはい。 「おら／＼、八が来たい。」と村の女たちは言つた。 「いゝ／＼、あの目を見いやい。」と子供が言つた。 「おめい、悪いことをするとあの八が捲つて食ふぜい。」とおつ母が言つた。 「誰い／＼。」と子供はおつ母を捲つた。

八は木切を以て、村長と郵便局の家と寺とへ代り／＼やつて行つて、つか／＼と藁所へ這入つて、米の飯と焚きものとの交換を求めた。それも、例の目をむづ／＼睨いて、木切の束を握つて黙つて立つてゐる。すると下女やおかみさんが下りて来て八の袋へ飯を入れてやる。八は、それを受取るよ焚きものを置いて番小屋へ歸つて来る。相手知らない顔をしてゐると、八は何時間でも藁所に立つて目を睨いてゐる。だから、最後には必ず物になつた。つまり有形の行動の前夜から言ふと、八がたき物をくれて飯を貰ふのではなく、相手、飯をくれて八から焚き物を貰ふわけであつた。

八は歸ると石がけのふちなぞに坐つて、手づかみで、袋の中の飯を食つた。村長の家が一ばんけちで時々米の中に麥が混つてゐた。八は麥の粒を一粒づつ口の中へ選り分けて、ぶつぶつと土の上に吐き出した。すると、番小屋の上で鳥が「かア。」といふ。「かア、かア／＼。」といふ。この「かア」と「かア、かア／＼」とを餓説すると、 「おゝい、八が飯を食つてるぞ。来い／＼。」といふのであつた。この譯には近頃流行する誤譯のないことは鳥に訊いてくれよばすぐわかる。

次の鳥語にも止に誤譯はない。即ち、

「よし来た。おゝい、手前もこつちへ来いよ。かア／＼かア。」と五六羽の鳥が飛んで来て八のぐもりへ下りた。そして、上の上の麥、即ち八の口で洗滌された麥の粒を拾つて食つた。

「おや、お前ばかり、ずん／＼食ふぢやないか。おや／＼、こいつは石の缺けらだ。ペツ。かアカア、かア／＼。」と一羽の鳥がじれて、少しく休憩してゐたが、やがて、

「さうだ」といふ風に八の手元へ飛んで行つて、袋のはしに喰つ附いてゐる白い、粒を突つついて食ふ。八はあんげらかんとして頬張つた飯を喰んでゐる。このとき程八の顔面の多忙なことはなかつた。日も間斷なく瞬く上に、口も頬ももが／＼動かさなければならなかつた。つまり彼の顔は目と口を中心として兩個の渦動に轉回するのであつた。鳥はそのどさくさまぎれに、八の手の先に附いてゐるまで口へ入れた。

「おい八さん、その中指を上を上げろよ。そこに一粒附いてゐるから。さうだ。かア。」と嘴を持つて行く。こんなづう／＼しい鳥が出世して代議士や銀行の頭取なぞになるのであつた。

そこへ子供がわい／＼言ひながらやつて來

る。

「しよウい／＼。」と一人の子供が鳥に砂を投げ

る。  
「よせやい、塵汁たれ。おい諸君ぼつ／＼行かう。」と鳥は悠々として立つて行く。下へ下りると大きな八と大きな子供だと思つてゐた。天突へ舞ひ上ると、何んだ、よく見れば俺より小さな、黒豆のやうな八と黒豆のかげらのやうな鼻たれ共ぢやないかと思ふ。だから鳥は、この次にもいゝ氣になつて下りて來るのであつた。

「見いよ、八が飯ウ食うちよら。」と子供は八を取巻いて珍らしさうに見てゐた。けれども、にしして彼等は代議士の子でないの、たゞ遠巻きに見てゐるだけで八の飯を取つて食はうとするものはなかつた。この點は感心である。八は

目をぼちくり／＼させながらゆつくり／＼食つて行く。この八と、同じ木の飯を食ふ村長たちとの違つてゐるところは、八の顔はいくら物を食つても、食はないときの顔と少しも變らないことであつた。いつまでも腹の太つてゐるやうな、同時にいつ見ても腹に何にもないやうな顔をしてゐた。

「八の袋へ砂を入れちやらうかい。」と一人の鼻

汁たれがいふ。

「おい、これ／＼何うする。そげんことをすると海に食はせるぞ。」と丁度いゝところへ年取つた赤蟻の漁師が来て砂地へ杖を打つ。あとから五六人の若い赤蟻が綱を擔いでやつて來る。

「どけい／＼。あつちへ行つて遊べい。食はせるぞ。」といふ。子供はのそり／＼遁げて行く。

八はさうして安全に食事を了へると、ごろんと地びたへ轉がつて目をつぶつてゐる。その顔を見ると何事にも平氣な空つぽな顔にも見えるけれど、目の當り工合では、八は村の何人よりも最智慮ある人間で、それがすべての人の運命を豫知して、驚かに彼等の前途のために腹想してゐる顔のやうにも見えた。

「おい八。」赤蟻がいふ。  
「狼見たいな鼻をしちよらいなう。」と、餘計なお世話をやきながら綱を干す。

八はそんなことは平氣で目が曇るまですやすや寝て、日没と共に番小屋の下へ這入り込むのであつた。

八はそんなにして、十日目に一度ぐらゐるしか飯を食はなかつた。寺や村長などのところへ飯

を貰ひに——寧ろたきものを與へに——出かけ

ることは一軒へ月に一回と限つてゐた。村長たちは八にそれだけの計算が出来ぬのを不思議に思つてゐた。その代り八は、時によると腰のあたりまで海へ這入つて行つたりして、足で貝や小魚を取つた。海の種やかな時などには潮が満ちてゐる間中、ちつと一つとところに突立つたまゝで、水の中を動かないときがあつた。八はさうして取つた魚貝をいきなり生のまゝで齧つた。どうして取るものだから、或時は、一尺ぐらゐの鱈や、大きな章魚の、びちや／＼跳ねたり、ぬら／＼動きもがくのを引つ纏んで、火番小屋の側の日向で齧つて食つてゐた。骨までかり／＼食つた。そして例のやうに仰向けになつてぎら／＼と日光に光つてゐた。

村のものは、はじめは時折八にゐるんな食べものをくれようとしたものであつた。けれども八は人／＼直接に物を貰ふことを恥辱のやうに拒んだ。たゞほつてあるものだけは自己の権利のやうに拾つて食つた。

「おい、八よ、これウ食へいさ。と一文菓子屋の婆さしちの腕の腐りかけたのなごを突き出すと、八はそんなものは目に這入らないやうに、知らん顔をして逃げて行つた。

「何ちふ恩鹿ぢやる、人がやらうちふのに。」と婆さんは怒つた。後になつてこの婆さんも他の女たちも、八に物をくれるには、八が通るときを見計つて、往來へ捨つて置けばいゝといふことを知つた。けれども村のものも貧乏だから減多に八に物を施す餘裕もなかつた。

「うりイ、八がたアけアの着んも貰うちよらア、あゝい。(おや、八がおたけちやんの着物を貰つてるぜ、やアい。)と、或時村のものが笑つた。おたけといふ髪のおぢれた女がゐた。それが、八が冬の眞中に、いよ／＼ぼろけはつて髻の上までしかない着物を着てゐるのを見て、自分の單物のぼろ／＼になつたのをくれたのであつた。八はさういふものを三年でも五年でも着てゐた。道ばたに落ちてゐるぼろ布は、たとひ泥だらけになつた一寸四方の小布でも八はすぐ拾つて海で洗つて乾かして、自分のぼろ着物の上へ縫ひつけた。時には、唐米袋や古手拭の切なぞが八のコートの一部分に點綴されてゐた。

「今でぼろが歩いちよるやうなもんぢやなう。と或時村の巡查は笑つた。十二錢の眼鏡の、両も柄が折れたのをかけてゐる癖に、いかに八を嘲るやうにから／＼笑つた。目の腐つた床屋

の「寅も出て来て齒をむき出して遊戯と一纏にげら／＼笑つた。

八はこのやうにして何十年といふ前から村に生活してゐるのであつた。馬のあとに附いて行つて八を發見した鼻汁たれ子が三十七八になつたのだから、八は少くとも三十年以上この村にゐるのであつた。三十年の間には、生れ立ての赤ん坊が疾くの背十五になつて、腕に自分の名前を入墨した。これは大人になつた印であつた。十五になれば漁に出るので、もし海で死んでも、どこかへ漂着すれば、どこ誰だと思ふための準備に入墨をするのであつた。そのうちには女を姫ませたり赤ん坊を作つたり、酒を飲んで喧嘩をしたり暴れたりして、二十になるやうに兵に出た。そして二三年たつた後には、一等卒のカーキ服を着て、頸にけちな紺のハンケチなぞを纏んで、日丸や隊旗などを描いた盃を土座に持つて歸つて來た。そして卒當の女房を貰つて盛に鼻汁たれ子を作つた。それから戦争へ行つて勳八等を貰つたり賞はなかつたりした。そして今は後備になつてゐる。赤ん坊が頭の禿げた後備二等卒となるだけの變化の過程を八は全で一分間のやうにけらんとして、三十年前も今も同じ四十ぐらゐの顔で我慢して

ゐる。そして三十年の間精勵勤續して、小止みもなく目をばち／＼させて来たのである。あたり前なら、もう恩給が附いて、貴族院ぐらゐへ入れられてもいゝ筈だけれど、だれ一人、八のためにさういふことを運動してやるものがゐなかつた。

それでも八は一寸も不平を言はずに床の下にもぐつて暮して来た。未だ嘗てたゞの一度も口を利いたことがない。笑つたこともない、欠伸一つしたこともない。大人しく、何の音も立てずに床の下にゐた。雪が積つて菓の入口が塞つてしまふと、その雪が溶けて二人で出口が開くまで、ぢつとしてゐた。七八月には蚊がうぢやうぢやたかつて體中を刺しても、八は掻きも動きもしずに我慢してゐた。中學校用、師範學校用、高等女學校用、女子師範學校用、商業學校用、農學校用と、學校によつていろいろに修身書の使ひわけがしてある今日に、それらのいづれを聞いても、精勵又は忍耐の部に八のことが書いてないのは誠に日本の道徳的進歩のための一大恨事である。

それは或秋の暮であつた。村のものは近頃八が番小屋の側にゐなくなつたことを發見した。火の番の若者が、夜床の下を覗いて見て八は

ゐなかつた。

「八い、八い、ゐないかい。うりイ變だぞい。一と、若ものは竹竿を持つて来て八の穴を突つ突いた。それでも八はゐなかつた。」

「どこへ行つたんづら。」

「もうこの村に飽きたんづらうか。」

「さうぞい。お前がそんな婆さまになつた

け、八があい、そウつかして他所イ行つたんだい。」

「お前がそれいにいゝ男ぢやけ怖れたのよ、

こげんものがゐるところにやうらアゐなアチエ

て、どこかへ行つたんづらう。」

「あは、／＼／＼。」

と村のものが笑つた。

すると、たゞの半纏の上へ靴をかけて頬冠を

した、郵便配達の爺さんが、村のはづれの出岩

の上で、八がわん／＼泣いてゐたと言ふ報告を

持つて歸つた。人々はいろんな噂をした。巡査

が通りかゝつて、伴れて歸らうとしても、た

だら／＼／＼と泣いてばかりゐて動かないのだ

と言ふものもあつた。

一行つて見よう／＼。」と子供等は駆けて行つ

た。

「ゐねいよ。誰ばつか吐かア。と、ヤがて彼等

の一人は歸つて来た。八は出岩からまたどこかへ行つたものらしかつた。それから尙十日ばかりも八の姿が見えなかつた。

その間に、或ものは、八が社の後つ赤剱山

で、渾だらけになつて轉がつてわん／＼泣いて

ゐるのを見たといふものもあつた。その外いゝ

加減なことを言ふものもあつた。

「死んだんづらうぞ、そいぢや。」

「さうよなり。どこか寝めるけ、泣いとつたん

づらうい。なり、かはいさうに。と年寄りたち

は言つた。

それから二三日して大雨風があつた。村中の

屋根がばら／＼に吹き飛ばされて、そこいら中

へ牛小屋の中のやうに藁がちらばつた。船とい

ふ船は道ばたまで引き上げられた。ごう／＼と

土砂ぶりの雨が暴れ狂つた。雪では鐘をがんが

ん叩いた。社の時の太鼓も鳴り響いた。子供

等は顔へ上つて泣いてゐた。男も女も、その

晩はいたづらどころではなく、自分の家の倒れ

るのを恐れながら固まつてゐた。火の番の若い

ものたちはびしよぬれになつて黒い夜の中をか

け廻つた。

その翌日は、村中は終ん日あと片附けに逆は

れた。倒れ落ちた屋根の下から茶碗や席を引

き出したり、濱を探して歩いたり、倒れた垣を起したりした。海に向いてゐる家々の雨戸は、  
づく／＼になつて閉かなかつた。

その夕方がどんよりと濁つて暮れて行く頃、  
村のはづれのうどん屋の煤だらけの二階に、七つになるおしいといふ女の子と、四つになるおつうといふ女の子が、ぬれそぼちた板戸の戸袋のところ立つて「雀や／＼、五兵衛がとウこの雀の子」といふ歌を歌つてゐた。すると、おつうが、

「うりイ、あしこに八があるいなう。」と姉に言つた。

「どこにやア。」と姉が鼻汁を吸つた。

「うーり、八ぢやぞい。まあ何するだア。海へはひちよらア。——うーり、わん／＼泣いちよら。どうしたんづらい。あゝ、お波が来た。あゝ、ずん／＼海へ這入つて行かア。——母やあ、母やあ。——おしいが下へ下りて行つた。母やあ。——父やと母やが上つて来て向うを覗いた。

「誰をつけい。だアれもゐやアせんがい。」

「うーり、うそだいなう。この子は。」と二人は代り／＼言つた。

「そんなもんだい、なう、つうや。」と姉は自己

を主張した。  
「一人ですん／＼向うへ行つたい。」と、つうは廻らぬ口で言つた。

「あつちへ向いてかい？」

「うん、ずん／＼行つたい。」

「うーり、そしてどうしたい。」

「もつとずん／＼行つたい。」

「やア？ 死んだんぞい、そいぞや。」

「ずうと鹽が隠れたかや。」

「あゝ。」

「うーり、まあ。」

と大人二人は愕いて薄暗い潮が満ち寄せて来るのを見守つた。

母が村中のものはみんな濱へ出た。八が水の中へ立つてゐたのをたしかに見たといふものが二三人もゐた。

「巡査は夜うどん屋へやつて来た。いつも暮れるとすぐ寝るおつうは、母やにぼろ／＼の垢光りの寝間着を着せられかけてゐた。そこへ父やば門口で巡査に八のことを説明してゐたが、

「つうや、一寸来いよ。」と呼び出した。

「うーん、いやアだ。」と巡査が氣味が悪いのでつうは應じなかつた。それを母やが無理に引つ

ばつて来た。

「お前たちは八がずん／＼深い方へ行くのを見たんぢやの？」と巡査は訊いた。すると第一に

しいが八を殺した責任者でもあるやうに、しやくり上げて泣き出した。つうも「おゝん／＼」と泣き出した。

翌る日には火番小屋の近所のものたちは八の穴の前へたかつて、中を覗いたり突ついたりしてゐるんな八の追憶を轉つた。例の三十七八の女といふのもそこゐた。三十年前の丁度

同／＼からいふ秋の暮に、彼女がはじめて八が村へ這入つて来たのを發見した話をした。例のやうに女の先生にお禮儀をしてそれから馬が通るところから話した。

床の下の藁の中から、八の缺けた襦袢が一つ出て来た。子供等はわい／＼言ひながら、その襦袢を往來中へ賣り歩いた。

私が雀の餌ほどの月希で、その村の役場へ出てゐたときのことである。

(大正四年四月)

年譜

明治十五年 (一七歳)

九月、父悦二、母ふさの三男として廣島市猿樂町で生れる。當時父は同市役所學務課につとめてゐた。兄二人と次弟とは、いづれも十歳未満で没した。

明治二十四年 (十歳)

九月、母三十七で没す。あとは父、祖父母に育てられる。後に同市本川小學校の四年、第一高等小學校の二年を終へて廣島縣立第一中學校に入學する。

明治三十四年 (二十歳)

四月、中學卒業。

九月、第二高等學校に入學。三年間の在學中、神經衰弱と胃病とに苦しむ。

明治三十七年 (二十三歳)

九月、東京帝國大學英文學科に入學。夏目漱石先生の講義をきく。

十月、祖父宮助七十七で没す。

明治三十八年 (二十四歳)

一月、夏目先生の『倫敦塔』と『猫』とが『帝國

文學』と「ホト、ギス」で發表される。

九月、神經衰弱にたへかねて、一年間休學に決心し、廣島の家や、瀬戸内海の或島で保養する。

明治三十九年 (二十五歳)

三月、廣島の家で處女作、短篇『千鳥』をかき上げて夏目先生に奉呈する。

四月、先生の『坊ちゃん』が「ホト、ギス」で發表される。

五月、『千鳥』が先生の推薦の辭と一しよにこの月の「ホト、ギス」に掲げられる。

九月、先生の『草枕』が『新小説』に出る。この月上、京復校。先生の門に入り、漸次、高濱虚子、坂本四方太、寺田寅彦、松根東洋城、森田草平、小宮豊隆、野上豊一郎、阿彌生子の諸氏に引合さる。

明治四十年 (二十六歳)

一月、第二作『山彦』を「ホト、ギス」で發表する。

四月、先生は大學を辭して創作生活に移らる。

れる。この月、私の最初の短篇集『千代紙』が初山書店から出る。

五月、『お三津さん』を『中央公論』で發表。

明治四十一年 (二十七歳)

七月、大學を卒業する。同月、父五十七歳で没す。歸郷。『鳥物語』が「ホト、ギス」に出る。十月、千葉縣成田中學校の教頭に就任。

明治四十二年 (二十八歳)

一月、『黒髪』を『國民』に出す。

八月、歸郷して家宅を賣りはらひ、祖母と小母とを成田に伴ひ來り、家をもつ。

明治四十三年 (二十九歳)

一月、『小猫』を「ホト、ギス」で發表。

三月から十月まで、長篇『小鳥の巢』を『國民』にかく。

明治四十四年 (三十歳)

二月、『鳥』が『太陽』に、『赤い鳥』が『中央公論』に、『女』が「ホト、ギス」に出る。

五月、成田中學校を辭して上京。海城中學校の講師を勤めつゝ、創作をつづける。この月、結婚。同校には大正七年まで前後七年在職、受持時間のあひ間に、物置部屋にはひつて創作したことも度々ある。

七月、八月にわたり「瓦」を「讀賣」にかく。  
 八月、「民子」を「新小説」にかゝげる。  
 九月、「女帯」を「中央公論」に出す。  
 十月、短篇集「女と赤い鳥」を春陽堂から出す。

十二月、「羊」を「太陽」で發表。

明治四十五年(大正元年) (三十一歳)

一月、「黒血」を「新小説」に、「鏡」を「中央公論」に、「伯母とお濱」を「太陽」にかゝげる。  
 三月、「人形」を「東亞の光」に、「せんぶり」を「太陽」に出す。短篇集「返らぬ日」が春陽堂から出る。

四月、中央大學講師となり、海城中學と兩方へ出る。中央大學には爾後大正七年まで勤める。

六月、「瀧」を「新小説」に、「馬車の出来る間」を「太陽」に出す。短篇集「お三津さん」が春陽堂から出る。

九月、「凶兆」を「中央公論」にかゝげる。  
 十一月、「穴」を「新潮」に、「留守の間」を「太陽」に出す。長篇「小鳥の巢」が單行本として春陽堂から出る。

大正二年 (三十二歳)

一月、「黒蜻蛉」を「新小説」に、「別れる日」

を「中央公論」に出す。  
 二月、「大伯母」を文章世界にのせる。  
 四月、「紅血」が「新小説」に出る。短篇集「瀧」を春陽堂から出す。

五月、短篇集「女帯」を濱口書店より出版する。

七月、「蛇七母」を「新小説」にかゝげる。この月から十月まで長篇「桑の實」を「國民」に連載する。

大正三年 (三十三歳)

八月、「霧の雨」を「中央公論」にのせる。

一月、「桑の實」が單行本となつて春陽堂から出版される。  
 三月、「戀」を「新小説」に出す。短篇集「赤蜻蛉」が岡村書店から出る。

五月、短篇集「留針」が春陽堂から出る。  
 九月、短篇集「珊瑚樹」を植竹書院から出す。

大正四年 (三十四歳)

三月、全集第一卷「瓦」を春陽堂から發賣。  
 四月、「八の馬鹿」を「中央公論」に掲げる。全集第二卷「赤い鳥」を出版。

六月、同第三卷「小猫」。  
 七月、同第四卷「女」。  
 九月、同第五卷「千鳥」。

十月、同第六卷「霧の雨」。ゴリキイ作機梅の讀譯を博文館から出版する。  
 十一月、全集第七卷「黒血」。  
 十二月、同第八卷「金魚」。

大正五年 (三十五歳)

二月、全集第九卷「桑の實」。  
 三月、同第十卷「瀧」。  
 四月、同第十一卷「八の馬鹿」。  
 五月、同第十二卷「小鳥の巢(上)」。  
 六月、長女すげが生れる。

七月、全集第十三卷「小鳥の巢(下)」。  
 十二月、童話集「潮水の女」を春陽堂から出す。

大正六年 (三十六歳)

四月、世界童話集第一編「黄金鳥」を春陽堂から出す。  
 七月、同第二編「鼠のお馬」。  
 八月、同第三編「星の女」。

九月、同第四編「青い鸚鵡」。  
 十月、同第五編「海のお宮」。

大正七年 (三十七歳)

一月、長男瑞吉が生れる。世界童話集第六編「潮水の鐘」を出す。  
 二月、同第七編「魔女の踊り」。

三月、同第八編「黒い沙漠」。

五月、同第九編「銀の王妃」。この月、氣管  
支喘息を發し、爾後今もつて、持病となる。

六月、世界童話集第十編「馬鹿の小猿」。

七月、童話童話集第十編「赤い鳥」を發行。爾後昭  
和四年二月まで十二年にわたり、その續書に

努力し、同時に毎月缺かさず一二篇の童話を  
かく。

九月、喘息のため大學病院に入院。同月退  
院。

大正八年 (三十八歳)

五月、世界童話集第十一編「懲はり猫」。

六月、長男瑞吉、消化不良で大學病院に  
入院。九月まで在院。

七月、世界童話集第十二編「黒い小鳥」。

九月、同第十三編「七面鳥の卵」。瑞吉の保  
養のため、赤い鳥社を東京に残し、一家々  
移りて樂山に移る。

十月、世界童話集第十四編「大法師」。同第十  
五編「本足の兵隊」。

大正九年 (三十九歳)

十月、世界童話集第十六編「あひるの王さ  
ま」。一家樂山を引上げ歸京。

十一月、世界童話集第十七編「かなりや物語」。

「古事記物語」上下二巻を赤い鳥社から出  
版。

大正十年 (四十歳)

四月、世界童話集第十八編「蟹の王子」。同  
月、乗馬をはじめ、現在までたえず修練す。

十一月、童話集「救護隊」を赤い鳥社から出  
版。

大正十一年 (四十一歳)

五月、世界童話集第十九編「せんたくやの驢  
馬」。

大正十二年 (四十二歳)

四月、世界童話集第二十編「小馬と機關  
車」。

大正十五年(昭和元年) (四十五歳)

八月、世界童話集第二十一編「象の鼻」。

十一月、祖母れい、百二歳で没す。

昭和二年 (四十六歳)

六月、「アンデルセン童話集」をアルスの日  
本児童文庫の一冊として出版。

昭和三年 (四十七歳)

五月、大島中將を團長に、私たちは理事と  
なり、十三歳以上十五歳までの中等學生に三  
年の期間、乗馬を通して精神教育を施す目  
的で、騎道少年團を作る。一年生入團。

昭和四年 (四十八歳)

二月、この月かぎり「赤い鳥」を廢刊する。

三月、不慮の災難で左大腿骨を折り五月ま  
で入院。あと十月まで苦痛な治療を続ける。

五月、世界童話第一集「黒い騎士」を春陽堂  
から出す。同月、騎道少年團第二回「新一年生  
を迎へる。同月、團は「東久邇宮殿下御邸に  
召され、一回の乗馬を右腕に傷へ奉る。

六月、世界童話第二集「湖水の女」。

八月、同第三集「駒ひ焚火」。

九月、同第四集「かるたの王さま」。

十一月、童話集「十二の星」を春陽堂から出  
版。

十二月、童話集「少年王」を續刊。

昭和五年 (四十九歳)

二月、賀陽宮殿下、御乗馬で騎道少年團  
を御檢閲下さる。同月、肺炎にかゝり、重症。

四月上旬まで就床。

五月、騎道少年團第三回「新一年生」を採用す。

森田草平集

私は後生樂と云はれ、程健忘症だ。そのせぬ  
か、過去のことを大抵忘れてしまふ。書く時は、  
それでも、一字々々石にひも刻みつけたやうな事  
簡で、指の尖から血のにじみ出るやうな苦痛もす  
ゝか、書いてしまつた後はほろりとしてぬる。此が  
長生とすゝでせうよ。

昭和五年春

森田草子

煤

煙

水中に滑るゝ如き手つきして

頭のあらゆる偶像をだく

日が落ちて、空寂の怪しく成つた頃である。

東海道線の下り列車は、途中で故障を生じたので、一時間餘りも後れて岐阜驛へ着いた。車掌が「きふ、きふ」と呼びながら、一つ宛車輪の戸を開けて行く。其後から、乗客は零れる様にプラットホームへ降りて、先を争つて細路の上に架けた橋を渡らうとした。

小島要吉は三年振りで此停車場に立つた。今頃故國の上を踏まうとは昨日迄も思つて居なかつた。去年の夏大學を卒業した時でさへ、歸省して見ようなどと云ふ心は起らなかつた。小さい時から郷へ出た、いろ／＼因由が有つて、故郷へは歸らない。一生歸りたくない。天が下に自分の生體といふものが無ければ可いと思ふこととさへなかつた。それが今度止むを得ない事情で、突然歸つて来て、早くも聞かれた土音を

耳にし、見慣れた風俗を眼にすると、幾許永く他國に放浪して、自分だけは他所の人間に成濟したつもりで居ても、矢張り此處の上と水とで出来た人間だなど云ふ感じが俄に強く成つた。要吉は妙な心持に成つて、一番後から橋架を渡らうとしたが、偶と他所の側に、兩人の纏附が道をに連れられて竹の子笠を被つた儘立つてるのが眼に着いた。他の乗客が通り過ぎるのを待合せて居るものらしい。何處から護送されて来たものか、一人は人相の悪い老翁で、じろ／＼と前を通る人の顔を眺めて居たが、最一人は肩の寄せた女で、流石に飾向き加減に成つて面を見せなかつた。要吉は思はず足を留めた途端に、顔を上上げた女と眼を見合せた。二十四五の色の悪若い、白眼の勝つた女であつた。固より知らぬ女である。で、只斯う云ふ者を見た時に誰もす可厭な感じがした許りで、其儘通り過ぎた。改札口で切符を渡して居る時、直ぐ自分の背後

から其兩人が隨いて來るのを見た。荷物を受取るのに良殿取つて、人力車を雇つて新出した頃は、町の見世に燈火が點いて居た。兩側に柳を植ゑた八間路といふのを原直ぐに駆けさせると、間もなく芝居小屋の櫓だの看板だのがごた／＼して人通りの賑しい十字街へ出た。其處を突切つて、滑川に沿うて行くと、暫く藍鯨の裏手に成る。高い黒板塙の角で、又前の纏附を見かけた。單に吹かれたながら腰繩を打たれて、地倉の前をとぼ／＼と歩いて行く。要吉は景一度好く女の顔を見定めたいやうな気がして、車の上から振り返つた。能くは分らぬが、其女は懐妊して居る様に思はれた。外套の襟を立てて、兩人は今夜何處で寝るのだらうと思つた。兩人は同じ犯罪で捕られて行くのか、それとも互に知らぬ同志で、偶一緒に護送されるだけか。同じだとすれば何んな犯罪だらう。放火か、亭主でも殺したのか。何れにしても込入つた事情がある様に思はれてならぬ。又下らぬ妄想を始めたなど、自分で打消して見たが、今更女と罪惡とが未來永劫離れ難いもの様に思はれて、唖り落ちさうな空模様と一緒に、要吉の胸を壓し附けた。

要吉は自分の不行跡な生活を想ひ出した。去

年の冬、かねて妻と極つた隅江を故郷から招び寄せたには寄せたが、女の身に成ると、却つて招び寄せられない方が可かつたかも知れぬ。一日もほつと思つた日は無からう。それが此春腹の兒を出來たと分つた時、産をする爲と云ふので實家へ歸した。其後で要吉もほつと息を吐いた。隅江は實家で、女の兒を生み落したと云ふが、生れた兒も弱く、自分もそれから三箇月にも成るのに、未だぶらぶらして居るさうだ。當人からは只一日も早く快く成つて東京へ行きたいと云つて寄越した許りだが、母親のお絹からは是非一度歸れと幾度も云つて來た。それにお絹は又お絹だけで別に相談したい事があるもので、外でも無い、要吉の家に賣れ残つた林を抵當に金子を借りようと云ふのである。お絹は平生の氣性にも似合はず、要吉に橋突いて執拗く云つて來た。それには又それを云はせる者が有るので、要吉は其人と母と、引いては自分と三人の關係に想ひ到る毎に、常に咽喉を扼されるやうな心持がした。初めは手紙で間に合はせる積りで居たが、周圍の紛糾した事情に堪へなく成つて、何事も一思ひに遣切つて仕舞ふやうな了簡で、急に新橋を發つて來た。が、偕て此處迄來た上で考へて見れば、自分の様な意志

の薄弱な者が、面の當り會つた上で、何を爲し得よう、何を言ひ得よう、其結果は纏れた糸を一層纏れさせるだけに過ぎない。要吉はこの儘此處から、引回さうかと思つた。車は監獄の裏から寂しい町を幾町か走つて、堤へ上つてやがて長良橋へかゝつた。川風が寒い。石河原へ引上げた新造の船の横腹を覆を焚いて焦して居るのが、橋の上から見える。長良の町端れから往還を左へ折れて、一里許り走れば、要吉の生れた村へ着くのだ。一筋の道が宵闇の中を仄白うつゞく。氣候が急に冷たく成つた所爲か、其邊の村々をそゞつて歩く者衆一人にも出會はない。人力車の輪が轆々と響く。要吉は帽子を眉深に冠つて頸垂れたまゝ、何處を如何して來たとも知らない。村の取附の水車小令で、杵の音が耳へ這入つた時、初めて眼を覺した様に頭を上げた。人力車の輪音を聞附けて、犬が小舎から走り出して吠え始めた。其處から二町許り行つて、用水の上の土橋を渡ると直に生れた家だ。要吉は門前で車を降りて、漕りを押さうとしたが、分銅の工合が悪くて聞かない。扉に凭れたまゝ少時蹲つた。何だか自分の家へ戻つたやうな氣がしたい。知らぬ他國に行暮れて、一夜

の宿を借りに寄つた様な心持である。そして間に中から扉を引いて、弓張提灯を持つた五十近い女が顔を出した。「まア要さぢやないか。餘り遅いで、今與三松の七へ訊きに出かける所ぢやがな。さあ早うお這入りやすな。」扉に片手を掛けたまゝ、お絹は身を開いて要吉を通した。要吉は一寸母親の顔を見て頷いた許りで、黙つて漕りをくゞつた。車夫が後から革鞆を兩手に下げて這入つて來た。お絹は一寸門外を見廻したが、追ひ纏る様に隨いて來て、「與三松は如何した、あれは如何したぞい。」「え、與三松? 知りません。」「まア停車場まで迎へに遣つたのに。屹度人込でうろ／＼して居て、見外して仕舞つたんぢやろ。」「左様でしたか、私も氣が附かなかつた。」要吉は行儀よく並べた圓い石の上を母屋の方へ歩いて行つた。小さい平家造りである。湯を立てたのか、鹿から煙がもう／＼と立昇つて、ばち／＼と豆殻の爆る音がする。偶と見ると、一人の女が風呂桶の前に蹲んで、肌を脱いだ兩の肩に濡手拭を二重かけたきり、小氣味よく

發育した乳房の邊りをあかくと火に照されて居るのが眼に映つた。足音を聞き附けて此方へ向いた拍子に、黒い唾がざらりと流れた。戸口まで立上つて来て、

「矢張り要様ぢやつたらうがな」と聲をかけた。

「あ、お倉か」と言つたまゝ、要吉は側を擦り通つて縁鼻にどざりと腰を下した。

「與三松に會はんのぢやとさ」と、お絹が張合の袂けたやうに言つた。

「まア何の事だ」とお倉は舌打して、「それに今頃迄何處を迂路々々してけつかるんだらう、あの神間めが」と、口汚く罵つた。與三松はお倉の弟である。

「歳が行かんもんぢやで仕方がないわな。其間戻つて来るぢやろと、今度はお絹が取成す様に言つた。

お倉は風呂の蓋を取つて、手を突込んで湯の加減を見て居たが、要様、直ぐお風呂へお這入りして如何ぢやな、着替へんさる前に。」

「お倉様、左様するが可えと、車夫から荷物を受取つて、座敷へ運んで居るお絹も言つた。

要吉は立上るのも無い位疲れて居るので、黙して居たが、お倉が急ぎ立てる様に言ふので、

一日肩の張つた洋服をゆき棄てて、下駄を突かけて土間へ廻つた。湯氣の一杯立昇つて居る風呂場へ飛込んで、頭を桶の縁へ凭せたまゝ、ぢやぶりとも香をさせないで沈んで居た。

お倉は門側の物置から柴を一把抱へて来たが、どざりと其處へ下して置いて、「お湯の加減は宜しいかな」と訊いた。要吉は返辭をしないで、うつとりとお倉の容子を眺めて居た。お倉は風呂の下を覗く様にして、長い火箸でつゝいて居たが、手に餘る黒髪を弛く束ねて桶で留めたのが、俯向く拍子にぐらりと肩へ落ちた。

お倉は周章で桶を捨て、兩腕を上げて手早く束ねようとした。小さい頭が大きく長い頸の上に乗つて、腕から胸へかけて若い男かと思はれるほど氣持よく筋肉が發育した中にも、何處か女らしい婀娜さも見えて、暗闇から浮出した様にすらりと立つた姿は、名工の手に成つた銅像の様に思はれた。

一體此女は幾歳に成るのだらうと思つた。要吉が知つてからは、何時でも此通りの容貌をして、此通りの身體附をして居る。

お倉は此村に一軒ある×××の娘であつた。親爺は村内に死人があつた時墓穴を掘るのが役で、冬に成れば夜番もする。其手隙には川魚を

捕つて賣る。又百姓の閑な頃には浪花節を語つて近隣村を打つて廻つた。人からは其方の藝名で辰丸々々と呼ばれて居た。母親は又産業を稼いで、此近所界隈の女房でお倉のお袋の手にかゝらぬ者はなかつた。こんなにか家内中が稼いで好い錢を儲けながら、それで居て、家は年中風車で、村でも氣の好ささうな權那場では必ず借錢をした。お倉も十七八の時分から娼妓に賣られて、初めが沼津、次に吉原、それから静岡の二丁町、大阪の難波新地といふやうに、五六箇所も住んで移り來た。勿論其間には金持の隠居に引かされたことも有つたし、所好な男と前借を踏んで逃げ出したことも有つた。

それが如何云ふものか半年と續かず、其處何に男を棄てて、何時でも此村へ戻つて來た。そして親爺の側で百姓の手傳ひをして居た。左様して居る間に金が詰つて來ると、嫌な顔もせず又稼ぎに出かけた。これだけ永く娼妓などして居れば、酒の香が身に沁みて、土臭い田舎が可厭に成りさうなものなのに、お倉は一方向平氣だつた。何んな荒い野良仕事をさせられても嫌とは云はなかつた。時たま、兩親と喧嘩することもあるが、そんな時は何日でもお絹の許へ逃げて來た。そして一日も二日も家へ歸らな

いで差込んで居た。

日頃から此二人は合口で、お絹も自分が若い盛りに町から在郷へ嫁入りして来て、山のこけ猿の様に手が荒れて仕舞つたといふことを、生涯の不平にもし又自慢にもして来たやうな女だから、お倉の外に一寸話の合ふ者は無かつた。

お絹の實家は今潰れて仕舞つたが、元名古屋に有つたので、お絹は誰に向つても好く自分が十三の歳から御殿へ上つて、前様のお側でお宮仕へをした時の話をした。別けて好くするのは、

秋になると御簾中様のお供をして、出来町の先のお林へ疋狩に行つた話であつた。髪を兒輪に結つて、羽二重の裾模様を着て、撫縁の帯を腰結びにして、赤い鼻緒の草履を穿いて、御駕籠に引添つて、しゃなら／＼と清まして行く。自分の家の傍を通る時に、近所のお友達や母親達が見物して居て、あれ彼處にお絹さまが行く／＼と小聲で囁くのが聞えると、胸が躍つて嬉しかつたと云ふのである。要吉も此話は小さい時から側で何處となく聞かされた。それが如何云ふものか、子供心にも作話のやうに思はれて成らなかつた。お絹が其時の様子を衣裳の色合や模様まで、目に見る様に委しく話せば話すほど、餘計に誰の様に思はれた。お絹は又お倉に對し

ても負けぬ氣に成つて、昔、新地へ枕水といふ妓樓に居た萬浦太夫の全盛を聞いて聞かされた。大阪の札指の零落れた家の娘で、其頃年紀はまだ十七にも成らぬ位、それは／＼と細く見るやうな可愛らしい妓であつたが、可哀想にさる大盡に身受けされると、間もなく病み附いて死んださうな。お絹の談話工合から見れば、尾張大納言も萬浦太夫もさのみ運庭が無いやうに見えた。

此様にしてお絹とお倉とは殆ど毎日の様に話し合つて暮した。お倉は何日も意氣地が有るのか無いのか、莫迦か伶俐か分らない。女であつた。第一あれだけ永くあんな雑業を勤めて來ながら、左様いふ女に有勝ちな、色澤の悪い、病み差けた容子は少しもなく、子供こそ生まないが身體は何日もみづ／＼と脂切つて、皮一重下には若い血汐が漲つて居る様に見えた。これからして譯の分らない女であつた。先刻から要吉は茫然して湯の中に浸つて居ると、お倉が不意に風呂の縁へ手をかけて、一背巾を流さうかなと訊いた。要吉は夢から覺めたやうに飛上つたが、「いや、最う、出る、出る」と、急に手拭をぢやぶ／＼遣り出した。

「まあ静乎として被坐しやいよ」と、お倉は抑へ附けるやうにして背巾を流して呉れた。

此時要吉はお倉の二の腕に入墨をして、矢で消した痕があるのを見附けた。強い腕の力で背巾を擦られて、好い心持に成つて、「お前幾歳やらに成つたんだね」と訊いた。

「三十四」と言下に答へる。

一寸まごついたが、「まだ一人身か」と訊ね直した。

「え、と笑つて居る。要吉は風呂から上つて、お絹が握多た食膳に向つた。お絹は盆を持つて側に坐つて、お給仕をしたが、種々三年の間に變つた村の噂をした。併しあれ程差迫つた手紙を出して、要吉を呼び寄せた肝心の用事に就いては何事も言はなかつた。成るべくそれに觸らない様にして居る容子も見えた。そして一番多く隅江が産をした當時の騒動やら、それから後の消息を語つた。一彼娘が憎れもんぢやでな。それに月足らずではあるし、生れた當座はこれで育つかしらと思はれる程小さな兒ぢやつた。なアお倉さ。一本當に自宅の阿母でさへ、あんな兒が育つと云ふは珍らしいと云つてたんぢや。」

お倉は風呂から上つて、湯氣の立つ身體を拭き拭き大きな聲で返辭をした。

「江さも此頃は最う大抵快く成つた様ぢやが、一時はどつと床に就いてな。それに彼娘の阿母さんと云ふが、左様云つては悪いが、私が見て居ても眞實の娘とは思はれん位纏つて遣らん人ぞな。」

お前は要吉の顔色を眺めては、ぼつり／＼と話した。そして何かと云ふとお倉の方を向いて同意を求めの様に「左様だつたね」と訊ねた。久し振に會つた爲でもあるが、我子にも氣を置いて居るやうな氣色を見ると、要吉は何となく可憫らしくて成らなかつた。

「未だ戸外へ出歩かれないやうな鹽梅ですか。」  
「そ、そんな事も有るまいよ。明日にでも使者を遣れば、能度乘んで来るだろう。」

「なに、それにも及びません。」  
それから暫く纏つてから、要吉は好い位に談話を切上げて、子傳の時に起臥した寢間へ這入つて、記憶のある家具を引纏つて襦に着いた。停車場へ行つたといふ與三松が歸つて来て、お倉にがみ／＼言はれて居るのを夢現の境にして、其後にぐ／＼と寝込んで、間もなく何者にか驚いて眼を覺した。枕頭には古い行燈の

油に染んだ紙がぼんやり照されてゐる。何處からともなく紅を叩く音がして、大勢の聲を揃へて唱へる御誦歌が聞える。それが竹藪の向うへ廻つて遠く微かに聞えるかと思ふと、又はつと大きく近く聞える。秋の夜長に成ると、何處の汗堂とか藥師堂とかの建立と稱へて、田舎では好く老人や若い者や、男も女も一緒に連れ立つて勧進に出掛けるのだ。要吉はそれが耳について久しく眠られなかつた。

二

明くる朝要吉が寢床を出た時は、障子に日影がかん／＼と當つて居た。曇つた空は昨夜の間に名残なく晴れた。楊枝を衝へながら縁側へ出て見ると、藏の前の明地に竹屋の佐兵衛が来て居る。庇の桶を取替へるために桶はれて来たものらしい。裏の竹藪から太い眞竹を伐り出して鋸で際引き割る。引割つてから節を丹念に割つて取るのだ。佐兵衛は要吉の顔を見る、冠つて居たお倉の様な輪子を取つてお叩頭をした。  
「桶を代へるんだね。毎夜今頃取替へるものかしら？」  
「何有に、左様と云ふ譯も御座いません。何時

でも田畝の閑な時見えて遣つときますぢや。一青竹を割つて桶を造ると云ふことが、要吉の心に適つた。何となく田舎へ戻つたといふ感じが深い。それに興を催して、まだ楊枝を衝へたまゝ其處へ蹲んで、擬手と佐兵衛の薪を引く手を見詰めて居た。  
藏の前の明地といふのは、元菅屋根の柱が椽びで黒い母屋が立つて居たので、大地裏の折に七分通り割れかけたのを、幹皮粗母や父の亡くなつた後、家内は小人数で適宜して居た時分だから、ついでに取崩して仕舞つて、其頃の離家に庇を繋がせて住まふやうにした。それが今的小さい家だ。母屋の跡は其後十餘年來明地の儘で捨ててある。べん／＼草も生えた。裏の藪から根を張つた芽生えの笹も茂つた。子傳は其中を狂ひ廻つて遊んで有つた。夏と秋との收穫には藏家から製の穂や粉を乾かして貰ひに来た。年の暮には小作人が集つて、榊で米を量つて、新菜の俵へ入れて藏へ納めた。或年の秋祭には其處へ小屋掛けして、村々居を興行したことさへあつた。屋敷跡で多居を打つ様ぢや、最う其家の運勢も本だと云つて、年の年寄どもが渡つたさうな。それが識を爲したわけでもあるまいが、お倉の手一つに委ねて置いた身代は見える見

る傾いた。要吉は十四の歳から東京へ勉強に出されたが、それが大學を卒業するころには、最う小作人も年貢米を量りに、寄つて來なくなつた。

勿論其中には不作もあつた。三年續いて耕地の上を洪水が溢れて、米一粒野麥一把取れないこともあつた。左様成つては、年貢米を宛にすることが出来ない上に、片方では要吉の學資が段々かさむので、其頃から少しづつ田地を減し始めた。お絹は子煩悩であるから、我が子が成業するために、身代の無く成るなぞは何とも思つて居なかつた。只それが向う五箇年の學資があるつもりで、豫算を立てて金子を調達して、お絹に預けて置くと、一年餘りの間に何處へか消えて仕舞ふ。又三箇年位はと思つて拵へると、一年足らずの間に無く成る。お絹は自分で氣を揉んで非常に心配して居るが、其中から無くすることは矢張無くして居た。こんな工合で元々多くも無い身代だから、今では雜木りて薪や柴しか刈れない山林が數町歩と、租税が高いのと年貢が滞るので、誰も買手の無い小作人の宅地が七箇所許り残つて居るだけに成つた。それだから要吉は學生時代から少し宛は筆で稼いで、學資を補ふ様にして居たが、學校を出た

其日から自分の腕一つで世に立つ外はたかつたのである。

「要きや、顔が洗へたら直ぐ御飯を喫べなさらんか」と、家の中からお絹の呼ぶ聲がした。

二三度呼ばれてから漸と開附けて、要吉は知らぬ間にお絹が汲んで置いた金盥の湯で、べちやべちやと顔を洗つたまゝ家の中へ這入つて行つた。茶の間ではお絹が煎立をして、長火鉢の側の子然として待つて居た。要吉は座に着いたが、茶碗が二つ伏せてあるのを見て、「阿母さんも喫らないで、待つて居て呉れたのですか。それは何うも——」

「久し振で一緒に睡ばれよう思つてな」と、お絹はいそ／＼と箸を上げたが、「何も口に適ふやうな物が無うてお氣の毒ぢやなも。」

「なに澤山です。」

「それでもな、お前さんが所好ぢやつたと云つて、佐兵衛が山の芋を持つて來て呉れたて、早速汗にして見た。さ、加減見てお呉れな。」

お絹は努めて愛想好くしたが、何處かきよと

きよとして我子を憐る容子が見えた。斯うして親子差向ひで顔を見合せて居ながら、二人の間には遠い距離が出来たやうで、何うも打解けた

心持に成れない。要吉は産てお絹に或陽解の男があることも、それが何日からも知れぬ昔から續いた間柄で、今如何することも出来ない

と云ふことも知つて居た。其男といふのは矢張名古屋生れの畫工で、要吉の父が生前から知合であつたさうだが、或事情から一時國を跡がせなかつた。それが父の歿後又繁々出入するやうに成つて、來る度に毎も手土産など買つて來ては、要吉を自分の子の様に可愛がつた。それがたゞお絹に取る爲ばかりでなく心から可愛く思ふらしかつた。尤も其時分は要吉もほんの子供で、何の事やら譯は分らず、お絹が伯父様と呼べと云ふから、其通りに伯父様、伯父様と呼つて懐いて居た。其伯父様はいろ／＼家の中の世話を焼いたが、岐阜が大火事で丸焼けに成つた頃、好い仲間があるから芝居小屋を建てようといふので、お絹を説伏せて田地を大半賣入させたが、板葺の小屋が出來上つて、田舎廻りの廣役者で一興行濟んだ頃には、もう人手に渡ると云ふ様な事もあつた。其外これに類した事は幾つもあつたが、要吉は別に氣に留めなかつた。それが段々物の譯が分つて來ると、最う伯父様とは呼ばなく成つた。其男の方でも流石に考慮して稱達さかつた。其後要吉が東京へ出た

後では、又自分の家の様に入り浸つて居ると云ふことを薄く聞いて居た。それ許りでなく、其頃から気が荒く成つて、家中を引掻きまはして、有金を掴み出して使ひ捨てる。それでも足らんで、お絹を口汚く罵つて、打つたりはたいたりすることも有つたさうなが、お絹の方に未練があつて、如何しても別れられないで居た。そんな日に會ひながら、直ぐ其後から忘れて仕舞つて、二言目には伯父様がノと要吉の方へも決して悪うは言つて寄越さなかつた。其男が酒にでも酔拂つて、「俺はこんな片田舎で村果てるやうな平凡書工ではない。立派な腕を持ちながら、手藝が無いため一生、頭の上らぬのが残念だ」と、空の煙草を壘へ投げ附けて啐り立つ時などは、お絹は殿られて紅くなつた肘を撫でながら、涙を流して幾度も點頭いた。何でも男の言ふことを正直に信じて居た。此男の手にかけては、お絹は宛然新粉細工の様に如何にでも成るのであつた。要吉も是等の事情を大抵は知つて居た。それで心の中では憤慨もし苦々しくも思ひながら、自分から進んで如何することも出来なかつた。一體、要吉は何事に依らず成る様に成らせて置くことしか出来ない男で、それには又始終東京で暮して、遠く離れて居たから、

都合の好いこともあつた。けれども、今日の當りお絹の落着かない容子を見て、心では既う自分を舐外して居るのだなど感附くと、我を忘れて母親が憎らしく成つた。で、箸を下に置いて、凝手とお絹の顔を見入つた。  
 昨宵釣洋燈の火影で見た時は、さのみとも思はずはなかつたが、今朝見ると、お絹の老け様は一通りでなかつた。昔から名代の洒落者で、今も身振みがよく、何日頃の流行かは知らぬが、黒天驚絨の襟を掛けて青筋の張つた頸筋の色の際立つて白いのや、眼の縁に小皺が寄つて、紫色に見えるところなどは、昔ながらの様でもあるが、頬がげつそりと着けて頬が抜け上つた爲に、何處となく顔が野卑に見えて、これが自分を生んだ親かと情ない位であつた。昔、要吉が七八つ時の時には、他所へ連れて行つても、阿母さんと呼ばれるのを嫌がつて姉さんノと呼ばせられたものだ。今こんなに成つて居ながら、まだ年輩を隠す心持が失せないのか、好く氣を附けて見ると、いやに黒光ると思つた髪は染めたものであるらしい。これ程迄にして男に飽かれまゝいと努めるのか、いかに人間の弱點を目前に見せ附けられた様で、要吉は漫ろに淡ましく成つた。淺ましいと云ふよりは、母親が可憫ら

しく成つた。これで見れば、お絹はお絹で始終罵詈が絶えぬのだ。左様思つて見ると、可哀想に容子が落膽して居る。要吉は胸が詰るやうな氣がした。  
 「如何かお爲たのか、何もお食べんやうぢやが。」お絹は氣遣はさうに要吉の顔を見上げて言つた。  
 「ねえ、阿母さん」と、要吉は一生懸命に涙を飲み込んで、「私は今度成らうことなら阿母さんと一緒に東京へ歸らうと思つて来たんだが、如何だな、阿母さんも一つ奮發して、こんな家など兼んで出掛けては——私も左様成りや安心します。」  
 お絹は唖驚したやうで有つたが、「私もな、左様思はんことも無いが」と、頸を襟へ落して考へ込んで仕舞つた。  
 二人は暫く無言で相對した。  
 良有つて、要吉の方から口を開いた。  
 「山林を抵當にして、何れだけとか金子を借りる話だつたが、實際そんなに貸す人が有るのですか。」  
 お絹は急に元氣ついた。聲に張も出て、事實に有るのぢやとさ。それがね、お前は知らぬぢやろが七五郎と云つてな、若い時から村を飛び

出して永いこと行方知れなだんぢやが、去年不意に臺灣から大金を儲けて戻つて来て、あの蟻に有つた自家の宅地な、彼處を買つて立派な普請はするし、それはえらい勢ひぢや。其人が自家の割さへ採きや、幾許でも貸さうと云ふんぢやげな。

要吉は俯向いたまゝ聞いて居たが、ま、貸す人があるにしても無いにしても、阿母さんも彼人の爲に金子を工面するのは、好い加減に止めたら如何です。随分久しいものぢやないか。彼人の爲には自家も何度となく餘計な損をして来たのですからね。

「それだからさ」と、お絹は相手の言葉を抑へる様に、今度青山様の御道具がお拂下げに成るに就いて、それを引請けて、名古屋へ来て居る西洋人に頼める事が出来さへすりや、大變なお金に成ると云ふのぢや。左様なれば、從來損した位は一度に埋合せ、着くと云つてぢやが、何分側から競争する者もあるので、早い處手附を打たにや成らぬが、それが未だ手に入らぬので、伯父様も毎日氣を揉んでおいでぢや。一だつて左様のふ物は又其道の商人があつて、素人に儲けさせる迄放つて置く筈がない。それに舊大名の道具が今頃拂下げに成ると云ふの

も訝しいし、左様のふ事は得て詐欺師の種に使用されるものですぜ。

「いゝえ、そんな事はお前伯父様も左様云ふ方には眼が利いて居るで間違ひは無いわな。此間私も一寸見せて貰つたが、六枚折の屏風一雙で三千圓もすると云ふんでな、それは、見事な物ぢやつた。」

「三千圓の屏風は如何でも可いが、私はどうも其んな事に係り合ふ氣には成れませんね。」

斯うきつぱり言ひ切られると、お絹は又しよげて仕舞つた。

「伯父様も一生懸命に成つてお坐ぢやがなア」と、未練らしく言つたが、「それにな、實は彼人も仕事の方が面白うなうてな。盡きにかゝると何うも手が震へて不可んさうぢや。近頃は身體も減切り弱つて、私も困つて居るわな。」

「矢張酒毒ですか。」

「左様ぢやらうなと、お絹は溜息を吐いた。

伯父といふのは、名古屋から出る七寶燒の圖案を渡世にして居たのであるが、舊時代の職人で、新しい意匠の持合もなく、左様でなくとも餘り歓迎されぬ所へ手が利かなく成つては、今後如何することだらう。あれでも繪を畫く人の端くれかと思ふと、要吉は何だか才なく

して藝術に依頼する者の末路を見るやうな心持がして、如何やら我身につまされた。それと共に目頭成るべく避けて考へまいとして居る或事を想ひ出さずには居られなかつた。それは自分が或は此身を持懸した老畫工の血を別けた子かも知れないといふ疑懼である。こんな事はお絹も流石に言はないし、要吉も決して口へは出さなかつた。併し兩人顔を見合せると、暗黙の間にそれを許して居るのであつた。

要吉は其事を底迄突留めて確めて見るだけの勇氣が無かつた。只成るだけそれを想ひ出さない様に、考へない様にする外に術はなかつた。それを思ひ出せば、要吉の眼には必ず蒼い顔をして蒲團の上に横はつた亡父の、儂が泛んだ。要吉が卅歳の存亡成つたと云ふから、實際父の面影と云つては何一つ記憶えて居ない。人に聞けば八年も病褥に横はつて居たと云ふ。其永の歳月、お絹は些とも厭な顔を見せないで、他人からも感心される程忠實に病人を介抱したさうだ。それだけが切つてももの慰藉であつた。

要吉は不意に、一阿父様の二十三回忌は來年でしたかねと訊いた。お絹は妙な顔をして我子を見返したが、

「左様、來年ぢやつたらうな。」  
「阿母さん、阿父様も氣の毒な人ぢやつた。些  
たア阿父様のことも思つて上げて下さい。」  
「私が」と、お絹は眼を圓くして、「私が阿父様  
の事を忘れて居るつて、お前迄が其んな事を思  
つてお呉れか」と、俯向いてしく／＼泣き出し  
た。

が、又顔を上げて早口に言出した。

「私はこれでも阿父様の忌日命日を忘れて暮し  
たことはない。けれど、あの伯父様はな、お前  
知るまいが、阿父様の生きてぢやつた頃から隨  
分自家の利益に成つた人ぢや。そりや芝居小屋  
なんかで損したことも有るにや有つた。それを  
言出されると、私はお前の前へ顔を上げられん  
が――」

「阿母さん」と、要吉は鋭く言ひ切つた、「私は  
そんな事言出しちや居ない。――」

「そ、それが」と、お絹は狼狽して、「そんな事  
お前は言出しは爲なさらぬ。けれども、それ  
を思ふと私の胸は實に切ない。それと云ふが、  
伯父様だつて昔お前の利益を思つて、自宅の身  
代を譲りたいばかりで計畫んだ事ぢやけれど、  
何々も思ふ様に成らなんだのぢや。お前だつて  
伯父様のことを餘り悪う思つては濟むまい、濟

むまい。一段々泣聲に成つて、しどろもどろな事  
を言ふ。

「要吉は黙つて見て居たが、やがて、阿母さん、  
ま、泣くのは止めて下さい、泣かなくとも譯は  
分つてる。私は斯うして東京から態々來た位だ  
から、阿母さんもそれ程に思つて居るんだもの、  
決して證文に印を捺すのを拒むつもりは無い。  
勿論私もあんな賣れ残りの林など當にしちや居  
ないんだから、阿母さんの好い様に爲さるが可  
いのだ。だが、愈々抵當に入れて金子を借りる  
と成りや、もつと好く事情も調へた上で、毒に  
見込が着いてからにしたい。ね、左様でせう、  
それが至當でせう。」

お絹は返辭をしないで、子供の様にしやくり  
上げて泣いて居たが、急に袖で眼を拭つて顔を  
上げた

「最う解つたで何にも言つてお呉れでない。今  
度伯父様が見えたら譯を言つて斷りませう。

ね、私も好く得心が行つたで、最う心配してお  
呉れんが可え。

要吉もお絹が當て附けたやうな變り方に氣が  
附かんではないが、別に何とも言はなかつた。

やがて二人は冷えた飯を茶漬にして、飲み込  
む様にして、食事を終へた。

三

今朝も空一面に着く暗れ渡つた。三反計り昇  
つた太陽の光線を眞正面に浴びて、要吉は町か  
ら長良の町の方へ新道を歩いて行つた。近頃縣  
道に編入されて道普請をしたので、幅の廣い道  
が何處までも眞直に續いてゐる。こんな道を少  
し急ぎ足に歩いてると、何時となく胸が廓然と  
して心持の好いものだ。電信線が一本だけ道  
に沿つて低う張つてある。それへ幾羽とも數へ  
切れない雀が行儀よく並んで棲つて居て、人  
が近づくとほと立つ。要吉はそれに氣を車ら  
れて、殆ど何も考へないで歩いて居た。

幾度も市場へ野菜を曳いて行く荷車を追ひ越  
した。其間自分も後から來た郵便脚夫に迫附か  
れた。頭笠を被つて、荒い麻の囊を棒の先に  
結び附けて擔いだのが、飛ぶが如くに行つて仕  
舞つた。要吉は其後影を見送つて居たが、偶と  
可憐なものが眼に映つたので、俄に惡寒でもす  
る様に足を留めた。

前面の道から十間程横へ入つた大根田の中  
に、六坪か七坪の小さい篠竹の數がある。土俗  
道三の首擧と稱へて、要吉が小兒の時分には、稻  
葉山の麓のおぼろが池と共に諸人恐れて近寄り

なかつた。藪の中には一基の墓石が半ば土に埋もれてると云ふことだが、要吉は嘗て見たことはない。舊記によれば、道三は俗名を齋藤庄九郎といふ。京都の油賣で其性篤悪、美濃に來つて國司土岐氏に寄寓して居る間、欺附つて其一門を塞しにし、此國を横領した。一時は悪運強く世に時めいたが、老後子の義龍に代を譲つて、其身は別に砦を築いて隱居するに及んで、忽ち仲違ひして父子干戈を交へ、長良川を挟んで陣するに至つた。一戦して道三の軍破れ、總に身を以て逃るゝ所を、百姓の爲に竹槍で突破された。弘治丙寅二年四月歿す。行

年六十五歳とある。其後首は河原に捨てられたが、近臣それを拾つて此所に埋めたといふ。村の百姓は固よりこれだけの事をも知らない。只此數には道三の執念が何日迄も残つて居て、若し過つて足を踏み入れた者があれば、直に怖ろしい祟りがあると傳へて居る。それも要吉が子供の時の話で、それから十四五年も経つた今日でも、小學校へ通ふ子供達が道草を喰ひ過ぎて、夕暮れ人顔の朧に見え出した時など、矢張此藪蔭を袂で頭を隠して駆け抜けるか如何かは分らない。

何と思つたのか、要吉は前後を見廻して、盜

む様に畑中の小徑を傳つて、此藪へ近づいた。垣根に手をかけて、及び腰に成つて藪の中を覗いて見た。竹に絡つた蕨だの蔓草だのが未枯れて、大分奥の方まで見透されるが、別に怪しいものも眼に留らなかつた。それでも中へ踏込んで見る氣には成れないと見えて、靜乎と手を撰いで立つて居た。

此時要吉の眼に明々と泛んだ幻がある。切主頭の白髪が五分許り延びた、面瘡せて、身丈の鬨抜けて高い老婆がじつ許りの男の兒の手を引いて、朝まだ日がしらぬ間に、人目を懼つて狐鼠々々と此藪蔭へ近づく。やがて袂から三寶と土壺とを取出して、御酒を此藪の主に供へた。先づ自分から地に跪いて、合掌して長い祈念を凝した。それから側に怖々立つて居る孫にも、自分の通りにせよと教へた。男の兒はがつく齒の根を合せながら、教へられた通り小さい手を合せて拜んだ。老婆は、「最うこれで可いぞよ、さあ歸ら」と言ふ。男の兒は泣出しさうな聲で、「お祖母、お祖母」と呼びながら、「一生懸命に老婆の手に縋つて、迷出す様に走つて村の方へ戻つて行く。」

此老婆は二十年前に世を去つた要吉の祖母で男の兒は要吉自身であつた。

四年の間、月の初めの朔日には、夏も冬も、この藪蔭に此二人の影を見ないことはなかつた。只何かして朔日に雪が降つたり、雨風の烈しい朝などは、老婆一人で来ることもあつた。老婆は歸りの道すがら孫に向つて言つて聞かせた。「此様にして毎月お前を連れて来て、道三の墓へお詣りして御説をするのも、皆お前の祖父様が餘り氣が荒かつた爲ばかりぢや。あの時私が幾許留めたか知れんのに聞き入れなさらんで、昔から祟りがあると云ふ道三松を到頭代つてお仕舞ひなされた。それから自家は道三に祟られたのぢや。」

祖母はこれから後は語らなかつた。要吉の子供ごろには何の事とも譯は分らなかつたが、只道三が怖いと云ふことだけが、小兒の頭に深く沁み込んだ。道三といふと種栗頭の白い刺々した鬚の生びた、丹眼で色の青黒い大入道の様に思はれて成らなかつた。明日の朝は又祖母に連れられて、例の處へ行かねば成らぬなと思つて寝ると、其夜は屹度大入道が來て要吉の背中に負はれようとした。それに隠されて一時顔色の悪く成つたことさへ有つたが、そんな夢を見たといふことは、祖母を初め誰にも言はなかつた。それを口外すると悪いやうな氣がして居た

のである。

其後誰から聞いたと云ふこともないが、何日となく要吉の知り得た事實を綴合せると、要吉の祖父に當る人で、祖母の連合といふのは此村の里正であった。若い歳から親の跡目を繼いだので、血氣に任せて我儘な振舞ひをすることも随分多かつたさうな。或時何のためかは能く分らぬが、道三松を伐らうと言出した。其頃祖母は長良の常願寺といふ寺から嫁に來た當座であつたが、それは餘りなと云ふので、切に留めた。けれど、留められると尙張合があるもので、血氣盛りに祟りなし、退込んで俺の遣口を見て居れと云つたやうな調子で、一向聞入れる様子もなく、翌日から袖を備つて來て、大小三本あつた老松の中で、初めの日は左の一本を伐つた。其日は何事もなかつた。それ見たことかと云ふ様に、勢づいて、次の日も右の一本を倒した。三日日には、愈中の一木で、四五百年も経たかと思はれる此大木を伐り倒せば、それでお仕舞ひと云ふのだから、皆朝早くから出掛けた。祖母も其日は流石に氣が弛んで、閑かな日向で薬物をして居る所へ、備はれた袖の一人が息せき切つて駆けて來た。突然祖母の袖を掴んで、「大變だ大變だ」と叫り、何を言ふのか分

らなかつた。漸く今此處へ旦那が釣られて戻つて來ると云ふことだけ分つた。祖母は的切り倒れる松の下に成つて氣傷をしたに違ひないと思つたので、其儘便の者を捨てて置いて、ひとりで駆け出した。途中まで行くと、向うから祖父が人の背に擔がれて來るのに出會つた。駈取座敷へ擔ぎ入れて蒲團の上に寝かしたが、其時も祖父はまだ正氣を失つて居た。袖は皆異口同音に言つた。今朝も毎もの通り向ひ曳きの大綱で勢よく伐り込んで、九分通り伐れたところで、いざと云ふので皆片側へ寄つて、此方から綱で引張ると、流石の大木もめき／＼と軋んで、見る／＼凄まじい地響きを立てて倒れたが、怖ろしや、其利那代口からばつと血を噴いた。それが眼に映ると、根元の方に見張つて居た祖父は即座に卒倒して仕舞つた。其場に居合せた者は、誰も彼も皆血が噴いたのを見たと言つた。それで自分達も何んな祟りを受けるか知れぬと言つて、青く成つて戰へて居た。祖父はそれから息を吹き返すには返したが、兩眼は其儘盲目で、熱は何日迄も退かなかつた。醫藥も、加治所禰も、祖母が心づくしの介抱さへ更に驗が見えないで、四十日餘りも悩んだ果に、三十一を一期として息を引取つて仕舞つた。

祖母は其頃懐胎つて居たので、間もなく男の兒を備けた。元來氣丈な女であつたから、そんな幼孩を力に二十の歳から六十の歳まで、さまざまな憂い日辛い日も堪へ忍んで、四十年の間家婦を通して來た。其子が成長して、お絹といふ嫁を貰つて、祖母はもう是れで安心して眼が眩られると云ふ段に成つてから、一生の杖でも柱でもあつた息子が又病褥に親しむ身と成つた。それが人の思む脈痛といふ病で、永年煩つて、終ひには一間に閉ぢ籠つたまゝ、見るもみじめな最期を遂げた。息子が病氣に罹つた時一番力を落したのは祖母で、或年京都へ上つて六條の本山に參詣したついでに、名高い易者があると聞いて訪ねて行つて見て貰つた。易者は祖母の顔を見ると、直ぐに首を振つて、「お前さんはえらい業人だ。何でもお前さんの家では由緒ある樹を伐つたことがあるに相違ない。それがお前さんの家へ代々祟るので、お前さんの息子だけぢやない、孫があれば、孫も同じ様な病氣に成るか、それが違へば氣が狂つて早死にする。氣の毒ぢやがお前さんの家の血統が絶えなければ、其祟りは遠くまいよと、圖星を指した様なことを言つたきりで、向うを向いたまま、後は何を訊いても相手になつて呉れなかつ

た。それでは取附く島もないので、必死に成つて願つた末やう／＼易者は、「まあ其祟りの元へ好く罷つて見るのだな。それも験が有るか無いか、私は請合はぬ」と言つた。それだけの言葉の端を手廻にして、祖母は着く成つて故郷へ戻つて来た。それからである、祖母が世を終るまで、毎月の朔日には、雨の日も風の日も、人目を避けて此道三の墓へ詣るやうに成つたのは。

小さい時は、要吉も實際祖母の云ふ通り左様いふ祟りや呪ひが有るものと信じて居た。世の中は只眞暗に見えた。自分の一生は、雨のしよほしよほ降る晩に、野中の細道を提灯一つ力

によほ／＼通るやうな気がして心細かつた。祖母は八つ歳の歳に死別れた。それからは母親の手一つで育つて、随分甘やかされたが、如何いふものかお絹には餘り懐かなかつた。お絹が例の伯父様と一緒に岐阜の町へ出掛けて歸宅の遅い時などは、子供心の寂しさに、門前の柱に凭れながら黙つてひろ／＼とした野末を眺めて居た。冷たい涙が二筋頬を傳つて流れる。こんな時には歸つて来ない母よりも、死んだ祖母が戀しく成つて、聲を出して、「お祖母、お祖母」と呼んで見たこともあつた。

良長じては、そんな家の祟りと云ふやうな

のに對する恐怖の念は薄らいだが、其代り疾病の海傳が有りはせぬかと云ふことが氣にかゝり出した。手を切り足を斷ち、木／＼斷株の様に疲たきりで、何から何まで人の世話に成つて、それでじり／＼と命數の盡きるのを待つ。そんな事が堪へられようか。いや左様成るまで、斯うして手を束ねて待つて居る方が、猶更堪へられない。晝夜中飽と眼を醒まして、蒲團の上に坐つたまゝ、甲斐妻のない前途を想像して、戰慄したことも何度有るか知れぬ。其都度父のことを憶ひ出しては思ひ返した。其通りの生涯を経て通つた人が、既に自分の前に有るのではないか。自分は其不幸な父が代しい晩年の、唯一の慰藉であり希望でもあつたと云ふではないか。それ

だけでも自分が此世へ生れて来た甲斐はある。假令父と運命を共にし數奇を分つとも、父の爲に犠牲と成つたと思へば、悔いる所はないとまで思ひ詰めた。

父の佛と云つては、直接要吉の記憶には残つて居なかつた。が、其頃父の挨拶を頼まれて来い／＼したお倉のお袋がいろ／＼話して聞かせて呉れた。この婆の語に依ると、要吉が生れる迄は、父は飽迄家の跡目が自分一代で絶え

る覺悟をして、人から養子など勸められても、頑として聞入れなかつたさうだ。それで生前から氣に入つた小作人に家屋敷や田地を分けて遣りなどした。それが子供顔を見てから急に思ひ止まつたと云ふことである。要吉は此話を聞いて父が自分を生れるものと思つて居なかつたと知つた時には、何とも名狀し難い妙な心持がした。父は其身限りで小鳥の家の血統が絶えるものと思つて居た。或は絶やさうと計つて居たのかも知れない。一只一代延びたこと、要吉は冷やかに考へた。

要吉が東京へ出たのは、最初陸軍に身を投ずるためであつた。恰度日清戦争が終つた頃で、地雷火の洗禮を受けて、身體が跛方もなく粉砕されると云ふことが心を惹いたのだ。が、間もなく其志望を放棄した。陸軍へ這入ると云ふことは、身體が木の斷株に成る前に、先づ頭が木の斷株に成らなければならぬことが解つたからだ。陸軍の方でも要吉の様な士官を得なかつたのは勿怪の幸ひだらう。

一年振りで歸省した時には、前とは大分心持も變つて居た。此夏要吉は例の婆から一大事を聞いて仕舞つた。或は其頃の家の亂脈を見かねたのかも知れぬが、或日要吉に向つて斯んな事

を言つた。「先づ旦那は本當に氣の寛大な人ぢやつた。世間ではお細さまの悪い噂が立つて、要吉だつて誰の子か分るもんぢやない、其證據には此とも仰て居らんぢやないか、とそんな事を言ひ頼らして居ると告げたら、只寂しきうに薄笑ひして私の宅で私の家内が生んだのぢや、私の子に相違ないではないかと言つたきりで、相手に成らず、餘計な告口したやうで、却て此方の顔が銀く成つた」と。婆は別段何とも思つて居ないのであらう、こんな事を平氣で言つたが、聞いた要吉は足下の大地が靡り落ちて行くやうな氣がした。此上即ちして見る勇氣は出なかつた。其後も此事については何人とも口を利いたことがない。今でも未だ婆の言つたことを虚偽とも眞實とも思ひ定めては居らぬ。何方も可厭であるが、何方にしても一身の破滅は免れない。只人間は何んな境遇にも慣れて仕舞ふものである。其後の要吉が放縱な生活は、其時すべての理想に對する信仰を失つた爲だとは、流石に自分でも考へることを恥ぢて居た。

それを今逢りすがりに、久らく忘れて仕舞つて居た道三の首が目に着くと、自ら祖母の佛が眼に迷ひだ。六七十年前に此佛堂で起つたといふ家の蕃藪が掘り出される、松の樹の幹から血を噴いた。そんな事が有るものかとは、要吉には如何しても思ひ切れない。それは恐らく一種の幻覺でもあつたらう。けれども祖父は確にそれを見たのだ。その爲に生命まで取られたのだ。祖父で無かつたら、そんな血は見えなかつたかも知れぬ。けれども祖父に取つて、松の樹を伐つて血が出るのは、人の腕を切つて血が出るよりも確な事實であつたのだ。祖母は啞くそれを信じて居た。父は分らないが、其人は生きながら影に成つた魂を見るやうな人であつた。要吉も此家傳の幻惑を免れぬのではなからうか。昔、祖母が此墓の前へ連れて來て手を合せて拜ませた時、小さい心に種子を蒔いたのだ。何日かは其種子が芽を吹かずには止むまい。

要吉は組んで居た手を解いて、念の爲に小坂を一周りして見た。それから又元の所へ出て、だらりと手を垂れたまゝ立つて居た。

「要様、何してるのぢやな、そんな處に立つてり」

不意に聲を掛けられたので、要吉はぎくりとして振り返つた。お倉が道から此方を向いて立つて居た。

「え、なに」と、要吉は強ひて何氣ない顔をして、

畑の畔を傳つて道の上へ戻つて來た。

お倉は今土の中から引いた許りの藁箒を一杯詰めた手籠を提げて居た。裾を高く踏折つた下から白い腰巻を見せて、朝露に濡れた脛には菜の枯葉がへばり着いてゐる。

「早うから何處へお出掛けやアした？」

「うむ、一寸常願寺まで。」

此寺は祖母の生れた家であるが、又隅江の實家でもある。要吉と隅江とは又従兄妹同志で有つた。

「あ、お在所へ。何かな、隅さまは貴方が此方へお出のこと最う知つて見えるかな。」

「いや、未だ知るまい。」

「ま、それぢや早う行つてお上げなさい。そりやア可愛らしいんですよ。見やしたら、屹度連れて行きたく成る位だに。」

「赤ん坊かい。」

「え、一寸何んな氣持がするの、殿方でえものほ？」

「何が。」

「初めて子持に成つてさ。」

「左様さね」と言つたが、「成程、お前は子供を生んだ覚えが無いんだね。如何だい、違らうか。」

「そんな事言ふもんぢや有りませんよ、冗談にも。大切なお児を私等風情に」と、お倉は眞顔で言つた。

だが、子供は眞個一人欲しいと思ふことが有りますよ。志主なんざ一生欲しいとは思ひません。

「そんなものかい。」

「だつてと、何やら言ひ掛けだが、不圖氣を變へて、今夜彼方でお泊りやアすか。」

「いや歸るつもりだ。何故？」

「何故と云ふこともありませんが、お倉は言葉濁して、「阿父が、今頃旬外れの鮎が捕れたで養上げたいと云つてましたから——」

「それは有難う。ぢや又。」

要吉は踵を回して五六歩踏み出したが、お倉が又「よいと、ちよいと」と呼んだので振り返つた。

「お倉はちよ／＼笑ひながら戻つて来たが、何と思つたか聲を潜めて、「貴方、東京で何か陽さまに心配させやしたことが有るんぢやないか。」

「何を言つてるんだな」と、要吉は事もなげに斥けたが、お倉の眼附を見ると又氣に成るので、「隅江が何かお前に言つたのかい。」

「いゝえ、何も聞きやしません。ですが、そんな事位私が見りや大抵解りませアね。」

「莫迦な」と、要吉は空嘯いた。

「そんな事如何でも可いに、早う行つてらつしやい。左様なら」と、お倉は尻上りに言つて、後も向かずに、村の方へ歸つて行つた。

お倉に別れると要吉の心は又沈んだ。自分は既に人の親であると思ふと、それが今初めて起りでもした様に愕かされる。父は其身一代で家の跡を斷たうとした。そこへ自分と云ふ者が生れて、父は其生涯の祕密を抱いたまゝ死んで行つた。切めて自分の代には父の志を果さうと決心したことも有つた。それが矢張り知らぬ間に——

若し左様云ふことを許されるなら——知らぬ間に次の代が出来て仕舞つた。生れて来る子は、何も知らずに、此呪はれた家の一員と成つて、其小さい肩に家の呪詛を分けて擔はねばならぬ。斯う成れば最う手の下しやうは無い。生命の流れは今幾幾萬年を経て、時の流れの悉きるまで續くかも知れぬ。斯う考へて来て、要吉は思はず兩手で胸を搔抱いた。強い恐怖の念に襲はれたのだ。死は不可思議である。而も生は更に不可思議である。其測り難い神祕に、これから行つて面の當り會はなければ成らぬ。

要吉は幾度も途の上で振り返つた。何だか怖ろしい物を避けて見ないで居る様に思はれて、氣がさして、故らに眼を放つて前的小藪を見遣つた。小藪は光の波の深ふ中に、只靜に黒く立つて居た。

#### 四

やがて要吉は柱を赤く塗つた寺の門をくゞつた。木堂の屋根に草が一二本立つたまま、枯れたのが眼に着く。正面の雨滴落に録物の天水桶が指差してある。近寄つて中を覗くと、足の長い蟲が青く濁んだ水の上を彼方此方走つて居る。それを見詰めたまゝ、何の爲にこんな處へ来たか忘れて仕舞ひたいやうな心持に成つた。

森とした寺内で俄に犬が氣たゝましく吠え出した。要吉は自分が吠えられる様な氣がして、ふいと顔を上げると、庫裡の戸口にぼろ／＼の襦袢を下げた乞食が一人立つて居た。犬はそれを遠巻に吠える。戸の中から女が手を出して、盆の米を囊の中へ明けて遣つた。乞食はそれを貰つて囊の口を緊めると、遠で逃げるやうに門の方へ出て行く。内からしつ／＼と犬を制する聲がした。それでも却々吠え止まぬので、

盆を持つたまゝ隅江が出て来たが、男の姿を

見て、

「まあ、眼を睜つた。」

要吉は女の側へ近寄つた。

「あの犬は自宅に飼つてゐるのか。」

「いえ、角の床屋の犬ぢやさうですが、始終自宅へ来て居て、人様に吠え着くので困つて仕舞ひます。」

斯う言ひ、隅江は前に立つて戸口を入つたが、戸外から来た者は眼がぼつとして、家の中が薄暗い。縁の高い上り框には、黒塗の杵の腰高障子が閉めてあつた。それを開けると、又

ぼつと明るい。要吉は靴を脱いで上つた。今迄其處で隅江が針仕事をして居たものと見えて、紅い唐縮緬の鏡を束つた座蒲團の周圍に、縫ひかけの紅絹の裏が放り出されて、針を抜いた儘の針箱だの綿巻の袋だのが散らばつてゐる。が、此處へ上ると直ぐに要吉の眼を引いたのは、縁側の方を庇にして、小さい蒲團の下に寝かされたもので有つた。被けた蒲團が堆いので、顔は未だ見えない。其間隅江が奥から座蒲團を持つて来て、襦袢をきて、要吉は黙つて其上に坐つた。

「まあ何日か歸りやアした。此とも存じませんでしたか——」

「昨日の晩着いたばかりだ。急に思ひ立つたので知らせる暇が無かつた——」

「まあ好かつたこと、隅江は何日ない嬉しうな顔をして、一あんなお手紙でしたけれど、それでも一廻来てお呉れやアすと可えがと、何の位思つて居たか知れませんか。」

要吉は返辭をしたかつた。兩人の視線は申合せた様に小さい蒲團の方へ注がれた。足許が少しうごめく様である。

「最う見て遣つて頂戴したか。」

「うゝむ」と、笑つて顔を振つた。

隅江は蒲團の側へ擦寄つて、上から半手で窺ひ込んだ。薄赤い頭の毛がもじやくと生えて、顔の少し膨んだ小さな生物が見える。何だか怖ろしい物でも見たやうに要吉は急いで身體を退いた。何うもこれを見て親子と云ふやうな心持は起らない。それが世間の人は左様でないのに、自分一人起らない様に思はれて、何となく気が咎めもした。

子供は薄目をして眠つたまゝ、呼吸もしない様に見えたが、時々うついで口を窄めて、乳を吸ふやうにびく／＼させた。

「お夏ちゃん、もう起きなさい」と、相手に解るやうな物言ひをして、隅江は子供の背へ手を廻して抱き上げた。未だ顔が揺らぬか動かず度にとぐら／＼して、見る眼に危さうである。要吉は思はず手を出して留めようとした。

「さ、眼々開いて、此方向いて御覽、これ誰方だえ、誰方が解るかえ」と、隅江は男の方を向かせて、子供に親の顔を見せる様にした。

要吉は黙つて母子を見た。頭の中を往來した心持は自分にも解らなかつた。

其時急に小兒が顔を覺めたかと思ふと、形に似合はぬ大きな唖をした。

「唖したの、お夏ちゃん。大人の爲る様なこと何でも爲ますわね」と、隅江は子供の顔を覗いて嬉しさうにした。

「お前、子供が可愛いかと、突然要吉が俯かゝる事を訊いた。

「ま、面白いこと言やアすなも」と、隅江は割れて眼を睜つた。

要吉は笑はなかつた。

「可愛う御座いますわな」と、隅江は伏日に成つて、小兒の頭の毛の中へ唇を押附けたまゝ言つた。何故そんな事を訊くのか、要吉の心持は隅江には解らない。これ迄も男の心の中で考へ

ることが、自分などの考へとは段々懸離れて、

寄附かれないやうな氣は始終して居た。けれど小兒に對しては、自分と一つ心持には成つて呉れぬのかと思ふと、今更寄邊ないやうな氣がして成らぬ。それにつれて、去年東京へ出てから半歳の間、辛かつたこと、心細かつた事などが順繰りに憶ひ出されるか、恨むことも嘲つことも知らない女は、矢張黙つて俯向いて居る外はない。

要吉も女の顔の曇つたのが眼に着いた。直ぐ女の胸で思つて居さうな事が心に泛ぶ。それが如何して違ふことも、如何して貴ぶことも出来ないうやうな氣がする。斯う成ると、要吉の様な毎も境遇に支配されて、自分で境遇を作ることの出来ない男は、むらくと力の抜けた怒氣を發して、如何とも成らば成れと投げやる外は無かつた。

暫く兩人の談話が途切れた。

縁側の障子は眩しいほど明るい。茄子の蒂を糸で繋いで廂に吊したのが、風の吹く度にかさかさとして障子に觸つて、其影が長く成つたり短く成つたりする。要吉はそれを見詰めて居た。

其間子供が泣き出したので振向いたが、隅江は子供を抱へたまゝ、此方を向いて居た。要吉が振返ると、急に眼を反して、牛乳の吸口を小兒

の口に含ませた。髪も薄く成つた様であるし、一體に寔れた所爲か、以前は左程でもなかつた雀斑が目立つて、顔が汚く見える。元からはき附かぬ質の女ではあつたが、産後の爲でもあらう、いかにも容子が懶るさうで、これでも嘗て要吉が放縱な空想をゑがく對象に成つた女だとは、如何しても思はれない。

「身體はもう快いのかと、つい釣込まれて要吉は優しく訊いた。

「最う大抵快く成りましたが、未だ如何かすると眩暈がして——」

「それぢや暖かく成るまで、悠然此地で養生して歸るが可い。

「え」と聞えない位の聲で言つたが、少時してから、「今度は何時頃迄此方にお坐やアすなも。」

「さ、用事が濟めば直ぐ歸る積りだ。」

「左様も急いでお歸りやアすのかな。阿父さんも一度會ひたがつてだに。」

「先刻から見えぬと思つて居たが、今留守かい。」

「伊勢の一身田の方へなも、此間から——」

「左様か、そりや残念だ。」

「けども阿母さんは直き歸ります。」

「さア今日は左様もして居られない。一寸岐阜へも廻る用があるから」とは言つたが、急に立上る様子もなかつた。

何時迄話して居ても、別に變つた話の種子があるでもなければ、又一向談話も冴えない。要吉は物足らなかつた。それが皆自分の所爲であると思ひながら、矢張物足らなかつた。男と女とが差向ひで坐つて、誰の前で話しても差支のないやうな話でなけりや出来なく成る。それで子供だけは生む。これが世間一通りの夫婦と云ふものであらう。要吉は取返し附かぬ物を落して来たやうな心持がした。

暫くすると隅江の母親といふ人が戻つて来た。寺のお座裡などには似合はない、至つて無愛想な機嫌買ひの女で、角額で鼻梁に節のあるのが、要吉の氣に喰はなかつた。隅江が其子で矢張鼻梁に節があるのを平常から氣にして居た。

一通り挨拶が済むと、要吉の方からいろ／＼東京の様子や、自分の一身の事も好い加減に取纏つて話したが、そんな遠い所の話は別に此女の興味を惹かなかつた。それが故郷の話に成ると、急に調子づいて話し出した。お綱が山林を採當にして金子を借りようとして居ることも、

ちやんと聞いて知つて居て、お絹さんにもあれ  
では困ると繁允く疎返した末に、「自家へは此と  
も相談に見えたことは無いし、北方から口出す  
のも變ぢやで見ては居るが、全體お前さんは如  
何する氣ぢやない」と言つて、口を新んだ。

自分の親の不始末を明らかに並べられて、  
要吉は何とも言へなく成つた。隅江もはら／＼  
して聞いて居たが、

「阿母さん、そんな事まア言はんでも宜しいが  
なも、彼方の阿母様の爲すことぢやで。」

一言はんなんがえ、お前、自家だつて面目な  
いぢやないかと、萎む氣色もない。

要吉は逃げ出したやうな心持がした。

五

日が落ちてから急に風が生暖かく成つた。要  
吉はのそりと我家の關を跨いだが、如何したの  
か、柔だ灯火が點いて居らぬ。家中が閑然と  
して、眼々が薄暗い。立つたまゝ一寸思案した  
が、又引歸して戶外へ出ようかとも思つた。途  
端に襖の向うで、ヒコ／＼と物の倒れる音がし  
て、ハハと忍音に女一泣く聲が洩れた。何や  
ら騒まれた男の聲で罵つて居る。要吉は驚い  
て一足下つたが、女の泣聲がお絹だと分つたか

ら、矢庭に合の襖を開けて飛び込んだ。  
「要吉か、好え所へ戻つてお呉れだど、お絹  
は我子の足許へ轉び伏した。  
「如何したんです、阿母さん」と、要吉は急ん  
で訊れた。  
「如何も斯うもない、ひ、人を打つたり蹴つた  
り、私や、私や斯んな目に逢ふ覺えはない、覺  
えはない—お絹は涙が喉に詰つて、言ふ事が能  
く聞取れない。  
相手の男は云ふ迄もなく例の老番工であつ  
た。それ迄は火鉢の向角に中腰に成つていき  
り立つて居たが、要吉の顔を見ると流石に案ん  
で見えた。俄に挨拶も出来ないと見えて、濡い  
面をしながらもぢ／＼と尻を叩した。要吉は二  
人の顔を見較べたまゝ、亞の様に茫然突立つて  
居た。何か言はうとしても、舌が上顎に密着し  
た様で聲が出ない。  
お絹は其處へ倒れたまゝ肩で息して居たが、  
急に向直つて、一、要が来たに、要と直接に談  
して見るが可え。私は要の言つたことを取次い  
ただけぢや。さ、談しなさらんか、談しなさら  
んか—と詰寄せた。それでも相手は何とも言は  
ないのを見ると、又はら／＼と涙を流して、一私  
やな、これ迄貴方の言ひなさる事を一度だつて

諸かなんだことは無い。貴方のためには、要の  
手前や世間へも氣がねして、何の位心配して  
来たか知れん。此頃始終身體の工合が悪いのも  
皆貴方の爲ぢやないか。それをも思つたら一度  
位都合が出来んかとして、こんな無法な目に會は  
すと云ふことが—  
「それぢやで無理に拵へて呉れとは言やせん  
だ—と、男は大きな聲で押被せるやうに言つ  
た。  
「お前が誰に出来ると云つたので、先方とも約  
束したのぢや。それを今更そんな女や子供供の  
言ふ様なことを言つて破約が出来ると思ふか。  
ね、要吉、左様ぢやないかと、此方を向いて急  
に聲を優しくした。—お前には好く話をせにや  
分らんが、ま、聞いてお呉れ。  
「いえ、聞くに及びません—と、要吉はわな／＼  
顫へながら言ひ放つた。先刻から一刻も座に堪  
へないやうな心持がして居たのを、自分の前  
をも憚らないでお親を呼捨てにして、我物戯  
に振舞はれては、最う我慢が出来なく成つたの  
だ。—何んな話か知らんが、今夜は聞いてる暇  
が有りません。談話がしたかつたら又出直して  
来て下さい。—  
「さう お前までが左様言やア仕方がない—と、

男も顔色を變へた。だが、全體、お前は私を何だと思つてゐるんだ。え、思ひ當ることは無いかの。

要吉はきよつとした。若し此男がお絹に對すると同じ様な明らかな態度で、自分に對する様に成つたら、今此處で此胡麻頭頸の頸筋の肉の厚い老爺の口から、自分の一番巻かれて居ると――實際の親だと云ふことを言ひ出されたら如何しよう。如何する事も出来ない。一度そこへ勢へ及ぶと、何とも云はれぬ憎惡の念がむらむらと湧いて、夢の中で驚される様に、手足が自由に利かないやうな氣がした。何がなしに早く此滑稽な幕が閉ぢて仕舞ひたく成つた。

「早く歸つて下さい。何でも可いから早く歸つて下さい。」要吉は手を掛けて押出さむ許りにした。

「歸れと言やア歸る。」

老匠工は何と思つたか素直に立上つた。一寸お絹の方へ眼を遣つたが其儘何も言はないで出て行つた。

要吉は戸口まで送つて出て、茶の間へ引返さうとすると、上り框の上にお絹が心配さうな顔をして立つて居る。要吉は直ぐ其顔色を讀んで可憐な心持がした。

「お母さん、灯を點しちや如何です。」

「あゝ、と、勢のない返辭をしたが、久らく経つてから大儀さうに洋燈を出しに行つた。」

要吉は暗がりの火鉢の前に坐つて、火箸の先で豆の様に成つた火を掘出したが、次の間でお絹がこゝろ／＼爲せる物音を聞いて居た。

其間洋燈が来て、急に一間の中が生々しく明るく成つた。お絹は如何したのか夕飯を止めると言つた。要吉は強ひては勧めず、今日行つた常願寺の様子など氣の紛れさうな話をいろ／＼して聞かされた。お絹は「あ、あ、あ」と返辭だけはした。空耳を走らして聴いては居なかつた。そして、時々ひとりで屈託さうに溜息を洩した。

要吉は先刻から始終それが耳について、何か言はうとしては又引込めて居たが、到頭怖へ切れなくなつて口を切つた。

「お母さん、あの人のことが未だ心配に成るのですか、そんなに。」

「いゝえ、あんな人の事なんぞ、些とも心配してやしません」と、お絹は努めて平氣な聲で言つたが、一只、ねえ、彼人も身體の工合が始終悪いのだし、今夜の様に憤ると、此處又お酒でも飲んで後が悪いのぢやが、誰も側で見て居て世話

して遣る者も無いしねえ。」

お絹は襦袢の袖を引出して、竊と眼の隅を拭ふやうであつた。

要吉は見るに堪へない様な氣がしたので、遠てて眼を隠つた。可憐ぢやないか。如何してこんな女――左様だ、こんな女を非難することが出来よう。徳迄わが身の因果に負けて居るのだ。この外見の弱さうな身體が續く限りは、絶えず其ために苛まれて生きて居る外はないのだ。お絹自ら知らないで左様成つてゐる。業し知つたところが、これだけ深く因果が根ざしては最う如何することも出来なからう。それに自分は此女の腹から出たのではないか。同じ血が脈管を流して、同じ因果の芽が身體に宿つて居るのだ。これ迄の自分のことを考へると、大抵は目に見えぬ因果に支配されて来た。過去の自分は其因果が造つたのだ。將來の自分も矢張左様成行くのを免れないかも知れぬ。今夜の事は何だか自分の鏡を見せられた様に思はれる。而も餘り好ましい鏡ではない。

「お母さん」と、要吉は思ひ入つた様に喚んだ。

「あゝ、と、氣の無きさうな返辭をして、お絹は掌で顔を撫で廻した。

「そんなに心配しなさらんが可い。金子は借り

ることに爲ませう。今夜は最う追つかけても間に合ふまいが、明日の朝には貴方から左様言つて上げて下さい。一

一本當にえと、お絹の顔は急に輝いた。一本當に左様してお呉れぢやと、私も安心しますがえ。

一本當ですとも、急に要るのなら、明日にでも其手續をしたら可いでせう。」

「左様なりや、伯父様も彼様は言つて歸つたもの、何んなに嬉しがるか。大變儲かると云ふ話ぢやものね。」

「そんな事は如何でも可いです。」

左様言はれても、お絹は今迄と打つて變つて、にこ／＼と子供の様に喜んで居た。要吉は其様を見ると涙が胸一杯に突掛けて来るのを辛と悵へ／＼した。

お絹は不意に顔を上上げて、何やら聞耳を立てて居たが、

「あれ、雨ぢやないか。」

成程露地に網々の上に池み込むやうな雨滴の音がする。何時の間に天気が變つたのだらう。

「もう寝ませうか」と要吉が言つた。

「左様ね。」

お絹は両戸を繰りに立つた。

六

要吉は蒲團の上で起直つたまま、凝手と肩の筋欠から射す夜明の光を見詰めた。頭巾の邊りが汗でぬたたくたする。昨宵は夜通し夢に驚はれたものらしい。一番終りに番場の渡船場で船から上つて口村を通らうとする、十二三の

女の兒の姿びた青海の様な顔をしたのが、犬の耳を切つては掃へ入れて黴漬にして居るのを見た。それだけは明々と覺えて居るが、如何してこんな夢を見たのか解らない。最う一度枕に頬を押し付けて見たが、寝附かれさうにもない。起上つて臺所の方へ出て行つた。井戸端で顔を洗はうとする、戸外は一面にひどい霧だ。冷たい清水の中へ手拭を突込んで、顔を好く冷した。少し避つた様な心持がする。何と思つたか朝子を被つて表へ出ようとする、茶の間に居たお絹が、

「今御着ぢやに早うから何處へお出だえと、聲を掛けだ。一うむと口の中で言つたきり、戸外へ出て仕舞つた。

四方の山は霧に覆されて、遠いのも近いのも全然見えない。土手の上の藁屋が一軒霧の中か

ら浮出して見えるが、裏口が明いてゐるのか、朝餉を焚く籠の火が蛇の舌の様にちら／＼と天井迄燃え上るのが目に附く。雨水について下ると、自然に土手の上へ出る。長い堤の上をすた／＼歩いて見た。雫の様に凝つた霧がほてる鏡に打突かると、口を塞がれるやうで息苦しい。秋も何時の間にかしつとりと成つた。霧と河下の鐵橋を渡る汽車の音が非常に近く聞える。

世間に朝風がそよ／＼と動き初めた。稻葉山の黒い霧が先づ現はれた。河面を見下すと、潤れ／＼に成つた水の上を見る間に霧が剥けて行く。此邊の川は秋から冬へかけて河床が露はれて、白く露れた礫の様な石がごろ／＼と轉つてゐる。河原の向うはひろ／＼とした枯野で、野火でも焚いたのか一面に黒く見える。野原の中を細い徑が繞つてつく。人を埋めに行く道だ。枯野の奥は村の三昧である。三昧の樹立には、未だ薄い霧が残つて居るやうに見えた。

それを見ると、要吉は急に其處へ行つて見たく成つた。で、直ぐに土手を下りて、着物の裾をからけて、素足で膝迄ある秋の水を渡つた。それから石河原を横倒しに走つて、間もなく目指す林へ着いた。

林の中はたゞ石の様に寂びて、木の葉一枚動かない。鳥も啼かぬ。人間が今息を引取るといふ静屋へ迷ひ込んだやうな心持である。要吉は足を緩めた。

其時ふと人の近寄る氣勢がしたので、立停つて頭を上げた。身丈の圓袂けて高い大男が、壁つて前に立つて、凝手と要吉を見下して居る。それが何處やら懶さうで、頭髮の延びた上合と云ひ、色澤の悪さと云ひ、見るも不快で、而も見ずには居られないといふ體であつた。着物は此邊の百姓に似合はない絹布を重ねて着るが、帯は細帯で、素足に冷飯草履を穿いて、帽子を被つて居ない。眞正面に頭の上から要吉を見据ゑたまゝ動かうとせぬ。要吉も氣味の悪い男だとは思つたが、路の左右は丈の長い草が露に濡れて生えて居るので、これも道を譲らうとはしなかつた。暫く無言の儘で互に眼を見合せて居た。何と思つたのか件の男は踵を回して元來の方へ戻り出した。要吉は少時惘れて突立つて居たが、其男の姿が見えなくなると、急に思出した様に跡を追ひ掛けて見た。小徑が嘖ひ違つて四辻に成つた處迄駈けて行つたが、其時は最う何處へ行つたのか、怪しい男の姿はかく見見えなかつた。延上つて彼方此方と見渡して

も、矢張り影さへ見えない。何處かへ隠れたのぢやないかと思ふと、更に薄氣味が悪く成つた。一狂人かも知れないと呟いた。

林の中の小徑で見慣れぬ男に邂逅した。只それだけの事に過ぎない。それだけの事が何だか不祥の意味が有る様に思はれて、要吉は何うも心持が好くない。こんな事に頭を悩ますのは愚だと思ひながら、矢張り其男のことが氣に懸つて成らぬ。あの顔、あの眼の色、如何も一生忘れられさうに無い。何故だらう。俺は如何かしてゐるなと思つた。

三昧は林の縁に在る。荒れ果てたもので、何處からが墓地の地境と云ふこともない。只道がやゝ廣く成ると、枯れた芒や茅草に囲まれた少し許りの平地があつて、正面の堂の中には三體の石佛が安置してある。眞中に雨曝しの石の蓮臺を据ゑたのが、半ば草に埋まつてゐる。葬禮の時には此上へ棺を載せるのだ。村に棲む者は、男も女も、早晚この蓮臺の上へ鼻き据ゑられる運命を擔つてゐる。一人も残されない。要吉は一寸其側立つて見渡したが、直ぐ祠堂の裏手へ這入つて行つた。

そこは一面の卵礫臺で、此中に要吉が父祖の墓も在るのだ。尤も要吉の家には先祖といふも

のが無いので、二三代前まで位の所でなけりや、何れが誰の石神やら分らない。只父の石塔だけは久しく捨て置いて、近年漸く建てたので、新しいから直ぐ分つた。

要吉は父を知らない。知らないだけに其當體を理想化して居た。因より神も佛も信じない。けれども父の靈魂だけは、自分のためには尙今存在して、常に自分と精神上の交通が有る、有得るといふ考へは始終去らなかつた。父が晩年世間と懸離れて生活したのも、永く自分一人の心に生きむが爲であると思ふことさへ有つた。

其後父子の關係について、いろんなんぢはしい事實を知ることゝなつて、單で自分は何處までも父の子である、少くとも精神上に於ては、自分は父が唯一の眞の子であると、堅く思ひ詰める様に成つた。今朝此處へ來たのも、暫しの間全く他の關係を離れた、世の中に父と唯二人居るやうな心持に成つて、心ゆく限り泣けたら泣いて見たかつたのだ。

それが來て見ると、其儘石塔の前を素通りした。父の戒名と並べて、石に刻んだ何々信女といふ朱文字が眼に映つたからだ。恐らくお絹の思案ではあるまい、専ら坊主か何かの細工であらう。縦令お絹の心から出たとしても、世間の

人が左様するから自分も左様するものだと思つたのだらう。それは如何でも可い。只要吉は此兩人の名を並べて見ることが逆も堪へられなかつた。

昨宵の光景がまだノ、と眼に泛んだ。如何思つたとして、自分は父の子で無いかも知れぬ。自分の存在には初めから汚點が打たれたのだ。其汚點は肉體の中に潛んで居るのだから、自分を濁さない限りは如何することも出来ぬ。この手、この指、皆不義の結晶に外ならぬ。いかにも獸的だ。併し人間が生れるなどと云ふことは、元々餘り餘と違はない。何れにしても五十歩百歩だ。自然は破倫なり。一人間の事は要するに此一語に盡きてるんだ。斯う云ひ放つて見ると、何だか世界を黒黒に染つて造つたやうな氣もする、只それに依つて心は少しも浮立たない。如何することも出来なからだ。今在る状態はそれに依つて少しも動かないからだ。總ての人類が眠られた所で、呪ふ者はそれに依つて幸福とは感らない。

要吉は墓地の外へ出たまゝ茫然立つて居たが何處へも行かぬ氣が無いやうな氣が仕出した。人間は何處へも行かぬやうな氣が仕出した。父を埋めた墓場へ来てさへ、自分の手を取つて

呉れる者が無いとすれば、他に何處へ行く處が有らう。何處へも行かぬ氣がなくて、それでも未だ死ぬなけりや、急に寒氣がして、ぞつと爪先まで悪寒が通つた。

何の的もない。要吉は只眞直に自分の胸に葉を掻き分けて這入つて行つた。思ひ掛けないことには、其處に二歳ばかりの菊が開花されて、ひよろ／＼とした紫の赤い蔭影が小さい白い花を着けて居た。そこへ寄せた藍色の汚い野良物がつか／＼と出て来て、要吉の顔を彼端さうな眼附で睨めて居たが、又彼方の藪蔭へ走つて行つた。要吉は何心なく猫の駈けて行く跡を見送つたが、偶と又最前の男のうしろの影を見附けた。畑の方へ差出した百日紅の人の腕ほどある杖へ紐を懸けて、其端を結び合せて居るらしい。何を爲るのかと、要吉は息を凝して見てゐたが、稲妻の様に其意味が頭へ閃いたかと思ふと、自分でも知らぬ間に驚出して、男の肩をむすんで居た。

一何を爲るんだ。をかした事を爲ちや不可い。と思はず大きな聲で此り附ける様に言つた。

男は振り回つて、例の險しい眼でじろりと要吉の顔を見たまゝ、何と云はない。

一をかした、異しな事を爲ちや不可いぢやない

か一と、要吉に同じことを繰返した。

此時男は初めて口を開いて、

「如何してだ」と、只一言反問する様に言つた。

要吉は水を溜せられた様にひやりとして、其低い聲が一時に額天まで沁み渡つた。成程人間が此處に集きて死んで行くのに、他人がそれを妨げて、幾合一瞬間たりとも生を強ふる權利が何處にあらう。自分の思慮が足らぬ所から、許し難い越權の處置を他のヒューマン、ピングの上に加へた様に思はれて、少時口離つたまゝ、返答が出来なかつた。やがて氣を取直して、

一死んで不可いと云ふ理由は勿論無い。只私の眼に留つたから不可いと云ふんだ。人間は他人の目前で自殺することは許されない。」

一左様かと云つたまゝ、男は周章てる容子もなく、徐に杖に懸けた紐を外して、丸めて袂へ入れた。それから要吉を尻目にかけたまゝ、べたべたと草履の音をさせて、彼方へ歩み去つた。

今度は跡を辿つて見る氣もなかつた。少時茫然と突立つて居たが、室も林も細も見えない。

心は次第に底の知れない淵へ沈んで行く様である。やがて氣が附いて、男の立去つた後から自分も器械的に林を出たが、それから半時間後に

は、何處を如何して歩いて来たか、家へ歸つて井戸端で足を洗つて居た。お絹は割れた様な顔をして見て居たが、要吉の唯ならぬ顔色に恐れを抱いて、何處へ行つたかとも訊かなかつた。朝飯の膳を拵へて勸めて見ても、要吉は頭を振つて欲しくないと言つた限り、座敷へ這入つて夜着を引被つて寝て仕舞つた。

何うも寝苦しくて連も寝附かれさうになかつたが、何時の間にか寢人つたと見えて、眼を覺したのは午後の日影も大分薄く成つた頃であつた。眼が覺めて見ると、身體は籐の様に破れて、額に手を當てると癢けるほど熱い。少し頭を動かしてもづきんと痛む。そこで成るべく静手として仰向けに成つて居たが、臺所の方へお倉が來て、何やら息を喘ませて談して居るらしい。お絹も聞いて居ながら、返辭の様子が少し周章で居るやうだ。裨が聞いているので、二人の話を此處まで摘挙けに聞える。初めそれが耳觸りに成つて煩いと許り思つて居たが、偶と一言思ひ當ることが有つたので、急に肘を立てて耳を澄ました。

一内の與三松が死骸を釣込んだ所まで見て來たと云ふが、彼所の主婦さんも娘もそりや平氣なもので、涙一つ零さなんださうな。」

「ま、それでも如何いふ人達ぢやらう。

「左様ぢやるか。娘だつて遣子だと云ふし、主婦さんだつて何うせ金に働かれて隨つて來たのに違ひないもの。私も一度しか會つたことはないが、一寸見てもそりや一物ありげな女さな。これからは彼處の内も皆あの主婦さんの仕たい儘ぢやで、折角建てた家も藏も賣拂つて戻つて行くぢやると云ふ噂ぢやが、それかと云つて、誰一人人物の言ひ手は無かる」と言ひかけて、お倉はひとり失笑しさうにした。「いゝえ有るの、只一人有るんぢやさうな。あの糸ツさの許の鳴衆なも、あの女の今日の周章で方といふは無かつたさうぢや。」

「あの女がえ、左様かな。」

糸ツさは親身の兄でもお仁善しぢやで何も言ふまいが、あのお辰さと云ふが却々利かん氣ぢやでなも。七五郎が村を逃出してから、去年臺灣で大金儲けて歸つて來るまで、十年の餘も盲目の親を引受けて面倒見て來たのぢやもの、切めて七五郎が一日でも煩つて寝て居たりや、どうせ他人に遣つて仕舞ふ身代なら、幾許何でも半分や三つ一は兄弟に譲つて死にさうなものぢやつて、遺書でも無いかと家中捜したんぢやさうだが、書いた物は何一つ無いし、死人に

口無し、如何したとて彼方の身代はそつくら彼の主婦さんと娘の物に成るんぢやとさ、それもお辰さは未だ未練が有つて、親戚を一軒々々頼んで廻つても口利いて貰ふ積りぢや、此方の言分が通らん間は葬儀も出させんで、一人で力んで御座るさうなが、御葬儀が出んと、自己の阿父さが困るだけさな。」

お倉は一人でのべつに訛舌つた。

「左様だがよ一と、お絹は矢張浮かぬ聲ををして、「まア如何して無理に死ぬ様な氣に成れたんぢやらうか。金子は有るし、普請はつい近頃出來上つた許りぢやと云ふし、何が不足でそんな心を出したもんか。」

「それがなも、誰でも解らんと言つてだがな。あんなに田地を買つたり、金子を貸したりして、立派に遣りかけたのぢやが、誰一人近しう交際つた者は無いさうな。それに糸ツさは彼様云ふ人だしなも、側に居る主婦さんと娘でさへ全然氣が附かなんだと云ふのぢやもの、他人に解らう筈はないわな」と言つて、「一寸首を傾げたが、「だけど、人の死ぬのは大抵譯の分らんものぢやぞな。」

お絹は思はず溜息を吐いた。  
「ふら／＼と左様云ふ氣に成ると、自分で承

知して居ながら、如何しても後へ引けんと云ふでな。何にしても人の生命程分らんものはない。

そこへ要吉が蒼福めた顔をして奥から出て来た。お絹はそれを見ると、

「まあ好う寝んでぢやつたな。何處か悪いのぢやないかと心配して、三度も見に行つたがな。朝から何も喰べんぢやで故度お肚が空いたらうに。」

要吉は手を振つて制した。御飯は未だ欲しくないと云ふ積りであつたが、口の中が乾燥いので聲が能く出なかつた。お倉は上り柵に腰掛けたまゝ、要吉を見上げてにや／＼笑つて居たが、

「要様、昨日は如何ぢやつたな。」

「如何と云ふこともない。」

「彼んなことを。それでも最う餘程大きく成つてでしだらう。」

「あゝ。」

「あ、忘れて居たが、お前にとて今頃珍らしい鮎を持つて来てお呉れたぞえ」と、お絹が口を容れた。

「いえ最う昨日からお約束しといいたのぢやわな」と、お倉は急に尻を上げて、又話込んで仕舞つたが、今夜も他所村に産がある云つて、阿

母を招びに来て居たで、私も斯うしては居られんぢやつた。容器は又今度貰ひに来るわな。お倉はそゝくさし出て行つた。

その後でお絹は茶を淹れて要吉に侷めようとしたが、お湯の方がといふので、言ふがまゝに湯呑に注いで渡した。

「今お倉やの語ぢやが、七五郎が三昧で首吊つて死んで居たといふな。今し方あの與三松が林へ柴刈に行つて見附けたさうな。それから駐在所の巡查を招んで来るやら、村方の人が走つて見に行くやら、向うの土手は一しりり大騒ぎぢやつた。あんな人が死んで行くなんて、本當に思ひがけない。つい三四日前に伯父様が會つて、

お金子の話もしたのぢやさうな。——伯父様と云へば如何したのか、使者を遣つても未だに見えぬが、

お絹は要吉が蟬の脱殻のやうな顔附をして、自分の話を聞いて皆さうもないのに氣が附くと、下を向いて口を噤んだ。

林に首振りがあつたと聞いた時、要吉は直ぐあんな男だと思つた。思つただけで別に驚きはしなかつた。それが當前の様に思はれた。自分にはちやんとそれを豫期して居たのだ。お倉の話も聞いてる間も、あの男の家の様子やら何

やらが日々自分の考へて居た通りの様に思はれた。初めからあの男の身の上を知つて居たやうにも思はれた。何の爲に死んだのか、自分だけにはあの男の心の奥まで解つてゐる。一生の間には一度出會つた、而も死ぬる間際に出會つた。あの男も自分と出會はなければ成らなかつたのだし、自分もあの男と出會はなければ成らなかつたのだ。二人の間には眼に見えない連鎖が繋がれてあつたかも知れぬ、いや、あの男は單に自分の心の影に過ぎなかつたものでは有るまいか。あれが自覺しない自分の半面で、如何しても離れることゝ出来ないのでは無からうか。

實在の人間としては餘り玄妙に過ぎる、不可思議に過ぎる。要吉は自分も察穴の中へ引入られさうな心持に成つた。

お絹はと見ると、兩手を袖口へ引入れて火鉢の縁へ掛けたまゝ、屈託さうに俯向いて居る。その蒼い筋の張つた顔を見詰めて居ると、要吉は道理もなく涙が滲み出た。

「阿母さん。」

「え」と顔を上げる。

「私は明日の朝東京へ歸らうと思ひます。」

「まあ何んぢやとえ。」

「其人が死んぢや、金子の都合も出来にくから

うから、兎に角印形は阿母さんに預けて行きませ。私の立つた後で好い様にして下さい。

「如何して、急にそんな事を言ひ出すのだ。」  
お絹は泣き出しさうな顔をして我子を見返し

## 七

要吉は與三松一人連れて、未明に村を立つた。長良の橋を渡る頃、月の色が次第に薄白くなつて、四邊は一層仄暗い闇に包まれた。夜明が間近く成つたのであらう。

暗がりに来て、又暗がりに去る。何うやら身後に後暗い事でもあつて、わざと人目を避けて故園を出るやうな気がした。與三松は水燙を喰りながら黙つて隨いて来る。二人の足下に橋板が高く轟いた。

町へ這入つても未だ人通りはない。監獄署の裏は寂然として、黒い板塀が一しほ高く見えた。それをを外れようとして、與三松がふつと提灯の火を吹き消した。薄い煙が一條横に靡いて、蠅の臭ひが鼻を打つ。何時の間にか、夜は白々と明け放れて居た。

やがて停車場へ着く。要吉は與三松の手から荷物を受取つて、

「最う可いからお歸りな。」  
「へえ。」

「姉やにも宜しく言つとくれ。」

與三松は一散に駆け出した。要吉は少時其後を見送つて居たが、不圖、今朝立ちがけに門送送つて出て悄然立つて居たお絹の顔が眼に泛んだ。明日立つと言ひ出してからはお絹は唯おろおろして、荷拵へを手傳ふ間も始終涙含んで泣き居た。實際親一人子一人の仲で、長年離れ離れに暮して、偶々逢つたと思へば直ぐ別れて仕舞ふと云ふは心細いに違ひない。それを手頓なく思ふ容子が明々見えながら、口へ出しては決して留めようとしなかつた。彌々立つ前に成つて、一隅江さが今日にも來たら咄落膽するぢやらう、私が彼の娘に對して言譯がないと、さも術なさうに繰返して居たが、要吉の口から「阿母さんの所爲ぢやない」と言つて貰ひたかつたのであらう。

要吉は泣きたいのか、笑ひたいのか、自分でも解らぬやうな氣持に成つて、四邊を見廻した。他人の中より外に自分の住む國はない。路傍の群集に紛れて、不圖行方知れずに成つたまゝ、他人の中に生ひ立つた迷兒の様に、忘れられるものなら忘れたい、生れた家も、生んだ親も――

自分が自分だと云ふことも。

不意に汽笛の音がした。

要吉は飛び上つて、足早に改札口へ近づいたが、下り列車が地面を揺がせて構内へ這入つて來た。西行、何方でも可いではないか。何爲に父東へ歸る必要があらう。二たび彼の渦巻の中へ投げまじいたら、心からあらゆる舊い鎖を斷つて新に孤獨の境涯に入る覺悟があるなら、西へ指してこそ行くべきではないか。

二人後れて來た乗客が要吉を突除けるやうにして駈けて行く。要吉の頭の中は旋風の様にぐるぐると廻つた。其中から一人の女が腹れ切つた、襟袢を乞ふやうな眼差で、凝乎と此方を見守つて居るかと思はれた。要吉の足は立竦んだまゝ動かなかつた。

其間、汽車が徐々と動き出した。

要吉はプラットホームの上になつた儘、各拵の田圃の中を細曲りながら遠ざかつて行く列車を見送つた。如何したら一思ひにあの女が捨てられよう、あの女から通れて自分の行く處へ行かれよう。それさへ覺束ないと成りや、お絹と違つた所はない、永い間の惰性に壓せられて二度俯ひ上る力もなく、じり／＼と泥沼の底へ沈んで行く――あの自分を生んだ女と。「矢

張親の子に違ひない」と口の中で呟いて、つと  
踵を回した。側に立つて居た驥長と面を見合  
せると向うで「や〜と笑った。先刻から始終  
自分の舉動に注意して、此方の腹の中まで見透  
して居られた様な気がしてならぬ。で、わざと  
何氣ない顔をして、ブラツトフオームの端の方  
へ寄つて行つた。

彼の二人は——と、此前汽車から降りた時見  
かけた細附の老爺と若い女を想出した。あの  
二人は如何したらう。彼時ちらと自分の眼に觸  
れた限りで、二人の姿は永く人の世から隠れて  
仕舞つた。監獄の門をくぐつて、自分の背後に  
重い鐵の扉がたりと落ちる音を聞いた時は、  
何んな心持がするだらう。人間じんげんの社會しやかいが、全  
く切離された獄舎の中へ這入つてこそ、初めて  
過去と絶縁した、新しい生涯しやがいに入ることも出来  
るのではなからうか。

便所の側の梧桐の葉が黒く末枯れて、風の吹  
く度にごろ〜と地に落ちた。要吉はそれを見  
て居た。又それを見て居るのでもなかつた。  
やがて四分の一時間許りして、大垣發の上り  
列車が着いた。要吉は機械的に其室へ乗込んで、  
片隅に身を横へた。此列車は貨車を連結し  
たもので、何んな小さい驟でも一々寄つて行く。

要吉は誰とも口を利かなかつた。身體も精神  
もへと〜に疲れて、別に物を考へても居なかつた。  
偶々顔を擧げては、其都度同じ乗客の顔  
が自分の前に並んで居るのを見ると、斯うして  
知らぬ人と一日一緒に乗つて居るのが不思議で  
成らぬ様にも思はれた。

百里の道は一日がかりの汽車の旅である。箱  
根の山を越す頃には、日も傾いて、谷間の陰が  
薄寒さうに見えた。大磯邊りから誰彼れて、大  
船で灯が入つた。汽車の中で日が暮れる程淋し  
いものはない。此世に只一人生きて居るやうな  
心持が、何處からともなく身に逼る。  
十四の春初めて首都へ出た時も、恰度此邊で  
日が暮れた。關東者の調子の高い話聲に挟ま  
れながら、泣出しさうにして居た覚えもある。  
それでも新橋へ着いてからは、教へられた通り  
人力車を備つて、同じ村から出たと云ふ縁故を  
頼りに、築地橋の袂で屋根に大釜の看板が出て  
ゐる金物屋と訊き〜、お種の父親を訪ねて行  
つた。此處だと分つた時の嬉しさも、座敷へ上  
つてから——生れて初めて他人の中へ這入つた  
所爲でもあらうが——思つた程に落着かれなかつた  
ことも、昨日の様に忘れない。萬端世話に  
成つて、一年餘り其家から學校へも通つた。其

間お種とは朝夕一つ家に起臥したが、同い年で  
も女のことではあるし、東京に育つたのだから、  
田舎者の要吉などでんで子供扱ひにして、眼中  
に置いて居なかつた。それに父親の道樂から二  
人の娘に遊藝を仕込んで、姉は常磐津、妹は  
踊、春秋のお波へには眼の色を變へて騒ぐとい  
ふ有様であつた。未だ其外に總領の息子で、大  
阪役者に成つて居るのがあつたが、音信不通と  
かて違つたことがない。其後木樨町の芝居へ來  
て、成田屋の相手に「春雨傘」の丁山などを演つ  
て居ると云ふことを他所ながら聞いたが、生家  
へは立寄らなかつた。それは預置きお種は翌年  
の春十五で花柳の名取に成つて、新富座の大役  
會に出たが、十六の歳には千葉の百姓へ貰は  
れて行つた。何でも先方の男とは親子程年紀が  
違つて居たと云ふ。間もなく父親は死んだ。姉  
の養子の代になつてから、内輪の苦しさが段々  
人目に立つた。それでも何うやら斯うやら六七  
年持耐へて居る間、或年世間一帶の不景氣から  
堀りを喰つて到頭店を閉めて神田の明神下へ  
引越した。そして其養子は元勤めて居たお店へ  
通ひ出した。其頃要吉も豫備門から大學へ移つ  
て、下宿生活にも飽果つて居たから、談合の  
上で、お種の母親に當る小母さんと一緒に、本郷

丸山で假の所帯を持つた。それだけなら未だ可  
かつたが——要吉は急に深い追憶から醒めて、  
汽車の窓から黒い丘や藪や小家やを見詰めて居  
た。車輪の音は絶えず眼氣を誘ふやうに轟々  
と響く。要吉の心は復たび昔に回つた。

一昨年秋、お種は片附いた先方から離られ  
て来た。唯子供が無いからと云ふ言分であつた  
さうな。當人は何とも云はなかつた。嫁入した  
時、箭筒の底へ入れて行つた小鼓も其儘一緒に  
戻つたが、鼓の蓋は別人の標に變つて居た。最  
早お種は元のお種ではなかつた。それを憐れと  
見たのが——言葉少なに控目な女の容子を物  
の哀れに思つたのが、二人の因果であつた。其  
後のことは言ふに忍びない。

併し何日迄斯んな生活が續けられるものか。  
新しい境涯に入るには、心を鬼にして、古い殼  
を脱いで棄てなければ成らぬ。それには自分か  
ら丸山の家を去る外はない。恰度好い折だ。此  
機曾を外したら再びこんな折は來なからう。今  
度こそ歸つたら席の暖まらぬ間に、一思ひに足  
を上げなければ成らぬ。

とは云へ、今頃は何と思つて居るだらう、母  
子寄つて何んな談話をして居るだらうか。今夜  
急に歸つたら、何んな顔をして迎へるだらう。

若し少しでも不快な顔色が見えたら——  
何時の間にか、汽車は都近く走つて居た。品  
川の沖は暗かつた。芝浦邊の街の灯がちら／＼  
と祭の夜の様に見えた。乗客は皆降りる用意  
をした。

新橋のプラットホームへ降りた時は、鎮で  
仕切られた後ろへ、迎への人が各自に提灯を振  
舞して山の様に簇つて居た。要吉は一人其中を  
抜けて、足早に停車場の出口まで来たが、思は  
ず其處に立ち停つた。無数の街燈が蛇の舌の様  
にきら／＼と眼を射つて、四邊を取巻く雑然た  
る都會の物音が、一つ／＼聽分けられる様にも  
思はれた。石段の上に立つたまま、頭がぐらぐ  
らとした。

丸山の奥へ戻つたのは彼此七時に近かつた。  
町は未だ宵の口ながら、此界隈はどこも皆戸を  
閉めて、ひっそりと寝靜つたらしい。人力車の  
音を聞附けたのか、小母さんは袴衣の上から羽  
織を引掛けたまゝ駈出して、表の木戸を開けて  
呉れた。

「まあお歸りなさい、在外早う御座いました  
ね。」  
「え、と、要吉は一寸振回つたが、直ぐに自  
分の居間へ通つた。小母さんは後の戸締りをし

て、備で洋燈を持つて跟いて来た。  
「今晚あたり如何かしらとは思つてましたが、  
眞朝早う御座いましたね。お故郷では皆様お變  
りもありませんか。」

「あ、別にと、要吉は氣のない返辭をした。  
小母さんは一人いそ／＼と脱棄ての洋服を盛  
んだり、昔後へ廻つて小振巻を被けたりして、  
「では、一つお茶の熱いのを入れませう」と立上  
つたが、偶と衣紋竿に懸けた腰裏の紅い女の  
平常着が眼に附いたので、それを外して一緒に  
持ちながら出て行つた。

要吉もちらとそれを見たが、故と氣の附かぬ  
容態をした。留守中お種が泊りに來て居る筈  
である。先刻から顔も見せず聲もしないのは  
如何したのであらう。何となくそれが氣にかゝ  
る。

机の周圍は霧然と片附いて、瀬戸物の手焙か  
ら、座蒲團から、缺けた灰皿から、書散らした  
反古、讀み差して開けたまゝ捨てて置いた書物  
まで、五日前に立つた時の儘そつくりしてゐる。  
この日々見慣れた部屋的光景が一つ／＼眼に映  
ると、嘗て失はれた自己の幾分が戻つて來た様  
な氣がして、要吉はぐつたりと其處へ倒れて仕  
舞つた。

一旦目を覺しながら、うつら／＼して居る間に父寝入つたと見えて、二度目に頭を上げた時は天井裏まで明るく成つて居た。枕頭には毎日の通り新聞が置いてある。乗合馬車の喇叭の音だの物資の呼聲だのが、朝の静か空気を傳つて、此處迄聞えて来る。何だか自分が故郷へ歸つたと云ふこと、其間に起つた様々の出来事が遠い時日を離れてた夢の様に思はれて成らぬ。

十五分も経つて漸と起き上つた。楊枝を銜へながら茶の間を覗くと、長火鉢の向うに小母さんが坐つて、それと向合つて、一人の女が此方へ背中を向けて居た。後姿がお種であつた。二人ながら黙つて居る。尼音を聞くと、小母さんは顔を上げたが、お種は益々俯向いて仕舞つた。

「今お湯を取つて上げますよ」と、小母さんは金盥に銅壺の湯を汲出して呉れた。それから掃帚と箒を持って、寢床を上げに取つて返した。要吉は合掌して、二度茶の間へ出て来た。それを見ると、お種は少し膝を蹴つて、一昨晩お歸りでしたさうで御座いますね。

「あゝ」と、何気ない風をして座に着いた。

「彼方は昔様御健康ださうで、赤さんも……」  
要吉はお種の顔を見返した。女は直ぐに睫毛を伏せて黙つて仕舞つた。二人は少時手無沙汰に坐つて居たが、

「大變顔色が悪いやうだね。如何かしたのかい」と、男の方から言出した。

「えゝ」と、お種は兩手で自分の顔を撫でて見て、「何ですかね、何うも気分が勝れませんで、昨日も姉の宅へ行く途中から悪く成つて、先方へ着くと其儘臥つて仕舞ひましたの。」

要吉は何だか自分が其病氣に責任があると云はれた様な氣がした。

「毎もそんなぢや、早く養生をしなければいけない。」

「でも、私の疾病はね、一日経てば斯うして起きて居られるんですもの」と、稍々言ひ流んで、「阿母さんが何か私のことで貴方にお願ひしやしませんでしたか。」

「何を——未だ何も聞かないよ。」

「それなら可いんですが、今後若し何か言出しても、餘り相手に成らん様にして下さいませ、ね。」

そこへ小母さんが戻つて来たので、お種に急

に口を噤んだ。小母さんは一寸二人の顔を見たまゝ、別に氣にも留めぬ様子で、片隅へ寄せてあつた朝飯の膳を出して備めた。

それを済むと、要吉は自分の居間へ戻つた。掃除をした後で、障子がかりりと開放してある。木理の持上つた縁側へ一椀に陽が射して、手水鉢の水が厨の壁にちら／＼と映る。崖の下の小家だから今頃でなければ日が當らない。

留守中に着いた一通の手紙を持つて、縁鼻の柱に凭れながら封を切つた。神戸といふ友人から来たので、「近頃君は段々僕から遠ざかつて行く。僕の體目かも知れぬが、何うもそんな様には思はれる。平生君が何を考へて、何をして生きて居るかも分らなくなつた。兎に角一度會つて話りたい」と云つて、巻紙の末に、「例の金葉會を又始めることにしたから、今週の金曜日には毎もの教會迄来て貰ひたい」とあつた。金葉會といふのは、今年の青葉の頃から一週に一回若い女が集つて、外國文學の研究をして来たので、神戶が會の主人であつた所から要吉をも誘つて其中へ加へた。それが追々情氣を生じて、何時となく中止の姿に成つて居たのを又再興しようと思ふのである。要吉は一人苦笑ひをしながら手紙を巻返して手紙の上に載せて置いた巻煙草

を吸はうとしたが、火が熄えたと見えて煙がでない。つと振向きさま庭へ掃つた。

今朝置いた庭の霜は蜜柑の皮の蔭だけ残して消えた。小さい池の水が澄んで、底に映る金魚の影も見える。昔此家に棲んだ一葉女史が月に硯を投げたと言った池で、垣根の下に二三木聚つて枯れた芭蕉も矢張其頃から有るといふ。要吉が永く此家に居つたのも、一つは其様な事が心を惹いたからで、何日も神戸が来て、「君は一葉さんの家に居る間に、何か大作をしたら好からう」と言つた。それは何日出來るといふ宛もないが、此處に住むのは随分久しい。

何時の間にか、お種が十能を持つて入つて来て、火鉢に火を埋けて居たが、其儘出て行かうともせず、徐かに縁側へ出て、手欄に片肘を掛けたまゝ、同じ様に座を見詰めた。要吉も知らぬ振をして物を言はなかつた。二人は斯うして暫く並んで居た。

一昨年の冬、恰度今日の様な日和の日であつた。要吉が學校から歸つて、何の氣もなく庭から這入つて來ると、お種は髪を洗つたと見えて、此手欄に凭れて日光に背を曝しながら、膝の上

に、何か何かの木を聞いて居た。袂衣の様に身を包む濡髪からは、陽炎が立つと思はれた。足音を聞付けると、急に上半身を振つて振向いた。明るいところから這入つて來たためであらう。女の顔は只ぼつと卵形に白う見える許りであつた。要吉は我にもなく其手を執つた。女は男の弄ぶが儘に手を借して居た。

併し女が何日も斯ういふ位置に許り居て呉れるものではない。偶々無意識で斯ういふ位置に置かれたのである。それが一たび意識して男の歡心を買はうと努める様に成つては最う堪らない。時には年紀の行つた女の甘えたやうな所作を見せられて、一種不快の念を禁じ得ないことさへあつた。それにも拘らず、其不快の念が湧くたびに、如何いふものか、却て女から離れることの出来ないものにされて仕舞ふ様な氣がした。お種は何時の間にやら持つて歸つた着物も大抵質入して、要吉の側を離れては、あの小鼓一挺抱へて街に彷彿外はない身と成つた。それと知つた時、要吉は思はず身震ひしたが既に遅い。一日経てば一日だけ事情が絡んで、自分の爲にも成らず、女にも憂い目を見せると知りながら、心苦し日夜を明して暮して行く。これが何日迄つゞくのであらう。

「もし」と、不意にお種が呼び掛けた。

見ると、眼に一杯涙を溜めて居る。「あの、私は今日の午過ぎに姉の宅へ歸ることに成りましたかし。」

要吉は尙且黙つて居た。「餘り阿母さんが言ひますので」と、羞俯向く。「左様、親には心配を掛けない方が可いね。」

お種は上眼に一寸男の顔を見た限りで、何とも言はなかつた。

少時して又男から言出した。「何の方へは、新橋の家元とやらへは、此頃も未だ通つて居るかい。」

「え、毎日行つてますわ。悉皆浚ひ返して貰はないと、何一つ満足には立てないんですから。」

「ぢや容易のことではないね。」

「でもね、一遍通つたことなんですから、ずんずん抄は行きますが、唯、側の上手な人を見ると、彼時から何處へも行かずにみつちり稽古をして居たらと、時々思ふこともありませう。」

要吉にはそれが何だか自分への言譯らしく思はれた。で、只何とはなしに、

「それも仕方が無いさ。」

「ね」と、お種はやゝ調子附いて、「初めて樂地の家へ入來して下すつた頃、私は未だ男鬚に結

つて、袂の長い着物の裾子に男帯を具の口に  
聚めて居たでせう。幾許可厭だと云つても、お  
稽古へ通ふ間はそれでなけりや不可いつて、如  
何しても阿父さんが承知して呉れないんです  
の。眞個頑固な人でしたよ。」

「併し面白いぢやないか。」

「だつて、そんな服装をして居る者はお友達の  
中にも無かつたのですもの、随分可厭でしたわ。  
何日でしたか。」二階に土用干をして、其側で貴方  
一人勉強して被坐したことがあるでせう。そこ  
へ私がお節屋さんから歸つて来て、暮のお淺ひ  
に鞍馬の牛若に出た半振袖が眼に附くと、馬鹿  
ですわね、夏の眞盛りりに綿入を着てとん／＼踊  
り出した。貴方も笑つて見て被坐したわ。」

「左様、そんな事も有つたらう。」

「たうとう阿母さんに目附かつたが、叱るこ  
も出来なかつたか、一緒に成つて笑つてしま  
いのね。」

「あの時分は二人ながら子供だつた。」

「一罪が有りませんでしたわね。」

朝の御仕が済んだと見えて、小母さんは例の  
通り、鏡を叩いてお題目を唱へ始めた。これが  
毎朝小半時つゞ、代々法華に凝つて、月の十  
三日には何用を差指しても、日和下款に朝締掛

けでお節御様へ参詣するといふ女である。

九

中一日経つた。要吉は居間に閉籠つて、机の  
前に倒れたまゝうつら／＼目を送つた。始終何  
か考へて居るやうで、實は何も考へては居ない。

何か爲なけりや成らぬと焦躁つては見るが、何  
も爲ることが無いやうな氣がする。それで身體

には何とも云はれない不快な倦怠を覺えた。

「もしと、小母さんは關の外に立つて、何か被  
けてお臥みなさらないと、風邪を引きますよ。」

要吉はわざと返辭をしなかつた。

「風邪を引きますよ」と、小母さんは二たび繰返  
しながら枕元に坐つて、肩に手を掛けた。

要吉は餘儀なく起直つた。

小母さんは少時其方を見詰めて居たが、「毛布  
でも出させようか。」

「いや、最う可い。」

「左様ですか」と、一寸氣を變へて、「何だか陰氣  
ですわね、閉て切つて。少し明けませうか。」

片手を延して、縁側についた障子を明け放し

た。

「此間から伺はうと思つて居ましたがと、相  
手の氣を見い、言葉をつゞけて、お故國の方

は何んな話をしてお歸りなさいました。」

要吉はぎくりとした。此方が懇々々して居  
る間に、到頭先方から火蓋を切られた。

「別に如何もしない。」

「それでもお金子の話は。」

やゝ安心した。「うむ、それも打捨ちかして歸  
つた。後で好い様にするでせう。」

小母さんは苦い顔をした。「それだから貴方  
は不可いと云ふのですよ。何でも左様いふ風だ  
から、側の方が困つて仕舞ふのです。」

要吉は何とも言へなかつた。

少時して小母さんが、「私は一つお願ひがあ  
るのですがね」と切出した。

「えゝと、要吉は頭を擽げて、「何ですか、そ  
れは。先づ言つて試して下さい。」

「私は何も過ぎ去つたことを彼は云ふのではな  
い。親が側について居て出来たことなら、何と  
云はれても仕方がない。いろ／＼考へた上で、  
お種は知らぬが私だけは諦めて居ます。彼女も  
最う仕方が有りますまい。一日も早く諦めた方  
が可いのです。」

小母さんは一寸言葉を途切らしたが、材料の  
袖を引出して眼の縁を拭つた。

「彼女は最う何處へも行かないで、一生獨身

で暮すと云つてゐますが、如何して女が師匠の師匠などして造つて行かれるものでない。彼様な事を云つてる所を見ると、未だ何んな氣で居るかとお頼の身に成れば案じられるのですよ」と、眞正面に相手を見上げて、「それでお願いと云ふのは、私が言つたのでは聞かないから、貴方から好く得心の行くやうに、彼女に言つて頂きたいのですかね。」

要吉はお種が云つて居たのはこれだと思つた。そして蕪く胸を押鎖めながら耳を傾けた。小母さんの頼みと云ふのは、何とかしてお種が再縁する様に勸めて呉れと云ふので、段々聞いて見ると、現に姉の許へ貰ひに来て居る口がある様子で、何でも先方は深川の廻米問屋だとか云ふことであつた。

それを打明けられた時には、要吉も一種厭容することの出来ない氣持に捕はれた。一人の女を二人の男で分つ——自分が關係したことのある女を、幾許先方で貰ひたいと云ふにもせよ、それに乘じて自分の身抜けをするために、自分が手傳つてまで、何も知らぬ他人に押附けようとする。そんな眞似は逆も出来るものではない。先方の男も氣の毒であるが、お種は三たび意味もなく男の手から轉々して行く。それが知

らん顔して見て居られようか。見て居られないからと云つて、未だしも左様成り行くが女の爲には仕合せであらう。それを思へば何んな卑劣な所行をも忍ばねば成らぬ。今の一時では無い、永い一生の間、其男の前には知らん顔をして過ぎねば成らぬ。——要吉は自分が道徳上の墮落を目の前に見せ附けられるやうな心持がした。

「いづれ其間違つたら善く談して見ませう。」

一時逃れに左様は云つたものの、そんな事が自分の口から言はれるものでない。それだけは斷じて出来ない。

「貴方が強く言つて下されば、彼女もねえ。それぢや何分お願ひしましたよ」と、小母さんは心を殘して立上つた。

足音が襖の外に消えると、要吉は急に背々して、部屋の中をぐるぐる廻つたが、不圖これも嫉妬心ぢやないかしらと云ふ氣が附く。あれだけ女を棄てて仕舞ふ覺悟で居ながら、此方の手を引くには待設けても無いやうな都合の好い話を持出されて、こんな心が苦つのは、未だ未練があるからだらうか。又ごろりと机の前に倒れた。其儘息もしないかと思はれる程静手として動

かなかつたが、二時間倚り纏つと、むっくり起上つて、帽子を擲んだまゝ、ぶいと戸外へ出た。何か差迫つた用事でもあるやうに、急ぎ足で明神下の人通りの様な横町まで来て、びつたり足を留めた。永い間突立つて居たが、又徐々となる家の軒下へ近づいた。

格子の中を覗くと、沓脱の上に赤い鼻緒の朱塗の下駄が二足揃へて脱いである。三味線の音がして、お種の聲で「禿かむろと澤山さうに」と唄つて居るのが聞えた。近所の子供に暗古でもして居るらしい。何と思つたか要吉は其儘格子に掛けた手を引いて、町の角まで戻つて来たが、ぐるりと一周りして町の向う角へ出た。

「お師匠様、左様なら」と、尻上りに云ふ女の兒の聲が聞える。

「左様なら、忘れぬ様にお液ひなさいよ」と云ふ聲が中からした。

やがてお下げとお輝草盆に結つた二人連れが手拭に包んだ扇子を赤い帯の間へ差して、格子戸を開けるや否やばた／＼と駆けて行く。

要吉は少時其後影を見送つて居たが、一今會つたところで仕方が無いと呟いて、又元来た方へ引返して行つた。

何處を通つたとも氣が附かなかつたが、矢張

正直に前と同じ道を歩いて、要吉は丸山の家の前まで戻つて来た。何だか直ぐ家の中へ這入るのが可厭に思はれたので、又引返して、柳町へ出た。小石川と本郷との高臺から落す悪水を溜めて、其處に瀬川が流れる、其上に架けた柳橋の袂に、露店の魚屋が戸板を並べて、悪臭を放つ魚肉の切身に附木の札をつけて露いで居る。恰度夕飯前の人の出盛つた所で、殊に此邊は職工や労働者の集窟だから、結立の鬻だけ光らせて、醬油で煮しめた様な袖を着た細君達が金切聲を立てて商賣と唾み合ふ。其中を要吉は何か一人で吠いたり聲高に物を言つたりして急いで歩いた。往き違ふ者の中には胡散臭い眼をして顔を眺める者もあつた。

洞について下つて行くと、地面に席を敷いた古着屋に續いて、植木屋がある、人形焼の屋臺がある、大きな傘を擡げた簡屋もある。今日は藪藪閑堂のお賽日と見えて、子供や女や年寄なぞがぞろ／＼と黒門の中へ這入つて行く。要吉も其後から隨いて行くと、閑堂の横手の古い石塔の倒れた中に、露店屋の轆轤だのが小屋掛けして、太鼓や銅鑼で喧ましく嘩し立てて居る。けば／＼しい滑看板の下で、木戸番が聲を暖して客を招ぶ。藪の隙間からいやに白粉を塗

つた若い女が薄汚れた顔を出して、群集を覗いて居る。こんな連中が眼に留る毎に、要吉はいつても何だか自分とは餘り縁が遠くない様な心持がした。今日は殊にしみ／＼と身に沁む。若しあらゆる係累を斷つて、親も子も妻も何もない、天地の間に只一人の身と成ることが出来るなら、こんな仲間へでも這入つて、世界の果までも行つて仕舞ひたいやうな心持もした。

何時の間にやら人込に押されて裏門の外へ出た。急に人通りが稀に成つたので、初めて我に返つた様に四邊を見廻した。「これから何處へ行かうか」と考へた。

十

砲兵工廠側の埃の厚い道を、側目も振らず水道橋の上まで来て、要吉ははたと足を留めた。橋の下を濁つた水がゆる／＼流れる。何物の影をも映さない、又何物をも沈めて返さないといふ水である。擬乎とそれを眺めて居る間に、何しに來たのか、何の爲にこんな所へ來たのか想ひ出せなく成つた。空は曇つたのか暗いのか分らない。造兵の横手の門から、ぞろ／＼と職工が歸り始めた。街一杯に擴がつて行く。何れも疲れ切つた顔をして居る。歩くのも今初めて歩き出

したといふ歩き方ではない。一日歩き通して來て、今夜もこれから夜通し歩かねばならぬと云つた様な足取である。要吉も其中へ交つて何處までも行つて仕舞はうかと思つた。二三間歩いて見て、直ぐ後れて仕舞つた。茫然道端に立つてると、「おい」と呼んで、肩を叩いたものがある。振向くと、それが神戸だつた。

「あゝ君か。」  
「如何したんだな。金葉會ぢや、君が來ないものだから、今迄散會せず待つて居たんだが。」  
「そりや濟まないことをしたね。」  
「なに、そんな事は關はないが又如何かしたんぢやなからうかと思つてね、それに」と、神戸は背後を振回つた。

三間許り離れて、日に立たぬ程の縮の袴を穿いた女學生らしい女が一人立つて居た。焦茶色の毛皮の襟巻が年紀よりも老けて見える。要吉と視線が合ふと、此方へ近づいて來て、しづかに頭を下げた。  
「それに」と、神戸は言葉をつとけて、「これから僕が君の許へ行くと云ふと、眞鍮さんも丸山なら歸途だから一緒に寄つても可いと云ふのでね。」

「あ、左様か、それぢや」とは云つたが、何となく此處から引回すのが躊躇はれた。

「いえ、私はと、眞鍋と呼ばれた女は初めて口を開いて、「又此次にお伺ひしても宜しいのですから。」

「左様ですな。それぢや餘り晩く成る様だと不可ませんから、此處で失禮しませうか」と、神戶は側から引取つて言つた。

女は二人に別れて、間もなく往來の群集に紛れて見えなく成つた。

要吉は神戶と顔を見合せた。

「何處か其邊を歩かないか。」

「さ、歩いてても可いね。久し振で池の端でも散歩するかな。」

二人は壹岐殿坂を上つて行つた。

「一體如何したんだい」と、神戶は二たび相手の容子を氣にして訊ねた。

「いや、別に、眼を地上に落して、「四五日故國へ歸つて居たものでね。」

「え。それぢや何だね、今度は皆さん御一緒に。」

「なに、只一寸歸つただけなんだから。」

神戶は未だ何か言はらとしたが、餘り立入つてもと思つて控へた。

良あつて要吉は語頭を轉じた。「あの何は、此方から通ふんだと見えるね。」

「今のあれか、何でも家は白山の先きだと云ふことだが。」

「何日か、君は銀座だとか云つたぢやないか。」

「うむ、あれは關部三枝子さ。何かい、君は彼の女だと思つて居たのか。」

「左様ぢやないのか。」

「別人さ」と、神戶は笑ひを含んで、「三枝子はもつと派手で、風俗が下町式だよ。此方は、左様さね、最初會員の中に目の女子大學を出たのがあると云つたらう。それだよ。」

「何といふ名だい。」

「眞鍋朋子。」

「朋子、左様か。」

「併し間違ひとしちや面白いね。如何して又君にはあ、云ふ顔が氣に適るのだらう。」

要吉は自分が物笑ひに成つた様な氣がした。

「あの眉と眉との間の暗い陰は、誰の眼にも附くぢやないか。冥府の烙印を顔に捺したやうな——一度見りや一生忘られぬ顔だ。」

「其代り一度見りや澤山な顔だらう。」

「如何しても始終見て居られる顔ぢやないね。」

「一度見りや澤山な顔で、一度逢つたら一生忘

られない顔と云ふのだな。」

やがて二人は切通しの坂を下りて、不忍の池の畔へ出た。腐れた水は毎もの通り動かないが、空の曇つたためか、何處となく穢かでない。

蓮は大抵土に返つて、所々に枯れた莖が折れたなりに水の上へ出て居る。刻々に迫る夕暮の色に追はれる様に、點燈夫は池を廻つて走りながら、一つ／＼街燈に灯を入れて行く。それと後に成り、前に成りして、雪見橋から辨天祠の方へ歩いて来たが、三橋寄りの所で、路傍に人群りして居る後ろへ立つて、二人は足を留めた。

その貨席らしい家中二階に、赤と白と段

だら幕を張つて、外を向けて蓄音機を鳴らして居る。歌の文句は能く解らないが、寂びのある年の行つた女の聲を一杯に張上げて、三味線や太鼓迄も合の手にて、馬子唄か船頭唄か、いづれ海か山で唄はれるものらしい。其内に一曲濟むと、前に立つた職人體の小僧が、「船頭かはいや音頭の瀬戸で」と、直ぐ歌の節を眞似しながら立つて行く。

要吉も黙つて動き出した。神戶は其後から

流水を大きく廻つて、要吉と肩を並べたが、

「あんな様な墮落した女の、何と云つて可いか、

コイシユハイトを失つた聲と云ふものは、賑や

かな中に何處か手頼ない所があつて、隠いて居ると、僕は身に沁むがね。」

要吉は只頷いた。

「神戸はなほも言葉をつゞけて、左様ぢやないか、吾々の廢した心持は、あんな女のあんな聲に、辛うじて、其鳴を見出すのだぜ。其外には言表はし様もなければ、理解される宛もない。考へると淋しいね。」

一人は黙々として行く。

「矢張人間を動かすものは、人間の聲だね、肉の聲だね。何うもあの聲には誘惑が滲んで居るよ。人を墮落させる力が有ると、神戸はだんだん自分の聲で自分はずんで來るらしい。」

「左様か」と、要吉は誰に言ふともなく言つたが、一何が人生の快樂だと云つても、誘惑に抵抗しないで身を委せて居る位好いものはないね。」

「後で命を奪つて呉れたならなほ好いさ。誘惑を怖れるのは人生の吝嗇漢だよ——誘惑に克つたと云ふのも、日が暮れてとほく、墓場の手前迄辿り着いてから、一生を振返つて見て、何等の悔をも殘さなかつたと思ふやうな淋しさは堪へられんやないか。」

神戸も何處迄自分の云ふことを信じて居るの

だらう。やゝ有つて、要吉は下を向いたまゝ、一併し僕は駄目だね、誘惑に對して殆ど抵抗力が無いのだから。」

神戸は何とも言はなかつた。

西の空が切れたのか、上野の森から石段へかけて舞臺のフットライトでも廻した様に、其邊一面に明るく成つたが、見る／＼間に又暗く成つて行く。

池を廻るに伴れて、一旦辨天の屋根に隠れた向側の待合の家つゞきが又見え出した。軒並に二階へ灯がついて、障子へ映る人影までが廻燈籠を見るやうに、此世のものとは思はれない。不意に何處かの座敷で下方を入れて騒ぎ出した。水を渡つて聞えるためか、賑やかな筈の太鼓の音が心寂しい。

「おい君」と、要吉は神戸を呼び掛けて、「一寸向側を見給へ。何だか斯う芝居の書割でも見る様ぢやないか。」

「左様と、神戸は洋杖を立てた。  
「十人斬でも有りさうだね。」  
「うむ」と、又小石を踏んで歩き出したが、「近頃創作は如何した。未だ手を着けないか。」

「逆も書けさうにない。」  
「餘り凝り過ぎるからだらう。矢張事實を其儘

書くんだね。平凡な様だが、眞實の事を書くこと云ふことは如何しても最後の手段だね。日記を書く積りでさう／＼と遣つて見給へ。」

「日記に眞實の事が書けるかい。」

「左様か。日記に眞實の事が書けると思ふのは人間が自己に對して矯飾するものだ云ふことを忘れて居るからだらう。」

神戸は咄嗟の間に相手の言葉を説明したが、一併し自分のことは諷でも、他人の事を日記に書く時や眞實のことを書くだらうぢやないか。要吉は思はず相手の顔を見た。「だが、僕は他人の事に成つたら猶更書けない。矢張自分の事を書く外ないものね。」

「ぢや仕方がない、デイヒツンゲ、ウント、グールハイトで書いたら可からう。」  
「そりや洒落か眞面目かい。」  
「何方でも可い。」

「だが僕はねえ、何うも書く人ぢやない、書かれる人に生れて來たのぢやないかと思ふことがあるよ。」

「其代り實際の生活其者が作品だらう。」  
「何だ」と、要吉は苦笑したが、「只其方は値が高いからね。」

神戸は急にしんみりして、「併し誰かの言草

ぢやないが、其日送りの頓智や舞句でお茶を濁して、生涯何も爲すに仕舞ふ者は、身代を銅貨に換へてはら撒くやうなものだと云ふよ。其邊はお互に戒めなけりや成らんね。一何時となく池を一周して、二たび雪見橋の袂へ出た。片側町の柳の樹の下は暗かつた。仲町へ出ると、狭い町筋の兩側の灯が入り亂れて、白書を欺く程明るい。二人は十字街頭に立つて、一寸眼を見合せたが、ふいと又向横町へ反れた。

十一

昨夜一時頃、要吉は池の端から自宅へ戻つた。とろ／＼として目を覺したら、雨の音は止んで居たが、夜は未だ明けない。胸がむか／＼して、二目解らしい氣持である。漸と小母さんが起きる迄床の中で辛抱したが、勝手の方でことと云ふ音が聞え出すと一緒に起上つた。

此日は一日中身機が倦怠く、机に向つても書物さへ手に觸れる氣がしない。日の暮から悪寒がして、毛の穴が竊立つので、急いで夜着を引被つて寝たが、眞夜中に成つても戦慄が止らぬ。つゞぎさまに夢を見て居るやうな、覺めて居るやうな心持で、手足の所嫌はず自分で注射し

て、それにつれて熱が往來するかと思はれた。跨頭まんじりとも爲すに夜を明した。朝に成つて、稍疼痛が去つた様だから、一寸寢返りをして見ようとしたが、膝の關節が硬張つて曲げることとも出来ない。怖る／＼新聞を捧上げて見ると氣味の悪い程赤く腫上つて居た。かねて母親のお絹が自分を生み落した前か後に、重い痛風に罹つて、永く煩つたと云ふことを聞いて居る。今迄そんな氣觸ひは少しも無かつたが、如何かしたらそれぢやなからうかと案じられた。

そこで近所の醫者を迎へに遣つて、診て貰ふと、矢張急性の痲瘋質斯だと云ふ診断である。其上少し激烈に來た様だから早く入院して手當をしなければ不可まいと云はれた。一たび病人と成つては、醫師の言葉に従ふ外はない。其醫者の紹介で、小石川名荷谷の奥の狩野病院といふへ這入ることに成つた。醫者の宅の電話で訊いて貰ふと、恰度病室も明いてゐると云ふので、これも好都合であつた。

其日の夕方、要吉は身の周りの物だけ持つて、一人人力車に乗つて出掛けた。小雨が降つて來さうなので幌を下させたが偶と此家へは最う歸らないのぢやないかと思つた。あれだけ此家を去る計畫をしながら、無事の日は爲す所な

く、病氣に成つて出て行くのが自分ながら笑止である。車夫は氣をつけて、徐々曳いて行く。切支丹坂は勾配が急だからと云ふので、大家の火藥庫の側まで行つて又引返すことにした。其處迄は場末でも流石に町つゞきだが、其處からは路の上を高い杉の樹立が鎮して、車はごろりと暗闇の中へ這入つて行つた。ところ／＼道の曲り角に街燈が弱い光を放つてゐる。何處に病院が在るのか、要吉は未だ知らない。車夫も知らなかつた。石の門があるもので、此處だらうかと思つて訊いて見ると、門番がこれは寺院だとほざく。寺へ來るにはまだ早いと、要吉は人力車の上でひとり苦笑したが、聲を出すだけの力はなかつた。此様にして、兎に角無事に目指す病院へ着いた。

女關へ着くと、看護婦が二人出て來て肩を借して呉れた。兩方から釣られる様にして長い廊下を定め、病室へ通つた。一しきり當直の醫員だの看護婦長だのが來て、いろ／＼世話を焼いて呉れた。最後に副院長が診察したが、始終心安げに物を言ふ人で何となく心が落着いて來た。副院長が出て行くと、間もなく又看護婦が來て、罷法をするんだと云ふので、暫く足の纏帯を解いたり巻いたりした。それが清むと附添の

看護婦一人残して皆出て行つて仕舞つた。

夜が深けたと見えて、其後は森とした。時々

蒸氣の通ふ鐵管の中で、かたんと吃驚する様

な音のする外には、物音一つ聞えない。病室は

六疊で壁も天井も白い。電氣燈の光で見ると、

毛布も藁蒲團に被けた上被ひも寒い程白い。白

いづくめの中に仰向けに成つて寝て居ると、生

きながら白木の柵に納めて、海の底へ沈められ

た様にも思はれる。一人世間から遠く隔離され

たやうで、此處迄は誰も追掛けて来ないやうな

氣もする。偶と若し自分が本當に死んだらと

考へて見た。自分が死んだ後の周囲の者の行末

を一人々々明細に眼に泛べて見た。最後に如何

しても自分が一番可憫に思はれた。

こんな事を考へて居る間も、足の疼痛は忘ら

れない。それが疼くのもなく、やめるのでも

なく、一種異様な陰性の痛みで、何とも云はれ

ぬ不快な心持がする、氣が附いて見ると、窓の

外は幾でも降つて来たのか、しと／＼と重い音

が絶間なくつゞく。それが何だか足の痛みと調

子を合せるやうで堪へ難い。硝子窓を透して見

ると戸外は何處迄も潤く暗い許りである。

一おい／＼と看護婦を呼んで窓掛を下させよ

うとしたが、何時の間にか寝入つたと見えて返

辭をしなかつた。

明る朝に成つて見ると、要吉の當がはれた

室は病院の建物の東の端にあることが分つ

た。庭は只平に廣い許りで、窓際のまだ突支棒

を支つた青桐の外には、草一筋生えて居ない。

ずつと向うの垣根に滑うて、一面に厚い植込み

が見える。其處は傳染病室であると云ふこと

だ。この殺風景な庭を眺めて、要吉は二週間餘

り明し暮した。初めの間はいぢけた底寒い天氣

が續いたが、後には毎日快晴に成つた。それに

つれて要吉の病氣も目に見えて快く成つたが、

それからが何うも妙々しく行かない。自分でも

快く成るのか悪く成るのか分らない様な氣がし

て焦躁しい。恢復期に入つた病人は、健康體

の時よりも、反つて心持の澄々するものだとい

いて居たが、一向そんな覺えはなかつた。

お種は最初から眞心能て介抱した。今でも

一日置きか、二日置き位には必ず見舞ひに

来た。要吉も初めの間は、又此様にして此女の

情に絆されて行くことかと、内々それを恐れて

居たが、病院の單調な生活に倦んで来ると、

此頃ではお種の來るのを待造しく思ふことさへ

あつた。米市場の方の縁談は如何成つたのか、

此方から訊くのも氣の毒な様で、女は猶更何と

も言ひ出さない。只來ては只歸つて行つた。

十二

午後一時頃である。朝から仰向けのまゝで讀

み續けた小説にも飽きて、鬱陶しく成つたので、

看護婦を呼んで窓を開けさせた。白い窓掛が帆

の様に風を孕んで、隙間から蒼い空が見える。

要吉は、廻つた様な心持で、蒲團の中から乗出

して、久らく新鮮な空氣に面を曝して居たが、

急に顔色が變つた。ぞく／＼寒氣がするので速

て横に成つた。看護婦も氣が附いて急いで窓

を閉めて呉れた。

そこへ二人の看護婦が廊下の入口から顔を出

して、「此方が御面會に」と、一葉の名刺を差出

した。

附添の看護婦が受取つて、寝て居る眼の前に

翳したのを見ると、神戸直方とある。要吉は「あ

あ」と言つて點頭した。

看護婦が引返すと、間もなく廊下には音が聞

えて、身丈の高い神戸の姿が先づ戸口に現はれ

た。把手に手を掛けたまゝ、一寸振向いて物を

言つた様であつたが、續いて女の長い袂が現

はれた。

神戸はつか／＼と枕元へ近づいて、一其後

は如何だ。今日は珍らしい人を伴れて来たよーと言ひ／＼洋袴の膝をたくし上げて坐つたが、「眞鍮さん、お這入りなさい。」

朋子はしとやかに一禮して、入口の壁に近く座に着いた。

要吉が遂て起直らうとすると、神戸は、「ま、左様して居給へ」と、手を擧げて留めた。言はれるまゝに要吉は又仰向けに成つた。

「如何で被坐しやいます」と言ひかけて、朋子は稍依違つた。「未だお顔色が悪い様で御座いますわね。」

其聲が極めて優しく、調子が暖かで、眼を睨つて聞いてゐると、恰もそつと柔かに抱かれる様な心持がする。

「左様」と、神戸は何氣なく頷いて、「先達て来た時よりは悪い様だね。又如何かしたのぢやないか。」

「あゝ昨夜から少し熱が出て」と、要吉はうつかり嘘を吐いて仕舞つた。それが口へ出ると共に努めて苦痛を装はねば成らぬ様な氣がした。

「それや不可ね、又後戻りするやうぢや。」

「なア」と言つて、要吉は眼を半眼に閉ぢた。

斯うして力の無い風を装ひながら、竊に朋子の容子を窺つて居た。

何時も物を言はぬ時の此女の癖で、少し反身に成つて、伏目に一所を凝視つてゐる。堅く閉ぢた唇はやゝ豊かに過ぎて、熱のために上皮膚の乾燥いだのが男の心を惹く。

「大切にしまへよ。」と言ひながら、神戸は宛もなく枕元に散らかつた書物を一册取上げた。

其下には何日か神戸が見舞つた時に、こんな際でもなけりや讀む機會はなからうからと、持つて来て貸して呉れた聖書が其儘開かれもしないで伏せてある。

「如何だ、聖書は讀んで見たか」と言つて、手に持つた書物の表紙を見たが、「オスカア、ワイルドの『サロメ』だね。」

「其方は讀んだ。」

「君のことだから左様だらう。面白い。」

「あゝ面白いよ。」

「矢張新約聖書の中のサロメがババテスマのヨハネの首を盆に載せて呉れといふ、あれだらうね。」

「うむ、あの女がそれへ援助するんだ。」

「生首にか。」

「あゝ。」

「汝は常に姫を見る。姫を見ること過ぎたり。」

さばかり人を見てあらむは殆し。何等かの怖ろしきこと起るべし。」

要吉は竊と朋子を視る眼を反した。

「眞鍮さん」と、神戸は朋子を呼びかけて、「貴方ダンヌンチオの『トライアムフ、オブ、デス』をお讀みに成つたことが有りますか。小島君は此處へも持つて来て居ます」と又一册の洋書を取上げた。

「え」と、朋子は小首を傾けたが、「それですか、いゝえ。」

「ぢや是非讀んで御覽なさい。初めから終ひまで刺戟の強いものですよ。綺麗な所が眼の覺めるほど綺麗なら、汚い所も鼻持の成らぬ程汚い。」

「はア」と言つた許りで、朋子は又口を閉ぢた。

そこへ看護婦が這入つて来て、院長の廻診があると言つた。

要吉は神戸に向つて、「それぢや、一寸失禮だが――」

「さ、何卒。」二人は片側へ寄つた。

看護婦は直ぐ毛布をはねて、足に巻いた繻帯を取り始めた。少時すると三四人とや／＼と這

入つて来た。院長は看護婦が差出した體温表に眼を呉れて、一寸局部に觸つて見たが、「あ、左様か〜」と頷いたきりで、又どや〜と出て行つた。

それを機會に神戸も朋子を促して立上つた。「ぢや、又來ようね。」

「さうか、わざ〜何うも。」

朋子の穿いた赤い鼻緒の上草履が廊下に消えんと、要吉は芝居の幕が降りた後の様な物足りなさを覺えて、枕に頬を押着けたまゝ、凝手と其後を見守つて居た。ざわ〜と心が落着かぬ。

間もなく朋子一人引返して來たが、入口から覗き込んで、

「あの、只今の書物はお明きに成つてませうか。」

要吉は一寸驚いて其顔を見たが、

「明いてます。お持ちなさい。」

「拜借して行つても好う御座いますか。」

「何方をお持ちなさいませう。」

「何方でも。」

要吉は二たび女の顔を見た。「ぢやダンナンチオの方から先きへ。」

朋子は云はれるまゝに、包みを開いて「死の

勝利」を入れた。

「貴方は獨逸語の方が達者だと云ふぢやありませんか。它には獨逸譯のがある筈です。」

「いゝえ、只家の者が皆獨逸語を遣りますから——これで結構で御座います。」

朋子が急いで玄関まで來ると、神戸は靴を穿いて仕舞つて、今其處で人力車から降りたらしい、赤兒を抱へた女と挨拶をして居た。やがて其女は丁寧に叩頭をして神戸と別れたが、受付の看護婦に案内を頼んで奥へ這入つて行つた。

神戸は其後で朋子の方を向いて、「如何爲さいましたか？」

「いえ一寸」と、判然言はなかつた。

二人は門の方へ出て行つた。

前の女は看護婦に隨いて、要吉の病室の前まで來たが、此處だと教へられておぼ〜扉を開けた。それを見ると、要吉は思はず聲を出した。

「隅江か、如何して來たのだ。」

隅江は子供を抱へたまゝ、其處へ小さく成つて坐つた。

「一昨日丸山の方へ手紙を出して置きましたがな、未だ見とくれやアせんかも知れんが。それでも御氣の方は大變宜しいさうで御座いま

すなも。」

「俺が病氣だと云ふことを如何して知つた。」

「え〜、隅江は意外な面持して、「そりや貴方丸山の小母様から知らせて頂いたがなも。それ貴方知りやアせんのかな。」

左様かと要吉は心の中で頷いた。今度の病氣は全快つて仕舞ふまで、故郷へも知らせて呉れるなと云つて置いたのだが、知らせた上は仕方がない。

要吉は枕の上に頭をつけながら熟々隅江の姿を見た。田舎者が田舎者らしくしてりや未だ見られる、田舎者の盛装した位見苦しいものはない。着替へる位なら五分の隙もないやうで有つて欲しい。辻棲の合はぬ服装をして、それで當人は得意で居れる程可厭なものはない。

其下から要吉は直ぐ何故自分は何も知らぬ隅江にこんな罵倒を浴せ掛けるのかと思つた。隅江を嘲るのではない。自分自身を嘲つて居るのだ。今其處で隅江が朋子に出會つたかと思ふと、何だか見られたくないものを見られたやうで、少からず自分の虚榮心を傷けられる。其傷けられた虚榮心に對して隅江を罵つて居るのだ。左様思ふと、如何にも自分の心掛がさもししい。

「今玄關の所で神戸様にお目に懸りましたが、今度彼方にも大變お世話に成りやしたさうだとも。」

「うむ、まあ可いや。コートでも脱いで悠然したら可からう。」

斯う言つた要吉の聲は優しかった。

隅江は暮方迄居て、丸山の家へ歸つた。故郷の事など此方から訊きもしなければ言ひもしなかつた。

### 十三

其後はお種がふつり来なく成つた許りで、又單調な日が續いた。神戸は二三度見舞つて呉れたが、朋子からはあれきり何の音沙汰もなかつた。

又三週間前経つた。師走の末に、要吉は漸と退院して、二たび有哉無哉の間に丸山の家へ戻つた。此上寝て居る必要もないが、病後の衰弱に記けて、一間に閉籠つた儘うつら／＼と暮した。誰も訪ねて来なければ此方から行きもせぬ。家の者とも減多に面を合せなかつた。机に向ふこともあつたが、別段何を書くでもなく、何を讀むでもない。唯始終何事かを待つて居るやうな心持がした。何事かは自分でも分らない。

不圖、此次には如何したら可からうかと云ふ氣が附く。病んで起らない間はともあれ、一旦恢復した上は、如何にかして此不自然な境遇から遁れなければ成らぬ。一刻も早く如何かしなければ成らぬ。が、併し自分一人の力では最う如何することも出来ない様に思はれた。自分は自分を餘りに熱く知つて居る。加之、そんな事よりも、未だ根本に於て何物かが解決されずにあるのぢやないか。それを解決した日には、自分の身が如何成るか分らない。従つて目前の事など如何だつて構はない様なものである。こんな手前勝手な、都合の好い理想を着けて、無理に安心して、一日延ばしに其目を送つた。

隅江は何とも言はない。又言ひたくも言ひ得ないのであらう。要吉の方から談話をしかければ、一日でも物を言はなかつた。故意とか、それとも其様なつもりも無いのか、成る可く要吉の側へは近寄らぬ様にして、始終小母さんの所について居た。小母さんとは割合に好く談話もした。

全體、此女は俺を如何想つて居るだらうか。要吉は時々こんな事さへ考へた。未だ此女に良人の愛情を求める心が有るのだらうか。そんなものは最う要らぬのぢやなからうか。辛抱

強いと云へば是程辛抱の好い女もない。けれど、何處迄辛抱して忪へて居るので、何處か考へが込んだ時は、流石に自分ながら非道い心根だと思つたが、其後から又、何うもそんな様に思はれた。

夜半に隣の部屋で子供が泣き出すと、要吉も動蹙眼を覺した。まじり／＼天井を見詰めながら、この先き自分には、此虚人の良人と成り人の父と成つて、普通の生活を續けて行くだけの覺悟が有るだらうか。縦令あの女とは故障なく手を切ることが出来たとしても、それならそれで満足して、人並に人の爲るやうな家庭を營むことが出来るだらうか。安んじて一生を送られよとを止めた。それから先きは成るべく曖昧にして置いて、良心の隅をつまたくない。

年の暮だと云ふので、小母さんが小松や注連笹を買つて来た。今朝から隅江と二人でお正月の煮物やら御節を切るやら、どさくさとして、日影の薄い家の中も何處やら春めいて見え

た。一日居間に引籠つて居た要吉も、何を想附いたのか、御食を手に持つた儘ふらりと茶の間へ

出て来た。小母さんと隣江とは仕事を片手に何やらひそ／＼と話し合つて居たが、それを見ると急にぼつたり止めて仕舞つた。要吉は可厭な心持がして、二人の顔を一人々々見廻したが、

「一寸出て来るよ。」

「今頃から」と、小母さんは顔を覚めて、「追附日が暮れるぢやありませんか。」

「うむ、直き歸るんだ。其邊の年の市の景氣でも見て来ようと思つて。」

「戸外は風が冷たいんですよ。」

要吉はすん／＼上り框の方へ出て行つた。隣江は遂て下駄を揃へた。

眺めて外出したので、何と云ふこともなく人の顔が珍らしい。足の向くまゝに本郷三丁目の方へ違つて来ると、軒に張つた注連飾や笹葉の乾いたのがさら／＼と風にざわつく。霞でも降つて来さうな空模様になつた。往來の人は益々

忙しさに駆け出した。其中を一人外套を着た身丈の飾り高くない男のそりと急ぎもしないで向うへ行く。背後附が何だか知人に似寄つて居るの、要吉は其姿を追掛けて見ようとしたが、間もなく夕暮の同じ様な黒い人込の中へ紛れて分らなく成つた。向うの人は要吉に認め

られたと云ふことも知らないで過ぎたらう。別には逢はなければ成らぬ人と云ふでもない。それが如何いふものか、要吉は妙に寂しい心持に成つて、何時までも扉の吹きまくる中に立つて居た。

#### 十四

年が明けてから第三の金曜日、要吉は猿樂町の教會の玄関を上つて行つた。午後一時から金葉會の新年に成つて最初の會合を聞くと

云ふのだ。玄関は明け放したまゝ、廊下には人影が見えぬ。突當りの階段を上つて行くと、校舎の二階へつゞくのだが、未だ早いかして誰も

来て居なかつた。そこへ外套と帽子とを放下して置いて、又玄関まで下りて来た。小使を呼んで見たが返辭をせぬ。

廊下の左側の扉を開けるとそこは教會の會堂で閃然として人氣もない。一段高く成つた説教壇の背後は白い壁が龜の様に圓形に凹んだだけで、何一つ裝飾の無いのが奥床しく見える。説教壇の下に一臺の古い洋琴が据ゑてある。

扉、前子の窓から射す青や赤や黄色の光線が象牙の鍵の上を流れる。要吉は何心なく其前に坐つた。指を出して一つ鍵を押して見た。又一

つ押しして見た。續いて鍵の上に指を走らせて見た。音楽の心得などは全然無いのだから調子を成さう筈はないが、それでも自分の指頭から音が出て耳へ傳はると云ふのが面白い。彼方を押へて見たり此方を押へて見たり、何時迄も飽かず繰り返して居た。

偶と背後に人の氣配がした様なので、思はず手を止めて振返つた。何時の間に違入つて来たのか、そこに朋子が立つて居た。前に手を重ねて立つたまゝ靜手として動かない。頭を下げようともせぬ。唯じろりと要吉の顔に眼を注いだ。それも要吉の顔を見て居る様でもない。何も見て居らぬのかも知れぬ。

斯うして居れば、二人ながら何時迄経つても物を言ひさうもない。何かしら言出さなければ成らなく成つて、要吉は洋琴の前を離れて立上つた。

「貴方、これをお習ひに成つて？」

「ほんの鳴らすことだけ。」

「ぢや何か一つやつて御覽なさい。」

「いえ、駄目です御座います。」

此時ふと男の心に浮んだことがある。何か物の本で讀んだ様でもあるし、又今自分が想ひ着いた様でもある。何方にしてもそれを言出さ

なければ、一寸外に云ふことが見附からぬので、思ひ切つて言つて仕舞つた。

「貴方は、如何考へておいでですか。」

「何で御座います」と、朋子はそつと洋琴の端へ手を掛けた。

「戀の話です」と早口に言つて、女の顔を覗く。

「はア。」

「笛の歌口を強く吹き込む様に、一人の女を胸しく想ふのが眞の戀でせうか、それとも洋琴の鍵盤の上に指を走らす様に、女の唇から唇へ早く移つて行つて、其間に諧音を見出すのが眞の戀でせうか。」

「そんな事は」と、朋子は静に見返して、「先生だけは既う極つて被坐しやるのだからと思つて居ました。」

要吉は何とも言ふことが出来なかつた。朋子の態度は落着いて居るが、顔だけはやゝ赧らめて、黒みがかつた唇が愈々黒ずんで見えた。平常地味な服装をして、努めて若い血潮の溢れるのを隠さうとして居る。それが一寸した機會にも現はれるのだらう。何うもこれに似た顔を見ただけな気がする。何處かで見たに違ひない。左様だ、故郷へ歸つた夜初めて見たお倉の顔だ。

勿論兩者の間には野生の儘なものと、幾代の修養を經たのとの差別はある。併し如何しても兩者の間に相通する何物かがある。何物とも指しては云はれない。けれども其何物かを、要吉は自分ひとり捉へ得たやうな心持がした。

此時廊下にばた／＼と足音がして、二三人若い女の聲がしたかと思ふと、不意に扉を開けて中を覗いた者がある。二人は何か悪い處でも見られた様に身を開いた。覗いた女は一吋要吉に目禮したが、

「眞鍋さん、此處に被坐して。先刻から随分捜してよ。」

朋子は戸口を振向いたが、何とも言はないで、徐に出て行つた。

要吉は洋琴に凭れかゝつたまゝ、其うしろ姿を見送つた。「新しい誘惑」といふ聲が頭の中を響かすやうに聞えた。それを耳にしながらか矢張それに引かれて行く。今迄も左様であつた。此後も左様であらう――

少時すると、又廊下に足音が聞えた。

「未だ會堂に被坐しやるかも知れないわ。」

「此度左様よ。」

二人の女の顔が同時に扉の背後から出たが、直に又引込めた。其後で神戸が現はれた。

「や、何うも遅く成つて失敬した。」

「いや」と、要吉も漸と氣が附いた様に言つて、側へ近づいた。

それから皆二階の教室へ集つた。十畳に足らぬ程の小さな間で、火鉢を中央に十脚許りの椅子を並べて、それへ面々が腰を掛けた。會員は段々減つて七名だけに成つたさうである。朋子の外には、日白の女子大學から來るのが三人、此教會附屬の女學部から三人、其中に團部三枝子といふのがある。一人は三枝子の友達で、今一

人は年配も五十の餘、其前身は吉原で名の賣れた藝者でおちやらと云つたさうな。如何いふも

のか、こんな所へ紛れ込んで、殊勝らしく讚美歌を唄つたり、種々な會の世話を焼いたりして、それを娯しみにして居るらしい。

神戸は恰度大人が一人子供の中にあつて遊んで居るといふ態度で、衆皆に相手をした。平易な話をさも面白さうに、時々は警句を言ふことも忘れなかつた。要吉には左様は行かぬ。矢張り相手よりも自分に興味の有りさうな事しか言はれない。何でも此夏前には初め希臘の劇場の話をして、それから戯曲の脚色に移つたことと記憶えてゐる。大分骨を折つて、草稿迄作つて話したが、聞いてる方では此とも面白くな

つたらしい。手持無沙汰にして居ると、神戸が来て何か話をせよと云つた。此前希臘の話をしたからと云ふので、サッフエーの斷片について語つた。リユーカチャの岩角から身を躍らして海に入つた此女詩人の死は、いろ／＼異説はあつても、矢張死んだことにしたい。死因は分らぬことにして置きたいと言つた。サッフオーから想ひついて、紀元五世紀の初めにアレキサンドリヤに住んだと云ふ巾幗の學者ハイベシヤが、基督教徒のために美しい生身の肉を貝殻で削り取られて虐殺されたといふ話をした。熱い圖だけに埃及の女の死方は皆聊しい。クレオパトラは毒蛇に身を齧ませて自殺を遂げた。それはシオークスピヤに竊されたが、マアロウに書かれたダイドーといふ女王は熱帯の香料を積み上げて、其中に立つて焚け死んだ。こんな風で、終ひには事實だか戯曲の中の話だか分らなく成つて止めた。

要吉は机の兩端に手を掛けて、始終下を向いて話した。下を向いて居ながら、始終一人の女の顔がまざ／＼と眼に見える様に思つた。

十五

此日の會を開きつゝ、同じ方角へ歸るのは、

朋子と神戸と要吉との三人だけであつた。三人は水道橋の袂まで來た。此處で朋子と要吉とは、神戸に別れて、同じ道筋を丸山と駒込とへ歸る筈である。左様成ると、要吉は今迄最う一度朋子に近づく機會があつたらと思つて居ただけに、氣が咎めて、神戸と一緒に大久保へ行かうと言出した。

そこで二人は朋子と別れて、水道橋停車場の石段を登つて行つた。荷架に腰を下しながら電車を待つた。神戸は如何したのか、凝手と考へ込んで物を言はぬ。それを見ると、要吉は何とか言はずには居られないやうな氣がして、  
 「おい君と、神戸を呼びかけた。一随分無意味な會だね。」  
 「何が。」  
 「金葉會さ。」

「如何して」と、神戸は意味ありげに笑つた。「今度此會を始めたのは、實際あの二人だよ。あの二人が言出したのだ。三枚子と朋子との會だと思へば、それだけで可いぢやないか。僕は三枚子一人の會だと思つて居るよ。」

要吉は下を向いて苦笑ひしたまゝ返辭をしたかつた。

電車が來たので、二人ながら飛び乗つた。隅

の方に乗客が一人しか無い。神戸は又語り續けた。

「去年の暮、左様だ、最終の授業の濟んだ日だ。僕が矢張此電車を待つて居るとね、背後から息を切らしてばた／＼と駆けつけて來た者が有るんだね。毎時あのはつとした派手な服装だらう。長い袂が翩翩としてね。何處へお出です」と訊くと、  
 「え、一寸信濃町迄と言ふのさ。それで信濃町で降りるのかと思ふと、又新宿迄參りますと、分らない位に口の中で言つて居た。頭新宿迄一緒に來たんだよ。僕も其時は何とも言はれない氣持だつた。君は同情が無いから他人の事など注意しても居まいが」と言ひさして、神戸は要吉の方を振向いた。

要吉は黙つて腰掛けたまゝ、聞いて居るのか居ないのか分らなかつた。  
 「あの濃い髪のと、あの唇の白味がかつた邪慳らしい口元とは、今でも眼に泛べようと思へば、直ぐ泛ぶね。」  
 「斯んなことを言つて、神戸は要吉から何んな返辭を待設けて居るのだらう。」

「左様、あんな顔がフェエと云ふのだらうね」と、要吉はわざと冷淡に言つた。心の中ではダークな顔を想ひ泛べて居た。

神戸は何とも言はなく成つた。

大久保へ着いてから線路を横切つて一町許り行くと神戸の住家である。細君は持病で寝て居ると云ふことであつた。神戸は三枚子から寄越したといふ極彩色の繪端書だの歌の草稿だのを見せて呉れた。それから金葉會の連中が書いたといふ小品が五つ六つ、其中に鬘子の『末日』と云ふ題の短篇が一つあつた。

「これを見給へ。君よりは旨いかも知れぬぜ」と言つて、神戸はそれを要吉に渡した。

要吉は引留められる儘に、十二時過ぎまで話込んで居た。甲武線の電車は勿論ない。新宿まで出て市街電車に乗らうとしたが、これも車庫へ歸るもの許りで、今から出ようとするのは一臺もなかつた。已むを得ず人力車に乗つた。往來の絶えた路はもう凍てついて、本郷迄二里の間冷たい風を切つて戻つた。

宿へ着いたのは夜の二時に近かつた。此位暗く成ると夜明まで寝附かれぬのが癖だから、洋燈を明るくして、持つて歸つた『末日』の草稿を読み始めた。自意識の強い女が意氣地の無い男を振棄てて信州へ隠れに行くといふ筋だ。如何にも性急らしい漢の走り書きで、所々に脱字さへあつた。何と思つて朋子がこんな事を

書いたものであらう。要吉にはそれが氣に成つた。何うもそんな経験があつて書いた物とは思はれぬ。そんな経験も無いのに、空想の上で、男を愛すると云ふことよりも、先づ男を棄てることを描いて居る女かも知れない。

其夜要吉は『末日』について長い批評を書いた。一番終ひへ持つて行つて、「傳説に依ればサツフォーは顔色のダークな女であつたと書き添へた。翌朝草稿と一緒にそれを郵便で送らせた。

一日經つて返事が来た。こんなに早く返辭が来ようとは待設けて居なかつた。それが何だか好くない辻占の様に思はれて、封を切る時の要吉の手は震へた。あの意味が朋子に通じないで仕舞ふ筈はない。通じて居て通じない風をされたら、それこそ堪へられなからう。少時手紙を持つた儘思索して居たが、思ひ切つて讀み下した。すらくとした手紙の文體で、當前の事を述べた末に、只一句「此夜此頃御言葉のはしく、まで繰返して、思ひ留るゝことの憂候」とあつた。

次の金曜日に要吉は、又例の教會へ行つた。霜降の道の悪い日であつた。毎もの通り毎もの教室で神戸にも會つた、其外の連中にも會つた。

朋子は別段變つた容子もなく、外の人に挨拶すると同じ様に要吉にも挨拶した。要吉の眼には朋子の態度が幾層にも取れた。何だか今迄自身が勝手に描いて居た夢に冷水を注がれた様にも思はれた。朋子は三枚子の姿を見ると直ぐ其手を引張つて片隅の方へ連れて行つた。何やら面白さうに話しては二人できやつくと笑つて居た。要吉はそれにも眼を離さなかつた。此女の表情なり舉動なりの何處迄が心から出るもので、何處からが技巧を弄するのかわからない。

斯んな風で會は面白くもなく閉ぢられた。要吉が神戸と一緒に支關に出ようとする、最う先へ歸つた筈の朋子が駈けて来て、背後から呼び留めた。

「あの先遣で拜借した御本は獨逸譯の方が拜借出来ませうか。矢張り何うも能く解りませんで——」

要吉は一寸顔を見たが、一え、宜う御座います。此次に持つて参りませう。——

「いえ、それでは餘り何ですか、私がお宅へ伺ひしても——」

「そりや構ひませんが、要吉は口籠つた。家へ來られては少し好くないことがある。

「では、何日頃お伺ひして宜しう御座いませ

う。

「左様ですね、明日は土曜日だから、ちや明日の午後お待ち申して居ませう。宅は分つて居ますね。」

「存じて居ります。それでは何卒。」

朋子は一人毎もの道を歸つて行つた。後の二人は何處かで、夕飯を喰べようとぶふり、ぶらぶらと九段の方へ向つた。

要吉は途々歩きたがら考へた。如何いふ積りで、朋子が宅へ来ようとぶつたのか、合點が行かぬ。或は先達二往復した手紙が、自分ながらやゝ氣を越えたと氣が附いて、其防禦策として、萬一としたら隅江とでも懇意にならうと云ふ考へかも知れぬ。そんな處まで氣を廻して見たが、何れにしても餘り来させたくない。

飯田町の郵便局の前まで来た時、一寸と言つて、神戶を外に待たせて置いて、名刺の裏に二三行走り書きした。

「あれから神戸君と話をして居る間に、金業者のことに就いて、貴方とも何種談申したい事が出来ましたから、お差支なれば、明日午前九時までに水道橋の甲武館電停停車場へ来て頂きたい。私に其處に待合せて、御一緒に大久保の神戸君

の宅へ行きます。書物は其節持つて参ります。」

別に懐中から一通の手紙を取出した。眞實朋子殿と宛名を書いたまゝ、未だ封がしてない。中味を抜いて、件の名刺と取代へながら、郵便へ投り込んで仕舞つた。

それから神戸と一緒に夕飯を喰べたが、此事については何も言はないで別れた。

### 十六

外套の衣袋に兩手を突込んだ儘、要吉は人待顔に水道橋停車場のプラットフォームを何處となく往反した。電車は仕切りなしに發着する。昇降の乗客は何れも急足に要吉の前を通り過ぎた。改札係の驛夫も初め二三回はお乘りに成るんぢやありませんかと注意したが、頭を振つて腕を向いたので、其後は氣にも留めぬらしい。不圖砲兵工廠の練解に沿うて其人らしい影が見えるので、凝手と眼を離さずに居ると、段々近づいて橋の袂へかゝる頃には、何處も附かぬ女に成つて仕舞ふ。氣がついて快時計を出して見ると、午前九時を六分過ぎて居る。或は來ないのぢやないかと思はれ出した。要吉はまた小石を敷いた上を大跨に歩き始めた。昨

日の手紙を今朝遅く見にとすれば、九時迄には間に合はぬ。間に合はなければ見合せたかも知れぬ。來なければそれ迄だ。何事もなく済んで仕舞ふだけである。要吉は、か左様成れば可いと思つて見た。が、若し此處へ遣つて來たとすれば、云はく爲つて誘き寄せたのだ。明らかさまに左様告げる外はない。明らかさまに告げた上で如何成るかは分らぬ。唯、これ迄の通りで済まぬのは明白である。

再び改札口へ来て、停車場の時計を覗いて見ると、矢張り九時六分過ぎだ。要吉の快時計が少し進んで居たものと見える。そこで又傍樂に腕を下して、先刻からこれで三度目で、脇に挟んだ「死の勝利」を抜いて讀み始めた。要吉が初めて此書を手にしたのは、今から三四年前未だ大學へ入つた當座で、餘程身を入れて讀んだものと見えて、或所に赤インキで横線が横間もなぐ引いてある。赤インキの處だけを兼び、に讀んで行く、大抵は戀に悩む若者の、無稽に罷つたやうな練習ばかりだ。要吉は急に書物の上へ手を伏せて、自分は本當にあの女に惚れて居んだらうかと自分の心に糺して見た。糺して見たばかりで、それに答へようとは思はなかつた。こんな疑問を出しては其儘にして置くといふこ

とが、不安の間に何ともふはれない快感を興へるのである。

この時石段を登る足音がして、裳裾の衣擦と忙しい息遣ひとを聞いた様に覺えて——或は後から左様思つただけかも知れぬ——要吉は不圖眼を上げた。其刹那石段の上には現はれた女の半身が燒着くやうに踵手へ映つた。明子は終に遣つて来た。要吉は思はず立上つて二三歩前へ出たが、その儘其處へ立竦んだ。明子は要吉と眼を見合せたばかりで、直ぐに切符を求めに行つたが、やがて驕犬に剪刀を入れさせて、首に巻いた毛皮の紐巻を取りながら近寄つた。し

とやかに一襲して、一大へん御待たせ申しました。御手紙が門の受信箇へ遣入つてましたのを、今朝に成つて拜見しましたから。——

——いえ、私こそ火急な事を云つて上げて……それでも能く間に合ひましたね、手紙が。大抵無駄だらうと思つて居ました。——

何氣なく言ひはしたが、要吉は自分ながら語尾が顛へた様に思つた。

今朝に限つて、受信箇を私が開けに参つたのです。それに毎も十時前でなけりや家を出ませんのを、今日は九時前に火急ぎで出たものです

から、家内ぢやア何だか變に思つて居る様でした。

要吉はそれと女の顔を見た。急いで来た所爲か少し上氣して、手に持つた襟巻で口元を蔽ふ様にして居るが、別段意味があつて言つたのでは無いらしい。

他人の家を訪ねるので明子も態々着替へて来たものと見え、洋装の人を人とも思はぬ様な色合でなく、くすんだ柄ではあるが、流行の色の縞御石に撫肩をしながら見せた。羽織の袖に二三筋眞鍮の紐を引いたのも、何となく懐かしげである。要吉はそれに力を得たやうな氣をした。事實を告げるなら今だと思ふ。けれども口では矢張り外の事を言つた。

——死の勝利の獨逸譯を持つて来ました。矢張り書入れがしてあつて汚いんですが。——

明子はたゞ黙つて頭を下げた。

そこへ電車が着く。要吉は、一ちやいこれに乗つて参りませうかと訊いた。明子が頷いたので、倚架の上に捨てて置いた書物を取らうとすると、一あ、それは私が持つて参りますと一言つて、手を出した。

——いやと、後ろから押すやうにして電車へ乗込んだ。

電車の中は幸は空いて居たので、二人並んで腰を掛けた。要吉は等めて軽い雜談を仕向けようとしたが、二三言話す間には自分から口を禁んで、眞直に正面を見詰めた。頭の中は車輪と一纏に成つて忙しく廻轉する。斯うして電車に乗込んで仕舞つたからには、手を東ねて事實の贊助するのを待つ外はない。自分ながら拙い地位に附つたものだ。管も斯う成るべき筈でないものが、斯う成つたやうな氣がする。切めて此騒つく胸を細手が觸つて呉れたらと思ふ。

あらゆる物を見逃さぬ女の眼だ。恐らく知らぬ管はあるまい。或は心の底を見抜いて居るのかも知れぬ。見抜いた上で出て来たのかも知れぬ——自分との密會に加はるつもりで。此間も電車は猶豫なく駛る。停車場へ着く度に、乗客がどやどやと乗込む。それと押合つて降りる者もある。要吉は唯いろいろな物音の交つた雜然たる聲音を耳にする計りで、まるで眼前の未來を知らないで居た。

やがて電車は大久保の停車場へ近づいた。要吉はだん／＼俯向いた。明子の足袋の爪先を見詰めたまま、顔を背向けて居た。電車が徐々と進行を留めると、車掌が大久保、大久保と呼んだ。乗客は大抵降りて行つた。要吉はそれで

も立たらとせぬ。朋子は少し髪を浮かして、小聲に、

「あの、此處ぢやありませんか」と注意した。

それにも返辭をしないで、要吉は彌々俯向いて仕舞つた。其内電車は發車する。要吉は女の足袋の爪先を凝手と見詰めた儘で居たが、此時の朋子の顔の表情を明々と見るやうな氣がした。

朋子は微かに溜息を洩した様であるが、又靜に髪を下して身動きもしなく成つた。此僅少の時間に、二人の頭の中では、殆ど數へ切れない程の感想が稻妻の様に通過した。間もなく、電車は、柵木を過ぎて、中野の終點に到着した。乗客は皆降りた。二人も其後から續いて降りた。此時要吉は初めて朋子の顔を眞面に見た。

「眞面さん！」

「はアと、極めて落着いた返辭をした。此女の落着、時は心の中が極めて動亂してゐる時である。

「私は貴方を欺いたのです、欺いて此處まで連出したのです。それは打入つて聽いて頂きたい事が有つたからですが、若し私の爲たことをお腹立なく、何卒介さず此處からお歸り下さい。御遠慮には及びません。それとも私の行く

處まで一緒に来て下さいませうか。

要吉は一息に斯う言つて女の顔を覗き込んだ。

「は、伺ひませうと、朋子は眼を伏せたまま、答へた。

「え、来て下さる！一 要吉は人日さへ無けりや其處へ、跪きたいやうな氣がした。

「實は何處へ行かうといふ宛も何も無い。唯此處迄来ただけです、兎に角柵外へ出ませうか。

朋子はまた黙つた。

二人は乗越した分の貨錢を拂つて停車場を出た。線路に沿つて少し行くと踏切がある。それを横切ると、一面に畑が開けて、青い麥が五寸程伸びてゐる。夜露りの雨で土は黒く濕つて居るが、空氣は清く澄んで、小春日和の暖かさ、草木の液を吸上げる音も聞えさうである。要吉はうつとりとして、初戀をして居るやうな心持に成つた。女と同じ暖かい日光を浴びて、同じおんだ空氣を呼吸して、人日の少い閑道を並んで歩く。袂が擦れたり、肩が當つたりする度に、要吉の胸は遠潮の寄せて来るやうな溫柔の情にゆらぐ。

やがて路が兩方に蔽れてゐる所迄来ると、要吉は急に首を傾げて、

「新井の薬師は確か此路を行つた様に覺えてるが、貴方は被在した事が有りませんか。」

「一寸と以前祖母と一緒に參つたことが有りませう。最う六七年前にも成りますから判然記憶えては居ませんが、此處此方で御座いましたてせう。」

「お祖母様がお存んなさるのですか。」

「え、始終眼が悪いものですから薬師様へお參詣すると云つて、私を連れて來たのです。」

要吉は頭を圓めた品の好いお婆様が、孫雲に勞られて、薬師へ參る姿を眼に泛べて見た。それに自分の記憶に残つてゐる二十年前に死んだ祖母が、いつも坊主で居たから左様思つたので、東京には滅多に頭を圓めた年寄の無いことを憶ひ出して、直に切髮にして見ようとしたが、如何しても眼に浮ばなかつた。

「訖度善いお年寄でせう。」

「家内のものは皆善い人です。唯私だけが不善い。」

要吉は振返つた。

「如何不善いのです。」

「如何でも不善いのです。」

二人は眼を見合せて笑つたが、要吉は急に堅く成つた。眞面目な家庭に生れて、暖かい雨親

の手に育つた朋子は、自分とは如何しても近寄り難い他人の様に思はれたからである。

路傍の茶の木の沿うに曲ると、急に道幅が廣く成つて、雑木林の間から薬師堂の瓦屋根が見え出した。

掛茶屋の軒から一本の棹を差出して、種々な講中の名を茜色や紺に染抜いた小旗が幾つも吊してある。

そこを通り過ぎて、山門をくぐると、鋪石の上に鳩が群を爲して居た。それが人の足音を聞いて、ぼつと立つ。中には屋根の上へ舞上るものもあつた。鰯口の綱にすがつて、御堂の奥を覗き込むと、薬師の尊體は油煙に煤びて能くも拜まれないが、列を爲した蠟燭の裸火が風にまたたくと、香の煙が蛇の様にうねつて空へ上る。

御堂の上では一刷毛の白い雲がなだれて、蒼空の底へ吸ひ込まれるやうに消えた。

二人は踵を廻した。手水鉢の側に、眼の濁れた小さい婆さんが、鳩に遣る豆を小皿に載せて賣つて居る。要吉は其皿を取つて二三杯鋪石の上にはら撒いた。

朋子は足許へ鳩が寄つて来るので、動くことも成らず、其處に立竦みに成つた。逆上せる程の日光を眞面に浴びて、うつとりと鳩が豆を拾

ふさまを眺めて居る。眼が満んで、唇の色が際立つて紅い。今にも其場へ崩折れさうな。要吉は手を出して扶けようとして、僅に控へた。良あつて鳩が向うへ去るのを見て、朋子は徐に歩を移した。要吉も並んで歩く様にして、

「何處かお加減が悪いんですか。」

「いえ、そんな容子に見えますでせうか」と、速つて顔を擧げた。

「別に左様といふ譯でもないが、何なら一寸向うの家で休んで行きませうか。」

「先生はお勞れに成りまして。」

要吉は返辭をしないで、先づ茶屋の軒をくぐつたが、そこは餘り往來から見え透り、庭の枝折戸を開けさせて裏座敷の縁側に腰を掛けた。少時左様して居たが、日影の射さぬ處は矢張寒い。で、文靴を脱いで障子の中へ這入つた。

二人は火鉢を中にして黙つて相對した。何か言はなければ成らぬと思ふが、偕て言出す事がない。いろ／＼迷つた擧句、

「此處は好く書生の來る所でせう、粟飯を食ひに」と言つた。直ぐに下らないことを言つたと思つた。

朋子は唯いつと白い齒を見せた許りで、別に返辭をしなかつた。沈黙は再び續いた。斯う成ると、要吉は神經が昂つて愈々意氣地がない。けれどその意氣地のない容子が、或種の女に對しては自分に有利であると云ふことを忘れなかつた。先刻から壁一重隔つた隣の部屋で、何か爺さんと婆さんとが詩々と話し合つて居る。爺さんが少し耳が遠いと思えて、婆さんが時々大きな聲を出す。それが耳障りに成つて甚く煩い。今に止むか／＼と待つて居たが、低く成る

かと思ふと又高く成つて、何時迄も止みさうに無い。要吉は終に苛々して來た。朋子はと見ると、眞直に坐つたまま、顔の色がや／＼蒼ざめて、唇をさつと結んで居る。

「私の爲たことを、矢張憤つていらつしやる？」

「えと見返したが、又唇に眼を伏せて、」此處迄御一緒に伺つたぢや有りませんか。」

要吉は女の顔を見た。「最一度言つて下さい、最一度今の事を仰つて下さい。」

朋子は何時迄も答へようとせぬ。また談話が途切れさうに成つた。

「私は貴方を」と、要吉は思ひ切つて言出した。一けれども今日の様な大膽な事をする前には、何れだけ一人で苦しんだか、それは申しますまい。私は此上他人の前で知らん顔して貴方にお目にかかることは出来なくなつた。許し

て下さい。私は教會で貴方のお目に懸つて、貴方の側に坐つて、貴方の聲を聞くたびに、他人に云はれない苦痛を嘗めて来た。私は今こんな事を貴方に打明けたとして、決して貴方から何物をも求めるのぢやない。況して貴方の前途を如何しようといふ考へなどは少しもない。何の希望もない。何の目的もない。それは全く絶望的な執着です。私は唯貴方に會つて、此事を白狀して、若し貴方の心の隅に私といふものを記憶してさへ貰つたら、それで十分です。私はそれで満足します。」

要吉は火鉢の角を強く握つたまゝ、低い聲で囁いた。朋子は他處日には何等の感動も受けない、殆ど石化したやうな容子で耳を傾けた。壁の向うでは、少時止んで居た爺さんと婆さんとの話聲が又一段階高く成つた。それを聞くと、此方の空氣まで滑稽に氣觸れさうで、要吉は腹が立つて堪らないが、不圖自分の云つてる言葉もウエルテルめいた誇張に過ぎて、感情を伴はないのに氣が附いた。何だか他人の書下した臺帳で芝居を演つて居るやうで、自分の爲に物を言ふ様な氣がしない。今迄云つた言葉がすべて空に費されたかと思ふと、編々度を失ふまで急ぎ込んで来た。

「私には心の中で思つて居ることが逆も言へない。成程私のこゝろは汚れて居る。何日か會堂の洋琴の側で貴方からも言はれた通り、從來さまんな女——さまんな事をして来た。それを隠さうとは思はない。貴方にそれを隠して——と言ふ下から、丸山の家の内と外とに残した二人の女が眼に泛んだ。二人を性としながら、自分もそれに搦まれて身動きも出来ぬ、あの惨目な境遇から遁れようと思へば、新しい誘惑の力にたよる外はない。今の自分には誘惑に従ふ外に何の力もない。唯悪いことを重ねて行く。切めて一つの悪いことを忘れるために他の悪いことに移つて行く——其外に如何する力もない。」それを隠して、貴方から何を求めよう。私の目下の心持は宛難破船だ。此後自分の身が如何成つて行くか、私にも解らぬ。唯、貴方に依つて力が興へられたい、新しく生きる道が求めたい。」

「私はそれ程迄に思つて頂く價值があるでせうかと、朋子は要吉の言葉の切れるのを待つて言つた。其聲は妙に變つて居た。「價値の問題ぢやない」と、要吉は押被せる様になつた。「私が貴方を選んだのだ、貴方は選ばれたのだ。左様思つて下さい。去年の夏から一週

に一回他所ながらお目に掛つた許りだ。私は貴方を知らない、貴方が私を御存しない通りに知らない。それが如何いふものか——二人はまた黙つて相對した。久らくして朋子の方から口を開いた。「先生、私からも申上げたいことが御座います。」

「何でも伺ひませう。」

「朋子は黙つてまじ／＼と火鉢の灰を見詰めて居たが、

「何卒戶外へ出て下さいませ。此處ぢや如何もお話し申されません。」

「左様、少し其邊を歩きませうか。」

「ええ。」

直ぐに女中を呼んで、茶代を渡して其家を出た。藥師堂の裏の生垣に沿うて、田圃の中まで来ると一條の街道が白くつゞく。遠い丘の上を走る雑木林が煙つて、有りふれた水彩畫の畫題に似て居る。道の下を春の水がちよ／＼と落ちる。日は暖かいが、風は冷たい。要吉は前へ立つて歩いたが、向うから一分隊詰りの兵卒が、軍曹に連れられて来るのを遣り過して、「先刻私に言ふと仰つたのは——何んな事でも遠慮なく言つて下さい。私は何時でも用意し

て居る。

「はア—と言つたが、其儘二三間歩いて来る。最  
う何も言はないのかと思つて居ると、

「私——」

要吉は息を詰めた。

「先生が私に仰有つて下さつたやうな、左様い  
ふ心持を抱いたものなら、私の力が先んで  
御座います。」

要吉は自分の耳を信じかねた。其處に立留つ  
たま、朋子の力を振向いて見る力もなかつた。  
朋子は徐に後を続ける。

「先生は記憶えて居て下さいますか。金葉會で  
先生の一番初めの講義の時間に、白蜜が無くて  
困つて被坐した時、私が隣の教室から取つて來  
て、先生のお側へ參つたことを——外の者にさ  
せないで私が持つて參りました。」

要吉は四方に開けて何處からも見通される。

二人は黙つて徐に歩みを移した。やがて道が二  
筋に岐れる處、進來ると、兵隊が十人餘り道祖神  
の前に藁を敷いて休んで居る。其前を通り抜け  
た時に、要吉は初めて振返つた。  
「能くそんな事まで記憶えて被坐しやいます  
ね。」

「自分の爲た事だけは記憶えて居ます。」

また會話が途切れた。それから少許行つて、  
道が鞍蔭へ這入つた時、向うから葬式の行列  
の來るのに出逢つた。古い錦襦袢の袈裟をかけた  
老僧の車についで、五歳許りの女の兒がおと  
なしく位牌を捧げて乗つて行く。棺の上には白  
と紅との小袖が重ねて懸けてあつた。若い女が  
死んだのかも知れぬ。見送りの人も極めて少  
い、僅に近親と思はれる老人が二三人隨いて行  
く許りである。二人は道の片側に寄つて行列  
を通した。柩が過ぎ去つた時に、不圖眼を見合  
せて互に莞爾とした。

再び路の上に並んだ時、要吉は何と思つたか  
こんな事を訊いた。

「貴方は毎も地味な柄の物ばかり着て被坐しや  
るやうだが、如何したのです。編柄のことなぞ  
能くは解らないが、何だか斯う枯葉の様な色合  
ばかりぢやありませんか。」

「私には彼様云ふ色が一ばん能く自分を表はし  
てる様に思はれますから。」

要吉には此返辭が何故か不快に思はれた。

で、其通りに、

「故意とらしくて、不自然ぢやありませんか。」

「え、不自然なんです、私之不自然なんです  
の。」

つと寄添つて、甘える様に要吉を見上げた。  
其眼の色は媚を賣る女でなければ見られないも  
ので有つた。それが出たかと思ふと捉へる間も  
なく消えた。

一ですけれども母が華美好きなものですから、  
二三年前迄は、そりや華美な物許り着せられて  
居ました。今では姉などと一緒に他所へ參りま  
しても、此度私の方が上に見られる位ですが、  
女子大學へ這入つた頃迄は、羨もお下げにして、  
まるで子供見た様でした。初めて學校へ上つた  
日は悉皆して——」

後は早口に言つて、襟巻で口元を抑へて笑つ  
て居る。眼の隅が濡つて、今の容子が却て子  
供らしかつた。要吉は横から顔を見つて様にな  
がら、

「如何したのです。何だか解らない。——  
「あんな小さな子が來たくと言つて囁すんで  
すもの。」

要吉も聲を出して笑つた。

「そんなに小さかつたんですか。」

「え、小さかつたんです。」

「今でも何處か小さい。」

こんなたわいもない問答が、要吉には二人を  
親しくする様に思はれた。ついでに自分が初め

朋子の姓を神戸から三枝子と取違へて園部だと教へられ、久しく左様思つて居たと云ふことを話した。尤も、神戸が何故取違へたか、そこ迄は言はなかつた。朋子はそれを聞いても別に感じない様であつた。

それから幾度も村へ這入つたり畑へ出たり、幾度も道を尋ねて、それでも尚行過ぎて随分廻り道をしたりして、日の積下る頃、柏木の停車場へ着いた。其處から又お茶の水行の電車に乗つた。二人の間に未だ外の人々が悠に腰掛けられる位の間隔を置いて腰を掛けた。朋子は膝の上に「死の勝利」を載せて、其上に長い鼠色の手袋を穿めた両手を重ねたまゝ窓の外を眺めて居る。何時の間にか書物が朋子の手に渡つて居たと云ふことが、要吉には譯もなく嬉しかつた。やがて大久保へ電車が着くと、又どや〜と人が這入つて来た。其中で要吉の前に腰をかけた、古ぼけた廻套を着た小柄な男がじろ〜眺めて居たが、「小島さんちや有りませんか、久らく」と元氣な聲を懸けた。

「あ、久らく。つい失禮して居りました。」  
要吉はヤ〜述べて挨拶した。この人は狭山と云つて、大く文壇に名を知られた小説家で、要吉も一面識があるのだ。

「先夜の蒲田寺侯爵の招待には、貴方もお出の様に聞きましたが、如何でした。宛に角新聞ぢや大變ですね。」  
要吉は弱身を持つた身のつとめて他所事を言はうとした。そして衣囊から巻煙草を取出した。

「いや如何も一言つたきり、狭山さんは一寸朋子の方を見て、氣の乗らない様子である。要吉は構うが無いので、取出した巻煙草を持扱つて居たが、思はずがぢ〜と噛み碎いた。少時して狭山さんは市ヶ谷で降りた。要吉は朋子をかへり見て、

「今の人は神戸君の懇意な、あの狭山楓葉で手が解りましたか。」  
「えゝ、大抵御容子で解りました」と笑つて居る。  
二人は次の半込停車場で又電車を拾つた。

### 十七

二人は見附を這入つた。九段の富士見軒へでも立寄つて、一緒に夕飯を喫べて歸ることにした。だら〜坂を登りかけて、朋子は一寸足を留めた。

「私の小さい時通つた學校だから見て下さいませ

し。」  
要吉も振向くと、女關に掛けた富士見小学校といふ横額が目にとまつた。

「随分遠方まで来たんですね。」  
「え、元此先の番町に家が在つたものですか。」  
こんな話から要吉は朋子の生ひ立ちを聞いた。一家の事情も知つた。左様しながら歩いてると、何時の間にか中坂の上へ出て仕舞つた。招魂社の鳥居前へ出る積りだつたので、

「來過ぎましたね。最少し後の曲角から右へ折れるんでしたらう。」  
「えゝ。」  
「えゝと云つて、知つてながら見て被坐したのか。左様、貴方は此邊は好く御存じの筈でしたね。」

「ですけれど、先生がずん〜前へ被坐しやるから。」  
要吉は其儘踵を回さうとしたが、朋子は立つたまゝ動かない。

「如何したのです。」  
「私、最う此處で失禮したい。」  
何故、如何して急にそんなことを？

二三押問答の末に、朋子は又後から隨いて來

た。馬場を横切つて目指す家へ着く。

二人は階下の一室へ導かれた。廊下越しに見

上げると、二階の硝子窓は西日を受けて燃ゆる

様に輝いてるが、此處は早くも隅々から薄ぼん

やりして、部屋の中を物語めかして見せた。要

吉は白い食卓被けを挟んで、斜めに女と向ひ合

つて腰を下した。

「勞れたでせう。」

「いゝえ、其んなでも」と、朋子は言葉数を少

く返辭した。

要吉は身體に程好い倦怠を覺えて、何だか斯

う西洋の小説の中で見るやうな、兩人が馬に乗

つて羅馬の郊外でも遠足した歸路に、路傍の小

ぢんまりした客舎へでも立寄つた様な氣がして

成らぬ。それを口へ出して言はうか止さうかと

思つてると、朋子が偶と、

「ハイヤシンスの香がしますでせう」と、四邊を

見廻した。あ、其燧爐の上に。」

斯う言つたまゝ、額を押へて伏日に成つた。

見ると二三歩離れた燧爐棚の上に小さな白い花

を着けた鉢植がある。

「此香が不可い？ ぢや、給仕が来たら彼方へ持たせて遣りませう。」

ら何でも有りません。」

給仕が食卓の上に皿を並べて去つた。

要吉は卓刀を執つて麵包を割いた時、つと眼

を上げて、相手の顔を見詰めたが、一貴方の前

で食事をするのは、これ限りに成りやしないで

せうね。」

朋子は僅に頷いて見せたが、「先生、御酒召

上るんでせう。何卒御遠慮なく。」

「そんな事を——神戸君からでもお聞きでした

か。」

「いゝえ、左様ぢや有りませんが、大抵上るだ

らうと思つて——」

「少許は飲らないことも有りません。」

「何卒御遠慮なく。」

「それぢや」と云ふので、給仕を呼んでウキスキ

イを命じた。

「貴方も」と言ふと、笑つてゐる。

「ぢやキュラソーでも。」

やがて大小の洋盃は運ばれて、白と赤との兩

種の酒が充された。如何するかと思つて見て居

ると、朋子は臆病らしく小さい盃を唇に觸

れて、其盃下に置いた。

「一緒に飲みませうか」と言つて、共に盃を

たが、朋子の盃には半分許り残つた。それを

下に置いたまゝ、半巾を口に當てて、嚔せて苦

しさうに笑つた。

要吉は何か言はうとしたが、再び給仕を呼ん

で盃を充たさせた。朋子も黙つて盃を出し

た。要吉は思はず其顔を見た。

「貴方は平常飲るのか。」

「如何思召す。」

「さ。」

「止しませうか。」

「召上れ。」

要吉は幾度も酒盃を重ねた。朋子も三杯目に

は其方づをと言つた。言ふが儘、ウキスキを

注いで渡した。恰も酔ひの廻るのを娛しむやう

に、凝手と酒盃を見詰めた女の瞳は重くして動

かない。一體此女は身體が弱いか、強いか。

病上りの女の様に倦怠さうでもあれば、並外れ

て健康さうにも見える。それが代るく、左様成

るので、何方とも着かぬ處が没義道に人の心を

惱ませる。

「瓶く成りましたでせう」と、朋子は片手で頬を

抑へて、ふいと顔を上げた。

要吉は返辭をしない。其眼は大膽に女の唇の上に注がれた。それを見ると、朋子は直ぐ眼

を反した。けれども自分が男の慾望を燃しつゝ、  
 あると云ふ自覺は女の胸を擾さずには置かなか  
 つた。

二人ながら物を言はない。要吉は段々高く心  
 臓が波を打つて、今にも呼吸が塞がるやうな氣  
 がした。此上黙つて居ようとすれば、直に慾望  
 の満足を求める外はない。

「私は死にさうだ」と、口に出して言つた。「熱  
 砂の上に百合の花が咲く。今朝ダンヌンチオを  
 拾ひ讀みしたらこんな處があつた。見る間に咲  
 いて見る間に凋む。其蕊を開いて見ると、大抵  
 の花には蟲が一疋づつ強い香に蒸されて死んで  
 ると云ふのです。香に蒸されて死ぬ、好いぢや  
 ありませんか。彼處邊は最うお讀みに成りま  
 したか。」

「いゝえ、未だ」と答へたが、其實朋子は書物を  
 借りて行つて、机の上に載せたまゝ、未だ一頁  
 も開いて見ないのだ。

「それぢや、今度お讀みに成る時、氣に入つた  
 所があつたらアンダアラインして置いて下さ  
 い。赤インキぢや不可い、貴方の指の爪で、裏  
 へ透るほど深く傷痕をつけて下さい。」

「こゝな事を要吉が云ふのは、印度古劇に見え  
 るシヤクンダヤ姫が、戀人に送る手紙を蓮の葉

に指の爪で刻み附けたといふ話を想ひ出したか  
 らで、今それを黙つて朋子に強ひようとしたの  
 だ。

朋子はそれを聞いたのか、聞かないのか、指  
 先を冷たくして、知らん顔で林檎の皮を剥いて  
 居る。やゝ俯向き加減に成つてる爲に、頭が二  
 重にくゞれて、少し右へ寄つた所に目立たぬ程  
 の黒子が一つある。要吉は息を詰めて其横顔を  
 眺めた。給仕は暖の臺の上で頻に風を重ねたり  
 積んだりして居たが、潮とそれを持つて去つた。

要吉は思はず腰を浮かして朋子に近づかうとし  
 た。給仕が又戻つて来た。又舌打して腰を下し  
 た。

再び給仕が去る。要吉は透さず身をずらして  
 女の指先に觸れたかと思ふと、今まで平靜に構  
 へた朋子の姿勢が崩れて、××××××××××  
 がたりと椅子が倒れた。初めて四つの唇が合  
 ふ。二人は堪へられるだけ永く呼吸を詰めた。

間もあらせず靴音に驚いて、とと兩方に分  
 れた。要吉は故と聲高に給仕を呼んで、煙草を  
 吩咐けて置いて、さて靜に朋子と眼を見合せた。

此時女の顔は凄じいほど充血して、兩氣を合  
 んだ空へ大火のどかりと映つた様に見えた。要  
 吉の胸も波打つ様な動悸が止まない。

二人は向ひ合つたまゝ、少時口を利かなかつ  
 た。此次には何を言出して、何としたものか。  
 要吉は所在なきに巻煙草を取つて火を點けた。

朋子は黙つてそれを見て居たが、  
 「私も——可いでせう。」

「え、煙草?」  
 要吉は巻煙草を載せた金皿を押し遣つた。  
 朋子は其中の一本を取つて、小さい煙の雲を吐  
 出して居たが、一寸相手の顔を見て、  
 「私が煙草喫むことをお聞きなさいましたか。」  
 「左様、聞かないでもない。」  
 「教室の火罎に吸殻があつたと云つて、外の生  
 徒が騒ぐんですもの。最う大抵知れて仕舞ひま  
 した。」

斯う言つて、朋子はひとり面白うに口を抑  
 へて笑つた。其聲は平常に戻つて居た。勿論  
 女が煙草を吸つたとて、それが要吉には珍らし  
 くもない。只此女は自分の前で故とそんな真似  
 をして見せるのぢやないか、それが解らない。

「手附がお上手ですね。お内でも喫るんです  
 か。」

「いゝえと強く打消して、「内ぢやア最う決して  
 其んな事はありません。誰ぢやないんです。内  
 ぢや私本當に好い子に成つてるんですから、

母などは私が其んな事をすると言つたつて信  
じますまい。

「稍あつて朋子に又言葉を頼いだ。」

「それだけの事はして有るんですもの、内ぢや  
私、本當に能く働くんです。」

「働くとは？」

「廚房も手薄ひます、雑巾がけもします。」

「何だか本當の様ですねと、要吉は片頓に微笑  
んだ。」

「本當ですもの。父は砂糖を喰べませんから始  
終、サツリオンを使ふんですが、父の喰べる物だ  
けは大抵私が拵へる様にして居ます。」

要吉は返辭をしなかつた。そして何も知らな  
い女の家庭を想像に描いて見ようとした。少時  
して胸と氣が附いて時計を出して見た。  
「餘り遅く成つても——ちや出掛けませうか。」

紺仕を呼んだ。朋子は靜に立上つた。片方の  
手を延ばしながら、徐に手袋を穿め始めた。  
平常よりは身丈が薄く見える。する／＼と玄  
關へ出て行く。

街へ出ると、夕暮の風が肌へ沁みる。二人は  
黙つて別々の事を考へながら並んで歩いた。  
互に傍に居る者のことを恐れて居る様である。  
やがて中坂を下りて、三崎町から水道橋へ抜け

ようとする頃には、家々の軒に燈火が點いて、往  
來の人の顔が晝に見え出した。朋子は少し背後  
へ下る様にして隨いて来たが、此時不意に聲を  
掛けた。

「先生！」

元と足を留める。

「これから如何爲さいます。」

「如何とは——お家の近くまで見送つて歸らう  
と思つてる。其外には何も考へて居ない。」

「私、此儘ぢや否、此儘ぢや歸らない。」

要吉は女の顔を見て迷ひ様にして、相手の心  
を讀まうと焦躁つた。

「ぢや、如何しようと思ふのです。」

「如何かしたい、如何でも先生の爲さる様にし  
たい。」

「それぢや何處へでも行きませうと、思ひ切つ  
て言つたが、唯頭の上に星の光る處へ、ね、  
それが可いでせう。」

朋子は黙つて頷いた。

僅の距離に幾度か電車を乗換へて、朋子と要  
吉とは上野公園の三橋へ着いた。此時日は名残  
なく暮れた。瓦斯と電氣との光が街頭の寒空に  
煌ついて、ひとり電車の鈴の音が忙しない。二  
人は明るい賑やかな街を後に、暗がりの木蔭を

指してずん／＼這入つて行つた。廣小路から眞  
直ぐに博多館の前へつゞく大路は、玉川利が  
薄白う光るのに、觀音堂の邊り藪ひ袴さるや  
うに老楓が茂つて、其下が底の知れない淵かと  
も怪しまれる。

要吉は驚と女の手を執つた。朋子も其儘にし  
て居たが、指先は冷え切つて氷の様に冷たい。

それが一通りの冷たさでない。すべての血が  
脈管から退き去つた死人の掌の様に冷たい。

要吉は思はず足を停めて朋子の姿を眺めた。

高い木の梢には、雨が激つて、四邊の樹々は  
海の底の植物の様にゆり／＼。要吉は物の本で

見る妖姫に伴はれて、否應なしに他界へ連れて  
行かれる様な氣が仕出した。斯うして女と手を  
繋いで歩いて居たがら些とも自分の身が仕合せ  
だとは思はれない。

「何處まで行つても果しのない森の奥へ這入つ  
て行くやうな氣がするぢや有りませんか。何處  
か二度と戻つて來られない所へ行つて仕舞ひた  
いやうですな。」

斯う口に出して言つて見たが、其聲はやゝ顫  
へを帯びて居た。朋子は返辭をしないで、強く  
男の手を握り緊めながら、一歩々々身體の重み  
を凭せ掛けた。或は要吉がな様思つただけかも

知れない。

幾度か木の根に躓いたり、濡つた土の上で滑

つたりして、漸く兩大師の前の廣場に出た。

崖に近く据ゑた平たい石の傍に停つた。僅に街

燈の光が此處迄とゞく。二人は鞆いだ手を解い

て、立つたまゝ顔を見合せたが、女の顔に顔が

觸ると焼けるほど熱い。それなり倒れる様に石

の上へ腰かけた。真あつて、要吉は××××た

が、朋子は其儘男の胸へ顔を埋めた。よゝと泣

く。

「如何した、え、如何したんです。」

「如何かして、もつと如何かして。」

××××××××。

「足りない。足りない。それぢや足りない。」

「譚言のやうに口走つて、手當り任せに×××

×××。其聲は喚れて、其手には狂人の様な力

が湧つた。要吉も痛たじろいだ

「如何すりや可いか、如何することも出来ない

ぢやないか。」

「いやだ〜、如何かして、如何かして仕舞つ

て下さい。」

×××××××××、×××××××××。其度

吉は×××××××××く其泣く音を塞いだ。

冷たい風が吹く。其時、二三間許り離れた下

の道を歌を唄つて通る者がある。二人は尋手と

して、足音の遠く成るのみに耳を澄ました。

朋子はなほ泣き止まぬ。要吉は手巾を出して

涙を拭つて遣つて居たが、留度なく流れるので、

終ひには口をつけて吸ひ取つた。今夜別れてか

らも、切めて此羅氣を舌の先に持つて家へ歸り

たい。

朋子は尚泣き止まぬ。身を震はせて泣く、只

泣きに泣く。胸は大波を打つて、心臓の鼓動が

手に取る様に聞える。それが云ふに餘る嬉しき

に壓倒された涙とは思はれぬ。何だか絶望を浸

らす様でもある。要吉は氣拔けてして茫然眺めて

居たが、思はず少し立退いた。俄に二人の間に

鴻溝が穿たれた様な心持がした。肉體の接觸

が離れたばかりでなく、精神も永久に近寄り難

いものでは有るまいか。

二人は全く別々な人間だ。それなら如何する

ことも出来ない

要吉は思はず唇を噛んだ。様々な違つた言

ひたいことや糺したいことが、口先まで突かけ

て来るのをぐつと涙へて、敵意を含んだ眼に、

理泣いて、漸く涙を納めて起直つた。靜に衣

襟を繕ひ始めた。これでお終ひかと思ふと、要

吉に餘りの殘惜しさに、今一度寄添つて女の

手を握つた。朋子は男のするがまゝに任せて居

る。要吉は爪先を口へ持つて行つた。

「もつと強く、強く噛んで」と涙るに女は言ふ。

要吉は齒型のついた指をちつと擧つて、

「貴方は後悔してるんぢやないか、今日のこと

を。」

女は劇しく頭振を掉つた。

「ぢや、何なりとも貴方の思つてることを言つ

て下さい。私は貴方の思ひ通りに成りたい。今

から直ぐ一切を棄てて北極迄も隨いて行くや

うな心持に成つてる。貴方の爲なら私は何ん

な犠牲を拂ふことも厭はない。」

要吉は聲を顫はせて掻口説いた。自分で自分

の言つてることに感動して、世の中に自分位不

幸な人間は無いやうな氣がした。勿論後に成つ

て、今言つてる様な事が實行されようとは思は

ない。後に成れば誠に成るかも知れぬが、少く

とも今言つてる間は誰ぢやない、決して自分の

心を偽つて居るのぢやない。

朋子は返辭をしないで、うつとりと淺草邊の

な人の海は足許まで押寄せて、直ぐ目の下には汽笛の音だの車輪の響だのが絶間なく騒々しい。

二人はかうして何時迄も無言のまま坐つて居た。時間が鏡い羽音を立てて飛び去るのが、耳に聞える様には思はれた。

「最う歸ります、もう歸らないと内の都合が悪う御座いますから。」

斯う言つて朋子は立上つた。其聲音には冷やかち失望の色が含まれた。要吉はぎくりとした。此方にも未だ言残したことがある、仕残したことがある。が、今夜は最う如何することも出来ない。今夜ばかりでないと思ひ返して、自分も立上つた。

途々も稀に言葉を交すばかりで、女の素振は何となく素氣なかつた。要吉も物の度を過した時に感ずる一種の哀愁を感じた。多分女もそんな心持がするのであらうと思つて、僅に安んじた。

駒込妙義坂の上まで来た。二人が袂を分たうとした時、要吉は二三歩女の行く方へ一處に歩

きながら、

「此次は何日會へるでせうね」と訊いた。

「何日でも。」

「ぢや明日。」

「明日」と、朋子は稍躊躇して、「今夜こんなにかしく成りましたから、午前の中は出られないかも知れません。」

「それぢや午後でも。」

そこで、翌日の午後一時から二時迄の間に、矢張水道橋の停車場で落ち合ふことにした。

「私は今夜は眠られさうもない」と言ひかけて、要吉は例と想ひ出した。一あの片方の手裏を私に下さい、切めて貴方の手に能く似た物でも持つて居たいから。」

朋子は直に渡さなかつた。

「え、如何して、不可い？」

一旦執られた手を引込めさうにしたが、急に靡いで要吉の掌に握らせた。

山の手の草深い町だから、早仕舞ひして、大戸を下して寝た家が多い。要吉は坂の上に立つたまま、朋子の姿が其邊の店屋から射す灯火の中へ出たり、又啼がりへ隠れたりするさまを見送つて居たが、其間に分らなく成つたので、漸と踵を回した。

夜風に吹かれながら、要吉は一人白山坂を降りて行つた。ひどく興奮してるが、頭腦は妙に明晰して来た。心の隅まで隈なく見えると共に

に、軒窓の屋簷などが闇に着いて成らぬ。今朝家を出た時とは、女にしても勿論左様だらうが、自分の心持にも大變な相違を來した。一日の間に斯んな極端まで押詰めようとは溝石に思ひも掛けたなかつた。殆ど眼を閉いで溝壑を躍り越えて仕舞つた。其結果が如何成るか、そんな事は今考へた所で仕方がない——自分は熱く自分を知つて居る。到底一人の力で自分を救ひ得る男ではない。目下の變則な境遇から自分を救つて呉れるものは、矢張誘惑の力である。唯罪惡のみが自分を罪惡の淵から救つて呉れる。自分はそれを待つて居た。そして、今それを見出したのかも知れないが、此處に少し氣がかりなのは、今日一日を振回つて見ると、何處か不合理な所がある。自然の成行でない。朋子の仕草にも、何だか強ひて矯飾した裝が見えないでもなかつた。少くとも彼の女の遣つて居ることは皆自分で意識して遣つて居る様に見える。それでも構はない。無意識でして居られるよりも、意識した上で遣つて呉れる方が可い。それにしても彼の女の烈火の様な情熱は何處から來るのだらう。あの性急な氣立つやうな情火を煽つたものは——が、初めてそれに觸れた者は矢張自分を置いて外にあるまい。才様思ふ

と、稍自ら媚びられぬでもない。要吉は幾度か途の上に立停つたり、又急に歩き出したりなどした。

丸山の家へ戻つたのは未だ九時前であつた。小母さんは頭痛がすると云つて、宵から寝て仕舞つたさうだ。隅江はひとり寂しさに待つて居たが、火鉢の前に向ひ合つて坐つたまゝ、何處へ行つたとも訊かなければ、此方から言ひもしなかつた。要吉は洋袴の駄を胡坐かいて、注いで出された湯呑の茶を吸つて居たが、

「洋燈をもつと明るくせんか。一別段燈籠に言つた譯でもないが、始終氣がねしておどろ／＼している隅江は叱られた様にでも思つたらしい。遂て洋燈の心を思ひきり上げたが、要吉の顔を目見て、直ぐ膝の上へ眼を落して仕舞つた。それから又油煙が氣に成ると見えて、心を少し引込めて見たが、直に又元の通りにした。要吉は無言でそれを見て居た。何と云ふことはなしに、一種の憐憫の心が浮ばずにはいられなかつた。只憐れむ心である。少しも自分の事を憐む後悔の念は起らない。女を憐れむ心の下には、自分を憐れむ心が隠れて居る。要吉は涙が胸先へ垂掛けて、つと聲に出さうなのをなうじて嘔ひ留めた。自分を憐れむ位涙

を誘はれ易いものはない。一最う寝ようか。」

「はい、寢床はちやんと取つて御座います。」

「左様か」と立上つて、茶の間に自分の部屋へ這入つた。灯を點すのが面倒なので、暗がりの中で上衣を脱ぎかけたが、其儘机に凭掛つて静手と頬杖を突いてると、一日の光景が續々と眼に泛ぶ。

「併し不思議な女だ。まるで噴火山の様だ、灰も噴く、火も噴く。近寄ると硫黄臭い煙の中へ捲込まれさうだ。」

少時黙つて居たが、いや、處女だ。如何しても處女に相違ない」と呟いた。

### 十八

水道橋停車場の石段を上つて行きながら要吉は自分にも氣が附くほど胸の動悸が早まつた。今でも矢張初戀か何ぞしてる様に、女に逢ふ前

には我にもあらず胸の蕪くのを感じ得ない。何時迄こんな心持を繰返すことであらう。

石段を上り詰めると、生憎プラットホームに別子の姿は見えなかつた。最う一時半にも成るが、矢張家を出難いのかも知れない。要吉は直に思ひ返して、倚架の上に腰を下した。昨日

と今日と同じ所に同じ様にして、相手の女の來るのを待つ。何だか自分ながら顔が腫められるやうな氣がした。仕方がないから、強ひて自分の今違つてゐることに考へを向けまいとした。何でも好いから耳目に觸れる物に心を寄せて、自分が何の爲に此處へ來たかも忘れて仕舞はうとした。初めは昇降の乗客をまじり／＼見て居たが、やがてそれも飽きて、今度は欄干に凭れて、石段の下を通る物賣や道行人を眺め出した。支那の學生が通る、豆腐屋が喇叭を吹いて行く。三神神社の拜殿では三四人の子守が手を繋ぎ合つて、一つぼんだ、つぼんだ、蓮華の花が窄んだと、寒さにもめげず遊んで居る。要吉は握手とそれを見守つた。斯うして成るだけ永く抱いて此方に向いてゐると、何時の間にか別子が遣つて來て、背後から聲を掛けるかも知れない。

轎から曇つて居た空は今にも崩れさうに成つて、風がいよ／＼冷たい。子守連は何時となく姿を隠した。鼓の音だらけな下駄の響入が、破れた鼓を敲いて、寒さうに車を引いて行く。と見ると、其隠れた袖無しの背巾を掲げて、はらはらと霰が降り出した。要吉は初めて振回つた。土手の上の吹き曝しで、北風を眞面に受けるか

ら、寒さは彌が上に寒い。乗客も遮って歸路に着いて、プラツトフォームの上には人影も途絶えた。

「若し愈々来ないとしたら、要吉はひとり考へた。左様考へても、初めは腹が立つよりは却て微笑された。女に待ちぼうけを喰はされて、霰まじりの寒風に吹かれながら立つてゐるが、自分だとは如何しても思はれない。自分が作つた小説の中の人物の様な気がする。自分が作つた小説の主人公を自分が虐待してゐるやうな氣もする。左様思へば一種の抒情詩的な情緒が湧いて、何も彼も忘れて溶けて行く様な氣持に成つた。

要吉は柱に凭れかゝつたまゝ、砲兵工廠の高い煙突から代燐色した汚い煙がわく／＼と立上つて、横に一町許りなだれた木は、空を吹く強い風に吹散らされて消えて行く様を見詰めた。胸の内衣囊には、昨夜の手囊が燃える様に熱して居る。要吉は須臾もそれを意識せずには居なかつた。手囊のことを思へば、指先の細つた、手の甲の指の附根の所が子供の様に凹んだ小さい手が眼に泛ぶ。此處へ来たなら、如何いふ態度で迎へて、何と言つて遣らうかと、そこまで細かに豫想して準備した、其計畫が悉く畫餅に歸し

たかと思ふと耐れない。興奮した欲望の充たされない所へ加へて、痛く自尊心を傷けられた様な氣もして、苦痛は一しほ鋭い。

袂時計を出して見ると、二時迄と約束した時間が七分許り過ぎて居る。昨日来たのも恰度これ位であつた。若し此處へ息を喘ませて駆け来たら、何んな風で何と言つて来るだらう。辯解を聞くのも娛しくないではない。要吉は再び好奇心と妄想とに捉はれた。

又半時間許り経つた。霰は些の間で降り止んだが、空の氣色はいよ／＼悪く成つて、日が暮れる様に四邊が薄暗い。要吉も最う来ないものと諦めた。改札俵の驛夫までが、今更自分をじろじろ見てる様な氣がするので、つとめて平氣な顔を装つた。この平氣な顔を装はねば成らぬと云ふことが、更に要吉の不快を増した。何んな事があつても、今日は價はねば置かぬと心に誓つた。

此儘 同じ改札口から未だ使用しない切符を驛夫に渡して出るのが、何だか可厭に思はれたので、恰度そこへ電車が来たのを幸ひに乗込んだ。初めは大久保の神戸でも訪ねようと思つたが、こんな時に友達に會つた所が先方も此方も面白くあるまい。そこで又氣が變つて、四谷

見附で降りた。市内電車に乘換へる積りで立つて居たが、停電と見えて何時迄待つても来ない。其邊まで行く間に来るだらうと、外濠に付いた廣い路を又水道橋の方へ向つて歩き出した。雪がちら／＼降る。

電車は未だ来ない。雪はだん／＼繁く降り出した。地面の上は降る後から消えて行くが、電車道の敷石の上は淡く靴の跡にくつつく程溜つた。

頭水道橋まで来て仕舞つた。外套の肩から胸へかけて眞白に積つて居る。要吉はそれを拂ひ落さうともしないで、暫く道の中央に立つて居たが、急に辻待の車夫を呼んで丸山迄歩いて行けと吩咐けた。

家へ着くと、小母さんが出迎へた。

「毎日遅く成りますねえと、咎める様な口調で言つた。それを聞き流して部屋へ這入ると、追掛ける様に、一お手紙が来て居ますよ。」

「うむ」と言つたまゝ、机の上を見ると、四角な状袋に見覚えのある朋子の手跡が眼に着く。故と落着いて上着の袖を脱ぎながら、一使が持つて来たか。

背後から手傳つて脱がせて居た隅江は、「御當人が持つてらした様でした。私は出ませんでし

たが、  
「何でも大變速で息を喘ませて被坐したやう  
ですよ」と小母さんが側から口を出した。  
然然帯を緊めてから座に着いて、兩女の去る  
のを待つて、封を切つた。薄い書簡用紙五六枚  
にペン先の細字で認めた長い手紙である。二三  
行讀むと、直ぐ顔の色を變へて、思はず手紙を  
下に置いた。又取上げて、一氣に讀み下した。

失禮などと申すことは、最早要なき文字  
の様に思はれますから、申しません。只  
私の眞の告白を何でも聞いて頂きます。  
昨日の私の行爲のいよ／＼出でていよいよ  
よ虚偽の多かつたことを御許し下さいま  
すか。  
是非なし、我類に百千の難をも加へた  
まへ。私は云ふべきだけのことを云ひ、  
受くべきだけのことを受くる外ありません。  
眞實の我姿を解せられずして愛せら  
れる程苦しいものはない。眞を申せば、  
私の世界には戀も愛も同情も皆無意義の  
文字に過ぎない。残れるものは只理解と  
云ふことだけ、人と人との關係は理解と  
いふことだけ、それで私は理解といふこ

とを心配して申すのです。先生から愛さ  
れようが憎まれようが、それは第二の間  
題で、理解が同情を生むかも未知數なの  
です。理解の結果が如何成らうと、只理  
解それだけが唯一の幸福なのですから、  
途中で何んな御心を害ふ様なことが有  
つても、長たらしき告白を是非忍んで讀  
んで頂きます。

われとわが眼を閉ぢ、耳を閉ぢ、色界界  
を遠ざからむとした自分は、それだけの  
點に於ても、死の淵へ一歩近寄つたので  
す。斯う外界と絶縁した身ながらに、昨  
宵以來先生に對して何等かの接觸を感じ  
て、何處となく恰しき思ひに襲はれたの  
は疑ひなき事實です。私は他人の服装、  
言語、素装などには無感着な方なのです  
のに、先生のごとは妙に些細のことまで  
氣が着く。友達と先生方のお噂をする  
時私は何時も無遠慮な出鱈目を申すので  
す。それを眞に受けて聞いている友達を見  
ても面白いのですから。併し先生のこと  
は一番好く承知して居ながら、如何して  
も口を切つて小島先生と云ふことが何だ  
か出来なかつた。友達から云ひ掛けられ

た時も私は強ひて冷淡な風をして、何事  
も知らない様に一然うですかそんな事が  
有りましたか一などと申して居た。それ  
も事實です、お許し下さい。「昨日金葉  
會で『死の勝利』の獨逸譯の方を拜讀し  
たいと申したのは、全く其場の譯でした。  
何の爲に譯をついたのか、私にも解りま  
せぬ。獨逸語は四年前に家で厭々ながら  
『メルヘン』の一冊位は讀まれたこと  
も有りますが、英語でさへ解らぬ所が如  
何して獨逸語で解りませう。それを先生  
が明日の午後待つてからと仰有つた時  
は、津石に申請なく成りました。何故  
眞實が語れなかつたか——唯ひとり我胸  
の奥に自由に先生を思はせて頂きたかつ  
たのです、決して／＼口外したくなかつ  
たから。私は逆もそんな事を口外する  
資格は無いのです。私は逆も熱い酒を盛  
る器ぢや無い。ダブル、キヤラクタアに  
懼まされて居る身は數れにも左様いふ事  
は口外し難いのです。假初に戀といふ字  
に唇を併すは、我理想とする戀の手前  
恥かし、自他を欺くものなれば。戀とは  
純一無雜なものでせう。自分を形造る

た時も私は強ひて冷淡な風をして、何事  
も知らない様に一然うですかそんな事が  
有りましたか一などと申して居た。それ  
も事實です、お許し下さい。「昨日金葉  
會で『死の勝利』の獨逸譯の方を拜讀し  
たいと申したのは、全く其場の譯でした。  
何の爲に譯をついたのか、私にも解りま  
せぬ。獨逸語は四年前に家で厭々ながら  
『メルヘン』の一冊位は讀まれたこと  
も有りますが、英語でさへ解らぬ所が如  
何して獨逸語で解りませう。それを先生  
が明日の午後待つてからと仰有つた時  
は、津石に申請なく成りました。何故  
眞實が語れなかつたか——唯ひとり我胸  
の奥に自由に先生を思はせて頂きたかつ  
たのです、決して／＼口外したくなかつ  
たから。私は逆もそんな事を口外する  
資格は無いのです。私は逆も熱い酒を盛  
る器ぢや無い。ダブル、キヤラクタアに  
懼まされて居る身は數れにも左様いふ事  
は口外し難いのです。假初に戀といふ字  
に唇を併すは、我理想とする戀の手前  
恥かし、自他を欺くものなれば。戀とは  
純一無雜なものでせう。自分を形造る

幾億萬の細胞の一つ／＼が、等しきウア  
イブレーションに燃えた時に名附けべき  
ものでせう。私は左様いふので無ければ  
満足しません。永遠などといふ異かなこ  
とは望まない迄も、只一轉瞬でも左様い  
ふ純な境界に入りたい。成らうと努力  
しました。遂に駄目でした。

お許し下さい。昨日私は禁じられて居  
る酒を三杯まで一滴残さず頂きました。  
後で何様に成るか、全く無経験で豫則  
は出来なかつたのですが、私は寧ろ狂  
して見たかつたのです。上野へお作した  
のもあの儘では自分に對して自分が少  
からず不満足であつたからです。まづた  
く暗い所へずん／＼這入つて行つて、道  
に迷ひでもしたら好いと思ふ様な心持  
でした。けれど、駄目です。如何したつ  
て私は駄目です。胸が一杯に成つて居て  
も、はつと自我を提げて投じることが出  
來ないのです。波瀾は始終絶えないので  
すが、底には絶えず同じ方向に靜に流れ  
る潮流が有るのですから。昨日は自分は  
もう駄目だといふコンクリュージョンに  
來て仕舞つたのです。それが他から境

遇に依つてせしめられたと云ふのならば  
ですが、原因は内なる我に潛んで居るの  
ですから、先天的なものでせう。若し罰あ  
らば私一身に受くべきものと覺悟しま  
した。

けれど切めて、切めて先生だけ！……此處  
に私の云ふに云はれぬ苦しさが昨日あつ  
たので、私が彼様な事を造つたのも御許  
し下さいませうか。いよく酔ふことの  
出来ないう自分を確めて、切めて先生の  
御胸に凭つて、日頃の苦しい涙を思ひざ  
ま流して樂みかけたのです。で、あんな  
事でもしてもつと泣き泣きたかつたの  
ですが、泣かうとしても泣けませんでし  
た、哭泣するなんて事は何んなに成つた  
ら出来るでせう。随分切實に感ずる苦痛  
に對しても涙を次第々々に禁じられて行  
くのであらうか。私は自分と自分に失敗  
して、もう歸りますと申上げました。切  
めて一秒でも長く御胸に居て、堪へ難い  
思ひも味ひたいのを、一遅く成ると家で  
叱られますからと申しました。謙です。  
あれは眞實に語られたるに、左様云つた  
のです。家が何です。両親の前に頭を下

げて小言を聞くのが唯一の苦痛の様だ身  
に成つて見たい位です。母は勿論不興な  
顔附をして種々申しましたから、私は母  
が云ひ終らない間に、面白さうに種々話  
して聞かせたのです。新井の華師へ久し  
振に行つたこと、天気が好かつたの、空  
が何うだの、薔木林だの、夢畑だの、鳩  
だのと、のべつに饒舌つたのです。そし  
て眞實に面白かつたから、今度又行つて  
見ませうと勧めました。

私は白狀しますが、家では新な孝子とし  
て、両親が唯一の誇りと成つて居るので  
す。勿論それだけの事は盡しますから、  
非常に親切な子だと思つて居るのでせ  
う。私の心を以て親に對し家に對しては  
何することも出来ませんから、切めて無  
意味な機械的な勞働を以て報いてる迄な  
のです。いやもつと／＼酷い事も考へて  
居るのですが、それは自分にも怖ろしい  
から竊に思つて居るだけで、言葉には出  
しませんまい。

こんな者の爲に、先生は何んな犠牲でも  
拂ふとまで云つて頂いた。只他人に犠  
牲を強ふることを何とも思はない方が、

自分で犠牲を拂ふことが出来ますでせうか。昨夜私から着上げた手袋は頂戴した御本の代りに——あの御本は如何も私が頂戴したやうな感じが顔にあつたものですから——着上げたので、其外に意味は無いものと思召せ。

私は中庸といふことは出来ないのですから、火がさらすば水、雨して火は駄目だと確めたのです。水です、雪です、雪國へ突進します。先生は未だ火に附き給ふか、斯くて焚死する方がお有りですか。若し左様ならばそれ迄です。併し水に附き給は、あゝ氷獄の中に白骨を負うて阿々大笑するを面白しとは思召ぬか。

私は興味を持つて居ます。自分で造り上げた氷獄の裡に、前も後も左も右も雪々、氷塊、氷雨の音絶えず、其中で遊ぶのです——堪へられるだけ堪へて凍死するのは面白い様です。己の如く天地を化したらうといふのは人間誰しも欲求でせう。若し先生の世界が私と合致したらば、氷獄の水れる戸を開いて迎へます、雪でも何でも致します。

こんな取留めもない事を書連ねたら、他人は皆笑ふでせう。併し先生だけは御笑ひ下さるにしろ御怒り下さるにしろ、愛想づかしを遣はずにせよ、何処かに私の心を吐いてる所を御射取下さると信じて申したのです。これに對しては屹度屹度御返辭を下さい、それ迄は御目に懸りませぬ。

二月二日 明

小島先生 御許に 二伸。申落しましたが、昨日中野の停車場へ降りた、先生が大久保と云つたのは謬です、貴方を爲つて と仰つた時は、私は 私には先生の御聲とは聞えなかつた。私の聲です。私が實は勇氣の無い爲に云はれずに居たことを、代つて云つて下さつたのです、甚く自分の胸に徹へて彼時は反抗する力が逆も無かつたのでした。

手紙をそこへ放下して置いたまゝ、要吉は震ふ手先で巻煙草に火を點けたが、一口吸ふと、指頭に戻の附くほど火針の中へ押込んで仕舞つた。其儘身動きもしなく成つた。

良あつて氣が附いた様に落散つた紙片を拾つて、重ねて積みながら、如何も文章が生硬で不可い、同じ事でも何故もつと女らしく書けないだらう。

斯う啖くやうに言つて、折角挿んだ手紙を又續けた。一理解せよ、この上何を理解せよと云ふのだ。單純に理解者一俤ぶ享樂なら、理解する方にあるんで、される方に有るんぢやない。理解されたいと云ふのは、それからして既に何物かを待設けて居るんだ。

要吉は強ひて他所事を云つて見たか、胸に徹へたのは其んな物ぢやない。女は具事に昨日の一日を覆して、面もそれが一歩でも退いたのぢやない。却て男に肉薄して居る。

固より要吉も終局のない戀を夢想して居たかつた。何時か如何なる方法に於て、終局を來すべきものとは思つて居た。若し手際よく失戀することが出来たら、それでも構はない。

唯こんな素早く女から先んじられようとは思はなかつた。尤も昨日の朋子が言葉にも仕打にも、何處か故とらしい所があつた。驕傲した動はあつた。要吉も油石にそれと氣附かないでもなかつたが、まさか程迄に出抜かれようとは思はなかつた。斯うなれば戀愛も單に知力上の争ひに過ぎない。それが機才に於ても、明か

に男が打敗られたのだ。要吉は自分の置かれた地位が滑稽に見え出すと共に、心の底から屈辱を感ぜずには居られぬ。

其中から男は矢張り心を惹かされた。女に對する情態が加はるに俾れて、奇妙にも女に對する慾望が鋭く成つて、昨夜の生々しい記憶が去らぬ。何んな風に手を廻して、女の足が如何成つて居たか、細かな姿勢まで眼に泛ぶ。爰の頃の觸れた跡がうづく様に思はれる。「私は逆も然い酒を盛る器ぢや無い。」そんな事は言はせない。

彼時は煽られた情熱のために、底の汚い心が半ば神祕的な薄絹に掩はれて居た。それが今は亦深々な情慾と成つて頭を擡げた。××××××××××、××××××××××。これだけでは如何することも出来ない。要吉は復讐のためにも快樂のためにも、何んな手段を盡してでも、今一たび逸した鳥を捕へなければ置かぬと誓つた。

要吉は直に筆を執つて、必死に成つて長い手紙を書いた。「餘りに早く解剖を急ぎ給ふものかな」と書き始めて、成るべく先方の自尊心を傷ける様な毒々しい言葉を連ねて、これを讀んだら逆も其儘靜手としては居られぬ様に筆を廻

して書いた。眞夜半頃迄かゝつて漸く書き終つた時は、大分心も落着いて居た。初めから讀返して見ると、如何も面白くない。皮肉が皮肉に成つて居ない。到る所此方が負けて居ながら、それを無理に隠して居るのが見え透いて、如何にも見苦しい。要吉は筆を投げて溜息を吐いた。

一體此女は何者だらう。此手紙の劈頭に女は欺いたといふ。而も男を弄ぶのでなく、自分で自分を弄んで見たのだと云ふ。只何のためめに左様しなげりや成らぬか、其理由は一言も洩らさない。

いや、種々書いてはある、寧ろ誇大してまで並べてある。併し昨日此女を動かしたものは、矢張り好奇心に過ぎない。始り新しい如鼓に飢ゑて居たので、男の爲に何んな境地に持つて行かれるか、それが見たさに、此危険な遊戯に加はつたのだらう。生れ附き爲れの強い、容易に人に屈しない女が好奇心に驅られたら、何事をも敢てしないものは有るまい。其上此女は自分の鋭敏な趣味性に従つて、實際は醜い平凡なものを理想化する特殊の手腕を持つて居る。

昨夜なぞも詰り火花が烈しいために、氣紛れ

が情熱とも見えたのだ。此女の感情位性急に燃え上るものはない。宛然爆發するやうだ。あの天上の炎の標に見える淨い情火の下には、汚い肉慾が隠れて居ないとは如何して云はれよう。

此處迄考へて来て、要吉は思はずぶろくと身震ひした。女は昨夜何を求めて居たのだ。何故それに氣が附かなかつた。いや、氣が附いて居ても、何故其機智を掴むことが出来なかつた。女から身を振附ける様にされて、未だ如何することも出来なかつたではないか。

どうも彼の女は肉體が精神か、何方か平衡が取れて居ない。斯んな風に容赦なく女の心に突込めば突込む程、要吉は自分の心に突込んで居た。女を解剖して居たと思つたが、矢張り自分を解剖して居たのだ。二人の性格の間には、それだけ類似の點が見出される。初めの憤怒が消えると共に、だんだん女の仕打があつても好く成つた。女が何處迄も自分を弄ぶ氣なら、弄ばれても遣らう。其代り此方も弄ばずには居ない。つまり弄られたり、弄んだりして、其間に途満足を求めるといふ、往々々々業婦の仲間に見るやうな下劣な心持に成つた。

それから筆を拭つて、一字づつ紙に落す様に、長い間が、つて、別に次の様な短い手紙を認め

一啓、留守中に御持参相成りし御狀一通り見致候。今更御合せいたす候もなき次第に候。只、お互に自分が許きたる種子は自分で丸るだけの覺悟は致し居候。兎に角今一度御目にかゝりて、申渡したることも申上げたく、明朝御樂町へお出の節、私は教會前の珈琲店にて御待ち申し度候、以上。

署名は故と省いたが、明朝の明を今と改めて、丁寧に封じて、上に宛名を書いた。少時左様した儘で居たが、氣に應ると見えて、又故前の朋子の手紙を取上げた。同じ事でも、此女の云ふ事には力がある。一種の勇氣があつて人を襲ふ様に思はれる。初め讀んだ時からして何やら氣に成つたが、そこもなく古い牢屋の隅から吹き上げる様な、陰森な氣が氣を刺れぬ。第一此女をコーケツトとして、單に近代文學に感服した生物として見ることは、如何もあの纏りのあ表情と一致しない。要吉はそれを何とも思ひ別けかねたが、強ひて考へまいとして、息を強めて洋燈を吹き消した。

### 十九

土居の松林の下の生垣に添うて、要吉は先刻から立盡してゐる。空は藍色に暗れて、朝の日光が吸ひ附くやうに射すので、昨夜積つた雪がもう地面から溶け始めた。靴の底で踏んだ跡が濡々する。要吉は薄石の上に立つて見たり、又二足三足歩き出したりして、氣を背立つて居たが、少時すると向角から車夫が一人妙な腰附をして駈けて来た。

一行つて参りました。  
一如何だつたかと、努めて平氣な顔をした。  
一行くと直ぐお嬢様が玄關へ出て被坐しやいました、お手紙を差出しますと、其場で抜いて讀んで、確に受取りましたと、それだけ傳へて呉れいと仰つた。それだけで可いと云ふことで、へえ。  
車夫は小腰を屈めて、要吉の顔を見上げたまま、別に笑ひもしない。

確に受取つた。それだけでは分らないと思つたが、直ぐ思ひ返した。いや来るんだ、斯う成つては來ずに居られるぢやない。  
「左様か、や、御苦勞だつた。それぢやアと、矢張樂町の教會まで行つて呉れ。」

一はして、車夫に「何方よく御出して、半町許、手前に乗せてた人力車を引置りに行つた。それから半時餘り後には、要吉は教會の赤煉瓦の建物の朝對した要吉の二階で、ひとり紅茶を吸つて居た。編紗の窓を透して横様に朝日が射すと、ヌーボー式の梳様を畫いた壁紙が明るく見える。白い卓布の上の籠に盛つた林檎に埃がかゝつてる。要吉は紅茶の茶碗を前に立上つて食卓の前を歩き出した。

一來たら先づ何と言はう、如何して迎へてやらう。——第一先方が何んな風をして遣つて來らだらう。  
要吉は面を見合せた時の有様を豫想して、二三の會話を作つて見ようとしたが、全然何とも考へ得られなかつた。  
餘程興奮していると見えて息が詰る様な氣がする。鏡の前へ立つて、一寸自分の顔を寫して見た。いかにも情氣返つて、昨夜は必夜眠らなかつたといふ容子が、何處かに見えないと都合が悪い。眼は充血してゐるか、頭髪は亂れてゐるか、顔の色も女の注意を惹くほど蒼蒼と暗なけりや成るまい。

こんな事は別段悪いこととも思はないで、

自然に要吉の心に流ぶのだ。未だこれ位ではない、戀の目的を遂げる爲なら、何んな虚偽でも許略でも敢て尻込みしようとは思はない。唯それが高じると、われを忘れて、自分が計畫んだ虚偽で自分を欺いて、自分が掛けて置いた係蹄に自分が掛つて、自分の刃で自分が傷く迄行かねば止まぬ。恰度自分が續る蜘蛛の絲に十重二十重と絡まれる、シャロットの妖姫が掛い果に似たとも云へよう。それが又今日まで要吉がすべての戀に成功すると共に、又必ず失敗して来た所以でもあるのだ。

折、教會の屋根の火時計が闇かに七時を打つた。要吉は今迄向つて居た鏡を離れて、窓際へ逆寄つた。窓掛で身體を隠す様にして、斜めに街上を見下した。積つた雪は大抵掃寄せられて、日の當る所は地面が乾きかけた。女學生が多勢右からも左からも集つて来る。それが教會の入口で出會つて、互に頭を下げては一緒に中へ這入つて行く。講師らしい西洋の婦人が遣つて来ると、其方へ辭けて行く年紀の若い女學生もあつた。要吉は眼を離さず見守つて居たが、其中に朋子は交つて居ない。道々出校する女學生の數も稀に成つて、やがて又關に人の影も見えなく成つた。小使が一人ひよつこり出て

来て、振鈴を持つたま、後を見廻つて居たが、直ぐ又何處かへ行つて仕舞つた。

それから五分許り經つた。要吉は良失望の氣味で窓を離れようとした時、急に胸が波打ち出した。朋子がひとり後れて遣つて来た。固より要吉が此處に居ることは知つてるのであらうか、殆ど側目も振らず眞直に道を歩いて、教會の女關を上つて行つた。間もなく又姿を現はして、石段の上立つたま、外面を見廻して居る。

要吉は急いで珈琲店の二階を降りて行つた。一寸朋子の着を見たま、教會の前を通り抜けようとする、女も後から隨いて来た。十間許り歩いて町の曲り角まで来ると、

「私一寸お友達に會つて、傳言を頼むことが有りますから――直ぐ戻つて参ります。」

一左様ですか、何卒。

朋子は斯けて教會へ引回したが、言つた通り直ぐ戻つて来た。そして、懐から端書を二三枚出して、角の郵便函へ入れた。要吉にはこの何でもない日常の動作が小憎らしく見えたが、何とも言はないで、前に立つて大跨に歩いて行つた。電車鈴の喧しい大通りを離れて、九段中坂の急な傾斜にかゝると、要吉は歩調を緩めて、初めて口を開いた。

「眞鍋さん――」

一はア。

「私達の何は――な様だ、ま、戀だと云はせて下さい。私達の戀は宛然イブセンの戯曲の様ですね。始まつたかと思へば既に終局に来て居た。」

要吉は口元に寂しさうな笑ひを泛べて、女を振向いた。朋子は俯向いたま、返辭をしなかつた。

二人は其儘何とも言はないで、九段の廣場を抜けて、招魂社の裏手へ廻つた。立停つて見渡したが、樹にも岩にも濃い雪が溜つて、四邊の物靜かな中に、噴水の音だけが絶えず動いて止まない。

「今日も私の行く處迄来て下さいませうか。何うもこれぢや腰掛ける場所も無い。」

「は、何方へでも。」

「尤も郊外まで出る氣にも成りませぬね。如何でせう、其邊の料理屋へでも行かうと思ひますが、貴方はそれで宜う御座んすか。」

「私なら何處でも構ひませぬ。」

そこで二人は又招魂社の境内を出て、直ぐ其處の板扉を廻らした門構への家の軒をくゞつた。また朝の間で、男衆が入口の三和土の上を

洗つて居た位だから、外に客らしい者は居ない。

裏の小座敷へ通された。家が大きいのに天井など低びて、持つて出る器具も古い。如何やら廢れた驛路の本陣へ着いたやうな感じがする。それが要吉の心を惹いた。

女中の去つた後は、二人ながら何とも言出さない。脚子は壁の上に手を重ねて端然として坐つて居る中にも、何處か不決定な容子が見える。男から口を切るのを待つて居るらしい。

「私は如何することも出来る人間ぢやない。弱い男です。それだけは貴方も安心して居て下さい。一寸女の首色を窺つたが、又言葉を書いて、一昨日新井の師で、彼の様なことを一旦口外した上は、私は貴方の前に全然抵抗力を失つたも同様です。貴方から命令何んな取扱ひを受けても、如何することも出来ない。」

「それは私の方が尚更な様ぢや御座いませんか。」

要吉は震手と女を見据ゑた。何の積りで斯んな事を言ふのか、欠票負嫌ひが手厚く竹籠返しに過ぎないのだらう。

「貴方、貴方に相手心を持って如何すること

も出来ない様にしたぢやないか」と、要吉は自分で自分の手を掴んで、「私は最う貴方の身體に觸れることさへ出来ない。」

脚子は只黙つて居る。

「ね、理解せよとは——お手紙の中にあつた理解せよとは、何を指して云ふのです。貴方が私を——愛することが出来ないといふ、それですか。ね、異癡らしいが、最う一遍面の當り聞かせて下さい。」

「左様ぢや御座いませんと、女は伏目に成つたまふ言つた。

「ぢや何です、何を理解するのです。」

「私はもう駄目な女で御座います。と言ひ切つて、脚子は自分の膝の上に俯向いて仕舞つた。

要吉はまじり／＼女の髪の水色のリボンを眺めて居たが、「貴方は私に如何したら可いのです。既／＼斯う成りや、如何も斯うも無いと云ふことは解つてる。それが解つて居ながら、私は如何することも出来ないぢやありませんか。」

そつと女の肩へ手を掛けて、女の耳の側へ熱く成つた唇を寄せた。「貴方は斯うしてこれきりで、二人の關係が清んで仕舞ふものと思つておいでですか。」

脚子は俯向いたまふ頭振を擧げた。

要吉は痴みかけて、「では先夜上野でのことは如何です。まさか冗談にして仕舞ふ積りぢや無いでせう。」

「私は一生懸命でした。」

何か言はうとすると、女は又言葉を書けて、「一生懸命でも、如何することも出来ませんでした。」

要吉は女の肩に掛けた手を離して溜息を吐いた。

「仕方がない。私は自ら招いたのだ。自ら招いてこんな地位に陥つたのだ。貴方に不足をぶふ筋もないが、貴方も餘り大膽に振舞つて下さつた。」

「先生も、それは——」

「だから何とも言はない。けれども私の態度に不眞面目な物が有つたにせよ——従しんば貴方を欺かうとしたのにもせよ、私は全力を擧げて人を欺かうとしたのだ。決して餘裕が有つた譯ぢやない。全力を擧げて人を欺くといふことは、もう欺くんぢやない。眞面目なものでせう。ね、察して下さい、私に其爲に貴方の前に自分といふものを全然隠け出したので、斯う成つては隠れるにも隠れやうがない。貴方はそれで好からうか、私は如何成ります。」

「私がこれで好いと思つて下さいまして？ 私だつて好くは有りません。」

要吉は兩手に堅く女の兩手を把つた。「ね、私を憐れんで下さい。愛することが出来なけりや、切めて憐れんでも下さい。それも出来なけりや。切めて——切めて私を欺いてなりと下ささい。」

言ひさして聲を滿せた。これ程までに自分を卑しくしたかと思ふと、自分の聲で自分が悲しく成つた。其儘又つゞけて行く。

「私は欺かれるだけで澤山な人間かも知れない。始終機會さへあれば自分で幻影をつくつて、自分を欺いてる。幻影の中を生れて、幻影の中で死んだら思ひ残すことは有るまい。貴方も他人を欺くと共に何故自分を欺かうとは爲さらんか。お互に生きようと思へば自ら欺く外に道はない。」

斯う言つて、女の顔を覗き込む様にしたが、朋子は矢張押黙つて居る。

要吉は竊と女の手を離して、「それぢや貴方は如何しても徹骨徹髓に醒めた女だと云ふのか。けれども醒めて見た所で、矢張新しい幻影の中へ起き過ぎて過ぎない。縱し本當に底の冷たい水に觸れることが出来たとしても、そりやナツシ

ングだ。無に立腹する外はない。」

「無かも知れませぬ。無に堪へようと思ひます。」

女は短刀の如く言ひ切つた。要吉は少時其聲を聴いて居たが、昨宵此女の手紙を讀んだ時と同じやうな、底に一貫した、峻烈な、冷冽なものがあつて、人の心を襲ふのに氣が附いた。此女を動かさうとするのは容易なことぢやない。要吉は火箸で灰を搔均しながら、ぢり／＼と考へ込んで仕舞つた。

何時迄経つても二人ながら物を言はぬ。二人ながら自分を不幸だと思つた。而も其不幸の原因ははつきり意識に上らない程漠然としてこんがらかつて居るが、壓迫だけは犇々と身に追つた。

北向の窓へ風が吹き附けるたびに、腰硝子の障子ががた／＼と鳴つた。其音が如何にも慍さうに聞える。要吉は黙つて腕組して居たが、急にぶる／＼と身を震はせた。

「如何爲さいましてと、朋子が氣遣はしきうに訊いた。

「え」と、要吉は着醒めた顔を上げて、「如何もしません。」

「左様ですれと、氣の無い道辭をしたが、直ぐ又、一飲ませて下さいますか。」

「え」と、朋子は落着いて笑つて見せた。

「其代り私酒盃ぢや飲まない。」

「ぢや、何で——」

要吉は黙つて火鉢の縁に掛けた女の兩手を見詰めた。手の甲に着いた筋が淡く透いて見える。一何でも可いから、片一方の手を前へ出して御覽なさい。」

朋子は言ふが儘に左の手を出した。要吉はつと其手頭を握つて、指を掃へて掌に四みを作らせた。衣裏から小さい鐵を取出して、其處へ強い酒を注ぐ。それ迄爲れるが儘にして居た朋子は、酒が掌に充つると同時に、ばつと指を開いた。酒はだら／＼と火鉢の中へ滾れて、白い灰が立上つた。要吉は身を反して避けた。

「ぢや止ませせう。」

朋子は片手を前へ出したまゝ、顔を首に向けて笑つて居たが、急に笑ひ止んで、

「いえ、今度は眞實にと、掌を要吉の前へ突附ける様にした。

「お終ひ迄大人しくして居なけりや——」

「え、屹度。」

たが、其儘濡れた掌を男の口髭にねたくり附けた。要吉は手巾で其手を抑へたまゝ、何時迄も離さうとせぬ。餘り眞顔に見詰めて居られるので、女は花容の咲く様に次第に唇をほころばせた。

「一體其齒は如何したのです。」

「え、是れと直に手を引いて口元を隠した。目だたぬほど上反つた齒は一枚置きに義齒を入れて、物を言ふたびに煙々と人の眼を射る。」

「何時か元祿が流行りましたでせう。あの時に遣らせたのです。」

「莫迦な」と口では言つたが、何かしら始終思ひ切つたことをしなけりや一日もいられない女だから、そんな事も進りかねないかも知れぬ。

女は男の矜持れた顔をしたり顔に見て居たが、「いゝえ、左様ぢや御座いません。眞實は永く齒を病んで困つたものですから。」

「何故そんな、ちよいと小刻みに齒を吐くのです。女は皆そんな所に興味を持つてゐるんですね。」

「おや、此れからは最う申しますまい」と、朋子は俯向いて素直に言つた。

少時して要吉から又口を開いた。「今のこと

「え、何なんです。」

「今爲たことでさ。あれはね、矢張ダンヌンチオの中で讀んだので、切めて貴方に左様でもして貰ひたかつたから——けれども、最うあれ以上貴方から與へられようとは思はない。」

斯う言つて、相手の顔附を熱々見守つて居たが、「貴方は眞實に小説なぞ讀んだことはないのか。」

「え、小説といふものは全く手に取つたことが有りません。」

「何故。」

「だつて、私は一人で澤山ですもの、他の女の話しなどは如何だつて構はない。小説の中の男や女と一緒に成つて、泣いたり笑つたりすることは、私には逆も堪へられさうもない。」

要吉は黙つて聞いて居ながら、ひいと胸を打たれた。斯んなに自我の強い、飽迄自分自身の生きる道を歩まねば止まぬ女が、空想の中なら知らぬこと、呼吸をする現實の世界に有るだらうか。此女の小さい頭の中の秘密程知らぬものはない。

「私はね、左様は云ふものの、貴方も斯頃流行る小説や戯曲なぞ讀み散らしたんだらうと、實は今迄も疑つて居た。ね、眞實に讀まない、」

女は黙つて點頭いた。

「ど、如何して斯んな女が出来たこと、要吉は思ひ入つて、引寄せせやうに女の手を執つた。朋子は膝を屈して、男の腕に凭れ懸るかと思ふと、ばらりと煮える様な大粒な涙を男の膝に灑いだ。

「私——ひとりで斯んなに成つちやつた。」

凡て女は其最も深く自ら憐む所に媚びられた時に泣く。媚びられて泣かぬ女はない。要吉は唇の上に急激の如く落つる女の涙を見て、何とも云はれない満足を感じた。少くとも女は動かされた。自分の方の反應があつた。此深さへ見れば、最早何物を失つても惜しくないと思つた。而して女を捕虜にし得たりと信じた時は、即て自分自ら捕虜に成つた時であることを忘れて居た。

要吉は女の泣く儘に泣かせて置いて、竊と後れ毛を撫上げたり撫下げたりして居たが、髪の毛の一筋々々が極めて細いのに、如何したのやら切れた短い毛が多い。それが爲に、一體に髪が薄らさへ見える。久らくた様して居たが、漫ろに言出した。

「私は最う如何しても貴方と離れることが出来なく成つた。此儘元二人が此とも知らなかつた

時の様に永い一生を暮して行く、そんな事は連も出来ない。「又聲に力を入れて、一貴方はそれが出来ると思ふか。」

朋子は男の腕に顔を埋めたまま頭を掉つた。

「ね、貴方は何人をも愛することが出来ないんだ。それなら強ひても私を愛して下さい。私は待つて居る。貴方が愛して呉れることが出来る迄待つて居る。」

「何時迄待つて下さいまして、私は駄目で御座います。」

要吉は思はず女を引起して、凝乎と其顔を見詰めた。「何故、如何して？ 私はそれ程迄に貴方から——」

「先生ぢやない。私が一私は」と、泣膨した眼を伏せて、男の視線を避けるやうにしたがら、一幾許強ひても——そんな要求が起らない身體ですもの。」

「なに？」

「私は女ぢやない。」

「其儘下に突伏して仕舞つた。」

要吉は眞蒼に成つた。ざらりと電光を頭の中へ送られた様な心持がした。少時は立上る力

もない。聲を出さうとしても聲が出ない。——今に成つて初めて理解の外に人事關係がない

と云つた女の意味が解つた。冷感な手紙の謎も好く解つた。炎々と燃上つては、空をも焦すやうに見えながら、どこか油が無くて燃える火の様に思はれた、彼の耐しい情熱の秘密も解つた。

「此女の眼に映じた世界は何んなに空漠な、寥廓としたものであらう。氷と雪に閉ぢられた獄令と云つただけでは、まだ云ひ盡されたとは思はれぬ。其身に成つて見なければ、他人は窺ふことも想像することも出来ない。要吉には理

なくも亡父が想出された。尤も父の顔も、何んな人と云ふこともおぼえて居ない。が、父の眼に映つた世界は矢張こんなものでは無かつたらうか。目前に左様いふ世界が存在すると知りながら、自分は唯彼等の世界の閉ぢられた扉の前に立つて戦慄するに過ぎない。二人とも物を言はなかつた。其間、長いやら短いやら解らぬやうな時間が経つた。やがて、「あゝ、左様だつたか」と、要吉は太い息を吐いて、「貴方の言ふことを爲すことの意味が初めて能く解つた。私は斯んな怖ろしい現實の事實に接しようとは思はなかつた。」

又、少時言葉を送切らしたが、「私は最う貴方を自分の方へ引込まうとは云はぬ。何處でも可

い、連れて行つて下さい。私は貴方の行く處へ行く。」

「来て下さい」と、堅く男の手頸を掴んで引寄せた。掴まれた痕が痛い。此世に怨恨を残して死んだ亡霊が、行途ふ人を手當り任せに黄泉の國へ引掛り込むやうな氣もする。引寄せられて、要吉は固う幸福ではなかつた。けれど、斯う成つては最う仕方が無い、如何することも出来ない。

「私は貴方に云ふ事があること、良あつて要吉が言出した。一昨日貴方は内の者は皆善い人で、自分だけが不善い——自分だけが一人造つて居ると言つたでせう。」

「えゝ、言ひました。」

「其時は唯それだけの軽い意味に聞いた。私は自分の暗い過去に思ひ合せて、明るい家庭に生れた貴方が羨ましいと云ふよりも、只自分とは遠いものの様に思はれた。が、左様ぢやなかつたのですね。二人は生れながら同じ様な運命を背負つて居たのですね。」

暗い波の上を夜馳る二艘の船——互に相手を捜して居ながら、此儘知らずに過ぎたら、一生逢ふ期はなかつたかも知れない。

「私を何んな身だと思つて呉れる」と、要吉は

聲に力を入れて、「私も矢張呪はれた身だ。ね、聞いて呉れますか。」

女は點頭いた。

「私の身はデレマの上にある。私は——正しい父の子で無いが、それでなけりや生甲斐のない身か、何方かです。何方かは誰も知らない。又知りたくもない。いや、唯一人知つた者があるが、私は其女を惜まずには居られない。」

斯う言つて、相手の容子を眺めた。朋子は身動きもしない。

「それは私の母です。勿論私はと、急に苛々して、「私は斯んな事を打明けた所で、それに依つて貴方の同情を買はうとするのではない。勿論憐愍を求めるでもない。人を愛すること、人に同情することも出来ない貴方だと知つたからぶふのだ。私の此秘密を知つてる者は固より私ひとりだ。今貴方に話せば、貴方と私と二人だけだ。」

女は海と手に力を入れた。

「貴方は此秘密を口外することは出来まい。つまり私の此秘密を握らせて、貴方を私から離れることが出来ない様にしたのだ。解つたか。」

「若し女がそれを餘り殘酷だと言つたら、貴方の方か、それと云ふ積りで居た。」

併し女は何とも言出さない。

二人はそれ限り物を言はないで、何時迄も離れなかつた。一時に煽られた感情が漸次に沈靜して行くにつれて、何とも名状し難い心の空虚を感じた。同時にそれが終に充されぬことも知つて居た。

何時の間にか障子の目影が移つた。

「最う大分遅いでせうね。」

朋子はそれが聞えたと思つて眼を上げて四邊を見廻したが、ちりと前歯を見せたきりで、其儘

儂怠さうに男の腕に凭れかゝつた。斯んな媚めかしい嬌態が若い素人の女に如何して出来るのか。要吉には何とも思ひ分らない。只、此上何時迄かうして居た所で、如何にも成らない、それだけは解つて居る。勿論女の側には居たいことが、時として女から離れて、一人に成りたいこともある。

「最う立ちませうか。」

男は低い聲で囁いた。

「え、と、女も振回つた。」

そこで女中を喚んで、身繕ひして立上つた。二人の腕は手を着けられずに残つて居る。要吉

は先に立つて襦袢開けようとしたが、急に振回つて其處に立つて居る朋子の肩に手を掛けた。

「私は如何しても理解だけぢや満足が出来ない。私の望むのは貴方のデスパイズする——あれだ。それを知つて居て呉れるか、ね、それを。」

女は上眼に相手の顔を見返したまゝ、點頭いて見せた。要吉はそつと其項に唇を附けた。

其儘、二人は梯子段を駈下りて街上へ出た。

再び馬場を抜けて中坂の上に立つた。日は沈んで、階下の町の屋根から向ひの高臺へかけて、一面に薄白い霧が懸つて居る。其中からニコライの圓蓋が黒く浮出して見える。大都會は今

が埋葬の間際かと思はれた。此寂かな夕暮の空に彼方此方工場の煙突から幾條となく煙が立つ。遠いものは段々灰色にかすれて、霧と見分け難いのもあれば、近いものは盛に黒煙を上げる。中には砲兵工廠の高い煙突から吐出すのは、三四町許り硝子色の空を濶様に靡いて、凄じい勢ひで廻轉して行く。二人は立停つたまゝ、眼を放つた。

「煙が好う御座いますね。私、煙煙の立つのを見てると、眞實に好い心持なんです。」

「貴方の心の中の動搖を象徴的に表はして居る様だから——」

朋子は涙辭をしないで、凝手と煙の渦を眺め

てゐる。要吉は言葉をつづけた。

「貴方は何日か海岸で浪の音を聞くのが嫌ひだと言ひましたね。」

「ええ。」

「あの煙は音の無い波浪だ。眼に見える形は如何にも猛烈で、強い力が籠つてるやうだが、それと共に船迄轟だ。何の音も立てない。そこが貴方の氣に入つたのでせう。」

「朋子はなほ黙つて煙に見惚れて居る。殆ど男の側に居ると云ふことも忘れて、只黒い煙の渦巻が風に靡いて散つて行くさまに心を奪はれて居る。」

「要吉は凝手と女の様子を見守つて居たが、何時迄も細黙つて居られるのに堪へなく成つて、「何を考へてるのか」とや、語氣を荒くして訊いた。

「ええ」と、朋子は例の遠い所から呼び戻された様な顔附をして、男を見返したが、何にも考へては居ません。」

「要吉も一たび押して訊く氣はなかつた。成程自分は此女の祕密を知つた。が、同時に此女の世界から押出されたやうなものだ。何と思つても、最う仕様がなにかも知れない。——要吉は遠い空を眺めたが、一種の淡とした世界、苦

に打たれた。

中坂を下へ降りた所で、胸車を雇つて女を先へ歸らせた。朋子は男の言ふがまゝに一人胸車に乗せられて行つた。車夫が梶杵を上げるのを見て、要吉は直ぐ電車の線路俣ひに女と反対の方角へ歩き出した。何處へ行く宛もない。只何處かへ行かなければ成らぬやうな氣がする。日が暮れかゝつたので、往き鈍ふ上の人足音が小忙しい。電車の鈴も、層喧しく鳴る様に思はれる。何と云ふこともなく胸膨れがして、唯訴へたい、懺悔したい、聲を上げて泣いて見た

い。神壇の前に跪いてなどとは云はぬ。自分と同じ様な生きた人間の前でも、聞いて呉れる人さへあれば、あらゆる我執を離れて正直に懺悔し得られると思つた。幾年にも斯んな心持に成つたことはない。十字街頭の繰るが如き往來の中に立停つて、地面を見詰めて居ると、後から來る人が皆追越して行く。何時の間にか兩

眼に一粒涙が溜つて居た。

見ると、向うに老人の乞食が一人、寒い風に吹かれながら尺八を吹いて行く。毎時見掛けの乞食で、老破巾を被つて、大きな包みを負ひながら、半の匁ぶ様に緩く歩む。尺八の音は枯れがれて殆ど聞取れない。要吉は併へ近寄

つた時、不圖背中上の荷物の上に小さい板切を結び附けて、何か書いてあるのが眼に着いた。永い間風雨に曝されたものと見えて、字體が磨滅して能くは讀まれない。それでも暮れ残る光に透して見ると、此爺さんは小田原在の者だである。一人の娘が家出して行方が知れない。娘戀しさに家を疊んで廻國に出た。娘の年組は十九、名前と人相とを書いて、見附けた人があつたら此親爺に知らせて呉れとある。そして、最後に明治二十三年何月何日相州足柄野何村役場とある。二十三年に十九の娘なら、生きて居ても最う好い年頃だらう。それにしても、此盲目の爺さんは二十三年から今日迄雲を掴む様な尋ね物して、夏の日、冬の夜、街衢の風に曝されて來たのか。恐らくは生を終るまで捜しても再び廻り逢ふことはあるまい。要吉は人間の強い執着と弱い力とを面の當り見せられたやうな心持がした。知れないものを、何うせ知れないと知りながら、なほ追尋せずに居られないのは、獨り此爺さん限りではあるまい。要吉は前へ廻つて爺さんの顔を見ようとしたが、頭巾を眉深に被つて俯向いたまゝ、餘念もなく笛を吹いてるので、能く分らなかつた。其儘二三歩行き過ぎて、何心なく懐へ手を入れて紙入を

出さうとしたが、又思ひ直して止めた。  
折柄電車が来たので、背後も振向かず、そ  
れへ飛び乗った。

要吉はそのそり家の闇を跨いだ。誰にも物を言  
はないで、自分の部屋へ這入った。飯も要らぬ  
と云つた。燈火も持つて来るなど云つた。座敷  
の真中へ仰向けに倒れたまゝ、灰白い障子の紙  
を見詰めて居ると、日は暮れて行く。一度暮れ  
ては永劫明けないかと思はれるまで、徐に暮れ  
て行く。

やがて素直に起上つた。洋服を脱いで平常着  
に着代へた。何時の間にか手焔に火も入れて、  
西洋燈も燈火を細くして、部屋の片隅に置いて  
ある。一寸それを見遣つたが、顔を灯に背けて  
机の前に坐つたまゝ、長い間身動きもしなかつ  
た。眼は開いてるが何を見て居るのでもない。  
涙は内に向つて静に音もなく流れる。絶えず落  
ち、絶えず流れる。貴い上人の夢に似たとも云  
へるやうな、確かな悲哀が身に迫る。斯んな心  
持に成つたのも、餘り肉感的な刺戟に勞れた一  
時の反動に過ぎなからうとは、自分ながら危ま  
れぬでもない。貴族か斯ういふ心持を經驗し  
て、能く其經過には熟して居た。如何すれば、

如何成ると云ふことも知つて居た。けれども此  
度許りは如何も行着く所へ行着いた様に思はれ  
る。これが生涯の一轉機を劃して、今度こそ  
いよ／＼新しい生活に這入るのではなからう  
か。これ迄の事を思へば、自分ながら怪しい。  
只無理にもた様思ひたい。

尤もこれ迄も、一日として人並に晴れやかな  
日を送つたことはない。絶えず自分の背に負は  
された暗い影に脅かされたがら生きては來た。  
が、それも慣れては唯刺戟として意味があるに  
過ぎない。それだから要吉は自分の不幸を人へ  
信知つて居ると共に、又其不幸を忘れて居た。  
で、だん／＼其刺戟にも慣れて來ると、又新し  
い刺戟を求めて走つた。この常に刺戟を求めて  
止まぬ習性の底には、卑しい欲望の衝動が潜ん  
で居ることは争はれない。それを墜落した文學  
に耽つて養つた想像力に依つて、修飾し複雑  
にし、又鋭利にした。加之、それを辯護するこ  
とさへおぼえた。

それが今日の打撃に會つたのだから堪らな  
い。要吉には此打撃が如何しても偶然だとは思  
はれなかつた。豫め自分の爲に用意されて、  
如何しても其處へ行着く様に定められて居た様  
な氣がする。朋子が自分に對して言つたこと爲

たことが、斯程遙に深刻な意味で虚構であらう  
とは誰が知つて居ようぞ。あゝあの女の涙――  
あの涙には毒が有るやうだ、あの涙が自分の  
頬に痕跡を残さなかつたのは、正に不思議と云  
つても可い。

眼を睨ると、朋子の面影があり／＼と泛ぶ。  
それが如何しても生きた顔が泛ばない。何遍描  
いて見ても、女は冷たく成つて、眼を閉ぢた  
まゝ、寝床の上に横はつて居る。朋子は今でも  
死んで居るのだらう。親類の人らしいのが大勢  
枕元に寄つて居る。皆打濕つた容子をして、一人  
も物を言ふ者はない。要吉は來るべき所でない  
所へ來た様な氣がして、一旦は引返さうとした  
が、又立戻つて、凝乎と女の顔を見て居た。仰向  
けに寝かされた女の死顔は蠅の様に蒼白い。髪  
は綺麗に梳かれて白い敷布の上に垂れてある。  
要吉は我を忘れて枕元へ近づいた。人々の騒  
いでる間に、倒れかゝる様にして死體の唇へ  
接吻した。見る／＼死毒が身體へ傳はつて手足  
が利かなく成つた。四邊がぼんやり暗く成つて  
行く。

二人は影と日向と別々の世界に住んで居る。  
死ななければ接近することは出来ない。朋子は  
自分の方へ來て呉れと言つた。來て呉れとは、

死んで呉れと云ふ外に意味はない。

夜は更けた。室内は火気に蒸されて春の様である。何時の間にやら戸の外は風が出て、家をも木をも揺がすばかりに、どうつと吹き、又どうと吹く。どうつと吹く木柵の中を白衣を着た大夫に昇がれて、しづ／＼と柩が行く。音もなく、聲も立てず昇いで行く。これはわれ自らの柩ではないか。眼を開くと火桶の炭は白う成つて、身體は水から上つた様に勞れて居る。此儘静手としてさへ居れば、如何しなくても死んで行けさうに思はれた。

床へ入る前に、要吉は巻紙を舒べて、今宵の幻影を細々と書いた。未だ女に送るとも送らぬともはつきり決めたのではない。

二十

戸の隙間の白む頃、要吉は蒲團の中で不圖眼を覺した。最う寝附かれない。昨日一日の出来事が潮の如く頭の中へ戻つて来る。あの様な著しい日の後にも、毎日の通り夜が明けるといふことが、何だか瞞されたやうな氣がして物足らない。

九時頃、漸と床を離れた。一人朝飯の膳に向つて、不味さうに煮詰つた味噌汁を啜つて居る

と、縁側へ隣家の女の兒が姉妹連れで遊びに來た。自家に乳呑兒が有り出してから、近隣の子供が寄附くやうに成つた。初めの間は寄つてたかつて赤ん坊をあやして居たが、やがてそれにも飽きると、目の當る縁側へ陣取つて、二人で手遊をつき出した。

つツつきつばたの掘井戸は、  
ほうそり細りと掘る時に、  
お仙のやぐらに火が着いて、  
火イチやあるまい紅である――

こんな叫びつれて、障子に映つた影が揺れる。池の金魚が水面に泛んで、ゆらくと陽炎の立つやうな天氣であつた。

要吉は少時二人の影に見愧れて居たが、だんだん昨日の出来事が遠く見えて、まるで別世界で起つた事の様にも思はれた。自分は矢張自分の想像に弄ばされて居たのでは有るまいか。日頃から頑末な物の末に拘泥したり、又は誇大して見る癖が着いて、眞直に物の真相を掴むことが出来ぬ。そんな事も今更氣にかゝる。

が、それも押詰めて考へて見るだけの根氣はなかつた。只病上りの病人の様で、うつら／＼として一日の日を送つた。不圖、書棚から精神病學の備忘録を取出して、彼方此方讀つて見て

居たが、未だ所要の項目が見附からぬ間に、何を目前に捜して居たのやら忘れて仕舞つた。日暮前に郵便脚夫の手から一封の書を受取つた。朋子から來たのである。要吉は上書を見ただけで、何となく悪い前兆を掴まれたやうな氣がした。何時か上野の森で逢つた夜の明くる日と云ひ、又明日の今日と云ひ、何うも好い音信とは思へない。

で、指先を震はせながら、封を開いて讀んで行くと、先づ初めに、「昨日は誠に有難く、年來になき記念すべき一日にて候ひき」と書き出して、お蔭で人生の内容を癒したのだ、私は實世間に對しては直接の興味しか持たないのだ、何も人に強ひられて斯く成りしにも候はぬ、今更人に強ひられて左右し得るものにも候はずだの、私は何でも彼でも嫌ひな様なれど、又何でも彼でも所好なれば、何時何處へ行くか其時々々に放任いたし置べく候だのと、一時にも餘る長さを並べて末に、「私只今此手紙を書きながら、少からぬ興味を覺え候。多分自分のこと許り申原候故なるべしとも考へ申候」と書添へてある。

要吉は長い間黙つて其手紙を見詰めて居た。別段腹も立たなければ騒ぐ氣もない。只、何の

爲にあの女はこんな眞似をするので有らう。此  
上欺いたり欺かれたりしたとて、何の得る所が  
有らうぞ。此方で思ふ心の甲斐なきを知ると共  
に、女に對しても、索然たる感に打たれざるを  
得ない。

其夜更けて同じ人から又一通の手紙が来た。  
床の中で寝ながら讀み下すと、次の様な文句が  
簡單に認めてあつた。

是非御目にかゝりて申上げたきことの候  
まゝ、何卒明日午後三時より四時迄の  
間に、水道橋停留場まで御越し下された  
く、御日にかゝりたる上、何處へとも御  
供申上ぐ可く候。

「これも待設けて居た通りだ。」  
要吉は手紙を枕元に抛り出したが、

何でも男は此方の思ふ通りに成るものだと思  
てかゝつてられる様なのが忌々しい。が、一方  
には、女の意の儘に右したり左したりするの  
も面白いと云ふ様な氣も動いた。女の掌の中  
に鹹弄される——先方の奴隷に成つて、相手を  
支配する——そこに一種の類廢した快感がな  
いではない。

明くる日は朝から大學の圖書館へ行つた。薄  
暗い書庫へ這入つて、紙が朽ちて座に成る臭ひ

を嗅ぎながら、彼方此方あさつて居たが、宛にし  
た本が見當らぬ上に何うも心が落着かない。何  
遍となく池の縁へ立つて、老樹の幹の間から青  
黒い水を眺めて居た。午後の三時が打つと、遠  
てて風呂敷包みを抱へながら急ぎ足に赤門を出  
た。壹鼓殿坂を下りて、水道橋の方へ歩いて行  
く。土手の上を走る電車が眼に着いた時は、何  
と云ふこともなく可厭な心持がしたが、自分は  
矢張りするより外に仕方が無いだと思ひ返  
して、又足を早めた。橋の手前から最上プラツ  
トフオームの上に其人らしい影が見えた。近頃  
何處となく踏み慣れた石段を上つて行くと、朋  
子は五十餘りの被布を着た切妻の婦人と何やら  
話して居たが、急に談話を切上げたと思つて、其  
女は丁寧に御頭をして別れようとした。朋子  
も媚やかに禮を返した。要吉は少し離れて足を  
留めたまゝ、兩女の挨拶振を眺めて居たが、此  
時程朋子の様子が女らしく見えたことにはない。  
昨夜受取つた手紙の主と同一だとは如何しても  
思はれない。そんな事を思つて居たので、朋子  
が側へ来て何か言つたのも能くは聞取れなかつ  
た。やがて急に氣が附いた様に、  
「餘程お待たせしましたか。」

「いえ」と言つて、朋子はしばらく言葉途切ら

したが、一私、今日被人して下さいますとは思  
つて居ませんでした。」  
要吉は黙つて女の顔を見詰めた。

「眞個な疑いふ心算ぢやなかつたんですか  
ら——濟みません。今日は如何しても日冥まで  
に歸らないと不可ませんから。」

朋子は他所見をしながら早口に斯う言つた。  
それなら何の爲にこんな眞似をしたのか。單に  
男の心を試して見たのか。それとも一時の出来  
心から、何日ぞや霞の降る中に男を待ちぼう  
けさせた、其同じ場所でも自分も來ぬ人を待つて  
見たかつた——それが餘り容易く自分の希望を  
充されたので、勝氣な女の常として、どこか物  
足らないと云ふのか。要吉は頭の中でいろんな  
想像を忙しく働かせながら、女の顔を見返し  
て居たが、

「ぢや、御一緒に歸りませう」と、無造作に言つ  
た。

で、二人連立つて石段を降りた。要吉は一寸  
女を振り回つて、「毎日の道を歸るのも何だから、  
お茶の水の方から廻つて歸らうぢや有りません  
か。」

朋子は唯慎まじやかに體の上部を曲げた。  
それが又女らしい素振に見えた。水道橋を渡ら

ないで、眞直に駿河臺へ上つて行くとして、

「先刻貴方と話して居た人は、御存じの方なんでしょうか。」

「え」と解らなごうに、男を見返したが、「彼方ですか。初めて彼處で會つただけなので御座います。」

「左様」と言つたまゝ、又五六歩歩いた。ヤがて、「何日かのお手紙にダブル、キョラクタアといふ事が有りましたね。如何いふことなんです、あれは？」

朋子は黙つて居た。

「只性格に極端な兩面を有すると云ふことか、それとも心理学なぞでダブル、パソナリテイと云ふ様な意味なんですか。二つの人格が代るゝ、歸いて、其間に連鎖がない？」

「何方だと思ひに成つて」と、突込む。

「そんな事は私には解らない。後者なら丸で病理的な状態だし、又性格に二つの側がある」と云ふだけのことなら、大抵の人は皆二重にも三重にも持つてゐるんでせうね。」

二人は黙つて歩いた。すべて戀人は無言で居る時に最も了解し合ふと云ふではないか。それに、要吉は黙つて居る時ほど、相手の心を探らうとして、氣の焦躁することはない。勿論、二人

は戀人ではないので有らう。

お茶の水橋の袂へ出た時、朋子は急に想ひ附いたやうに、

「ね、ニコライへ行つて見ませうか」と言出した。

「え、行つて見ませう。」

又一町許り東へ行くと、黒い鐵の扉の閉つた石の門がある。脇の小門が開いて居たので、そこから這入つて、禮拜堂の前へ出た。二人は女關を上つて行つた。圓天井の下は唯ひるゝとして、輕く踏む足音さへ胸を冷す許り高く四邊に反響した。高い窓から射す薄い光線に照されて眩い程輝立た。正面の金箔の色が落ちて

て見える。眞中にある聖晩餐の繪を初め、基督一代の奇蹟が隙間もなく畫かれて、其前に並べた黄金の大燭臺が人の眼を惹く。

男と女と、二人の不信者は人氣のない祭壇の前に並んで立つた。要吉は正面の聖晩餐の繪から眼を離して、徐々と朋子の方を振り回つた。

朋子は漸次に男の方へ眸を向けたが、二人の眼を見合せた時、片頬に薄く笑つて見せた。要吉は女の顔に何とも云はれぬ不快な笑が、うつて居ると思つた。カインの刻印だと、心の中で叫んだ。女の笑顔が消えて行くと共に、自分の

生命の緒を奪ひ去られるやうな氣がした。

「最う出ませうかと、良あつて朋子が言つた。二人は踵を回さうとした。其時迄誰も居な

かと思つて居たが、祭壇の下に長い白髯を生やして、小倉の袴を着けた老人が眠つたやうに靜に懸掛けて居るのが眼に着く。堂の番人であらう。

禮拜堂の横手へ出て、二人はその石段を駈降りるやうにして下つた。門の扉の前に立つて、今一度下から禮拜堂と其側に立つた高い鐘樓とを見上げた。空の曇かな日であつた。

「石段が好い。寺でも社でも門前に石段のないのは好くない。」

「鎌倉は石段の多い所ですよ」と朋子が言つた。

「あゝ、貴方は鎌倉がお所好でしたね。」

「夜分に好く八幡様の石段の上へ行きました。」

「夜分に？」

「鳩がよく啼いて居ました。」

「又お茶の水へ出て、本郷三丁目から退分迄来た。二人は袂を分つた。

「明日金曜日ですね。」

「先生被入しやいますか。」

「参ります。貴方も。」

朋子は頷いた。

二三間來てから、要吉は何だか言ふべきことを言殘して來たやうな氣がした。別れた後では、何もこんな氣がする。いつそ後戻りして、道掛けて見ようかとも思つたが、やつと押帳へて歩き出した。

二十一

一園部さんは「と、若い女子大學生が不意に言出した。金葉會の道中が皆其處へ着いた時である。

一今日は被入しやらないのぢやなくつてと一人が應じた。

一いゝえ、今し方階下へ來て被入したのよ、ただかお加減が悪さうだつたから、最うお歸りに成つたかも知れないのよ。

一でも可訝しいわねえ、誰にも何とも言はないで歸つたのかしらと、前のが鼻聲を出した。

一見て來ませうかと、最初の女學生が立上つた。

一私も」と、今一人が一緒に立上つた。二人はぼた／＼と階下を走つて、襦子段を駈降りる音がした。

神戶は一寸其後姿を見送つたが、何もない體で又上階を歸けた。

一澤井さん、貴方へ差上げた切符は最う無く成りましたでせうね。無く成れば、幾許でも後をお願ひします。」

切符と云ふのは、此處の女學部が何うも不振な所から、其勢力を張るために、廣告がてら演奏會でも開かうと云ふので、既に其日取も極つて、生徒やら關係者やらに切符の續め方が頼んであるのだ。

一私なんかあれだけでも持餘してゐるんですから、最う澤山で御座います。

一左様ですかと、神戶も苦笑した。

一皆様の體分困つてらつしやる様です。前日多ういゝてすもの。

一眞鍮さんと、神戶は眞向に眞子に話を向けた。「如何です、貴方にも願はれますまいか。」

一はアと、眞子は今迄は何事かを考へて居たと云ふやうな顔を上げた。如何したのか、左の眼に細帯をして居る。

そこへ又階下に入聲がして、前の二人の後から、三砂子が靜に這入つて來た。

一何處へ行つてらして、三砂さんと澤井が懐かしさうに訊いた。

扮装が目に立つた。實多に袴なぞ着けたことはない。それで居て眼鏡をかけてるが、別長着にも成らなかつた。

湯澤しの湯がたぎり出した。眞子は自分で立つて紅茶を入れたが、皆衆の前に一つづつ茶碗を配つた。乾葡萄酒の風が眞中へ出された。

斯んな事をしてゐる間も、眞子は全力を盡して平氣に、能達も冷淡に見えるやうに努めてるらしく思はれた。要吉は眼もて女の後を追ひながら、幾度か其眼を捕へようとした。が、何うも思ふ様に行かない。

階下では音楽の練習を始めたと思へて、洋琴の清音も空気に波紋を起して二階へ傳はつた。

やがて神戶は立上つて、何日になくクリスチナ、ロセッティの短い詩の話を二つ三つした。

若い女達は各自其處へ着いて、備忘録を出して、一語も濕すまいとそれを書取つた。

要吉も眞の方へ坐つて、片手に額を支へながら耳を傾けた。時々坐む様にして眞子の方を見違ると、海の波の様に變り易いムードを擲へて、表面は幽玄海靜に清へて居る。神戶の細い力のある聲に響續して聞えて居たが、漸次に其意味が解らない。手帳を出して、其端へ鉛筆で、一われば其處に着を愛す」と書いた。「執事にといい

ふ言葉か、如何にも毒々しく響く。幾度も同じことを書いては黒く滲り消して居たが、其次へ持つて行つて、「如何に愛するも其甲斐なきを知ればなり」と附加へた。それから次々に書き足して、斷んな手紙を書上げた。

「われは執拗に君を愛す。日夜に君を想ひ、君を愛ふ。ハハに想はむも其甲斐なきを知ればなり。君より愛せらるゝ日の永劫來らざるべきを知ればなり。これをしも戀なりとすれば、直に斯かる望み絶えたる戀を爲せしものありや。知らぬ、知らぬ、實す所を知らぬ、出づる所を知らぬ、造るゝ所を知らぬ。戀それ自體が刑罰なり。切めてもわれは永く其刑に服してあるべし。永く君が冷酷なる臍の中を生くべし。されど唯一昨日の手紙の様なるは堪へじ。君の手に成らざとせば、冷酷を過ぎて寧ろ輕薄に流れたるものとも云はまし。昨日の君が態度の如きも、如何に解くべきか。冷酷は尙堪ふべし、輕薄に至りては終に堪ふべからず。われ獨り居て君を想ふ時、毎に君が早く死すべきを思はざる能はじ。君は若くして死ぬ人なり。君の如くにして何時迄か

生くべき、何時迄か生くべき。」

それを手帳から引裂いて、小さく巻んで衣袋へ入れた。間もなく神戸の話が濟んで、皆が又椅子を火鉢の周圍へ引寄せようとした時、要吉は何気なく朋子の名を呼んだ。

「はア」と言つたまま、朋子は立停つた。

「あの先達てお訊ねのダンスマンチオですが」と、要吉も二三歩近附いた。

「ダンスマンチオの？」

「彼處は大抵斯ういふ意味だらうと思ひますが、今一寸書附けて置きましたから」と早口に言つて、紙片を朋子に手渡した。

朋子はそれを受取つて、黙つて頭を下げた。一寸神戸の方を振り回ると、最う他の女生徒を相手に今度の演奏會の話をして居た。要吉もそれに加はつて、少時雜談に耽つて居た。何と思つたのか、朋子は少し用事があつて急ぐからと、一人先へ戻つて行つた。

神戸は座談に長じて居た。特に自分よりも劣つた者を相手にする時、其成功は日ざましかつた。常に好んで未來を語つたけれど、心は飽きず現在に繋がれて居た。それが爲に、餘り目前の効果を収めることに焦躁り過ぎる嫌ひはあつたが、其少し落着きた顔に、紅を潮して、自分の言

つてることに確信を持つてるやうな聲で語り出すと、聽手は唯酒にでも酔はされるやうに見えた。殊にそれが若い女であらうものなら、神戸は一層眞面目に成つた。苟も婦人の前で冗談を言はないと云ふのが、日頃此男の格好であつた。

此日も西の窓に日影が薄く成る頃、やつと散會した。神戸は小使を呼んで、跡の掃除を爲せる様に吩咐けて置いて、要吉と一緒に教會を出た。水道橋まで來ると、

「何うだ、最少一緒に話さう」と言出した。

要吉は黙つて其意に従つた。八通りの少い飯田河岸から、外濠の土手に添うて番町の方へ歩いて行つた。途々神戸は毎も口々に「時代が悪

いといふ話を仕出した。思ひの儘に自己を發揮することの出来ないのは時代と自分との關係が悪いんだ、自分が悪いとは如何しても思はれない、又思ひたくない。斯んな話から、如何しても雜談を經營して見たいと言出した。「批評」といふ題で、一つ純批評の雜談が拵へて見たい、極手薄な物でも可いから、内容のしつかりした、何人もそれを讀まずには居られない、縦し讀まないにしても、見得にでもそれを購ると云ふやうな、それ位な力ある雜談にしたい。

それから未だ其雑誌の経営について、誰に書かせるとか書かせないとか、實際そこに行を採へたやうな委しい話をして居たが、急に墨子を落して、「これも僕のことだから計畫だけで、何時實行するかも分らないが」と、自分で自分を嘲る様に言つた。

「左様さうと、要吉も解、受けて、一片手に戀をして片手に仕事をするのは其と難かしい。トルストイが言つたといふぢやないか、そんな丸魔なしに戀をするのは解するに限るんだと。」

「トルストイの言ひさうなことだと、言つたが、神戶は何か想出したやうに、「ね、吉野身子は此頃彼方で分絶したと云ふことだね。」

「へえ」と、振返つて、相手の顔を見ながら、「随分病身だつたと云ふぢやないか。」

「病身だつて子供を生まないとも限らないさ、君は時々面白いことを言ふよ。だが、子供を産んだが爲に健康が弱るのが健康に成ることもあるとは云ふね。それからだん／＼肥立つて、顔太に成つて、意外長生きでもされたら——」

「そして君は自分も美しかったと云ふことも忘れて仕舞ふに成つたら——少し悲惨だね。」

「君が云つて、二人は君を見させた。雑誌に上つた貞子といふのは、一昨年三人の名で歌集總

衣」を出した中の一人で、一番若く美しく、そして一番先に人妻と成つた女であつた。

「で、何かい」と、要吉は相手の顔を見詰めたまま、「彼一人の——彼人は矢張京都に居るのか。」

「左様だらうよ」と言つたが、神戶は一寸空を見上げて、「仰てるだらう、え、君は左様思はるか。」

「三枚子にかと、少し苦ひ難い顔をした。

「君は一々について見るから不可い、ばつと映つた顔全體の印象さ、あの派手な趣味も似てるぢやないか。」

「左様言へば、左様さね。」

神戶はなほ三枚子について、いろ／＼語つた。そして最後に、

「斷うして、君に話して此處に戀を再現すれば、直接接觸して居る時と、殆ど同様の享樂が得られる所ぢやないか、君々の戀は如何しても裏切られたね。何うも眞面目とは云はれない。」

「眞備左様だと言つたが、要吉は未だ自分のこととは一言も云つて居なかつた。人に語るには、餘りに手取ない戀である。

「君は連日電車で奥山に逢つたさうだね。」

要吉は一才女達の顔を見返したが、一逢つた

よ。」

「何でも有り難草を逢さに逢んだのを見て居たさうだよ。」

「一輛草三本」と云ふ題で短篇を書かつかと云つて居るんだ。」

「さ、書かれても仕方ないかも知れないね。」

「それから、これは何日か君の言つたことだが、昔の纏絆を絶つたために新しい纏絆をつくる」と云ふことが、あの仲間で迄頭達行つて居るだよ。」

「僕はそんな事を言つた覚えはないさ。」

かう言つて、要吉は苦笑ひに終らした。

二十二

朝くる日の朝、家の中は森として人氣もない様に見えた。

源江は音を立てぬ様に窓と障子を開けて、陽の上に膝を突いたまゝ、及び腰に一封の郵便を枕元の新聞の上に置いた。其新聞の傍に手を掛けて、少時長人の髪を見詰めて居たが、喚び起したら又冷やかな眼で自分を見られよう、左様思ふと、膝さへ掛けられない。何だか張合の無ささうな容子をして、徐々と障子を閉めた。それが障子へても言つて行つたものらしい。表の街には、午の豆蔵屋の囀が彼方にも

此方にも聞えて居た。

「此女も黙つて苦しんで居る。俺のために、黙つて小さい胸を布めて居る。」

要吉は遠ざかる足音を聞きながら、心の中で思つた。先刻から寝た振をして、彌江の素肌を一々見て居たのだ。尤も苦痛と云つた所で、此女に相應した取柄もない不安に過ぎなからう、此女を慰めて、其苦痛を除いて遣る位のこととは譯もない。それだけの事すら自分が住んで居るんだ。が、愈じそんな事をするのが却て殘酷の極にも、可哀想の極にも思はれる。それで是迄も打拵つて置いた。彌江に取つては、斯うして何とも言はないで忍んで居るといふことが、一番此女の身に適つたことかも知れない。それが最も好く此女の美しい所、尊い所を發揮するのだ。自分はそれを知らぬではない。恐らくは當人すら思ひ及ばぬ程に認めもし、同情もして居るんだ。それだけでも彌江は離いられて餘りあるではないか。——要吉は斯んな論議の不當なくとも、爲我一點張であることも氣が附かぬではない。時には自分がエゴイズムの化身でも有る様に怖ろしく見えることもある。が、自分で自分が安心するためにも、何處迄も此理窟を押し通して見ずには居られない。

で、頭を上げて見ると、手紙は誰から来たといふことが直ぐ眼に着いた。

先生、私歸宅を急ぎそはしくと歸りしこと可訝しと御覽遊ばされてか。「これはあのダンマンチオの」と、先生の御手より白き紙片の我手に落ちたる時、我胸の中にては「否々」と響き候。其大騒ぎの中より「何ぞ御座います」と再び御問ねいたし候時、先生は又ダンマンチオの」と仰せられ候。「否々」と、私は底四角に頭を下げて御覽いたし候。傍には神戸先生あり、岡部姉其他あり、眞ありと思召してか。私一刻も早く家に歸りて聞きて見たく成りし故にて候。人は冷徹とも不貞操とも不貞面目とも云はゞ云へ、最早私には何等の痛痒なし。さはれ、先生の御辱よりは決して二度とは云はせまじく候。冷徹は尙忍ぶべし、輕薄は堪ふ可からずとは、私より申出たき言葉に候。私の冷徹なるは事實上候。時には輕薄なる言葉さへ、仕打さへ、ひよい／＼と出ることも能く承知の上にて候。されど先生だけは、よもそれを咎

め給はじ、寧ろ如何にして斯く成りしかを覆れみ下されても然るべしと存候。辯解を好む者には候はねど、先生に對してはお願兎くとも他迄辯解もいたしたく候。自分以外の總ての物に興味を失ひし絶望の結果はインデファレントには候はずや。何が何でも、如何でも好く成りしに候。若し私の仕打に輕薄とも見ゆるものあらば、此如何でも好い一の形を變へたるものに過ぎず、今後は又かゝりでも御注意下されたく、私全く知らぬ間に意味もなく口を洩れ出づるものに候。

翁ては普通以上に自信心強き者なりしも、今はそれさへ用ひ盡して既に死せる針金に候。情たき者に候。斯んな矛盾だらけの私、生涯自らやり外なる人に解されむこと夢にも想ひかけざりしに、今宵の如く苦痛に感じ候こと、生れて初めて候。多分初めの終りなるべく、過去二十年の無意味なりし生涯も、今にして思へば生甲斐ありしよと涙も浮び出で申候。内に向つて流るる涙は我ても覺めても絶えざりしに、近頃はそれが落けて外に出づる様に成り

申候。

さは云へ、不慮は自らも堪へしもの候。矛盾に矛盾を重ねては終に無に歸する外なく、こゝに至つて、私は却て心持好く感じ居り候。無なり、空虚なり、我なく、人なく、思ふものなく思はるゝものなし。空しくピヨントの境なり、思惟の外なり、無縁を絶せり。それが好く候、それが好く候、それを我れ握れりと思ふ思ひに生き申候、私の最後の興味は涅槃寂靜の日に繋がり居り候。此日を味ひ樂まむがために候、日夜様々な事を考ふるも、最後はそこに歸し申候。私に取りては死か唯一の解脱なることに残り居候。されば却々容易き事にては死するを惜しと思ひ申候、感るが如く死ぬるやうな不届に努へて見るだけでも可厭に候。却々来練多く、死に行く最後の我まて、肉も骨も無塵に成りて散らし盡す滅盡の真境まで、解に見開けて味ひ盡したる。今こそ斯くてあれ、来らむ其日を思へば、涙のに情のしくも覺えぬ。——我家滅の日に、やがて我が家滅の日と覺悟したまふ。解り候か立てば、我なが

ら何を書くやら覺束なく候、かしく。

要吉は思はずむつくり起上つた。更紗襦袢の夜着の上に、長く巻紙を捲けたまへ、何時迄も動かなかつた。胸の中は攻鼓を打つ様に動悸を打つ。因より女から受取りたいと思つたのは斯んな消息ではない。女はあらゆる方に逃し去つて、爾も尙自分に纏らうとするやうな風情を見せ居る。それがむづ痒い、胸足らない。只、此女の言ふことは、考へると同時にそれを實行しさうな氣勢が見える。思想が感情を伴つて居る。頭で考へるのでなく、心臓で考へる。尤も、此手紙にも故と誇大したやうな所がないでもない。それが幼稚にも狡猾にも見える。が、一たび此女の背後に潛む黒い影に想ひ及んで見ると——如何しても、此女は自分の手に自分の生命を操つて居る。何時でも自分は自分の主人で有ると云ふ自覺を持つて居るらしい。要吉は首を傾げながら、幾度か心の中も最後の一句を繰返して見た。我家滅の日は君が家滅の日と覺悟したまふか。——

やう／＼氣が附いて、平着に着換へようとした時は、一重の寢巻を透して、身體が氷の様に冷たく感つて居た。

二十三

其後一週計り経つた。要吉は圖書齋から歸途に大學の正門を出ようとする時、街一杯に砂塵を捲上げて、一時は向側も見えない。少時立止つたまま、風が通り過ぎるのを待つて居たが、偶と脚子の後姿が眼に着いた。五六歩其方へ隨いて行く。向うでも顔見せず、ずんずん足早に歩いて行くので、一町計り行つて漸く附いた。脚子は要吉を見ると、一寸足を留めたが、何とも言出さない。

「大學の前から隨いて来たんですと、おづ／＼相手の顔を見ながら言つた。

「些とも存じませんでした。」

女の舉動は何となく素氣ない。何時迄立つて居ても果しかないので、男の方から言出した。

二人は足を敷めて、別に談話をするでもなく、自分の酒鋪の前迄来た。要吉は此處でも別れる氣に成れなかつた。やがて人通りの少い町へ道入つた時、

「今日は如何して此方の道をお歸りなんですと、訊いた。

「自家から少し、お茶を飲まれましたからと、聖子は尋常な答をした。「それに、お茶の水の學校へ通つた時は、毎日此道を通つたんですの。」

其頃は女生徒の中の運動家で、テニスも選手であつたような。女子大學の家政科へ移つてからは、三年の間、毎日試験管作りばかりして暮した。それから寮舎の生活から校長の噂など一人面白さうに話をつづけた。要吉は俯向いたまゝ、黙つて歩いて居たが、不意に、

「何故と訊き返した。」

「何と申す、と、女は頭を上げた。」

「いえ、唯貴方がね、試験管いぢりが所好だと云ふこと——それが如何云ふ理由かと思つて。」

「え、それは、あんなに結果が精確に出るものはないから——」

要吉は何か言はうとしたが、思ひ直して、其儘を背向けた。此女は何を試験管の中へ入れて動して見たので有らう。此女自身である。此女自身の魂である。此女は自分の魂を試験管の中へ入れて、あからめもせず、擬手と其反應を見守つて居るに違ひない。其結果は如何成る！ 狂人だ。狂人でなくとも、狂人に成る外に行く道はない。

「か、二人は、つちや場の土迄来た。要吉は黙つて帽子裏の方へ手を向けると、帽子も何とも言はないで隨つて来た。漫ろに往き行いて、谷中の五重の塔の下から日暮里へ出ようとする、薄暗い木下路の坂へ差しかつた時、

「先達のお手紙は誰に頂きましたと、要吉は思入つた様に言つた。少時黙つて歩いて居たか、又言葉を一つつけて、「成程、二人の行く道は並行して居るかも知れない。が、それだけに、何處まで行つても出逢ふことは有るまい、ね。」

「え、私ね」と、朋子はぐるりと表向いた。「お友達の中に疾うから先生に御紹介したいと思ふ方が一人有るんですよ。其方はそりやア面白い性格で、政茂先生のお相手が出来るに違ひない。」

何を——何を言ふのか。要吉は思はず相手の顔を見返した。此女は自分が何を求めて、此處へ来たと思つて居るのだらう。あの顔、あのはいやいだ顔——矢張り自分を調戲つて、外らかつて仕舞ふ了簡かも知れない。が、此方の心持が眞面目なだけに、何だか要合ひのない心持がした。二人は又墓地の下の線路を横切つて、日暮里の通りへ出た。と有る牛舎の欄手から小徑を傳

つて行くと、田舎の中へ、「兩志庵」と稱する自然木の蔭を擡げた小門が有る。朋子は其扉室に女達が居るから奇らうと言つたが、何となく気が通まないから止めにした。庵室の裏から三河島へ響け、と、ころん／＼に腐つた檜の斷柱が幾つて居る許りで、荒れ果てた田野の中には眼を垂るものもない。二人は畦道を傳つて歩いた。朋子は幾度か下駄を泥濘に嵌み取られたり、折角来ても袂い濡れたために半町餘も後戻りを爲せられたりした。

空は薄曇つて、午後一睡頃の斜い日影が射して居た。遠くから見れば、二人の影は夫婦のやうに纏れたり、離れたりした。海岸線の鐵道線路が向うに高く見えて白く塗つた柱の横木が下つて居る。汽車が停車場へ着くのであらう。

二人は兎角して線路の上へ出た。

少時其土手の上を傳つて歩いたが、踏切のある所から小路を辿つて、三河島の村中へ這入つた。車轍をしたやうな廓かな村である。少許行くと千住へ通ふ往還へ出た。それに隨つて又少許行くと、道が二又に岐れて、其角に石の地藏尊が立ててある。何心なくそれを左へ取つた。村を出離れると、淋れた田圃の中を一筋真直な道がつゞく。道の盡くる所に一櫓への目に着く

やうな他物があつて、本棟屋の古い煙突が屋梁の屋根から突出して居る。要吉はそれに眼を刺けたまゝ、  
「火葬場でしたね。」  
「え。」

二人は目じるきもせずそれを見詰めたまゝ、其方へ足を運んで行つた。此不吉な他物は此寒い日の此寒さうな四邊の風物と相應して、何事かをしめし合せて居るやうに見えた。

其時背後から一攫黒塗の籠が来て、二人を追越して前へ出た。それに續いて二三臺の脚車が行つた。何れ身寄の者を挽きにかけて行くのであらう。人足は息杖をついて、足の續くだけせつせと歩いて行く。脚車は見る／＼遠ざかつた。急に地から湧いてでも出たやうに、ぼらぼらと乞食の籠が飛んで来て、此一行を取巻いた。しばらくは脚車と一踏に成つて、何處までも隨いて走つたが、其間一人後れ二人後れして、一行は驚なく白く滑つた火葬場の門をくゞつた。

二人はそれを見送りながら、別に何とも言はなかつた。偶と見事に物乞ひの籠がする。見ると水漬れた黒い襦をかけた男が、故と不具の足を露出して、顔にまろく白い紗を着けながら、虞の満つた籠で人を眺ぶ。要吉は手早く紙

入を出して、籠を其前へ投げて遣つた。其籠行かうとすると、又一入老婆の乞食が物憐れな聲で強説りながらくつゝ一来る。指が三本しか無い手を此方の身體に纏る迄差出して、顔に頭を下げる。要吉は胸が怒く成るやうな思ひをしたが、又婦人から小銭を遣らうとすると、急に前の老婆を押退けて、他の奴がそれを奪つて仕舞つた。老婆は嘔み罵くやうな聲を出して、前にも増して執拗くせがんで来た。要吉は仕方がないから又出して遣つた。それを見ると、前に腕に腕つて居た乞食の籠がわつと一踏に成つて押寄せて来た。

一彼方へ行きませう、先生、頼いから彼方へ参りませう。  
朋子は泣聲を出した。二人は逃げる様にして横道へ反れた。二三町行くと、其處迄は流石に乞食も隨いて来なかつた。只、此細い路を傳つて行つても何處へ出られるか分らない。一歩毎に東京から遠ざかることだけは覺だけれど、要吉は裏う一度振り返つて、火葬場の煙突を眺め遣つた。人を畏く嫌は未だ出て居ない。

「ね、阿蘇の噴火口へ」と言ひかけて、側に立つて居る籠子を見た。  
「え」と、女は乾いだ唇を開く。

「彼處へ身を投げると、見る／＼人間の身體が灰に成つて居るといふことですね。つまり自然の儘に捨てて置けば、三年たり五年なり掛つて行はれる分解作用が、僅に五分間に行なれるといふんです。」  
朋子は只黙つて居た。要吉もそれ限り何とも言はないで、又歩き出した。

路はうね／＼と曲り紆つて、又時の瓦屋根が向うに見え出した。成るべくそれへ近寄るまいとしても、二宮家は次第に其方へ迫らうと、やがて千住大橋の袂へ出た。此街道は都管と田舎とが直交接する所に、眼に見ゆる物の色が皆日に曇せて、何處やら臭い。橋の上に立つて、どろ／＼した水の面を眺めて居ると、荷車の通る度にゆき／＼と橋板が揺れた。昔から渡人引汐と見えて、水は芥を泛べたまゝ、ずん／＼下へ流れて行く。此水を五分間つゞいて眺めて居たら、此處其中へ引込まれて運ばるに違ひない。

要吉は何か言はうとして止めた。  
二人は橋を渡つて、青物市の立つ北千住の町へ這入つた。午過ぎの市場ほど氣の抜けたものはない。只凸凹した街の上に、一匹の野良犬が尾を垂れて走つて行くのを見かけた。町の中程

から左へ折れると、荒川堤の上へ出た。土手から河面まで四町許り、一面に枯れた蘆が生えて居る。

二人は風に逸つて歩いた。自づと眼に水が溜る。

「土手の下へ降りませう」と、要吉は風上から背後を向いて言つた。朋子は手に持つた包みを騎して、風を避ける様にしながら、何か言つたらしいが、言葉は唇から風の爲に吹きちぎられて能く聞えない。

要吉は堤の小段迄駆け下りて、黄色く枯れた草の中に腰を下した。朋子もつゞいて降りて、其側に小さくしゃがんだ。土手がくの字に曲つてるので、此處だけは風も通らぬが、前はざわざわと騒ぐ蘆の葉擦れの音が絶えない。それが皆生きてるやうに思はれる。自分達と同じ様に考へて居るんだとも思はれる。只、何故とも知らず怖ろしい。

朋子は真直に自分の前を見詰めて居た。鬢の毛が風にそよけて、唇の色が満んで見える。要吉はじろく女の横顔を見遣りながら、幾度も言出しかけて見えては止めた。何だか女の方では男が傍に居ると云ふことも忘れて居るらしい。だん／＼男の心の中には、楯の火から薄

い顔が居る様に嫉妬の念を生じて来た。あゝ息が塞がるやうで堪らない。何れにしても、吹く風の中で泳ぐに應はしい女だ。闇の中で泳ぐに應はしい女だ。

「私は初めて、やゝ有つて、要吉は重い口を開いた。「私は初め貴方の心を自分といふもので充したと思つた。それが私の此世で抱いた一番大きな望みだつた。併し最う其望みも捨てました。」

斯う言つて、口元に淋しい微笑を浮かべながら女を見た。又言葉が続けて、

「ね、私は最う貴方に愛して貰はれようとは思はない。如何して貰はなくとも宜しい。唯、これから貴方のために私が如何變化して行くか、それだけを見て居て下さい。ね、見て居ると言つて下さい。」

要吉は聲に成つた。涙含んだ眼に、凝手と相手の返辭を待つて居た。女は少時もぢ／＼として居たが、やがて、

「今は見せて置きます。」  
「今は？ 何故左様ですと、要吉は詰寄るやうにして、「今はでなく今はだけ取消して下さい。」  
「それなら皆取消します。」  
要吉は無言で女の顔を見詰めた。其儘長い草

の中へ仰向けに倒れて仕舞つた。

朋子はそれを見送つたまゝ、別に介つて呉れようとは仕なかつた。こんな田舎廻りの役者めいた表情に依つて、女の心が動かされようとは男の方でも思つて居ないが、假令言葉や素振に虚偽はあるにしてもこの心持！この造りのない心持に虚偽はない。何故この心持が素直に眞實の儘人に傳へることが出来ないのだらう。

若しそれが如何しても出来ないといふれば、左様云ふ約束を持つて生れて来たといふれば、眞個一人置いて行かれたやうな気がして心の底から淋しく成らずには居られない。

要吉は起直つて、久らく俯向いたまゝ黙つて居たが、やがて投出す様に、一え、貴方が見て下されなければ、私が見せるまでです。」

又言葉は途切らした。やゝ有つて、「あれは如何いふ意味です。最後のお手紙の一番終ひの所にあつた、あの一句は？」

朋子は一寸相手の顔を見返したが、又其眼を反して、「あれは唯あの時あんな事が書いて見たかつたのです。」  
「ぢや、あれもあの時きりの話ですね。」  
それには返辭をしなかつた。日頃言葉少くない女ではあるが、今日は殊に初めから口を噤んで

堅く自分を護らうとして居る様に見えた。二人はそれから半時間餘りも草の中に坐つて居た。其間風は止んだが、それ迄薄い暮を張つた様な空に太陽がぼんやり圓く見えて居たのも、何時の間にか隠れて見えない。

「歸りませうか」と、要吉が不意に立上つた。「え、」と女もついでに立つた。

「まだ何か言ひ残したやうな、物足りないやうな心持もするが、斯うして二人一緒に居た所が如何にも成らない様に思はれて、迄々談話もなく、さりとて急ぐでもなく、やがて北千住の停車場まで来た。此處で又小一時間待つて、漸と汽車へ乗込んだ時には、硝子窓に細かい雨滴が間を置いてばらばらと斜めにかゝるのが見えた。

上野の停車場を出ようとすると、日が暮れかけて小雨がしと／＼と降つて居た。胸車を備つて、硝子を先へ乗らせたが、車夫が容赦なく幌を下げるので、や、俯向き加減にした女の顔が見えなく成つた時は、何だかそれが消え一行く様に思はれた。二臺の胸車は池の端迄来て、雨の中を右と左とに別れた。

其夜要吉は雨の音を聞きながら、ひとり机の前に坐つて居た。別れて見ると、何の事もな

く唯ほひたい、顔が見たい、聲が開きたい、息が停る程……。今日自分が硝子に對して言つたこととや偽たことは、今に成つて見ると皆心にもない虚偽ばかりの様な氣がして、それが藪草い。今度逢へば決してあんな事をして、あの様にしては別れない。左様思へば、如何しても今一度逢ひたい。逢はずには置かない。要吉は直に巻紙を舒べて、言ひ残したことがあるから、是非今一度逢へる様に都合して貰ひたい、時と場所とは選ばない。返辭さへ来れば、何時、何處へでも行く。それ迄は唯此儘斯うして坐つたまゝ返辭の來るのを待つてると書いた。それを持つて夜深に雨傘を翳して、角の郵便筒迄入れに行つた。

二十四

明くる朝雨は上つたが、空は未だ霽れない。要吉は午前中自分の藩屋に閉ぢ籠つて居た。午過ぎ別に行先を告げないで、ぶらりと戶外へ出た。毎もの水道橋へ出て、漆に添うて下つて、お茶の水から萬世橋を経て、橋をもう二つ渡り見たが、急に戻りたく成つて、其處に居るよほどよへんさんの禿ちやけた胸車に乗つて歸つて来た。家では隅江と小母さんと二人して着物の綿

を入れて居た。小母さんは肩に眞綿をくつつけ

たまゝ出て来て、茶箱の上から手紙を取つて渡した。故と其前封を切つて見ると、

「本日午後四時に上野公園西端御嶽の下まで御遊ばせ下たく、かねて淺草の親戚へ參る筈に成り滞り候へば、其前には如何しても時間的餘裕これなく、早々。」

今は最う四時を餘程過ぎて、五時に近い。要吉は手紙を持つたまゝ、慥かな聲で、「これは何時頃着いたのか。」

小母さんは返辭をしたかつた。隅江は小母さんの顔を見て、「一寸ためらつたが、

「貴方がお出掛けやアすと直きでした。」  
「左様か」と言つたまゝ、要吉は手紙を袂へ入れて、又下駄を穿いて出掛けようとした。隅江は只唇かぬ顔をして、それを見送つた。

要吉は上野の入口で胸車を降りて、石段を登つて行つた。日の短い頃ではあるし、空模様も怪しいので、竹の藁は掃いた跡の様に人影もな

い。それでも是の向いたまゝ、銅像の下まで行かうとする。背後から呼ぶ者がある。振り返ると、それが朋子だつた。何時になく綾織のコートなぞ着て居たが、何を急いだのか息を喘ませて早る。

に合はませんでしたと、背後を振り返つて、二、三丁度そこで先生をお見掛したのです。」  
「身でしたか」と、要吉も冷淡に言つたまま、黙つて考へて居たか、一それぢや、兎に角御家の方へ歩いて行きますせう。又遅く成つても不可せんから。」

二人は荷物置の前へ出て、谷中の露場から隅子坂の方へ行く道を取つた。途中で隅子は着て居るコートを引取りながら、

「可笑しいでせう、袴を穿いて斯んな物を着てるから。私一人です。」

「昨日お風邪でも引いたのぢや有りませんか。」

要吉は在外前日に言つた。隅子は左様だとも左様でないとも言はなかつた。やがて圓子坂の方へ曲る所迄来たが、それを曲らないで、何とはなしに雨具に松の生えた間かな道を五重の塔の下迄行つた。又踵を回さうとした時、要吉は靴で引添うて居る女に靴を背向けたまま、一私は昨日貴方に別れてから、如何しても堪へられなく成つた。堪へぬ、堪へぬ。私は、私一人でも貴方を山氣したい。貴方に愛されたい。貴方の眼に私と外の男との間に區別のない様なことは地味も堪へられない。」  
斯う言つて息をつきながら相手の返辭を待つ

た。隅子はたゞ黙つて居る。二人は茶屋の裏まで来て、根岸へ長ける路を左へ取つた。暮地の中は木の葉送じめ／＼として薄暗い。頭の上では、大きな星が一つ少の途切れに光つて居たが、間もなく消えた。二人はそれを見なかつた。

一ね、先生はこんな様な経験がお有んなさいませんか。隅子が不意に言出した。

一え、と、要吉も返つた。一何んな経験。」

一夜など、一人で坐つて居ると、回邊かきりさりと海の底の様に、左様すると、今迄混沌とした頭が一時に爽やかに成つて、眼もほつきりと物の裏透見える様に成る。」

要吉はぎくりとした。此女は何を言ふぞ。彌

彌の發作前には好くそんな麻痺を見るものだとはドストイエフスキイの小説でもたび／＼讀んだ。が、此女にそんな病が――

一ね、ソリヤアと、少時して訊いた。一自分で取と左様しようとして左様成るのか、それとも自然に成るのか。何方です。」

一何方でもと、女は男の側へ寄添ふ様にして、會日はわざと左様したのが、今では自然に左様成る様に成つた。自然に左様成る時は、發

詩それに抵抗しようとしても方が及ばない。一

一ふむと要吉は吐息をついた。成程、如何かす

ると、此女にはそんな病氣が有るかも知れない。が、併しそれが何だ。要吉に取つては、女の身の上よりも自分の身の上である。何時迄もそんな事を考へては居られない。

一愛させる／＼、何處迄も愛させる」とやがて自分と自分に言ふ様に言つた。一私は斯うして此

様に貴方を思ふのか、貴方の前に新しく跪くやうな氣はしない。今迄奪はれて居たものを取返すやうな氣がする。」

又、二三歩行つて、一だから私の戀は復讐だ。痛切な復讐だ。」

路は僻處へ這入つて、いよ／＼暗い。辻の常

夜嫁が赤く見え出した。要吉は前に立つて歩いたが、折々隅子の足音を聞えない様な氣がして、

返つて見ると、直ぐ背後へくつついて来て居る。其儘又向き直つて歩き出した。

一此戀を今初めてするとは思はぬ。一度有つたことを繰返すやうに思はれてならぬ。それか此世で有つたことぢや無いかも知れぬが、生煎或

因果の鏡で斬られた、其因果を今果して居る、

それでなけりや、斯んな冷動な――どうせ無駄と分つて居ながら、斯んな苦しい戀を繰返した

けりやならぬ筈はない。情ないやうだが、私は

貴方に對して最う嫉妬心さ――持つ様に成つた。

それが何だか正當な道理がある様に思ふことさへある。

御院殿の坂を降りて、其下の踏切を越した。

其處に毎も波瀾張りの茶店があるのが、今度店を仕舞つて、襦袢も伏せてある。二人は立寄つて、紫花に腰を下した。雨の降つた後で、板が湿々する。

要吉に何時迄も物を言はない。

折柄上り列車が人の群を踏するやうな、氣味の悪い音を立てて、二人の顔に生暖かい息を打附けながら通つた。

汽車の音が長く尾を引いて、森の彼方に消えた後は、一しきり響物の通つた後のやうな沈黙がつづく。女は石の様に黙つて居る。要吉には、それが自分ならぬ者の者。恐らくは此間ならぬ他家の者と、他人には言らない會話をひそひそと續けて居られる様に思はれて、堪へない。

いよいよ此女に遺毒も罪みも添てなければ成らぬかと思ふと、胸は大きく探へられたやうで、只救う手無らしく其處に泣き倒れない。

二人向ふことも出来ない、私は如何することも出来ない。

要吉は胸へ通つて、手と女の頬を掴みながら、

貴方は何を言ふたかと言出した。貴

方は私を騙した、止まきだと言つた。貴方は如何しても私を愛するんだ、愛せずには居られないとも言つた。要吉は肩を擦されたまゝ、顔に男を見送した。味着いた襦袢の下に、獺の色に濡くも分らぬが、男の顔にかゝる女の息は火の様に熱かつた。

一貴方は私を愛するんだ、愛せずに居られぬやうに

要吉は長柄杓を繰返した。

一私は覺悟しましたと、要吉は初めて口を利いた。手早く包みの中から短い小刀を取出して、要吉の手に握らせた。

一これで何處でも可いから、私を殺して血を吸つて下さいまし。それより外に、兩人が一つに處る道はありません。

要吉は小刀と一絡に女の手を支へたまゝ、少時物が言へなかつた。肉を裂いて血を吸る。趣味としても可厭な趣味だ。一種の偏狂かも知れない。

一そりやうなほやく女の手を持つたまゝ、一そりやうに、一響に死ぬことか。

響を言つて要吉は女の頬を先づ刺して見たが、

一響に死ぬ。貴方が同じ理由でなう死に得る。

響し貴方は貴方のために死に、私は私のために死ぬ。そんな事は誰も堪へられない、そんな事

が、私と貴方と、同じ理由で死ぬて呉れるか、同じ道に来て呉れるか。

女に俯向いたまゝ、何時迄も返事をせぬ。それをみると、要吉は心の底から女に對して憎惡の念を持たずには居られなかつた。如何して、此女を如何して呉れよう。かうして血を吸いたまゝ、自分か手を下した、女の死體を前にして、突立つて居る自分の姿が明々と眼の前に浮ぶ。血に染れた髪の色が顔にねばり着いて、顔はまだ生命が去つた許りで生けるが如く見えるが、響はだけは氣味悪く震んで居る。

要吉は響を透して女の顔を見定めようとした。

一やうやうなほやく女の手を持つたまゝ、一そりやうに、一響に死ぬことか。

響を言つて要吉は女の頬を先づ刺して見たが、

一響に死ぬ。貴方が同じ理由でなう死に得る。

響し貴方は貴方のために死に、私は私のために死ぬ。そんな事は誰も堪へられない、そんな事が、私と貴方と、同じ理由で死ぬて呉れるか、同じ道に来て呉れるか。

「先達ての晩も、最少して方々へ使を出す所でしたから、今夜は先生のお宅へ最う母が参つて

るかも知れません。」

「阿母様か？」

「え、上れば母が参ります。」

要吉は黙つて二足三歩を移した。朋子も後

から隨いて来た。

「私の様な者が——これ迄家に居たのが間違つ

てるんですから仕方ありません。」

坂下の新道へ曲る角迄来た時、要吉は立停つ

て、凝乎と女の顔を見守つて居たが、

「何處かへ、何處かへ行つて仕舞はうか。」

朋子は頷いた。

何處へ行く。唯都の外へ出たい。懐中に持

合せもないが、錢の存るだけ汽車の切符を買つ

て、出来るだけ速く東京を離れたら、汽車を

降りると、直ぐに海行せずには居られまい。

女が頷くのをを見ると、要吉は自分にも考へる

追を與へないで、根津の新道を前へ急ぎ足に歩

き出した。夜も深けたらしく、街の上にも灰白

う霧が降りて居るが、人通りは割合に多い。二

人は其中を縫うて漫ろに歩く。

要吉は濃い夢の中から見ると女を見詰めた。

「今夜は歸りますが、何うせ自宅には置きま

まいから、明日の朝王子に居る友達の所へ、一

時遊つて貰つて、正當に家を出るやうに計ひま

す。」

「それぢや——え、左様成さる方が可いでせ

う。」

二人はしばらく顔を見合せたまゝ、途の上に

立つて居た。其儘、又踵を回した。

王子に居る女の友達といふのは、朋子が唯一

人持つて居る友達で、一私のためには何んな事

でもして呉れる、此女なしには私は手も足も

動かせない。で、若し其友達の許へ引取ること

が出来たら、直ぐ知らせるから送つた上で何と

でも爲よう。手紙も其友達が取次いで呉れる。一

途々朋子はこんな話をした。要吉は黙つてそれ

を聞いて居た。

土居の松林の蔭まで来て、二人は急に立停つ

た。

「ぢや、最う歸りますか。」

朋子はうじ／＼して居たが、「ね、先生、此儘

お目に懸れなく成つても、又出られるやうに成

要吉はそれには返辭をしなかつた。一貴方が

死ぬ時は——何日でも好い。乾度私と二人き

りの所で死ぬと約束して下さい。私の胸の上

で死ぬと。」

折病人の近づく足音がした。朋子はさと別れ

て其方へ近づいた。自宅から迎への人と見えて

何か二言三言言葉を交した上、連れ立つて歸つ

て行くらしい。要吉は「傷いた鹿」のやうに樹蔭

へ近れ去つた。

丸山の家へ戻つて、表の戸を開ける迄要吉は

唯今日の續きはかり考へて、今日の一日を振回

つて見ようとはしなかつた。しばらく上り板に

突立つたまゝ待つて居た。茶の間に灯火が點い

て居るまゝで、家中寂として物音もしない。や

がて障子を開けて、何気なく隅江が出て来たが、

送つて、「お歸りなさいまし」と言つた。

障子の外から茶の間を覗くと、小母さんは眼

を上げて一寸要吉を見返したまゝ、黙つて火鉢

の前に座蒲團を直した。何かに氣に障つた事か

あると、物を言はないのが此女の癖だ。要吉は

中へ滑入らないで、其儘自分の部屋へ戻らうと

した。

るぢや有りませんか。のそ／＼女と一緒に彷徨  
き廻るなんて、身を持つた者のする業ぢやアな  
い。」

要吉は一寸立停つたが、何とも言はないで自  
分の部屋へ戻つた。隅江は後から洋燈を持つて  
這入つて来て、机の上に置いた。それから留守  
中に来た往復封書と封書とを要吉の膝の前に差  
出した。再び立つて行きしなに、

「あの、毎日の家のお酒を持つて参りますか。一  
「うむ」と、要吉は頷いた。近頃癖が悪く成つ  
て、寝る前に強い酒を飲まないと容易に寝附か  
れなく成つた。

隅江が去つた後で、手に取つて見ると、往復  
封書は書庫の期待状で、封書は故郷の母親から  
の手紙であつた。其方は封を切らないで下に置  
いた。故郷から手紙が来る毎に、一晩位は封を  
切らないで延ばして置くのが常であつた。餘り  
に自分の身に近いことは、好い事でも悪い事でも  
聞くのが怖ろしい。

間もなく隅江は盆の上にウキスイイと懸した  
青團扇を載せて持つて来た。良人の常ならぬ顔  
色に氣附かぬではないが、何事に依らず自分の  
方から訊ねることの出来ない女だけに、彼を前  
に据ゑたまふ眼の上に手を置いて、何時迄も黙

つて坐つて居た。

「若し今夜あの儘で歸つて来なかつたら——」  
要吉は心の中で想つた。固より半ば空想で夢  
の中を往來して居た様なものであるが、それが  
又如何しても取返し難かぬ重大な事件の様に  
思はれる。自分の居なく成つた後で人々の周  
章てるさまや、其後長い一生の間、隅江がみ  
じめな生活を送る姿がまざ／＼と眼に泛ぶ。自  
分が手を下して自分と自分の周囲の者との前途  
を暗黒にして行く。これが如何しても免れぬ自  
分の約束かも知れない。

「お酒、注ぎませうか。」  
斯う言つて、隅江は瓶を手に持つた。  
「酒ごと、要吉は夢から醒めたやうに、今迄残  
酷な想像を擲いて居た女、顔を見詰めた。一酒  
なら、今夜は最う止さう。」

隅江は瓶を下に置いて良人を見上げたが、目  
頃から大きな眼が瞼を持つた爲に一瞬大きく  
見えた。毎時の事で慣れても居るから、隅江は  
其儘何とも言はないで盆を下げようとした。髪  
も油氣が凝り、手前が健さうに見える。

「お前、何處か加減が悪いのか。」  
「い、えと言ひかけたが、「はい、少許——」  
「大切にしないと不可いよ」

女は俯向いたまゝ、ぼたりと一雫大粒な涙を  
瞼の上に落した。其儘盆を持つて出て行つた。  
家族は主人の出来心の犠牲とせられべきも  
のではない。思へば、要吉が妻の手に觸れなく  
成つてから最う幾月だらう。今度隅江が這入つ  
て来たら、突然其手を取つて顔中燃ゆるやうな  
唇を押附けて遣らうか。審判が分らなく成つ  
て聞訊々々することだらうが、又何んなに喜ぶ  
ことで有らう。あゝ、此女の息が詰つて着く成  
る所が最一度見て遣りたい。

斯んな勝手なことを想像しながら、偶と机の  
上を見ると硯箱の蓋が開いて、其側に書き損  
ひの封筒が落ちて居た。何心なく取上げて見る  
と、隅江の手で宛名は自分の實家へ遣らうとし  
たのだ。要吉は可厭な心持がした。

### 二十五

昨夜は何處か身體の工合を損ねたと見えて、  
折々子供が夜泣きをした。隅江は徹夜眠らな  
つたらしい。朝氣が清んでから小母さんと相談  
した上、二人で子供を連れて、傳道院の小兒科  
の醫者へ診て貰ひに行つた。

其後で、要吉は一人留守居をして居た。生  
欠働が出て、何うやら自分も變不足らしい。机

の上に紙を突いたまゝ、ぼんやり障子の紙を見詰めて居たが、不圖案内の聲が聞えたやうな気がして激返つた。出て見ると、神戸が入口の障子の前に立つて居た。

「……這入りたまへ」と言ひながら、要吉は足を退いた。

神戸はフロックコート下の洋服の裏を窺つて居た。成程、今日は宣樂町の教會に宣樂會のある日だと思つたが、わざと歸つて居た。神戸もじろ／＼相手の顔を見守りながら、

「如何した、一人か」と訊いた。

「あゝ、昔者へ行つてね。」

「警者……」

「なに、昨夜から少し事件が悪いんだよ。」

「子供が——」

「不可いね」と言つたが、相手は餘り氣乗りのせぬやうな様子を見て、其儘口を噤んだ。

それから別な題目について、いろいろ話して見たが、毎時う様に談話がはずまない。如何やら互に勉と云ふ言葉を避けて居るやうな氣もした。それが神戸が洋服の膝をすらしながら、こんな事を言出した。

「何だね。他の者と向ひ合つて居る時に、かうして話が切れると、非常に窮屈に感じるもの

だが、君だけはを嫌でもない。これは戀人だけだね。戀人と一緒に歩いて居て、何かの地子に偶と云ふことがなく成ることが有る。そんな時は却てそれが好い。」

「ふゝむ」と言つたまま、要吉は返辭がつかぬかつた。唯俯向いて火箸を弄つて居た。

聞もなく、彌江と小母さんとが子供を伴れて戻つて来た。彌江は子供を抱いたまゝ、障子を開けて、一寸挨拶に顔を出した。神戸が暫切らしく子供の容態など訊くにつれて、「へえ、お醫者様ではなし、何やら言ひ掛けたが不圖要吉の顔を見返したまゝ、言葉を途切らした。そして冷えた茶碗を下げながら、そこ／＼に廊下へ消えた。

午後一時頃、午飯を済してから、二人は猿樂町へ出掛けた。空は拭つた様に晴れて、綿のやうな電話線にふくらむ雀が結つて居る。神戸は何と思つたか、要吉を道連れにする様にして、一僕ハスラして君を引張り廻すやうに、三枚子は毎も澤山を引張り廻して居た。澤山でないにしろ、自分一人で都合の悪い時は、屹度誰かしら一緒に連れて来た。

やゝ有つて、「あの女は今日來るんだらうね」と言つた許りで、要吉は來るとも來ないと

も言はなかつた。教會へ着いた時には、最も會堂に一杯の雅樂が集つて居た。女學部の主事は神戸の顔を見ると、

「貴方を待つて居ました。最う時刻ですから何卒開會の鐘を遣へて下さい。」

神戸はにや／＼笑ひながら演壇へ上つて行つた。

禮堂は大抵人ばかりで、一面に赤や黄や紫の色が揃いで、が／＼と賑めく物音と共に若い人々が立上つた。其中胸に細い花を着けた人々が周旋する。要吉は禮堂の中に突つて、ひとり隅の方に坐つて居たが、椅子に掛けたまゝ、地の底へ落ちて行くやうな寂寥を感じた。當に心の寂しさではない。身體までがずんずん滅入つて行く様に思はれた。

かく自分自身の中へ退き込んで、四邊の雑音を忘れて居る間に、歌臺の番組が演じられた。何の位時間が経つたかも知れない。急に拍手の聲が一瞬に起つた。眼を上げると、恰度今業がかけた激手な棉襦を着た退場、二たび呼び返されて、壇の上に立つて懸業に會

稽をして居る所であつた。それを見ると、今頃自分が如何してこんな處へ來て、こんな人々と



電車は幾臺も着く。直ぐ方向を轉換しては、又發車する。二人は倚架に腰を下したまふ、何時迄も動かなくつた。何だかひどく勞れたやうで、折々言葉が途切れる。夜が深けたのと、少し飲んだ酒が醒めかけたのとで、白い息も眼に見える様に、ぞくぞくする程肌寒い。

「寒いね」と、要吉が口を開いた。「眞何錢が無い様に寒い。」

「魂でも賣るさ。」

「左様」と、何やら考へて居る。

神戸はつく／＼相手の顔を見守りながら、「買手があつて、眞實に賣る氣だから君は怖ろしいよ。」

「ふん」と、要吉も鼻の先で笑ひながら、「併し凄いなね。魂の買手が来さうな夜だ。」

二人は言葉を途切らしたまふ、凝手と對岸を見渡した。ちらほらと電柱の灯がうつゝいて、深

の水は平に死んだものの様に黝い。

「君と、要吉は又友達を呼びかけて、一生きた

い、命が惜しいといふのが動物性本能なら、

死にたいと云ふのも本能ぢや有るまいか。何だ

か近頃そんな無理が言つて見たいね。」

「如何だか、動物は自殺しないよ。」

「だが、自殺するのも有るといふことだ。」

斯う言つて、うつそり笑つて居たが、「ま、本能が不可ければ、衝動でも可い。寧ろ藝術的衝動だと思ふね。だから、死ぬ奴には皆芝居氣が有る。一味の芝居氣なしぢや、何うも人間は死ぬるものでないらしい。スターン、リアリテイに壓迫されただけぢや——死なない。」

神戸は眞直に自分の前を見詰めたまふ黙つて居た。やがて、「君は如何だ。僕は近頃自分で

思ふんだが、何うも自殺すると云ふ患れは無く

成つたやうだ。そんな時期は最う過ぎた様に思

ふね。」

「さ、僕も左様は思ふが」と、まじ／＼相手の横

顔を見遣りながら、「どうも自殺する患れはな

い様だが、何だか他人から殺されさうな氣がす

る。」

誰に殺される？ 要吉はまじ／＼と女の顔を

眼に泛べて居た。が、わざと打消す様に、「それ

も愚い事で、何の因縁もた——」

「人違ひか何かでね」と、神戸は何氣なく笑つ

た。

一條り未練を出して、こたはつてると、何だか

其んな事で片が附いて仕舞ひさうにも思はれる

ね」と、少時して又神戸が言つた。「併しそれぢ

や何うも思ひ切れない。死ぬ時は矢張自分が世

間から捨てられたやうな心持ぢや死にたくないね。世間が自分が捨てられた様に思はせて遣りたい。ニイチエが癡狂院へ入れられた時は、世間がニイチエを捨てたのぢやない、ニイチエが世間を見棄てたのだ。」

半ば装へるが如き神戸の憂鬱な顔は、電燈の

光が遠い所爲か、一層意味を帯びて津鬱に見え

た。

「君と僕とは矢張違ふね」と、要吉はつく／＼言

つた。「僕は世間に如何見えようが、そんな事は

構はない。自分が氣違ひに成るか——人は如何

して氣違ひに成つて、如何して自殺するか、そ

れが問題なんだよ。」

神戸はじろりと見返したまふ、「君は自分が

氣違ひに成るやうな氣がするか。」

要吉は答へなかつた。

「僕は自分が狂人に成るとは思はない。狂人に

成る間際迄じろ／＼押寄せては行く。併し今一

歩と云ふ所で、如何しても知覺を失ふ譯には

行かない。」

「つまり的を射越すことが無いんだね。左様

さ、僕の箭は毎でも的を越して仕舞ふのかも知

れない。」

又少時して、「だが、二人ながら中らないこと

は同じだね」

謎のやうな談話が途切れると、又藏人込む様に四邊が森とする。やがて車掌が轎へ来て、「終電車が出るから、乗るなら、早く乗つて下さい」と注意した。

二人は速つて乗込んだ。

電車の中へは、二人の外に乘客もない。神戸は鈴革に掴まつたまま、

「君、其後戀愛事件は如何した？ 少し聞きたいね。」

「そりやア訊かないで呉れたまへ。言へる様な事があれば、此方から言はずには居ない。君こそ如何した？」

「さ、ルデインは危機に存んでる。併しルデインの事だから如何するか分らない。」

其間次の停車場へ着く。

「それぢや」と言ひながら、要吉は一人別れて電車を降りた。

其足で水道橋を渡らうとすると、丁度今聖堂の森を離れた月の色がいに赤い。洪水が激つて暴風雨の来る勢かと思はれる程に赤い。やがてそれら町の屋根に隠れた。雨の爲に柔かく成つた土が凍り結んで、踏む處にさざ／＼と音がする。

神戸に氣遣ひに成るやうな氣がするかと訊かれた時、要吉は自分のことよりも、寧ろ朋子のことを思つて居た。此女の精神に異状があることは、何うやら疑はれない。又、精神に異状があればこそ、普通の人は寛ふことすら出来ない、別な世界を持つて居るのであらう。それを癒すには忍びない。此女の病氣を癒すのは、此女を殺すやうなものだ。昨夜——昨夜のあの女の仕事を

を見ても、何うもモノメニヤツクな所があるとしか思はれない。眼を凝ると、朋子の姿が宛ら

涯もない北極の水の野に、ひとり香木が氷れる天を焦して、火の柱の様に燃えて居る様に思はれる。自分は火を舐んで居るやうなものかも知れない。果は自分も一縷に焼け死ぬ外に術はないかも知れない。それが如何成らう。

要吉は何時の間にか自宅の前に立つて居た。それと氣が附いた時、何となく足が凍んで、其儘退出したいやうな氣がした。

二十六

今朝から小兒の容態が急に變つた。うつらうつら眠つて居るのか却て氣掛りらしい。彌江は只おろ／＼して居る。午過ぎ廻診に来て呉れる筈の傳通院前の醫者は未だ見えない。小母さ

んが心配して、去年の暮、要吉が入院する前に、一寸かゝつたことのある近所の町醫者を邀へに行つた。幸ひ其人は直に來て呉れたが、どうも病氣の性質が善くないから、事に依ると肺炎に變症するかも知れない。此儘昏睡状態に陥つて仕舞へば、如何もなと云つて頭を捻つた。兎に角自宅では手當も届くまいから、一刻も早く入院させる方が好いと、大學病院の小兒科と駿河臺の潮川病院とへ宛てて、紹介状を渡して、近頃は斯ういふ小兒の病氣が流行るから、如何かすると大學の方は病室が明いて居ないかも知れない、其時は駿河臺の方へお出なさいと言殘して歸つた。

それを持つて、要吉は直様自身で出掛けることにした。門口を出ようとする時、郵便配達夫に出逢した。呼び留めて、一封の手紙を受取つたが、一寸上書を見ただけで衣囊へ捻ぢ込んだまゝ、向う裏の人力車屋へ寄つて、先づ大學病院迄走らせた。小兒科の應接室で、紹介状を宛てた助手に會つた。容態を問はれて、是々々と云ふと、顔に手を當てながら、どうも近頃は左様いふ患者が多いので困つて居る。殊に小兒には傳染の患ひがあるので隔離しなけりやならぬから、今は病室が塞つて、如何しても

收容することが出来ないと云ふ挨拶、強ひて頼んで見た所で、如何にも成らぬらしい。それに此助手の口振に依ると、左様成つた、患者は大抵助からぬもので、只病院へ死に來られるやうなものだから、大分面倒臭いらしかつた。で、それぢや駿河臺へ行つて見ませうと立上ると、彼處も大抵一杯でせうと言はれた。それを聞いて急に落膽したが、兎に角行つて見ることにした。

濠洲病院の受付へ行つた頃、冬の日も薄れて、うそ寒い女關には誰も出て居ない。酒と通りかゝつた事務員らしいのを捉まへて、宗旨を告げると、案の如く、此方は一杯だから何幸江東病院の方へ行つて貰ひたいと、にべもない。

要吉はすこゝと女關を出た。暫く立つて居たが、どうも微々な小さな病人が、それ程重症に成つて居るものを、丸山の奥から、兩國の向う迄連れて行く氣にも成れない。で、最う一度大學へ引返し、律師を依頼して行くつもりで、車夫には先へ歸つて、病院へは這入れない、内へ出來るだけの手當をする様に用意せよと言傳して歸して逸つた。

小兒科へ行くと、幸ひ未だ前の助手が残つて居たので、それに面會して用件を頼んだ。要吉

はひとり運動場の柵の横手まで來たが、どうも足が進まない。御殿の前の芝原の上へのめる様に倒れたまゝ、ぼんやり低い空を見上げた。空想の世界と現實の世界との餘りに厚しい接觸に、日の眩ぶやうな氣がして、自分ながら如何して可いか解らない。昨日迄は殆ど小兒のことも忘れて居た。これが人の親だらうか。

空は一面に籠えた牛乳のやうな雲が張つて居る。夕ぐれなれば人も通らない、木も草も動かない。要吉も頭の中一様に薄白い雲が張つたやうで、何一つ考へては居ない。

要吉はつと起直つて、衣袋から二つに折つた最前の手紙を取出した。策鴨の消印があるから王子に居る友達とやらの手を経て來たものらしい。封を切つたまゝ、芝生の上へ俯伏せに成つて、何か悪い物でも見る様に、片端から讀むに従つて巻紙を引裂いては、手の中へ丸めて行つた。

一君は初めより醜弄する氣で居たまひしなれば、よも人の君を欺くを咎めたまはじと、最初から書出して、「この上御院殿の森陰にて二人の演じたやうな喜劇を続けるに堪へない。何日ぞや家で許さぬのを押して演奏會へ出た時は、懐に長い手紙を持つて居た。あの時も餘程決

心して出たのだけれど、お顔を見ると、流石に何とも言へなく成つて、其儘立歸つたと、此處迄讀んで來て、要吉は思はず手紙を掴んだまゝ立上らうとした。

一たび逢つて別れてから、殆ど前の事を覆すやうなことを言つて寄越すのは、あの女には最早珍らしくない。長い手紙を懐にして居たといふ。それが白い紙の上に黒い墨で書いたものか、左様でないのか、何れにもせよ、顔を見ると何とも言へなく成つて歸つたといふのは、言葉が簡單なだけに、此方が傷けられたことは一しほ深い。

なほ讀み續けて行くと、一あの夜から母は持病で病みついて、未だ枕が上らない。今も枕邊に介抱して居るが、私は斯んな事すら最早僞善なしに爲ることが出来なく成つた。私の爲に氣を揉んで哭れる周囲の人々の苦痛を長びかすのは、一層殘酷だと思ひながら、未だ私が半信で、一思ひに親を殺すことが出来なから、斯うしてじり／＼母が弱つて行くのを見て居る外はない。介抱する者もされる者も、互に理解の絶えた仲程辛いものはない。一此處から又急に筆を轉じて、一私は香を焚くことが所好だ。殊に観音が好い。斯うして凝乎と線香の燃えて行

く様子を見過めて居ると、灰が折れて下へ落ちるたびに覚悟を急がすやうな大きな音がする。あれ、庭前へ犬の仔が正来て、面白さうに狂つて遊んで居る。早く来て下さい、二人であの様にしこ遊ばせつと、手紙は此處で終つた。

總吉の灰が落ちるたびに大きな音がする。夜半に心を鎮めて見て居たら、實際そんな音がするかも知れない。何時かの夜も、室中が照り渡るとか、音ばかりの夢を見たことがあるとか訊いて居た。如何かしたら、彼の女は女親や女職を持つて居るのかも知れない。が、これは左様ぢや無いらしい。書いて有ることといひ、人を愚弄するやうな口吻といひ、要吉の心の底で何か解つたやうな気がした。解つたが、何うもそれをはつきり意識の上へ浮べたくない。

雨音がたけ、草山の上を、さら／＼と冷たい夕風が通つた。要吉は兩手に紙片を握つたまま、久ら動かなかつたが、偏と気が附いて立上つた。立上ると共に、漣／＼と池を廻りながら、表門の方へ出て行つた。丸山の家の近く迄来て、胸の角で小母さんに出會つた。

「小兒はと訊くと、  
「大いんですよ。眼も動く様になりまして

ねと、言ひ捨てて米を買ひに走つて行つた。

要吉は小兒の容態が快く成つて居ようとは思ひ掛けない。それを聞くと、偏と自分の心の底で其死を願つて居たんぢやないかと云ふやうな気がした。そして、劇しく否々と打消した。

隅江と看護婦とは、蒲團の兩側に坐つて、黙つて病人を見守つて居た。要吉が部屋へ這入らうとして闖ち上に立つと、隅江は立上つて側へ来た。

「一病院は不可ませんでしたさうだとも。」  
「うむと言つたが、やがて、一彼方のお醫者さんは見えたか。」  
「え、。」  
「何と言つて了つた。」  
「今夜は寝られませんか。」

「左様か、如何も少し手後れだつたと見えるな。」  
「私が悪う御座いました」と、直ぐ涙聲に成つた。

「左様でも無いやな。」  
「でも、先刻瀧鴨してから元氣が出て、眼も動かすし、泣きもしまするがなも。」  
要吉は病人の枕元へ行つた。米囊の下で、小さな頭をくる／＼と動かしづめにして、時々

苦しさうに口端を歪める。未だ諒へることを知らないだけに、悔めて見て居られない。

元氣が出たと思つたのは、矢張空頼みで、明くる日の午過ぎから薄く白眼を伺いたまふ、全く動かない様に成つた。只口元へ手を遣つて見ると、微かに息が通つて居る。注射をするたびに、黒い腫子が動くやうに見えたが、それもほんの少時で、別段夕日は無いらしい。三日日には、食糧の注射をした。太い針を小さな股にづぶりと刺して、見る／＼と蛇が吐を呑んだ様に腫れ上るのを見ては、女どもは皆面を背向けた。

雨より口からは何も通らない。只瀧鴨だけで生きて居るのだから、寔れて行くのが眼に見えるやうで、終ひには顔に小兒らしい所が失せて、宛然年寄の様に淺狭しく成つた。

隅江は夜の眼も合せなかつた。要吉も流石に主我的な空想を走せる暇も、殘酷な思索に耽る餘裕もない。隅江と同じ事を憂ひ同じ事を喜んで、一切の餘事を忘れることが出来た。只、要吉の心持は變り易く、自分で自分の主人でない。

死に願した病兒のために、折角開かれた此變しい感傷的な情緒も——それは自分の性質の好い方面を代表したものだ——こんな生活を續けて居たら、又何時の間にか乾れて仕舞ふのだ

らう。要吉はそれを自覺して、且啼れて居るが、自分ながら如何することも出来なかつた。

四日目の日暮は、夏子は最う此世に居なかつた。夏子といふ名は、此子の爲に神戶が選んだので、名に因んだ一葉女史が、元の控住居であつたといふ同じ家の、女史が臨終の間であつたといふ同じ部屋で、一歳に足らぬ小さい兒は、掌に載せられた襦が消えてでも行く様に、ほつりと息を引取つた。隅江は蒲團の上から抱くやうにして、ばら／＼と留度なく涙を零した。女どもは皆泣いた。要吉は腕組をしたまゝ、それを見て居た。

看護婦が白粉帯を持つて来て、死顔に白粉を塗り、唇に紅をさした。眼窩は凹んでも、未だ頬の肉が落ちないのか、見違へる程可愛らしく成つて、口元が今にも笑ひさうに見えた。何だか玩具の様で、此儘何時迄も藏つて置きた

い。  
夕闇が部屋の中を罩めて行く。人は灯火を點けることを忘れた。

## 二十七

次の日の夕べ、夏子の遺骸を一片の茶毘に附した。隅江の實家から、村の墓地へ埋めて、後

の申ひも此方でしたいからと云つて奇越したので、初七日の清むまて骨帯を寺へ預けて置いて、其間隅江に持たせて故郷へ歸すことにした。

薄白い洒れたやうな日の後に、又薄白い夜が明けて、幾日も同じやうな日が續いた。隅江は殊に身の置所もないらしく、何處に坐つて見ても落着かない様に見えた。要吉もしばらく戸外へ出ないで、成る可く隅江とも言葉を交すやうにしたが、如何いふものか、隅江の方が要吉を避けるやうな素振が見えた。此女がこんな素振を見せたことは是迄にない。夏子の居た頃は、要吉が少し新り子供をあやす眞似でもしようものなら、心から嬉しさうにして寄り纏つて来たものだが、淺薄な女氣の、子供が失く成ると共に、俺に繋かれた夫婦の情愛も絶えて仕舞つた様に思ふのかも知れない。それにしても、こんな世間知らずの妻の良人に對する依賴心を失はせたものは、誰でもない、矢張要吉である。要吉自身も仕向けたのである。要吉は自分が手を下して左様して置きながら、それを罪惡だと感ずる前に、又妻の頼りない心細さを察して遣る前に、自分の身の寂寞に堪へないやうな心持がした。それが他人の所爲ではない、悉皆自分の心柄だと思ふと、一層取返しが附かないやうで、

寂しさの底か知れない。固より同情には値しないが、こんな男でも、矢張不幸の人の數には洩れまい。

初七日もやがて過ぎた。要吉は毎日隅江の顔を見ながら、何日立てとも言はなかつた。今度立たせて遣れば、それが一生の別れに成るやうで、二たび呼び戻すことが自分ながら覺束ない様に思はれて、何だか歸したくない。少くとも自分からは言出し難い。斯んな風で、一日づつ妻の歸園を延ばした。勿論隅江の方からは何とも言出さない。

三月、桃の節句が過ぎて二日目、今日は夏子の二七日で、隅江は小舟謀と連立つて寺詣りに行つた。其後に要吉は一人留守居をして居たが、つと立つて障子を開けた。日の入方の空は拭つた様に晴れて、一塵を留めない。電話線が綿の様に霞んで見える。此二三日は風も吹かず俄に時候が暖かく成つた。海の向うから燕の來るのに間もあるまい。

此不穩な天地に對して、何うも心が落着かない。胸の中の動者と周囲との不調和が際立つて、宛もなく飛出したい。飛出して、何處迄も一直線に行つて仕舞ひたい。

不圖郵便囃夫の足音がしたやうな氣がして、

出て見ると、上り匣に切手を二枚張つた重い郵書が書いて居た。要吉は形容することの出来な

い妙な心持で、胸を撫がせながら封を切つた。別に一本、手紙が其中に這入つて居た。王子の

女達を許へ轉送を頼んで遣つたが、何と思つたか返して来た、彼人の仕さうなことです、今つ

いてに送るから読んで呉れとある。先づそれから開いて讀むと、例の思ひ上つた調子は毎時

と變らない。其中に、一きりとして君は今何を爲したまふか、何を思ひたまふか。我には暗闇の中

にて候。互に遠き世の思ひに候。想像せむも愉ろしく候はず。されば君が眼とわが眼と相

會せる時、近寄り離き二つら世に思ひの衝なさはよりは、却々に今は心易くも覺え候。半月の沈黙は自らつくりなせる虚構の世界に對する執着をいよく増し申候。わが最後の息はこの

世界の外ならじと送誓ひ申候などと書いてある。今一つの手紙には、今日は何の御句にて、主人役に白酒を過して、後の心持悪しく、何をしても後に悔いのか私に當に候。悔い得る人は幸なりと人の申せしと書き連ねて、尚々書には、此書事は淺草の海潮寺へ宛てて呉れとあつた

あるとは、要吉も豫々聞いて居た。朋子が此寺へ出入するとすれば、此前の手紙に線香の灰

が落ちる音だとか、犬の仔と遊ぶとか、禪學の公案めいたことが書いてあつたのも、折々手紙の中

に女らしくない粗大な文句が挿まれたのも、此女の手蹟が男性化して居ることも、それ許り

ではない、最初から此女の常軌を逸した振舞が、すべて裏書された様に思はれた。尤も、こ

んな疑ひは是迄もたび／＼要吉の心に泛んだ。が、毎時懸命にそれを打消して来た。女の上に

自分でつくつた幻影を壊されるのが惜しさに、両手で捧げる様にして来た。それ迄にして、漸

とイリニージョンをつまげ一来たものを、今女の手足から無残に壊されては、何とも言ひ様のない心の空虚と、自我の屈辱とを感ぜずには居られない。

此女は幻視又は幻聽が有る様に思つたのも、時には癡癡の瘡痂が有るのではないかと思つたのも、考へて見れば、皆此疑ひを打消すためであつた。此疑ひを打消して自分の方へ引附けて置く爲で有つた。此女が禪學の支那の下に有るとは、如何しても考へたらない。幾合相手

如何がな禪學から引離して、自分の方へ引附けたさに、此女をアブノーマルのものにした。自分の家系が一種の幻視に簡まされて居るのを願ひては、此女も左様したかつた。

父の墓碑に絶死した男と出逢つた時、何と言ふこともなく、それが自分の半身の様に思はれた。大都の眞中に初めて朋子を見た時、何う

もそれが偶然に出逢つたものとは思はれなかつた。此日自分と逢ふために、今日迄此世に生きて居たものの様にも思ひたかつた。そして、只

自分だけが此女を知り得た様に思つて居た。が、何と思つた所で、當人がそれを裏切る氣な

ら仕方がない。加之、此女は自分參禪が得意なやうでも有る。何の位修業を積んだのか知らぬが、自分も禪學の狂信者に用はない。

併し、左様思ふ傍から、又それに逆行するやうな考へがむく／＼と頭を擡げた。自分は心からあの女を偶像の様に崇拜して来た。あらゆる熱情を捧げて来た。此儘では何うも此儘では講められない。

あれも迷へる女だ。幾し癡癡でないにしても、癡癡は餘りだから撤回しても可い。あの女の頭腦に異狀が有ることは争はれない。あの怖ろしい和温氣な禪學を有ちながら、自家

の行爲の責任を知らない様に見えるのも、或はそれを爲すでは有るまいか。今の世に新しい女は幾許でも有る。あの女は普通の新しい女ではない。あの女の言動を裏附けるものが何かなければ成らぬ。何か暗い影が——黒い星の下に生れて、黒い運命に支配されなければ、こんな女は出来ない。

要吉は机に向つて長い手紙を書いた、これが最後と思つて書いた。先方が幻影を壊す氣なら、此方にも其覺悟が有る、此手紙は只それを壊されまいとする努力に過ぎない、左様思ひながら書きつづけた。何時の間にか二人が戻つて来て、隅江が側へ洋燈を持つて来たのも知らなかつた。

聲、久し振りに御狀に接し、例の臆病にて、暫しは封も得聞かず、只々打聽め居候。それに近頃は事業く、残念ながら氣根衰へて、手紙を書き出しても、何を書くやら筆の跡さへ覺束なく候。理性にては、矛盾せる二つのもの同時に存在するを許さずと申せ、感情ばかりは然らず、明かに矛盾せる感情の兩つながら一時に身に迫るが堪へがたく候。

半月の沈黙は、君自らつくりなせる虚構の世界に對して執着を増さしめしとのたまふか。ざりとて其虚構の世界が何なりやは能くも解らざれど、何が故に今更虚構の世界とはのたまふぞ。君自ら君の世界の眞實を疑ひたまふか。君の世界は恐らく夢ならむ。されど夢の如く眞實なるにあらざるや。眼に見ゆる現實の世こそ、夢の如く虚構と成り了れりとは、西の國なる新しき詩人どもの新しく唱ふる所候。

かくて空想の世界は日に／＼現實の世界に迫る様に覺え候。近頃心の中で考へただけのことが、事實と成りて現はるる手續の易々たること、我ながら怖ろしき計りに候。時としては、未だ考へても見ぬことさへ、夙くも取返し難き事實として目前に現はるゝこと、魔性のものありて人の心を豫知するかと疑はるゝまでに候。何時ぞや、二人して都を出でむと、霧の街を彷徨ひ歩きし夜を記憶したまふか。私はあの眞實に死ねもし、殺しも出来るやうな心持に成りたかりしに候。其後氣

力衰へてうつら／＼暮す間には、あの夜のことを思ひ續けて、一時の衝動に依らず、十分なる省慮の結果として、なほ人を殺すに至る迄わが心の壞れ行くさまを考へなど致候。一種の罪人心理に有之べく候。

今は隠すも詮なければ云ふべし。あの折霧の中を歩きたながら、私は——場所も貴方の所好だといふ鎌倉鶴岡の社前にて——貴方を手にかけて殺した女影を泛べて居た。其時如何いふものか、私は生き残つた、生き残つてゐる必要がある様に思つた。十二年間——十二年といふに根據はない——棒太なる集治監の水に閉ぢられても、まだ生残つて居る必要がある様に思つた。——私は詩人である、藝術の徒である、美の崇拜者である。君を殺す、君を滅する瞬間に於て、我戀人は何んなに美しく我眼に映するか。總て美しきものは其滅ぶる前の瞬間に於て最も美しいといふにあらざるや。私は許されざるものを見る第一の人で有らなければ成らぬ。貴方ばかりとは云はぬ。私は貴方を殺し

たといふことが、私自身の上にも及ぼす影響を見たかつた。何物の前にもたじろがぬ、學者の好奇心を以て、自分の心理に及ぼす反應が見えなかつた。只、科學の研究は實驗者其人に取つて最も危険なものである。私は其儘永久に歸つて來ないかも知れぬ。そんな事は私の知つたことではない。

或人は近代人の人生は厭世でもない、樂天でもない、樂天と厭世との接近であると云つた。極度の戀愛は極度の憎悪と伴ふ。私は貴方を愛することの深けれど深いだけ、貴方を憎んで居たのかも知れない。私は貴方の身に殘忍な行爲を加へたい。そこに初めて切なる愛の表現を見出さうとした。埃及のハイベシヤが一、否々、今夜私は涙は平調を失つて居る。

併し何を言つても、今と成つてはすべてを過去の渦巻の中に葬る外はない――

此處まで續いて、ぼつりと思想の線が途切れ、涙の中に書きこむ事かうどうやう有るやう

で、何も何を書かうとしたのか想ひ出せない。巻返して、書いただけを讀直して見た。初め書簡文體で書出して、後の方では言文一致に成つて居る。要吉は眼瞼の熱く成つた眼に、少時紙の上を見詰めて居たが、其儘引裂いて、ぐるぐると、又思ひ返して出さなく成ると思ふから、宛名を書くと共に立上つた。恰度そこへ隅江が夕餉の膳を持つて來たが、

「郵便なら入れて參りませうかな」と訊く。「うゝむ」と、それを開流したまゝ、自分で出て行つた。

間もなく、要吉は戻つて來た。膳の前に直された座蒲團の上に坐つて、器械的に箸を上げたが、何を喰つてるか自分でも知らない。時々物忘れでもした様に考へ込む。隅江はそれに氣が附いても、故と見ない振をして、盥手と俯向いたまゝ、膳の上の給仕をまきぐつて居た。

今と成つては、總てを過去の渦巻の中へ葬る外はない。

唯、如何してすべてを過去の渦の中へ葬るか。それが要吉の身に剩された一つの課題である。夏子は世を早くした。情も意もつて世を早めた様子にも思はれる。此父らしからぬ父は、自分の手

を下して自分の前途を闇黒にして行く。それを何者かが厭て傍から手留ふとしか思はれない。何者かとは矢張自分の意志に違ひなからう。人の意志が其人の外へ出て歸くことも無いとは云はれぬ。故らに或境遇をつくつて、それに着くといふ傾向が止めようとして止められないのも、想ふにそれが爲では有るまいか。

何れにしても今は我が身一つを處分すれば可い。何時か――一週間も前でも有つたらう――或人の許で清國の四川省に傳教師の口があるといふ話が出た。北京から未だ五十日の餘も道のせうな路をはるん、輿に昇かれて行かないりや成らぬ所だと聞いて、稍心を動かされたが、其時は何とも言ひ出さないうで歸つた。一人でそんな難關れた所へも行つて、物を言ふ相手も無く、只生きてだけ居たら、其間には口を利くことも忘れ、頭も鈍く成つて、大方片が附くかも知れない。

隅江は要吉が黙つて差出した茶碗に、飯を盛つて渡さうとした。

「あ、お茶だつた、御飯ぢやない。」一寸見返したが、別に湯呑に茶を注いで出した。

要吉は初めて此女を見附けてもした様に、隅

江の顔を見遣つた。自分は此女を捨てようとして居る。而もそれが一時の氣紛れではない。それなら未知すべき所もあるが、豫め今日あるを知つて、永い間其計畫をつづけて来た。唯、自分は決して此女を嫁つて居るのではない。一生を通じて隅江を忘れることは無からう。恐らく眼を眩る瞬間に於て、自分の口端に上る女の名は隅江を措いて外にあるまい。やがて隅江は膝を下げようと、背後へ退る様にして障子へ手を掛けた。

「隅江」と、要吉は女の名を呼んで留めた。「え」と、振回つたが、相手が何とも言出さぬので、一何ぞ一用で御座いますかなも。一

「らむ」と、又行詰つた。良久つて、「少し言ふことが有るんだ、眞面目に。」  
「今直ぐしー」  
「直ぐ。」

隅江は障子を閉めて、其側に坐り直したが、眼の造場に困つて、幾手と良人の顔を見返した。

「お前、明日にでも故郷へ歸るか」と、要吉は思ひ切つて言出した。

「へえ」と、言ひさして、隅江はしばらく返辭をせぬ。

要吉は女の素振を見て、自分の言つた言葉の

意味が相手に通じたなと思つた。それと共に、人殺しでもする様に手が震へ出した。

妻を捨てるのは妻を愛せむが爲に外ならぬ。要吉は自分にもそれを承認させようとして、幾度も心の中で繰返した。別れて後こそ、妻を愛する心も彌々募るだらう。永く女を愛して變るまいと思へば、其女を捨てる外に道はない。

唯、そんなにして迄女は男から愛されたいものか如何だ分らない。それに附けても、男の愛といふものが、愛せらるゝ者のために愛するのではなく、愛する者自身の爲に愛するのだと言ふことは争はれない。それが又如何することも出来ないものであらう。

妻を捨て置いて、妻を愛したい。故らに妻を不幸に陥れて置いて、妻を憐れんで見たい。四川省の山深く分け入つて、永久に歸らなく成つた時、隅江の上を思ひ遣つたら何んな心持がするだらう。固よりこれは半ば空想に過ぎない。但だ空想程世に怖ろしいものはない。

が、斯んなに迄心置なく隅江を虐待することが出来るのは、心の底で此女を一番深く愛して居る證據ではあるまいか。尤も、それを又口實にして虐待を重ねようとするのだから、自分ながら淺ましい。

「随分お前にも苦勞させたが、最う愛想が盡きたらうね。」

「何故なも？ そんな——」  
見る／＼隅江の睫毛に露が宿つた。それを見ると、要吉の眼も熱く成つた。

「お前には濟まない、眞個濟まない。勘忍してお呉れ、な。」  
要吉はつとめて聲を濁せた。相手が眞面目なら此方は無理に出さうとしても、心持を仕向けてさへ行けば、涙は自ら出るものだ。隅江の顔が霞を透して見え出した。今一息ではらはらと頬に傳ひさうに成つた。此涙を隅江に理解されようとは思はぬが、切めて女から憐れま

れたいといふ一念は失せない。要吉はじり／＼と身體をずらして、影に成つた自分の顔を洋燈の光に照し出した。

其時、急に涙が出なく成つた。あゝ人の性格は宿業にして容易に改め難い。隅江は終に良人の涙を見ずして濟んだ。

## 二十八

新橋停車場の古い石造の建物は、雨氣を持つた月夜の空を背にして黒く眠つた様に立つて居た。只、北に向つて昇降口だけが明るく見え

折柄二葉の人力車が駆けて来た。石段の下へ根柢を倒すと、先づ立上つたのは要吉で、續いて隅江も降りた。白い紙片に包んだ五丁四方位の荷を大切さうに、兩手に抱へて居たが、良人の後に跟いて、おづ／＼石段を上つて行く。

午後十一時の發車には未だ間があるかして、待合室にも二三人の旅客しか見當らない。皆遠方へ行くらしく、大きな荷物に凭れて坐睡つて居る。隅江は其前を擦り通る様にして、やつと片隅の倚靠に腰掛けた。それを見ると、要吉は直に立つて礼賣場の方へ出て行つた。停車場の時計と自分の時計とを合せなどして、何と言ふこともなく其邊を見廻して居たが、やがて元の處へ戻つて来た。隅江は膝の上に小さい箱を載せたまま、しよんぼり荷物の側に坐つて居たが、良人の顔を見ると、

「未だ餘程間がありますかなも」と訊く。

「うむ、一時間足らず有る様だね。」

隅江は黙つて眼を伏せた。要吉も並んで腰を下した。洋杖の頭に、兩手を掛けたまゝ、何とも言はない。此期に及んで餘計な事を言ふのは、女に對しても氣の毒な様に思はれたからだ。今夜子供の骨を持たせて故郷へ歸すとはいふもの、暫く別れて暮す約束にして、荷物も當座

入るものは大抵纏めて来た。昨夜それを言出した時に、隅江が案内物容易く承知したので見た、一方では重荷を倒した様にも思つたが、同時に何だか物足りない心持もした。暫くと云ふ暫くが何時迄に成るか、それは分らない。要吉はこれが永い別れだと思ふ。少くとも空想の上では、一期の別れを演じて居るやうな氣がして成らぬ。それに自分だけは空想の障り芝居を演つて居たのが、後からどし／＼取返しの着かない事實と成つた類例は從來の経験でも數多い。そんな斯なで、今夜八時の汽車で立つ筈であつたのを、外に準備も後にはしたが、要吉からぐづ／＼と時を後らして終に十一時にして仕舞つた。併し明日に延ばす心はない。女の一人旅ではあるし、何だか心配だから明日にしてはと、小母さんが強つて止めたのも諸かなかつた。

平生人込みのする待合室だけに、がらんとして居るのが、一層際立つて見える。最う燠燠も焚かなく成つたのか、白い灰だけが鐵網越しに見えるのも、却てうそ寒い。燠燠の上に掛けた大鏡が冷たさうな光を反射して居る中に、時々白衣の人影が出没して、宛ら他界の姿を覗いて見る様に思はれる。要吉は癡手とそれを

見て居た。長い間鏡の中を見詰めながら、偶と此中へ自分と隅江と、二人の行末が映りはせぬかと云ふやうな、變な心持がして来た。今、自分の側に坐つて、微かな呼吸をして居る女と自分の間に、何かの因縁があるとしたら、一瞬の後に別れて、一生の間再び相見る期がないといふ今は、女の行末が自分の眼に映らぬとは云はれまい。

隅江は其處に居るか居ないか分らぬ程、靜に音も爲せないで居る。要吉は振向いて女の顔が見たいやうな氣もしたが、故と其儘にして女の上を想ひつづけた。いよ／＼自分が行方知れず成つて仕舞つたと聞いた時、女は何んな心持がするだらう。恐らくは隅江自身にも解るまい。固より側の人に解らう筈はない。自分にも解らず、人にも知られないで、矢張り暮れて夜が明けるだらう。一年、二年、三年日には、人の妻と成るだらう。又新に人の母と成つて、其日々々の小さい出来事に心を奪はれて暮す間には、何時となく頭に指を置いて、腰も曲れば齒も落ちるだらう。其時に成つて、萬一年寄の夜話に若い頃の話でも出たら、何卒今夜のことと思ひ出して貰ひたい。恐らくは此女の生涯に唯一のローマンスたるべき自分との關係が、

老眼の霞を透して遠い灯でも見るやうに、ちらと泛ぶことが有つたら、其時は——今から願つて置く——数十年前に上と成つた自分の上に好意と温情を持つて想ひ出して貰ひたい。

不圖、足許に痺がしたので振回ると、それは驛夫が水を撒ぎに来たので有つた。要吉はつと腰掛を離れて、隅江の顔を彼方此方と歩き出した。こんな奇もない想像に耽つて今の別れの重大な意味さへ切實に感じ得られないとすれば、自分ながら何處迄墮落して居るか方圖か知れない。今夜此女に背いて、明日から何に手頼らうとするのか。われから闇黒を求めて行く。それが最後迄堪へられるもので有らうか。こんな單純な女を空想の餌とする男の心は、禽獸にあらずして河だらう。自分は怖ろしい淵に臨んで居る。——泣いて呉れ、人目も構はず泣いて取纏つて呉れたら、それに依つて、此處迄追ひつた二人の運命を變じ得たなら！ あゝ、自分の方が此女が惻れまれない。要吉は腕組をしたまゝ、隅江の前に立停つた。何故泣かぬ、何故黙つて居るのだらう。此女には終に空想を容れる餘地がない。

何時の間にか、待合室には旅客が一杯たかつて来た。要吉も切符を買つたり手荷物を預けた

りした。間もなく振鈴が場内に鳴渡つた。ざわざわと人の足音が改札口へ近づいて、雪崩を打つてプラットホームを押し付けて行く。要吉も漸と隅江を列車の中へ乗込ませて置いて、窓の前に立つて居た。

時は刻々に移る。隅江は膝の上の小箱に手を掛けたまゝ、要吉の顔から眼を離さなかつた。今でも——今でも可い、隅江が客車の中から飛出して来て、泣いて取纏つて呉れたら、そして二人は救はれるのだ。要吉は女の顔を見返したまゝ、それ許り思ひ詰めて居たが、口では絶えず何とも言はなかつた。

一それぢや氣を付けて行くが可い。皆様に宜しく言つとくれ。  
一貴方も御機嫌好う。  
隅江は延び上がるやうにした。要吉も五六歩列車に隨いて歩いたが、白いペンキ塗の柱の側に立停つた。と、急に踵を廻したまゝ、駈ける様にして改札口を出た。

夜半に雨滴の音を聞いて、要吉は偶と眼を覺した。暫く蒲團の中で耳を凝らしたが、一雨だないと、獨言を言つた。程程隅江が今汽車で雨の中を進行してるの

を想ひ出した。今頃は矢張膝の上から小箱を離さないで、ぼち／＼眼を開いて居ることだらう。これだけ長く抱いて居たら、眼の曖昧が小箱を透して、更に響を透して、其中の死灰に傳はるかも知れない。要吉は肘を立てて、枕の上に顔を伏せたまゝ、夜の白む迄身動きもしなかつた。

### 二十九

次の日の午後、要吉は久しぶりに金葉會へ出て朋子と落合つた。朋子は彼の目からずつと缺席して、今日初めて出て来たのださうな。後れて来た男の姿を見ると、一寸目禿したまゝ、二たび正面を向いて、教壇の話を聴き惚れて居た。二週間あまり見ない間に、元から纖細ぢな肩の邊りが一層ほつそりした様にも見えるけれども、其外には別段變つた容子もない。先般出した手紙の返事も未だ呉れないが、何と思つて如何いふ氣で居るのか、それは解らない。要吉も最早自分で自分の頭を苛むに勞れたやうな氣がして、わざと他所見をしながら黙つて居た。

散會後、神戸と要吉とは朋子を待合せて、一緒に教會を出た。女關の石段を降りた時、三枝子が澤井を引張る様にして、後を追うて来た。

毎も歸る途とは方角が違ふので、何處へ行くのかと神戸が訊くと、一え、一寸病院へと言つたま、取違して居る。其が険らしい白い唇が男の眼を惹く。

で、五人かひろい街の上を横に一列に並んで、がや／＼言ひながら水道橋迄送つて来たが、神戸は一人別れて甲武藏の電車で歸らうとした。澤井は神戸に隨いて行かうか、それとも三枚子と一緒に歸らうかと、少時迷つて居たが、三枚子が左様ならと、お叩頭をしたまゝ、ずん／＼左手について坂を登つて行くのを見と、

「まあ三枚さん、酷いわねえ」と、送つて其後を連掛けて行つた。

要吉は朋子と二人だけに成つた。一町餘り黙つて歩いて居たが、豪岐殿坂の下迄来ると、

「彼方へ廻つて歸りませんか——今日もと言出して見た。

細子も黙つて點頭した。

要吉は一步退る様にして並んで歩きながら、何遍同じ事をして、如何成るものかと云ふやうな味氣ない心持をした。と、つて、引回す氣にも成れない。不圖、此女は毎日自宅で何を爲て居たか、と、その氣に成つて、

此間にお銀様の葬でしたつてね。貴方が主人

役で？」

「え。」

「お客様は如何云ふ連中ですか？」

「親類の子や近隣の——皆がきやツキや騒いで、そりや面白う御座いましたよ。」

要吉は鶴と女の顔を見違つた。こんな事を言つて、對手の話を外らかすのも此女の癖だ。

「ぢや、何です。貴方はそんな家庭の行事にも興味を有つて居るんですねと言つたが、又二歩三歩行つてから、一で、お裁縫は誰が爲さるんです？」

「自分の事は自分で爲る様にして居ます。

如何だかと思つたが、自分でもわざ／＼自分を欺いて、餘計な事に拘りつて居るやうな氣がしたので、急に口を閉んだ。

途中、たゞ／＼話が途切れたが、それでも湯島へ出て上野公園迄来た。正面の石段を登つて、草叢の碑の背後から蒲鉾山の方へ、肩を並べて行く。

要吉は一人じり／＼した。何か言ひたい、言はなからぬや成らぬと思ひながら、妙に心持がこじれて口へ出ない。

「貴方と會つても、私は最う幸福ぢやアなく成つた」と、打遣るやうに言つて見た。一併し會は

ずに居るのはなほ苦しい。」

女は只聞き流した。男は更に言葉をつづけた。

「此頃中、私は支那へ行かうと思つて奔走したのですが」と言ひ掛けて、不圖、それが此女に何の關係が有るか、急に又勇氣が挫けた。が、言ひ掛けたことは仕様がな。

「他に人が有つて、それは駄目でした。此頃又或本屋の手代に成らうかと思つてます。左様成れば勿論、文學などは絶縁して、全く商賣に成つて仕舞ふ了簡です。私などに成れるか成れんか知らぬが、兎に角金葉會へ出て、貴方のお日に掛るのも永くはない。」

「それよりも、肉屋の手代の方が好いでせう」と、朋子は白ぼつくれたやうな調子で言つた。

要吉は思はず足を停めた。が、又思ひ返して歩み出した。何故そんな物の言様をするのか。尤も朋子の言葉が林枝を折つて投げつける様に素氣ないのは、今始まつたことではない。それを何か深い意味でもある様に迎へて思つたのは此女が先天的の境遇に遇せられたのだ。一たびそれが他の形勢から導かれるのだと知つて

は、そんな言葉は聞くに堪へない。

やがて二人は兩大師の廣場へ出た。言ひ合

はさねど、足は自ら何日ぞやの夜の石の方へ向つた。偶と見ると、其石には女學生が一人腰掛けて、長い袖の中から補衯の袖を出したまゝ、何やら讀んで居るらしい。二人は其體を察り通つて、右の方へ曲つて行つた。

「お宅では御不幸が有つたさうで御座いますね」と藤子が不意に言出した。

「其んなことを、神戸君からでもお聞きでしたか。」

「いえ、え」と言つた許りて、何處から聞いたとも言はない。

要吉は話題を轉じようとして、「ね、何時かのお手紙に淺草の親戚へ行くからと有つたでせう。あれは海禪寺のことなんですね。」

「え、あれはね」と言つたまゝ、少時口徳つて居たが「彼處は只私が王子の友達と時々寄つて話をするために、一間借りて居るんです。そりやア坊主ばかりで、本當に呑氣ですよ。」

要吉はじろく女の横顔を見守りながら、「ぢや、貴方は坊さんが所好なんですね。」

「え、唯想へば所好です。空に描いて見れば所好ですが、實際見ると大抵は嫌ひです。」

「左様、昔の物語の中へ出て来る僧都や阿闍梨などは大概好い。」

こんな風に合體は打つたが、朋子の才走つた返辭は男の心に餘り好い感じは與へなかつた。何うせ最う此女は駄目だ、如何成るものでない知りながら、矢張如何がなして、最う一度自分の方へ引寄せて見たさに、

「ね、貴方は、貴方は彌衯の患者が昏睡状態に陥る際の經驗を聞いたことはないか」と、女の顔を覗き込むやうにしながら言出した。

「私はね、貴方は彌衯病者の症候が有るんだとはかり思つた。ね、左様ぢやないか。私一人で左様考へたのかも知れんが、私は如何しても貴方に左様思つて貰ひたい。」

朋子は黙つて五歩行き、又十歩行く。良久しうして、やつと顔を上げたが、「三死の勝利」の中へ出て来る女は、矢張彌衯を持って居た様で御座いますね。

久しい以前に讀んだので、それとも心細かなかつたが、矢張知らず識らずの間に並行を求めて居たのではなからうか。要吉は少時物が言へなかつた。

女は氣味よげに男のげつそりした顔を眺め遣つた。

「うむ、左様でしたね」と満と備へを立直しながら、要吉は先に立つて歩き出した。

ずつと廣場を一周りして、又元の石の側へ戻つて来ると、前の女學生は何處かへ行つたと見えて、其邊に居なかつた。二人は石の上に並んで腰を下したが、要吉は直に又立上つて、前の木欄に凭れた。朋子と顔を見合せる。

あの夜のことが子供の時に見た遠い夢の様に一つ／＼戻つて来た。すべてが自分の描いた幻影に過ぎないやうな。あの夜女が一つとして自分の待設けないやうな事を言はなかつたのも、それが爲では有るまいか。兎に角、自分が女の上に小説を描いて居たことは争はれない。

自分はいと女の口から、自分の思想や感情を、自分の言葉と論理とで言はせて、それを樂しんで居たに過ぎない。

併し今此石に腰掛けた女は、あの夜の女ではなからうか。此手、此膝たらしいやうな、堅く結んだ唇は自分の心の中に描いた朋子を指して、他に持つ者は有るまい。——偶と朋子が毎も巻いた毛皮の襟巻を止めて、別の肩掛を掛けて居るのに氣が付く。

「あの、毎もの襟巻は如何なすつた」と言ひ掛けて、不圖、天聲の様に頭の中へ閃くものがある。——「ね、引裂いた。」

「朋子は一寸顎を襟につけて、肩掛をいぢつて

見たが、につと笑つて點頭いた。

「何日、あの夜、一ばん終ひに別れた夜？」

「え、一それきり、二人とも又黙つて仕舞つた。要吉は左様して居ても気が落着かない。對手の落着いて居られるのが腹立しい程落着かない。で、われにもなく立ちませうか」と言出した。

「朋子も直に立上つたが、何やら傾げになよなよとして見えた。」

二人は又毎もの路を戻つて行つた。要吉は歩きながら気が寄つて、何か言ひたい、言つて仕舞ひたい様に思ひながら、偕て何を言はうにも、口へ出せば皆修辭的に成つて、今の自分の心持を率當に傳へ得ないやうな気がして遺瀨がない。

谷中から園子坂へ降りる坂まで来ると、朋子は急に立停つて、

「先生、今日はお急ぎなんでしょうか。」

「何を？」

「いえ、此方へ通つて歸らうかと思ひまして」と言ひながら、つと花見事の方へ曲つた。要吉も黙つて隨つて行つた。しばらく行つても、朋子が何とも言出さぬので、

「ね、如何したんですと、後から聲を掛けた。」

「え、一と、女は顔だけ素向いた。」

「如何したのです。私には解らない。」

「唯あの道を通るのが可厭でしたから、餘り度々通つたので——」

要吉は何と言ふこともなく自我の屈辱を感じた。だん／＼空模様が變に成つて、日も暮れるらしい。生塔に添うて、田舎に似た路がつゞく。

「私は一つ如何しても聞きたいことがある。一良久らくして、要吉は四邊を見廻しながら言出した。朋子は返辭をせぬ。」

「これだけ聞けば可い。貴方が九段の上で私に言つたことは——貴方自身のことには就いて——あれは事實か、それだけ聞かせて下さい。」

「朋子は園子の様に黙つて仕舞つた。只管路を急いで行く。田圃一面、途の上にも夕靄がかゝつて、しつとりと袂も染れたらしい。」

二人は轉坂の上で別れた。別れる時も、朋子は何とも言はなかつた。

三十

「聞くの情、要吉はやつと九時前に寢床を出た。湯敷を衝へなごら茶の間に覗くと、小母さんは

餉室の上に小皿や茶碗を伏せて、其上に布巾を

被けたまゝ、ぼんやり待つて居る。其儘湯元へ降りた。が、又氣を變へて、金盥と手拭とを握んだまゝ、のそ／＼と水口から井戸端へ出て行つた。

井戸は門の内側に在つた。門の外を剝鼠に後れたらしい遣兵の職工が、ちらほら通つて行く。要吉は釣瓶の水を汲んで、何處となく頭の後ろを冷して居たが、やがて雫を切つて立上つた。それから乾れた手拭で摩擦しながら、二たび金盥を下げて戻つて来た。茶の間の毎も坐る所に坐つて見たが、前の日の破れが持越して、朝から物を喰べるやうな氣はしない。で、習ばかりに箸を上げようとした時、不圖戸口で案内の聲がした。女の聲らしい。小母さんが出て、

「あの失禮で御座いますが、何方様で」と、訊いて居たが、間もなく顔の色を變へて這入つて来た。

「一到達して来ましたよ。」

「うむ」と、要吉も息を噤ませた。

「ね、如何します？」

「如何もしない、通すさ。」

かう言つて、自分で出て行つた。土間に立つて居る朋子と顔を見合せて、一寸どきまざした

が、

「何卒と言ひながら、自分の居間へ招じた。

二人は向ひ合つて座に着いた。何方からも何とも言ひ出さない。要吉は、それでも、思ひ掛けな

い女の來客が気がかりで、如何して来たのか、早く其所因が知りたい。が、女の突詰めた容子

と、充血した眼の色と、熱病にでも罹つたやうな紅い唇とを見ると、迂闊にそんな事も訊か

れない。朋子は目じるぎもせず男の顔を見送して居る。時々氣にしては、人並よりも引詰めた

襟を無理に擦合せた。最う黙つて居るのが息苦しい。

そこへ小母さんが茶を煎れて持つて来た。二人の顔を見較べながら、二たび襟を閉てて出て

行く。朋子は一寸其後を見遣つたが、

「お邪魔ぢや有りませんでしたかと、初めて口を開いた。

「いえ、そんな事は有りません。」

其儘又話が途切れさうに成つた。要吉は机の上から象牙のペーパー、カッターを取つて、やけ

に頬邊へ押附けながら、

「ね、貴方は如何思ふ」と、漫ろに言出した。「神と人間との間には未だしも融通がある。それは左様でせう、人間が神を造つたのですからね。併し人間と人間との間には、それだけの融通す

らない。一層神秘的で、一層怖ろしいものぢやアないか。

朋子は一寸眼を伏せたまゝ、別に何とも言はなかつた。

「が、併し如何することも出来ない。何うも仕方がないと、要吉は續いて打捨る様に言つた。

父ひとり咳く様に、一神が人間を造つたと云ふのは誰かも知れんが、人間が神を造つたと云ふことは争はれない。

何故こんな事を言ふのか、要吉は自分でも能く解らなかつた。が、これ隠しに強ひて理窟にも成らぬやうな理窟を並べた。朋子はそれを辛抱して聽いて居たが、其眼は絶えず、左様ぢやない、そんな談話をするためにわざ／＼此處へ來たんぢやないと、不服と輕蔑とを語つて居るらしい。要吉もそれに氣が附くと、相手の顔を見返したまゝ、俄に口籠つた。一時上氣した血の氣も漸次に落着いて、皮膚の底に暗い色を持つた女の顔は、傷けられた傲慢の象徴たる魔王の様に近寄り難い。

朋子はなほ四半時間も左様して居たが、急に、

「最う歸ります」と言つて立上つた。

要吉はそれを停めるだけの力もない。で、ぐづ／＼上り框迄送つて出ると、女は下駄を

穿きながら、男の顔を見上げる様にして、

「ね、先生は是迄他人の夢を自分が見るやうな氣のしたことは御座いませんか。」

一人他人の夢を自分が見る？と、要吉は只繰返した。

朋子は少時十間に立つて思案して居る様に見えたが、急に頭を下げて、後も振向かずに出て行つた。

要吉はそこに突立つたまゝ、ぼんやり其後を見送つた。女の姿が見えなく成ると、つか／＼と居間へ戻つて、のめるやうに机の前に倒れた。又すつくと起直つて、何やら想出した様に机の抽斗を搔き出して居たが、やがて片々だけの女の子袋を取出した。未だ眞新しいと思つて居たが、明るみで見ると大分手擦れがして、指の頭が黒く汚れて居る。要吉はそれを眼の筋へ持つて来て、飽かず見入つて居た。

女は來た、此處に坐つて居た。何のために來たのか、それは最う考へたくない、考へるだけの精も根もない。只、あの女に取つて自分は何だらう。要吉は初めて此問題を自分の前へ出して見た。が、答ふるに堪へない。あの女のために自分は弄ばれ、苛まれ、又侮られもした。併し愛されたとは――女が自分の上に興味を持

つたとは云へようが——愛されたとは幾許か思ふ目にも思へない。それだけに、自分が却て女の冷徹な態度を喜んだ。女が自分に對して冷徹であらばある程、却て心を惹かされた。今日迄自分が女に依て興へられたものは、不安と猜疑との長い連続に過ぎない。が、この免れ難い猜疑の去つた時は、即ち女に對する興味の去つた時で、此戀を續けようと思へば、何時迄も猜疑の種と成る外は有るまい。畢竟自分は性に過ぎない。而も同時に其目撃者だから堪らぬ病だ。昔から自分一人の病だ。

併しこの上幾度違つたところで、矢張り同じ事を繰返すに過ぎない。これを始めた者が、これを終らなければ成らぬ。それには禪學といふものに對する自分の反感を誇大して二人の關係を案審にして仕舞ふ外に道はない。只、それが堪へられようか。人は自分を道化視して尙生きられるものでは有るまい。

要吉は二さび茶の間へ戻つて、ひとり冷えた膳に向つた。何やら氣拔けがして、物の味も好くは嘗たない。で、箸を下に置くと、急に小母さんを呼び立てて洋装に着替へたが、一寸其處までと云つたまま、御上へ出た。

最初番町の或家を訪ねて、かねて頼んで有る丸着の口を貰かうとしたが、折悪しく不在だと云ふので、言置をして其家を出た。新見の所に立つてぼんやり見渡すと、土手の草が青く萌え始めて、外灘の電車が仕切りなしに往來する。何だか自分だけは社會の傍觀者のやうな氣がして、名狀し難い寂しさが心の底から湧くと共に、ほか／＼と背中に當る日影も怪しい。衣囊から時計を出して見ると、針が動いて居ない。時間も分らないが、午刻近い頃だらう。一八坂を降りて行く。

「ひとりだ、人間は終に一人だ。」  
こんな言葉の口に出しても考へて見た。實際一人に成らうとして闕の上になつて見ると、一生の長いのが今更の様に愉ろしい。

要吉は地面を見詰めたまま、こつ／＼洋杖の尖で小石を突きながら、淨瑠璃坂を登つて行つた。かねて關江を故郷へ歸したら、自分も住み着いた丸山の家を出ようとして居た。寺住ひか、一人者の世語を見て呉れる間借りでもして、生活状態を一變したい。で、方角の知れない大路小路を宛もなしにぶら／＼歩いて居たが、一向目に留めて搜すでもなく、何時しか余丁町の先から郊外の田圃の中へ降りた。

二たび坂を上つて、四五町行つてから植木屋の垣根について曲れば、神戸の住家だ。ぶらぶらと門のくゞりを開けたが、格子戸の前に立つたまま、主人を喚び出した。神戸は聲に應じてあらはれたが、  
「まア這入りたまへ。」  
「這入つても可いが、少し其邊を歩かないか。」  
「左様だね」と、少し考へて居たが、やがて帽子を被つて出て来た。

二人は鐵道線路に添うて雜木林の中へ這入つた。西に向つて眞直に走る四條の鐵路が、夕日を受けて白刃の様にきら／＼と閃く。要吉は神戸と肩を並べて、久らくそれに見惚れて居たが、又想ひ出したやうに足を上げた。

「寂かだど、獨言の様に言つたが、何だか人が懐かしい日だね。」終りの日が近づいたやうに。

神戸は先に立つて歩きながら、不意に、一僕の戀も終つたよと言出した。  
「如何して」と、要吉は思はず女の顔を見送つた。  
「なに、矢張り豫期したやうな結果を見たのさ」と、又一二間前へ出たが、一乗月學校を卒業すると、大阪の親類へ嫁に行くといふんだがね。僕

のことだから、大概それで幕を閉ぢることだらうよ。」

要吉の眼には、昨日水道橋で別れた時の三枝子の容子がちらと映つた。が、別に何と言様もない。たゞ黙々として隨いて行く。

良あつて、神戸は又言出した。一此間僕がひとり教員室に居る所へ這入つて来てね、初めは唯黙つて立つて居た。それから前の椅子に掛けるには掛けたが、腕手と俯向いたまゝ、何も言はずに手に持った紙表紙の書物ををぎり／＼と振つて仕舞ふんだよ。それを見た時は、何とも言はれない心持だつた。」

「左様だらう。」  
「左様だらうは、少し同情が無き過ぎるねて、一寸後ろを振り返つた。尤も、他人の戀といふものは同情の出来るものぢや無いかも知れない。要吉と神戸は顔を見合せて笑つた。が笑つた後は一層寂しいやうな氣がした。

「それぢや」と、十歩にして、要吉が言つた。「兎に角終つたのは此方だけぢやないと見えるね。唯、僕のは最初から始まらないと云つた方が可い。」

神戸は要吉の顔を見る／＼と見詰めたまゝ、  
「又、君の方から複雑にして仕舞つたのぢやな

いか。女は單純を望んでるよ。」

「如何だか」と、相手の眼を避ける様にしながら、「僕は何時も胡粉を塗つた張子の岩に凭れて、褒詞をいふ積りて語る戀でなけりや出来な人間だらうよ。」

一だが、それはね、何んな戀にも幾分か左様ぶつた要素の含まれないものは有るまい。草刈の戀も、二面から見れば藝術だらうぢやないか。」

一まあ如何でも可いさ」と、ぼんやり四邊の野を見廻して居たが、「それよりも、僕は此頃何の女にも愛されたことが無いやうな氣がして成らんよ。」

一何の女をも愛したことが無いからだらう。」

一左様、愛しない者は愛されない。」

何時の間にか、四邊はほんのり黃昏れて、一軒家の障子に灯火が射した。二人は田の中の小徑を辿つて、ばつたり溝に行當つたが、何方を見ても橋がないので、それに添うた畦路を夕闇に包まれて行く。

「おい」と、要吉は背後から神戸を喚んだ。「君はド、キンゼイの『鴉片喰ひ』を知つてるか」

一知らない」

「僕も知らない。が、あの頃の連中はラムでもコールリツヂでも皆鴉片を吸入したもんだつて

ね。」

「うむ、鴉片はいい、少くともアブサンよりはいいだらう。」

一寸飲んで見たいね。だん／＼量を多くするにつれて、意識が朦朧として、影が薄く成つて行くのはいいぢやないか。」

一漫性の自殺か、それもいいだらう。」

二人の語はしばらく途切れた。

村を一周りして、二たび神戸の家へ近づいた。座敷へ上り込んで、又尻を落着けたが、何うも談話が湧えない。何だか最後の言葉と言つた後のやうな氣がして、別段言ふこともない。

其夜十一時を過ぎて、要吉は漸く友の家を辭した。水道橋迄電車で来て、そこから砲兵工廠の練塲について歩き出したが、角の交番に人簇りがして居る。何心なく立ち寄つて見ると、一人の醉漢が巡查に小突かれて、何やら聲高に喚いて居たが、手暴く突倒されたと見えて、地面に平這つたまゝ、急に聲を上げなく成つた。死んだものの様に口も利かなければ身動きもしない。見物人は詰らなささうに一人散り二人散つた。

要吉も足を留めて見て居たが、  
「此男の遣方の方が手取早い」とひとり呟いて、又すた／＼と歩き出した。

桃の花の色を褪まして、春の激雪が降つた。朝の強い日影に照されて、早や乾きかけた街の上には、ちら〜と水蒸氣の立上るのが見え

た。此日、要吉は小舟町の或銀行へ行つて、故郷から取寄せた小切手を金子に換へた。又泥濘の道を大通りへ出て、電車で猿樂町の教會迄來た。

今日は此處で金葉會をひらく日である。尤も、女學部は學年試験を卒へて、二日前から春の休暇に成つた。教會の窓は盲目の目の様に閉されて玄關の戸だけ一枚開いて居るが、會堂の中はたゞ薄暗い。要吉は街の眞中に突立つたまま、少時思索して居たが、つと振返つて、向側の珈琲店へ這入つた。朝の間だから他に客もない。毎時掛ける片隅の椅子に腰を下したが、其儘兩肘を立てて額を支へながら、凝手と考へに沈んだ。

最う一度朋子に逢はうと思つて此處へ來た。二人の關係を終るには、切めて幕切なりと好くしたい。出来ることなら言ふことも言ひ、聞くことも聞いて、すべて精算した上で二たび相見ないやうに成りたい。併しそれは無理な註文か

も知れない。實際世の中では、何事に據らず、斯うしてぐづ〜と片附いたとも片附かないとも分らぬ間に、何日となく済んで仕舞ふものでも有らう。それを思ふと堪へられないが、其可厭な心持さへ何日連続くものでもなからう。人間が絶望するのは未だ好い。絶望の悲哀よりも生き延びるのは堪へ難い。斯んな事を思ひつづけて、給仕の女が持つて來た珈琲茶碗の冷めたのも知らなかつた。

此時、不意に入口の戸を開けたものがある。要吉は額に當てて手を外して、ほんやり女の額を見上げた。朋子は血相變へて齒を咬ひしげたまゝ、眞直に要吉を目驚けて、這入つて來たが、突然懷中から四角な状袋を出して、  
「今直ぐこれを讀んで頂きます」と、男の前に突附けた。

「これ迄の手紙とは違ふのですから——これが私の言へるだけの眞實の心持なんです。今朝からひとり教會の二階にお出を待つて居ました。讀んでお仕舞ひに成つたら何卒彼方へ來て下さいまし。屹度御返事が伺ひたい。」  
斯う言ひ捨てて、其儘男の返辭も待たずに出て行つた。

懷中の長い手紙は終に出された。要吉はそれ

に手を懸けたまゝ、少時思ひ煩つたが、思ひ切つて取上げると直ぐに封を切つた。一尋に餘る巻紙に苛々した鉛筆の走り書きがつゞく。

先達て不意に御宅へ伺ひしこと、何と思召し取り下さつたでせう。私は最う堪へられなく成つた。是迄先生を懸き、自己を偽つて、心にもなき言葉に行為に酌送自己を晦まし得る積りで居りましたが、

最う駄目です。私は無残に敗れた。血と肉との續く限り争つて見ましたが、最う自分で自分を制御することが出来なく成つた。此前お目にかゝつてから今日迄、一週間は全く夢中で生きて居た。徹宵靜坐も續けて見たが、何の甲斐もない。昨日は朝から家を出て、王子の友達に會ふ積りで海禪寺へ行かうとしましたが、途中で會つても仕様がないと云ふ氣がさしたから、圖書館へ這入つて、一日人と物を言はないで暮しました。今日も一人目白僧園へ行つて、彼處の欄干に凭れて、綱

の様に成つた木の間から冬ざれの田圃を瞰下して居たが、矢張如何することも出来ない、如何しても日頃の冷靜な自己を

取返すことが出来ない、で、又ふらふらと其處を出て、宛もなく街の中を彷徨ふ間に、二三度も轉けて路上に倒れた。其儘意識を失つて、再び立たなかつたらとも思つた程です。

此頃は家の者も心配仕出したので、取分け母の顔を見ると氣の毒で堪へられませんから、今夜も早くから自分の居間へ閉籠つて、誰が来ても動かない様にして居ますが、私が最う駄目だ。先夜の夢は戻つて来た。何度でも繰返して執拗く戻つて来る。空虚な夢は紙に肉附けられねば止まぬ。最う抵抗する力が無い。私は永遠に失はれた。

私は失はれた。此手紙は胸に取返しの附かぬ痛傷を受けて、死者狂ひに成つた女が最後の努力である。書く、書く。この上は只書けるだけ書いて、一歩でも先生に接近する道を求める外はない。何日ぞや先生は私をスライクスのやうな女だと仰有つた。先生は最うおぼえて被坐しやらないかも知れない。が、何故私はスライクスのやうな女に成らなければ成らぬか。敗北したことを切りに感

じたからです。私はスライクスのやうな態度を装つてならば、何時でも先生と握手する資格がある。けれども、今これを書く間は、先生と眼と眼を合せるとは逆も出来ない。私の苦痛は私の口から誰に向つても言へない、無論言つた所で同情同感などして呉れる人が有る筈もない。私には友達もない。家もない。一人で堪へて来た、最後迄闘ふつもりで生きて居た。若し私に自分を非我がの地位に置いて觀察する習慣がなかつたら、疾うに狂したか、今頃は如何成つて居たか分らない。唯、私は一方バツシヨンに驅られて動いて居ると同時に、他方には餘裕のある我が見て居た。餘りに怖ろしい迄勃發しきうに成ると知つた時は、大抵意力で制御して仕舞ふ。私は自分を制御する上に始終坐禪の力を藉りて居る。私は禪の思想を口にする資格はない、只自分を制御する上に使つて居る。

何日ぞや御同行した日暮里の兩忘庵は、私がたい物好から彼處へお連れ申したとも思つて被坐したかも知れませんが、あれは私が三年前夢中に成つて坐つて見

性した所なのです。それで先生と闘ふ時彼の家を一度見て置きたく成つたのです。先生もお聞き及びでせう、釋宗活と云ふ坊さんを。

けれど、それも最う駄目です。私は最後迄来て仕舞つた。最早私には何物も残されぬ、有るものは只恐怖と不安との連続である。靜に自分の最後を味つて死ぬと云つたけれど、それさへ今の状態では覺えない、最う叶はぬ。私は先生の御手にかゝつて死ぬ——殺して頂く。

勿論、日夜それ許り考へた上で極めたのですから、此決心は動かぬ。只一つ遺憾なのは、私が死んでから先生が如何變化して行くか、それを見ないのが残念で堪らないのですけれど、斯う成つた上はそれも仕方がない、思ひ切る外はない。

三月十九日夜半

小島先生

御許に

此手紙は直接手から手へ渡すべきものだ。

一昨日の眞夜中に書いたものらしい。要吉は

一旦ずつと眼を通して、又初めへ戻つて二三行読み掛けたが、わな／＼と震ふ手に巻返した。終に其日が来た。自ら招いた總ての力の壓迫を一身に受ける日が来たと思ふ許りで、頭の中は白紙の様に何の考へもない。何の感情も動かない。不意に帽子を取つて立上つた。又想ひ出した様に組入から珈琲の代を出して拂つた。其儘後をも見ないで街の上へ飛出したが、急に足を緩めて、

「殺せと云ふのは、斷念せよといふ他の言葉ぢやないか」と、われにもなく呟いた。  
兎に角教會の玄関を這入つた。二階へつゞく梯子段を綾首臺へでも上るやうに、一段づつ刻んで、俯首れながら登つて行く。其時上からも朋子が降りて来た。互にそれと知りながら、なほ一足づつ近づいて、二人は梯子の途中で行違つた。要吉は下から女の顔を見上げた。見る見る女の眼瞼の下から大粒な涙が持上つて、はらはらと頬から襟に傳はつた。朋子はそれと欄干に凭れて顔を背向けたまゝ、それを拭はうともしない。要吉は眼の當り人間の魂の苦痛を見るやうな氣がして、唇く物が言へなかつた。無言の間五分間経つた。やがて男は女の顔から眼を離さないで一步退つた。朋子も一步隨

て来た。二人は梯子段を降りて、こつそり其下の扉をあけて這入つた。

人氣の絶えた會堂の中は、人の肉を得て、急に四方から陰森の氣が迫る様に思はれた。要吉は椅子を引寄せて、女の座を設けたが、朋子はそれに掛けようともせず、男の傍に立つて居た。少時して、要吉は口を開いた。

「お手紙は——確に讀みました。一  
女は涙を一杯溜めた眼に男を見返したが、只點頭いて見せた。  
「貴方に接近する爲なら、私は何んな事でもする。何んな事でも躊がぬ積りだ。唯、あれぢや未だ解らない、あれだけぢや——」  
朋子は屹と成つた。

「ね、あれだけぢや」と、要吉は言葉をつゞけた。「あれ以上言へないのか、あれより外に言つて呉れることは出来ないのか。」

女は靜手と睫毛を伏せたまゝ、何とも言はない。要吉は苛々しながら女の返辭を待つて居たが、何時迄も黙つて居られる苦しさに、

「それぢや聞かない、強ひて聞かなくとも可い」と投出す様に言つた。「私はどうせ何も知らず

に貴方に隨いて行くのでせうよ。」  
朋子はつと男の腕に取纏つた。男は片手を

出して支へながら、只、あの夢とは？ 夢とは何です、一  
一步背後へ跟けたまゝ、女は凝手と男の顔をみ詰めた。

「あの夢とは、手紙の中の夢とは？」  
「それを私の口から——」  
「言へない——」

女は點頭いた。かたりと椅子の倒れる音がして折重るやうに、二人の……  
「私は負けた。あゝ、最う私は——」  
女は男を押退ける様にして立上つた。

此女の愛は——愛は此女に取つて勝利である。自分が此女から愛せられるのは、此女が負けた時である。血汐の中に、た打ち廻つて居る時である。そんな風で愛せられるのが何の嬉しからうぞ。要吉はデレマの上に立つた。少時敵意を有つた眼に女の顔を見据ゑて居たが、

「それぢや」と、何やら不圖想ひ着いた様に前へ乗出して、「何日かの朝私の許へ飛んで来たのも——」  
「矢張悪い夢に魘はれた後でした。」  
男はたゞ息を詰めた。

「そりやア生死の争ひだつた——海の暴風

雨の様に怖ろしい」と、女は夢見る様につゞけた。「私は最う一人で生きることが出来ない。」

「二人で生きること——？」と、要吉は相手の顔を覗き込む様にした。女は石の様に動かない。

「何故、如何して？」

「この上生かして置くのは餘り酷い。一日生きて居れば、一日だけ悲惨な死方をするだけです。」

斯う言つて、思はず延上る様にしたが、「先生だけは知つて居て下さると思つた。それでなけりや上野の森で、あんな眞似は出来ない。」

「上野の森で？」

「解つたでせう」と、塔から飛び下りるやうな聲で言つた。

「私は最う自分の疾病と争ふのに勞れた。私の運命は水の墓か、癡狂院か、二つに一つを選ぶ外はない。」

火か、さらずば水——それは最初に此女から聞いた言葉だ。それぢや、此女の正體は火で有つたのか、火は駄目だから水に漬くと言つたのも、左様云ふ意味で有つたのか。火が火に着けば、自ら亡びる外に道は有るまい。

「それで」と、要吉の聲はかすれた。「それで水

の墓を選んだのか。」

「先生も——私を癡狂院へ送るやうなお心持は無いでせう。」

要吉は黙つて女の顔を見詰めた。人並外れて思ひ上つた女が、自他の辨別も無く成つて、鐵の棒を立てた檻の中で荒れ騒ぐ——そんな怖ろしい將來の運命を明かに見ながら、じり／＼と自分を制御する力が衰へて、負けて、狂つて行く。それを又自分で眼を離さず見て居る。何といふ奮闘を續けて来たものだらう。而も一人で、全く一人で、絶望的に——最後の勝利は水の墓の外はない。

要吉は黙つて手を出した。朋子はつと其手に縋つたが、其儘男の膝に顔を埋めた。それが如何にも狂人の殘酷な心から、相手を誘惑して同道に引摺り込まねば置かぬ、一緒に狂ひ死にさせねば置かぬと云ふやうに見えた。

何れにもせよ、自分は性に過ぎない、此女の性に過ぎない。

「私は殺せる、貴方なら殺せる。」

他から促されてもするやうに口走つた。此女を失ふまいと思へば、此女を殺す外はない。

朋子は眼を上げて、屹と男の顔を見遣つたが、二たび顔を伏せたまゝ、聲を立てて獻獻く。要

吉は手を携いて女の泣き止むのを待つて居た。其間、少し落着いたのを見て、

「其日は？」と、小さな聲で訊く。

「何日でも、先生の好きな時——」

「早い方が好い。」

女はむつくり起直つて、少時考へて居たが、「明後日の朝十時迄に、海禪寺へ来て下さいませ。私はそれ迄に其處へ參つて居ります。」

朋子は起直つたついでに、袖で涙を拭いて、居坐ひを正した。要吉も並んで腰を掛けたが、身體が甚くがつかりして、恰度二人が難船して無人島の荒濱へ打上げられたやうな氣もした。何も言ふことがない。玄關から吹込む風に煽られて、入口の扉がぱたんと大きな音を立てて閉まる。又開いて、又閉まる。二人はそれに見枕れて居た。

やがて朋子が振回ると、自分の顔を見て居られたので、眼に露を有つたまゝ、につと唇を綻ばせたが、二たび男の腕に凭れようとした。

「最う此處を出ようか。」

「ええ。」

二人はそれと立上つた。金葉會の連中が申合せた様に出て来ないので、會堂の中はひっそりとして居る。で、玄關を降りようとした時、

何かに躓いたと見えて、朋子はよろ／＼と地面に膝を突いた。髪の中の根元迄顔を振らめながら、袴の泥を拂ひ／＼立上るのを見遣つて、

「え、負傷をしないよ？」

「いゝえ」と、傍へ寄つて来て、「此頃は好く轉ぶんです。」

何やら想ひ出した様にくす／＼笑つて居た。

要吉も片頬に笑ひながら、一町餘り一緒に来たが、町の曲角迄来ると、

「ぢや、此處で二と立停つた。一人に成つて考へたかつたからだ。」

朋子は泥濘の道を一文字に歩いて行く。少時其後姿を見送つて居たが、又／＼飯田橋の方へ向つた。一人に成つて見ると、又何がなしに淋しい。未だ言残した事が有るやうな氣もして後を追掛けて見ようかとも思つたが、思ひ返して止めた。

飯田橋の上に立つた時、不圖、今朝出掛けから見舞ひに行く心算で居た或亡友の遺族のことを想ひ出した。今度其友の遺稿を出すについて、本屋との交渉を略纏まつたから、旁々それ知らせに行くのだ。其人達は半込の奥に住んで居た。で、／＼神樂坂を登りながら、要吉の眼には去年の夏纏れたやうな炎天の下に、こつ

そり友の柩を送つた寂しい行列が泛んで来た。友は人を愛せず、又人にも愛されなかつた。大學を出て間もなく死んだので、其名を記憶する人も有るまい。今頃遺稿など出されるのは、故人の本意でないかも知れない。自分も一萬一そんなことに成つたら——後に何物も残したくない。嘗て此土の上に足跡を印したことがないかと思はれる迄、清潔に此世から忘れ去られた

友の家では母屋を他人に貸して、裏の離座敷めいた小家に住んで居た。阿父さんは非職軍人とかで、縁側に火桶を抱いて坐つて居たが、眼だけぎよろりとして、むくんだ顔が何處やら病人らしい。要吉の來意を聴いて、やつと安心した様に重たい口からぼつ／＼と自家の事情を語つた。死んだ息子ばかりでなく、其兄弟が皆虚弱で、後から／＼と一人づつ取られて行く。此

後に男の子として季の弟一人しかいないで、健康やら活計上の都合やらで、近く一家を擧げて沼津へ引越すのださうな。こんなじめ／＼した話を聴いて居ながら、要吉は妙に心が浮つて居た。何だか自分の役でない役目を勤めて居るやうな氣もした。

其家の門を出た時ははつと息を吐いた。枳殼

の垣根についてそろ／＼足を運びながら、兎に角、生前にすべき事を一つだけ済ましたやうな氣がした。同時にそれだけ前途が詰つたやうな氣もした。何時の間にか暮れたのか、毛筋のやうな雨が降つて居る。

それにしても——要吉は二たび女の上に戻つた。それにしても、あの女の言ふやうな、そんな事が有り得ようか。長い間に被さつて居た重荷の除れた嬉しさに、一も二もなく女の言ふことを承認して来た。けれど、女の通りだとすれば、あの女は——何日ぞやあの女の口づから、自分は女でない、如何してもそんな要求の起らない身體だと聴いた。それは全然裏腹だ。

が、それ迄にして女が男を纏弄する——何うもそんな事は考へられない。「女でない」と言つたのも、只わが身の苦しさに、左様云ふ境地を夢みながら、辛うじて生きて居るのだとすれば、極端から極端に走るあの女の性情として、さのみ不思議ではない。それに上野の森で見たあの女の狂態も、強ひて女の言ふ様に解すれば解されないでもない。が、それにしてもエロトマ

ニヤとは彼様なものだらうか。何うも左様は思はれない。あの女にしても、あの怖ろしい多感

性が自制を困難にして感情の暴ぶが儘に任せた時は、自分ながら不安の念に堪へないことも有らう。それが爲に苦悶が内部に湧いて、烈しい倫理上の葛藤に對する不完全な渴望から、自分を動物性に墮落したものと想像して嫉しむ——そんな事がないとも言はれない。若し左様だとしたら——それだけの事だとしたら——

が、併し——と、やゝ有つて又考へた。その女の狂氣を此方から癒すことが出来ないとすれば——あの女を自分の手から離すまいとすれば、あの女をあの女の言ふが儘に狂氣にして置く外はない——あの女の言ふことが事實にもせよ、想像にもせよ、何方にしても同じ事だ。自分はたゞ一刹那あの女と同化し得れば可い。只一瞬間。それに依つて萬事休す矣。

實際、自分は女を殺さうと言つた。そんな怖ろしい事を口にする自分は、それぢや怪物か。いや、犠牲に過ぎない。あはれな、牲に過ぎない。あの女はあの女自身のために死ぬ、死はあの女に取つて一種の勝利である。それに自分は——自分はあの女を手を掛けるかも知れない。が、殺されるものはあの女ぢやない、自分自身である。あゝ、自分は今日迄他人が自分の爲に死ぬものだと思つて居た。自分が他人の爲

に死なうとは夢にも思つて居なかつた。何んなロマンズに於いても、自分が主人公に成れると思つた。脇腕の役を勤めようとは思はなかつた。が、それも成行なら仕方がない。只切めては自分が死んだと聞いたら、後から隨いて死ぬ女の一人位は有りたい——要吉は後に遣して行く女の顔を一人々々心に泛べて見た。そして小雨に濡れながら江戸川の終點に立つて、ぼんやり電車を待つて居た。

松ヶ枝町で電車から下りた時は、雨がびしよびしよと降出した。頭からづぶ濡れに成つたまま明神下の横町を曲つてお種の家の格子戸の前に立つた。こと／＼といふ足音を聞附けたのか、上り框の障子を開けて羽織を着た女がすらりと立つた。

「まあ大變！」  
お種は大業に男の姿を眺め遣つたが、下駄を穿いて、格子戸の樞を外して呉れた。  
要吉は黙つて土間へ這入つた。上り框に腰掛けて、雨水に濡つた靴を脱ぎ難さうにして脱いだ。女が外套を受取つて縁側の竿に掛けに行つた間に、茶の間へ通つたが、灯火が一つ點いてる計りで、誰も居ない。お種は戻つて来て、遽つて座蒲團をすゝめた。

雨はしと／＼と降る。要吉は氣味悪さうに何處も半巾を出して、頭筋の邊りを拭つた。お種はそれに氣が附いたが、平時と容子が違つて居るので、時々男の顔を偷むやうに見遣りながら、其語を聞かうともしなかつた。要吉も別に説明しようとはしない。

「姉様は？」と、少時して口を開いた。  
「今一寸お湯へ」と、背後を見返つたが、又元の通りに向直つた。

「皆様お變りはないか。」  
一え、相變らず。

要吉は最う何も言ふことがない。何の爲に此處へ来たのか、自分でも解らなく成つた。折柄、又格子戸の開く音がした。お種の姉が湯から上つて来たものらしい。茶の間の障子を開けて、何氣なく顔を出したが、

「おや、被入しやいまし」と、下町の主婦さんらしい丁寧な挨拶をして、  
「何卒御免なさいましよ」と、石鹼や濡手拭を掛けに行つた。

やがて又茶の間へ戻つて来て、長火鉢に寄添ひながら、  
「何だか鬱陶しう御座んすねえ。おや、濡れたまゝで被入した？ 何故着代へて頂かないんだ

え。あれが未だ一度も手を通さないから良人のあれが好いよ。」

「私なら直ぐ歸るから」と、要吉は口を挿んだ。「まあお宜しいでせう。良人も直き歸つて参りますから、今夜は何卒御寛り遊ばして。」

「姉さんと、お種は姉の顔を見て、「あれは如何なものか。此間阿母さんが持つて来たのが、今日漸と仕立上つたから、未だ重しが掛けてあるけれど。」

「左様、そんなものが有るんなら早くお出しなさりや可いのに。」

お種は向うの部屋へ行つて、仕立板の下から銘仙の袴を持つて来た。要吉が去年着たのを洗ひ熨りに出したので、何日の間にか此處へ持つて来て仕立直したものと見える。要吉もそれを着て見るやうな心持に成つた。で、立上つて手を遣すと、姉妹二人がかりで仕立縫を取つて呉れた。種はなほ袖だの裾だのを引張つて見て、

「好い、好い、よく出来た」と、獨言の様に言ふ。お種は下を向いて睨捨てた洋服を櫛んで居た。

こんな夜は小さい時分の事が憶ひ出されると言つて、二人の姉妹は火鉢に鐵網をかけて、か

き餅を焼いた。お種は割合に言葉少なにして居たが、姉は一人ではしゃいだ。要吉もたうとう十時頃まで居た。始終自分が如何して斯様にして斯んな話をして居られるかと疑ひながら、矢張ぐづ／＼と相手に成つて居た。そして、何も言ひ出さないで、杜時計が十時を打つのを聞いて立上つた。

雨傘をさして寝静まつた町の中へ出た。物足らぬといふ感じの外に何も残らない。何と思つて女に會ひに行つた。たゞ女の涙が見たかつた。女が遺骸の上に注ぐ涙を生前に見て置きたかつたのだ。併しこんな不純な心持が本當に死を決した人の心に泛ぶもので有らうか。眞個要吉は死よりも死が齎すものを望んで居たらしい。

三十二

中の一日は、朝からじめ／＼と雨が降り續けた。要吉は居間に閉籠つて、これ迄自分が關係した仕事の中で、早速片附けて置かねば他人の迷惑になるものだけを調べにかゝつた。平氣で死ぬ準備をすると云ふことに、一種の興味をおぼえながら傍目も振らず手と目とを動かした。

小母さんは二度茶を煎れて持つて来たが、それも邪魔に成ると思つたかして、直に引退つた。夜の十一時頃迄に漸く一通り片附いたので、茶の間へ行つて見た。近頃は小母さんも年を取つたのが目に立つ。努めて何かと話しかけたが、頻りに睡さうで氣が乗らない様に見えた。洋燈も油が乏しく成つたと見えて、幾度かを上げて見ても見る／＼四邊が薄暗く成つて行く。要吉は云ふべき言葉もなく、老婆の瘠せて陰影に成つた顔を眺めて居た。間もなく居間へ戻つた。其日は来た。雨上りの空が蒼く暗れて、樹の枝に露が滴つた。彼岸の入りだと云ふので、小母さんは心ばかりの用意をした。要吉は平時の様に朝飯の膳に向つたが、何気ない體で、「今日は千葉送行つて来ようと思ふが」と言出した。「千葉へ？」と、小母さんは眼を睜つた。「急な用事が出来たから」と、遮つて言譯をしたが、「今夜は歸らないかも知れんが、明日は屹度歸る。」

直に立上つて身支度をした。小母さんは飽氣に取られたから手傳つた。要吉は小母さんの氣が附かぬ様に、一昨日銀行から受取つた金子の折半と、それが用途を指圖した一封の手紙とを用算簿の中へ入れて置いた。

門外迄つか／＼と急ぎ足に出て、一寸橋の上  
に立停つたが、其儘後を振向かなかつた。

三丁目から電車に乗つて、淺草の門跡前で降  
りた。わく／＼しながら、松葉町の寺を訊ね

て行くと、海禪寺は容易く分つた。門を這入る  
時、偶と自分は此寺へ何爲に來たのだらうと思

つた。何爲にとは、要吉が最も考へるのを恐  
れた所だ。成るべくなら終ひ迄自分が何を爲て  
るかも忘れて居たい。

境内は閑かに、一株の老松が門邊を支配して  
居た。只、左の方に學校か寄宿舎か、ペンキ塗

の不恰好な建物が見えて、庭に石炭殻を敷いた  
のが稍うとましい。

要吉はぼんやり玄關の前へ立つた。衝立を一  
枚立てたきりで、開放しだから奥の方まで見透

せるが、森として物音一つしない。二三度聲を  
掛けても、誰も應ずるものがない。不圖、朋子

は來て居ないのぢやないかと云ふやうな氣がし  
た。本當に彼の女が來て居なかつたら、最初か

ら自分を騙したのだとしたら——只自分を騙さ  
れたといふだけで、實際にも何事も起らずに済  
む。未だそれにも曉くはない。——要吉は衷心  
自分がそれを、養つて居るやうな氣がして、思  
はず後を振回つて見た。

其時、腰衣を着けた若僧が一人鋪石の上を  
横切つて駈けて行く。喚び留めて、これ／＼の  
人はと訊くと、直様心得て走つて行つた。女は  
矢張來て居るらしい。

間もなく廊下の向うから、朋子が小走りに出  
て來た。敷臺へ降りて一禮したまふ、二人は顔

を見合せて立つた。やゝ有つて、  
「ちや」と要吉は片足引いた。

「少し、少し待つて下さいまし、友達が來て居  
ますから、一寸左様申して參ります。」

要吉は黙つて點頭いた。朋子は其儘引回した  
が、やがて二たび現はれた。

玄關を降りる時に、朋子は小さい女靴を穿い  
た。服装は二人が初めて水道橋で出逢つた日に  
着て居たものらしい。

二人は門を出た。要吉は何處へ行くとも告げ  
ないで前に立つて歩いた。門跡前から藏前の通

りへ出て、須賀橋詰の或銃砲店の前へ進來ると、つ  
と其店へ立寄つた。少時經つて其店を出たが、  
路傍の柳の下に待合せた女の側へ來て、

「ね、拳銃は賣るが彈丸は賣らないさうです。  
近頃新聞などの廣告を見て、警察の認可證が無  
くとも可いことに成つたんだらうと、一人極め  
に極めて居たんですが——と言ひながら、何だ

か自分の行爲がわざとらしいやゝな氣がして、  
女の手前恥かしかつた。要吉のつもりでは、只  
かうして自分をぐんぐん引返し難い境地に連れ  
て行きたかつたのだ。

「左様でせう」と、女は平氣で居る。

「左様だ、貴方に訊けば分るんでしたね。お宅  
には乾度有る筈だ。」

「え、ですが父の居間に所藏つて有るんです  
から。」

二人は足の向いた方へ宛もなく歩いて行く。  
「それでなけりや不可いんですか」と、やゝ有つ  
て、朋子は一言づつ區切りながら言つた。「短刀  
なら、私がつて居ますが。」

短刀！ 要吉は右の腕が痙攣するやうに覺え  
て、竊と自分の掌の甲を見遣つた。

「此處に？」  
「直ぐ自宅へ歸つて取つて參ります。」  
男は稍躊躇つた。

「是非それにして、是非——私はそれが好い」  
と、女は急に子供の強請るやうな容子をして見  
せた。

「ちや、私は何處で待つて居ませう？」  
女は腫れぼつたい眼臉を伏せたまふ、少時考  
へて「停車場なら、田端が一番近いんですが！」

「田端に？」

二人は落合ふ先を約束した。それから又電車に乗つて、上野山下まで来た。男は人力車を備つて女を乗せながら、

「貴方の来るまで、私が耐へさせられる苦痛を記憶えて居て下さい。」

朋子は眼で點頭いた。女の乗つた車は見る間に屏風坂の方へ走り去つた。

それを見送つたまま、要吉は二たび上野の停車場へ出て汽車で田端へ来た。

岸についた坂を上つて、道の二筋に分れる處に、一軒御休憩所とした家を見附けた。二階へ上つて見たが、氣ならぬ儘に又其家を出た。

其邊の雑木林の中へ這入つて、小路といふ小路を隈なく歩いた。

午後一時に成つた。前の家へ戻つて見たが、朋子は未だ来て居ない。何よりも考へるのが怖ろしいので、又引返して村の中へ這入つた。裏の菜畑の中に的を設けて自妻の隠居と酒屋の御用聞きらしいのが夢中に成つて大弓を引いて居た。其處にも久らく立つて見て居た。

何時の間にか、空がどんよりと曇つた。一步二歩と村を出て、われにもなく駒込へ行く道を逸つた。此邊は一帯に先頃迄田圃の中であつたが、

つたが、兩側に新しい借家が建つて、だん／＼町を形造つて行くらしい。今も屋根に梯子を掛けて、酒醬油卸小賣所と筆太に看板を書いて居る男があつた。犬が二足駈けて来て、往來の真中に噛み合つて居たが、又向う裏の明地へ駈けて行つた。何だかこんな些細な事にも心を取られるのが自分ながら可訝しい。

駒込遊病院下の坂まで来て、一寸立停つたが、又徐々上つて行つた。

遊病院の側の細い路を曲つて、板塀の盡きる所迄行つて見たが、又中途迄引返した。塀に添うて立てた往來安全の角燈の下に、長い間行き所のない人間の様に佇んで居た。衣囊から巻煙草を取出したが、生憎燻すが無い。四邊は日が暮れる様に薄暗く成つて、霰が二つ三つ帽子の縁を掠めてはら／＼と降つた。又半町許り歩いて、駄菓子だの草履だのを賣る店の前に立つた。裏口まで見透せるやうな小さい家だが、火の氣の無い火鉢の側に、六つ許りの女の兒がしく／＼と泣いてる許りで、店の人は居ない。

「燻すをお呉れ。」

女の兒は兩手を眼から離したまゝ、戸口に立つた人の顔をじろ／＼眺めて居る。

「燻すをお呉れでないか」と、要吉は故と微笑む

様にして言つた。

つか／＼と立つて薄汚れた手に燻すを掴んで差出した。

「幾許？」

「一錢お呉んな。」

要吉は裏口から錢を出して擲つた。其處を去つて、富士神社の前から古祥寺の通りへ出た。雨まじりの霰がばら／＼と降つては、又小止む。

町の角に小さい稻荷堂がある。此處を曲れば朋子の家に一町とはいはない。一寸足を留めたが、顔を見知られぬを幸ひに、其家の前まで行つて見ようかと云ふ様な心持に成つた。二三歩足を移した時、その人力車宿からつと一人の女が出て来た。女は朋子だつた。平常着に紅い帯を締めて自宅の使ひにでも出たものらしい。

朋子は男と顔を見合せたまゝ、側へ寄つて来て、「十時迄には乾度出て参りますから——十時迄に。」

何やら闊く鼻着してる様に見える。要吉は唯黙つて點頭いた。そして直に踵を回した。女も急いで戻つて行つた。

男を待たせて置いて、平常着に變へて平氣で自宅の用をして居る。要吉も變に思はずには居

られない。が、一旦家へ戻つたら、そんなに容易く出られない事情も有らう。それには又家の人達に油断を爲せる必要が有るかも知れない。左様思ひ返して、女の言ふが儘に待つことにした。

が、それにしても——要吉の考へは再び同じ所を徬つた。此處で若し朋子に逢はなかつたら、二人の運命は如何變じたらう。それは自分にも解らない。何だか此處を違つたと云ふことだけが、二人の運命を支配して居る様にも思はれる。併しかう成つたよは仕方がない、仕方がない。

十時まで——それ迄は何處かに時間を消さなければ成らぬ。やがて追分へ出たが、今朝出た丸山の家も程遠くない。あの家にも六年近く棲んだ。他所ながら最一度見て行きたい様にも思はれる。が、それと心を決しかねて居る間に、又大學の前迄来た。

一二たび此上を踏むことは有るまいと、そんな思ひを味ひながら、街の上に立つて見渡した。不圖、向うから一人高い襟をした男の遣つて来るのが眼に着く。要吉を見て、遠方からにやにや笑ひ掛けたが、通りすがりに帽子を脱つてお頭をした。自分を知合と思つて居るらしい。

何と思つたか要吉は青木堂へ寄つて、ウキスキイの大壺を購つて下げた。又三丁目へ出て、切通しの坂から池の端の賑やかな街を抜けて、二たび上野の停車場へ着く。汽車に乗つて田端へ戻つた。

崖の家の二階へ上つて、障子を開けると、冬枯の樹の間から八州の平野が見渡される。窓の園の上に肘を突いて、暮れて行く空と野原とを見守つた。

「此日は二たび来ない。自分は取返しの出來ぬ一歩を踏み出した。」

こんな感じが暮々と胸に迫つた。自分は此日を失つた、過去を失つた。總ての持てる物を抛つて、一瞬時に殉じようとして居る。其一瞬時は未だ來ないのに、既に總ての物を失つた。生れて、此日ほど取返し難いと思つたことはない。

要吉はつと立上つて、薄暗く成つた部屋の中をぐる／＼と廻り出した。そこへ女中が洋燈を持つて来た。で、又其前に坐つたまま、擬乎と火影を見詰めて居た。死刑囚が刑の執行を俟つ間の苦しみは何んなものか知らない。要吉は一生の間に此一夜を経験した。

やがて又女中が膳を持つて来た。づぶの山出

女と見えて、何かと物を言ふたびに、いッいッいッと身體を揺つて殆ど聲を立てないで笑ふ。それが側の目にも苦しうに見える。要吉は可厭な心持がしたので、箸を附けたまま、直に膳を下げさせた。

又一人と成つた。死の覺悟して、ひとり火影に對する人の心持は斯んなものだらうか。昔から死んだ人の心理を書いたものはない。有れば皆、死なない人の書いたものだ。自分は死なない人の妄想を實現しようとして居る。死を決したから總ての物を捨てたのぢやない、死を決する爲に總ての物を捨てたのだ。何を捨ててもあの女の運命について、最も重大なものを我手に握りたいと思ふ。唯此思ひに、人間に許されざることを敢て爲よう決心した。此決心は筒迄動搖しない積りだ。唯、此決心が動搖しなければいけない程、如何いふものか、それが不合理で、奇怪で、てんで遂げられない事の様に思はれた。勿論自分では、一番善い道を決つて居る、此外に執るべき道はないと信じて居るのに、自分の意志に反して、そんな心持が絶えず頭を擽げた。が、これ迄自分の生涯は一つとして此處へ到着する準備でないものはない。

一歩々々此處へ近づいて來たのだ。今日迄の何

れの日も取返されぬ様に、明日も最早動かせない。運命は二人を連れて行く處迄連れて行かねば止むまい。

か、傳し——と、要吉の心は再びわれに反つた。此處迄出て来てから、なほ運命に依順し、相手に依頼して居る自分は、何といふ卑怯者ぞ。此上は只朋子が待遠しい。早く朋子が来て呉れば可い——

九時を打つた。要吉は外套を被つて戸外へ出た。木下圃の暗い坂を降りて、停車場の間表を見に行つたが、十時五分に高崎行の終列車があることを見定めて戻つて来た。此家の勘定を済まして、何時でも立たれる様にして置いて、壁に凭れたまゝ眼を閉ぢた。

戸外の夜風が耳に響く。幾度か物音に驚いて立上つた。最後に一輛の人力車の駈けて来る音がして、坂の上で停つたかと思ふと、車夫が聲高に物を置ける聲がして、車上の女の聲も交つた。

要吉は第一段を駆け降りた時には、車夫が氣たゝましく大戸を開いて、女中か送つて戸を開ける所であつた。要吉は黒緞のコートを着て、せいりく息を切らしながら土間へ這入つて来た。

二人は二階へ上つて、少時顔を見合せたまま、何とも言ふことが出来なかつた。

要吉は人の世に許されざる罪を犯した。あゝ、二人とも失はれた。

女は男の腕に身を委ねたまゝ長く纏れなかつた。

「ギヤア直ぐに。未だ終列車には間に合ふ。一冊子は點頭いた。其儘二階を駆け降りて、戸外へ出たが、終列車は極度渋滞して暗がりの坂を降りた。停車場の入口へ着いた時、死傷場所と云ふことが此間際に成つて急に頭へ泛んだ。

一山か、海か。一

要吉は聲に力を含めて叫んだ。

「山」と女は一言答へた。

直ぐに切符賣場へ行つて、西宮須野驛行の切符を二枚買つた。

女は此時既に架橋を渡つて居た。要吉は後から走り着いた。車掌が二人を乗込ませて、磔と戸を閉めた時、汽車は動き出した。

二人は車室の片隅に座を占めて、ほつと息を吐いた。二三の旅客は頭を擡げて此方を見遣つたが、何やら懶けに呟いて、又背後へ凭れる

のも横に成るものも有つた。何だか沙漠を彷徨いて、高の天幕の中へでも閉入したやうな心持である。

汽車は武藏野へ出た。平野の暗闇を劈いて走るので、車輪の音が一層大きく聞えた。それが遠くへ成るかと思ふと又自分の身體の上へ突掛ける様に大きく成る。天井から下つた薄暗い洋燈の光を見詰めて居ると、汽車は前へ進むの

か後へ退るのか分らない。其薄暗い洋燈の下に、殺す人と殺される人とは無言で相對した。女の顔は影に包まれて動かない。男は二たび殺されるものは女ぢやない、自分だと思つた。女が驚い、汽車は此二人だけ乗せて、華園の中へ突入つたまゝ、再び歸りたい様にも思はれる。

やがて大宮へ着く。要吉は女を促して汽車を出た。明日の朝汽車を待つて東北へ向ふ積りである。他に行くべき場所も手段も残されぬやうに、此處で降りたのは何れも分らない。二人は停車場を出て大通りを一町許り行つたが、何處の家も寝靜つて居る。唯一軒大戸を開けた家を見つけて、其二階へ上つた。

要吉は女中が出て行くのを待ちかねた様に、何か言はうとして、不圖女の容子に眼を留めた。

女は座蒲團の上に端然と坐つたまゝ、一人で考へて居る。何を考へて居るのか、それも解らない。が、そんな管ぢやない、何うもそんな管ぢやない、——折角言ひ掛けたことも言ひそ、くれて、少時手持無沙汰にして居たが、やがて、

「二人とも失はれた。今夜は再び回らない」と、獨言の様に言つて見た。

「今夜ぢやない」と、女は自分の前を見詰めたまゝ、「最初お手紙を頂いた時から、私は二たび取返されな」と思つて居た。

「要吉は思はず女の顔を見返した。何か言ひたいと思つても言ふ事がない。少時して、

「お宅ぢや最う知れたらうか。」

「今夜は大丈夫でせう」と言つて、やゝ俯向き加減に成つた。「表の方から出ようとすると、一寸開けても門が鳴る様に成つてますから、裏から出たんです。夕方雨戸を自分が閉めて、わざと一枚だけ残して置いて——」

「それでお家の方の氣が附かない？」

「えゝ、でも少し狭過ぎたから、それを開けるに氣が苛つて、大變でした。」

男はうつそり女の額を見詰めた。此女の無教育な小娘らしい仕業を聞くのが、譯もなく心嬉し。

「今日途中で逢つた時は、何をして被坐した？」

「彼岸だもんですから牡丹餅を作らされちやつたんです。」

それを聞くと、要吉は初めて女の家庭に面したやうな心持がして何とも言はれなく成つた。

「一週間許り私の容子が變だものですから、内者の氣を附けて居るので、故とそんな事を爲て遣つたのです。」

かう言つて、少時考へて居たが、「私はつひぞ子供などを抱いたことが無い。それが子供にも分ると見えて、偶には抱いて遣らうと言つても、向うから嫌つて抱かれませんが、今日は如何したのか急に抱いて遣りたく成つて、姉の兒を遊んで遣つて居ると、餘り強く抱き締め

たもんだから、到頭泣出して仕舞つた。」

女の語が目の前に見える。要吉は胸をとぐろかせながら聴いて居たが、「で、其姉さんと云ふは、何んな方？」

「誰は私と違つて、母に似て好い女なんです。」

「貴方には一人のお姉さんでしたね。」

「私が子供を抱いてると、姉が母の側へ行つて、私のことを、何だか平常の様ぢやない、彼方の部屋で泣きかけて居たと、そんな事を言つて告

げるんです。それが聞えた時は——」

「其時は？」

「それ丈で可いのです」と、朋子は急に言葉を切つた。

そこへ宿の男が寢床を仰べに来て、ついでに火鉢を下げようとするから、最少し置いて行つて呉れと頼んで見たが、「へえ、最う一時を打ちましたので、階下でも皆就寝しますから——それに、近頃は火の用心が悪う御座いましたな。」

幾度頼んでも、ねつく同じ事を繰返して居るので、煩いから、其儘持つて行かされた。

「ね、就寝みませうか」と、要吉は後を見送りながら言つた。

「何卒、私は斯うして居ますから。」

男は思はず女の顔を見遣つた。何と思つてそんな真似をするのか。女は斯うして一身を衛らうとして居る。それだけなら未だ可い。此期に及んでなほ自分をそんな男だと思つて居られ

たら——最う取返しが附かない。が、まさか此女にそんな事も有るまいと思ひ返して、

「えゝ、それぢや私も起きて居ませう。」

春の宵ながら、夜深けては底冷えがして曠野の一つ家の様に四邊が森とした。二人は膝を突合せたまゝ、少時物を言はなかつた。やがて、

「あれは、あの物は持出された？ と、男の方から訊く。」

「女は黙つて、左の手に懐を押へて見せた。」

「それぢや、此包みは？」

「先生からのお手紙が這入つてる。」

「最初からの？」

「女は點頭く。男は微笑みながら手に取上げた。」

「私、先生に済まないことをしました。」

「何を？」

「あの『死の勝利』を、日記だの、其外いろんな物を庭で焼棄てる時に、つい間違へて火の中へ抛り込んで仕舞ひましたから。」

「其方が好い」とは言つたが、何うも知らずして焼いたものとは思へない。星月夜の下に、女が半身を火影に照されたながら、反古を焼く姿が眼に泛んだ。

「貴方は始終日記をつけて居るのか。」

「え、女は微かに點頭いたが、一私には本當に談話の出来る友達がないから、友達と談話をする代りに日記を書く。そして三箇月位に焼いて仕舞ふんです。」

「何故。」

「其位經つと、自分が書いたものの様な気がしないから。」

「朋子に急に黙つて仕舞つた。」

「今夜家を出る前に、女は手紙と一緒に焼くつもりで、久しく捨て置いていた日記を取出した。一枚づつはぐつて行く間に、不圖、一月末の或日の下に眞黒に塗消した跡を見附けて、胸を騒つかせながら、速てて其前後を讀んで見た。あ、あの日から始まつた、あの日から——だが、此様にして自分にさへ隠さうとした事を、何うして男の前に打明けたのか、男の手に自分の生命を委ねたのか。矢張自分は弱かつた——左様思ふと堪らない。男に對する女の憎悪はいよく容赦がなく成つた。女は自分を滅した男を滅さずには置かない。」

日記の反古が白い灰に成つたのを見済まして女は筆を執つて二三行書下した。

我生涯の體系を貫徹す。われは我がこころに囚つて斃れしなり。他人の犯す所に非ず。

三月二十一日夜

眞鍋 朋

今一枚には

拜啓、我が最後の筆蹟に候。今日學校に行きませんと申せしは、實は死すとの事に候。願はくば君と共にらざるを許せ。

君は知り給ふべし、われは決して戀の爲に人の爲に死するものに非ず、自己を貫かむが爲なり、自己の體系を全うせむが爲なり、孤獨の旅路なり。天下われを知るものは君一人なり。我が二十年の生涯は勝利なり。君安んぜよ。而して萬事を許せ。さらば

明治四十一年三月二十一日

宛名は王子の友にした。併し讀ませるのは相手の男で有つた。自分が息絶えて、男の心中の記憶と化した後、此遺書を讀んだとしたら、男の失望は何んなで有らう。若し又光の薄い獄窓の下で讀んだとしたら、恐らく悶え死に死なない者は有るまい。女は自分の死後になほ男の運命を支配する力を自覺して、唇を噛んだまま、片頬に刃のやうな冷笑を泛べた。

朋子は今其時の形相を自分ながら眼に見るやうな気がした、何でも可い、最う何でも可いから早く決行して仕舞ひたい。

「出ませう、早く此處を出ませう」と、俄に男の腕を掴んで飛立つやうにしたが、又うつとりと

坐り直した。

わが生命を爆發させて、相手の生命を碎かうとする。男は女がそんな恐ろしい報復の手段を執つて居ようとは知る筈がない。

「如何したので、え。」

「いえ如何もしない」と言ひながら、朋子はぼんやり座敷の隅を見詰めた。

隣の室か、それとも一つ置いて向うの室か、有らう、野獣の寝て居るやうな軀の聲に交つて、時々齒をきしむ音が聞えて居たが、

「あゝと、不意に遺瀨のない女の聲がして、

「最う間に合はない」と明白に聞えた。

二人は思はず顔を見合せた。後はむにや／＼と寝惚けた欠伸に代つて、軀の音もはたと止んだ。曉方近い空氣は身を斬るやうに人の肌に通つて来た。

「お寒かア有りませんか」と、やがて女は襟を掻合せながら言つた。

「え」と、要吉も一寸女を見返したが、頭の中へ群がつて来る感想を掃ふやうに、「ね、談話を爲ませうよ。貴方の小さい時分の話をして下さい。私は未だ貴方のことは何も知らない。」

「小さい時分の？」

「二人が現在爲て居ることとは、全然關係のな

い事が可い。」

朋子は少時黙つて居たが、

「私のこれね」と襟に刺した煙銀の襟留を弄つて見せて、「五つの時から火くさないで持つてるんです。」

「そりや何です。」

「四葉の首緒でせう。これを持つてる者は何たと云ふぢや有りませんか。」

「えゝと」

「私も捻げるんだつて」と、一人で笑つた。

「私は知らない。で、それを」

「父が佛蘭西から歸つた時、土産に呉れたのです。これと女持の時計とを姉妹の前へ出して、お前の方が小さいから何方でも好きな方を先へ取れと言はれて、私は此方を取つて仕舞つた。」

要吉はまじ／＼と其襟留を見詰めたまゝ、黙つて聞いて居たが、女の言葉が途切れたので、偶と眼を見上げて其顔を見遣つた。

「それからもつと外に。」

「え、姉は其時分から私に親切でしたが、私は矢張不好い性質の女でした。」

かう言つて、女は男の眼を避けるやうに顔を背向けながら、「何日かも姉が大切に伺つて居た

金絲雀を殺して仕舞つたことがあるんです。矢張七つか八つの頃でしたらう。何を終つてだつたか、今は記憶えて居ません。姉の居ない間に鳥籠の中へ手を突込んで、金絲雀の頭へ留針を打込んだのです。二三度ばたくと羽翼を動か

したきりで、鳥は死んで仕舞つた。血も出ないし、和かい毛が被さつてるので、留針も分らない。到頭如何して死んだか知れずに仕舞つた。

今でも未だ私が殺したとは誰も知りませんまい。」

「今でも」と要吉は息を詰めた。

「併し姉は最うそんな金絲雀のことなぞ忘れて居ませう。」

男は兩手に女の兩手を把つた。そして、初めて見る様にしげ／＼女の顔を見守つた。

遠方で一番鶏が啼く。

### 三十三

やがて宿でも起出たと見えて、階下がたつき出した。ばた／＼と廊下を歩く草履の音も聞える。要吉は何度も女を呼んで見たが、皆忙しさうにして返辭をしない。

「如何したのでせう。昨夜一番汽車で立つからと言つて置いたが」と、又時計を出して見ながら、「最う汽車の着く時間ですね。」

「照子も何やら落着かぬらしい。で、  
「此儘立ちませうか。」  
「え。」

二人は身支度をして立上つた。  
街には轎籠がかゝつて、未だ人通りはない。  
人力車の立場らしい家の軒から一本の竿が出て

其頭に汚い旗がしつとりして垂れて居る。楊枝  
を衝へた男が車の輪を扶いて居る。  
停車場の振鈴が鳴る。二人は遮つて駈附け

た。プラットフォームに立つて、待つ間程なく、  
上野發の一番列車が霧の中から現はれた。  
二人は又北に向つて行く。朝の夙いためか、

同春の客は肥つた商人體の男一人きりで、大  
きな革靴に凭れたまゝ、昨夜の夢を續けて居た。  
時々手拭の肘を外して、ぼんやり赤い筋の張つ

た眼を開くが、直に又と／＼と寝附く。  
二人は湯婆の上に足を揃へて腰掛けて居た。  
晨朝の寒さは一しほ身に徹へる。

「これを着ては、要吉に手に持つて居た女の  
コートを差出した。  
「いえ、これで可いんです、照子はそれを受

取つて、「ぢや斯う爲ませう」と、言ひながら、  
二人の眸の上に被けた。  
其下で二人は手を繋いだ。

何時の間にか、客車の中へ朝日が射し出し  
た。霜枯れた田圃の上に、煙の渦が影を落して、  
千疋の袋が狂ひ廻る様へ／＼と轎がづつて行

く。要吉は久らくそれに見惚れて居たが、不圖  
女が口元に笑つて居るのを見て、  
「何ぞ？」  
「え、唯。」

照子の視線は前の男に注がれて居た。昨宵か  
ら初めて女の顔を目影の下で見た。照子は一寸  
羽織の袖を翳して、  
「こんな色、全然私とは調和しないでせう。」

「なに、單色だからと一  
「え、何にか紺紐の此色が所好だと仰有つた  
でせう。だから態々これを着て出たんです。」  
女の髪には、濃いお納戸の花の紺紐が差して

ある。男がそれに眼を遣ると、一寸右の手を上  
げて頭髮を抑へる眞似をした。  
「あゝ其手裏は——」  
「これ？」と男の前へ其手を突出して、「早く一

對にして下さいな。」  
要吉は衣囊から手袋を出して、片方の手に一  
本づつ指を持つて穿めて遣つた。女は黙つて左

様されながらだん／＼男の腕へ凭つかゝる様  
にした。何だかそんな事で男の心を繋がうと

するものらしい。  
ヤがて宇都宮へ着く。其時汽笛の音を立てて  
眠つて居た商人體の男は、急に眼を開いて、大

革靴を掲げながら、あたふたと降りて行つた。  
少時窓の外に物賣の聲が騒々しい。  
ヤがて汽笛が鳴つて、列車はがたりと動き出

した。今度は二人の外に乗客もない。汽車は  
平野の中を馳つた。  
何をしに行く。二人に成ると共に、一層散し

くそれが男の心に迫つた。女を殺しに行く。最  
初自分が「貴方なら殺せる」と口走つた時、女は  
一番自分に接近して来たやうに見えた。彼時か

ら見ると、今は又すつと離れて仕舞つた。終局  
に於いて人間は矢張り一人のものかも知れない。  
一人だ。が、一人だとすれば、此女とした約束

を果すには、自分の女に求める力、愛の力に  
據る外はない。併し酬いられざる愛の力が、そ  
れ程力有るもので有らうか。

で、それが駄目だとすれば、後は只一種のニ  
キスペリメントとして、藝術の徒の好奇心に手  
頼るばかりだ。好奇心の犯罪。此上は只狂人

に成る外はない、他迄自意識を失はぬ狂人に成  
る外はない。  
男は凝手と女の横顔を見詰めた。赤い絲のや

うなものが、一筋女の首を周つて連なる様に見えた。女は唇く口を結んだまゝ物を言はない。一人で考へて居る。自分が自分の事を考へて居る様に、此女も自身の事を考へて居るので有らう。只黙つて居られるのが氣懸りで堪らない。

「二人は」と、男は思はず口に出した。「二人は別々の事を考へて居るのだらうか。」

「え」と、女は何やら解らなさらうな顔をしたが、急に男の手頭を掴んで振りながら、「別々ぢやない、別々ぢやない。」

「ふむ、別々では死ねない。」  
二人は長い間無言をつづけた。汽車は小さい停車場へ着く。

やがて又汽車の出るのを待つて、要吉は獨言の様に言出した。「二人の何が——これが、普通の金に詰つたとか、添ふに添はれぬとか云ふやうな、左様いふ原因で死にに出たのなら、こんな壓迫は感じまい。其方が何の位好いか知れないだらう。」

朋子は一寸男を見返したまゝ返辭をしなかつた。男も其儘口を噤んだ。

幾つも同じ様な小さい停車場がつゞく。新に田舎者らしい三人の客が乗込んだ。要吉はほん

やりそんな人達の容子を眺めて居たが、  
「ねえ」と、女の方へ振向いて、「貴方は東北を旅行したことがあるか。」

「え、一度平泉まで。」  
「ぢや、衣川や高館の跡も見て来たんですね。」  
女は鷹揚に點頭いた。

夏草やつはものどもが夢の跡。要吉は目の前に死後の長い時間と廣い空間とを透べて見た。で、何か言はうとした時、汽車が停車場へ着く。西那須野驛と聞いて、女を促して、邊で客車を降りた。

うね／＼と東北の野に向つて遠ざかり行く列車を見送りながら、二人は停車場を出た。別に行くべき處もない。車夫の親方らしいのが傍へ来て勤める儘に、人力車を二臺鹽原まで急がせた。鹽原は此處から五里に餘るといふ。

那須野は只ひろ／＼と霜枯れた草野がつゞく。一面に灌木の木の葉が赤く枯れて所々に着い松の葉が交つた。行手の雪を被つた山脈から吹卸す風は春のものとも思へぬ。

一筋の街道が枯野の中を眞直に走つた。上りだといふので、車夫は緩々と曳いて行く。固より何んな人に乗せて行くかは知る筈もない。薄い日影が女の肩を照して居た。

原の真中で、朋子は俄に人力車を停めさせた。  
「如何かした？」と、後の人力車に乗つた要吉が訊く。

「いえ、只風が眼に沁みて痛いから。」  
二臺の人力車は又駛り出した。山の麓に杉の樹立がある。此村迄来れば道の半ばだといふ。少時そこで休憩んだ後、いよく坂道へ差懸つた。雨の降つた後で泥濘が多い。

山路は九十九折に紆つて、深い谷底には箒川の淺瀬も見え出した。湯の宿へ近づくとつれて、山の氣が冷やかに、山蔭に雪が積つて、木の葉の落ちた枝が黒い網の様に連なつた。車夫はくどく／＼と鹽原の名勝を説く。煩いから黙つて居ると、心得て更に言葉を繼ぐ。

日暮近く湯の宿に着いて、二階の新しい座敷に案内された。山國の朝夕寒く、大火鉢に炭火の青い炎を上げるのが懐かしい。二人は其側へ寄つて坐つたが、酷く勞れた様で、向ひ合つたま物を言はない。一夜の合宿に知らぬ同志が泊り合せたら、斯んなものかも知れない。

下婢が来て、「お風呂へ御案内しませう」といふ。山國の男が着るやうな袴を穿いて居る。要吉は黙つて朋子を見返つた。女は頭振を掉

つたので、

「後にするから」と、斷ると、

「それでは、直ぐ御膳を差上げます。」

白い圓笠の洋燈が持出された。二人は其下で夕餉の箸を上げた。

「私は是迄貴方の前で何度物を喰べたらう。彼時此時、殆ど數へられる。これからも何度喰べるか。」

朋子はたゞ下を向いて居た。

やがて食事を終つた。長い廊下は寂として、

客は二人の外に有りとも覺えぬ。早くから雨戸を締つたが、山嵐は絶えず咥を吹きまくつて、早瀬の音が耳につく。

「一寸其手紙を見せて下さい。」

「え、是れ々。」

女は包を開いて手紙の束を男に渡した。

「随分有ると、要吉は自分を冷笑ふやうに言つた。

「尤もデョールチオは二年間に一人の女へ二百何本といふ手紙を書いた。」

「え、でも私達はそれより烈しいことが有つた。一日に二本のことも。」

二人は洋燈の下に頭を寄せた。要吉は其中の一事を手當り任せに取つて中味を抜き出さうと

したが、偶と今見たら修辭的な誇大な文句許り並べて、死んだ人の墓銘を見る様に、空虚な文字に代つて居るやうな氣がしたので、手に持つたまゝやゝ躊躇した。

「何だか出して見るのが怖い。寧ろ止めませうか。」

「お止めなさい」と、女は引たくる様に取上げた。

そこへ宿の主人が出て、茶代の禮を述べてから、宿帳を出して引退つた。要吉はそれを取上げて、有體に二人の住所姓名を記けた。

朋子も傍から見居たが、に々と笑つたまゝ、何とも言はなかつた。又自分一人の中へ引込んで、相手の男のことも忘れた様に見えた。要吉は少時それを見守つて居た。何も言ふことがない。強ひて言へば、此場に應はしくない聯想を

招くのが心苦しい。

「湯へ入らうかと、やがて男が堪へかねた様に口を開く。女はたゞ頭振を掉つた。

「汽車の煙にも吹かれたから、一寸汗を流して置いた方が可い。」

「お留守番をしますから、先づ行つてらして。」

「ぢや、後からね」と、男は立上つた。

「え、清濁な湯だつたら」と、追掛ける様に言ふ。

それを聞捨てたまゝ、手拭を下げて湯殿へ降りる。板の間に着物を脱いで、浴槽の中に立つた。槽は木の臭ひのする程新しい。湯は絶えず樋を傳つて流れて来て、槽の縁を越して落ちて行く。天井の下に立置めた湯氣は夜深の寒さに凝つて、一しほ息苦しい。

要吉は片肘を槽の縁に託したまゝ、柱に掛けた洋燈の火影を見詰めて居た。濃い湯氣の玉が其前をぐる／＼と廻つて、月傘のやうな輪をなかく。眼を離さないで、凝手とそれを眺めて居ると、だん／＼燈火の光が遠く成つて行く。かうして幾重にも白い湯氣に包まれて、其奥に閉籠められたまゝ、自分は二たび歸られないのの有らうか。だん／＼氣も遠く成つて、櫃を落ちる湯の音だけが、山の猪が来て水を飲むやうに、

べちや／＼と聞えて居る。只、それだけで此世に繋がれて居るやうだ。此儘、水の上に泛んだまゝ、二たび眼を開かなかつたら——二たび二階に残した女を見なかつたら——

不意に湯殿の戸の開く音がして、われに歸つた。誰やら這入つて来たらしい。恰度洋燈の下に立つて居るので、男とも女とも見分け難い。

何か物を言つたらしいが、好くは聴取れなかつた。間もなく、板任切を蹴てた女湯の方から、ひそかに湯を使ふ音が聞えて来た。

要吉は匆卒に濡れた身體を拭いて風呂場を出た。薄暗い廊下儘ひに、裏椅子から二階へ上つた。何の部屋も灯火が點いて居ない。

座敷へ戻つて見ると、有明を一つ點火して、つとも寢床が延べてあつた。何處へ行つたのやら、朋子の姿は見えない。要吉はひとり火鉢の前に坐つて待つて居た。

やがて女も湯から上つて来た。髪を洗つたと見えて、ちびれ毛が肩に波を打つて居た。其足で衣桁に濡手拭を掛けて来たが、真中へ鏡臺

から直に束ねようとするらしい。要吉は只その女らしい手附を眺めて居た。あの長い髪をあの細い頸に巻附けて、力任せに引いたら一ふら

ふらと、そんな心持にも成つた。恰度女は彼方を向いて居る。何だか腕の力が抜けたやうな氣

がして、纒に擦げた腰を下した。今自分が何を爲して居るか、それを知つて居て人殺しが出来

るか。無意識に成る外はない、一瞬の誘惑に驅られる外はない。自分の力で、自由意志を以て、人間が人間を殺せるものか。殺すものは——何

か知らぬ——自分が外の或物だ。或物の道具と成らなけりや殺せるものでない。

一ね、髪を束ねないで、其儘で居て下さい。一男が急に聲を掛けた。

一えと、朋子は振返つた。

一髪を垂れた方が美しい。一

女はつと立上つて男の側へ来た。男は女の背へ手を廻して抱へた。指が濡れた髪の毛の中へ這入る。不圖それが血汐のぬめりのやうな氣

がした。其時女は男の腕に身を委ねたまゝ、そつと懐の短刀を出して、男の手に握らせた。有明の灯に透して見ると、黒鞘の短い懐劍である。

一早く、早くして。

男はそれを握つたまゝ、思はずたじくと成つた。此儘では——此儘では如何することも出来ない。

一言へない、え、言へない？」

一其時迄、其時迄言へない。一

要吉は女を引起して、腕手と其顔を見入つた。女は其眼を避けるやうに、彼方此方自分の顔を

持扱ひながら、つと男の膝に突伏して泣く。涙は着物を透して煮える程に熱い。

男は女を抱へたまゝ、何とも言はれない苦悶を経験した。何故言へない、何故其一言が此女

には——が、言へぬものなら仕方がない。今更何と言つた所で、それが如何なるものか。女は

一直線に思ひ込んで居る。それに自分は——自分

は生温い水だ、熱くもなければ冷たくもない、某者の口から吐出されるやうな生温い水だ。一種の實驗として、人殺しの出来るやうな超人でもなければ、又われを忘れて狂暴を敢てするやうな狂人でもない。矢張自分には人間以上の力はなかつた。そんな物が有る様に思つたのは、眞個一時の妄想に過ぎない。あゝ、自分は一生の危機に臨んで居る。何と言つた所で、自分は此女を失ふ外ないかも知れない。此女を失ふばかりでなく、自分といふものの靈魂を

い、又人間の一生の様に短い夜で有つた。

二人は又次の日の光を見た。

有明の丁字が落ちて、ぼつと薄白い炎を上げたが、其儘夢の様に消えた。火皿に油が盡きたのだらう。何處かで幽戸を繰る音が聞える。

女は男の腕に顔を伏せたまま、息があるものとも思へない。要吉はそつと身體を揺振つて居た。

一ね、又夜が明けた。一

女は動かない。

「今頃御宅ぢや、阿母様には何んな夜が明けたらう。」

「そんな、そんな事を言ひ出しちや、可厭だ。一

女は男の口を閉ぐやうにして、泣く。

實はねと、要吉は女の背に手を掛けたま

ま、一夜が明けたら御宅へ電報を打つて、迎への人に來て貰はうと思つて居た。其人達に貴方を渡して置いて、私は——矢張北を向いて、山

越えに行ける所まで行かうと決心した。

「そんな事をされちや耐らない」と、女は顔を

上げて、手當り首せに動輪みつ。

「其外に住居ないで投出す様に言つた。一私は思ひ遣ひをして居た。死ぬ時は、互に手を取つて、おそろしく泣き合つて、滑けて行くやうな心

持に成らなきや死ねない。私の爲に泣いて呉れる相手でなきや手は下せない。」

何か言ふだらうと思つて待つて居たが、女は突伏したまま返辭をせぬ。又じろ／＼女の耳の後ろを見守りながら、

「貴方は未だ私に對して敵意を持つてゐるんだ。一敵意」と、聲の下に呟く。

「敵意さ。昔から打解けたことのない、一兩性間の舊い怨恨」と、ぼつり／＼言つたが、

同士ぢや一緒に死ねない。」

「左様ぢやない／＼。そんな事は十九日から解つて居て呉れた筈だ——あの手紙を讀んで呉れたら。」

「それぢや何故——と、男は思はず腰を立てた。

不意に襖を開けて、下女が有明を下げに來た。二人ははつと座を聞いたが、顔を見合せたま、

少時物を言はなかつた。

やがて女は想出した様に、男の手を執つて揺振りながら、

「私は行く、先生の被行しやる所まで行く。一棒太迄も？」と、男は女の顔を見返した。

「何處へでも。一死ぬ處まで。」

女は笑顔を見せて點頭。

要吉は何やら考へて居たが、

「ねえ、御宅では田端停車場に氣が附きはすまいか。一

女も一寸考へて見て、

「參ります、訖度參ります。」

「それぢや、あの晩の終列車で、二人が西那須野驛までの切符を買つて乗込んだことは、直に知れる理由だ。」

「朋子も不安らしい容子をして聞いて居たが、一早く立ちませう、早く。」

「左様、猶豫しては居られない。」

二人は立上つた。折柄戸を繰りに來た宿の男を急ぎ立てて、あたふたと出立の用意をした。

### 三十四

朝飯の給仕に出た下婢に、それとなく様子を聞くと、此奥の道は尾花峠と云つて、會津へつづく街道、冬の間は雪が文餘も積つて、月を

越さなければ人は通れないといふ。

二人は逆巻を見物すると言ひ置いて、宿を出た。上の鹽原迄は、昨日の人力車に乗せられて行く。山の中の寂惚けたやうな町であつた。昔

風な湯の宿が何軒も並んで居る前を、から／＼と町外れ迄曳いて行つたが、後の車夫は急に振り返つて車上の人を見上げながら、

「もし、旦那、何方へ着けませうか。」

要吉は夢から覺めたやうに四邊を見廻した。

「うむ、最う可いんだ。此處で卸して呉れ。」

でも、何方かお宿を――

「うむ、可いんだ。此邊を散歩してから勝手に宿を取るから、最う歸つても可いんだよ。」

「左様ですか。」と、車夫はしぶ／＼桿棒を押し

た。

町の町外れに、壊れかゝつた木の橋がある。

二人は橋の袂に立つて、空車が歸つて行くのを見送つて居たが、其影が見えなくなると、速て

て橋を渡つた。又北へ向つて行く。

麓の村迄は三里だといふ。二人は落人の様に道を急いだ。街道は霽川の上流に添うて緑の

様に續く。草灘の水の激む邊りに、二人の男が

岩の上に蹠んで、禪定に入れる人の様に黙々と

して絲を垂れて居た。十二三の女の子が、背中に赤ん坊を結び附けながら、弟の手を引いて

来た。二人とも裁附を穿いて居る。其外には滅

多に人にも出逢はない。

空が晴れて、雪の積つた山の嶺が白くくつ

きりと際立つて見えた。あの山越しに行くのである。朋子は袂を上げて顔に滲む汗を拭いた。山から吹いて来る風は冷たいが、日はほかくと暖かい。

谷合の平原はだん／＼迫つて、やがて麓の小村へ着く。村外れの軒家で、簷に草鞋を吊して、障子に煙草の葉の描いてある家を見附けて、

要吉は女をかへり見ながら、つと闕を踰いだ。

つゞいて女も這入つて来た。其後から直に障子を閉て切つた。

一寸休ませて貰ひますよ」と、縁鼻に腰を掛けたが、誰も應ずるものがない。家の中はからんとして居る。

不圖障子の側に蹲つて居る爺さんに目を附けて、最一度聲を掛けて見た。

「ねえ、一寸休ませて貰ひましたよ。」

「えゝツ」と、爺さんは頓狂な顔を上上げた。眼の縁が赤く爛れて居る。

「これは／＼、お出なされや」と言ひながら、急須の茶を煎れて、二人の傍へ持つて来た。

「如何でせう、峠は木だ馬が深いでせうね」と、要吉は爺さんに眼を附けながら訊いた。

爺さんは耳が遠いらしい。要吉は聲を大きくして最一度訊いて見た。

「あゝ、峠か」と、爺さんはきよ／＼として、「峠の聞くのは、左様ぢや、月を感して十日も経つてからの」と言ひながら、二たび障子の側へ戻つた。

其儘うつら／＼として居たが、又急に眼を開いて、

「左様ぢや。一昨日もな、一人旅商人のやうな客衆が峠を感すと云うてちやうで、俺が強つて留めたが、無理に振切つて出掛けたぢや。あれも無事に越せりや可えがと、案じて居るぢやわい。」

「でも、戻つて来なけりや無事に感したのでせう。」

要吉は口を挿んだ。が、爺さんは矢張聞えな

いらしい。

「裏山が難所でな」と、獨言のやうにつづけた。「トリ一里に下り三里、三里の下りが難所

な。それに午前ぢやと未だ可えが、これから日が下りかけると、雪の下が緩んでな。裏山の雪

弱れ、此奴が怖ろしいぢや。」

要吉は朋子と顔を見合せて點頭を合つた。雪崩れの下に葬られる。自然の手に身を委ねる

ほど容易いものは有るまい。自然の前に人間の

意志はない、不和も憎悪もない。凡てを混沌の

裡に獲ることが出来る、暗黒の裡に、あゝ、未だ此處に最後の手段が残つて居た！

一人は少時思ひ／＼考へに耽つて居たが、やがて一人か、

一立ちませうと言出した。

一人も直に立つた。

要吉は幾許かの茶代を下に置いて、

「爺さん、何うもお邪魔でしたと聲を掛けた。爺さんは黙つて居るのか返辭をしない。其儘

其處を出ることにした。

二人は又目の前に山を見て急いだ。村を抜けて板橋を渡れば、直に山路へかゝる。本道は未

だ人が通らない。炭焼小屋の在る處まで、拔路の方が却て道が開けると聞くまゝ、山の麓か

ら右へ折れて、谷川に墮いてゐる。山は淺い、鳥も鳴かぬ、雪の下行く谷水に添うて、炭焼の

通路は枯木の中を窺つて走つた。

水の中の石を傳つて、背負梯子に炭俵を背負

つた男が、むず／＼と谷川を渡つて来た。二人

は此方の岸に立つて待つて居たが、其男は通り

すがりに、被つた手拭を取つて、

「御免なされ」と挨拶した。

「炭焼小屋まで、道程は何の位かな」と訊く。

「左様さ、最、五、六町も有らうかな。つゝ、其處

ちやいなと言ひ捨て、又のそ／＼と行く。不圖、女の綱紐が水に落ちた。くる／＼と渦を巻いて、見る間に下の巖蔭へ隠れた。女はそれとも心附かない。

二人は又雪を踏んで登つた。谷間の行詰つた處に、立つ／＼炭焼小屋が見え出した。其前迄

進り着いて、小屋の中を覗き込むやうにした。土の中へ團扇裡を切つて、自在鍵に煤びた茶釜

を懸けてある。燃えさしの樹の灰が白い。

要吉は入口に立つて、二三度聲を掛けた。

「おゝと小屋の裏から炭焼の女房が出て来た。

一湯が一杯無心したい。

一湯かいなど、女房は無愛想な返辭をしなから、茶釜の湯を汲んで出した。

二人は小屋の前の丸太に腰を掛けた。樹の間を渡れる日影がちら／＼して、茶碗に輝は入つても中の水は美しい。

上の岨路から、五つ許りの女の兒が素足に藁

沓を穿いて、よち／＼降りて来たが、二人の前に立停つた。時々汗を吸り上げながら、日躰

きもしないで、代る／＼二人の顔を見上げて居

る。

「お出／＼、これを上げるから。」

「お出／＼、これを出さぬ。立上つて、側へ行かうとすると、わづと泣き出した。

「何を泣くんだよ、これを遣るとちやに。」

小屋の中から女房が出て、連れて子供に代りに受取つた。此女房が取上げて、汗臭い巾着にきり／＼巻いて、何時迄も所藏つて置／＼らしい。

要吉は息苦しいやうな心持がした。日も傾かう。二人はやがて其處を立つた。本道へ出る路だと教へられたまゝ、小屋の裏から坂を登りかけたが、勾配の急な上に、未だ人の通つた跡もない。三町とは行かぬ間に、路が雪に埋もれて、何方へつゞくとも分らな／＼成つた。少時途方に暮れて立つて居たが、丁々／＼と斧を揮ふ音が響いて、谷の向ひの雪の上に木を伐る黒い男が見えた。

「おうい」と呼べば、やゝ有つて、

「おゝと應へる。



踏んで燐寸を擦った。小さな青い火がぼよんと燃えて、其儘すうと煙を出して消えた。二たび擦る。燐寸が半ばから折れた。三たび、四度目に燃え上った。男の戀を運ねた文字が燃える。黒く煙つて消えようとしては、又ぶすくと燃え上った。

要吉はそれを見詰めて居た、眼も離さず見詰めて居た。いよ／＼黒い灰と成つて仕舞つたのを見済まして、不圖女をかへり見たが、自分の顔に泛んだ失望の色が自分の眼にも見えるやうな気がした。

俄に山嶺からどつと風が落ちて来た。灰を飛ばし、雪の粉を飛ばし、われも人も吹飛ばして仕舞ひさうな。二人は轟と相抱いた。風は山を鳴らして吹きに吹く。

「死んだら如何成るか、言つて／＼。」  
女は男の胸を掴んで、暖れた聲に叫ぶ。

「言つて／＼。」

「私には一言もない、」  
女は腕手と男の胸を見守つて居る。それを見ると、男の心には又む／＼と反抗の心が起つた。生きるんだ／＼、自分は何處迄も生きるんだ。

つと內衣裏から短刀を取出して、それを握つ

たまゝ立上つた。女は其氣色を見て、一如何するんですと、突走る様に訊く。  
「呀哉と言ふ間もなく、要吉は谷間を見蒐けて短刀を投げた。」

「私は生きるんだ。自然が殺せば知らぬこと、私は最う自分ぢや死なない。貴方も殺さない。」

二人は顔を見合せたまゝ聲を存んだ。天上の風に吹き散らされて、雲間の星も右往左往に亂れて見えた。女は又叫ぶ。

「一歩きませう、もつと歩ませせう。」

「うむ、歩ませせう。」

二人は雪明りをたよりにして、風の中を行く。風のために雪が氷り始めたやうだ。只、其上層を破れば、底迄踏み込まずには置かない。やつと半明程進んだ時、ぱたりと背後で倒れる音がした。朋子は崖を踏み外したまゝ、聲を立てずに居る。遮つて、それを引上げようとして、一緒にずる／＼と摺り落ちた。三間はかり落ちて行つたが、危く雪の洞に引かゝつた。

二人は折重つたまゝ動かなかつた。だん／＼風の音も遠く成るらしい。要吉は腰の邊りから冷たい水が沁み込んで来るのを覺えながら、ついでと／＼とした。其後は如何成つたか知らな

い。

不圖、誰かに喚び起されるやうな気がして眼を開いた。朋子が腕手と自分の顔を見守つて居る。

「一ね、歩ませせう、もつと歩ませせう。」

女は急に男の手を持つて、同じ事を繰返した。

要吉は黙つて立上つた。見返れば、月天心に懸つて、遠方の山々は宛ら大洋の濤が其儘水つた様に見えた。わが居る山も、一面に雪が氷つて、きら／＼と水晶のやうな光を放つた。あゝ氷獄！ 氷獄！ 女の夢は終りに形を與へられた。到頭自分は女に作れられて氷獄の裡へ

来た。——男の心には言ふべからざる歡喜の情が湧いた、最う可い。最う可い！ 二人は手を取合つたまゝ、雪の上に乗つて居た。何も言ふことはない！

二人は又立上つた。堅く氷つた雪を踏みしだ

きながら、山を登つて行く。

山嶺も間近に成つた。

だん／＼月の光がぼんやりして、朝の光に變

つて行く。

(明治四十二年)

初

戀

私が十三の歳であつた。恰度濃尾に大地震の  
あつた二三年後のことである。

私は或町の片田舎に母親と一人で淋しい生  
活をして居た。そこへ、一日、東京から着いたと  
云つて、一人の男が訪ねて来た。調緯を脱いで  
座敷へ上つて、私は此處の家の御新造の弟  
だ」と云つた。母親の弟なら、私のためには  
叔父である。私が母方の身寄と云ふものを見た  
のも、これが初めてである。

母親が何んな心持で此叔父を迎へたのか、何  
にせよ、小さい時分のことだから私には分らな  
い。只、其時母親が私に云つただけ覺え  
て居る。三人の同胞の中で、只一人の男の子  
の弟が、十六の歳に家出をしたまゝ、皆目行  
方が知れない。両親もたづね倦んで、到頭死  
んだものと諦めて、葬禮迄出した。後々の法事  
法要も懇に申つた。それが両親も此世を去  
り、妹も後を追うて二十年も経つた今日に成

つてから、ひよつこり出て来たのだと  
其話が面白かつた。併し叔父の顔を見ると、何  
處かぎす／＼して、左の腕には狐の面の刺青さ  
へあつた。何だかそれが怖らしい。

兎に角、無人ではあり、それに父方の親類と  
云つては祖母の里が一軒あつたが、久しく往來  
も絶えて居たので、叔父は其儘私の家に居つく  
ことに成つた。別段仕事もないので、私の相  
手をして折鶴を教へたり、釣竿の修繕をしたり  
して、毎日ぶら／＼として居た。一二箇月左様  
して居る間に、如何云ひくるめたものか、母親  
の手許から若干の金子を引出して町へ出て商  
賣を始めた。尤も其商賣が普通の商賣ではな  
い。

五六年前から、此町にも鐵道がついて、それ  
と一緒に遊廓が出来た。監獄署の裏から濶川に  
沿うて下つた畑中に建てられたので、大門もあ  
れば、本通りには柳の樹を植ゑて、夕ざれば張  
店と云ふことをする。凡て古原の様子を寫した  
ものだから。一時は物珍らしさに全盛を極め

たが、大地震からこちらへはつたり火が起れた  
様に寂れた。中には、景氣の立ち直る迄持たへ  
ることが出来ないで、店を閉める家もあつた。  
其の中の一軒を叔父が引受けたのである。

こんな商賣を始める位だから、叔父と云ふ  
のは行方の知れなかつた間何處で何をして來  
たのだらう。一切私には分らない。母親も何と  
思つてそれに同意したものか、別に聞かうとも  
しなければ聞いたこともない。只思ひの外に金  
子が入ると云ふので、母親が折々思案に暮れた  
容子を見かけたことがある。田地を抵當に入れ  
て金子を借りる所なども、他所ながら見聞きし  
た。

私は母親から變人だと思はれて居たらしい、  
又多少憚られて居た。別段變人な譯はない  
が、他の子供と違つて朝夕机に凭れて本を読む。  
それだけで最う母親などの眼には變な子だと映  
つたらしい、本を読むと云つても、其頃私は  
活版本の若見武勇傳と自雷也物語とを讀んで、  
それに味を占めたので、土蔵の隅からよれ／＼  
に成つた頼家阿闍梨怪鼠傳を捜出して、書夜  
それに讀み耽つた。固よりそれが幽浮馬琴の  
作だとも、挿畫が北齋だとも知る筈がない、讀  
んでさへ居れば何でも可いのである。

ある日、學校から歸ると、見慣れぬ女のお客さんがあつた。髪は結び様、着物の着こなし迄、其風俗が此邊の在所には見かけない。と云つて町の女とも違ふ。併し子供にはそんな事分らう筈はない。只妙な女だと思つた。日當りの好い縁側で、母親と向ひ合つて、袂の長い着物の上に襟掛けをしながら、不器用な手附でふぢ豆の筈を取つて居る。それを取つては籃の中へ入れる。左様しながら、二人で何やら話をして居た。「只今」と云つて見たが返辭がない。

私は上り籠に片足掛けたまゝ、少時立つて居たが、其儘氣を背けて奥の間へ這入つて行つた。机の上に本袋を抛り出して、勝手に坐つて居る。やがて、

一 亮き、歸らしやつたかえ」と母親の聲が聞えた。

私は黙つて返辭をしなかつた。

一 亮はまゝと云つたのは、其女の聲らしい。

其後に能く分らなかつた。何やらぼそ／＼と云ふ語聲が聞えて居たが、急に二人とも聲を揃へて笑ひ出した。私は何たか自分か笑はせて居るやうな氣がして、此儘退出したい位に思つた。

で、速つて讀みかけの報章新聞を取出して、其上に眼を曝した。

それにしても、あの女は何處から来たのだから、

今度叔父の持つた家にはいろ／＼の女が居ると聞いた。女ばかりの家だとも聞いた。何うも其中の女らしい。初めて見た時から何うもそんな氣がして成らぬ。

私の眼は本の上に注がれても、文字一字心にとまるのではない。

「何を見つてらつせるのと不意に頭の上で其女の聲がした。

私は理由もなく氣後れがして、いよ／＼本の上に顔を伏せて仕舞つた。

一 精出して勉強しやすなもの

かう云つて、女はやをら机の端に坐つた。そして、自噴落に片肘出して煙杖を突いたまゝ、凝手と私の容子を見守つて居るらしい。私に出来るだけ女の方を見まいとした。女も如何したのか、何時迄経つても動きさうもない。

私は只何となく、三年も前から私を知つて居るさうな此女の素振が氣に成つた。其中から初めて女の女らしい臭ひをおぼえたやうな氣もした。勿論子供だけに、それとは分らぬ。分らぬ

ながら心が驚いた。一つは女氣のない、紅も白粉も見たことのない在所の家に着つたためであらう。

一 亮きや／＼と、背戸で母親の喚ぶ聲がした。

一 あゝ、と、大きな聲で返辭をした。

一 此處へ来て、無花果摘つてお呉れせ、土産に持たせて歸すのぢやに。

一 あゝ、摘つて上げよと云つたまゝ、ばた／＼と驅出した。

一 田毎も見に来やあせ」と、たゞび母親の聲がした。

田毎と云ふのは其女の名らしい。

三人は井戸端の無花果の樹の下に立つて、尻が紫色にはじけて、ほと／＼と液汁の滴れさうなのを見附けては、物干竿の先ではたき落した。それが小さな手籃に一杯に成る頃には、私も其女と平氣で口を利く様になつた。

間もなく、女は廻ひに來た晩車に乗せられて戻つて行つた。立ちしなに私を喚んで、

「貴方や、叔父さまの家へも遊びに入らつせ。御馳走しますぞえ」と、こんなお愛想らしいことも云つた。

後で、此女が叔父の家のお職女處で精氣して休んで居たのを、保養がてら遊びに來たのだとも聞いた。田毎といふ瀧氏名に忘れても、

緒に無花果を喰つた女のことは長く忘れなかつた。

此話はこれだけで済んだ。

其間に、秋も暮れて冬の初めに成つた。私の家は地震の時に倒れかゝつたのを、突支棒をかつたまま、それ儘に成つて居たが、今度いよいよ修繕を加へることにした。大工や日傭の人つてゐる間は自宅では勉強も出来ぬし、それに一里足らずの道を毎日町の小學校に通つて居たから、學校へ近い便利もあると云ふので、私は少時叔父の家へ泊ることに成つた。最初に叔父がすゝめて、母親も承知したものでらしい。

ある日、私は木袋を肩に掛けたまゝ、叔父に連れられて行つた。明つゞきの畑の中に、二階三階と一際高い屋根の折衷なつた一郭がある。何日ぞや川祭の夜に遠くから三階の灯を眺めて、あれが金津の遊廓だと教へられたこともあつた。彼處へ行くのだと思ふと、子供らしい物珍らしさの中にも、一種の不安が伴つた。尤も、そんな所へ行くのが可厭だとも汚はしいとも思ふのではない。私はおど／＼しながら叔父の後へにく／＼着いて小走りに走つた。

大門と云ふものを見た。白晝の遊廓はからつとして人通りもなほ。河の家も森として物音

一つ聞えぬ。只街の真中に唧筒の波井戸があつて、其側で洋犬が二足戯れ合つて居たが、二足とも何處かへ駈けて行つて仕舞つた。

叔父の家は直ぐ前にあつた。

「此處だよ」と云はれて振向くと、入口に淺黄の暖簾を垂れて、二神風樓と白く染抜いたのが見えた。打水の跡もしつとりとして、園の上には盛綱が三つ盛上げてあつた。

私は叔父に隨いて暖簾をくぐつた。段梯子の横から張店のうしろへ出ると、帳場の上に神棚が祭つてあつて、長火鉢に大きな鐵瓶の湯が沸つて居た。そこを抜けて、風呂場や料理場の前を通りながら、とん／＼と廊下を降りると、東座敷へ出る。一人年増の女が横に成つて居た。

「おい／＼、起きないか。お前からしてぐたぐた寝てちや、外の者のしめしが附きやしねえ」と口小言を云ひながら、叔父は一閑張の机を提出して、「此奴は上等だ。ね、此處で遣つてる分には、誰も這入つて来やしないから、幾許でも勉強が出来る。」

私は其机の前に坐つて見た。

年増の女はむつくり起上つて、ぼり／＼二の腕を掻いて居たが、「これ姉はんの何かいも、好

う入りやあたたなも」と、たたく／＼笑ひながら私に側へ寄つて来た。

此女は叔父が此商賣を始めるに於いて、急に貰つた細君ださうな。

其晩叔父は帳場に坐つて、ちびり／＼盃を舐めて居た。私も其側で夕飯を喰べたが、いち早く箸を下に置いた。そして所在なきに、帳場のうしろに貼つてある藝子の引札を一つ／＼讀んで見た。雙つ一とあるのが、何のことやら分らなかつた。

そこへ新規に出来た叔母さんが長から駈込んで来て、

「一入らつせ／＼、松泉樓で店を附け出したに入らつせ。お山さん見せて上げますに入らつせ」と、氣た／＼ましく喚んだ。

私はうじ／＼として立たうともしなかつた。

「お山は内にだつて居るさ」と叔父は苦笑ひして居たが、「何だ、店を附けるだなんて、下足札なんぞ鳴らすなア、ありや小店ですることだ。」

「早よ入りやアせんか。お可厭かいも」と、叔母さんは私の顔を見／＼上つて来たが、赤く成つた鼻の先を長火鉢のうしろに突出して、「なま、お前はま、梅本ぢや又新子が出るせえも」と、今度

は叔父の方へ向いて云つた。

「他所のことは如何でも可いやな。梅本だの、高だのと云つたつて、何だ。本元からして、高が新地のおき屋ぢや無えか。神風樓と云やアお前、關東ぢや豪儀なもんだな。」

叔父は歸つて、何やら譯の分らぬことを云つて居た。後で聞いたが、何でも十三人居る妓どもの中で、五人迄病院へ入つて、今日の検査でも又一人取られたと云ふので機嫌が悪かつたのださうな。

やがて二階からいろんな女がぞろ／＼と下りて来た。皆髪を被つたやうな髪かみの結方をして、白壁の様に白粉を塗つて居た。段梯子だんじしを降りきると、言合いあせた様に端折はなぢつて居た丹前の裾すそを下して、べちや／＼と饒舌じょうぜつしながら、一人づつ張店ちやうてんの方へ出て行く。

私はほんやりとしてそれを見てゐた。何だか好い着物を着た女の行儀ぎよぎの悪いのが、不思議なやうな胸の悪いやうな心持こころもちがして、直に裏座敷へ戻つて寢て仕舞つた。

明るく日は日曜であつた。私は話相手もなく退屈たいくつな一日を過した。帳場へ行つても仲居や豆まめどんが晝寝ひるねをして居るし、机に向つて見ても、如何云ふものか本を讀む氣にも成らぬ。戸外へ出て見る氣には尙更さら成れなかつた。

午後ごごの一時頃、裏木戸を開けて一人の客を送り出した女があつた。その後姿が何日ぞや宅へ来たあの女らしい。二たび鏡を叩たたして此方を向いた所を見ると、欠張かぢ左様さやうであつた。随下駄ずげだを穿いたまゝ、私の居る座敷の直ぐ前を通つたが、何か心の急ぐことでもあるのか、振回つて見ようともしなかつた。其儘そのままと／＼と裏梯子うらじしから上つて行く。私はそれを見送つたまゝ、何だか物足らぬ心持こころもちがした。

少時せうじ左様して居たが、不圖思ふとひ立つて、二階へ上つて見る氣に成つた。わざと梯子はしを遠へて、帳場ちやうばうの前から上つて見た。表二階の十疊間じゆうざいにはしつぽく臺と大きな鬼面の火鉢ひばちが置いてあるきりで、何一つ見當らない。其隣の部屋へやでは、四五人の女が寄つて、何やらべちや／＼饒舌じょうぜつして居るらしい。私はそつと反れて裏の方へ廻つた。行燈あんどん部屋の前で豆まめどんが洋燈掃除やうてんじゆいをしてゐるのを見かけた。其側を避けて通つて、廊下の外れそばを行つて見た。女の部屋の前には、黒塗くろぬりの札ふだに各自の名が書いて下げてある。私は一つ一つそれを讀んで行つた。一番奥の部屋で「田毎」と云ふ字が見當つた。私は何がなしにはつと思つた。

見ると、障子しょうじが一枚開け放したまゝである。

おづ／＼其間から覗いて見た。上置うわぎのついた簞笥たんすの前に、一人の女が彼方向あつちきに成つて耳の邊り迄みみ巻まき引被つたまゝ寢て居る。あの女だ、あの赤あかちやけた髪かみの房々ふさふさとしたのが、あの女に違ちがひない。客を送り出して、其儘部屋へ歸つて寢たものらしい。部屋の中は森閑もりかんとして、時たま長火鉢ながひばちに掛けた鐵瓶てつびんの口から有るか無きかの湯氣ゆけの輪りんの上るの見える。

私は物珍ものめづらしきうに擬手ねいこと女の寢態ねたいを見守つて居たが、つと眼を反して、うしろ向きに廊下の欄干らんかんに凭たよりかた。此家の裏は黒板塀くろばんべいの下に一間幅いけんの洞川どうせんが流れて、それに沿うて田舎道いんがぢが通つて居る。其道の向うは一面に霜枯しもがらの田野でんやがつゞく。黒い桑くろの葉はが／＼として、薄うすい午後ごごの日影ひかげは當つて居ても、何となく風が寒さむさうである。不圖見ると、正面しょうめんのやゝ黄ばんだ森もりの外れに、ぼか／＼と煙けむりが湧わく。つゞいて轟とどろと地面ぢめんを撼ゆがすやうな音が聞えた。

「あゝ、汽車が——」  
私は思はず口走つた。そして此方の森から彼方の森迄、田圃でんぼに沿つてうね／＼と馳はる汽車を見送つた。  
「亮あきらはま、何時いつ入りやアた。」  
背後せうごで女の聲こゑが聞えた。振回つて見ると、何

時心間にやら女は寝返りを打つて、此方を向いて枕をしたまへ、眼を開いて居る。

「一通此處へ入りやアせと、片手を墨の上迄伸ばしたが、おいやかおもと云つて、其儘又うつとりと半眼に成つて行く。

私は女が紅く膨れ上つた眼を見ながら、それきり物を言つて呉れぬのが、何だか物足らぬやうな氣もした。

やがて女は又不意に眼を開いた。四邊をぎろぎろ見廻して居たが、急に腹ン這ひに成つて、長煙管の輪首で朱塗の煙草の箱を引寄せながら、一つ大きな欠伸をした。

亮はま、お前はまえも、好え人だに其處にある燻寸取つて、頂戴はんか。

「何れなと云つて、私は部屋の中へ這入つたが、あ、これかと、長火鉢の猫板の上にあつた燻寸を取つて、女の手に渡した。

女は燻寸を擦つて、お腹の中迄煙草の煙を吸込んだ。それから又物臭さうな手附をして、二度目の煙草を詰めたがら、ぶーと鼻の孔から太い煙の柱を吹出した。

私は不思議さうに其顔を見守つた。

二三服立つつげに吸つて、ぼんと煙草を捲り出したが、其儘左の頬を比紙に押附けて、

「お前はまえも、此とも叔父さまと似てりやアはんなんも。阿母さまとも、澤山似てぢやない。」

かう云つて、一寸言葉を送切らしたが、一本當に好え生際だなも——女でも欲しいやうだがいも」と、じろく私の顔を眺めて居る。

私は生れてから未だ自分の顔について彼は云はれたことがない。くわつと逆上るやうな心持がしながら、矢張りじくとして其處に坐つて居た。

「あゝ、左様々々、好え物があるに待つてりやアせと、女は突然起上つて、何やら筆筒の上置の中を捜して居たが、

「亮はま、最一遍私に頼まれとくりアはんか」と、最う別な事を云つて居る。

「何ぢやなと私は初めて口を利いた。

「えゝと向うを向いた儘返辭をしたが、やがて二三通の手紙と封筒とを持つて、私の側へ寄り寄るやうにして、

「あのえも、男の手で此上書をして頂戴なも」と、後得さうな、相手を誑かふやうな眼附をして、私の顔を覗き込んだ。

私は只黙つて點頭いた。此女から物を頼まれ

るのが嬉しいやうな心持もした。

「本當に書いとくりやアすの」と女は念を押して、違棚から硯箱を下して来た。そして片手で墨を磨りながら、筆の穂を前齒で嚼んで、私の手に渡した。

私は女の云ふが儘に宛名を書いた。

「真には頂戴——左様、私がおくめだでなも、条嬢として頂戴はんか。条太嬢でも条吉でも可えわなも。」

こんな事を言ひ、私の書いて行く手許を見守つて居たが、「左様々々、それで好えわいも。此方の住所は書かんと置いて頂戴。」

かう云つて、封筒を手に執つて讀み下して見た。

「えゝ何うも有難う、ついでに最う一枚頼むぞなも。」

後の二枚も女の云ふ通りに書いて渡した。女はそれを受取つて、直ぐに封をして出すと云ふでもなく、其儘硯箱の根斗へ仕舞ひ込んだ。私はそれを見つて、何だか手持無沙汰で其處に居づらいやうな心持がして、ばた／＼と段梯子を駆け下りて仕舞つた。

日暮前に、又二階へ上つて見た。西向の窓の障子の下に鏡臺を据ゑて、女は湯上りの寒さ

にも差けず、兩腕を廻り、裸に身體ひをして居た。足音を聞いて一寸振返つたが、「如何しやアした、あんなに逃げて行つて仕舞つて——」と云つたまゝ頭を伸ばして、襟胸の白粉を鬼の足でなどつて居る。

私は筆筒に凭れて、がちや／＼と引手を鳴らして居た。女も別に口を利くでもなく、眉毛に墨を入れたり、口紅を注したりして居たが、最後に最う一遍刷毛で鼻の頭をはたいて、一き、最うこれでお仕舞だぞいも」と、兩肌を入れながら、此方に向いた。大きな黒眼がちの眼に露を含んで、裏間とは丸で別人の様にも見えた。

「何故逃げて行きやアした、折角上げましたのを取らずに」と、笑つて居る。  
「私にはや／＼としながら、何時迄もそこに立つて居た。チゴが外の部屋から女どもが寄合つて来て、煙を云ひながら薬店へ出る支度をする間も、片隅にしやがんで物珍らしさうに見て居た。」

聞く目は學校へ行つた。件し女部屋へ来て居ると云ふことは、誰にも云はなかつた。心では上りも待たかねて、件しから外れる様にして、こつそりと戻つて来た。そして直ぐに二階へ遊

びに行つた。

こんな風にして、暇さへあれば、私は此女の部屋に入浸つて居る様に成つた。時々鏡の上書を書かされた。何故私に書かせるのだと云ふことも、私には解つて居た。私は此女の云ふことなら、何でも喜んでした。外の女から頼まれて書いて遣ることもあつた。終ひには女と一緒に手習ひもした。

一 亮はま、あゝ毎日田毎さんの部屋へ行つて、何して貰やアす」と、仲居の片眼が私を捉へて云つた。

「何もしつて貰やせん。一

「あんな事云つてりやアすが、此度何かして貰やせしに違ひない。」

「私は調数ははれるのだと思つたから、黙つて居た。」

「油 祇りの田毎さんに紙つて貰やアすのぢやろ」と仲居はしち冗く繰り返した。

「何ちチ、油 祇りつて何ちやい、一

「は、ま、丁笑つたまゝ、一叔母さまに訊いてりやアせ。それ、油 祇りぢやで怖い、さな、一

「何だか子供扱ひにされるのが忌々しいので、抑しても聞かなかつた。又他人に訊いて見る氣にも成れぬので、心にかゝりながら其儘にして

置いたが、油 祇りと云ふ異名は随分名高いものらしい。其後もちよい／＼耳にした。ある日、叔母と仲居との話を傍聞きして、やつと其譯が分つた。

此女はもと新地の浦々樓に居た。矢張り浦々といふ源氏名で出て居た。筆立は取立てて云ふ程でもないが、どこか氣が利い、一寸三味線も弾ける。お客に依つては、箱内のさはり倚り筆で唄つて聞かせるので、座敷が持てる。

藝者上げるよりも面白いと云ふ評判が立つて、一時は素賑らしく賣つたものだ。それが爲に檢番から苦情も出た位だが、間もなく大垣在のさる物持に引かされて行つた。ところで、そんな女のことだから、何うも田舎に煙つて居る氣に成れない。如何かして其處の家を出ようと思ふのだが、深い世話に成つたおぼえもあるし、幾許そんな稼業をして来た女だと云つても、左様々々義理を外したことも出来にくい。

それぢやと云つて、其儘辛抱することは尙更出来ぬ。いろ／＼考へた擧句、不圖一策を想ひついた。

それが油 祇りの一條である。

世の中にく／＼首と云ふものがある。美しい女が夜寝て居ると、女の首だけする／＼と仲

びて、首を擡げた様に行燈の油を舐めたり、小廻の水を呑みに出たりする。それで眼が覺めて見ると、當人は一向知らぬと云ふのである。まさか頸まで仰はず譯には行かぬが、切めて油を舐める眞似でもしたら、向うから愛想を盡かして出て行けと云はれまいものでもなからうと云ふので、早速其支度に取りかゝつた。毎晩男の寢息を窺つてこつそり床を抜けて出る。それから行燈の向うへ廻つて、此方へ影が映るやうにしながら、びちや／＼と皿の油を舐めた。勿論出来るだけ男には氣附かれない様にした。男が身動きでもしたら、びつたりと止める。凝手と息を殺して、男が寢附くのを待つて、又そのそと出掛ける。随分氣の長い話ではあるが、そこが手際の入る所である。斯うして、毎晩根氣よく續けて居る間に、男も氣が附いた。そつと女の寢床へ手を遣つて見ると居ない。はてなと、同邊を見廻したが、枕元に置いてある有明の中へ首を突込んで、びちや／＼と油を舐めて居る。それが明くる晩も續く、其又明くる晩もつづく。左様なると男も怖氣が附いて来た。幾許執心を掛けた女でも、左様云ふ女では家に置かれない。で、何氣なく女を喚んで、少し都合があつて暇を遣るから、お前に當てがつた物は

悉皆持つて行くが可いと言ひ渡した。女は思ふ處に眠つて来たと言ふ心持を色にも見せず、それでは是非が御座いせんからと、體よく其場を下つて、身のまはりの物は小片布一つ残さず持出した。そして、又元の古集へ舞ひ戻つて、一箇月も經たぬ間に同じ家から勤めに出た。男の方でも、後で一杯喰はされたと氣が附いたらうが、大家の主人ではあるし、それ限りに成つて仕舞つたさうな。油舐りと云ふ異名はそこから出た。

其後半年餘り新地に居たが、神風樓が出来ると一緒に鞆登して来たのだと云ふことである。こんな話を繰回して、

「それでも、よく／＼可厭ぢやつたと見えるわな。あの女が、本當に菜種油を舐つたんぢやるか」と、仲居は片眼を光らしながら云つた。「そりや些とは喚へも行つたのさな。」

「は、／＼と二人は笑ひながら立上つた。

私は少時其後に立つて居たが、急につか／＼と二階へ上つて、女の部屋へ行つて見た。女は今日も蒲團の上に寢轉んで居たが、足音を聞くと思をばつちり開いて、お出／＼をするやうに、夜着の片袖を持上げた。

あの口で油を舐めたのか、本當にそんな事を

したのかしら——  
それが訊きたいと思つても、如何しても口へ出ぬ。私はだん／＼女の側へ近づいた。女の顔を見詰めたまゝ、じり／＼と側へ寄つて行つた。云ひたい、云ひたいと思ふことが如何して云はれない。

「如何しやアした」と云ひながら、平常の様に兩手で私を引寄せた。私は女の頸の下へ頭を押附けたまゝ、一人ぼろ／＼と泣いて居た。

其後、油舐りの一件は噫にも出さなかつた。

師走の二十一日に、祖母の法事がつとまるといふので、私は一寸自宅へ戻つたが、冬休暇の間は其儘自宅に居ることにした。一箇月餘りもあんな賑やかな生活に慣れただけ、母親と二人、それに作男を加へても三人鼻を突合せて膳に向ふのが、何となく淋しかった。殊に喰物が不味かつた。小さい時から喰ひ慣れた、お饅節にお醬油をかけて御飯に添へて喰べるのが何うも可厭で堪らない。

それでも、暮の二十八日には例年の餅搗きをした。今年は叔父の家の分も一所に搗いて、町からも手傳ひに來ると云ふので、朝から大騒ぎをした。日暮から搗き始めて、夜通し杵の音がして居た。そして、明日の午近くやつと搗きを

はつた。四斗檜の上に置るのだと云つて、檜の鏡の外へはみ出る程の鏡餅をこしらへた。大晦日の日、皆それを荷車に積んで曳いて行つた。

除夜、元日、何事もなく済んだ。

二日の朝、初めて神風樓へ行つて見た。大門を這入ると、廊の中は門松で林の様に見えた。何處の樓も、刺ぎ竹に根こぎにした松や梅の古木をあしらつて、盛砂に景氣を添へてある。毎も雪間は森として人通りもない街の上に、派手な襦袢の雙つーらしいのが、印半纏の上に雙子の羽織を引掛けた男と一緒に成つて、羽根を突いてきマツキヤと騒いで居る。赤い顔をして

格子先をぶら／＼歩いて居る男も見える。私はあわてて叔父の家の軒下へ駈込んだ。見ると、家の中が森閑として居る。少時梯子段の下に立つて居たが、誰も出て来ない。何だか當の外れたやうな氣もした。

そこへばた／＼と側へ叔母さんが二階から降りて来たが、

「あ、亮はまか／＼と云つたまゝ、此方へとも云はず、あたふたと奥へ這入つて行つた。

私は一氣に取られて立つて居た。ついで、

一如何したんぢやいと訊くと、  
「え」と梯子段を降りて仕舞つて、一田毎さんが酒に酔つて、叔父さまと喧嘩したんぢやぞな。そりや一時えらかつたに。一

一何故そんな事したんぢやろ。一

一何故つて、そりや云ふに云はれん譯があるのさな、まア可えに、一遍二階に行つて見てりやアせ。」

一左様と云つて、二階を見上げたが、女が辭つて居ると聞いたので、思ひ切つて直ぐに上つて見る氣にも成れない。  
少時うじ／＼して居たが、一段づつ梯子を上つて、そつと引附を覗いて見た。そこに五六人の女が立つたり坐つたりして、何やらぼそ／＼と話して居たが、一人が振向くと外の女も皆一齊に振向つた。

私は直に奥の部屋へ行つて見た。女は懐手をしして兩脚を投出したまゝ、箆奇の抽斗に凭れて居たが、上眼にじろりと私の顔を見たり、直ぐに又眼を伏せて、何時迄待つても何とも云はぬ。毎もとは容子が違ふので、私から何か云はうとしても口へ出ない。少時立つて見て居たが、あきらめて階下へ降りて来た。

何でも、其晩から客へ出ないと言ひ張つて、

ふてて居たさうだが、それでも午過ぎに親戚の客が来たと云ふので、其男を相手に鬨氣にはしやいで居た。三味線や太鼓の音も聞えた。そんな譯で、私は女の座敷へ行くことも出来ず、一人勸工場側の吹矢へ行つて、吹矢を吹いて暮した。そして、明るる朝早く自宅へ歸つて仕舞つた。

此後、私はたまに叔父の家へ行くことはあつても、長く逗留して學校へ通ふやうなことはなかつた。女の部屋へも滅多に行かなかつた。私には能く解らないが、家の祿業も思はずくなく、だん／＼店も寂れて行くらしい。叔父自身他所の樓へ上つて騒いで戻つて来て、それが悶着の種子に成ることもあつた。

そんな風で二三箇月経つたが、陽氣がぼかぼかとして桃の花の吹く時節に成つても一向景氣が直直らない。其間叔父は内密で、店を人に譲つて其金子を持つて、夜逃げ同様に古屋へ上げ越して行つた。そこで小料理屋の様なものを始めたと云ふことだが、それからと云ふものは私は一度も叔父の顔を見たことはない。又、勿論私の家へ顔を出したこともない。

一年許りして、叔父が酒毒のために死んだと云ふ噂が傳はつた。其時は最も小料理屋の店も

聞めて、何處かの裏長屋へでも這入つて居たものらしい。例の叔母さんは如何したらう。

「あれも感心な女ぢやぞえ。貞次が死ぬ迄側に  
ついて居て面倒見たのぢやさうな。」  
母親はこんな事を云つて居た。

二

私は十四の春を迎へた。

其頃から、私は俄然大人びて来た。身長もずる／＼と伸びて、一人前の小男よりはずつと高かつた。子供らしい遊びにはすつかり興味が失せて、同級の仲間なぞが夢にも知らないやうな、大人の世界に對して苦しい憧憬を感じて来た。そして、一人寂しい日を送つた。

勿論早熟だとは云はれよう。併し私には左様云ふ時期に際して男だてら邊幅を氣にしたり、女と云ふ女が氣にかゝると云ふやうな心持は知らなかつた。日常日に觸れるやうな女は、私とは縁もゆかりもない。私の心にとまる女は、只小説本や講談の中に棲んで居た。たとへば花見の歸りに若衆を見染めて、戀わづらひをしたリ、それから乳母の仲立でやう／＼思ひが倦つたり、倦つたかと思へば又別れたりして、悪漢に勾引かされるやら、苦界へ身を沈めるや

ら、さま／＼憂日を見た擧句、二たび男に近り合ふと云つたやうな女であつた。此一年間に、私は何れだけ小説や講談物を讀んだか知れない。尤も作者の名も知らず、表題さへ知らずに讀むのだから、後では一つとして覺えて居らぬ。只次から次へ讀みに讀んだ。高潮に達した所へ來ると、明けの鐘を聞いて床へ這入つたことも一度や二度ではない。夜も表も夢を見て居るやうな心持がつづいた。其中へ入り込む女には、只一人廓で知つた女があつた。

其後、あの女のことは忘れられるともなく忘れて居た。それが何時となく、二たび心にかゝる様に成つた。あの當時の事を一つ／＼想ひ出して、二たび眼の前に泛べて見ることもあつた。あの女も、一日廓を出てしばらく桑名で藝者をして居たが、それも面白くなかつたのか、此頃又金津へ舞ひ戻つてつとめをして居ると云ふ噂も、もうす／＼聞いた。併し逢ひたいと思つても、

わざ／＼逢ひに行つて見るだけの熱心はなかつた。昔から稗史小説の作者は、遊女を卑しいもの、擯斥すべきものとしては教へない。寧ろ威嚴のあるもの、押の利くもの、女と生れたらあやかりたい位のものにした。私も左様は思はないまで

も、決して賤しむ氣はなかつた。それに、あのやうな事情からあのやうな種類の女を知つたので、普通の人の持つやうな、女郎を齎すべからざるものとするやうな心持は、悲しいかな、一度も持つたことがない。只現實に見る女郎には物の本で讀む浮川竹の女に見るやうな、水仙の根を切つて花瓶に挿したやうなしをれがない、萎れた寂しみが無い。そこに一種の反感を持たせるものがある。

兎に角、小説や稗史を讀みながらも、時々あの女の姿が紙の上にならつて、雪の降る夜、裏庭の松の樹に纏られて遣手に折檻されて居る遊君をあの女だと思つたり、それを私が斯を乗り越えて晦けに行つたりするにはしたが、未だ錢を握つて遊廓へ足を踏み入れるだけの度胸はなかつた。そんなにして、其年も無事に暮れた。

明けの年の春、私は鶯谷の小學校を卒業した。此徳田舎に残つて百姓に成らうか、それとも上京して學問をしようかと云ふことが問題に成つた。年貢米を貰つて、冬は獵銃を擔いで林の中をあさつたり、夏は寫眞器でも肩にして、水邊をぶらついて、一生のらくらして暮すのも氣樂で好いかも知れぬ。只、それでは何だ

か残惜しい。見ない所も見たい、知らない所も知りたい。殊に此儘田舎の羽俊には成りたくない。四圍の男や女とは違つたものに成りたい。違つたものとして道へられたい。私はいろいろ思ひ悩んだ擧句、卒業したら買ふ筈の獵銃と寫眞器とを捨てて、一人知らぬ旅路に上つた。

上京して、初めて志した學校へ行つて見た時、私はその狭いと汚いと惘れた。芝口に宿を取つたまゝ、一週間許り通つて見たが、先生も生徒も教へることも語らない。全體東京の街からして思つた程に美しくもなければ、立派でもない。これぢや如何しても長く居つく氣がしない。いよく故郷へかへるつもりで成つて、同宿の男に案内を頼んで、上野淺草と見物して廻る間に、其男は私の紙入を渡つて宿屋の二階に私を置き去りにした。仕方がないから、宿の主人に事情を打明けて、故郷へ書留郵便を出した。電報では意を盡さぬし、書留郵便なら普通の郵便よりも早く着くだらうと思つたからである。

二三日して故郷から一人の男が出て来た。其男に伴れられて私は初めて下宿屋と云ふものゝ軒をくゞつた。其處から、又元の學校へ適ふ

ことに成つた。下宿屋の趣向程味氣ないものはない。私の夢はや々に故山へ飛んだ。不思議なことに、私の夢に入るものは故郷の家を守る母親でもない。勿論遊び仲間の友達でもない。あの女だつた。廊に居る女であつた。

夏の休暇に成つた。遊學と歸省、此二つの言葉位當時の私に快くも懐かしく響いたものはない。而も遊學に失望した私は、何の位歸省を待ちかねたらう。明日の朝立つと云ふ前の夕、銀座で少々の買物をして、革靴に詰めて、枕頭に置いて眠りに就いた夜は、私の一生の間でも、實際幸福な夜であつたらしい。

が、いよく汽車が故郷の町に着いて、改札口を出た時、私は最う一種の物足らなさに襲はれた。歸省する位なら、停車場へは弟や妹が迎へに来て貰ひたい。妹の年は十三で、弟は九つ位で有つて欲しい。併し一人子の私には弟も妹もない。妹の連れで、最一人同い年の妹にも来て貰ひたい。其頃濫識した小説に魅せられて、心算かに許嫁の女を描いて居た私には、それが無いのも、何とやら物足らなかつた。私を迎へには、家の作男が荷車を引いて来て居たに過ぎない。

毎日、家にぶら／＼して居ると、一層物足り

ない。備には十三になる作男の小体で、釣の上手な奴にそのかされて、漁師の船を借りて、大川へ釣に出て見たが、それも興味を持たぬものには一向面白くない。柳の下に籠をもちやせて、小俵が籠を垂れて居る間、私は籠の間に寝轉んで、水簾の女房殺しを眉山の大盃に讀み耽つて、其儘歸つて來ることが多かつた。

長良の川祭の夜かと覺えて居る。未だ日のあかりから出かけて行つて彼方此方人込みの中を押されながら、宮の裏へ出た。賑やかな人いきれの中を抜けて來ただけ、急にひつそりとして、ちらほら通る人影も侘しさうに見える。川の流れについて、だん／＼堤を下つて見た。だんだん祭の場から遠ざかつた。

渡船場を上つて、堤の上へ登つて來る一團がある。其後から一人の女がおくれて上つて來た。何うもそれが二年前に別れた例の叔母さんらしい。私は思はず足を止めて、「おい」と喚んで見たが、其あとに叔母さんとは如何しても口へ出なかつた。

叔母さんは一寸眼を上げたが、其儘私の前を送來て、一まあ亮はまか、やつとか日だなもと、さも

人懐こいやうな表情をした。

「え」と云つただけで、別に云ふ言葉を知らな

い。

「彼時から、阿母はまは御機嫌よろしいかな

も。」

又、「え」と云つて、少時黙つて居たが、「僕

は、此春から東京へ行つて居るんだぜ。」

「東京へなも——矢張勉強にかいも。」

私は只點頭いて見せた。

「あ、今は夏休みで歸つてらつせるだなも」と

私の顔を見て居たが、

「一遍金津へ遊びに来やアせんか。田毎さんも

居りやアすぜえも。」

私は心持顔が靨く成るやうに思つた。

少時して、「何と云ふ家に居るの」と訊いて見

た。

「田毎さんかな。」

「うむ、叔母さんでも——何方でも。」

「え、田毎さんはなも、金波樓知つてりやア

すぢやろがな。角のあの家に居やアすに、一遍

逢ひに行つてりやアせ。」

かう云つて叔母さんはにや／＼笑つて居る。  
随分さまりの悪い思ひをしながら、それでも  
何處やら嬉しさうな心持を隠し切れなかつた。

其夜、家へ歸つてからも、同じ事ばかり思ひつ

づけて居た。夜が明けても、未だ同じやうな心

持である。

午過ぎ、例の小倅を誘つて、大川へ釣に出て

見た。だん／＼船を下へ流させた。下るにつれ

て、遊廓が近づいて来る。此邊から堤へ登れば、

廓の裏までは四五町もあるまい。

「おい、一寸向うの岸へ船を着けて呉れんか。」

「何處ぞへ行くのかな。」

「うむ、町へ買物に行つて来る。」

小倅は云ふが儘に、船首を堤の下の砂地に着

けた。

「此處に待つちよるのかな。」

「なに、歸つて来たら喚ぶで、何處へなと漕い

で行つて居るが可い。」

かう云ひ棄てたまふ、堤の腹を駆け上つた。

堤の上に立つて、一寸向うに見える屋の棟の高

い一郭を見渡したが、其儘又駆け下りて、田圃

の中につゞく小徑を一散に走つた。誰か見て居

るやうな気がして、只も走らずには居られな

かつた。日光が頭の上から照り附けて、田の

水も沸立つやうな目である。  
裏門から廓の中へ入ると、傍目も振らず、金波  
樓の門口へ来た。流石に一度は通り越したが、

二度目に其前迄戻つて来て、つと軒下をくゞつ

た。土間に突立つたまふ、

「おい／＼」と喚んで見たが、昔々靴でもして居

ると見えて、一向返辭をしない。

「おい／＼、誰も居らんのか。」

二たび音出しさうな聲を出して喚んだ。

「へえお出やす」と直ぐその腰高障子の中か

ら寢惚けたやうな、頓狂な聲が聞えた。やがて

亂次ない風をした女が上り框へ出て来て、

「お出やす、何うも御無禮しました」と云ひなが

らじろ／＼私の姿を眺めて居る。

「上つても可いかい。」

「え、何ぞ」と蓋つて云つたが、藪草履を穿い

て、綿笠を扱へた私の様子、何うも跡に落ち

ぬらしい。私は度はず椅子段を上つた。後から

跟いて来た女中に向つて、

「田毎と云ふのが此家に居るんだね。」

「え、見えます、田毎さん喚びましよかなも。」

「あ。」

一人引附に残されて、ぼつねんと待つて居る

と、やがてばたん／＼と悠然した重草履の音が

して、  
「まア」と云つたまふ、女は關の前に立止つ

私は立上つてつか／＼と側へ寄つた。

女は少時私と眼を見合せて居たが、

「部屋へ入らつせ」と云つたまま、くるりと背後を向けた。そして急ぎ足に廊下を引回して行く。

私は胸を躍らせながら其後に従つた。

いきなり障子を兩方へ開け放して、

「暑いに、開けて置かうかい」と、べつたり長火鉢の前に坐つた。

私にも向ひ合つて坐らせながら「本當に好う來てお呉れたなも。如何して此處が分つたな。

え、叔母さんに聞きやしたのかな。」

私は只相手の顔を見ながら笑つて居た。

「あゝ、左様だ、それで解つた」と、頓狂な聲を出しながら、「此間の晩達中で叔母様に違つたら、田毎さんの昔の好い人に違つて來たと云つて、如何しても名を云やアせなんだが、それ

ぢや、屹度それが貴方のことに違ひない。」

私はくすぐつたいやうな氣がしながら、それでも嬉しかつた。

「これ如何しようなも」と仲居が引附に忘れて來た試鏡を持つて來た。

「あゝ、それか」と云つて、私は傍から引たくらうとした。

「何だいも、それは」と女は笑つて見て居る。

「釣に來たものだから。」

「好え物釣りに來やしたな。」

二人が聲を合せて笑つた。私は眞赤に成りながら、相手の女が憎いやうにも思つた。女は何と思つて居るのだらう、何と思つて私が此處へ來たと思つて居るのだらう。

「左様だかえも」と、女は笑ひ止んで、「此お人

知りやアせんか。私が元居た家の息子さんだぜえも。」

「へえ、神風樓の。左様かいも」と仲居はじろじろ私の顔を見て居る。

「左様ぢやないや」と私は遠て取消した。

「えゝ、息子さんと云ふ譯でもないけれど」と、女はいろんな當時の事を言出して、「毎日一緒に手習ひをしたでしよ。貴方も記憶えて居やアすか。」

併し、私はあの頃の私ぢやない、あの時分の私だと思つて貰ひたくない。左様思はれるのが可厭さに、仲居が、

「何ぞ取つて參りましょか」と云つた時にも、直ぐに、

「私は酒が飲めるんだぜ」と云つた。

「お酒上りやすの。」

「あゝ、東京ぢや誰でも呑むんだよ、かう云つた時には、自分ながら嬉しかつた。

仲居が出て行つた後で、

「さ、浴衣と着代へやアすな」と、箆帚から刷のごは／＼したのを出して、背後から被せた。帯迄新んで貰つて、二たび座に着いたが、兩方の肩から襟の邊りを振回つて、何だか影護たいやうな心持もした。子供扱ひにされるのは可厭でも、こんな所へ來る並の客の様に遇はれるのも好い心持ではない。

やがて三つ井に銚子をつけて持つて來た。

「御面倒さま」と女はそれを受取つたが、「私達二人で好え様にするに、ほかつて置いて休んどくりやア。」

「へえ／＼、そんなら御氣隨に」と、仲居は其儘引下つた。

私は盃を取上げて二つ三つ續げさまに乾した。女も黙つて其後から注いで居たが、急に銚子を引くやうにして、

「最う止めて置きやアせ。無理に飲むと、後で苦しいぜえも。」

「ぢや、上げよう」と、私は出した盃を相手に突き附けるやうにした。

「私最う澤山」と、大業に顔を覺めたが、手に

持つた銚子を下に置いて酒を切り上げることにした。

私は思はずどきりとした。

「ね、それで可えてしょ」と裏ねて云はれて、私は女の云ふ儘に成つた。やがて女は、

「一寸待つてりやすな」と、其儘下へ降りて行つた。何をしに行つたのだらう。何だか看護婦が患者でも取扱ふ様に、物慣れた扱方をされるのが怖ろしいやうでもあり、又物足らぬやうでもある。

少時して何やら鼻唄をうたひながら廊下を戻つて来た。そして、

「些との間、かうして置かうかい」と云ひながら、廊下の障子を兩方からびたりと閉め切つた。

二人は部屋の中に閉籠つた。

「幾つに成りやしたいも」と、女が訊く。

「十五」と私は小さい聲で云つた。

「私より八つ下だな」と云つて、女は笑つた。

一時間許りの後、二人は又長火鉢の前に向ひ合つて坐つた。私はうつとりとして女の顔を眺めた。女の容子がまるで違つて見える。私の眼には最早元の女ぢやない。女も私のことを何

と思つて居るのだらう。それが聞いて見たい。それが知りたい。

とは云へ、女は別に何とも思つて居ないらしい。細帯のまゝ立膝をして、重たさうに鐵瓶の湯を湯さましへうつしたが、其儘朱羅子の煙管を引寄せて、一服ゆつたりと吸ひ込んで、ぶらと鼻の孔から吸出した。私には出来ぬ藝當である。私の吸へぬ煙草を吸つて、私の出来ぬことをする。それが忌々しい様でもある。

私は何時迄も歸りたくはなかつた。只、目が暮れてどきどき仕出してから廊を出るのが可厭さに、思ひ切つて立ち上つた。女は裏木戸迄送り出したが、

「阿母はまに、私に逢つて来たと云やアすか」と、わざとらしく笑ひながら訊いた。

「そんな事は云はないさ。」

「左様、それなら好えわな。」  
私は木戸を出ると、又一瓶に断出した。街の角を曲らうとして、一寸振向いたが、女は未だ元の所に立つて居た。

大川まで一息に駆け戻つた。小倅はさも待ちくたびれたやうに、堤の下へ船をつけて、ぼんやりして居た。

「些たア捕れたかい」と訊いたが、只氣の無ささ

うに、  
「え」と云つて棹を突張つた。

暗がりの水の上を半里餘り漕いで上つて、百姓家の夕飯過ぎに自宅へ戻つた。寢床へ入つてからも、ちやぶ／＼と船縁を洗ふさゞ波の音が耳について離れなかつた。

明くる朝、目が覺めると先づ廊の女を思つた。昨日逢ひに行つて、又今日も行くと云ふことが、先の女に對して氣恥かしいやうにも思つたが、辛抱が出来ずに、例の小倅をそのかして船に乗つて出た。

女は私の顔を見ると、只淋しさうな笑ひ方をした。私はそれが氣にかゝつた。何處やら前に知つて居た頃の其女とは違つて居るらしい。が、何時迄そんな事の心にかゝる年頃でもない。その日も、何をしたりやら知らぬ間に日が暮れて、いや／＼送り出されて戻つた。

それからは毎日の様に廊通ひをした。毎日、同じ時刻に船に乗つて出て、同じ時刻に戻つて来た。晝間だから、何日行つても、樓中が森として、女も私一人を待つて居るやうに見える。何時の間にか、私は女を自分一人のものもの様に思ひ出した。始終眼は輝いて居ても、丸で物の見えない年頃の私は、自分の火の手さへ高

まつたら、相手も一緒に得えるものと思つて居たらしい。又、大様思ふのを、誰一人かけるものもなかつた。

いよ／＼夏休みもそとりと成つた。

八月三十一日の朝、町の停車場から汽車に乗つたと見せかけて直に引回して、女の許に隠れて居た。此一週間位夢心地に酔つて居たことはない、一生あるまい。自分で何をして、何を云つたかも知覚えて居らぬ。女が何んな事を云つたかも知覚えて居らぬ。只、二人は起請と云ふものを取交した。小指の血を滴しながら、同じ文書を二通に書いて、一通づつ別けて持つた。でも、これは女から言出したのだが、如何云ふ氣で、あの女がそんな事を言出したものか、今でも分らない。

一週間経つて、私は十分身體を養つて行くやうな思ひをしながら、廊を立つた。

三

東京へ来て、無暗に手紙を出した。返事が来れば、直に又其返事を出した。僕の思はくなどには未だ氣が附かない。當人は何と思つてそれを受取つたらう。宛に角、彼れがちながら返事は来た。それが五通とたまり、十通と重つて、

終ひには來にして藏つて置いた。かうして一年の間つゞいた。

又夏休みが間近に成つた。恰度五月の節句の頃である。半月餘りたよりが絶えたと思つたら、不意に其女から一通の手紙を受取つた。裏書に名古屋市門前町何十番戸とあるので、先づ胸が轟いた。開けて見ると、去年の暮から二三度出た老人の容に、不圖した話のはずみから急に引かされて、十日程前に此地へ來た、相手は造酒舗の隠居である、年寄りのことではあるし、ほんの出來心で引かせて貰つたのだから、長う續く筈はない、晩くて二三箇月もしたら暇が貰へるだらう、そしたら貴方の側へ行つて、

繼令何んな苦勞をしようとも屹度添ひ逢けるから、必ず惡う思つて呉れるなど云ふ知らせである。私は生れて最初のデイスリユージョンに出逢つた。遊女と云ふ名には何處か濡ひがある、たよ／＼とした所がある。併し人の姿が何だ、姿には同情も縁もない。遊女は畜生に劣つた埃津かも知らぬが、未だしも人の子か成ると、姿には畜生が成る、あの女が隠居の姿に成らうとは思はなかつた。

私は眼が眩んで、四邊が暗く成るやうに思つた。一日一夜興奮した擧句、直ぐに其家を出よと書いて出した。愚圖々々して出なけりや、何も彼も着て置いて、此方から出かけて行くと書き添へた。彼方からは、今にも如何かするから短氣を出さずに待つて居て呉れと云ふ、煮え切らない返辭だが、其頃は大方心持も納まつて、直に出掛けて行く程でもなかつた。

其後は此方から出す手紙も間違に成つた。何うも様子がお名所の所には居ないらしい。それなのに居所も知らせぬ。何處かへ消えて行つて仕舞ひさうな氣もして、心も心ならず目を送つた。其間に、やつと休暇が來た。

夏の朝、旅装もそこ／＼にして新橋を立つた。かねて打合せもしてあるから、笹島の停車場へ着くと、うろ／＼場内を見渡したが、如何したのか女の姿が見えぬ。くわつとして、矢處に脚車を備つて駆け出さうとした時、

「もし、背後から聲を掛けたものがある。」まア遊つて何處へ行きやアすか。」

一何處へ行くものかと思つたが、好く／＼見ると女の容子が何處か窺れて、服装も思つた程好くない。何だか當が外れたやうな心持がして、思つたことも口へ出なく成つた。其儘脚車をかへして、女に作れられたながら、とある裏小路の

旅人宿に泊つた。

私は初めて此女が素人の風をしてゐるのを見た。併し最早私のものぢやない。左様思ふと堪らなかつた。如何して可いか解らない。他人に身受をされるものなら、何故其前に一言知らせ

て呉れぬか。其前に知つて居たら、私だつて如何にか成らぬことはない。母親の前に出て、斯うした譯だと右様を白狀したら、それ位の身代

金は出して呉れぬこともなからう。私は母親を見くびつて居たから、本當にそんな事が出来る様に思つた。縱令出さぬ迄も出させて見せる。

命にかけても出させて見せる。そんな事情は女の方でも分つて居る筈ではないか。女にしても、隣居の妾になるよりは、私の家へ来る方が仕合せであつたらう——

私は思ふさま言ひまくつた。「そんな事云やアしても」と、女は口を挿んだ。「阿母はまに、私お目にかゝることの出来ん譯があるでなも。」

「何故々々、如何してそんな事を云ふんだい」と詰め寄せた。

「如何してと云つて、そりや、いろ／＼譯があるわいも。」

「解らない、私には解らない。二人が大姉に成

るものなら、お前が阿母さんに逢はぬ譯には行かんぢやないか。それとも私の許へ来て呉れると云つたのが嘘かい、お前は私に嘘を云つたのかい。」

「いゝえ」と頭振を推つたまゝ、何とも言はぬ。私も少時黙つて居たが、「ぢや、最う云はない。済んだ事は云はないから来てお呉れ。私の許へ来て呉れるのが可厭なら、私から行く。何處へでも隨いて行くよ。」

「貴方えも、今年十六に成りやアあなたア」と不意につかぬ事を女が訊いた。

「何故成見たいなもの訊くんだい。」

「でも——貴方が三十に成りやアすと、私は幾歳に成るんぢや。かうつと、今年底の二十九ぢやでと、眼を瞑つて指折り數へながら、一恰度四十三だぜえも、そんなお婆さんでも好えか

いも」と、うそ／＼笑つて居る。

四十三にはさのみ驚かなかつた。私も何時かは四十三に成るのだ。併し女は確か私より八つ上だと覺えて居る。女の口からも左様聞いたやうな覺えがある。

「如何しやアた。何を考へてらつせるの」と二たび女が訊ねた。

「何も考へてやせん。歳なんぞ幾つだつて可い

んだ。歳のことなぞ考へやせん。私は只お前と別れたくない。お前が来て呉れなけりや、本當に私は如何なるか分らない。」

「そんなに云やアすと」と云ひかけて、女は言葉を途切らしたが、「だが、今は左様思つて居りやアしても、三十に成つてから考へて見やアせ、峠度思ひ當りやせえも。」

「そんな、そんな人間だと思つて居るんかい。私はそんなんぢやない、そんな薄情な人間ぢやない。」

「えゝ、そりや分つて居ますとて。」

「まアそんな話は止めて置かうかいも。折角私も無理をして来たんだに、しつぱりと逢つてお呉れやさんか」と、つく／＼相手の顔を見返さむやうにして、「こんな事をしてりや、まるで帯屋の遮見たいだなも。」

「何だい、そりや。」

「何でも好いわなも。」

私は又女のするが儘に成つた。二人は徹宵でうと／＼とした。敷蒲團は寝汗でしつとりとして眼を覺ました時にも、半ば夢心地が離れない。

やがて、十時頃に朝飯を済ましたが、私は如何しても此處を立つ氣がしない。何時迄も此處に居たい、女も此處に止めて置きたい。

「私一遍、自宅へかへつて來ますぜえ」と、云ひ出した。

「いやだ、未だ歸つちや可厭だ——」

「そんな事云やアしても。」

「ね、今日一日だけは可いだらう。切めて日暮迄も、私は哀願するやうに云つた。

「それが、昨日も出られぬのを無理に出て來たのだでなも、如何しても今日は歸つて居らんと——え、何と云やしても。」

女はきつぱり云つた。

「だつてと相手の顔を見詰めたま、一人人は十日に一度か、半月に一度しかお前の許へ違つて來ない」と云ふんぢやないか。そんなら何もそんなに違つて歸らなきや成らぬ筈はない。」

「え、と云つて、私の顔を見返したま、少時何とも云はぬ。

「ぢや」と云ひ掛けたが、頭の中はびくりと動いた。左様ぢやないと云ふんだぬ。」

女は歸つて歸つて歸つた。

二たび女は歸つて歸つた。

「ぢや、何だい。其人は何だい。」

「本當は——本當は博奕打ちやす人でも、其方の親分だと云ふことだがえも」と、一寸私の顔を見ながら、又早口に言葉を續いで、「それだ

でなも、こんな事が知れようもんなら、何んな目に遭ふか——ひよつとしたら殺されて仕舞ふかも知れんぜえも。萬一そんな事にでも成つて、

私だけなら可えが、貴方に迄——

私は飽氣に取られて、何とも云ふことが出来なかつた。如何思つて可いかも分らない。

「だで、如何しても今日は歸らな——好えか

いも、其間又都合を見て違へるやうにするでなも。貴方も一度自宅へお歸りやアせな、悪いぜえも。」

さう云ひ、片側繩子の帯を緊め直しながら、「私もそんな顔を見て歸つて行くと、何日

迄も氣がかりだでなも。好えかいも、屹度來月の五日過ぎには、私が貴家へ行く」と云つて内を

出るでなも、其時に貴方も四日市迄來てお歸りやアせ。え、左様して頂戴なも。」

少時返辭を待つて居たが、

「そんなら、最う行くぜえも」と、女は一足づつ部屋を出て行つた。

あの女が遊び人と一所に成つた——あの女が、元々自分が好きで成つたのか、それとも——それが聞ききたい、それが聞ききたかつた。好きで成つたんだとすりや、そんな女に用はない。私とは縁がない。何うもあの女にはそんな所がある、私には分らぬやうな暗い半面がある。

其夕、汽車で自宅へ戻つた。二三日は人にも合はず、氣抜けがした様にして、うつら／＼日を送つた。そして、毎日同じ事ばかり繰り返して考へた。

或朝郵便夫の手から一封の手紙を受取つた。差出人の名がない。私は一通りそれを讀むと、俄に其日の午後口實を設けて家を出た。

四日市の町を外れて、山の手へ一里半許り上つて行くと、名もない温泉宿が一軒ある。そこ

に行つて待合せよと、手紙にあるのを手頼りにして出た。知らぬ所へ行くのと、女に逢ふと

ぶふ期待とで心を悩ませながら、汽車や嘯車に揺られて、夕ぐれ日指す宿へ着いた。店に駄

菓子や並べて草鞋や馬の沓さへ吊してあるが、奥は思ひの外に廣い。古めかしい勾欄が築山や

泉水の端をめぐつて、内湯も沸く。女はと訊いて見たが、未だ着かぬと云ふ。其夜は裏の山に響ぐ風の音を聞きながら、一人限りにい

た。

「明くる日、午前申待つて見たが、未だ来ない。午後には此村に盆の村芝居があると云ふので、私は寄々しながらそれでも氣を紛らしに行つて見た。例の軒の中に席を引張つた小屋である。宿の女中に案内をさせて棧敷についたが、幕間の騒々しいこと、夥しい。物賣がわめく、子供が泣く、棧敷がひしめく。寢不足の頭にはぐわんぐわん響くやうな騒動である。私は幕開きも待たず這々の體で逃げ出した。」

「かへりには荷の前を通り過ぎて、一町許り行つてから氣が附いて引返した。廊下で行き違つた女中が、

「あの四目市からお待ちかねの方が」と告げた。私ははつと思ひながら襖を開けた。

「お歸りやす」と、女は身體を振向けながら「何うもおそく成りまして——大變待つて頂戴したさうだなも。」

「うむ」と云つたまゝ座についた。

私は女の顔を見ると、二たび逢へないものに逢つたやうな氣がして、云ひたいことも、口へ出ない。一緒に酒を飲んだり湯に入つたりして、ぐづぐづと日が暮れた。

それでも女が私の前で平氣で其男のことを

云ひ出して、痛痒が強いから一度も外へ出して呉れない、今度初めて十日許り留守に成つたので、早速實家へ行くと言ひ置いて出て来たのだなど、事もなげに話すのを聞いては尙更堪らない。私は寄々する心を抑へながら、

「そんな男が、お前は好きなのかい、好きでそんな男の許へ行つたのかい」と語るやうに訊いた。

女は意外な面持で見返したが、

「いゝえ、好きぢやない。誰もあんな怖ろしい人の好きなのものが有りませぬものか。」

「ぢや、何故そんな所へ行つたんだい。好きでないものが、何故初めに左様成つたんだい。」

女は唇を噛んだまゝ黙つて居た。少時して、

「それが因果だわいも、私の因果で——今更仕様がなわいわいも」と、しめやかに言つた。

其顔を覗き込む様にしながら、「ぢや、矢張好きだと云ふんだね。」

「いゝえ、嫌ひでも仕様がな。彼様云ふ男に見込まれたが最後、罷許可厭だと思つても逃れ様がない。未だ貴方には解らんがえも、あゝ云ふ人達と云ふものは、一日見込んだら、縦令殺してでも自分の思ひ通りにせな置かんのだぜえ

も。又殺さうと思つたら殺し損ひはない。それが可厭なら、あの人達の云ふが儘に成つて、思ひ通りにされて居るより外に仕様がな。」

そんな事が有るだらうか、そんな無法な事が此世の中にあるだらうか。私は相手の顔から眼を離すことが出来なかつた。

「それぢや、お前は其男の云ふが儘に成つて居るんだね。此後も成る積りなんだね。」

女は黙つて居る。

「如何しても」と、私は泣聲に成つて相手の身體を揺振つた。「如何しても私を捨てて行くのかい。これ、最一海私の許へ来て呉れることは出来んのかい、如何しても出来んのかい。」

「堪忍して頂戴と、女も泣聲で云つたまゝ、疊に顔を伏せて仕舞つた。

「いや、堪忍しない、私は何處までも堪忍しない」と、頑是ないことを言ひ張つて、

「それよりも、私の云ふことを語いてお呉れ、私の云ふ通りに成つてお呉れ。」

「そんな事云つてりやアして」と、女は又むつくり顔を上げて、「私が急に居らん様に成つたら如何しやアすか。不意に姿を隠したら——」

「そんな事をする積りか」と、私は吃驚しながら、おづ／＼と相手を見守つた。

女の云ふ所に依れば、其男は北海道の空知太へ移住する計畫を立て、今度もそれが爲に旅行したので、旅先から歸れば、直に此地を引拂ふ手筈に成つて居る。彼女も併せて行く。今も六つたやうに、此際男の言葉に違ふなどは思ひも寄らぬ。何處迄も云ふが儘に成つて連れて行かれる所へ随いて行く外はないといふのである。

空知太と聞いて、私は此女が死んで行くやうに思つた。最う争つて見る勇氣もない。只一生懸命に女の身を救ふ事とした。

一本當にそんな所へ行く氣かい、行くつもりに成つて居るのかい。

「最う何も言はずに氣い好くして頂戴」と、女は涙に睨れた聲をして、「これから未だ七八日あるで、其間好きな事して遊ぼうかいも。何でも相手に成りますぞええ。」

私はそれを嫌だとも云ふ夢もなかつた。明くる朝に成つて、伊勢詣りでもしようかと云はれたが、何うもそんな氣はない。何一途も此處に居りたいと云つた。そして、毎日遊藝なげに女を慰めてばかり居た。

七日目に其處を立つて樺島の停車場へ戻つたが、前に泊つた旅館に立寄つて、女は其處別

れて行かうとした。私は如何しても最一度逢ひたいと言ひ掛つて、女も承知した。

他人目を憚つて、女の後から見え隠れに隨いて行つて舞津の隠れ家も突きとめた。とある二階の露の露路の木戸を明けて一寸振りつたまゝ、女はつと姿を隠した。其夜、暗がりに紛れて、二三度其家の前を這つて見たが、客家の様に森として物音一つ聞えない。夜露に

つとりと袂も濡れた頃、やつと諦めて宿へかへつた。

次の日、かねて示し合せた時刻に例の露路口に行つて、ほと／＼と木戸を叩いた。やがて誰やら足音を忍んで近づいたかと思ふと、細目に木戸を開けて、女がそつと顔を出した。そして

何にも云はずに手招きする。

私は黙つて木戸の中へ這入つた。何本も青銅の立つて居る中に古びた茶席めいた平家があつて、女はそこへ連れて行つた。其内側は案内

は鐵瓶の湯も湧つて居た。

「昨宵は淋しかつたよ、私には逆も堪へられさうもない。

私は座に着くと、直ぐにかう云つた。

女は手を上げて謝するやうにしたが、

「能く來て頂戴したなも、怖ろしいことなかつたかいも。」

「濡かつたよ。」

「誰も見えなくて可えわいも。」

つと立上つて、籠へ掛寄りながら、私を帯の上から抱き寄せるやうにした。私は戸口を見詰めたまゝ、がた／＼と馴れ合ひした。

日更前に、女は木戸口から私を送り出さうとした。私は女の袂を握つたまゝ離さなかつた。仕方がないので、途中迄送つて來た。私は田圃道をぐる／＼廻りながら、何處迄も別れようとはしない。とつぷりと日も暮れた。

何處迄行つても同じ事だ、最う歸るぜえもこと、女は幾度か繰返した。

私に其度何とも云はずに女の袂を掴んだ。

日が染れて、人頭が見えなくなつてからは探りづめにして離さなかつた。

「一遁そこ離して頂戴。最う歸つて居らんと悪いでなも。」

「いやだ／＼、如何しても離さない。」

「そんな無理な事云やアしてもと、女は立止つて引返るやうにした。

「何方が無理だ。如何してもお前は私を捨てる氣かい、捨てる行くつもりかい。」

私は葱畑の中に坐つたまゝ、ぼろ／＼と涙を流した。流れる後から、涙は夜風に乾いた。其後から又新しい涙が流れた。

女も側に躍んで背中を撫でて居た。

「私はいいや、お前に抱こられるのは可厭だ」と、時々想ひ出したやうに云つた。

如しの醉を人が通るたびに、二人は聲を呑んだ。時間は何れ程経つたか分らない。

「最う行くが可えかい」と、女の聲が聞えた。私は黙つて居た。

何時の間にやら女は其處に居なかつた。

\* \* \*

それから十三年に成る。

私は二たび其女を見ない。此後も恐らく逢ふことはなからう。

偶には何處に居るやらと思はぬこともない。當時、本當に北海道へ行つたものと諦めたが、今に成つて見りや、あの女の云つたことは皆

諛で、つい近所に生きて居る様に思ふこともある。

青桐の中の家は、其後行つて見ぬから分らない。

### 好きな文章（抄）

そのうちドストイエフスキイなどの心理的描寫が氣に入り出した。こゝでも矢張り刺戟の強いのが氣に入つた様である。例へば『罪と罰』の主人公ラスコルニコフが、金貸しのお婆さんを殺しに行つて、戸口の鍵の穴から部屋の中を覗き込むところの描寫に、心臓の鼓動が強くなつて、しまひには心臓以外の肉體は消えてなくなつてしまつたやうに感ずるといふやうな句がある。それなぞもその裡那のラスコルニコフの氣持を寫すには實に巧い文章ではあるが同時に刺戟の強いのが私には氣に入つたのである。それから同じ主人公が金貸し婆を殺した後になつて、その家の前を通ると急にまた自分の犯罪の跡が見舞ひ度くなつた。で、三階か四階かに昇つて行くと、ラスコルニコフの心では、殺された金貸し婆がまだ血塗れになつた儘倒れてゐるやうな氣がしてゐるのに、大工が入つて柱を削つたり、壁を張替へたりしてすつかり元の形がなくなつてゐるのを見て、呆氣にとられたやうな顔をしたがら、「あの血はどうしたんだ」といふやうなことを訊くところがある。あれなぞも非常な

際の際張した心理を最も適確に描いたものである。どうしてこんなに刺戟の強い文章が好きなんでせう。恐らくは私の神經が麻痺して鈍になつてゐるからとも言へよう。恐らくはまた私の神經が麻痺しなければ止まない程に鋭敏であるからとも云へよう。どつちでも説明はつく。一方に決めて貰ひ度くない。その後私もドストイエフスキイのやうな微に入り細に入り、情調を顧みないやうな文章は本當ではないやうな氣がして來た。矢張り小説の文體としてはトルストイあたりが最も本流を代表するやうな中心の文章ではないかといふやうな氣がしてゐる。トルストイに刺戟の強い、官能的な文章は決して少くないが、ダンスタンチオのやうにこれでもか／＼と、後から／＼盛りつけられるやうな處れはない。サイコロジを措くと云つても、ドストイエフスキイのやうに、他の事は放棄らかして置いて十頁も二十頁も同じ人の變則な心理を説明すると云つたやうなところは少い。心理描寫と官能描寫が相俟ち相助け、小説の文體としては上乘の模範をなしてゐるやうな氣がする。

自 叙 傳

あの儘明けなかつたら——  
うとく〜と眠つたやうな、眠らないやうな心持がして、薄ら眼を開いたが、相手の女は雪の上に乗つたまゝ待つて居た。私は女と顔を見合せた。月の光で見た女の顔を二たび朝の光で見た。唇も色を失つて、まるで頬の色と變らない。何うやら身軀中の血が心臓にあつまつて、そこで凝結して仕舞つたやうにも思はれる。ぐざと短刀で突刺しても、一滴も血は溢れなからう。

私は覺えず眼を反した。よろ〜と立上つて、二足三足元來た道を取つて回した。裏山の木立は鈍染んだやうな灰色の中に沈んで、明方の空の色は眞珠貝の裏を見るやうな。

山の中は一夜の間に三たび空の景色が變つた。日の暮れる頃から眞黒な雲が空一杯にひろがつて、どつと嵐が出た。一木一草を止めぬ雪

の上を山から山へかけて只吹きに吹いた。山は悲鳴を上げた。眞夜半まで暴れつゞけて、風はばつたりと止んだ。一時に天地が森とした。間もなく月が出た。風に吹き拂はれたのか、空には一片の雲の影さへ見えぬ。山々は月の光に照されて、宛ら大波濤が其儘米つたやうにも思はれた。二人は其時まで洞穴の中に隠れて居たが、月明りに返つてついた雪を踏んで一足づつ路を辿つた。行先は暗闇の外にない——人生の行手が暗闇であるやうに。二人ながら物を言

はぬ。何だかそれが夢の様に思はれた。かうして女を作れて雪の中を辿ると云ふことが、すべて實在性を失つたやうな、同時に何か象徴めいた深い意味があるやうにも思はれた。  
あゝあの儘暗闇の中へ迷ひ込んだまゝ、永劫歸つて來なかつたら——左様したら、少くとも戯曲的效果の感能を満足させるやうな、藝術的的な終局を見ることが出来たらう。併し本當の悲劇といふものは、極めて散文的な非藝術的のもので、そんな詭向のキャタストローフなど

が有る筈のものではない。見よ、大詰の幕が下りた途端に、夜の帷に又きり〜と捲き上つた。何の猶豫もあらせず第六幕目が始まつた。あわてて澤場を失つた役者の様に、私は雪の中に墮けながら又起き上つた。

岩陰を廻つた時に、二人の裁附を穿いた齒師體の男に出逢つた。こんなに早く何處から來たものだらうと訝みながら、道を訊かうと思つて近づくと、向うから口髭のあるのが走り寄つて、「こゝら何處へ行く」と、聲を掛けた。

私は只黙つて見返した。

「私は此下にいる駐在所の巡查だが——」  
二人の外の世界をまるで考へて居なかつただけ、私は見る〜顔色が變つた。

巡查はそれをじろ〜眺めながら、一些と訊ねる者が有つて跡を辿掛けて來たので、別に怪しい者と思ふ譯ぢやないが、一應身體を調べるから。」

私は唯々として相手の爲すがまゝに任せた。外套の上から衣囊を撫で下して見て、巡查は頭を振つた。

「短刀を持つて出たとあるが、何處へ遣つたか。」

「捨てた。」

「捨てた？ 何處へ。」

「谷底へ」と、私は機械的に云つた。

「ふむ、女は何處へ行つた。伴員の女が一人ある筈ぢや。」

此時急にわれに返つて、「女も居る、併し失禮な事のない様にして貰ひたい。相應に身分のあるものだから、二人とも。」

「それも承知して居るが、今何處に居るの。」

「私も思はずあの女を坐らせて置いた方を振返つた。」

「え、何處に、何方だ。」

黒い樹の蔭に女の袖が見えた。巡查はつかつかと其方へ進む。私は足を可開けにされたやうに立止まつたまま、只その爲さむ様を見守つた。

何んな問答をしたのか、やがて巡查は女を連れて来た。白い雪の上に立つ黒い樹の間の間を彼方此方に變つて——丁度捕手の役人に引立てられて花道を出て来る人質の女でも見るやうに。

私は茫びるやうな眼附で女の顔を見守つた。女は一寸見返したまゝ、直ぐに眼を反した。

「それでは兎に角町迄引返して貰ひませうか」と、巡查も安心したのか、言葉が尋常に成つた。

「貴下方と一緒には？」

「え、左様です」と無造作に言つて、最一人の男と共に先に立つて山路を下つた。最早有無を云つた所で仕様がな。

私はわざと一二間後れて、女の側へ寄添ひながら小聲で、「少時候へて居て下さい、ね。今に危度如何かするから。」

女は其儘返辭をせずに歩行いて居たが、急に想ひ出したやうに點頭して見せた。何か外の事を考へて居たのであらう。

私も物を言はなく成つた。平な、風に吹き飛ばされた雪の中に、一筋来る道につけた二人の足跡がつづく。追手は此足跡を蹤けて来たものらしい。

やがて路傍に白樺の木が一本道に迷つた様に立つて居る下へ来た。巡查は此根のところを杖にした木の枝で繋ぎ廻しながら、一此處で焚火をしたんだな」と呟く。

二人の手紙を焼いたのだ。永久に過去を葬つたのだ——

巡查はずん／＼行く。

道々昨宵からの話を仕始めた。昨夜おそく宇都宮の本家から電話がかゝつて、これ／＼の落人二人を捕へよと云ふ命令を受けた。それから温泉場の宿屋を軒並にしらべて、やつとそれらしい見當が着いたので、たづねたづねて此山の麓の村迄辿り着いた。直ぐに村役場の書記を叩き起して案内を頼んで徹夜抜道を掛け登つた。此人がそれだと云ふこと。

「昨夜からまんじりともせんで睡いなう」と云つて、巡查は口を噤んだ。

一山中道跡されて居るとも知らずに居たのか。斯う成つたのも自分一人の所爲の様に思はれて間の悪さの持つて行き所がない。それだけに又一刻も早く此不面目な状態から女を救ひ出さねば成らぬ。左様思ふ中から、何うやら斯んな事が前にもあつた——女を伴れ一遣けて、途中で巡查に捕まつて引かれて行く——こんな事が、これと寸分違はぬ事が、前にも一度有つたやうな氣がして成らぬ。四邊の物の様子から巡查のあの横顔までが、何うも初めて見たやうに思はれぬ。

併しそんな事が有らう筈はない。若しそんな事が有つたとすりや、何方か片方は誰だ。誰のが誰だと云ふのなら構はないとしても、後のが

誰だしたら、今斯うして歩いて居るのが誰だ  
としたら、氣の迷ひに過ぎないとしたら——  
下の山路は思ひの外に抄取つた。

間もなく谷間の炭焼小舎へ着く。炭焼小舎の  
主婦さんは、不時の客來にきよとくしなが  
ら、自在に掛けた眞黒な紙蓆から茶を注いで  
出した。

一味増漬でも上がるかね、何もお茶うけ無えだ  
が。

小さい土瓶の井に入れた物を持つて来て、  
書記と進食との前に俯めた。

私は腹痛を感へながら片腹にしやがんで居  
た。

そこから麓まで、巖の露がつけた小徑  
がうね／＼とつゞく。谷川に雲雨の水がよる  
ちよると溢れて、木の枝に下の雪に透して黒い  
網のやうな林の中には無いいためか鳥も啼か  
ぬ。

谷川が太く成るに伴れて、麓の里へ出た。川  
沿ひの堤の上を後先に成つて歩きながら、一一  
と、進んで来た。道がや何處でも休みだつたな  
ら、進んで来た。

一何處と云つても一日籠りながら、二人が草鞋  
を買つて穿いた草鞋の紐手を壊した。

一あゝ、彼の家でしたか。いや、あの噂アめ、  
怪しからん財ぢや。彼れ程識くのに向見掛け  
ませんなど、圖太くしらを切りやアがつた」と  
口滑く言つて、一此後の事も有るから、一番小  
ツびどく痛しめて送らなくつちや。」

私は思はず眼を上げた。二人のために隠し  
て——それは二人が店先に着て行つた古靴な  
ぞから後難を恐れたためであらうが——思はぬ  
奇禍を降つた上さんをあはれに思ひながら、口  
へ出しては何とも云ふことが出来なかつた。

やがてその家の附近に來ると、進査は一足先  
に新出して行つた。

二人は並んで行く。村の書記は少しく離れて  
前に立つた。私は女の横顔を見い／＼何か云  
はうとして、幾たびか口の端迄出た言葉を嚙み  
下した。女は充血した眼を据ゑて、堅く唇  
を締んだまゝ物を言はぬ。何を一人で考へて居  
るのだらう、今朝からの出来事を何んな心持  
で受取つたらう。それが知りたい。私は身に降  
りかゝつた出来事よりも 出来事大自體より

も、それが女に與へた影響の方が氣にかゝつ  
た。何だか水を一杯入れた玻璃の盃を兩手で  
捧げて、おづ／＼足を運んで居るやうな心持も  
した。

一聞もなく進査は背後から振つて来て、一は、  
は、噂アめ、弱つて居やアがつた。笑ひながら  
村の書記と肩を並べた。

山から一里の餘、名なしの橋を渡つて、橋  
の傍の休屋に立寄つた。  
これも炭焼を穿いた六十餘りの婆さんが土間  
の庭の前にしやがんで居たが、進査は知合と  
見えて、

「やア今日は酷い日に逢つたぞ。婆さま、玉子  
酒を一本つけてお呉れな」と聲を掛けながら、ど  
つかりと縁鼻に腹を下した。

一あゝ、それから一と進査は土間に立つて居る  
女の方を振回つて、「此方の着物の裾が濡れて居  
る様だから乾かして上げて貰ひたいが——さ、  
何卒此處へお掛けなさい。」

裏の方から色目の若い女が出て来て、六つ位  
の男の兒が頬く乳房に纏るのを眺し／＼、婆さ  
んと二人して、女のせいだ上着の袂と裾を引張  
合ひながら、焚火で乾かして呉れた。

唯だに倒れて、ち／＼と痛む腕を掲げながら  
ら、私は涙手とそれを見て居た。あの二人は  
何と思つて、あゝして他所の女の着物を乾かし  
て居るのだらう、あの二人の眼には、山から連  
れられて来た見慣れぬ女の濡れしよぼれた様子

が、何んなに映るだらうなぞと、そんな事を心に思ひ廻らしながら――

「如何なさいまして」と、女は私の側へ寄添ふやうにして訊ねた。

「なに、最う好いんです。」

「雪あたりぢやないか」と、巡查はちびちびとめて居た盃を下に置いて、「早く宿へ着いて湯へお入んなさるが可い。え、婆さま、町まで遣つて貰ふのだが、馬は明いて居ないかな。」

「左様だねえ、男どもは野良へ出て居ねえけんど。」

「うんにや、お前達が曳いて行くさ。」

二人は駄馬に乗せられて其家を出た。峠に雪はあつても、里には田圃の水がぬるんで、春の日がぼか／＼と馬の背に當つた。長い杖を眼の上へ懸した女の、後姿が繪のやうな。薬香を穿いた馬は街道の乾いた土の上をかっぱ／＼と歩む。

やがて古ぼけた温泉場の町へ這入つた。とある宿の軒下へ馬を曳き込むと、番頭があわてて跡察を持つて来て、女を抱く様にして下した。

巡查は宿の主人を喚んで、何かひそ／＼と指圖をして居たが、「それぢや、私は一度駐在所へ寄つて、直に又何ひますから」と、二人に挨拶

をして、門口から引回した。

二人は女中に伴れられて、二階の一間へ通つた。女中は何事も知らぬらしい。偏に座蒲團を出して、それから茶と菓子とを侷めて置いて引下つた。

二人は初めて差向ひに坐つた。

何と云つて可いか、何と言出したものであらうか。私は身體中の神經が刻々に弛緩して行くやうな疲勞を感じながら、只相手の顔を見守つた。女の下唇はびく／＼と戦へた。

「如何か爲ようか、直に。」

「如何でも爲るわ」と、女は符設けて居たやうに唇に取附いて、「直に、これから直に。」

「あの巡查は今電報を打ちに行つたのでせうね。」

「家の者などに遣つて來られぢや――私、堪らない。」

「だが、此處でぢたばたして又遣損つちやア」と、私は相手の顔色を見／＼言葉をついで、

「縦令迎への人に貴方を渡して置いても、私だけには二たび東京へ歸らうとは思はない。」

女は私の手を解いて起直つた。

「貴方は――最一度家が出られるか。」

「出られます。」

「乾度、一」

「元、乾度、一」

斯う云ひながら、女は自分で何を云つて居るか知らないやうな風に見えた。互に出来ない事を出来ないし知りながら約束して居る様な氣もした。女も白けた容子が氣が附いたのか、急に振回つて、「出られる、乾度出られる」と聲に力を入れたが、又うつとりして黙つて仕舞つた。

大宮に泊つた夜、あの夜から冷たい白い物が二人の間に立つた。何物かそれは知らぬ。只心中する男女と云ふものはこんなものぢや有るまい。だが、そんな事を云つた所で仕方ない。最早今と成つては無理にも行く處まで行く外はない。

折柄がちや／＼と梯子段に御尻の觸れる音がして、「や、此室でしたか」と、巡查が障子を明けて這入つて來た。洋傘の脛を屈さうに曲げて坐つたまゝ、彼時から腹痛はどうかなぞと尋ねて、「いや、山では驚いた。女が崖からでも落ちて、男一人歸るにも歸られず自殺でもしようとして居るのぢやないかと疑つたのですよ。それだから最初に懷中を調べたのです」と、言譚らしく云つて、「それぢや奥の座敷を掃除さ

せて置から、其間に湯へ這入つておいでるが可い。」

二人は手拭を下げて、廊下舞ひに、河原へ突出した湯殿へ降りた。二つある戸を別れ、開けて這入る。硝子窓から日光が湯槽の中へ射し込んで、黒ずんだ板に荒い木目が浮いて見えた。湯殿を周つて雨の様な河瀬の音がざぶざぶと絶間なしに聞える。

不意に入口の戸をこつくと叩くものがある。私は湯の中へ浸つたまゝ振向いた。三寸程開けた戸の隙間から、女の乳房から上が見えたが、あわてて引込みさうにしながら、一彼方は湯がまるで水の様で、それに垢が一杯浮いてるから堪らないの。」

「おや、此方の湯へ被人しやいな。」  
「可いんですか、行つても。」  
私は只點頭いた。

頭がぐらぐらとした様に思つて眼を開いたが、何時の間にか女は傍に居なかつた。一人湯から上つて濡手拭を持つたまゝ、一足づつ裏柳子を上つて行つた。奥の座敷の前迄来て、何気なく障子を開けたが、

「や。」  
「おい。」

神戸が来て座敷に待つて居た。  
「大變な事をして呉れたな」と、神戸は私の手をとつたまゝ坐つた。私は何とも云へなかつた。

「併し最う何も云ふまい。貴方も」と、其處に居た女を見返りながら、一私が来た以上は安心して居て下さい。二人の意志は何處迄も立てるから。」

あゝ、二人の意志と云ふやうなものがあるか。それが有つたなら——  
神戸の云ふ所に據れば、前の晩から宇都宮へ来て居たのださうな。一お内からは阿母さんがお出です、阿母さんに末一貰ふことにして置きました。

女は只黙つて居た。  
「おや、僕は一寸駐在所の巡査に逢つて打合をして來るから」と、神戸はわざと席を外した。  
女は二たび鏡臺に向つて、一度解きかけた髪を解きにかゝつたが、急に振向いて、  
「今この間に——何處へも行かないで、此場で。」

「此場で？」  
「最う母などに言はない。」  
斯う云つて、別の髪に顔を伏せた。死を決した女の男にしなければならぬ有様程、何とも言葉

のないものはない。  
女の異議を許さぬ顔色を見ると、私は思はず一握りの髪を掴んで、ぐるぐると女の顔に控きつけて見たが、

「髪の毛が短くて足りない。」  
「切つても可い、此鏡で切つて繼いで可い。」  
私は其儘黙つて手に力を入れた。女の顔は見る／＼充血したが、こんな事で人の命が取られようと思へない。

「紐でも可い、何んな紐でも」と、女は仰向けに成つたまゝ云つた。  
此時位私は女の言葉の俗惡なのに打たれたことはない。又此時位痛切に自分の造つて居ることが一種の造つて見づくだたと感じたこともない——私は冷たい風が通つたやうな心持がして、思はず手を離した。

「私は駄目だ、自分の力ぢや如何することも」と云ひかけて、少時黙つて居たが、一あの人の影が邪魔に成つて、如何することも出来ない。何處迄もあの人の影が着纏つて離れない。」  
女は可憐な顔をして見返した。

「あの女の影」と、二たび力を入れて云つた。  
「時子さん？」と、いきなり起直つたが、「あんな人何でもない、あんな人に意味はない。」

「併し去年の一月にも貴方は自殺しかけたと云ふぢやないか。其時の事はあの人だけが知つて居るのでせう。」

女は點頭した。

「其時のシークェンスなら——それを二たびするだけなら、私の地位は請らない、餘りに意味がない。」

「違ふ、去年とは違ふ。そんな事は十九日から分つて呉れた筈だ——あの私の手紙を讀んで下さつたら。」

「ぢや、戀のためだと云つて下さい、只一言。」

「戀以上——戀などと云つては足りない、足りない。」

私は二人の間が再び遠ざかつた様に思つた。二人は手を組合せたまゝ何方からも物を言はなかつたが、やゝ有つて、

「未だそんな事を思つておいででしたか」と、女が想ひ出した様に訊く。

「あゝ。」

「一緒に死んで下さい、此度一緒に。最もう二人でなければ死ねなく成つた。」

「私を愛するために？」

「そ、そんな事を云はれると、不安に成つた、不安に成つた。」

「何故、何故そんな事を云ふのです。」

何時迄も女は答へない。

廊下に神戸らしい足音がして、がらりと障子を開けたが、

「恰度今阿母さんがお着きでした。三階へ通して置いたから、貴方も後から来て下さいと言ひかけて、後へ下つた。」

女は黙つて立上つた。二足三足廊下へ出たが、急に又駈け戻つて来た。

二人は立つたまゝ相抱いた。

「ぢや、最う其日でなければ會はないから。」

女は啜くうなづく。

あとは一人に成つた。室の中をぐる／＼廻つて居たが、又ぐつたりと真中に坐つた。坐つたかと思ふと、又立上つてぐる／＼と廻つた。

何を考へて居たのか、頭の中は白紙を見るやうで、自分にも分らなかつた。何れだけ其間に時間が経つたか、それさへ夢の中の様に一切分らなかつた。

「たうとう手渡して来た」と、神戸はさも厭倦な様子に云つて這入つて来た。

「左様」と、私は只眼を上げた。

「彼のしつかりした奥さんが、娘の顔を見ると、眼に一粒涙を溜めて居たが——片方は平氣な

ものさ。」

私は古い鏡の中を覗いて、思はぬ自分の影を見た様にひやりとした。

神戸はなほも二人が家出した後の内の人達の狼狽やら、友達の手走やらの顛末を喋して、あの阿母さんと云ふ人も、始終一緒に歩いたが、落着いて、分別のある、あんなのが賢い人と云ふのだらうなと云つた。新聞は一々手を廻して留めて置いたから其方は安心せよとも云つた。

私はそれを聞きながら、それが皆な自分の仕事だとは思はれない位、餘所事の様に聞き做された。併し自分だけは最う別者に成つた、他人は皆な自分を別者にして見て居るのだと云ふ感じは善々と胸に迫つた。神戸も最早元と同じ儘に變がれた囚人ではない。

其夜、二人が床に就いてから、神戸はあの日或女が自分の家へ訪ねて来る約束があつたのだと言出した。遠方へ嫁に行く前に、最後に一度逢ひに来るのだが、たうとうそれも滅茶々に成つた。これで最う逢はず仕舞ひに成るのだらう。新緑の木の間に、日傘の華やかな紫が白い顔に映つたのを目に見るやうなとしみ／＼云つた。私は只黙つて聞いて居た。

二人の語聲は三時頃迄絶えなかつた。  
 神戶が寝入つてからも、私は一人天井を眺めながら、まじり／＼起き居た。此上に寝て居る密の親し子と二人の上も思はれた——夜もすがら話し明かしたらしい二人の上も。

情、眼を覺ましてから、神戶を案内して湯殿へ下りた。一足先きの上つて、俯向き脇ちに段梯子を上つて来ると、急に其上の空いて居た室の障子を明け、

「もし」と呼ぶ者がある。  
 目を上げると、兩の眼が充満して、思ひ入つた様な女の顔が目に闖く。二人は直に其室の中へ這入つて障子を閉て切つた。

「昨夜は何なんだつた。え、如何でしたと、女の肩に手をかけながら、急ぎ込んで訊いた。  
 「酷かつた、酷い目に逢つた。徹宵寝かさないで。」

「阿母さんが？」  
 「え、そりやア堪らないことを訊くんですの」と、精言ひ濁んだが、一身體を汚されたか、汚されなかつた、それ計り聞きたがつて。」  
 「そ、左様でせうね」と、私は吃つた。少時何とも云ふことが出来なかつた。併しそれ位の侮辱を受けるのは當前ぢやないか。

「私が悪いんだ。無、私のことを——悪い奴だと思つておいでせうね。」  
 「そんな事はない／＼。憎めば私を憎むのです、私がいけない女だと云ふことは、好く知つて居ますから。」  
 斯んな事を云ふ間に、段々顔色が落着いて来た。

「母は貴方と一緒に御殿でも喫べて、好くお話が出来たいと云つて居ましたが、小娘らしく首を傾けて、私も皆な一緒に御殿が喫べたい——只、神戶さんが中間へ這入るが、可厭だけれど。」

私は女の心持を測りかねた。  
 「そんな事を云つても——」  
 「母が左様云つてましたから——可いでせう。」  
 廊下を人が通る氣合がした。  
 二人は息を潜めて、足音が遠ざかつて行くのを待たつたが、

「では、私は何か心ならぬやうな氣かして女を促さうにした。  
 女は別に氣にも留めぬらしく、一彼れだけは「好く考へて見ると、彼れだけは出来ないから取消します。」  
 「何を。」

其日が来る迄逢はぬと云ふこと——そんな事は迎も出来ない。  
 私は二たび女の心持を測りかねた。  
 前と同じ足音が忙しうに戻つて来て、今度は三階へ梯子段を上つて行つた。  
 「神戶さんでせう。」  
 「左様。」

女に握手と天井を見詰めて居た。  
 「ちや敷うこれで——」  
 私は倒れかゝる様にして、女を抱へた。楯に納めた死體を抱く様に——  
 女が去つてからも、私は少時其室の中に坐つて居た。山から歸つた後、女の態度が變つた。何處か人懐こいやうな素振が見える。それが却て氣味にも思はれるけれど——併し最う何も考へまい、萬事が去つた、二人の間に萬事が去つた。

私は裏座敷へ歸つて一人物思ひする女の様にしよんぼり柱に凭れて居た。  
 間もなく神戶が三階から降りて来て、一緒に朝殿の障に向つた。

「何うも彼の一緒に来た伯父さんとか何とか云ふのが分らんので、丸で普通の淫奔して逃げた若い男や女を捕まへて云ふ様なことを言ふん

だから、僕迄が不愉快に成つた。併し世間は彼の伯父さんと同じ眼で見るんだと云ふことは覺悟しなきや成らんぬ。

私も仕方なしに笑つた。

「阿母さんの方は、最初から私にもは一向方が附かんからと云つて、一切任せて居るんだが、只最う娘の命が如何か成りやしまいかと、それ許り心配してねえ。見て居ても、氣の毒なものさ。」

神戸は此後の事を語つた。東京へ歸つてからは事が面倒だから、凡て此處で解決をつけて行く積りだと云ふので、或處へ電報を打つた。其返事を待つて居るのだといふこと。

午後、其返事の都合で急に工子送引回すことに成つた。私は最う自分の意志で動くことは出来ない。只他人の爲すがまゝに成る外はなかつた。

六人乗りの田舎馬車に乗つて宿を立つた。おぼえのある、同じ道を行くと歸つて行く。あの女の母、伯父さんと云ふ老人、神戸と私、それに最一人宇都宮から隨いて来た男、都合六人が乗つて居た。車中では、誰も物を言はぬ。時々老人が大切さうに一本づつ巻煙草を出しては喫つた。

那須野ヶ原に一筋真直な街道が続く。原の中では一人一人逢はなかつた。

やう／＼小さな片田舎の停車場へ着いた時には、日影も薄かつた。汽車の時間表を見ると、上り列車は未だ二時間も待たなければ成らぬと云ふので、前の休み茶屋の二階へ上つた。

其間女は人目も憚らず私の側へ来て居た。如何云ふつもりか、此次に逢ふ迄のかたみを呉れよと云はれて、考へて見たが何も持つて居らぬ。手垢に擦れた一冊の本をあづけた。

汽車が着く時刻だといふので、吹き曝しのプラットホームに立つた。日が暮れてから、少しほぼうつと煙立つた野原の上に、雪氣を含んだ綿雲が被さつて、見る目にも薄ら寒い。

やがて汽車が着く、青森發の列車の屋根には白い雪がうす／＼と積つて居た。一行の外には乗る者も降りる者もなかつた。

天井から下つた洋燈が一ついかにも氣の滅入りさうな。それ、兩側に腰を掛けたが、葬式の行列でも見る様に物を言はぬ。時々母親といふ人が見かねて、病身らしく大儀さうにしながら、何かと言出して、直に言葉尻から熄えて仕舞つた。

「何うも冷えて參りましたねえ。年寄は仕方が

有りませんと、下の湯婆に兩足の爪先を掛けながら私の方を向いて、

「貴方もお載せなさいませんか。」  
私は其聲の引入れられるやうな調子を何時迄も忘れなかつた。

汽車はご／＼と音を立てて闇の中を走る。薄暗い洋燈の下には、皆なの顔が意味ありげに黒ずんで、物の形も平常よりは大きく見え、物の音も大きく聞えた。何時の間にか汽車が停つたまゝ、動かぬ様に思はれた——又急に走り出したやうにも。

私は歸るのだらうか、二たび生きて歸るのだらうか。  
つと立上つたまゝ、一人離れて窓際に坐つた。闇を透して腕手と見詰めて居たが、汽車の動搖に伴れて、硝子窓に頬を押し附けながら、ほろ／＼と泣く。

私は泣きたかつたのだ、泣きたたくて泣いたのだ——この凡てを背景にして。何と云ふ不都合な涙であらう。

神戸が背後へ来て、肩に手をかけた。  
「あの何が行つて遣つて呉れと云ふから来たんだ。え、如何したんだい。」

「何でもないよ、最う好いんだ」と、故とらしい

笑顔を一つつて俯向いた。私は女からもおれま  
 された、憫れまれるやうな境遇に立つたのだ——  
 「ねえ、君」と、私は少時して顔を上げた。「僕  
 はあの母子の人達が被嫌して坐つて居る所を見  
 ると、どうも氣の毒で堪らんがね。今夜王子で  
 泊るなどと云つて、何だか理窟に合はぬ様に思  
 ふから、君から左様云つて直に家へ歸る様にし  
 て上げて呉れたまへ。僕の事なら如何でも可い  
 んだから。」

これが當前に自己犠牲の心から出たもので  
 あらうか——私は只極端に憫れな地位に自分  
 を置いて見たかつたのだ。そして自分の影を憫  
 れんで見たかつたのだ。

だつて、そりやア——と、神戸は聲に力を入  
 れて、「阿母さんが歸りたくないと言ふんだか  
 ら——子供の意中を十分に軋して、安心の出来  
 るまでは自宅へは歸りたくないと言ふんだ。」

私もそれきり黙つて仕舞つた。  
 王子へ着いたのは、夜の十一時頃でもあらう。  
 どろ／＼と乗客の廣客が込み合ふ中に、  
 最う行きますよ、行きますよと、女は私の  
 前に立つて囁いた。

「それ其の其の道はない」と、私は女の顔を  
 見上げたまゝ、一勿論手紙なども進取りしない

から、其つもりで。」  
 他の二人は車外へ出て待つて居た。  
 「早く、早く出て下さい。」  
 車掌に呟鳴られたながら、女はあたふたと降  
 りて行つた。  
 汽車が出た。間もなく上野へ着く。東京の夜  
 の明は、深けて、ばら／＼と雨が降つて来た。  
 二  
 其夜一時頃床に入つた。  
 床に入る前、今夜もどうやら眠れない様な  
 氣がして居たが、枕に就くや否やぐつぐつと寝込  
 んで仕舞つた。そりや、大宮の夜、温泉宿の  
 夜、山の夜、次の温泉宿の夜とつゞけて、殆ど  
 寝なかつた爲もあらうけれど。明くる朝、はつ  
 と思つて目が覺めた時には、何とも云はれない  
 可厭な心持がした。如何にも自分と云ふもの  
 の、謙に似た調が遺憾なく現はれたやうな氣が  
 して——つまり自分の前に恥ぢた、歌として畫  
 いて居る自分の前に。

私は逆も他人には云はれぬやうな、不快な心  
 持を隠して思上つた。そして朝敵の點に向つ  
 た。それが何處だと云ふことは——昨夜何處の  
 家へ落着いたかと云ふことは、凡て略して置く。  
 朝飯が済んで、皆なの人々が座を立つてからも、  
 少時そこに坐つて居た。  
 昨日の朝から自分達の事が最う新聞の三面種  
 に成つたとは、昨夜歸つた時に聞いた。今朝は  
 それが一層甚だしく、何の新聞も一段二段、中  
 には一頁近く其記事で埋めたものもある。  
 私は同じ事なら新聞など見ないで済まさうか  
 とも思つた。が、又思ひ返して其邊に落ち散つ  
 て居る一二葉を取上げた。見るものも／＼皆間  
 違つて居た。心持に立入つたのは云ふ迄もな  
 い、表面の事實が間違ひだらけであつた。私の  
 名も知らぬ父親が生きて居たり、甚だしいのは  
 私と神戸とがさかさまに成つて、神戸が飛んだ  
 迷惑を享けて居るのもあつた。併し何方かと云  
 へば男よりも女を主として書いてあるだけ左様  
 いふ事情は女の方に餘計有つたらう。  
 私は案外平氣であつた。一々讀んで仕舞つ  
 た時は讀まぬ前よりも心持が平靜であつた。  
 一方には斯んな馬鹿らしい間違ひは永續するも  
 のでないと言ふ自信もあつた。又一方には人間  
 は他から此位の程度にしか理解されるものでな  
 い、此位な間違ひは日常事實として通用する  
 ものだと云ふやうな楽観な考へもあつた。併し  
 實を云へば、私の心の中はそれ所ではない、も

つと忙しい事が外にあつた。別に私の心を占領するものが、私はたゞ女の事を思ひつゞけて居た。

其朝、白山裏から使の人が来て、神戸へあてた手紙が届いた。披けて見ると、昨夜王子に泊つて、今日神戸と會見する事に成つて居た、彼方の人達は、一晩でもあんな所に留めて置く訳に行かないから、昨夜の間に迎への人を遣つて自宅へ引取つたと云ふ簡単な挨拶であつた。私は初めて現實の腕をもちと見たやうな心持がした。

山の中で巡查に逢つても、私の夢は覺めなかつた。温泉宿でも、汽車の中でもやゝもすれば、却て現實の見るもの聞くものを夢の中へ引入れようとした。それだけに泣いたり笑つたりしても、別段痛くない。感情は動いても、結果の自覺がない。今朝新聞の記事を見て、案外平氣なもの、それが爲であらう。此手紙を見て、初めて女の周圍と云ふものが眼に映じた。現實の人間と人間との交渉に氣が附いた。急に自分の手で爲たことの結果を見るやうな氣がした。

私は堪らなかつた。此儘現實の世界に着手として居るに堪へなかつた。この上は女一人を

頼みとする外はない。女一人を頼みとして、二たび空想の世界に後戻りする外はない。文は如何して居るだらう……何んな夜が明けたらう。

昨夜神戸は一度自宅へ引取つて、午過ぎる頃又遣つて来た。此手紙を讀んだ時には自分が此事件について餘計な骨を折られたと云ふ自覺があるだけ、一々自分の指圖を待たなければ何事も爲ないものと思つて居たので、ひどく出抜かれたやうな心持がしたらしい。併し自分が負けたとは、減多に口へ出さぬ實なので、一ぢや、僕は先方へ、度挨拶に行つて来るからと出て行つたが、其日は其儘歸らなかつた。

私は赤い目を一日片開に坐つて居た。一週に一度木曜日其家へ集る友達が日暮前からぞろ／＼遣つて来た。茶の間の火鉢を圍んで雑談に耽りながら、殆ど何事も起らなかつた様に私を其仲間へ入れて呉れた。中にはそれが不自然だと思つたのか、

一今度計りは驚かされたぞ。私にや逆も出来な事を遣つてのけた。一昨日それと聞いてから私は一日中興奮して居た。そんなに小さく成つて居るなよ。頭を上げて歩け。私なら昂然として街の中を漏歩して遣るんだがなと、一人の

培せた男が力味回つて云つた。一そんな事を言ふな、可憐想にと、小早川と云ふのが留めた。

馬鹿云ふな、私を本氣で云つて居るんだぞ。誰だつてあんな女に出逢つたらあんな事を遣つたかも知れない。あの心持が私には解るんだと、何か旨い比喩を考へ出さうとする様に、空眼をして居たが、一併し最初から此男は死にやしないと思つた。如何しても死ぬる男ぢやない。それだから偉いんだ。あれきり死ぬ様ぢや下らない。

私は黙つてそれを聞いて居た。自分の遣つて来た事が只遣つて見づくだと云はれたとて、なに精解の辭があらう。いよ／＼歸木塵に臨んだ其最後の新聞迄は自分でも分らないのぢやないか。私は矢張りボール紙を貼つて糊粉を塗つた岩に腰掛けて、白紙を刻んだ雪を降らせただけでも間に合つた人間かも知れない——併し他人には云ひたくない、他人の前では白狀したくない。

一新聞なぞ氣にするな、新聞なぞ何と云はれても構はない。書けよ、書けよ、自分で書けよと、前の男が云つた。何を書けと云ふのか。一たゞ血を以て彩らう

としたものを、二たび文字に書けと云ふのか。私は自分の拙い所に指を渡られたやうな心持がした。

「此男も世の中から葬られたんだから、小説でも書く外に生きる道はなからう」と、此家の主人が云はれた。

誰一人返辭をするものはなかつた。

「木の芽田樂が喰ひたいな」と、少時して前の男が口を切つた。一茶の花のおひたしで冷酒をあふるのよ。私やア坊うから奥さんに約束がしてあるんだがな。」

「勝手にお遣りなさいよ、私は知らないから。」

「だつて、それぢや仕方がない。ね、庄司さん、又彼所へでも押掛けて行かうかなう。一遍此處に居る皆なを引張つて行かうぢやないか。」

「は、は、は、又庄司から一々謝辭附きの御馳走に成つて、君の氣焰を聽かされるんぢや仕様がない。」

庄司と呼ばれた何處や、殿上人めいた顔をしたのは、只にヤ、と笑つて居た。

「そんな事は仕やしませんぜ、え、と一寸庄司の顔を凝視した。一ありやア如何したのうかな。彼の人からはまだ手紙が来るんか。」

「彼の人からと云つて、それだけぢや解らない

ね。」

「幾人も有るからな。」と側の者が交ぜ返した。

「あの何さ、始終着物を縫つて呉れよつた女よ。」

「あれか、彼女は最う居ない。去年の暮に田舎へ嫁に行きましたね。」

「左様か、能く讀めたもんだなと又遠い所を見る様な眼附をしたが、一私やア彼の人を思ふと可憫想で仕様がながの。新しい障子の側で、毎日針仕事をして、針仕事を止めては手紙を書き、手紙を書き出しては又針仕事をし

て居る女の様な氣がして成らんが——一度も逢つたことはないけれど。」

「未だ有つたでせう、京都の人とやらが。彼の女から来るんでせう。」

「どうも皆なから左様云はれちやア」と、頭を掻いて居たが、二人、來ますとも、毎日の様に來ますよ。」

「侯爵家の姫君とか云ふぢやありませんか。」

「ところが今年二十七の出戻りだと云ふんだから——」

「だつて、そんな人から附文をされるんだから、庄司さんも偉いわ。」

「え、餘程變ですよ。」

斯んな話が煙草の煙と一所に渦を巻いた。そして散會したのは夜の十二時を過ぎる頃であつた。

私は一人暗がりの寢床の上に坐つた。眼を開いたまゝ暗闇を見詰めて居ると、淋しさが込み上げて来るやうで堪らない。他人が自分の顔を見さへすれば、お前は本當に死ぬ氣だつたのかい、と、うそく笑ひながら云はれるやうな氣がして成らぬ。そんな事が、心から死ぬ氣であつたなぞと云ふことが、死ぬまでは、死體と成つて對らぬ迄は如何して云はれうぞ。

併し何も思ふまい。何も思ふ必要はない——あの女さへあれば、あの女さへ自分を離れなければ。左様思ふ傍から——

あの女は自殺しやしなからうか。始終糸に掛つて始終抑へ／＼して居ることが不開心に記んだ。私の手を離れてからは如何するかわからない、何んな事を仕出來すかわからない。

私にそれを目の前に見ながら如何することも出來ない様な心持がした。

併し一人で死ぬ——あの女にそんな權利はない、そんな事をして私を窮地に陥入れる權利はない。

私は心の中に幾度も叫んだ。

水の底に沈んで、其儘が塞る様に思つたら眼が醒めた。天井の明り窓はうつすら白んで居た。私は寢床の上で起直つた。

女が死んだら——昨夜の間にも死んで仕舞はれたら——私は、人後に取残された自分の死ぬにも死なれず生きるにも生きられぬ不見目な有様を想像して、思はず身震ひした。聲を上げて、女の名を喚びたい様な心持もした。

何時迄左様して居たか知らぬ。やがて湯殿へ下りて含嗽をしてから茶の間へ出て來ると、

「おい、彼方の女が何か云つてるよ」と、一葉の新聞紙を渡された。

「へえ」と言つて、私はそれを受取つた。「神學令嬢の告白」と云ふ標題が煮入る様に目につく。初め十行程は何が書いてあるか讀みは讀んでも頭に殘らなかつた。やつと、

氏は、娘が歸つて來ましたから一切の事實を當人から聞いて下さいとて——子を呼ばれしに、徐に襖を明けて現はれし美人こそ云々。

此邊りから心を落着けて讀み出した。

社員の間に應じて語るやう、「私が出しましたのは全く自分の精神を貫く爲です。」

先方は私を殺しても我意を張らうと迫ります。私は自分の主義を曲げぬ爲に死ぬ

のは厭ひません。若し先方が私を殺せば刑事上の罪人と成つて所刑されるは當然ですが、私は彼が所刑される位では満足しません。私は命を棄てても構ひませんから、彼の死ぬのを見届けたいと思つて家出したのです。二十一日は終列車大宮に向

ひ、翌二十二日朝腕車で剛原に向ひ、其夜升田屋に一泊しました。情の爲に逃げたのではありませんから、宿泊中は務も取らず夜もねむりませんでした。二十三日の朝腕車を雇ひ、一甲足らずも行つて、八幡神社の前で降り、尾花峠の山中で死ぬ覺悟で筆を踏んで山深く分入る途中警官に押へられました」と、どうも要領を得ぬことを語りて立去りたり云々。

次にそれに就て父なる人の意見と云ふものと女が家出する前に、友人木下時子の許へ遺書と一緒に預けて行つたといふ、私へ宛てて書いた手紙で、其儘出さなかつたものらしいのが載せてあつた。

別の新聞を見ると、矢張女の家を訪ねた記事を載せて、それには彼の日女が自宅に残して出

たと云ふ遺書が寫眞版に成つて出た居た。いは

く、我生涯のシステムを貫徹す、我が二三によつて斃れしなり、他人の犯す所にあらず。

三月二十一日夜

又時子に宛てたものは、拜啓、我が最後の筆蹟に候。學校に行きませんと申せしは實は死すとの事に候。願はくは君と其ならざるを許せ。君は知り給ふべし、余は決して戀のため人の爲に死するものにあらず。自己を貫かんが爲なり。自己のシステムを全うせんが爲なり。孤獨の旅路なり。天下余を知るものは君一人なり。余が二十年の生涯は勝利なり。君安んぜよ。而して萬事を許せ。さらば。

四十二年三月二十一日  
木下時子様

私は何氣ない體に、そつと新聞を下に置いた。ばた／＼と自分の周囲の城郭が壊れて行くやうな、壊れて行く音を聞いて居る様な氣がした。

此遺書——私はこれを否定しようとは思は

ぬ。又否定される譯もない。勿論あの時、温泉宿の裏二階で、あの女がぶつた言葉とは違ふ。あんな人に用はないと云つた、其時子に遺書を

して出て行く——それも仕方がない。只あの女が遺書をする、こんな言譯めいた遺書を残して置く——それが解らない。あの女は遺書なぞ

する女ぢやない。そんな女ぢやない、少くとも私の眼に映じた女はそんな女ぢやない。黙つて死ぬ女だ。何も言はずに死ぬ女だ。夫程に

自我の強い、充實した自我を持つて居る女だ。自分一人の中に生き、自分一人の中に死んで行く女だ。其女がこんな遺書をした——死ぬ前に

他人に對してこんな言譯がましいことを——解らない、如何しても解らない。あの時、時子の影が邪魔に成つて如何することも出来ないと言つたのは、何も時子其人を

指した積りぢやない、時子に依て代表された或物——禪學が氣に成つたのぢや。禪學が人を死なせるものか如何かは知らぬ。併しあの女が禪

學に依て生き禪學に依て死ぬ女だとは、何うもしたくない。あの女だけに限つたものにしたか

女も折ふしそんな事を口にした。禪學などの爲ぢやないとも云つた。それでも氣に掛るから、彼の期にのぞんで又訊ねた。

—そんな事は十九日の手紙を見たら分つて呉れた筈だ—と云はれたが、此遺書ぢや、左様云つたのも虚言らしい。

女の周囲の人達は、いろ／＼女の修養について物語つて居る。日僧園の雲照律師、興津の清見寺住職眞淨老師などについて、特別な法

談さへ許されたと言ふことである。いつも夜は二時に寝て、朝は五時に起きると云ふことなぞも。又時子は記者に向つて、

要するに今回の事は無二の親女に對する言が若し最も眞なるものとせば決して物質的

眼前の劣情にのみ起因したるにあらで思想の缺陷と云ふ一事が最も好く今回の事相を説明する語と信じます云々。

と述べたといふ。但し思想の缺陷と云ふことは如何いふ意味か能く解らない。私は女の両親に對してまづ無法な損害を與へた。それを思へば、縱令彼方の言分に如何かすれば相手の男を傷けても、女の行爲を辯護しようとするやうな形跡が見えたとして、私は甘んじてそれを享ける外はない、不服を云ふ筋は

ない。そして女の純潔と云ふこと許り氣にされる

と云ふのも、親の身として、是位無理からぬことがあらうか。

併しあの女が両親と同一様な態度で、宿屋に泊つても、夜も寢ぬの姿も取らぬのと、記者に向つて云つて居るのを見た時は、私は殆ど大空から引摺下されたやうな、意外の感に打

れた。それ所ぢや無かつたのではないか。大宮の夜、女はそんな事を考へて居たのか、それで袴を脱がなかつたのか——馬鹿なの

あの夜、二人の中に白いものが立つた様に思つたのも、そんな心持で對して居られたからであらう。次の日も、其次の日も、何處やら他人に許さぬやうな面持が見えたのも——

私はそんな警戒の念を抱かれながら、女と一緒に歩いて居たのであらうか。それで一所に死ぬ？

二人が山の中で明かした一夜も、其實そんな滑稽なものであつたのか——あの思ひ上つた夜も。私は生れて初めて其戯曲的效果を味ふ暇のない感情と云ふものを體驗した。私は餘りに

人生を羨望した。此人生を只詩として見て居た、嘲として味つて居た。何んな場合にもしみじみと感情を身に占めることが出来ないうで、只其感情が驚く曲曲的效果を味つて居た。而して終に人生から呪はれた、手痛い復讐を受けた。

成信、私は今度の事でも只詩を作つて居たのかも知れぬ、空想を描いて居たのかも知れぬ。併し其詩の中へ、空想の中へ身自ら没入し去らうとしたことだけは——他人の前とは云はぬ——自分自身の前でも云ふことを憚らない。女を犠牲にする前に、自分を犠牲にしようとした、只それだけは——併しそんな理解が他人の前で云へようか、世間で通用しようか。私は口を噤む外はない。

世間の前に——新聞記者の前に、立派に言ひ聞きの出来る様な口實を持つて居る女は幸ひであらう。

併しあの女が働だすと云ふことは此記事で分つた。毎朝新聞を見るたびに、若しやあの女が死んだと云ふ雑報でも出て居はせぬかと、思はず手が戦へたものだが、最うそんな心配はいらぬらしい。

間もなく取次の女中が来て、一葉の名刺を差

出した。

「此人が私に？」

女中は點頭した。

名刺の表は今朝女の談話を載せた同じ新聞の記者で何某とあつた。

「ふむ——主人の人もそれを見て居たが、先方は先方で自分の方の立場を衛る様な態度に成つたのだから、君も何か云ふことがあるなら會ふのも可い。又辯解をしない氣なら會はんでも可い。併し會ふにしろ、元來君の方から先方の家へ對して——女に對してぢやないよ——不名誉と損害を與へて居るのだから、無法な事を云つちやア成らん。」

「いえ、辯解なぞしません。」

「ふむ。」

「併し一通會つて見ようかと——」

「會ふなら會つても可い。」

女中に待たせて置いた記者を別室に招じた。縮緬の兵児帯に銀時計の金鎖を絡ませたのが目に着く。何か言出される迄私は胸の中がざわつた。記者は型の如く今度の様な事を仕出来した動機を語れと云つた。

「それは申しかねます」と云つたが、一總て世間

の評と云ふものは本人の意見を參考にしない、又それが當然でせう。既に世間から弄られた私が今更自分を辯護する必要もないが、安りに私の心事に迄立入つて解釋をせられるのは迷惑でないこともありせん。今朝貴方の社の新聞に出た記事も見ましたが、實際あれ位の事は云ひかねない婦人です。恐らくあれ以上の事も申しませう。併し自分の爲た事について世間へ辯解の必要が有るやうな、そんな下らぬ女でない」と云ふことは論迄信じて居りますと述べた。

此話は次の日の新聞に出た。

私は何故新聞記者などに會つて、こんな話をしたのか。只記者を通じてあの女に物が言ひたかつた、其外に物を言ふ道がなかつた。

併し新聞の記事と云ふものが何れだけ眞實を傳へて居るものだらう。かうして他人の手に離てられて、互にじり／＼と遠ざかつて行くかと思へば思ふだけでも堪らない。

其後神戶が遣つて来た。方向は、此頃中神戶がいろ／＼奔走した爲に、却つて思ひも寄らぬ誤解を受けて迷惑をするから、一應此方からも眞情を新聞社に嘯して載せさせよう」と云ふので、

「君は僕に向つてさへ何も云はないから、眞情

と云つても分らんが、兎に角僕の見た所だけを咄して置かうよ。」

「目下の様ぢや、僕からは如何することも出来ない。何分好い様に計つて呉れたまへ。」

昨日神戸が先方の家へ行つた結果に就ては、別に何とも云はなかつた。彼時から和強樂堂へ廻つて演説をしたのださうな。演説講義の約束があつたのだが、急に演説を男女二人の爲に断ずと取代へたと云ふこと。

神戸は私を誘ひ出して、月夜の江戸川端を歩きながら、君を保護する事は君自身よりも僕の方が好く知つて居る。昨日は二三の先輩や友人も来て居たが、あの人は少しも君の價値を認めて居るのではない。こんな事をするのも、單に僕が君に對する友情だと思つて居るらしい。

それで演説が済むと、或人はこんな際に能くも彼の二人の爲に辯ずる勇氣が有つたもんだと云つて割れて居たよ。何も君方の爲ではない。聴衆が笑つた時には——僕が此演説を掲げて壇上に立つと、聴衆はくすくす笑つたよ——

其時は他人の事ぢやない、僕の利害だと考へ出した。——

少時黙つて歩を移したが、一何故笑ふか、君等も近代人の片遣れぢやないか。此問題に敢てあ

の二人の問題ではない、君等自身の問題だぞと嗚鳴つて遣つた。聴衆も、終に標を正して聴いたよ。」

私は只黙々として隨いて行つた。何とか云はなけりや濟まぬと思ひながら、何とも云ふことが出来なかつた。それを焦躁しと思つたのか、神戸は又、「勿論君は君で信ずる所があらう。又自分さへ信じて居ればそれで可いのかも知らんが、世間の人と云ふものはそんなものぢやない。」

「僕だつて何と——と口を挟んだ。

「いや左様だよ、確かに左様だ。君に比べると、未だ女の方が餘程世間的だ。現に世間的にも自ら衛る手段を取つて居るぢやないか。」

「あゝ女が、あの女が——あの女さへ自分を信じて居て呉れたら——私はそつと側を向いた。」

「昨日は狭山にも逢つたが、小島君も結婚する氣なら、外に仕度もあつたらうに、愚な事をしたものですなと云つて居たよ。左様ぢやなからうと云つて辯解はして置いたが、世間の人は皆左様思つてゐるんだよ。」

「併し——と云ひかけて、私は言葉途切らし

たが、併し人間が途方もない馬鹿げた事をした

時には、其動機は大抵抜しくないものだと云ふこと位、彼の人なら解つて呉れさうな——

「左様さ。尙且小説家として見て居るのぢやない、世間の人として見て居るのだからな。まあ、そんな事は可いさ。他人の問題ぢやない、君の問題だ。君自身の心掛について云つて居るのだ。」

二人は少時無言の歩歩いて居たが、「昨日君はあの女に會つたのか」と、私は思ひ切つて訊ねた。

「うむ」と云つて、少時経つてから、「随分自尊心の強い女だね。何時逢つても鼻ツ張が強いばかりで、弱味を見せたことがない。あゝいふ女としても、僕はどうもそれを好まんがね。」

私は黙つて考へに沈んだ。

「どうも始終一貫して鼻先が荒い」と神戸は重ねて云つた。「或時はケブリシアスに泣いて喚いて、平凡な女に成つて呉れなくつちや、僕達には些と困るね。」

あの女が泣く——あの頭の頰い女が、あの傲慢な、人を近寄らせない女が。山から歸つた後、あの女は何んなに成つて居ることだらう。

私はあの女の緊張した、齒を咬みしはつた顔を見るやうな氣がした。

併し私はあの女の泣くのを見たのだ、あの女の眼に涙を見たことがある。

何で泣いたのか。何が私の前であの涙を釣出したのか。戀ぢやない、勿論戀だとは思はぬ。併し兩親も知らぬ、友達も知らぬ、誰も知らぬあの女の秘密に自分一人が觸れたと思はなければ、如何して今度の様な事が出来ようぞ。

又自分一人が觸れたと思つたら、貴方はそれぢや一人で寂しい道を行きなさい、私は私で此方の道を行くと、情なく袂が分たれようぞ。

それが諺なのか。左様思つたのが、私一人勝手に畫いた夢なのか、幻影に過ぎなかつたのか。幻影でも可い。あの儘幻影の中に消えて仕舞ふことが出来たら、二たび戻つて來なかつたら——

女は何を云ふぞ。

「全く自分の精神を貫く爲です。先方は私を殺しても我意を張らうと迫ります。

私は自分の精神を枉げぬ爲に死ぬ——」

諺だ。あの女の云ふことは諺だ。あの自尊心の強い女が諺を云ふ——そんな事が考へられようか。

成程、あんな風でおめく〜と生きて戻つたら、あの女の自尊心は傷けられたかも知れぬ。併し

し其傷は、新聞記者の前へ出て、あの周囲の人達が、

一男に迫られ、止むを得ず家出をしたと云ふやうな卑近な言葉に裏書をして、それで慰められる様なものであらうか。

偽善者——あの女の云ふことは宛然偽善者の言葉だ。何んな平俗な解釋でも下せる言葉だ。

あの女を偽善者にする位なら、寧ろ病人にせよ、氣狂にせよ、第一偽善者ぢやない。

あの遺書が眞實に弱者の強がりなら、弱者が齒を咬ひしほつて勝利を叫んで居るものなら——

あゝ幻影は破られた、無残にも破られた。併し幻影でも可い。私に取つては動かし難い事實だ、一生を賭した事實だ。今は只あの幻影に肉を與へよう、血を與へよう。そして客觀的にも動かし難い事實としよう。それ迄は私は死ぬにも死なれない。

こんな時、人間は藝術の力に依頼する外はない。藝術に依て幻影に客觀性を與へる——此の外に道はない。私は不圖、忠臣蔵の大星由良之助が大石内藏助よりもより多く實在性を持つた人間の様だと思つた。永遠に生命のある人間の様に思つた。思慮に成つては、こんな事迄本當に

考へた。藝術の力。自分の腕の力。私は腕が萎えるやうな心持がした。

併しこれを書くとき云ふことは、即ち二人の關係に終局を置くとき云ふことではないか。それを覺悟しなければ、何も出来ない。一字も下すことは出来ない。

私は半送見附の橋の欄干に突伏したまゝ、何時迄も兩手で筆を抑へて居た。

「君は國許へ何とか云つて遣つたのか」と、神戸が不意に訊ねた。

私は思はず顔を上上げた。

「いや、未だ別に。」

「先方からも未だ何とも云つて寄越さんだね。」

「さ。——僕の行先が分らんのかも知れんが。」

「左様か」と云つたまゝ、神戸は魔手と漆端を周る電車の灯を見詰めて居た。漆の中の水は只平に動い。

「併し先方の人ぢや、最う何とも云つて寄越さぬ積りかも知れんよ。」

私は黙つて下を俯向いた。

「隅江さんは最う君に對するコンスタンシーを失つたかも知れない。僕は左様思ふ。併し男の

仕向様一つで、コンスタンシイを失はぬ女が何處にあらう。良人の方で殘酷な手段を取つて、段々妻のコンスタンシイを失はせるのは、斯んな場合に妻を自殺せしめるよりも卑劣だよ。自分の非を遂ぐる爲に——

私は何時の間にか神戸の腕を握つて居た。神戸も涙を流して泣いた。

「僕の許だつて、明日からでも妻の貞操を失はせる位譯は無い。偏に僕の仕向様一つで持つて居るんだ。それ程に女と云ふものは弱いものだよ。僕だつて、何もそれに依つて得る所はない。只弱者を勞つて遣つたと云ふ愉快さ、それだけで満足して居るんだよ。」

二人は涙を顔にたれたまゝ、當座もなく暗がりを見詰めて居た。何時迄も、時も所も忘れたやうに——

昔室には三ツ星も輝いた。

一暮ら歸らぬか。

新うぶつて、私は襟を掻き合せた。涙も嵐に

流いて居た。

「まゝ、歸らぬか。」

神戸も立上った。

「お水で私は江戸川流を一人とぼろりと戻つて行つた。一時に感情が凍した夜まで、奥の中

は大雨で洗ひ流した様に澄んで、目の前にありありと自分の姿を見るやうな——死んでから自分の一生を振り返つて見る様にも思はれた。雨上りの霧は水の面を包んで、前後に人の影も見えない。

私は許し難い人間だ。

世にも不人情な、冷酷な、而も自分では知らずに——

私は妻を捨てた。一思ひに捨てる事が出来ないで、先方から愛想を盡かすやうにも仕向けた。併し其様にすればする程、私は一しほ妻を愛した、一日も忘れる事はなかつた。此心持が解つて哭れたら——私は妻を捨てた、けれども妻が私を捨てようとは思はない。

こんな主我的な考へがあらうか、又こんな心持に同情して哭れる女があらうか。

併し今夜は餘りに良心を弄んだ。今の様な境遇にある私の心を傷けて血を流させる位容易いことはあるまい。何をぶうても返らぬ今と成つては、行き掛けた道を行く外はない。私は行く處迄行く。

只世間的に——私は世間的に何れだけ他人に負つて居ることであらう。

不圖今自分の歸つて行く家と思つた。山から

歸つて後、あの家に落着いて居られるため、何も言はずに落着いて居ることを許されたため、私はまだ幾分自分の顔面を保ち得たのではなにか。それだけ彼の家の壁面を傷けて居るのではないか。

主人は未だ書齋に起きて居られた。私は一禮

したまゝ、暫く其背後に坐つて居た。

「如何した、何處へ行つて来たか。」

「江戸川迄行つて来ました。」と、少時口を噤んだ

が、「私はインヒューマンな男でせうね。」

「左様さな。君等の遣つて来たことは全くイン

テレクチュアル、ファイトだ。第一あの遺書を

見ても少しもハアソナルな所がない。」

「併し——、やがて又言葉を次いで、僕は君等

の遣つた様なことは遣らんが、あれをアングス

タンドすることは出来る人間だよ。」

火鉢の灰は白く成つて居た。

### 三

四月に入つて、大雪が降つた。電話線がずた

ずたに切れて、一時に市内の交通が止まつた

工夫が凍死したり、立坊が凍えて死んだのもあ

る。只春の雪は解けるにも早かつた。雪が解けた

後には、櫻の花舞が着醒めて花の幽霊の様に見えた。八重などは殊に汚かつた。三春の行樂が始まらうとして居た時だけ、都は全體に裏装したやうにも思はれた。

二週間後、私は築土の手へ引移つた。本堂の裏手にあたる隅の六疊で、窓を明けると直に墓場が見えた。墓場の向うは崖に成つて、谷を越えて、一帶に小日向臺が見渡された。

朝は早く窓の障子が日が當つたが、申刻下りには部屋の中が薄暗く成つた。窓の圓に肘をつけて夕日の射す向ひ側の高臺を眺めて居ると、大日坂をのぼり下りする黒い人影が、他界の消息でも見て居るやうに眼に映つた。

私は本當に最う他界の人ぢやないのか——此世界と没交渉な。

こんな時絶るものがあれば絶つて見たい。神佛に絶れない身なら切めて人間にでも、あゝ、此情緒の定住が欲しい。

本堂で八釜しく鉦が鳴出した。人の神経を苛立たせるやうな、病人なら直に氣狂にでも成りさうな鉦の音がつゞく。其後で長たらしい睡むさうな讀經が始まつた。私はその呻くやうな、泣くやうな讀經の聲を聞き、墨の上に倒れたまゝ、寢入つて仕舞ふこともあつた。

其鉦の音を聞くのが可厭さに、夕暮からよく戸外へ出た。街を歩くと、そんな筈はないと思ひながら、人から顔を見られる様な氣がした。買物をするにも、停車場の改札口で驛夫に電車の切符を渡すにも、何となく鉦が背向けられた。

或時神戸に連れられて、初めて人の家を訪ねた。其處に居合せた知人は皆心置なく待遇つて呉れた。併し心置なく待遇不中にも、つとめて左様して呉れるやうな、年下の者まで、社會上、處世上の知慮の優つて居るものが劣つて居るものを容れて呉れるやうな風に見えた。私は出獄人が初めて世の中へ出た時の様な思ひをした。それからと云ふもの、私は人の家を訪ねることが億劫に成つた。

神戸に對してさへ、私は此心持が失せなかつた。私は最う——それが當前の事でもあらうが——自分と同じ位置に立つて話をする者が一人もない。今度の様な事が有つたら、神戸とは愈近づぐべくして却て遠ざかつた。神戸はそれを怪しからぬ様に思つたであらう。私は如何することも出来なかつた。神戸は併し根氣よく私を容れて呉れようとした。或時などはこんな事迄云つた。

「僕は、君から見たら、或は僕が君の爲に盡したことを大きく云ひ、君から受けた損害を誇大して云ふやうに思はれるかも知れんが、これは、先方に自分が感じて居ると同様にイムプレッションを與へたいと思ふからで、左様しなければ、何うも徹底した様に思はれんのだ。僕の性分だから仕方がない。」

私は神戸として道理な言分だと思つて聞いた。併し心持はそぐはなかつた。

其頃、新聞に「天神黨者殺し未遂」と云ふ標題で、三日許りつゞいて出た。何でも相手の男と云ふのは萬木義手義足製作所の職人で、戦後、好い工手間の取れる所から、つい茶屋酒の味を覚えて、近所のつまらぬ藝者に引かゝつた。たうとう金子に誘つて、不義理な借財も嵩む。お定まりの心中といふ段取に成つて、馴染の符合

の二階にしつぱりと訣れの盃を酌んだが、いよいよ其場に臨んで、急に女の方で變心した。何とか言ひ諷めて階下へ下りようとするのを、それと悟つた男はさきさせせじと梯子段の上から斬りつけた。手許が狂つて僅に女の小鬘を擦つただけ、あれツと云ふので、一時に家中の騒動と成つた。男は警察へ突出され、検事局へ廻されて裁判に成つた。證人として喚出された女

は負傷も癒つたと見え、酒蛙々として、一々男の口述を否認した。元よりそんな深い幽染でもなければ、夫婦約言などは勿論ない、心中しようなぞと云ふ意志は毛頭ないと云ふので、これを聞いた男は棧木につかまつたまゝ口惜し泣きに泣いたが、其儘有守に引かれて行つた。

女の云ふことが本當か、それとも主婦にでも入智慧されたか、其處は能く解らないがと書添へてあつた。これを讀んだ時位、私は不快な心持のしたことはなかつた。此記事を読んで自分の身に思ひ當るやうなものは、私の外には無かつたかも知れない。併し私自身が此男のステューピッドな地位に同情したと云ふだけでも堪へられぬではないか。

あゝ、何んな人間にもそれ／＼悲劇はある、悲劇はある。其悲劇は當人の思つて居る程眞面目なものではないかも知れぬが、又側から見る程滑稽なものでもあるまい。當人の心持に成つて人情を取扱ふものは藝術の外にない。傍觀者が嘲笑したり、若しくは冷眼に見過す間に、ひとり藝術のみは當事者と共に泣いたり笑つたりして居るものである。

私に書、何處迄も書くのだ。

かう思ふ傍から、私は腕が萎える様に思つた。そして、二日経つても三日経つても、乃至一週間経つても何も書かなかつた、又書かうともしなかつた。

あの女の消息については、殆ど聞くことが出来なかつた。只一度或家元あの女の隣に金葉會などへも来て居た女に逢つた。其女が歸つて行つた後で、

「今のが君、例の人に逢つて来たさうだよ」と、主人が云つた。

「へえ」と、私は只左様言つたが、故とらしく見えるが可厭さに、「如何して居るのでせうね」と附加へた。

「左様さ」と、にや／＼笑つて居たが、「何うも君にはアンフエボラブルな報告だね。あんな煙霧い人はないとか、嫉妬心が強いとか云つてるさうだよ。」

私は返辭の仕様もなかつた。「誰にでも言ふ様子だね。些ともしよげた所がないつて、驚いて居たよ。」

「左様でせう。」

私は其處を辭して歸る途すがら、矢張あの女のことを考へて居た。あの女が擬券を張つて、他人に聴した所を見せない、其心持は分つて

居る。併し何の爲に今尙自分を追究するのだらう。私は何日ぞやあの女に向つて、何うも私はジェラスだ、貴方に對して最う嫉妬の念を持つ様になつた、これは戀でせうね、戀でなけりや斯んな心持に、成る筈はない、かう云つたのを其儘繰回して居る。此外あの遺書の文句を見て、女達に預けたと云ふ手紙を見ても、あの女の云ふことは皆私の云つたことだ。私の云つた言葉を其儘使つて、私の論理で私を攻撃して居る。そが女らしくもある。

併しあの女は何處迄も一人であつたことにして置きたい。あの女以外の他の要因から影響を蒙つたといふことは——例へば禪學のやうな——逆も堪へられない。いや、私自身の影響を受けたと云ふことも、餘り有難くはない。

あの女は飽迄一人であつたのだ。一人であの女の頭の中に暴れ狂ふ或物と闘つて居るのだ。他人はそれを見て居ながら如何して遣ることも言ふことも出来ない。あの女に取つては、自分の物狂ほしい情熱を征服すること夫自體が勝利だと考へる外はない。他人から見ると、それが無意義であつても、ナツシングでも、それに意味があると考へる外に生きる道は

ない。

成程これを禁慾主義だと云へば、世の中に禁慾主義位俗悪な癖持は無からう。彼等は何物をも意欲せず居ることが出来ないから、切めてはナツシングを意欲しようとして居るのだ。彼等は他人に對して暴虐を振ふ譯に行かないから、切めては自己に對して暴虐を振はうとするのだ。何でもこんなものが彼の女の本性ぢやらう。そんなものに捕はれて居る女ぢやない。

併し——若し生れたが其外に生きる道のない女なら、それを手頼る外に生きて居られないやうな身であつたら、勿論外來の勢いなどあつたら、何の力もない、併し自分で自分が當に成らぬやうな身體であつたら——そして今日迄にかく一切の誘惑に打克ち、一切の欲望を征服することに由つて、辛うじて危い生涯をつづけて来たものだとしてら——何と云ふ凄じい、壯烈な一生であらうぞ。

左様云ふ思ひ詰めた女が、僅かに空想を生命として幻影に左右せられて居るやうな男の胸甲斐ない有様を見たら、如何して其無氣力を輕蔑せずに居られようか。

卑怯者！  
汝われを殺し得ずとすれば——われ汝を殺

さむ。

あゝ、あの女には一切が許される。歸京後、あの女が昇着して、いよく爲我的に、復讐的に成つたのも無理はない。あの惡魔のやうな冷やかな微笑も——  
それにしても、僞善者か、男蕩しか、抑又物狂ほしい、情然に惱まされたがら生きて居る女なのか。恐らくはその皆たであらう。  
私はあの女の上に戯曲を書いた。  
凡て男の戀は皆女の上に戯曲を書くものだ。  
私も其例に洩れなかつた。紙の上に書くべきものを生きた人間の上に書いた。あの女は又私の豫期した通りに物を言ひ、豫期した通りに泣いたり笑つたりして呉れた。私の豫期しない様なことは一つも言はなかつた、又言ふことが出来なかつた。あの女は私の影に過ぎない。私は自分の影を抱いて、山迄死に行つた。

併しあの女に云はせたら——  
あの女のために、あの女の考へて居る通りな、あの女の本當の役を書いて呉れたものは、未だ一人も無いのであらう。私はあの女の爲にあの女の役を書いた。それが本來あの女のものでは無かつたのか。  
どうも左様は思はれぬ——左様は思ひたくた

い。只目の前の此事實を如何したら可からう。  
併し——あの女にいさゝかなりとも私に對する愛情と云ふやうなものが残つて居ようとは思はぬ、そんなものが有らうとは思はれぬ。併し未だ一幕あるべき女だ。これ限りに成る女ぢやない。  
私はこんな事迄考へた。  
それも、何時迄かあの儘あゝして居たら、如何變つて行くことであらう。一度、只一度で可いから逢ひたい、逢つてあの女の本心が糾した

い。併し——あの女にいさゝかなりとも私に對する愛情と云ふやうなものが残つて居ようとは思はぬ、そんなものが有らうとは思はれぬ。併し未だ一幕あるべき女だ。これ限りに成る女ぢやない。  
私はこんな事迄考へた。  
それも、何時迄かあの儘あゝして居たら、如何變つて行くことであらう。一度、只一度で可いから逢ひたい、逢つてあの女の本心が糾した

私に昔の淫世草子に見るやうな、生若い男と女とが仲を壊かれて慕ひ焦れるやうな遺瀆的な思ひをした。幾たびとなく縁飾を苛々して往反りしながら、又ぢつと柱に凭れて建てつゞく町の屋根を眺めた。瓦屋根の黝黒いのが私の心を苛立たせるために、故とあんな不快な色をして居る様にも思はれた。一生此色を忘れま

を私の手に渡した。

私は直に其筆蹟に眼を留めた。

「中を見ても可いかい。」

「あゝ」

私は手紙をひろげた。

先生は私の友達に成つて違ると仰有つて下さつたから、それにお繼り申してこんな事を申し上げますが、これは私が今後

家出の際の口實なども有之候まゝ、此事は決して母の耳には御入れ下されまじく候。

あらゆる策を講じて平氣を装ひ、冷酷な眞似をなし、冷酷でも行かなければ輕薄をさへ以てして、いろ／＼に自分を欺かうとしたしまして、山よりの歸宅後は、それにおみ勤めて今日迄参りました。かうでもして心にもない事を周囲の人々に言ひ散らした上は、自分一人で最後を決行し得ると思つたからでした。そして小島様に私が單に彼の方を贖身したものだと思はせて仕舞つたならば、餘程自分が心安く成れることであらうと思つた。それで先日先生のお室へ妙な手紙を

私は故意に差上げました。あれは小島様に心をから輕薄な者と思はせて、存分に冷笑して頂きたかつたからの所業でした。

ところが駄目でした。いかに其邊中大謏を言つて見ても、自分を欺くことは全然失敗にはりませんでした。最う今は策が盡きて居ます。小島様に對して何の興味を持つて居ませんでしたが、私が唯一の興味は自分の死、死の瞬間の思ひでした。そして必ず一人で死を決行し得るものと信じて居ました。所が、今日の境遇に置かれ、今日の心状態と成りては、今は如何しても獨りで處決することが出来なく成りました。幾度か企てても見たけれども以前の様なクリアーな頭で、靜かに死を味つて死ぬことは出来さうもない。死ぬにしても實にこれでは遺憾で成らぬ。

女子大學とは、先日櫻盟會に退會狀を出して、無關係のものとして成つて仕舞ひました。又一昨日は木下姉と非常に冷酷な事を言ひ合つて、今後互に相離れることにして貰ひました。私を生かささうと思ふ

のならば、今迄の女說的關係を全然忘れて、私を捨てて呉れと頼みました。承知して呉れました。

これだけの境遇にまで進めて見ましたが、未だ不可ません。殆ど堪へ難い不安に生きて居る。此上は最う如何とも致方ありません。小島様の御口から思ひ切つた冷笑、罵倒、其外何でも、どんな事でも宜しう御座いますから發表して頂きたい。私は小島様以外のお方から何と云はれても、てんで痛痒を感じられないものですから。私は小島様に愛を捧げることも、如何することも出来ない身で、又候こんな事をお願いするのは、誠に申しにくいことでも有り、又申された筈のものでもないとは能く承知いたして居りますが、最うこれが最後の一策だと思ひますから、何とか先生より御取計ひに預かりたく、偏にお願ひいたします。

かうでもして頂けば、此度一月當時の我が歸ることが出来よう。其上はいづれ両親の安心いたすやうな方法によつて、家を出て自由の身と成ります。そして國を去らうと思ふ。最う境遇かららんど

んじぶんでつくつて行く外はない。萬事を捨てて眞の孤獨となれば、自分の生命を深くしみんと感じられよう。さすれば死が唯一の興味である。かう成れば、以前の我にかへつて、三年以來のわが夢を實現し、米獄に端坐して凍死することも出来るかと思はれます。今の儘にては生きること死ぬことも出来ません。殆ど堪へられないと云ふより外に言葉がない。

親戚知己其外世を憐るることに於て成功したと信するだけ、自分を欺き得ないことが痛切に感じられて堪へられません。今迄先生をも偽つて居りましたことは、幾重にも私の心状を御推し下されて、お計して頂きたい。誠に何とも申しかねましたが、これが最後の御依頼だらうと思ひますから、何とも小島様まで御傳へ下さいまし。小島様御自身の御筆蹟にて、何とか一言最後の鐵彈を下して頂きますか、それとも御口づから承はられませうか。それも出来ずば、雑誌新聞などを通じてでも宜しう御座います。何とか宜しき様に、先生にお願いたします。それ

にて私は萬事を決しますから、何卒々々最後の御手数と思召して御取計ひ下されます様くれぐれもお願ひ申上候。

四月三十日

神戶先生 御許に

あの女の名

神戶は私が一通り讀みをはるのを待つて居たが、何の事だか、僕には解らないねと、投出す様に云つた。

「左様云つたまゝ、私は手紙を巻回した。

「第一何だ、今迄は他人を欺いて居たが、これから宜しく頼むと云ふやうな無様な言分はない。そりや君達の間ぢや欺くとも如何ともするが可い。併し中間に立つた者を只欺いたと云ふんぢや、全然法が着かぬではないか。」

私は思はず神戶の顔を見上げた。

成程、これが本當なら、あの女の非世間的なことは私にも譲らない。世間の人はそれ／＼忙しい。みんな自分々々の興味に忙殺されて居る。あの女の云ふことなどを正面から引受けて眞面目に聴いて遣るものが、私の外にあらうか。

「うむ、未だ有つた。これも見るなら見たまへ」と云つて、神戶は衣囊の裏を搔搜したが、「い

や、無い。確に持つて出た筈だが――」

「何だな。」

「なに、此後に最う一本来たのだよ。僕は何と云つて遣つたのか、記憶えても居ないが、素晴らしい怒られて仕舞つた」と、神戶は急に碎けたやうな言振をした。

「仕様が無いねえ。」

「どうせ繋がる悪縁だと覺悟はして居るもの、随分有難い役廻りだぜ。」

神戶は苦笑して云つた。

二時間許りして、神戶は歸らうとした。二人は迷ひさへすれば夜が夜迄談しつゞけたものだが、此頃はつとめ一語題さへ捜す様に成つた。

「ちや、此手紙は最少し借りて置いても可いかい。」

「あゝ、可いよ。何なら君の言に置いて呉れたまへ。」

「左様か。ちや、借りて置くよ。」

私は神戶を送つて神樂坂を下りた。午後の日影は冬支度の私の背にはぢか／＼と暑かつた。新に道普請をした後の小石が下駄の裏にごろごろして歩きにくい。

「些と大久保へも遣つて来たまへ」と、神戶は坂の上に立つて云つた。

「あゝ、有難う。」  
「あの寺も住心地は好いのか。」  
「矢張寂しいね。何處に居つても同じことではあらうが。」

「左様さな」と、二足三足蹠つて歩いて居たが、何と思つたか、「お互に熱のない癖に熱のあるやうなことを言合つて来た後は、寂しいものだよ。」

私は牛込停車場の入口に着くまで、別に口を利かなかつた。  
二人は其處で別れた。

寺へ歸ると、直に最一度前の手紙を出して讀んだ。これが本當なら——本當でも本當でなくとも、私はこれを本當だと信ずる外に救はれる道はない。私に自分自身よりもあの女を信じて居る。寧ろ自分を信ずることが出来ないから、あの女を信じて居る。山で別れる時にも、「私は貴方を信ずるが故に、自分自身を信ずることが出来る」と云つた。あの女もあの約束を忘れるはしなからう。

それにしても此手紙の中に、何處か権氣の失せぬやうな所が見えるのは何の爲だらう。あの女に取つて、女子大學が何であらう、木下が何であらう、一大事を決行する上に、そんな物

が何の煩ひに成るのであらう。  
併しそれは直に思ひ返した。夜の白々と明けると頃まで、巻紙を幾尋となく書いては破り書いては破りした。夜が明けても、未だ何も書いて居なかつた。

窓の障子が薄白く成るに伴れて、洋燈の灯がだん／＼赤く成つた。終ひには笠も火屋も朝の光にはつきり見え、其灯だけ小さくとぼれた。何處からともなく、雨氣を含んだ朝風がすうと肌沁みわたる。私は手を延ばして窓を明けた。空には軒端の様な色をした雲が低く垂れて居た。

私は最一度あの女の手紙を讀んだ。彼時以來初めてあの女の書いた文字を見て、あの女の言葉を聞くのだ。その一字々々に眼がとまつて一字々々に離れ難い様な心持がした。さりながら此手紙程、心を落着けて考へて見れば見る程冷淡なものはない。殆ど考へ様もない位に自己宰位である。自分の目的を果すためには、他人は如何成つても關はぬ。縱令其目的は死ぬと云ふことであつても、あの女が死んだ後、一人取残されたものは如何成ることと思つて居るのであらう。あの女は、自分のためなら、私と云ふものを幾許犠牲に供しても關はぬと思つて

居るのであらうか。恰も左様云ふ權利をアツシニ  
一ムして居るやうではないか。  
併し、あゝ併しそんな事が私の口から云へた義理であらうか。自分のためには有らゆるものを犠牲にしても、顧みなかつた私の口から——  
行く所へ行く外はない。  
私は疊の上へ仰向けに倒れた。倒れたまゝ、  
眼をぎろ／＼と開いて居た。雨戸を繰りに来た小僧が、「お早う」と聲を掛けて、洋燈を吹消して行つた時にも、私は振向いても見なかつた。  
午近く、やつと起上つた。そして日記帳を出して、其書き終ひの所へ丹念に前の手紙を寫し取つた。尤も日記と云つても日附が有る譯ではない。此頃の寂しさを紛らすために、その日の心の心持を一人で問ひ一人で答へる様に、恭賀紙の中に小さく書いて来たのであるが、其手紙を打留めにして、此日からふつつり日記をつけなくなつた。

四

午後中、私は只空の雲を眺めながら坐つて居た。朝曇りの空は、其儘降りもせず、だん／＼、雲の底が光つて来た。

あの女の手紙を見た。併し私からとは何とも云つて遣り様がない、最早あの女に此思ひを通ずる機會があらうとも思へぬ。それは可い。それよりも私は此事について此上人の手を煩はすのが堪へられない様に思つた。他人を通じて物を言ふ——自分の生命と恃む、最奥のインテレストを他人の掌中に委ねて置く、そんな事が堪へられようか。

日暮前、私は思ひ切つて等を出た。そして、何日か或女と行合せてあの女の消息を聞いた先輩の家を訪ねた。

主人は北堂笑して迎へながら、「如何だ、例の女から妙な手紙が来たと云ふぢやないか。」  
「え、如何云ふ積りか傳りませんが」と、言葉

を濁した。  
「ふむ、神戸君も此間来ていろく相談して居たが、何うも當人が未だそんな事を云つて居る様ぢや、二應兩親へ其旨を通じて置かなければ成るまい。勿論あゝ云ふ女のことだから本心は解らぬけれど。」

「さ、左様ですな。」  
「で、僕から云つて造ることに成つて居るんだが、何か君にも註文はないのか。」

「いえ、別に」と云ひかけて、「それに就て、若

し出来るなら一寸あの女に傳言がして頂きたいのだが。」  
「ふむ。」

「私の方では、今度の事は既に終局を告げたものとして、何とも思つて居ないし、又此後とも人の意思もないのだから、二たび神戸君の手を煩はしていろんな事を云つて貰はんやうに。」

「そりや何うだ、此處に書いてやアと、主人は一通の封書を見せて、「これは東方の兩親へ宛てて遣るのだから、君が左様云ふ意志なら其様に書添へて遣つたら可からう。」

私は云はれる儘に、其餘日へ二三行書足した。それを持つて出て、歸途に暗がりの郵便函へ投込んだ。

あゝ終局——これで終局を告げたのか、私の口からはそれより外に云へなかつた。私には別に愁詞がある、其終局を待つて生きて居る。私はそれを、掌に爪の立つ程堅く握つて、骨に

怏へて居る。  
二三日は何事もなく済んだ。

或夕江戸川端へ来て、櫻の若葉の下に蹲りながら、近所の子供が咄々わめいて、猪牙船を操るのを見て居たが、それにも飽きて歸つて

來ると、其留守に神戸が来たと云ふので、机の上に置手紙があつた。開けて見ると、中からあの女の手紙が出た。私は又かと思つた。手紙はわざと落着き拂つたやうな火音で始まつた。

其後は御無沙汰に打過ぎ申候へ共御變りもなく入らせられ候御事と存じ上候。御からだに御障りもおはさずと一方ならず心にかゝり申候、最良御神經も鎮まり遊ばされ候や、それのみ祈り居り候。

私も暗のたつに從ひ却て疲勞をおぼえ候も、今は大方回復いたし候。先日

は、御の發作にて、逆も堪へ難き迄性急に成り、神戸先生を煩はして飛んだ御迷惑を相かけ、今更後悔いたし候。扱御書面に依り何等の意志なしとの御事だけ承知いたし大きに心安まりはいたし候。御筆蹟の亂れたるを見見しては胸裂かるるまで心苦しく存候。何卒一日も早く平かなる御心にかへらせたまへ、心より祈上候。

など。

それから一轉して、私如き打捨て置きては何一つ出来ぬ様

に成り居りしものを、いろ／＼御手に掛  
けられ、お蔭様にて新しき思ひを味ひ、  
生活の内容を少からず増し候こと、厚  
く御禮申上候。

など、茶かした様な事が書いてあるかと思へ

ば、  
お手紙に依れば、何の意志もおはしまさ  
ぬ由、さらば今度のことはこれにて全く  
終局を結びたるものと認め、安堵いたし  
候。就ては私の態度は一變、勿論貴方  
も一變せられしものと見做し候まゝ、  
と書きかけて、急に又、

私はお互の態度を明かにして、後始末  
をちやんと着けなければ斷じて承知し  
ない

などと、思ひ入つた様な言葉を挟んで、

私の案出せる善後策を御参考までに  
申上候。何卒御費否の程御一報相煩は  
したく候。

とある。何事かと思へば、

私は貴方にどうしても創作を遊ばす方  
に成つていたゞきたく、其努力に依て何  
日迄も生きて頂きたき希望止みがたぐ候  
まゝ、第一着として今回の事を材料と

していたゞきたく候

と云ふので、それなら自分が小説のプロット  
を立てる相談相手に成つて遣らうの、女の言葉  
なら自分の方が少しは旨からうのと、いろ／＼  
並べた末に、それも強ひてとは云はぬ、若し不  
承知とならば、自分は日下海外に出て、自由の  
死所を選ぶ計畫を立てて居るから構はないと書  
添へてあつた。

私は一わたり目を通したまゝ、手紙を其處へ  
抛出して、ぐつたりと机に凭れた。如何でも可  
い。最う如何成つても關はぬ。只此儘暫く静乎  
として動かさずに置いて貰ひたい。恰度長途  
の行軍に勞れた兵卒が、路傍の熱砂の上に倒れ  
たら、其儘日射病に罹つて死ぬと知りつゝ、容易  
に起上らないのと同じやうな心持がした。

やがて又手紙を取上げて二三行讀んだ。こ  
れで相手を纏弄した氣なのかと馬鹿々々しくも  
ある。それでも私の身には微へた。あの女が  
海外へ出て果てると云ふのも、私には眞面目  
に思はれた。

其夜一時頃まで机に向つて居た。やつと二尋  
ばかりの手紙を書いたが、夜が明けて見ると出  
す氣には成れなかつた。二たび十行餘りのも  
のを認めた。御申出の儀は此場合出来ること

でもなからう、縱令私は今度の事を書くとして  
も、この上貴家に迷惑は掛けたくない、貴方や  
御両親のオノアに係はる様なことは斷じて書  
かね、何れ出来上つた上は一度お目に掛けるか  
らと、極めて餘處々々しい挨拶をした。

此返辭は幾日経つても来なかつた。  
私は二たび書くことと云ふことに無理にも心を向  
けようとした。此儘では、世間の物笑ひはとも  
あれ、自分自身の眼にも滑稽に見える、自分の  
眼に滑稽に映る位切ないことがあらうか。此  
状態から免れない間は、私は何をすることも  
出来ない、何をしても意味がない。

それでも何一つ書かなかつた。只それを書い  
たら出版して遣らうと云ふ書肆があつて、預告  
の必要上「煤煙」といふ題だけつけた。  
或日、私は神戸から借りて置いた手紙を持つ  
て、大久保の家を訪ねた。

此前の手紙の末に、「何日ぞやは、前後の考  
へもなく神戸先生の手を煩はして、何と思はれ  
たのか、諺の眞實のと云はれ、腹立紛れについ  
飛んだことを云つて仕舞つた」とあつたのを想  
出して、  
「此手紙の後に來たと云ふのは、何んな手紙だ  
いと訊いて見た。

あ、左様だじ、神戶は四角な封筒に入れた罫紙を私の手に渡した。私はそれを器に載せたまゝ黙讀した。

拜啓、眞實の態度でさへ申せば、少くとも其函開に於ては凡の眞なるべしとは、予一人の認許せし所なりしと、今時分氣附いても早や遅時。から成つては止むを得ぬ。人事關係の總ては絶え候。情的關係などは以ての外、理解關係も無之候。いづれ所請うせならぬことは御互様に火葬場を通過してやり、ゆる／＼泰然聞え上ぐべき機會も有之べく、わざと申残し候。予も君を崇拜するものには無之候へども、小鳥さんや私などは餘程子供なりぬ、大きなお方とは疾くより敬服いたし居候。さればこそ三枝子筆、我が教主、マドンナ、アーメンにて誠に平穩無事の次第なるべく候。計らずも我が汚れたる辱に御名を唱ふるの餘儀なかりし罪を許したまへ。予が見たる人生は過ぎしりをしての綱渡りなり。笑ふだけの餘裕もなきを惜れみ給へ。いづれ其内眞諦様。あまりに見え

透きては骨の砕くる音までも聞ゆるを。畜生に成るか、聖者に成るか。とかく中庸にてばかり藝當を心得、ラフ邊りにてお茶を濁し、落情死と胡魔化すが、賢しらの避難所とは存じ及びながら、何と云つても腦細胞のワイブレエジョンが青んじないとならば、さりとして、致方もなく、又結核は例に依てナツシング、ナツシング、他人の云ふナツシングは知らぬこと、予に有りては何うとも始末の着かぬ時の差言葉。せめては一炷の香の煙の末に思ひを乗せて、家出の計畫、死場の選定、最早二度とは親兄弟、友人のある里にてはいたさぬこと。警官の御厄介にうそにも頭を下げる憂き目を味ひ候こと、心魂に徹して懲り／＼いたし候。こゝら邊りが子供らしき處かとほゝまれ申し候。御親切なるお言葉にて、私如きものまでも將來藝術界の人となれとの仰せ、誠に有難くは候へども、將來の幸福とか希望とか仇なることはとんと當に致したることもこれなく、現在に生きるだけが、やつと／＼の大事業に候。何を致しても屹度途中にて失望するが是迄の習

ひ、努力せぬさきから失望して置く方、くたびれ儲けの辛さなく、且は考へて見れば藝術とか云ふものも早晩自滅の運命を免るまじく、それも心細く候。何も致さぬこと、いたさぬこと。何うせ思想の不健全は前々四方八方より頂戴する御言葉、思想とは性格の一部分に過ぎざるべく、何様性格が病的の出来上つたからには、今更救済の見込みも立たず、何の道社やには生存いたさぬが自他の幸福と覺悟は二三年前に定めながら、ついで今日に迄及び候段誠に御恥かしく候。計らずもこんな事を能言り立て候も、これは我が爲の煙出し。尤もあらゆる人事關係を放棄せる上にて申上げたことなれば、何の他愛もなき妄言同様、又誰を云つたなど御思ひ遣はずだけにて、今度御煩に候。矢張君も死に依らざれば解決の着かぬお方、或は御同行の止むなきに立寄りはせぬかと心配に候。以下は母の申せし處、眞偽の程は私一向存じ寄らず候へども、耳目に觸れ候まを御傳言申上候。毎もながら御親切よと繰り返し候。先日一寸御宅迄參上い

たせし處、あやにく皆様御不在にてほん  
やり歸せいたしたる様にて候ひき。其後  
は又病院通ひに候、かしこ。

五月五日

あの女の名

神戸先生 御許に

ずつと目を通したが、只刺戟の多い文字がぐ  
んぐん頭に響いて、ぐらぐらとする前、何の  
事とも解らなかつた。私は手紙の紙を見詰めた  
ま、少時俯向いて居た。

神戸も私と一緒に手紙の文字を辿つて居た  
が、

「御同行は驚くね」と呟いた。

又言葉を次いで、「それから先達て彼家の姉さ  
んと云ふ人が来たよ。其話ぢや何でも阿母さん  
が病氣で、それに餘り家に詰り置いても爲に好  
くなくからうと云ふので、一緒に旅行に出たのだ  
さうな。」

「あゝ左様か。」

それなら私の手紙も其留守へ着いたのであ  
らう。何れ家の人の手を經るものとは思ひなが  
ら、何時迄も本人の手へ渡らず、自分の書いた  
物が宙宇に迷ふかと思へば心苦しかつた。

私は大久保を出て、初夏の日光を浴びながら、

一人田圃の中の道を歩いた。額に汗が滲んで、  
歩くのも息苦しい。一足毎にそこへのめりさう  
にも思はれた。

あの女の手紙——あの女は矢張あの女だ、  
私の思ふ通りの女であつた。それにしても——  
神と人間との間には未だ祕通がある、何となれ

ば神は人間の造つたものだから。けれど人間と  
人間とは縁に近づくべき道がない。毎日顔と顔  
と合せ眼と眼と見合せながら、別々の世界に生  
きて、別々の世界に死んで行く。こんな不可思  
議なことがあらうか。

何處へも行かぬ所がない。私は最う何處へも行  
く所が無い。

私は前後を見廻して、懐から一挺の拳銃を  
取出した。引金に指を掛けたまゝ銃口を額に當  
てがつたが、又そつと懐に納つた。そして足  
早に歩き出した。

不圖、氣が附くと、私は四辻に立つて居た。

何だか見覚えのある道だと思つたら、落合から  
新井の藥師へ行く街道であつた——あの女と  
初めて會つたあの藥師へ——私は急に後戻りを  
した。總司ヶ谷からぐるりと廻道をして、下  
宿の寺へ歸つた。

其月の末、私はあの女の家から一個の小包を

受取つた。開けて見ると、別れる時あの女に預  
けた書物であつた。私はそれを目に見えぬ挿入  
の隅に隠した。

一週間程経て、私は又あの女から一通の手紙  
を受取つた。

拜啓、前月中旬より旅に明け暮れて御無  
音に打過ぎ申候。御著作中を御読げい  
なすことは餘りに心なく、何より不本意  
に候へども、一言用事のみ申述べ候。

擬私こと總て計畫通りに参り準備も  
大方調ひ候へば、此夏だけは母の病氣  
もあることなれば、湘南にて少しく母の  
心を慰め候後、遅くも秋までには漫遊の  
途に着くことに確定いたし候。勿論周囲  
の事情をも考へ、兩親の許可を得て、實  
際的に事を運ばせ候ものなれば、其邊は  
他事ながら御安心いたさき度候。歳では  
出發前に、今回の事につきては師友又は  
世間より色々質問をも受け居ること成  
れば、極簡単に私の態度を明かにし一  
應答へ置きたき希望に候。今日迄世に發  
言いたさず参り候は、一は新聞雜誌記者  
の質問に答ふことの餘りに馬鹿々々し

く、且は單に外觀的事實だけ語りたりとて、多くの誤解を生むとも事實の真相など解つたものにあらざるべく、

私は此處迄讀んと思はず眼を上げた。あの女は恰度其通りを放てしたのぢやないか。如何して斯うぬけ／＼したことが云へるのだらう。私に又思ひ返して讀みつゞけた。

又私の小さき頭腦よりして貴方の總てを解し得ざるは云ふ迄もなく、又貴方も私の總ての方面を御承知なきは勿論のことなるべく、且貴方は心々御創作を遊ばすことが最初よりの御考へなるべけれど、それが公に成るに先立ちて、私が事件其ものに對して兎や角と言を挿むは御迷惑なるべしと、今迄差控へ居りし次第に候。

私は最早讀むに堪へなかつた。つまり其後は、昨日一寸歸京して見たが、近刊の預告も出たさうだから、いづれ出版にも間がなからう。それを待つて師友や、眞面目な質問をして呉れた未見の知己にも答へたいから、出版の時日を知らせて貰ひたいと云ふのであつた。

私は直に筆を執つた。思ふさま書いて書きさちぎつて遣らうと思つた。

「規程には必ず書く。併し何時出来るか分らぬ。或は一生出来ないかも知らぬ、若し貴方に云ひたいことが有るなら、そんな事には觸着しないでどし／＼發表して貰ひたい。併し貴方は是迄も隨分世間へ對していろんな事を云つて居たぢやないか。勿論あんな風で山から歸つたら、貴方の自尊心は傷けられたらう。それにしても餘りな、私でさへ見かねる迄反動的なハッシュンに驅られておいでの様だ。成程漫遊も好いでせう。併し家族と云ふものは——私の口から云へたことでは無いかも知れぬが——決してむらな出来心之恩恵の下に置かるべきものではない。現在貴方のために病氣に迄成つた親を捨てて行く。少しは貴方のモラル、センスにも、訴へて見たら可からう。

斯んなこと迄書いた。あの女の非常識的な言動に報いるには、自分が常識的に成る外はなかつた。

兩三日経て、私は二十枚餘りの洋紙に鉛筆で走書した、長い返事を受取つた。私は好く文字の速度が思想に及ばぬ時、鉛筆で手紙を書いた。それに倣つたものであらう。

その長い手紙は次の如く走つた。

御手紙は昨夜母の手を経て拜見いたしました。其時の氣持は逆も云へません。昨夜來靜坐をつづけてやつと氣が落着きましたから此手紙を書くことにしました。少し長く云はせて下さい。私は自分の苦しまぎれに誠にいろ／＼馬鹿げた眞恥を致しまして、貴方には何とも申譯が御座いません。素知らぬ顔で心にもないことをどん／＼いたして居りました。故意に貴方を傷けるやうな事も致して見ました。けれどけれどあゝでもしなないで、私は如何して居られますか。未だそんな事を云ふか柄果てた女だと御有るかも知れませんが、私はあんな事をして居ても、貴方だけには解されて居たと思つて居ました。私は大膽きで馬鹿げた眞恥を類に遣り出した。それでも貴方だけは私があゝでもせねば居られないと云ふことを知つて頂きたかつた。世間を相手にあゝ遣つて居るとは、餘り／＼餘りに見えてとつて下さつた。世間を考へるだけの餘裕があれば、あんなとぼけた眞似

は迎も出来ない。この前旅行先で拜領した御手紙はあんまりです。「貴家の名譽と貴嬢の名譽とは傷けないやうにする積りである云々。」あれは迎も堪へられなかつた。彼處迄より私は讀むに堪へなかつたから、其儘母に返しました。あゝ私ばかりと貴方までそんな事を云はれる様に成つたかと思ふと、もう泣くどころでもおこるどころでもない。只自身で血だらけに成つても未だ死に切れずに狂つて居る女の姿を瞻みて居た。オノア、オノアとは私の家の方で散々に責められた言葉です。私は父母の身として道理だと、誠に善まなくも氣の毒にも思つて堪らない心持で居るのです。けれど親からでさへ此言葉を聞く毎に又不愉快でたまらない。唯一人云はないて居て下さる筈の貴方からまで、それを聞かされた——私は親に對してはモラル、センズどころではない、原宿的の愛情がある、大やぶに見るやうな衛生のまゝの愛情がある。それでも私に如何しても今度は家を出て見ようと思ふ。名譽々々と云はれるのが辛いことも一つは其原因です。今後の私の

生涯は名譽回復のために存在を許されるやうな取扱ひは迎も堪へない。私は冷徹ぢやない。只冷徹を裝はねば居ても立つても居られたものでは有りません。如何に何でも世間の人と同様に貴方の御口から「お前の名譽は保護して遣るとか、病氣の母親まで捨てて去るとは何と云ふ事だ」とか仰有るのは舍して頂きたい。いかに決心は定めて居ても私も石ではない、又心が動き出して仕方がありません。さうかと云つて、此儘兩親の傍に居ては迷惑を掛けるまでも満足を興へられよう見込はない。私は思慮の結果造りに従つたのです。あの汽車で御別れた以來の私のやうに、或パツションに支配されてわざといる／＼な事を遣つていらつしやるのなら知りませんが、それではなく眞實に貴方までが此前の御手紙や又は今度の御手紙のやうに私をお考へに成つていらつしやるのかと思ふと迎もたまりません。もう今日は何も云はせて下さい、云ひたいことが誰にも云はれないので、私は一人で只狂ふのです。少し前のことですが、それから云はせて

下さい。御別れ後、私は何故こんなに成つたかと云ふことから云はせて下さい。それは汽車の中で承はつた最後の御言葉——あれが無です、あれが私の總ての努力を踏みつけた。一無論手紙などは遣り取りしないこと。「これが私の心にどんな印象を深く／＼殘したか知れない。御想像に任せませう。王子の一夜、私は只其御言葉ばかり繰り返して居た。そして生涯の好き敵一人得たと思つた。あの情熱の燃え立つた瞬間に生誕する方面の私は、其夜儘の間にどれだけの恐ろしい事を考へて見たか知れません。とても恐ろしい空想を孕がいて居た。けれど其反抗心のために自分自身の苦痛を忘れて居ただけは寧ろ幸ひであつた。そのためにも歸宅後も兩親に對するモラル、センズなど二三日は動かなかつた。只祖母に會つた時如何にも嬉しさうな顔で「何でも生きてさへ歸れば結構さ、どうでもお前の好きなやうにして上げるんだから死ぬことがあるものかね」と云はれた時には、初めて聲を出して泣くことが出来た。其他の人達には何の感情も動かな

い。只貴方に對する敵愾心に心の大部分が占められて居た。其當時私が世間に對つて徳舌つたことは——無論強ひられて口を開くのですが——世間を相手取つてなどと云ふ思慮もなければ、てんで其方には氣を向ける氣にも成らない。口を開けば、只貴方を相手取つて、あの時のあの「無論書信などはしないこと」と云ふ聲を耳にしたがら徳舌つて居た。其當座私は只貴方に對する怨恨のみに充ちて居た。貴方は私が又今度の事の爲に自尊心を傷けられて、それで恨んで居るものと思つて頂いたかも知れない。それは自尊心と云ふやうなものも無いとは云はないけれど、そんな事よりも更に——私を動かしたものは別にある、口惜しくて残念でたまらなかつたことは別にある。尙後自分一人で死を決行し得るか何うかと考へた時、私は逆も只ちつとしては居られなく成つた。あまりの遺憾、あまりの意氣地なき。勿論貴方を恨むといふ理由はない。只自分の意力の足らぬこと、自分が信じて居つただけ鍛錬が出来て居なかつたことを感じた時の苦しさである。苦し

さの持つて行きどころがないから、塲中で神戸先生にも當つて行つた。木下にも當つて行つた。寧ろ激發を強ひて招いても狂ひ廻つて居るのが最も容易であつたからでした。悪いと知りつゝ狂はして置いた。時には冷笑的な氣持にも成つた。何んな事を云つても平氣であつた。何がなしに只可笑しく、笑つて——留度なく笑ひたいやうな氣持が一日中つゞいたこともあつた。けれども家の者が少し心配し始めたやうに見えたので、例の避難所へ逃げ込んで、朝夕座禪ばかりして居ました。それから旅へ出ました。其處へ先日の御手紙が連れて私の手に落ちた。あれに對する私の激昂の結果は誠に考へれば子供らしいまで馬鹿らしい行爲をさせたのです。御本をお返しいたすやうに姉の許へ依頼して、殊にもう私の名を書く必要はないことに成つたとまで註文して遣つたのでした。

それから歸京して見ましたら、時子から手紙が来て居て、「煤煙」とか云ふ小説が出るさうだ、近刊報告を見るがいゝと、これだけの事でした。此手紙で私は又腹が

立つた。重ねの事では堪へられない。そこで仕方がないから、あの手紙を作ることにしたのでした。誠に何とも申しやうのない書き振りに相違御座いません。けれど私は眞面目でした。震へながらも彼の襟に書いたのです。あゝでもするより貴方に接近する道はなかつた。それより外に、私は貴方に對して報いる方法を知らなかつた。あんなしらはつくれた顔をしてあゝせねばならない私の心の中は誰も察しては下さるまい。私は漫遊などいふ文字を特筆大書する必要があつた。血まみれに成つた女が、さりとて死にも得せず、自分の血と肉とのつゞく限りわれとわが血に癒えつゝ最後まで戦はねばならぬと、取返しつかぬ創傷を負ひながらよろめき去る姿を睨まむが爲である。私は只貴方のみみ解されたりと信じて居たのに、かうまで成つた以上は、いつそ自分の血と肉とを以てした行爲の總てを滑稽化して、貴方に報いるのが唯一の方法であると考へた。それで私は「煤煙」の出版を待つて、私の態度を御友に對つて明かに答へるとしらばつくれたので

す。私に今日師友と云ふものが何處にありませうか、それだけでも察して頂きたい。もと／＼眞の師友といふものはなかつたに相違ないのですけれど、師友に答へるとは即ち貴方に答へると云ふことに成る。両も思ひ切つて馬鹿なことを云つて御答へするつもりであつた。私は何をするのも皆貴方を相手にして居るのである。貴方の前に發表した自己以外に、何で他人に發表し得るいつはらぬ自己が残つて居よう。

私は自分で出来ただけの處まで貴方には接近した。あなたまでも他人に接近したことが是迄あつたでせうか。他人の前にあれまで自己を表はしたことがあつたでせうか。あれ以上の發表は私の口からは出る出来なかつた。只藝術家たる——私は左衛門信じて居た——貴方の洞察力に訴へようと思つた。私は自分を見ることは何處迄も無い。其は色々なことに、是もあり、方便もあり、進取もあつたに相違ない。けれども始終一貫して傷らぬために何處迄も見ない。私は最も作れない。今日は總て云はせていた

だきます。私は口では逆も云へぬことである。いづれや貴方は私をスフィンクスの様な女だと仰有つた。私はスフィンクスの態度を装つてならば、何時でも貴方と上手する資格がある。けれども今これを書、聞は貴方と眼と眼を見合はせることはとても出来ない。貴方は御自分を敗北者だと仰有る。私も敗北者です。けれど私の苦痛は貴方の苦痛とは全然別のものです。私は何故スフィンクスのやうな女に成らなければならぬか。敗北したことを切りに感じたからです。肉體的に征服されたかつたから勝利を得たなどと、そんな大まかなお日出たい考へでは私の性質として瞬間も居られない。私は何よりも自分の心の経験を重んずる。肉體的に何うした斯うしたは第二の問題です。敢て問ふにも及ぶまい。私は自分の心を愛味に取扱つて置くことだけは何うしても許さないのです。私は深い／＼創傷を受けて仕舞つた。これは貴方だけは解つて下さるでせう。

貴方にも解つて頂くことが出来ないとす

れば、私は今度胸に受けた創傷に堪へない。思ひ切つた馬鹿なことをして自他を欺くより外に今後の道はない。私だつて涙はある、涙はある。私の苦痛は私の口から誰に向つても云へない。無論云つた所で同情同感なとして呉れる人にはある筈がない。只信頼して居た貴方までが餘りな事を仰有るやうに成つた。「私が見かねるまでに反社会的な情熱に裏かれて居る」と仰有るが、何故私があんな事をして居るかは察していただきたい。自分でも見かねて居るのです。けれど私は貴方にごの見かねたさまを見ていたゞけば可い。私は悪いには相違ない。貴方を傷けるやうな事を敢てして居たのです。實に悪いけれども、切めて何故あんな態度を執るに至つたかといふ、それだけでも時には察していただきたい。私もこんなに精神生活の動搖をうけたことは有りませぬ。若し私に自分を非我の位置において觀察する習慣がなかつたら、とうに狂したか、また無分別な死を遂行することが出来たかも知れない。或はその方が幸福であつたのでせう。けれども私は情

然に騒がれて動いて居ると同時に、一方では餘裕のある我が見て居た。俯り落るしいままでに深獲しさうに成ると知つた時は、多くは意力でもって制得してしまふ。私、自分を制御する上に始終座敷の方を籠りて居る。私は禪の思想を口にする資格はない。只自分を制御する方便に使つて居る。いつぞや御同行した日蓮聖の兩志庵は、私がたゞ物好きから彼處へお連れ申したとでも思つていらしたかも知れませんが、あれは私が三年前十日間夢中になつて坐つて見ればしたところなのです。それで貴方が聞ふ時あの家を一度見て置きたく成つたのです。貴方もお聞き及びでせう、釋宗活と云ふ坊さんを。それから貴方が私の心を解剖して下さつた、あれにお答へいたします。私も先達で以來いろいろ反省ばかりして居ますが——こんなことをして居るのが今は一番心易い——私にとつて自殺は自我の完成である。自己意志の發現であるとは思ひません。私にとつて自殺はいよいよ情熱のために破船せねば成らぬと、切迫つまつた瞬間に辛うじてとる消

極的の勝利なのです。今度自分が死を決するに至つた心状態をいろいろ振回つて見ました。が、私は貴方とお話をして居る時、父け手をとつて歩いて居る時などは、とても死ぬ氣になれない。死を決行する勇氣はない、又派などは何うしても出ない。けれども抱擁された瞬間派直に出る。同時に死決心は成る、又實行も出来る。あの瞬間に殺されるのなら私は平氣として一番容易な死に方をする。自己意志の發現だとまでは信じられない。更により強き我がわれの上にあると思ふ。今度私があれば死を決したのは、あの當時はどことも最後まで戦つたと思つたけれど、死を決するに至つた動機を更に考へれば、或意味に於て敗北であることは明かである。それは恐怖と不安と苦痛とに逆も堪へ切れなく成つたからです。決して強いものではない。最後に貴方のお手に避難所を求めた諦に成る。つまり奮闘の中途に於て恐怖と不安とがあまりに切實に迫つて來たので、實は逆も堪へられないから死ぬ氣に成る。ですから抱擁されて居る時——最

も不安の時、そして最も情熱の熾烈な時に死にたい。尤も是は私の思想の結果ではない。私の頭は寧ろこんな死に方では承知せぬ筈である。だから私は家出前切に脱したのです。若し貴方と相對坐して居る時に砲口を向けられたら、私は屹度自己防禦の態度をとらずには居られまいとも想像して見た。戦へるまで腕力であたらうかとも考へた、又意力をもつて平然として殺されて仕舞はうかとも考へた。自殺するよりも其方が容易には相違ない。けれども甚く敗けたやうな氣がして來たのでした。それで口惜しまぎれに、御覽でしたか、あの遺書をした。あれは自分で自分を偽つて見たのである。同時に貴方へ當てつけたのです。時子に手紙を遺る氣に成つたのも同様の氣持からです。それと最一つあの遺書をして置けば、もし或事情に迫つたら自殺をする勇氣も出ると考へたのでした。貴方は私がかまか世間を相手にあんな遺書をしたものとは思つて下さるまいとは思ふが、私は誓つて云ふ、あれは貴方へ當てつけたのである。あれを受取るべき人は

貴方より外に世には一人もない。改めて  
あの遺書を貴方に差上げる。

こゝに私の口頭から考へて居る思想上の  
問題を少し語らせていたゞ。私は哲學  
や宗教に關する讀書をしたことは殆ど  
數へる程しか有りません。只自分の心的  
經驗の過程を考へて、個人思想發展に  
關つた階段を設けて見る。

一、肉の時代。

二、肉と靈と對立の時代。

三、靈の時代。

四、靈肉合致の時代。

此四つは發展の階段ではあるが、又同時  
にこれだけ存するものと思ふ。そして意  
志の力による精神鍛錬に依つて最後の  
境地まで到達することが出来るのです。  
若し修養と云ふことが少しもなかつた  
ら、何時迄も肉の時代にとどまる  
ものだと思ふ。それからこれは私が確信  
して居る所ですから特 申しますが、こ  
の靈肉合致の境地は一度肉を征服して  
靈化し去つた境地を経た人でなければ達  
し得られるものではない。メレヂュコフ  
スキイの靈肉主義とはどんなものではな

か、是非讀んで見たゞ成りました。私は  
知らないから何とも云ふことは出来ませ  
んが、只肉は靈の象徴で此象徴を通  
してにあらざれば靈を讀ぶことが出来な  
いと云ふ言葉は大變面白く感じました。

但し靈の象徴であるといふその肉は靈  
肉一致の境地に達した、即ち訓練を  
た肉であると思ふ。二元論の見解にある  
ところの肉とは區別して論ずる必要があ  
るでせう。私はなにもシステムイック  
な學說を人の前で云つて見る考へもない  
し、又其力もない。時には何とか系統を  
與へて自分の頭を明晰にして見たいと云  
ふ要求も起らないではないが、私はたゞ  
自身の血と肉とを以て戰つて居るまでで  
ある。血と肉とをもつて、靈肉一なる境  
地に泳ぎ着かむとする努力である。今で  
も此境地に達したと信ずる瞬間はある。

けれども多くの瞬間は第二第三の間に  
彷徨する苦闘である。闘の苦しさに堪  
へない時、死を考へる。けれども死は最  
後の勝利だとは思へない。この上は最後  
まで生命の續く間は戦ひます。死ねば  
戰場で死にます——私も今度といふ今度

はしみん、自分の弱さを感じました。今  
度私が死を決したことは貴方をしほに自  
分を兼もて避難所を求めたものである。  
しかも終に避難所へ埋没し去るわけにも  
行かず、新に手傷を負うて血まみれに成  
つて出て来た。何だか又頭が亂れて来た  
から止めませう。

思附き次第順序なく書いて見ますが、貴  
方に私を接近せしめたものは情熱であ  
つたには相違ない。それは確です——け  
れ、一方には私に友達がないことです。  
私が本當に自分で考へ自分で感じて居る  
ことを其儘に發表したことは殆どなかつ  
た、なかつたのではない、出来ないやうに  
せしめられて居た。私は喧嘩ばかりして  
来たといふ。けれども自分が本當に考へ  
ることを發表して人と思想上の争ひを  
したと云ふのではない。そんな事はした  
くも今迄出来なかつた。私が何と云つた  
ところでもうせ駄目だと云ふ絶望的な腹  
立ちまぎれに、他人を相手取つて争つて  
見るので、私の思想其者とは關係がな  
い。勿論目的もない。只絶望的な恨みか  
ら無鐵砲な喧嘩をするだけのことです。

この時の私は全く態度が違ふ。貴方の前にもこれでもって現れたことが近頃は深山ある。勿論無道徳に成つて仕舞ふ。只知的に意地悪くさへ出れば可い。故意に罵詈雑言をして見る。裏のあること許り云ふ。貴方は私が他に何か目的があつてやると思つて下さつたかも知れないが、そんな餘裕は私にはない。ふざけて遣るのでも、じやうだんに爲るのでもない。齒を喰ひしばつて居るもののあることだけは見て頂きたい。私自身も決してこんな事をするのが善いことと思つて居ません。けれど編輯がましいけれど、境遇上かう成らざるを得なかつたと、自分では思つて居ます。これは私が後天的に受けた一面である。

してしまつた。今迄接した人と少し違つて居たから好奇心に驅られてしたのです。貴方の前にも折々こんな態度が出たやうでした。迅速に竹筥返しをすることも気が附いては居ますが、考へて遣るのではない、反動的に出るのです。こんな事を書いて居る間に、私は何も知れない、近頃にはない穩かな氣持に成つて來ました。故意とらしい態度で此間中貴方に對したことは許して下さい。只私は不貞面目にあんな貞節をして見たのではない。それだけは認めて下さるでせう。私は貴方にお別れした以後も解されて居たところは解されたものと思つて居た。それだけは何日迄も變らないと信じて居た。未だ手頼つて居た。それ以外私に何を誰に手頼つて居るが有らう。私の總ての中で自分以外のものに手頼つて居るところと云へば、只私が貴方の前であんな事を遣つても、貴方には解されて居ると信頼しただけです。ところが何日の間にやら世間の人から聞くやうなことを貴方から承はる身と成つた。私の態度が一變したのは無理もないと思つて

下さい。あゝ又得手勝手なことはばかり云つて仕舞ひましたけれど。私は私である。世間とは獨立して居るつもりです。私が今度やつて來たことは、私にとつては曾てない大事業である。この経験は生涯私の所有である。何んた事があつても抹殺するわけには行きません。これだけの努力は非常な價値を産んで居る。私の一生はそれだけ値打を優したのである。事實は事實ではありませんか。世間が何と云つたとて、二人して遣つて來たことは有の儘の事實である。誰が何と云つたとて、二人の間の事實を抹消する力がある筈はない。私は左様信じて居た。この事實は二人が所有すべき特權がある。私は一分一厘でも抹殺されるのは遺憾で成らない。私は西遊生誰の所有として居るつもりである。私の胸には深酷な悲痛をとめて、云はれない位感じて居る。こんな悲痛を書いたものは未だ世間には有るまい。私は貴方に向つておこる權利はないけれども、貴方を藝術家として深く信じて居ただけ、私は此前の御手紙と今度の御手紙とに對していよ

いよ失望せしに居られたない。勿論勞わ  
ていらつしやる貴方の御手を勞して自分  
のことを小説にしてくれなると厚い  
ことは云はないまでも、この悲壯な生き  
た小説を求めては二人の所有として生  
涯持つて居たいと思ふ。これだけの希望  
を察いで居たものである。それだのに近  
頃貴方の御心に持つていらつしやる悲劇  
と私を持つて居る悲劇とが別々ものに  
成つて来た。私はそれが残念でノノとて  
もたまらない。

それに私の兩腕を御心配下さつたのは  
有がたい。名譽を重んじると仰有つ  
たのも御本意でありますまい。けれど  
も私と相談していゝやうな事を書かうな  
どとはあまりに二人を侮辱し切つた話で  
ある。物質的に二人を破壊したくとも、  
あゝ言葉だけで十分に踏み潰されたも  
のではありませんか。自分のしたことは  
終生責任を負ふかはりには、他人から抹  
殺されようとする時どこまでも所有を主  
張する権利がある。藝術とは何んなもの  
か知りませんが、少くともそれ自身に於  
て獨立したものでせう。社會の前に頭

を下げて、初めて存在を許されるやうな  
藝術なら餘りに憐れむべきものである。  
私は貴方の前にしたことは社會は眼中に  
なかつた。どうぞ求めて御筆を御執りに  
成る間だけでも、二人の舞臺にしていた  
だきたい。母を御心配下さるのに誠に有

りがたく御禮致しまするけれども、決し  
て貴方が御想像下さるやうに、私の家の  
者に貴方を恨んで居りません。私の方  
が恨めば母よりもつと恨んで居る筈で  
ある。母の病氣は久しい前からの持病で  
そんなに甚いので御座いませぬから、  
何卒御安心なすつて下さい。私の母のこ  
とは私が心配いたします。貴方ほどこま  
でも藝術家としての威厳を保つていた  
だきたい。藝術上の問題にまで周旋の  
事情を顧慮せねば成らぬと思ふと私は  
残念です。私が若し藝術家であつたな  
ら貴方の様な雅量はとてもない。私は  
どこまでも區別する。周旋の事情を顧慮  
して常識的に動く時の私と、自己を主  
張する時の私とを混同することを憎む。  
私の家のために頭を下げて下さつた御  
心の程は誠に有りがたいので、私にも

分つて居ますが、藝術家としての主義  
を貫く上には決して御遠慮には及ばまい  
と存じます。それでなければ貴方はあま  
り御苦しくいらつしやりはしないかと思  
つて、何だか申譯もないやうに成つて  
来ます。私は貴方の病氣を持つては居ら  
ない。

大變長々と書きました。私は今迄誰に  
も云へ得なかつたことを何も彼も書しま  
した。お目に掛つてはとて／＼云へな  
い、決して云へないことも申しました。

今日は貴方に最も接近した。かの山上  
の一夜よりも接近して居ます。けれども  
この様なことまで僞るところなく自分の  
姿をあらはした時、私は今は御目にか  
かる資格を失つた。スフィンクスの様に  
振舞つてこそ御目にかゝる資格もある。  
が、只謝罪します。自分以外の人にこれ  
丈の事を語り得ようとは曾て思ひ設けな  
かつた、云つて見ようなどと云ふ氣にも  
成らなかつた。不思議で成りません。私  
はたうと曾てを告白するやうに成つた。  
私自身の口から永久他人に語るわけに  
は行きません。今日、明治四十一年六月

十日、貴方二發表いたしました。私自身は私を發表する資格はない。とても申せません。金輪際云ふ譯には行かない。只貴方に願つて置きます。私に關する一切の發表の自由を御任せいたします。重ねて申しますが、今回私のいたしましたことは何處迄も私の所有である。他人の所有を請さない。——子のしたことである。いかに不名誉な形容詞を世間から浴せられたからとて、——子の名まで抹殺することは請さない。私が悪いことをしたならしたで、私が責任を持ちます。其御心配はして下さいませぬ。

改めて私に關する發表の權利を貴方一人の御手に總て譲ります。私は生涯眞の自己を自ら他人に語ることは有るまい。一切貴方に御願ひいたします。母のことは御安心下さい。又私も今迄云ひ得なかつたことを云ふことが出来たから、今後は決して見苦しい狂ひやらはしませんから、これも御安心下さい。

あの女の名

小島様

敬請に

最も少し書かせて下さいませ。先日私から差上げた手紙に「櫻」を御惠與下さいたく云々と書きました。あの御惠與といふ文字は餘程考へたのです。私は腹を立てて堪らなかつたから、書いた。それを貴方はまるで違つた意味に御取り下さつた。私はあの旅行先で拜領した御手紙のやうな、あんな御心持でお書きに成つたものなら、一切見が出来ないといふ意味だつたのです。あれでは藝術家らしい態度もなければ、同時に私をも少しも解して被坐しやらない。私だけを侮辱なさるのなら未だしも堪へる。貴方御自身まで侮辱して被坐しやるから、私はあんまり胸甲斐なく思つた。あれでは二人とも滅茶々にされて仕舞つたぢやありませんか。今度の御手紙の二出版前には御前に一度見せるつもりで居る」といふのも、同様の意味に於て、又二人を侮辱して居ると感じました。そんな態度で御筆が御とりに成れるものか、又私がそれを喜んで拜見いたしますと云へるものか、御考へ下さいませ。藝術家たる態度を失つておしまひになつた貴方なら、

最も貴方でもなく成つて仕舞ふ。貴方を藝術家と信ずればこそ、あれまで接近しました。藝術家でもない人に、何であれ近づきされて見るのですか。最初か、断然お断りした筈です。社會上の位置を失つたから藝術家にでも成れと、私が云つたと仰有る。私にもとく社會上の位置など御かまひに成る方ではないと貴方を思つて居た。社會と個人との關係なんて、私にはとても認められない。私の世界が社會とどこに相應するところが有るか。貴方と私の關係は私にとつて最初で最も唯一の社會的關係です。この外私には何處に理解ある關係がありますか。貴方に理解されよう、知られようと思つたのは、成程私の弱身ではある。私は何うせ誰一人にも知られることなく、獨りで戦つて獨りで死んで行く身だと、覺悟は疾うにして居た。ひとりでもいゝ、何うでもいゝ、どうせ駄目だとは、私の人に對する絶望の聲である。けれど今度は貴方の洞察力に信頼して自分を知られて見ようと思ふ氣に成つた。そんな希望

を起して見たのは、私が悪いには相違ない、私が弱いからには相違ない。併し一旦知られて見ようと思つた後、ちつとも知られて居なかつたといふことに成つては、連も堪へられない、孤獨でたまつたものぢやない。先頃中の様などほけた顔でもして居るより外に、私には仕方がなかつた、あくでもしなないでは如何して居られよう。只貴方に知られて居ると思へば、私は何處へでも行つて、ひとり自分の世界の、闘を最後までつゞける力も出ると思ふ。何うせ解して貰ふ見込のない社會に、しかも邪魔ばかりされて居るよりも、せめては邪魔だけでも餘りされない所へ去つて、社會とは只自分の肉を支へるだけの資料を得るために無意味な關係だけしようと考へて居るのです。唯一人と思つた貴方にも解されずに生涯をはるとすれば、あまりに孤獨、感に堪へなく成つた。でも未だ解されて居ると信じて居る。だから又こんな長たらしい事も書いて見る氣に成つたのです。未だ申上げたいことはいろいろ、

有りませんが、あんまりだからこれで止めませう。私に關する一切のことは貴方の御所有だと思ひますから、何でも御發表下さいませ。其代りに他人を相手に御書きに成るものなら私は承知しない。『娼婦』は貴方と私と唯二人の所有物だと信じて居ます。外の人に何で解るものですか。此手紙は何でも手から手へ直接に御渡しすべきものです。仕方がない。仕方がない。

私は始終わく／＼としながら、幾度も途中で行止つて又後戻りをするなど、長い間かゝつてやつと讀み終つた。讀んで仕舞つた時は割合に平靜であつた。左様あるべきものが左様であつたと云ふ迄で、別段心は動かされなかつた。今更々娼婦は二人の所有物だと云はれても、此生きた小説を切めては二人の所有として生涯持つて居たいと云はれても、如何いふものか餘り身に沁みなかつた。二人の中の事實は何人といへども採み消すことを許さぬと云ふ。併しそれを採み消さうとしたものは、あの女自身ではなかつたのか。あの女自身が事實を採殺し去らうとしたら、私は如何することも出来ない、幾

許無説つても澤山いふことも出来ない。如何することもあの女の自由である。現にあの女は自分が血と肉とを以てした行爲の總てを消滅化して私に報いる外はないと云つたぢやないか。何だかそれが私の言葉について拵へた言譯の様に思はれるけれど。

山から歸つた當座、あの女があゝでもして居なけりや居られなかつたといふのは解つてゐる、其心持は解つて居る。併し最後に汽車の中で云つた私の言葉がそれ程あの女の機嫌を損じて居ようとは知らなかつた。勿論手紙など遣り取らないと云つたのも、あの女を信ずればこそ云つたのではないか。あの女を信ずる言葉があつた女の意力の足らぬこと、鍛錬の出来て居ないことを諷示したと云ふのなら、何だか解つた様でもある。只それだけに一層詰らな

い。

併し私の前に發表した自己以外に、何でも他人の前に發表し得るいつはらぬ自己が残つて居ようかと云ひ、出来ただけ、私には接近した、あれまでも他人に接近したことが是迄にあらうか、あれ以上自分の口からは連も云へない、此處を見よ、此苦しきを見て呉れぬかと云はれては、私は矢張あの女を豫々信じて居た通り

の女だと思ふ外はない。スフィンクスの態度を  
装はなければ私と握手するに堪へないと云ふ、  
其女面御身の像と齊しく、あの女の頭の背後に  
暴れ狂ふものは矢張私の本性ではなからうか。  
それなればこそ、あの女は自分に涙があること  
云ひ、自分の苦痛は自分の口から誰に向つても  
訴へることが出来ぬ、縱令訴へた所で同情  
同感などして呉れる人はないと云ふのだ。それ  
でなければ意味がない。あの女が自分でわざと  
女ぢやないと云つて見たり、米につくか火に  
つくか、兎に角中途半端では堪へられないとぞ  
と云ふのも矢張それで説明とれよう。二六時中  
米の様な意志の力で抑へては居るものの、一寸  
寸でも隙間が有つたら忽ち異常な情急が勢  
を得て、燃え上り火焰の中に身軀ごとした／＼  
と捨て去る外はない。抱擁された瞬間、涙が  
直に出て、同時に死の覚悟は成ると云ふのも是  
が爲ではないか、左様思へば、三年前日暮里の  
兩宗庵で夢中で見性したと云ふのも頷かれる。  
あの女は自分を制御する方便として座禪の力  
を藉りて居ると云ふ。只それ方便である、目的  
ぢやない。徹頭徹尾あの女が禪學に依つて説明  
されると云ふのぢやない。しかも其制御の力が  
だん／＼弱く成つて自分が自分に負けて狂つて

行く。未來の定められた運命を明かに見ながら  
苦闘を續けて居るものとしたら——實際生きて  
居るだけが大事業であらう。何んな事を云はう  
が、何んな事をしようがあの女には許される。  
あの女の性格が冷酷を通り過ぎて、時に残忍な  
と迄見えるのも無理はない。其残忍な發作から  
あの遺書をしたのだとしたら、あの私だけに見  
せる積りであつたと云ふ遺書も、若しあの女が  
死んだ後に、私一人生き残つて、歴史にでも捕  
はれ、裁判官の前に曳出されて——私は何時ぞ  
や新聞で讀んだ湯島の女殺しを想出した。  
あの遺書を證據物件として讀上げられたら、  
私は如何成つたことであらう。いかに私でも狂  
ひ死の外はない。あの女は、自分の死後、牢獄の  
中迄張いて来てでも、私の魂を粉砕したけれ  
ば止まぬと云ふのか。成程あの女の仕さうなこ  
とだ。それにしても何と云ふ恐ろしい復讐であ  
らう。  
尤も、こんな事を考へるのは、矢張空想に驅ら  
れて居るのかも知れぬ、自分一人の想像で拵へ  
て居るだけかも知れぬ。あの女の云ふことだつ  
て、只私の前の言譚に、後から捏つて云ふのだ  
と疑はれぬこともない。併しあの女の何れだ  
けが、私が夢に見て居るので、何れだけが實際

なのか。今更あの女の実際は知りたくない、知  
りたくない。  
物足らぬことを云へば、其外にも數々ある。  
それが眼に附くやうに成つた。  
あの女が、内に充實して生きて居る女だけ  
に、外へ對しては何處か幼稚な、世間見ずとで  
も云ふ様な所があるのは可い。それなら何故自  
分一人の中に止まらないで、時々自分以外の物  
についても口を插むのだらう。自分の悲痛を  
切實に感じるのは可いが、こんな悲痛を書いた  
ものは未だ世間になからうなどと云はれるのは  
可厭だつた。藝術家々々々と矢張に藝術家呼  
はりをされるのも、何だか故意とらしい。それ  
に又藝術の尊嚴と云ひ、獨立と云ひ、そんな事  
ならあの女の設法を承はる迄もない、私の方  
が好く知つて居る。兎に角あの女には自分の周  
圍が見えぬ、周圍と自分との鈎合が解つて居ら  
ぬ。それだから世の中へ對してシニカルな態度  
を執るのだ、他人を鑑弄するのだと云つても、  
それが一人で左様極めて居るやうで、側から見  
ると滑稽に成らざるを得ぬ。  
全體自分以外のものが丸で見えないのに、自  
分と云ふものが見えるだらうか。自分を知るの  
は自分の周圍を知つてからのことである。あの

女が自分を非我の地位に置いて、觀察する習慣を持つて居なかつたら、狂したらうの、自分を意味に取扱つて置くことだけは既に許さぬのと、自分と云ふものを知り切つた様に云ふのも、餘程限定された意味に於て聞かなかれば成らぬ。あの女は又、自分は禪の思想なぞ口にする資格はないと云ふ傍から、類に震だとか肉

だとかか生観めいたものを並べる。個人の思想發展の段階が果して四つの時代に分けられるものやら、それが又意思の力による精神鍛錬に依つて到達せられるものやら、そんな事は私には解らぬ。メルテュコフスキイの象徴主義と云ふのも、只雲の救済を骨に肉を膚ける喬伯來の思想に對して、美と快樂とを卑しまぬ希の思想を調和しようとしたまでで、あの女の云ふ様な

つもりぢやなからう。何れにもせよ、私はあの女から主義だとか思想だとか、安價な講義めいたものを聞くことを好まぬ。あの女を動かししたのは、そんな薄ッぺらなものぢやない。

廣津、私は何日かの手紙にあの女の心持を解明して、「貴方に取つては、適例なら自己否定の極限と見做される自殺も、事實上自己否定の極限に達したものである。自我意志の顯現である。貴方は生れたが、自我意志を顯

示すべく運命の手に縛られて居るのだ」と、こんな事を云つて遣つた。自殺を自我意志の發現だとするかしらないかは考へ様だから何方でも可い。只あの女が自殺を唯一の目的だと云ふ時、あの女を縛つて懸崖の上へ連れて行く者は、あの女の持つて生れた黒い運命の手でなければ成らぬ。

見よ、此手紙の中にも一道の氣が湧つて居る。動かし難い決心がある。私を傷ける様なことも敢てしたと云ふ。悪いと知りながらどんでん返したと云ふ。何んな事をしてでも平氣だと云ふ。見かねた様を見て貰へば可いと云ふ。こんな事は死を決した者でなければ出来ない。自分が死ぬ覺悟をしたばかりでなく、相手も殺す氣でなければ——こんな事は出来ない。

一われを理解せよとほ、一緒に死ねと云ふことぢやないか。最後に、一それでも未だ解されて居ると信じて居ると云ふのも、私はあの女の堅い意志に引掛られて、あの女を撫んだ同じ運命の手に捲込まれて行く。其外に道がない。

併し私からはそんな手紙を送る譯には行かぬ。私の意志はあの女に通ずる由もない。その夜、私は洋燈の赤い灯の下に、眼が痛ん

で薄い紙の文字が見えなく成るまで、繰返し繰返し手紙を讀んで居た。

五

次の朝、華岡の上で目が覚めると、私は直に又あの女から一の手紙を思つた。七十日餘りの不快な日と夜とを乗り越して、此朝が直に山の朝についで、様にも思つた。私は二たびあの女の傍へ戻つた。

併しそれ許さず思ひ續けては、足らなさも加はつた。あの女は、前の朝に打明けた、私一人の前に總てを發表したと云ひながら、其實何も云つてやしないではないか。此長い手紙も、畢竟議論が歸つて、具體的には何一つ打明けては居ないぢやないか。斯う自分と自分に云つて見たが、自分ながら進す訳がなかつた。

私は此手紙に對して返事を出したか出さぬか、能く記憶して居らぬ。兎に角、中日新聞の六月十三日の日附で、又次の標な手紙を受取つた。

拜啓、私は到底みづから己を語り得るものではない。只黙して戦へばよいのだと、好く／＼解りました。貴方の洞察方

に信賴する。どうか解してだけは居て下さい。私は何も云ひ得ない。理解ある、赤子の様な、無邪氣な笑はりがしたい。何處か一點相觸れた世界を持つて生きて見たい。

併し今日の様に接近することを得ずして、此土地に居ることは逆も堪へない。過敏な神經は益々激する外ない。益々人嫌ひに成る。無邪氣に成ることが出来な

い。外、國へ行く／＼と申しますもの、何も外ではない。境遇を變へたつて自分

ん。病氣も持病の胃癆瘵で先頃少し悪かつたのですが、最うよいのです。私から伺つても可いのですが、貴方が出て来て下さいれば尚々うれしい。こんな事と云つて、貴方はお腹立に成るかも知れませんが、母は乾度許すと思ひます。未だ訊ねては見ませんけれど、貴方さへ御許し下されば、私は何うでも出来る。

十三日

小島様 御許に

あの女の信

總て打明けたと云ふかと思へば、二度自ら語

はなければ成らぬ。私は承諾の旨を書いて送つた。

その日、折返して返事が来た。

拜誦、御手紙唯今拜見、曝手ぶましき御願ひ御き、入れ下され、誠にありがたく候。私は何日にも在宅、貴方の御都合よろしき日に御出頂きたく、母も其様に申し候。何も其折に申し残し候、かしこ。

私は二たび明後日の朝つねるからと知らせて遣つた。

其前の日の夕ぐれ、私は何物か待たれる様な気がして、部屋にも居たたまらず、寺の門前を迂路々々した。赤く塗つた門の柱に凭れながら、向瀬の鍛冶屋から火柱が街の上へ飛んで来るのを何時迄も／＼眺めて居た。

いよ／＼其日の朝と成つた。

私は隨車を備つて寺の門を出た。空は時れやかに霞んで、街の大通りには人出が多かつた。

ぼつとした色の傘や、薄い一重に着替へた女がぞろ／＼とつゝいた。壁の厚いじめ／＼した部屋の中から出て来たので、私は僅に夏か来たやうに思つた。

白山の裏手から生垣について曲ると、新緑の匂ひが身の周りに迫つた。何日かの夜あの女に

ついで此邊迄来たこともあるので、辻の捨石、垣根の木の葉にも、去年の衣を取出して忘れ香を嗅ぐやうな思ひ出があつた。

最う直きだなどと思ふと、われながら動悸が高まつた。

あの女の苗字を標札に出した衛門の前で腕車を降りた時には、四邊に見て居る人でもある様に、私は迷つて滑門を開けた。それと同時に奥の方で呼鈴が鳴つた。

「あゝ、何日、あの女から聞いた通りだ」と思ひながら、玄關に懸つた。

少時、玄關の前に立つて居ると、十五六の小女が出て来て、手に手をつかへた。それに名刺を渡すと、黙つて叩頭をして引込んだ。入れ代つて、恰度次の間に待つてでも居た様に、あの女が出て来た。あの汽車で別れた女が――

私は眼ばかりせず、女の顔を見詰めた。女も私の顔を見つめた。

やがて其處へ手を突いて、「何卒」と云つた。

先づ、私が女が自分の内に居ながら、尙且袴を穿いて居るのに氣が附いた。何日も穿いて居るのか、それとも今日だけなのか。何だかそんな事にも意味を附けて、故と遣つて居られる

様な氣がして不快だつた。

女は私の帽子を受取つて帽子掛にかけた。それから又、「此方へ」と云つて、初めて、笑つたが、一私の居間にして置きました。四圍の室には誰も居ませんけれども。」

「えゝ、何方でも。」

私は唯それだけ云つた。

女は口に當てた袂を離して、前に立つて廊下を案内した。二つ許り部屋の前を通り抜けて、一番奥の六疊二間があゝの女の居間であつた。前の小女が座蒲團を直して、おづ／＼茶を備めて置いて退いた。

あとは二人に成つた。一人に成つても、最初儀式張つた冷たい挨拶をしたのが邪魔に成つてどうも打解けられぬ様に思はれた。私は只女の顔を見詰めた。油氣のない髪、毛の短く切れたのも、連夜眠らぬやうな眼の色も、邪慳らしい唇も、それから頸筋に近い額の黒子も――矢張あの長い手紙の主に違ひない。

何か云ひたいと思つても、會つたら斯う云はう被嫌云はうと考へて居た事は、總て意圖のない様に思はれた。私はだん／＼俯向いて仕舞つた。「誰も居ませんから、何卒御遠慮なく仰有つて

下さい。」

女は立上つて私の胸へ来た。

私は思はず其手を執つた。そして戀人が戀人を抱く様に、女の始終熱のあるやうな――

「貴方は思つた程着せて居ない。」

「貴方も。」

少時言葉はなかつた。

やがて二人の唇の離れた時、女は相手の顔を見上げるやうにして、「あとで内の母に會つて遣つて下さいませんか。」

「えゝ、何時でもお目にかゝりませう」と、私は居坐ひを直さうとした。

一後で可い、可い。後に此處へ参りますから。私は初めて四邊の静かなのに氣が附いた。それと共に、此靜かな家の何處かで娘のことを案

じながら、今日の成行を待つて居る人のあることを思はずには居られなかつた。父親にも内密で、世間の手前も懼りながら、かうして二人を逢はせて置く。それには我子を信用して居ると云ふこともあらう。が、左様送せずには居られない程、母親は娘を持歸したのだ。それ程迄に女は狂つたのだ。

「ねーと、私は女の肩に手を掛けて廻直らせた。一私は貴方が何んな人だと云ふことは、貴

方から云はれる迄もない、知つて居たつもりだ。またそれではなけりや、いかに私でもあんな事には成らぬ。今でも知つて居る積りでず。併し貴方の口からしては何一つ聞いたことはない、何一つ打明けて貰つたこともない。今度の長い手紙だつて左様だ。あの長い文句の中に、私の聞きたいと思ふことは、肝心の事は何も書いてないぢやないか。」

私は斯う云つて相手の退避を待つた。女には私の云ふ意味が解つたのか解らないのか、只黙つて見返した。

「ね、此上哲學を講ぶことだけは、お互に止めましょう」と、眞正前に相手の顔を見ながら、「私は最う哲學ぢや生きることも死ぬことも出来ない。」

女は頬に點頭いた。

「ぢや、云つて下さい。貴方は如何云ふわけに家に居られないのか、家出をしなけりや成らぬのか、それが聞きたい。あの手紙にあるだけの事ぢや——あれ位の事なら、何も家出をするには及ばない、そんな事をして、両親に心配を掛ける必要はない。」

女は私を見る眼を反らせた。それが恰度、此男は尙且自分を解して呉れない、駄目だ——と

云ふ様にも取れる。又そんな事が——長い間苦しい思ひをして隠し通して来た胸の奥の秘密が、云へと云はれたとて、自分の口から云へるものかと云ふ様にも取れる。私はもどかしく成つた、われを忘れて急ぎ込んで来た。

「如何しても家出をしなけりや成らぬと云ふ譯があるのか、如何しても生きては居られぬと云ふ——譯がある？」

「私だつてと、女は顔を背向けるやうにして、相手の膝に凭れながら、「私だつて、生きられるものなら、如何してでも生きて居たい。」

「それなら何故——如何してと、私は女の顔を覗き込むやうにした。女の顔は破るゝ許りに充血して、兩眼には一杯涙が溜つて居た。

「それが——それが如何しても云はれない。え、云へない？」

女は俯向いたまゝ點頭いた。

私は無然として腕を組んだ。

「ぢや訊かない。強ひて聞かうとはしません」と、真有つて云つた。一では、私が思つて居る通りに思つても可いんですね、私が信じて居る通りに信じて——」

女は二たび點頭いた。

「それでも可い、私は貴方の行く所へ行く。」

斯う云ひながら、私は如何にも自分が憫れに見えた。こんなに迄しなれば、此女に近づくことが出来ぬかと思ふと堪らない。何も聞かずに、此儘隨いて行く。左様するより外に、私の落着く所はない。」

女は私の肘に取組つた。

「来て下さい。私の行く所へ、庇度、庇度。」

私はそつと女の手を執つて懐中の拳銃を握らせた。女は驚くそれを握つたまゝ、畳の上に顔を伏せて居た。

やゝ有つて、一併し、私にとつては死ぬ資格は生きている資格と同じだ。死ぬ必要がなく成つてからでなきや、何うも死にともない。それには——書きかけた「煙」だけは書いて置きたい。其の間待つて呉れるでせうね。」

女は不意に顔を上げた。

「私の方でも、いよく家を出る迄には、矢張り準備も入りますから——」

二人は常もなく顔を見合せて坐つた。

部屋の障子はわざと開放してあつた。斜に内窓を越して、應接間らしい洋館の窓が見渡された。此時、濡い芭蕉の葉の蔭に成つた窓の中に、ちらと女の影が見えた。何でも抱かれた孩兒の足と、抱いた人の紅い腕帯の邊りらしい。

「あれは？」

「姉ですよ」と女は打棄る様に云つた。「あゝ子供なんぞ可厭だ、子供を生むなぞと云ふことは考へて見るだけでも堪らない。」

又机の前に坐つて、「夜暗く、此處に斯うして坐つて居ると、瓦斯の燃える音が大風の様ですよ。」

私は机の真前に突出した燐色の瓦斯の花笠に気が附いた。それから段々本立に眼を移して、其中にニイツエの『ツアラトストラ』の英譯があるのを見附けて、「あんなのを讀むのか」と訊いて見た。

「えゝ、他人から讀んで見よと勧められたので、一寸。」

「で、解つたのか。」

「矢張り解らない所が多い。解つても若殿など讀んで居る方が何の位面白いか知れない。」

「左様と、私は學つて仕舞つた。少時左様して居たが、

「では、最うお母様にお目にかゝりたいから——と云つた。

「えゝ」と、女は立上つた。

れない。只差障りのないやうな事をぼつり／＼話して行く。いよ／＼其方へ話の糸口が向いても、「私もどもには一向解りませんので」と、話を避けた。

それぢや、私にはそれよりも好く解つて居るのだらうか。自分ながら覺えない。

母親の去つた後で、「あゝして始終側に隨いて居られるのですから、それだけでも私には堪へられない」と、女が云つた。

午後の三時近く、私に其家を辭した。門を出ると共に、急に物足らぬやうな、取返しの附かぬやうな心持がした。折角あの女に逢つて、あれだけ話もして居ながら、何れだけ打解けたと云ふでもない。互に心はちぐはぐの儘思ひ／＼のことを言合つて別れたやうでもある。あの女もあんな話をすると、わざ／＼私を嘲んだ譯でもなからう。私は——私は只下手な役者のやうな身振をして居た。そして、あんな約束だけして仕舞つた。米だしあ約束があるから、あの女と自分を繋いで居るとは思ふ。左様は思ふものの、あんな約束が何の役に立たう。

私は易々と一大事の約束をした——如何にも安々と。私は一日中身振をして居たとも云はれる、身振をして他人の魂を玩具にしたとも云

はれる。それで居ながら、あんな一日経たしのことを云つた。死に行く者に、何處に書きかけたものを書上げて行く必要があらう。あゝ、私程當に成らぬ卑しい人間はない。

私は寺へ歸るや否や自分の部屋へ歸込んで、其儘壁の上に倒れた。倒れたまゝ、暫く是上らなかつた。

併し、私は私としても、あの女は何の爲にあんな約束をしたのだらう。一旦違つて見て失敗つた、其同じ相手を相手として、何の爲にあの女が輕々しくあんな約束をしたものであらう。それも二人の心持がしつくり合つたと云ふのなら可い、それなら聞えた話だが——いや、あの女は只道具として私を使ふのだらう。あの女はあの女一人の道を行く。其道伴侶として、私を連れて行く氣だらう。

あの女は心の中で何んな事を思つて居たか知らぬ。只、あの女の思ひ入つた顔色を見ると、私は萬事を抛つ、萬事を抛つてあの女に隨いて行く。私は自分で自分を當にすることが出来ぬ。只、あの女を信ずるが故に、自分自身をも信ずることが出来る。

此言葉を想出した時、私は急に教はれたやうに思つた。縦令途中で私が折られたとて、あ

の女は行く所迄私を連れて行かすには止むま  
い。

私は直に筆を執つて長い手紙を書いた。今日  
あの女に對して居た時の不真面目な態度も、自  
分で責めて自分で白状した。其最後一持つて行  
つて、

「私は悪魔かも知れぬ、併し悪魔はそれが給に  
書かれた程悪いものではない」と、沙翁の光顧者  
マアロウの一句を附加へた。

其手紙を入れた外へ出ようとしたが、何時の  
間にやら夜も更けたと見えて、庫裡は寢静まつ  
て居た。玄關脇の移戸をがたがたしきせながら、  
やつと庭へ降りた。小走りに街の角迄行つて、  
郵便面へ抛り込んだが、急に又それを取返した  
い様な心持もした。

私は人通りの絶えた坂道を一人とぼくと戻  
つて来た。

こんな手紙を遣つたとて、如何成るものかと  
云ふ氣が頻に仕出した。こんな手紙を遣つて、  
今更測塗しようとしても——私は女の前に自分  
を測塗しようとして居る。幾許自分を責めて、  
寸毫も假借しないやうな風を裝つて見ても、矢  
張女の顔を測塗しようとする下心がある。そ  
んな事をした所で何に成らう。あの女に今日

の私の態度が解らぬ筈はない。私の心の中は  
見透されて居たに違ひない。

併し——と、又考へ直しても見た。それ程迄  
にして、私があの女に隨いて行く、あの女に離  
れまいとする心持は、あの女も察して呉れた  
からうか。成程、私は第三者かも知れぬ。あの  
女はあの女、自身のために死ぬので、私の爲に  
死んで呉れるのではない。それを知りながら、

私は尙且あの女から離れられぬ、あの女を思ひ  
切ることが出来ぬ——私は是迄他人が自分の爲  
に死ぬものだと思つて居た。自分が他人の爲に  
死なうとは思ひも寄らなかつた。何んなローマ  
ンスに於ても自分が主人公に成れると思つた。

主人公として生れて来たと思つた。併し今度は  
如何考へて見ても自分が主人公ぢやない、シテ  
ぢやない、ワキダ、ツレに過ぎない。そして、  
これが二つない自分の一生のをはりなのか、か  
うして終る宿世であつたのか。

門のくゞりを押して這入ると、石疊が一條ほ  
の白くつゞいて、正面には本堂の大屋根が眞黒  
に輝いて見えた。私は何ものにか脊がされた様  
にぞつとした。

こそ、と移戸を開けて、庫裡から本堂を脱  
けようとした。須彌壇の前には、宵の勤行に上

げた御燈明が一つ消え残つて、四邊に微かな光  
を投げた。しつとりと帷帳が垂れて、金色の蓮  
華の塵埃に埋れて黒ずんだのが目に附く。

第三者だと云つた、その同じ人が私のことを  
牡丹燈籠の中の男の體だとも云つたさうな。

「牡丹燈籠は讀んだことがないから何んな男が  
知らぬ。只女に取殺されると云ふ意味かも知れ  
ない。あの女に取殺されると云ふのなら——  
私はそれだけで満足する、満足しなければ成ら  
ぬ。

やがて私は毎夜の様に一人で蒲團を敷いた。  
蒲團に大屋の響つた洋燈を吹消して、ごろりと  
其上に横に成つた。そしてまじ／＼としながら  
長い一夜を明かした。

明くる日からは、只前に出した手紙の返事の  
み待たれた。それが二日経つても三日経つても  
来ない。私は日に／＼不安な心持に裏はれて  
来た。終ひには、彼の一日で萬事が去つた様に  
も思つた。

やつと九日目に一封の手紙を受取つた。其消  
印が相州ヶヶ崎とある。私は胸を蕩かせなが  
ら封を切つた。

拜啓、過日は押して御出で下され、誠に

誠まことに有難ありがたく、御ご面會めんかい後は混沌こんとんの中なかに住すんで、私わたしより手紙てがみを差さ上げる處ところではなかつた。御許ごきょし下くださいませ。翌日あしたの御手紙ごてがみは拜見はいけんしました。最もう恐おそろしくして仕方しかたがなかつた。容易やさしに誓ちかつて下くださる程ほど、容易やさしに私わたしに従したがつて下くださる程ほど怖こわろしくて成ならない。讀よみ了しまつた後は恐怖おそこわ心こころより外ほかにない。それに續ついて取留とどめもない猜疑さいぎ心こころにも苦くるしんだ。それで今迄筆ふでを執とつことは止とめて居ゐたのです。

かうして居ゐると、暗くらい方かたへくと段々だんだん入いつて行いくやうだ。手てを執とつて居ゐる人ひとを見みると黒くろい。籲うつて自分じぶんを見みれば、なに自分じぶんが黒くろいのだ。惡魔あくまは繪ゑに畫かかれた程ほど、黒くろくはないとも思おもへない。もつとくく黒くろいやうだ。億途いふとも黒くろいが可よい。世よに處女じよ程ほどの惡魔あくまがどこにあるか。それだから處女じよ程ほどの縛ばりを重おもんずるのです。聖せいなるもの程ほど或意味あるいに於おて最もも恐おそるべく惡わるなるものはなないぢや有りありませんか。恐おそれの極度ごくどに恐おそれはない。平氣へいきなものである。大膽だいだんなものである。沈著ちんじやくなものである。只懸ただかへて御目ごめに成なつて仕舞しまつた。最もう信しんじて、其そのう信しんじて、其その方かたを信しんじて、自分じぶんを

重おもんずる丈ただ貴方あなたを重おもんずる。自分じぶんを犯とがさざる如ごとく貴方あなたをも犯とがさない。自分じぶんを可愛めづがるだけ貴方あなたを可愛めづがる。自分じぶんを憎にくむだけ貴方あなたを憎にくむ。優待ゆうたいもする、虐待ごうたいもする。何年途なんねんとはないでも、消息そくしが絶たえても、自分じぶんを信しんじて居ゐる方かたのある間まは同様どうように貴方あなたを信しんじて居ゐる。誓ちかつた事は忘わすれない。あの誓ちかひのある間まは、終しまりの日ひの希望きぼうを持つて、今日けふの日に生なきて居ゐる。私は貴方あなたの前に私わたしの内に隠かくれて居ゐるものの總くわてをだす。狂くるぜずしては居ゐまい。私わたしの此方こゝでももつて貴方あなたをも狂くるはせて仕舞しまふ。貴方あなたは氣違きちがひひに成ならなければ眞面目まじめな人間にんげんには成なれない、私わたしと同じものには成なれつこがない。そして二人ふたり一緒に狂死くるしをしようといふのです。情死じやうしぢやない。狂死くるしだ。狂死くるしです。二人ふたりの男をとこと女をんなが或ものもの爲ためにだまされて居ゐるやうな情死じやうしなぞ、いやだく。知らずにだまされて居ゐるのならそれで可よいけれど、知しつてだまされて居ゐる譯わけには行いかない。そんな難むづかしいことは出来できない。私は狂死くるしでいゝ、長ながく生いきられようとも思おもはないけれど、生いきられる迄まで生いきて見る。狂死くるしが免まぬれぬ

必然じつぜんの運命えんめいなら最もう恐おそれない。今迄いままでこれを恐おそれて居ゐたから、火ひを棄すてて水みづにつくと云いつた。最もう恐おそれない。火ひにつく、火ひの中なかへ行いく。

私わたしがなにも貴方あなたを道具たうぎにしようなどと、そんな問題もんだいではない、そんなお安いことではない。道具たうぎに使つかふのならば、何なにも貴方あなたを憐あはれずとも外ほかに作つくらうと思おもへば人のないこともない。あれまで自分じぶんを打明うちあけた人ひと、自分じぶんを解とけて下くださつたと思おもふ人ひと、其その人ひとを自分じぶん以外の路傍ろぼうの人ひととは如何いかしても思おもへない。離はなれることは逆さかり出来できなく成なつた。生いきるにも死しぬるにも關係かんがなしには逆さかり出来できなく成なつた。けれども如何いかしたつて同じものには成なれないぢやないの、如何いかしたつて成なれないぢやないの。私わたしは貴方あなたと同じものには如何いかしたつて成なれない。だから貴方あなたは私わたしと一緒に死しぬるか、私わたしだけでも殺ころして下くださるべ成ならぬ。私わたしを殺ころして下くださることが出来できないなら、最もう仕方しかたがない、貴方あなたが私わたしと同じ様ようなものに成なつて下くださる外ほかはない。それには狂くるして下くださいと願ねがふのです。貴方あなたの意志いしを殺ころさなければ駄目だめだ。だから私わたしの行いく

所へ来て、私と一緒には狂死して下さいと願つたのです。それより外私には何が無い、御承知下さつたのですね、贈り物、信じて可いのですね。若しそんな事は出来な、お前と同じ様なものなぞ、交れるものかと仰有るなら、今の間に贈つていただきます。さすれば家に他にかへがある。

それでは父の許しを得て、いよ／＼出発の日が定まる迄に御無沙汰いたします。

今度家出するについては全然前親が安心する程にしたいと思ひますから、貴方からの御手紙もしばらく止めて頂くたい。

併し此手紙が御手に着いたか何うか氣に成りますから、此返事だけは、女子大學内水野千子の名にして、只安否を問

ねる態なるものを下さい。此手紙も家の中で書く自由がないので濱へ出て書いたのですから御察し下さいませ。一昨日から

書きたい／＼と思つて居たのですが、雨が降つて外へ出ることが出来なかつたため後れたのです。出發間際には最一度

お目にかゝりたい、逢つて下さいますか。今度は少し遠大な考へで計畫を立てたの

ですから、貴方も其氣に成つて下さい。私は非常に性急で、時を立つても坐ても居られない様になるけれども、又それだけ一方では人一倍辛抱強い所もある。これは一方に、他人よりも弱味が有るから自然かう成つたものらしい。いづれ委しいことは御目にかゝつた上——其日迄貴方は私のことを忘れて居て下さい、そして御心の癒を御作の方へ使つて下さい。では暫く御無沙汰いたします。此地には七月下旬迄滞在。一度米國へ行くより外に任方がない、それでなければ兩親の心が安んない。御機嫌よう。

六月二十四日 あの花の名拜

小島様 御許に  
追伸、郵便局に親戚のものが居ますから表には法名を用ひました。

上書に蕙蕪とあつた、あれが老圃から許されたとか云ふ法號なのか。私は一寸不快に思つた。

尤も、此手紙の初めに、やれ處女が悪魔だとか、聖なるもの即ち悪なるものだとか、恐れのか、聖なるもの即ち悪なるものだとか、恐れの極度に恐れはないとか、すべて反對と反對と、

極端と極端とを結び合せたやうな、パラドックスめいた文句が数珠繋ぎに並べてあつたのを見ても、あゝ云ふのが貴家の御用手段とは固より知る筈でない。只、私、最うあゝいふハラドックスを聞くのが煩く成つた。自分でもパラドックスに成れた。此期に及んで理窟は云ひたれない。死ぬにしても理窟で死にたくない。少し許りの慰問さへしなかつたなら死ぬにも及ばぬやうな死方はほしくない。

あの女は何故いつまでも理窟を云つて居るのだらう。あの女を刺すものに理窟ぢやない、暗い事實である、怖ろしい運命である——それとも私の想像して居ることは單に私の想像に止まるのではないか、私は只自分の感情を誇大して居るに過ぎぬのではないか。若し左様だとしたら——そんな事は云ふにも忍びない。

私は、水に溺れて、助けを呼ばうにも聲が出ないやうな心持がした、手應へない水を引掻きながら沈み上らうと焦心つて居る様な心持がした。

併しあの女が私の前に内に隠れて居るもの總てを出さうと云ふのは、矢張り事實を指したのではないか——他人より弱味を持つて居ると云ふのも、氣違ひに成らなければ自分と

同じものには成れないと云ふのも。それなればこそ、狂ひ死にに死ぬのだ、私も共に狂はせずに、はげしくと云ふのだ。私は赤道直下に近い加州の労働者の中に入りながら、二人の男女が裸體の儘狂ひ廻るさまを想像して見た、狂ひに狂つた擧句一人づつ作れて行くさまを——何れにもせよ、あの女はあの女の云ふ通り長う生きられる身ぢやない。

それにしても、私にだけは何故有の儘打明けて呉れぬのだらう。私は最もあの女の眞實を知らなければ、如何することも出来ない。あの日、あの別れたのが、今に成つては残念で成らぬ。兎に角最一度逢ひたい。逢つて自分の思ふ通りを明かさまに云つて見たい、そしてあの女の顔、所が見たい。

左様した上で、若し私の思つた通りなら、最早兩親の前にも強ひて隠して居るにも及ばない。兩親といへども、それを聞いたなら、手を束ねて、あの女の自決を傍觀する外はなからう。あの女の遺大體も、いふべき努力に免じて、切めてはあの女の心を儘に墓所を選ばしむる外はないからう。

あの女にしても、兩親の納得の上で、人目にまゝに他所の國へ死に行くに成れば、

心を置くこともあるまい。私も許されて其最期を見届けに行く。二人はかくして日本といふ國から消えるのだ。

私はこんな事迄想ひ遣つた。直に筆を執つて逆事を認めた。最初は極簡單に済ます積りであつたが、段々長く成つた。で、又それを破つて、今度はペン尖で蚊の様な小文字を綴つた。

折返して其返事が来た。

拜啓、御手紙は只今落手、直に拜見しました。私に逆もかうして居られぬ所を、昨日今日と何うにか胡魔化して、かうして居るのでは有りませんか。何卒來て下さい。すつかり御話して御相談がしたい。私は手紙では如何しても書けぬ、

書く時は何とか苦しまぎれの迷言葉に成つて仕舞ふ。來て下さい。此手紙は明日おそく御手許へ參ることでせうから、明後日の朝八時三十分名古屋行の列車で御出下さらば、十時半には此處へ着、晴天ならば散歩にかこつけて、私停車場迄お迎へに參り居り候。雨天ならば散歩にも一人行くことを許されませんかから何

辛茅ヶ崎館——この貸別荘から三町餘のところ——へ御投宿下されたく、私は十一時頃其方へ參り居り候。何と其折にと申候候。

二七日十一時半 あの女の名 拜

小島様 御許に

私は一議もなく明二十九日の朝、指定の汽車で立つことに極めた。それには旅費にも差剛へたので、いろ／＼思案の末、古い洋服を一二着抱へて街へ出た。

ヤガて若干の金を懐に入れて、夕飯時に寺へ戻つた。見ると、机の上は前と同じ型の封筒に入れて、同じ手で書いた手紙が載せてあつた。私は封を切る間も手が震へた。

先日來時は非常に心配して、少しも眼を離さず、私は考へることすら自由を得ず候。過日の御手紙と同時に水野よりも手紙參りしたため、母の疑ひを引き、同じ所より二通の手紙來るいはれなし、是非に見せよとのことに、止むなく見せ申候。最早母の前に公然と出來るだけのことを致すより外なく、兎も角も御出していたゞ

き御話いたすこと、今の所許とれさうにもなく、又言附された事にもあらず、ほとほと困り果す候。あの御手紙に對して申上げたことも、又お水、はりたきことも數々有之候へども、今こ考へることも書くことも思ふに任せず、まゝしばらく御待ち直きた候。今と成りては、お返しも好い方へは出でず、兎も角貴方に御任せ、いたし置さ候。御少しく御思を得ば、私より何とか謝上すべく候。勿々、

二六六  
小島様 成許に  
あゝ女の名

ば、尙更自分で増を別けなければ成らぬ。どうせ雨和つ前に打明けるものだとすれば、却てそれが好都合だとも思はれた。私に急に身支度をして立上つた。白洋袴の裾を裏返して、襷袢をひくする雨の中に、雨傘の柄をみたげながら、電車停留場まで急いだ。新橋へ着いた時は、九時に近く、八時三十分後といふには間に合はなかつた。止むを得ず待合所の片間に腰を下して見たが、心が苛々して、手も震つて替られさうにもなかつた。火を焚かぬ暖爐は降更つつそりとして、其上の壁に掛けた鏡の中に、時々浴衣を着て雨傘を持つた男の姿が映るのも一しほうそ寒い。

やつと汽車が出た。芝浦寄りからおひひ、雨も晴れて、品川を出外れると、雨傘の水を分んだ草や木が目に立つた。あの日以来、汽車に乗つて市外へ出るのは今日が初めてだと思はれた。此處この汽車に乗つてさへ居れば、自分の生れた國へ行くのだとも思はれた。久しく忘れて居た自分の故郷へ――茅ヶ崎の停車場で汽車を降りた時には、何といふわけもなく心が谷められる様だと思つた。

停車場を出て、前に建ち並んだ低い町家を見ると、われにもなく、初めての土地へ来たなと

いふやうな、一種の不安が湧く。十町餘り電車に揺られて、丘と畑と松林の中を行くつと、やがて海岸に近い平家達の旅館の門へ着いた。泊客の少ない頃と見えて、私は直に海を見晴した奥の部屋へ案内された。座に着くと、茶を啜る間もなく、女中に吩咐附て視察を持って來させた。

一 此近所に木村別荘と云ふのがあるのかいと訊いて見た。

一 へえ、御座います。家から料理を入れて居るのやでして、何でもお蔵を召したお方と若い娘はんとお女中二人切りで泊つておいでやさうな。」

一 ふむ、其處へ手紙を持つて行つて貰ひたいのだが、

一 え、御有りみせん、奥の番の平どんを遣りますでな。一寸呼んで來まほうか。」

一 あゝ、左様して貰ひたいぬ。

私に其後で彼方の母親へ宛てて手紙を書かうとした。汽車の中でも文音を考へて來たが、差當つては只胸が躍つて、字體も文章も成さなかつた。

やつと書き終つて、それを平どんと云ふ爺に持たせて遣つたが、其結果が案じられて、使が

歸つて来る迄は立つても坐つても居られないやうな氣がした。母親が其手紙を受取つた時の驚きも、それから氣を喚び附けて氣附するさまも、まご／＼と眼に見えた。

間もなく奥呂番の爺が戻つて来て、「お手紙は誰に受取りました。後から直に其方へ参りますからと、斯う云ふ御返事で御座いました」と傳へた。

「で、何かい、何んな人が挨拶に出て来たのか。」

「ええと、何でも五十恰好の品の好え奥様様でしたよ。」

「あゝ奇様か、何うも御書勞さまと、其儘爺を歸らせた。」

「いよ、此處へ母親に來て貰ふとして、借何と言出したものであらう。私に只わく／＼とした。何だか目も眩くやうな大事件に成りさうな氣もして、どうも自分の手には負へさうもな

不圖、難室(なんしつ)に二人の泊客があるやうな氣合

したので、急に宿の女中を喚んだ。

「一寸内談があるのだからね、私の許へ御客があつたら、何處か別の間いてる室へ通して貰ひたい。」

斯う云ひながら、私は何となく氣が差した。女中は異まつて退いた。

其後は只何とかがして心を静めようと努めた。やがて又其女中が来て、「お出に成りました」と告げた。

私は直に別室に行つて面會した。母親と云ふ人は、毎例の通り容子のしとやかな、體かな物の言振ではあるが、何處か他人に許さぬと云ふ氣が見えた。そこへ氣が附くと、私は俄にし

どろもどろに成つた。

「兎に角あつちが彼様様にして、親を落しても運米利加なぞへ行かうとなさるについては、矢張り御南親にも云はれぬやうな譯があるかと思は

れます。私は其譯を……」

私は其譯を知つて居ると云ひたかつた。併し私に本當に其譯を知つて居ようか。母親よりもあの女に接近して、あの女の眞實を知つて居ようか。いよ、何を云つて居るのやら自分でも分らな、成つた。

「で、如何しても亞米利加三界迄行かねば成らぬものなら、あの方も最う其譯を説して被せしやる場ではない。私が聞いて居ることは私の口から申しても可いが、其前に最一度あの方に逢つて確と心持を聞ねて見たい」と、そ

れでも言葉は前後しながら、一口につゞけて云つた。

私の言葉が相手の人には如何取られたか、それは分らぬ。兎に角、恩案の末、最一度二人を逢はせると云ふことだけ許された。私は明日の朝彼方の別室へ誘ねて行く約束をして、去關迄送つて出た。

「とたび室へ引回しては見たが、直ぐ其足で、上草履の儘裏門を抜けて、海苔の乾場の裏間から

渚へ出た。渚には砂山がづいた。私は雨に濡れた砂山の上に立つた儘、水と雲との境を眺めた。渚には白帆一つ見えぬ。私は破船をして大浪に比喩へ打上げられたやうな、手頼ない心持がした。何を思つても居ない、何を考へても居ない、只一つ——今自分のはあの女に接近して居る、あの女の身邊に近く來て居ると云ふ意識が、五月雨の空に光る一つ星の様に擬乎と私を見詰めて居るやうな氣がした。

宿へ戻ると、直に夕飯の膳を運んで來た。それと共にばた／＼と雨戸を繰り始めた。室の中が急に蒸暑く成つた。

私は寝苦しい一夜を明かした。

「明方近くと／＼としたやうな心持がして、急に眼を覺ました。頸筋から脇腹へかけてねち

やねちやと悪汗を掻いて、枕元の蚊帳がしつとりと垂れたのも、何となく忌々しい。私思はず、圍の上へ起直つた。

不意に懸子を開けて、女中が看明を下げて行かうとした。

「おい」と呼び留めて、「雨戸を開けて呉れないか。」

「へえ只今と云つたまま、女中は縁側を蓋けて行つた。

やがて彼方の端から雨戸を繰る音が聞えた。さつと一枚此室の前戸を引いた時、日は案外高かつた。

あゝ、暑ヶ嶺の夜が明けた。あの女に近く寢て居たのだ。

私は直に立上つて合敷をしに降りた。それから九時迄、時計の針の進むのがもどかしかつた。遅く九時に行くとも約束はしなかつたが、餘り早くから出掛けるのも気が置かれた。

やがて風呂番の爺を案内に連れて宿を出た。門を出てから一町餘り、田圃道の三叉に分れる所迄来ると、「此道左へ取ると直でがすよ」と、前に立つた爺が云つた。「あれ、彼處へ来るのが其お嬢さんでねえか。あの別荘に泊つて居るお嬢さんがすよ。」

私ははつと思つて前方を見た。片方が松林の丘で、片方はちよろ／＼と蘆の生えた浅い池に成つてゐる小徑を、俯向き駈ちに此方へ違つて来るのは爺に其人らしい。何時になく符を着けて居らぬので、最初は自分の眼を疑つたが、向うでも此方の二人が眼についたと見えて、急に佇立つた。

「あゝ左様だ。おや、景う可いから歸つてお呉れ。」

斯う云つて、私は爺を歸らせた。それを見ると、女はくるりと向直つて引返した。私も其跡に跟いて足早に驅け出したが、女は林の中途から枝折戸を開けて、一寸折返つて見たまゝ、ずん／＼丘の上へ上つて行つた。

そして私の眼にはきちんとお太鼓に結んだ紺の帯の空色だけが眸に彫りつけられた様に残つた。私は少時枝折戸の前に立つて居たが、誰も出て来る様子がないので、思切つて其中へ這入つた。そして壊れ掛けた坂道をだん／＼上つて行つた。それを發り詰めると、一面に砂利を敷いた庭に成つて、併別荘の縁側が一目に見えた。

母子の人達は縁側迄出て迎へられた。一通り時儀の挨拶が済むと、

「餘りいらつしやらないから、私お池ひに上らうと思つたんですわ」と、女はちらと袖を出して笑つた。そして母の顔を見送つた。

「え、と云つたまゝ、私は手持無沙汰に控へた。」

母の顔色はさうも悪れなかつた。それでも努めて四方山の話をせられた。暑ヶ嶺と云ふ所は松原と砂山ばかりで、これと云ふ取柄もない、只海岸の空氣が好いとかで、太抵は病人の來る所だと云ふやうな話も出た。

「で、其後御持病の方は」と、私は間の悪いたづね方をした。

「有難う御座います、此方へ参りましてからは、毎日鬱陶しいお天氣が續きました、矢張りどうも」と、如何にも大儀さうに見えた。

私、しみ／＼、氣の毒に成つた。「何分不自由な土地で御座いまして、それに連れて参つた女中も、先達て宅の都合で歸しましたから、尙更行届かぬ勝ちで」と云ひながら、茶盆を持つて次の間へ立たれた。

そして、其儘少時出て来られなかつた。何と言出し様もないので、私はたゞ座敷の中を見廻した。夏場三四ヶ月の間、家族同伴の遊樂の客を當てて建てた安普請のこととて、奥行もな

ければ、何一つ裝飾らしいものもない。只唯の柱に女袴の集計を鎖のまゝ釣して、其下に四五冊の書物の積らばつたのが目につく。

私に二たむら面に女の顔を見た。女の顔は、今笑つた人とは思はれぬ程底暗く、しかも傲慢に見えた。其眼の色が人を脅かすやうな。

「大變顔色が悪い」と、良あつて私が云つた。  
「左様、兩手で頬を抑へるやうにしたが、一昨夜些とも眠らなかつたものだから。」

「私に思はず来つ間を見違つた。明け散した家の間から、長火鉢の前で何か捜し物でもして居るらしい母の姿をちらと見えた。」

「たつて、阿母様、身に成つたら……」  
「ですから、此處へ来て静乎と母の介抱をして居るんです」と、女は筆を小さくして押寄せる様に云つた。「併しそれも偽善です。私は最う等差でなしに母の介抱さへ出来なかつた。細く私に、氣を添へて呉れる人の苦痛を此上長びかすのは堪へられない。貴方も左様思つて下さいませうでせう。」

「一そんな事を、貴方は云つたが、私は次ぐべき言葉もなかつた。やゝ有つて又言葉を續いだ。」

「では、貴方は如何しても亞米利加へ行く人なんでしょうね——今度の様な事がなくとも——」

「私は最う堪へられない。斯うして静乎と話をして居るのも辛い。」

「斯う云ふ女の聲は暖れて居た。」  
「私は最う聲も出なく成つた——此處へ来てからは、夜も殆ど眠つたことがない。如何しても眠れなく成つた。物を喰べることも厭に成つた。膳に向つて食物を見るのも堪へられない。」

「貴方は、え、それで如何する積りだ。」  
「如何も成らぬ。如何かして下さい。」

「女の手は鐵の熊手の様に蒼と洋袴の襟を握んだ。」  
「次の間の母親は外へでも出たのか、其邊に見えなかつた。」

「私は靜に其手を執つて側へ移した。」  
「今度来たのはと言出したが、其聲は自分ながら變つて居た。今度此處へ来たのは、先達で逢つた時に言殘したことを言ひに来たのです。」

「女はすつくと顔を上げた。満みを持った其眼は感光りがして、薔あ毛の根元まで充血した顔の色が、恰度燭臺の上に燃える蠟燭の火の様に

思はれた——今にも燃え盡きて仕舞ひさうな。私に思はざるを反した。」

「あの時は、如何しても口へ出なかつたが、今日は思切つて云つて居る。それを讀みずには、何うも辛抱が出来さうにもない。」

「何卒何有つて下さい、何でも構ひませんから——私も一思ひに云つて下さつた方が可い。」

「何んな事でも。」  
「私はそれ限り黙つて仕舞つた。」

「女も静乎と見送して居たが、其儘以禮をすらしめて、相手、兩脚の間に頬を埋めた。それが如何にも狂人、發狂な心から、男を誘惑して、同じ道に引摺込まねば置かぬ、一緒に狂ひ死にさせねば置かぬと云ふ様に見えた。」

「私は上からそれを見下したまゝ、只一つこれが聞きたい、これを聞かぬ間は——と云ひかけて、又口を禁んだ。」

「女は目の當り落ちて来る打撃を待つやうに、静乎として動かなかつた。」

「貴方の口からこれを聞きたいと思つたのは、何も昨日今日のことぢやない。貴方と云ふ人を知つた初めから——貴方は最初から自分でアブノーマルな女だとは云つて居た、女ぢやないと云つた。併し其精神生活の異常といふのは

兩親にも友達にも云へぬやうな性質のものか。如何しても家族とも朋友とも離れて行かねば成らぬやうな——」

女は葬と私の胸を掴んだ。

「そして私一人にそれを明かして呉れたのか——いや、最少し判然云つて下さい。貴方は自分でマニヤックだと云ふのか、あのエロトマニヤックだと、ね色情狂だと云ふのか。」

何とも名状の出来ぬ、押殺したやうな聲が聞えた。それと共に、夏の薄い洋袴を通して、ぼたぼたと煮えるやうな涙の蔭に滲むを覺えた。

私は斧を振上げて人殺しをした様な心持がした。これから如何成るか云ふ考へもない。只癡癡の様に波打つ女の胴體を眺めて居た。

「私はこれが云ひたかつたのだ」と、良久して口を開いた。「それぢや、貴方はそんな事を何時から知つた。何時から自分でそんな徴候が分つたのです。」

「小さい時から、まだほんの子供の時分から——其時分から違つて居た。」

「そんな時分から今日迄——誰にも云はずに隠し通して来たのですね。」

女は黙つて點頭した。  
私は目の當り受苦しつゝある魂の崇巖を見

るやうに思つた。あゝ女に勞れたのだ、自己のマニヤと闘ふのに勞れたのだ。

不圖、茶の間の方で人の氣合がした。二人はつと離れた。

「母が歸つたのです」と、女は涙に膨れた顔に寂しい笑ひを泛べて云つた。

そして、急に立上つて、私の側へ来た。其處なら、次の間からは合の襖に隠れて見えない。

私は頬に鬢の毛の觸れるのを覺えた。  
五月雨の空は底照りがして、空氣は息の塞る程蒸暑い。

折柄、宿の若者らしい半纏を着た男が、黒塗の箱を下げて坂を登つて来た。それが勝手口の方へ廻ると、間もなく、母親は自分で膝を座敷へ運ばれた。女も立つてそれを各自の前に直した。

「何も御座いませんが、私共も一緒に御招待いたしますから。」

斯う言つて、母親は座に着いたが、「何うも此處はひどい所で御座いまして、海邊と申しまして、お肴が不自由で」と寂しい笑ひ方をした。

「大分鯨が好く漁れる様で御座いますね」と、私も箸を執りながら云つた。

「はあ、最う毎日々々鯨ばかりで。」

「道理で、昨宵も鯨を食べさせられましたか。」  
「左様でせう。」

三人は顔を見合せて笑つた。  
併し其笑ひは直に後から消えた。大風の吹いた跡の様に、如何しても座が白けて見えた。

食事が済んだ後も、言葉の纏袖がなさに、斯んなことを云つた。

「何時か彼の宿には、國木田獨歩が死んだ後で、大勢自然派の文士が集つたと云ふぢや有りませんか。」

「如何ですか」と云つたが、女は何か想ひ出した様に、「貴方、伊野さんと云ふ方御存じぢやないか？」

「伊野とは？」  
「あの、半野主義とやらの」と云つて、母親の方を振り向つた。

「いえ、知りません。貴方こそ能く御存じですね。」

「え、あの人が此家へ来ましたから」と、少時黙つて居たが、一好く一人で何でも仰有る方ね。大變酔つていらして、此縁側へ懸掛けたまゝ長い間しやべつてお歸りなさいましたよ。」

私は此女から斯んな話を聞くのが不快だった。

「で、向うぢや貴女方だと云ふことを知つて居たのですか。」

「いえ、そんな事は有りませぬまい。」  
母親も側で聞いて居たが、此時そつと座を立たれた。

私は急に向直つた。

「ね、私は今二人の間でした話を阿母様に云ふかも知れないから、貴方も左様思つて居て下さい。」

女の顔の筋は見る／＼堅く成つた。

「兎に角、最一度宿で阿母様にお目に掛つた上、私は直に東京へ歸らうと思ひますから。」

女は俯向いたまゝ、黙頭いた。

「それが皆く行けば、何の故障もなく亞米利加へ行くことが出来る様な話になるかも知れない。併し——」

私は相手の手を握つた。

「最うこれで何日逢はれるやら分らぬ。縱令如何處つても、貴方は貴方の計畫通りにどん／＼遣つて下さい。私も自分の書きかけた物だけは書く。そして貴方の行く所へ行く準備をするかしら。」

女も驚く程に叫び出した。

私は何時迄も立ちとまらないやうな、又急ぎ立

てられる心持で、別荘を離した。

いよ／＼別れを告げて、女に背を向けた時、急に世の中が暗く成つた様に思つた。宿へ歸つてからも、只掴まへ所のないやうな氣持がづづいた。

一時間許り待つたが、如何したのか母親の姿が見えぬ。私は又それが氣に成つた。終ひには立つても坐しても居られない様な氣がして、上草履の儘庭へ下りた。

海の水は油の様に黒く、雲の切れ目から射す日光に、折々海面が照つたり陰つたりする。

見ると、渚に人ばかりがしてゐる。遠目だから能くは分らぬが、七八人の漁師らしいのが寄つてたかつて叫々騒いで居るらしい。砂山の背後から走つて来る子供もあつた。私は、不圖、水死人だなど云ふ様な氣がした。で、何氣なく裏木戸を開けて、段々其方へ近づいた。近づいて見ると、漁師が網を乾して居るのだと分つた。私が側を通つても、振向きもせず、こつ／＼と網を乾して居る。

私は其處から外れて、砂の上へ引上げた小舟の舷に腰を掛けた。海の向うの國が思はれる。外に國がないか何ぞの様に、何故選りに選つて

亞米利加へは行くのだらう。あの女が一時奇矯する筈だといふ、柔港とやらの傳宗の奇談所と云ふのも、何となく殺風景に聞える。併し、私は只あの女の亡骸を送つて行くのだ、生きた亡骸を送つて行く——それと聞いたら、兩親も其亡骸だけなりとも私に呉れなからうか。

不圖、私の名を呼ばれたやうな氣がして振り返つた。宿の女中が縁側に立つて手を振つて居るのが見える。私は直に立上つた。

空へ歸ると、彼方の母親が待つて居られた。私は其前に坐つて一大事を言出さうとした、思ひ切つて云はうとした。併し如何しても口へ出ない。現在生みの親を前に置いて、そんな事が云へるものかとも思つた。が、それよりも私には、現實の光の下に、そんな傳奇小説めいた事を言出すのがどうも堪へられなかつた。縱令言出しても物笑ひに過ぎない様にも思はれた。で、たうとう何も言出さずに、其場だけをつくらつて別れた。

玄圃へ送り出して、一人引出した時私は自分でもあの女のマニヤを信じて居ないのぢやないかと思つた。左様いふマニヤが有り得ようか、矢張り自分の想像で誇大して居るのぢやなからうか。あの女にしても——あの怖ろしい多感性が

六

自制を困難にして、感情の暴ぶが儘に任せた時は、自分ながら不安の念に堪へないこともあらう。それが爲に書簡が内部に湧いて、烈しい倫理上の高處に對する不健全な渴望から、自分を動物性に墮落したものと想像して恨しむ——そんな事がないとも云はれない。若し左様だとしたら——それだけの事だとしたら——併し——と、良春つて又考へた。併しあの女の狂氣を私から置ますことが出来ないとするれば、事實でも想像でも、何方にしても同じことである。いづれにせよ、女はヒステリカルで、男はアブノーマルだ。救はるべき所は少しもない。

「停車場迄車を一臺、直に。」  
「あの一寸暇がかゝりますが、矢張停車場迄喚びに遣りますので。」  
「左様か、ぢや歩いて行かう。」  
私は直に身支度をして立上つた。沼津發の上りに乗込んだ時は、やう／＼日も黄昏れて、雨の粒がはた／＼と窓の硝子を打つた。列車の中には一人も相乗の客がない。私はごろりと横に成つた。何だか自分で自分の檻を送つて行くやうな心持もした。

山から戻つた當座の詩合せも盡きて、私はおひおひ浮世の金子につまる身と成つた。他に上面の出来る當事も無い。折ふし故郷の家に賣れ残つた山林のことも想出しては見たが、今にも如何成るやら分らぬ私の身で、それ許りの物にも手を着ける氣には清石も成れぬ。私はやう／＼現實と云ふものから包圍せられる苦しきをおぼえて来た。

八日付の手紙には、  
「此中にも、あれ女からの手紙はつゞく。七月あの日以來、母親は中々安心どころか、思ひも寄らぬ臆測をめぐらして、あれ儘にては速も始末に成らず、私渡米の儀につきても非常に危険がり、一方ならぬ心配をすればじめ候次第、まして父などに我々の意中を明かしなすれば、何んな事に成るやも知れず、公費實行の上に困難を來すことと存候云々。」  
あゝ、矢張私は世間見ずであつた。如何したつて、普通の人は私達の思ふ様にまで考へて呉れるものでない。手を動かせば動かすだけ、餘計に縛しめの繩が緊つて行くばかりである。

私は手紙を持つたまゝ、身内がわな／＼く様に思つた。  
次の日又一通の手紙を受取つた。性急な走り書に、  
昨夜はまた三時間餘りも母に口喧かれました。最う家に居るのも、家の者の世話に成るのも、日増しにいやに成るばかりです。母は暇さへあれば私の部屋に來て居ます。

昨日差出しました手紙に、あまり家の者が心配するやうなら、彼地に在る間貴方とは書信の往復もしなくても可いと、場合によつては申して仕舞ふ様に書きました。が、そんな事は出来さうもない。あれは服まぎれに親を欺くことに成る。あれだけは取消します云々。  
其後、音信はふつと絶えた。  
又その二、三心に掛つた。一旦ケ崎を引上げて、自宅へ戻つたとは知らせて来たが、今も未だ東京に居る。如何やら分らぬ。私はあの女を思ふ時、天の地角、只雲を撫むやうな張合のない心持がした。此世の女を思ふとも思へない。  
兎に角私は書きかけた物を書かうと努めた。

只、此一つだけ書く。此世に自分が生れて来た記念として、これ一つだけは残して置く。此小説の世に出る頃、少くとも、私は此國には居なからう。小説ぢやない、遺書である。二人のために遺書を書く。

左様思ふ中から、何うもそんな事には成らぬやうな気がした。私の意志に反して、顔にそんな気がする。何にもせよ、これさへ書上げたら、私は直様あの女の許へ走つて、あの女に合すのだ、それ迄だ、それ迄だと思ひながら、如何いふものか筆が進まぬ。殆ど一字も書けぬ。

それには金銭上の煩ひも有つた。其月の末、私は故郷の母から絶えて久しい手紙を受取つた。そして、其中に三百圓の爲替が封じてあつた。手紙の文言に依ると、お前の方へは黙つて居たが、去年の暮、山林はたうとう人手に渡した、其金子で始めたことも、案の定、失敗にはつた、お前には重々済まぬと思ひながら是迄隠して来た、それは呉れぬも勘辨して貰ひたい、いろ／＼骨折つて、此頃やつと半分足らず取戻した、其中二百圓は、度々せつかれるので、隅江の兩親に渡した、後金だけ其方へ送るから如何でも好い様にして貰ひたい、折角身體を獻つて呉れよとあるばかりで、其外の

事は何一つ書いてない。

私はほつと吐胸をついた。あれ許りの山林さへ無くしたら、これから母親の老後を送る道はない。此手紙の字體にも文言にも、どこか年寄染みた所があるのを見ても、老先が思ひ遣らる。親一人子一人の間で、何んな親にして、私の外に前途を見て遣るものが何處にあらうぞ。

隅江のことは只考へないことに極めた。固より私がない後の母親の身が託されよう筈もない。

私は切めてそれだけの金子でも其儘送り返さうかとも思つた。左様思ひながら、矢張それ下手を附けた。

八月と九月とは白紙の儘過ぎた。十月に入つて、初めてあの女の名を聞く。神戸の許へ淺間山の麓から出したもので、私と二人の名宛にしてあつた。私は今其手紙を持たぬ。それに對して、何んな事を云つて遣つたものか、それも記憶えて居らぬ。只此處に其返辭がある。

拜啓、御手紙は確に落手いたし候。心苦しきに堪へず候。たとひ何んな物を書くと、二たびポストに投げ込むやうな

失態は必ず／＼いたすまじく候。何卒御許しいたゞまたく、只々後悔の外無之候。今日迄へられて此處に歸り候。ため、御返事おくれたるに候。あしからず、右のみかしこ。

十月十九日夕

あの女の名

此處とは信州の松本である。

同じく二十四日の日附で、

拜啓、御手紙は只今拜見いたしました。私の意志は決して變りません、茅ヶ崎以來變らない。けれども四日淺間の麓から差上げた手紙はあれは貴方に宛てました。過日來後悔して居る通り、咄嗟に妙な氣持に成つて、最う駄目かと思つて、あんな事を書いて仕舞つたのです。間接に心變りを込めかすのなんのと、そんな思慮分別どころか、最う切迫して来た様な氣持が頻に仕出したので、精一杯餘裕を附けて、あれだけの手紙を書けたのです。全く減茶々々な事を申したと、後で後悔いたしました。自分の意志が變つたか何うかと云ふことは、今日迄改めて反省し

たことさへない。

只許して頂きたいのは、決して意思が變つたのではないけれど、時々あんなに成つて仕様がなない。私の目下の境遇と云へば、漸く家の者の眼を離されたと云ふ迄で、其日々々の生き易い道をたつねては今日を終るに止まつて、少しも事が運んで行かないのです。丸で見込がないのです。今の状態を幾許辛抱して見た所で、何日に成つたらと考へると最う堪へられなく成つて仕舞ふ。其瞬間の自制を仕かねてついあんな事も書いたり、又は彼方此方と居所を變へて見るのです。時々出来もせぬ歌などを拵へて見ようと言を折るのですから、あれは許して下さい。

意思が變つたのぢや決してないので、此處まで。

これで見ると、私は度々あの女の意思が如何の斯うのと云つて造つたものらしい。自分で自分が不安に思はれる所から、却てそんな事を女に向つて云つたのであらう。

次に一箇月置いて、十一月二十二日の日附の

もの。

御手紙は拜見。私は安心して居る。未だ辛抱も出来るから落着いて書上げて、總て準備をして下さい。夢も最う何でもない。一時の現象だつた。實は家であまり久しく柵木に掛けられて、息も吐けないやうな、厭服された氣持で居たのが、やつと出られたので、俄にそこいらの辛張棒が緩んで方々妙に成つて来て、始末に成らなく成つたのでせう。けれども今はすつかり取戻した。此家に来てからは落着いて居ます。只最う歩くことは餘り出来なく成つた。肩が張つて来て、苦しくて、毎日家に許り引籠つて居る。半日座禪をすれば、後半日の力は出て来る。座禪をするだけの體力のある間は、乾度辛抱が出来ると信じた。讀書位では容易に心が聚らない。それから未だ何でもしなければ成らぬ、片附けなければ成らぬことも残つてゐる。それもする覺悟はして居る。

私は斯う云ふ状態に居ます。未だ辛抱が出来ると信じて居る、又せねば成らぬ

と思ひ定めて居ます。云々。

追かけて、二十五日出の手紙には、更に思ひ詰めた様に、たい、近頃私は大變弱く成つて居たことに氣が附いた。昨夜から最うちゃんとして仕舞ひました。屹度境遇を切開いて出来る様にするのですから、動搖しないで居て下さい。當分此家を出ないことにしました。

とあつた。

かうして、私はあの女から来る手紙の中に生きて居た。其外に云ふべきことも書くべきこともない。小説は只反古が殖えて行くばかりで焦躁れば焦躁する程、いよ／＼拂取らぬ。つまやかにして居たが、貯への金子も盡きた。それを見かねてであらう、或人の手で私の小説は都下の或新聞へ掲載されることに成つた。其豫告も出た。

あの女の手紙も最早残り少なに成つた。此處に日附の分らぬものが一通ある。

此處はポストのない山の中の口舎ですから、郵便も遅く成ります。

「燥煙」の豫告が出て、それ位迄運んだと承はるのは嬉しい。けれども大凡何日頃迄に書終る御豫定か、切めてそれだけでも聞かせて置いて下さい。安心はして待つて居るものの、何だか當度のない様な氣持がして成らぬ。かうして待つて待つて、生きてさへ居れば、或日が來ると貴方が來て下さると云ふだけでは、時々心細く成つて仕舞ふ。それに私は此頃いけなく成つた。餘程氣を附けては居るけれども、本當の自分とは關係のない出來心がふい／＼と起つて、何方が何うだか譯が分らなく成つて、つい捲込れて仕舞ひさうな氣がして成らぬ。理由はなけれど、矢鱈に激昂しちまつて、何か書かずには居られなく成るので、頭を過ることを何でも其時々書いて仕舞つては、後で大間違ひをして居るのではないかと心にも成るし、又先達で神戸先生と貴方とに宛てた手紙と歌との様なことを考へると冷汗が出るし、幸ひ大概忘れて仕舞つたけれども、實は何をして居たら可いかわからない。

に寝るから涙が襟の方を流れて冷たく成つて仕舞ふ程なのに、何が悲しいのだから取留めもないし、時々は可笑しく成つて來て、一人で聲を出して笑ふのは見つともないと思つても、如何しても只可笑しく成るので、い／＼氣が違つたのかと思ふけれども、なに、宿の人が來れば上手に話も出来るし、母や姉から手紙が來れば、ちやんと母や姉に對するやうな返事を出すことも出来るから、未だ／＼確かだと思つて居る。

大抵何ぞ彼ぞ考へては居るけれども別段自分のことなぞ思つて居るでもなければ、他人の事や東京の事なんか考へたことは無論ない。只時々家のことや貴方のことや何か思ひ出して、母のことも、父にウイヘルヘルム、テルの話聞いた餘程昔のことを如何したのか想ひ出して悲しく成つたけれども、他人事の様な氣がして涙が出る。洋燈の灯をちつと視て居ると、自宅にある私の部屋の赤いホヤの瓦斯がコオ／＼云つて燃えて居るのを思ひ出して、一度歸つて見たく成つたけれども、あんな物は如何でも可いと思つちま

つた。築土裏の寺とやらへも一度行かうかと思つて、飯田町迄の切符を買つたけれど、汽車が來てから、そんな事をしても仕方がないと思つて、レールの中へ捨てて歸つて來て仕舞つた。

それから私の仕事、仕事と云つたから何事かと思つて頂いたのでせうが、ほんの氣まぐれに過ぎない。只私の姉に残して行くものを書いて居るので、それも別に深く考へて書いて居るのではない。三十枚許り夢語の様なものを書いて見ましたが、手が震へて、字が餘り亂れて居るので、書直しをします。生きて居る間は、斯うぶふことでも遣つて居ないと、他人に向つて飛んだ間違ひをするから、最う恐ろしくつて／＼。今度と云ふ今度は失態ばかりして仕舞つた。其時々々の氣分に任せて亂暴な手紙をつい出して、最う後悔ばかりしたし、後で端書で取消を出すやうに、近頃は本當に馬鹿なことばかり繰回したので、最う恐ろしいから手紙を書くことはおふつり止めになりました。其中で姉にだけ上げる氣になつたのは、姉は誠に／＼センチメンタルな優しい人

で、私の所へ附近に手紙を呉れる、書物を何度となく送つて呉れる、何か書いたら見せて呉れる、と云ふのです。私は如何したら可いか分らない。それで姉の所へ送らうと思つちまつた。私は残念だが何を云ふか少し疑はしいから評して下さい。

小島様 御許に

あの女の名

これを読んだ時、私はまぎ／＼とあの女の衰へたさまを眼に見る様に思つた。最う躊躇して居る所ではない。即座に握つた筆を捨てて、あの女の許へ走らうかと思つた。左様思ふ下から、切めて此作だけでもと、又思ひ返す氣にも成つた。

私は返事の代りに、イブセンの『ヘッダ、ガラア』を一冊送つた。別に如何云ふつもりもないが、女主人公ヘッダの性格と、其猛烈な復讐の念から男が畢生の力を籠めた草稿を火中する所とが、多少思ひ當る節もあつたので。折返して謝書が来た。

不思議なればこれだけの事を云はせて

頂く——今後は重要な事がなければ、其日の来る迄さし控へますが——『ヘッダ、ガラア』は昨夜読み終へた處です。『海よりの夫人』と二つ讀みました。

惠蕪拜

それが何故不思議だらう。何だかあの女にも似ない様な心持がした。それを其儘通して置くのは、如何やら二人が命懸けで仕ようとして居ることを二たび飯事にして仕舞ひさうな、不安な心持もしたが、矢張其儘にして置いた。

次の日、私は又一通の手紙を受取つた。小形の汚げな状袋で、それを破つて一二行讀むと、思はず顔色が變つた。

私は非人情で申します。私の意思は全然變りました。自分のことは自分で處理いたします。尤も死ぬのでもなければ狂するのでもない。人と關係ある位置に身を置くことは、私には最う堪へられない。

信州の土地は去ります。死ぬのではないと云ふことだけ御承知を願ひます。其

他總て私に關することは放棄して頂きます。以上、確かな心で斷言します。

十二月九日

小島様 御許に

あの女の名拜

私は手紙を其處へ抛り出したまゝ、二たび取上げて見ようともせず、凝乎と硝子の棧を見詰めて居た。其間にだん／＼心も落着いた。

昨日あんな葉書を寄越して、今日こんな手紙を呉れる。あの女の癖だ。あの女からこんな目に逢つたのも、今度が初めてと云ふ譯ぢやない。私は最初からこんな手紙を待設けて居た様にも思つた。併し今度のは是迄とは違ふ。これは皆他人の前でしたのだ。他人の爲にしたとも云へる。今度は二人切りの間である。誰も知らぬ二人の間で、私はたうとうあの女から投出されたのだ。最早取附く局もない。

思へば、長い間であつた。私はあの女——あの女と云ふよりは、自分があんな女の爲に抛つた過去に對する未練から、如何してもあの女から離れまいとした。あの女と離れたが最後、私の手には何ものも残らぬ。それが辛さに、何んな凄辱にも堪へて来た。昨日と今日と定まらぬ

あの女の出来心に操られながら、矢張あの女に  
くつ着いて居た。最後迄くつ着いて行かうとし  
た——身命を賭しても。

流石に、私は勇れた。此上また立上るだけの  
力もない。最う如何成つても構はぬ。此儘かう  
して置いて貰ひたい——ぐざと短刀で胸を貫か  
れた手負が次第にのた打ち廻る力も失せて、生  
臭い血汐の中に平臥つたまゝ、静手として動か  
ないやうに、只かうして置いて貰ひたい、此儘  
動かさずに置いて貰ひたい。

あの女は如何成ることであらう。固より自分  
の責任なぞ眼中に置かず女ではない。心變りの  
動機もたづねるには及ばぬ。あの女の身に成れ  
ば、何日迄ぐざして雲を掴むやうな男の來  
る日が待つて居られようぞ。斯う成るのが當然  
かも知れぬ。それにしても、あの女は信州を去  
つて何處へ行くのか。手紙には、くれぐれも死  
ぬのではないとある。死ぬのでもなく、狂する  
のでもなく、人間と關係を斷つと云へば、豫々  
あの女の云つて居た通り、何處かの僧院へでも  
遁入るのであらう。山奥の僧院の中に、尼僧の  
淨い生活を嘗んで、日の前に迫つた終り日を  
待——とすれば、あの女に取つて是程殊勝なこ  
とがあらうか。いかに私でもそれを邪魔するこ

とは出来ぬ。  
只、私は如何成ることぞ。あの女は去つた。  
行先も分らぬ。縱令分つたとしても、僧院の界  
は高くして安りに入ることを許さぬ。石垣にで  
も頭を打附けて血反吐を吐く外はなからう。

私はそれでも机の前を動かかなかつた。良とも  
すれば戶外へ飛出して、足の向いた方へ行つて  
仕舞ひたい様な氣がするのを、呢と慄へて動く  
まいとした。これが一年前なら、私は直飛飛出  
して、街の中を着い顔して彷彿つたものだ。うる  
うると河庄の店から突出された治兵衛の様に、  
世の中を呪ふやうな眼附をして——併し今日は  
それ所ぢやない、そんな眞似をして濟まされる  
譯のものぢやない。一生の一日の様に思はれ  
る、切めて今日一日だけでも一人で居たい。一  
人でしみる、此寂しさを味つて見たい。

夜が來た。小僧が來て、ガラ／＼と本堂のぐ  
るりの戸を練つた。其音が一しきり續く。後は  
又一時に森とした。  
人氣のない寺の中が急に氣に成つた。最う慄  
はぬ。誰でも可いから人の顔が見たい。成らう  
ことなら見ず知らずの他人の顔が——  
私は慄へ切れずに立上つた。其儘よいと戶外  
へ出た。知らず／＼、濠端についてお茶の水へ

來た。それから柳原河岸を眞直に兩國の橋を  
渡つた。不圖、何處迄も眞直に行つて見る氣に  
成つた。只眞直に——市川から行徳の向うま  
でも。眞直に傍眼も振らず歩いて行くと云ふこ  
とが、今の心持に添ふ様にも思はれた。

幾つも橋を渡つた、大きなものも小さいものも。  
田金道へ出た。又橋を渡つた。だん／＼夜も深  
けて來るらしく、終ひに大きな川の縁へ出た。  
川に添つて、一重並低い町家が續く。一軒あや  
しげな商人宿で、未だ大戸を下さずにあるのを  
見附けて、つと軒をくぐつた。

十五六の個々の小女が出來て來て、襷掛けの  
飯の給仕をした。床へ入つてから、一時を打  
つても、階下では賑やかな話聲が止まなかつ  
た。  
明くる朝、裏の河は江戸川だと分つた。鴻の  
臺の森も見えた。  
何處を如何歩いて來たのか、其日の夕暮れ、  
私は千住の大橋を北から南へ渡らうとした。遠  
い旅路の果に、やう／＼此處迄辿り着いた様な  
氣がして、ぐつたりと橋の欄干に凭れた。見る  
と、私よりも前に同じ欄干に倚つかゝつて、蹠手  
と水の面に見入つて居る若い男がある。退潮と  
見えて、蒼の澄いたどろ／＼した水が、橋杣に

突當つては渦を捲きながら、ずん／＼下へ流れて行く、絶間なく流れて行く。私もそれに心を取られた。時々背後を通る荷車にゆら／＼と橋が揺れるので驚かされるが、矢張り水の流れる心も動いて居る。

情から興つた空が晴れて、何時の間にやら毛の濡れた雨が降出した。

私は思はず頭を上げた。前の男は矢張り向うに居た。彼女一枚に小倉の角帯を束めて、髪が生じた上合、何うやら職業に離れて行場がないとでも云ひさうな。

私は男のことが心に掛りながら、二足三足引回した。二たび大都會の中へ押分けて這入つて行くのかと思へば、何うも足が差まぬ。寧ろ此水に下らうかと思つた。鐘ヶ淵から向島の堤を抜けて、本所横瀬の河岸へ差しかつた頃は、雨は小止みもなくしと／＼と降り出した。

其夜一時頃、一日中雨にしようど濡れた小鳥の様な、みすばらしい風をして、私は寺の門へ駆け込んだ。

「何誰、何誰」と云ふ聲が奥でしたが、やがて梵音が寢巻のまま洋燈を持つて出て来て、玄關の戸を開けて呉れた。

「まあ、大變、如何なすつたんで御座います。」  
「え、何うも、晩く成つて済みません。」  
「それは宜しいが、お荷物は何なすつたんで。嗚、お氣味が悪いでせう。」  
「え、何」と云つたまま、私は直に本堂へ引込まうとした。

「あ、もし」と、梵妻が背後から呼び留めた。「あの、信州からな、お客様が有りましたよ。」

「信州から」と、私の聲は高かつた。

「え、誰か信州でした。」

「そりや何時、何時のことです」と、私は急ぎ返して、梵妻の前に突立つた。

ほんの今し方、私が床へ這入つて直でしたから、十一時、彼は十二時前でせう。何でも車夫が上野の終列車で着いて此處迄お供をした様に云つてましたから。

「ゴヤ、いよ、此處へ来たんだ。」

「何ですか——急な御用でも」と、梵妻は氣の毒さうな顔をした。

「いえ、何と云つたが、一寸其邊を見て來ますから。」

私は思はず飛出して神樂坂を駆け下りた。右視左視見廻しても、雨上りの霧にじんだ様な液端の電燈がちらほらと續くばかりで、そ

れらしい影も見えぬ。私は少時線路の上立つて居たが、やがて父とぼ／＼と坂を上つて行つた。

玄關へ洋燈を出したまゝ、戸が一枚開放してあつた。私は自分で戸締をした。

「如何でした。最う見えないでせう」と模惑しに梵妻が訊ねた。

「え、今起きに行きますから」と云ふのを聞捨て、私は廊下傳ひに本堂へ廻つた。

本堂には、須彌壇の御燈も消えてあつた。冷たい壁を手探りに、擦足をして裏手の自分の部屋へ戻つた。其儘とさりと疊の上に坐つた。

暗闇の中に静乎と坐つて居ると、何故とも知らず、只ぼろ／＼と涙が流れる。私は泣いた。

机の曳出から、何日ぞやあの女に貰つた左の手囊を出して、いきなり涙を拭くと、又後から留度もなく新しい涙が洒いた。

やがて押入から夜着を引出して、それを引被つたまゝ夜を明かした。明方からとろ／＼と眠つたが、目が覺めると、不圖車夫を調べて見たらと云ふ氣が附いた。上野から乗せて來たと云ふか、停車場の構内の車夫を一々調べたら分

らぬことも有るまい。そこへ気が附くと、矢も  
桶も壊らなく成つて、むつくと起上つた。

上野の停車場へ着くと、私は直に人力車の札  
賣場へ行つて訊いた。左様云ふことなら、車夫  
瀧りへ行つて訊ねた方が早分りだと云はれて、  
又其處へ行つた。

「左様だ、昨夜の終列車なら雨が降つて二人し  
か寄がなかつたが、何でも女で実土迄と云ふ  
の有りましたよ。其がアお年の召した方です  
う」と、中でも親方らしいのが云つた。

「いや、年は行つて居ない。兎に角昨夜実土迄  
行つて呉れたのが分りや可いんだが」と、私は  
断性急に成つた。

「おい、誰か此中に昨夜実土迄御尋人の御客様  
送つた奴は居ねえか。」  
「うむ、そりそ野郎だと、即座に云ふ者が  
あつた。」

「おい、堅公は居ねえか。」  
「なに、堅公なら今迄將軍を指して居たんだ  
が、内へ歸つたかも知れねえよ。」

「家と云ふのはと、私は逢さず其男に訊いた。  
一 御徒土町の裏通りでさ。」  
「おれは、御徒土町の裏通りでさ。」  
「おれは、御徒土町の裏通りでさ。」

「おれは、御徒土町の裏通りでさ。」

る車夫達の男に出逢つた。  
「あ、堅公か遣つて来ました。あれが堅公で  
さ。おい、此方がお前に用が有るとよ」と、  
私の後から来た車夫が云つた。

堅公はどきまきして足を留めた。  
此車夫について、昨夜確に信州から来たと云  
ふ女の客を實土迄送つて行つたが、先方へ着  
けば留守だと云ふので、雨は降るし、何處か泊  
る宿はと云はれて、此方も不案内ながら神樂坂  
の下の定宿へ送り込んで、其儘歸つたと云ふこ  
とだけ確めた。其宿の名も聞いた。

直に又神樂坂へ引身した。屋敷を見ると、宿  
の名が出て居る。私は思はず大息を吐いた。  
「肥前子の口を開けて這入ると、三十輪好の丸  
籠に結つた主婦さんが出て来た。一寸音出しに  
くい様に思つたが、思ひ切つて、昨夜これ／＼  
の女が泊つた筈だと切出した。」

「其お方なら、昨夜確に着きに成りました、  
今朝最う早く御飯も召上らないでお立ちに成り  
ました。」

「で、其行先は分らないでせうか。」  
「へえ」と云つたまま、一寸思案して居たが、何  
でも車夫に小石川の白山の方がへと仰有つた様に  
覺えて居りますか、何なら一寸其車夫を喚んで

「で、其行先は分らないでせうか。」  
「へえ」と云つたまま、一寸思案して居たが、何  
でも車夫に小石川の白山の方がへと仰有つた様に  
覺えて居りますか、何なら一寸其車夫を喚んで

参りませうか。」  
白山へ歸つたと云ふなら、最う願ひは延もない。  
私はほつと安心した。それと共に、又何時逢は  
れるやらと云ふ様な気がした。朝飯も食はずに  
立つたと云ふから、恐らく昨夜はあの儘襦に  
置かなかつたのであらう。それが如何にもあの  
女らしい。

私は主婦さんに禮を云つて、軒端を離れた。

二三日は齒の駆けた様な日が續く。私は後つ  
ともなくあの女のお消息を待つた。あの女の性癖  
としても、そんな苦はないと思ひながら、矢張  
心待ちに待たれた。それも空頼めと云つた。

七

「いよ、あの女との關係も絶えた。  
最初あの女を見た刹那、如何云ふものか、私  
はわが生涯の危機に臨んだやうな気がした。  
それが好いか悪いかは知らぬ。兎に角、非常な  
喜びと悲しみが前途に懸されてゐる様な気が  
した。最う逃げるにも逃げられない様な気がし  
た。實を云へば、あの女から親切らしい親切も、  
眞心らしい眞心も、嘗て二度も受けたことはな  
い。あるものは只苦痛と屈辱とばかりである。  
それでも私はあの女から離れられなかつた。あ

「いよ、あの女との關係も絶えた。  
最初あの女を見た刹那、如何云ふものか、私  
はわが生涯の危機に臨んだやうな気がした。  
それが好いか悪いかは知らぬ。兎に角、非常な  
喜びと悲しみが前途に懸されてゐる様な気が  
した。最う逃げるにも逃げられない様な気がし  
た。實を云へば、あの女から親切らしい親切も、  
眞心らしい眞心も、嘗て二度も受けたことはな  
い。あるものは只苦痛と屈辱とばかりである。  
それでも私はあの女から離れられなかつた。あ

「いよ、あの女との關係も絶えた。  
最初あの女を見た刹那、如何云ふものか、私  
はわが生涯の危機に臨んだやうな気がした。  
それが好いか悪いかは知らぬ。兎に角、非常な  
喜びと悲しみが前途に懸されてゐる様な気が  
した。最う逃げるにも逃げられない様な気がし  
た。實を云へば、あの女から親切らしい親切も、  
眞心らしい眞心も、嘗て二度も受けたことはな  
い。あるものは只苦痛と屈辱とばかりである。  
それでも私はあの女から離れられなかつた。あ

「いよ、あの女との關係も絶えた。  
最初あの女を見た刹那、如何云ふものか、私  
はわが生涯の危機に臨んだやうな気がした。  
それが好いか悪いかは知らぬ。兎に角、非常な  
喜びと悲しみが前途に懸されてゐる様な気が  
した。最う逃げるにも逃げられない様な気がし  
た。實を云へば、あの女から親切らしい親切も、  
眞心らしい眞心も、嘗て二度も受けたことはな  
い。あるものは只苦痛と屈辱とばかりである。  
それでも私はあの女から離れられなかつた。あ

「いよ、あの女との關係も絶えた。  
最初あの女を見た刹那、如何云ふものか、私  
はわが生涯の危機に臨んだやうな気がした。  
それが好いか悪いかは知らぬ。兎に角、非常な  
喜びと悲しみが前途に懸されてゐる様な気が  
した。最う逃げるにも逃げられない様な気がし  
た。實を云へば、あの女から親切らしい親切も、  
眞心らしい眞心も、嘗て二度も受けたことはな  
い。あるものは只苦痛と屈辱とばかりである。  
それでも私はあの女から離れられなかつた。あ

「いよ、あの女との關係も絶えた。  
最初あの女を見た刹那、如何云ふものか、私  
はわが生涯の危機に臨んだやうな気がした。  
それが好いか悪いかは知らぬ。兎に角、非常な  
喜びと悲しみが前途に懸されてゐる様な気が  
した。最う逃げるにも逃げられない様な気がし  
た。實を云へば、あの女から親切らしい親切も、  
眞心らしい眞心も、嘗て二度も受けたことはな  
い。あるものは只苦痛と屈辱とばかりである。  
それでも私はあの女から離れられなかつた。あ

の女の出来心に操られて看したり左したりしながら、私にはそれが自分の思想に表現を興へ、自分の感情に形體を興へ、又自分の夢に實在性を興へるものの様に思はれた。そして、それが私の生きる唯一の道だと信じた。

只、何處かに無理があつた、始終物足らぬ所があつた。

勿論あの女も普通の女ぢやない。あの女の身の周圍には、何物か常人の持つて居らぬ力がある。あの女の背後には圓光がある。それが私の幻影とも思はれぬ。只私があの子を理想化して見て居るばかりとも思はれぬ。併し何處かに無理があつた。自分ながら強ひて左様して居るやうな形跡があつた。目のあたりあの女の實際とあの女の上に描いた幻影とが喰ひ違つて居るのを見ても、私は只あの女から離れともなさに、強ひてそれを見まいとした、考へまいと努めた。

それだけにしても、矢張離れる時は離れた。只あの女と離れた上は、私の自由だ。あの女のない代り、私は私の思ふ儘に幻影をつくる。幻影を不朽にする。それに依つて、私は失つたものを取戻すのだ。其外に、私の救はれる道はない。

私は二たび現實の世界から空想の世界へ逃げた。二たび死物徒ひに成つて製作に取りかゝつた。

日一日、僅かながらも原稿紙が嵩んで行つた。あの女とは別れたが、あの女のために書くのだと云ふ心持は離れない。一字といへども、一行と云へども、皆あの女の爲に書くのだと思つた。私は極力あの女を理想化した、誇張もした、文飾もした。それでも未だあの女の實體には及ばぬ様な気がした。これが出来上つた上、あの女が見たら——あの女は如何思ふだらう、何と思つて讀んで呉れるだらう。私はあの女の爲に、あの女に代つて書いて居る。

それにはいろ／＼苦しいこともあつた。殆ど前例のない境遇に立つて書いて居るだけ、一寸した世間の取沙汰でも、鼻と胸に徹へて、二三日筆の執れないこともある。そんな時は、毎もこれが最後だと思つた。これを最後に書く——これが濟んだ日は、私が此世から解放される日だ。

縦合そんな事には成らぬにしても、二たび文筆に携はるやうなことは有るまい——左様思つて、自ら安んじた。私はこんな卑屈な状態に陥りながら——女と一緒に死なうとして死損ひ、其女に捨てられて、自分で自分の願末を

綴らねば成らぬと云ふやうな——こんな醜態に成りながら、私は未だ自分にも何處かへロイツクな要素が残つて居ると信じて、一日の生を偷まうとしたのだ。これさへ濟んだら、私の身は如何成るか分らぬとは思つた。左様思ふ側から、私は能く如何も成らぬと云ふことを知つて居た。切めて文筆を賣つて口を彌すことだけは止めたいと思つても、それさへ心に任せぬのぢやないかとも思はれた。

かうして自分の肺甲斐ない心根を知つて居るだけ、私は一しほあの女が崇高に見えた。離れて居るだけ、一しほ高い山の巔にかゝつた雲か、野に燃える陽炎の様に思はれた。それ程人界を離れたものの様に、あの女を思ひ込んで仕舞つた。

あの女が霞を喰つて生きているなら、私は土の中に棲んで泥を管める。私は出来るだけ自分と云ふものを眞黒な色で描かうとした。意氣地のない、黒癩つばい、其癖自分の利益を忘れることの出来ない男として——殆ど取柄のない男として表はさうとした。私は自分の上に何の容赦も加へないつもりであつた。あゝ併し何事ぞ、私はそんな事をしながら、かうして自分で自分を非難して置きさへすれば、他人は最早自分を非

難する権利がないか何ぞの様に思つて居た。何と云ふ淺ましい心根であらう。

其間にも、だん／＼年の暮に迫つた。私の小説が紙上に掲載される時期も近づいた、私はうか／＼側視をしては居られなく成つた。あの女の消息もふつつりと絶えたが、何事もなく自家に居ると云ふことだけは、何處からともなく傳はつた。あの女の氣性としても、そんな答はないがと思ひながら、そんな事に心を使つて居る暇もなかつた。

一月一日、初めて私の小説が紙上にあらはれた。小説らしい小説を書くのも初めてなら、勿論新聞に出るなどと云ふことも初めてである。

即日一人の友から端書が来た。つゞいて田舎の女からも手紙を寄せた。いづれも何んな物を書くかと案じて居たが、先は安心したと云ふ意味であつた。私はそれに力を得た。

小説は日に／＼出た。毎朝自分の書いた物の挿書を見るのも楽しみに成つた。挿書はカットの様な小筆の筆を省いたものであつた。

只、其中にも、何となく淺ましい心持が失せない。本當に好きな者の名は、他人に云ふのも可厭なものであらう。他人に一寸漏らしただけでも、味ひが抜ける様に思はれる。それを、

小説とは云へ、斯うして日々自分の秘密を曝け出して行くのは、自分自身の爲にも可厭ぢやないか。どんな詰らぬものでも、秘密にさへして置けば、自分の眼にも有難く見える。此世の中にローマンスを齎す唯一のものは秘密である。私は其ローマンスがしつかり捕へたさに、自分の手でローマンスを壊して行く。私は只寂しかつた。一字書き一行綴る毎に、何とも云はれぬ淋しさに襲はれた。

それに、漸く日々の掲載に迫はれ出した。最初それでも二十回分許り出来上つて居たが、瞬／＼間に退附かれて、其日々々に出る分を前に日に書く外はない。朝も夜も晩も机に俯みついて居て、それでも未だ間に合はなかつた。斯う成れば、最早精神の勞働ではない、肉體の勞働である。

一月二月と經つて、山の夜の年回日も廻つて来た。其頃或雑誌に、あの女の書いた脚本が載せられると云ふ噂が立つた。それを聞いても、私はどうも信じられぬ。今更あの女がそんな事をとも思つたが、噂は矢張事實と成つた。大袈裟な廣告も出た。が、實物について見れば、夫程でもない。

『退京』と云ふ題で、女主人公に第一人女の

友達を配して、進父親の言葉に従はず家を出ると云ふ筋、最後に一人の文科大學生を新橋へ映んで無理矢理別れを告げる幕があつた。二人の中を暗示するものとも云へば云へる。

勿論あの女が何んな事をしたとて、何んな物を書いたとて、私の知つたことではない。でも可厭な心持がした。何んなつもりで書いたのかは知らぬが、自分で書くのさへ可厭だと思ふもの、あの女には尚更書かせたくない。作の

好い悪いに拘らず、書いて貰ひたくない。あの女には、只黙つて居て貰ひたい。私の書いた物なども、手に觸れても見ないと云ふ程、夕風に立つ池のさゞ波の様に見做して、一人高き行ひ澄まして居て貰ひたい。左様されたら、私は堪らなく寂しからう。寂しくとも、私の眼に映じたあの女としては、左様して居て貰はねばならぬ。

あの女の最後の手紙に、人と人との關係を斷つて自分で處理するとあつたのはこんな事を指したのか、自宅に居て、こんな物を書いて日を送ると云ふことであつたのか。私は二たび其脚本を讀み回した。長い間、あの女の消息に飢ゑて居たので、活字に印刷されたあの女の名を見るだけでも胸が躍つた。

あの女自身に擬した女主人公の立場とあるのを見ては、目の前にあの女の姿が泛ぶ。女の友達と云ふのは勿論木下らしい。をかしい事には、二人の女の顔立やら風采やらがあべこべに成つて居た。此二人の對話の中に、父親が二人のことを心配して、何方か一人だけでも結婚して呉れたら屹度片方の意思も變るだらうと云つて居るが、私達はそんなに見えるでせうかなぞと笑ひながら話合ふ所があつて、それから新時代の女性らしい議論がいろ／＼並べてあつたが、何の事か軽く解らぬ。解らぬ程に解つたつもりで居るやうな風も見えた。併し二人が父親の前へ喚ばれて、意見をよめながら、如何しても家出をすると言ひ強る、それなら其理由を云へと云はれても、押黙つたまゝ、口を開かぬ。そこに云ふに云はれぬ力があつた。

父ととき子、其涙は何の涙ぢや。

娘（泣聲にて） 御父さんには解りません。

父「私に解らぬ。道理の解らぬ様な父ぢやない」と云ふに。

（とき子泣く）

父「お前の様な剛情者が泣く程悲しい譯があるなら、明かに申したら可からう。

娘「最う何と申すことは御座いませぬ。只

家を出して頂きます。これからは自身のために生きてますから。

（とき子退場）

とき子と云ふのは女主人公の假名である。

この父子の對話には、私は實感を以て讀まされた。併し家出の理由として只自分自身のために生きるるとしか云はぬのは、云ひたくても云へぬのか、それとも云ふべき理由がないのか。私はどうも外に云ふ事がないのではないかと云ふやうな気が仕出した、あの女は随分云はぬ、飽く迄秘密にする。其秘密に釣られて、私はあの女を周囲に幻影をさかへ、一人でロマンスを作つて居たのぢやないか。これで見れば、家庭の撞着と云ふものも、ほんの單純な飽氣ないものに過ぎぬ。勿論此脚本が本気で書かれたものとは思はぬが、それにしても心にもない事は書けなからう。こんなのが本當の所ぢやないのか、これが本當だとしたら最う悲劇ぢやない喜劇だ、物笑ひだ。左様成るのが悲しさに、私は何れだけ心を盡したらう、あの女が語らなければ、私は尙更語らないのだ。それとても、最う仕方ない。

二三日は、それでなくとも流り勝ちの筆がよいよ流つた。原稿紙に向ふのも懶かつた。併し斯う成れば愈々此作の外に頼む所はない、此作の中に自分の長い夢を託して、切めて幻影を固定する外に生きる道はない。

私は今一度綿の様に勞れた身體を起した。餘りに筆の滞つた時は、人に頼む見られる事かしさも忘れて、新聞社へ出かけた。社の編輯機側で一枚宛書く後から活字に組んで貰つた。そんなにして漸く一日分を纏めた。

五月のある日、私は社の樓上でやつとをはりの一回を書上げた。最う一時間も待てば明日の初版が刷れると云はれて、つくねんと待つて居た。やかつてしつとりとインキの匂ひのする新聞紙を買つて、それを讀みながら戻つて来た。

神樂坂の下で電車を降りた時は、兩側の廂に夕日の影が射して居た。眞白に塗立てた土地の藪やらしいのが、不常着のまま、抜衣紋をしたがらざら／＼と歩いて居るのにも出逢つた。私は不圖其邊で夕飯を済まして行くつもりに成つて、坂の上の往來からやゝ引込んだ西洋料理屋へ這入つた。

二階へ上つたが、折悪しく何處とやらの生徒の會合があるとかで、梯子段の上の狭い部屋へ通された。どつかと身體を椅子に投出したまま、誰へた物の來る迄うつら／＼として待つて

居た。

明日からは何を爲しよう。

こんな心持がほつと白雲に包まれたやうな頭の中にも湧く。今日迄はそれでも爲ることが有つた。明日からは何にも爲ることがない、爲ることがばかりでなく、何を爲る力もない様に思はれる。

俺は最う不用な人間に成つたのか——自分にとつても不用な。

私は地の底へ落ちて行くやうな心持がした。隣の部屋からは、しつきりもなく騒々しい、しかも着やかな會衆の聲が聞えた。

矢鱈に強い酒をあふつて見たが、如何しても醉を成さぬ。そこくにして其家を出た。

九時頃私はいろく世話に成つた禮のつもりで、或家の玄關に立つた。鈴が鳴ると、ばたくと子供が大勢出て来た。中には寢巻を着たへたまゝのもあつた。私は何と云ふこともなく人の世か悲しい様に思つた。

主人はぢつと私の顔を見ながら、「如何したと訊かれた。

私は着醒めた顔を隠す様にして、「やつと今日書いて仕舞ひました。」

居た。

其儘少言業か途絶えた。

「どうも、気が滅入つて——これさへ書いて仕舞つたらと思つて居ましたが、矢張不可ません。」

やゝ在つて、私は訴へる様に云つた。

「そりや、小説を書上げたつて、そんなに愉快なものぢやないさ」と、主人は軽く笑はれた。

一時間許りして、其處を辭した。二たび築土へ引回して、寺の門をくゞつた。玄關から自分の部屋へ戻つて、灯火を點けて蒲團を敷くまで、誰も他人の事でもして違るやうに、只器械的に手や足を動かして居た。さて帯を解かうとして、不圖、一週間許り前に故郷から手紙が来たことを想出した。それが其儘見ずにある。私は自分で見たくない手紙だと、いづれ見ではかなはぬものと知りつゝ、かうして封も切らずに捨てて置く事がある。

私はそれを机の曳出から出して、思ひ切つて讀み下した。子供の書いたやうな大きな文字で、

此中はたよりも無いが、息災にておはし候や。私もまめに候故御安心下され候。五月二十一日は父の法事、ぜひく

一どおかへりなされたく。

「江こと永らく内に居りましたが、此春再縁して、むこを取りました。右御知らせ申上候。

私も其地へまゐりたく、念じ居候。

五月九日

要吉どの

は、が

一わたり目を通したまゝ、ぐる／＼と巻いて封筒へ突込む。直に洋燈を吹消して横に成つた。小僧が窓の戸を閉め忘れたと見えて、障子の紙がぼんやりと白く映る。私はそれが氣にかりながら、二たび起きて閉める氣にも成れない。

「江が再縁した。到頭他人の妻に——それも私が自分で左様させたのだ、自分で手を下してあの女の貞操を破らせたやうなものだ。何んな女でもあゝした上に、あゝして、あれだけ長く打捨て置けば、かう成らぬ女はあるまい、かう成つて行くのが當然であらう。私は暗にそれを豫期して居たのだ。かう成るのを待つて居たのだ。私は左様ぢふ非道な男であつた。

斯う思ひ捨てて、私は強つて眠らうとした。此上あの女のことを考へるのは、あの女に對して、いやが上にも濟まない様な氣がしたのだ。

併し、私は眞實それを豫期して居たのか、それで可かつたのか、私は数々の女を知るには知つた。が、自分の爲に生れた女だと思つたのは、あの女の外になかつた。あの女だけは、此世に生れた時から自分の妻に極つて居たものと思つた。私は凡ての缺點を自認した上でも、只心の底からあの女を愛して居たことだけは誰の前でも云ひたい。成程打拾つても置いた、虐待もした。そんなにしても、毫も自分で疚しく感ぜない程、私はあの女を愛して居たのだ。あの女の身にしたら、随分當に成らぬ良夫でもあつたらう。是からも如何成るかわからぬ。併し何處でどんな不行跡な一生を送つたにしても、最後にはあの女の許へ歸つて行く積りであつた。あの女も私を待つて居て呉れるものと思つた。よぼく／＼と杖に縋つて、やう／＼迎り着いた私を背戸に迎へて、私の白髪頭を抱いて呉れるものは、あの女の外にないと思つた。私はあの女の一生を歌にして仕舞はうと思つた。昔の物語の中の歌に——併し左様思ふ中から、左様は成らぬと云ふことも知つて居た。今日の様な日があると思ふことも。

そして、愈今日の目が來た。固よりあの女から裏切られたとは思はぬ。此方が無法なこと

をして居たのだから、あの女が悪いとは思はな  
い。只後から／＼幻影の覺めて行く、其醒際の  
寂しさに堪へぬ。誰に不足の言ひ様もないが、  
只物足らぬ。あの女が再び見ず知らずの男に  
嫁ぐ。私の知つて居る女が二たび他の男を知  
る——何だか美しい物の汚れて行く様な気がし  
て成らぬ。

併しこんな事を思ふのは我ながらはしたな  
い。最う何も思ふまいと心に誓つて、頭から  
夜着を引被つた。とろ／＼と寝人つたかと思ふ  
と、何か怖ろしい夢を見た様な気がして、はつ  
と眼を覺ました。何んな夢を見たのか能く記憶  
えて居らぬ、只、今にも直ぐ如何かして遣らね  
ば成らぬ、私があんな女を救つて遣らねば成ら  
ぬ——そんな気がするばかりで、前後には何も  
記憶えて居らぬ。

私は寝手と暗がりの中を見詰めて居たが、や  
がて寝巻の袖で頸筋の汗を拭つたまゝ、二たび  
枕についた。

又同じ夢を見た。夢だと知りながら夢を見て  
居る。  
私は長良の橋の上に立つて居た。しと／＼と  
降る雨の中に、傘を擎しながら橋の下を眺めて  
居た。河原の石はづぶ濡れに濡れても、未だ水

嵩の増す程でもない。上の瀬の邊り霧がかゝつ  
て、其中から筏が一つ箭を射る様に流して來た。  
又一つ、其後から又一つ。それが段々橋の手前  
へ近づくにつれて、次第に水の流れも濃んで、  
筏師は棒を上げたたまゝ、壘の上を滑る様に下つ  
て來る。二たび橋の下手へ出ると、ぐるりと水  
押を轉じながらたわ／＼と下の瀬にかゝつて流  
れて行く。私は幾つとなく見送つた。見る／＼  
蓑を着た筏師の立姿が、川下の霧の中に包ま  
れて行く、何時の間にやらそれがふつと消えて  
仕舞ふ。あの先は十里、二十里、桑名の海へ出て  
水の瀬まで廻すのだとも聞く。水の上の一生と  
云つても、筏師程水に濡れて暮すものもなから  
う。私は橋の上に立つたまゝ、筏の行先を思  
ひ遣つた。

其間にも、筏は幾つとなく橋の下をくゞつた。  
不圖、上から流れて來る筏の上に、何かしら黒い  
ものが見えた。それが女らしい。だん／＼近寄  
つて見ると、丸太の上に板切を敷いて、其上に一  
人の女が寝て居る。何處やら病氣らしく、雨  
に濡れたたまゝ、寝手と上眼違ひに橋の上の人を  
見上げた。其大きな眼に見覚えが——

あツ、隅江ぢやないか。  
筏は其儘橋の下へ這入つた。私もつゞいて下

手を離した。女は背後を見せたまゝ見回らうともせぬ。ぐつと後衛の裏つた櫓に、早や下の瀨の真中にかゝつた。

隅江だ、隅江に相違ない。それにしても、あの女が後乗りの妻に——あの後乗りと夫婦に成つたのか。

私は少時薄紙に包まれたやうな二人の姿を見送つて居たが、いや盗まれたのだ、あの女は今盗まれて行くのだ。斯う思ひ返すと共に、私は遮二無二驅出した。川添ひの堤について、何處迄もと後を追いかけた。如何しても水の足が早い。初めはそれでも夜の影を見失はぬ様にして居たが、一里行き、二里行く間にたうとう見失つた。それでも夢中になつて驅けた。

其間、雨は篠突くばかりに降つた。四邊はだんだん暗く成つた。時々振回つては見當をつけつけた稲葉山も、霧に隠れて見えぬ。何時の間にかやら川とも離れた。今は方角さへ分らぬ。私は一人途方に暮れた。

まゝよと、足に任せて歩いて居ると、目の前に白壁の土蔵が見えた。何でも寺の御堂の裏手らしい。前へ廻ると、門の扉に昔菊の紋のついて居たのを大政官の御布令で割がした跡がある。これは隅江の貴家ぢやないか。今頃こん

な所へ来る筈はない。夢だと思ひながら、くぐりを押して這入つた。物音を聞きつけたのか、玄關の障子を細目に開けて、そつと女の顔が覗く。

隅江だな。其途端に、又びしやりと障子を閉めた。

私は一人雨の中に立つて居た。やがて又ぐぐりの開く音がして、蓑を着た大男が這入つて来た。じろ／＼と私の顔を見ながら背戸の方へ廻つて行く。あの男だ——隅江と一緒の蓑に乗つて居た男に違ひない。

夢だ、夢なら醒めよとあせつた。私は蓑を上げて呻いた。其聲に驚かされて、眼を開く。夜は明けたらしい。窓の障子も白んだが、四邊は未だ森として物音一つ聞えぬ。私は夜着を脱ね回す様にしたがら寝返りを打つた。夢を見た様でもある。只そんな事を續げざまに考へて居た様でもある。それにしても、何處からあんな事を思ひ着いたのであらう。あの女と後乗りの妻——何うやらそれがあの女の行末を暗示する様にも思はれる。あゝあの女の一生の日は暮れた。如何して遣らうにも、最う如何することも出来ない。

私はあの女を知つたそも／＼から、二人の中

の様々を一つ／＼心に泛べて見た。何うやらそれが凡て光彩を失つた。あの時の事も、あの時の事も皆私一人で遣つて居たも同じらしい。あの女と言つたことも、爲たことも皆私が左様爲せたのだ。あの女の心から出た事は一つも無いのであらう。それにしても私の云ふことを好く聞いた、何んな事でも私の云ふが儘に成つて居た。私の云ふが儘に成る女は、又他人の云ふことも聴く、あの女は柔順に剛の者の云ふことを聴いて、私を見棄てる氣に成つたのであらう。又女と云ふものは、斯うしたものなりであらう。

何時迄考へても、同じことを繰り返すに過ぎぬ。私は思切つて起上つた。寝巻の儘井戸側へ降りて、釣瓶の水で頭を冷して来た。窓一杯に障子を明け放すと、空は瑠璃色に光つて、向側の高い煙突からうす／＼と煙の立つのが見える。豆蔵屋の喇叭の音も聞えた。何處からともなく、大洋の様な大都會のどよみが傳はつた。

私は窓の間に凭かゝりながら、腹の底に力のないやうな心持がした。それから袂の底を探つて、二三本よれ／＼に成つた巻煙草を取出した。其一本に火を點けて、一息吸ふと、テリ／＼と物の爆せる音がして、急に死骸を焼く様な匂

ひが鼻を打つた。私は驚いて巻煙草を見た。薄い紙の下に、髪の毛が一筋捲込まれて、それの上から透いて見える。あゝ、これだなと思つて、少時それを見詰めて居たが、其儘窓の外へ捨てた。最う次の一本に手をつける氣もない。

考へて見れば、私は是迄何事をするにも串戲の様な氣がして居た。幾許自分では眞劍のつもりで居ても、何處かに遊戯分子が加はつて居た。何事も遣つて見づくであつた。未だ串戲だ、串戲だと云ふやうな心持が半分して居る間に、こんな事に成つて仕舞つた。取返しのかぬ境遇に——少くともあの女の身の上を取返しの着かぬものにして仕舞つた。斯う成つてから、私はあの女を戀ふるのか、戀ふるのが罪惡に成つてからあの女を戀ふる因縁であつたのか。

私は戀の悲劇を知つた。戀に不忠實なる者のみが、眞の戀も知る、戀の悲劇も知る。一生忠實にをはる人は、只戀の滑稽な半面のみ知つて終るのだと、私は日頃そんな事と思つて居た。成程、私は戀の悲劇を知つた。併し私の知りたいたと思つたのは、かうした悲劇であつたのか。

あゝ、小説もはつた。小説と共に人生が終

るものなら——小説は終つても人生はつゞく。長たらしい、小説にも成らぬ人生がつゞく。小説や劇の興へる恩安と云ふ様なものがあるなら、それは最後の頁の後には——大話の幕が下りた後には、人生がないと云ふことである。ああ、人生のロマンスを生き延びた人間程儂めな、而もやくざなものなからう。

## 八

あの女——あの女と云つても、色々ぐつちやに成つた、此自敘傳を書始めてから、始終あの女と云つて来た、其女である。此處迄あの女で通して来たのだから、いつそ終ひ迄あの女で通さうかと思ふ。元來小説の中で人の名を附ける位六ヶしいものはない。若し本名と云ふ。其本名が云はれぬとすれば、矢張あの女で済まして置く。

私はあの女を離れて小説を書くことと云つた、あの女を離れて、あの女の上に描いた幻影に形を興へるとは云つた。併し左様云ふ中から矢張あの女のために書くのだと云ふ心持は離れない。今こそあれ、かうして中が絶えて居るにしても、これさへ出来上つたら——あの女から何とか云

つて呉れもしよう、縱令あの女からは何とも云はぬにしても、何とかがして近づく道もあらう。私は心の奥にこんな未練があつた。何處かの隅にこんな卑しい考へを持って居た。

それが、小説は終つても何のこともない、何の音信もない。一日と經ち二日と過ぎる。私は毎日洞穴に面して呼吸をして居るやうな心持で日を送つた。

尤も、未だ残つた仕事はある。如何かして書上げた小説を一冊に纏めて置きたいと思つても、どうも思はしくない。かねて約束のあつた本屋は、此頃出版物の取締が厳しいと云ふので、それとなく當局の意向を引いて見たところ、どうも駄目らしいので残念ながらと、一度持つて歸つたスクラップ、ブックを返して来た。それでもと思つて、外に知合の本屋を呼んで話して見たが、これも二の足を踏んだ。スクラップ、ブックの上には、徒らに埃がつもつた。

其間に、月もかはつた。何處からともなく、あの女が又告ぐめいたものを書いたと云ふ噂が傳はつた。到頭あの女から音信があつた。一年半かゝつて、『煤煙』を書いた報酬は興へられた。最う可い、何んな事でも書くが可い。

私は日中の炎天に蒸されながら、雜誌屋の

古先へ行つて、其雑誌を買つて歸つた。それを机の上にひらげた時は、わな／＼と指先が戦へた。

それは臨時増刊として、所謂驚くべき手紙を集めたもので、あの女のも其一つであつた。今、其概略を抜く。

偽らざる告白

私はストイックが所好です。堅忍にして情に動せざる底のものでなければ人間は駄目だと思ひます。女々しいと云ふことをあらゆる意味で憎みます。男は勿論ですが、女でも平生から生死得脱の工夫はして置くべきです。従容として死につくだけの覺悟は何人でも日頃いたして置くべきだと思ひます。修養の或階段に於て、人は是非とも禁欲主義で行かねばならぬと、私は信ずる。無論思想上にて、これが人生に於ける最上の主義では決してない。修養の極致は心の欲する所に従つて矩を踰えずと云ふ至妙の境でなくてはならぬ。併し精神鍛錬が十分な爲に、私などは遺憾ながら時として頭腦と身體とが一つに出ない。誠に取づべきことであるが、今日の私の境界に於

ては仕方がない。それで實行上に於ては禁欲主義で行かねば成らぬ。この階段を通過せぬことには、一步も先に出ることが出来ぬのである。止むを得ぬと云ふ外ありません。

今日の小説に描出されてある人生を偽らぬ人生だとか、眞の人生だとか云ふのは許すまじきことである。眞の人生は向上せむとする努力奮闘でなくてはならぬ。眞の自然境、大自在の解脫境に到達せむとする向上の道程でなくては成らぬ。一切の欲望を征服し、一切の誘惑と闘つて徹底せる自我を發揮するところに人生はあるのである。私が小説を讀まぬのも小説中の人物に同情同感する譯に參らぬのも、之が爲である。自意識が強いからと云ふやうなことも無くはあるまい。併しそんな事ではない。同情するだけの價値がないと認めるからせぬので、同情がないと云ふのとは譯合が違ふのである。「煤煙」中の朋子の如き者に對しては、未だ同情する譯には行かぬ。あれでは弱い。要吉の如き人物にも同情することは出来ぬ。私は寧ろ限江を愛する。今一つ私が小説に興味のもてぬのは、

私の頭が何方かと云へば科學的に出來て居るからである。何を見ても聞いても直ぐ抽象化する癖があるので。骨ばかりしか見ぬ癖があるので。具體の世界にはかり住んで居ることが出来ないのです。世間の事や日常の生活の事に興味を有てぬのも此故でせう。

近頃いろ／＼の方々から「煤煙」のことに就て御質問を受けます。無論私と「煤煙」とは關係がある。少くとも朋子と私とは關係がある。併し「煤煙」が既に藝術品である以上は、藝術の堂に參じたことのない私などは、一步半歩も立入ることは出来ませぬ。たとひ事實と相違の點があらうとも作者の想像は自由なのでせう。其邊の事をわたくし彼是と申しますのは、潔しとせざるどころです。御返辭は致しませぬ。只私が禪と云ふことに多少關係がありました爲に、私の行爲によつて、又あの「煤煙」に依て、禪と云ふものが變なことに曲解されて、禪とは宜しくないものだ、危険なものだ、人を誤るものだなどと早合點をなさる方が若しあるとすれば、それは大きな間違ひなのでして、私の行爲が原因と

成つてそんな誤解を來したとすれば、誠に申譯なく思ひます。斯道の前に立つて罪を感ぜずには居られませぬ。就ては私の口から申せますだけのことを及ばずながら申して置くだけの義務があるかと思ひますので、私など連もぶふだけの資格はないのですけれど、少しぶはせて頂きます、具眼の士の一笑にも値せぬでせう。

一體見性と云ふことは睡眠状態や夢幻状態や、特殊な病的状態の中に於て實驗される様なものでは決してないのです。精神並に生理的状态の最も健全な時なので、無論覺醒状態なのですが、普通かうして居る時の覺醒状態即意識状態とは違つて、更に覺醒し、更に意識して居るとでも申しませうか、意識が最高潮に達して遂に意識を超越した時なので、半意識や無意識の状態とは全然別なのです。

感官を閉塞し、心的作用を制止した幽愁と暗黒との中に、神様でも天降りするかの様にばつと光明が射込むやうなものではない。若し寂光の世界とか、永劫調和の世界とか稱するものを、斯くの如き神祕めいた、奇蹟めいたもので、特殊の状態に於て

でなければ見られぬ世界轉瞬の間に於て消えるやうな世界、現身の儘で一才現世を脱出して垣間見るやうな別世界であるならば、それは何程美しい世界であらうとも、楽しい世界であらうとも、私などに無關係なものです。淺草公園の活動寫眞を一寸覗いて來たのと大差ありますまい。ところが左様ではなくて、何人も通常の狀態に於て日夜見て居る此世界であるからうらしいのである。娑婆即寂光土であるからよいのである。決して瞬間に於て見得る特殊な世ではない。

催眠術にでもかゝつて居るやうな、不可抗の狀態に陥つて居るやうな存氣な事では、千億萬年たつても、見性などは出來ますまい。座禪でもして居ますと、如何にも外見は存氣さうに、さも眠つてでも居る様に見えるかも知れぬが、實はきつぱつぱつの大戦闘です。我々が平生「我」と思つて居るもの、エゴと稱して居るものは、實は眞の我ではない。決して實在して居るものではない。假の我である。小我である。假想假感に過ぎぬ。千變萬化して起きては滅ぶ幻影に過ぎぬ。この假想の我を打破し盡した

時に、眞相の我が本體を見ることが出来るのです。これを本来の面目と云つても、徹底せる自我と云つても、神と云つても、佛と云つても、何と云つても差支ありません。これが所謂即身成佛なので、靈と肉とが一枚に成つた所です。此處が所謂生死解脱の境涯です。決して耳目を閉ぢて、外界と絶縁して死人の様に成つて居る状態ではないのです。色相即無色相なので、何もわざ／＼色相界を遠ざかる必要などはないのです。山川草木人畜、何でも一切の物を有る儘に見て、それで少しも邪魔にならぬのである。丁度眞空の中に居ると同様なのである。水晶宮裡に居ると云ふか、萬里の氷河原の只中に坐つて居ると云ふか、とにかく云ひ知れぬ涼味を感ずるものです。古人も水を飲んで冷暖自知すと云はれた通りで、逆も申様はありませぬ。

禪は身を以て努力するものである。内なる一切の欲望、外なる一切の誘惑に克つて、眞の自我を發揮する所にあるのである。更に廣義に云へば、禪は心のことである。決して碧巖錄や、從容錄の中になど大人しく

隠居して居る譯のものではありません、禪學などと云つて學問か何ぞの様に思はれては少々違ひます。禪をいたしましては何一つ智識を煩はすものではありません。のみならず、今迄一大事の様に論じ合つて居た現象的の空論などとさりと消えて仕舞ひます。自己其者を忘れて、他人の學説を追ひ求めて動いて居たことの如何に愚かであつたかと云ふことが存込みます。

私の日頃の修養上の實際を申して見ます。精神鍛錬だとか意力の養成だとか何とか難かしく云ひませんが、何は倍おき二六時中自分の姿勢を正しく保つて居ることが一番だと思ひます。姿勢と云ふことは精神生活の上に至大の關係のあるものです。大變問題を詰らぬことに片附けて仕舞ふやうですが、姿勢と云ふことは全く怖ろしい程道徳的生活の上に重大な關係があります。私はさう信じて居ます、確信して居ます。精神鍛錬だとか何とか云はないでも、先二六時中姿勢を正しく保つて居るのが一番だと思ひます。これが出来ないやうな者は——これが出来ない様に成つては人間はもう駄目です。一切の欲望を制御し、一切

の誘惑に克つて眞の生活をしようと思ふならば、まづ姿勢を整へることから始めねばなりません。姿勢が眞に正しく成れば、血液の循環、呼吸状態、其他の生理的狀態がちやんと整つて來れば、決して欲情などは起るものぢやありません。起さうと思つても起つて來るものではありません。起らないのが當然なのです。此境界にあつては意力を以て己れを抑制すると云ふやうなことも必要です。私は意志の弱いと云ふことは姿勢を整へて居ることの出来ぬと云ふことであると信じて居ます。私は生來虚弱な體質です。併し自分の姿勢を正しきに置き、生理状態を自分から整へることに努めました結果は普通以上の健康を得ることが出来ました。又意力を養ふことも出来ました。私は生來の神經過敏です。

併しこれに依つて感覺の爲に煩はされることか少いやうに成りました。然らば此修養法は人の感受性を鈍らし、無神経なものにするのかと云へば、決して左様ではありません。刺激を受けることは同じ様に受けるのですが、只受けただけで終ふことが出

來る様に成るのです。反撥的なことを直にして仕舞ふといふやうなことが無くなるのです。何も感じない、無神経だと云ふのは、外見は同じでも、其間に大變相違があります。

諄く申す様ですが、姿勢を整へると云ふことは生理的狀態を整へることで、生理的狀態を整へると云ふことは外來の刺激に對する抵抗力を増さしめることである。欲情を制御せしめむが爲の事である。更に進めば制御の必要なきに到らしめむが爲のことである。此處が修養の極致で、解脱の境とか、至善の境とか、理想の境とか何とか云ふ様ないろ／＼面倒な言葉は要するに此處を指したものでせう。此境が不斷に繼續すれば、二六時中この境界に遊ぶことが出来る様になれば、其人は聖人である、達人である、大悟の士である、眞の人である、自然の人である。然るに私共になると繼續すると云ふことが出来ぬ。それ故或時は自由な境に居るが、或時は不自由な境に落ちる。今日なほ不自然な一階段を超越し得ぬのもこれが爲である。鍛錬が不十分な爲に動搖するからである。恥ぢざるを得ぬ。

私は過去の半生涯に於て何一つとしてしなかつた。何一つの仕事もしなかつた。此努力だけが私の唯一の事業なのである。私の生命なのである、誇りなのである。これを抜き去つた時、私は零なのである。此方の盡きた時は私の死です。努力は價値を生む。私が身を以てなしたる努力は私にとつては無上の價値あるものである。何物にもかへられぬ。この前にはあらゆるものを犠牲にしても惜しからざりと思ふのである。

勿論修養の極致に於て自殺など成立しやう筈の事は當然である。併し不幸にして半途に奮闘力が盡きるかも知れぬ。其時己に克たむと思へば、己を殺すより外に道はない。自殺によつて勝利を得る外に道はない。斯くして一代の戦闘史を一貫させるより外に致方がない。遺憾である。併し止むを得ぬのである。この死は私の勝利ではない。勝利の死である。勇者の死である。權威ある死である。世を厭ふが爲ではない。厭世など云ふことは許すまじき横着なこと、私は思つて居る。人間はそんな受身なことでは駄目である。人格の力は

自然の力を征服し得るものである。人生は無量弱から無量強に達する過程ではないか。

佛教がシヨツペンハウエルの厭世主義の如きものであつて、私が其影響を受けて厭世的な考へでも有つて居るかのやうに御察し下され御教示下さつた方もあつた。併し私は信ずる。佛教は決してそんなものではない。涅槃寂滅とは死ではない。未來的のものではない。縱し又佛教がそんなものであつたにせよ、私は人の思念の爲に死ぬ譯には行かぬ。生命は佛教よりも高價なものである。私は私の半生の努力の價値を高價なる生命よりも更に高しと思ひ、更に尊しと思へばこそ死しても遺憾なしと思つたのである。又思ふのである。今後よりよく活きむが爲に或は佛教を使ふかも知れぬ。併し佛教の爲に使はれる譯には参らぬのです。以上。

何日ぞや、あの女の手紙に、『煤煙』が濟んだら、いろ／＼親切にたづねて呉れた師友や未見の知己に、一應自分の態度を明かにして置く積りだとあつたが、畢竟これがそれなんだらう。

尤も、其後では、そんな事を云つて白はつくれて見たので、今日自分に師友と云ふものが何處にあらうか、それだけでも察して呉れとは云つて来たが、一旦云つた言葉は反占にするのはあの女の常だからわざ／＼咎立する迄もない。

如何にも公明正大な論旨である。誰に聞かれても差支はない。それだけに、又誰からでも聞けるやうな議論である。あの女に特殊な所がない、あの女の口からでなきや聞けないやうな所がない。私の目から見ては、あの女自身について何一つ語つちや居ない。

成程、あの女の修養については語つて居る。が、何故其修養が妨げられるのか。半途に奮闘力が盡きて自ら殺さなければ成らぬと云ふのも、何者の爲せる業ぞ。そんな不安や恐怖は何處から來るのか、あの女は何も云はない。昔から裏面の消息については一切洩らさない。それにしても、それを明かさなない程なら、こんな物を書く必要が何處にあらう。書いても意味はない。

ともあれ、『煤煙』は其點に觸れた物である。あの女に代つて、其點に觸れるのが唯一の目的である。あの女が自分ぢや避けて云はずに居ながら、只『煤煙』に向つて、一縱令事實と相違の

「誰かあらうとも、其邊の事は彼是云ひたくはない」などと、妙に絡んだ物の言振をするのは専横である。あの女の一身だけではない、他人の家の秘密を許くことにも當るのだから、私だつてそんな事をすりや如何成るか位のは考へて見た。それだけの用意もした、覺悟もした。それだけの思ひをして仕上げた仕事でも、あの女が朋子でないと云ひたけりや、それも構はない。何なりとも云ふがよい。只、あの女自身は本來何者なのか、明白に名告つてからにして貰ひたい。

それには又、あの女が自分達のために禪學が世間に理解されたからと云つて、自分で禪學の講釋を始めたのも解らない。禪學の奥義を講ずるには別に其人がある。敢てあの女を煩はすにも成るまい。あの女が本當に禪學のために世間の誹を解く氣なら、先づ眞先に自分の暗い半面を歴史から曝け出して、それに依つて禪學の享けた汚名を雪ぐべきである。それを爲し得ないで、只あの女の様な事を云つて居るのぢや、千萬言を費しても何の足にも成るまい。何の足にも成らぬばかりでなく、いよ／＼以て禪學は危險なものだと思はせるかも知れない。それ程の事があの女には分らぬだらうか、分つて居て遣

つてるとすりや、何と云ふ空々しい仕事であらう。

「餘りのことに、又白ばつて居るのぢやないかとも思はれる。が、今に成つて、二たび彼の當時の態度を繰回すのだとすりや、あの女の心持は最早私の考へにも稱る。何うもそれ程ぢやない、それ程深酷な女とは思へない。第一、何處か幼稚な所があつた。こんな物を書いて、本當に禪學のために辯じ得たつもりで居るのぢやないか。本氣で書いて居るのぢやないか。見よ、何處かむきに成つて居る所がある、思ひ込んだ所がある。」

これが本氣だとすりや、此外にあの女がないとすりや、隠して居るのでも空忙けて居るのでもない、無いのだとすりや——最う何も云ふな、云つて呉れるな。  
あの女が禪に没頭して、あの女の不安と云ひ恐怖と云ふものも、こんな所から割出されたものだとすりや、まったく世話はない。詮じ詰めて見れば、こんな事だらうとは、時々思はんでもなかつた。あの女の云ふ理窟が内々此方の心持に合はなかつたことも、一度や二度ではない。が、斯う明らかに打出されて見ると、何とも言ひ様のない氣持である。

私はもつと變つた女だと思つた、變つた所のある女だと思つた。「煤煙」の中の朋子が小説を讀まないと思ふのも、あの女の性格から推して、何處迄も自分の生活を生かすに忙しく、小説の中の男や女と一緒に成つて泣いたり笑つたりして居られないのだとした。私は其外に考へ様になかつた。あの女の云ふ様だと、如何やら道學先生でも云ひさうなことで、世間は好からうが、矢張私の云ふ様であつて貰ひたい。

又、ある時、あの女が自分の癖として、間々一種の恍惚状態に陥ることがある。あらゆる感覺と情調とが調和して、無念無想、限なく光明が照渡るやうに、頭の中はそよとの影を亂すものもない。同時に、諸々の活力が横溢して、自意識と存在の意識との頂點に達するのである。此状態は日夜時を定めずして起る。かうして一緒に散歩して居ながら起ることもあつたと云ふのを聞いて、それが見性の實驗を成めかけたものとは知らないから私は的切癡癡の發作前に於ける症候だと思つた。糞合それぢやないにしても、あの女にはそんな様な持病があるのだらうと思つた。一つは「死の勝利」の女主人公を連想したからでもある。が、私のつもり

ぢや、飽迄あの女にはあの女に特殊な情みが  
あると信じたかったので、見性が夢幻状態で  
あらうが、覚醒状態であらうが、意識を超越し  
ようがしなからうが、こんな事は私の知つた事  
ぢやない。

併し、此方で如何思つても、相手が左様でな  
けりや仕方がない。幾許あせつて見ても落撞い  
て見ても、あの女は矢張禪學の産んだ子ら  
しい。禪學から生れて禪學で死なうとしたものら  
しい。私がそれを如何することが出来よう。  
只、あの女のために、一身の破滅ばかりか、何  
も知らぬ家族の者の一生の運命にも取返し難い  
變動を來したことを思ふと、いかにも瞞されて  
居たとは認めたくない。虚誕でも可い、何時迄  
も瞞されて居たい。

あの女も、それなら何と思つて、私の前に心  
にもない振舞をして見せたのだらう。あの女は  
朋子ぢやないかも知れぬ。只朋子の様に物を言  
つて、朋子の様に振舞つた。あの女の云つた  
ことにも爲たことにし始終暗い影が作つた。時  
には私の手を執つて自分の暗い半面を覗かせる  
様にしながら、此處迄來てそれを握れとも云つ  
た。それが皆誰か。口で云つたことには事實と  
相違があるなぞと云ふなら、手紙だけにしても

可い。手紙にも歴々其跡がある。あれが皆狂  
言か、狂言なら狂言でも可い。何の積りでそ  
んな狂言をつゞけた——私は許さない、許す  
ことが出来ない。

私は驚ペンを握つた。指が曲つて伸びない程  
握り緊めて、遮二無二書き續けた。次の日も一  
日机の前に坐つて居た。やつと書上げた物を讀  
んで見ると、まはり元い脈味や揚足取ばかりで、  
少しも念所を突いて居ない。私は落膽してペン  
を抛り出した。一旦は其儘棄てて仕舞はうかと  
も思つたが、又思ひ回して、其日暮原稿紙三十  
枚餘りの手紙を小包郵便で送つた。

幾日待つても返事は來なかつた——そんな  
ものに返事を出す必要がないと云ふやうでもあ  
る。私は後悔もした、苛立ちもした。そして、  
だん／＼平靜に成つた。

私の手には只スクラップ、ブックが一冊残つ  
た——毎日自分の手で『煤煙』の切抜を貼つて置  
いた、あのスクラップ、ブックが。

これだけは私のものだ。何と云つても、朋子  
は私のものだ。畫工が心を籠めて描き上げた  
肖像畫は、描いた畫工のもので、モデルに成つ  
た女のものではないとしたら、私の朋子も矢張  
私のものだ。本當の朋子は『煤煙』の中に居るの

だ。あの女は只其影法師だ。影法師に似て居る  
ばかりだ。

こんな事を思つて、思ひ詰めては、俄に激昂  
することもあつた。

併し最一度『煤煙』を繰回して讀む氣もない。  
時々スクラップ、ブックを出して齧つて見るこ  
ともあつたが、其儘枕にしてうとうとと寝入つ  
た。

## 九

夏が來た。

此頃から漸く死んで行く人が殖えるらしい。  
淋しい寺ではあるが、時々思ひがけない時分に  
葬禮の鉦が鳴つた。そんな事が二三日づくこ  
ともあつた。

あ、今日も又誰か死んださうな。

本堂の裏の薄暗い部屋の中で、禿びた筆を握  
りながら、そんな事を思ふ日もあつた。須彌壇  
の前には、日に／＼白、青、金色の蓮華が幾對  
となく殖えて行つた。夜に成ると、鼠が造花  
の糊を喰べようとして夜どほし騒ぐのが、廣い  
御堂の中だけにうすら淋しい。

それでも、何うやら斯うやら約東の短篇小説  
を二つ三つ書いた。書く事もなく、書く氣にも

成らぬのを、無理矢理書くのだから堪らない。後の一つなどは、締切りの日限を越しても未だ出来ぬので、遠方から毎日催促の使者が来た。終ひには、只其使者に立つた人が氣の毒さに筆を揮るやうに成つた。

昨夜は到頭徹夜をして書上げた。明方近くとるところとしたが、目を覺すと、朝の間に自分で行つて、玄関口から投込んだまゝ引回したが、日光は頭の上からちか／＼と射る。今日は舊盆の精霊祭をするから、お喧しいでせうが一日だけ何卒と、出掛に楚妻から云はれたことを想ひ出すと、寺へ歸る氣にも成れない。私の足は藪寄屋橋を渡つて、何時ともなく日比谷公園に向つた。門を入つて、圓形の運動場を横に見ながら、真直に噴水のある池の畔へ行つた。そして藤棚の下の倚架に腰を下した。

いろ／＼の人が同じ倚架に腰をかけて又立つて行つた。私は一人何時迄も動かなかつた。洗ひ晒しの浴衣に兵児帯を緊めて、黄色く成つた麥得帽を被つたまゝ、此處にかうして居る自分の姿が自分ながら醜められた。此光如何しようかと云ふ當もなければ、二たび歸らうと思ふ家もない。只今日一日生きるために生きて居る。自

分は文字通りの放浪者に成つたのぢやなからうか。

あの女——あの女ともあれ眼に成つた。かうして此儘をはるのが物の順當であらう。少くとも無事だ。それにしても、長い夢を見たものだ。あの女を知つてから、今日迄、あれだけ人騒がせもしながら、あれが悉皆私の夢なのか、自分一人で行つて居た幻影だと云ふのか——私はそんな男なのか。

私は何とも云はれぬ屈辱をおぼえた。左様思ふ中から、左様思ひ切つて仕舞ふのが苦しさに戻思ひ返した。あるが儘の女を戀ふるのは、男の戀ぢやない。男の戀は斯く有らせたいと思ふ、其女を戀ふるのだ。矢張自分の描いた幻影を戀ふるのだ。それが男の戀だ。男の戀の權威である。

こんな言草を想ひ着いた時、私はそれが動かすべからざる眞理でもある様に思つて、何時迄もそれを思ひつゞけた。

「おい、何が面白いんだい。」  
斯う云つて私の肩を打つた者がある。私は思はず眼を上げると、其處に一人洋服を着た若い男が立つて居たが、  
「久しく逢はないやうだね。」

「あゝ、小早川か。しばらく」と、私も相手の顔を見上げながら云つた。此炎天に酒でも飲んだのであらう、髪を長く生ばして、華美な衿飾をつけた細面の顔を眞赤にして居る。

「何方へ」と、つい其嬉しさうな容子に釣られて訊ねた。

「一寸病人を見舞ひに来て、その歸途なの。」  
「病人? 誰かわるいのか。」

「いや、何」と云つたまゝ、小早川は額に垂れ下る髪を煩さうに掻き上げて居た。私も強ひて訊かなかつた。

「あゝ左様だ。君に逢つたら訊いて呉れと頼まれて居たんだが、小説を一つ書かないか、日出新聞に。」

「今、何か出て居るんぢやないか。」

「あれは最う直き濟むさうだ。」

「左様さな」と云つて、少時口籠つて居たが、「どうせ何か書かなきや居られないんだけれど、實際何も書くことがないもんな。」

「ふむ」と云つたまゝ、小早川も左様ぢやなからうとは云はなかつた。

「僕の小説も最う濟んだよ。」  
かうひとり言の様に云つて、自分一人の意味に解釋しながら、私は勝手と考へ込んで仕舞

つた。

「あゝ、今直に行くよ」と、不意に頭の上で小早川が大きな聲を出した。

其聲を聴るべに眼を移すと、松本樓の軒から、縁の葉がぐれに、二三人縋の友禪を着た雛妓らしいのが此方を覗いて、小手招きをして居た。あのおとなしい男が何日の間にこんな事をする様になつたらう。

「何でも構はず書いたら可いぢやないか。そんな時に却て好い物が出来るかも知れんよ」と云ひ云ひ小早川は立上つた。

「兎に角書く氣がないでもない、僕から云つておくことにしようね。」

「左様さな」と云ひながら、未だ心が極まらなかつた。

「ぢや、今日は失禮するよ」と、一寸私の顔を見て悪い顔をしたが向うへ走つて行つた。

私は又正面へ向直つたが、不圖噴泉の水が出て居ないので氣がついた。今迄それに氣が附かなかつたものか、青銅の鶴も臺石も干上つて、池の水はどんよりと濁んで居た。日盛りの炎熱に蘆棚の葉も凋れて、四邊に人も見えぬ。私は俄に淋しく成つた。

最う歸らう。矢張歸る外はない。

かう思つて立上つたが、足許がよろ／＼して、それを踏み應へると、急に眼が眩むやうに思つた。又そろ／＼と歩き出した。

あゝ、俺の小説もはつた。

私は又其言葉を想ひ出した。おれの一生のローマンスは終つた。明日から自分を待つものは無味な、極めてプロゼイックな長たらしい月日に外ならぬ。而も自分には甘い思ひ出すらしい。すべてが悪い夢であつた。あの女自身も私の夢であつた。只、あの女の顔——あの顔だけは夢ぢやない。如何してもローマンスの女主人公の持つ顔だ。ローマンスの中の女でなければ居る。あの顔だけは忘れぬ——あゝ、是非がない。私の息のある限り、あの女は私を支配しなければじむまい。

あの女の顔——私はいつそ「顔」と云ふ題で小説を書いて見ようかと思つた。

明くる朝、私は俄人で小説家で、日出新聞の文藝欄主任といふ人の訪問を受けた。昨夜小早川君からの手紙に接したが、次の小説を是非書いて貰ひたい、日限は二週間後に迫つて居るかと云ふ話であつた。

一さ、書きたいには書きたいのですが、私

の言葉は濁つた。餘り急いでお氣の毒ですが、なに書きかけさへすりや、書けますよ」と至極無造作に云はれた。

それを聞くと、私は長命寺の櫻餅といふ話を想ひ出さずに居られなかつた。或時此人が小説を載せ始めたが、一向に未だ趣向が纏まつて居らぬ。で、主人公を向島へ散歩に遣つたまま、九日の間櫻餅を食はせて置いたといふ話である。

「私も好く腹案もないのに書出すことも有るんですが、其間には如何か成りますよ。」

「いえ、一つ書かうと思ふことも有るには有りますが。」

「それを如何です。」

「何だかそれが——幾許書いても書き盡されぬ様でもあるし、又一日か二日書けば、直ぐお仕舞に成るやうな氣もするので。」

「はゝゝ」と、其人は象の様な鼻の上に小鏡を寄せて笑つた。

兎に角、私も如何にかして書くつもりに成つて送り出した。御堂の青い壘の上に新しい紹の羽織がいかに涼しさうに見えた。

私は机の前へ引回すと、俄に氣が苛々して來

た。あの女の顔——すべてが消え去つた中に、あの顔だけ残つた。何方を向いても可厭な思ひ出の中に、只一つあの顔だけが私の瞳子の底に燃着けられたやうに残つた。これが私の今の實感ぢやないか。其實感の後から藝術化して行く——何といふ變則な生活であらう。

それにつれて、時々聞くともなく聞いたあの女との消息も思合はされた。三松學舎へ老子の講義を聴きに行つたと云ふ噂も傳はつた。麻布とやらの借堂へ座禪に通ふとも聞いた。殊に三松學舎では、あの女と知つた外の生徒が黒板にいたづら書きをしたのを、あの女は黙つて立つて行つて、それを拭き消したまふ、二たび座に着いたと云ふやうな噂もあつた。それさへ逸話と云ふものに興味をもたぬ私には、たゞ可厭に思はれた。

三日の間、いろ／＼思ひ悩んだ擧句、如何しても出来さうもないので、二たび斷りをぶつて止めることにした。私はさまざま陳謝の辭を列ねた。

恰度、其手紙を出した日の夕方であつた。私は神樂坂の下から電車に乗つた。車掌室に乗つたまふ、車掌の中を覗くと、不圖、思はぬものが眼にとまつた。

あの女だ。何うもあの女らしい。着て居る浴衣の模様にも、セルの袴の端目にも見覚えはないが、夏帯の襟に類こそこけたれ、あの子供染みた髪結び様と云ひ、あの女の横顔に違ひない。

私は俄に胸の動悸が打つて、眞鍮の棒に掴まつたまふ、たじ／＼と眼が眩んで行く様におぼえた。

線路の交叉點で、がた／＼と車臺が揺れると、其横みに乗客の頭が皆動いた。あの女は不圖此方へ向いたが、私の居るのには氣も附かぬらしい。其儘俯向いて膝の上に載せた友禪模様風の呂敷包みの端をいぢつて居た。

如何せう、如何して呉れよう。

そんな心持が私の胸の中に渦巻いた。未だ如何しようとも心が定まらぬ間に、電車は水道橋の停留所へ着いた。此處であの女は白山行に乘替へるのだと思つたから、一足先に私は電車を降りた。そして、道の真中に突立つたまふ、後から降りる人々を見守つて居た。

やがてあの女の顔も見えた。車掌に切符を渡して、足許に氣を附けながら踏臺を離れたが、仰向く拍子に私の姿を見附けた。見る／＼顔の色が暗く成つた。腕と肩を噛んだまふ、私を

目覚めて眞直に近づいた。そして突然、「何處かへ行きますやう。え、何處かへ行つて好く話をしませう。」

又例の負け嫌ひがと、少時女の額を見下して居たが、  
一え、行きませう」と云つて、直に足を轉じた。

私は先に立つて水道橋を渡つた。女も直ぐ後から跟いて来た。日はもう高臺の町の屋根に隠れて、夏の夕べの長い餘光のつゞく頃ほひであつた。擦れ違ふ人の足どりも忙しかつた。私はとゞろく胸の中から、不圖、初めてこの女に逢つた日のことを想ひ出した。夏と冬との違ひはあれ、時刻も恰度今時分なら、場所も矢張此處だつた。かうして私の後から跟いて来た女は、不意に私を呼び留めて、

「何處かへ行きますやう。此儘自宅へは歸りたくない」と、あの時も矢張左様云つた。それでも、私は女を伴れて他人の家の屋根の下に這入るのが扱しさに、

「それぢや、空に星のかゞやく下へ」と逃れるやうなことを云つた。そして二人で上野の森へ行つた。森の下蔭で、  
「如何かして呉れ、如何かして仕舞つて呉れ」

と、身體を擦附けられながら、私は如何する事も出来なかつた。私はあの女の熱湯の様な涙を人の世のものではない様に思つた。小説の中の女が脱け出して来て物を云ふ様にも思つた。そして、長い、幻影を描いた——此女の上に。何んなことにも成らば成れ、俺も二たび彼の様な眞似はせぬ。

私は急に自分以外の役に扮した役者のやうな、不自然な力と覺束なさとを扮ほえた。三叉に成つた街の角に立つて、一寸思索して見たが、半町程先に赤煉瓦の塙をめぐらした三層樓の旅館に目を留めて、

「彼の家が好いでせうと、頭でしやくつた。「何方でも」と、女は軽く頭を下げた。私は其口元に微かな反語の影が泛んだ様にも思つたが、其儘思ひ切つて旅館の軒をくゞつた。

帳場に居た丸顔の主婦さんは、二人の異様な容子に目を留めて、じろ／＼と見て居たが、やがて、

「何卒お上り下さいませ」と聲を掛けた。

暗い廊下を通つて、奥まつた一室へ案内された。二人は、いろ／＼持運ぶ女中には目も呉れず、座敷の片隅へ寄つて、互に面を見合せたま

ま坐つた。二人ながら何とも言出さぬ。

「あの、お風呂をお召しに成りますか」と、女中は私の背後に手を突いて訊ねた。

私は一寸振回つたが、

「いや、這入らない」と云つた限り、又直つた。女中も其儘引下つた。

私は二たび目の前に女を見据ゑた——顔面筋の表情の一點一劃をも見逃さじとばかりに見据ゑた。女は思ひの外に寢れて居た。夏場薄着の所爲でもあらうが、口頃から人並外れた撫肩が一際ほつそりとして、何處やら力なげに見えた。只、何時見ても、下腮だけは二重に括れて初々しい。

あゝ、私は何れだけ此顔に飢ゑて居たらう。だん／＼見て居る間に、私の心は淡雪が土の中へ沁み込むやうに溶けた。私の眼には露が宿つた。今度逢つたら、何時何處で逢つても、何よりも先づ第一番に、

「未だ死なないのか、何時死ぬんだい」と云つて遣らうと思つた。唯今迄も左様思つて居た。何遍も心の中で繰回して居た。それも最う口へは出ない。

餘り口を利かぬので、女の方から微かに唇を開いた。

「如何爲さいますで、え？」と、此女の癖として少し首を右へ傾げた。

其聲を聞くと、私は又俄に胸が早鐘を撞くやうに躍つた。何か言はうとしても、物を言つたら聲が鎮へて悟られようかとなほ押黙つて居ると、女はずつと身體を延して、男の膝の上に顔を伏せようとしたが、間が隔つて居て肩かな

い。それでも、私は堅く腕組をしたまゝ、手を借すことも爲し得なかつた。

女はやがて起直つたまゝ、冷笑を含んだ眼元に、凝乎と私の容子を眺めて居たが、つと膝をずらして側へ寄つて来た。

な、何を爲る氣だらう。

私が何も爲し得ないのを見て、海山に功を積んだ手だれ女の態度を學ばうとするのか。今に見よ、如何するものかと云ふやうな心持がむらむらと起つた。

そこへ、西洋風に成つた入口の扉を開けて、女中が膳部を運んで来た。

「貴方は夕飯を上るか。」

女は只頭振を掉つた。

「ぢや、最此つと後にするから、其處に左様して置いて下さい」と云つたが、二たび「おい、おい」と喚び戻して、

「何でも可いから、酒の稠をして持つて来て呉れ。」

女中は畏まって退いた。

私は手酌でつゞげ様に酒をあふつた。此家の器は、建物の見かけが立派なものにも似合はず、能代塗の上等なもので、酒も悪かつた。つんと頭へ来さうなのを、我慢して、又盃をかき替へた。初めから女には俯めようとしなかつたが、女も見かねたのか、不器用な手酌で酌をしようとした。

私は一寸其顔を見返したが、

「ぢや、最う止めませう。」

かう云つて、盃を下に置いた。口の中がえがらいうやうで、心持が悪い。

何時の間にか、大粒の雨がぼつり／＼降つて居た。開放した窓と、隣の土蔵との間が三尺にも足らぬので、土窖の中にも居るやうに蒸暑い。そこへ、次の間から音も立てずに兩戸を繰つて来た、盲目織の長半纏を着た荷の若者らしいのが小腰を屈めて、

「御免下さい。え、驟雨が来さうですから、一寸戸を閉めさせて頂きます」と云つたまゝ、又次から次へ兩戸を押しに行つた。悉皆閉め終つた頃には、最う土沙降りになつて、樋をつたふ

雨の音がやかましく聞えた。室の中は人香が籠つたやうで、一しほ息苦しい。

「最う何時でせう」と、女はうつとりとしたやうな顔をして云つた。

「おい、最う何時頃だい」と、私は更に膳を下げに來た女中に訊いた。

「へえ」と、女中は二たび膳を下に置いて、「今し方十時を打ちました。」

「あゝ左様か。」

女は女中が扉を閉めて廊下へ出たのを見ると、何やら急に落着かぬ素振になつた。

「私最う自宅へは歸れない。」

私は黙つて女の容子を見て居た。

「本當に最う歸られない」と云つて、不圖、私の容子に気が附いたのか、下から顔を覗き込むやうにしたが、「私、今日から貴方の寺へ押掛け

て行つても宜う御座いますか。」

「來る氣が有つたら、被人しやいな。」

「何も致しませんよ。」

「何も爲なくつても宜う御座んす。」

「併し、あれぢや可厭だ。外の事を要求なすつちや——唯、一緒に棲むだけ。」

私は何を云ふのかと思つた。

「此頃、大神寺へは行かないんですか。寺で疲

て居るのなら、彼處でも可いんでせう。」

「え、彼處の坊主が仕様のない坊主ですから——焼餅など焼いて。」

「坊さんが焼餅を焼く。可笑しいんですね。」

「そりや坊主だつて——それに少し譚が有るんですから。」

私は何事かと胸を躍らせた。

女は私の容子を尻目に掛けたまゝ、得意らしい笑ひを口の邊りへ漂はせて居たが、急に眞顔になつて、

「禪の方でも、これは祕密に成つて居て、滅多に他人に云つちや不可いんですが——大分進んだ所に婆焼庵と云ふ公案がある。」

「公案とは」と、私は口を入れた。

「え、左様云ふものが老師から出るんです。老婆庵を焼くと書くんですが、其解答を用意して入室した時、老師の前で——」

虚誕だ！何を云ふのかと思ひながら、其中から私は堪らないやうな、可厭な心持がした。

「それで、そんな事が有つてから、彼處の坊主が私のことを何とか思つて居る様なんですと、女も早口に言葉を次いだ。「現に『禪』が出て

からも、あんな事が實際あつたかなんて、長い手紙を寄越すんですが、それが全く別の意味な

んですから。

私は返辭をすることも忘れた。

何の爲にこんな事を云ふのだらう。一時の座興か、それともあの女に繋がる私の執着を根柢から覆さうための作話か。いづれにしても興の醒めたことには違ひない。

室の中は彌々うひとして、じとくと肌汗が滲んだ。そこへ足長の蚊が来てへばり着く。女も額に汗掻いて、ぼつと上氣した。

「最もう私共も戻りますから、お床を」と、女中が這入つて来た。

「そんなに晩いのか」と、私も今更今日の成行を思つたが直に如何成るものかと思ひ返した。

「如何しませう。自宅へ電報でも打つて置きませう」と、女は又念におど／＼して来た。

私にはそれが憐れに見えた。

「それが可いでせう」と云つて、女中に吩咐けて電報用紙を持つて來させた。此方の居場は省いたが、女の言ふ通りに文句を認めて、二たび車夫に持たせて電信局まで遣つた。

「寢ませう。左様して居ても仕方がない。」

かう云つて、私は蚊帳の中へ這入つた。

恰度一時間計りしてから、宿の大戸をどんと敲く者がある。四邊が寢鎮まつて居るだけ

に、それが手に取る様に聞える。

女は急に半身を起した。

「お宅から」と、私も聲を呑んだ。

やがて、廊下を走る女中の足音がして、前に遣つた帳場の車夫が戻つて來たものと分つた。

私は寝苦しい一夜を明かした。朝、目を覺ますと、敷蒲團は寢汗に冷々として、身體は綿の様に疲れて居た。

未だ薄明りの間から、女は起上つた。私もつづいて顔を洗ひに立つた。洗面所には早起きの客が二三人居たが、どうも客子が日本人らしく

ない。間の延びた顔をして、じろ／＼二人を眺めて居る。やがて頭を洗つて仕舞ふと、皆こそ

こそと二階へ上つて行つた。

あゝ支那人の下宿！ 二人は支那人の下宿に泊つて居たのか。

左様云へば、昨宵からどうも變だなと思つたことが、一々點頭かれる様でもあつた。何だか、

其邊の柱や壁迄が薄汚れて居るやうにも思はれ出したが、それと思ひ返せば、昨夜といふ一夜の宿には應はしいかも知れぬ。

そこ／＼に合嗽をしたまゝ、座敷へ引回した。女は先へ戻つて、鏡臺の前に寢亂れ髪を直して居たが、

「彼處に居たのは、皆な支那人の様ですね」と云つても、わざと右に左に櫛を持扱つたまゝ、振回らうともしなかつた。

私も窓の闔に腰を掛けたまゝ、黙つてそれを見て居た。これから二人の身の處置を如何したものであらう。決心次第で、直にも此處を立たなければ成らぬと思ひながら、これからの事よりも、昨夜の一夜が心に懸つた。

女は實筋から胸へかけて、思つたよりも瘡せて居た。

何だかぐつたりして、骨の折れるやうなことは考へたくない。

其間、女は指先で生毛の様な額の後れ毛を直したまゝ、鏡臺を片寄せて、眞面に顔を見合せた。何か云つたらしいが、能く分らぬ。

途端に女中が顔を出して、

「あの、此方様へ訪ねてお出に成つた方が」と、二葉の名刺を出した。

「え、私の所へ？」と云つたまゝ、私の顔色はさつと變つた。

「玄關に待つてお出ですが、此方へお通し申しませう。」

名刺の主はそれでも神戸と第一人の知人であつた。昨夜から二人の跡をたづね廻つて、やつ

と突留めたこと云ふことである。何でも女の宅へ出した電報から足が附いて、郵便局で訊くと、直に此處だと知れたさうな。私は餘りのだらしない身に、置場もないやうな心持がした。他人事の様に、啞く口を結んだまゝ、女は只側の者のするが儘に成つて居た。間もなく腕車に乗せて連れられて行つた。少時して、私も一人こそ〜と其宿を出た。

十

あの朝、あの様にして別れた限り、あの女は消息はふつと絶えた。偶々あの女が自宅へ戻つてから、私のことを悪様に罵つて、無理にあらんな所へ連れて行かれたとやら、如何されたとやら云つて居るとは聞いた。あの女が正可そんな事も云ふまいとは思つた。又あの女だからそんな事位言ひかねないとも思つた。何れにしても、私にはそんな事は如何でも可い。私は只あの女に逢ひたかつた。あの女の代りにと思つて「煉煙」を書いたのだが、一度あの女に逢つてからは、そんな小説など見かへる氣もない。自分の描いた女では、自分を満足させることはい出来ない。縱令何んな女でも——何んな背景のない女であつたにしても、矢張あの女の側に居

たい。過去のことなどは如何でも構はぬ。最もあの女の心を動かさうとも思はぬから、強ひて物を言はんでも可い。物は言はんでも、只あの女の顔を見てさへ居りや可い。逢ひたいと思ふ時、自由になふことが出来さへすりや、其上の望みはない。私はそれで澤山だ。其日が来るのを、かうして氣長に何日迄も待つて居る——何日迄も。

あの女を思ふ日はついででも、あの女が如何して居るかも知らない。何をして、何を考へて居るやら、皆目分らない。私は暗がりを手探りで歩くやうな、遺瀾のない思ひがした。こんな思ひが募つては、ふら〜と寺を飛出して見ても、さて、何處へ行くといふ宛もない。一足づつあの女の棲家に近づいて、夕方の暗まぎれにぐるりと垣根の外を一周りして來ることもあつた。自分ながら、昔の人情本の中にでもありさうな、意氣地のない今様ぐうたら男の身の上も思ひ合はされて、流石に後日たい。秋へかけて、しと〜と長雨がつづいた、日に日に單衣の肌ざりがうすら寒う成つて行く。私も外出を止めて、机の前に坐つたまゝ、雨に濡れた石塔を見て暮した。石塔は圓いのも、角なもの、五輪の形をしたのもあつた。此間か

ら墓地の移轉が始まつて、片端から掘削して何處かへ引いて行つたが、それも止んだ。其跡を地均しして、二階建ちの長屋が建つと云ふことであつた。それが雨のために抄取らなかつたのを、やつと雨合を見て、土臺を据ゑて細い柱を立てた。明くる日は最う屋根屋が來て、木羽板で屋根を葺き始めた。壁下地に取かゝるのもあつた。

私は所在なきに、毎日窓からそれを見て居た。こんなにして、此窓の前にも長屋が建つ様になつたら、今に此部屋も見捨てる外はない。其上、又見知らぬ家族の中へ遣入つて行くのも可厭だし、そしたら、寧ろ——私は不圖故國へ歸つて見たいと云ふやうな心が泛んだ。何處へも行く所がないとしたら、人間は矢張生れた國へかへる外はない。すべて傷いた者、敗れた者の歸つて行く故里へ——が左様思ふ下から、自分で自分を裏切るやうな、冷やかな笑ひが泛んだ。私は二たび隅江を見ては成らぬ。矢張東京に居るんだ。東京に居たとて、別段當事もないが、切めてあの女の住んで居る所に居るのだと思へば、縱令顔は見いても、聲は聞かないでも、いさゝかの思ひ遣りに成らぬこともない。あの女と同じ土地に、同じ呼吸をして、

あの女も歳を取るのだ——私も歳を取つて行く。あの女が生きて居る間は、私も生きて居なければ成らぬ。

それからそれへ、斯んなことを想ひつゞけては、氣勞れに勞れて、其儘うとく寝入ることもあつた。此日も、疊の上に肘枕をしたまゝ、思はず轉寢をしたと見えて、眼を覺ました時には、朝から降りつゞいた雨の脚も霽つて居た。私は起上つて、庫裡の流元へ顔を洗ひに下りた。

何やら戸口で案内を乞ふ聲がする。誰も出て行かぬと見えて、先刻から幾度も繰回して喚んで居る。何うもそれが女の聲らしい。

私は歸りしなに茶の間を覗いて見たが、鐵瓶の湯が吹いて居るのに、誰も居ない。裏へでも出て居るかと、縁側に立つて見廻したが、其邊に姿も見えぬ。で、止むを得ず、引回して、自分で上櫃へ出て見た。

この小寒いのに着衣を着て、乳呑兒を十文字に背負つた女が、片手にびしょ濡れの蝙蝠傘を下げて、格子戸の中に立つて居たが、私の顔を見ると突然お叩頭を二つ三つした。

「何か御用ですか」と、私は立つたまゝ云つた。「へえ、あの此方が正定院様で？」  
「左様です。」

「あの一寸伺ひますが」と帶の間からよれよれに成つた紙片を取出して、「私は斯う云ふ者を尋ねて参りましたが、角の荷屋さんで訊きますと、四十三番地は此方一軒だと云ふことで——」  
私は其紙片を手に取つて見た。成程、築土八軒町四十三番地大工職丹羽辰五郎とある。

「これは番地が間違つてるやうなことが有りませぬか、私も能くは知らないんだが。」

「へえ」と、女は當惑さうな顔をしたが、「で、若しや此方で何つたら分るかと思ひまして。」

「左様ですねえ。住職でも居たら分るかも知れんが、何しろ此寺の中にや左様云ふ人は居ないやうですよ。」

「へえ」と、いよく泣出しさうな顔に成つた。其顔が如何にもあどけない。背中に子供を負つては居るものの、母親自身未だほんの子供の様にも見えた。

「如何したら可いので御座いますせうね。」

「さ」と、私はそつと脾弱さうな子供の寝顔から眼を離して、「交番で訊いて見たのですか、交番で訊けば先の方が此邊に居さへすりや大抵分るでせう。」

「左様ですか、何うも有難う御座いました」と、女は丁寧に頭を下げて、やがてすゞぐと出て

行つた。門迄行くとも、關の上に子供を下して、二たび背負ひ直し居るやうであつた。

私はそれを見送つたまゝ、部屋に引回した。何と云ふこともなく、肥江があんなにして自分を尋ねて來たらと云ふやうなことが思はれた。他人の子を生んで、内懐をはだけながら、乳房を衝ませて居る所なぞも、まざぐと眼に見えた。その日は到頭酒を被つて寝て仕舞つた。

何時の間にか、私は酒に親しむ癖がついた。

「煤煙」を書いて居た頃、夜遅く迄書き續けて、眼が冴えて眠られさうもない時、冷酒をあふつて床に入り／＼したのが癖に成つたのであらう。近頃は庫裡の板の間に酒樽を据ゑて置いて、呑口からたぶ／＼と湯呑に注いで来て、それをぐいぐい飲りながら筆を握ることもあつた。

一度出詣つた煤煙も、本屋の番頭が此儘にするのは餘り残念だから一册宛分本にして出して見たいと云ふのに、うかた乗せられて、私もつい其氣に成つた。そのの校正やら、氣に入らぬ所を直すやらで、年の暮は忙しなく纏つた。明けの春、第一巻が市上に出たが、案じた程の事もなく濟んだ。第二巻は二月の半ばに出した。それだけならば何事もなかつたものを、本屋が故意に出版局を後らしたとかで、名義人

として、私は法廷へ喚出された。此小説の世に出るためには、おそかれ早かれ、いづれ不祥な事が起らば止むまいと思ひながら、事が事なので、それが爲に作物までも滑稽化されたやうな心持もして、忌々しさの遣場もない。

それでも、生れて初めての場へ出ると云ふことに、一種の好奇心がないでもなかつた。私の前には、請負師らしい、でつぶり肥つた男が、抵當物件の騙取か何かで裁判長の訊問を受けながら、分り切つた罪跡を晦まきうとして、つべこべ述べて立てて居た。それを頷いと思つて聞きながら、傍聴席に控へて居ると、間もなく喚ばれて榎木の前に立つた。取調べは三分間許りで済んだ。

私は法廷を出て、待たせて置いた腕車に乗らうとしたが、何うも此儘歸る氣にも成れない。で、車夫だけかへして、一人日比谷公園の門を這入つた。少時木立の中をくぐりつて歩いたが、噴井の池の畔へ出ると、急に思ひ附いて松本樓の二階へ上つた。片隅の卓に腰を下して、煙杖をついたまゝ、眼を瞑つた。

何うせこんな事が滑ちだらう。  
私、はせくら笑ひたいやうな心持に成つた。  
自分も他人も笑つて仕舞ひたいやうな——その

下から、ずん／＼地の底へ落ちて行くやうな氣もした、木の根に纏つた指の力が脱けて行くやうな。

生麥酒の大盃が行列をつくる頃、私の顔もぼてつて来た。夕日の射す窓から噴井の飛沫を見下しながら、何日ぞや小早川が舞妓を伴れて居るのに此處で出逢つたことを想出した。あの後、小早川と舞妓とは噂の種にも成つた。あゝして酔はれるものなら、自分もまたび酔つて見たい。

私は椅子の背に凭れたまゝ、昔知つた女の冷たい鬢の毛を心に描いて居た。  
やがて、つと立上つて電話室へ這入つた。手早く電話帳を繰つて、下谷の一九一三番へ繋いで、女中頭のお直と云ふのを喚んで貰つた。間もなく聞き覚えのある聲がして、  
「何誰? 何方様やらでしたのね」と、案外生真面目な訊ね様である。

それに出鼻を挫かれて、其儘切つて仕舞はうかとも思つたが、又思ひ直して、  
「高砂屋の千香は未だ居るのかい」と訊いて見た。  
「千香さん——居ますよ。」  
「何だぞ、二三年前に出て居たのぞ。」

「ぢや、前の千香さんだ。あの女は去年の暮に廢業しましたよ。」

半ば待設けたことながら、私は間の悪い思ひをして一寸返辭にもまごついた。

少時すると、又お直の聲がして、  
「貴方、失禮ですけれども、何誰やらでしたのね」と訊く。

「随分薄情だね。」

「あら——だつて電話ちや分りませんわ。ね、ですから是非被入して頂戴な。千香さんが居ないたつて、そんなにお見限りなさるものぢやありませんよ。」

「左様なら」と、電話を切らうとした。

「ね、お待ち申して居りますよ、屹度ですよ」と云ふ聲が、未だ聞えて居た。

元の座へ戻つて腰を下すと一緒に、何とも云はれぬ可厭な心持がした。何と思つてあんな眞似をしたらうと思つても、最う追附かない。左様思ふと、此儘にするのが一層不問な様な氣もした。で、何がなし追かけられるやうな心持で其家を出た。電車道に沿うて、銀座の方へ歩いて行つたが、何處へ行かうと云ふ當もない。小早川は如何して居るだらう。急に逢つて見たいやうな氣がした。いつそ今夜はあの男を喚出

して、あの男一流の雛妓を相手に飯事でもするやうな遊び方でも見て居ようかと思つた。私は最う何處へ行つても傍觀者の側に立つ外はない。

一時間後には、池の中の旗亭の一間に胡坐をかいて居た。障子の腰硝子を透して、黝黒い池の水を眺めては、時々想出したやうに盃を上げた。此家へ着くと、私は直に手紙を持たせて小早川を呼び遣つた。それと一緒に、大抵當りをつけた雛妓を名指して三人語り掛けて置いた。その一人は間もなく遣つて来た。お客の顔馴染がないので、一寸雛妓がなさうであつたが、女中の側へ寄つて行つて、何やら耳こすりをした。

「左様ねえ」と、女中は私の顔を見て笑つて居る。「百合ちゃんも来るの」と、今度は甘えたやうな聲を出して、人並外れた猪頭を傾げた。

「誰も来ないさ、お前一人を喚んだのよ。」  
「左様、嬉しいわねえ」と、鏡子を取上げて、「お酌！」

私はその人を呑んだやうな言草を聞くと、ついで返辭も出さされた。  
早く小早川が遣つて来て呉れたらと、心の中

に念じた。やつと使の車夫が戻つて来たところで、小早川は三時頃に宿を出たまゝ未だ歸らない。此頃は好く晚におそく成るから、お歸りの程も分らないと云ふ口上である。私は思はず舌打をした。

「何方が被入しやられないの」と、側から猪頭が口を出した。

「うむむ、ぶんたが、又氣を更へて、此頃小早川は相變らず遣つて来るかい。」

「ええ、被入してよ。あの、そら、あの方ですら。一昨日——一昨々日の晩も御目にかゝつたわ。」

「今夜邊り如何だらうね。何處かへ来て居ないかしら。」

「ああ、此度被入してよ。電話で訊いて見ませうか。」

「うむ」と、私は笑つて點頭いた。

直に駈出さうとした時、廊下で若い女の聲がした。

「あら、百合ちゃんだ」と、其儘駈出して、一人でべちやくちやと喋舌つて居たが、「そんな事云つても、私知らないわ」と、鼻へかゝつたやうな聲も聞えた。

三人とも揃つて這入つて来た。一番後から来た柄の小さいのが、私の顔を見て、何やらうそと笑つて居たが、突然、  
「しばらく」と云つた。  
「私を知つて居るのかい。」  
「知つて居てよ。何日か日比谷公園でお目にかつたわ。」  
「能く記憶えて居るね。」  
「ええ、感心ですよ。」  
私は不圖此子の可愛らしい味噌齒に目を留めた。一張羅の友禪に帯を矢の字に結んで、頭からは水の滴るやうな化粧をして居るものの、兩手に赤く凍瘡の出来て居るのも憫々しい。かうしてむくつた男が来て蹂躪するのを待つて居るのだと思ふと、何やら雛妓を繪の様に眺めて居る小早川の心持も解つたやうな氣がした。併しいよ／＼小早川が来ぬとすれば、如何したら可からう。相手と同じ水準に下つて洒落を云つたり、役者の噂をしたりするのが面倒だとしたら、どうも手持無沙汰で成らぬ。色氣附いたのが、わざと邪氣ないやうな物の言樣をするのも煩かつた。

「誰か一人掛けませうか、雛妓さんばかりぢや詰りませんわ。」  
女中がかう云ふのにつれて、直ぐ「それぢや」

と云つて鞆だ。何事も女中任せにした。二三  
人電話を掛けて、最後に一人やつと来ることに  
成つた。

其間に小早川が遣つて来るかと心待ちに待  
つたが、矢張来ない。私は火桶を抱へたまま、  
ちびり／＼盃を襲ねた。やがて音のせぬやう  
に襖を開けて、一人の妓が半身をあらはした。  
「姐さん、お先きへ」と云つて、ばた／＼と座を  
譲つたが、鑼妓どもとは一人も顔輪染がないら  
しい。

「鑼助さん、お盃一と、女中が取次いだ。  
一有難うと受けたま、妙に俯向き加減にして  
顔を上げない。

私は這入つて来た時から、此女の顔が氣に成  
つた。折々進む様にして、凝乎と其横顔に見入  
つた。稍而長の顔で頸が二重に括れて居る。只  
髪は剛迄濃い。それが爲に、何處か下卑でも見  
える。矢張自分から似させようと思つて居るん  
だと思ひ返した。

三味線を下に置くのを見て、私は女の前へ火  
桶を押して遣つた。

「火が深けた所爲か、寒いね。」  
「冷えますこと」と、女は其側へ寄添ふやうに

して、兩手の指を拵合せながら疊の上を見詰め

て居た。何處か人擦れたやうな所も見えるが、  
又何處か含羞んで居るらしい様子もあつた。二  
言三言談話もした。ふる／＼と聲帯が斷ち切れ  
きらな細い聲を出して、物を言ふたび蟲齧の沁  
むやうに息を吸ふ癖があつた。私にはそれもあ  
る女を想出させる種子であつた。

其間、鑼妓どもは勝手な事をして遊んで居た  
が、好い加減にして切上げることにした。がや  
がやと立上つて、銘々迎ひに來た腕車に乗つて  
かへつた。私は一足後れて出た。

戸外の冷たい風に吹かれて、ふら／＼と反橋  
の上迄來かゝつた時、背後から棲をとつて駆け  
て來た女が、

「御一緒に参りませう」と云つて、びたりと寄添  
ふやうにした。

冬の夜の深更とて全く人通りがない。向側  
の待合でも戸を閉めたのか、毎もの書割のやう  
な二階の灯も見えぬ。私は池のまはりを跟けな  
がら大踏に歩いて行つた。自分ちや酔はない積  
りで居ても、書間からの飲みついでで大分脚元  
が怪しい。一寸した土塊に躓いて、意氣地も  
なく膝を突いた。

「あ、危い」と、女は聲を上げて駆け寄つた。  
「まあ速いこと」と、手を貸して扶け起したが

ら、「私や又急いでもんだから、こら、こんな  
に動悸がして」と、せい／＼息をはずませながら  
立つて居る。私は夜目にも女の白い呼吸を見る  
やうに思つた。

「ね、私の行く所へ行かないか」と云つて見  
た。何となく左様云はなきや成らぬやうな氣が  
した。

「え、と云つて、少時言葉途切らしたが、小  
さい聲で、お見送り申ませう。」  
何だ、作聲をしてと思つたが、其儘何とも云  
はずに歩き出した。雪見橋を渡つて仲町へ出る  
と、未だちらほら往來の人の影も見えた。私は、  
不圖何をするのかと思つた。暗がりの街を女の  
手を引いて歩く——あの女に似た女の手を

私は堪らないやうな氣持に成つた。  
「一寸用事を想出したから、今夜は歸るよ」と  
言出した。

「え、と、お歸りに成るの。」  
「今夜は歸るんだ」と、四邊を見廻して車夫の  
提灯に眼を附けたが、一明日にも喚んだら來  
て呉れるだらうね。」

「何卒」と、女は頭を下げた。  
私は直に腕車を喚んで乗つた。二、三間駈出し  
た時には、女は未だ其處に立つて居たが、二度目

にはばた／＼と駆けて行く後姿が見えた。

一里の夜道は、提灯の灯も米つて、膝掛の下ながら膝坊主が千切れる様に冷たかつた。

朝、目を覺まして、平常の震床の中で寢て居るのだと気が附いた時には何だか心強いやうな心持がした。其中から底に水が差して来るやうな寂しさもあつた。あゝ、常に――恆にと云ふことは、人間にはない。

一日ぶらくして居たが、夕方に成るのを待遠しいやうな気がして、外出の用意をした。何をしに行く。

電車を降りて、少時清水堂邊りでぶらくしながら、軒洋燈のつく頃を見計つて、つと山樂の軒をくぐつた。家の中の普請をしたと見えて、前とは座敷の模様も變つて居た。私は蒸花を入れて来た女中を見回つて、

「お直さんが居たら、一寸来て貰つて呉れ」と頼んだ。

「え、何でした」と、恍けた面を上げて、「お直さんを喚びますか。」

「あゝ」と云つたまま、脇息に凭れて足を投出した。

やがてお直が段梯子を上つて来た。「まア」と、仰山に驚いたらしい顔をして口を

喋んだ。「本當に如何なすつたんで御座いますえ。」

「如何もしないさ。」

「それだつて――あゝ、左様だ、昨日電話を掛けて下さつたのは、貴方でしたらう。」

「あゝ、飛んだ事をしたね。」

「何ですよ。だつて、何うも聞いたやうな聲だと思つても、能く分らないし――左様ぢやありませんか。最う二年越しですよ。」

「左様かい。」

「時に、千香さんね」と、何やら聲を低めて、「あの女も可憐な事をしましたよ。」

「へえ、廢業したと云ふぢやないか。」

「そりや、引くには引きましたけれどね、自宅へ引いて、到頭肺病で死にましたの。」

「死んだ？」

私はぎくりとした。

「眞個弱い體質でしたからね。それに、矢張りこんな商賣をして居ちや、如何してもね。」

「ぢや、何だね」と云つたが、何を云はうとしたのか、つい馴れして其先が出なかつた。固より其女ともさしたる譯があつたのぢやない。只肉と肉との關係である。それも錢で購はれた一通りのものに過ぎぬ。それにしても――私は

冷たい手で抱かれるやうな心持がした。

「本當に可憐なんですよ」と、お直は何氣なく言葉をつづけた。「お寺詣りでもしてお上げなさいな。」

「うむ、左様でもしようかね。兎に角新聞に送喚はれた仲なんだから。」

「えゝ」とにや／＼笑つて居たが、何の事とも解らなかつたらしい。

「で、今夜は」と、急に眞顔をつくつて、

「誰か喚んで来ませうね。」

「さ。」

「何ですなえ、そんな陰氣な顔をして、一つ景氣をお附けなさいよ。」

そんな事を云はれると、いよ／＼尻込するのだが、それでも、「吉三樹の雛助と云ふな、此家へ来るかい」と訊いて見た。

お直は一寸首を傾けたが、「此頃に出たんでせう。」

「左様らしいね。」

「ぢや、雛助さん掛けますか。」

「あゝ。」

一人置いてけ抛りにされて、酒盃を下に置いたまゝ、まじ／＼と松に目の出の床の懸軸を見

て居ると、やがて「此方？」と云ふ聲が段梯子の

上(う)でして、すうと襖(ふすま)が開いた。一寸顔(いちすんがほ)を見合(みあ)せたが、

「昨晚(こぞ)はと云(い)つて、側(わき)へ寄(よ)つて來(き)た。」

女(おんな)は昨宵(こぞ)よりも太(お)り肉(にく)に見(み)えた。

「此方(こなた)は近頃(こゝろ)奥様(おくさま)をなくして弱(よわ)つて居(ゐ)るんだから」と、後(ご)から銚子(ちやうし)の代(か)りを持(も)つて來(き)て、お直(なお)がこんな事(こと)を云(い)つた。女(おんな)はじろりと私(わたし)の顔(かほ)を見(み)た。

お直(なお)の降(くだ)りて行(い)つた後(ご)で、別(わか)りに云(い)ふこともないから、「未(ま)だ出(で)て聞(き)がないんだつてね」と誤(あや)しいた。

「私(わたし)？ え、と駭(おど)かす。

「何時(いつ)披露(ひやう)目(め)をしたの。」

「此(こ)れ正月(げしげつ)。それ迄(まで)は仲ノ町(なかつのまち)に居(ゐ)ました。」

「ぢや、江戸前(えどまへ)の藝者(げしや)なんだね。」

「でも有(あ)りませんけど——それでもね、此處(こゝ)へ來(き)てからは随分(ずいぶん)勞(らう)しますのよ。」

「そんな事(こと)を云(い)つても可(か)いのかい。」

「如何(いか)して」と、女(おんな)は急(いそ)に顔(かほ)を上げたが、「いえ、そんなんぢや無い、決してな様(さま)云(い)ふ譯(わけ)ぢやあり

ませんよ、只(ただ)ね、彼方(こなた)で餘(あま)り賣(う)れないもんだから、此方(こなた)へ來(き)て來(き)るに云(い)はれるので——斯(か)う云(い)ふ商賣(しょうばい)と云(い)ふものは可(か)厭(いや)なものですよ。」

女(おんな)の述(のたま)懐(なつか)は本當(ほんとう)らしくも思(おも)はれた。

「其間(そのま)、好(よ)い旦那(だんな)でも目(め)附(つ)けるさ。」

「左様(さやう)です、精(せい)々(ざ)氣(き)を附(つ)けて搜(さが)しませうよ。」

かう云(い)つたまゝ、初(はつ)心(しん)さうに巻煙草(まきえんそう)の吹(ふ)きで

火鉢(ひばち)の灰(か)を撒(ま)均(ら)らして居(ゐ)る。

一つは髪(かみ)の結(むす)方が違(ちが)つて居(ゐ)る所(ところ)爲(な)りでもあつたらう。昨夜(こぞ)あれ程(ほど)迄(まで)に似(に)たと思(おも)つたものが、今(いま)見(み)ると左程(さほど)でもない。何處(どこ)か似(に)てゐる所(ところ)はないかしらと思(おも)つても、如何(いか)見(み)ても、矢(や)張(はり)普通(ふつう)の藝者(げしや)者(もの)である。私(わたし)は騙(だま)されたやうな氣(き)もした。

「あ、女(おんな)が死(し)んだとしたら——

私(わたし)は不意(ふい)にこんな事(こと)を想(おも)つた。此家(このうち)で知(し)つた前(まへ)の女(おんな)は死(し)んだ。死(し)に角(かど)に其(その)暖(ぬか)かい息(いき)に觸(ふ)れたおぼえもある女(おんな)が死(し)んだ。斯(か)うして私(わたし)の知(し)つた女(おんな)が一人(ひとり)宛(あて)おひ／＼死(し)んで行(い)つたとしたら——

そして、私(わたし)一人(ひとり)後(ご)に取(と)残(のこ)されたとしたら——

何時(いつ)の間(ま)にやら、女(おんな)は脇(わき)に垂(た)れた私(わたし)の手(て)を執(と)つて、一本(いっぴん)本指(ほんさし)を弄(も)つて居(ゐ)た。私(わたし)の注(ちゅう)意(い)を惹(ひ)くやうにそつと手(て)の甲(か)を撫(な)でて見(み)たりした。それ

に氣(き)が附(つ)いてからも、私(わたし)はわざと知(し)らぬ顔(かほ)をして其(その)儘(まま)抱(かか)つて置(お)いた。

「私(わたし)、此方(こなた)へ來(き)て居(ゐ)ても、お稽古(けいこ)には毎(まい)日(にち)吉原(よしかわ)迄(まで)行(い)つてますのよ」と、女(おんな)は其(その)手(て)を離(はな)しながら云(い)つた。

「随分(ずいぶん)大儀(たいぎ)な話(わ)だね。」

「え、だつて、それ位(くらい)のことは。それと親戚(おつき)が彼方(こなた)に居(ゐ)るものですから。」

「何(なに)だい、親戚(おつき)さんは。」

「親爺(おやぢ)ですか」と、一寸(いちすん)此方(こなた)を見(み)たが、「吉原(よしかわ)の幫間(はなむち)。」

私(わたし)は思(おも)はず其(その)顔(かほ)を見(み)返(かへ)した。幫間(はなむち)と云(い)ふもの、爲(な)る永(なが)水(みづ)の、梅(うめ)扇(あふぎ)で讀(よ)んだ外(ほか)には知(し)らぬ。只(ただ)、左様(さやう)聞(き)けば、此女(このおんな)がわざとらしい嬌(こゝろ)を合(あ)んだ中(なか)にも、少(すこ)しも思(おも)ひ上(あ)つた所(ところ)のない、藝者(げしや)らしい顔(かほ)で、持(も)たぬ様(さま)に見(み)えたのも、今(いま)更(さら)に合(あ)はされる。

女(おんな)は何(なに)もなく語(かた)りつづけた。

「あんな商賣(しょうばい)をして居(ゐ)ながら、本當(ほんとう)に髪(かみ)人(ひと)ですよ。第一(だいいち)お入湯(いりゆ)が嫌(きら)ひで、幾許(いかに)押出(おしだ)すやうにして、一(ひと)箇月(かんとし)に一度(いちど)位(くらい)しきや入(い)らない。」

「不思議(ふしぎ)だねえ、それが本當(ほんとう)なら。」

「え、眞個(まこと)なの。」

こんな事(こと)から、お座敷(ざしき)ではベコ／＼と頭(かぶ)を下(くだ)げて居(ゐ)るだけ、家(うち)では又(また)我儘(わがまま)で手(て)に負(か)へぬ、始終(しじう)氣(き)六(む)かしい顔(かほ)をして、妻(つま)子(こ)にも小言(こご)の絶間(たぎり)がない、其(その)爲(ため)家中(うちなか)の折合(せあひ)がわるく、阿母(おはは)さんが霞町(かすみまち)で二度目(にどめ)の袂(たもと)を執(と)るやうに成(な)つたんだと、そんな事(こと)迄(まで)話(わ)して聞(き)かせた。最後(さいご)に、

「私(わたし)、それでも阿母(おはは)さんより阿父(おとう)さんの方が好(よ)い。」

女(おんな)の述(のたま)懐(なつか)は本當(ほんとう)らしくも思(おも)はれた。

いのよ」と云つた。

何の爲に此女がこんな話をしたものか、私には解らない。

其夜、一時近く、私は此家を出た。

今度吉原のお師匠さんのお波ひが常盤華境であるんですが、貴方も来て下さらない？」と、歸りな女が云つた。

「お前さんも出るのかい」と訊くと、

「え、お因台に話らないものを。」

「何だい。云つて御覽なさいな。」

「本當に引立たなくつて、話らないもの。賤機帯の船頭と、それから名取が五人揃つて、新しく手の附いたものを一」と。

賤機の船頭なら好いぢやないか、私も二三年前歌舞伎の藤間の波ひで見たやうだ。」

「好う御座んしたでせうね。藤間さんのは土臺が舞臺踊ですから、私達のは云はゞ座敷踊で——只、お座敷ぢや矢張ね。」

「そんなものかい。」

「ですが、本當に被入して下さるの。」

「お邪魔に成るんでなげりや、見せて貰はうね。」

「ぢや、屹度、宜う御座んすか。」

「あ、屹度。」

二人は言葉番へ別れた。

### 十一

朝晴れの日、私は手に持った鷲ペンを抛出して、疊の上に寝轉んだま、天井を見詰めて居た。廊下を小走りに来る女の足音がして、

「朝からお勞れ？」と、梵妻の聲が聞えた。

思はずはちりと眼を聞くと、

「まあ眼を覺ましてお坐んなさいな。好い物が參りましたよ」と、蓮葉な口の利方をして、手に持ったものを枕頭に置いた。

「何です」と云ひさま、起直つて見ると、小本に型どつた番組に花柳歌代として、扇子と手拭とが添へてある。

「へえ」と云つて手に取りながら、「誰が持つて來ました。」

「左様ですね。六十位の肥大つた婆さんに、てら／＼した坊主頭の男が隨いて——二人とも身形はちやんとして居ましたよ。お婆さんが白襟紋附なら、片方も仙臺平の袴を穿いて、そりやア流とした服装でしたよ。」

「未だ居るんですか。」

「いえ、最早歸りました」と、梵妻は一寸間の悪さうにしながら、「一只ね、此方に小鳥さんと仰有

方が被坐かと言いて、此三品を差出して、何分御最良にと云つた限り、さつさと歸つて行きましたよ。門前に腕車が待つてゐるやうでした。」

「ふむ」と云つたま、私は番組を換げて見た。

奉書を二つ折にして、上り藤を桃色で指込んだ上に、

一、種馬三番叟

三番叟社中  
長 唄 連 中

とあるのを手初めに、番組の次第が並べて書いてある。手習ひ子だの、潮波だのと順に繰つて行くと末の方に、一、賤機帯として、其下に戀助の名が出て居るのを見附けた。

「踊のお波ひですか」と、側から覗き込むやうにして梵妻が云つた。「好う御座んすねえ、本當に綺麗ですから。」

梵妻はそれから自分が小さい時に嬰のお波ひに出た話を長々と始めた。何で他人の持つて居るものを、自分も持つて居た様に云はなきや

氣の濟まない質だと知つて居るので、只「え、え」と空返辭をしながら、やつと追返して、又

餘念もなく其番組に見入つた。

私の所へこんな物を持つて來る筈はない。いづれ戀助が寄越したものは思ふが、それにしても——

兎に角、私は三種の物を地袋の上に置いた。赤や草色で縁取った包紙を見て居ると、薄暗い室の中が急に明るく成つたやうにも思はれる。明くる日の夕方、それとなく山樂迄行つて見ると、女は遠出と云ふので来なかつた。私は約束でも間違へられたやうな気がして、すこゝと戻つた。歸る途すがら、不圖、三月二十一日も最う四五日の間に來るのだなと思つた。去年の今頃は一生懸命に小説を綴つて居た。今年はこの道を歩いて居る。來年は如何成ることぞ。かうして年毎に違つた年回りを繰り返しながら、私の身は終に如何成つて行くことであらう。

いよ／＼お波ひの日が來た。一寸気が重い様にも思つたが、それでも午後三時頃から出掛けて見た。入口から素張しい景氣で、何だか脅かされるやうな心持もした。二階の隙間に假の舞臺をかけて、見物席は竹で仕切つてあるが、それも減茶々々、只黒山のやうな人の頭がざわざわとして、正面に垂れた幕の金字さへ濁つた空氣にぼんやりと霞んで見える。其中を疊下地に結つて肩を引いた女が右左往行人を分けて歩く。私は隅の方の柱に凭れたまゝ、其邊に居るお居もやすると、鏡を長くして場内を見渡

した。花道脇には常陸山かと思はれる角力取りが居る。長髪で袴を穿いた男は浪花節語りの雲右衛門らしい。何處にも色街の勢力がうかゞはれた。

幕が上ると、山臺の上に、ずらりと並んだ長唄連中の三味線に伴れて、八つか九つ位の分不相應に大きな髪を着けた女の子が、日傘を翳して千代紙の草紙を抱へたまゝ、ちよこ／＼と花道から出て來た。襟に揃んでの髪も美しい。番組を見ると、河内櫻おしんとあつた。大きなリボンを下げた花環なども舞へ持出された。

次は濱松風で、此兵衛に成つた女の調子外れた聲が聞き苦しい。私はかうして一人話相手もなく見知らぬ人々の間に挟まれて居るのが段々不安に成つた。終ひには舞臺よりも其方が氣に成り出した。で、少時廊下へ出て彼方此方見廻して居たが、別に仕様もないので、又元の座へ戻らうとすると、後から追廻るやうにして補助が跟いて、はそれ

ながら、何時の間に被入したの。一「好く来て下さつたわねえ」と云つて、前へ廻り「先刻から――最う歸らうかと思つてる。」「如何して、折角被入したんぢやありませんかと、急に鼻聲に成つて、

「最う二つで私の番だから、それだけでも見ていらして下さいな。」「あゝと、私は何方とも附かぬ返辭をした。女は間違の人を見い／＼、先達て親爺が参りましたでせう」と訊く。

「あれが阿父さんかい。」「私が好い加減に云つて、酒井様のお邸へ何つたついでに廻りさせたのよ。」「何だかお婆さんの人も居たと云ふが、それがお師匠さんだらうね。」「えゝ左様なの」と云ふ時、又幕が開いたらしい。

「ぢや、宜御座んすか。屹度被坐しやいよ」と云つたまゝ、ばた／＼と断けて行つた。其幕が下りると、直に又遣つて來た。伏目に足袋の爪先を見ながら、小さい聲で、「此間は失禮しましたわね」と呟く。

「それに、如何しても違つてお話ししたいことがあるんですが、一足先きに彼の家へ行つて待つて居て下さらないか?」「だつて、今夜は忙しいのだらうと云ふと、」「いゝえ、聞はないの、私、如何かして行くから。」「左様、屹度來られるね。」

「貴方も屹度ですよ」と心を推した。

次の幕は何が出たか知らぬ。いよ／＼此女の出る番に成つたが、吾妻八景とでも云ふやうな新曲の素踊で、歌の文句からして今めかしい。私は柱の蔭から見て居たが、それが済むのを待つて、匆卒に賑やかな人いきれの中を逃れ出た。

戸外はとつぷりと日が暮れて居た。

四疊半の下座敷で、水焜籠にかけた鍋の物から沸々と湯氣の立つのを見守りながら、私は箸を附けようとした。なかつた。

「何うも失禮しました」と、お直が這入つて来た。「今日は、何方のお歸り？」

「今迄お歌さんのお遊び。」

「あゝ、左様でしたな。何でせう、あの人も出たのでせう。」

「なに、そんな譯でもないのさ。」

それから、いろ／＼出物の噂などをして、段々芝居の話に移つた。此家の主婦さんが紅の國屋最辰だと云ふことも聞いた。そんなに芝居がお厭でないなら、千鳥會に附合つて貰ひたいとも云はれた。私は何心なく承諾した。

「それぢや、此次の總行には屹度切符を送りますからね。」

「あゝ。」

お直が外の座敷へ行くと、私は又一人に成つた。待遠しくもあれば、退屈もした。何の爲に私に先へ行つて待つて居れと云つたのか、疑へばそれも分らない。何だか、口から出せの言葉を買へたやうで、馬鹿々々しくも思はれて来た。「小走り」

其間に柱時計は十時を打つた。

今頃かうしてこんな處に、私は何をして居るのだらう。私は、不圖、あの女に對して申譯のないやうな氣がした。あの朝別れた眼り振向いても呉れぬあの女に對して——私は未だそんな氣があるのだらうか。あんなに迄突離されて居ながら、未だそんな氣があるのかと思ふと、自分ながら冷汗が流れる、誰にも云ふことの出来ないやうな冷たい汗が流れる。

十一時を打つた時には、私の身體中水に浸つたやうな疲労を覺えた。天井から下つた電球が薄暗いのも氣にかゝる。いつそ思ひ切つて此儘歸らうかと思つた。

俄にどや／＼と足音がして、段梯子の下で何やら啾く女の聲も聞えた。私は思はず耳を敏てた。

やがて女中が十能に火を持って来て、「お待遠さま、潮と見えましたよ。」

「解拂つて居るのかい。」

女中は只私の顔を見て笑つて居る。

「好いよ、私一人で行くから——關はない下さいな」と、襖の外で駄々を捏ねて居るらしい。

「まあ好いからお這入んなさいよ」と、お直の聲も交つた。

女中の手に倚つかゝつたまゝ、一目じろりと室の中を見渡したが、よろ／＼と跟けて来て、べつたり其處へ坐つた。其儘だらしなく兩臂を出して、飾臺の上に顔を伏せて仕舞つた。

「如何したんです、彌助さん。さ、起きて被坐しやいよ」と、女中が二三度肩を揺振つたが、

「好いよ」と云つたまゝ、女は顔を背向けた。

女中は私を見回りながらにや／＼として、冷たく成つた銚子を下げに行つた。

私は少時凝乎として、女の耳朶のうしろに後れ毛のへばり附いたのを眺めて居たが、

「おい／＼と坪起して見た。一何處でそんなに飲まされたんだい。」

「おや／＼、此人は可笑しな事を云ふよ。」女はむつくり起上つた。其眼の色が變つて居る。

「如何だつて可いぢやないか、他人のことなぞ。」

私はこれでも約束したんだから、未だ後におなつ姐さんや冬次さんが居残つて居たのを逃げるやうにして来て上げたんぢやないの。来る早々可笑しなことなど云はれちやア理まらない」と前先の荒いことを云つたが、急にがつくりとして、「貴方は普通の人よりもしつこいんだよ。」

私は黙つて相手の顔を眺めた。何を楯にこんな悪態を吐くのかと怪しみながら、此女が何日になく向ッ腹を立てて、やゝ氣色ばんだ顔のほんのりと色づいたのも憎からず思つた。

「何を見てゐるのよと、女は氣味悪さうに訊ねた。餘り相手が何とも云はぬので、却て無氣味らしい。

「お前さんの顔を見て居るのさ。美しい女と云ふものは怒れば怒る程美しく成るものだね。」  
「馬鹿にしてるよ、本當に」と云ひ捨てたまゝ、つと立上つて襖の外へ出て行つた。何處へ行くのだらうと、其後姿を見送るながら、私は何となく引摺んで抱緊めて遣りたいやうな心持もした。

其儘、女は暫く戻つて来なかつた。  
「ね、貴方一寸と、お直が這入つて来て、「雞鳴さん、最上鳴しても可いでせう。如何しても、今夜を過ぎなまきや済まないお座敷があるんで

すつて、あんな事に出りや、如何してもね、そんな義理も有るでせうから。」  
「あゝ左様か」と、私はお直の口を箝ぐやうにして、「左様云ふ譯なら、私も最上歸らうよ。」  
かう云つて立上つたが、帯を緊め直しながら、何だかお直の手前も氣の引けるやうな氣がした。そんな譯があるからこそ、来た時からぶり他人に當り散したのだなと、大方讀めたものの、それなら、何故ぞ〜私を待たせて置いたのだらう、待たせて置いて如何する積りだつたらう。

「何うも済みませんねえ」と、お直は背後から羽織の襟を直して居たが、「ぢや、最上一本熱いのを爛けて来ますから、それだけ上つて被入しやいな。」  
「うむ」と云つて、一寸躊躇したが、「矢張りさうよ。」  
「いよく立つ間際に成つて、雛助は玄關迄送り出した。私はそれを後日にかけたまゝ、黙つて陣車に乗つた。」

其後、しばらく彼の邊りから遠ざかつた。日の經つたつて、女のことと忘れるともなく忘れた。女の顔さへ想出せぬやうな氣もした。或朝、新聞を見て居ると、噂の種の中へ組入れ

た小形の寫眞が何うも雛助らしい。何心なく讀んで行くと、此頃大根河岸の旦那とやらを操なして、吉原の幫間櫻川のなにがしに身上りをして居ると云ふやうなことである。私は苦笑ひをしながら新聞を抛り出した。

それよりも、私の心を波立たせるやうなことが一つあつた。  
ある日のこと、私は郵便俣夫の手から一冊の雜誌を受取つた。かねて此號には「小説に描かれたるモデルの感想」といふ記事の中に、あの女の談話が出て聞いて居たので、何がな〜落着かないやうな心持がして、直様封を解く氣には成れない。今頃に成つて、あの女も何を云ふことが有るのだらう。何なりとも云ふが可い。

あの女はあの女で勝手なことをして居るが可い。私は私でそんな物はいぢに置けばかりと、其儘押入の中へ抛り込んだ。兎に角、私は同じ見るにしても、一刻でも後へ延ばして置きたかつた。  
夕方からぶらりと戸外へ出た。打水の香の心地よく、浴衣の新柄が流の様に店頭に吊される時節であつた。電車を降りて、私の足はおのづと山樂の軒をくぐつた。

「まあ随分お見限りでしたなえ」と、お直が愛想

好く迎へた。

私は座に着くと、「ありやア如何したい」と訊いた。

「雛助さん？」

「いや」と、頭振を揮つて、「例の總見の話さ。」

「左様々々、あんなにお願ひして置いてあれツ限りに成りましたねえ。ですが、紀の國屋は何とも折合が附かなくて、彼時からずつと大阪へ行つてますからね。」

私はそんな事情も聞いては居たが、わざと空懐けて、

「惜しいものだねえ、如何かして此方の舞臺を踏ませる法はないかしら。」

「ですから、皆さんがやきもきして被坐しやるんですよ。何ですか、此盆興行には矢張元の所から出るやうな噂もありますがねえ。そしたら何卒お願ひします。今度は屹度お知らせしますから。」

「あゝ、何卒ね。」  
「では、雛助さん掛けませうね」と云つて立上つた。

私は不圖何日ぞやの噂の種を想出したが、如何だつて關はない、又そんな事を氣にする人柄でもないと思ひ返して、其儘にした。一つは

其後如何成つたらうと云ふやうな好奇心も手傳つた。

やがて女は思ひなしか元氣のない容子をして這入つて来た。毎も素面の時は、いやに含羞んだやうな所のある女ぢやあるが。

「何日ぞやは大變失禮をしました。最う喚んで下さるまいかと思ひましたよと、こんな事も云つた。

私は女の額の邊りをじろくくと見ながら、「大變寒れたやうだね。苦勞でもあるのかい」と訊いて見た。

女は何氣なく、「左様ですか、そんなに見えますかねえ」と、黒く成つた眼瞼を引上げるやうにしながら、「私、今日は朝ツばらから何か好い事があるやうな氣がしてましたのよ。そしたら矢張貴方が来て下さつたわね。」

斯んなあざとい事を云ふ傍から、さも物臭さうな手附で煙草入を引寄せながら、ぷうと小鼻から煙の輪を吹出した。それが如何にも不貞腐れたやうにも見えた。

一時間許りそれでも話して居たが、一向に話もはずまぬ。私は此處へ来たのが今更後悔なやうな心持も出て、早く切上げて歸らうとした。

「此次は何日来て下さるの。」

「左様だねえ」と、私は立上つた。

女は側へ寄つて、相手の羽織の紐を弄りながら、来ないつもりぢやないの。えゝ、左様だ。それなら可いのよ、可いのよ。」

ずる／＼と滑り落ちるやうにして、足許に蹲んだまゝ、兩手で喉く額を押へて仕舞つた。

「如何したんだな、えゝと、私も身を屈めて無理に其手を離したが、女は本當に眼の縁を赤くして、涙を一杯溜めて居た。

如何云ふつもりかしらと、私は不思議でもあり可笑しくもあつた。

そこへお直が這入つて来たが、一最うお立ちですか。大層お早いですねえ」と云ひ掛けて、じろく／＼二人の容子を見比べて居る。

私は只笑ひに拘らした。女も鼻白みながら涙を隠した。

三人揃つて廊下へ出た。お直が一足先に馳出したのを見て、前後を見廻しながら、私はそつと女の頸を抱へた。

これ限り、此女にも逢ふまい——  
左様思ひながら、手を離した。其儘ぱいと表へ出た。  
寺へ戻つてからも、まじ／＼と寝もやらず、

机の前に坐つて居た。氣が附いて見ると、未だ外套を着たまゝであつた。私は何やら急に立上らうとして、又坐つた。きよろくと部屋の中を見廻した。

少時又動かずに居た。

やがて、押入の隅から小さな支那靴を出して来て、机の上に置いた。玩具の様な錠が卸してある。それを外して、蓋を開けた。中はあの女から来た手紙の束である。

私は先づ覗かした。赤いや、青いや、角なや、いろ／＼な封筒がある。いづれも一昨年の日附である。何れかこれかと迷ひながら、例の一番長い手紙を拔出して、最一度讀み回して見た。

長い手紙は初めから火の出るやうな文字で繋がつて居た。一字々々舌を噛んで滴る血潮に染めたやうな——それも、長い歲月の間には流石に色が褪せたらしい。鉛筆の走書も、所々文字が薄れて居る。

時々氣にして洋燈の心を上げたが、上げる後から又暗く成つた。

私は初めて真心地儀であの女の手紙を讀んだ——讀まうとした。是迄は讀まうとしたこともない。如何やら眞正面にあの女が解つて来た

やうな。

これがあの女の凡てである。凡てがこれである。あの女の苦痛も不安も希望も捨替するところも皆此手紙の中にある。此手紙を見るたびに、何も云つて呉れぬと恨んだが、何も彼も云つてある。此外にあの女がある様に思つたのが私の間違ひである。あの女を凡て禪學のものにして仕舞ふのが残念さに、あの女の不用意に出た言葉や仕事までも倫理的に裏附けようとしたのが間違ひである。西洋の劇や小説を見る眼であの女を見たのが間違ひである。自分の生立に引比べて、あの女にも——

但しこれなら——あの女の不安と云ひ恐怖と云ふものも、斯んなものだしたら、何もあの女一人のものぢやない、あの女一人で苦しい思ひなぞすることはない。誰の前で饒舌つても疚しいこともなければ恥ぢるにも及ばない。それだけに又、こんな事に理解も絲瓜もない。あの女はそれを如何して、如何ぶふ積りで、斯う大業に考へて大袈裟に物を言ふのだらう。只、それが女である。

私は堪らないやうな心持がした。あの女の癖として、口を開けば、自分を知つて呉れるものはない、誰一人自分を了解して呉れるものはない。

いと云ふ——それ程自分のことを云ふなら、あの女は少しでも私を了解して呉れたらうか。不圖、そこへ氣が附くと、私は思はず手に持つた手紙を下に落した。あの女が私を如何思つて居るか——そんな事には今迄考へも附かなんだ。あの女は私を知らぬ。何一つ了解して居らぬ。

あれ迄にして、あれだけの襪靴も押つて、二人は到頭互に知らずして別れたらうか——あの最後に水道橋で逢つた夜までも。私は丁字の瞬きのを見ながら眼を瞑つた。

それにしても、あの女のあのモノマニヤクな所は何處から来るのだらう。禪學なら禪學でも可い、一筋に思ひ込んで離れない所は——只、それも女だからと云ふのか。あゝ、何れにしても萬事が終つた。何日となくずる／＼に終つた。かうして終る外に別段終り様もなからう。俄に森とした本堂の中で飛立つやうな大きな音がした。私は吃驚して眼を開いたが、後は又森として何の音とも分らない。

十二

女の面白いのは、何でも知つてる女が、それ

でなけりや何も知らぬ女だと、オスカア、ワイルドが云つた。換言すれば、自分を自由にする女が、それでなけりや自分の自由になる女だと云ふことであらう。私は一生の間に其何れにも出逢つたと信じた。一人があんな女なら、一人は隅江をそれに擬した。そして、二人とも極力其鑄型に當て做めようとした。僅し事實は二人とも夫程の女ではない。何方も並の女であつた。あれが女の當前だ、あんなのが當前の女だと思ふと、私は女の仕た事について女を憎む氣にも成れぬ。憎むことさへ出来ぬ。只、要するに自分と他人であつたと思ふ外はない——二人とも終に路傍の人であつた。

私はこれでも私のために生れた女、生れた時から私に戀して居るやうな女が一人はあると思つた。私の爲に生れて、私の爲に死ぬ、終首臺迄も隨いて来るやうな女が——私を理解してなりとも、或は理解せずとも可い——そんな女が一人はあると思つて居た。

「はいよく、こんな長い間の夢も捨てなければ成らぬのか。」  
此廣い世の中に、私の考へて居るやうな女が一人もいないとすりや、私には世の中がないと云ふに均しい。不圖、死と云ふことを、何か忘れ

て居た道伴を想出してでもした様に考へて見た。昔は死を想ふ毎に、何とも云はれぬ恐怖の念が伴つた。其恐怖の念が却て死に近づかせようとした。死と云ふものを何か懐かしいもの、親しいものの様に思はせた。恰度崖の上に立つて下を瞰下した時、目眩いて、あゝ怖いと思ふ傍から、むら／＼と飛下りて見たく成るやうなものであらう。流石に今はそんな恐怖の念もない。只、死など云ふことを考へるたびに——これは私一人に限つたことであらう——一種の羞恥の念が伴はずには置かぬ。他人は知らず、私は滅多に死など云ふことを口にする姿格はない。人並にそんな事を云へる身ぢやないと云ふやうな氣がして、つい自分で自分の考へを反す様に成つた。

冬の薄い日が本堂の簷をくゞつて、斜めに影を落す頃、障子の棧にびゅ／＼と羽音を立てて、死残つた蒼蠅の飛廻るのがうるさく耳に附く。初めは目に入らなかつたが、其姿を見附けると、鉛筆の尖で突殺さうとした。幾度も押へようと

しては逃がした。それでも、遠くへは逃げようともせず又元の所へ歸つて来て、白い障子の紙に突當りながら、びゅ／＼と繰り返して居る。「おい、自宅に居るか」と、聲を掛けたものがあ

る。

「あゝ」と返辭をした。

小早川は支關へ廻らずに、墓場の木戸を開けて入つて来たものらしい。がらりと外から障子を開けて、窓の口へ頭を出した。

「まあ上ねな。」

「うむ」と云つたまゝ、背中に日影を浴びて立つて居る。

「如何したんだい。」

「只睡いよ」と、やけに手の甲で眼を擦つたが、下駄を脱いで廊下から上つて来た。

「何だかとは／＼として居る。影が薄いやうだね。」

「ふむ」と、烏打帽を下に置かうとして、不圖、そこに落散つて居る一枚刷の辻番を取上げながら、

「おや、斯んな物があるね。」

「あゝ、それかい。そりやア何さ、山樂のお直が送つて呉れたの。」

「何だ、ぢや未だ彼の家へ行つてゐるんだね。」

「いゝや、夏頃から一度も行かない。只ね、何時か鯉之助の見連に誘はれて行く約束をしたものだから、それで今度送つて寄越したのだから。」

「あゝ左様か、それなら恰度好い。僕は初日に行つて見たけれど、明日も行くから向うで逢ふことにしよう。」

「だつて僕は分らないよ。」

「如何して？」

「如何と云ふこともないけれど、僕は君の様にあの役者が別段眞實と云ふ譯でもないもんな。」

「だから此後最辰に成つてお呉れよ。折角戻つて来たかと思ふと、又大阪へ行つて仕舞はれちや皆衆が困るから。」

「それぢや、僕一人の力で引止めて置くやうだれし笑つて、一君は又何かい、例の所から皆衆を連れて行くのかい。」

「そんな見つともないことは最うしないさ」と云つたが、急に淫かぬ顔をして、「此頃一寸可厭な事もあるんだよ。」

「何だい、それは。」

「うむ、何でもないがね」と、稍言ひ辛いやうにしたが、小さんと云ふ體做を知つて居たらう。

近い間に、あの子が如何か成つて仕舞ひさうでね、相手は何者だか分らないが——只榮太の奴め欲張つてゐるのだから、未だ大丈夫の様だけれど。」

「何かい、榮太と云ふのは其家の親さんかい。」

「あゝ、と、下層を讀んで居る。」

私は小早川が去年から藝妓を引張廻して、日夜あの邊りに入浸つて居ながら、一人も如何することも出来ない、男を知らぬ女をむざむざと踏み躪るやうな、そんな眞似の出来ない性分だと知つて居るだけ、それぢや君の方から先へ如何かして仕舞つたら可かりさうなものだとも云へない。少時相手の顔をまじく見守つて居たが、

「矢張仕方がないね、生きた人間だもの。」

「まあ左様さな。」

「それとは違ふがね、僕は近頃如何云ふものか生きた女を見ても心が動かない。昔から書ける女を見て心を動かすと云ふことは果敢ないもの腎にもしたやうだが、あの豊國や國貞のなまめかしい姿勢をした女の給を見ると、大に心が動く。それで居て、實際の女を見ては——實際的に何だから生理的に如何かしたんぢやないかとも思ふが。」

「そりや、左様だらう」と、小早川は氣の乗らぬやうな返辭をした。

「併し何だぜ、君が藝妓ばかり相手にして如何することも出来ない」と云ふのも、矢張同じやうな心持ぢやないのかねえ。」

「そんなんぢや無いよ」と云つたが、それでも稍氣の晴れたやうな顔をして、いろ／＼小まんの話をして聞かせた。あの子だけは自分のことを思つて居る、此方で思つて居ることも知つて居るらしい。他の藝妓と一緒に喚んでも、あの子だけは如何しても自分の側に坐らなく成つた。暗がりへ連れて行くと、あの子の自分を見る眼が大きく成るなど、そんな話を幾つもしてから、二人とも巻煙草の盡きる頃に、「それぢや、明日は繪の女を見るつもりで藝妓を見においでな。」

「あゝ、と、私は笑つて返事をしなかつた。小早川を玄關へ送出して、大戸の掛金を叩いてから再び部屋へ戻つた。ぐつたりと身體中勞れたやうに思つたが、眼だけは冴えて眠られさうもない。一人ぼつねんと考へ込むのも可厭だし、書物を開けても讀む氣には尙更成らぬ。毎もなら酒でも飲むのだが、此夏偶とした出来事で禁酒してから、こんな時には自分で自分の身を持ってあぐむ外はない。切めてもつと小早川を止めて置けば可かつたとも思ひ出した。

床柱に凭れたまゝ、凝乎と洋燈の火屋を見て居たが、押入から蒲團を出してごろりと横に成

つた。暫く眼の前をちら／＼と光る物が飛んで  
行つたが、やがてそれも止んだ。時間は何れだ  
け経つた後とも分らぬ。

「太陽が太陽が上る。」

私は聲を上げて飛び上つた。真夜中に、眞暗  
な中から太陽が昇る。圓い銅色をしたものが  
つる／＼と昇る。

不圖、それが掻消すやうに消えた。

私は暗闇の中に腕組をして坐つて居た。何と  
云ふ理由もなく、最う永久に太陽が上らぬやう  
な気がした。此儘、二たび日の光を見なかつた  
ら——人間と人間とが手と手で探り合ふやうに  
成つたら——私は思はず、両手を出して疊に觸  
つて見た。

やがて又蒲團の上へ突伏したまゝ寝入つて仕  
舞つた。

朝、目の覺めた時には、何よりも先づ朝の光を  
見るのが嬉しかつた。ねと／＼した頸筋の汗を  
寝巻の袖で拭きながら、今日の芝居行を思ひ遣  
つた。一刻も早く人の顔が見たい、人の居る所  
へ行きたい。

午飯を済まして、直に出掛けて行つた。久松  
町で電車を降りて、橋を一つ渡ると、軒並木の  
半暖簾を垂れた芝居茶屋が見えて、繪看板やら

積櫓やらに、おのづと人の心も浮立つ。私は軒  
提灯の屋敷を見い／＼、座の横手へ曲つて、三  
軒目の茶屋へ這入つた。机を前に、頭のてらて  
らと赤げた番頭らしい男が控へて居て、  
「え、山業さんの御連中ですか。最う疾く  
聞いて居ります。何卒直に小屋の方へ——あ  
あ、誰か御案内を」と、氣の引けるやうな聲で呼  
ばはつた。

私は茶屋の格印を捺した福草履を穿いて、男  
衆に連れられて行つた。恰度幕の下りた所と  
見えて、がや／＼と人立がして居る。樹の中に  
は、見知越しの山業の女隠居が居て、座を譲り  
ながら、「何うも、今日は御苦労様」と、小さな  
胡麻鹽の盥を下げた。

「え、と」云つたまゝ、背後を振向くと、其處  
には小早川と、其外三四人知合の者も来て居  
た。「や、や」と挨拶を交したが、最後に又小早  
川に向つて、「如何だい」と訊くと、  
「うむ」と云つて笑つて居る。

「そりやア鯉之助が好いんですよ。今度は紀の  
國屋一人の芝居です」と前の隠居が引受けて  
云つた。

「ぢや、いい盥梅ですね。一  
こんな事を云ひながら、私は周囲を見渡した。

何方を見ても女連ばかりである。小早川はそ  
つと私の肩を敲いて、  
「彼處に居るのは皆吉原の連中だよ。あ、今  
恰度向うを向いた、あれが例の松子なんだよ。  
一何處だい、分らないね。」  
「うむ、今立上つたのさ。それ此方を高いたら  
う。」

富士額の稱せ、こましいのが、小早川と眼を  
見合せて、一寸目禮したまゝ、直に又知らぬ顔  
をして彼方此方見廻して居る。小早川は何か考へ  
て居たらしいが、又氣を取直して、  
「それから、君に是非紹介して置くものがある  
よ。あの樹から一つ、二つ、三つ目で、お婆さん  
連の揃つてるのが有るだらう。」

「あ、あの舞臺に取附の樹かい。一  
「左様、あの中に一人若い女が居るだらう。好  
く見たまへ、一寸眼が綺麗だからさ。」  
「左様だねえ」と云つたが、他の人の肩と肩との  
間に、前髪と銀杏返しの太い輪だけしか見えな  
い。

「魚河岸の娘だと云ふが、一寸見ると素人ぢ  
やないやうだよ。ね、お金さんと、小早川は側  
に居る女中を見返つた。  
「え、そりやア全く。それに紀の國屋氣狂

ひで、頭の先から足の先迄千鳥の紋散らしです  
よと云ひかけて、「お待ちなさいよ、今立つて  
来さうですから。」

かう云つて、お金は頸を延ばして其女を見守  
つた。私も一緒に成つて見て居たが、其女は  
狭い假花道の上に立ちながら、何やら同じ癖の  
者と話をして居る。「一言云つては笑ふたびに、  
口許の締りが弛んで齒茎が遠慮なく出る。私は  
其表情の何處かに智慧の足らぬ女の様な気が  
仕出した。」

間もなく、下座の三味線が鳴つて幕が開いた。  
其女も立ちかけたまま、元の座に歸つた。一番  
日は座附作者なごしの新作物で、眞面目には  
見て居られないやうなもの、それでも女どもの  
瞳子は目じろぎもせず舞臺に聚つた。私もそ  
れに釣られて段々舞臺に見惚れた。が、舞臺の  
上の發展を辿るよりも、衣裳の色や背景の取合  
せから、私の連想はあらゆる方へ走り勝ちであつ  
た。終ひには舞臺を見ながら、私は私で別の  
事を考へて居た。

やがて、ゆる／＼と緞帳の下りた時、私は  
ぼつと息を吐いた。同時に、機擘の上下へ連ね  
た御園白粉の投灯に、ぼつと灯が入つた。土間  
中が又が／＼と陽氣立つ、私は俄に寂しく

成つた。何だか自分などの来る所ではない所へ  
來て居るやうな、何とも云はれぬ淋しさが萌し  
た。

「おい、一寸出よう。」  
私は小早川に促されて廊下へ出た。一緒に  
隨いて來た舞妓どもにせがまれて、小間物店の  
前に立つて、小早川がいろ／＼な物を買はされ  
て居るのを少時辛抱して見て居たが、つと反れ  
て、一人三階へ上つて見た。機擘裏の欄干に凭  
れて、土埃に塗れた町の屋根を見下しながら、  
冷たい風に當つた。

「智慧の始まる所に美は終る。」  
誰やらの云つたことが想出された。紀の國屋  
氣狂ひの女が美しいのは、あの女が馬鹿だか  
らだ。智慧が足りないから美しいのだ。私は一  
人で左様極めて、美しい女の智慧が足りないの  
は肉感的なものだとも思つた。只肉感を満足さ  
せるために生れて來たやうにも、男の慰みもの  
に成る女の様にも思はれた。あの女が意氣難り  
にして居るだけ、一層そんな気がする。こんな  
のが女と云ふものであらう、これ以上女に望  
むのは男の無理であらう——併し異性を侮る  
位、私には寂しいことはない。

やがて場内がどよめくので降りて來たが、不

圖、梯子段の下で、其女が懐中鏡を出して顔  
を直して居るのに出逢つた。女は足音を聞いて  
一寸見回つたが、又側目も振りぞ鶴の羽根で小  
鼻の邊りを抑へた。

私は其前を通り抜けて元の座に戻つた。直に  
中幕の幕が開いた。歌舞伎十八番の内鳴神上  
人と云ふので、瀧壺の前に四本柱の庵をしつ  
らへ、其中に舞踊して、天下國土に雨降らさじ  
と上人一生の祈願を籠めて居る。朝廷を恨む  
筋あつてのことである。そこへ雲の絶間姫、天  
子の敎誡を受けて、國土のため上人の心を  
蕩かし其修法を破らんと、はる／＼山に分入つ  
てくる。

絶間姫に扮した鯉之助が、揚幕を出て、花道  
の七三にとまつた時には、何處かで、  
「あれ、鯉ちゃんが」と、溜息を吐いた女があつ  
た。本舞臺へ來て、二人の青坊主を相手に去に  
し男の戀しさを語る。語るに作れて、振がある。  
男に逢ひに北山へ、裾を絡めて川を渡るやうな、  
仇つばい振がある。其振よりも、役者の少し顔  
へを帯びた聲音が私の心を惹いた。其聲の色よ  
りも、物を云ふたびに、折角美しい顔の造作をく  
づして仕舞ひさう、なあの汚い口元が——そし  
て、あれも男が女に扮して居るのだと思ふ時、

私は一しほ心をそゝられるやうな気がした。自分ながら如何したことであらう。

私は矢張繪に畫いた女に焦れるのだ。まこと女よりも繪に畫いた女に、女でない女に、焦れても、如何することも出来ない女に――女でない女が戀しい。

私は鳴神上人も舞臺も忘れて、只絶間姫に見入つた。絶間姫と云ふことも忘れて、只目前の女に見入つた。絶間姫の白も耳に入らねば、科も目に映らぬ。私の眼中には、只女があつた、女でない女があつた。

幕が下りてからも、少時女の姿が眼を離れなかつた。

「あゝ、好い」と、背後で小早川の聲がした。

「本當に好う御座んすわねえ。」

「全く好い女に成るわねえ。」

彼方此方の女の口から感嘆の聲が出た。

併しあの口元は穢くるしいね」と、一人の男がわざとらしく云つた。

「それが好いんだよ、其汚い所が」と、私は思はず口を出した。「何處迄も揃つた女と云ふものは、餘り好くない。何處か一所缺けた方が却て其美を添へる。女は左様したものだよ。」

大變な御執心ねえ、貴方」と、お金も惘れた様

に云つた。

「あゝ、執心だよ。あんな女なら何時迄も見て居たいね。」

「それぢや、一寸此處へ來させませうか。」

「うんにや、私は役者の素顔など見たつて仕様がなない。そんなものを見たいとは思はない。」

「ぢや、髪を着せたまへ、側へ引附けて置かうと云ふんですね。随分貴方も物好きね。」

「あゝ、物好きだよ。こんなのが色氣違ひに成るのかも知れない。」

「さうね、色氣違ひとも違ふわ」と、種宥めるやうな調子で云つた。お金は私が腹を立てたとも思つたのであらう。

私は何だか初めから云つたことが取返されたら取返したい様に思つた。

「後は何だ、太郎冠者の喜團ぢや語らないね。最う歸らう」と、小早川が言出した。

皆總立に成つた。私も一緒に立上つた。茶屋の二階へ戻つた時、小早川が私を側へ喚んで、

「これから彼の子達二人作れて吉原へ行くんだ。君も一緒にいけ」と云つた。

「僕は」と云つて見たが、

「東海も行くぢやないか。君が附合はぬと云ふ

法はない」と、一口に押附けた。

小早川が吉原で遊ぶと云つても、只引手茶屋へ藝者や戀妓を喚んで騒ぐだけに止まつて、それから中へは一步も踏込んだことがない。それも聞いて居たので、何を見せびらかす氣なのか、見せるなら見て遣らうと云ふやうな氣にも成つた。

間もなく、五臺の腕車が北を向いて景氣好く走つた。暗い町、明るい街を幾つも駆抜けた。

やがて五十間を進入つて、仲ノ町を水道尻の方へ、信濃善と掛行燈をした店頭で相棒を下した。店の火鉢にあたつて居た女どもが皆立上つて、

「おや、被人しやいと口々に。

一同二階へ上つた。五十餘りの眼のぎよろりとした女中が隨いて來た。

「お土産」と云つて、小早川が裏朱の小さな重箱を差出した。

「おや、お芝居のお歸りですね、皆さん揃ひで。」

「鯉ちゃんの見えさ。」

「左様々々、今日は左様でしたねえ。それぢや、小夏ちゃんや松子さんも行つて居たでせう。」

「あゝ、だから其連中に逢ひに來たのさ、早く

喚んで来てお呉れ。」

「左様ですか、最う歸つて居ますかしら。」

「歸つては居るさ。疲勞れたなぞと我儘を云つたらね、鯉ちゃんと言傳があるから、一寸でも顔を出すやうに、私が左様云つたつて。」

「左様申しませうね」と、女中は階下へ降りて行つた。

「おい、お松どん」と、追かけて喚んで見たが、返辭をしない。今夜小早川は何か非常に興奮して居る様に見えた。

「ね、小早川さん、私達送つて呉れなきや可厭アよ」と、おづ／＼座蒲團の上に坐つて居た雛妓が、小まぢやくくれた音様をした。

「ね、私もと、今一人が云つた。」

「大丈夫だよと云ふものの、小早川自身身落着いては居なかつた。」

鈍子が出て、私は一つ受けて見たが、はらく／＼して、自分が先へ酔はずには居られない様な氣がした。早く酔を買はうとして、薄締の御膳火鉢に凭つかゝつたまゝ、引つかけ／＼盃を饗ねた。

やがて芝居で見たのと、三人ばかり妓が這入つて来た。

「あら、皆さんと御寄るやうにして、「先刻は

何うも失禮を。」

それを序開きに、役者の噂が始まつた。渦巻が如何の嫌々が如何のと、情人の噂でもするやうに、何通も同じ話が繰回された。駄洒落の噂廻返しもまじつた。小早川は一人でそれを引受けて切つて廻さうとした。

今一人の東海と云ふのは、只にや／＼と笑つて聞いて居る。

「此方は好いわねえ、本當に大人しくつて、なぞと云ふ女もあつた。」

私は盃を襲ねるに伴れて、だん／＼土の底へでも江んで行く様に思はれて来た。周囲と自分との懸離れた心持が、芝居に居た時よりも際強く身に迫つた。かうして自分一人取残されたやうな氣がして、小早川も憎かつた、女どもも憎らしい。自分でも迎へて寂しい心持を誘ひもした。誘ふが儘に涙も出さうな心持に成つた。泣きたい、泣いたら泣いて見たい。私はそつと隣に坐つた、友達腕に凭れるやうにした。

「如何した。顔色が悪いぞと、東海も可成酔つて居るらしい。」

「え、如何したんだ。氣持でも悪いのかと、小早川は巫山戯て居た手を止めて訊いた。それを

機に、私は東海の手へ顔を伏せて仕舞つた。

「なに、酔つたんだらう。僕が預つて居るから可い」と、東海が云つて呉れた。

私は兩手で顔を押へたまゝ、傍の見る目も憚らず、思ふが儘に涙を流して泣いた。何故泣けるのか、自分にも分らぬ。只、後から／＼留度もなく涙の出て来るのが、子供の様に嬉しかつた。其間、東海はそつと私の背中を撫でて居た。

少時經つと、又小早川が側へ来て、

「如何だい、心持は。若し吐く様だつたら吐いて仕舞つた方が可いぜ。」

私は只頭振を掉つた。

「如何で御座います。杖を持つて参りますから、少時横にお成りなすつたら」と、女中が氣を利かせた。

「左様だねえ」と、小早川は一寸考へて居たが、「いつそ此男だけ何樓かへ送つて仕舞つたら如何だらう。」

「それが可い／＼」と、東海まで同じた。

「おい／＼」と、私はむつくり起上りながら、「そんな無暗な事をしちや不可い。」

「なに、好いから黙つておいでよ。」  
かう云つて、小早川は何やらお松と聯合せた

が、「さ、起きたく」と、私の手を執つて引起した。

私は小早川に手を取られたまゝ戸外へ出た。

足許がふらふらとして、一歩毎に頭の心がづきんと痛む。仲ノ町はひつそりとして深けたらしい。

「何處へ連れて行くんだいと、私は不意に街の真中に立停つた。

「好いんだよ、僕が隨いて行つて上げるから」と、小早川も振回つて促すやうにした。

「そりや好いけれど、あの家だと一寸困るんだが。」

「如何したんだい、そりや。」

「なに、何でもないんだよ」と、わざと言ひ紛すやうにながら、「只ね、あの家へは一度来たやうに思ふからさ。それも一昔前に。」

「一體誰だい、そんなのが有れば早く云やア可いのに。」

「何と云ふ花魁なの、お馴染は」と、お松も側へ寄つて来た。

私はそんな事を訊かれるのが、堪らなく可厭なので、

「名前は忘れたよ」と云つて、すたくと歩き出した。

大黒樓のひろい砂梯子を上る時、私は自分ながら胸の蕪くの覺えた。引附では、お松が又顔を覺めて、

「そんなのがお有んなさるのなら、仰有つて下さらなきや困りますよ」とも云つた。

私は投出すやうにして、「何とかぶつたよ、薄水と云ふ女が居るかい。」

「薄水さんなら居ます」と、言下に云はれた。

私は直に其女の新造の手へ移されて、未だ明いて居た女の蒲屋へ連れて行かれた。そして、宛然自由意志のない子供の様に、衣を剥がれて、敷いてある蒲團の上に寝かされた。私もされるが儘にされて居た。

次の間で、新造が脱棄した着物を繕んで居るのを、薄目を開いて見い、部屋の中を見廻した。屏風の巖に成つて能くは分らぬが、夜具戸棚に掛けた萌黄の風呂敷のやうなものにも、硝子の蓋をした裸人形にも、長火鉢にも、鏡臺にも、それらに見覚えがある様な氣がした。

此處でなければ見られないやうな風俗が心を惹く。

只、此大きな家の中に三味線や太鼓の音もせぬ。夜は静かであつた。

間もなく、廊下に重草履の音がして、障子の外で止まつたかと思ふと、すうと身丈のひよる長い女が這入つて来た。赤地に金糸の織のある襦を着たまゝ、長火鉢の前に片膝立てて坐つたが、いさなり長煙管を出して、二三服すばしと煙草を吸つた。私は息を凝らして見て居た。電燈の光を真正面に浴びる所爲か、眞白な横顔が死骸に白粉でも塗つたやうで、濱島田に紅白緋ひ交ぜの奴をかけたのも却て薄ら消しい。

やがて煙管を抛り出して、襦を脱いでふはり衣袴に掛けたまゝ、女は枕元へ寄つて来た。

「貴方、お睡つてらつしやるの。」

「いゝや。」

「大變酔つて被入したことねえ。それでも好く忘れずに来て下さつたわね」と、蒲團の上に片肘を突いて、だん／＼顔を側へ寄せて来た。

私は此女の聲に一番記憶が残つて居る様に思つた。

「伴れの男は如何したい」と、私はわざと外の事を訊いた。

「如何ですか。最うお歸りに成つたでせうよ。」

私は黙つて居た。

「だつて、可いぢやありませんか。今夜は泊つたつて可いでせう。貴方は些とも泊らない人で

したわね。」

「私のことを知つて居るのかい。」

「それは記憶えてまさアね。同じちよくれんさ  
いの國ぢやないの。」

「ふむ」と云つたまゝ、そんな事迄話してあつた  
かと、一人顔が報らむ様に思つた。

女は何氣なく、「併し考へて見ると長いわね  
え。私が此處へ來てから六年目だから、恰度  
五年目よ。」

私は思はず女の顔が見られた。「能く辛抱し  
たものだね、それにしても。」

「え、随分長かつをわ——何だか、恥かしい  
やうねえ。」

「併し、それぢや最う年菊が明くだらう。」  
「え、と、何故か其話はしたくない様に見え  
た。」

「あの時分から此部屋だね。」  
「え、能く記憶えていらつしやるわね。」

「今度ほ此方がかい。」  
女は急に身顛ひして、「お、寒い。夜が深け  
ると冷えるわねえ。」

かう云つて、——

「私ひえ性だから、冷たいのよ。」

厭られぬだらうと思つて察したが、酒が廻つ

たと見えて、間もなく前後を忘れた。時々はつ  
として目を覺ましたが、直に又寝入つた。朝に  
成つて下薪が長火鉢に火を入れに來た物音を聞  
いて、むつくり頭を上げた。

女は未だ正體もなく寝入つて居る。

「おい／＼と喚んで見たが、一向返辭をせぬ。  
どす黒い眼臉に、うつすら白眼をして、がつく  
りと口を開いたまゝ、側に何んな男が寝て居て  
も氣にもかゝらぬ様に、すや／＼と寝入つて居  
る。私は凝手と其顔に見入つた。そして、何と  
も云はれぬあはれを身におぼえた。」

茶屋に居残つた連中が昨夜の間に引上げた  
聞いて、日の光を浴びて此廓を出るのが可厭さ  
に、其日は到頭ぐ／＼して一日中此部屋で暮  
した。私はそれが日の目も昇めぬ日蔭の國に居  
るやうな氣がして、何となく心を惹いた。日蔭  
者が日蔭者を相手にして生きて居るやうな心  
持もした。

女は私の顔を知らぬ新造に向つて、私が以前  
如何にもしげ／＼此處に通つたやうなことを云  
つた。そして、素晴らしい各盛な遊びでもした様  
に吹聴した。私は只女が疎ましかつた。

「それぢや、同じお國ぢやあるし、幼馴染とで  
もぶふんだわねえ」と、新造はさも氣の無ささう

な挨拶をした。

「あ、だけれども此人は薄情だから、五年の  
間顔も見せないんだもの。」

一本當に花魁が可哀想ですわねえ。其理合せ  
に、これから些と來て上げて下さいませよ。」

私は其五年の間に何をして來たらう。今の  
私はあの時分の私ぢやない。そんな事を思ふ  
と、不圖味氣ないやうな心持がした。

二人に成つた時女はこんな事を言出した。  
「ね、本當のところ、私來年の三月で年期が明  
けるのだから、それ迄だと思つて來て下さらな  
いの。又、これ限りに成つちや、實際酷いわ。」

「へえ、來年の三月かい。」

「こんな事は誰にも云はないんですけれど、ま  
つたく三月の三十一日よ。それに如何しても  
ね、年期明前に成ると、何んな人でも客が落ち  
るの。どうせ今に居ない女だと思ふと、お客の  
方でも詰らないのでせう。」

「ぢや、私にも三月迄の期限を附けるんだね。」  
「だつて、其上の事は望まれないんだもの。貴  
方も皮肉ね。」

「まあ、そんな事は如何でも可いさ」と、私は  
笑ひに紛らした。

こんな女の云ふことなど、何が何やら當に成

らぬとは思ふものの、來年(らいねん)年期(ねんき)が明くと云ふのは本當(ほんとう)らしい。それ迄(それまで)しか居ない女だと思ふと、かうして居るのが不思議(ふしぎ)の様に思はれて、やゝ殘惜(ざんせき)しくもある。

日が暮れて、隣(とな)遊所(よす)の店(みせ)をつける音が聞え出した頃(ころ)、私はこゝろと吉原(よしかはら)を出た。山下(やまのした)で轎車(こしや)を棄てて、やう／＼廓(くわく)の空氣(くわき)から逃れたやうな氣に成つた。初めて頭(かぶ)を上げて往來(わうらい)の人を見た。

### 十三

明くる朝(あした)寢床(ねど)の上(うへ)で眼(め)が覺めた時(とき)には、四壁(よっぺ)が圍(こ)まらばら／＼に繼(つ)れて、只(ただ)並(なら)べてあるだけの様(よう)にも思はれた。一度(いちど)目を覺(さ)ましたまゝ、又(また)と／＼と寢(ね)附(つ)く。いろ／＼な處(ところ)でいろ／＼な女(おんな)に逢(あ)つた。美しい馬鹿(ばか)の女(おんな)にも、舞臺(ぶたい)の女(おんな)にも、それから籠(かご)の鳥(とり)と云はれた境遇(きやうぐ)の女(おんな)にも——皆(みな)それ(それ)が走馬燈(そうばとう)の様(よう)にぐる／＼と廻(ま)つた。そして、皆(みな)一所(いここ)に成(な)つて消(き)えて行く。

私ははつと思つて眼(め)を覺(さ)まし／＼とした。日暮(ひぐさ)前に、やつと起(た)ち上(あ)つて見たが、他人(たにん)の身體(しんたい)の様(よう)にふら／＼して、折角(せきかく)箸(はし)は執(と)つて見てもどうも物を喰(く)ふ氣(き)にも成(な)らぬ。私は又(また)暗(くら)い洋燈(やうとう)の下(した)に、一人(ひとり)自(じ)分の影(かげ)を見出(みだ)した。

した。今夜(こんや)も又(また)父(ちち)の妻(つま)せた女(おんな)は、あの骨(ほね)のやうな顔(かほ)に白粉(おしろい)を塗(ぬ)つて、轎客(こしやく)の寄(よ)つて來(き)るのを待(まち)つて居(ゐ)るのだらう。女(おんな)を侮(あは)つて見たり、繪(え)に畫(か)いた女(おんな)、女(おんな)でない女(おんな)を戀(こ)したりしながら、終(つい)には色(いろ)を賣(う)る女(おんな)の所(ところ)に落着(おち)いたのも、自分(じぶん)ながら怪(あや)しい。併(ま)し、私は矢張(やば)り、はあんな女(おんな)の所(ところ)に落着(おち)く宿命(しやくめい)を持つて生(な)れて來(き)たのぢやなからうか。あんな女(おんな)の所(ところ)より外(ほか)に行(い)き所(ところ)のない身(み)ぢやなからうか。あの女(おんな)を女(おんな)としては何(なん)の興味(くわんみ)もない。何(なん)一つ心(こころ)を惹(ひ)かされる様(よう)な所(ところ)もない味(あじ)も艶(えん)もない、ばさ／＼とした女(おんな)である。こんな無味(むみ)な女(おんな)でも、六年(ろくにん)の圍簾(いりざん)の中(なか)に入(い)れられて、さんざ生血(なまぢゆう)を絞(しぼ)られた擧句(あやう)、骨(ほね)と皮(かわ)ばかりに成(な)つて、それでも三四箇月(さんしうくわんげつ)後(のち)には其體(そのたい)を立つて行く。其後(そののち)は何處(どこ)へ行(い)くやら分(わ)らぬ。何處(どこ)へ行(い)つて如何(いか)成(な)るやらも分(わ)らぬ。只(ただ)それだけの事(こと)が心を惹(ひ)く。切(き)めては、あの女(おんな)がいよ／＼巢立(すずた)をする迄(まで)見守(みまも)つて居(ゐ)たいやうな氣(き)もする。

思(おも)へば、私は是迄(こゝまで)女(おんな)よりも女(おんな)の置(お)かれた境遇(きやうぐ)に心(こころ)を寄(よ)せて來(き)た。何(なん)の女(おんな)にも左様(さやう)であつた。そして、其結果(そのけつが)は何(なん)の女(おんな)にも捨(す)てられた。何(なん)の女(おんな)にも捨(す)てられた擧句(あやう)、何(なん)一つ心(こころ)を惹(ひ)かされぬ女(おんな)の境遇(きやうぐ)だけに心(こころ)を寄(よ)せて行(い)くとしたら、それが私(わたし)の最後(さいご)かも知(し)れぬ。女(おんな)に心を寄(よ)せる最後(さいご)かも知(し)れぬ。

せり最後(さいご)かも知(し)れぬ。山(やま)に行く前(まへ)に、私は二人(ふたり)の女(おんな)を知(し)つて居(ゐ)た。二人(ふたり)とも水商賣(みづあらい)の女(おんな)であつた。其中(そのうち)一人(ひとり)は死(し)んで、一人(ひとり)は生(な)きて居(ゐ)た。何(なん)だか私(わたし)を待(まち)つて居(ゐ)た様(よう)でもある。此處(こゝ)迄(まで)考(こう)へて來(き)て、私は一人(ひとり)苦笑(くせう)した。其(その)儘(まま)洋燈(やうとう)を吹消(ふき)して眠(ね)についた。明(あ)くる日(ひ)、夜(よ)が明(あ)けて見(み)ると、宵(よ)にはさも意味(いみ)があるらしく思(おも)はれたことも、すべて色(いろ)の纏(まと)めた網罟(あみ)の様(よう)に見(み)えた。さのみ心(こころ)にも懸(か)らない。かうして其日(そのひ)は無事(むじ)に暮(く)れた。次の日(あした)も、其次(そのつぎ)の日(ひ)も同じ(おな)じ様(よう)な日(ひ)がつかつた。

師走(しゅうさい)の月(つき)は、山(やま)の手(て)にも下町(しもまち)にも歳(とし)の市(いち)が立つた。一年(いちねん)中(ちゆう)で、此頃(このころ)程(ほど)一人(ひとり)棲(す)る者の心(こころ)淋(さび)しい時(とき)はない。ある日(あるひ)、私は神樂坂(かみがらきざか)へ出て往來(わうらい)のはげしい中(ちゆう)をぶら／＼と歩(あ)いて居(ゐ)たが、坂(さか)の下(した)へ降りて、

「おい／＼と、柳(やなぎ)の下(した)で客待(きやくまち)をして居(ゐ)る車夫(くるまぶ)を喚(よ)んだ。車夫(くるまぶ)が楯棒(たてぼう)を上げた時(とき)、一待(いちまち)て／＼と云(い)はうとしたが、又(また)え、儘(まま)よとも思(おも)ひ返(かへ)した。喧嘩(けんか)を這入(こ)る時(とき)には、何(なん)となく氣後(きご)れがした。何(なん)となく社會(しやかい)の裏面(うらめん)へでも這入(こ)つて行(い)くやうな氣(き)がして、物(もの)を突破(つと)るやうな捨身(すてみ)な心持(こころもち)に成(な)つた。」

「おい／＼と、柳(やなぎ)の下(した)で客待(きやくまち)をして居(ゐ)る車夫(くるまぶ)を喚(よ)んだ。車夫(くるまぶ)が楯棒(たてぼう)を上げた時(とき)、一待(いちまち)て／＼と云(い)はうとしたが、又(また)え、儘(まま)よとも思(おも)ひ返(かへ)した。喧嘩(けんか)を這入(こ)る時(とき)には、何(なん)となく氣後(きご)れがした。何(なん)となく社會(しやかい)の裏面(うらめん)へでも這入(こ)つて行(い)くやうな氣(き)がして、物(もの)を突破(つと)るやうな捨身(すてみ)な心持(こころもち)に成(な)つた。」

た。それが、私には一種の刺戟にも成つた。

只、信濃善の前は素通りをした。いづれは直に分るものとしても、今日一人で遣つて来たといふことは知られたくない。で、何と決したこともなく、廊の中を一周りした。未だ灯が入つたばかりで、金襴の前に女の姿も見えなければ、格子先に素見客の聲も聞えぬ。何の小路もひつそりとして居た。やがて大黒樓の店頭へ出たが、四邊に人が居らぬのを幸ひ、私は直に二階へ通つた。座敷には女も居なかつた。

おくれて隨いて来た新造を片陰へ喚んで、茶屋へかゝつて来ないからと頼んだ。新造はつゞけさまに點頭いて、

「今、お湯に入つてますから、何卒」と、煮花を出して俯めた。

「外は一向寂しいね。」

「え、不景氣ですよ。今年の暮の様に寂しいつたら、そりや全くない。」

こんな話をして居ると、やがて女が頸だけ眞白に塗つて顔をほてらしながら、湯から上つて来た。

「何うも相済みません」と云つたまゝ、つと背後向に、薬の箱に坐つて、顔にお化粧を始めた。やがて、手拭で顔の白粉を抑へながら、此方を

向いて、

「お品どん、松筒屋の金玉簪が有つたでせう。あれを出して上げて下さいな。」

「未だ有つたかしら」と、新造は茶筥の上の鏡を出して振つて見る。

「あれ、それぢやないのよ。」

「何れさ。私にや分らない。」

女は手に持つた手拭を鏡の上へ掛けて置いて、側へ寄つて来た。

「此處に有るんぢやないの。物覚えの悪い人ね。」

私は出された菓子を掴みながら、何となく心がくつろぐ様に思つた。此女が私を庇度來るものと極めて居たやうな一來るものとも來ないものとも全然意に介して居なかつたやうな態度も、今の私には嬉しかつた。私は此女に對して、何一つ求むる所はない。此女のおが誰に占められて何處へ走つて居ようとも、私の知つたことではない。私は只かゝる女をかゝる女として見て居る。其間に微かなあはれを求めて満足しようとして居る。こんな淡い心持で女に對したことは、是迄私にはない。

「あゝ、私も變つたな。私は自分で自分を憐れむやうな心持が湧いて、

た。何をそんなに鬱いで彼坐しやるの」と、女が側から訊いた。

「あゝ、と、私は顔を上げたが、「た様だ、私は未だ飯を喰はない。」

「おや此人はお腹が空いてるんだとさ。早く御飯を喰べきせて下さいな。」

「何にしませうね」と、新造が側から訊く。

「何でも可い、只ぐつぐつ煮て喰ふ物が可いね。」

やがて、茶屋から寄鍋を持つて来た。酒は壺で取寄せて、小注をして銅壺に入れられた。何櫃も醬油も押入から取出された。

私はそれを見ながら、「何だか斯う所帯でも持つてるやうだね。」

「貴方が御主人よ。」

かう云つて、女は銅の物を小皿に分けて呉れた。

私は早速に返辭も出なかつた。私が自分で自分の家を壊して、一人寂しく膳に向ふ様になつてから幾年に成ることであらう。

「ね」と、少時経つて言出した。「私が此處へ來なく成つてから、何處へ行つて居たと思ふかい。」

「何處へとは、女の許なの。」

「左様され、まあ女の許でも可い。」

女は少時考へる様にして、「素人？」

「いゝや。」

「ぢや、不見轉？ 不見轉はお止しなさいよ、汚いから」と、顔々變めた。

「そんな者ぢやないさ」と云つたが、「實はね、私は或女と心中しかけたことが有るんだぜ。」

「まあ」と、兩女とも唇を揃へて云つた。

「そんな事せう」と、女は私の顔を下から覗く様にして、「あゝ、論議、論議。」

「論ぢやないさ」と云つたが、暫々しくこんな事を言出したのが、自分で自分を侮つて居るやうにも思はれた。

「へえ」と、新造は道理らしい顔をして、「で、二人とも助かつて。相手は如何したの。」

「相手は自宅に居るさ。」

「でも、能く左様して居られるわねえ。」

「なに、初めから私のことなど何とも思つちや居ないんだから——女は左様云つてるよ。」

「訝しいわねえ。」

兩女ともそれきりであつた。

「だから何だよ、女と云ふものは決して私など惚れるもんぢやない——生れてから一度も惚

れたこともないし、又惚れられたとも思つちや居ない。そんな自惚は無く成つたね。」

「だつて、そりやア——」

「いや」と、相手の言葉を抑へる様にして、「お前さんだつて、決して惚れて貰はうとも、惚れられたとも思つて居ないから、それだけは安心してお座でなさい。」

「だつて、そりやア無理だわ」と、女も抗ふ様に云つた。「ね、此方でも成程と思ふ迄信實を見せて呉れないんぢやア——女の方でも惚れよう惚れようとして居るんだけれど、それ迄通つて来る人がないんですよ。」

「何だ、其方で惚れる迄通へ」と云ふんか、少々押が強いやうだね」と云つたが、自分の方が可厭味の様にも思はれた。

其夜は十一時頃に切上げて戻つた。

歸りがけに、女が、「私から手紙上げて可いの」と訊いた。

「そりやア手紙が来たつて構はないけれど、讀まん間から中味の分つてるやうな手紙なら、まあ貰はん方が可いね。」

「だつて、私には旨い事が云へないんですよ。」

「ぢや、私が教へて遣らうか。何なら此處にお

手本を書いて置くから、其通りに書いて遣つて貰つても可い。」

「そんなんでも可いの」と笑つて居る。

「あゝ、手紙ばかりぢやない、二人向ひ合つて云ふ言葉でも、出来る事なら前に教へて置いて、其通りに云つて貰はうかとも思ふよ。世の中に私の思ふやうな返辭をして呉れる女は一人もない。私はそれが悲しいんだよ。仕方がなけりや、私の口寫して、本人の心から出たのでなくとも可い、唯女の口から私の思ふやうな事が云つて貰ひたい。」

「随分面白いことを云ふのね。」

女は新造をかへり見て薄笑ひをした。

私は其儘表へ飛出した。何時になく興奮して、「論議でも可い」と口走つた。眞實のものがなけりや、論で満足する外はない。私は誠に生きる様に生れたのだ、先方に實のない、此方ばかりの影に生きるのだ。

こんな事を寺へ戻る迄思ひつゞけた。

其後私はしげ／＼大門をくぐる様に成つた。

年の内にも二三度行つた。何をしてても三月迄だと云ふことも、私の足を近くした。

年が明けてから、十日餘り遠のいて、或夜十一時近く行つて見た。矢張座敷が明いて居た。何

時か女も云つて居たが、本當に客がないらしい。客と云つたら、私一人の様でもある。私の様な者の外には来る者がないのかも知れぬ。

「何だか寂しいやうだね」と云ふと、

「え」と云つて、懐手の儘標の中へ首をちぢめながら、「それでも三月三十一日迄は辛い勤めをしなければ成らぬのよ。」

私は女が可憫らしいやうな気がした。

其居續けの朝、十時頃に目を覺まして、捲巻を被つたまゝ、長火鉢の側で茶を啜つて居ると、不圖、向うの座敷から三味線の音が聞え出した。

私は思はず耳を敬てた。

「東家さんの部屋へ清元の師匠が來て居るのよ。」

かう云つて、女も耳を澄まして居たが、「ああ、私も三味線でも出来たら如何か成るんだかね」と、打棄る様に云つた。

「ねえ、貴方」と、女は少時して又私の注意を攝亂すやうにしたがら、「私が此處を出たら二三日東京見物をさして呉れないの。私未だ淺草の近所しか東京を知らないのよ。」  
「あゝ、好いとも、そんな事位なら容易に御用だ。」

「それから、芝居にも一日行きたいわ。」

「だん／＼出て来るね。ま、それも可いとして、併しいよ／＼此處を出るとなりや、何處ぞに差支が有りやしないかい。」

「何ですつて」と大業に云つたが、急に又變れて

見せて、「餘り意氣地がない様だわねえ。滿六年の間こんな商賣をして居ながら、年期が明けても誰も引取手がないと云ふやうな。そりやね、私だつて長い月日のことだから些とやそつ

とは可愛いか憎いか思つたこともあつたのよ。それが如何云ふものか今日迄続かなかつたの。私の方から振つたばかりでもないのですけれどねえ。まア因縁がないのでせうよ。」

私は何だか此女の言葉にも世相の一片が含まれて居るやうな気がして、其儘閉ぢてにもされなかつた。で、

「それぢや、此家を出たら差止め如何する氣なんだい。私が諷く譯もないけれど。」

「えゝ、仕方がないから一先づ故國へ歸らうかと思ふの。今ぢや、まア左様思つてゐるのよ。」

私はうそ／＼と女の顔を見乍ら、「併し、今更田舎へ歸つて暮せるかい。」

「だつて仕方がないぢやありませんか。こんな處に居りやこそ、かうして居るものの、外へ出たら私なんぞに東京で口過ぎは出来ませんもの。」

威程、かう云ふ女を一人突歸したら、如何處ることであらう。私の眼には、だん／＼暗闇から暗闇へ落ちて行つて、芥漣の中に落ちて居る女がうぢや／＼と見えた。

「まア、故國へ歸つて、當分両親の手傳ひでもして暮しませうよ。」

「それも左様だね」と云つたが、「でも、両親があるから可いや。家ぢや何をして居るんだい。」

「私の家? 私の家は刷毛屋よ。」

此後、女は私の顔を見るたびに、「最う七十日の生命ね」とか、「又五日減つたわね」とか、そんな事を繰回した。

「乾度見物をさせて呉れなきや可厭よ。私はそれだけが楽しみにして居るんだから」と、念を押すこともあつた。

私も此女に逢へなく成る日が近づくのだと思ひながら、又それが待遠の様に思はれた。此女に對してつくつた果敢ないローマンズが——

私にとつては最後のローマンズである——日に日に縮まつて行くと知りながら、私は其東の間の生命を樂しんだ。實際又期限が切つてあつて、將來がないと云ふことを外にしては、私にして居ることは只の女郎買ひに過ぎぬ。

二月の月は最も足繁く通つた。月の末に行



見掛けない。

やがて大分暇取つた積りで、又千束町の家へ行つて見た。矢張前の娘が出て来て、

「未だ歸りませんのよ。お氣の毒様ですなえ。何なら私の外に誰もいませんから、何卒上つてお待ちなすつて。」

私も如何しようかと思つたが、到頭上つて待つことにした。娘は缺餅を出したり寫眞帳を出したりして取持つて置いて、又裁縫を取上げながら、

「これ薄氷さんのよと、嫣然笑つた。

「ふむむと云つたまゝ、私は只餘念もなく針を運んで行く手許を見守つて居た。

一時間許りして、やつと二人が戻つて来た。

「大變お待たせしたのよと、娘が出迎へると、  
「左様か、そりや濟まない〜と、お品どんは足袋の埃を拂ひながら上つて来て、ついで、此人がもつと行かう〜と云ふものだから、一足づつ兩國迄行つて仕舞つたの。何うもお待たせして濟みませんね。」

かう云ふ間から、後ろで薄氷のおたつが何やらぶつたのを聞かして、「なにさ、それで何の御利益もなしさ。本當に疲勞れ儲けで話らない」とこれにも相手に成つて居る。

薄氷は少し離れて坐つて、一寸日禱をしたまゝ兩手を膝の上に置いて居る。何時の間にやら肩髀にかはつて、黒籠袖の袴を着流した容子が、何處か品好くも見えた。こんな所へ訪ねて来て、こんな風にして逢へば、何うやら深い仲でもありさうな。私は何だか羞痒いやうな氣がして顔を背向けた。

お品どんは一人で陽氣に喋舌つて居たが、不意に話を止めて、「おや〜こんな事を云つてる間に晩く成つて仕舞つたよ。お前さん方何處かへ行くんなら早く出掛けなさんか〜と、女の方へ向いて、

「何だらう、お前さん其の姿で可いだらう。」

女は一寸自分の襟の邊りを見て點頭いた。

「ぢや早くお出掛けなさい。私達は最う寝るから晩く成つても可いんだよ。」

二人は立上つた。お品どんは殊路口まで送出して、私の袂を擦へる様にながら、一泊つても可いんですよと嘯いた。

表通りへ出ると、女は袂から羽二重の襟巻を出して頸に巻きながら、肩を並べて、

「私、昨日出ると、直にあの手紙を書いて出したのよ。」

「だから、それを見て遣つて来たんぢやないか。」

か。」

「そりやア左様だけれど——」

「それよりも、おい、何處へ行かう。」

「私にはそんな事分らないわ。」

二人は往來の眞中に立停つた。

「困つたな。」

「何處でも貴方の行く處へ行きますよ。」

私は今頃こんな女を宿屋なぞへ連込むやうな氣はない。

「ま、可いや。兎に角何處かへ行つて、何か喰ふことにしよう。喰ひながら話をしよう。」

私は先に立つて、十二階の下から活動小屋の前を抜けて、奥の常盤へ行かうとした。

「此方の道を行きませうよ〜と、女は急に傳言院の裏の小暗い所へ連れて行つた。「私や何だか他人に顔を見られるやうで可厭だから。」

常盤の座敷は何れもが空きで、疊が寒さうに見えた。成べく小さい間を擇つて入れて貰つたが、女は直に私の蛭蝨口から紙幣を出して女中に遣つた。

「そんな事をするよ、直に素人ぢやないと見られるよ。」

「え、何うせ左様見られてるんだから。」

私はそれでも可厭に思つた。かうして二人の

會合をつくるはほいろ／＼待設けるやうな氣にも成るが、逢つて見りや、別に話もない、又話のあるやうな女でもない。

「何だらうね、それでも氣がのう／＼したらうね。」

「え、何が何だか未だ分らないのよ。」

私は又女が可憐らしくも成つた。

溜つり／＼飲んで居たが、十一時頃に勘定をして立つた。女には折詰を持たせて、とにかく其夜は歸すことにした。人通りの絶えた暗い街を女を乗せた輪車が駈けて行つた。

女、胸、私は又女を連出した。

「何處へ行くのよ、今日は。」

「東京見物をさせて遣るのぢやないか。何處へでも、歸つて置いて来たら可い。」

「え、と、女は何やら浮かぬ顔をして、」

「私省歸つたら故國から手紙が来て居たのよ。」

「ふむ、それで？」

「それでね、何でも早く歸つて來いつて云ふんですの。親爺が餘程性急に成つてゐるらしいから、私もね、寧ろ最う東京なんぞ知らなきや知らんでも可いから、一日も早く歸らうかと思つてるのよ。」

私は黙つて五六歩移したが、一で、何日歸らう

と云ふんだい。」

「明日にも、明日の夜汽車では如何でせう。」

「それでも可いさ」と云つて、又少時黙つて居たが、一如何だい、今日一日は私に哭れないかい。」

「おや、如何して」と、女は急に止めた聲を出して、「明日歸るつたつて、それ迄は最う離れやしませんよ。」

「併し何だぞ、餘り好い所へ連れて行くんぢやないんだぞ。」

「何處でも可いのよ。」

二人は花居敷の前から觀音堂の裏手へ出た。

小さな祠堂の前に石の反楯がかゝつて、龜の子が幾つもある影の目影に甲羅を干して居る。私は一寸其前に立りつたが、

「これが淡島明神と云ふんだ。女を護りの神様だと云ふからお祈りをして可い。」

「左様と云つたまふ、女は蝙蝠傘を賽銭箱に立てかけて置いて、帯の間から紙入を出して小錢を投げた。一寸鯉口の綱に觸つただけで、手を合せて拜む。」

私は此方に立つて寢不足の眼をしばたまきながら見て居た。不圖、あの女を連れ出して、最初新井の薬師へ行つた時のことが心に泛んだ。只

女を連れて名所廻りと云ふことも心を盡かぬではないが、實は此女が扉を出たら一所に三年前の舊跡廻りをしようとか、かねて心に思つて居たのだ——それに依つて、私の長いローマンズの大詰の葉を閉ぢようとうと。

「大そうな折衝ですわね」と、女は何心なく健へ寄つて来た。「天井一杯に下つて居るんですよ。それが皆青や赤や五色の紙で、丈も中には色の纏めたものもあるわ。」

「あれは皆女が上げるんだよ。一日に一羽宛折つて、百日の間に百羽上げると、大抵の願ひ事が叶ふんだとき。」

「左様、本當に。」

「まあ、左様思ふんだよ。」

私はずん／＼歩き出した。仲間を撥けて、雷門から電車に乗つた。上野で降りて、又山の手線に乗換へた。

「もし一寸、これは田舎へ行くんぢやないの。」

「ああ、田舎に好い所があるんだよ。」

「左様」と云つたまふ、女は別に深く訊ねようともしなかつた。

私も物を言はなかつた。二人並んで腰掛ながら、成べく顔も見ないやうにした。かうして女を連れて歩く。女は何處へ連れて行かれると

も知らぬ。あの時も左様であつた！あの時も。時々女が身動きをするたびに、衣擦れの音を夢の様に聞きながら、私は一種の不安をおぼえた。私は殆ど現在を忘れた。

やがて電車が新橋へ着いた。人込の中にまごまごして居る女の手を引張りながら、又中野行の電車に乗移つた。間もなく終點へ着く。

「此處だよ」と、私は先に立上つた。

「左様、最う来たの。」

何處へ連れて行かれるのか、行く處迄行くんだと云ふ了簡で尻を落着けて居た女は、不意に左様ではれたので吃驚したやうな顔をして居る。

「さア／＼早くするんだよ」と、急ぎ立てる様にして停車場の外へ出た。

「そんなに急いたつて歩かれないのよう」と、女は足許を氣にしたがら脚中の小路を隨いて來る。

私はそれでも足を早めて薬師の門前へ来た。

三年前と物の様子も別に變つては居なかつた。山門には鳩も居る。豆賣の婆さんも未だ生きて居る。御堂の中には蠟燭の裸火が行列をして、

春の柳が満を巻いて居る。今日も又しつとりとした土の上を木の葉の圓い蔭が斜かに俯ふやう

な穏かな日である。すべてが元の儘である、元の儘である。

「此處は何様が祭つてあるの」と、女は鰹口の下に立つて調理をしてから私の方を向いて訊いた。私は女の顔を見詰めたまゝ返辭をすることも忘れた。

「何處か淺草の觀音様のやうねえ」と、何氣なく四邊を見廻して居る。

「あゝ、これは薬師さんだよ。」

私はやつと氣が附いた様に云つた。

「左様、お薬師さんなの」と、矢張彼方此方見廻して居たが、一あれ、一寸あれを御覽なさい」と、急に私の袖を掴んで引張りながら、一あれは何でせう、あれが薬の繩と云ふんでせう。女の髪のもで綯つた繩——何だか怖らしいやうだわね。」

かう云つて、女は尻込する様にした。「なに、あれは何だよ、目の悪い女が自分の髪を切つて薬師様へ上げる、それが段々溜ると、あゝして繩に綯つて仕舞つて置くんだよ。何しろ何十年と溜つたんだから、あんなに成るんだね。」

「だつて、可厭なものね。」  
「ぢや、最う此處を出よう。」

私は裏門の方へ出て行つた。女も別に不足な顔もせず隨いて來た。少時村中の生垣について歩いたが、やがて田圃の中の街道へ出た。三年前に通つた道を其儘踏附けようとするのである。

「あゝ、今日こそ本當に延び／＼するわねえ」と、女は溜んだ蝙蝠傘を眼の上に繋しながら、四邊の景色を見渡した。

雑木林が積んで、隅の夢が青う生びて居る。何處からともなく、ちよろ／＼と水の音も聞える。

「あゝ、これがあの女なら——あの女であつて呉れたら。」  
私は並んで歩きながら幾度も心の中で叫んだ。私は今こんな事をして居る。こんな事をしてやつと生きて居る。あの女は何をして居るだらう、今の今、何をして居るだらう。

私は堪らないやうな心持に成つた。石でも木でも可い、何でも可い、冷たい堅いものが抱き合せて見たい。  
橋の袂迄來ると、つと女を遣過して置いて、

路傍の草の中に足を投出して仕舞つた。  
女は其儘氣も附かずに行つたと見えて、少時して、一おや——と振向つた。

「如何したの、実方」と、立つて居る。  
少時を様して待つて居たが、當り私が出来た  
行かぬので、又側へ戻つて来た。

「本當に貴方は悪いよ、私を一人遣つてさ」と、  
別の間から顔を見せ込むやうにしたが、私は物  
を言ふ氣もなかつた。

女も其處に踞んだまゝ、黙つて、勝手と待つ  
て居た。やがて、

「もし」と、前とは丸で違つたおぼくした聲  
で、「如何かなすつたの、えゝ？ 心持でも感  
いんぢやないの。」

それでも、なほ押黙つて居た。

「如何なの。私には云はれない」と

私は急に撤回つた。勝手と顔を見合せて居た  
が、つと其頸を抱へて——女も私を支へようと  
した手で、堅く私の着物を掴んで居た。

やがて私は女を突離す様にして、其儘青草  
の中に顔を埋めて仕舞つた。

其夜、銀座裏の宿に着いた時、私は女に向つ  
ている／＼言譯がましいことを云つた。

「さぞ驚いたらうね、如何かすると、私はあんな  
風に成るんだから——心では別な事を考へて  
居ながら、ついあんな事をして仕舞ふ。」

こんな事も云つた。こんな事を云ふ位なら、

云はぬ方がましだとも思つた。

「構ひませんよ、あんな事と云つたまゝ、女は  
別に口を利かなかつた。

如何いふものか、彼時から言葉少なに成つた。  
夜店でも見に行かうかと誘つたが、それにも應  
じなかつた。そして、早くから寝ることにした。

寢る時に、寧ろ本當の事を話して仕舞はう、あ  
の女の事も打明けて話さうかとも思つたが、又  
思ひ返して止めた。

明るる朝、女の方から、「最う東京も見たく  
ない。疲勞れて外を歩く位なら、此處にかうし  
て居る方が可い」と言出した。

それでもお品さんの所に預けてある荷物も持  
つて来なけりや成らぬし、土産物も最少し買ひ  
足したいと云ふので、午頃から一人で出掛ける  
ことにした。私は買物だの、汽車賃だの、お品ど  
んの家で厄介に成つた體だの、それから歸つた

當座の小遣錢などを見積つて、若干の金子を  
女の手に渡した。

「まア、それだけにして呉れ。私も明日からの  
小遣が要るから。」

「これだけで澤山ですよ。いろ／＼何うも御迷  
惑を擧げて済みません。」  
女の出で行つた後で、私は物に追かけられる

やうな、勝手として居られぬやうな心持もしな  
がら、其宿屋にころ／＼して居た。

夕方、女は大きな行李を電車に積んで戻つて  
来た。お品さんも、其袂も見送りに隨つて来た。

四人一緒に夕飯を喰べに近所迄出かけたが、切  
符も行李も前屋の番頭に頼んで置いて、銀座の  
夜店を見ながら、停車場の方へ歩いて行つた。

四人に成つてからは、別に話をする機會もなかつた。

午後八時の夜汽車で立つことにした。いよいよ  
汽車に乗る前に、女は私を片膝へ呼んで、

「着いたら直に手紙を出しますよ。貴方も時々  
おたよりを聞かして下さいな——私、何だか最  
う一度お目にかかれるやうな氣がして成らんの  
よ。」

「有難う。併し私からは手紙は出さんよ。ま  
ア、先の事は約束しない方が可い。」

かう云つて、私は笑ひながら手を離した。  
間もなく汽車は出た。お品母子は二三間出  
して迄見送つた。私はほつとして踵を回した。

出口の石段の上に立つて居ると、  
「おゝ、小鳥君ぢやないか」と、背後から来て、  
私の肩を叩いたものがある。見ると、それが神  
戸であつた。

「お、暫くと云つたが、實際神戸とは暫く疎々しく暮したので、私の方からは極りの悪いやうな思ひもした。」

「本當に暫くだつたねと、神戸は心置なく物を言ひながら、「君歸るのか、歸るのなら一緒に歸らう。」

二人は連立つて石段を降りた。後の二人は遠くから目撃をしたまゝ、何處かへ消えて行つた。

銀座街まで来ると、神戸が裏回つて、「如何だ、別に用事がなかつたら、最少し話して行かうぢやないか」と言ひ出した。

「左様だね」と、二人は又街の角のビーヤホールへ這入つた。

二人は啤酒を飲みながら話した。話の種は啤酒と共に盡きなかつた。それでも、神戸はあの女の語には觸れない様にした。私も素より口にしたかつた。

其處を出たのは十二時に近かつた。須田町迄来ると、最う江戸川行の電車がない。神戸も其處で降りて、一所に歩いて歸らうとした。

夜、街に歸りかゝつた。

神戸は線路の上を歩きながら、

「あの女が此頃ちよゝ、僕の許へ来るよ。素晴しい風姿をして——如何したのか。」

「如何したんだらうね。」

私はこんな進辭しか出来なかつた。

「併し彼の時分から見ると、あの女も歳を取つたよ。今ぢや未だ歳を取つて却て美しく成つたやうだが、女は變るものだね。」

他人からあの女の噂を聞くのが、私は只侘しいやうな心持がした。

神戸は又言葉が続けた。「それにしても、何時迄あゝして居る氣なのか、いづれ一生あゝして居る積りだらうが、それぢや堪らないね。殊に君は一層左様だらう。あんな事をして居られては、君の落着く時はない。」

私は黙つて線路の敷石の上を歩いて行つた。

「實際あの女の心持は僕にも分らないね。自分では大に分つてるのだらうが、俺から見れば、矢張分らない」と云つたが、聲を低うして、「併し何だね、男が女のために苦しむのは、決して女から嫌はれるためぢやない。女は決して男を嫌ひはせぬ。只愛するとも云はぬ。又愛せぬとも云はぬ。偶々近寄つて来て意味のあるやうな事を云ふかと思ふと、又元の所へ戻つて、平然として居る。如何してあゝ平然として居られるかと思ふ程平然として生きて居る。それも何か生田妻のあるやうなことを造つてるのなら

可い。それなら此方が諦めもする。左様ぢやないんだ、左様ぢやないんだから困る。かうして有義無義の間に釣つて置かれるのが一番辛いんだよ。」

神戸は何時の間にやら自分のことを云つてるらしい。私の事を一所にして話して呉れるのは——私のは最う女の心が分らぬと云ふのでない、それだけにも値しない——あの男の好意であらう。で、

「君のあの女は如何して居るんだい」と訊いて見た。

「如何もしない。あの儘だ、あの儘に生きて居る。僕はそれで餘り堪らなく成ると、寧ろ向うで僕を捨てて呉れたらと思ふよ。如何云ふ手段でも可いから左様云ふ意志を明白に示して呉れたら——そしたら、とにかく片が附く。時には死んで仕舞つて呉れたらと思ふことさへある。」

だん／＼酒の酔が醒めて来たので、神戸の聲は鋭かつた。私は只聲を呑んだ。

「そんな殘酷な事さへ思ふことがある」と、神戸は薄笑ひを洩しながら、

「併し女は死にもせぬ、捨ててもせぬ。只、此處に女が歳を取る——女の頭に白髪が生えると

云ふことは、男性が女性に對する唯一の復讐だよ。男性全體が女性に對する復讐だよ。」

かう云ひ切つて、少時黙つて居たが、「君も左様思つてゐるんぢやないのか。」

「そりや僕だつてと、私は諦りながら、一僕のもの生きてゐるのはあの女が生きて居るからだ。あの女が生きてると云ふ外に、僕の生きて居る理由は一つもない。」

神戸はしばらく黙つて歩いた。私も黙つて足を運んだ。

やゝ有つて、又神戸が言出した。

「併し時には只ナイーフに逢ひたいことがあるよ。君でも同じことだらうが、一日でも可いから顔が見たい、逢つて聲が聞きたいと思ふことがある。」

「他所ながらでも」と、私は思はず附け足して云つた。

「それと同じ様に、矢張夫婦に成りたい。正直に云へば、夫婦に成つて暮したい」と、神戸は自分の云ふことだけ續けて云つた。「そりや直に飾きて仕舞ふだらう。こんな位なら最初から一所に成らずに、あの儘で居た方が可かつたと後悔するのは目の前に見えて居ても、矢張夫婦に成りたい。そして女にも愛想を盡かし、自分も

後悔がして見たい。」

二人は街の真中に立つて手を握り合つた。神戸も興奮して、云ふことが一々私の代りに云つて居る様にも思はれる。何も彼も知合つた昔の友は矢張懐かしい。

「おゝ、最う水道橋へ来たこと云つて、神戸は立停つた。一ぢや、此處で別れようか。」

「今夜は併し面白かつた」と、私は二たび手を出した。

二人は強く握り合つた。

やがて、神戸は其處に客待をして居る馬車に乗つた。私は涙についてとほくと戻つて行つた。

### 十四

毎日、うつら／＼として日が経つた。何も考へまい、何も思ふまいとした。考へることも、思ふこともないやうな氣もした。滅多に部屋の中からも出なかつた。

一週間許りして薄氷から音信があつた。それは只無事に着いた知せと、世語に成つた禮とで、固より心にとまるものでもない。

此度四月九日午後一時頃のことである。私は銭湯の戻りに神樂坂送用達に行つたが、坂の

下から鈴を鳴らして、二三人號外賣が走つて來る。近頃珍らしいなとは思つたが、其儘氣にも止めなかつた。歸り途に、不圖氣が附くと、電信柱の前に人だかりがして居る。何心なく立寄つて見ると、今、號外が貼附けてあつて、「吉原大火、江戸町二丁目より出火し、今尙延焼中」とある。私はわけもなく胸が痛いた。

朝からどんよりして生暖かい風の吹く日であつた。私は部屋の中に坐つて居ても、始終吉原の火事が氣がかりで落着かれない。第二第三の號外が出る。其たびに一々それを買はせて見た。午後四時頃には風上の京街にも延焼して、大黒樓にも火がかゝつた。風下は五十間を越拂ひ、吉原堤を越え山谷方面にも出火して、今や殆ど番都の北門を管め盡さうとして居る。終に軍隊の出動を見とあつた。

あゝ、吉原が減びる、何となく人の心に一種の感傷を傳へて行く。兎に般、二百年の歴史を持つた色街である。あれで崩れたとは云へ、あの位傳説と習慣とで堅じられた色街が、他所の國にもあらうか。國の誇りには成らぬかも知れぬが、誇りには成らぬ誇りである。私は一人

でしみ／＼と舊いもの減びて行く殘惜しさを味つた——恰度、一本だけ残して置いた古

い御染の文を失くしたやうな。  
日暮に、何と思つたか梵妻が窓の側へ立つて、

「吉原が火事ですつてねえ。此處からぢや駄目ですけれど、表の坂へ出て御覧なさい。眞黒な煙が空一杯に見えて、そりや凄まじいものですよ。」

「こんな處から見えるなア雲ぢやないのですか。」

「えゝ、雲ですすか煙ですか、何しろ大變なものですから、一遍見て被入しやいよ。」

私は別に出て見る氣もなかつた。  
梵妻は一寸張合が無さうにして、

「何ですか、南千住が危いと云ふことですねえ」と云ひ足した。

明くる朝、新聞を見ると、一面大火の記事で埋めて、淺草の地圖を挟んだのが、大半眞黒に塗られて居る。女郎の逃げ惑ふさまや、消防や救助隊の活動が挿畫添へて載せてある。

思つたよりも一層屈かつたらしい。  
私は十日前に原を出た薄氷のことを思ひ遣つた。昨夜からまたび／＼それを思つた。六年も居ながら、僅かのことで此災難に遇はずに済んだのが何うやら偶然とも思はれない。あの女が

折ふし、私は東京には居ない」と云つたことも思ひ合せた。

其日の午過ぎ、私は頸頭跡を見に出かけた。坂本の通りを眞直に行つて、鷲神社の傍から曲らうとしたが、巡査が立つて居て這入らせない。

又一二町行くと、其處から千束町の方へ抜ければ、私は大勢の彌次馬の後に隨いて行つた。

「何々樓立退場」と云ふ札を立てたのが幾らもあつた。女郎が汚れた顔をして、夜具に凭れながら、所在なげに往來の人を見送つて居るのも見受けた。其中に「信濃善立退場」と云ふ札も目に留まつた。吉原病院の裏手へ出ると、木欄

の間から一面に焼跡の精の上が見えた。所々土蔵の焼け残つたのが、ぼつくり立つて居るのも、一しほ荒涼の氣を添へる。未だ壁の下から塵の積んだのからぶす／＼と煙が出て居るのもある。それでも場所柄だけに大方周囲をし

て、其上に樓の名を染出した畑がはた／＼と風に靡くのも物寂しい。

私はそれから吉原堤の上へ出て見たが、只見渡す限りの畑野原と云ふ外はない。直に又千束町へ引回した。此邊にお品どんの家があつた筈

だと、洞に添うて、二三度露路をまごつきながら、やつと訪ね當てた。格子の外から聲をかけ

ると、同居主らしい婆さんが顔を出して、お品さんは大黒樓の寮へ行つて居ない、娘も留守だと云つた。

「それでもお品さんは恰度家へ歸つて居たから、好い鹽梅に火事には遣はなかつたでせうね」と訊くと、

「好い鹽梅なら好いんですが」と、口をもが／＼させながら、「折も折、昨日の朝又お店の方へ戻つたんですよ。戻ると直にあの騒ぎでせう。眞個か眞想だつたら有りませんや。」

「左様か、そりや如何も」と云つたが、別に言様もない。違つたら宜しく云つて呉れと言ひ残して、念の爲に寮の所在を聞いて其處を出た。

父がら／＼と歩いて山下迄來た。恰度日が暮れたので、甲子へ這入つて夕飯を喰ひながら、不圖、上野の山にあるといふ大黒屋の寮を訪ねて見る氣に成つた。

一まあ這入りにくかつたら、他所ながら見て來るだけでも可い」と一人言つて、木蔵の坂を上つて行つた。

圖書館の側を入つて突當つた角に、二階中時なり廻りが點いて、わや／＼と女の聲のする家がある。此處らしいなと思つて、つと立寄り

うとすると、門の前に一人の男が先へ來て立つ

て居る。途端にばた／＼と梯子段を駆け降りる音がして、一人の女が上草履のまゝ、  
「あれ、吉村さん」と、突然其男の胸元へ纏りついた。

「まあ今度は大變よ。私達も着のみ着の儘で、からして居る外に着替さへ持つて出ないのですもの。餘り心細いから、今恰度貴方の所へ手紙を書いて出さうとして居た所なので、袂から鞆に成つた紙片を出して、それを圓めながら両手を合せる様にして、一本當に好く来て下さつたわねえ。」

それにつれて男が何やら云つて居る。  
私はそつと暗がりの方へ立退いた。そして、生垣について足早に其處を去つた。

やがて足を地めながら、  
「俺も最う東京に用はない」と、不圖こんな心が浮んだ。

あの女の心が分らぬと云ふが、それも最う分らぬ度を越して、私にさへ何の味ひもない。あの女が生きて居るから、自分も生きて居る。あの女の住む所に住んで居る。そんな意地を出して見た所で今更何に成らうぞ。又そんな意地に生かされる私ぢやない。そんな私ぢやない。それよりも故園へ歸つて、最う一遍靜かな所で寝

て見たい。久し振に母親の顔も見たい。  
私はあんなにされながら、矢張あの女のことを好く思つて居る——他人から見たら見苦しからうが、心の底ぢや、矢張好意を持つて居る。そんな仕度のない好意の、これが最後の表示として、私は東京を去らう——東京を。

本気で左様極めたと云ふでもなく、又極めぬでもなく、それでも考へることだけは一心に考へつゞけた。そして暗い町、暗い町と擇つて歩きながら、當もなしに彷徨つて行つた。

「何時お歸りなすつたんです。私は又——と、  
楚妻が云ひ掛けた時、急に想ひ出した。私は寺へ歸つたのだ。寺へ歸つて、自分の部屋に坐つて居るのだ。

「私や又、玄關の戸も明いてるし、洋燈も宵の儘とほつて居たものですから、如何なすつたかと思つて——」

私は俯向いたまゝ、只えつ／＼と顎で返辭をして居た。併し向うが云ふだけのことを云つて仕舞つてからも、何と返辭をして可いか分らない。

二人ともまじ／＼として、少時話が絶えた。  
「最う何時でせう」と、良あつて、私から言出した。

「左様ですけれど、一寸背後を見返るやうにしたが、最う晚いですよ。一時過ぎ彼是二時にも成りませうか。」  
「そんなものでせうね。」  
左様云つたまゝ、又候一人で考へ込んで仕舞つた。

「最うお臥みなさいましな。寢床を取つて上げますから」と、楚妻は襦の蔭に立つたまゝ云つた。  
「えゝ、寢ませう」と、我ながら無愛想な返辭が出た。

「御免なさいましよ、こんな旨い服裝をして」と云ひながら、身體で襦を押し開ける様にして着入つて来た。成程、寢巻に細帯一つで、勝手知つた押入から夜具を出して敷いて呉れるのを、私は「は只まじ／＼と見守つた。何だか、日頃から餘り好かない様に思つて居た此女までが、今夜は取分け懐かしい。私の物の言ひ様に依つちや、此女でも年寄つた夫を捨て、三人の子供を残して、私と一緒に走らないとも限らぬやうな氣もする。

「さ、早くお臥みなさいな」と、楚妻は夜着の足許の方へ廻つて、一寸叩き附けながら、襦の蔭に置いた茶汗燈を取上げようとした。

「あの上、私は流れて呼び留めた。「あの、明日の朝五時が打つたら、直に起して下さいませんか。」

「五時に？」と可訝なやうな顔をして、「何處かへいらつしやいます。」

「え、一寸故郷へ歸つて来ようかと思つて。」

「あ、左様ですか——宜しう御座います。」

「それぢや、何卒五時には間違ひなく。」

「え、大丈夫ですよ」と、片手に洋燈を持つて立上つた。

「あの——それから此事は、後で訪ねて来る者があつても、誰にも仰有つて下さらぬやうに。」

「故郷へお立ちに成つたと云ふことですか。」

「え、左様です」と云つたが、楚妻の何やら胸に落ちなさうな笑ひ顔を見ると、私は又むきに成つて頼んだ。何度も同じ事を繰返して、しつこく念を押した。

「大丈夫ですよ、そんなに仰有らなくとも」と、楚妻も終にじれつたさうな返辭をしたが、其儘部屋の外へ出て、そろ／＼と襖を閉めながら、「それぢや、最うお臥みなさい。」

「お臥みなさい」と、聲に應じて云つたものの、楚妻の姿が壁の外に隠れると、私は急に最う一度睨び返して顔を見たいやうな氣がした。

如何云ふ譯だか、私にも分らない。私は只胸一杯に成つて居た。

大團圓

次の日の夕ぐれ、私は靴一つ持たずに手ぶらで岐阜の停車場へ降りた。僅か許りの書物と身の周りのものとは、そつくり其儘あの寺に捨てて置いた。何とも言ひ残しては來なかつたが、一二年も持宝があらはれなかつたら、其内には如何かして呉れるだらう。此後、縱令何處で暮すにしても、最う諸道具などのある身には成りたくない。

私は改札口で驛夫に切符を渡さうとして、不圖、吉原を出た女のことゝ心に泛んだ。あの女も、十日前には、此處を通つて、此欄干にも手を觸れたらう——が、直に又思ひ返して、車夫を喚んだ。最うあの女にも用はない筈である。

長良の橋を渡つて、町を出外れた辻堂の前で陣車をかへした。それから長い堤の上を一人でてく／＼と歩いて行つた。堤の片側は何處迄も笹薈がついて、片側は青夢の畝がほの黒く夕風に靡いた。見ると、腰の屈んだ農夫がのそのそと堤の上へのぼつて來て、一寸春延びをしながら、自分の前をせか／＼と村の方へ戻つ

て行く。私はわざと歩調を緩めて、其爺さんに追附くまいとした。

やがて、又一一人畑の畔から唐織を擔いだ男が出て來た。其後に手甲を穿めた女房らしいものつゝいた。そして、前の爺さんと出奔頭に何やら聲を掛けた。私は思はず足を留めた。村には一面に夕靄がかゝつたが、何處からでも目標にされた自家の裏の大櫓が見えない。私はこんな事にも胸が蕪いた。

又そろ／＼と歩き出した。村の取附の軒家では、昔戸から籠の火があか／＼と見えた。何處であらう、竹の向うから赤子の泣く聲も聞えた。それが斷れんに、弱く、さる悲しげに泣く。何時迄も泣く。幾許他の事に心を向けようとしても、如何しても其聲が耳について離れない。

私の心は遠い昔にかへつた。高い木の梢で、夜なく赤ん坊が野衾に血を吸はれて泣くと云ふ、子供の時に聞いた話も想ひ出された。村の中程の十字街へ來て、前の三人が横へ反れたのを見ると、私は思はず驅出した。家の跡は一面に見違へる程明るく成つて居た。邸の周りを取巻いた木立も代り拂はれて、只桑畑の中に、立ちの低い村屋と掘井戸の屋形

だけが残り居た。勿論、土蔵も門も何處へ行つたやら影さへ見えぬ。思へば、音信も途絶えがちな、丸三年の留守の間、母親はそんな物でも買つてかつく生活を立てて居たのである。

私は少時屋敷跡の空を見上げたまゝ立つて居たが、又思ひ返して、前の板橋を渡つた。そして、草に埋もれた敷石傳ひに母屋の軒下へ近づいた。其時、家の中から入口の聞き戸を開けて、つと出て来た白髪の婆さんがあつた。其顔に見覚えがない。向うでも私を見知らぬのか、じろじろと私の顔を眺めて居たが、やがて地面にくつ附く程、頭を下げて、其儘表の方へ出て行つた。私は入れ違ひに土間へ這入つた。

土間の中は眞暗で、一足動いても、柱に打突かりさうな気がした。私は少時闇の中に目を凝らして居たが、不圖、中の間の杉戸を渡れて、佛間から微かな光が射して居るのに気が附いた。それを口當に物をも言はず、つか／＼と上つて行つて、闔の上に立つたまゝ奥を覗き込んだ。佛壇には、丁字の立つた燈明が一つ消え残つて居るばかりで、部屋の間々が妙に薄暗い。それでも、段々暗がりに慣れて、佛壇の前に何やら溢くものが眼についた。一人の老婆が幾枚も蒲

團を積んで、それに背を凭せて寝て居るらしい。顔を見ると、それ程年を取つて居るやうでもない。圓々と子供らしい顔をして居るが、頭髮は一筋も残さず眞白に見えた。向うでは早く此方の姿が眼に附いたと見えて、頻にお叩頭をして居る。私は二足三足何へ近づいたが、思はず、「阿母さんか」と喚んだ。

矢張お細だ、三年前に別れた母親のお絹に相違ない——ああ、この變り果てたことわい。「誰だと思つたら、阿母さんか。私ですよ。只今東京から着きました。」

それが耳へ入つたのか入らぬのか、老婆は前と同じ様に繰返してお叩頭をして居る。「如何したのです、え？ 私に分らないのですか。」

斯う云つて、やをら老母の肩に手を掛けながら、俄に悪い前表でも見附けたやうに、胸の動悸が打出した。私は凝手と其顔に見入つた。

何日か一度中風に罹つたとは聞いた。半身不随の難病だとは聞いても、其後格別便りもないので、心には掛りながら忘れともなく忘れて居たが、彼時からこんな事に成つて居たのか、こんな、現在我子の見界も附かぬやうな、手頼ない有様に成つて仕舞つたのか。

「ね、物が言へるんですか。物を言つて下さい、傍とか言つて下さい。」

私は老母の冷たい手を握つたまゝ、只遺漸なしに擦振つた。擦振りながら、たら／＼と涙が頬に傳はつた。

老母はけりりとして相手の顔を見て居る。

私は思はず其手を離した。感覚のない腕はぐたりと肩から垂れ下つた。それを見ると、私は思はずよろ／＼と立上つた。誰か来て哭れぬか、誰か来て涙が聞かして貰ひたいと思つたが、其儘又其處へ倒れて仕舞つた。

ああ、子は終に親の側へ歸つた。私は最う何處へも行かない、何處へも行く所はない。

(明治四十三年)

# 袈 裟 御 前

## 人物

袈 裟 御 前 又の名阿とま。  
 衣 川 袈裟の母。  
 遠藤武者盛造 北面の武士。  
 波邊左衛門尉 豆 袈裟の良人。  
 松 ケ 夜 袈裟の侍女。  
 楓 ケ 衣川の召仕。  
 兵 五 盛造の郎黨。  
 奎 作 老いたる番匠。  
 其他に番匠、仕丁、侍女など数人。

## 第一場

### 波邊橋供養の場

正、面に太鼓形の橋、橋の袂に波邊橋普請場とした標示柱立つ。それに柳の樹をあしらふ。舞臺上手と下手に假屋立ち並び、帳幕を張設してある。假屋の前に櫻

の二本三本。

時は春の末、夕まぐれ。凡て橋供養終へて人散じたる光景。櫻の花、間を置いてひらくと散る。下手の普請小屋の中に大釜を据え、其下に火燃ゆ。番匠ども五六人打興じて居る。そこへ仕丁三人下手より来る。

仕丁一 やれ／＼済んだぞ。これで今日の役日も首尾よく済んど云ふものぢや。

仕丁二 左様とも／＼、幸ひ風もなく日も暖かに、結構な渡り初めでおじやつたわい。

仕丁三 これから終りと骨休めの振舞ひに有附くのぢや。(小屋の中を見て) や、お主達は早や始めて居るな。

番匠一 いや最う行列の長さに待ち勞れて、内密でちよつぱり始めた所ぢや。お前方も此處へわせられい。

番匠ども さアわせられい／＼。  
 仕丁一 俺も早い奴等ぢや。

仕丁二三 それでは仲間へ這入ろか。  
 番匠ども さア／＼。

大釜の周りに圍座して、釜の中の白丁を取出し、皆々酒を酌む。盃順々に廻る。

仕丁一 さア／＼今日の賑ひは驚いことぢやつたの。近年橋供養もつづく中に、此様な人出は見ぬことぢやい。

仕丁二 加茂の祭も斯程では有るまい。何さま禁裏からの勅使は立つ、仁和寺の御坊が導師で、緋の衣を着た大衆が渡り初めすると云ふからに、京洛中の男女が集つて出たのぢや。それにしていはいかう評ひもなく、負傷人も出ず、無事に済んで何よりぢや。

仕丁一 俺は又餘りな人出に、折角架けた橋が今にも如何ぞ成りやせぬかと、大抵心配したことぢやないがな。

番匠一 何を言ふぞい。津の國の番匠が腕に擔をかけて仕上げた仕事ぢや。間違ひが有つて堪ろかい。

仕丁一 何ぢやと。  
 番匠二 まア／＼、堪もない唾合は止めぬかやい。お奉行様の耳へでも入つたら事ぢや。したが、今日のお奉行様、お歳は若い物の

裁きも、いきばきして行届いた方ぢや。

仕丁二 おうき、あれはの、遠藤武者盛造とて、高い聲では言はれぬが、院の侍の中でも慕れ者と評判の方ぢや。彼の大きな眼玉で、四邊ぎろく見廻しながら、大薙刀を挿込んで、のそりく歩く姿を見ては塞も立って働かうぞ。

仕丁三 ちよと手を明けてでも居ようなら、直様あの怖い眼を怒らして、大音聲に喚かれる。ほんに氣も魂も身に添はぬわ。

番匠二 したが、其お蔭で今日の供養も無事に済んだ。

仕丁二 そんな物かい、はムム。

仕丁三 さア一杯飲め。

番匠三 時に本作の姿が見えぬが、何處へ行た。あの酒好きの翁が見えぬぞ。

番匠二 今迄此處に居た筈ぢやが。

番匠一 あれく彼處にほんやり立つて居るわ、遺物が落ちでもした様に呆けて立つて居るわ。

一人白髪のお番匠、仲間を離れて假屋の外へ出て、腕組みをしながら、ほんやり橋の上を見詰めて居る。

番匠三 こりや本作、主や其處に何してぢや。

此と此處へ来て祝ひの酒を飲まぬかやい。

老番匠 (昔を向けたま、咳く様に、) いや、僻せぬ事が有るぢや。

番匠三 何が僻せぬのぢや。  
老番匠答へず。

(假屋の外へ出て、) はて、今日はお主如何かして居るな。あれ程好きな酒も飲まず、何ぼ聲を掛けても返辭をせぬ。

老番匠 (一人言の様に言ふ、) はて、不思議な事が有るものぢや。今日波りれめの導師がお通りの前、庵も残さず清潔に掃いた橋板の上を、二尺に七寸餘りの母子の蛭が、ちよるちよる、ちよくと波つて行く。誰も氣が附かぬ様ぢやつたが、俺の眼にはちやんと見えたわい。

皆々少時沈黙する。

仕丁一 (一人嘲笑うて、) 何を言ふのぢや。そりやお主の眼の迷ひぢやろ。

老番匠 眼の迷ひなら眼の迷ひにして置け。此橋には女の執念が祟つて居るに違ひない。此橋にも橋を建てた者の身の上にも、何ぞ間違ひがなければ可いな。

番匠一 何を言つてるのぢや。此ほかくとし

た陽氣なら、蛭も出よ、藁も出よ、彼の年中土の中を潜つて居る土龍も春と知つて踊り出さうわ。それに何の不思議が有るか。

番匠二 いや、待てよ。それに就いては俺も

聞き込んだことが有る。今迄縁起でもないところへ居たが、此橋が出来ると、左様ぢや

一昨日の朝ぢや、歳の頃は二十四五の女房が此橋から身を投げて死んだといひ。

仕丁二 あ、其女なら昨日の日暮れ、川下の村から死骸に成つて上つたさうな。何でも腹に五月ばかりの子を抱へて居たと云ふ話ぢや。

仕丁一 して又、其女子が何で死んだ。

仕丁二 俺は知らぬ。

番匠二 俺も知らぬ。

皆々 いや最う鶴龜々々。

仕丁三 こんな話がお奉行様に聞えて見ろ、又何んな日に遣はうも知れぬわ。

仕丁一 あれく噂をすれば影とやら、彼處へ見えるはお奉行様ぢや。

遠藤武者盛造、今年十九歳、紺村紺の直垂に黒絲威しの腹巻して、折鳥帽子、銀の蛭巻したる薙刀左の脇に挟み、舞臺上手より後ろを顧み勝ちに出で来る。橋の前迄来て、物に躓きたる心持にて振り回り、普

請小屋の中をぐつと見込む。仕丁番匠ども盛造の姿を見て屏風を倒す様々。頼まりたるが、此時假屋の前に並んで、びよこびよこと頭を下げる。盛造はそれを見たるまゝ、殆ど心にも留らぬ様子にて、二たび後ろを振り返り、一心に上手を見詰めて居る。

それとも知らず袈裟御前、十六歳、下髪に被衣、みやびたる女房の風俗にて、同じ上手より出づ。頭重く惱ましがな風情。

松ケ枝 (手に市女笠を持ち、つか／＼と後を追うて来たが、) もし上様え、お前の氣合ひが悪いて、假屋に休んで御座つた暇に、參詣の衆も大方散つて仕舞うたさうな。いつそ奥に召しますか、それとも最少しおひろひ遊ばすかえ。

袈裟御前 さマ、慣れぬ外出に人に酔うて、お前にもいかい苦勞を掛けました。したが、暮れ行く春の野の寂けさ、あれ／＼櫻の花も散つて居る、いぶせき奥に揺られうより、最些と歩いて見ようわいな。(又そろ／＼と舞臺前面へかゝる。)

松ケ枝 (一歩も動かずに、) 一歩、一日一夜を

籠めて、寧すお方の偶の外出、ほんに野木の色も面白から、それでは左様遊ばせや。盛造、舞臺後方に突立つたまゝ、眼もて袈裟御前の行く方へ従つた。やがて段々後ろへ退つて、二人の女と入れ代る。

老番匠 (盛造の傍へ近寄つて、小腰を屈め、) お奉行様、もし若いお奉行様え、何を其様に見てお坐で遊ばす。見るのは悪い、其様にして一つ所を見るのは悪い。

盛造の耳には入らぬ體。老番匠 な、其様にして女子を見るものではない。屹度好からぬ事が起りますぞえ、貴方の身にも、女子の身にも。

夕ぐれ時へ舞ひ下りむとする雲雀の音空に聞ゆ。袈裟御前思はず足を止めて、空を仰ぎながら靜に踵を廻したが、松ケ枝と顔見合せて、

袈裟御前 ほムム、ほムムム。松ケ枝 ほムム、ほムムム。

袈裟御前、不圖、盛造が火の如き眼に自分を見詰めて居るのに氣が附いて、急に笑ひ止む。何か物に怖ぢたる様に花道の附根迄逃げ行き、わな／＼と震へて居る。

松ケ枝も振向いて、盛造を見附け、走り

寄つて、片手に主を庇はうとする。袈裟御前 早う奥を、早う。(物言はむとすれど、聲出でず、手を動かすのみ。)

松ケ枝 奥丁の衆、早う／＼。奥丁、白木造りの奥を屏き据う。袈裟御前、其奥に乗らうとして腕を上げたが、又盛造の眼に引かれる様にして、二三歩戻る。其儘うつりと成る。

もし、お上様え。如何なされました。(と、袖を引く。)

袈裟御前 あいなア。(氣が附いて、二たび奥に乗る。)

奥丁、奥を昇いで揚幕に入る。松ケ枝も引添うて走せ行く。

盛造、たじ／＼と舞臺真中へ連れて来て、一里先きの物でも見詰める様に、凝手と揚幕の方を見込む。

老番匠 (傍へついて来て、) あゝ、危い事ぢや。お止め成されませ／＼。其様にして見詰めて居たら、屹度悪い事が起りますぞえ——もし、お願ひで御座ります。何卒あの方は見デに置いて下さりませ。爺のお願ひで御座ります。

盛造 (不圖、振向いたが、袖を振りちぎつて、か

らりと薙刀を捨てて。爺轉ぶ。兵吾々々。雜兵一人（下手より出て跪く。）これより預盛遠（腹巻をかなぐり捨て、）これを其方に預けたぞ。

よろ／＼と袈裟の後を追うて入る。老番匠、一旦尻餅をついたが、起上つて、其後を見詰む。日の暮れる心持にて舞臺面次第に暗く成る。

## 第二場

### 衣川住家の場

鳥羽の里、衣川住家の體。靈草の軒朽ちて、上手に障子を閉め切つた佛間。正面二重には、白地の襖、其前に二枚折の屏風を立てて、爐の釜に湯沸る。下手に網代門。

母衣川、四十八九歳、切下髪、未だ残んの色香失せやらぬ姥櫻、昔の美しさを思はせる風情、後ろ向きに坐つて、釜の湯加減を見て居る。門前には、一人の托鉢僧、口の中で讀經せる所にて、幕開く。

### 衣川

（讀經の聲に聞耳を立てて、向直りなが

ら）あゝ、又毎もの托鉢の御出家さうな。どれ、お布施を進せませう。（と言ひつゝ、立上つて納戸へ入り、再び初穂を盆に載せて出て来たが、香脱石の上の庭下駄を穿いて、門の傍へ近寄つた。手頭を敷珠を掛けて居る。）さ、心ばかりのお布施やぞえ。

托鉢僧 歸命頂禮、南無阿彌陀佛。（と誦し終つて、初穂を頭陀袋に受け、鉢の中から衣川の顔を覗き込む様にしながら、）今日も白河から四條の邊り迄參ります。何か京へお言へども御座らぬかな。

衣川 さいなア、此中娘の便りも聞かぬが、便りのないのは無事な證據、其間文でも認めて置いて、又頼むことに爲ますわいな。托鉢僧 ほんにお前様は有徳な仁ぢや。當時渡邊黨の中でも美男の聞え高い耳殿を尊に取つて、此方の娘御と二人並べて置いたら、定めて鑑の様である。何事も前の世で善根を積まれた應報ぢや、南無阿彌陀佛々々々々々。

（花道）かゝつて退場。）  
衣川（凝手と其後姿を見送つて居たが、つと身を引いて、）今日は九月十三日、月こそ遠へ、亡くなられた阿とまが父御の速夜、わが

身が彼の子を抱へて奥方から戻つてからも十

三年、あゝ思へば早いものぢやなア。どれ、花でも手折つて佛に進ぜましよ。

と、片手に剪刀を執つて、口の中で稱名を唱へながら、庭前の桔槌女郎花など切つて居たが、再び二重へ上り、障子を開けて佛間に入る。其時金色をした佛壇が見えて、又障子に隠れる。靜に鉦の音ひびく。

遠藤武者盛遠（狩衣を着て素足に草履の扮装、顔色憔悴して頓髪少々伸び、思ひ切つたる面持にてばた／＼と花道を駆けて来たが突然門の扉が破れよとばかり打叩く。）物まう、案内まう。

鉦の音止む。  
盛遠 誰ぞ有らぬか。盛遠が參つた。早く出て門を開けられい。  
衣川（佛間を出て、訝しげに四邊を見廻しながら、）楓々、楓は居やらぬか。誰やと門に案内があるぞ。

返辭なし。首を傾げながら庭に降りて門の中より聲を掛く。  
衣川 誰ぢや、氣た／＼ましいい、何人ぢや。（盛遠應へず。そつと扉を細目に開けて、）何人にて坐すぞ。

盛遠、物をも言はず、其扉に手を掛けて押開け、衣川を突除ける様にして、ぬつと入る。衣川は其扉と一緒に倒れむとして、漸く踏み留まり、此無法な闖入者を睨めて居たが、

衣川 や、其方は盛遠——ま、珍らしい、好うおじやつたな。(と、いそ／＼近寄らうとして、相手の血相變へた容子に氣が付き、急に怖氣がさして立縮む。)

盛遠 いかにも盛遠ぢや、久し振に伯母御前を見舞ひに參つた。(擬乎と衣川の様子を見返したが、俄に憤怒の聲荒く。)伯母御前、何故其様に俺の顔を見詰めてぢや。

衣川 (たじ／＼として) さ、何もわざ／＼和殿の顔を見ると云ふではないが、お、それ、和殿も子供の前には毎日の様に此處へ來やつて、阿とまとも一緒に遊び暮したものでやが、おひ／＼男に成るに附け、院の北面へ出仕する様に成つては、お宮仕への暇なさ、ふつり足も途絶えたのに、何と申うて今日のお出——と思つての事ぢやいな。ま、其方へ上らつしやいなう。

盛遠 (阿とまの語を聞いて顔色を變へたが、さ有らぬ儘に沓脱石の上に登つて、縁に腰打掛

く。)併し伯母御前には御息災に何より重疊。衣川 (遠くから廻る様にして、二重へ上つて、和殿も健固で嬉しわいの。それに此春は又渡邊橋の橋供養に奉行の役を勤めて、いかい名譽の事さうな。阿兄持遠殿にも、草葉の蔭から嘸お喜び——)

盛遠 (じり／＼と向直つて) 渡邊橋の供養のこと、誰から何と聞かれた。

衣川 さ、誰から聞いたとなけれども、それは最う此邊り迄大層な評判ぢやわいな。(二たび盛遠の容子に眼を附けて) 其方、何故其様に震へてぢや。まア怖らしい眼をして此伯母を如何する氣ぢや。

盛遠 お、一期の敵、伯母御前の命を貰ふのぢや。(と言ひさま、伯母の小腕取つて振ち伏せ、片手にすらりと腰の刀を抜放つ。)

衣川 (悲鳴を上げて、身を激揺しながら) 何とし給ふ、盛遠殿。妾のために和殿は明、和殿のためには玄は伯母、殊に母御の沒られてからは、此伯母が手鹽に掛けて育てた和殿、親とも子とも思はれよう、恨みを受ける覺えはない。誰が何の様な謔言して、斯く愛目をば見せたまふぞ。

盛遠 いや、他人の謔言でない。今も和御察の言はれし通り、幼きより阿とまとわれ、野邊に蝶追ひ川に漁りして、共に睦びしことを忘れ給はずば、折に觸れての戯れにも行末は二人を聚合せむずと、伯母御前の口づから宣ひしこと、よも忘れじ。さるに何日の間にやら我を差置き、一門の亘に袈裟をたまひしことぞ心得ぬ。現在の伯母に欺かれ、可惜女子を人に奪られた。此恨み伯母なりとて親なりとて容赦が成らなうや。

衣川 そ、そりや無體ぢや、其恨みは餘りに無體ぢや。和殿が左程執心なりや、何故早う沙汰はしてたもらぬ。老先短い親の身は、一目も早う娘に好い掣取つて、初孫の顔見たいものと、そればかりに憂身を甞すぞや。少しは子を持つた親の心も酌んでたもいなう。

盛遠 え、親の心おのれが知らうや。盛遠こそは三年が間、われから此家へも遠ざかつて、人知れず心の痛手を包んで來たものの、先つ頭渡邊橋の供養の日に、久しや、袈裟の姿を見掛けてより、妄執の念二たび燃え立つて、晝とも夜とも分たねば、身は空蟬の脱殻の如く、命は草葉の露も同然、戀には人の死なぬものかは。斯く成り果つるも元はと言

へは誰がためぞ。嗣子命を取らるゝなら、伯母御前、和御寮を殺してわれも死ぬわ。いと、衣川の頭髪とつて巻廻しながら刃を胸元に振す。

衣川 まア〜待つて、少時待つても。

盛遠 待つてとは未練な。

衣川 未練とも言へ、卑怯とも言へ、親一人子一人の袈裟を置いては死にともない。宥してたべ、盛遠殿。(と、手を掲げて伏拜む。)

盛遠 (擬手とそれを見て居たが、) すりや、左程に命が惜しいか。

衣川 台點々々する。

盛遠 命惜しくば、耳が手から袈裟を取戻して、われに返せ。

衣川 ま、其様なことが。

盛遠 出来ぬと有らば、それも可い、盛遠一人やみ〜と見殺しには爲れまいぞ。

衣川 いえ〜、待つても。今は是非に及ばぬ、其方の心の晴れる様に爲ようわいな。

盛遠 なに、阿とまをわれに返さうとな。

衣川 今、袈裟を此家へ喚んで、和殿に會はさう程に、其後は二人で兎に角、兎に角此處を離したもいの。

盛遠 屹度さうか。(思はず、衣川を捕へた手

を放つ。)が、併し腕に至つて耳か方へ通り忠など爲さば、和御寮を初め、袈裟、耳、一門残らず棄殺しにして、恩ひを晴らすが心得たか。

衣川 (身を震はせながら、) あいなア。

盛遠 うむ、それだに間違へ給はずば、一命にも及ぶまい。では又々方に御意得申すぞ。(わざと慈悲なし眼に睨み廻して、舞臺下手より退場。)

衣川 (少時其後を見送つて居たが、) 如何せう、如何せう、如何せうぞいなア。

と、泣き沈む。やがて佛間から料紙と硯箱を持つて来て、一字々々考へては書く、やつと認め終ると、も一度讀み直して、吐息を吐きながら、文箱に入れた。手を叩いて侍女を喚ぶ。

楓々。

衣川 楓々。(襖を開けて出て、) 召しましたか。

衣川 大儀ながら此文箱を持つて、並の里の亘が邸へ行き、袈裟に手渡ししたもいなう。構へて何事も言ふまいぞや。

女の童 はアい。(元の襖から退場。)

衣川 (擬手と一つ所を見詰めて居たが、はらはらと落涙して、額を上げ。) あゝ、ひよん

な事に成つたわいな。いつそ額を喚び戻さうか。したか、今の盛遠が有様、よも其儘には差指くまい。親の身として、わが子に道ならぬ道の手引をする。一定來世は地獄に墮ちよう。あゝ、如何したら可からうぞいな。(と、身を悶えて泣き伏す。)

稍長き沈黙。舞臺次第々々に暗く成る、黄昏の心持。

袈裟御前 (楓と共に急ぎ足で登場、花道の中程に、息切れのする體にて停る。) あゝ、何とやら氣がかりな、心細い文の御消息。母様の身に大事ないかえ。

女の童 いえ、御案じなさる様では御座りませぬ。

二人綱代門の前迄来る。女の童門の扉を開けて置いて、裏口へ廻る。

袈裟 (門の中に入つて、) 母様々々、阿とまが参りました。(と言へど、答へなし。) まア日も暮れたに燐火も點けず、如何なされたことやら。(と、だん〜縁鼻に近づく。)

女の童奥より燈火を持つて出づ。

袈裟 (母の倒れて居るのを見て、) まア母様、そこにお坐遊ばしたか。風邪のお心地と承はりましたが、何の様で御座りますぞえ。

衣川 (半ば身を起して、つく／＼、袈裟の顔を見つめて居たが、はら／＼と潸潸して、) 娘か、好ら来たもつた。此母はな、犯せる罪とてなけれども、身に振りがゝる大難に、所詮生きては居られぬわいの。

袈裟 え、(飛び立つ。)  
衣川 さ、何も言はずに此刀で、(と、傍の手箱の中から小刀を取り出して、わが子の前に置く。)  
さ、和女の手懸け此母を思ひ切つて殺したもい。

袈裟 (後ろへ下りながら、) まあ何としてぞ。母様、お氣でも狂ひしか。阿とまに何で其様な——さ、心を落着けて様子を話して下さい、譯を聞かせて下さいいなア。

衣川 (袖で顔を蔽うて居たが、) 様子と言ふは今朝のこと、何日になく彼の盛造が訪ねて来て、子どもの折の事を言立て、是非なく袈裟をわれに返せ、さらずば母の命を取ると、刃を胸へ突きつけてのつ引させぬ無理難題。

袈裟 (思はず知らず、) あの遠藤盛造どの——  
衣川 和女、何と云ふつたか。  
盛造 い、と、阿とも致しませぬ、(と言へど、心の中には何時ぞやの邂逅が浮んで来る心持、) それから何と爲されましたえ。

衣川 さ、それぢやに依つて、盛造の思ひを許させずば、無慈悲な刃に殺されるは一定、さりとして互が心を破らうではない。いろいろ思ひ惱んだ上、人手に係つて憂目を見まじり、切めて和女の手にかゝつて果てようと、思ひ定めて居るのぢやわいなア。(と、袈裟の膝に取懸つて、さめ／＼と泣く。)  
袈裟も暫くは言葉なく、折重つてよ／＼と泣く。

袈裟 (やう／＼涙を拂ひ、) 母様、最う泣いて下さりますな。阿とまは心を決めました。親のためには、さしお義もする習ひ、お命に代ります。縁を結びの神様も、哀れと思して下さいませう。

衣川 なに、何と言やる。  
袈裟 盛造殿に會ひますわいな。  
衣川 いや、和女に其様な目を見せこは、此母が亘殿に面目ない。何卒、姿を手に懸けて——

袈裟 え、最う、何も何も言う下さりますな。(と、畳の上に伏沈む。)  
衣川 ほと／＼と網代門に案内の音聞け。衣川、そつと頭を擧ぐ。  
盛造 (門の扉を開けて入りながら、) 先刻の約

東によつて盛造が参つた。  
衣川 お、(と、飛び上つたが、後ろに袈裟を隠しながら、わたくしと戦へ一居る。)

盛造 伯母御前、何と爲された。(づか／＼と縁の前迄進んで、) なに、そこに居るは袈裟御前ではないか。(と、二重へ上つて、) 幼馴染の盛造なるわ。なにも、其様に怖がることはない。これへ出ませ、さ、これへ出ませい。(と、矢聲に傍へ寄りうとする。)

衣川 あの、それは——(と、兩手に盛造を支へようとする。袈裟、袖屏風をして、小鳥の様に懐へ一居る。)  
盛造 え、邪魔ひるぐな。(と、拳を上げて打たずも氣勢。)

袈裟 もし——(と、二人の中へ割つて這入つた。)  
盛造 どの——(兩膝をとんと突いて、片手に衣川を庇ふ様にしながら、腕手と盛造の顔を見上げたが、其眼には決心の色見えて、男に對する恐怖と憎悪とが鬨つて居る。とは云へ、其憎悪は物狂ほしい愛着と峻一重障りのものである。)  
盛造 お、阿とまか——(と、傍へ寄りうとしたが、女の顔を見ると、何となく其威に打たる、やうな心持がして寄添ひ得ない。)

袈裟（眼して盛遠の後を追つたが、見る／＼緊張した肩のまはりの筋肉が弛む。）おゝおゝお——（と、聲を上げて泣伏した。直ぐに又屹と顔を上げて、）阿とまぢや、阿とまで御座んす。其阿とまをお前は何と爲されますぞえ。

盛遠 おゝ知れたこと。此戀かなはずば生きて暮ない盛遠、武士と生れて、弓矢に死ぬるも一定、戀に死ぬるも一定。世の心なしが笑はゞ笑へ、和御前を殺してわれも死なうと、疾くより覺悟を定めて来たわ。

袈裟 えゝ。へ、思はず顔を上げたが、又しをしをと差俯向く。）

衣川（後ろではら／＼と氣を揉んで居たが、前へ乗出して、）そ、そりや其方何を言ふのぢや。

袈裟 母様、もしッ——（と、衣川を制して、）お前は彼方に居て下されませ。阿とまが好い様に致しまする。な、な。（母を宥めて、佛間へ連れて行く。やがて又懐へ手を差入れたまゝ、しを／＼と出て来て、やゝ離れた所へ坐る。）

盛遠は始終眼を離さず袈裟の舉動を見詰めたまゝ、何とも言はない。

（顔を上げて見えては、又言出しかねたが、やつと）もし、盛遠どの。小さい時からお前の氣性、言出しては諸かぬ人と知らぬではなけれど、昔の事を思つたりや、阿とまを哀れとはおぼさぬか。思ひ返して、宥してはたらぬかいの。

盛遠 なに、哀れと思へ——それは此方て言ふこと。宥せとは、此盛遠に一人死ぬと言ふのぢやな。

袈裟 いえ／＼、左様ではなけれど、何を言ふにも、われは人妻。

盛遠 えゝ、言ふも無益。其人妻には誰が成つた。斯く成る上は命くらべ、誰彼の容赦が成らうや。和御前が不祥、盛遠が不祥、加へては亘が不祥、三人の不祥が一度に来るとも、宿業なれば是非もなや。いづれにしても、三人に一人、所詮生きては居られまい。袈裟御前、心を据えて返答召されよ。（むつくと立上つた。）

袈裟 えゝ、三人に一人——（と言ひさしたまゝ、差俯いて物を案するさま。やゝ暫くして）盛遠さま——（問。）お前のお心やうやう合點が行きました。

盛遠 合點が行つたとは。

袈裟 から成り行くも、皆宿世の因果、繋がる縁で御座りませう。阿とまはお心に随ひまする——したが妾は未だ真人のある身、重きが上の小夜衣、人目を恥づる棲籠ねはよも爲せまい。盛遠どの、まこと妾を思はうてなら、一思ひに、わ——亘を殺して下されいなう。

盛遠 なに、亘を殺せ——とな。

袈裟 今更お前は後れてか。それでは先刻仰有つたのも——

盛遠 おゝ、和御前さへ其心なら、何とて盛遠が後れを取らうや。して、其手段は。

袈裟 其手段は——おゝ、左様ぢや、妾はこれより家へ戻つて、左衛門尉に髪を洗はせ、酒に酔はせて高敷にそつと寝させて置きませう程に、其濡れた髪を搜つて打つて下さりませ。

盛遠（躍り上つて、）大願成就。それでは、明日の夜九ツの鐘を合圖に——

袈裟 えゝ——屹度。

遠盛 屹度言葉を番へたぞよ。

袈裟、杖を銜へたまゝ、佛に點頭く。盛遠、沓履石の上へ飛び下りて、綱代門より出て行く。

衣川（佛間より出て、）盛遠は歸つたかえ。ま、

能う彼の暴れ者が歸つたなう。(と、袈裟の後ろから寄添ひて、心配さうに其顔を見上げらる。)

袈裟、立上つたまゝ、盛遠の後影を見送つて居たが、母と顔を見合せて、上から見下しながら、物は言はず、せぐり来る涙にぶるくと身を戦はす體。だんく岸折れようとして、途中から急に衣川へ背を向け聲なく下に伏沈む。

其間、家の裏にある背景の立樹の梢に、夜明けの心持にて、茜色の光射す。

幕

### 第三場

#### 亘の邸宅

舞臺や、下手寄りにまはり縁を廻した殿造りの座敷、庭を距てて、上手に障子を閉切つた高殿が見え、波廊が兩方を繋ぐ。恰度その波廊の上邊りに十四夜の月が出て居る。庭前の泉石、すべて中古武家の好み。

波邊左衛門尉 亘、二十三歳、名古屋山三に似たやうな美男子、練組の小油に袴を

着けたばかりで、縁に近い座敷の脇息に凭れ、打寛いだる體にて盃を擧ぐ。袈裟御前、瓶子を取つて、つましやかに酌をし、居る。火皿の燈火ゆらいで、微かに二人の面を掠む。

亘 (盃を下に置いて)、あゝ、先刻より、何とやら氣がかりな和女の容子、氣分でも勝れぬか、それとも何か心に係る——

袈裟 いえ、左様な事は御座りませぬ。亘 それなら最そつと浮立つて、一つ酒でも過しては如何ぢや。母御の病氣も、案じたよりは事なく清んで、それも重疊。見やれ、今宵の圓かな月を。夫婦の中も彼の様に缺けたることもないではないか。

袈裟 はい——お心を煩はして済みませぬ。只——親のいたづきとは云へ、女の身に斷りもなく一夜を外に明した、それさへお咎めもなく、お優しい言葉を聞くに附け、何や彼や案じ過して、つい——

亘 はて、何を語らぬ。それより如何ぢや、これを一つ和女に上げよ。(と、盃を獻す。)

袈裟 (叩頭をして、それを受けた。)妾も今宵は酔ひます。

亘 (やゝ酒のまはりたる心持。)それは希代な事ぢや。では、如何である、月を肴に、一曲所望は出来まいかな。

袈裟 (笑顔を見せて點頭きながら。)拙い調べも、時の興——

亘 (はたくと手をつつて、侍女を喚び寄せ) 奥の間から筑紫琴を取つておじや。侍女 はい。(退場。)

亘 和女が我家へ來てから、早や三年、和女と一緒に采も來たのぢやな。

袈裟 采も手馴れる、妻も古びる——

亘 はゝゝゝゝ。

袈裟 ぼゝゝ。侍女二人、一面の琴を拂して出で、それを袈裟御前の前に置く。袈裟、それに見入りたるまゝ、急に眞面目な表情と成る。

一つづつ琴爪をはめながら、物を案ずる體。やがて絳の音に作れて、しめやかな唄に成る。

露深き浅草が原に迷ふ身のいと閑路に入るぞ悲しき

(急に琴の手を止めて。)もし、人に斬られて死ぬ時は、佛に成らぬと云ふことぢやが、ほん

の事で御座りませうか。

亘 はて、異な事を訊くものぢや。佛に成るか  
成らぬか、其様なことは女子の云ふものでな  
い。したが琴の音色も沈み、何うやら手許も  
惰さうな。最早や琴は止めにしやれさ。

袈裟 いえ、妻は夜すがらでも。

二たび朗詠に作れて、琴を振鳴らす。物  
靜かな夜の氣合。其間、亘は脇息に凭れ  
たま、うと／＼と成る。袈裟は不圖琴  
の手を止めて、亘の顔を見遣つたが、いよ  
いよ疲れた顔に、つと琴を押し除け膝  
で擦寄つて、腕手と五分間餘りも良人の  
寝顔を見詰め居る。顔面の筋肉次第に  
痙攣する様に震へて、喉へ切れずに、わつ  
と聲を出さうとして袂を咬み緊めながら  
伏沈む。

亘 う、其方や如何かしやつたか。(むづ／＼  
と動く。)

袈裟 きくりとして頭を上げたが、二た  
びすや／＼と寝附く様子を見て、胸推下  
しながら立つて襖の前へ行く。はた／＼  
と手を打つ。

侍女 (襖の中に、) はア——

袈裟 (二たび亘の傍へ取つて返して、手を掛

けて捲起しながら、もしツ、夜風も寒う成  
りました。彼方へ御座つて御寝成されませぬ  
か。

亘 (むつくり起上つて、) あゝ、何時の間にや  
らうと／＼疲れたと見える。夜も深けた  
か。和女も来やれ、彼方へ參つて寝ると致さ  
う。

袈裟 はい、妻は後から——

亘、足許や、危き心持にて、侍女に伴  
れられて次の間に入る。袈裟は立上つて  
其後を見送つて居たが、良人の姿が襖の  
外に隠れると、思はずたじ／＼として振  
回り、べつたり亘の坐つて居た茵の上  
に坐つた。そして、いや／＼とする様に  
泣上げながら二たび脇息の上に顔を伏せ  
る。

侍女二人 (襖を開けて這入つて、) 上様には、

未だ御臥み成されませぬか。

袈裟 (急に顔を振上げて、) 殿様は最う御寝成  
つたかえ。

侍女 最うお臥み遊ばしました。

袈裟 あゝ、左様か。妾は未だ彼方に用事も有  
る。それでは後を頼んだぞえ。(縁側へ出て、

突當りの波廊へ通ふ開き戸に入る。)

侍女二人、其後に、脇息、茵、其他消  
宴の器を取片づけ、最後にばた／＼と兩  
戸を閉めて行く。それと同時に、上手の  
高殿にばつと灯火が點つて、障子に二人  
の女の影法師が映る。

袈裟 (障子の中にて、あゝこれ、松ケ枝や、  
一寸待つても。又あの蠟が火皿の灯を奪り  
に來た。左様して置いたら、今に焼死ぬであ  
ろ。危い。早う其障子を開けて逃して  
遣りやいなう。

松ケ枝 はい、畏まりました。(障子を開け  
て、蠟を退出さうとする。)

袈裟、片手に濡髪を支へたまゝ、鏡立に  
向つて坐つて居る。傍に金唐箱の櫛箱を  
置いて、すべと髪を洗つた後の體。

袈裟 (松ケ枝の方を見遣つて、) 最う好いわい  
なア。

松ケ枝 え、頼い盡め。(と、二たび袈裟の後  
ろへ廻つて、あるじの髪を櫛も一梳き上げな  
がら、ほんに、上様のお髪は好いお髪ぢや。  
天竺に有るといふ、蘭香の香りを焚きこめて、  
中宮様の黄金の冠を被せても、屹度好う似  
合ひませうぞえ。

袈裟 (暫時黙したる後、) 其方にも好いと見え

るかえ。

松ヶ枝 好い段かいな。したが、夜に入つて、不意に髪をお洗ひなされたのは、如何いふ譯で御座いますぞえ。松ヶ枝には何うも合點が参りませぬ。

袈裟 え。 (稍ぎくりしたが、直ぐに又心を落附けて、) お、それ、今宵は菊月望の夜。此夜若い女子が髪を洗ひ、薄化粧して臥せる時は、一生男に捨てられぬと、昔の譬話にも有るさうぢやわいな。

松ヶ枝 まあ左様かいな。私は又好い歳をして、つひぞ其様な話も聞きませなんだ。左様云ふ事なら、紅も白粉も好うつけて、たんと可惜しがつてお貰ひ遊ばせや。さア、お髪も最う出来ました。つい一寸下へ行て、盥の水を明けて参りますぞえ。

袈裟 いろ／＼大儀であつた。したが、其水を明けやつたら、取う此處へは來んでも可い程に、ゆつくり臥座したもい。

松ヶ枝 いえ、最一度参ります。

袈裟 いやい、和女の來てたらぬ方が、却て妾の都合が可い。な、な。

松ヶ枝 ま、左様で御座りましたか。それなれば、最度参りませぬ。御機嫌好しお臥し進ば

せや。(何やら呑込み顔に、襖を開けて降りて行く。)

袈裟 (襖の閉つた後を稍久しく眺めて居たが、又もや後ろ向きに吸り上ぐる體。やがて正面を向くと共に、片袖づつ互みがりはりに涙を抑へて) あ、幾たび泣いても返らぬこと——涙に顔を汚しては死顔を見られるのも恥かしい。切めて化粧を直直して置かうわいな。

二たび鏡立に向つて、紅血、白粉刷毛など取出して、顔をつくる。其間不圖顔を上げて仰上つたが、物に襲はれる様にわなわなと身を戦はして思はず手に持つた紅血を取落す。紅血鏡の縁に當りて二つに割る。氣が附いて、吃とそれを見遣つたが、だん／＼其眼を鏡の中に移して、自分の顔が映るのを見ると、又急に飛び立つ。

お、妾を誰に見しよとて顔を粧るのぢや、死顔に化粧して——誰に見せようと云ふのぢや。(稍長き間) 誰でもない、遠藤武者盛遠どの、お前に見せるのぢや。お前でなくて誰が有らう。わしやお前に——身體は上げられぬ。それで——それで、此首を上げるのぢ

や。お前に殺されるのぢや。(にた／＼と笑つて) あ、可愛いか、可愛かる。妾もお前を可憎しう思うて居る——お前を此處に待つて居る、一人寝て待つて居る。お前の足音が次第に此部屋へ近づいて、枕元に立つ迄待つて居る。闇の中に白刃が閃く迄腕手と眼を開いて待つて居る——

きり／＼と齒を咬みしばつて、當處もなく宙宇を見詰めて居たが、ぼつたりと壁の上に伏し轉んだ。月の前を怪しげな雲が走つて、草叢に蟲の音すだく。

(やがて又その／＼と頭を擡げた。一時興奮した感情も二たび鎮靜したらしい。) あ、妾は矢張良人のために死ぬのぢや。母様、真どの、宥して下さい。妾故に數多の人の命にも係はる難儀、それが悲しさに、わが身一つを失ひます。袈裟をあはれと思召さば、後世の御回向を備へに頼みますわいなア。

鐘の音微かに響いて来る。

あ、あれは——妾を死出に迎ひの鐘——

障子の棹に縋つてよろ／＼と立上つたまま、物音に耳でも欲てる様に、凝乎と庭前を見透して居る。月雲に隠れて庭の面次第に暗く成る。やがて袈裟御前、そ

そと障子を閉めて、五寸程に成つてから、ぱつぱつ閉切つたまゝ、妻を對岸の中に隠す。少時して、ふつと烽火を吹消したる體。

月光再び水の様に輝く。家の中は何處にも烽火の影射されば、月の光も當らぬ所は、黒々として物凄。下手の座敷の櫓に釣つた鐵燈籠が急に光を増して、大きな宮守のへばり着いたのが、はつきりと見える。

鐵燈籠が、袴衣の上に輝をして、素足、下手屋臺の裏の植込の中から、のつそりと出る。四邊を窺ひ、方足を踏み擧めて、舞臺中央迄忍び寄つたが、家の蔭を出外れると、全身に眩いばかりの月光を浴びて、驚いて一足退く。今度は縁の上へ這ひ上つたが、角の柱を曲ると、月光の當つて居る鞆淵を一目散に駆けて、渡廊へつゞく間き戸の蔭へ隠れる。事なく其戸を開けて内側へ這入つた様子。

少時の間、舞臺の上に動くものなし。宮守も依然として動かない。

高殿の中に、「ヤツ」と云ふ掛聲。

と、突然障子を開けて、盛造の妻が高殿に現はれた。右の手に白刃、左の脇に何やら抱へて居る。一瞬間右腕左腕して驚つたが、思ひ切つたさまで、高殿の欄干を登って庭へ飛び降りた。直ぐに立上つて元來の方へ駆出した。が、下手迄駆けて行つて、何と思つたか急に足を留めた。二三歩立戻つて、左の脇に抱へたものを、鐵燈籠の灯影に透して見る。盛造の腕には驚きの表情が有つた。又、突然駆け戻つて、月光に透して見た。

ヤツ、こりや笑姿が――  
盛造は白刃を取落して、兩手に袈裟の首を抱いたまゝ、大息を吐いた。其儘、地上に尻餅をついた。足摺りをして、自分で自分の腕を蔽ひた。聲を上げて呻いた。

互の聲 (家の中にて、) ヤア曲者が這入つたと見えるぞ、者ども、出音へへ。

家の中一時に騒然と成る。盛造はそれにも気が附かぬ様に、身を隠えながら、遺瀧なげに袈裟の死瀧へ顔擦をした。

高殿を開き戸から、ばら／＼と物具を

着けて、襖物を使った御書が現はれた。盛造はやつと気が附いた様に振回つた。急に片膝立てて立上らうとしたが、思ひ返して、袈裟の首を腕に抱いたまゝ、地上に平造つて仕舞つた。

(大正二年三月十六日)

年譜

明治十四年 (一歳)

三月十九日、早曉、岐阜縣稲葉郡鷺山村の一農家に出生。父の名は龜松、母の名はとく。米松と命名さる。村の西方、長良川の支流古河に臨んで、麓より頂上まで二町程にて達せられる香山あり。稲葉山の城主齋藤道三の隱退したる城の址なりといふ。道三の滅びて後、その藩武者の土着せるものも村の中にありといへど、わが家は左様のものにあらず、先祖よりの土百姓らし。

明治十八年 (五歳)

この年五歳にて隣村上居村の小學校に入る。昔に左様のこともありけらし。開卷劈頭凡そ地球上には五大人種あり、亞細亞人種、歐羅巴人種といふやうに、無暗に畫の多い宛字を四五行並べた圖書を授けらる。時易して間もなく退學す。

明治二十年 (七歳)

改めて同じ小學校に入學す。

明治二十四年 (十一歳)

明治二十八年 (十五歳)

この年三月岐阜市高等小學校に入學す。五月父を失ふ。越えて十月二十七日震尾の大震災あり。岐阜市全焼、小學校も炎上す。わが家は無事なりしも、村内に死者多敷、しかも餘震半歳にしてなほ熄まず、物情騒然、初めて溚世の有爲轉變を悟る。

明治三十一年 (十八歳)

この年四月上京、攻玉社海軍豫備校に入る。日清戦争の影響と感化を受けたるらし。一つは費用少なくて仕官の途を求めむがためなり。五月中明治天皇廣島より大艦を反させらるゝを内幸町大凱旋門のあたりに奉迎す。

明治三十二年 (十九歳)

三月日本中學校を卒業。一日歸省して、七

月中金澤の第四高等學校に入學す。十一月二日、親戚の一女を、後を追ひ來りたること發覺して、擔任教授藤井乙男氏より諭旨退學を命ぜらる。これより翌年の春まで名古屋手にて、耽讀措かず、純正文學に興味を有つに到りたるそもくなり。

明治三十三年 (二十歳)

五月中再び上京して、根津權現の境内にある下宿にて、女庫海詩人河井醉茗氏と相談する。七月中第一高等學校の入學試験に合格したるも、當時亞弗利加の南端に所謂南阿戰爭の勃發せるあり、ボーア人に加擔して、大統領クリューゲルの下にその獨立戰爭に参加せむとの志熄まず、容易に入學の手續きを踏まざりしも、河井氏等の諫止に會ひ、終に志を變じて、九月に入つて漸くその手續きを了す。

明治三十四年 (二十一歳)

同級生にて文學に志せる生田長江、栗原古城、川下江村等の諸君と共に、同覽雜誌「夕づつ」をつくる。「水泡集」の調子に似せたる美文「大吠酬」を書きて得意になりたるも、この頃のことと覺ゆ。

明治三十五年（二十二歳）

千駄ヶ谷の新詩社に與謝野寛氏同品子女史を訪ねて、その知遇を受く。ドーデエの「サツフオー」、モウパッサンの『知篇集』、ワシントン・アーヴィングの『アルハムブラ』などを讀み始む。

明治三十六年（二十三歳）

初めて波蘭の詩人シェンキエウイツチの『十字軍の騎士』を讀む。なほ「サツフオー」に影響されて、假名姿を書き、文藝俱樂部に投書して賞金二十圓を受く。七月一高文科を出づ。八月長男亮一を生る。母は森田つね。

この冬本郷區丸山福山町四番地に一小屋を借る。その前栗原古城氏に伴はれて、馬場孤蝶先生を飯田町の寓に訪ひたることあり。先生、たま／＼予が移轉の通知を受けて、これはこれ故人随口一葉女史の舊居にあらざるかとの疑ひを起し、わざ／＼訪問せらる。果して女史が孀居の趾なり。予が大隈文學に眼を開きたるは、一に孤蝶先生の知遇と指導に據る。初めツルゲーネフの「ルーディン」を先生に借りて讀み、驚喜して巻を捲く能はず、更に先生の所有せらるツルゲーネフは悉く讀破したるが、なほ足らざるは先生の紹介

によつて、田山花袋氏、柳田國男氏より借覽して、その業を終れり。當時ツルゲーネフを所持するものは、實にこれ等の數氏の外兩名に過ぎざるなりき。更に孤蝶先生に教へられて、メレジュコフスキの『人及び藝術家』としてのトルストイ並びにドストイエフスキを一覽するに及んで、予が露西亞文學に對する傾倒は殆どその絶頂に達せりといふべし。後年予は安倍能成君と共に同して、この書を譯出せり。なほ予が上田柳村先生の知遇を得たるも、孤蝶先生の紹介に基づく。上田先生は予が大學にてその指導を受けつゝありし先生なり。その先生を學校外の孤蝶先生の紹介にて知りたるも、一奇と云はむか。

明治三十七年（二十四歳）

上田柳村先生、馬場先生と共に雜畫、墓苑を出され、予も生田長江君等と共にその同人に加へらる。先生に教へられて、初めてダンヌンチオの『死の勝利』を讀む。前に讀みたるシェンキエウイツチの『十字軍の騎士』を抄譯して、郷國大垣の先輩加藤楓柳先生の手を経て、『時事新報』の紙上に連載さる。

明治三十八年（二十五歳）

雜誌『帝國文學』に「捨てられる女」を掲載す。

明治三十九年（二十六歳）

前年の暮より一週に一回つゞ夏目先生の自宅に參會す。所謂木曜會これなり。その間に高濱虚子氏を初めとして、寺田寅彦博士、小宮豊隆、野上豊一郎の諸君と相識る。やゝ後れて鈴木三重吉君とも知る。後に先生は西片町十番地、早稲田南町七番地に移轉されしも、われ等がその後を慕ひて集まること相同じ。中にあつて、三重吉君最も異彩を放ち衆目を惹く。この年七月東京帝國大學文科英文學科を卒業。

明治四十年（二十七歳）

四月天台宗中興林の英語教師となる。與謝野品子女史開秀大學講座を創始し、予もその講師の一人となる。その時の學生に平塚らいてう、山川菊栄等の諸君あり。十二月甲子が學期試験の當日失念して、出校せざるの故

を以て、時の天台宗管長某大僧正猗下の名  
によつて中興体の英語教師を免ぜらる。

### 明治四十一年（二十八歳）

二月の末、或事件のため予は殆ど社會的  
に葬られむとしたるを、漱石先生に救はれ、  
しばらくその邸に寄寓したるか、後横寺町の  
正定院に移りて専心創作に従事す。創作に  
よりて自家の行状を表白する以外、予が再  
生の道なかりしなり。漱石先生の好意によつ  
て、その作の成りし曉は春陽堂より出版、  
次いで「朝日新聞」に掲載の豫約成る。しかも  
當時予の心不静を缺けると、さまんゝなる  
世間的顧慮のために、さなきだに性來釋筆の  
予は、筆漉りて業容易に進まず、その年の暮  
れに及んで、僅に百有餘枚を脱稿せるに過  
ざざりき。

### 明治四十二年（二十九歳）

正月元日より予の「筆煙」は「朝日新聞」の  
紙上に連載する。この作意外にも世間の注  
目を惹き、旬日を出でざるに、予は所謂有名  
なる作家の一人とはなれり。勿論、事件その  
もの「筆煙」の注目を受ける上に、所謂苦  
白小説なるものが未だ多く世に現はれざりし  
時代のことなればなるべし。しかも、それか

ために、予は益々進んで、前に書き溜めた  
る百有餘枚も間もなく追ひ着かれ、その日送  
りとなれるばかりか、終には新聞社の輪轉機  
の側にて、書く後から一枚づつ活字に組んで

貰ふといふが如き醜態をも演じて、焦慮と煩  
悶との間に漸くその業を終りたること、今  
なほ予の記憶に新なる所なり。かくして「煤  
煙」は辛じて出来上りたるも、作中官憲の忌  
諱に觸るゝ所ありとて、かねて約束したる春  
陽堂も出版を躊躇し、貼込帳はしばらく筐  
底に埋藏する外なきに到る。なほ「中央公論」  
にすゝめられて短篇「離合」を書きたるも、「煤  
煙」に餘力を剩さざりし後とて、勿論失敗の  
作。この頃よりして、余は漸く文學にて自立  
する力を疑ひ始めたるも、十一月の末より  
漱石先生が朝日文藝欄を起さるゝに及び、入  
りてその業務を擔當することとなる。朝日文  
藝欄は新聞に文藝欄を設けたる嚆矢にして、  
當時にありては自然派に對抗して純正藝術  
の大道を行く唯一の機關なりき。

### 明治四十三年（三十歳）

朝日文藝欄の仕事をする傍、同じ新聞の紙  
上に、「煤煙」の縮稿ともいふべき「白杖傳」  
を連載す。作者としては多少の自信ありたれ

ど、世間的には凡ての縮稿の遺棄するが如き  
運命に遭逢せり。この年八月漱石先生修善  
寺にて大吐血、門弟子一同周章を極む。

### 明治四十四年（三十一歳）

この年十一月朝日文藝欄廢止さる。先生の  
病中、予の編輯振り甚だ粗漏にて、紙面の  
一角を占領する價値なしと見做されたるに據  
るもの如し。なほ予は「離合」を「中央公論」  
に掲げたる後、大正四年に到るまで、數年間  
に亘りて、同誌並びに「新小説」その他の誌上  
に十數篇の短篇小説を物したるも、その中常  
に「初戀」の一篇が漱石先生のお褒めに預りた  
ると、最後に「中央公論」に掲載したる戯曲  
「婆娑御前」が、世間の注目は惹かざりしも、  
自分としては比較的自信ありたるをを除き、  
他は皆云ふに足らざる劣作乃至間に合せもの  
にて、作者自身すらその題名も内容もよくは  
記憶せざる程なれば、こゝに記して、わざわ  
ざ讀者の記憶に無用の負擔を強ふるにも及ば  
ざるべし。

### 明治四十五年（大正元年）（三十二歳）

長篇小説「十字街」を「讀賣新聞」に連載、職  
に放れて、しかも創作をつづけることに自信  
を有せざる予は、一番たやすい翻譯に手を附

けて、先づイブセンの『鴨』を手始めに、ダン  
マンチオの『快樂兒』、ドストイエフスキの  
『惡靈』等を完了す。この後、十數年間に互  
りて、常に翻譯の筆を絶たざりしものと知ら  
れたし。ダンマンチオの犧牲、ゴゴリの  
『死せる魂』、檢察官等その中にあり。

大正五年 (三十六歲)

この年十二月九日、夏目漱石先生病みて歿  
せらる。予は直ちに遺作、明暗の校正に従事  
す。

大正六年、七年 (三十七、八歲)

『漱石全集』の校正に専念従事す。

大正八年 (三十九歲)

下總國利根河畔大森町に移り住む。次男長  
良生る。(以下三男あれど、略す。)

大正九年 (四十歲)

この年三月法政大學に文科の新設せらるゝ  
に及び、入りてその教授となる。爾來十年間  
その教職にあり。

大正十二年 (四十三歲)

久し振りに創作『輪廻』に筆を染め、雜誌『女  
性』の九月號より連載す。然るに九月一日  
關東大震災あり、書き留めたる原稿も雜  
誌社にて焼失され、物情恟然、天下を擧げ

て騒擾せる間に、ひとりての稿の復活と續  
稿の制作に従ふ。

大正十四年 (四十五歲)

三月より國民文庫刊行會に入つて、多年繼  
譯したる『ウイルヘルム・マイスター』子一夜  
物語、ドン・キホーテ、椿姫、タイス等の  
整理に従事す。原稿紙にして約一萬枚以上に  
上る。その中小デユマの『椿姫』とアナトー  
ル・フランスの『タイス』とは、譯者としてや  
や自信あるもの、ゲーテの『ウイルヘルム・マ  
イスター』は學生時代よりその翻譯を思ひ立  
ちしものなり。なほ、一昨年より續載したる  
『輪廻』を十一月中一先づ完了す。

大正十五年(昭和元年) (四十六歲)

一月中『輪廻』を新潮社より出版す。

昭和二年 (四十七歲)

秋九月東京より鎌倉に移る。

昭和三年 (四十八歲)

三月盲腸炎を病む。七月新潮社の『日本文  
學講座』に『夏目漱石論』を草し、十月『國民文  
庫』の編輯整理事業を了る。

昭和四年 (四十九歲)

二月九日急性腹膜炎を患ひ、順天堂醫院  
にて腹部を切開す。四月より六月まで、一朝

日新聞に『吉良家の人々』を連載。六月十二  
日順天堂にて二度目の手術を受く。十月雜  
誌『改造』に『四十八人日』を掲載。十二月  
朝日文藝欄後年復活せるものに『他を許す  
文學』と許さざる文學』を掲ぐ。プロレタリア  
文學の現實味を缺けることを論じたるもの、  
多くの人の云はむとする所を云ひたるだけに  
多少世の注目を惹けるもの如し。

昭和五年 (五十歲)

三月、予の處女翻譯とも云ふべき『十字軍  
の騎士』及び『シヤクンタラ姫』を續めて、改造  
社の『世界大衆文學全集』の一冊として出版  
す。同じ四月中、ポツカチオの『デカメロン』  
を新潮社の『世界文學全集』の一冊として出  
版。五月中『吉良家の人々』と『四十八人日』  
とを續めて改造社より出す。なほ、予は當分  
『吉良家の人々』に倣ひて、在來世間から一種  
の偏見を以て見られぬ歴史上の人物にジャ  
ステイイスを與へるやうな創作に従事せむと  
の志念あり。例へば、足利尊氏、齋藤道三、  
江戸町奴の魁祖とも云ふべき大島逸平等。し  
かもこは未來のことに屬す。

昭和五年六月十日印刷  
昭和五年六月十三日發行

現代日本文學全集 第四十二篇

著者

鈴木 三重吉  
森田 草平

發行者

山本 美

印刷者

杉山 愛二



發兌

東京市芝區愛宕下町  
四丁目四〇番地

改

造

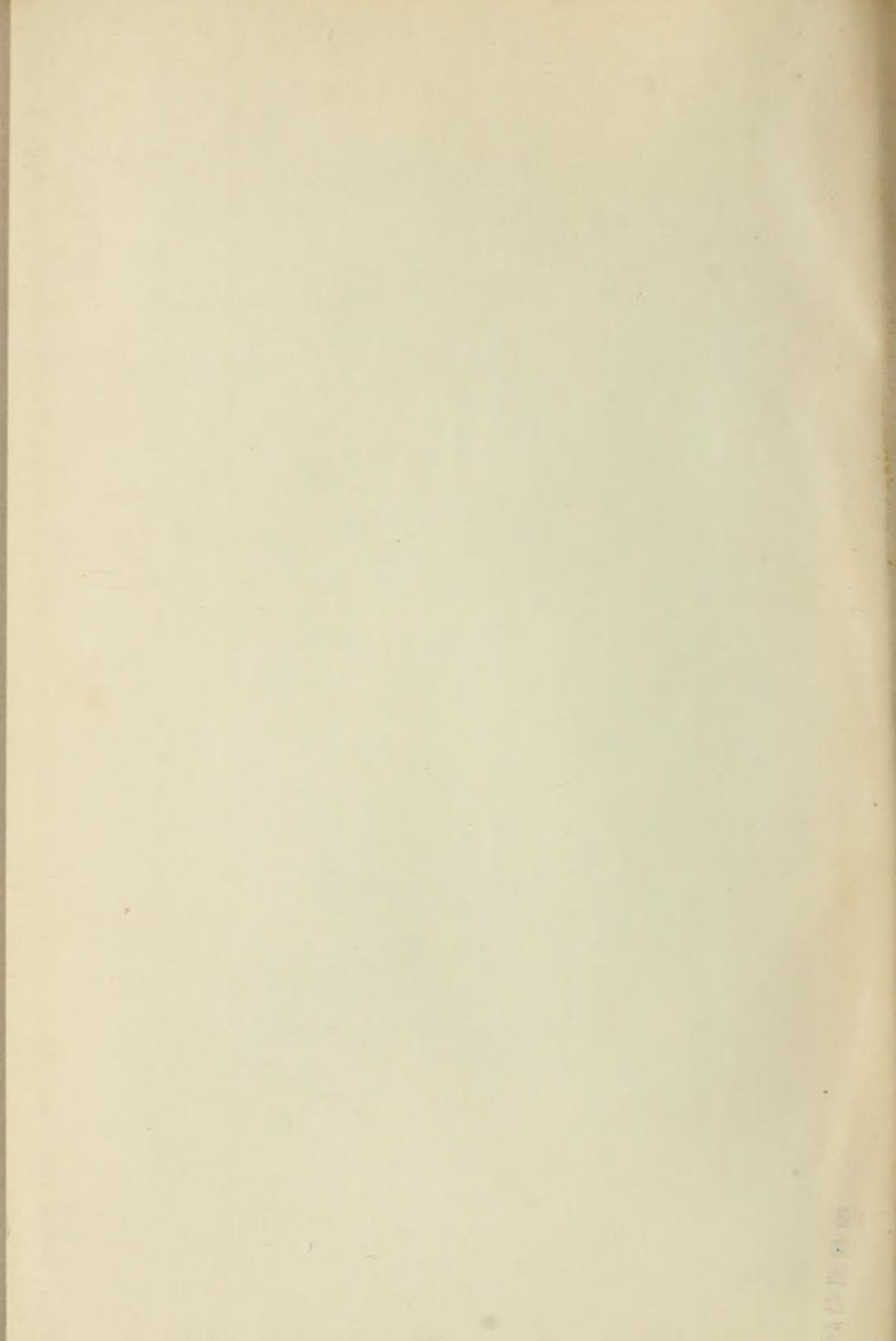
社

振替東京八四〇二二番  
電話芝(44)二二二番  
四三二二番

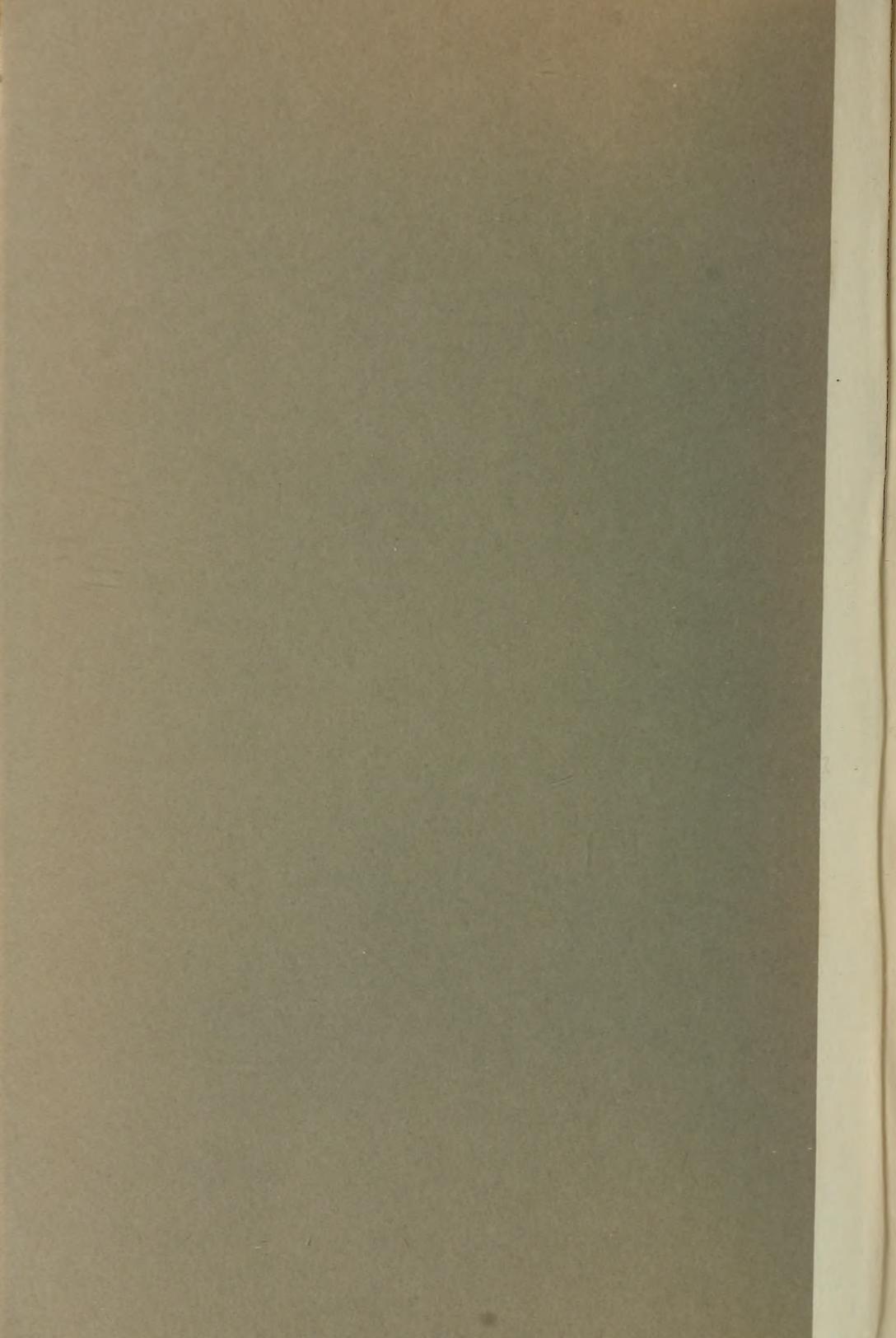












EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02950 9486



改造社